

# お馬鹿な武道家達の奮闘記

星の海

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、とある世界の物語から少しだけズレの生じたお話。本来、舞台の隅で主役に華を添えるだけだった脇役達が、ほんの少しのお節介から主人公に手を差し伸べた時、本来ある筈だった未来はガラリと姿を変える。馬鹿で優しい武道家達が、少年の涙に、少女の嘆きに立ち上がる。これは、強きを挫き、弱きを助ける、お馬鹿な武道家達の物語。

## 目次

プロローグ	生真面目少年と生真面目少女	1
一章	武道家達の未知との遭遇	
1話	バカレンジャーとの相談	12
2話	筋肉教師の警告 友人のお節介	18
3話	二人の少女 友情の確認？	23
4話	少女との談笑 少年と非日常	31
5話	少年少女とロボ少女の戦闘 武道家、絶叫	40
6話	少年の苦悩 武道家達の決意	53
7話	武道家達と吸血鬼 絶望の闘争(上)	65
8話	武道家達と吸血鬼 絶望の闘争(中)	75
9話	武道家達と吸血鬼 絶望の闘争(下)	87
10話	闘争の終結 武道家達の想い	101
11話	現状の把握 少年と武道家	113
12話	大人と武道家と少女達	134
閑話	舞台裏の思惑 少女の決意	153
二章	古き都に咲く鋭き一輪の花	
1話	真剣勝負 信用と信頼の差	163
2話	かぶき者の護衛 少年少女の信頼関係	178
3話	想定外妨害 悲痛な絶叫	189
4話	混沌劇場	198
5話	謝罪合戦 現状把握と風韻急なる一報	208
6話	追跡 偽装 発見 戦闘	217
7話	キマジメ剣士とキチガイ剣士	229

8話	少女の懊悩	少年の春	244
9話	恋の助言	騒動の芽吹き	253
10話	悲劇的	或いは喜劇的大騒動(上)	264
11話	悲劇的	或いは喜劇的大騒動(中)	276
12話	悲劇的	或いは喜劇的大騒動(下)	287
閑話	二人の出会い		298
13話	状況整理	問題の解決へ	309
14話	劇場舞台にて	姫を守る誓いの場	319
15話	キチガイ剣士とキチガイ剣士		331
16話	それぞれの覚悟	キチガイ? 剣士と奇妙な刀	341
17話	大乱戦	戦場の武道家達	354
18話	激闘の果て	乱入者	368
19話	一難去つて次絶望		383
20話	仮初めの姉弟の懊悩	死闘の幕開け	396
21話	少女の告白	少年の返答	407
22話	加速する戦場	少年の覚悟	421
23話	死闘の続行	驚異の顕現	435
24話	化け物との相対	少年少女 覚悟の闘争	447
25話	一刀両断		458
26話	動乱する世界の始まり		479
閑話	話し合いと決裂	想いの行き場	499
三章	武道家達と少年の転機		
1話	現在把握	少年の望む力	514
2話	特訓	特訓 更に特訓	526

3話 危険な話と危険な遭遇 | 536

4話 性別不明の竜と人 | 554

5話 課される条件 武道会に向けて | 567

6話 苦労人の情報提供 武道と魔法の交わる一歩? | 583

7話 サギタマガイマスター | 595

8話 気になる彼女の恋愛模様 | 609

9話 それぞれの在り方 | 627

10話 雨の中の来訪者 | 657

11話 犬と少女と老人の来訪 即ち千客万来 | 680

12話 降りかかる災難 | 698

13話 大なる変態 | 722

14話 因縁の相手 | 743

15話 超常的な悪魔と非、常識的人間 | 764

16話 それぞれの征く道 | 801

17話 恋路の道は険しさを増す | 833

18話 中村 達也という偉大な馬鹿 | 862

閑話 盛大な祭りに向けて | 895

#### 四章 お馬鹿な武道家達の恋と戦模様

1話 祭りの始まりは混沌と | 930

2話 少年少女の恋模様 辻と刹那 | 968

3話 少年少女の恋模様 辻と刹那その2 | 991

4話 少年少女の恋模様 辻と刹那その3 | 1013

10万U A突破記念SS 第1弾 辻と刹那のイチヤイチャ | 1048

5話 少年少女の恋模様 豪徳寺と千鶴 | 1057

	6話	少年少女の恋模様	豪徳寺と千鶴その2	101085
	7話	まほら武道会 予選 (上)	—————	1101085
	8話	まほら武道会予選 (中 その1)	—————	1139111
	10万U A突破記念SS 第2弾	中村と愉快的仲間達	—————	1167113
	9話	まほら武道会予選 (中 その2)	—————	1193111
	10話	まほら武道会予選 (中 その3)	—————	1219112
	11話	まほら武道会予選 (下)	—————	1242121
	12話	まほら武道会本選第1試合	辻VS刹那 (その1)	1276
	13話	まほら武道会本選第1試合	辻VS刹那 (その2)	1295
	14話	まほら武道会本選第2試合	山下VSエヴァンジェリ	1295
ン	(その1)	—————	—————	1324
	15話	まほら武道会本選第2試合	山下VSエヴァンジェリ	1377
ン	(その2)	—————	—————	1342
	16話	まほら武道会本選第3試合	中村VS楓 (その1)	1377
	17話	まほら武道会本選第3試合	中村VS楓 (その2)	1389
	18話	まほら武道会本選第4試合	豪徳寺VSクウネル(その1)	1411
1	(	—————	—————	1411
	19話	まほら武道会本選第4試合	豪徳寺VSクウネル(その2)	1427
2	(	—————	—————	1427
	20話	まほら武道会本選第5試合	ネギVS高畑	1457
	21話	まほら武道会本選第6試合	高音VS杜崎 (その1)	1457

22話 まほら武道会本戦第6試合 高音VS杜崎 (その2)

23話 まほら武道会本選第7試合 篠村VS小太郎 (その1) 1515

24話 まほら武道会本選第7試合 篠村VS小太郎 (その2) 1558

25話 まほら武道会第8試合 大豪院 VS古菲 (その

1) 1612

## プロローグ 生真面目少年と生真面目少女

……やつぱり綺麗だな、この娘は……：  
試合の最中だというのに、辻つじ一はじめはふとそんなことを思い浮かべた。

少女の一本芯が入ったような真っ直ぐな佇まいは程よく力が抜けており、隙の無い青眼の構えは竹刀の先端が正確に辻の左眼に向けられている。

対する辻は上段に竹刀を構えつつ、摺り足でじりじりと間合いを詰める。

この少女とやり合う時は受け身で挑んではならない、華奢な見た目に到底似合わぬ苛烈な攻めであつという間に叩き潰されるが故に。

既に数え切れない程行つた試合で辻はそう悟っていた。

他の試合や練習では賑やかに声援を送る、世間一般では緩い、と称されるであろうこの麻帆良剣道部の部員達でも、この二人の試合は固唾を飲んで真剣に見守っている。

「…存外静かな立ち上がりね。部長がまた火の玉みたいに立ち上がりから突っかけると思つてたけど」

「ごこん所の十数試合、攻めまくつた拳句の面の制し合いで勝率悪かつたからまた初心に立ち返つて試行錯誤してんだろ、よくやらあな毎度毎度」

「まああの娘ホントに強いからねえ。女子副部長のあたしの立場が無いなんてのは別に今さらだからいいんだけど、部長としては負け越してはいられないでしょ色んな意味で」

「まあなあ。部長としての立場の為に意中のあの娘を振り向かせる為にも」

「ねえ、そろそろいい加減あの真面目男女の甘酸っぱい所見て見たいわ」

……一部を除いて、ではあるが。



そのやり取りが聞こえていた訳でもないだろうが傍目では緊迫した状況に苛立ったかのように少女が飛び出す。

流れるような滑らか且つ高速の踏み込みからの抜き胴の斬撃。

辻は瞬時に左足から下がり半身を引き気味に胴薙ぎを躲しぎま引き面を放つ。

少女はそれを跳ねあげた竹刀で逸らし、小手の返しと体の捻りだけで高速の面打ちを返した。

踏み込んで受け、至近からの胴打ちに繋げる辻。

鰐元で受け、少女は引き小手を打ち返す。

互いに捌き、受け、打ち返す。

時折漏れる気合いの声と共に両者は高速の応酬を重ねる。

「おく何時もながらすげえすげえ」

「相手が悪いだけで部長も本来なら大学部の主将相手に勝ち越せる腕前だからね、とはいえそろそろ…」

「イヤアアアアアアツ!!?!?!?!」

と、まさに次の瞬間、少女の振り抜いた胴薙ぎを打ち上げ、裂帛の気合いの声と共に辻は竹刀を大上段から振り下ろす。

パアアアアアアアン!!?!と竹刀が防具を打つ乾いた音が道場内に響き渡った。

「…一本!!?!」

審判の声が刹那、無音に包まれた道場の中を通り抜ける。

辻の面打ちは少女の左肩に打ち込まれており、少女の竹刀は打ち込まれるのと同時に辻の胴を薙いでいた。

数瞬の間動きを止めていた二人はどちらもともなく動き出し、開始線にて蹲踞の後、竹刀を納める。

「…やられたな、これでこの所俺の五連敗か。やっぱり強いな、お前は」

「いえ、勝った側の私が言うのもおかしいですが、今日の辻部長の動きはここ最近で一番きれいなと思います。今の試合もどちらが勝ってもおかしくはない域なものですから、あまりご自分を下に見られないで下さい」

面を外しながら幾分苦味の強い苦笑でそう告げる辻に、艶やかな黒髪の張り付いた顔をタオルで拭いながら、こちらは幾分緩い苦笑で少女が返す。

「生憎この様で腕前を誇れる程凶太い精神はしていないさ。せめて二本に一本は取れるようにならないとな」

「…結果として白星の多い私がい以上言うのも嫌味でしょうから何も言いませんが…」

「解ってるよ、思いつめはしないさ。初めに負けが込んでた状況でそれでも挑み続けたんだ、そこら辺はもう割り切ってる」

「…挑戦は続くという事ですね」

「ああ、面倒だろうが付き合ってくれよ？」

そう言つてこの男にしては珍しく悪戯めいた顔を浮かべると少女は薄く笑つて小さく頷く。

「…お二人さくくん、いちゃついてくれんのは個人的に大歓迎なんだけど内容が物騒だと思ふんだ」

「たまには手合わせ以外でも話に華を下さいな、部長が悪いんですよ頃の女の子に顔合わせては勝負勝負つて」

穏やかな空気に割り込んだのは先程話していた男女の副部長二人、ちなみに付き合っている。似たようなにやにや笑いを浮かべつつちよつかいを出す。

「誰がいちゃついてるつてんだ馬鹿の片割れ、人間きの悪いことを言うな。そしてしようがないだろうもう片方、毎日部活には来てくれないなだから」

「申し訳ありません、辻部長。私事なのですが普段はやることが…」

「ああ、いいんだいいんだ。責めるような言い方になって悪い、各々生きてて事情があるのなんて当たり前なんだから生活を優先するのは当然だ。大体こつちが無理を言つて時間取らせてるんだ、文句なんて欠片もないよ」

「あくあ、後輩には甘いんだからねえ辻部長は。それとも相手がこの娘だからかなあくん？」

「いやあくん部長つたら！勝負しようなんて形でしかコミュニケーション

シヨン取りにいけないなんて好きな子虐める小学生みたい!!?」

「よしお前らそこに直れ。話し込んでるばかりで部活に身が入ってないようじゃいけないからな、俺と一人十本勝負しよう」

「ちよつとちよつと部長煽り耐性低すぎ!!?ただでさえ最近勝負にならないのにそんなやつたら半殺しにされちまう、どうかお慈悲を!!?」

「さつきと面を着ける、おくいそこのお前ら、出入口塞いどけ」

「了解です」

「ちよ、ガチだこの人!!?た、助けて麗しき後輩剣道小町、部長を止められるのは貴女しか、」

「辻部長は腕が立つだけでなく指導も上手いので頑張ってください、先輩」

「笑顔でスルーされた!?!?こつちも何気に怒ってたし!」

「当たり前だこの馬鹿!!?俺はどうでもいいが後輩にまで風評被害もたらすな、俺なんぞと一緒にされたら迷惑だろうがあ!!?」

「あ、いえ、そういう訳では…」

「皆まで言うなフォロオなんて俺には必要ない。迷惑だったら迷惑だって言っつていいんだぞ俺に気を使うな」

「…はあ~~~~~」

「…何が言いたい、馬鹿ツプル」

「いやあ部長って普段あんだけ気が回るのになんでこつちの方面だけこうかなあ~~~~」

「むしろ気配り上手のお人好し生真面目男だからこそこの有様じゃない?」

「よしもういい纏めて来いお前ら」

「ちよ、待った部長まだ俺防具着けて」

「剣道家として不意打ちってどうなん、つきやあああああ!!?」

口の減らないお似合いカップルの頭部に仲良く竹刀が炸裂したのはそれからきっかり二十秒後のことだった。

「…しっつかし俺ら叩きのめした後に五戦やらかすとか、うちの部長はバケモンだね、その一人に対するストーカー地味な執着性において」「ついでにあれだけ叩きのめされてなお折れずに向かうメンタルもね。…はっ、もしかして部長ってマゾ」

「まだやられ足りないらしいなお前ら」

「ごめんなさい」

「…先輩方は本当に仲がいいですね……」

部活が終わり、部員達が帰り出す中相も変わらず騒ぐ一行に、少女は微かに微笑みながら告げる。

「なに言ってるんの、当事者の一人なんだからそっちももつと絡んで来てよいつでも大歓迎だから」

「そうそう、個人的には部長と物理的に絡まってくれと私としてはおいしい、」

「黙ってる得に女の方の馬鹿。…俺としてはこいつらと仲がいいとなんぞ評されたくないんだかなあ」

「出ました部長のツンデレ発言、そう言いながら毎回ツツコミをくれる部長マジヒロイン!!?」

「べ、別にあんた達と仲良くしたいから機会を見つけては会話に加わってるわけじゃないんだから痛ったあ!?!?女の子の頭にグーパンは無いんじゃないの部長!?!?」

「己が発言省みてから文句言え。キリが無いから解散だ解散。もう暗いんだから気をつけて帰れよ」

辻はそう促し剣道場の扉を施錠する。既に辺りに人は疎らで、闇に包まれる校舎周りは活気と変人に溢れる昼間と違い何処か物寂しい。

「じゃあ部長、また明日、女剣士ちゃんもまたね」

「あの、副部长。妙な呼び方はやめていたいただきたいのですが…」

「まあまあ気にすんな!じゃあ部長、俺らはこっちですんで後はお二人でごゆっくり…」

「死ね」

親指を人差し指と中指の間に入れたサインをこちらに向けな

がら妙にイイ笑顔を向ける副部長（男）に冷たく吐き捨て、辻と少女は学生寮へ続く小道へ歩き出す。

この二人、当然ながら帰る場所が同じな訳では無い。それぞれ男子寮と女子寮暮しであり二つの建物はまるきり別の方向なのだが、遅い時間まで付き合わせた時には必ず寮の近くまで送ることを自らに辻は義務付けていた。

少女は当初遠慮していたし、辻も実際初めは無理に行うことではないと辞退したのだ。しかしある事件から辻は少女を送るようになり、少女も遠慮がちながらそれを拒まなくなつた。

二人に少なくとも現時点では確実にお互い憎からず思つてはいても恋愛感情は無いのだが、こんな調子で行動していれば離れ立てなくなるのも理解はできるだろう。妙に見えていくすぐつたい先輩と後輩なのであつた。

「最近どうだ、学校は。勉強の方は大丈夫か？二年の二学期期末で補習食らつていたらうに」

「その節はご迷惑をおかけしました…恐らくは大丈夫かと思ひます」  
「やばそうなら言えよ？これでも成績はいい方だ、中学レベルの内容なら…：…いや、やっぱり年頃の女の子が年上の異性に勉強教わるつてのは外聞が悪いよな、ただでさえ部活のバカどもにあることないこと騒ぎ立てられてんだ。俺なんぞとこれ以上変な噂立てられたくないだろうし俺よりも教え方が上手いやつなんていくらでもいるだろうし、大体ここぞとばかりに張り切つて後輩女子に良くしようなんて奴普通にキモいよな、よしここは俺のクラスで成績のいい女子を…」

「部長、部長。一人で先走つて完結しないで下さい、お気持ちは頂きました気持ち悪いなんて思つてませんよ。先程も言いましたが恐らく大丈夫です。危なそうな時は頼らせて頂くかもしれません」

「そ、そうか。解つた気を使わずに気軽に頼つてくれ。あ、だからつてこう言われたからなるべく頼るように、とかそういうのは無しだぞ。あくまで気が向いたら、気軽に、だ」

「ええ、解りました」

苦笑しながら言葉を返す少女に、くどかつたかなー面倒臭い先輩

と思われてなきやいいなー、と辻は気落ちする。

小

心な所がありいつも変に気を回しすぎては言わずともいいことまで言って割を食うのだ。この男、損な性分である。

「まあ元気にやってるなら何よりだ。お前の所のクラスもうちに負けず劣らず変…いや個人的な娘が多いからな、真面目そうな奴は割を食いそうで気になるといかなんと言うか…」

「ふふつ、心配ありがとうございます。そうですね、何かと騒がしいクラスですが、流石に一年以上も一緒に過ごしていればある程度は慣れますよ」

ゆつくりと歩を進めながら並んで二人は帰る。煮え切らない口調でぶちぶちと少女を気遣う辻に小さく吹き出しながら少女が答える。

「そうだよなあ、慣れてしまっただよなあ。俺もあの馬鹿の真髓達と付き合い持って早三年、随分脳味噌が侵されてしまったと思うよ。クラスが変わらないのってのは奇人変人の影響が大きいから嫌なものだ」「変わらないのも良し悪し、ですね。…そういうえば、私のクラスは担任が変わりましたね。話す機会が無かっただけで少し前の話ですが」

哀愁を漂わせつつしみじみと語る辻に、ふと思いついたように少女は告げた。

「へえ、それは珍しいな。確か高畑先生だったろ担任って。今さら誰に変わったんだ？」

「それが…ネギ・スプリングフィールド、という少年をご存知ですか、部長？」

「うん？何処かで聞いた名前だな…ああ、なんだっけ春から麻帆良にやって来た子供先生だよな。確かまだ十歳そこそこだとか聞いたんだが…いや待て、ここでその名前が出るってことは」

「はい、その子供先生が私達3-Aの現担任です」

まさかという顔で問いかける辻にこちらも何とも言えない表情で少女は答えた。

「うわあ本当か、そりや大変だろう色々。いくらエスカレーター式で最低限進学できるっていつでも中学3年なんて大事な時期に、迷惑

な人事だな」

「いえ、頭のいい少年らしくきつと想像されているよりも立派に教師をやっていますよ?…部長にしては随分と酷評ですね。子供先生に對して気に入らないことでも?」

「いや、その子供先生本人に思う所はないんだけどな。受け入れた学校側に物申したい気分だよ。率直に言っつて務まるはずないだろう十歳児に先生が。お前らより年下なんだぞ?先生つてのは勉強だけ教えられればいいもんじゃないだろうに、人事の人間は何を考えてんだ、まったく」

「仰る事はごもつともですが、こればかりは私達に決める裁量のないことですから…それにうちのクラスは概ね子供先生に好意的ですし今の所上手く回っていますから、様子を見るしかないのでは?」

憤懣やるかかない、という顔の辻を宥めるように少女は語りかけつつ、やがて二人は女子寮の前に到着した。本日は随分話が弾んだが、それでも道場からここまで時間にして15分足らずである。

「では部長、ここで。送っていただきありがとうございます」

「なに、本来必要のないことを半ば強引にやってるんだ。礼なんざいらないよ、何時ものことながら」

そう言っつて辻は少女に別れを告げ、自分の寮へと歩き出す。

「…部長!」

「ん?」

突然背中から声をかけられ、少し驚きつつも辻は振り返る。

「なんだ、何かあったか?」

声をかけた側の少女の顔は先程までの穏やかな様子は消え、何処か張り詰めていた。

「…すみません、部長。これから妙なお願いをしますが、どうか聞き入れて下さい」

「な、なんだその前振りは。怖いだろ、一体何だよ、なんか悪いことしたか、俺?」

「いえ、部長には一切非の無い話なのですが…先程子供先生の話が出ましたよね?」

心当たりは一切無いのにビクつく辻に、固い表情のまま少女は問う。

「あ？ああ、確かに出たな。それがどうかしたか？」

「これから子供先生に、個人的に接触を持つのをやめていただきたいんです」

「……………うん？……………」

文章としては理解できるが意味が理解できない辻はやや間抜けな疑問符を上げる。聞き違えたかと少女を見やるが真剣な表情は崩れていない。洒落や冗談をこの少女は元々好まないが、巫山戯ている訳では勿論無いらしい。

「…どういうことだ？別段元々積極的に関わりに行く気は無かったけど、お前がそんな風に言っつてまで関わらせまいとするなんて…普通じゃ無いぞ」

「理由は、言えません。建前ならば述べられますが、私は常に親身に、そして誠実に接して下さっている部長にはできる限り誤魔化しをしたくは無いです。誓って邪な考えでこのような事を言っているのではありません。納得できるような説明でないのは百も承知ですが、どうかお願いします」

そう言っつて少女は頭を下げる。言外にこれ以上は語れないと態度が示していた。

「ひとつだけ、聞いていいか？」

「…はい」

色々と聞きたいことはあった。だが今聞いてもこの少女は、教えてはくれないとなんとなく辻は解つていたから、最も気になる点だけを辻は聞くことにした。

「お前は、何か俺がそうすることで苦勞したり損をすることはあるのか？」

「…は？」

思わず、といった様子で少女が顔を上げる。てつきり出し抜けに失礼な頼みをしている事へ苦言の一つでも返つてくると考えていたからだ。



「あの、それはどういう、」

「他人と関わりを持つなんてある意味凄まじく自分勝手なことを他ならぬお前が言うんだ、相応の事情があるのはなんとなく判る。だからお前のその頼み、聞くつもりだよ。元々ちよつとした好奇心位は持ってたけどそこまで子供先生に興味があるわけじゃないし、俺にとって負担のある頼み事じゃないからな。でもそれでお前が不利益を被ったり、いらぬ苦勞を強いられるなら首を縦には振れない。後輩が氣を使つて一人辛い目に遭うなんて到底領ける話じゃないからだ」

そこで言葉を切つて辻は驚いたように見開かれた少女の目を真っ直ぐに見据える。

「だからもしそうなら事情を素直に一から話せよ、できる限り力になる。お前は俺の後輩で、俺は先輩だ。手を貸すのに理由はいらない、だからこれだけ正直に答えろ。：お前は、大丈夫なのか？」

沈黙が流れる。吃驚させられた直後のような、何処か惚けたような顔をする少女を見て辻はじんわりと汗を滲ませ始める。

……ヤバイ盛大に外したか？勢いに乗つて言つてしまつたが思い返すまでも無くクサイよ俺!!？普通に恋人でもなんでもない男にこんな大仰なセリフ言われたら引く！間違いなく引くだろうわあくやつちまつたあく!!？……………

等と絶讚大見得の後悔タイムに入り、そろそろ額に浮かぶ汗が脂汗に変わろうかという頃、長い沈黙が破られる。辻が少女を見やると、クールな印象の強い少女が珍しく、はつきりと相好を崩し笑つていた。

「くっ、ふふふふふっ、…はあ、…全く、本当に貴方という人は…」

「あー、待て違うんだ、今のはこう、思わず昂ぶつて大袈裟な言い方になったというか、いや嘘ではないんだが些か盛りすぎた表現があると言うか」

「ありがとうございます、部長」

「へ？」

暫くして笑いを納め、どこか感心したような呆れたような少女

の様子にたまりかね、へどもどと言いついになっていないような誤魔化しを始めようとした辻を遮るように少女は言った。

「不躰な願いを申し出たというのに私の心配などしてくださってあげてください」

「お？おとおおおう、気にするな、正直大袈裟にも程があつたしな。いや、でも俺が聞きたいのは」

「はい、解っています。大丈夫です、部長が心配なさっているようなことは一切ありません。どちらかと言うと本当に私の個人的な我儘なんです。ですから部長、お気持ちがありますが、どうか心配なさらないで下さい。私は、大丈夫です」

薄く微笑みながら少女ははつきりと言った。

「…本当だな？」

「はい、本当です」

「…わかった。なら、いいんだ。約束するよ、できる限り子供先生とは接触しないようにする」

「…ありがとうございます、部長」

「礼はいい。その代わり、そのうち事情を話してくれるか？」

「…善処します」

そうか、と苦笑しながら辻は今度こそ帰るため踵を返す。疑問は山だが辻は後輩を信じることにした。どちらかと言うと無愛想で、あまり他人と打ち解けない、固い印象の強い少女だが、他人に無関心なのではなく根底にはきちんとした思いやりを持っている娘だと辻は知っていた。その位には辻 はじめ は、この少女を理解できているつもりである。

「じゃあ今度こそ。またな、桜咲」

「はい、おやすみなさい、辻部長」

辻は背を向け歩き出し、少女は礼にてそれを見送る。

少女の名前は桜咲 さくらさき 刹那 せつな、これから様々な意味で辻 はじめ 一と深く関

わって行くことになる娘である。

# 一章 武道家達の未知との遭遇

## 1話 バカレンジャーとの相談

「シュツツ!!?」

鋭い呼気と共に空着手を来た男の右上段回し蹴りが、空気を裂き対面の男の首目掛けて襲う。対する剣道着に木刀を持った男―辻

一 は左半身に木刀を立て、男の蹴りを受け止める。

ミシリ、と衝撃で木刀が軋む程の威力に辻は僅かに顔を歪めるが力を込めて蹴り足を弾き返し、その勢いを利用しての胴薙ぎを男に打ち込む。

男は弾かれた蹴り足を素早く降ろしつつ右の中段内受けで木刀の軌道を下に変え、同時に降りた蹴り足で地面を踏み込み、身体全体で回転する薙ぎ払うような左中段回し蹴りを辻に見舞った。

まるで曲芸のような動きだが、その一撃が虚仮脅しでないことをこれまで何度も手合わせを行った辻は知っている。鍛え抜かれた体幹とバネが不安定な体勢からでも強力な威力を生むのである。

「喰らうか!!?」

気迫の声と共に辻は態と左側にバランスを崩し、右側から襲い来る蹴りを倒れ込むように躲しつつ、木刀から左手を放し地面に手を着く。同時に辻は木刀を右へ渾身の力で振り抜き、男の軸足を襲った。

「ちいつつー!」

流石の男も左右2段蹴りを振り抜いた直後に軸足を浮かすことはできず、自らの蹴りの勢いに乗って体勢を崩し、横に一回転するような動きで足下への薙ぎ払いを躲した。

互いに体勢を崩した二人は、次の瞬間ほぼ同時に体を跳ね起こし、再び激しい打ち合いに入る。

お互い気を使用していないだけの限りなく全力に近い真剣勝負である。打ち身や骨折、当たり所が悪ければ病院送りになってもおかしくない稽古や鍛錬というには激しすぎるものだが、彼らは時間が

合えば日常的にこんなことをやっている。巷で武道馬鹿とか呼ばれてしまう一因だろう。

やがて一際大きな打撃音と共に重なっていた二つの影の内一つが弾き出され地面を転がる、一応の決着だ。

「っ痛うゝ遠慮なくキメてくれやがって。お前武器持つてんだからちったあ手加減しろっつーの」

地面に転がった空手着の男——中村<sup>なかむら</sup> 達也<sup>たつや</sup>は、打撃をくらった右脇腹を押さえつつそう溢す。髪の毛は逆立ち、後髪を短い数本の三つ編みに纏めている。髪の色は鮮やかなオレンジ色に染め上げられており、格好だけを見れば到底武道家には見えない。顔はよく見れば中々整っているのだが、子どものように唇を尖らせ文句を言うその態度で色々と台無しである。

「その武器相手に平気で素手でぶつかり合ってる人間凶器が言うな、白々しい」

辻は鼻で笑ってそう返しつつ、持って来た荷物からスポーツドリンクのボトルを2本取り出し、1本を中村に放る。

「サンキュー。ま、お前長物無けりや単なる雑魚に近いからなあ、言っただけだけだよ。それにしてもやけに今日は気合入ってたじゃねーの、なんかあつたか?」

貰ったボトルの中身を早速流し込みつつ中村は尋ねる。やる気があるというよりは何かを振り切るように辻は勝負に打ち込んでいるように見えたからだ。

「うん、まあな。ちよつと後輩と不思議なやりとりがあつたもんでもやもやしてたんだよ」

「おつ、なになに!? ついにせつたんと進展あつたわけひやつほう!! ?さんざつぱら囃し立てまくってた甲斐があつたぜい、今夜は祝勝会だな!」

「待てや」

勝手にテンション上げる馬鹿に鋭く制止を入れる辻。相手をするのが面倒だからと放置すると話を最低10倍はかくして周囲に拡散させるので、この男を相手にする時は逐一訂正と否定を入れな

がら話をせねばならない。もう一度言うが面倒臭い男である。

「なんで桜咲との話だと断言できるんだ、俺は後輩としか言っていない」  
「何を仰るこの色男！ せっったんなんて崩した愛称を即座に桜咲刹那  
んのことだと気づける程あのクール少女を想ってるんだからお前さ  
んがあの子以外のことと時間置いてまで悩むはずなかるうに。それ  
ともせったんのことじゃあ無かったか？」

「……………」

当たっているだけに反論のし辛い辻である。

「…とりあえずせったんは止める。絶対いい顔しないで、桜咲は」  
「だろうからせったんの居るところでは呼ぶ気はねーよ？ ワタクシもそ  
の位は気遣い出来ますとのこと」

「信用ならないが…まあいい。確かに桜咲のことなんだけどな」

「告白なら麻帆良祭の世界樹の大発光まで待った方が良くない？」

「違えつつってんだろ話が進まないから黙って聞け!!？ 妙なお願いを  
されたんだよ！」

したり顔で提案する中村に辻は目を向いて吠える。

「へいへいすんませんね、で、何よお願いって。様子からして色っぽい  
内容じゃないんだろ？」

「詳しくは言えんが特定の人物に会うのを止められた。それが評判悪  
い人間ならまだ分かるんだがどう考えてもそんな風じゃないしな」

「先輩っ！ 私以外の女に色目を使わないで下さ…解った解ったんな目  
で睨むなよ。ならば真面目に答えるけど、正直それだけの話じゃわけ  
わからん」

「そりやそうだろうがもう少しお前な…」

気持ち悪い裏声と共に身をくねらす中村に辻の若干殺意の  
籠った睨みが飛ぶ。流石に空気を讀んだらしく多少真面目な顔にな  
り答える中村だがその返答は身も蓋もない。辻もがつくりと来たが  
今の話だけで解れという方が無理だろう。

「まあ、もうちよっと言うならあの子らしくねー物言いだよな。未来  
の旦那のお前相手とはいえ、あんま他人に干渉する子に見えねえも  
ん」

「死ぬよお前と言いたい所だがお前の言うとおりなんだよな…」

「未来の旦那が？」

「干渉云々の方だ脳足らず」

軽口を叩きながらも辻の思考は昨夜のやりとりに飛ぶ。辻は刹那を信用しているし約束を破る気もない。それでも信じることと思考停止するのは違うと辻は考える。止むに止まれぬ事情があつてあんなことを言つたのなら、なんとか力になってやりたいと思う辻なのであつた。

急に黙り込んで何事か——十中八九刹那のことだろうが——を考える辻を見て中村は笑う。巫山戯た態度ではあるがこの男なりに目の前の生真面目男を気にかけてはいる。面倒見のいい男なので厄介事を背負い込んで苦勞して、それでも愚痴をこぼさず他人を氣遣えるこのお人好しを、口には出さないが中村は敬意を持ち、いい友人と思つているのだった。

「おーい手合わせ終わつたか？」

後ろの方からかけられた声に二人が振り向くと、三人の男がこちらに近づいて来るのが見えた。

先頭で中村と辻に声をかけた男は丈が脛まである長ランに身を包んだ二メートル近い大男である。足には鉄ゲタを履き頭部で歩みに合わせ悠然と揺れるのはきつちりと整えられたリーゼント。本人の頭と同じ位の大きさがある誰がどう見ても立派なリーゼントであつた。正確にはこの高く上げられた前髪はポンパドールと呼ばれるのだが言つても詮無いことだろう。

昭和の不良映画から抜け出してきたような時代錯誤な出で立ちの男だが続く二人も中々に人目を惹く姿であつた。

一人は緋牡丹と紅椿が倒れ伏す白骨死体の眼窩や肋骨の間から咲き乱れる、着ている人間の神経を疑うような柄の着物を身に纏う細面の男である。鼻筋の通つた涼やかな、整つた容姿の為ある意味栄えた格好であり、似合っているかいないかならば似合うのだが、端的に言つて服の趣味が悪い。容貌も手伝い却つて悪目立ちしそうである。

最後の一人は前者二人に比べれば幾分までも濃紺のカンフー服にカンフーシューズといった典型的な拳法家の出で立ちで目鼻立ちはくつきりと濃く、身体つきも逞しいので精悍な印象を与える。特徴としては唇が分厚い。ムツツリとした表情で静かに歩む姿は威圧感があるが、この集団の中では相対的にかなりまともに見えてしまう有様である。

名前はリーゼント長ランが豪徳寺ごうとくじ 薫かおる、悪趣味優男がやました山下けいいち 慶一

無愛想カンフー服が大豪院だいごういん ポチ。

辻と中村を含めバカレンジャー（高等部ver）と呼ばれる五人組の集結であった。

「へ〜とうとう桜咲ちゃんとの関係に変化があったんだ。挑んでは倒され続けて早二年。ようやく切った張った以外のコミュニケーション取る気になったんだね」

「山ちゃん、バカ村にも言ったけどそんな和やかな雰囲気じゃ無いんだよ。なんか深刻そうなんだ桜咲」

「囃し立てるのは散々馬鹿がやったろうから俺らは真面目に考えるか。と、言っても俺に女子の気持ちなんて解るわけ無いしな。悪いが役には立てそうも無いぞ、辻」

「…そもそも詳しい話の内要もお前が語らんなら相談に乗る以前の問題だ。愚痴が言いたいなら聞いてやるがそういう訳ではないだろう？ 珍しく馬鹿が正しいぞ、辻」

「ああ、解ってる。でも桜咲の考えが解らない以上下手に話してあいつが誤解されるような事にはしたく無いんだ。相談しておいてろくに説明もしないですまんがここは譲りたく無いんだ」

「本人に聞きもしないで他人がどうだ、なんて決めつけねえよ。と言いてー所だがいいいんじゃないやねえか？ お前以外はせつたんとろくに付き合いねえしな、よっぽど大事になんきややりてーようにやりやいいさ…それはそうとてめえら揃いも揃って俺をバカ扱いしてんじやねえよ!!？」

「今更だ、馬鹿。…まあめげずに話してみろよ、そんなこと態々言つて

来るんだ、少なくともどうでもいいとは思われてねえさ」

「寧ろ相当気にかけて貰ってるみたいだからね。あつちが折れるまで粘ろうよ」

「うむ」

「…そうだな。はいそうですかと引き下がれないなら、踏み込むしか無いか」

辻はひとつうなづき、決意する。結局最初から話は決まってるのだ。納得できないならできるまで行動あるのみである、この際妙な噂が立っている相手だからと関わるのに尻込みしてはいられないだろう。

「皆、ありがとう。俺なりにやってみるよ」

「応、がながれよはじめちゃん！できれば問題解決と一緒にラブロマンスも持ってこい」

「こりねえなお前。よし、とりあえず目処が立った所で今度は俺と勝負だ辻！」

「その切り替えはどのようなさ豪徳寺。いまやっても辻は集中できないんじゃない？」

「それ以前に間も無く始業だ。まずは学校に行くぞ」

「うげえ〜〜」

「だな」

リーゼントと馬鹿のうめき声を余所に辻達は学校へと歩き出した。



## 2話 筋肉教師の警告 友人のお節介

「よーしお前ら、ホームルーム始めるぞ、席に着け。さっさと静かにせんと下校時間が遅くなるだけだぞ」

一日の授業が終わり開放感に賑わう教室の中、教卓の前に立つ大柄なスーツ姿の教師が生徒に声をかける。

教師というより格闘家かプロレスラーと言われた方がしつくりくるこの厳めしい男、名を杜崎もりさき 義剛あきたけ、名前まで強そうである。麻帆良の広域指導員の一人で高畑・T・タカミチこと死の眼鏡デスメガネと双壁を張る暴力教師。理由の無い体罰はしないが逆に言う理由があった場合容赦はしない。二メートルを超える巨体だというのに信じられない速さで獲物に接近してはそれが100キロ超の大男だろうと片手で振り回す。

恐ろしいことに素の身体能力だけでこれらを行っていらしくそこらの腕自慢程度では気による強化を使うまでもなく鎮圧する。問題を起こした連中に軍隊仕込みらしき容赦のない打撃関節投げ技を決める姿から

「生物災害」バイオハザード、「怒れる猿人」レイジングゴリ、「暴虐武人」アウトレイジなどと呼ばれている。

ちなみに最もこの鉄人教師にお世話になっているのは辻達バカレンジャーの五人で、事あるごとに繰り返される殺し合いのような応酬は学園の名物(?)の一つになっている。

「さて、連絡事項等は今朝話した通りだ特に追加変更はない。四日後の大停電に向けて各々準備をしておくこと。そして中村。去年のよくな騒ぎを起こして見ろ、今度こそ痛めつけて殺すぞ」

「おいおいおい、この猿人が一応仮にも驚異的なことに教師やってる身で生徒に対してとても吐いてはいけないような暴言かましたぞ。PTAは何やってんだいたいけな生徒が傷付いてるつてのによー」

「いたいけな生徒? 何処にいるんだ見えんぞ俺には。俺に見えるのは呼吸するように問題を起こす害虫以下のクスだけだ」

「おやおやおやおやおやどうやらこの脳味噌筋肉は身体鍛え過ぎて目

ん玉にまで筋肉が膜張ってるらしいぜ。この清廉潔白品位方正なこの中村達也様捕まえぶばあ!!?てめえなにしゃがる暴力教師、脈絡無く人様ぶん殴ってんじゃねえぞ!!?」

目にも止まらぬ速さで顔面を殴られた中村が鼻血を垂らしつつ怒鳴る。

「寧ろ今の流れでどうして殴られないと思っていた馬鹿の日本代表。あまり俺を苛つかせると前倒して潰すぞどうせまた覗きでもかますんだろうからな」

「ああ!!?証拠もねえくせに人疑ってんじゃねえぞ教師以前に人間失格野郎が!大体覗きに関しちや俺だけがやった訳じゃねえんだから俺だけを責めるんじゃねえよ!!?」

虫でも見るような冷たい視線を送る杜崎に中村は心底心外だと言わんばかりの怒りを露わに周りに被害を広げにかかる。

「さっさと俺たちまでお前に加担したような言い方をするなこのボケ!!?」

「僕らは話があるって言われて大浴場の近くに呼び出されたら中村が侵入開始しててドサクサで巻き込まれただけじゃないか!」

「:貴様を止めに突っ込んだ所為で共犯扱いだ。戯けたことをほざくなゴミが」

案の上他バカレンジャー達からバッシングが飛びまくる中、最後に辻がポツリと付け加える。

「:言いたいことは大体言われたからあんまり関係ないけど一つ。中村、さっきの反論は一応まだ何もやってないんだから証拠もないくせに、じゃなくて根拠もないくせに、の方が正しいだろ」

「:「どうでもいいわ!!?」」

中村達や杜崎はおろか他のクラスメートまで一体となった突っ込みが炸裂した。

「:兎に角ホームルームは終わりだ、これにて解散。中村、警告はしたぞ。これで何かやらかすなら本当に抹殺してくれる」

去り際に物騒な宣言をして杜崎は教室を後にした。それを気にした様子も無く騒がしくなる教室、正直慣れなくともいい方向に慣

れてしまったクラスである。

「…けつ、いくら脅されようとも弾圧に屈さず全力で目的地に向かうのが真の男つてもんだぜ」

「懲りずに覗きに行きますというだけの宣言を無駄に格好良さげに言うんじゃねえよ馬鹿が」

「言うまでもないことだけれど僕達は一切協力しないよ。死に行くなら一人で逝って」

「あらかじめ言っておくが大停電の日は呼び出しにも応じん」

全く堪えた様子も無く無駄にイイ表情で覗き宣言をする馬鹿に冷たくツツコミが入った。

「なっお前らそれでも友達か？こういう時は黙って行動を共にしてくれんのが友情つてもんだろが!?!?」

「生憎だけど面倒事に巻き込む時に限って友情を押し付けてくるような人間に応えるような広い心は無いんだ中村」

「ってというか本気で今年も一緒に行くと思ってたのかIQ猿以下。おめでたいと言うか脳味噌ついてるか?」

「ニワトリの方が悪意が無いだけまだましだな」

冷蔵庫の方がまだ暖かいだろう氷点下の罵倒を喰らい中村が絶望したように力無く机に突っ伏す。

「くそ…なんて奴らだ最悪だよお前ら…俺はお前らのことを露払い兼囃役だと思っていたのに……」

「最悪はオメーだよ」

「死んでよ、もう」

「まったく、只でさえ辻が妙な事になっているというのにいらん騒動を…待て、そう言えば辻はどうした?」

大豪院の指摘に煤けている中村以外はふとホームルームが終わってから会話をしていないことに気づく。

「何時もの細かいツツコミがそういうや無いと思っただらいないじゃねえか辻の奴」

「あれ?本当にいないね。律儀な辻が黙って帰るなんて珍しい」

「…いや、あれを見ろ」

指差された方向を皆が見やるとそこは辻の席である。机の上  
にノートを破ったものであろう書き置きが残してあった。

豪徳寺が黙って回収に行きそれを全員に見えるよう掲げる。

『桜咲に話を聞きたいから女子中等部まで行ってくる。声をかけると  
中村辺りがうるさいから黙って行く、すまん。』

「…まあ、賢明な判断か？」

「こいつがこれならいらん気回しだったかな」

「態々書き置き置いて行くのと最後に一言謝ってる辺りと自分の問題  
だからって僕らに協力してもらおうとしない辺りがなんて言うか  
辻って感じだね」

その相変わらずな水臭さと律儀さに中村を除いた全員が苦笑  
する。

「…追いかけるか。まだ遠くまで行って無いだろ」

「一人でやるというなら放っておけばどうだ？」

「まあまあ、どうせやることなんて鍛錬以外無いしね。何やら深刻そ  
うだから、できることだけでもやってあげようよ」

「…まあ、今日は中武研の集まりも無い。いいだろう」

「素直じゃねえな、お前も」

言い合いながら各々立ち上がる。いじらしい友人の為に一肌  
抜いでやるかと意気揚々と出口に向かう。

「……………待て!!？」

出口の寸前、浴びせられた大音声に皆の動きが止まる。

振り返ると中村がゾンビのような動きで席から立ち上がり、恨  
みがましい目つきで問うた。

「…目的の為に一生懸命なのは俺も辻も一緒なのになんでお前らの態  
度がそんなに違うんだ…」

「聞かなきゃ解らねえようなことか馬鹿野郎!!？」

「覗きと後輩の手助けという目的の崇高さの違いが原因だね」

「ついでに言うなら日頃の言動と行いの差だ」

集中放火を喰らって今度こそ中村が力尽き床に倒れ伏す。

「ほら立て。お前も行くぞ」

「…辻なんざせつたんにストーカー扱いされて杜崎のゴリラに潰されちまえ…」

「不吉なこと言っていないで行くよ。グタグタしてると追いつけないじゃないか」

「仮にそうなくても辻相手なら杜崎教師は情状酌量をくれるだろうよ」

中村を全員で引きずりつつバカレンジャー（一名不在）は辻を追いかける。

向かう先は麻帆良女子中等部。全員にとって転機となる場所である。

### 3話 二人の少女 友情の確認？

活気溢れる大通りを様々な格好の女子達が縦横無尽に行き交う。

時間帯は放課後、部活に行く者や下校途中に友人と談笑する者など、それぞれの青春を謳歌する中、辻は一人浮かない顔で歩いている、原因は道行く女子達の視線だった。

麻帆良女子中等部は教師以外の男性の立ち入りを禁止していないが当然「女子」中等部である以上道行く人間の9割以上は女性である。男性であるというだけで否応なしに人目を惹くし、ましてや辻は麻帆良学園内でもどちらかという悪い意味で有名なバカレンジャーの一員だった。もつとも当人はそんな不名誉な名称の集団の一員であることなど一度たりとも認めたことは無いが、そういった認定は当人が望む望まないに関わらず勝手に成されるものなので文句を言った所で意味は無いだろう。

兎に角始終喧嘩に明け暮れているだの女性にセクハラを繰り返しているだの教師達相手に乱闘を繰り広げたのだといった外聞のよろしくない噂が立っている以上(半分以上は事実である上にセクハラ云々はほぼ一人の所為とはいえない行っている)で反論の余地は無い気がするが)周りの目線があまり好意的でないのは当たり前である。これが普通の教育機関なら警備員を呼ばれて退出させられるレベルの悪評であろうから、こんな時ばかりは変人奇人揃いの為何かにつけて寛容な麻帆良の気質に感謝する辻であった。

「…やっぱり女の子達の目線がキツイ…早まったかなあ、高等部や大学部と違って詳しくやらかしたこの内容が伝わらないから女子中学生には凄い評判悪いんだよね、そもそも桜咲に話を聞こうにも部活に来ない日にあいつが何処で何をやってるかなんて聞いたことなかったしなあ。

何処にいるかすら見当もつかん」

呟きつつ辻は辺りを見回す。目線の合った女子があからさまに目を逸らすのにちよつと傷付きつつも目当ての少女がいないかと

目を凝らす、

「見つかるはずないよなあ」

当然の如く姿は見えず辻は溜息を吐く。そもそも探している少女は普段何かしらやることがあつて部活を休んでいるのだからこんな所をぶらぶらしてはいないと辻も解っている。何か取っ掛かりを見つけなければこのまま訪ね損で終わるのは火を見るより明らかだろう。

「話を聞く、聞かない以前の問題だったな…」

あらためて自分は桜咲のことなど殆ど何も知らないのだと落ち込む辻だった。

「何をしていますか？辻先輩」

それでも探すだけ探してみようと気合を入れ直した辻に声がかけられる。

辻が振り返るとそこにはビニール袋を手にした、長髪のサイドを三つ編みにした小柄な少女が立っていた。

「ああ、綾瀬ちゃんか。久しぶりだね、元気にしてたかい？」

その少女は辻の知り合い、と呼んでいい桜咲 刹那のクラスメート、綾瀬<sup>あやせ</sup>夕映<sup>ゆえ</sup>だった。

「おかげ様で、と言わせていただくです。今日はお一人なのです、稀にこちらにいらつしやる時はいつも初代バカレンジャーの皆さんと一緒になのに珍しいです」

「いや、その呼び方にも色々突っ込みたい所だけど、とりあえず俺とあいつらをセットで考えないでくれよ。その不名誉な集団に俺は所属していると認めた覚えはないんだから」

「何を仰るですか。桜咲さんに日頃から勝負を迫り俺が勝ったら嫁になれ、とのまこと男らしい宣言をなさっているのですから、馬鹿と言つてもいい意味での馬鹿呼ばわりでしょう」

「君までそんな事を言うんかい!!? そんな阿呆らしい宣言をした覚えは一度たりとも無い、大体俺が勝ったらって桜咲には三本に一本は勝つてからそれが事実なら何回プロポーズしてるんだ俺は!!?」

「冗談です」

目を剥いて吠える辻に臆した様子もなく、表情一つ変えないまま夕映は言い切った。

「…そんなに俺が桜咲にどうこう、って噂は広まっているのかい？」  
「ご安心下さい、事情通な人間の耳に入る程度の浸透です。私のクラスで最近噂になりましたので私も知ってますが既に立ち消えた噂です。辻先輩はリアクションがいい上にツツコミが細かいのでついからかいに走ってしまったです」

「後輩にまで弄られるのか俺は…一回はクラスで噂になったということだし桜咲には申し訳ないし…まあそれはよくないけどいいとして綾瀬ちゃん、あまり年上の人間をからかうような物言いをしないようにね。俺相手ならいいけどそういうのに敏感な人間は物凄く腹を立てるから、トラブルにならない為にも気をつけて」

既に世話になってる後輩に実害が及んでしまっていた事実  
に打ち沈みながらも、相手によっては割と洒落にならない態度を取る目の前の後輩にとりあえず辻は忠告することにした。辻の悪友に比べれば可愛いものだが、あの常識が絶賛行方不明中の社会不適合のようになるかもしれないきっかけを態々見過ごすこともないだろう。

「ご忠告痛み入るです。私にはそもそも軽口が叩けるような相手も少ないのでつい調子に乗ってしまいました。失礼したです辻先輩」

「いや、さつきも言ったけど俺相手なら構わないよ。後輩との談笑で位は固いことを言いたくないし、TPOを弁えてるなら俺から言うこととは何も無いさ。ただ桜咲の件はおおっぴらに広めないでくれ、桜咲の方に迷惑がかかってしまう」

鷹揚に返しながらも刹那の件ではしつかり釘を刺す辻にふと夕映は記憶を巡らせ、

「…話題になった時の反応からして向こうも満更でもなさそうです  
が」

「え？何か言ったかい綾瀬ちゃん」

「いえ、何でもありません。所で辻先輩、先程もお尋ねしましたがこちらには何をしに？まさか本当に桜咲さんにプロポーズしに来た訳ではないでしょう」



「うんとりあえずそのネタはもう蒸し返すな後輩。プロポーズ云々ではもちろんないけど桜咲に用事があつて来たんだ」

何気にいい根性をしている夕映に辻は流石にぴしゃりと言いつ返し、刹那に話があつて搜索している旨を告げた。

「そうですか、残念ながら心当たりはありません。私は桜咲さんとは余り面識はありませんので…」

「そっか、わかったありがとう。当てはないけど虱潰しに探してみよう。それじゃあね」

情報が得られないことを残念に思いながらも辻は刹那の搜索に戻ることにした。手がかりが無いなら足を使うしかないだろう。

「待って下さい辻先輩、少しよろしいですか？」

「ん？なんだい綾瀬ちゃん」

最近よく後輩に呼び止められるな、と思いながらも辻は夕映の方を振り返る。

「辻先輩の用は急ぎですか？」

「ん？いや、なるべく早い方がいいけれど今日明日期限が迫っている類のものじゃ無いよ。でもどうしてだい？」

「そうですか。ならば好都合と言えます。辻先輩、一つ私の頼みを優先して聞いていただけませんか？」

夕映の顔を思わず見つめる辻だがそこに巫山戯た様子は…ないのだろうか？少なくとも辻には夕映は表情の変化に乏しく見えるため真剣な顔も冗談を言う時の先程の顔も同じに見えた。

「…それは今すぐじゃ無ければいけなくて、ちゃんと俺に出来る範囲の頼みかい？」

「前者の問いにはYesと言いつ切れませんが、辻先輩もお忙しい身です。今後いつ時間を取つて頂くにしても、それは作つて、頂く時間でしょう」

夕映は作つて、の部分強調して言う。

「そして後者の問いには間違いなくYesです。辻先輩にしか出来ないですし辻先輩なら簡単にやつて頂けることです。…前置きが長くなりましたので言いますが、辻先輩に会つて頂きたい人がいるので

す」

「俺に、合わせたい人？」

辻は疑問の声を上げる。

「…噂を聞いての興味本位とか、そういう話じゃ無いんだね？」

辻は尋ねる。夕映が用事のあると言っているのに物見遊山気分の人物の都合を優先させるとは思えないが辻に会いたい人物の用件など、それ位しか思い当たらなかった。

「もちろん違います。いえ、ある意味ではその通りですが、真面目な相談のお話です。急ぎの用事でないのなら、どうか時間を裂いていただけないですか？」

相変わらず表情は殆ど変わらなかったが声色だけは至って真剣だった。

辻は噂関係で真面目な話ってなんだと疑問に思ったがともあれ真面目な話というのは伝わった。

「わかった。余り長い時間は取れないけど大丈夫？」

「充分です。では今から呼びますのでその喫茶店ででもお待ち下さいです」

夕映は一つ頷き携帯電話でその誰かに電話をかけ始めた。

…どういふ状況だ、これは。

辻は自問したが答えは見つからない。言われた通り喫茶店に入り、とりあえずコーヒーを注文して待つこと十数分。現れたのは腰まである艶やかな長髪の大和撫子、といった感じの穏やかそうな少女だった。

見覚えはかろうじてある。辻が夕映と面識があるのは何を隠そう、夕映をリーダーとした五人衆、バカレンジャー中学生verとして繋がりがあからなのだが、(何度も言うが辻は認めていないし別にレンジャー同士で何か活動している訳ではない。奇人変人、あるいは馬鹿が纏めてそう呼ばれるのでなんとなく面識を持っただけの話だ)そのバカレッドと呼ばれる少女とよく一緒にいるので挨拶位は交わした事がある。しかし名前をかろうじて知っている位で個人で話しかけたことは一度も無い。一体何の用が自分にあるのか辻はと

んを見当がつかなかった。

「木乃香、こちらが辻 一先輩です。辻先輩、彼女は私の友人で近衛<sup>このえ</sup> 木乃香<sup>このか</sup>です」

「…お久しぶりです、辻先輩。近衛木乃香です、忙しいゆうんに時間取ってもらてありがとうございます」

「ああいや、いいんだ。綾瀬ちゃんには言ったけど急ぎの用事ってわけでも無いから。相談に乗る位は全然問題ないから気にしないで」

夕映に紹介され、挨拶をする木乃香。なにやら思いつめたような表情で辻の記憶にある姿よりも明らかに元気がない。これは相当深刻な話だなと内心を引き締めながらも、できるだけ気さくに返事を返す辻。

「…それで話っているのは何なんだい？様子からして近衛ちゃんには大事なことみたいだけど」

「はい…」

「待って下さい。話が始まる前に私は席を外させていただくです」

辻が木乃香に水を差し向け木乃香がおずおずと話し始めようとした矢先、夕映が二人を遮り、席を立った。

「え？帰るのかい、綾瀬ちゃん」

「はい、木乃香にとって多分にプライベートな話になるでしょうから、当事者でない私はいるべきではないです」

「夕映…さつきもゆうたけど、おつてくれてええんやで？」

「私が事情を尋ねた時、木乃香は話しくそうでしたでしょう？仮にも友人を称しているながら任せられない自分の器量不足には腹が立ちますが、それだけ木乃香にとって大事な一件ということです。話せる時が来たら話して下さい、木乃香。責めるつもりはありませんが、私も、皆も心配しているんですから」

少し悔しそうに、それでも穏やかな口調で夕映は言った。

「…ごめんな〜……………」

「いいんですよ、それでは失礼します、辻先輩」

「ああ…大層深刻そうな悩みのようだが出来るだけ力になって見せるよ」

「お願いしますです先輩。お礼に先程私が購買で買っておいだジュースを…」

「いらんわ!!? 持って帰れ、なんだそのドドメ色の飲み物!!? 大体喫茶店で飲み物を出すなマナー違反だ!」

「失敬な。非常に美味なる飲料ですよ? それにここは持ち込みOKな店です」

『衝撃のソーマ〜暗黒味をお上がりよ〜』と描かれた怪しいボトルに全力でツツコミを入れる辻と反論する綾瀬。先程までシリアスな空気だったのにぶち壊しである。やりとりを見て近衛が小さくではあるが笑っていたのでそれが狙いだろう。…恐らくは。

「不本意ながらジュースは不評のようですので私が帰ってから美味しくいただくです。それでは木乃香、辻先輩。お先に失礼です」

「うん、またな夕映」

「今日を境に君を見なくなったらジュースが死因と見なすぞ!!? 気をつけるよできれば飲むな!?!?」

席を後にする夕映に別れを告げる木乃香といらん所で湧いて出た不安要素に律儀にツツコミと心配をこなす辻だった。

「それじゃ、改めて…。話つていうのは何だい? 近衛ちゃん」

夕映が去った後辻は木乃香の分の飲み物を頼み、紅茶が運ばれた後におもむろに切り出した。

「はい…。ウチが話したいことゆうんは、辻先輩と仲がいいゆう女の子のことなんです」

「俺と、仲がいい?」

オウム返し気味に返してから辻は自問する。そんな女子いるか? クラスや部活ではそこそこ話すけど、特別親しい女性なんて…

とそこまで考えてから不意に辻は呼ばれた理由を思い出す。

…噂を聞いて話があったって言うてきたんだよな、この娘は。だとしたらその親しい(と、されている)女子など一人しかいない。

「…桜咲について話があるってことかい?」

そう、尋ねる辻に、刹那の名前を聞いた瞬間ピクリと体を震わ

せつつ、木乃香は頷いた。

「はい…。せつちや、いえ桜咲さんについてウチ、どうしても聞きたいことがあるんです」

……………せつちちゃん？

辻はやけに親しげな愛称に内心首を傾げる。ウチの馬鹿ではあるまいし、親しくもないクラスメートに気安い呼び方をする少女ではあるまい。と、いうことは……………。

辻は半ば確信の元に言った。

「近衛ちゃんと桜咲は友達なのかい？」

木乃香はその質問に少し悲しそうな顔をして、

「…友達、やとウチは思ってます。でも、最近桜咲さんとは話せてないんです」

「…そりやまたどうして？」

「…ウチがなんか、やってしもたのかもしれない。前はすつごく、仲が良かったんです」

ウチと桜咲さん、幼なじみなんですと木乃香は言った。

…すまん綾瀬ちゃん。俺が解決するには荷が重そうな相談だ

わ。

少し顔を引きたらせつつ辻はそう心中で夕映に謝った。



などとこちらに対するツッコミだろう眩きを発していた。辻としてはこれまた申し訳なく思う。確かにいきなり 後ろで写真云々なんて叫びが大声で上がったらなんだそれはないと思うだろう、辻は心の中で背後の客に謝った。なんだか聞き覚えのある声だった気もするが気の所為だろう。

「え、えーとな辻先輩。写真ゆーのはウチのクラスメートの朝倉って娘が持つて来てくれた奴でな…」

「名前聞いたことあるぞ自称麻帆良のパラッチだな、よし判った情報ありがとう近衛ちゃん。その娘には俺からきつちりお話しておくから気にしないでいいよ」

「…えーと、お手柔らかにしてあげてな？」

目が全く笑っていない笑顔を浮かべる辻に少し引きつった顔で木乃香は取り成した。

「気を取り直して、話はわかったよ近衛ちゃん。桜咲のことで何か近衛ちゃんとの関係で知ってることが無いか知りたいんだね？」

辻の問いに木乃香は頷く。

「はい、ウチ桜咲さんともう一度子ども頃みたいに仲良うなりたいです。せっかく一緒のクラスなのに、このままやったら寂しすぎます。せやから辻先輩、お願いします！なんでもええから、せっちゃんのこと教えてください!!?」

そう言つて木乃香は深く頭を下げる。途中から桜咲さん、がせっちゃんに変わっていた。無意識だろうがそれだけ必死なのだろう。

辻としてはここまで真摯に頼まれている以上、何とか力になってやりたい。しかし、

「…申し訳ない、近衛ちゃん。俺も二年以上桜咲と会話しているけれど、近衛ちゃんの話が出たことは一回も無いんだ。桜咲からプライベートな話題が出るのは珍しいから話題に出ていれば覚えてると思う。だから、本当にすまないけど俺じゃ役に立てそうにないよ…」

心底悔しそうに辻は木乃香に告げる。ここまで必死な彼女に協力出来ないことが情けなくてならない。

…くそつなんで俺はもつと踏み込んで桜咲と会話していなかった

んだ…

「そうですか……」

「本当にごめん」

二人の間に暗い雰囲気が漂う。

いたたまれない気分を辻が味わっていると木乃香が一つ被りを振って辻に向き直る。

「…せやったら辻先輩、ホントになんでもええです。桜咲さんのことで知ってること、教えて貰えませんか？」

「…近衛ちゃん」

「しつこくてすいません、先輩はせつちゃんと仲がええから、さつきまともに顔合わせたばかりのウチに話すのは抵抗あると思います。でもウチこのまま諦めたくはないんです。嫌われてるんやったらそれでもええです。でも、もし違うんやったら、ウチが諦めたら一生仲直りなんて出来へんから。…お願いします、辻先輩」

揺れる瞳で、それでもしつかりと辻を見据え、木乃香は言った。

…強いな、この娘は。

さすが、桜咲の友人だ。

我知らず、辻は微笑んでいた。

「…先輩？」

「ああ、ごめん。わかったよ近衛ちゃん、俺が知ってることは全部教えよう。万が一後で桜咲に知られたら土下座して謝るさ。俺にとって桜咲は大事な後輩だから、君みたいな強くて優しい娘に仲直りして欲しいと、俺も思う」

臭いなーと内心苦笑しながらも辻は木乃香の頼みを快諾した。

「…ありがとうございます、辻先輩」

「お礼はいらないよ、さつき言ったら、俺も仲直りして欲しいって。

そしてまず一つだけ、確実に言えることがある。」

再度頭を下げる木乃香に、辻は微笑み、後輩を安心させるため、辻の知っている彼女を木乃香に伝える。

「桜咲 刹那は理由も無く友人を嫌いになるような人間じゃない」  
はつきりと辻は断言した。



「曲がりなりにも部活であいつと一番接していたのは俺だと思ってる。あいつは初めこそ、何処かよそよそしくて、試合で叩きのめした相手に声もかけない取っ付き辛い奴だった。それでもしつこく声をかける俺を邪険にはしなかったし、指摘をすれば素直に聞いてたよ。そのうち少しずつ周りと打ち解けていって、相変わらず口数は少なかったけど誰にでも丁寧に接するようになったよ」

昔を懐かしみながら辻は言葉を繋ぐ。

「恥ずかしい話、先輩で部長だって言うのに桜咲には負けっぱなしでさ。それが悔しくて随分しつこく付き纏ったよ。あいつは呆れながらも俺に時間を裂いて、指導をしてくれた。立場が逆だよ、これじゃあ」

「…せっちゃん、いえ桜咲さんは強いんですね」

話を聞いて、小さくではあるが微笑んで木乃香は呟いた。

「別にせっちゃんでもいいと思うよ。呼びかけるのは仲直りできた時に取っておいてさ、本人がいない時くらい好きに呼んだっていいじゃない」

…中村は珍しく正しかったな。

「…そうですね?」

「そうさ。とにかく桜咲はちよつと話しかけにくい空気を纏ってるかもしれないけど、根はとても素直で優しい娘だと俺は思ってる。嫌われる心当たりがないなら、桜咲が近衛ちゃんを避けるのは近衛ちゃんに責任はないよ、きつと。何か止むに止まれぬ事情があるんだと思う。だから今は話しかけてもつれないかもしれない、でも近衛ちゃん、諦めずに話しかけ続けてみてくれ。本当に嫌いな人間に人はいつまでも同じ態度は取らない。姿を現さなくなったり実力で排除しようとするんだ。ただ避けているだけなら、今は話せないって。…ことなんじゃないかな」

木乃香は目を見開いて、辻の言葉を聞き続ける。どうかこの少女に伝わればいいなど、辻は自分の言葉を語る。

「俺は桜咲 刹那を勝手に信頼してる。だから勝手に、近衛ちゃんは仲直り出来ると、言わせて貰うよ」

その言葉に、木乃香は俯いて絞り出すように、言葉を零した。

「…ええんでしょるか」

消えているように、小さく。

「…せつちゃんにウチ、嫌われてへんって。思ってたええんでしょるか？」

言葉を受けて辻は苦笑する。

「あれだけ大見得きっておいて情けないけど断言は出来ない」

でもね、と辻は続ける。

「近衛ちゃんから話を聞いて、現在の桜咲を俺は知ってて。何となく思ってたんだ、二人の縁は切れてないって」

説得力ないかな、と辻が笑っていると木乃香は顔を上げてふるふると首を振り、

「ううん、信じます。辻先輩、せつちゃんを凄くよいように見てるって思いましたもん」

「いや、そんな大したもんじゃないよ」

大体その言い方だと誤解を招きそうだし…と、辻が口の中で呟いている内に木乃香は目の端に浮かんでいたものを拭い、少しだけ明るさを取り戻した笑顔で辻に話しかけた。

「辻先輩。せつちゃんの部活の様子、もっと詳しく教えてくれませんか？」

「ああ、もちろん。桜咲はね、最近の中東部女子の指導を任せられるようになったんだ」

「せつちゃんが指導ですか！どないな感じなんですか？」

「結構初めは戸惑ってたけどね。元々俺に対して指導をしてたようなものだったからすぐに慣れたみたいで…」

二人はそれから、外が暗くなるまで一人の少女を話題に語り合った。

「すいません、辻先輩。こない遅くなってしもた上にごちそうしてもろて」

「いいのいいの。こっちも楽しかったよ。桜咲とよりを戻せることを祈ってるよ。もちろん何か協力できることがあつたら言ってくれ。できる限り力になるよ」

喫茶店から出て礼を言ってくる木乃香に笑って応じる辻。それを聞いて何処か楽しげに笑う木乃香。

「ウチ、せつちゃん辻先輩を慕ってる理由、なんとなくわかりました」

「は？」

辻は思わず間抜けな声を上げる。

「辻先輩がせつちゃんの彼氏さんに立候補するんやったらウチ、応援しますえ」

「え、何？なに言ってるの近衛ちゃん」

「木乃香でいいですえ、じゃあ、辻先輩、今日はホンマにありがとうございました」

ぺこりと頭を下げ、木乃香は奥の雑踏へ消えていった。夕御飯の用意がなくなるといふ声が遠ざかって行く。

「…なに、十年來の親友にまで俺と桜咲は茶化されるわけ？」

何処か呆然と辻は呟く。

しばらくして気を取り直した辻は流石にタイムアップだと自分の寮へと帰り始める。

「結局桜咲とは話せなかったけど今日は来てよかったな」

辻は満足げに帰り路を急ぐ。何日も剣道部を休む訳にはいかなないので明日はきちんと顔を出そうと辻は思い

昼間に比べれば幾分減った女生徒の間を通り抜けていく。心なしか目線も優しいような気がするのには心が満たされているからか「きやあああああつ!!?彼処にいるのーはじめちゃんよね!!?ーはじめちやあああん!!?やつと逢えたわああああ!!?」

周囲一带に響き渡る気持ち悪い男の裏声に心が萎んでいくのを辻は感じた。

「気味の悪い声を出すんじやねえよ変態馬鹿!!?」

「あく視線が痛い。やっぱりここら辺僕達にとってアウェイだよな」

「9割方このカスの所為だがな」

聞き覚えのある声が続々と後ろから聞こえてくる、考えるまでもなくバカのレンジャー共だ。

「…なんて言うかいい気分で終わらせてくれないのかなあ……」

「おい辻ー、辻斬り野郎ー聞こえてんだろー、返事しやがれー」

「聞こえてるよ馬鹿野郎、不名誉な呼び方をしてくれてんじや」

半ばヤケクソ気味に振り返った辻はピタリと動きを止める。

原因は近づく変人集団の中央でロズウェル事件の宇宙人の如く両手を掴まれ連れられているスーツ姿の少年にあった。

「よう辻、こんな時間までご苦労さん、収穫あったか？」

「俺の状況報告より何より先に誰だ、その子は」

見れば妙な木の棒を背中荷物から生やし子どもだてらに仕立てられたスーツを着ている。あどけないながら顔立ちは整っており利発そうな雰囲気少年だった。

最もその少年の顔はお通夜の席のように暗く、青ざめている。格好だけ見ればとっ捕まった万引き少年のようだがそれならここまで中村達が引っ張っては来まい。よく見れば大豪院の手には紐で縛られた鼬の様な生き物が暴れては大豪院に締められてぐったりしている。

…ホントになにやってんだこいつら。

「辻、説明すると長くなんだが巻いて説明すつとお前追っかけてたら色々あってこいつ捕まえたんだよ」

「要約しすぎだわけわからん。いいから答えろその子は誰だ。君、大丈夫かい？君の右腕掴んでる変態に何かされなかったかい？」

「あ、いえ…」

「辻、その子は子供先生だ。聞いたことあるだろ、春から教師やってる10歳児の話」

「……………なんだと？」

豪徳寺の説明に固まる辻。よりにもよって今凄まじく不穏な言葉をこのリーゼントは吐かなかつただろうか？

「…今なんて言った？」

「どうしたの辻凄いい顔して、だから子供先生だよ。奇遇なことに桜咲

ちゃんの担任やってるんだって」

「なぜその子供先生を捕獲しているのかについては複雑な事情があったな」

大豪院の言葉を半ば聞き流し、辻は俯き長いため息を一つ零す。そしておもむろに全員顔を見て

「お前ら今日に限っては全力でいらんことしてくれたな!!?」

「は?どうしたよ辻。興味ねえか子供先生」

「あるかないかと言えばあったがタイミングが悪いよ!!?」

「え、何タイミングって。なにかまずいことでもあるの?」

「あるんだよ!!?ちくしょうなんでこいつらはピンポイントな状況でピンポイントな人物を:俺は今日桜咲に不義理を働いてばっかりじゃんか」

「桜咲がどうかしたのか?ともあれ何か大変そうだが聞け、辻。こちらもちちらで大変な事態だ」

「何が大変だよ軽いノリで人に約束破らせやがって:」

「おい辻、マジで聞けって。すげえヤバイこと知ったんだよ俺ら」

怒ったのち嘆いていた辻だが中村の滅多にない真剣な声によく耳を傾けることにした。

「:だから何が大変なんだよ、子供先生に関係あるのか?」

「大有りだ。辻、マジで状況はシリアスだぜ」

「本当にシリアスか?」

「おう」

「ギャグじゃなくて?」

「そうだ」

「シリアスに見せたギャグじゃなくてか?」

「しつこえよ!!?真面目な話だ!!?」

怒る中村を見てどうやら本当に何かあったらしいと認める辻。

「あ、あの:」

「ん?」

小さくかけられた声に首を下に振るとすっきり存在を無視する形になっていたネギが恐る恐るという感じで辻に話しかけていた。

「僕、ネギ・スプリングフィールドと言います。中村さん達のいう話には、僕が関わっているんです」

「ついでにこの鼬もな」

大豪院が相変わららず元気に暴れている鼬を軽く掲げる。

「…一体なんなんだよ」

いよいよわけのわからない辻はこれ以上ないほど怪訝そうに聞き返す。

「まあ話せばマジで長いから結論だけ言うとな」

「中村、お前の使えないまとめはもういい」

「所が今回の話はちゃんと説明してもわかんねえと思うぜ」

「…何？」

「まあ聞け、俺たちは今日な…魔法を目の当たりにした」

「……………狂ったか。ああ、元からだな」

「違えよ！いいから聞け!!？」

「寝言は寝て言え。俺は帰る」

「待てやコラア!!？」

押し問答の末喧嘩になり、事情説明が始まったのは十分後のことだった。

## 5話 少年少女とロボ少女の戦闘 武道家、絶叫

「辻の奴は何処にいるんだろうな、馬鹿引きずって来るのに時間喰いすぎたぜ」

「順当に考えて桜咲ちゃんの居る所なんだろうけど僕らにわかるはずないしね」

「このままではとんだ無駄足だぞ。おい馬鹿、お前は心当たりは無いのか」

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿うっせーよ!!?俺が知るか、いつそ学校まで押しかけて聞いてみるしかねえんじゃねえの?」

時間を少し遡り辻が喫茶店で木乃香と話し始めた頃、中村達四人は遅れて麻帆良女子中等部を歩いていた。周りの奇異の目線も気にせず辻と刹那を搜索する四人だが当てずっぽうに回っても成果は芳しくなく、気づけば敷地の中心からは大分離れた所まで来てしまっていた。

「一旦学校付近まで戻るか。いくらなんでもこんな端の方にいないだろうあいつら」

「って言うか電話かけて辻に桜咲ちゃんに会えたかどうかだけでも聞こうよ。会えてないなら僕らも搜索に加わればいいし」

「そうだな…」

このままふらついていても不毛なだけだとの結論に一同達し辻に連絡を入れようと山下が携帯を取り出す。

「じゃあちよっと待ってて皆、一回で出てくれればいいけど…」

「んあ?」

電話をかけようとした瞬間、中村が間拔けな声を上げた。

「どうした中村、ボケが回ったか、ああすまん元からだな」

「言ってやるな豪徳寺、本人はこれでも精一杯生きているのだ」

「うるせえ死ねお前ら。いや、ちよつとあれ見ろよ」

指を指す中村、その方向を三人が見やると、そこには一人の女生徒がいた。

「あの子がどうした、ナンパする気ならやめとけ。成功しないどころ

か通報される」

「ん〜？なんだかあの子どこかで見た気がするな」

「…超包子の店員をやっている少女だろう。絡繰からくり茶々丸ちやちやまるとか言ったな」

大豪院の言葉に他の三人が思わず大豪院へ振り向く。

「…なんだ」

「いや、大豪院が女性関係の話題で情報知ってるのがなんか意外で」

「言われて見ればそうだと解るが普通見ただけで思い出さねえぞ、格好全然違うしよ」

「ま、まさかポチ、ああいう子が好みなのか？お前には古ちゃんと言う将来を誓い合った仲の少女がいるじゃないか!!？浮気なんてお父さんは許しませんよ!」

「中村、とりあえず死ぬ。古は単なる中武研の鍛錬仲間だ。そしてポチと呼ぶな、殺すぞ」

「はいはい落ち着いて大豪院。で、中村。その絡繰ちゃんがどうかしたの？中村が節操無いのは知ってるけど中学生にまで手を出すわけ？」

「確かに絡繰 茶々丸は麻帆良美少女ランキング評価A―についてるハイレベルなロボ娘属性の萌え対象だが俺が指してんのは後ろだ、後ろ」

「って言うかロボなのか、あの子？」

「いや豪徳寺、関節とか耳とか見れば判るでしょ」

「それは今いい、…確かに妙だぞ、見ろ、豪徳寺、山下」

大豪院に促され見た先には、茶々丸の後ろからバレバレの潜み方についていく少女と少年がいた。何故か子どもだというのにスーツ姿の赤毛の少年に見覚えは無いが、鮮やかな橙色の長髪をツインテールにした少女には一回見覚えがあった。

「何やってんだろうな、ストーカー？」

「お前じゃあるまいしよ。というかあれバカレッドじゃないか？」

「豪徳寺、名前で呼んであげようよ。確かに神楽坂ちゃんだね、隣の少年は誰かな？」



「ま、まさかシヨタに目覚めちまったってのか、神楽坂かぐらぎ 明日菜あすな。流石は俺と覇権を共にするバカレツドだぜ…赤髪、眼鏡、スーツをオプシヨンたあわかってんじゃねえかよ」

「脳が腐る、黙れ。…もしや噂の子供先生とやらか？」

大豪院の呟きに再び他の三人が振り向く。

「今日はどうしたポチ、何時もあんま喋んねえくせにやたら今日は役に立つじゃねえか」

「何気に女子中学生の情報通だったりするか大豪院」

「僕は女の子に興味のある大豪院の方が好感が持てるからその調子で行って」

「囃すな貴様ら、古に担任が子供に変わったと話を聞いて風貌を聞いていただけだ」

「なにもうポチちゃんつたらさつきから惚気てくれちゃって!!? 俺の嫁自慢ならもっと堂々とやっていいのぐべえっ」

皆まで言わずに大豪院の崩拳が中村に打ち込まれ宙を舞う中村。

「馬鹿は放つとくとしてどう思うよ?」

「遊びでやっている雰囲気じゃ無いしね。気にはなるけど声をかけるのもなあ」

「面識がある、という程でもないが神楽坂は理由も無く人をつけ回すような人間ではあるまい。様子を見た方がいいかもしれんな」

「俺は無視かよ薄情者共!!?」

中村をきつちりスルーして一行は少し離れた物陰から尾行を観察することにした。

「絡繰ちゃんってどんな娘なの? 僕は超包子で位しか見たことないけどクールな娘ってイメージしか無いな」

「ロボが感情豊かっても違和感あるけどな。評判は俺も知らん、変態、出番だ」

「科学部の野郎連中には大人気でその他コアな属性の奴らから根強い人気を得ている、ランクB越えはそのおかげだろうな。人と成りは山ちゃんの言った通り無口でクール、ただ面倒見はいいらしい。ガキやじつちゃんばつちゃんらは通学路周辺で助けて貰ったつのが大勢

いるんだと。更に何故か麻帆良ロリッ娘ランキングTOP3に毎回入るエヴァたん知ってたんだろ？あの変態教師多田野が狙ってる金髪幼女。あのロリの身の回りの世話してるらしい。茶道部所属で趣味は野良猫の餌やり、スリーサイズは残念ながら非公開だが俺が見たとこバスト84のCかDだな。悪いのがこんなこと位しかわからん」

「充分詳細で気持ち悪いが今回ばかりはよくやった、ただし後で死ぬ。そうするといよいよつけ回される理由がわからんな」

「中村じゃないけどストーリーカーはついてもお礼参りが来るような娘じゃ間違っても無いね」

うーむと一同首を傾げる。そうしている内に茶々丸はどんどんと外れの方まで歩いて行き、やがて川べりの高架下でネコ缶を取り出すと寄って来た野良猫に餌をやり始めた。

「あ、本当にやってるぞ餌やり。なんだ、いい娘じゃねえかよ」

「しかし引く程寄ってくるね猫。よほど普段からやってないとここまで寄り付かないよ」

「野良は警戒心強いしなー、あ！今子猫がスカート下に潜り込んだ、いいなあ俺も猫になりてえ」

「とりあえずお前はもういらぬから黙っている。そして何やら不穏だぞ、見ろ」

大豪院の指摘に他が首を向けるとネギと明日菜が姿を現し、茶々丸と正対した所だった。

「おいなんだ、楽しくお喋りって空気じゃねえぞ」

「事情はさっぱり飲み込めないけどやりあう空気だね」

「おい止めようぜ、少なくとも片方は知らない仲じゃねえしよ」

「女子どもだからと言って私闘をしてはいかん訳でもない。行き過ぎるようなら止めればよからう」

「いや、あの子達は武人じゃないんだからそんなバトル脳な考えで纏めちゃいけないでしょ、止めようよ」

「そうだ。女は暴力なんざ振るうもんじゃないやねえ」

「じゃあ古ちゃんとかどうなるんだよ？」

「混ぜつかえすな中村、とにかく他人の問題に迂闊に首を突っ込むも」

のではあるまい」

「んなこと言っただつてお前、」

「黙れお前ら、始まるぞー!」

揉める一同を中村が鋭く制する。その直後、ネギが杖を構え何事かを咄くと明日菜の体が発光を纏い、常人には見切れぬ速度で茶々丸に向かつて飛び出した。

「ああ!?」

「なっ……」

中村達は驚愕し、思わず声を漏らした。

神楽坂 明日菜という少女は天性のバネを持っており、下手なスポーツマンよりも優れた動きをするのを、多少付き合いのある中村達は知っていた。だが明らかに今の動きは、素人らしく初動はバレバレ、無駄な動作も多かったが「多少優れている」の域を超えていた。

と、言うよりは生身の人間では不可能な速度を出していた、という表現の方が異常は明確にわかるだろう。すなわち普通でない力が、今の明日菜には働いている。例えば、「気」のような。

その速度に茶々丸も面食らったらしく、反応し切れずに明日菜の攻撃を喰らう、何故かデコピンだった。

さらに二人の後方でネギが杖を振り、輝く十数発の光弾を茶々丸に向けて撃ち出した。

「やべえぞ、あれ!!」

中村が、この男にしては珍しく切迫した声を上げる。普通でない力を持つている彼らから見て、あの光弾には、少なくとも当たり所が悪ければ死ぬ程の威力が籠っているのが彼らにはわかった。

「止めねえと!!」

「くっ……」

出遅れた豪徳寺、大豪院が失態に歯噛みする。が、

「言わないことじゃ、ない!!」

一人、他の三人よりも抜きん出て早く飛び出した姿があった。

「山ちゃん!!」

「援護、頼むよ!!」

叫んだ山下の姿が、かき消える。

「マスター、すみません。私が壊れたら猫の世話を…」

茶々丸は眩き、目の前に迫る光弾を静かに見据える。

「あつ…止ま、」

その眩きが耳に入り、ネギは魔法の射手に制動をかける。ネギは最初から迷いを得ていた。自分が狙われているからといって生徒を手にかけていいのかを。迷いながらも魔法を撃ったネギだが、茶々丸の己の最期ですら猫を気遣うその優しさに、自らの教師としての本分を思い出したのだ。

だが、その制動は必要のないものだった。

「レデイへの扱いじゃないけど、許して、ね!!?」

「あつ…」

光弾の直撃する寸前、瞬動と呼ばれる気を使った移動術で茶々丸の側に山下が現れる。

山下は茶々丸の襟と左手を掴み、自らの後方へ体を沈める。茶々丸が引かれてバランスを崩し、山下へ倒れかかる動きになった瞬間、山下の全身がブレる。全身の筋肉が瞬発し、茶々丸の倒れかかる力の動きに強力な力が加算され動きの方向が変わる。

次の瞬間、凄まじい速度で反転した山下の手に茶々丸は既に掴まれていない。茶々丸は、風に舞い上げられたビニールかなにかのように、緩やかに回転しながら宙を舞っていた。

「川に落ちるから大丈夫と、思いたいね…」

そう呟く山下に、光弾が着弾する、その寸前。

「裂空掌・散」

「漢魂あ!!?」

咆哮を上げながら中村と豪徳寺がそれぞれ掌打と腰だめの突きの動きで腕を突き出す。

次の瞬間、中村の手を外から内へ振るう動きの中、無数の光弾がその手から放たれ、まるで散弾銃のような十発近い弾幕を形成し、ネギの放った光弾の群れに横から突っ込む。

一方、豪徳寺の突き出された拳からは直径1m程もあるうかという巨大な光弾が飛び出した。何故か表面に「漢」と読める文字の浮かんだ光弾は高速でネギの光弾幕の頭を抑えるように飛び込む。

横から飛び込んだ中村の弾幕はネギの弾幕にぶつかり、次々に爆発してネギの光弾を誘爆させて行く。撃ち漏らした数発は、割り込むように進路に入ってきた豪徳寺の光弾がその内の一発に当たった瞬間、直径数mの巨大な爆発を起こし、全てが弾けて散った。

「え、何!?!?」

「い、今のは」

「なっ増援が来やがったのか!?!?」

ネギと明日菜、ついでに地面から響く謎の声は唐突に飛び出し、茶々丸を守り攻撃を撃ち落とした集団に驚愕の声を上げる。

「て、言うか、え?あれって中村さん達…?」

「そうだ、神楽坂。曲がりなりにも状況が理解出来たならこちらを向け」

「は?…」

疑問の声を上げた明日菜が後ろから掛けられた声に振り向くと、そこには後ろからネギの首を抑え、同時にネギの足を踏みつけて動きを封じる大豪院の姿があった。

「痛っ」

「黙っている、小僧。妙な動きをしたら即、意識を奪うぞ」

押さえ付けられ苦痛の声を上げるネギに冷たい口調で大豪院は告げる。たとえ子供といえども得体の知れない力を使い、人を殺傷出来る攻撃を放つ以上、油断するつもりは大豪院にはない。

「ち、ちよつと、大豪院先輩!!?ネギにそんな…」

「てめえ兄貴を離しやがれ!!?明日菜の姐さん、どうにかして兄貴を!!?」

「黙れ貴様ら。俺の行為が酷いと感じるなら、貴様らは今あちらの少女に何をしようとした?」

大豪院は何処かから響く甲高い三人目の声に不意を突かれないよう警戒しつつ鋭く言葉を返す。

「そ、それは…」

「黙れと言ったぞガキ。骨の一本も折られたいか？」  
「う……………」

反拍の声を上げようとするネギを脅す大豪院。彼の口調に冗談の響きは無く、本気であることが見て取れた。その迫力に怯えるネギ。「ま、待って大豪院先輩!!?とともすぐには説明し切れないけど事情があるの!!?ネギは命を狙われてるのよ!!?。」

「…………何?。」

切羽詰まった明日菜の叫びに、思わず疑問の声を漏らす大豪院。その間にも周りは制圧の終わった大豪院の元へ集まり始める。

「よし、神楽坂ちゃんと子供先生も確保と。危ねえ所だったな、怪我は無いか全員」

「俺は気弾撃っただけだから問題ねー、山ちゃん無事か?。」

「目の前の爆発には肝を冷やしたけど大丈夫。茶々丸ちゃんなんかしばらく空に浮かんでただけど、こつちに頭下げってから飛んでっちやっつた」

「空飛べんのかよ☒パネエなロボ娘!。」

「というか事情聞かないといかんのに黙って返すなよ山下」

「全員聞け。何やらこいつらおかしなことを言っている」

大豪院の言葉に全員がネギと明日菜の方を振り向く。

「あんだく?カツとなつてやった。反省はしているが後悔はしていない、なんぞとほざいたんならガキでもぶん殴るぞ」

「事情をとりあえず聞こうよ。神楽坂ちゃん、素直に話してくれるなら手荒な真似は誓ってしないしそつちの子も解放するよ」

「お前らの動機によってはそのまま広域指導員送りにするけどな。後なんだ今のは?気じゃねえよな二人が使ったの」

各々聞きたいことは山とある。が、未だ混乱状態にある明日菜は満足に言葉を返せずにいる。中村達が普段とは違い、何処か剣呑な雰囲気醸し出しているのも原因の一つだろう。ネギに至ってはそもそも大豪院によって喋れる状態にない。

これでは埒が明かないと、捕まえているネギに事情を聞こうとした

大豪院だが、

「やいやいやい手前ら!!? さつきから聞いてりや事情も知らねえ癖にこっちの邪魔しやがって、どうしてくれんだこれじゃ兄貴が殺されちまうだろうが!!?」

地面から響く声に遮られた。

「あ?なんだこの声」

「誰かいるのかまだ?」

「気をつけて。隠れて奇襲しようとしているかも…」

「俺たちは逃げも隠れもしてねえ!!? 俺たちはここだあ!!?」

自分達の遥か下から響くその声にネギと明日菜を除く全員が下を見やると、そこには小さな白い生き物がいた。

「…鼠か?」

「フェレットじゃない?」

「鼬だろ?」

「何でもいいが喋ったかこの小動物?」

「俺たちは由緒正しいオコジョだ馬鹿野郎!!? 兎に角今すぐ兄貴を離しやがれ!!?」

キーキーと喚くオコジョーアルベール・カモミールに、その場に沈黙が降りる。

「…疲れてんのか、俺?」

「中村、僕にも聞こえるよ。夢や幻じゃないみたいだ」

「いや待て。色々待てよ、何だこの状況?」

「…腹話術か?」

「何をブツブツ言ってるんだ! いいから兄貴を」

「ま、待って下さい!!?」

いよいよ事態に収集がつかなくなりそうだったその時、全員を制したのはネギだった。

「ぼ、僕がきちんと説明します。僕が何者でなんで茶々丸さんを襲ったのかも全部説明しますから、カモ君と明日菜さんに乱暴しないで上げて下さい!!?」

「あ、兄貴!!?」

「ネ、ネギ、大丈夫よこの人達悪い人達じゃないから！先輩達、これ以上私達何もする気は無いからネギを放してあげて!!？私達傍から見てたらすぐく洒落にならないことしてたのはわかってるけど事情があるのよ、ホントに!!？」

「あくわかったわかった。大豪院、一旦放してやれよ。どうやらもうやり合う気はねえみたいだし」

必死に頼み込むネギ達に氣勢を削がれた中村は頭を掻きながら言った。

「…大丈夫か？」

「まあいいんじゃない？動きからしてもし逃げても捕まえ直せるし」

「そうしようぜ。言っとくがお前ら、妙な真似したら今度こそ叩き潰すぞ」

各人念を押して放すように大豪院に言う。大豪院は一つ息をついてネギの拘束を解いた。

「ケホツケホツ」

「ち、ちよつと大丈夫ネギ？」

「兄貴、無事ですか!?!？」

咳き込むネギに心配して駆け寄る一人と一匹。

「だ、大丈夫です。ありがとうございます、えーと」

「大豪院だ。礼はいらん、こちら子どもに対して少々やりすぎたかな。だがきちんと説明はしてもらおう」

頭を下げるネギにぶつきらぼうに返し、説明を促す大豪院。

「まあまあ大豪院、あんまり強く言っても萎縮するだけだよ。ひとまざ落ち着いて、君たち。手荒な真似をする気はさつきも言つたけど無い。でもさつきの絡繰ちゃん僕らからして襲撃されるような悪い事をする娘じゃないんだ。君たちにも言い分はあるだろうけど、黙って君たちをこのまま帰す訳にはいかない。ゆっくりでいいから、説明をしてくれるかな？」

高圧的な大豪院を制し柔和に微笑んで落ち着かせようとする山下。中村も豪徳寺もとりあえず黙って話を聞くことにしたらしい。

「何が悪い事をする娘じゃないだ!!？何も知らない野郎どもが偉そう



にぐえっ!!?」

「あんたは黙ってなさい馬鹿力モ!!? せっかく先輩達が落ち着いてくれたのにまた凄まじりたいの!!?」

「ナイス神楽坂」

再びまくし立てようとしたカモが明日菜によって締められる。その素早い制止に親指を立て賞賛する中村。

「あっちは気にしないで。じゃあネギ君、でよかったかな? 話を始めてくれるかい?」

「あ、はい、わかりました…」

ネギは一つ息をついて話し始めた。

「まず、僕の名前はネギ・スプリングフィールドと言います。明日菜さん達の通っている麻帆良中等部の3ーAで担任をしています」

「うん、噂では聞いてるよ。それでどうして君は担当する生徒の一人の絡繰ちゃんを襲ったんだい?」

「はい、それは僕の特殊な立ち位置に関係しているんです」

「立ち位置?」

「ち、ちよつとネギ。それ言っちゃって大丈夫なの?」

傍で心配そうに話を聞いていた明日菜が慌てて聞く。

「はい。この人達には既に見られてしまいましたし、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんの事を説明するには避けては通れませんので」

「そう…」

「兄貴…」

「つていうかなんか今エヴァたんの名前出なかった?」

黙って聞いていた中村が唐突に出た少女の名前に質問をする。

「はい。僕が茶々丸さんを攻撃してしまったのはエヴァンジェリンさんに関係があるんです」

ネギははつきりと断言する。

「…いよいよ訳わかんねえが何か因縁があるのはわかった。で、さっき出た立ち位置ってのはなんだ?」

豪徳寺も口を挟み、先を促す。

「はい。エヴァンジェリンさん達は僕の血を欲しがって僕に襲撃をか

けて来たんです。その理由が、僕に特殊な血が流れているからなんです」

「……血？」

「なんで血よ？」

「特殊な血ってなんだ特殊な血って」

「皆待った。気持ちはわかるけど先に話を全部聞こう。ネギ君それで？」

「はい。僕に流れているのはある偉大な魔法使いと呼ばれている父さんの血なんです。僕自身も立派な魔法使いになる為にこの学園に修業に来たんですが、それを知ったエヴァンジェリンさん達が、封印されている自分の身を自由にしようと、僕の血を吸って力を取り戻す為に僕を襲って来ました。命が危ないと思ったから僕は、茶々丸さんを襲ってしまったんです」

後悔している様子でネギは言った。しかし、それに対する反応は無い。

不思議に思ったネギが顔を上げると、そこには奇妙に顔を引きつけた四人がいた。

「え？」

何かおかしな所があったかと明日菜達の方を振り向くと、明日菜とカモはまあそういう反応になるわよねー、そうっすねー、といった感じに苦笑していた。

「え？…え？」

ネギが四人に向き直ると丁度中村が奇妙な無表情のまま片手を上げた。

「……え〜それでは皆様、ご唱和下さい、さん、はい」

片手を降ろす。

「二つなんじやそりやああああああああああつ!!??!!??!!??!!  
?!!??!!??!!」

四人の魂の叫びが暗くなり始めた麻帆良の空に木霊した。

「んでそっから魔法の実践して貰ったり魔法使いの成り立ちやら何や



## 6話 少年の苦悩 武道家達の決意

「…纏めるとエヴァンジェリンっていうネギ君のクラスにいる娘が実は600年生きてる吸血鬼で、15年前にネギ君のお父さんにこの麻帆良に封印されて、その封印を解く為に魔法使いとしてずば抜けた素質を持つてるネギ君の血を吸おうとしている。ネギ君は血を吸われて殺されない為に、将を欲すればまず馬を射ての理論で従者の絡繰ちやんを倒そうとしたけれどうちの馬鹿共が邪魔したんで絡繰ちやんは逃げてしまつて現在に至る、と」

「はい……………」

既に陽は落ちて、辺りはすっかり暗くなっていた。辻とどこか暗い表情で話し合っているネギは教員をやっていると言えどまだ十歳である。本来ならとつくに家に帰さなければいけないのだろうが、色々そんなことを言っつていられる状況ではなくなっていた。辻はネギの下宿先に連絡を入れ、安全に送り届ける旨を先方に確約し、現在の話し合いに臨んでいた。

…電話で出た相手が近衛ちゃんだった時は巡り合わせの凄まじさにかなりビビったが。(やたら朗らかな声で辻先輩が言うなら安心や〜、と快諾された。)

「しっかし魔法に喋るオコジョに拳句の果てには吸血鬼と来たもんだ。…一日色々ありすぎて頭混乱して来たぞ」

「痛い程よくわかるけど辻、残念ながら全て現実なんだよね…」

「世界は思ったより摩訶不思議なもんで溢れてた…ってか。にしても魔法かー」

「この目で見えていなければ一笑に付していたのだがな…」

現実を認められないとばかりに沈んでいるバカレンジャー、正直かなり珍しい光景である。

「あ、あの皆さん。先程も言ったんですが、僕が魔法使いだってことはどうか秘密でお願いします。魔法関係者に知られたら僕は本国に強制送還でオコジョにされちゃうんです」

「魔女っ娘かお前は、ともあれ了解だ。他人の秘密にしている事をべ

らべら喋るなんざ漢のやることじゃねえ」

「とうか話しても信じて貰えないだろこんな話」

「正気を疑われるのがオチだね。僕も約束するよ、ネギ君」

「事情が判明した以上ネギ教員に含む所は無い。俺も了承した」

「中村、お前もいいよな、…中村? どうした?」

ネギの嘆願にバカレンジャーが次々了解していく中、一人反応の鈍い中村に辻が確認するがやはり返答は無い。

「…可能性はあるよな」

「ん? 何だ?」

中村が何事かを呟き辻が聞き返す。

「ネギ少年!!? 聞きたいことがある!!?!!?」

「うおつ!!?」

突如バネ仕掛の人形の如く跳ね上がり、大声を上げる中村。声を聞き取ろうと近づいていた辻が驚いて思わず二、三步後退するが気にした様子は無い。

「な、何ですか?」

多少怖気づきながらもネギが聞き返す。

「魔法つてのは誰でも身につけることは出来んのか?」

「え?」

中村の予想外の質問にネギが驚いた顔をする。その言葉に周りもざわついた。

「おい中村、お前魔法を身につけようってか?」

「確かに凄い力だけど今そんな場合じゃ無いでしょ」

「それに貴様は既に空手に身を捧げた筈だ。武道家が二足草鞋を行おうというのか?」

口々に中村を非難する他の面々。そんな中辻はなにか悟ったような顔で豪徳寺達を制した。

「落ち着け皆。この馬鹿は空手だけは真面目にやってるから。絶対何か下らないこと考えてるに決まってる」

「えーと、中村さんは魔法を使えるようになりたいという事ですか?」

ネギが驚きから立ち直り中村に尋ねる。それに対して中村は不敵

に笑い、応じる。

「応よ、是非とも俺に魔法を教えてください、ネギ君。魔法なんて超パワーが使えるようになりゃあ姿を見えなくしたり壁の向こうを透視出来たり、ぶつちやけ召喚魔法みたいなのでサキユバスとかのエロい生き物呼んだり出来るんだろ!!? 夢のような力じゃねえか!!?」

「ほらな」

「最悪だ、こいつ…」

「わかってたことだけどね…」

「本当にブレないな、こいつは」

呆れと軽蔑とほんの少しの感心の視線にもめげずに、中村は鼻息も荒くネギに詰め寄る。

「俺に出来る限りの報酬は払う、頼むネギ君、俺にとっての人生の一大事なんだ、この事実は!!?」

「安い人生だな…」

豪徳寺が哀れなモノを見るようにポツリと呟く。

「え、えーと中村さん。確かに魔法は訓練すれば予程適性が無い場合を除いて、誰にでも使えるようになるんですけど、相当な時間の修業が必要ですし、邪な目的のために使うのは…」

「何を言ってるネギ少年!!? 力を身につけるのに努力が必要なのは当たり前だろう? 己が身を鍛えずして身につく力なんて一つもありやあしねえ。修業、望む所だぜ!!? それにネギ君、力そのものに善も悪も無い、ただ使う人間によって善し悪しが決まるんだ。さっきはああ言ったが俺は魔法という力に大いなる可能性を感じている。俺が魔法を身につけられれば、きつと周りの為にその力を振るうことが出来ると思う。だからネギ君、より大きな幸福を導く為に、俺に魔法を教えてくださいませんか?」

「中村さん…そんな立派な考えで…」

「騙されるなネギ君。一分前の色欲の権化のような姿を思い出せ」

「大体こいつ結局善いことの為に魔法を使うとは断言してないよ」

「幸福の為に云々の発言の頭にはどうせ自分の、がつく。遠回しな煙巻きに惑わされるなネギ教員」

「そもそもそんな悠長にお勉強している場合じゃないだろうが!!? 命がかかってるんだからもつと真面目にやれ、中村!!?」

辻の怒号に中村も叫び返す。

「俺は大真面目に言ってるんだよ!!? とは言え確かに学習装置が危機に瀕している現状、薔薇色の未来の皮算用をしても始まらねえか。よし、わかった!!? 学習装…いやネギ少年の身の安全の確保を真面目に考えようぜ、お前ら!」

「脱線どころか車道まで逸れたのはお前だよ」

「と言うかこいつ、いたいけな十歳児を学習装置と呼んだぞ」

「人間のクズだね」

「ツツコンでいるときりが無い、後で殺しておけ」

一通りの漫才が終わってからネギを含めた一同は、車座になってエヴァンジェリンに対する策を考えてる。

「…つまり現状ネギ君は他の魔法関係者とやらには頼りたくないんだな?」

「はい。相談したいのは山々なんですけど、エヴァンジェリンさんほもし魔法関係者に自分のことをバラしたら僕の生徒を襲う、って…」

「解りやすくゲスだなあのチビ女」

「でも話によると封印されて大分弱体化してるんだろ? こつそり相談して一気に拘束すりゃあいいじゃねえか」

「豪徳寺、相手が600年生きてるっていうのが本当なら凄まじい人生経験持つてるって事だよ。それぐらいは予測済みだと思うし、大体魔法なんて訳のわからない力だ、どこからどう監視されてるかかわからないし、弱ってるからって多人数を一気に巻き込む手段が無いと決めつけるのは危険だよ」

「そうだな、何にしても情報が少なすぎる。正確な戦力もわからないのでは下手に動くで大惨事を招くかもしれない…」

「……………」

一同に沈黙が降りる。判断材料がどうにも少なすぎるのだ。

「面倒臭えな、要は魔法関係者とやらの力を借りずにエヴァたんをぶちのめせりゃあ何の問題もねえんだろ?」

「中村？」

重い沈黙にうんざりしたように中村が言った。

「俺らでやっちゃまおうぜ。それが一番手っ取り早いだろう？」

「…中村、一応確認するが、やろうって何をだ？」

僅かに眉を顰めながらの豪徳寺の質問に、中村はあつけらかなと、  
「決まってるんだろ、エヴァさんと茶々丸ちゃん。二人をぶちのめすの  
さ俺たち五人で」

中村の発言に一瞬場が静まり、

「…こいつはつくづく…」

「薄々それしか現状打つ手は無いと思っただけだよ…」

「いざ言葉として聞くとクるものがあるね…」

「確かに魔法の専門家達に頼らんとすればそれしか無いがな」

否定ではないが肯定しているとも言い難い、迷うような空気が中村  
を除くバカレンジャーの間に流れる。

「ど、どういう事ですか!!？」

「そうだけ、一体何を言い出すんだ旦那方!!？」

ネギが話が掴めない、といった様子で声を上げる。その肩に乗って  
いるカモも同様だ。

「あん？今のでわかんねえのか？だからお前らを悩ますロリ吸血鬼、  
俺たちで退治してやろうってんだよ」

「待って下さい!!？それはつまり、中村さん達がエヴァンジェリンさ  
んと闘うってことですよね!!？」

「それ以外にどう解釈のしようがあんだよ？」

「駄目ですよ、危険すぎます!!？」

「そうだけ、旦那方の気持ちは嬉しいがそりゃあ無茶つてもんだ」

中村の返答を受けてネギとカモが猛反対する。

「はあ？何が無理だよ、今弱ってるんだろ、エヴァたん」

「だからって中村さん達はいさつきまで魔法を知らなかった一般人  
ですよ、封印状態とはいえ、エヴァンジェリンさんは600万ドルの  
賞金がかけられた悪い魔法使いの代名詞とも言える人です、勝てる訳  
ないじゃないですか!!？」



「聞くだに凄え経歴だけだよ、お前さんと割といい勝負だったんだろ？ならいけると思うぜ」

「え？」

「うん？」

どうにもお互い話が噛み合っていないことに気づき、首を傾げる中村とネギ。

「…ああ、そういうことか」

その様子を見て、得心が云ったとばかりに頷く山下。

「何よ山ちゃん、なんかわかった？」

「うん、まあ意識の違いとか常識の違いというか。考えて見ればネギ君十歳児だし、闘いとかやったこと無くて当然だし、話を聞く限り相当才能あってこの年では破格の強さみたいだし、そう思うのも無理はないかな〜って」

「ん？なんだなんだ？何言ってるか全然わかんねえんだけど山ちゃん？」

疑問符を上げる中村、一方、

「ああ、そういうことか」

「少しムカつくが年相応っちゃそうか」

「この場合責めるのは酷だろう。比較対象無く育てば、人として当然の認識だ」

辻や豪徳寺、大豪院は解ったらしく、苦笑気味に笑いながら頷いている。

「え？何がですか？」

「おい俺にも解るように説明してくれよ山ちゃん」

さっぱり訳がわからない中村とネギは山下に説明を求める。

「うん、まあ怒らないで聞いてよ中村」

山下は一つ頷き、

「ネギ君は僕達が魔法を使えないし、最近まで知りもしなかったから僕達は自分よりも弱いって思ってるんだ」

「……はあ？」

「え？え？」

中村は思わず口を開けて呆け、ネギはなぜそんな確認をするのかと疑問符を上げる。

「…ネギ、お前さん俺がお前よりも弱いって思ってる訳？」

「いや、そんな…」

「まあまあ旦那、怒らねえで下さい、兄貴に悪気はないんです。確かに旦那の腕は一般人にしちゃ立つ方なんです。兄貴はこの歳で魔法学校を首席で卒業、戦闘魔法も多数覚えてる言わば天才なんです。そりゃあ一回り以上も下の子どもよりも弱いなんぞと言われていい気はしないでしょうがここは一つ、寛大なお心で…」

顔を歪めて質問する中村に、流石に失礼だと感じたのかネギは言葉を濁し、カモがとりなすように弁解する。しかしそれを聞いて中村は一層眉を顰める。

「…わかってねえのはお前らだよカモネギコンビ」

と、低い声で告げる。

「いえ、あの…」

「だ、旦那。俺も兄貴も馬鹿にしようとなんぞ、」

しどろもどろになる二人を見て苦笑しながら山下が宥める。

「中村、怒らないようにって言ったでしょ。言っつてしまえば相手は子どもなんだから、大人気ないよ」

「……よしわかった」

山下の言葉を受け、しばし考えた後中村が何事かを決める。

「カモネギコンビ、お前らが勘違いしてるのはわかった。でもこういうのは口で言っつてもわかんねえだろうし、一つ俺らの実力を見せてやろう」

中村はそう告げて席を立ち、何処かしらに歩き出す。

「やれやれ、臍を曲げたか」

「これじゃどつちが子どもかわかんないよ」

「まあ、納得させねば話し合いも纏まるまい」

「俺、それ以前に吸血鬼退治了解してないんだけどな…はあ、とりあえずネギ君達もおいで、今は納得出来ないかもしれないけど、言えることが一つある」

皆に続いて歩きだし、戸惑っているネギ達を促しながらきつぱりと言った。

「俺たちの中で君より弱い奴は一人もいないよ」  
しばらくして、麻帆良の郊外の森で轟音が響き渡った。

「じゃあ吉報を待ちな、ネギ君よ」

女子寮の前、ネギとカモを送り終えての別れ際、からからと笑いながら中村が告げる。

「…すみません。皆さん、どうかお願いします」

深く頭を下げてネギが頼み込む。

「任されたよ、じゃあネギ君、おやすみ。ゆっくり休んでね」

「大船に乗ったつもりでいな。じゃあな」

「さらばだ。お前は自らの職務に専念することだけ考えていればいい」

「…じゃあね、ネギ君」

残りの面々も口々に別れを告げ、女子寮を後にするバカレンジャー。

「……皆さん!!?」

大声での呼びかけに振り返ると、ネギが思いつめた表情で言葉を紡ぐ。

「…皆さんには危険なことをお願いする身です。その上で、厚かましい頼みなのですが…」

ネギは一旦言葉を切り、少しだけ迷ってから続きを口に出した。

「エヴァンジェリンさんに暴力で言うことを聞かせるのは、エヴァンジェリンさんが説得に応じなかったらにしてもらえないでしょうか!!?」

ネギの言葉に辻達は誰も言葉を返さない。ネギは頭を下げ、言葉を続ける。

「エヴァンジェリンさんは、悪い魔法使いで、僕の生徒を襲った悪い人です。でも、エヴァンジェリンさんも、僕の生徒の一人なんです。説得もしないで暴力で排除するなんてことしたくないんです、だから

…」

「…ネギ君、それは僕達に無用の危険が降りかかることをわかっていて言ってるんだよね」

ネギの言葉をやんわりと遮るように、静かに辻が尋ねる。

ネギはその言葉に声を詰まらせる。しかし、言いづらそうに言葉をつかえさせながらも、ゆっくりと言葉を繋ぐ。

「…自分はその場に行きもしないのに勝手なことを言ってるって、わかってるつもりです。でも、僕は…」

「皆まで言わなくていいよ」

今度も辻はネギの言葉を遮るが、その口調は先程と違い、柔らかい。「バーカ、ネギ坊主でめえ、お兄さん達が任せとけつつたのがわかんなかったのかよ、弱つちいロリ吸血鬼一人、言葉かける位は何でもねえつての」

「こつちとしても始めから吸血鬼退治のノリで行くつもりは無いよ。あくまで説得に応じなかったら実力で排除する予定だったんだ。ネギ君に言われるまでも無いよ」

「あんま心配すんな。あつちも馬鹿じゃねえんだ、穩便に済むだろうよ」

「説得をしろと言うなら否やは無い。平和な解決が成就することを祈っている」

辻を皮切りに、安心しろ、と皆はネギに告げた。

「皆さん…ありがとうございます」

「旦那方、すまねえ、よろしくお願いしやす!!?」

ネギとカモは再び、深く頭を下げる。

「じゃあね、ネギ君また、明日会おう」

辻の言葉を最後に、今度こそ女子寮を後に辻達は歩き出した。

「…：僕は、卑怯者だね、カモ君」

「兄貴。自分を責めねえで下さい、旦那方も言っていたじゃねえですか。兄貴はまだ子どもなんです。旦那方は兄貴よりも歳上で、兄貴よりもずっと経験を積んでいて、強いんです。今回は旦那方にお任せしましょう。兄貴はゆっくり成長して、いつか恩を返せばいいんです」

「……うん」

「さ、明日菜の姐さんや木乃香の嬢ちゃん心配してますぜ、部屋に入りましょう」

カモはネギを促し、やがて一人と一匹は寮の中に入っていった。

「いい子だね、ネギ君」

辻達バカレンジャーは男子寮に続く道をゆっくりと歩いて帰っていた。

言葉少なに歩む中、山下がポツリと呟く。

「ああ、ホントに十歳児かって聞きたくなるほどの男だぜ、いや漢だな」

「平然と無茶言ってくれっけどな。実力未知数の海千山千ババア相手によく言うぜ」

「平然とはしてしまい。無茶を言っているのはわかっているだろう。そんな所は年相応と考えてやれ」

「わかってんよ」

言い合いながら歩く中、黙って歩く辻を見かねてか、中村が声を掛ける。

「後悔してんのか、辻？」

「ん？」

顔を上げて聞き返す辻に、

「皆わかってんだぜ。お前は試合や手合わせならともかく、相手を害しようとする鬨いを苦手に、いや違うな…望んじやないってよ」

「中村…」

中村は応じず、言葉が続ける。

「過去になんかあったのかななんて聞かねえよ、人間生きてりやなんかあるに決まってるなあ。俺にも、豪徳寺達にも語りたくない身の上の一つや二つある。…ネギは確かにヤバい状況にいる。お前も助けたって思ったから、あの場ではロリ吸血鬼退治を了解したんだろ？でもこんなもんは嫌々やるもんじゃねえよ。相手は封印とやらでまともにも力出せねえらしいしよ、お前一人いなくともなんとかならあ。中

途半端な覚悟で行ってもお前が危ないだけだし、はつきり言っただけだし、まといだ。：元々お前は茶々丸ちゃんの一件に関わってねえんだし、抜けても文句は言わねえぜ。俺らも、ネギ達だって責めはしねえ。こつちから巻きこんどいて今更なんだと思うかも知れねえが、お前は桜咲のこともあるしよ」

笑いながら気軽に中村は告げる。後ろの豪徳寺達も穏やかな顔で頷く。言葉を受けて辻は黙って暫し歩を重ねた。やがてゆっくりと、想いを語り始める。

「：気遣ってくれてありがとう、皆。確かに中村の言う通りなんだ。俺は、迷ってた。お前達みたいに、迷い無く自分を信じて、力を振るう自信が無いから。：ネギ君に助けてやると、明言出来なかった」でもさ、と辻は続ける。

「理不尽だろ、ネギ君の現状。自分は何もしてないのに、勝手に親のツケを押し付けられて、命まで脅かされてるんだ。：だって言うのに誰も助けてくれない。魔法関係者か何か知らないけど、子どもは助けて、なんて口に出さなくても、大人が助けて当然なんだ。：だから助けるよ、大人が動かないなら俺達が動こう。十歳児が怯えながらも自分で何とかしようと頑張ってたんだ、俺が小さな自分の都合で尻込みしてられない。：俺も行くよ。近衛ちゃんにもネギ君のことは任されてるんだ、お前らだけにいい格好、させてたまるかよ」

きっぱりと辻は断言した。それに対し豪徳寺達は笑い、  
「やっぱ人が良いわ、お前」

「なんていうか、辻って感じの言葉だね」

「ならばこれ以上何も言うまい、当てにしているぞ、辻」

「ああ、任せとけ」

笑って辻は軽く腕を掲げる。

「：辻……………」

「ああ、お前も心配するな、中村。大丈夫だ、俺は」

そんな辻の言葉など聞いていないかのよう、中村は驚愕の表情で告げた。

「：近衛ちゃんに任されただあ？貴様いつの間にもランクA―の大和撫

子系美少女、近衛 木乃香に手を出した!!? 桜咲というクール系女子とよろしくやろうとしているだけに飽き足らず、天然系女子までも毒牙にかけようと言うのかあ!!?!!?」

「つてそつちかよ!!?」

騒がしい一団はわいわいと騒ぎながら夜の道を歩いていった。

あくる日の昼日中、辻達は昼休みに学校を抜け出して、とあるファンシーなログハウスの前に居た。

「おいおい吸血鬼つーからもつとおどろおどろしい建物かと思えば、いいとこ住んでやがんなあ」

中村が感心したように言った。使い古して肌に慣れた空手着に身を包み、直ぐにでも動けるよう足元は裸足だ。

「まあ確かにイメージと違うが、んなことはどうでもいい。それよりちゃんとこの中に居るんだらうな?」

豪徳寺が言葉を返す。格好は何時もと基本的に変わらない。サラシが巻いてある位である。

「ネギ君に午前中に電話したけど、今日は学校を休んでるらしいよ。家にいる可能性は高いね」

山下が捕捉する。何時もの悪趣味な格好は鳴りを収め、ゆつたりとした道衣に袴姿である。

「くれぐれも油断せず行くぞ。敵の本陣だ、何があるかわからん」

眼光も鋭く大豪院が続ける。こちらも格好は普段通りだが、雑納を背負い、手には棍が握られていた。

「…とりあえず正面から行こう。交渉出来るならそれに越したことは無いからな」

幾分固い表情で辻が締めくくる。着慣れた道着姿で、手には木剣が握られている。背中にはリュックサクと、鞆袋が背負われていた。

五人は顔を見合わせ、一つ頷くと、足を踏み出す。

「…行くぞー」

「…応!!?」

辻の呼びかけに四人は返す。鳴らした呼び鈴が済んだ音を立てた。

## 7話 武道家達と吸血鬼 絶望の闘争（上）

呼び鈴を押して現れたのはメイドだった。

「はい、どちら様でしょうか？」

感情を伺わせない声で応対したのは絡繰 茶々丸、辻を除くバカレンジャーの面々が先日助けた少女である。

「……」

のっけから意表を突く展開に沈黙する五人、沈黙する辻達を見て、茶々丸は無表情のまま一つ頷き、

「皆様、遅ればせながら挨拶と感謝の言葉を。申し遅れました、私わたくし絡繰からくり 茶々丸ちやちやまるというモノです。先日は助けて頂いたにも関わらず黙って去ってしまった無作法をお許し下さい。皆様、マスターにご用件がおありでしょうか？」

「……そうなんだ、取り次いで貰えるかな？」

辛うじて困惑から立ち直り、言葉を返す辻。

「申し訳ありません。現在マスターは所用によりお客人への対応を致しかねます、本日はお引き取り願えませんでしょうか？」

やはり表情を変えぬまま、淡々と断りを告げる茶々丸に無言で眉を顰める辻。

「……取り合うつもりは無いってことかな」

「わからん。従者が対応している以上、単純に逃げようとしているわけでもあるまい」

「強引に入つちまうか？」

「早まるなよ豪徳寺、基本は話し合い、だ。……多分中には居るんだが……」

茶々丸に聞かれぬよう、小声で相談する辻達。そんな中、黙り込んでいた中村が、

「……ただでさえ萌え属性の3倍満状態だった茶々丸ちゃんにメイド属性のプラスで数え役満だと……？エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。……聞いていた以上の強者だぜ」

「黙ってる馬鹿。……済まないがこちらも外せない一件なんだ。そこを



なんとか取り次いで貰えないかな？」

阿呆なことを呟く中村に冷たく吐き捨ててから、改めて退くつもりは無いことを告げる辻。

「しかし…」

「…構わん、茶々丸。通してやれ」

なおも洩る茶々丸を制したのは奥の階段上から響く声だった。

辻達が階上を振り仰ぐと、そこに立っていたのは腰を遥かに越える豪華な金髪を靡かせ堂々と此方を見据える、人形のように容姿の整った少女の姿があつた。

「大方格好からして坊やから事情を聞き、私に釘を刺しに来たという所だろうか？ 相手をしてやる、入るがいい、招かれざる客人」

あどけないと言つていい可憐な容姿に似合わぬ尊大な態度でエヴァンジェリンは辻達の立ち入りを許可した。

「しかしマスター…」

「いいから茶々丸、茶でも煎れて来い。曲がりなりにも客だからな」

「…かしこまりました」

礼をして茶々丸が下がる。エヴァンジェリンは辻達を何処か愉快げに見下ろし、あくまで尊大に言い放つ。

「腰を落ち着けて茶でも飲んでいろガキ共。アポ無しで来たのだからレデイが身嗜みを整える位の時間は待ってもらおうか？」

言い終えて、エヴァンジェリンは奥へと消えていった。後にはバカレンジャーの五人が残される。

しばらく黙りこくっていた五人だがやがて誰とも無しに話し始める。

「…とりあえず、話し合いには応じる気があるみたいだな」

「やたら態度がでかいがなんなんだあのチビ」

「まあ形だけ見れば無理に押しかけたことになるし、600歳らしいからね。そりゃ僕達なんかガキ扱いするよ」

「なんにしろ最初から物騒な展開にはならんらしいな」

「…つつーかよ」

ひとまず一歩前進だと頷き合っていた中、中村が微妙な顔で呟く。

「なんでパジャマだったんだあのロリ」

その言葉に暫し沈黙が降り、

「…敢えてスルーしていたけど顔赤かったよな」

「なんかフラついてたしよ。もしかして体調悪いのか？」

「…まさか風邪じゃあないよね？」

「そもそも吸血鬼は風邪を引くのか？」

「「「……………」」」

「…とりあえず、座ってるか」

「ああ、油断しないようにな」

なんとも想像していたのと違う展開に各人微妙な表情を浮かべながらも、エヴァンジェリンを待つことにした。

「待たせたな、貴様ら。なにぶん今は不便な体でゴフツ、ゴフツ」

「マスター、無理を為さらないで下さい」

しばらくしてパジャマの上にカーディガンを羽織り、やはりフラフラしながらエヴァンジェリンは席に着いた。態度だけは変わらず大きいのが、咳き込んだ所を隣の茶々丸に介抱されている様は、どう見ても迫力ある悪の魔法使いというよりは、風邪つぴきだというのに暴れて嗜められる小学生である。

「…おいなんだこれ。吸血鬼退治どころかこのまま自滅しそうだぞこのチビ女」

「弱っているとは聞いていたけどここまでとは思わなかったぞ…」

「油断は禁物だけど正直過剰に警戒し過ぎた感があるね」

「此方を油断させる演技。…ではなさそうだな」

「この姿の写真持ってたら多田野の変態に幾らで売れると思う？」

「中村、真面目にやれ。殺すぞ」

「ゲフン、…ともあれ要件を聞こうか？まあ先程も言ったが大体想像はついているがな」

ようやく咳き込みの止まったエヴァンジェリンは辻達にここへ来た目的を尋ねる。

「それなら話が早くて助かるよ、マクダウエルさん。ネギ君の件で話し合いに来た」

辻は一つ頷き、話し始める。

「…マクダウエルさんって何よ？」

「見た目があれでも歳上だからだろ？」

「辻の律儀ポイントプラスで」

「どうでもいい、黙って聞くぞ」

背後のこんな時でもくだらないやり取りを出来る悪友達に辻は苦笑する。

…こんな時ばかりは頼もしいもんだ、こいつら。

「ふん、やはりな。その仰々しい格好からして、私が坊やを襲うのを止めなければ実力で止める、と言った所か？」

「そうだ。まだるっこしいのは好きじゃないから単刀直入に言う。今後ネギ君やネギ君の周りの人間に手を出すのを止めて貰いたい。要求はそれだけだ。聞いて貰えない場合は武力によって貴方を制圧する」

からかうような調子のエヴァンジェリンの問いに対して辻はきっぱりと断言した。

「ゴホッ…そうか…」

一つ咳き込んでからエヴァンジェリンが笑った。

「暴力を背景に脅迫しておきながら、『話し合い』とは言ってくれるな。やり口がまるきりヤクザのそれだぞ？」

わざとらしく目を伏せ、かぶりを振って嘆いているそぶりを見せるエヴァンジェリン。

「ぬ…」

「貴様らが言えた文句ではあるまい、吸血鬼」

辻が言葉に詰まる、すると横合いから大豪院が鋭く言葉を発した。

「なんの関係も無い一般人を襲い、親の因縁を子に押し付ける。俺たちがヤクザなら貴様は何だ？」

敵意も露わに睥睨する大豪院に怯んだ様子も無く、エヴァンジェリンは茶々丸の運んで来た紅茶に口をつける。

「まあそついきり立つな。こちとら熱で体が怠いのでな、そう元気に言い合いはしていられん。今のはちよつとした冗句だ。自分に他人

の負い目を責める資格の無いこと位、百も承知だとも」

あくまでのらりくらりとした調子のエヴァンジェリンに大豪院は苛立ちも露わに舌打ちをする。

「落ち着け、大豪院。相手のペースに乗るな」

「…ああ」

辻が宥めると大豪院は一つ息を吐き、乗り出していた身を引く。

「それで、どうなんだいマクダウエル女史。まだ辻の要求に答えて貰ってないのだけれど？」

続いて山下が尋ねる。物腰は柔らかいが誤魔化しは許さない、とばかりに目はエヴァンジェリンをしっかりと見据えている。

「…そうだな」

エヴァンジェリンもこれ以上茶を濁してはいられないと悟ったか、一つ息をつくと言語り始めた。

「まず私が坊やを襲った件だが、言ってしまったえばルール違反を初めに犯したのはそちら側だったとしたらどうだ？」

「…何だつて？」

「まあ聞け。私と坊やの父親、ナギ・スプリングフィールドは単純に敵同士だった訳でも無いのだ」

それからエヴァンジェリンは自分がナギと出会った顛末、そして封印されてから交わした約束を辻達に語った。

「…つまり私は坊やの父親の契約不履行でこうして退屈な学園に縛られている。確かに坊やに非は無かろうが、私にも権利を主張する筋合いはあると思わんか？」

そう言い終えるとエヴァンジェリンは一つ息をつく。熱のある身で長話をした為疲労したようだ。

「…つまり貴方は解放するという約束を破られた為にネギ君に代わりに代償を払って貰い自由を得る、と？」

「そうだ。私にはかり非のある訳では無いのはわかったらう？」

「…それは」

「通らねえだろ」

一瞬言葉に詰まり、何事かを返そうとした辻を遮り、豪徳寺が言う。

「ほう?」

「通らねえだろ、そんな話は。確かにあんただけが悪い訳じゃねえんだろうよ、でもそれで責任があんのはネギの親父さんじゃねえか。あんたも言った通りネギ自身は預かり知らねえことだ。仮にネギが責任を取ることを了解したってんなら、百歩譲って納得できねえ話じゃないが、あんたは問答無用でネギを襲った。同情出来る事情があれば何をしてもいい訳じゃ無いだろ。あんたの言い分は、やっぱり筋が通らねえ。俺は認められねえな」

そう言つて豪徳寺は腕を組む。

「…他の連中も同意見か?」

エヴァンジェリンが聞くと、辻達は無言で首肯する。

「やれやれ、取り付く島も無いな」

エヴァンジェリンは溜息を吐き、ソファーにもたれかかる。

「どうあつてもネギを犠牲にはさせねえよ、エヴァンジェリンさんよ。それで、どうする? 本当に再起不能にされねえと諦めつかねえか?」

中村が威嚇的な笑顔を浮かべながら尋ねる。これ以上ゴネるなら本当に拳を振るうのも辞さない考えだ。

「…出来るのか?」

「あん?」

エヴァンジェリンが紅潮した顔に嘲るような笑みを浮かべ、中村に問う。

「なんの義理も所縁も無い坊やを、話を聞いただけで助けようとこんな所までわざわざ現れるようなお人好し共だろう、貴様らは。仮に私が拒んだとして、ろくに抵抗も出来ん私に恫喝する以上のことが、貴様らに出来るのか?」「舐めんな」

返答は即座に返った。同時に場の空気が変わる。

中村の睨がつり上がり、犬歯が剥き出しになった獰猛な表情になる。同時にその体からは紛れもない殺気が漂い始める。

「自分の弱みを盾にすりゃ俺が怖じけづくとも思ったかよ? ちとら生半可な覚悟でここに来ちゃいねえ。口の聞き方に気をつけやがれ、ロリババア。次につまんねえことほぎいてみる。…マジに潰す

ぞ」

空気が張り詰める。中村の脅しを受け、腰を浮かせかけた茶々丸を手で制し、エヴァンジェリンはなお笑う。やがて、小さく咳をした後、「ふむ…悪かった」

以外にも口から出たのは謝罪の言葉だった。無言のままだが軽く眉を上げた中村にエヴァンジェリンは笑みを深くし、訳を語る。

「只のお人好しかと思ったが、本気だな、貴様。並んでいる奴らも程度の差はあれその気で来ているようだ。成る程、坊やとは違うな、暴力の意味を解っている」

誤魔化しは効かんか、とエヴァンジェリンは笑った。

「…答えて貰おう。僕らに潰されるか、ネギ君を諦めるか、だ」

最後通牒を山下が突きつける。

「…そうだな。私からも最後の譲歩を提案したい」

「交渉の余地はこれ以上は無いと思うよ?」

「そうだな、だが、前提が崩れたらどうだ?」

「何?」

エヴァンジェリンは指を立て、提案する。

「貴様らは私が坊やを殺してしまうからこそ、私を認められんのだろう?ならば、坊やの命が助かるとしたらどうだ」

「…どういふことだい?」

山下が聞き返す。

「近々とある理由により、私は一時的に全盛期に近い力を取り戻す。時期や方法は言えんがな。今現在のよう封印された状態では、坊やが干からびるまで血を頂かねば私の封印は解けんだろうが、その時ならば坊やの命に別状は無い範囲の吸血で、力任せではあるが封印を破れるだろう。それならば貴様らも本意では無い荒事を起こさずに済むのではないか?」

エヴァンジェリンはそう辻達を諭す。

「坊やには多少災難だろうが、これならば貴様らも」

「巫山戯るな」

エヴァンジェリンの言葉を遮り辻が吐き捨てる。

「なんだ？」

「巫山戯るなつて言ったんだよ吸血鬼。あんたは何も解つちやいな  
い」

辻は鋭くエヴァンジェリンを睨み据え、言葉を叩きつける。

「命があればいいなんて割り切れることじゃ無いんだよ、あんたのや  
ろうとしていることは。ネギ君は十歳の子どもだぞ？そんな年端も  
いかない子どもにとって、襲われることがどれだけ恐ろしいと思っ  
てる!!あんたに初めて襲われた時、ネギ君は神楽坂ちゃんに恐怖のあま  
り泣き付いた。それから今日まで、生徒としてすぐ近くにいるあんた  
がどれだけネギ君の負担になったと思ってるんだ!!それでもあの子  
はあんたをやっつけてくれとは言わなかった。自分の生徒だから、話  
も聞かずに排除はしたくないと言ったんだ。：そんなネギ君に免じ  
て俺達はあるとわざわざ交渉をしたんだよ。勘違いするな、吸血  
鬼。お前のやったことはとつくに許されることじゃ無いんだ。これ  
以上、ネギ君に傷一つでもつけようってんなら僕達はあるを排除に  
掛かる。あんたの譲歩は考慮に値しない、ネギ君に今後危害を加えな  
いと今、此処で誓ってもらおうか。拒むというなら、容赦はしない」  
辻は言い捨て、ゆっくりと立ち上がる。続いて中村達も各々席を立  
ち、隣接体制を取った。

張り詰めた沈黙が互いを包む。エヴァンジェリンは睨みつける辻  
達を見返し、ようやくその口元から笑みを消した。

「ああ、解ったよ小僧共。：交渉、決裂だ」

エヴァンジェリンは表情を消し、はつきりと言った。

「：：：そうかよ!!？」

辻は吐き捨て、木剣を構え、飛び掛かる。中村達も続いて飛び出  
た。

迫る五人にエヴァンジェリンは身構えない、ただ彼女は唇を歪に吊  
り上げ、

「危ないぞ?・足元に注意しろ」

と言った瞬間、辻達五人の足下が輝いた。

：：魔法!?!?

辻は歯噛みし、そのまま木剣を振るおうとする。致命傷を喰らわなければ一撃当てれば勝てるかと判断してだ。

しかし次の瞬間、視界が全て光に包まれ、辻は上下もわからなくなり、浮遊する感覚を覚えた。

刹那、視界が暗転する。

「……………はっ!?」

辻が一瞬の意識の断絶から立ち直った時、視界に入ってきたのは地平線まで広がる青い空だった。

「……………なんだ、これ」

自らの理解を越えた現象に辻を混乱が包み込む。自分は確かにエヴァンジェリンに攻撃を撃ち込む寸前だったというのに当の本人は影も形も無い。いや、それ以前に先程までいたログハウスは一体どこに行ったと言うのか。

「…じー辻!!」

辻を呼ぶ声にはつととして振り向けば、こちらに駆けてくる中村の姿があった。

「中村！無事だったか!!?ここは…」

「俺が聞きてえよ!!?なんだこりゃあ!!?」

「お前らー!!?」

再び響く声にそちらを向けば、山下、豪徳寺、大豪院の三人が一丸となってこちらに向かってくる所だった。

「なんだどうなってるんだ!??ここどこだよ!」

「エヴァンジェリン女史はどこ行ったのさ!!?」

「先程の光の所為か!??」

口々に質問するが、その問いのいずれも、

「わからない…」

辻の言葉が答えだった。

「ともあれ落ち着こう、まず僕達がどうなったのか…」

「お前達には私の別荘に来て貰ったんだよ」

山下の声を遮り、頭上から声がかけられた。



「てめえ…」

「済まん、ここと現実の世界では時間の流れが違うのでな。直ぐに相手をしてやるつもりだったのだが少しばかり待たせてしまったよ」無論、そこにいたのはエヴァンジェリンであった。ただしログハウスにいた時とはその姿にいくつか違いがあった。

まず、体にびったりした露出の高い漆黒のボンテージのようなものに身を包み、肩から同色の襟付きマントが風にたなびいている。

次に、そのふるまいは先程までの熱で紅潮し、フラついていた頼りない状態では無く、凛と背筋を伸ばし、光の下、青白い肌が透き通るような輝きを持っていた。

そして何より異様な点として、その姿は何もない空中に浮かんでいた。

「その、姿は…」

「私が黙って貴様らに罵られるような大人しい淑女にでも見えていたか？生憎降りかかる火の粉は常に払い除けて生きてきた。私の目的に貴様らが相容れないというならば、払いのけるだけだ、これまでのようにな」

獣のように牙を見せて笑い、エヴァンジェリンは宣告する。

「ここは完全に外界と隔離された私の世界。ここには私を縛る封印の力も完全には届かん。全盛期には程遠いが、貴様らを片付けるには充分すぎる」

エヴァンジェリンは腕を掲げる。見えない力が渦を巻き、力ある何かが目現を始める。

「私を潰すと言ったな、人間。…半素人風情が、舐めるな」

言葉と同時に襲いかかるのは、透き通る無数の氷の刃。

絶望の闘いが、幕を開けた。

## 8話 武道家達と吸血鬼 絶望の闘争（中）

突き抜ける程青い空が頭上を覆っている。眼下に広がるのは透き通る青い海。そこから聳える白亜の塔は、完成された風景に自然の調和を果たし、見ている者の心を奪う絶景となっている。その美しい空間に似つかわしくない、必死の悲鳴が塔の上で響き渡っていた。

「……っだああああああああああああああああああ？！？！？！？！？！？」

辻達バカレンジャーは全力で塔上の円状の建物外周を駆け抜ける。その後方から陽の光に美しく煌めく、無数の氷の刃が辻達を高速で追尾していた。

「おいなんだありやあ超早えーぞ?!?!」

「ネギ君から事前説明あつたら?!?!?多分魔法の射手サギタ・マギカとか言う弾幕魔法だ?!?!」

「ああ確かネギ君の撃つてた光弾と同じ奴だっけ?!?!」

「あれ氷かなんかだろうが全然違うぞ?!?!」

「魔法使い毎に得意属性に違いがありあの吸血鬼は氷が得意だとそういう話だったろうが確か?!?!」

全力疾走しながらの大声での会話は酷く疲労するがそんなことを言っていない状況では無かった。

「はーっはっはっはっはっは?!?!?どうした小僧共先程から逃げてばかりだぞ?!?!?私を倒すのではなかったのかあ?!?!?」

哄笑を上げながら自ら放った弾幕の後ろを飛行するのはエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。訳あって封印されている真祖の吸血鬼だったが現在絶賛大絶好調である。

「ちくしようあのロリババア?!?!?ドヤ顔が目に見えるようだぜ調子こきやがってえ?!?!?」

「言っている場合か全員飛べえ?!?!?」

辻の叫びと共にハリウッドダイブを決めるバカレンジャー。地面に叩きつけられる際の受け身を一切考慮していない見事な捨て身ダイブだったが、それが功を奏し直前までいた場所に氷の剣群が突き刺

やる。

まともに地面にぶち当たり、全身に鈍い痛みが広がるが、痛みにく暇も惜しんで辻達はまた走り出す。

「どうすりゃいいこのままじゃいずれ蜂の巣になっちゃうぞ!!?」

「つつーか封印状態って聞いてたのに実は封印解除できますって一体なんだこの詐欺は!!?」

「目論見が甘すぎた！何かしら抵抗してくると思ったらまるつきりこつちが狩られる側だよこれじゃあ!!?」

「嘆いていても始まるまい、何かしら対抗手段を見つかるぞ!!?」

「なんだよ対抗手段って!!?」

「それをこれから考える!!?」

「相談は終わったかガキ共お!!?」

エヴァンジェリンは更に力ある言葉を紡ぐ。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 氷の精霊109柱、集い来たりて我が敵を討て!!?」

言葉と共に虚空に百を超える氷刃が形成された。

「魔法の射手 連弾 氷の109矢!!?」

再び氷の弾幕が高速でバカレンジャーに襲いかかる。

「くそ中村の一つ覚えみたいにまた来たぞ走れー!!?」

「しかもさつきよりも多いぞ畜生!!?」

「どうする、逃げてばかりじゃラチがあかないよ!!?」

「……こらで腹を決めるか」

「つつーか何が俺の一つ覚えだドサクサに紛れて俺を馬鹿にすんな!!?」

こんなときでも漫才のようなやり取りを繰り返しながら、再び速度を上げる。そんな中、大豪院がある提案をする。

「腹を決めるってのは!!?」

「攻めるぞ」

「はあ!!?どうやってだよ!!?」

「お前達、落ち着け！今までに無い種類の闘いで惑わされてはいるが、そもそも弾幕を喰らうのも空を飛ぶ敵も俺たちは初めてじゃない!!」

「？」

大豪院の言葉に全員走りながら無言になる。やがて、

「確かにな!!?」

「変な方向に極まったキワモノが群れてる麻帆良では確かに珍しい、つて程でもないね!!?」

「思い出したくもない女子弓道部の一件とかな!!?」

「悲しいことに確かにそうだけだから何、大豪院!!?」

納得する空気の流れる中、一人悲痛な悲鳴を上げる辻に走りながらも冷静に大豪院が返す。

「この超常現象オンパレードな相手でも、闘えるということだ!想定していた事態とは大きく異なる展開になったが、俺たちはここに何をしに来た!!?」

大豪院の言葉に全員顔を引き締める。

「…そうだな、逃げつ放しじゃネギに顔向け出来ねえ!!?」

「やられましたごめんさい、じゃ済まない話だからね!!?」

「例え化け物相手でも、やるしかねえか!!?」

「ああもう、しようがない、やろうか皆!!?」

決意を新たに代表して反撃の狼煙の言葉を、中村が叫ぶ。

「Go!Escape!!?」

「あん?」

宙から辻達を追っていたエヴァンジェリンは思わず、といった調子で疑問の声を上げる。

オレンジ髪の男が何事かを叫んだ瞬間、今まで同じ方向に逃げていた男達が同時に五方向へ散ったのだ。

真上から辻達を見ていればほぼ正確に72度ずつ、五人を線で繋がば綺麗な正五角形を形作ったのが見て取れただろう。

エヴァンジェリンが知る由もないが、これは辻達が追っ手（主に杜崎）から逃げるために考案した、合図の声と共に、一斉に逃げる方向に偏りが出来ないよう均等に五方向へ散り、誰かが狙われやすい状況を作らずに逃げる事で追っ手を刹那の間誰を追うか迷わせ、結果的に全員が逃げられる確立を上げるといふ高度なコンビネーションであ

る。

エヴァンジェリンが放った氷刃の弾幕は五人を対象に追尾し、敵を貫くよう設定した魔法である。

その五人が別方向に散った以上、当然氷刃も五つの対象へ別れて追尾を始める。五人は互いに十数m離れた時点で急停止し、それぞれが反転して己を追う氷刃に向き直った。

中村は手刀の形で両腕を前に翳す、前羽の構えで氷刃に相對する。

「弓道部の女共の射撃に比べりゃ、こんなもん!!?」

中村は叫び、両腕を霞んで見える程の速度で旋回させる。中村に飛び込んでいく氷刃は、中村の両腕に次々と払われ、砕かれる。

空手の防御、廻し受け。本来なら拳や前蹴りを受ける為の技だが、尋常ならぬ速度と力で旋回する中村の両の腕は、目で追える速度の弾幕程度は容易く撃ち落とすことを可能とする。

豪徳寺は全身に気を回し、全身を強化して氷刃に突っ込む。

「おおらあああああああつ!!?」

咆哮と共に氷刃の群れに腕といわず足といわず、出鱈目に叩きつけては砕いていく。当然そんな滅茶苦茶な動きでは、撃ち落とし切れず体に着弾するものも出てくるが、並の身体強化を遥かに超える圧縮率の強化は、直撃した氷刃をいずれも致命の深さまで通さない。気の総量ではバカレンジャー随一のこの男は、強引なまでの力技で、弾幕を突破した。

山下は自然体のまま、氷刃に自ら歩み寄る。自分の顔面目掛けて飛んでくる一本に、山下は掌を静かに、されどいつ手を伸ばしたのかを視認出来ない程の速度で氷刃の側面に手を添える。次の瞬間、斜め下方に勢いをずらされ、氷刃は床に突き刺さり砕け散る。山下が両腕を優美に閃かせる度、ある刃は床へ、ある刃は壁へ。次々と逸らされ、その身に刃は届かない。

「これぐらいなら…イケるか」

小さく確認するように山下は呟き、前方へ向けて駆け出した。

「破ッ!!?」

大豪院の手足はは閃光のように高速で翻っていた。手刀が、足刀

が、拳打が。四方八方から襲い来る氷刃を砕き散らして行く。

「翻子拳のような手数頼りは趣味ではないが…」

呟きつつ走り抜け、最後の氷刃を殴り砕く。

「多くが未知なる戦闘だ。己の全てをぶつけるのみ!!?」

大豪院の身体が、加速する。

「はあ…」

辻は憂鬱そうに溜息をつく。

「慣れないことはやっぱりするものじゃないのかも、なっ!!?」

高速で外に木剣を払い、上半身狙いの二本を纏めて砕く、小手を素早く返し斬り下げに繋ぎ、逆方向から迫る三本を打ち払う。斬り上げ、打ち払い、薙ぎ払う。

「桜咲の連打の方がよっぽど受けにくいよ」

辻は木剣を青眼に構え、高速の摺り足で突き進む。

「ほう…」

愉快そうにエヴァンジェリンは感嘆の息をつく。

逃げてばかりだった素人五人が、いずれもエヴァンジェリンの放った魔法サキタ・マギカの射手を突破して、エヴァンジェリン目掛け突っ込んで来たのだ。

弾幕は一人頭二十以上、加えて全盛期で無いとはいえ最強クラスの魔法使いであるエヴァンジェリンの放った代物である。並の魔法使いとは速度、強度、貫通力、全てが比較にならない。

初級魔法と言えど一人も大きく負傷せずに捌き、あまつさえエヴァンジェリンに対して戦意も露わに、臆せず目の前の五人は向かってくる。

「そう来なくてはな…」

笑ってエヴァンジェリンは言った。勢いと正義感だけは一人前だったが、これでほんの小手先とすら言えない初級魔法でやられてしまったのではお寒いにも程がある。

「実力の伴わない正義面など見ていて不快なだけだ。さて、どこまで足掻いてくれる、人間共!!?」

エヴァンジェリンは新たに魔法を展開し、辻達へと撃ち放つ。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 時を止め去りし無垢なる氷雪

我が手に宿りて敵を喰らえ!!?」

「無色シネ コロリブース ゲラータの凍氷!!?」

「おい何か来たぞ!!?」

辻が緊迫した表情で叫ぶ。

「何かって何だ魔法か!?!?」

「わからんし視認は出来ないんだろ?うがかなり広範囲多分扇状に広がる感じだ!」

「散開!?!?」

バラバラに突進していた状態から中央を空け左右に開き、エヴァンジェリンの左右から挟み撃ちの陣形での突撃に変えるバカレンジャー。

直後、脇を掠めるような近距離を抜けていった透明なモヤは、地面に当たるなり、頑丈そうな石畳は亀裂を入れながら見る見る霜を張り、白く凍結した。

「おいしいいいあのババアなんか洒落にならんもの撃ってきたぞ!!?」

「なんだありやあ冷○ビームか!?!?」

「いや、どっちかって言うと○雪だろう」

「細かいしどうでもいいわ辻!!?あっちも小手調べは終わりつてことだ!」

「臨む所だ、行くぞ!」

「「応!!?」「」」

「目にももの見せてくれるわ喰らいやがれロリババア!!?」

中村は掌底打ちの構えで腕を振り抜く。

「裂空掌れつくうしよう!!?」

放たれた気弾は高速でエヴァンジェリンに迫る。

「遠当てか」

楽しげに笑うエヴァンジェリンに一直線に進んだ気弾はまともに当たり、爆発する。

「よっしや舐めやがって油断しやがったなまともになにに!!?」

言葉の途中で中村が驚愕に目を見開く。

爆発による煙が晴れた先のエヴァンジェリンは傷どころか煤ひとつ無く悠然と宙に浮かんでいる。

「中村お前はネギ君の話聞いてたのかドアホ!!? 魔法使いは障壁つてもん張ってるんだよ!!?」

辻が中村に対して怒鳴る。辻の言葉通り、散っていく煙はエヴァンジェリンを球状に避けていく。中村の気弾はこの見えない壁を突破できず、

表面で爆発したのだ。

「そう馬鹿にしたものでも無いぞ剣道屋。並の魔法使いの魔法サギタ・マギカの射手に換算すれば今の気弾は十発近い破壊力だ。若いのによく稽古を積んでいるな、空手屋」

馬鹿にするでも無く、本当に感心したようにエヴァンジェリンは告げる。

「ぐわすつげえムカつく…」

「休むな中村、来るぞ!!?」

豪徳寺の警告の直後、上昇しつつエヴァンジェリンが詠唱を終える。

「精霊召喚・牙の蝙蝠58柱!!?」

言葉と共に現れたのは全身真っ黒で胴体が無く、全長の倍近い牙を生やした頭部から直接羽根の生える、気味の悪い蝙蝠のような生き物だった。

「はあ!!?」

「蝙蝠!!?」

「なに、単なる闇の下級精霊だ。最も下級と言えど喰らいつかれれば命が危ないがな、掛かれ!!?」

号令と共に不規則な軌道で辻達に襲い掛かる異形の蝙蝠。

「くぬー!」

気合いの声と共に振るわれた中村の手刀が蝙蝠の一匹を四散させる。

「!!?、脆いぞいこつら、うお!!?」



言葉の途中で危うく顔面を噛みつかれそうになった中村が体を沈め寸前で逃れる。

「数が多すぎるな!!?」

「くっそ本体の攻撃だけでもヤバイってのに…」

悪態を吐きつつ五人は蝙蝠に応戦する。蝙蝠は脆く、気を込めた打撃で殴れば散るが如何せん数が多すぎた。

「ぐあっ!!?」

「豪徳寺!!?」

豪徳寺が後方からの接近に気付かず肩口に喰いつかれる。

「この…野郎!!?」

肩越しに繰り出した拳が喰い付いた蝙蝠を爆散させる。傷口を抑えつつ後方へ飛んで着地した豪徳寺の膝が唐突に落ちた。

「なっ…」

片膝を着き、バランスを崩しながらもなんとか目の前に迫る蝙蝠を払い飛ばす豪徳寺。

「おい、どうした豪徳寺!!?」

「なに、少々力が抜けただけだ。牙の蝙蝠は生半可な防具をぶち抜くその牙の鋭さもさる事ながら、噛み付いた対象に<sup>エナジードレイン</sup>気力奪取を行う。常人なら気絶する所だが流石にタフだな」

笑いながら告げるエヴァンジェリンは、更なる呪文を展開する。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ氷精大気に満ちよ 白夜の国の凍土と氷河を」

最後にエヴァンジェリンは辻達を見据え、言い捨てる。

「終わりだな」

クルスタリザティオーテルストリス

「凍る大地!!?」

次の瞬間、視界内の全てが氷に包まれた。

「まあ、こんな所か…」

エヴァンジェリンは唐突に出現した大量の氷の影響で、大気との温度差から発生した白霧の中に身を漂わせ、何処か詰まらなそうに眩く。

凍る。大地は広範囲の対象の下半身を凍結する魔法で、ある程度の高度にいる目標に影響は無い。今頃動きの止まった五人に牙の蝙蝠が喰いついて気絶に追い込んでいる所だろうとエヴァンジェリンは考えていた。

「…まあ最近まで魔法も知らなかった、気を使えるだけの半素人にしては頑張った方か…」

やがて納得したようにエヴァンジェリンは呟く。

同じような戦闘力でも魔法関係者なら、次に来る呪文を読んでもう少し上手く立ち回ったのかもしれないが、ラテン語もわからない一般人では無理もないことである。

「殺しはせんよ、ガキ共。しばらく頭を冷やして家に帰るといい」

エヴァンジェリンが届かないであろう言葉をかけたその時、

「極漢魂あつ!!?」

叫び声と共に白霧を裂いて巨大な気弾がエヴァンジェリンに襲い掛かる。

「なっ」

直径三m近いその気弾は突然のことに反応できないエヴァンジェリンにまともにぶち当たり、直後大爆発を起こした。

「ぐうっつ!!?」

凄まじい衝撃に上方へ弾き飛ばされながらエヴァンジェリンは呻く。障壁を破られるには至っていないが、下手をすれば今の気弾は高位魔法以上の破壊力があつた。

体勢を立て直しつつ、エヴァンジェリンがポツリと漏らす。

「意識があるのか…?」

「あんま俺らを舐めんじゃねえよ」

その声はエヴァンジェリンの間近から聞こえた。

「なにっ」

振り仰いだエヴァンジェリンが目にしたのは腰だめに正拳を構えつつ、こちらに落ちてくる中村の姿。

「破碎、正拳」

中村は全身を捻転させる。下半身の先からの捻じりを腰を起点に

背筋へ、背筋から肩、腕へと通し、全身の力を用いて、渾身の正拳をエヴァンジェリンに打ち込む。

「千重砕きちえくだき!!??」

障壁に当たった拳から、膨大な気が溢れ、触れた地点から対象を衝撃の嵐で飲み込んだ。障壁が砕け、エヴァンジェリンに気の嵐が直撃する。

「がっ!!??」

苦鳴を上げ、地面へと吹き飛ぶエヴァンジェリン。その小柄な体を木の葉のように舞い狂わせつつ、轟音を上げて地面に着弾した。

「ぐう…っ」

呻き声と共に起き上がるエヴァンジェリン。氷を踏み砕く音と共に二つの影が襲い掛かる。

「っ！氷盾レフレクシオー!!??」

氷の壁が宙に出現する。それに対して二つの影の片割れが加速し、かき消える。

甲高い破碎音が鳴り響く。氷の壁が砕け散った音だ。

エヴァンジェリンの目の前には木剣を振りきった姿勢の辻がいた。

「貴様…!」

「…やっぱり木剣じゃ…・…こんなもんか」

辻は眩き、素早く右にスライドする。そこにもう片割れが飛び込んだ。

その影は、エヴァンジェリンの体が浮き上がる程の威力で掌打を顎に打ち込む。

「っ!!??」

その影―大豪院は、一瞬宙に留まったエヴァンジェリンの襟首と腰の衣装を捕まえ、まるで幼子をおぶうように自らの背中に乗せる。

「…っ、破は!!??」  
激震げきしん。

足元の氷が粉々に砕け、塔が一瞬揺れ動く程の震脚。

近距離での豪快な打撃を特徴とする中国拳法の流派が一つ、八極拳。

その技の一つ、貼山てんざん靠こうが障壁が砕かれた零距离で直撃したエヴァンジェリンは人形のように吹き飛ばされ、塔の平面の縁を超えて海中へ落ちて行く。

「ふうっ……………」

大豪院は破れたエヴァンジェリンの服の切れ端を投げ捨て、息をつく。

「なんとかなったな、大豪院」

辻は構えの残心を解き、歩み寄りながら安堵の息を吐く。

「手応えはあった。しかしとんでもないな、魔法とは…」

返事を返しつつ大豪院は呆れたように周囲の氷河を見やる。すっかり景色は変わり果て、今や南極にいるようである。

「おいお前ら、手伝ってくれ。どうにも氷が硬すぎる」

声に二人が後ろを振り向くと、豪徳寺が埋まった下半身を四苦八苦しながら抜こうと足掻いていた。

「まともに喰らったのはお前だけだぞ、豪徳寺」

「タフだからって防御が甘いのは悪い癖だ、お前は」

「うるせえ、こんなもんが予想出来るか」

「それは最もだね」

「痛つてー着地したところが尖った氷だらけだったぜ。山ちゃんナイストス。おかげでベストな位置からババアに喰らわせてやれたぜ」

「どういたしまして」

山下と中村も奥の方から姿を現す。

「つうか飛ばし過ぎだろ大豪院、追撃かけられないだろうが」

「この状況で下手な加減が出来るか。貴様も全力で打ったのだろう」

「正拳の威力だけで壁抜けりゃババアの体直接爆破できたんだがなー」

「手応えあったんでしょ、やったかな?」

「ちよ、馬鹿野郎山ちゃん、お前言ってはならねえことを!?!?」

自問するような山下の問いに目を剥いて吠える中村。

「なにがだよ馬鹿」

「こういう敵が倒れたか不明な状況で『やったか?』みたいなみたいな

セリフ吐いたら相手の生存フラグが立つんだよ!!?下手なこと言わず様子を…」

「まあ、やってはいないがな、実際」

その言葉に全員ゆっくりと振り返る。

そこには口端から滲む血を指で拭いつつ、五体満足で浮いているエヴァンジェリンの姿があった。

「…効いてねえのか?」

「いや、大したものだったぞ。まさか特に手を抜いていた訳でもない障壁を砕かれた上に、致命打を二発も喰らうとはな…お前の言う通りだ。舐めていたよ、お前達を」

信じられない、という様子で呻く中村にエヴァンジェリンは奇妙な程にこやかに告げる。表情は明るく笑っているというのに、見えない圧力が辻達を包み込む。場の空気が、先程までとは完全に変わっていた。

「仮にも私にお前達は宣戦布告をしたというのにな。狐狩りの真似事をしつつなるだけ無傷で穏便に帰らせようなどと…平和ボケが過ぎたようだな、本当に。ガキ扱いして悪かったよ。お前たち、私の敵になりに来たんだよな」

ブワアツ!!?!!?とエヴァンジェリンの全身から魔力が溢れる。

その威圧感に顔を歪める辻達。

「…決めきれなかった所か火イつけちまったみてえだな」

「もう二度と決まんねえぞあんな連撃」

「…勝算はあると思う?」

「…さあな」

「…正直ラストチャンスだった気がするな、さっきの」

控えめに見ても絶望感漂う辻達を見据え、エヴァンジェリンは囁く。

「さあ、待たせてしまったな、人間共!!?ここからが闘争の始まりだ。

…化け物の本分を、見せてやろう!!?」

絶望の第二ラウンドが幕を開けた。

## 9 話 武道家達と吸血鬼 絶望の闘争 (下)

その空間には戦場の空気が漂っていた。

「行つたぞ中村ア!!?」

「糞が喰らえアアツ!!?」

中村が怒号と共に放った気弾は高速で空中を縦横無尽に飛び交うエヴァンジェリンを捉えられず彼方へ消え去った。

「当たんねえ畜生! てめえロリババア降りてこいオラア!!?」

「有利な土俵からわざわざ降りてくれる訳無いだろ! どうかかしてま  
ず叩き落すぞ!!?」

「魔法の射手・連弾<sup>サギタ マギカ</sup>・闇の 53 矢<sup>セリエス オブスクーリー</sup>!!?」

上空から闇の塊のような弾幕が飛来する。

「なめんなよ……!」

「止める中村、受けるな!!?」

両手に気を纏わせ、払って距離を詰めようとした中村に大豪院の鋭い警告が飛ぶ。

「なにい!!?……ちいつ!!?」

疑問の声を上げた中村だが刹那の間迷った後、右前方に走り抜け弾幕を躲す。直後、闇の塊が石畳に弾けて散った。

「なんで止めたポチ!!?」

「その呼び方止める!!? 確か闇の弾幕は喰らうと精気とやらが抜けるらしい! 例によってネギ情報だ!!?」

「デバフ付きかようぎつてえ!!?」

悪態をつき中村は再び走り出す。

既に戦闘が始まってからかなりの時間が経過している。辻達は体のあちらこちらに大小様々な切り傷を作り、かなりの凍傷を負っている。

対してエヴァンジェリンはあれから一度も被弾をしていない。時折中村や豪徳寺の気弾が命中するが、全てが障壁に阻まれダメージを与えられないのだ。

加えてエヴァンジェリンの魔法の氷と冷気による体温低下が問題

で、戦闘によって熱を持った体が急激に冷やされ、体の各所が故障を起こしかけている。

「解ってはいたけど、やばいね、これは」

山下が斬り裂かれた肩口を押さえつつ、呻く。

「これでは鴨撃ちだ。しかも…」

「精霊召喚・抱擁する雪乙女36柱！」

言葉と共に、全身蒼白で半透明に透き通った美しい少女が無数に現れる。

エヴァンジェリンは雪乙女フラウと共に急降下し、新たに魔法を展開し辻達に叩きつける。

ニウイス カース  
「氷 爆 ・三重展開!!？」

冷気と爆風が辻達を包み込む。

「痛ツ!!？糞が、こんなもん…ぐおっ!!？」

「豪徳寺!!？うわっ!!？」

直撃を何とか躲し、離れようとする豪徳寺が、冷気と白煙に紛れて近づいた雪乙女フラウに後ろから抱きつかれる。豪徳寺の全身を凄まじい冷気が走り、急激に冷やされた体が、本人の意思とは無関係に動きを止めようとする。

崩れ落ちかける豪徳寺を助けに入ろうとした山下も右腕に雪乙女フラウが抱きつき、たちまち腕が感覚を失う。

「おおおおおおおっ!!？」

「こなクソおおおっ!!？」

二人はそれぞれ全身と右腕に気を巡らせ、雪乙女フラウを弾き飛ばし難を逃れる。

「休むなよお前達!!？」  
ヤクラーテイオー グランディニス  
「氷 槍 弾 雨!!？」

エヴァンジェリンの周囲に長大な氷の刃槍が現れ、爆風の余波も晴れぬ地上へ降り注ぐ。

「気をつけろ!!？さっきの弾幕の比じゃ無い!!？」

辻は怒鳴り、降り注ぐ刃槍を木剣で弾き、逸らしながら前進する。一撃受ける毎に木剣が軋む威力に顔を歪めながらも、弾幕を抜けた辻は近場にあつた一際大きな冰山を跳躍台替わりに、瞬動で一気に飛び

上がった。

通常、瞬動は着地する地面が無ければ単なる気による暴発ジャンプで終わるが、今回は空中に着地する場所があった。

「ほう…」

辻が着地というよりも殆ど蹴りを入れるようにして強引に止まったのはエヴァンジェリンの展開する障壁の表面だった。攻撃により展開する物理障壁を逆に利用し、辻は強引に距離を詰めた。

「いあああああつ!!?」

気迫の声と共に、辻は全身全霊を込めての兜割を振り下ろしたが、

「いい打ち込みだ。先程も思ったが貴様は瞬動が上手いな、剣道屋」  
乾いた音の正体は木剣のへし折れた音だった。

「…鉄芯入ってんだぞ、これ」

引きつった表情で呻く辻。足場も無く、落ちていくだけの辻は格好の的だった。

「だが木刀ではなあ!」

笑いながらエヴァンジェリンが辻に魔法を放つ。

ニウイス カース  
「氷 爆!!?」

轟音と共に冷たい風に包まれ、吹き飛ばされる辻。悲鳴も無く、近くの氷の柱に着弾した。

「辻ーっ!!?生きてつかあつ!!?」

雪乙女フラウを蹴りで吹き飛ばしつつ、中村が叫ぶ。

「…なんとか、な」

氷に埋まった体を起こしつつ、返事をする辻。直撃を喰らった所為で、体の前面がほぼ凍りついている。どうにか起き上がる辻だが、体が震え、まともに動けないでいる。

きわめわとこだま  
「極 漠魂!!?」

豪徳寺が巨大な気弾を放つ。

「効かんよ番カラ…何?」

疑問の声を上げるエヴァンジェリン。気弾はエヴァンジェリンでは無く、辻達とエヴァンジェリンの中間程に位置する氷山の一角へと



向かっていったのだ。

気弾が氷山に着弾した瞬間、弾けて辺りに衝撃と爆風を撒き散らす、だがその気弾は奇妙な弾け方をした。

「…ふん、なるほど目くらましか」

その気弾は爆発による衝撃が殆ど無く、代わりに気弾を形作っていた気の光が爆風に乗れ、辺り一面を光の靄で覆い隠した。

「気を緩く、収束させずに放ち、煙幕代りにしたか。以外に器用だな、番カラ」

笑ってエヴァンジェリンは呪文を唱え、強風を巻き起こす。

光が消えた先には辻達の姿はどこにも無い。

「逃げた訳でもあるまいしそもそも逃げられはせん。さて、どうするつもりだ？人間」

エヴァンジェリンは辻達の気配を追って移動を始めた。

豪徳寺の目くらましで一旦距離を取ることに成功した辻達は建物の一角に隠れていた。

「おのれあの見た目ロリ、バカスカ撃ちまくりやがって」

「ものの見事にズタボロだな、どうするすぐに追いつかれるぞ」

「とりあえず今のままじゃ当たり前だけど勝ち目は無いね」

「余力も少なければ負傷も小さくない。そう悠長に闘っていられんぞ」

中村達のこんなに余裕の無い様子を辻は初めて見る気がした。それだけの事態で今は危機的状況なのだと、今更ながら辻は理解できた気がして、あまりに呑気な自分の思考に辻は苦笑いを浮かべていた。

「辻?」

「どうした「ちゃん、まさか恐怖でイカれてねえよな?」

心配げに声を掛けてくる中村達。それを見て、辻は一つ決心をした。

「俺はさ、あの吸血鬼の家に押しかける時も、こんな所に飛ばされて闘うことになった時も、漠然と皆で頑張ればなんとかなるんじゃないかって思ってたんだよな」

そんな訳無いのにさ、と笑う辻を他四人は黙って見つめる。

「頑張っただけでなんとかなるなら世の中苦労はしないよな？何て言うかさ…この後に及んで俺は、真剣にやってるつもりで真剣にやっとなかったんだよ。あんな風にネギ君に太鼓判押ししておきながら、何処か他人事だった。お前らに申し訳ないって、思ってたさ」

「謝罪はいらん。こんな状況、現実感が無くて当然だし、お前は初めから事態に関わっていた訳でもないからな」

「ありがとう、大豪院。でも俺は、だからこそかな。今から全力、尽くそうって、思ってたさ」

辻の言葉に、空気が硬くなる。普段から軽い態度の中村までが、何処か緊迫した表情で辻を見返す。

「…大丈夫なの？辻…」

奇妙なほど深刻な様子で山下が辻に問う。それに対して辻は苦笑し、

「いいか悪いかで言えばよくはないさ。でもそんなこと言ってる場合じゃ無いだろ、山ちゃん。これじゃネギ君の安否を気遣う前に俺達が冷凍マグロになっちまうよ。やるしかないならやっちまおう。だから皆、無理を聞いてくれるか？」

普段と変わらないのに何かの違う辻に四人は顔を見合わせ、揃って溜息をつく。

「言い出したら聞かねえからな。お前」

「こんな時だけ強情にならなくてもいいのによ」

「任せておいてよ、どうせ辻の方が無茶するんだし」

「それで、俺達は何をすればいい？」

頼もしい悪友達の返答を聞いて、辻は一つ笑ってこう言った。

「あの吸血鬼、もう一度地面に叩き落としてくれ」

「あそこだな…」

エヴァンジェリンは気配を辿り辻達の潜む建物の付近上空までやってきた。

「このまま隠れん坊もいいが生憎私はフェアな鬼では無いぞ？」

エヴァンジェリンは再度凍<sup>クルスタリザティオー</sup>る大地<sup>テルストリス</sup>の詠唱に入る。前触れも無い広範囲凍結など避けられるものでは無い、エヴァンジェリンは容赦をするつもりは無かった。

しかし、詠唱が終了する寸前、建物の影から人影がバラバラと飛び出し、エヴァンジェリンに向かって突っ込んでくる。それを見てエヴァンジェリンは笑う。

「ははははーそうではなくてはな。貴様らに食われるのを待つだけの豚は似合わんよ、人間の維持をこの私に見せてみる!!?」

エヴァンジェリンは魔法を解き放つ。

<sup>クルスタリザティオー</sup>凍<sup>テルストリス</sup>る大地<sup>!!?</sup>」

氷河が隆起し、極低温の冷風が吹き荒れる。再び氷の世界と化した大地を、しかし白霧を裂いて駆ける影が五つ。

「ふん…」

エヴァンジェリンにしてもこの一撃で辻達がやられるとは思っていない

。初見の状態でも勘か反射神経かは知らないがほぼ躲して見せた連中である。しかし、凍氷に覆われ、否応なしに足場は悪くなるし、辻達の体力は限界に近い。このまま冷気を当て続けるだけでも自分の勝ちになるとエヴァンジェリンは判断し、躲しようがない広範囲の凍結魔法を放った。

続けてエヴァンジェリンは牽制にはいささか強力すぎる刃剣の弾幕を撃ち放つ。戦意を持ち、挑んでくる以上辻達はエヴァンジェリンの敵である。

<sup>ヤクラティオー</sup>氷<sup>グランデニス</sup>槍<sup>弾</sup>雨<sup>!!?</sup>」

降り注ぐ剣群に対して、影の一つ、中村は決意を込め、力を解き放つ。

「俺のとおっておきだロリババア!!? 目にももの見せてやらああああ!!?」

中村は化鳥の如く両腕を広げ、突き進む。体内から気が溢れ出し、白く輝くそれは伸ばされた両腕に収束し、光の翼のように両腕が光り輝く。

中村は獣の顎の如く両腕を斜め下方に挟み込むように振り下ろす。  
「裂空、掌波!!?」

放たれたのは幅5m、高さ2mはあろうかという光の波。中村の奥の手、オーラウェーブ気功波動である。

「なにっ?!?」

さしものエヴァンジェリンも目を剥くそれは、氷の剣群と激突し、それらを粉々に砕きながらエヴァンジェリンに突き進む。

バリエース グラキエーリス  
「結氷障壁!!?」

エヴァンジェリンの力ある言葉と共に分厚い氷の壁が現れ、光の波を阻み双方が砕け散る。

「くっ…」

余波の爆風に顔を歪めるエヴァンジェリン、その時、轟音鳴り響く  
中、後方から微かな音がエヴァンジェリンの耳に届く。

「っ!」

瞬時にエヴァンジェリンが振り返ると氷山の頂上から大豪院がエヴァンジェリンへと跳躍し、肩からぶち当たってくる所だった。

フン  
「?!?」

肩から入る靠撃がエヴァンジェリンに着弾する。が、

「な、に?」

「聞いたことがないか拳法家?」

大豪院の体は障壁を砕き、エヴァンジェリンに届いたものの、その体はエヴァンジェリンの右腕一本で押し留められていた。

「吸血鬼は怪力なんだよ」

肉を穿つ異音が響く。

エヴァンジェリンが無造作に放った左拳が大豪院の腹に突き刺さったのだ。骨の折れる音が不気味に響く。

「ぐ、ふっ?!?」

苦鳴を上げ、錐揉み回転しながら落下する大豪院。

「流石に同じような奇襲を二度も三度も喰らわんよ」

落ちていく大豪院を見下ろし、そう言い捨てるエヴァンジェリン。

「いや、三度は喰らって貰おうか」

声と共に、エヴァンジェリンの首元に腕が回され、同時にその腕と交差するようにもう一本の腕が奥襟を掴む。

「なん、だと!?」

今度こそ心底驚いた、と言わんばかりに目を見開き驚愕の声を上げるエヴァンジェリン。エヴァンジェリンから見て後方に大きな氷山は無く、仲間との連携で飛び上がったきたにしても、気の気配も何もエヴァンジェリンは感じなかったのである。

「山下流合気柔術・投極法の四」

交差するように掴んだ首周りを固め直し、山下の足がなにもない空中を踏みしめ、その体が回転する。

「虚空投げ」

首に回した腕が腰を軸に相手を真下に叩きつけ、更に奥襟を掴んだ手が相手をもう一段階、加速。超速度で相手の脳天を砕く変形の首投げを山下は見舞った。

大砲で発射された砲弾の如く、真下へ投げ飛ばされるエヴァンジェリン。後を追うべく身構えながら山下はポツリと言った。

「自分で言うのもなんだけど僕器用でさ…。使えるんだよね、虚空瞬間」

言葉を置き去りに山下の体が宙を蹴り、かき消える。

氷を砕きながら地面に墜落するエヴァンジェリン。声をあげる間も無く傍らに山下が着地し、半ば地面に埋まるエヴァンジェリンを引き起こし、後方から抱きつくように足で胴締めを行いながらの裸締めへ移行する。

「下手な負傷は回復するみたいだからね、首の骨、へし折らせて貰うよ」

「…ククツ、つくづく呑気に学生やっているのが不思議なガキどもだ、ぐっ」

「貴女と会話をする気は無いよ」

一気に締め上げ、首を捻じ曲げる山下。あと数秒あれば首が折れるだろう。

圧を加え、首の骨が折れる寸前、エヴァンジェリンの右手が閃き、鋭い一指が山下の肘から親指二本分程の所を正確に突き刺した。

「痛ウツ!?」

山下の腕が自身の意思とは無関係に力を緩める。その瞬間、素早く体を捻じり蛇のような動きでエヴァンジェリンは山下の裸締めを抜け出した。そのままエヴァンジェリンはまるで舞踏会でダンスのターンをするかの如く、宙に浮いたままの山下の腕を取り優美に回転する。

次の瞬間には、山下の体はバネ時掛けのおもちやのように回転し、腕を極められた状態で地面に叩きつけられていた。

「があっ!?」

苦鳴を上げ、もがく山下だが完全に極まった体制ははね返せない。

「腕の、圧痛法に、逆腕の絡み投げ?…柔法まで使うのか、貴女」

「長生きしてるというんなものが身につくものだ…しかし異様に柔らかな貴様。まあ吸血鬼わたしの力からすればこの状況で意味を成さんが」  
殆ど背中に付きそうな程に山下の腕を捻り曲げながら楽しげにエヴァンジェリンは告げる。

「二度ならず二度までも私に土を付けるとはな。本当に対したものだ、貴様ら。しかし生憎だが、これで終わりだ。楽しかったよ、人間」  
言いながら肩と肘で極めた腕を己の側に技術わざと力を持って捻じり、へし折りにかかるエヴァンジェリン。

山下は激痛に顔を歪めながらも、横目にエヴァンジェリンを見据え、笑った。

「残、念ながら。…メインディッシュは僕じゃ無いんだな」

「何?」

エヴァンジェリンは聞き返そうとして、視界の端に煌めく冷たい輝きに素早く顔をそちらに向ける。

白刃を振りかぶり此方へ構えを取る、妙に平坦な顔の辻がそこにいた。

「ほう…」

エヴァンジェリンは笑い、山下の腕を極めたままそちらへ向き直

る。

「文字通り真剣勝負と言うわけか、剣道屋。しかしポン刀一本で私に勝つつもりか？」

笑みながらも威圧するように告げるエヴァンジェリンに、足下の山下が笑う。

「ははっ…貴女、終わりだよ。マクダウエル女史」

「…？」

辻を注視し、警戒はしながらも、意味のわからない山下の言葉に僅かにそちらへ意識を向けるエヴァンジェリン。

その刹那。

世界が 割れた。

「あ……………？」

エヴァンジェリンは呆ける。

世界が、目に映る全てが二つにブレている。

間近に奇妙な姿が見える。白刃を持った男に見えるが、彼はもつと遠くに居なかつたろうか？

遠いような近いような場所からまるで獣の雄叫びのような声が聞こえる。体に力が入らない。自分は、今、何をしていたろうか？

辻の振り下ろした一刀にて

頭を二つに断ち割られた

エヴァンジェリンが呆けたようにフラつく。

猿叫の残滓を口の端から零しながら辻は、斬り下ろした瞬間刃先の欠けた日本刀を目に、思った。

… うん、

やはりこれじゃあ断てないや。

もつと丈夫じゃないと二つに割れない。

「…中村あつ…？」

跳ね起きた山下がエヴァンジェリンの手を取りつつ叫ぶ。

「…おうよ」





す。

「一極集中…零距离!!？」

エヴァンジェリンに拳を叩きつけ、同時に気弾が射出される。

「極漢魂あつ!!？」  
きわめおとこだま

爆発音と共にエヴァンジェリンが光の衝撃に飲み込まれ、建物が倒壊していく。やがて瓦礫の山となったその中に、動くものは、無い。

「…っし」

小さく頷き、豪徳寺は背を向け歩き出す。その先には五人がよろけながらも集まって来ていた。

「…やったか？」

「死亡フラグって言いてえとこだがこれで駄目なら本気で無理だな」

「確かにね。これ以上は、もう無いよ」

「辻…大丈夫か？」

尋ねられた辻は、欠けた日本刀を手になげ、ぎこちなく笑う。

「まあ、な。それにしてもお前ら、容赦無くやったな」

辻の問いかけに四人は笑う。

「当たり前だ。加減なんぞしたら逆にぶっ殺されていたからな」

「それに辻よ。殺してしまったと思ってるならそりや俺らもだぜ」

「人であれ鬼であれ、殺したつてのはいいい気分じゃ無いけどさ」

「お前だけがやった訳じゃない。気にするのは構わんが、一人で思いつめるなよ…」

四人の言葉に、辻は一つ頷き礼を言う。

「…すまないな」

「馬鹿野郎。そこはせめてありがとうだろ」

五人は笑い合う。そこに耳を裂く噴射音と共に一人の女子が飛来する。

「…絡繰ちゃんか」

辻の言葉通り、バーニアの噴射を止め降り立ったのは相変わらずメイド服姿の茶々丸だった。

「あんたの主人、斃させて貰ったよ」

「悪く思うな、とは言わん。やる気というなら相手になろう」

「生憎ボロボロだけど、それぐらいの力なら残っているよ」

口々に述べるバカレンジャーを無表情に見据え、淡々と茶々丸は述べた。

「申し訳ありません。貴方がたのお相手は今だ私ではありません」

「…あ?」

疑問の声に、答えるように背後の瓦礫が爆発した。

「「「「「?」」」」」

辻達は驚愕と共に振り返る。

そこには、あちこちボロボロの衣装ながら、それ以外の外傷がほぼ治癒した姿で、エヴァンジェリンが佇んでいた。

「……………あれで全部、再生したのか?」

「……………ああいや、頭のくつつきが妙に悪くてな」

乾いた声での豪徳寺の疑問に、まるでちよつと指先を切つてな、とも言うような気軽さで、頭を押さえながらエヴァンジェリンが言う。その目は平坦で、今までの威圧感が嘘のようであったが、辻達は逆に凄まじい悪寒を目の前の小さな少女から感じていた。

エヴァンジェリンは押さえていた手を外し、辻達に向き直る。

「まず言っておく。お前達、すまなかつた」

以外なことに、エヴァンジェリンの口から初めに出了のは謝罪の言葉だった。

「お前達、完全に殺す気で私を攻撃したものだ。殺すつもりで私を殺りに来たんだな。…それに対して私はなんだ?どれだけ私はヌルい気持ちでお前達とやり合っていた。坊やを笑えんよ、本当に申し訳ない」

空気が、変わる。粘ついた汗が止まらない。目の前の存在から逃げろと本能が囁く。

既にそこに立っているのは、麻帆良女子中等部、3ーA 出席番号26番のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルでは無かつた。

一匹の吸血鬼バケモンがそこにいた。

「(こ)ちらも礼儀を尽くす。殺すつもりで撃つが…死んでくれるな?」

エヴァンジェリンの右手に仄かな光を放つ長大な光の剣が形成さ

れる。

「いっそ優雅とさえ言える美しさのその剣に全員の毛がブワツ!!?と逆立つ。」

「逃げっ…」

「逃がさん」

エヴァンジェリンは右手を振り下ろす。

「エンシス エクセク エンス断罪の剣」

刹那世界が、弾けてトンだ。

## 10話 闘争の終結 武道家達の想い

その場所は破壊し尽くされていた。

破壊された床や建物の瓦礫と氷が混ざり合い、塔の一部は崩落し、調和を保っていた美しい空間は今や爆撃をくらった後のようである。

その中心に佇むのは一人の幼い少女であった。元々際どかった衣装は既に服としての機能をほぼ果たしておらず、隠さねばならない場所が色々と露出していたが、少女に気にする様子は無い。

ふと少女が空を仰ぐと一人のメイド服姿の少女が少女の傍らに降りたとうとしていた。

「茶々丸か」

「マスター、ご無事ですか？」

茶々丸に呼びかけられた少女―エヴァンジェリンは一つ頷き、剥き出しの胸を手でなぞる。

「流石に脳味噌と心臓の同時破壊は効いたが所詮は気に包まれているとはいえ唯の拳や刃だ。筋肉ダルマ程練り上げられ、極圧縮された気ならともかくあの程度では致命傷にはならん」

そう言ってエヴァンジェリンは歩き出そうとしたが、突如その膝が折れ、地面に蹲る。激しく咳き込み、手で覆った口の隙間から血が溢れる。

「マスター!!？」

駆け寄る茶々丸に大事ないと手を翳し、なおも咳き込みながらエヴァンジェリンは上体を起こす。

「…心配するな、少しばかり消耗しすぎただけだ。流石に飛ばしすぎた…血が足りんな」

フラつきながらも立ち上がるエヴァンジェリン。別荘に入ることで封印が一部解けるといってもエヴァンジェリンの状態は万全ではない。ましてや風邪を引き、体が消耗した状態から、魔力を魔法の連発で激しく消費した後で、辻達により徹底的に身体全体を破壊され、強引に急速再生をした後での大呪文の行使だ。無傷に見えるが、エヴァンジェリンは辻達にかなり追い詰められていた。

「直ぐに緊急用の血液をお持ち致します」

「いや、まだだ」

エヴァンジェリンは茶々丸の申し出を跳ね除け、後ろを向く。

「生きているだろう？お前達、顔を見せてはくれんか？」

その声の流れてしばし、沈黙が降り、

「…ばれてた、かよ」

男の声と共に瓦礫の各所が蠢き、人が這い出して来た、その数は五つ。

「全員生き残ったか。しぶといな、貴様ら」

「…生憎死んでくれと言われて素直に死んでやるような根性でいねえよ」

「といっても冗談じゃ無しに死にかけだがね」

「…うん、ごめん。軽口叩く元気が無いや」

「倒れるなよ、山下、今倒れたら死ぬぞ」

「…寒い通り越して感覚無くなってきたよ」

気丈に振る舞うバカレンジャーだがその体は既に限界である。

断罪<sup>エンシス エクセク エンス</sup>の剣は作り出した魔力の剣に触れた固体、液体を気体に相転移させる魔法である。平たく言えば触れたものを蒸発させる魔法であり、直撃を避けても相転移した物体は融解熱、気化熱を大量に吸収、結果周囲を急激に冷やす。

結果として辻達は蒸発を免れたが、その体は既に半ば凍りついていた。表面の皮膚は凍結して細かい断片毎にボロボロと零れ落ちていき、出血は傷口が凍りついている為に止まっている有様だ。

「…つつつても限界なのはお互い様みてえだからな、露出口リ。止め、刺してやるよ」

中村がギクシャクした動きで構えを取ると、他の四人も構えを取る。全員半死人ながらも、戦意だけは衰えていなかった。

エヴァンジェリンは無表情に五人を眺める。やがて五人へ静かに語りかけた。

「お前達、そのままでは死ぬぞ」

「それがわからないほど、馬鹿だと思われてるかな？」

「死にたいのか？」

「まさかな。死にたいなら初めにもう少し楽に死んでいる」

「…なぜ、私に挑む」

「喧嘩を売った理由なんざ初めに話したろうが、いい歳してガキを虐めるからだよ」

問いにバカレンジャーが口々に答える。

「昨日今日知り合ったばかりの子ども一人の為になぜ命を賭けられる。そこまでお前達の命は安いのか？そこまでやられておきながらなぜ降参しない、逃げ出さない？恐怖を感じないのか？罪も無い少年を悪党の魔の手から救う、などというシチュエーションに酔ってはいないか？言っておくが今お前達が生きているのはたまたまだ、完全に殺すつもりで撃った。まだやるといふなら私は手心など加えてやらん。斯の後に及んでまだ自分が死なないと思っっているなら、私が弱っているから楽に斃せるとでも思っているなら…：…舐めるな、ガキ共…殺すぞ」

エヴァンジェリンの全身から凄まじいプレッシャーが溢れる。空間が震え、濃密な殺気が辻達を包み込んだ。

辻達はその圧力に耐えるように身を縮める。只の威圧ですら消耗した身体にはキツイのだ。

それでも辻達は身体を再び伸ばし、エヴァンジェリンと相対する。

「なんでかって？…正直よく解んねえし、こいつらも解って無えと思っうんだわ」

暫しの沈黙の後、中村が口火を切った。

「あんたの言うとおりの正直命賭けるには割に合わねえとも思う。正義感に酔ってるかと言われりや否定はできねえな。んで？怖くねえかって？…怖えに決まってるんだろが!!？」

中村が叫ぶ。

「殺されかけて怖くねえ奴なんざいねえよ！桁違いの力見せつけられて、逃げ出したくなったよ!!？当たり前だろうが、このまま戦ったら下手しねえでも死ぬって…全部解つとるわ俺らは!!？」

「でも、それでもなあ」

豪徳寺がゆっくり後を繋げる。

「俺達は結構強いつもりだったんだよ、このキワモノ揃いの麻帆良でも勝てない奴なんてあまり思いつかない位にな。…そんな俺達が、五人がかりで目出度く死にかけてる。そんな化物が、あんただ」

「そんな奴にさ」

肩で息をしつつも、山下が続ける。

「ネギ君を襲わせる訳には、いかないでしょ。あんな喧嘩も碌にしたこと無いような、人のいいできた少年にさあ。貴女みたいな怪物ぶつけてみる!!? 少なくとも人生にいい影響与えない事は確実に言えるよ」

「だからこそ」

大豪院が静かに語る。

「割に合わなからうが恐ろしかろうが、俺達が貴様を止めねばならん。女子どもが暴虐に遭うのを見過ごして、何の為の武か」

「馬鹿げて聞こえようと下らない意地に見えようと」

辻が強い意思を込め、告げる。

「弱者を守るのが武道家だ!!? あんたが強大でも、いや強大だからこそ!!?」

辻は気迫も露わに刀を突きつける。

「俺達はあんたを斃す!!? 刺し違えることになってもな!!?」

「できれば勝った上で生きて帰りたいけどな」

戯けた風に中村が言う。

エヴァンジェリンは辻達の言葉を黙って聞いて、やがてくつくつと笑い始め、やがてそれは哄笑へと変わる。

「めっちゃ爆笑されてんぞ」

「ババアに時代錯誤と笑われるたあ俺らもヤキが回ったぜ」

「いや、済まんな、馬鹿にするつもりは無い」

悔しげに唸る中村と豪徳寺に目尻を拭いながらエヴァンジェリンが言う。

「まさか貴様らのような妙な格好したかぶき者共からそんな馬鹿正直なまでにまっすぐな言葉を吐かれるとは思っていなくてな。人がい

いだけの馬鹿かと思いきや、いやはや本当に大したものだ」

馬鹿にした風では無く本当に感心した様子でエヴァンジェリンは頷く。

「無粋な問いを発したな、武道家共。…ならば化物として相対しよう」  
エヴァンジェリンは再び重厚な殺気を身に纏う。この上無く凶悪な目つきと共に告げる。

「死ね」

辻達は身構える。

「来るぞ!!??」

「正念場だてめえらあ!!??」

かくして武道家と化物は三度目の闘争を始める。確実に言えるのは、これは死合いだと言うことだ。

「サギタ マギカ セリエス グラキアールリス  
魔法の射手・連弾・氷の314矢」

最早弾幕と呼ぶのも生温い氷刃の豪雨が降り注ぐ。

「とばしてやがるぜあのバ:うお!!??」

流石に当たる全弾を弾くのは無謀と判断して逃げながら追ってくるものを受けようと駆け出した中村が見えない何かに引かれたようにつんのめる。体勢を崩しながらも腕を振るうが、撃ち漏らした数本が中村の体に突き刺さる。

「ぐわあつ!!??」

苦痛の悲鳴を上げる中村に弾幕の半数程が瞬時に向きを変え、中村に全方位から時間差で襲い掛かった。

手足を総動員して受けにかかった中村だが、一本、二本と落とし損ねる毎に体に刃が突き刺さり、たちまちハリネズミのようになった中村が、気力で最後の数本を砕いた後、声も無く倒れる。

「なかむ:つ!!??」

「とりあえず貴様は最初に潰す」

中村を助けに入ろうとした辻の眼前に瞬間移動と見紛う速さでエヴァンジェリンが移動し、凄まじい速度の抜き手を放つ。当たれば体に風穴が開くと理解できる凄まじい一発だ。



「う…おおつ!!？」

間合いが近すぎて刀で受られないと咄嗟に判断して、辻は左腕に気を纏い、エヴァンジェリンの抜き手を弾く。弾くというよりはやつと逸れるようにしてエヴァンジェリンの一撃を捌いた。が、

「がつ!!？」

一撃を捌いた左腕に突如紫電が纏わりつく。まるでスタンガンを喰らったようなそれに辻の全身が縮こまって硬直する。

次の瞬間、エヴァンジェリンの逆腕が放った掌底が辻の鳩尾を捉え、鈍い轟音と共に辻の体を吹き飛ばす。

「げ…ぶうつ!!？」

吐瀉物を撒き散らしながら吹き飛ぶ辻に、容赦無く追撃が放たれる。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック・来たれ拒絶の凍氷 薙ぎ払え」

虚空に現れるはゾツとする程薄く、長い数本の氷の片刃。フレイド

「氷の刃」

エヴァンジェリンは氷刃を袈裟懸けに辻目掛け振り下ろす。

「ぐ、ふっ…ああああああつ!!？」

今だ打撃の衝撃が抜けない体に鞭打って、刀を翳し刃を受ける辻が、

「よく受けた。が、こいつは碎けるのが仕事だ」

エヴァンジェリンの言葉通り、刃が刀に受け止められた瞬間それが碎け散る。受け止められた地点から数十、数百の刃の欠片となって、全方位に弾け散った。

「つ~~~~~~~~!!??!!??!!??」

全身を破片に貫かれ、切り裂かれた辻が声にならない悲鳴を上げ、倒れ伏す。

「辻いつ!!??~~~~貴様あつ!!??」

大豪院が活歩でエヴァンジェリンの前に移動し、震脚と共に全力の体当たりを打ち込もうとする。

「なっ!!??」

が、震脚の為踏み込んだ正にその足が、放たれた冷氣により凍りつ

き、瞬時に感覚を無くした足が勝手に崩れ、転倒する大豪院。

「そんなでかい一撃は出足を潰せばそもそも撃てもせん」

エヴァンジェリンは冷たく言い捨て、魔法を放つ。

ニウイス カースス  
「氷 爆 ・ 三重展開」

最早冷気の奔流が大豪院を捕らえ、氷の彫像と化した大豪院が床に張り付く。

おとしだま  
「漢魂あつ!!?」

歯を食いしばりながら気弾を連射して、エヴァンジェリンの足止めにかかる豪徳寺。無数の気弾がエヴァンジェリンを捉え、たちまち爆煙に包まれる。

なおも気弾を形成し、撃ち放とうとする豪徳寺だが、前触れも無く煙を裂いて数本の氷刃が豪徳寺に襲い掛かる。

「ちいつ!!?」

氷刃を払いのけ、素早く次弾を撃つ豪徳寺だが、先程までと違い、当たった手応えが無い。

「……?」

「闇雲に撃つから対象も確認出来んのだ」

頭上からかけられる声にはと豪徳寺が振り上げば、そこには巨大な氷塊を掲げながら自身を見下ろすエヴァンジェリンの姿があった。

「貴様のような出力任せの力押しは、消耗させてしまえば勝負がそもそも成立せん」

マレウス アイスクローニクス  
「氷神の戦鎧」

大質量の圧倒的破壊が豪徳寺を襲った。

「くつそおおおおおおつ!!?」

山下が飛び出し、エヴァンジェリンに飛翔蹴りを叩き込む。障壁に阻まれるが構わず地面を、時には空中を踏みしめながら高速で上下左右前後に動き、エヴァンジェリンの反撃を躲しながら攻撃を続ける。  
「ちつ…」

エヴァンジェリンは後ろに高速で後退しながら、詠唱を始める。

山下が追いつがるが、エヴァンジェリンは無詠唱で氷や闇の弾丸をばら撒き、山下に接近を許さない。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック・来たれ真闇の獣 食い千切れ」  
山下の周囲に霧のような闇が満ちる。

スコートス グナトウウス  
「闇の顎」

闇が密集し、巨大な獣の顎のようなものを形作り、山下を両断せんと高速で閉じる。

「ツ〜!!?」

間一髪で噛み碎かれるのを跳躍して回避した山下が、空中で顔を歪める。牙の一本に足を引っかけ、ふくらはぎが大きく切り裂かれている。

直ぐに攻防が再開したが、足を負傷した山下には最前のキレが無い。

躲し損ねた数発の闇の弾丸を喰らい、襲い掛かる脱力に刹那動きが止まる。

そこにエヴァンジェリンが弾丸のような勢いで突っ込み、魔法を至近距離で打ち込む。

ニウイス カース  
「氷 爆 !!?」

冷気の爆風を間一髪躲す山下だが、大きく体勢は崩れ、無防備な姿を晒す。エヴァンジェリンは腕を振りかぶり、鋭い鉤爪の一撃で山下の背中を斬り裂いた。

「ぐあああつ!!?!!?」

地面に激突し、悲鳴を上げる山下。

止めを刺しにエヴァンジェリンがなおも詠唱に入り…

「ゴ、フツツ!!?!!?」

次の瞬間咳き込み、吐血しながら体勢を崩す。

「おおおおおおおつ!!?!!?」

その隙を逃さず、跳ね起きた山下がエヴァンジェリンにタックルを喰らい決め、その体を掴み取る。

「ツ!!?放せ!!?」

エヴァンジェリンの十指が山下の体に喰い込み、肉を抉り血を飛沫かせる。

「つっ~~~~!!?!!?」

激痛に歯を食いしばりながら山下がエヴァンジェリンを抱きすくめるように、両腕を肩の上から脇の下へ後ろから通し、襟首を両手で掴むとそのまま、高速でスープレックスのように後方へブリッジで倒れ込む。

「…弧月落とし」

エヴァンジェリンがまともに脳天から地面に凄まじい勢いで激突し、脳漿が零れ、不気味な形にエヴァンジェリンの頭が歪む。

「ッ!?…くくくな、めるなガキがあっ!!?」

エヴァンジェリンは濁った叫び声を上げ、山下を腕力で強引に振りほどき、蹴りの一撃で山下を吹き飛ばす。

「があっ!??」

吹き飛んで壁に激突する山下によろけながらもエヴァンジェリンは追撃の魔法を唱え：

「ぐうっ!??」

背中が気弾が爆発し、詠唱を中断させられる。

エヴァンジェリンが背後を振り返ると、血達磨になりながらも立ち上がった中村が掌打を振り抜いた姿勢で笑っていた。

「常時、壁張る、余力も…もう無いみてえだな」

「貴様…」

一歩踏み出すエヴァンジェリンが今度は横合いから飛び出して来た気弾を下がって躲す。

「外、したかよ」

血塗れであちこち体が歪んだ状態ながらも、豪徳寺が氷塊の下から這い出して来る。

辻は出血多量で痙攣する体を抑えながら、刃先が欠け、あちこち刃こぼれした刀をそれでも構える。

大豪院の体を覆っていた氷はいつの間にか砕け落ち、低体温症で青い顔をしながらも大豪院がこちらへ向かって来る。

山下はめり込んでいた壁からゆっくりと身を剥がし、腹を抑えながら歩みを進める。

「しっ、こい連中め」

息を乱しながらエヴァンジェリンが毒づく。

「もう、一息だ。くた、ばるなよ、お前ら」

「…おうよ」

「目が、霞む。いく、らも持たない、な」

「正に、死力って、奴だね」

「んじゃ…」

最後に中村は血塗れの壮絶な顔で獰猛に笑う。

「潰しに、いくぞロリババア」

武道家達は殴られ、斬り裂かれ、転がされながら再び立ち上がり、攻撃をしかける。

吸血鬼は斬り裂かれ、殴打され、気の爆発を喰らいながら、その身を再生させ相手を潰し続けた。

「…体、動かねえ」

中村は地面に転がりながら力無くこぼした。

「…こつちも、だ」

豪徳寺がやはり横たわりながらポツリと返す。

「死ぬ。これ本当に死ぬよ」

山下が同じ状態で朦朧と呻く。

「…右に、同じだ。辻。…生きているか？」

大豪院が壁に寄りかかり、辻に呼びかける。

「…いきで、るよ」

死んだようにうつ伏せで倒れていた辻が蚊の鳴くような声で応じる。

正に死屍累々、といった様子だ。五人共に正真正銘の限界であり、このままでは死を待つばかりだろう。

「…ババア、てめえは生きてつか？」

中村がエヴァンジェリンに呼びかける。

エヴァンジェリンは精魂尽き果てた様子で瓦礫の山に身を横たえていた。

「…生憎としぶとい性分だな。まあこれ以上動きたくは無」

「…クソが」

中村は悔しげに呻く。辻達は戦闘不能、最早追撃は不可能。武道家と吸血鬼の闘争の結末だった。

「…でかいこと言つときながら、恥ずかしい、限りだぜ」

「…そう、だね。うん。…申し訳無い、な」

「ゴッファー功夫が、足らん、か。…ワイチユンスゼイ未成熟的」

息も絶え絶えながら、悔恨の念を口にするバカレンジャー。

辻は悔やんでも悔やみきれなかった。結局は、負けだ。どこまで追いつめようと、どれほど奮闘しようと、勝たなければ駄目なのだ。

…これは、試合じゃ無いんだから。

「…そう悔やむな、お前達はよくやった。まあ、救われはせんだろうがな」

エヴァンジェリンは億劫そうに起きあがり、よろけながらも辻達の方へ歩いてくる。

「…言い残すことはあるか？」

静かにエヴァンジェリンは問う。

「…へっ……」

微かに中村が笑う。

「未練なんざいくらでもあらあ、言つても言い足りねえよ。だから、…悔しいが、悔いは無い、だ」

中村の言葉に、他の面々も微かに笑う。

「…だな」

「…ネギ君には、悪いけどね」

「…そうだ、ネギ少年に、気にするな、とだけ。頼む、吸血鬼。…まあ、無理だ、ろうが」

辻は中村の言葉に不思議とすつきりするものを感じていた。

…そうだ。

「後悔は、無いな」

辻は呟いた。結局無駄に終わったのは忸怩たる思いだし、あの子供先生には無責任に後を任せることになってしまう。だが、

「やるべきことを…やろうとしたんだ」

だからこそ、よくはないが、こうでなくてはいけない。

「……丸、……に……絡を……れ」

思考が霞む。遠くで誰かの声が聞こえる。

……ああ、死ぬんだな、俺。

……すまない、ネギ君、神楽坂ちゃん、近衛ちゃん。いろいろ、投げ出して、先に逝くよ。本当にごめん。

……桜咲。……結局、忠告を守らなかったからこうなったのかな、俺は。

……でも、

……こうしなけりや、悔いが残るから。

……馬鹿な、先輩で……ごめん。

辻の意識はゆっくりと闇に落ちていった。

## 11話 現状の把握 少年と武道家

「…何処だ、ここ」

目を覚ました辻 はじめの第一声はそれだった。

「つていうか生きてるのか？俺」

遅れて寝ぼけていた頭が覚醒し、意識を失う前の状況を思い出した辻は思わずそんな声を漏らす。

あの状態では十中八九辻達の死は確定していた。助かったのだとしたらそれはどのような方法で助かったというのだろうか。

首を捻る辻だったが、近くから呻き声が聞こえ、そちらに向き直る。そこには全身包帯だらけの中村が苦しげに唸って寝ていた。向かいと奥のベッドにも、豪徳寺、山下、大豪院の姿が見える。ここは病室のようだ。

「…全員生きてる、か……」

安堵の息をつく辻。あれからの経緯はわからないが、友人を失わずには少なくとも済んだらしい。

「ぬ、う……」

一際大きな呻き声と共に中村が目を覚ました。

「起きたか、中村」

辻の呼びかけに答えず、中村はぼんやりと白い天井を見つめ、

「…知らない天井だ」

「なんとなくやると思ったよ阿呆」

寝起きから絶好調らしい悪友に辻は呆れて息をつく。

「…おい、辻。あれからどうなった？」

意識の覚醒したらしい中村が真面目な声になり質問してくる。

「俺もさつき起きたばかりだ。何もわからない」

「…そうか」

中村は上体を起こし…そうとしてギクリと硬直し、再びベッドに倒れ込む。

「つゝゝゝ!!?めっちゃ痛えー!!?!?!」

「だろうな」



かく言う辻も全身筋肉痛十何故か塞がっているものの各所に負った傷が様々な種類の苦痛を主張している。

「無理も無いが中村、病室であり騒ぐなよ」

「うるせえ、ゴリラの野郎に半殺しにされた時でもここまで痛くなかったぞ…」

「殺意の有無だろう」

「…あれで殺す気がホントにねえのか？あの暴力教師」

「……さあなあ」

二人で微妙な気分になっていると、先程の中村の大声の所為か、残りの三人も呻きながら起き出した。

「う……ここは…」

「あれ？知らない天井だ」

「……俺は、一体…」

当たり前だが各々状況が理解できていないようだ。何やら二度ネタをやらかした奴もいたが。

「なんで生きてんだろな、俺達」

豪徳寺が心底不思議そうに言う。暫く一騒動あった後、ベッドに座り込みながら辻達は状況理解に努めていた。

「あれから意識落ちて完全に死んだと思っただけどね」

「死にたかつた訳では当然無いが何か釈然とせんな」

「っーかここ何処だよ？」

「わからんがああ訳のわからない空間じゃ無いのは確かだろう。あの吸血鬼に俺達を助ける理由なんて無いしな。こうして治療を受けてるってことは誰かの助けがああ後入ったのかもしれない」

辻が現状わかっていいることを纏める。

「助けって誰がだよ？」

「わからないし可能性の低い話かもしれないがああ吸血鬼が俺らを治療したつてのはもっとあり得ないだろう」

しかし、その言葉に大豪院がふと何かを思い出したかのように辻に告げる。

「いや……案外それが正解かもしれないぞ、辻」

「はあ!?？」

「なにい!?？」

「え、どういうこと、大豪院?」

驚いて尋ねる山下に大豪院は難しげな表情で腕を組み、語る。

「確証のある話ではないがな。俺はおそらくお前達よりも意識を失うのが少し遅かったのだと思う。意識は朦朧としていたが、あの女が傍らの絡繰に誰かを呼べと言っていたのを微かに覚えている」

それを聞いて辻の記憶が蘇る。意識が落ちる寸前、誰かの声がなくそう言っていたことを辻は思い出した。

「確かに…俺も聞いた気がする」

辻は同じく顔を顰め、そう言った。

「おいマジかよ…俺ら殺そうとして殺されかけた相手に助けられた訳?」

「僕は覚えてないけど…でも確かに僕らが生きてるにはまず最低限あのひ、吸血鬼が僕らを見逃したって言うのが前提なんだよね」

「おいおいそんなんあり得んのか?完全に殺す気だったら最後の方あんだけ全員ズタボロになったじゃねえか?」

「最もけどそうでなければ俺達が生きている説明がつかないんだ、豪徳寺。…見逃されたって、ことになるのか」

辻の言葉に空気が重くなる。

「……負けたな」

ポツリと豪徳寺が呟く。

「…ああ」

「五対一、完敗だね…」

全員が落ち込んでいる。曲がりなりにも腕前に自信があるからこそ、非力な少年に変わって吸血鬼退治を申し出たのだ。その結果は情けをかけられての敗北。心が折れそうになるのも無理は無かった。

「……ええい!!?大の男が辛気臭え顔してならんでんじゃねえよ暑苦しい!!?」

「中村?」

突如中村が顔を歪めながらもベッドから立ち上がり、吠える。

「負けは負けだ！俺だって悔しいわ!!？けど今はんなことより大事なことがあんだろうが、ネギがどうなつたかつて話だよ!!？」

「!!？」

辻達の顔が上がる。

「ロリババアに助けられたにしても見知らぬヒーローに助けられたにしても結局ネギが無事かはわかんねえだろ！そもそも何しに行ったんだよ俺らは？あのガキ助ける為にババアに喧嘩売つたんだろが!!？なんで助かったなんてどうでもいいから生きてんならまずネギの無事を確認しねえといけねえだろうが!!？」

中村はそう言つてよろけながら病室の入り口に向かう。

「何処へ行く、中村？」

「ネギの所に決まつてんだろ、あれから何日立ったかもわかんねえんだ。手遅れかもしれないねえが無事かもしれないねえ。だったら行くしかねえだろが!!？ババアに遭遇するのが怖いってんならてめえらはここで……」

「それ以上は言わなくていい、中村」

豪徳寺が中村を遮る。

「確かにお前の言う通りだ。俺らの腕つぶしへの誇りなんぞよりも、大切なことがあつたな」

「お前に気づかされるとは癪な話だが、武の本質を迂闊にも忘れていたな」

「僕も行くよ、中村。確かに色々寝てる場合じゃないね」

「…そうだな。わかつてることの方が少ないが、少なくともそれは急務だな」

辻も悲鳴を上げる体に喝を入れ、起き上がる。

…本当にこの馬鹿は時々すごい正論を言うから侮れない。

「…へっ、わかりやいいんだよわかりや。よっしゃてめえら、俺について来い!!？」

「どこへも行く必要はない。止まれ中村」

意気揚々と飛び出しかけた中村を遮つたのは病室の扉を開けてかけられた野太い男の声だった。

「お、お前は…バイオ兵器が何故ここに…」

「杜崎先生と呼べ、阿呆」

ゴズン!!?と痛そうな音を立て、中村の脳天に杜崎の拳骨がめり込む。

「痛つてえなハザード教師、怪我人にはもつと優しくしやがれ!!?」

「だからいつもより弱めに殴ったろうが。大体貴様ら、勝手に学校を抜け出した拳句半死人所か八割死人で帰つてきおつて。よくもそれでそこまででかい態度を取れるものだな?」

杜崎の言葉に山下が反応する。

「もっさん、じゃあここ麻帆良の病院?」

「気安いわ山下。そうだ、流石に放つておけば死んでいただろう重傷だったからな」

「つて言うか杜崎!俺らが学校抜け出しでからどれくらい経った!!?」

「豪徳寺、貴様…まあいい。あれからもう二日後の夕方だ」

「なにいつ!!?」

「くそ予想はしてたがやっぱそんぐらいいは経つてつか…モリー!!?訳は後で話す、どれだけ後で説教くらつてもいいから今はここ出させてくれ!!?事情を説明してる暇はねえがマジでやばいんだよ!!?」

「駄目だ」

「お願いします、杜崎先生。人の命が懸かっているんです」

「辻も少し落ち着け、大丈夫だ」

「何が大丈夫だ事情も知らねえ…」

「待て、中村。ネギ少年に何か起こつていれば学園でも騒ぎになっているはずだ。ここは杜崎教員に話を聞こう」

くつてかかる中村を制して大豪院が提案する。

「そうか!!?」

「確かに!もっさんちよつと…」

「いいから落ち着け馬鹿共、全てわかっている」

山下を遮り杜崎が語る。

「お前達の事情と顛末は全て知っている。色々言いたいことはあるが

まずはお前達の危惧しているような事態にはなっていないと断言してやる。だから全員、一旦ベッドに戻れ。貴様らは現在絶対安静だ」

「……はあ？」

「え、何言ってるの？モリー」

辻達は理解出来ないと再度問いかける。それに杜崎は面倒臭さそうに溜息をつき、

「ああもう面倒だからわかりやすく言ってやる」

自分の胸を親指で指し、杜崎は言った。

「俺も魔法関係者だ」

「……は？……」

場を沈黙が支配した。

「あり得ねえだろ……こんなゴツイおっさんが魔法使いだあ……？魔法なんてファンシーな力使えんのは、もっところ、ぷにとしてきやるん、つてした可愛いロリっ娘が使っていい力だろうが……野郎は駄目だろ、百歩譲ってネギまでだよ。ましてやこんな猿人ゴリがあああああげふっ!!?」

「グダグダ五月蠅いわカスが。アニメや漫画では無いんだ、現実で女子小生ばかりが戦っていてたまるか」

「とうかやだよ、そんな世界」

「大人は何やってんだ、大人は」

バカレンジャーは病室のベッドに座り、椅子に座る杜崎から説明を受けていた。

「……で、杜崎教員、貴殿は何を知っている」

仕切り直しての大豪院の問いかけに杜崎は一つ鼻を鳴らして腕を組み、

「貴様らがネギ・スプリングフィールドと関わってからのほぼ全て、だ。お前らの細かい動機などは流石に知らんが、物見遊山でそんなになるまで闘りあった訳で無いことくらいは知っている」

「杜崎……」

「先生をつけろ。貴様らが一番気になっているだろうネギ・スプリン

グフィールドのことが、ひとまず無事だ。少なくとも襲われるようなことにはなっていない」

その言葉にひとまずホツとする中村達。そんな中、辻は厳しい顔のまま、杜崎に尋ねる。

「杜崎先生。ひとまず、ということはまだなにか問題があるんですね」  
その言葉に杜崎も顔を顰め、

「まあな。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは結果だけ言えば今すぐに、ではないが解放される」

「はあっ!?」

杜崎の言葉に素っ頓狂な声を上げたのは中村だった。

「なんでだよ!? ネギは無事じゃあねえのか?」

「無事だ。しかしお前達が寝ている間に取引きがあつた」

「取引き?」

疑問の声を上げるのは大豪院。

「ああ。ネギ・スプリングフィールドはエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと、自身の健康に支障の無い範囲での献血を行い、その血液を保存魔法にて貯蔵。一定量が貯まった段階でエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルはそれを摂取。その後、麻帆良の魔法関係者の厳正な管理の元、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの封印を解除するという契約だ」

杜崎の説明に場に沈黙が落ちる。少しして、それを破つたのは辻だった。

「…ネギ君になんら得のない契約に思えますが?」

「貴様らも聞いたのでは無いのか? ネギ・スプリングフィールドの父親、ナギ・スプリングフィールドはエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルを一定の麻帆良学園での拘留の後、解放する約定を結んでいたがナギ・スプリングフィールドは一定期間を過ぎても封印を解きに現れなかった。その不履行をネギ・スプリングフィールドが責任を取るといふ話だ」

「ふざっけんな!!?」

怒りの叫びを上げたのは中村だった。

「それはあいつの親父の不手際であいつになんの責任も無いだろうが!!? だってのにんな真似許していいと思ってるのか!!?」

対する杜崎は落ち着いた様子のまま淡々と説明を続ける。

「落ち着け、中村。お前と同じような反対意見もあったが、最終的に当人同士の意志を尊重したのと、この件は学園長が責任を持つことで落着と相成った」

「学園長?」

驚きの声を上げたのは豪徳寺である。

「学園長も魔法関係者とやらなのか?」

「そうだ。簡単に説明してやるがこの麻帆良学園は、魔法に関わる者にとつて関東最大の総本山みたいなものだ。当然麻帆良学園内にも魔法関係者は多数在籍している、俺もその一人だ。その大組織の最高権力者が一件を預かると言った。ならば当人同士が納得している以上、これ以上の問答は不要だ」

「…納得がいかねえ」

唸るように中村が溢す。

「あいつは、ネギはあのロリババアを怖がってたはずだ。なのにお話し合いでババアの要望を全面的に飲んだだあ? ぜってーおかしいぞ!!? 脅迫でもされてんじやねえのか? そこらへんおかしいと思わなかつたのかよ杜崎!!?」

「中村」

杜崎は中村を遮り、ゆっくりと告げる。

「本当なら文字通り死ぬ気で頑張ったお前達にこんなことは言いたくない。手段はどうあれ、お前達は善意で動き、少年を守ろうとしたからだ。それは賞賛されて然るべきだろう。しかしこの事態を招いたのはお前達にも一因はあると俺は考えている」

「なに…?」

訳がわからないといった表情で疑問符を上げる中村。その時、

「…やっぱり、そういうことか…」

呻くように、沈痛な声を上げたのは山下だった。

「山ちゃん?」

「中村、マクダウエル女史がなぜ僕らを見逃したのかって話をさつきしたよね」

「?…おお」

突然変わった話題に戸惑いながらも中村は頷く。

「これがその理由かもしれない」

「…どういふことだよ、山ちゃん?」

「…まさか、そういうことか?」

「大豪院?」

大豪院はなにかに気づき、山下と同じように、言わば苦渋の表情を浮かべる。

「おい、二人だけで納得してねえで俺にもわかるように説明してくれよ!!?なんで俺らの所為でネギがああなのババアに…」

そこまで言っただけで中村は動きを止める。

「わかったか」

杜崎は頷き、辻達にその事実を告げた。

「ネギ・スプリングフィールドとエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルはお前達が発見され、病院へ運ばれるまでに秘密裏に接触していた節がある。何らかの取り決めを事前に行っていたと見るのが妥当だろう」

沈黙がその場を支配する。中村はもちろん、辻も、豪徳寺や山下、大豪院も、無言で唇を噛みしめる。

それは、つまり。

…俺たちが人質に取られて、ネギはエヴァンジェリンに血を与えることを承諾したってことか…

ネギ・スプリングフィールドを助ける為にエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと死闘を繰り広げた筈だった。だと言うのに、辻達はあるところかネギ・スプリングフィールドを屈服させる為の要因になっちゃった。

中村が震える程に拳を握りしめながら、力なく自嘲する。

「…なにが、武道家だよ。…俺たちは…」

辻達の様子を見て、杜崎が一つ息を付き、辻達に語りかける。



「至らぬ自分を恥じるのも結構だが、どうせ反省するなら相手の気持ちを知って正しく反省しろ」

「…なんの話だよ」

「ネギ・スプリングフィールドはお前達に感謝していたぞ」

「はっ！」

中村が馬鹿馬鹿しいとばかりに、

「なにが感謝だよ、俺ら結局あいつにトドメ刺したようなもんじゃねえか」

「それはお前の認識でネギ・スプリングフィールドの考えでは無い。…まあいい。当事者ではない俺が言った所で納得しまい。話は当人から聞け」

「は？」

「もっさん、当人って…」

「杜崎先生と呼べ。今はもう放課後だ。ネギ・スプリングフィールドは先程お前達が目を覚ましたと聞いて、授業が終わったら見舞いに来るそうだ」

「はあ!?？」

「ちよっ、待てどのツラ下げて会えばいいんだよ！」

「俺が知るか。ん、噂をすれば影だな」

ノツクの音に杜崎は扉を開ける。果たしてそこにはネギが神妙な佇まいでいた。

「ネギ君…」

「ネギ…」

「…皆さん」

ネギが辻達の姿を見て顔を歪め、何事かを言いかけ、杜崎の姿を見る。

「さて、俺の用事は終わった。ネギ先生、こちらへどうぞ。一応仮にも怪我人なのであまり長話は控えるようにして下さい」

「あっはいー！」

「では、馬鹿共、あまり騒ぐなよ」

そう言って杜崎は病室から出て行った。

残された病室の中では気まずい沈黙が降りる。やがて口火を切ったのはネギだった。

「…皆さん、怪我は大丈夫なんですか？」

辻達はそれに対して、わざとらしい程明るく答える。

「うん、大丈夫大丈夫。心配しないでよネギ君。こんな怪我しばらく寝てれば治るって！ね、ねえ中村」

「お、おう!!?なーに暗い顔してんだネギ!こんなん睡つけときやなおらあ大げさなんだよ。問題ねえよな山ちゃん」

「そうそうそうそう、まったく問題無い無い!大げさなんだよこんな包帯見てよこんなの何にも痛ったあつ!!?あ、いやうん、とにかく大丈夫だから、ねえ豪徳寺!!?」

「…お、おお。うん大丈夫だ心配すんな。ちつと身体のあちこち骨が砕けてるだけだからよ」

「馬鹿野郎余計なこと言うなりーゼント!!?なんでもねえぞーネギ。なあお前もなんら問題ねえよな大豪院」

「…いや無理があるだろういくらなんでも」

「あー裏切ったね大豪院!!?」

「それ以前に貴様ら誤魔化すのが下手すぎる。ネギ少年、白状しよう。皆それなりに重傷だ。だが命がどうという程のものではない。心配は無用だ」

大豪院の言葉にネギは俯き、搾り出すように話し出す。

「…病院の人に聞きました。皆さん生きてるのが不思議な位の大怪我だったって」

「いや、それは…畜生どこのどいつか知らねえが余計なことを。いやネギ、医者は大げさに言ってるだけで…」

「大げさなんかじゃありません!!?」

中村の誤魔化しはネギの大声に遮られた。

「僕は、皆さんがエヴァンジェリンさんに話をつけに行って下さった日に、エヴァンジェリンさんに呼び出されました。皆さんが捕まって大怪我をしているって、茶々丸さんが言いに来たんです」

「なにいい…」

「くつそやつぱ人質にされちまつてたんじやねえか俺ら」

ネギの言葉に不甲斐さを覚え憤る辻達。

「僕が行ったら、皆さん酷い状態で倒れていて、エヴァンジェリンさんが最低限傷は塞いだけど、このままでは長くないって：僕が、僕が無責任に辻さん達に問題を丸投げしたから、僕の所為で皆さんが：本当にすいませんでしたっ!!?!!?」

「ネギ君、それは違う」

目の端に涙を浮かべつつ、頭を下げるネギに辻が首を振って言う。

「俺達は確かにネギ君に代わってエヴァンジェリンに話をつけに行つて、決裂してこんな風になった。でもそれは、ネギ君に責任は無いんだ」

「そんなわけっ」

「まあ、聞いてよネギ君。ネギ君は俺達に無理に行つてくれと頼んだかい？違うよね、俺達が事情だけ聞いて、勝手に任せろと言つたんだ。ネギ君は危険なことだとちゃんと俺達に言っていた。全部踏まえて俺達は自主的に関わつたんだ。それで上手くいかなくて怪我をしたからってそんなの、見通しが甘くて事態を軽く見た俺達の自業自得だ。むしろネギ君は太鼓判押しして失敗した間抜けをなじつていい立場なんだよ」

辻の言葉にネギは納得出来ないと、反論しようとする。

「そんなの…!!?」

「まあ、無理だろうな、そんな簡単に割り切るのは。逆の立場なら俺達とて無理だ」

再びネギの言葉を遮り大豪院が語る。

「どんな理由があろうと俺達がお前の為に死にかけたという事実は変わらない。ましてやお前の性格ならば気にしない、などという事は不可能だろう。だがな、ネギ少年。そうやって塞ぎ込んで自分を責められては結局俺達が体を張った意味が無くなるんだ」

大豪院は、この男にしては珍しく、穏やかな風貌で優しく諭す。

「少々臭い言い方になるが、俺達はお前を落ち込ませるために命を賭けたんじや無い。吸血鬼に襲われるなんて理不尽に見舞われ、苦しん

でいたお前に元気に笑って過ごせるようになって欲しいから命を賭けたのだ」

「大豪院さん…」

「ネギ少年、いやネギ。俺達がやったことは傍迷惑で余計なお世話でしかなかったか?」

「そんなことは…そんなことありません!!? 出会ったばかりの僕に、こうまでしてくれて、僕は…」

「ならばネギ。少しでも俺達の行為をありがたいと思ってくれたなら、謝るな。お前にそんな顔で謝罪されても俺達は少しも報われな。難しいだろうが、自分の問題が楽になったならば、単純に喜んでいればいい」

そこで大豪院は言葉を切り、ネギを真っ直ぐ見据えて言った。

「その歳でそんなに他人に気を使うな、お前は少し急いで大人になろうとし過ぎだ。子どもは大人に無理させたからって気にしないでない。大人が子どもを助けるなんて当たり前前的事だ」

ネギはその言葉を聞いて、堪えていた涙がついに溢れた。

この年頃の少年少女は、子ども扱いと反発するものだ。ネギも多分に漏れず、普段は子どもだからと言われていい顔はしない。

だがこの時は、自分を子どもだからと当たり前前のように助けようとしてくれた事が、その善意がネギは嬉しかった。

「…あり、がとう、ごさいます…」

しゃくりあげながらも、ネギは辻達に、礼を言った。

バカレンジャーは全員照れ臭そうに笑って、どういたしまして、と声を揃えて言った。

「まあさつきは偉そうに言ったけどよ、結局お前は俺達にホントに礼は言う必要ねんだわ」

「そうだ。それ所か俺達はお前に謝らなくちゃならねえ」

ネギが泣き止み、落ち着くのを待ってから、中村と豪徳寺が一転して神妙な顔で言う。

「え?」

ネギは訳が解らない、という顔で辻達を見る。

「僕達は任せておけと偉そうに言っておきながら、結局マクダウエル女史を止められなかった。僕達は君になにもできちゃいないんだ」  
「それ所か俺達は人質になり、結果的にお前を却って追い詰めてしまった」

「だから約束を破った俺達はネギ君。君に謝らせてもらう。謝っただけで済むような問題でも無いが、これは俺達がつけなきやいけないケジメなんだ。…本当に、申し訳ない」

辻は頭を下げ、他の四人もそれに倣う。

「や、止めて下さい!!?そんな…」

それを見てネギは慌てたように立ち上がり、辻達に頭を上げるよう頼む。

「ネギ君、君は優しい。でも君は被る必要の無い災難を背負い込んだ。そしてそうなった一因は俺達にあるんだ。無理に受け取ってもらっても、頭を下げたから許せと言うつもりも毛頭ない。これは俺たちのせめてもの誠意の証だ。どうか好きにやらせてくれ」

尚も頭を上げない辻達を見てネギは何事かを言いかけ、そして一旦言葉を呑む。そして、ネギは年齢不相応な強い意志を眼差しに込め、自らの想いを理解して貰うべく、意を決して話し始めた。

「皆さん。先程、僕に対して皆さんは何もできていないと仰いました。でもそれは、違います。皆さんは僕を助けてくれたんです」

ネギの言葉に全員、下げた頭の裏で怪訝な顔をする。

「皆さん、一旦顔を上げて頂けませんか。ちゃんと伝えたいんです。皆さんが僕に何をしてくれたのかを」

その言葉に、一瞬間を置いて全員ゆっくりと顔を上げる。

「ネギ君、それは俺達の様子に気兼ねして言ってくれてる訳じゃ無いよね?」

「はい。辻さん達は僕の助けになってくれました」

辻の確認に対して、ネギははっきりと頷いた。

その姿に、五人は顔を見合わせた後、頷き合い、代表して辻が言った。

「話を、聞かせてくれないか。ネギ君」

「はい」

ネギは辻の言葉に応じ、自分がエヴァンジェリンに呼び出され、辻達の惨状を見せつけられた直後からの話を始めた。

「こんな…なんでこんな酷いことをするんですか、エヴァンジェリンさん!!?」

ネギは恐れの中にも、確かに怒りを覚えながら少し離れた場所に立つエヴァンジェリンを糾弾する。

それに対してエヴァンジェリンは肩を竦め、ネギに告げる。

「私にこいつらを差し向けておいて何を…などと言ってやりたい所だが、こいつらから事のあらましはだいたい聞いたよ。問答無用で襲いかかった私に対して随分と優しいことだ。…その善意の交渉が決裂してこうなった。それだけの話さ」

「だからって、こんな…」

ネギは納得が出来ない、いや、理解出来なかった。目的を邪魔された。だからといって他人をこんなにしてしまう、エヴァンジェリンの存在がネギには理解出来なかった。

その様子を見てエヴァンジェリンは目を細め、

「まあ坊やならそんな所か。…十歳の子どもならそれで当たり前か。…成る程そうだな。当たり前のことだ」

エヴァンジェリンは誰かに同意するように頷いた。そしてエヴァンジェリンはネギに本題を告げる。

「さて坊や、わざわざここに坊やをこっそり呼んだのは他でもない、私は坊やに頼み事があるのだよ」

その言葉にネギは顔を強張らせながらも強い視線でエヴァンジェリンを睨み返し、

「僕がエヴァンジェリンさんに血を与えなければ、辻さん達を…殺すつもりですか!!?」

「うん?」

聞き返すエヴァンジェリンに、ネギは杖を構えながらもおも言葉を紡ぐ。

「辻さん達をこれ以上酷い目には遭わせません!!? 僕が間違ってた、僕の問題なのに、他人を巻き込んで押し付けたからこんなことになったんだ!!? エヴァンジェリンさん!!? これは僕と貴女の問題です! 辻さん達は元々関係の無い人達です、今すぐ解放して下さい!!?」

その言葉にエヴァンジェリンは笑った。成る程いかにもお人好しの馬鹿共が気に入りそうな真つ直ぐさだ、状況をある程度理解しているにも関わらずいいことがいかにも善い子のそれだ。

そんな子どもと先程の男共の意識の格差が、エヴァンジェリンは妙に可笑しかった。

「エヴァンジェリンさん!!?」

「焦るなよ坊や。心配するなと言っても無理な話だろうが、こいつらは魔法で今状態が停止している。このまま魔法医の所に運べば一命は取り留めるだろうさ。放っておいても直ぐにどうこうという事は無い」

「だからって…!!?」

反拍するネギにエヴァンジェリンは笑みを深め、

「そう、だからといってこんな姿で転がしておきたくは無いよなあ。だから坊や。私から提案だ。坊やがある条件を呑んでくれるならこいつらは直ぐにでも医者に連れて行くし、今後坊やに私は一切関与しない。そして先に言うておくが、その条件とは坊やの命を危険に晒すものではない」

「……………」

ネギは言われた内容が今ひとつ理解出来なかった。エヴァンジェリンがネギに求めているものは血だ。そしてそれが必要だからネギの命をエヴァンジェリンは狙ってきたのだ。だというのにネギの命は奪われないとでも言うようなこの言葉である。

「混乱するのも無理は無い。私自身、ここまで譲歩する自分に驚いている位さ。まあ聞け、坊や。坊やには私に血を提供して貰う、それは変わらん。だが提供する血は坊やの命に別条の無い範囲での量を、複数回に渡ってある程度の期間を置いて貰うことにする」

「……………」

ポカンとするネギに構わず、エヴァンジェリンは言葉を続ける。

「そうしてある程度血が溜まれば晴れてそれを頂き私は解放だ。どうだ？坊やは死なない、こいつらも私も助かる。誰一人損をしない取引だろう？」

エヴァンジェリンの言葉にネギは情報を吟味するように黙る。やがて口を開き、

「なんで…」

「ん？なんだ坊や」

「なんでそんな方法があるなら、最初からそれを言ってくれなかったんですか！！？最初にそれを話してくれていれば、もしかしたら…」

「もしかしたらこいつらを巻き込まずに済んだかも知れん、と言いたい訳だ」

ネギはその言葉に頷きを返す。

「それはなあ、坊や」

エヴァンジェリンはネギを見据え、

「私が悪の魔法使いだからだよ」

そう、言った。

「私はモノを手に入れる時にお願いを<sup>お願い</sup>して譲ってもらい<sup>は</sup>せん。欲しなければ奪い取る。そうやって生きてきた。そうして生きねば生きられなかった。自分の我欲を通して生きてきた半生に、私は誇りを持って生きている。ましてや敵とも言える男の息子に遠慮する理由など何一つ無い。…悪としての誇りだよ坊や、安い誇り<sup>プライド</sup>さ。くだらないと思うだろう、坊やには理解出来んだろうな。だが私にとっては、譲れぬものだ」

その静かな、しかし力に満ちた答えにネギは気圧される。

「だから坊や。私がこんなことを言うのは特別だ。応じないなら坊やが言った通りこいつらを人質にもするし、仮に坊やが見捨てても、力<sup>力</sup>ずくで坊やの血を頂く。実質選択肢など無いんだよ」

笑いながらもエヴァンジェリンからはプレッシャーが増している。

逃げ場は無く、ネギは否応なしに選択を迫られた。

ネギは考えた。エヴァンジェリンの言い分の全ては理解出来なく



とも、今日の彼女は恐ろしいだけの怪物ではなかった。ネギは初めて、エヴァンジェリンとまともに話が出来た気がしていたのだ。だから、エヴァンジェリンの脅迫地味な提案に、恐ろしいから、選択肢がないから、と思考を止めてただ流されるままの返答をしたくなかったのである。

そして、ネギは返事を返す。

「…わかりました。エヴァンジェリンさん。貴女の取り引きを受けます」

「…そうか」

エヴァンジェリンはプレッシャーを消し、ネギに歩み寄る。

「いい子だ坊や。もう少し駄々を捏ねると思ったが、賢明じゃないか」  
「選択肢は無いんでしょう？それに、辻さん達の命には変えられません」

「クククツ、まあそうだろうな。これだけ体を張って貰ったんだ、見捨てるなど出来んよなあ」

笑いながら近づくエヴァンジェリンにネギは言った。

「エヴァンジェリンさん。取り引きに応じる代わりに一つだけ聞いてもいいですか？」

「うん？」

エヴァンジェリンは首を傾げるが、

「まあ坊やになんら得の無い取り引きだ。質問位なら構わんよ。何が聞きたい？」

「ありがとうございます。…エヴァンジェリンさんと父さんは、どんな関係だったんですか？」

その質問にエヴァンジェリンは歩みを止め、ネギの顔を見据える。  
「…そんなことを聞いてどうする」

笑みを消し、僅かに目を細めて尋ねるエヴァンジェリンにネギは言った。

「気になるんです。エヴァンジェリンさんは僕を敵の息子と言いましたが、その割りに僕はエヴァンジェリンさんに恨み言は言われても明確な敵意を向けられたことは無かった気がするんです。だから、エ

ヴァンジエリンさんと父さんは、単なる敵同士じゃ無かったのかもしれないと、そう思いました。僕は父さんのことを殆ど覚えてません。だからエヴァンジェリンさんから見て父さんがどんな風だったのか、気になるんです」

ネギの言葉にエヴァンジェリンはしばらくの間沈黙していた。やがて、

「…妙な所で鋭いな、坊や」

一つ溜息をつき、エヴァンジェリンはネギに応じる。

「わかったよ坊や。仮にも協力して貰う身だ。特別に教えてやろうじゃあないか」

しかし口での説明はいささか面倒だ、とエヴァンジェリンは言い、ネギを引き寄せ、地面に魔法陣を描き始める。

「私と奴の馴れ初めを見せてやる。力を抜け」

エヴァンジェリンは魔法陣の中にネギと額を付き合わせて跪き、詠唱を始める。

「ムーサ達の母、ムネーモシユネーよ、己がもとへと我らを誘え」

やがて、閃光と共に、エヴァンジェリンの記憶をネギは追体験した。

「…以上が私とあいつの馴れ初めだ。傍目からすれば馬鹿みたいだが私にとっては…どうした、坊や？」

ネギは何やら凄まじく微妙な表情で何事かをブツブツと呟いていた。やがて、

「…いえ、何か、父さんが想像していたのと大分違って…」

その言葉にエヴァンジェリンはプツと吹き出し、

「ははははは！その分ではあいつの英雄然とした姿ばかり聞かされてきたのだろうが、実態はあんなものだ。考えなしにその場のノリと勢いで行動する。正義感のようなものが強いからこそ、英雄と呼ばれるような結果を出せていたにすぎん！」

笑い転げるエヴァンジェリンに何かが崩れていくような錯覚を覚えながら、ネギは、ふと思ひ、それを口に出した。

「なんだか辻さん達って、父さんに似ているのかもしれないね」

「……………なに？」

エヴァンジェリンの動きがピタリと止まる。

ネギは辻達とほんの僅かな時間しか共にしていないが、なんとなく雰囲気のようなものが似通っているように感じたのだ。

エヴァンジェリンはしばらく停止していたが、やがて一つ鼻を鳴らし、

「…似ても似つかんわ」

そう言っただけで辻達の方に歩き出す。

「とにかく坊や、要求には答えたぞ。こいつらを病院にでも送ったら私の指示に従って貰うぞ」

「はい、わかりました。父さんが解放すると約束していた人なら、僕も貴女を信じることにします、エヴァンジェリンさん」

「フン」

空間を出るため歩き出しながらふとネギは気になったことをエヴァンジェリンに聞いた。

「エヴァンジェリンさん」

「なんだ」

「どうしてエヴァンジェリンさんは僕に譲歩してくれましたか？」

「あん？」

「僕の命を保証してくれたり、父さんのことを教えてくれまでして。なんで僕に気を使ってくれたんですか？」

その言葉にエヴァンジェリンはさあな、と呟き、

「その連中を見てみる、坊や」

と辻達を指す。

言われるままに辻達をネギが見遣ると、エヴァンジェリンが何故か不本意そうに、

「そのガキ共は私相手に半素人の分際で凄まじい粘りを見せ、私を追い詰めた。全快状態で無いだの油断があつただのくだらん言い訳はせん。私はそいつらに辛勝だったしそいつらは私に惜敗だった。本当によくやったよ。そいつらは…そいつらが私に挑んだ理由は坊やを助ける為だ。二、三日前に出会ったばかりの坊やをな。…そこにいるのは知り合ったばかりの人間の為に命を賭けられる本物のバ

力共だ。それが五人もいた所為で私も少々あてられたのかもしれない」

そう言い捨て、エヴァンジェリンは茶々丸を呼びに行った。

「…それを聞いて、わかったんです。僕は、辻さん達に助けられたんだって」

長い話をネギは終え、再び辻達を真っ直ぐに見据えネギは言った。

「辻さん達が命を賭けてエヴァンジェリンさんと闘ってくれなければ、僕が襲われずに済むことも、ましてやエヴァンジェリンさんと会話できて父さんのことを教えて貰うことも出来ませんでした」

ネギは笑って、

「だから辻さん達は僕を助けてくれました。勝てなかったから、辻さん達の行動がなんの意味も無かったなんて、決してそんなことはありません」

ネギは頭を下げ、辻達に告げた。

「僕を助けてくれて、僕の為に体を張ってくれて…本当にありがとうございました」

場に沈黙が降りる。やがてそれを破ったのはすすり泣きの声だった。

「つつぐすつ、ふつ、畜生、俺こういうの駄目なんだよ…」

中村が鼻を擧り上げながら溢す。他の四人も、目に光るものを滲ませていた。

「あ、あ、くそ、こんな子どもに氣い使わせて、格好悪い…」

「ホントに、ねえ…」

「情けない成果だったと、いうのにな…」

辻は滲む視界の中、不甲斐なさや情けなさを感じつつも、ネギに言葉を返す。

「…こつちこそ、ありがとう、ネギ君」

君のおかげで、俺達は報われたよ、と辻は告げた。

## 12話 大人と武道家と少女達

「うわ、ちょっとホントに大丈夫なの先輩達?」

「酷い怪我やんかくなにやったか知らんけど無理したらあかんえ」

病室に可愛い女の子二人がお見舞いに来た。

…まあ、後輩の神楽坂ちゃんと近衛ちゃんだけど。

「問題ねえよアスニヤン。あと三日も寝てりや退院できるって医者と言ってたからな」

「誰がアスニヤンよ誰が。まあでも自業自得よね〜試合しててヒートアップして殺し合いみたいな乱闘になったとか」

「うるせえぞバカレツド。今回はやり過ぎただけで毎度毎度やってるんだ俺達は」

「さつきから不名誉な呼び方やめてくれない!??誰がバカレツドよそっちなんてバカブルーの上にもリーゼントのくせに!!?」

「ああ!??今俺の頭を馬鹿にしやがったなお前、大体お前がリーゼントって言っている俺の前髪部分はポンパドールという名前だあ!!?」

「どーでもいいわよ!!?」

ギャーギャーと角突き合わせる二人をそれぞれ友人が宥めに入る。

「まあまあアスナ〜お見舞い来たのにケンカしたらあかんえ〜」

「こつちもだよ豪徳寺。後輩の女子相手にいきり立つな、みつともない」

「ぬぐ……」

バツが悪そうに押し黙った二人を余所に、辻と木乃香は会話に華を咲かせる。

「ごめんね近衛ちゃん。ウチの奴らは血の気が多くてさ……」

「いえいえこちらこそ、気にしてませんえ。辻先輩、お友達とケンカなんかしたらあきませんえ〜、友達とは仲良くせな」

「うん、君に言われるとなんだか身に沁みるね。仲が悪い訳じゃないから安心して、じゃれ……あい……の延長みたいなものだから、うん」

「その延長上は随分遠くにありそうだね、辻」

「うるさいよ山ちゃん。少なくとも険悪じゃないだろ、俺達」

「まあね」

「…つうううじいいいいいつ!!?!?!?!」

割り込んで来たのは血涙を流さんばかりの凄まじい形相の中村。

「テメ、コラビシヨウジョシヨシチュウセイトイチャイチャシヤガツ  
テウラヤマシイゾオレニモソノコウウンヲワケヤガ  
レエエエエエツ!!?!」

「日本語で言えよ。わからないから」

「…ごめん、やっぱり一部険悪かもね」

「…いつも通りの馬鹿騒ぎ、だな…」

大豪院が嘆くように呟く。

「じゃあそろそろ帰るわ、お大事にね、先輩達」

「じゃあ先輩達、安静にしてなきやいけませんえ」

「はい!!?仰せのままに近衛木乃香様!!?!」

「中村、五月蠅い。じゃあ神楽坂ちゃん、近衛ちゃん、また」

「もう木乃香でええってゆーてるやないですか」

「そんな風に親しげに呼んでいいのは親しい友人と家族と恋人だけで  
す、異性の先輩なんかには呼ばせちゃいけません」

「え〜〜…」

「固つたいわねー、辻先輩」

「本当にな、そんなんだからお前は桜咲とも…」

「豪徳寺、黙れ。お見舞いありがとう、二人共」

「イチャイチャしてんじゃねー!!?!」

中村の叫びをスルーしつつ辻達は明日菜と木乃香を見送った。

「…だあく元気に振る舞うのも疲れんなあ」

二人が去って暫くしてから中村がベッドに倒れ込みながら怠そう  
に唸る。

「傷はすっかり塞がっているけど体力がガタ落ちだね」

「また鍛え直さねえとな」

「寝ている時間が無駄だ。煩わしいものだな、入院とは」

「…そういうえば病院には行っても入院する程の怪我なんて高校に上が  
る前の一回つきりだな」

辻はふと昔のことを思い出す。昔はここにいる全員、ここまで仲良くつるんでいなかったし、手合わせもずつと凄惨な形だったものだ。ある意味これも中二病かと辻が苦笑していると病室のドアがノックされた。

「はい、どうぞ」

山下の言葉にドアを開け、中に入って来たのは、先程帰った筈の明日菜だった。

「あれ？どうしたよ明日菜っち。忘れもんか？」

中村の言葉に首を振る明日菜は何やら先程までと違い、何処と無く元気がない。

「…どうした、神楽坂」

大豪院の言葉に明日菜は、一瞬言い淀むが、辻達に向けて話しだす。

「…ちよつと、先輩達に謝りたくて…」

「謝る？何をだよ」

中村の言葉に明日菜は顔を上げ、

「エヴァちゃんとの一件よ。なんか私、ネギから話し聞いただけで先輩達が話をつけてくれるなら安心だって、単純に考えて、そしたら先輩達危うく死にかける位の大怪我したって…。ネギなんかにもあの人達本当に強いんだから大丈夫よ！なんて軽く言っちゃってたし、なんだか軽い気持ちで先輩達にとんでもないこと任せてたな、って」

明日菜はそこで言葉を切って辻達を真っ直ぐ見据え、はつきりと言った。

「私は戦いの事とか全然わかんないし、エヴァちゃんの実力とか、そういうのわかつてても先輩達が任せろって言ってくれてたら、ネギに行かせるよりいいと思って結局任せてたと思う。でも先輩達に無理させといて私、なんて言うか、誠意って言うの？が、足りないと思ったの。知らんぷりして苦労だけ押し付けて、いいことじゃないから。だから謝りに来ました。大変なこと任せて、大怪我させてすみませんでした!!？それから、ネギを助けてくれてありがとうございます!!？」

よく通る気持のいい声で、明日菜ははつきりと謝罪に御礼を申し上

げた。その潔さと言うか真っ直ぐな様子に、辻達は一瞬呆気にとられた後、揃って苦笑する。

…なんて言うか芯が強いなあ、この子は。

「どういたしまして、神楽坂ちゃん」

「気にすんな、やりたくてやったことだからよ」

「ネギにも言ったが結果オーライなだけで大したことは出来てねんだよ、俺達」

「うむ、ひとまず礼と謝罪は受け取るが、この話はこれきりだ」

「そういうこと。仮にも先輩なんだから、いざという時にはこれくらいは、ね」

辻達は口々に明日菜に告げた。それに対して明日菜も笑って頷き、もう一度頭を下げてから踵を返す。

「じゃあ先輩達、今度こそさよなら。木乃香待たせてるからもう行くわ」

「応、じゃあまたな」

「ネギ君にもよろしく」

明日菜は元気よく帰って行った。

「…なんて言うか、大物になるね、あの子」

山下が苦笑して言う。

「だな」

豪徳寺もしみじみと頷く。

「さて、実は今日もう一回客人が来るんだぜ」

暫しの時が流れ、各々余暇を過ごしていると、中村が唐突に何か言い出した。

「なに？」

「どういうことだ、中村？」

「貴様…また何か企んでいないだろうな」

「ろくでもない考えなら逃げるぞ、俺」

警戒する四人に中村は不敵に笑い、

「なーに如何わしいこっちゃねえよ。ただ入院してるっつーのに顔も出しやがらねえ俺んとこの空手部やポツチンの中武研、山ちゃんの合



気柔術同好会、薰つちのリーゼント部の連中と違って何処かの誰かさんの部活は大変部長思いでなあ。部を代表して三人程お見舞いに来てくれると連絡があっただけの話だ」

「二「待てや（つてよ）」」

四人が声を揃えてツツコンだ。

「まず僕らに人望が無いみたいない方をやめてよ。大怪我なんて麻帆良の武道系部活じゃ珍しくないから来ないだけだって、見舞いは」  
「それはそれとして何処かの誰かって後話に出てないの俺だけだろバカ村」

「そもそも何故辻では無くお前に連絡が入る」

「なによりリーゼント部ってなんだ！そんなもんに入ってるねーよ！！？」

暫しギャアギャア言い合ってからようやくやくひと段落つき、

「待て、聞くけれど三人って誰と誰と誰だ」

辻がようやくその疑問に到達する。

「いやあく言わなくてもぶつちやけ想像つくだろ」

「：答えろ。その面子に桜咲は入ってるか」

「さつすが「はしめちゃんわかって」

言葉の途中で辻は跳ね起きて窓から逃走しようとした。ちなみにここは五階である。

「捕まえろおおおおつ！！？」

中村の叫びにこの時ばかりは全員従い、辻の体はあっさりと拘束された。やはり怪我の影響は大きいようである。

「放せえええええ！！？」

「辻、何で逃げるのさ」

「桜咲が来るからだよ！」

「いいじゃねえか別に。茶化さないぜ俺達」

「そういう問題じゃない！」

「勝手に死にかけて部活を休んだからバツが悪いのか？」

「それも少しはあるけどもつと気まずい案件があるんだよ！」

「ん？何よ照れ臭いだけかと思ったらなんかあるわけ？」

中村の言葉に辻は暴れるのを一旦止め頷く。

「約束破ってしまっただよ。そのことを後悔はしてないけど、やはり顔は合わせ辛いんだ」

「約束…?」

「なに、それ?」

「わ、私以外の女に負けたら許さないわよ!先輩!!?つて奴か?」

「気持悪いわ中村。辻、何かは知らんがそういつまでも避け続けていられまい。珍しい馬鹿の気回しだ、腹を決めて謝ってしまえ」

「ぬ……」

辻は唸る。大豪院の言葉は正論であり、単に自分が勝手にビクついているだけなのだ。案外桜咲も気にせず普通に接して来るかも…

『どうか、お願いします』

無いな。

「だから逃げんな、辻!!?」

「ええい、吸血鬼相手にあれだけタンカ切れる癖に何故ここでヘタレる貴様は!!?」

「五月蠅い、放せお前らああああ!!?」

騒ぎの中、病室のドアをノックする音が響いた。

「はくいちよつと待っててくれ、今ラツキースケベイベントを起こす為に辻を適当に脱がすから」

「剣道部の連中じゃ無かったらどうすんだよ、お前」

幸い、この馬鹿な返答を聞いていたのはお目当ての連中だったらしい。

「ええ!!?ちよつと、初っ端から飛ばしすぎじゃあないの中ちゃん!!?」

「だがその意義や良し!!?桜咲、約一分後に突撃だ!ポイントは顔を赤らめながら手で目を押さえ、しかし指の間から相手の大事な所を凝視だぞ!!?」

「先輩方、病院では静かにして下さい」

最後に聞こえてきた声に辻は硬直し、観念したようにがっくりと項垂れる。

「よし、諦めたか、山ちゃん、大豪院！辻を脱がすぞ手伝え!!？」

「……せえ、の!!？」

「ふがっ!!？」

豪徳寺に後ろから羽交い締めになされている辻に指をワキワキさせながら近寄る中村を、山下と大豪院は無言で背後から抱き締め、ツープラトンで中村を脳天からジャーマンスープレックスで叩きつけた。中村は濁った悲鳴を上げ動かなくなる。

「さて、阿呆は片付けた」

「うん、次は桜咲ちゃんのお脇の阿呆共だね」

「そんな訳だからよ辻。邪魔者は潰してやるが逃げんのも無しだ」

「……わかった」

「好、<sup>ハオ</sup>…入れろ」

「うん。…どうぞー」

「つしゃー突撃!!？…あれ、部長脱いで無いじゃゴフツ」

「え!!？なにになにちよっべフツ!!？」

入ってきた三人の内、両脇の二人を大豪院と山下が割と容赦の無い勢いで首筋を手刀で打撃、副部長カップルは仲良く白目を剥いて倒れた。ちなみに辻も刹那も気にした様子は無い。

「……桜咲、暫くだな」

「…部長」

僅か四、五日ぶりではあるが、二人は再会した。

「……お怪我は大丈夫ですか？」

「あ？ああ、傷は塞がったから、後は疲労が抜ければ直ぐ退院できる」

「…そうですか、それはなによりです。こちら、剣道部合同での見舞品です」

「…うん、ありがとう」

傍目にも直ぐに見てわかる程、なんだかギクシャクしている二人だった。

「…どうする、予想以上に雰囲気固いぞ」

「…うん、どうしようか、これ」

「…俺ら一旦出て行った方がいいんじゃないか？」

隅でヒソヒソと話す三人を軽く睨み付けてから、辻は内心で大きな溜息を吐く。

…どうしようか。

色々言いたいことも謝りたいこともあるのだ。それに、自分の予想が正しければ、桜咲は…

「部長」

「ん？」

刹那が沈黙を破り、辻に声をかける。

「大事なお話があります。出来れば二人で話したいのですが、よろしいでしょうか？」

「あ？…あ、ああああ、わかった。屋上にでも行くか」

「お手数をおかけします。…先輩方、申し訳無いのですが…」

「ああ、僕らのことなんて全然気にしないでいいから！」

「そうだそうだ、辻とは好きなかだけ時間かけて話していいぞ！」

「この笨蛋共は気にするな、邪魔はさせん」

豪徳寺達の言葉に刹那は無言で一つ頭を下げ、辻を促す。

「…では部長、ご足労願います」

「…わかった」

刹那について歩き出しながら辻は思う。

…桜咲、今の言い方は多分に誤解を招くぞ。

…馬鹿三人の意識あつたら大惨事だったな。

「行ったね」

「ああ、行ったな」

「…色っぽい話だと思うか？」

豪徳寺の言葉に三人で顔を見合わせ、

「……無いな（ね）」

声を揃えて言った。

「なんだか空気が深刻そうだったしな」

「少なくとも色恋沙汰では無いね」

「まあ、時期からして、エヴァンジェリンとの死闘に関連しているのだろうか…」

うーんと二人で首を捻るが答えは出ない。

「…ま、辻が帰って来てから話してくれるのを期待しようぜ」  
「だね」

「さて、今の内に馬鹿共を縛り付けるとしよう」

馬鹿三人の緊縛中にノックの音が再び響いた。

「え？もう帰って来た？」

「いや、流石に早すぎるし辻ならノックはしねえだろ。客か？」

「…来客の多い日だな」

「まあいいけど。どちら様ですかー？」

「…俺だ、杜崎だ」

その意外な来客に三人は顔を見合わせる。

「…なんで杜崎が来るんだ？」

「さあな、魔法関係か？」

「単に補習のプランニング伝えに来たのかもよ。…この連中このまま  
でいいかな？」

「構わんだろう」

「杜崎なら面子で大体の事情は理解するだろ。入っていいぜー杜崎  
！」

「先生を付けろ、軍艦頭」

ドアを開け、杜崎が入ってくる。が、その後ろからもう一人と一体、  
続く影があった。

「なっ!?？」

「ええっ!?？」

「…貴様」

「養生しているか、武道家共？」

無言で一礼する茶々丸を後ろに控えさせたエヴァンジェリンはそ  
う言い、笑った。

「本当に体は大丈夫ですか部長？」

「大丈夫だって。伊達に鍛えちゃいないよ」

辻と刹那は病院の屋上にやって来た。既に陽が落ちかけており、綺  
麗な夕焼けがシーツのはためく中、佇む二人を照らしていた。

「…部活の方、どうなってる？突然こんな風に休んですまない、迷惑しただろ？」

「いえ、怪我なのですから、仕方ありません。あんな風に騒いでいましたが副部長達は部長をとても心配していたんです。部員への指導も部長がいなのだからとしつかり真面目にやっておられました。ですから、お気になさらず。治療に専念して下さい」

「そうか、囃し立てるのは許さんがそこだけは感謝だな…」

辻は微かに笑い、刹那を見る。刹那も苦笑しつつ、辻を見返して来た。

「…それはそれとして。そろそろ本題、入るか、桜咲」

「…はい」

刹那は頷き、話し始める。

「まず、何よりも先にこれだけは。…本当によくご無事で。よく、生きておいででした」

伶俐な美貌の中にも安堵の表情を微かに浮かべ、刹那は辻を労った。

「…そんな言葉が出てくるって事は、桜咲。お前も…」

「はい。ご想像の通りです」

隠していたことを詫びるかのように、何処か申し訳無さげに刹那は言った。

「私も、魔法関係者です、辻部長」

「あんた、何しに来やがった、吸血鬼女」

ベッドから立ち上がり、豪徳寺が拳を構える。

山下は素早く中村の元に屈んで縄を解き、大豪院が顔面を蹴り上げ叩き起こした。

「痛えっ!??誰だこの野郎、折角いい夢…」

「中村、非常事態」

「あ?…そうかよ」

目覚めて文句を捲し立てようとした中村だが、山下の真剣な声に、刹那の戸惑いの後、腕を回しながら警戒態勢に入る。

それらの対応を見てエヴァンジェリンは笑う。

「日和つていなくて何よりだよ。一度負けた位で尻尾を丸められては興醒めだったのではな」

負けの言葉に鋭くなる三人の視線にますます愉快そうにエヴァンジェリンが笑みを深めるが…

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。不要な挑発は止める。敵対行動と見なすぞ」

杜崎の鋭い視線にエヴァンジェリンは肩を竦め、

「お堅いことだ。まあいい、遊びに来た訳でも無いからな」

「…てめえ、モリー。なんでこのババア連れて来やがった」

エヴァンジェリンの顔を目にした中村が目を細め、杜崎に尋ねる。

「好き好んで連れて来たわけではない。学園長の元へ連れて行く仕事を任ざられているが、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが先に病院へ用件があると言うのでな。監視を兼ねて同行したのだ。ここに寄ったのはついであらう。勝手な話だが、この女はまだ立場上は学園防衛の一職員なのでな」

不本意そうに鼻を鳴らして言う杜崎にエヴァンジェリンは愉快そうに、

「どいつもこいつも鼻息が荒くて結構なことだ。なに、心配するなよ武道家共、物騒な真似をしに来たのでは無い。少し聞きたいことがあつてな」

「…聞きたいこと？」

「一体なんだよ？」

警戒しながらも尋ね返す中村達にエヴァンジェリンは杜崎に対し親指を指し向け、質問する。

「お前達、私と鬭り合おうと決める前にこいつらに頼ろうとは思わなかったのか？」

「やっぱりか…」

辻は納得する。ネギに会うのを止められていたのは、それが理由か、と。

「なあ桜咲、一つ聞いていいか？」

「…はい、何なりと」

刹那は表情を真面目なものに変え、承諾した。

「ちよつとお前のプライバシーに関わる内容で恐縮なんだけどさ…」

「?…はい」

僅かに訝しげな様子の刹那に、

「…お前が近衛ちゃんと仲良く出来ないのはその所為か?」

辻は尋ねる。見ている先で、明らかに刹那が顔を強張らせ、体を固くするのを見てとった。

…ああ、やっぱり。

…近衛ちゃんをどうでもいいと思ってる訳じゃ無いんだな、桜咲。

「…なんで、そんなことを聞くんですか?」

「気になるからさ、そして手前勝手ながら心配だからだ。言うまでも無いことだろうけど、近衛ちゃんはお前と仲良くしたいらしい。お前がもし魔法だのなんだので近衛ちゃんと話せないなら」

「辻部長には関係ありません」

辻を遮り刹那が告げる。心無しかいつもより硬く、冷たい口調で。

「…そうだな、俺は確かに無関係の部外者だ。不躰な問い方をした、すまない」

辻はそれを聞き、僅かに辛そうに顔を顰めるが、不作法を謝り、頭を下げる。

「あ……………」

それを見て刹那は一瞬、後悔するように顔を歪めるが、無理矢理平静な顔に戻り言葉を紡ぐ。

「…失礼しました。ですが、近衛さんとの事は、私が望んでこうしています。…口出しは無用に願います」

それを聞いて辻は心の中で反論する。

…違うだろ、桜咲。

…少なくともお前、望んでそうしていかないよ。

だが、辻はそれを言葉で表しはしない。今言っても、目の前の少女には届かないだろうと辻は感じていた。

「俺達があんたに挑むより魔法関係者に相談して対応して貰った方が良かった、と?」



「端的に言えばな。貴様らは少々短絡に過ぎるが馬鹿では無い。坊やから話を聞いていたなら結局そうする方が利口とは思わなかったか？私に挑んだ時も、私が黒だとわかったなら上に掛け合った方が確実に片が付くと考えなかったか？お前達は所詮素人だ。坊やから聞いた話だけで私に対して全てを上手くやるつもりだったなら、それは傲慢だし、無責任な対応ではないか？…なぜお前らは専門家がいながら一切それに頼ろうとしなかった」

エヴァンジェリンの言葉に中村達は黙り込む。エヴァンジェリンも答えを急かすようなことはせず、黙して待つ。杜崎は先程からむつつりと言葉を発しないでいた。

そしてまず、山下が口を開いた。

「貴女の言う通り、僕達は素人だ。だから最初の方は、ネギ君の言う上の人にかけてあつて対応して貰おうと思っていたよ、貴女の言うようにね」

ただ、と山下は続ける。

「ネギ君から事情を聞くにつれてどうにも違和感を感じたんだ。貴女はここに封印されて学園の警備をやってるらしいけど元々は賞金首の犯罪者だ。正義の為、正しいことの為に魔法を使うなんて題目を掲げてるこの人達とは相容れないだろう。そんな貴女が例え十五年経っているからといって学園の生徒の血を吸い、挙句の果てに英雄の息子なんていう大層な肩書きのネギ君を襲う、なんて派手な動きをして誰にも見咎められずに済むものかな？」

「また同様に」

大豪院が後を引き継いだ。

「先程も言った通りネギは生まれもそうだが本人曰く最年少で魔法学校を卒業、十歳にして魔法使い見習いとしてここで教員として働いている。そんな優秀で経歴から何から目立つ少年だ。この関係者からは放任されていると考えるより、期待や注目を集めていると考える方が自然ではないか？にも関わらず明らかに様子のおかしいネギに、魔法関係者が様子を伺うことすら誰一人行わなかったということが偶然であり得るか？」

「俺には難しいことはわからねえが」

豪徳寺が語る。

「ネギは絡繰の嬢ちゃんに襲撃までしたんだぜ？そこまでやって魔法関係者は誰一人事態を察知してなかったのか？…諸々考えて、俺達はネギ君に一件をまかされてから、魔法関係者達が何らかの事情であったの行いを黙認してるんじゃないかねえかと考えた」

そこで言葉を切って豪徳寺は杜崎を見やる。

「どうなんだよ、杜崎。あんたらはこの吸血鬼の行動もネギの様子と行いにも、全く気付いてなかったのか？」

問いかけられた杜崎は、何も言わない。ただ黙って中村達を見返している。その瞳からは、何も何うことは出来なかった。

「…何も言わないか、それとも言えねえのか、杜崎よ」

中村が目を細め尋ねるが杜崎は答ええない。エヴァンジェリンがくつくつと笑い、中村を制する。

「その位にしておいてやれ、空手屋。大人には止むに止まれぬ事情というものが往々にして有るものだ」

「てめえの言葉でなんかあんのが確定じゃねーか」

エヴァンジェリンを睨み付けながら中村が言う。

「とにかく俺らあなんか臭えと思って連中がネギをあえて放つとすると仮定したんだわ。理由は知らねえ、検討もつかねえよ。ただ、どんな理由があるにしろ、苦しんでるガキを黙って見てる連中なんざ口くなく奴らじゃねえと思つてよ。そんなんに頼つても役には立たねえから俺らでやった。そんだけだ」

中村は杜崎を見る。杜崎は相変わらず何も言つては来ないが、瞳の奥には何か揺れるものがあるように中村は感じた。それでも中村は告げる。

「あんたは厳しくて俺らからすりやめんどくせーが同時にちゃんと教師やってんだなと思つてた。でもあんたらが本当にネギの状況黙って見てたなら、ガツカリだぜ、杜崎」

「勿論、証拠なんてありませんし、仮にそうだったとしてもこんなのは事情も知らないガキが正義漢ぶつて偉そうに糾弾してるだけです。」

僕達に貴方達に何かを否定する資格なんて無いんでしよう」

「それでも俺達はどんな理由があろうとそんなことは認められない。だから魔法関係者には頼らないと決めた」

「んな格好悪い大人には頼らねえ、が俺らの結論だ。何か俺達に言うことはあるかよ杜崎。説教でも反論でも何でも聞かぜ」

そこで杜崎はようやく口を開く。

「……ノーコメント、だ。俺に言えることは何も無い」

「おい……」

「ただ」

と杜崎は続ける。

「仮にお前達の言ったことが事実なら、お前達は正しいだろう」

「…杜崎……」

「……」

中村はかける言葉が見つからなかった。他の三人も同様で沈黙する。

その時パチパチと乾いた音が病室に響く。エヴァンジェリンが拍手をしながら中村達を笑って見据えていた。

「ははは何とも若いな、そして真っ直ぐだ。何やらむず痒さを覚えるような好漢っぷりじゃないか、お前達」

「…馬鹿にしてんのか、ババア？」

「いや、随分と真面にモノを考えていると感心してるのさ。馬鹿扱いは返上せねばならんかもなあ。とにかく、満足のいく答えだった。礼を言うよ」

「…ならばもういいだろう、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。学園長の元まで同行して貰うぞ」

「そーだそーだ用事が済んだならとっとと失せやがれてめえら。言っとくが杜崎。俺らは納得してねえぞ。後できつちり話つけてやつからな」

「…好きにしろ」

「ではマスター……」

「まあ待て、そう邪険にするな、私の話は終わっていない」

移動しようとする杜崎と茶々丸を制し、エヴァンジェリンは再び中村達に向き直る。

「まだなんかあんのかよババア」

「…言つとくが俺らはてめえとも馴れ合いはしねえぞ」

「つい先日殺しあつたばかりだと忘れているのか？」

「まあ、喧嘩腰も止むを得ないというのは理解してよ、マクダウエル女史」

「やれやれ、嫌われたものだな、まあいい、直ぐに終わる話だよ。…ここにいらない剣道屋はどうした？」

険悪な中村達に怯んだ様子も無く、エヴァンジェリンは尋ねる。

「辻？」

「ハツそうだ、辻と桜咲は？？俺が寝てる間にどこ行つたあいつら！！

？ま、まさか既に二人は結ばれ…」

「空気を読め馬鹿。奴なら青春真っ盛りで席を外している」

「辻がどうかしたかい？マクダウエル女史？」

「そうか…まあある意味では丁度いい」

エヴァンジェリンは先程まで浮かべていた笑みを消し中村達に問うた。

「あいつはなんだ？」

辻と桜咲は気まずい沈黙を迎えていた。木乃香の件で否定をしながら刹那は黙して何も語らずにいた。

…空気が重い。

何か会話の取っ掛かりは無いかと辻は考え、やがて気になっていたことを思い出し、刹那に問うた。

「桜咲」

「っはい、なんででしょう？」

いつの間にか俯いていた刹那はやや慌てて顔を上げ、辻に応じる。

「ネギ君に関わるな、って、前俺に忠告してくれたよな。桜咲は」

「…はい」

「あれはネギ君がちよつと危なっかしくて、近くにいたら魔法の存在がバレてしまうかも知れないから言つたのか？」

刹那が魔法関係者だと知った辻は、それならばあの不思議な忠告に納得がいくと思った。現にネギは襲われている状況にあつたとはいえ、白昼堂々魔法を使い、中村達に魔法がバレた。ネギの幼さゆえにそう言ったのかと辻は考えたのだ。

しかし、刹那はゆっくりと首を振り、言った。

「確かにそれも理由の一つでした。ですが私が部長にああまで強引に接触を断とうとしたのは、偉そうな言い方になりますが、部長の為に」

「…俺の？」

「はい。私はネギ先生の状況を把握していました。それで何故、部長と先輩方のように行動を起こさなかったのかは、言えません。申し訳ありませんが私は語る術を持ちません。ただ、部長はネギ先生の事情を知ったら確実に助けようとするだろうと、そう思いました。…エヴァンジェリンさんは私など及びもつかないような大魔法使いです。…部長の命が、危険だと、考えたのです。…それであんな子どもを見捨てたと言うのですから、私に幻滅したでしょう、部長？」

刹那は自嘲の笑みを浮かべ、言った。

「…事情があつたのは何と無くわかるよ。お前がネギ君の状況を黙認するのが本位じゃ無かつたこと位、今のお前を見てればわかる。…今の俺には何も言えないよ。事情を知らない俺には、お前を糾弾する資格は無い。…それでも俺の心配をしてくれた事には、礼を言う。ただ、必ず助けに行く、なんて、俺を買い被りすぎだけどな」

その言葉に刹那は首を振り、辻に告げる。

「…貴方こそ私を買い被りすぎです。私はそんな立派な人間ではありません。そして貴方は自分を過小評価し過ぎです。…私などにも気を使える貴方なら、ネギ先生のような存在を放っておかないと、私は確信出来たんです。…貴方は、優しい人だから」

その言葉に辻は目を見開き、刹那を見るが、やがて力無く視線を外し、ぼんやりと夕陽に視線を合わせた。

「…桜咲、お前は勘違いしてる」

「……………」

無言で疑問を発する刹那に視線を向けないまま、辻は言った。

「俺は優しくなんて無い」

「奴は色々とおかしい。全開で無かったとはいえ、この私の障壁を突破し、あまつさえ私の頭を割った。一太刀でだ。更に私は奴の斬撃が認識出来なかった。…私に油断はあったろう。それに奴は瞬動の入りが異様に滑らかでほぼ私にそれを悟らせなかった。しかしそれだけで戦闘状態の私が一刀両断などありえんのだよ。そこまで迂闊なら私は過去の何処かで確実に死んで今ここには居ない。…あいつのあれは、なんだ？」

その言葉に中村達は顔を見合わせ、やがて中村が語る。

「詳しくは言わねえよ。俺とあんたはどっちかってーとまだ敵みもないもんだ。ただ言えんのは、あいつの本分剣道じゃねえからな」

その言葉にエヴァンジェリンは目を細め、

「やはりか。…歩法かあるいは縮地の応用か…」

「さあな、詳しくは俺らもわかんね。あいつ、麻帆良に来る前のこと、俺らに言わねえもん。ただ辻は、まあ言っちゃえば俺らの中で実は一番、どっかまともじゃねえんだよ」

「ほう…」

何処か楽しげにエヴァンジェリンは相槌を打つ。

「猫を被っているのか、あのお人好しは？」

「勘違いすんな、被った猫でてめえみたいなバケモン相手に命賭けられるか。…あいつがいい奴なのは本当だよ。ちよつとヘタレだが、生真面目で、面倒見が良くて、優しい。いい男だぜ、それは本当だ」

ただな、と中村は頭を掻き、

「持つて産まれたもんなのかね、わかんねえけど、多分その所為で、あいつは何処か、まともじゃ無いんだ」

「…ふん、まあよくわからん話だがあいつが只のお人好しで無いというのは賛成だ」

…何故なら奴は…

「奴が私をぶった斬った時のあいつの顔を覚えているよ」

そうだ、俺が優しい訳は無い。

…何故なら俺は、あの時。

「奴は二つになつた私を見て笑つていたからな」  
きつと俺は笑つていたろうから

## 閑話 舞台裏の思惑 少女の決意

広い室内の中央で老人と少女が向かい合っていた。壁の側には性別年齢様々な男女が整列して控えている。

老人の名は近衛<sup>このえ</sup> 近右衛門<sup>このえもん</sup>。麻帆良学園の学園長であると同時に関東魔法協会の理事長を務める、日本最大の魔法組織のトップである。

少女の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。齢六百の真祖の吸血鬼にして、かつて六百万\$の賞金がかけられていた伝説的な悪の魔法使いである。

経歴、種族、何もかもが違う二人は

しかし、一見親しげに会話を重ねていた。

「フォッフオッフオツ、エヴァンジェリンよ、辻君達にやられた後遺症でまだ身体は万全ではないのじゃろう。こうして出て来てよかったのかの？」

「わざわざ人を呼びつけておいてなんて言い草だジジイ。わかっているなら初めから言うな、不調も不調さ。だが死にかけた小僧共がピンピンしているというのに勝った側の私が何時迄も別荘で唸っているのか」

辻達バカレンジジャーとエヴァンジェリンの死闘は、一見エヴァンジェリン側になんのダメージも残していないように見えたが実際は違った。

そもそもエヴァンジェリンが辻達と死闘を繰り広げる前にかかっていた風邪にしても、別荘内に入ることで封印が一部解け、吸血鬼の身体と魔力を取り戻せるなら、体調を悪くする度に別荘内に入り、吸血鬼の治癒力で全快してからまた現実空間に戻ればいいだけの話である。

実際はそう単純な話では無く、別荘内で封印が解け一時的に体が復調しようと、再び封印状態になれば前の状態に体は引きずられる。それ所か、もし別荘内で何か体に負担がかかれば、仮にその場で回復しようと、別荘を出た時にひ弱な体になった瞬間、一気にその負担の後



遺症が現れる可能性がある。

辻達によつて負わされた負傷の数々などは正にこれに当てはまり、死闘が終わつた直後、エヴァンジェリンはそのまま現実世界に帰還すれば、その瞬間に反動で死亡していた可能性すらあつた。だからこそわざわざ別荘内にネギを呼んで取引をしたのだ。

そこから現実世界で一日強、別荘内時間にして一ヶ月弱の療養を経て、ようやく現実世界でもエヴァンジェリンは活動が出来る様になつた。

それでもまだ完調では無く、重度の風邪のような疲労感が尾を引いている。

つまりエヴァンジェリンにとつても、先の死闘はそれだけのダメージだつたと言うことだ。辛勝と言つたエヴァンジェリンの言葉もあながち言い過ぎでは無いだろう。

「フム、勝者の矜持というところかのう。…それにしても、辻君達がそんなに強かつたとは…。全盛期状態で無く、五人掛かりだつたとしても、エヴァンジェリンをあと一步の所まで追い詰めるとは、いやはや驚いたわい」

「フン、それはこつちの台詞だ。どいつもこいつも戦闘力だけで言えば魔法生徒所か下手をすれば魔法教師クラス、その上魔法のまの字も知らん癖に妙に勘と動きと連携が良く、私の本気の殺気を受けても向かつてくると来た。一体何の冗談だあの連中は?」

やつていられんとエヴァンジェリンがソファにもたれ掛かる。辻達は、場所を選べば現時点で充分裏の世界でやっていけるだけの戦力をその身に保有している。只の学生がこの能力を持っているのは、言うまでも無く異常である。

「杜崎君、君は彼らの担任で、広域指導員としてよく彼らを指導しているそうじゃの。君から見て、彼らはどうかね?」

近右衛門は壁に控える一人、杜崎 義剛に問いを投げる。杜崎は僅かに目を細め、淡々と答える。

「…連中の行動の問題性に関してはこの際無視して話しますが、実力に関してはかなりのもんです。一対一ならほぼ確実に私が勝ちます

が、二人掛かりなら劣勢、三人いればあちらが勝ちます。五人掛かりだったなら勝負にもならないでしょう。日頃私が奴らを鎮圧出来ているのは、あくまであいづらが主に逃げるだけなものと、武人としての矜恃らしく、こちらに

対して攻撃して来る時は一人ずつしか掛かって来ないからです」

杜崎の言葉に部屋の中にいる者達がざわめく。杜崎はここにいる魔法関係者の中でもかなりの実力者だ。その杜崎が、例えば本気でも学生数人を倒せない、という事実がそれだけ彼、彼女らにとって衝撃だった。

そんな中、動揺を受けていない一人に近右衛門は更に問いかける。

「刹那君、君はあの五人の内の一人、辻はじめ一君と交流があり、所属している部活動では週に幾度も試合を重ねていると聞く。君から見ても、彼はどうかね？」

問い掛けられた少女――桜咲 刹那は一瞬身を固くするが、静かに、しかし良く通る声で話し始める。

「…私が部長…辻はじめ一先輩と行っているのは気を用いない普通の試合です。あまり参考にはならないかと思われませんが…」

「フオッフオツ、構わんよ。そもそも彼らは危険人物という訳では無い。少しでも目安になればよいと思つてのう」

「…わかりました。辻はじめ一先輩は、試合においては堅実な防御で攻めを捌き、隙を見つけると思い切りのいい打ち込みを行います。攻防のバランスが良い方なのだと思います。決して無理をしない、基本的に忠実な洗練された剣を振るう方です」

「フム、気を用いぬとはいえ、刹那君から勝利を納めることもあると聞く。相当の腕前、ということかの？」

「…はい、少なくとも剣の腕前は。ですが、あくまで剣道での話です。実戦において同じ腕前が発揮できるとは思えません。一般人として見た場合、かなりの実力者と評価できるかと」

その言葉に近右衛門はフームと軽く腕組みをして唸り、

「数人で杜崎君を圧倒できる実力者を一般人の枠に収めて良いものかのお」

「杜崎先生とて、侵入者を相手取るように彼の先輩方に相對してはいないでしょう。あくまで魔法を知らない素人なのですから、過大評価はどちらの為にもならないかと」

「ムウ……」

思案するように近右衛門が顎に手を当て、唸る。その時、室内に押し殺したような笑い声が響く。

声の主はエヴァンジェリンだった。エヴァンジェリンはくつくつと笑いながら刹那に顔を向ける。

「桜咲 刹那、随分とあの小僧共に辛い評価をつけるな。この私を相手に奮闘し、あわや勝利をもぎ取りかけた奴らだぞ？ 貴様が最初に言った通り、日常の鍛錬試合や教師との小競り合いなど基準になるまい」

言葉を投げかけられた刹那は、若干目を鋭くしてエヴァンジェリンを見返し、

「…油断があった。と先程ご自分で御認めになったと記憶していますか…？」

「フン、なら貴様は油断している私に一撃入れられたとしてその後私に勝てるかと断言できるか桜咲刹那？ 個々の戦力は貴様やそのゴツいのに及ばんだろうが、あの馬鹿共は一揃いした状態で闘り合えば立派に高位魔法使いクラスだ。本気で死合をしたこともない貴様が奴らの実力を判断できる？」

「…それは……」

刹那は言葉に詰まる。あくまで刹那が手合わせしたことがあるのは辻一人、それもお互いに気を使った勝負は数回しか行っていない。それにしても、あくまで試合の範疇でしかないものだ、辻の本気がどれほどのものなのかは刹那にもわからない。

しかし刹那には、エヴァンジェリンが下手な冗談や無意味な誇張をするような人柄で無いと理解していても信じられなかった。中村達四人について刹那は殆ど何も知らない、麻帆良で腕の立つ一般人の問題児という認識だ。辻がそれと同等だったとして、どうしてそれでエヴァンジェリンをたつたの五人で打倒できるだろう。

…あの人のいい、優しい先輩が……

殺し合いをしたという事実がまず刹那には信じられなかった。木乃香と離れている現状の桜咲 刹那にとって、辻はじめ一という存在は、日常の象徴のような、陽だまりの如く暖かい存在だったのだ。

黙り込む刹那を見てエヴァンジェリンが笑う。

「随分と必死じゃないか、桜咲 刹那。クラスでも貴様と剣道屋は騒がれていたが余程あのお人好しが大事らしい。苦勞している女は包容力のある男に弱いものだなあ？」

「っ……………」

刹那はエヴァンジェリンを睨み付けるが気にした様子はない。

「エヴァンジェリン、あまり刹那君をからかわんでくれ。刹那君も、彼らの評価は全体の意見を聞いてから決めるとしよう。あまり先走らんようにのう？」

「フン」

「…申し訳ありません」

エヴァンジェリンは鼻で笑い、刹那は静かに頭を下げる。

近右衛門は頷き、全体に告げる。

「予定とは違った結果になったが、麻帆良の学園長としては弱者を守らんと立ち上がった辻君達のような若者がこの麻帆良で育っているのを喜ばしく思うわい。では、今後についてももう少し話を煮詰めようかのう」

「クククツしかし傑作だったな、あの武道家共を警備員としてスカウトしようとしてジジイが言った時の魔法使い共の狼狽えっぷりは」

「お主も趣味が悪いのう…流石にまだ時期尚早じゃったかのう」

会議を終え、学園長室にはエヴァンジェリンと近右衛門だけが残っている。

「無駄なプライドの高さと選民意識と正義感の強い正義の魔法使いからすれば素人共が自分達と同じ土俵に立つなど認められんのだろうさ。力に貴賤は無いというのにあいつらは何もわかつたらん」

エヴァンジェリンは詰まらなそうに語る。

「エヴァンジェリンよ、彼等は一般人を危険に立ち寄せぬ為に自分

達で事を片付けようとする意識が高いだけじゃ。あまり悪い見方をせんでやってほしいのう」

近右衛門の言葉を鼻で笑い、エヴァンジェリンは告げる。

「ハツよく言うわ狸爺いが。私の封印が大停電で解けても黙って見ているつもりだった連中がよくも声高に正義を語れるものだ。それとも坊やは半人前とはいえ魔法使いだから危険な目に遭わせるのは問題無いとでも言うのか？」

エヴァンジェリンの言葉に近右衛門は一旦口を閉じ、再び言葉を紡ぐ。

「…彼らの中でこの件を納得しているのはほんの一握りじゃ。内心皆、忸怩たる思いのはずじゃわい。全ては命令している儂に責任がある」

「フン、やりたくてやっている訳じゃ無ければ、命令されていれば、許されるとも言うのか？大体所詮貴様も本国の傀儡だろうが？」

「…英雄の育成は今の世界にとって急務じゃ。儂は納得して事を行っておる」

近右衛門の言葉にエヴァンジェリンは溜息を吐き、

「まあいいさ、所詮私も自分の為に話に乗った時点で貴様らを糾弾する資格など無いからな」

エヴァンジェリンは席を立ち、扉に歩み始める。

ふと、エヴァンジェリンは足を止め、近右衛門を振り返り、告げた。

「桜咲 刹那やあのゴリラは詰まらん矜持だけであいつらが裏の世界に飛び込むのを止めたのでは無いのだろうがな、あいつらの気持ちも貴様らを見ているとなんとなくわからんでも無いよ。…あの小僧共からすれば、貴様らは格好悪い大人だそうだ」

最もそれは私もだろうがな、と言い捨てエヴァンジェリンは学園長室を後にした。

残された学園長は文机に肘をつき、溜息を吐く。

「……若者の言葉はいつでも耳に痛いものう」

近右衛門はポツリとそう漏らした。

「おらああああモリーニヨ!!? 捕まえたぞゴラア!!?」

騒々しい声に杜崎が振り返るとそこにはバカレンジャーが勢揃いしていた。

「…貴様らか、退院して早々喧しいことだ」

「なくにスカしてやがんだこのゴリラ教師が、昨日の今日だ、忘れたとは言わせねえぞ。きつちりネギの件について洗いざらい吐いて貰おうかあ!!?」

通学路の真ん中、下校時刻から大分時間は経つがまだ人通りは多い。道ゆくせいと達はまたこの面子の騒動かとあるものは避け、あるものは今日はどちらが勝つか、いや逃げ切るかとトトカルチョを始める。

「…前にも言った。貴様らに話せることは何も無い」

「てめえ、その答えで俺らが納得すつと」

「待って中村。そんな喧嘩腰で聞いてももっさんは話してくれないよ」

いきり立つ中村を山下が宥める。

「杜崎教師、話せないと言うのならこれだけは聞かせて頂きたい。ネギが危険な目に遭ったとして、貴方達はそれが致命的な事態に発展しないよう万全の用意があつたのか?」

「あるいは俺達がやったことよりも結果的によりネギに害が及ばなくなるよう、取り計らうつもりだったのか? それだったら俺らは、納得は出来ねえが、あんたを罵倒する資格はひとまず無え。大人しく矛を収めるぜ」

大豪院と豪徳寺の言葉に杜崎は溜息を吐き、不機嫌そうに言う。

「俺達は最終的にネギ・スプリングフィールドの為になるよう活動している」

そう言い捨て、杜崎は背を向け歩き始める。

「おいコラ…」

「待って下さい、杜崎先生、答えになっていない」

中村を制しての辻の言葉に杜崎は一旦足を止め、辻達に向けて言い放つ。

「今回に至っては偉そうに説教などとても出来んが、こちらの道の専門家として言わせて貰おう。貴様らの行動は余りに短絡的で自己中心的だ。今回はいい方向に進んだが、あの女がもつと狡く、巧妙に立ち回っていればお前達の捨て身はなんの意味も無い所か少年をより追い詰める結果に終わっていた。自分に関係した問題で人が死んであの少年が気にしないとも思うのか？自分達が損をするなら何をしてもいいのでは無い。相手の気持ちを考えろ。お前達がやったのは素人の考え無しの暴走に過ぎん」

「ぬグツ……………」

「……………」

中村は青筋を立てながらも悔しげに唸り、他の四人も反論の言葉が見つからず、沈黙する。

「しかし」

杜崎は振り返り、真つ直ぐに辻達を見据え、言った。

「教師として言おう、…お前達、よくやった」

「ゴリラ…」

「杜崎先生と呼べ、馬鹿者。…話は終わりだ」

杜崎は足早に歩き去った。

「…先生、か…」

歩きながら杜崎は吐き捨てる。

「今のお前にそう呼ばれる資格は無いだろうに」

舌打ちをして杜崎は職員室へと歩を進める。小テストの採点をしなければならぬ。

「…なんか、もっさんのあんな顔初めて見たね…」

「ついでに言えば褒められたのも初めてだな」

複雑な表情で呟く山下に豪徳寺が苦笑しながら言う。

「なーんか納得いかねえな畜生」

「話せる段階に無いと言うことだ、機を待つしかあるまい」

唸る中村に大豪院が溜息と共に告げる。

「…俺達が未熟者って言うのも言う通りだ。少なくとも杜崎先生は、まだ教師ってことだよ」

辻は頷き、皆に告げる。先程の説教は身に沁みだ。辻達が結果死んでしまえば、何より自分を責めるのはネギだろう。現に、大怪我を自分達が負ったことで、ネギは激しく自分を責めていた。

…独りよがりだったなあ、俺達。

苦笑して辻は皆に言った。

「今日の所はこの位にしておこう。俺はもう行くよ。今日こそ部活に顔を出さなきゃ」

「ま、ご無沙汰だもんな、うっし、俺もたまには顔出すかい」

「じゃ、解散だな。俺も鈍ってるし、鍛え直すか」

「皆、無理はしないでよ？病み上がりなんだから」

「お前を含めて自らの体のこと位わかっているさ。では、また後でなお前達」

バカレンジャーは各々告げ、解散した。

辻は竹刀袋片手に剣道場への道を急ぐ。

「桜咲が言うにはちゃんと指導はあいつらしてたって言うけど、どうにも不安だ。部長としてこれ以上無責任な真似は…」

「部長」

突然脇からかけられた声に辻はビクリと身を竦ませる。

声のした方を見るとそこには刹那がこちらに向かって歩いてくる所だった。

「…桜咲か、驚いた。お前も道場に行く所か？」

「…はい、ですがその前に部長に一つ、お願いがあります。話を聞いて頂けないでしょうか」

「…ん？」

たった数日前のことだというのに随分懐かしく感じられるやりとりに非常によく似たパターンに辻は固まる。

「…桜咲、俺はまた何かやらかしたろうか？」

恐る恐る尋ねる辻に刹那は首を振り、

「いえ、今回も私の純粋な我儘です。部長にとって非常に迷惑な話なのですが…」



「わかった桜咲、皆まで言うな」

辻は刹那の言葉を遮り、頷く。

「よくわからんが、お前はしたいことがあって、それに俺が役立てるか  
もしれないんだろ？わかった、その頼み、受け賜るよ」

刹那は目を見開いた後、苦笑するように口端を歪め、

「…よろしいのですか、話を聞きませずに引き受けて。私は何か、とん  
でもないことを頼みこもうとしているのかもしれないよ？」

「お前に限って悪いことしようなんてあり得ないからな。俺は後悔し  
ていないとはいえ、お前との約束を一度破ってしまったし。だから桜  
咲の頼み事なんて貴重な申し出に俺が断るなんてあり得んよ。日頃  
から世話になっているんだし、なんでも言ってくれ。…あ、と言って  
も俺ができる範囲のことだぞ？」

「…本当に貴方という人は…」

何故か刹那は辛そうに俯き、

「…わかりました、ありがとうございます、辻部長。私などには身に余  
る信頼を預けて下さり、光栄です。それを裏切るような形になること  
は心苦しいですが、そんな貴方だからこそ、私はやります」

刹那は頷き、やや距離を取る。

対して辻は、なんだか物騒な台詞に顔を引きつらせ、

「…な、なあ桜咲。それで頼み事ってのは…」

「辻部長」

辻の目を見て刹那はきつぱりと言った。

「私と本気で闘って下さい」

「……………why?……………」

辻はピキリと固まった。

## 二章 古き都に咲く鋭き一輪の花 1話 真劍勝負 信用と信頼の差

麻帆良学園男子高等部、時は昼休み、購買へ走る者、弁当を広げ友人と談笑する者と、教室内は賑やかな空気で満たされている。

そんな中、辻 はしめ 一は端的に言って死んでいた。

「…おい、何があつたのよ、一ちゃんはしめは？」

中村が余りにも空気の重い辻に引きつつ、山下に尋ねる。山下は困ったように笑いながら答えた。

「なんでも昨日桜咲ちゃんと試合したらしいよ」

「なんだよ、何時ものことじゃねえか」

横合いから豪徳寺が口を挟む。

「…それで負けて落ち込んでいるのか？あいつは」

大豪院の言葉に首を振り、山下は三人に告げる。

「僕も朝方に力尽きてる辻からちよつと聞いただけだから詳しくはわからないんだけど、なんでも桜咲ちゃんの方から気を使った真劍勝負をしようって言われて、辻はそれを受けたらしいんだ」

「なにい…？」

中村が怪訝な声と共に首を傾げる。他の二人も同様だ。

桜咲 刹那という少女は口数が少なく、どちらかと言うと社交的な人間ではない。故に辻を除くバカレンジャーは殆ど刹那と話したことは無いが、時折辻から出る刹那の話からわかる人柄は生真面目、律義、礼儀正しいなどどれも悪いものではなく、おおよそ真面な人間のもそれだ。

「大豪院の嫁のバカイエローならわかるが桜咲がなんでんな真似を…」

「誰が誰の嫁だ？また宙を舞いたいとか馬鹿」

「止める止める飯時だ。しかし確かに妙な話だぜ。それで叩きのめされて落ち込んでるのか辻は」

豪徳寺の言葉に山下は難しい表情になり、それがねー、と前置きし

て言う。

「…なんか、勝っちゃったらしいんだよね、辻」

「「…はあっ？」」

「…無様だな……」

刹那はポツリと自嘲の呟きを洩らす。

昨日の勝負において辻は最初ゴネた。剣の腕前はまだ桜咲が上だ、後遺症の残る怪我でも残ったらどうすると、なんとか勝負を止めさせようとする辻に刹那ははつきりと言った。

「部長はエヴァンジェリンさんに致命の一撃を見舞ったとお聞きしています。あの闇の福音に不意を討ったとはいえそのようなことができるなら貴方は本気の私と同格以上、ということになります」

動きを止め、聞いてたのか、と呟く辻に刹那は頷く。

「部長、詳しいことは申し上げられませんが、貴方と、他の先輩方五人に今後、裏の世界に関わるよう打診があるかもしれないかもしれません」

裏の世界？と問う辻に刹那は肯定し、話を続ける。

「言うまでも無く危険な話です。命が獲られても文句の言えない、殺伐とした世界に首を突っ込むことになる。私は、部長にそのような目に遭って欲しくはありません」

だからそのような提案をされた場合は、断つて下さい、と刹那は辻に願い出た。それに対して、辻は申し訳なさそうに笑いながらも、言ったのだ。

「ごめん、桜咲。この前から色々心配してくれて本当に感謝してる。でもそれは約束出来ない。裏の世界っていうのは、ネギ君がこれから関わるかもしれないんだろ？俺も、多分あいつらも。…あの子が危ない目に遭うっていうんなら、きつと今度も関わろうとする。もう一回、不甲斐ない出来ながらも、助けてしまったんだ。素人のままでいられないなら、きつと俺は、俺たちはその申し出を受ける。だから桜咲、そのお願いは聞けないよ。…ごめん」

…そう言ったんだよな……

辻は全身ズキズキと痛む筋肉痛と断裂の痛み小さく呻きながら

も先日の一事件を思い起こす。

…そうしたら桜咲は……

「そうですか」

刹那は頷いた。済まないな、と謝ってくる辻に刹那は決心する。

…やはり、この人はこういう人だ。

優しすぎるのだ、辻 はじめ 一という男は。あつて間も無い少年の為に命を賭け、部活の後輩の為に、殆ど話したことも無いような少女に全力で協力する。

…おかげでお嬢様がまた話しかけてくるようになってしまったので、その点ではお恨み申し上げますが、辻部長。

ともかく話しをしただけで辻が止まらないのは刹那にはわかっていた。だからこそ、刹那は無理やりにも辻を止めるのだ。

「…ならば我儘を通させて頂きます」

刹那が印を構え、何事かを呟くと、周囲の空気が変わる。

「結界を張らせて頂きました。これで人は寄り付きませんし、周囲に私達の様子も洩れません」

結界つて、お前…と困惑したように刹那を見る辻に、

「勝負です、部長。私が勝ったら部長には今後裏の世界に関わらずに生きて頂きます。ご友人の先輩方が裏の世界に入ると言ってもです。ネギ先生のことは私も最大限助ける努力をすることを誓います。…貴方は裏に向いていない。それでも押し通すと言うなら、まずは私を倒していつて貰います」

…無茶苦茶だよな……

辻は溜息をつく。桜咲は辻が何を言っても応じなかった。あまつさえ、自分が負けたら部長の言うことをなんでも聞きましょう、などと宣ったのだ。

…女の子がなんでも言うことを聞くなんて言っちゃ駄目だぞ桜咲。尚も洩る辻に刹那は木刀を放り投げ、自らも木刀を構えた。飛んできた木刀を受け取りながらも、やはり構えようとはしない辻に、刹那は襲いかかって来たのだ。

「構えないならそのまま倒させて貰います!!?」

刹那は瞬動で辻の左後方に移動し、首筋を狙い打ち込む。辻は反射的に身を屈めながら前方へ飛び、素早く振り返ってようやく戸惑いながらも木刀を構えた。

…いい反応です。

余程普段から実戦に近い稽古を重ねなければ条件反射で体は動かない。辻が友人達とそれだけ厳しい稽古を積んでいるということだ。

…しかしこの程度出来るのは、初めからわかっていきます！

刹那は尚も打ち掛かる。全てが気の籠った本気の斬撃だ。辻は二撃目で木刀を弾き飛ばされそうになってから、全身を気で強化し、へし折られないよう木刀も気で強化する。だが、どちらも刹那から言わせればまだ甘い。

…これでエヴァンジェリンさんを倒したというのですか？……

確かに辻は防戦一方ながらも刹那のほぼ本気の打ち込みを凌いでいる。それだけでも大変な腕前だ。だがこれでエヴァンジェリンを倒せるかと問われれば否だ。無論、辻は戦意を今だ持つてはいない。まだ本気ではあるまい。だがそれを含めても刹那には辻にそんな飛び抜けた実力があるとは思えなかった。

…なにか奥の手を持っているのか、いや、ならそれで構わない……  
例えば辻に恨まれようと、憎まれようとも。刹那は辻を止めると決めた。本気を見せないならそのまま倒させて貰うまでである。

刹那は辻を全力の打ち込みで体勢を崩すと一旦飛び離れ大技の準備に入る。殺しはしない、骨くらいは折れるかもしれないが、最早刹那に慕う先輩を打つ躊躇は無い。

「神鳴流奥義!!?……」

…重いな……!

辻は刹那の斬撃をなんとか受けながらも、その威力に舌を巻く。

元々乗り気ではなかった勝負だがそんなことを言っていられる状況では無い。刹那は当たれば骨の一本や二本軽く砕け散る威力で攻撃を加えてくる。その動きは辻も気で強化をしているというのに殆ど見切れない。捌くのに精一杯だ。加えて刹那の言った約束も辻に

とって到底飲めるものではない。ならば辻は刹那に勝たなければならぬ。だが剣の腕でも気の習熟でも、勝てはしないとこの僅かな打ち合いで理解してしまっている。それに、

…桜咲を打つなんて、俺には出来ない。

こんなことをしてまで辻を心配してくれている出来すぎた後輩だ。辻には刹那を傷つけたくなくなかった。

だが状況は待つてはくれない。一際強い一撃で上体が泳ぐ。慌てて辻が構え直した時には、刹那は距離を置き、凄まじい勢いで気を刀身に収束させ、辻に打ち掛かる体勢を取っていた。

辻の感覚が告げている。あれは受けられも、避けられもしないと。即ち、このままでは辻は負ける。

…負ける？俺が……？

…負けたらどうなる、ネギ君は、

…桜咲は。

裏の世界に関われないという事は中村達やネギのことだけでは無い。目の前の少女にも関われないという事だ。

…駄目だろ、それは。

…俺はお前も助けてやりたいんだよ、桜咲。

この時折辛そうな表情をする少女に、裏の世界なんて下らないものが関わっているのなら…

……断ち割ってやる 何もかも

刹那、辻の姿がかき消えた。

刹那は理解出来なかった。

辻に渾身の一撃を打ち込もうとしたその瞬間、刹那は顔に風圧を感じた。目の前には木刀を刹那の脳天の寸前で寸止めした体勢の、既に木刀を振り下ろした姿の辻がいた。

………な…なんで………!!?

刹那は油断していなかった。目を逸らしても、瞬きさえしなかった。

だ……この気がつければ刹那は辻に打ち込まれていた。あまつさえ、寸止めまでされて。

「……………俺の、……………勝ちでいいな？……………桜咲……………」

辻は全身に走る激痛に顔を歪めながら、息も絶え絶えに刹那に告げた。

止められない斬撃を無理に止めたのだ。体のあちこち筋肉が断裂した痛みを伝えてくる。

やがて刹那は呆然としながらも、小さく頷き、木刀を下げる。

次の瞬間、辻は木刀を取り落としながら、地面に蹲ったのだった。

……………あれは一体……………

刹那は考える。が、いくら思い返しても答えは出ない。

瞬動の入りが辻は完璧で刹那に全く悟らせることの無いまま、刹那に接近して一撃を見舞った。

……………例えそうだとでも瞬動の抜きを行い、姿を現してから一撃を見舞ったのなら刹那は完璧でないにしろ受けるなり、躲すなり対応が出来る。だが辻は、まるで時間でも止めたかのように一瞬で刹那に一撃を入れ終えたのだ。

……………あれが辻部長の本気、か……………

刹那は理解出来ないながらも納得する。自分が認識すら出来ない一撃だ。あれならエヴァンジェリンも躲せないだろう。

兎にも角にも、辻は刹那に勝った。これで辻が裏の世界に関わることを刹那は止められない。それ所か刹那は辻のどんな要求でも従わなければならない。

……………だ……というのにあの人は……………

「……………なるべくでいいから近衛ちゃんと仲良くしてやれ、か……………。我ながら人がいいねえ」

タレながらも辻は苦笑する。はて、桜咲は約束守ってくれるだろう

かと辻は考えながら外の景色を見やる。  
すると、

「…おい」

声に振り返ると、辻の机の周りに暑苦しい顔が揃っていた。

「一人で悩んでんじやねえ。桜咲関連だろ？茶化さねえと約束するか話して見ろよ」

中村の言葉に頷く面々。それを見て辻は笑う。

…馬鹿だけどいい友人持ったな、俺は。

辻は体を起こし、中村達に告げる。

「丁度いい、お前達にも関係ある話なんだ」

…どこまで人がいいんですか、貴方は。

刹那は溜息を吐く。どんな要求が来るかと思えば飛んできたのは仲直りの要望だ。しかも、辻は決して刹那に強要はしなかった。

……なんだか、馬鹿みたいだな、私。

世話になつている先輩を勝手に見下して、下に見て。偉そうに心配しつつ挑めばあっさり負けて。あまつさえ無礼を働いた本人に友人との仲の心配をされる始末。

……恥ずかしい。

刹那は顔を赤くして膝を抱える。

…それでも刹那は辻にこっちに来て欲しくなかなかった。

…子どもか、私は。

自分から条件を出しておいて思う通りにならなければ不貞腐れる。よくも偉そうに先輩を諭せたものだ。

気持ちが悪む。自分は何をやってもこうなのだろうか、と悪い循環に陥るのを自覚する、だがどうにもならない。

…すみません、辻部長。

…今は約束、守れそうにありません。

「…とりあえず話を聞いてまず何よりも先に俺がお前に言いたいのは何故なんでもいうことを聞くと聞いた桜咲にエロいことを要求しな



かったああああ!!? 上手くいきやセツク…」

ズン!!?

三方向から打撃を喰らい中村が倒れる。

「茶化さねえと言ったろうが馬鹿」

「色々言ってる場合じゃ無いよ」

「そこで寝ている。…それにしても話が随分と大事になってきたな」

大豪院の言葉に辻は頷く。

「恐らくネギ君は今後ほぼ間違いなく何かに巻き込まれる。だから桜咲は俺をわざわざ止めに来たんだと思う。何か起こる確信が無ければここまで慌てて俺を止めに来ないと思うんだ」

「きな臭えな、どうにも」

渋い顔で豪徳寺が溢す。

「ようするに近いうちにネギ君に何か起こるってことだね」

「しっかしそう都合良く…」

「皆さ〜ん!」

唐突に響き渡る声にバカレンジャー全員が振り返ると、ネギが肩にカモを乗せ駆けて来る所だった。

「…噂をすれば何とやらだな」

「皆さん、退院おめでとうございます! 体はもう大丈夫なんですか?」

ネギの問いかけに辻達は笑って応じる。

「伊達に鍛えてないからな。心配すんな」

「丈夫なのが取り柄だからね。それよりネギ君、僕達を探してたのかい?」

「はい、辻さん達が退院されたと聞いたので…」

「なんつつーかホント律儀だよなあお前。十歳ってのが信じらんねーよ」

「確かにな」

「ははは…」

頭を搔いて苦笑いするネギに辻は尋ねる。

「ネギ君。変なこと聞くようで悪いけど、最近何か変わったことは無かったかい?」

「変わったこと、ですか？」

不思議そうに聞き返すネギに辻は頷き、

「変な格好した奴らに話しかけられたとか脅迫文を貰ったとか。襲われたりなんかもしてないかい？」

「え、えーと…」

「辻の旦那、そんなことを聞いてくるってことは旦那達の方で何かあったんですかい？」

唐突に物騒なことを聞かれ、やや混乱気味のネギに代わって、肩のカモが問い返す。それに対して辻は笑って首を振り、

「いや、何も無いよ。吸血鬼の魔法使いなんて凄いのには襲われたばかりだからちよつと過剰に心配しただけだよ」

辻達は相談の末、ネギ達には学園側の疑惑は伝えないことにした。理由は何か起こるとは確信が持てていないのと、不安を煽らないからだ。

辻の言葉にネギは笑顔で答える。

「心配してくれてありがとうございます、辻さん。あれから変なこともありませんし、エヴァンジェリンさんも授業に、ちゃんと出てくれるようになりました。僕の方は何も問題ありません」

「気を使ってくれたのにすいませんがあんな災難、そうそう降りかかりはしませんよ」

ネギとカモの言葉に辻は頷きながら心の中で胸を撫で下ろす。少なくとも今すぐなにか起こっている訳では無いようだ。

「まあまあ物騒な話題はこれ位にして近況でも聞かせてよネギ君。やっぱり教師は大変かい？」

山下も現時点では問題無しと判断してか、ネギ達の意識を逸らす為に話題を振る。それからしばらく、辻達とネギ達は談笑を楽しんだ。

「へえ、神楽坂ちゃん達と地下の図書館にねえ。なんだか聞く限りじゃダンジョンにでも迷い込んだみたいだな展開だね」

「はい、そうなんです。伝説の魔道書とか大きなゴーレムとか、兎に角凄いものが沢山あったんですよ」

「完全にファンタジーだな」

「まあ、それを言ったら俺らも気なんてもん使ってる時点で大分ファンタジーだな」

「んなことはどうでもいい!!? 麻帆良図書館の秘密の部屋にはありとあらゆる本が有ると聞けど、ネギ、俺をそこに連れて行ってくれ!!? きつと俺のまだ見ぬ超レア物のエロ本が眠ってる筈だ!!?」

「お前は本当にぶれないな…」

「まあこうじゃ無かったら中村じゃ無いって気がするけどね。エロ本はともかく、僕も興味はあるな。よかったら今度案内してよ、ネギ君」  
怪気炎を上げる中村をスルーしつつ、山下はネギに提案する。

「いいですね、僕や明日菜さん達が修学旅行から戻ったら、皆で行きましよう!」

楽しげに承諾するネギ。気になるオマケが台詞についてはいたが。

「修学旅行?」

「ああ、女子中等部はそんな時期か」

辻の言葉にネギは頷く。

「はい、うちのクラスは京都に行くことになってるんです」

「またベタだな…」

「去年の俺たちよりマシだろう。何故かうちのクラスに多数在籍する砂部の所為で俺達が行ったのはよりにもよってゴビ砂漠だ」

「うん、軽く地獄だったね、あれは」

遠い目をする大豪院達を見ると辻も苦い所か痛い思ひ出を思い出すので極力視界に入れないようにしつつ、ふと辻は思いついたことを口にする。

「ねえネギ君、日本には陰陽師って和風の魔法使いみたいな概念があるんだけどさ、ネギ君達が行く京都ってその発祥の地みたいなものなんだ。魔法使いがいるからって陰陽師もいたりしないよね?」

まさかなーと苦笑しながらネギを見やると、そこには見えていて可哀想な位にわかりやすく狼狽える少年がいた。

「……いるのかよっ!!?」

「え?なに?また物騒なことになったりしないよねネギ君」

「いや、旅行に行くだけだし大丈夫なんじゃねえの?」

「わからんぞ。存在を秘匿している連中とは縄張り意識が強いのが相場だ」

「だ、大丈夫ですよ!!? 親書を届ければ西との仲は良好になりますから!!?」

「「「親書?」」」

「あ…」

「兄貴い…黙ってるって言ったじゃねーですか…」

不用意な発言にすっかり噛みつかれあっさり自爆したネギにカモがやつちまったとばかりに額を押さえ、嘆いた。

「ネギい、なんか隠してんだろ、お前」

「今更誤魔化しは効かん、キリキリ話せ」

「う……………」

ネギは周りを見回すが、味方はいないことを悟り、がつくりと項垂れ、語り出す。

「馬鹿ガキが」

関西呪術協会の存在とその組織が関東魔法協会と仲が険悪な件。その為ネギがいる麻帆良女子中等部の京都入りを拒否した件。そしてネギが親善として関西呪術協会に親書を届けに行く旨を聞いた辻達、まず第一声は中村のそれだった。

「ううっ……………」

「だ、旦那方、兄貴を責めないでやって下せえ、兄貴は旦那方に心配させまいと、」

「それが駄目だつて言ってるんだよ」

項垂れるネギとそれを庇おうとするカモに豪徳寺がびしやりと告げる。

「ネギ君、僕らに迷惑をかけまいとするその心持ち自体は悪いことじゃ無い。でもいざ問題が起こった時にネギ君は一人で何もかも完璧に処理できる自信があるかい?」

「それは……………」

言葉に詰まるネギに大豪院が頷き、言う。

「無いだろう? 当然だ、俺達にだってそんなことは不可能だ。人間一

人にできることなど限られているぞ、ネギ。お前は有能だがまだまだ経験が足りない。上手くこなせる自信があつても今のお前は多人数の生徒の責任を預かる立場だ。失敗してダメでした、と謝って許されはしないのだ」

「……はい………」

すっかり落ち込んでしまったネギを見て辻達はバツが悪そうに顔を見合わせる。

…こんな説教、十歳児にする内容じゃ無いよな。

内心溜息を吐いてそう考える辻。

土台普通なら小学校に通うような年齢の少年に1クラスの担任を務めて、尚且つ魔法使いとしての修行に加え半人前とはいえ、追隨する義務や責任を上手く纏めて生活するなど不可能なのだ。

ネギは下手に能力があり、優秀だからこそ、表面上なんとかしてしまふ。だからこそ周りも天才だなんだと持ち上げてその身を誰も心配しなくなる。

…普通に考えて子どもに押し付けていい責任の域を大きく越えるだろ。

魔法関係者とやらは何を考えてんだと辻は毒づく。

どう考えても見習いの、それも子どもに任せるような内容の任務では無い。まともに関係修復などを考えているとはとても思えない。

…ネギ君の話だとあっちの組織のトップと話はついてるって話だけど…

仮に親書が名目上のもので既に話はついている八百長的な親善だったとしても、わざわざネギに任せる理由は無い。

エヴァンジェリンの一件といい、この魔法使いという連中は妙にネギに苦難を背負わせようとしている。

…それは、何故だ？

しばらく辻は考えるが、やがて小さく首を振り、その思考を隅に追いやる。

…今は組織の陰謀を読み解くより、ネギ君の心配だな。

辻はすっかりしよげてしまったネギの頭に手を置き、軽く撫でなが

らネギに告げる。

「ネギ君、俺達は君が判断を間違えたから君を叱ったけど、それは君がまだまだ俺達を信頼出来ていないから起こったことでもある。そういう意味では、俺達にも責任はあるね」

辻の言葉にネギは驚いたように顔を上げ、反論する。

「そんなことはありません!!? 僕は辻さん達を凄く頼りにしています。信頼してないなんてありません!!?」

辻達はそれを聞いてくすぐったそうに笑うが、辻が再びネギを諭し始める。

「そう言ってくれて嬉しいよ、ネギ君。でもね、ネギ君のそれはまだ信用であって信頼じゃあ無いんだ。君はエヴァンジェリン…さんの一件を通して俺達を受け入れてくれた。でも同時に俺達が大怪我をしたことで君は俺達に負い目を持ってしまったんだ。だから君は薄々問題が起こるかもしれないと思っても、俺達を頼ってくれなかった。これは俺達がまだまだ未熟だから、君に俺達に何を任せても大丈夫だと思わせるだけの根拠を示せなかったからそうなったんだ」

辻は一旦言葉を切ってしゃがみ込み、ネギに目線を合わせる。

「でもね、ネギ君。俺達は君が思ってるよりもずっと、君の力になれる。信頼って言葉は、その人に全てを任せられるって気持ちを持つことなんだ。俺達は君に、絶対にこの人達は大丈夫だと思わせるだけの根拠を見せよう。だからネギ君。一度不甲斐ない所を見せた俺達だけど、今回も俺達に任せてみてくれないかい? まだ子どもなんだから、君はもつと我儘でいい。もつと気安く接してくれよ。なんだか不安だからついて来て下さいって感じにさ」

「……辻、さん……」

「ううっ! 旦那、なんつう器のでかい方だよ、あんたって人は」

ネギは今にも泣きそうな顔で辻を見やり、カモは感極まったように男泣きに泣いている。

…うん。ちよつと格好つけすぎたか。

内心冷や汗を流しながらも辻は微笑みを崩さない。大仰な言い方になったかもしれないが、正直な気持ちを伝えたつもりだ。

ベそをかき始めたネギの頭を撫でながら落ち着かせようとしている辻を見て中村達は苦笑する。

「まったくカツコつけてくれるぜ」はじめ「ちゃんはよお」

「って言うか辻、僕らに一切振らずに僕らの総意みたいにネギ君に告げたよね」

「愚問だな、心は一つだ。それとも貴様らは行かんのか？」

「それこそ愚問だぜ、行くに決まってるんだろ。まあでもちよつと先走る時あるよな、辻って」

「早漏じゃ桜咲に愛想尽かされるぞまったく」

直後中村に三人の拳が飛んだのは語るまでも無いことである。

「皆さん、本当にいいんですか？授業もあるのに……」

「ネエギ、つまんねえこと気にすんなって言ったろが。俺らを誰だと思ってるんだ。あの生物災害バイオハザードの授業を抜け出し制裁を加えられること既に数百回!!？今更学校フケる位、なんでも無いわあ!!？」

「中村、自慢にも何にもならないことを堂々と言わないでよ。まあでも気にしないでいいよネギ君。中村じゃ無いけど、慣れてるし、うん本当に」

「本気で何かあったらヤバイだろ？俺らがボディガードになってやるよ」

「備えあれば憂いなしだ。何も無いなら京都観光を満喫するさ」

「そういうこと。だからネギ君、君は君で出来ることを無理せず頑張って、その上で修学旅行を楽しむんだ。折角京都くんんだりまで行くんだからね」

「……わかりました。皆さん!!？よろしくお願いします!!？」

頭を下げるネギに辻達は笑って声を揃えた。

…任せとけ!!？

ネギが帰るのを皆で見送りつつ、中村がポツリと言う。

「…過保護過ぎつかねえ俺ら?」

「どうだろうな？確かなにか起こると確実に言える訳でも無いんだが…」

「しかし辻が桜咲後輩に物騒な警告を得た昨日の今日でこれだ。この

上なく胡散臭いのも事実」

「…まあいいじゃないか」

辻は言う。

「あんな小さいのにあれだけ大変な思いしてるんだ。俺達位は甘やかしてやろう」

辻の言葉に一瞬押し黙った後全員が笑う。

「…そうだな」

「ガキは遊んででかくならなきゃいけないしな！」

「…ふっ」

「さて、気持ちが一つになった所で現実的な話」

何と無く穏やかな空気が皆を満たす中、山下が真面目な顔で言う。

「…旅費を各々捻出する手段を考えよう」

「」「……………あ……………」

どうやらまだ見ぬ脅威より先に片付ける問題があるようだった。



## 2話 かぶき者の護衛 少年少女の信頼関係

「あはは、賑やかで楽しいなあ」

新幹線の車内は麻帆良女子中等部、3ーA生徒の賑やかな声で満たされていた。持ち込んだカードゲームでお菓子を賭けての可愛らしい真剣勝負に勤しむ者達や、席で静かに読書を満喫する者。はたまた早朝に出発したことによる睡眠不足の解消に自席で励む者。殆どに共通しているのは旅行特有の何処か浮かれたハイテンションだ。

そんな中ネギはクラスの生徒達に異常が無いかを確認しつつも、周り同様、はしやぎ気味の上機嫌で歩む。

「おいおい兄貴、いくらなんでも浮かれ過ぎなんじゃねえか？」

定位置の肩の上でカモがやや呆れたように言う。

「うん、でも楽しめる時は楽しめ、って辻さん達が僕に言ってくれたから…油断してるつもりは無いけど、近くに辻さん達が居てくれるって思うと凄く安心できるんだ」

「兄貴…：そうっすね。必ずしもこんな朝っぱらから妨害があると決まったわけじゃ無し、万一何かあっても鬼強の旦那方がいりやあ安心してもんだ。前向きに楽しんで行きましょう、兄貴ー」

「うん、カモ君ー」

ネギは頷き、対戦している夕映やハルナ達に話しかけに行く。それを横目に見やりながら、カモは思う。

…：そうだよな、兄貴はまだ子どもなんだ。

アルベール・カモミールは自戒する。カモはネギと明日菜を煽り、エヴァンジェリンと対決させる方向に

持って行った。カモはそれについて後悔はしていない。エヴァンジェリン相手に逃げ隠れた所で相手は手段を選ばずネギを追い詰め結局はやられていただく。だからこそ少しでも勝機が出るようにカモは茶々丸を撃破しようとしたのだ。しかし、

…：兄貴に対してかかる負担ってのを俺っちも軽く見ちまっただな

：

辻達のエヴァンジェリンの一件を預けた時の、申し訳なきと情けな

さが入り混じりながらも、何処か肩の力が抜け、ホツとしたようなネギの表情をカモは覚えている。

…無理してねえ筈無いんだよな。

今はこんな身体ではあるが自分よりも年下になる少年達に教えられるとは面目ないと、カモは反省していた。

…俺っちも兄貴の負担を少しでも減らせるように動かねえとな。

そう決意しつつネギを見守るカモ。

最もこのオコジョ、木乃香の魔力や明日菜の身体能力に目を付け、隙あらばネギの役に立ち、ついでに自らの懐も潤う一石二鳥を狙って仮契約を狙っている辺り、バカレンジャー程純粹には動くつもりは無いようである。

「兄貴、そういや旦那方は何処にいらっしやるんで？」

カモの内心をおくびにも出さない問いかけにネギは首を傾げる。

「うーん僕もわからない。ただ出発前に来たメールではすぐ近くに居るようにするって」

「そうっすか…後ろの方の車両っすかね？」

「多分…。でも今は仕事に集中するよ。あ、亜子さん、大丈夫ですかー？」

ネギとカモは生徒の方に駆けて行く。

「うーん、やっぱこっからじゃ様子はよくわかんねえな」

車両を繋ぐ扉の覗き窓に張り付いていた中村が首を振り、離れながら言った。

「まあ当たり前だけどね。三両も離れてるし」

座席に座った山下が溜息と共に言う。

「…なんでグリーン車が貸し切りになってんだろうな？全席取ってあるのに一人も乗っていないしよ」

「…学園側のテロ対策か何かか？」

「まあ前の車両の方は麻帆良の生徒で満員だから意味が無いわけじゃないだろうけどなあ」

辻達はグリーン車を挟んでの後方の車両に乗車していた。早朝に

も関わらず、周りの席は全て埋まっております、

悪目立ちする辻達に乗客達からはあまり友好的ではない視線が飛んできている。

それもそのはずであり、辻達は全体として見ればこれ以上無く異様な集団であった。

まず辻と大豪院におかしな点は無い。辻はゆつたりとしたTシャツにジャケット、下はいざという時に動きを阻害しないよう履き古して柔らかくなり、色もいい感じに抜けたジーンズである。大豪院は黒で統一した大きめのスラックスにワイシャツ、足下の動き易さを考え、丈夫な布のブーツを履いていた。ここまでなら問題は無いのだ。

「…やりたく無いけどここらで突っ込んでおこう。まず豪徳寺、別に隠密行動している訳でも無いけど、俺達は悪い意味で麻帆良では顔が売れてる。だから中等部の先生や生徒と言えども正体がバレたら学園側に通報、最悪杜崎先生が降臨して俺達は連れ戻された上でジ・エンドだ。そこら辺ホントにわかってるか？」

辻の言葉に対して豪徳寺は自信満々に頷き、

「当たり前だろうが。だから俺の輝く漢のシンボルにしてトレードマークたる命の次に大事なポンパドールを断腸の思いで今日はキメて来なかつたんだぜ？これなら俺だとはそうそうわからねえだろ」

「…確かに貴様だとはわからんだろうが今の貴様は誰がどう見てもヤクザだ」

豪徳寺は自慢の前髪を後ろに流し、ポマードで撫でつけオールバックに、服装はグレーのスーツに黒のトレンチコートを纏っていた。ガタイも見事な為何処その武闘派ヤクザか殺し屋のようである。

「なんでんな目立つ格好にしたんだよ」

「いや、イメージが変わればいいと思っててな。お前らもてつきり変装してくるもんかと思つてたぜ。」

「正体わからなきやいってもんじゃ無いんだよ。後をつけて警察にでも通報されたら結局同じことだろう」

「あ？なんで通報なんてされんだよ？」

「…お前は脳味噌は比較的まともだが服装センスは昭和の感覚だと忘

れていたよ」

大豪院が額を抑えつつ呻く。

まあ最も最後の二人に比べれば豪徳寺はまだ『危なそうな奴』で済むだけマシなのかもしれない。

「山ちゃん、お前という奴は…」

「えっ、なにに？目立つ色合いでも無いし京都に合わせて和装にしたんだけど？」

本気で不思議そうに尋ね返す山下の格好は桜の意匠が萌黄色の生地には散りばめられた、一見やや女物に見える以外は何の変哲もない着物だが、よく見れば桜色の花びらの中に所々赤いものがあり、更によく見ればそれは花びらでは無く小さな手形である。おまけに萌黄の生地も、目を凝らすと彼方此方に歪んだ人の顔のような模様が入っている、実に猟奇的な着物であった。足下は目に焼きつきそうな程鮮烈な朱塗りの下駄、鼻緒まで血のように赤い。着物が一見まともなだけに嫌な意味で眼を惹くワンポイントお洒落である。

「貴様やる気があるのか、山下？」

「え、いやだから地味でしょ？持ってる柄で一番地味ながらも目立たない所でセンスの光る、我ながら絶好のチョイスだと思うんだけど？」

「……………」

無言で座席に沈む辻と大豪院を見て首を傾げる山下。なんとも残念なイケメンであった。

「トドメにお前だよ馬鹿！自分は関係ありませんって顔してんじやない！！？」

「あ？俺の何に文句があんだよ？」

「全部だ馬鹿が」

大豪院が吐き捨てる。

中村は赤地に所々黒や緑のラインの入ったラバー製の身体にぴったりとしたボディスーツで身を固めていた。顔は目元のデザインが炎に見える赤い覆面で覆っている。端的に言うなら戦隊もののレツドがそこに居た。はつきり言おう、変態である。

「一応弁明は聞いてやる、その格好はなんだ？」

青筋を立てながらの辻の質問に中村は得意げにフツと鼻を鳴らし、「これで中身が俺だとはわかるまい、どうだ完璧だろ？」

「あー確かに、正体がわからないという一点を除いて致命的にあらゆる活動に向かない上に通報されるという問題を除けば完璧だ」

「これで一応考えた結果だからもうどうしようも無いな、このカスは」  
終わった、と辻は項垂れる。

そもそも新幹線に乗れたのが奇跡のような面子である。何もしなくても国家権力が戦力を半分程削って行きそうな状況でネギの護衛など出来るのだろうか。

…なんで服装位事前に統一しなかったんだろ、俺？

余りにも迂闊な前準備に自分を呪う辻。この悪友達が服一つ取つても一筋縄でいかないのは解りきっていたことだというのにだ。

「「きゃああああああつ!!?」「」」

後悔の海に沈んでいた辻の耳に甲高い複数の悲鳴が聞こえる。

「なにい!?!?」

「え、もう襲撃か何か!?!?」

「行ってる場合か行くぞ!!?」

「辻、死んでいる場合か立て!!?」

「言われるまでも無い!!?」

辻は柵に置いてあったゴルフバッグを引つ掴み先頭を行く変態（バカレッド中村）に続き走り出す。

自動扉が阿久のももどかしく無人のグリーン車を通り抜け三つ目の車両を通り抜けると、先頭の中村がいきなり停止した。

「ブツ!?!?」

余りに急過ぎる停止に制動が間に合わず、中村の背中に激突する辻。幸いにして、三番手の山下は辻に激突することはなかった。

「っ痛う…お前なにやって…」

中村に文句を言いかけた辻は途中で言葉を飲み込む。普通車とグリーン車の境目に見覚えのある少女がこちらに長大な太刀の柄を握り、油断無くこちらを見据えていたからだ。

「…桜咲……」

「…辻部長？……」

その少女——桜咲 刹那は辻の姿を見て、鋭い眼光を放っていた目を見開き、柄から手を放す。

「桜咲、なんで……っていや、いるに決まってるか、修学旅行だ。さっきの悲鳴はなんだ？」

刹那は何故か表情を曇らせ、辻から目を逸らしながらも、辻の問いかけに答える。

「…恐らく関西呪術協会の嫌がらせです。奥にはカエルが溢れていますが皆に危険はありません」

「カエル？」

辻の後方にいる豪徳寺が疑問の声を上げる。刹那はそちらを見て頷きかけてから固まり、今度は正面にいる戦隊レッド（中村）を見て、冷や汗を流し始めながら辻に顔を向け問うた。

「…あの、辻部長。お連れの方達は一体……」

「わからないのも無理はないが答えは一つ……何時もの面子だ」

「………そうですか」

沈痛な表情で辻が答えると何事か察したらしく、刹那も痛まじげな表情になり返事をする。

「…いや、呑気に喋ってねえで前の様子を見に行こうぜ、お前ら」

中村が珍しいことに正論を言い、辻もハツとして前に出ようとするが、

「待つてください、大丈夫です」

一歩左に動き、立ち塞がった刹那に押し留められる。

「おい邪魔すんなよ他称 はじめ 一ちゃんの嫁」

「馬鹿の後半の戯れ言は聞くな、桜咲後輩。とはいえ俺たちは無事かどうかは己の目で確かめる。道を開けてくれ」

「できません。あなた方は今だこちらを知っただけの一般人です。辻部長と約束はしましたが、それでも専門が現場に居ればこれは専門家の処理すべき案件です。対処法も知らない素人が口を挟まないで下さい」

大豪院の言葉を刹那は冷たく切り捨てる。

「おいコラ後輩、あんまナメた口をきいてつと後悔すんぞ？」

「止める中村。桜咲、向こうの全員に本当に危険は無いんだな？」

辻の言葉に刹那はまた微かに狼狽を見せながらも、無言で頷く。

「わかった、ここは任せるよ桜咲。一旦戻ろう、お前ら」

辻の言葉に中村達が一斉に反拍する。

「おい一ちゃんよ、流石にそれはねえだろ」

「無いのはお前の格好だ。いいから行くぞ」

「おい辻…」

「頼む。俺に免じて引いてくれ。本当に大丈夫だ」

豪徳寺の言葉を押し留める辻。

「桜咲、任せていいんだな」

刹那は頷き、そしてその表情が陰る。

「…来るつもりなんですね…辻部長」

辻はその言葉に頷く。

「ああ、行くよ。こればかりは譲れない」

辻と刹那は目を合わせるが、直ぐにお互い視線を切り、互いに背を

向け歩き出す。

「いや、ねえ…辻さ」

「諦めろ山下、辻は何か考えがあるらしい。後で説明して貰うぞ、辻」

辻は頷き、バカレンジャーは車内を後にした。

「さて、説明して貰おうか、辻」

新幹線後部の席に戻った一行、大豪院が辻に問いかけると辻は一つ頷き話し出す。

「まず第一に、俺達はネギ君と違って誰に頼まれてここに来たわけじゃ無いってことだ。あっちには事情を知ってるネギ君や桜咲だけじゃなくて3-Aの娘と一般の先生がいる。さっきも言ったけど俺達は顔が売れてる、よしんばばれなくても絶対に俺達は印象に強く残る。この後も俺達はネギ君をフォロー出来る距離で集団について行

かなきやならない。なら新幹線にいた段階から後について来ていたとバレるのは非常にまずい。麻帆良の魔法関係者に俺達がいると判明した時にどういう対応が取られるのかはまだわからないが最悪強制連行なんでもあり得る。先々のことを考えると今の段階では手を出さない方がいいと俺は思ったんだ」

辻の説明に四人はうーむと唸りながらも辻に聞き返す。

「だけどよーいざって時にんなこと心配してたら何も出来ねんじやね？」

「勿論今の場合だって魔法使いやら陰陽師やらが襲撃をかけて来たなんて場合だったなら誰が止めようと駆けつけるさ。でも今回はカエルが沸いただけでせいぜいが牽制か嫌がらせ程度のものだ。それ位の騒動なら首を突っ込む方が危険だと俺は思った」

「辻よ、魔法関係者にバレるのがまずいなら桜咲にもうバレちまつてんじやないのか？」

「桜咲は恐らく俺達のことを報告する気が無い。数日前に俺との勝負で、俺は首を突っ込むと既に断言してるんだ。桜咲が修学旅行で何かあると知っていれば俺達が来るのは予想出来る筈だ。現にさっきの桜咲は俺を見て軽く驚いていたけど意外そうな様子じゃ無かった。なのに俺達が今こうして新幹線に乗っていられるってことは、桜咲は学園側に報告してないってことになる。俺との勝負の約束を守ってくれてるのか他に理由があるのかはわからないが、ともかく桜咲に關しては俺達の存在はバレでも問題無いよ」

淀み無い辻の説明に中村と豪徳寺は成る程な、と納得する。

「いろいろ考えて行動しなきゃいけないってことか」

「正直めんどくせーが招かれざる客はんなもんか」

「待て、それでは説明がまだ半分だ」

大豪院が辻に問う。

「確かに徒らに俺達は姿を現せんというのはわかった。しかし辻、お前の考えは殆どが桜咲後輩から得た情報を確認もせず事実としての前提で成り立っている。お前は桜咲後輩と普段から接しているし随分桜咲後輩を買っているのも知っている。だが辻、桜咲後輩はネギ



に不審な対応をしている魔法関係者の一員なのだ。お前には不愉快な話かもしれないが、あちらにどんな思惑があるかは全くわからない。桜咲後輩がお前を騙そうとしているとは言わんが、少し盲目的に信頼し過ぎでは無いか？違うというなら桜咲後輩の言葉が正しい根拠を見せろ」

大豪院の言葉に辻はなんとも言えない顔になり、頭を掻きながら辻は語った。

「ああ、うん、そうだよな。お前の言うことは最もだよ大豪院。だから本当ならちゃんとした理由を説明したいんだけど…」

辻はすまなそうに頭を下げ、言った。

「申し訳ない、まともに理由が説明出来ないんだ。俺はただ、桜咲なら大丈夫だっと思ってただけだから」

その言葉に大豪院が眉を上げ、山下が苦笑しながら辻に言う。

「辻、流石にそれはどうかと思うんだけど…」

辻は頷き、なおも語る。

「うん、わかってるんだ、理由になってないのは。でも、俺は何でか、桜咲が言うなら信じられるってそう思ってる。強引に理由をつけようとすれば幾つかあるんだ、桜咲は学園側に心証が悪くなるかもしれないのに俺に勝負を挑んだからとか、さっきも言ったけど俺達のことを報告していないからとか。でも、俺が桜咲を信頼できるって思うのは、そういう理由ありきのものじゃなくてさ」

辻は桜咲 刹那という少女を思い返す。辻がしつこく勝負を挑む度に、しょうがないですね、とでも聞こえてきそうな微笑を。剣道部のバカッフルとじやれている時にこちらを見て浮かべる小さな、でも楽しげな笑顔を。帰り道、成績のことに辻が触れた時の珍しい狼狽を。様々な桜咲 刹那を辻は見てきた。

だからこそ、辻は確信している。

「もう随分あいつを見てきたからさ。何と無くわかるんだ。桜咲は嘘をついて無いしこつちを心配してくれてるだけだ。見ていてそう思ったから、俺はあいつを信じようって。…そう決めたんだ、俺は」

辻が語り終えると場には沈黙が降りる。辻は一つ頷き、頬から一筋

の汗を流した。

：うん。：納得して貰える筈ないよな、こんな話。

どうしようかと辻が割と必死に考え、兎にも角にも言葉を重ねようとする。

「え、えーとな、まあなんで言うか…」

「もういい」

辻を遮って大豪院が溜息混じりに言う。

「毒気を抜かれた。お前がそこまで言うなら、信じよう、桜咲後輩をな」

大豪院の言葉に辻は目を瞬く。

「え…納得してくれるのか？」

「するもしないも代案がある訳じゃないし、悪い子じゃ無いとは僕も思うしね」

山下が笑って言う。

「それにしても、なあ」

豪徳寺がむず痒そうな様子で辻に告げる。

「お前よくあんな恥ずかしい台詞真顔で言えるよな」

「正妻の貫禄を俺は見た。ご馳走様です」

マスク越しで表情は見えないが君が悪い程朗らかな声で中村が言う。

「誰が正妻だ誰が。桜咲は俺の連れ合いじゃ無いし、そもそも俺が『妻』はおかしいだろ」

「いや、今回ばかりは中村に賛成だね」

否定する辻に山下が追い打ちをかける。

「なんつうかさっさと告白しろよ辻」

「桜咲はそういうんじゃないよ！」

「あの台詞の後では説得力が無いな」

「大豪院!!？お前もか!?!？」

その後半泣きで恐る恐る近寄ってきた新幹線の運行員に注意されるまで中村達に辻はいじられ続けた。

余談だがネギに対して新幹線内ではフォローがしにくい旨を山

下が後でメールを送っていた。山下、気遣いの男である。

### 3話 想定外妨害 悲痛な絶叫

「元気だねえ、あの娘達」

山下が呆れたような感心したような口調で言う。

ネギ達一行は既に京都に到着し、現在は清水寺を見学していた。

辻達は存在を気どられない様、ある程度離れた地点から観察をしている。ちなみに中村の格好は既に戦隊レッドの格好では無い、新幹線を降りた際に辻達四人が無理矢理に着換えさせたのだ。現在の格好は辻の予備のジーンズにフード付きのパーカーを着用している。山下と豪徳寺はまだしも中村は完全に目立ち方の次元が違うのが主な理由である。中村はゴネたが、一、三十発の誠意ある拳により一応の納得を見せた。

「にしても目立ってんなあいつら。スーツのガキが一定レベル以上の美少女大量に連れてりやそらあ目え引くけどよ」

「目立つ云々は俺らに言われたく無いだろうけどな、やっぱ山の妙ちきりんな着物の所為だぜ」

「言い掛かりはよしてよ豪徳寺。豪徳寺の一昔前のベテラン刑事みたいな格好が原因だってば」

「双方他人のことが言える格好か阿呆共」

大豪院が呆れたようにツツコミを入れた。

「もうこの面子がどう足掻いても目立つのは避けられないとして、油断はするなよ皆。悪戯みたいなものとはいえ、確かに妨害はあったんだから」

どうにも緊張感に欠ける空気を払拭する為、辻は再度注意を促す。今の所怪しい人物や不審な物体は見られないが、そもそも魔法や陰陽道について碌に知識の無い辻達には妨害方法の予想などできる筈も無い。結局注視して異変が起こったらその都度対応するしかないのである。

「わかってんよ。なんもなきやあ観光気分で廻れたんだがまあ仕方ねえやな」

「白昼堂々襲撃なんて最悪なパターンまで想定する位が丁度いいかも

ね」

「だな。にしてもなにやってんだあいっらは？」

豪徳寺が不思議そうに呟く。視線の先には庭石のようなものに続く玉砂利の道を目を閉じながらフラフラと歩く数人の3-A生徒がいた。

「ああ、あれは確か縁結びの恋石だよ。彼処からあの石まで目を瞑ったままたどり着いて石に触れれば恋愛が成就するんだって」

「成る程、一定の儀式的手順を踏むことで相手を状態異常・魅了にできる石か。便利じゃねえか、持って帰れねえかな？」

「台無しな言い方すんなボケ、言い掛かりも甚だしいわ。辻もやって来たらどうだ？」

「まだ言うか昭和ヤクザ」

「…凄い勢いで駆け始めた女がいるぞ」

「お、マジだ。目え閉じてんよな、あれ？」

「…心眼って奴じゃない？」

「中学生がか？」

「…妙にスペック高い娘多いよなあ、このクラス」

そうして眺めていたあやかとまきえの二人の姿が突然かき消える。

「……!?」「……」

辻達は驚愕する。

「おい待て何が起こった、キング・ク○ムゾンか!?!?」

「阿呆なこと言ってるな、とにかくあっちに、」

「落ち着け豪徳寺、よく見ろ」

「ああ？」

大豪院が指を指す先を見ると、地面から手が生えている。否、地面に空いた穴から落ちた二人の手が出て来ていた。

「……落とし穴？」

「…これも妨害の一種かな？」

「いや、なんの意味あんだよこんなことして」

「と言うかこの寺国宝だぞ。勝手に穴開けていい訳無いだろ誰だよこんな悪戯みたいな真似するのにこんなとんでもない場所に穴開けた

馬鹿は!?？」

辻が悲痛な声で叫ぶ。本気で洒落になつていない真似なのだから  
妥当な反応かもしれないが。

「…やらかしたことはとんでもないが、これがネギ達に対して堪えて  
いるかと問われれば、否、だな」

理解出来んといった顔で大豪院が言う。

「今の所妨害つて言うより嫌がらせの域だよな」

「なんつうか想像してたのと大分違うな」

「こんなんじや俺達出る幕無えぞ」

「いや待てお前ら、油断は禁物だ」

辻は何と無く白けた空気の漂い始める中村達を叱咤する。

「確かに想定していたより低レベルというか馬鹿馬鹿しい内容の妨害  
ばかりだがだからと言ってネギ君達に何も危険が無いわけじゃ無い。  
今のだって、打ち所が悪ければ骨位は折れるんだ。このまま黙って見  
てる訳にはいかないだろ」

「…まあ、そうだな。でもどう防ぐんだこんなもん」

豪徳寺が途方に暮れたように言う。

「…足でカバーするしか無いね」

山下が顔を顰めながらも案を出す。

「どこに何が仕掛けられてるかわからないから彼女らが行きそうな所  
を手分けして確認しよう。怪しいものがあつたら各自の判断で排  
除つてことで」

「うわー……」

「面倒臭え……」

「手間だがやるしかあるまい、散るぞ」

「極力正体がバレないようにな！」

辻は3ーA生徒達を回り込んで音羽の滝へ向かう。歩きながら辻  
は周りを見渡すが、それらしい怪しげな人物は見当たらない。

「…まあ、余程の馬鹿でも無ければわざわざ目立つ格好で妨害なんて  
真似しないか」

…それを言ってしまうえば、辻達はその余程の馬鹿に当てはまってし

まいそんな気もするが考えないことにした。

道の感触なども気にしつつ、足早に音羽の滝まで辿り着くが、特に異常は見られない。

「…まさか湧き水に毒でも仕込んでないだろうな…」

音羽の滝とは三種のご利益のある湧き水の流れる、清水寺の名の由来ともなった清水寺きつての名所だ。

まさかとは思うが国宝の寺の境内に落とし穴を掘った罰当たりな輩である。

…充分にあり得るな。

辻は周りを見回し、人目の切れた瞬間を見計らい一息に跳躍し湧き水汲みの小屋の屋根上に着地する。

「……………」

「おう、中村。そっちはどうだ？仁王門の周りには怪しいものは無かったぜ」

「こつちもだよアホくせえ。三重の塔だっけ？なんも無し」

「清水舞台の脇の方に回ってみたけど異常無いよ。大豪院は？」

「ネギ達に乗るバスにもその近辺にも怪しい人、物は無しだ。こうなると直接ついていった辻が臭いな」

「おつ、噂をすればだ。帰って来たぜ御一行が」

ネギ達3-Aが移動を始めていた。おそらく動きからして三重の塔を見た後に仁王門周りの売店で土産を買って帰るのだろう。

その少し後ろを、手に何かを抱えた辻が何処かトボトボと歩いて来た。

「よう辻。こつちは異常無いぜお前はどうかだった？」

「つっ—かなんだそりゃ？酒樽？」

豪徳寺と中村の質問に、辻は四斗樽程の大きな酒樽を翳しながら言った。

「…これが湧き水に混ぜたって流れるようになっていた……」

辻の言葉に全員無言になり、やがて誰からもなく口を開く。

「…なあ馬鹿なんじゃねえの関西何たらかたらつて奴ら？」

「さつきからやってることがセコいぞ」

「いや、これは案外馬鹿にならないよ。中学生が飲酒したなんて知られたら全員麻帆良に強制連行の上に停学だろうからね」

「…そうすれば当然ネギも京都には居られんという訳か。…まさかこれを本命として今まで馬鹿馬鹿しく見える悪戯騒ぎを起こし、こちらの油断を誘ったのか？」

「いや、考え過ぎだと思うが…兎に角馬鹿らしく見えても連中を放っておいたらネギ君達が方向性の違いはあれど危ない。俺らで事前に潰して行こう」

辻の言葉にげんなりした顔をする中村達。

「おい待てまだ京都見物一発目だぞ。こんな地道なこと一々やるってんなら下手に襲撃掛けられるよか面倒臭くね？」

「消耗戦って奴か…？」

「わからないけど思わぬ感じでキツくなって来たね…」

「想定していた事態とは違うが楽は出来んということか…」

「まあ兎に角」

辻自身もげんなりしつつ、

「まずは今日一日、乗り切ろう」

「やべえ…超疲れた」

精魂尽き果てた様子で中村が床に倒れ込む。

時刻は既に七時を回っていた。あれから円山公園、八坂神社、哲学の道、銀閣寺と3ーAは名所を回り、各所で同じ数の妨害行為を辻達は潰して来た。チンピラが生徒に絡む、昼食への下剤の混入、看板を入れ替え生徒を迷子にさせる、害虫の大量発生など、一々思い出すのも馬鹿馬鹿しい嫌がらせの数々を辻達はことごとく潰して来た。ネギにも逐次連絡を取り誘導し、3ーA一行は無事に初日の修学旅行を満喫したのであった。今頃夕食を終え、各自自由時間に入っている頃だろう。

「…もしかしたらこれが後四日か？…やべえ本当に襲って来られた方がナンボか楽だぜ」



「豪徳寺、不謹慎なこと言わない。…とはいえ本当に疲れたね」  
「もう言うな、とりあえず食事にしよう。ホテルの女将に用意を頼むぞ」

因みにここはネギ達一行の泊まっている『ホテル嵐山』に隣接する『ホテル青山』の一室だ。なんでも露天風呂は共用で繋がっている姉妹旅館とのことである。

「…どうでもいいけどよくこんな立派なホテルの部屋取れたな。しかもネギ君達が泊まっている隣の旅館なんてベストな位置」

辻が尋ねる。何しろ辻達が京都行を決めたのは数日前の話である。普通に考えればこんなベストな位置取りは不可能だ。

「まーなー。俺のツテを頼ってなんとかなった。感謝しやがれよてめえら、料金も割り引いて貰ってんだからよ」

中村が軟体動物ように床で蠢きながら言う。

「なんか珍しく馬鹿が役に立ってるがツテってなんののだ？」

「説明すんのが面倒臭え。それより飯だ飯」

「…いや、俺は先に風呂に行ってくる。銀閣寺で仕掛けられてた炭酸飲料の大量爆発を処理した時に巻き添え喰ってさつきから気持ち悪いんだ。お前ら飯は先に食っていてくれ」

辻は立ち上がり風呂道具を片手に立ち上がる。

「あれ？今の時間ってお風呂入れるの？」

「女将さんの話ではあっちの嵐山では男の先生方の入浴時間らしい。それが終わると消灯近くまで生徒と女の先生方が使用するんで今を逃すと当分使えないらしいから今の内に行ってくる」

「おいおい大丈夫か？新田とかがいたらどうすんだよ？」

豪徳寺の言葉に辻は手を軽く降り、言葉を返す。

「その時は洗面所だけ使用して着替えて戻るよ。兎に角今は服を変えたい。ネギ君から何か緊急連絡があったら携帯に連絡をくれ」

「承知した」

「いつてらっしゃい、ご飯は取っておくよ」

「大丈夫と思っていたら何故か女が入ってきてラッキースケベの起くるイベント期待してんぞ〜」

山下に頷き、中村に中指を立てて辻は部屋を後にし、露天風呂に向かった。

「…あれ、この服ってネギ君のだよな」

隣接している脱衣所に入った辻は脱衣籠に入れられている小さなスーツを見て首を傾げる。

「ネギ君も入っているのか、ならある意味丁度いいな」

辻はネギと明日の予定の擦り合わせを簡単にここでやってしまおうと思いつつ。ネギは教員として遅くまで仕事があるのだから話は早い方がいいだろう。

辻は一つ頷き、手早く服を脱ぎタオル片手に露天風呂の入り口に足を向けた、その時。

カシャン!!?と硝子のような物が砕け散る音と共に露天風呂が暗くなる。同時に誰かの鋭い詰問の声を引き戸越しに聞こえてくる。

…なんだっ襲撃!!?」

辻は目を見開き、慌てて持って来ていた木剣を掴み取り引き戸を開け飛び込む。

「ネギ君大丈夫…」ズドオオオオオン!!?」

辻が飛び込むと同時に露天風呂中央の大岩が横に真っ二つになった。

…ハアツ!!?」

見れば岩陰には小さな人影、こちらがネギだろう。ならば襲撃者は自動的に…

「そつちかああああ!!?」

朧な月明かりにも微かに煌めく白刃を手に岩を両断した人影に向かい、辻は瞬動で距離を詰め、打ち掛かった。相手は真剣などどビビってはいられない。刃物相手なら尚更ネギを庇わねばならないのだ。

「えっ、また襲撃!!?」

「いや兄貴、今の声は辻の旦那の…」

ネギとカモの声を後ろに振り下ろした辻の大上段からの打ち下ろしを小柄な人影は刃を寝かせて受け、辻の胴体を横薙ぎに払う。

辻は木剣を削られつつも白刃を上逸らし、素早く次を見舞おうとした次の瞬間、

フランス エクサルマティオー  
「風花・武装解除!!?」

ネギの声と共に人影の手に持つ白刃が明後日の方向に弾かれ、飛んで行く。

…よつしやネギ君ナイス!!?

辻は木剣を引き、襲撃者に全力の一撃を…

「……あ?……」

打ち込む寸前辻は間拔けな声を上げ、硬直する。

その理由は人影の濡れた輝きを放つぬばたまのサイドテールの黒髪、そして夜目にも鮮やかな白い肌と微かに見えるその整った顔立ちは…

……桜咲い☒

余りの事態に辻は固まるがそんな迂闊な辻を目の前の少女は放っておいてくれなかった。

「…フツツ!!?…!!?」

その少女——刹那は木剣に肘を叩きつけ辻の手から木剣を弾くとそのまま辻にしな垂れかかりながら足を絡め、辻を露天風呂の床に押し倒す。

「っ痛ツツ!!?」

まだ混乱したまま、まともに後頭部を打って呻く辻に構わず、刹那は辻の首根つこを片手で圧迫しながら、野郎ならば誰でも余程切羽詰まった状況出ない限り遠慮して狙わないであろう男の象徴シンボルを…思い切り握り締め、圧迫した。

次の瞬間、露天風呂だけでなく二つの旅館の近辺まで響き渡る程の音量で、鶏が絞め殺されるような悲痛な絶叫が轟いた。

「…明日菜、なんやろ今の凄んごい悲鳴…」

「…わ、わかんない…」

丁度脱衣所の目の前にいた木乃香と明日菜は辻の悲鳴に固まり、

「…なんだ今の胸が締め付けられるような絶叫は」

「…露天風呂の方じゃない?」

「つてことは辻か今の!?？」

「確実になんかあったぞ!!? ラツキースケベか!?？」

「こんな悲鳴が上がるラツキースケベがあるか阿呆! 兎に角行くぞ!!  
?」

中村達は尋常でない辻の悲鳴に駆け出した。

「つ、辻さーん! 大丈夫ですか!?？」

「む、惨え。なんつう恐ろしい真似を…」

ネギは凄まじい悲鳴を上げた辻を心配し、状況を察したカモは震えながら内股になる。

「動くな!!? 妙な真似をすればこいつの命は無い!!? 貴様ら何者だ、  
答えねば握り潰す…ぞ…?？」

刹那は風呂の中にいるネギを牽制し、馬乗りになっている辻の顔を覗き込み恫喝をしようとして…固まった。

「……つ、………辻、部長?………」

辻は答えず、白目を剥いていた。

## 4話 混沌劇場

保存日時：2015年01月05日(月) 23:04

…え? どうして、なんで辻部長が。

刹那は絶賛混乱中だった。入浴中に殺気を感じ、攻撃を仕掛ければ新手が飛び込んで来て打ち合いになり、何故か一瞬隙を見せたので押し倒し、急所攻撃で無力化したらそれが辻だったのだ。思考が固まるのも無理はないが、周囲は刹那を放っておいてはくれなかった。

「せ、刹那さん辻さんから放れて下さい!」

「てめえ桜咲 刹那! やっぱり西のスパイだったんだな、旦那に対してなんておっそろしいことを!!?」

ネギは杖を構えて刹那を威嚇し、カモは男として絶対に許してはいけない非道を働いた刹那に怒りを露わに突っかかる。

「え? あ、ネギ先生…ってえっと、これは……」

思考のまともに戻っていない刹那は要領を得ない返事をネギ達に返す。

カモはそんな刹那の様子にますますいきり立ち、

「何がえつとだこの女あ!!? いいから旦那の逸物をまず離しやがれ! 潰れちまつたらどうすんだ!?!」

その言葉に刹那はようやく現状を思い出す。

…あ、やっぱり私が今乗ってるのは辻部長で、ってことは私、裸の辻部長に裸で跨ってて、私が掴んでる柔らかいのって辻部長の……あ……

「~~~~~」

瞬間的に刹那の顔が茹で蛸のように真っ赤に染まる。ズバツ! と音が聞こえそうな勢いで辻から両手を放し、わたわたした動きで立ち上がろうとして見事に濡れた床で滑って辻の上につ伏せで倒れ込む。ちなみに結構な勢いだったらしく、下になっていた辻がグエツと蛙の潰れたような声を出していた。

間の悪いことは重なるもので、丁度そのタイミングで脱衣所に男女の扉がほぼ同じタイミングで開けられた。

「あのくさつき凄い声出してはりましたけど、大丈夫ですか？」

女の脱衣所からは心配げな木乃香が顔を出し、

「一ちやああああん!!?生きてつかああああっ!!?」

男の脱衣所からはひたすらやかましい中村が顔を出した。

「あゝっ」

刹那が年頃の女子とは思えない声を上げた。

辻と刹那の状況を客観的に見ると、二人共に湯の側で暴れた十斬り合いを短時間とはいえ行った所為で肌はしっとり濡れ、顔は上気している。二人共に生まれたままの姿であり、辻が寝そべった上に刹那が跨り辻の胸板に両手をつけてしな垂れかかっていた。

結論を言えばどう見ても情事の真っ最中を覗かれた男女にしか見えなかった。辻が白目を剥いたままならば多少は違和感もあつたろうが、更に間の悪いことに先程刹那が倒れ込んだ際の衝撃で辻は意識を取り戻し、薄目を開け、何処か熱に浮かされたような声で、…桜咲、そこは…駄目だ…などと呟いていた。最悪である。

顔を覗かせていた木乃香と中村が無表情になる。その能面のような顔にネギが小さく悲鳴を上げて後ずさるが、この場にそれを気遣う人間はいない。二人の後ろからは明日菜や豪徳寺達が遅れて顔を出し、あまりの光景に絶句しているが、矢張り木乃香と中村は反応しない。

「あの、これは…」

刹那の声を完全にスルーし、木乃香と中村はゆつくりと互いに顔を見合わせ、やはりゆつくりと同時に頷く。そして中村がゆつくり前に向き直り、次の瞬間その姿がかき消える。

中村は音も無く、風呂の湯を殆ど揺らすことも無くネギ達の傍に現れた。幽霊のように唐突に傍に出現した中村にネギとカモが揃って悲鳴を上げるが中村は一顧だにせず、ネギを抱え上げまた姿がかき消える。中村はやはり音も無く、脱衣所の入り口にネギを抱えたまま着地した。

奇妙な集中力によってこの瞬間中村の瞬動は縮地の域に達している。再びゆつくりと木乃香と中村は顔を見合わせ、木乃香が無表情の

まま親指をぐっと上げると中村も無表情のまま親指を上げ返す。そのまま二人は脱衣所の中に引き返し、辻と刹那を振り返ると、揃ってゆっくりと頭を下げ、同時に告げて扉を閉めた。

「お邪魔して申し訳ありませんでした…」

ピシヤツと静かに扉の閉まる音に呆然としていた刹那がハツと我に返る。

「いや、待って！お願いだから待って下さいお嬢様、先輩方!?!?」

刹那の必死な声に構うこと無く扉の向こうでは肅々と撤収の用意が進められていた。

「明日菜、早くここから出るで。ウチらが邪魔になったらあかん」

「え、いや木乃香、今の辻先輩と木乃香が前話してた桜咲さんじゃ…」

「せや、ウチの世話になった先輩と今でも親友やと思ってるせつちやんや。だからこそ、今は邪魔したらあかん。せつちやんが意を決して辻先輩にアタックしたんや、きつと。明日菜、クラスの皆にもしばらくお風呂に近寄らんように言ってる聞かせるえ」

「な、中村、今のは一体…」

「ここら一带を封鎖すんぞてめえら。辻の一世一代の大勝負だ、絶対邪魔を入れさせないのが友情ってもんだぜ」

「え、じゃあ何か？本気でやってたのか今の？」

「間違いねえ、きつと桜咲が暴走して辻を押し倒したんだ。さっきの悲鳴はそんな時の辻の悲鳴だろう」

「…何かの間違いではないのだな？」

「俺を信じる。友人の秘め事に口出す程空気読めなくはねえよ」

「…わかった」

「わかつちやダメです!!?!誤解です！不幸な偶然なんです!!?!」

刹那は脱衣所の扉に取り付き、二つの扉を全力で引き開けようとすがるが、中村達の方とはともかく何故か非力な木乃香が抑えている筈の女子脱衣所までビクともしない。

「明日菜、親友が友達より男を選んだゆうなら、笑って祝福してあげんのが、真の友達やんな…?!?!」

「こ、木乃香?!?!なんか桜咲さん出てこようとしてない?!?!なんで青

筋浮かべながら扉抑えてるの!?!?」

「絶対にここは通さねえ、諦めて辻とクチュクチュしに戻りやがれ桜咲い!!?!?」

「なあ、やっぱなんかの間違いじゃねえのか?」

「そ、そうです中村さん。辻さんは刹那さんに……」

「いや、絶対にあれはS○Xの真っ最中だった!!?!?俺の目に狂いはねえ!!?!?」

「お嬢様!どっちを選んだとかそういう話じゃありませんから!?!?そして中村先輩、貴方の目は狂いまくりです!!?!?」

刹那が必死で扉に取り掛かる中、辻がゾンビのようにゆっくりと蠢きながら蚊の鳴くような声で呼びかける。

「…桜、ぎ、き……」

「すみません!!?!?本当に申し訳ありませんが辻部長!!?!?しばらくじつとしていて下さい!!?!?このままでは私達は公衆前で堂々と情事に及んでいた変態になってしまふんです!!?!?」

力の限り叫び返す刹那に辻は微かに頷き、告げる。

「…外にで、る時は…。バス、タオル巻いて、行けよ……」

色々見えてたぞ、と口の中だけで呟き、辻は再びダウンする。

いよいよ収集のつかなくなりそうだった事態を破ったのは女脱衣所から響き渡った悲鳴だった。

「ひゃあああああつ!?!?」

木乃香の悲鳴と共に脱衣所の扉の抵抗が唐突に無くなり、刹那がつのめる。

…:今度はなんだ……?!

辻は動こうとするが、局部から伝わる鈍い痛みを一度震わせる  
と再び脱力する。

「なんだ今の悲鳴は?」

「ち、桜咲があつちの扉を突破しやがったな!!?!?やらせねえぞ今や完全はじめに「ちちゃんの嫁!総員踏み込め、近衛ちゃんの援護じゃあつ!?!?」

「おい待て馬鹿、そっち女子の脱衣所だろうが!?!?」

「しかもタイミングにまだ桜咲ちゃん裸だよね!?!?」



「ちつあの馬鹿を止めるぞ、続け!!?」

「つて言うか辻さんは大丈夫なんですか!!?」

「ああ?なんで辻の心配……うお!!?辻が死んでる☒」

「え?なんで!!?」

「さては桜咲に搾り取られすぎたか……桜咲い!!?てめえ童貞相手に飛ばし過ぎだこの肉食系女子!」

「不名誉な言いがかりはやめて下さい!!?というかそんなこと言っている場合ではありません!!?お嬢様が危ないんです!!?」

「…お嬢様とは近衛後輩のことか、……何!!?」

「うおおなんだこの小さい猿!!?」

「え、なににに!!?今度はなんなの!!?」

「こ、木乃香さん!!?大丈夫ですか!!?」

「あ、ちよつとネギ、なにさつきからどうなってるの!!?辻先輩と桜咲さんが絡んでたと思っただら何この下着ばっか狙ってくる猿!!?」

「こ、ここのは理想郷か!!?美少女三人がほぼ全裸の露天風呂だと!!?そこの猿共、お前ら俺の同志だな!!?」

「そこで死んでいろクス!!?桜咲、とりあえずお前が踏み込んで猿を……」

なんとというかえらい騒ぎだった。

…さつきから十ダースは突っ込み所があるのに体も口も動かん…

辻ががっくりと項垂れる。

その後もなにやらしばらく騒ぎが続いていたが、何故か木乃香が小さな猿達に担がれて女子の脱衣所から出てきた。

…痛みのあまり幻覚見てるのか、俺?

だがその幻覚は御輿が悲鳴をあげながらウツキウツキとひたすら腹の立つ掛け声と共に近づいてくる。

……………つつ!!?!!?!!?!!?

「ウキウキ五月蠅いわ糞猿があつ!!?!!?」

ブチ切れた辻が怒りを力に変えて跳ね起き、常人が喰らえば足首ごと持っていかれそうな水面蹴りを猿達に見舞った。

「ムキ~~~~」

猿達は去り際まで腹の立つ間拔けな悲鳴を上げながら真つ二つにぶち斬れ、紙に変わった。

「ひゃあっ!??!?」

支えが無くなり、落下する木乃香を、気力を振り絞って辻が受け止める。

「あ、辻先輩……ってひゃっ!!?!?す、すいません、辻先輩、私今……」

「わかっている、誰かバスタオル、大至急!!?!?」

裸体を隠して真つ赤になりながら恥じらう木乃香を見ないよう床に降ろしつ辻は叫ぶ。

「お嬢様、ご無事ですか!!?!?」

刹那がタオル片手に辻と木乃香の方へ駆けて来る。

「これを！お嬢様、怪我などしておりませんか!!?!?」

「へ?う、うん、大丈夫やせつちゃん。……えくと、せつちゃん、なんやわからんけど、心配してくれるん?ありがとう……」

「あ………」

刹那は瞬時に気まずい顔になり、助けを求めるように辻の顔を見て、更に気まずそうな顔になり、木乃香にバスタオルを押し付けると、落ちていた白刃を拾い上げ、走り去った。

「あつせつちゃん!!?!?」

木乃香が呼びかけるが声は返らない、後にはなんとも言えない沈黙が残された。

「……せつちゃん………」

「……近衛ちゃん、しつかり……」

辻は痛みを堪えながら木乃香を気遣う。理由はわからないが、刹那が木乃香を避けているのは明白だ。この修学旅行中に仲直りをしてみせると息巻いていた木乃香はどんな心境なのか、辻には想像もつかなかった。

「……ウチのことは良くないけどこの際ええ、でも一緒にお風呂入るくらい仲良うしてる彼氏さん置いていったらあかんやんか………」

「近衛ちゃん、急にギャグに走らないでくれ、反応に困る。って言うかそれギャグだよ、冗談で言ったでしょ?!?!?そうだと言ってよ近衛

「ちゃん!!?」

悲しそうな顔でとんでもないことを口走る木乃香に辻は全力でツツコミを入れる。

「お〜い辻、桜咲帰っちゃったわ、今回ばかりはマジで悪い。まぐわいの邪魔しちゃった」

「問題はそれでは無いわ阿呆。今のも西の連中とやらの襲撃ならやつら誘拐未遂犯だぞ。洒落にならない事態になってきたな」

「いや、本気でいたしてた訳じゃ無いだろうけど辻と桜咲ちゃんの方も充分大事だよね?」

「おい本気で状況がわからねえぞ辻、何が起こった?」

「あ、辻さん、木乃香さん!大丈夫なんですか!?!?」

「旦那あ!もう動いて大丈夫なんですかい!?!?あんた計り知れないダメージを受けたんだ、ゆっくりと休養を…」

「ちよつと木乃香、大丈夫!あ、辻先輩!桜咲さんと一体こんなところになにしてたのよ!!?」

「ああもう俺に説明できることは全部説明するからまず服を着させろお前からあああつ!?!?」

辻は今だに裸であった。

なんだかんだあつて木乃香は一旦ネギと明日菜に任せ、辻は部屋で中村達に露天風呂での一件を語った。

「…という訳で繰り返すが俺と桜咲は何も疚しいことはしていない。あれは事故だ」

辻が言い切つて中村達を見るとなんととも言えない顔で辻を全員が見ている。

「…なんだよ?」

「…いやお前、確実に何か持つてるなあ、と思つてよ」

中村が呆れ半分、感心半分で辻に言う。

「普通そんなタイミングにドンピシャで飛び込んでそんなことになつて、間が悪く俺達に目撃なんてされねえだろうか?」

「うん、なんて言うかご愁傷様だね…」

「…色々言いたいことはあるが、辻。…潰れてはいないだろうな」

「ああ、何とか大丈夫だ。…最も明日は血尿が出るかもしれないが…」

「…「うわあ……」」

四人が聞いているだけで痛いという顔で顔を顰める。

「ともあれ、俺と桜咲の件は良くないが今はいい。それよりあの猿は…」

「俺達もよくわかんね。いきなり近衛ちゃんの悲鳴上がって女子脱衣所から見たら猿が二人の服脱がしてやがった。西の連中とは仲良くなれそうだけ」

「黙れ。今までの嫌がらせとは状況が違ってきたな…」

「うん。ネギ君の妨害っていうより、近衛ちゃん自身を狙っていたみたいだね」

「なんでまた近衛なんだ？人質にでもしようってんならもつと狙い易い奴がいたろうによ」

「確かにな。わざわざ戦力の密集している所の近衛後輩を狙ったのだ、ネギ関係の問題とはまた別に問題がありそうだな…」

「う〜ん」

辻は唸る。木乃香自身が狙われる理由など検討もつかない。せいぜいこちらに木乃香が関係のある点といえ、ネギと一緒に暮らしていることと刹那と親しかった位のことしか…

「……それだ」

「は？」

「どうしたの、辻？」

突然閃き立ち上がった辻を中村達は不思議そうに見やる。

「近衛ちゃんは関西呪術協会自体に関わりがあるかもしれない」

「…何？」

「どういうことだ、辻？」

「本来勝手に話すのは良くないんだが、非常事態だ。近衛ちゃんには後で謝るとして、聞いてくれ、お前ら」

辻は木乃香と刹那が幼馴染であることから、麻帆良に二人が来るまでの話を中村達に言って聞かせた。

「…成る程なあ。つまり二人の出身がここ京都で」

「近衛ちゃんはずつかいお屋敷に住んで友達になったのは剣・のお稽古してた桜咲ちゃんぞ」

「その桜咲は魔法関係者、その桜咲が幼少時から出入りしていた家の娘となるぞ」

「近衛後輩も魔法に何かしらの形で関わっているかもしれない、それもこちらの陰陽師関係で、か…」

「…そもそもよく考えて見れば近衛ちゃんは麻帆良学園学園長の孫娘でその学園長は魔法関係者のトップだからな…」

…また問題が増えてしまったなあ…

辻は溜息を吐く。桜咲の件はこの際考えないにしても色々厄介な事態がてんこ盛りである。と、その時。

「お？メールだぞ、辻。お前のだ」

中村が投げ渡してくる携帯を受け取り、中を覗く。

「…ネギ君が一度こっちに集まって状況を纏めませんかっさ」

「おう、丁度いいんじゃないか？」

「ああ、この際だ。昼間からの巫山戯た嫌がらせも含めて対策を講じよう」

「んじゃ、行くか」

「だね。……辻？どうしたの？」

他の四人が立ち上がる中、座り込んだまま動かない辻に山下が不思議そうに声をかける。

「…俺はいかん」

「「はっ？」」

「俺達は情報共有をもう果たした。後はお前達が説明してくれ。俺は疲れた、もう寝る」

「おいおいなに言っただ一はじめちゃんよお。この状況でんなやる気の無え態度が許されると思っただのか？」

「そうだぞ辻。俺らが帰ってきてもう一度説明なんざ面倒だ。股間のダメージでかいのはわかるが一緒に来いよ」

「っっていうかどうしたの急に？あんなにやる気だったじゃない」

「…成る程、読めたぞ」

中村達が不審がる中、大豪院が合点がいったとばかりに眩き、辻がピクリと体を震わせる。

「辻、貴様桜咲後輩と顔を合わせたくないだけだろう」

「……………」

大豪院の指摘に辻は沈黙で答える。

「ああ、成る程な」

「そんなことかよまったくこのヘタレは」

「いや、今回ばかりは確かに死ぬ程気まずい気持ちはよくわかるんだけど、辻。非常事態なんだからガマンしてよ。桜咲ちゃんも悪いんだからお互い謝って終わりでいいじゃない」

「……断る!!?」

「うるせ〜ヘタレ! さっさと来やがれ!!?」

「往生際が悪いぜ、辻」

「諦めろ、足を持って、山下」

「…できれば時間を置いてあげたいけど、ごめんね辻」

「離しやがれえええええっ!!? 裸で接触してナニを掴まれるなんて馬鹿なトラブル起こしたんだぞ!!? どんな顔して会えって言うんだお前らあ〜〜!!?」

「知るか」

大豪院の冷たい言葉と共に辻は無情にも担がれて連行された。

## 5話 謝罪合戦 現状把握と風韻急なる一報

刹那がロビーに入るとそこには土下座があった。

「……………」

いきなりな光景に刹那が絶句しているとその土下座もといはじめ「辻一はゴガツという痛そうな音を立てて頭を床に叩きつけ、全身全霊の謝罪を敢行した。

「桜咲、さつきは俺の所為で多大な迷惑とあらぬ誤解をお前にかけてしまった。本つ当に申し訳ありませんでした!!?」

その潔すぎる謝罪の言葉にフリーズしていた刹那は我に返り、慌てて辻の前に跪くと辻に言葉をかける。

「や、やめて下さい辻部長!!?元はといえばネギ先生に私の立場をしつかり伝えていなかったから起こった事故なんです、あまつさえ助けに入った辻部長の…その、局部を…」

「桜咲、忘れてくれ。お互い非があったというなら両成敗ということの水に流そう。俺もなんというかお前の、…裸体をうつすらとはいえず見てしまいました本当にごめんなさい!!?お前が俺を半殺し位に痛めつけたらこの一件は俺もお前も無かったことにしよう、それでいいな!!?」

「よくありませんよ!何故両成敗と言っておきながら辻部長だけ半殺しになるんですか!!?わ、私はその…気にしてませんので、もうこれで終わりにしましょう。私も、あの、裸を見たというのは一緒ですし、寧ろ急所攻撃の分私に非が…」

「野郎が裸見られるのと乙女が裸見られるのが等価な訳が無いだろうが!!?お前は俺を半殺し所か殺しても許されるんだぞ!!?急所の一発位じゃ全然俺の罪はなくならないんだ、しかし今殺される訳にはいかない、故に桜咲、そこに木剣を用意した。それで俺を気が済むまで打ちのめせ!それでどうか勘弁してくれ!!?」

「いいですから!そこまで行くとは誠実を通り越して怖いだけです!!?聖人か何かですか貴方は!!?私は謝罪を受け取りました、頭を上げて下さい!!?」

「桜咲、お前って奴は……どこまでできた後輩なんだよ、しかしここで罪の在処を有耶無耶にはいかん!!? 桜咲、気が進まないならせめて一発! 一発でいいから殴れ!!? そうでもせねば俺の気がすまん!!?」

「ですから貴方は……」

自分の罪状を増やそうとしている変わった被害者A N D加害者二人を眺めながら中村達は呆れた顔で語り合う。

「何時終わるんだあの不毛な謝罪合戦」

「両成敗でいいって最初に言ったの辻なのにね」

「しっかし一ちゃんはじめが叩いて叩いて言ってるのを見ると実はマゾブファツ!??」

「黙れI Q 6 0。律儀すぎるのも問題だな」

「……うくん桜咲さんってクールで冷たい感じの人って印象だったんだけど、あんな姿見ると木乃香の親友っていうの、わかる気がするわ」  
「はい、それだけに僕の勘違いでこんな騒ぎを起こしてしまった本当に申し訳ないというかなんというか……」

「兄貴だけの所為じゃありません、俺っちが早とちりしてけしかけなけりゃ……」

「まあ、辻と桜咲に謝つとけ。仕方ねえよ、魔法関係者からはなんも聞かされてなかったんだろ?」

「仕事やらせる割にこの杜撰な管理体制は一体なんなんだろうね?」

「臭え臭え。つつーかいいい加減戻ってこいよあの似た者カツポー……」

結局ゴネる辻を刹那が宥め、露天風呂の一件が水に流されたのはそれから十分後のことだった。

「桜咲、許してくれて本当にありがとう。お前に救ってもらったこの命、お前の為に捧げよう。お前は俺が守ってみせる!!?」

「やめて下さい重いです。なんというかさこまで行くとありがたいを通り越してウザいですから落ち着いて下さい辻部長」

刹那の寛大? な処置に感激し、一人で盛り上がっている辻を若干冷たく宥める刹那であった。

「夫婦漫才は終わったか? 本題に入ろうぜ」



豪徳寺の言葉と共にようやく一同は本題に入る。若干二名程文句のありそうな顔をしたが黙殺された。

「まず桜咲後輩、近衛後輩が何らかの形で関西呪術協会に関係しているかどうかを知りたい」

大豪院の言葉に刹那は顔を真剣なものに変え、答える。

「…辻部長からお聞きになりましたか」

「悪いとは思ったがな。何かしら関係があるから連中も近衛後輩を襲ったのだろうか?」

…あれ?

辻は刹那の返答になんとなく違和感を覚えたが、それは形にならないまま話は進む。

「仰る通りです。お嬢様、近衛 木乃香様は関西呪術協会の長、近衛 詠春様の一人娘なのです」

刹那の言葉に驚くネギや明日菜達。

「木乃香さんが…!?」

「ち、ちよつと待ってよ。じゃあなんで木乃香は自分の父親のやっているなんとか協会に狙われるのよ?」

明日菜の最もな疑問に刹那は困ったような顔をし、

「関西呪術協会も一枚岩で纏まっているわけではないのです。長は関東魔法協会と融和をはかろうとしている穏健派であり、現在の関西呪術協会の大半はこちらについています。ですが、一部で魔法使いの日本進出を昔から良しとせず、隙あらば関東魔法協会と争いを起こそうとする過激派が存在しています。恐らく敵はその過激派で、長の娘であるお嬢様を自分達の旗印として神輿替わりに担ぎ上げようというのでしよう」

「うわ〜」

「何処にでもある話だけど…」

「超常現象を扱うそしきも人間の集まりか、世知辛い話だ」

刹那の説明にげんがりした顔をする辻達。

「敵は呪符使い、そしてそれらの使う式神です」

「桜咲、簡単でいいから特徴を説明してくれないか」

辻の言葉に頷く刹那。

「成る程、よくわかんねーが怪○くんと戦うようなもんだな」

「お前は一体何を聞いていた馬鹿。エヴァンジェリンとの戦闘を思い出せ、あれと基本は変わらん。魔法が飛んで来て、蝙蝠やら雪女が駒としてこちらを攻める。もしかしたら俺達や桜咲後輩のような肉弾系が護衛としてついている、だ。わかったか？」

「ああそうか。大体理解したぜ」

「手際いいわねー」

「中村や細かいことを気にしない豪徳寺と行動するならこれぐらいの状況把握能力と説明能力は必須なんだ…」

刹那から陰陽師の戦闘法を習った辻達は一部不安な面子が存在しながらも敵に対する理解を深めた。

「とにかく、敵の情報はある程度得たね。これからこの面子で対応に当たる訳だけど、まず第一に、神楽坂ちゃん。君は絶対に荒事になったら手出しをしようとしないうこと、いいね？」

「えっ？」

山下から名指しされた明日菜は驚いたように山下の顔を見る。

「えっと、あたし何もするなってことですか、山下先輩？」

「本当なら今までの話を全部聞かなかったことにして修学旅行を満喫して欲しい位なんだけどね。神楽坂ちゃんはそれじゃ絶対納得しないだろうし、曲がりなりにも僕達と一緒にお風呂場にいたんだ。敵には神楽坂ちゃんはもう僕達の一員と思われてる可能性もある。だから神楽坂ちゃんには近衛ちゃんと一緒にいて異常があつたら僕らの誰かにすぐ連絡する、いわば見張り役を頼みたい。これなら神楽坂ちゃんを近衛ちゃんと一緒に守れるし、危険も少ないからね」

「…うーん」

山下の言葉に、何処か納得できない顔をする明日菜。本来勝気な性格であり、狙われたのは親友の木乃香である。明日菜自身も知らぬうちに好戦的な思考になっていた為、ていといい厄介払いとも取れる言葉に納得できなかったのだろう。

「旦那、いいんですかい？ 姐さんは正式に兄貴と契約していないとは

いえ、兄貴の強化で戦闘力は結構なもんだ。敵の規模がわからねえ以上戦力は少しでも多い方が…」

「勘違いしてんじゃねーよカモ」

珍しく真面目な顔で中村がカモを遮る。

「戦闘力があるとかない以前に神楽坂は素人だろーが。裏の世界とやらのわけわからんえ厄介事にそもそも関わらせちゃいけねえよ」

「そうだ」

豪徳寺が続ける。

「素人って言ったら俺らも似たようなもんだが、俺らはちゃんと関わることを自分で決めてここにいる。ネギはこういう任務だと自分なりに納得したから受けた。加えて半人前とはいえそれを仕事にして金貰ってたんだ、ガキだからって甘いことばっか言ってるらねえよ。でも神楽坂は違う。身近な知り合いが巻き込まれたから善意で助けようとしていただけの一般人だ。無論その心意気は見上げたもんだし、充分ネギには助けになってきたろう。でもこれからの敵はガチだ。相手が素人だろうが女だろうが容赦をしないプロの暴力で考えるのが当然だぜ、危ないなんて言葉じゃ済ませらんねえ。神楽坂、この世界は関わっちゃったら一生抜け出せねえかもしれねえもんだ。お前はそんな物騒なところで他人を傷付けて、場合によっては他人殺してまで生きていく覚悟はあるか？」

「…そんなの、……」

豪徳寺の質問に明日菜は答えられない。

「神楽坂、お前の葛藤はわかる。ないと行って簡単に知り合いを見捨てたくない。だがあると言ってそんな世界に関わるのは正直に言うてごめん被る、だろう？」

「っ!!?、先輩!!?」

「お前は正しい」

大豪院の言葉に声を荒げて反論しようとする明日菜を制し、大豪院は続ける。

「それが普通で、当然だ。俺達のような奴らの方がおかしい。それでいいんだ、真っ当に生きたいと思うのは何も間違っではない。でも

友達が危ないのは嫌だろう？だから俺達や桜咲後輩がいる」

大豪院は順々に指を指す。

「そんな物騒なことは物騒なことが大好きな碌でなし共に任せてしまえ。それでお前の義憤と俺達は、繋がっている。だから任せて、日常を友達と過ごせ。それが俺達の、望みだ」

「…先輩」

「厳しいことも言わせてもらえば」

辻が後を引き継ぐ。

「神楽坂ちゃん戦闘力は気がちよつと使える連中と同程度。それぐらしいの戦力じゃあはつきり言つて、いてもいなくてもそんなに変わらない。現状近衛ちゃんを護るだけなら戦力は足りている。若輩の身で口幅つたいことを言うけれど、下手をすれば足手まといになる」  
「うっ……」

明日菜は首を竦める。正直に言つてネギの魔力を貰った所で、目の前の辻達に到底敵う気はしないのだから辻の言うことは正しいと理解できたからだ。

ややしよげたような明日菜の様子に辻は微笑み、

「キツイ言い方をして悪い。神楽坂ちゃんの気持ちはありがたい。でもこういう時の為に俺達はわざわざここに来ている。ここは俺達に任せてくれ、神楽坂ちゃん」

辻の言葉に、ややあつてこつくり頷く明日菜。

「わかった。あたしがでしやばつて却つて邪魔になったら意味ないし、あたしはあたしに出来ることをするわ、先輩達」

明日菜の言葉に満足そうに頷く辻達。

「ネギ、それでいいよな？お前のサポートは、俺らがきっちりやってやるよ」

中村の言葉に、ネギは勢いよく頷く。

「はい！よろしくお願いします!!？明日菜さん、しっかり僕達が護衛しますから、安心してください!!？」

「はいはい、頼りにしてるわよ」

ネギの言葉に苦笑して頷く明日菜。

「桜咲、それでいいな？」

辻の言葉に、少しして頷く刹那。

「先輩方の方針には私としても賛成です」

そう言いながらもなにか言いたげな様子の刹那に辻は苦笑し、

「桜咲、半素人の俺達が関わるのも不安だって言いたいんだろ？」

「……いえ」

「顔に書いてあるんだよ。それでも俺達は最低限自分の身は護れるし、口出しをしないのは俺との勝負の約束だ。いいな？」

「…はい」

躊躇いながらも頷く刹那に辻も満足げに頷く。

「よし、じゃあ決まりだね」

ガードイアンエンジェルズ

「麻帆良 防衛 隊 結成ですね!!? 関西呪術協会から木乃香さんやクラスの皆を守りましょう!!?」

「え〜何その名前…」

「そこは中村様と愉快的仲間達、だろうが」

「愉快なのはお前のオツムだ。名前なぞなんでもいい」

「締まらないねー」

山下がしようがない、とばかりに苦笑した。

「…では私は廊下で各部屋を見回りますので」

「…わかったわ、木乃香のことはしっかり見とくから心配しないで」

明日菜と刹那は3ーA五班の部屋の前でひそひそと話していた。

あれから配置を決め、各員見張りの為に散った後、木乃香の護衛と風呂の一件のフォロ―に明日菜は部屋に戻っていたが、木乃香が話し疲れて眠ったので刹那と打ち合わせに出てきたのだ。

「…お嬢様の様子はどうでしたか？」

「いや、中々大変だったわよ、木乃香ったら完全に桜咲さんと辻先輩が深い仲だって決めちゃったらしくてあたしが何言っても、ウチのせつちゃんとの仲直りで打倒せなあかんのは辻先輩やったんか…:辻先輩は悪うないけどちよっぴり恨むで〜、とか言ってるのよ」

明日菜の言葉に刹那はがっくりと項垂れる。

「…そうですね?…」

刹那の様子を見て明日菜は軽く首を傾げた後に尋ねる。

「ねえ、桜咲さんって辻先輩と本当につきあって無いの?…」

明日菜の言葉に刹那がずるりと滑って倒れそうになる。

「なんでそういう認識なんですか誰も彼も!!?…」

小声で怒鳴るといふ器用なことをしてのける刹那に明日菜はややたじろぎながら、

「いや、なんて言うか桜咲さん、私やネギとかバカレンジャーの他四人の先輩に対してはクールって言うか冷静に接してるのに、辻先輩とは結構素で話してるっぽい仲良さそうだなって…」

「辻部長は日頃から部活で接していますので他の方よりも会話はしますし、色々気を使って下さりますので私も頭が上がらないお世話になってる方なのです。憎からず思ってはいますが、恋愛感情とか、そういったものはありません」

刹那はきつぱりと断言するが、明日菜はなんとなく疑っているような顔で刹那を覗き見る。

「…そうかしらねえ?…」

「そうですね!!?では明日菜さん、お嬢様をお願いします。何かあったら真っ先に私に連絡を」

やや憤慨しながら刹那は言い捨て、荒い足取りで廊下の奥に消えて行く。

「あく怒らせちゃったかしら?…」

明日菜は苦笑しながら部屋に戻る。木乃香の無事を確認し、窓際の夕映に挨拶しながら、明日菜はふと思う。

…世話になってるだけの先輩を、普通決闘までして心配しないと思うけどね。

中村から聞いた話を思い返ししながら明日菜はやれやれと首を振った。

『辻、こちら大豪院、異常無し、そちらは異常無いか?』

「こちらも異常無し。じゃあ」

辻は定時連絡の電話を切り、溜息をつく。

：色々大変なことになったな。

決して舐めていた訳では無いが、想定を遥かに超えて話が大きくなっていくのも事実だ。不安もある、大きなことを言って参戦したが、自分達の力が通用するかは試して見なければわからない。他の四人も内心不安で無いはずは無いのだが、少なくとも表面上は平然としている。辻もネギ達の前では泰然と構えていたが、一人になるとどうしても思考がネガティブになりがちだ。

：俺が向いていないと言われるのはこういう所かもな。

そもそも辻は争い事が好きではない。実力を高め合い、練磨し合う鍛錬や試合は好きだが己の我を通し合う勝負、実戦といった類の言葉はどうにも好きになれない。

：そんな俺があいつらとつるんでいられるのは、俺が反吐が出る程嫌いで狂おしい程好きな、あれの所為であり、お陰か……

しょうもない。

辻は再び溜息をつき、思考を切り替える。今は見張りに集中しなければならぬ。

と、その時、懐の携帯電話が鳴り響く。

……？定時連絡には早いけどな……

不思議に思いつつ、辻は電話に出る。

「はい、もしも……」

「辻先輩!? ごめん、木乃香がゆーかいされちゃった!!? どうしよう!?」

……はあああ!?!?!?!

辻は思わず硬直した。

## 6話 追跡 偽装 発見 戦闘

中村は激怒した。必ず、かの木乃香を拐ったにつくき誘拐犯を除かねばならぬと決意した。中村には難しいことがわからぬ。中村は、空手とエロスの求道者である。鍛錬をし、エロいことを考えエロいことをして暮らして来た。けれども女の子のピンチに対しては、人一倍に敏感であった。(by 走れエロス)

「訳のわからんモノログ入れてねえで走れ中村!!?」

豪徳寺の怒号が夜の京都に響き渡る。

全員の携帯に明日菜と刹那から木乃香が誘拐されたとの連絡が入ったのがほんの1〜2分前。泡を食って全員周りを見渡し、飛び去る巨大な猿を見た中村が、

「こつちにいたぞうおううう!!?!?!?」

と周り一辺に轟く大絶叫を上げたのがつい先程。現在、声を聞いてあつという間に集まって来た全員で猿を追跡中であった。

「て言うか何あのかい猿?!?着ぐるみ?縫いぐるみ?!?」

「恐らく敵の式神です!遠隔操作か術士が直接体に纏っているのかわかりませんが馬力の出るパワータイプの式でしょう!!?」

「だから間抜けな跳躍の割に速いのか、面倒な!!?」

「このまま走って逃げる気なんでしょうか?!?」

「わっかんねーけどいくら速えつつあったってこんぐれえなら見失いはしねえぞ?!?」

ネギの疑問に中村が答える。

「だな、このままどつかで追いついて…っておい?!?駅ん中入ってくぞあの猿!!?」

豪徳寺の言葉通り、猿は木乃香を抱えたまま駅の中へと駆け込んで行く。

「何あの猿まさか電車で逃げる気?」

「逃走経路が丸分かりだぞ、何を考えている?」

「阿呆なんじゃねえの?!?昼間っから馬鹿みてえな嫌がらせばっかだしよお!!?」



「中村に馬鹿扱いとは連中も末期だなあおい!!?」

「どういう意味じゃワレエ!!?」

「聞いてわかんねえかキングオブ馬鹿!!?」

「わー!!?二人とも喧嘩してる場合じゃあ無いですよ!!?」

「どちらにしろ考えている時間はありません、行きます!!?」

刹那の声に従い、全員駅の中へと進む。

「人がいないな、終電間際だっというのに!」

ガランとした構内を見て山下が疑問の声を上げる。

「人払いの結界です、一般人は立ち寄れません!くっ、私が付いていながら…」

齒噛みして刹那は猿の後を追う。

「不甲斐ないのは皆同じだ!兎に角電車に乗せるな!!?」

大豪院が叱咤し、改札口を乗り越える。

「やべえ、もう電車が出る!!?」

既に扉は閉まり、電車が動き出していた。

「ど、どうでしょう!!?」

狼狽するネギに対して不敵に中村は笑い、

「こうすんだよ…裂空双掌!!?」

中村が両手から撃ち放った気弾が電車の車輪を撃ち抜き、ものの見事に車輪がひしやげ電車が傾く。

「ええええええええ!!?」

「なっ……」

ネギと刹那が驚きの声を上げる中、更に追撃が疾る。

「漢魂あ!!?」

豪徳寺の放った大砲のような気弾が電車の横っ腹に激突、その部分を紙のように引き裂きながら電車を一瞬浮かせ、電車は脱輪してホームの傍に激突、煙を上げながら止まった。

「よし、行こう!」

「訳のわからん力を使われる前に仕留めるぞ」

「ま、待って下さい!!?」

何事も無かったように破れた穴から車内に入ろうとする中村達に

続きながらも、余りにも強引なやり方に刹那が抗議する。

「お嬢様に何かあったらどうするんですか!!?」

「横転した訳じゃねえし大丈夫だろ、あのまま電車を行かせた方が面倒だぜ」

「しかし…!!?」

「桜咲、文句は後で聞く、今は近衛の奪還が先だ!」

「刹那さん、行きましょう!!?」

そう言つて豪徳寺が真っ先に乗り込む。他の面々も次々入り込んで為、ネギの声にやむなく刹那は抗議の声を飲み込み、ネギと一緒に車内へ続く。

「オラ観念しやがれ間抜け猿が、もう逃げ場はねえぞお〜」

中村の言葉通り、車内には木乃香を抱える猿の他、乗客はおらず、退路は脱輪と爆発の衝撃で扉が歪んだらしく、前後共に退路は無い。袋の鼠である。

「……ムキッ!」

巨大な猿は木乃香を座席に寝かせ、中村達に向き直り、シュツシュツ!!?とボクシングのワンツールのような動きを虚空に向け、やり出した。

「…:会話が通じてねえのか?」

「恐らくこれは決められた動きを実行しているだけの自立行動型の式神でしょう。ある程度の判断機能はあるのでしようが、会話をする程の知能は無いようです」

豪徳寺の疑問に刹那が答える。

「つまり追い込まれた場合は突破して逃げろとでも組み込まれている訳だね」

「この猿一匹でか?舐められたものだな」

シャドーボクシングを繰り返す何処となく間抜けな猿に目を細めながら大豪院が言う。

「まあ、なんでもいい。こちとら昼間からの糞くだらねえ嫌がらせの山でフラストレーション溜まりっぱなんだ。ようやくぶん殴れる相手が出てきて嬉しい限りだぜ」

ケツケツケツと凶悪に笑う中村、相当イラついていたらしい。構えて前に出る中村に豪徳寺達が続く。

「待って下さい、ここは私が…」

「桜咲ちゃん、君は僕らがあの猿に攻撃した隙について、脇から抜けて近衛ちゃんを確保するんだ。僕らじや近衛ちゃんを連れ出せてもどいう状態に近衛ちゃんがあるのかわからない、西の術士とやらに一番知識があるのは君だ。…近衛ちゃんに妙な術とかかけられてるかもしれない、君が行け」

前に出ようとした刹那を山下が制し、木乃香を任せる。刹那はその言葉に声を詰まらせ、やがて頷く。

「…決して無理をしないで下さい、皆さん」

「応、つっても安心しな桜咲。見た目と雰囲気で何と無くわかる。少なくともエヴァンジェリンの婆あとは比べものにならない位、弱いぜこの猿」

豪徳寺は不敵に笑う。

「ネギ、お前は万が一俺達が突破されたら魔法であの猿を仕留めろ。後ろの近衛後輩を巻き込まんようにな」

「は、はい!!?」

「頼んだぜ、旦那方!」

大豪院の指示にネギとカモは頷く。

「っし…行くぜ!!?」

「ムキョーツ!!?」

中村が前進し、猿が応じて走り出す。猿は高速で前に出て、中村に對し常人では視認できぬ程の右ストレートを叩き込む。

「へっ!」

中村は鼻で笑って一撃を外に払い、カウンターの逆突きを猿の鳩尾?にぶち込んだ。

「ムキョッ!!?」

猿は胴体部分を見事に凹ませ、奥へ吹き飛ばす。

「ふっ!」

その隙をついて刹那が木乃香の元へ走る。

「あん？」

吹き飛んだ猿を警戒しながらも中村は訝しそうに拳を見る。

「どうした？」

「手応えが無え。まるつきり縫いぐるみか何かを殴った感触だ」

「パンヤか何かでできてるんじゃない？まるつきり見た目は縫いぐるみだから」

「打撃は効きにくいか。少々面倒だな」

中村達が言い合っていると猿が起き上がり、何事も無かったかのようになり再び突進してくる。

「ちっ…面倒臭え」

「変わるか、中村？」

「必要ねえ。つうかこの面子じゃ桜咲か辻以外誰がやつても変わんねえよ。だけど俺でもやり方によっちゃ充分なんだよ…な!!？」

猿の右フックからの左アッパーを廻し受けて両方叩き落とし、中村が眼前に手刀を構える。

「別に斬撃はサムライカップルの専売特許じゃ…ねえよ!!？」

言葉と共に気を込めた手刀を振り下ろす。猿は弾かれた腕を引き戻し、掲げてガードの姿勢を取る。

「甘めえ!!？」

構わず振り下ろした手刀はあつさりと猿の腕を断ち切り、袈裟懸けに胴体部分を半ばまで引き裂く。

「ムツキョオオオオツ!!？」

相変わらず間抜けな叫び声を上げ、猿はゆっくりと煙に変わって消えていく。どうやら今のが断末魔だったらしい。

「はっ、問題にならねえな」

「あつさりしたもんだなおい。まあ、あの吸血鬼が特別強すぎただけか」

苦戦の様子を見せず敵を撃破出来たことに少々拍子抜けの中村達である。まあ、初めての敵で基準になる対象がエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルでは想定する敵の実力も過剰になるうというものだろう。

「ま、これで一件落着かな？」

「油断は禁物だ。近衛後輩を連れてとつと帰るぞ」

「あ、そうでした！刹那さくん、木乃香さんは何ともありませんか？」

☒

ネギが奥の刹那に呼びかけるが返事はこない。

「…？桜咲くどうしたく？」

「なにか問題か？」

「危険な状態ならすぐに医者の方に……」

「……りません」

刹那の声が力無く響く。

「え？なに……」

「これは……お嬢様ではありません!!？」

刹那の言葉に全員が固まる。

「……なに？」

「身代わり用の式神です!!？こつちの猿は……困だったんです!!？」

床に拳を叩き付け刹那が無念の表情で叫ぶ。ボン！と軽い音を立てて寝かされていた木乃香が人型の紙に変わる。

「……おい、つてことは」

「本物はどつか別の場所から……!」

「目立ち過ぎる動きだとは思ったけど、こんな……!」

「してやられたな……お前達！悔しがっている場合では無い!!？今からでも本物の近衛後輩を探すぞ!!？」

「そ、そんな……木乃香さんが……」

「兄貴、しっかりしろ！大豪院の旦那の言う通りだ!!？まだ間に合うかもしれないねえ、全員こんなとこで立ち止まっ……」

カモの言葉が途中で途切れる。

その唯ならぬ様子に失意に沈む刹那に叱咤をして立ち上がらせ、駆け出そうとしていた中村達の動きが止まる。

「か、カモ君……？」

「おい……おかしいぜ……」

ネギの言葉も耳に入らぬ様子でカモは何処か呆然と眩く。

「なんで……」

「首尾よく事は運んだようやな……」

ホテル『嵐山』のロゴが入ったワゴン車を運転する眼鏡をかけた妙齡の女性、天ヶ崎 千草は上機嫌に呟いた。ワゴン車の後部座席には薬で眠っている木乃香の姿がある。

千草はホテル内に侵入し、木乃香を無力化した後、彼女の使う式神の一つ、猿鬼に身代わり用の符を使い創り上げた偽の木乃香を抱えさせ、『なるべく派手に目立つような動きで駅に向かい、電車に乗り込んで逃げ、時間を稼げ』と命令した。

動きが余りにあからさまで感づかれるかと思ったが、見張りや護衛は素人らしき少女を部屋に残し、全員猿鬼を追いかけて行ったようだ。

「ふん、腕は確かかなんか知らんが、経験が足りん、ちゆうことや」

千草はせせら笑いながら車をゆっくりと走らせる。もう護衛はいないにしても焦らず、自然な動きで逃げなければならない。万が一不審がられて警察にでも止められた場合面倒なことになる。

「これでようやくや、ようやく始められる。目にも物を見せてくれたるわ……魔法使い共」

千草は顔を歪めて吐き捨て、ハンドルをカーブに沿って左に切った、その瞬間……

「なんで辻の旦那がいねえんだ？」

唐突に右の前後のタイヤがバーストし、車は右に傾きながら急激に左折して壁にぶつかり、止まった。

「……っ、痛うううっ……」

千草が呻きつつエアバッグから顔を上げ、ハツとして慌てて後部座席を振り返る。

そこには少し扉側に体を動かさながらも、傷一つ無い木乃香の姿があり、千草は安堵の息をつく。念の為シートベルトを着けていたこ



他の全員が慌てて携帯を開き、メールを確認するとそこには短い文面があった。

『あしどめするこっちかい』

「もう仲間に連絡は取った。あいつらの足ならもの数分でこっちに来る。近衛ちゃんを解放して神妙に縛につけ。そうすれば命までは取らない」

辻はいつでも渾身の突きを放てるよう体をたわめつつ、千草に宣告する。

「…囿に引つかからなかったんか。なんでウチが誘拐犯やとわかった？」

「答える義理があるとも？」

辻は冷たく返しながら心の中で安堵の息をつく。

…なんとか追いつけたな……

辻が千草を誘拐犯だと見抜けたのは偶然に近い。最も遠い地点にいた辻は皆より遅れて猿鬼が抱える木乃香を遠くから視認し、木乃香が違うと見抜き猿鬼が囿だと気付いたが、中村達はその時声の届く距離ではなくなっていた。

仕方なく辻は急いで皆にメールを打ち、まだ遠くには行っていない筈の犯人と木乃香を探した。しばらくして、ホテルから業務用のロゴがついたワゴン車が出てくるのを辻は目撃する。この時間帯にホテルの車が出てくるのを訝しく思った辻は近寄り、運転席を見た。すると新幹線に乗っていた売り子がホテルの車を運転している姿を見て千草が黒だと確信し、シヨートカットを重ねて車に追いつき、車の右タイヤを切り裂き車を止めて今の状況にあるのだった。

辻が木乃香を偽物と見抜き、千草が新幹線にもいたと確信出来た理由は言葉では上手く説明が出来ない。

辻にしてみれば一目瞭然でも他の人間に恐らく見分けをつけるのは困難を極めるだろう、辻には見えているものが他の人間には見えないからだ。

…こういう時は役に立つから、癪だよな、本当に。



辻は思いつつ、改めて千草に宣告する。

「そのまま百舌の速贄にされたいか？今すぐ車を降りろ」

…頼むから降参してくれよ…

辻の言葉に千草は口端を歪めて笑い、言い放った。

「舐めんや、ガキ。ポン刀突きつけられた位でイモ引くなら端からこんなことしとらんわ。ウチには引けん理由がある。んな脅しは、通用せえへん」

「…そうかよ」

辻は眩き、次の瞬間全力で刺突を千草の胴体目掛けぶち込んだ。千草は身を捻って逃れようとするが狭い車内で躲し切れる筈も無く、真面に胴体中央に切っ先は当たった、が。

辻の手に打ち込んだ力が吸い取られて無くなるような妙な感覚が走り、切っ先は千草の服の手前で停止する。同時に千草の体のあちこちから、複雑な紋様のようなものが描かれた長方形の紙が無数に舞い散る。

…ああ、やっぱり入らないか。

辻はこの結果に驚かなかった。千草を見ればエヴァンジェリン程では無いが断ちにくそうなのはわかっていたからだ。

…だけどその手の壁は有限だろ…!!?

あのエヴァンジェリンでさえ障壁を最終的には断つたのだ。もう一撃で刃が届くと辻は感覚でわかっていた。

…人を斬りたくなんてないが、グダグダ甘いこと言ってられないんだよ!!?

辻は決意を込めて刀を引き、二撃目を打ち込もうとする。が、

「…っ、調子乗んな、ガキいつ!!?」

辻が打ち込む前に千草が懐から取り出した長方形の紙を辻目掛けて投擲する。辻は本能的に嫌な予感がして咄嗟に斬撃を中断し、斜め後方に跳躍し紙を回避する。

すると紙は辻の横で爆発し、辻は爆風に煽られ道路に転倒する。

…あっ…ぶねえ!?!?

真面に受けていれば粉々になっていたかもしれない一撃に辻は冷

や汗を流す。ある意味当然だが相手は完全に辻を殺す気満々のようだ。

辻が起き上がり、刀を構えると既に千草は車を降り、呼び出したらしい熊の縫いぐるみのような式神に木乃香を預ける所だった。

「熊鬼、お嬢様をお連れしい、くれぐれも丁重にな」

熊縫いぐるみはクマーツ！と間拔けな返事をして木乃香を抱え上げる。

「…近衛ちゃんを放せ」

「はいわかりましたなんてゆうわけ無いやろうが兄さん？このまま失礼させて貰うわ」

「行かせるとでも思ってるのか？」

「追ってこられるとでも思っとるんか？」

鋭い辻の牽制に千草は嘲るように返し、親指で空を指す。

…？

不用意に視線を上げはしませんが辻が僅かに意識を上に向けた瞬間、後方から突然気配が膨れ上がる。

…っ!??

辻は体を強引に捻り、振り返った先に降ってきた輝きを刀で強引に打ち流す。

「きやあああああああゝ!!?」

襲って来た人物は間拔けな悲鳴を上げながら吹っ飛んで転がり、千草の側でようやく停止して、膝を払って立ち上がる。

「あいたたー、すみません遅刻してしもて…」

「安う無い銭払つとるんやから真面目に頼むわ…ああごめんなあ兄さん、上になんかある思うたんはウチの勘違いやったわ」

「この女…」

悪態をつきつつ辻は新手に構える、が…

…女の子？それもいとこ中学生位の…

千草の隣に立つのはフリルのついた西洋人形の着るような洋服を身に纏った、白髪の小太刀と短刀を両手に提げた小柄な少女であった。

どう見ても護衛に相応しいとは思えない外見だが、先程弾いた斬撃は確かな重い一撃だった。

「どうもく神鳴流ですくおはつにく」

間延びした口調で挨拶してくる少女に毒気を微妙に抜かれつつ、

「…神鳴流？それって確か桜咲と同じ流派の…」

「はいく♡月詠いますく」

朗らかな調子で肯定してくる少女ー月詠。

「追って来られん理由がわかったかいな？兄さんはここで月詠はんに遊んでもろてたらええわ。ほな、頼みましたで月詠はん」

「はいくわかりましたく。本当なら大層腕が立つゆう神鳴流の先輩とやり合いたかったんですけどく、お兄さんも中々やりそうですし、楽しみですわく」

のんびりした口調で物騒なことを言う月詠に辻は顔を微妙に引きつらせつつ、刀を構える。

…早く近衛ちゃんとおの女を追わないと。

踵を返し、立ち去る千草と熊鬼に目を向ける辻だが、

「あくあきまへんよくお兄さんく」

言葉と共に見た目と体格からは想像もつかない重く、速い斬撃が辻を襲い、辛くも辻はそれを受け流す。

「女の子の相手するのに余所見しとつたらあきまへんくちゃんとウチを見てくれんとく」

可愛らしく頬を膨らませる月詠に対して辻は刀を構え直しながら、まだ見ぬ中村達に思いを馳せる。

…早く来てくれ、皆。

直後、鋼と鋼のぶつかり合う甲高い音が夜の京都に響き渡り始めた。

## 7話 キマジメ剣士とキチガイ剣士

「走れええええええええ稲妻よりも速く!!?」

「お前がやってみろ!これが精一杯だ!!?」

中村達は駅から旅館までの道を全力で逆走していた。

辻のメールを見て直ぐにGPS機能を用いて辻の現在位置を特定、ホテルから3km弱の地点にいることを確認し、先程から辻が殆ど移動していないことから犯人と交戦していることを中村達は把握した。生憎木乃香の方は寝起きの浴衣姿だった為携帯を所持しておらず、辻と同じ地点にいるかはわからない。だからこそ一刻も早く辻と合流する為に彼らは駆けていた。

：私は、何をやっている？

全力で走りつつも刹那は自問する。

木乃香を護ると息巻いておきながら陽動にあっさり引つかかり護る対象は何処にいるかもわからない。あまつさえ素人扱いして遠ざけようとしていた辻に足止めなどという危険な役目を行わせ、助けられている、これではどちらが護衛かわからない。

そして刹那はそんな状況においても自分がまだ全力で事に臨んでいないのを自覚していた。無論今現在刹那は本気で走っている。手など一切抜いていない。だが少なくともこの状況で辻と早く合流する為ならば、刹那にはまだ打つ手があった。

しかし、それは刹那の禁忌に触れる行為であり、彼女にとってそれを人前で行うなど考えるのも恐ろしいことであった。

：だがそれがどうした。

：お前は何としても、自分の命に替えてもお嬢様を護るのでは無かったのか、お前の覚悟はその程度だったのか……?

刹那は己を叱咤する。だが、刹那は踏み切れない、決意が、揺らぐ。中村達が、ネギが紛れもなく善人だとわかっている、いや、だからこそ……

刹那は拒絶が、怖かった。

……私は……

「桜咲!!?」

己の名を呼ぶ声にハッと刹那が顔を上げるといつの間にか中村達からやや遅れてしまっている。走りながら大豪院が振り向いて刹那に声をかけた。

「何を考えているかは知らん、だが迷うなら今は捨て置き!!? 今自分が出来ることを全力で行え!!? 時間をかけねば結論などは出ん!」

「っ!!?」

まるで思考を読まれたような忠告に、刹那は言葉を返せない。

「難しいことはまず誘拐犯ぶつ殺してから考えろ! もうじき着くぞ桜咲!!?」

豪徳寺の叫びに、見ればホテルが直ぐ近くに見えている。ここから辻の所まで、どういう移動をしても最早大した差は無いだろう。

…言い訳か…

…卑怯者め…

己を蔑みながらも刹那は更に体に鞭を打ち、速度を上げた。

「ぎーんがーんけーん!!?」

「っんぐっ!!?」

真面に受ければ刀どころか腕ごと持っていかれそうな剛撃を辻はなんとか受け流す。

既に千草の姿は見えなくなっている。このままでは木乃香をみすみす攫われてしまうのだが、目の前の月詠という少女は見た目からは想像もつかない手練れだった。

小回りの効く小太刀と短刀の二刀流は絶え間無い斬撃の嵐をこちらの急所目掛けて打ち込み続け、辻はほぼ反撃を許されない。無論、手数が多い分一撃の重さは刹那よりも劣る。だが、こちらが強引に出ようとしたり、連撃の合間に隙が出来る神鳴流の技を用いてこちらを両断しかねない超威力の斬撃を見舞ってくる。八方塞がりとはこのことであった。

…くっそっ、こんな馬鹿げたチャンバラやっている場合じゃ無いってのに!!?」

齒噛みする辻だが突破口は見出せない。これだけ攻めていても月詠には全く隙が無い、少なくとも見積もっても月詠は刹那とそう変わらない実力がある。辻はそれを身を以て体感していた。

「うっっん……」

激しい攻めとは全く噛み合わない緩い調子で月詠が唸る。

「基本に忠実で、堅実にして堅牢。そんな感じの剣ですねっお兄さん」

「……」

容赦無く首を狙ってくる短刀を鰐元でなんとか受けながら僅かに眉を上げる辻に月詠は笑って言う。

「何時もやったらお兄さんみたいなお攻めきれん人は喜んで喰いに掛かるんですけど、今日は噂に聞いてた先輩とやり合えるかもしれん思ってたからでしょうか」

月詠は僅かに目を細め、

「…正直ちよつと退屈ですわ」

月詠は跳ね上げた小太刀で辻の刀を打ち払う。僅かに体勢の崩れた辻に月詠は両の刃を輝かせ、告げる。

「そろそろ終わりにさせてもらいますわ」

放たれるのは必殺の威力を込めた超速度の連撃。

「にとくれんげきぎざんてつせくん！」

「……っつっ!!?!!?」

ヤバイ。

これは受けきれないと辻は悟った。

故に辻は受けにはいかなかった。

「あやっ」

月詠は初撃をぶち込みながら疑問の声をあげる。

辻は振り下ろされた小太刀を、刀を背負うようにして肩越しに受け、次の短刀が体を斬り裂く前に全力で月詠に体全体でぶつかりに行った。

「っ!!?」

月詠の振り上げた短刀が腕の肉を削るが、構わず辻は体当たりで月

詠を後ろに吹き飛ばす。

：剣で圧倒できる程腕に差は無い、気の扱いでは明らかに向こうが上！なら俺が勝っているのは、体格差と、体重差！！？

空中で体勢を立て直し、着地する月詠に辻は全力で刀を大上段から振り下ろす。

「くっ！」

初めて苦鳴をあげ、小太刀と短刀を交差させ鎬で受ける月詠。辻は構わず、刀から片手を放し手の塞がった月詠の腕を掴む。

「なっ…」

辻は腰を沈めながら右足を軸に旋回、しやがんだ体勢の月詠を強引に腕力と体重の乗った遠心力で地面から引っこ抜く。

：少なくともこの投げを堪えられる程の身体能力はこの女には無い！！？

辻は月詠を一切の容赦無く地面に鋭角に叩きつけた。

「ぐっ！！？」

真面に左肩から背中にかけてを打った月詠はくぐもった悲鳴を上げる。

辻は投げで掴んだ腕を放さないまま右足を後ろに、まるでサッカーでシュートを放つように高々と上げる。

驚いたように見開かれた月詠のこちらを見つめる瞳を見据えながら冷たく辻は言い放つ。

「…お前なんか構ってる暇無いんだよ」

直後、辻の全力のサッカーボールキックが月詠の頭を蹴り上げた。

「ガッ！！？」

月詠の頭部がバネ仕掛のおもちやのように跳ね上がり、戻る。短い悲鳴を上げた後月詠の眼から光が消えた。

「……っ、ふううっ……！」

残心を取った後、辻は大きく息をついて月詠の腕を放す。

：正直女の子にやるような攻撃じゃ無いけどな…

辻は顔を顰めながらも、今は非常事態、甘っちょろい考えは無しだと気を取り直し、斬られた右手をゆっくりと開閉する。

…よし、動く。筋や骨はやられていない。

袖口を破って傷口に巻き付けた後、辻は屋根に飛び上がり上から千草を追跡にかかった。

…近衛ちゃん、待っててくれ!!?

辻が去ってしばらくした後、ピクリとも動かず地面に転がっていた月詠が、唐突に跳ね起き、油の切れたゼンマイ人形のような不気味な動きで体全体を捻じくねらせる。

「……フ……」

「ゴキリベキリと首を鳴らして頭を左右に振る。」

「……ウフフツ……」

堪えきれぬとばかりに月詠は口から笑いを溢す。

「ウフフフフフツ、なんですかお兄さん、詰まらん動きしかせえへん思たら急にあんなに強引に……」

「ゴキツ!!?と一際大きな音を立て、九十度近く真横に月詠の頭が傾く。」

「……ええ顔でできるやないですか、お兄さん♡」

嗤いながら月詠は落ちていた小太刀と短刀を拾い、宙を舞う。直ぐに白い後ろ姿は辻の消えた方向へと、闇に紛れた。

「ちっ、車を潰されたんは痛かったわ……」

千草は熊鬼の肩に乗り、移動しながら忌々しげに吐き捨てる。

時刻は真夜中に迫ろうとしており、道路に人影は全く無い。だが、巨大な熊の縫いぐるみが浴衣姿の少女を抱え、肩に女性を乗せてそれなりの速度で移動する様が目につかない筈は無い。全く街に人が出ていない訳が無いのだ。目撃されて騒ぎにでもなれば、近くまで来ていると言っていた護衛達に追いつかれてしまうかもしれない。

故に人気の無い道を選んで逃げている千草だが、言うまでも無くそれでは大通りを直進するのに比べ時間がかかる。

……こんなことやったら移動用の式を持参してくるんやったわ。

千草は後悔するが、後の祭りだ。

兎に角もう少しで合流地点に着く、そうすれば目的の第一段階は突



破だ。

千草はそう自分に言い聞かせ、逸る気持ちを抑えて裏路地をゆつくりと進む。が、

「…止まれ」

後ろから響く声に千草は身を震わせ、まさかと思いつながら慌てて振り向く。

果たしてそこには刀をだらりと下げ、鋭い目付きで千草を見据える辻の姿があった。

「なっ…月詠はん、こないなガキにやられたゆうんか!?!」

「充分強かったがね。楽しみに人斬りに来てる人でなしなんかにはやられる訳にはいかないんだ」

辻は荒い息をつきながらも刀を構える。手傷はそう深くは無いが、血が止まらない。あまりダラダラと戦っては行かないようだ。

「…はあっ…もうええわ」

辻がジリジリと間合いを詰めていると千草が溜息と共に言い放つ。

「…なに？」

「もういい、つてゆーたんや。曲がりなりにもガキやし、月詠はんにも殺さんようにとだけは言うとしたがな。ここまで邪魔するんやったら関係ないわ」

千草は懐から複数の札を取り出す。

「…本気で殺ったる」

千草は懐から木札を取り出す。今まで見た紙札とは表面の文様から何から造りがまるで違い、否応なしに「奥の手」だと理解させられた。

辻は警戒して歩調をやや緩める。辻の知識ではあれが先程の爆発のような攻撃用なのか傍らにいる熊鬼のような式神を召喚するものなのかすらわからない。

「来いや、獅鬼!!?」

木札の文様が輝き、朧な影が路上に現れる。次第にその影は輪郭をはっきりさせていき、やがてはつきりとしたその姿は、巨大な四足獣だった。粒らな瞳を持つ頭の周りには等間隔に節の入った環状の飾

りを持ち、全体的に丸みを帯びた形状フォルムの体は黄色の短い毛で覆われている。その姿はまさしく…

「ポ○・デ・ライオンじゃねーか!!?」

辻の力の限りのツツコミが炸裂した。

千草は露骨に動揺しつつ、

「な、なんの話や? ウチはデザインをパクったりなんてことはしとらんぞー!」

「語るに落ちてんじゃねーか!!? てめえ今までの緊張感返せこの女ーっ!!?」

「や、喧しいわ!!? 兎に角可愛らしいのは見た目だけや! ズタズタにしたるわガキいつ!!?」

「その間抜けな盗作珍獣でやれるもんならやってみろデザインセンス0女!!?」

「誰がいい歳して少女趣味の痛女や!!? もうええわやったれ獅鬼!」

「ポーンツ!!?」

「言つてねえよ! そして隠す気ねえなこの女!!?」

ツツコミに忙しい辻に向かって獅鬼が加速する。次の瞬間その姿が金色の風となった。

「うおわあっ!!?」

辻が慌てて右に飛び、そのすぐ脇を獅鬼が掠めて路地の壁に激突、蜘蛛の巣状の巨大なクレーターを作成する。

「うお……………」

振り返って惨状を目にした辻が冷や汗を流す。かなりの速度とパワーである、間違いなく舐めてかかれる相手では無い。

「ふん、舐めた口聞いた事をあの世で後悔しい」

「パクリは事実だろうが」

「しゃあないやろ可愛いんやから!!?」

「開き直りやがっ…うおっ!!?」

再び爪と牙を振りかざし襲い掛かって来た獅鬼を身を屈めて避けつつ、刀を振るう辻。斬撃は確かに獅鬼の腹を引き裂いたが、獅鬼は気にした様子も無く着地し再び辻に襲い掛かる。

「くっそー！」

「ホホホ獅鬼はパーツごと斬り落としてもせん限り幾ら傷をつけた所で意味無いわ！そのまま翻弄しときい獅鬼!!?」

千草は懐から数枚の紙札を取り出す。

「じゃあなあ兄さん、ほとぼり冷めたら線香ぐらいは上げに行つたるわ」

…やばいか!?!?

正直獅鬼の攻撃が激し過ぎて回避ができそうに無い。そうしている間にも千草は紙札を辻に向けて翳し、術を発動させた。

「焦炎大熱符!!?」

路地の通路全体を覆う程の火炎の波が辻に向かって放たれた。

「つつ?!!?」

辻は飛んで逃れようとするが獅鬼が体当たりしてそれを阻む。

「お前も焼け死ぬぞポ○・デ・ライオン!!?」

「獅鬼や!!?見当違いなこと抜かすなや、式神は焼けようが千切れようが気を使えば再度利用可能や阿呆お!!?」

嘲る千草の声と共に眼前に炎が迫る。

…あ、死んだ。

辻があつさりとした人生の終わりを実感したその時。

フランス、パリエース、アエリアーリス  
「風花・風障壁!!?」

見えない壁が辻の前で炎を遮り、双方共に弾けて消える。

「なんやっ!?!?」

「…これは!!?」

「おおおおおおおつ!!?」

雄叫びと共に人影が辻と獅鬼目掛けて落下し、獅鬼の背面を踏み潰しながら着地、踏みしめた際に全身が連動、下方へと落下の勢いを加算した凄まじい力が弾ける。

「哈ア!!?」

「ポーンツ!?!?」

人影——大豪院の沈墜勁が獅鬼に真面に直撃、胴体から真っ二つに千切れ、煙となって獅鬼は消えた。

「遅くなった、無事か辻!!?」

「…ははっ、またヒーロー冥利に尽きるタイミングで登場してくれるな…」

辻は笑う。

「漢魂あ!!?」  
おとしたま

「裂空掌!!?」  
れつこうしょう

「ぬわあっ!!?」

空から輝く気弾が飛来し、千草に着弾、爆発と共に千草が路地の奥に吹き飛ぶ。

「神鳴流奥義…」

凜とした少女の声が響く。

「斬鉄閃!!?」

「クマーッ!!?」

熊鬼の体が一刀両断に裂け、煙と消える。支えを失い、落下する木乃香を着地した少女―刹那がしっかりと抱きとめる。

「お嬢様…よかった…」

心底安堵した様子で刹那が笑みこぼれる。

「ありや、出番無かったね、僕」

「辻さーん！木乃香さーん！無事ですかーっ!!?」

「うおーっ、危ねえタイミングだったぜ!!?」

カモを肩に乗せたネギを抱えた山下が路地に着地する。

「やったかあの女?」

「大豪院ゴルフアーツやってないフラグを建てんなって前に山ちゃんにも行つたらがーっ!!?」

中村と豪徳寺が言い争いながら着地する。

「お前ら、…正直遅いぞ」

「言い訳の余地も無い」

「ごめんね、位置の把握に時間かかっちゃった」

申し訳なさそうに大豪院と山下が謝る。

「近衛は無事か桜咲ーっ?」

「はい、薬で眠っているだけのようです」

豪徳寺の声に心配無いと頷く刹那。

「っ!!? やつてくれるやないかガキ共おっ!!?!!?」

「ほらやっぱやってねえ、豪徳寺の所為だな」

「巫山戯んな」

怨嗟の声を上げフラフラと起き上がる千草の姿に中村が嘆き、豪徳寺がツッコむ。

「お嬢様は返させて貰った、大人しく降伏しろ、西の術士!!?」

刹那の言葉にせせら笑う千草。

「そう言われてはいわかりました言う阿呆が何処におんねん、今日はしゃあない、死ぬ程癪やが、ここらで引いたるわ」

「…それで俺達がみすみすお前を返すとも思っているのか?」

大豪院が構えを取り、低い声で千草に告げる。

「まあ正直ウチ一人じゃ逃げるのも難しいわなあ。でも考えてみいガキ共、ウチが一人で関西呪術協会の長の娘を誘拐なんて大それたこと仕出かすと思うか?」

千草が不敵に笑い、返す。

「あん?」

「まさか増援!!?」

「…神鳴流剣士の護衛は沈めたぞ、俺」

「…辻部長、神鳴流剣士と交戦したんですか!!? お怪我は…」

「ああちよつと腕斬られたけど大丈夫だ、桜咲」

「だつてさ、望みは無いみたいだよ?」

「ふん、…お目出度い頭しとんなあ、自分ら」

千草の言葉が終わるか終わらないかのタイミングで、その体が地面に沈み込む。

「…「」なっ「」」

驚く一同。よく見れば濃密な闇の様なものか地面の上に蠢いており、その中に千草の体は入り込んで行っていた。

「影…いや、闇の転移魔法!!?」

「なんか知らねーが逃がすかあっ!!?」

カモの驚愕の声を背に中村が駆け出す。

「中村さん、迂闊に突っ込むのは危険です!!?」

ネギの忠告を無視し中村は拳を打ち込む。

「はぎいせいけん ちえくだき破碎正拳・千重砕き!!?」

光り輝く正拳を、唐突に闇の中から突き出た白い手が言葉と共に壁を創り、迎撃する。

「バリエース テネブラエース凝圧・闇障壁」

直後、擬似的な質量を持つ程に圧縮された闇が中村の爆圧の拳の威力を全て吸収する。

「はあっ!!?」

驚きの声を上げる中村を余所に低く、何処かくぐもった声がある言葉<sup>を</sup>放つ。

「ヴェロス・オニムス・ザムウエルス・来たれ風霊 闇の精 闇を纏いて迸れ 心喰らう霸王の咆哮」

「フライトウス ドラコニス テネブラエ闇 竜の息 吹」

中村に伸ばされた掌から漆黒の烈風が巻き起こり、中村を飲み込み、吹き飛ばす。

「中村ーっ!!?」

吹き飛ぶ中村の軌道上に割り込んだ山下が自身を回転させつつ、中村を両手に抱え闇の暴風圏内から抜け出す。

「無事ですか!!?」

「闇の上級魔法!!? 敵に西洋魔術師がいんのか!!?」

ネギは二人に駆け寄り、カモは敵が魔法を放ったことに驚愕する。

「おーきにおやかまつさん、また来るで、ガキ共」

千草の頭が沈み込み、白い腕も同様に引っ込む。闇が消えた後には沈黙が訪れた。

「…中村は?」

「気絶してる、だけみたい。衝撃波を喰らったのもあるけどあの黒い風、少し掠っただけの僕まで凄く疲れてる。体力的にじゃなくて、なんて言うか精神<sup>こころ</sup>を直接殴られたみたいに…」

しばらくして我に返った辻が尋ねると、山下が力無く答える。

「あの魔法は精神を直接攻撃する精神<sup>マインドショック</sup>打撃の効果を含む高等魔法で

す。精神的に疲弊して気絶したんだと思います……」

ネギが心配そうに中村を覗き込みつつ、説明する。

「なんで関西なんたらと事構えてたのに魔法使いが出てくんだよ……」

「わからねえ……金かなんかで雇われた傭兵にしちゃあ転移魔法に上級魔法の行使、正直凄腕過ぎて考えにきいし……」

豪徳寺が理解不能という顔で言うとかモも首を振って答える。

「……ともかく、中村と近衛後輩を連れてホテルへ帰ろう。現状分析は後でいい」

大豪院が色々振り切るように軽く首を振ってから皆に告げる。

「……そうですね、まずはお嬢様を安全な場所まで運びましょう」

刹那も暫くしてから頷き、眠る木乃香を抱え直し、立ち上がる。

「よし、移動するか、山ちゃん、中村は俺が担ぐぜ、立てるか?」

「僕は掠っただけだから対して……?」? 辻、避けて!!?」

豪徳寺に手を差し伸べられ、その手を取って立ち上がると思った山下が、豪徳寺の肩越しに何かを視認し、鋭く叫ぶ。

「つつ!!?」

辻が即応し、飛び下がると同時に飛ぶ斬撃が辻の立っていた場所に深い亀裂を生む。

「今度はなんだ!?!?」

「これは……斬空閃? 神鳴流剣士か!?!?」

危うく難を逃れた辻が叫び、刹那が驚愕する。

「さつきはどうもくお兄さんく」

路地の傍らの雑居ビルの屋上でゆるゆると手を振るのは先刻辻と斬り合った神鳴流剣士、月詠である。

「なんだ、あの女は!!?」

「俺がここに来る前、やり合った、神鳴流剣士だ……」

大豪院の鋭い詰問に辻が愕然としながらも答える。素人が喰らえば永眠しかねない勢いで頭部に蹴りを入れたのだ。幾らタフでも後暫くは意識を失っている筈なのだから辻が驚くのも無理はない。

「お兄さん、ウチお兄さんに悪いことしたんで、謝りに来たんですく。お兄さんたら、初めての人みたいに全然動いてくれへんから、ウチつ

い我慢効かへんで焦つてもうてゝそしたらお兄さん、いきなり荒つぽくなるんですもん、ウチ痺れてしまいましたわ。でもお兄さんはそれで氣い悪くしたから行ってしもたんですやろ？えろうすいませんでした」

本当に申し訳なさそうな様子でペこりと頭を下げる月詠。それを見て辻は怖気が走る。

…あ、この女ヤバイ。

先程全力で蹴りを入れられた男に対して怒りの欠片も見せず、自分が雑に勝負を決めようとしたから辻が氣を悪くして去つたのだと、この女は本気で思っていてそれを本気で申し訳なく思い謝っている。あまりに異常な思考に辻は恐怖を覚える。

ふと、辻が月詠以外にも視線を感じ、目線を下げると何故かネギ以外の全員からじつとりした視線を注がれている。やがて大豪院が辻に尋ねる。

「辻…一体あの女と何をしていた？」

「真剣使つてのチャンバラだよ!!?この傷が目に入らないのかお前らあ!!?」

刹那にまで疑いの眼差しを向けられ、辻は割と本気で傷ついた。必死で手練れの剣士を撃破し、木乃香を助けようと闘っていたのにあんまりな扱いである。

「お前もだよ誤解を招くような言い方するんじゃない、…えーと」

「月詠言いますゝ是非とも覚えていて下さいお兄さん、お兄さんの名前はなんて言うんですか？」

「お前はなんかヤバそうだから教えないよ!!?二度と俺の前に顔を出すな!!?」

辻のすげない拒絶の言葉に月詠は身をくねらせ、

「やあんもう、イケズな人ですわ。まあええです、お堅い人ほぐすんも、楽しいですから」

などと言つてのける。そして月詠は木乃香を抱えた刹那に視線を向け、告げる。

「その綺麗な剣士さんは、神鳴流のお人ですよ、刹那センパイで



間違ごうて無いですか？」

声をかけられた刹那は月詠を鋭く見据え、

「…そうだ。貴様も神鳴流剣士だな？お嬢様をかどわかそうとするような輩に手を貸すとは、自分のやっていることが本当にわかつているのか？」

月詠はその言葉に笑みを深める。

「…わかっているからこちらについてとるんです。ウチはただ、美味しそうな人と剣を交えたいだけですから」

朗らかな顔で狂気地味た事を口走る月詠に刹那が言葉を失い、他の面々も顔を歪める。

「お兄さん」

「…なんだよ？」

再び呼びかけられ辻が嫌々応じると、月詠は刹那を片手で指し、「刹那センパイ、ウチとお兄さんがやり合ってた、てウチが言った時に渋い顔してはりましたけど…お兄さんは刹那センパイと恋仲なんですか？」

とんでもない言葉を口にした。

辻は本気でずっこけ、刹那は木乃香を抱えたまま、なっ!??と驚きの声を上げ顔を赤くする。

…こんなイカレ女にまでそんなこと言われるのか、俺と桜咲は。

暫く失意に沈んだ後、辻は跳ね起きて咆える。

「桜咲は単なる後輩だ!!? 大体なんでお前がそんなこと気にするんだよ!??」

辻の言葉に月詠はのほほんと笑う。

「そやったんですから刹那センパイ、ええ人と付き合い持つてはりますね。優しげな人なのに、あんな顔出来て、ウチお兄さんにときめいてしまいましたわ。…ほんに今回はええ仕事です、美味しそうな人が二人もおって、ウチ燃えてきましたわ」

月詠は刹那と辻を交互に見て笑みこぼれる。小太刀と短刀を腰に履き、歩き始めながら月詠は最後に二人に言った。

「刹那センパイ、是非とも一度剣を交えましょ。お兄さん、…また近

「うちに会いに来ますわ〜」

「来んな!!?!!?」

ウフフフフフフ、と笑いの残響を残しつつ、月詠は姿を消した。

暫くその場に重い沈黙が降り、大豪院が辻にポツリと言った。

「…疑ってすまなかった」

「……厄日だ、今日は」

辻は力が抜け、路面に座り込んだ。

## 8話 少女の懊悩 少年の春

「スゴイスゴイ、みてください明日菜さん、わああーっ!!?」

「はいはい、何やってんだか」

鹿がいる。それも当然、ここは奈良公園である。

「…ふ、何をやってんだかネギの野郎は。鹿ごときに醜態晒しおって、この中村様がお手本を…ふぎやー!!?」

「はいはいお約束お約束」

鹿せんべいごと手を鹿に噛みつかれて慌てふためいているネギを鼻で笑った中村が、鹿せんべいの束を手に鹿の群れに突き進み、あつという間に鹿に薙ぎ倒され踏み潰されながら鹿せんべいを奪われる。それを見て山下が適当な拍手を送る。

昨夜の木乃香誘拐未遂事件から一夜明け、3-Aは修学旅行二日目に入入していた。

当然辻達は木乃香の護衛をする為、木乃香がいる5班について奈良まで同行している。

「流石に中村も何時も程のテンションが無えな」

「まあ動いているだけでも大したものらしいからなあ」

昨夜、中村は部屋に戻って程なく目を覚まし、本人曰く死ぬ程かつたるい他に異常はなかった。

「だるいで済んでいるのが驚異的だそうだぞ。常人がまともにあれを喰らえば圧縮空気の衝撃波で全身へし折られた後に精神衰弱で一週間ほまともに腕も上げられんらしいからな」

大豪院が呆れたように言う。

「色々普通でないと思っていたけど本当に規格外だよね中村は」

山下は笑って中村のトンデモっぷりを語る。

「あいつの精神の根幹たる煩惱の成せる業だな。それにしてもこんなのにびりしていいんだろうか…」

辻が呟く。昨日あったような嫌がらせも無く、今の所平和に修学旅行を満喫している5班である。昨日の激戦を経たバカレンジャーからすればなんとも拍子抜けだが、敵側も流石に昨日の今日で直ぐ様襲

撃できる程の戦力的余裕が無いのでは、ということらしい。

「まあだからと言って気を抜き過ぎる訳にもいかん。近衛後輩に張り付いているとするか」

大豪院の言葉に頷きつつ、ふと辻が思ったことを口にする。

「しかしなんか空気が妙に緊迫しているとかそれだけで何処か浮ついてるというか…なんか変じゃないか？今日の5班の皆」

辻の言葉に首を傾げる三人。ちなみに中村はまだ鹿と死闘を繰り広げている。

「気の所為じゃねえの？普通に公園巡ってるだけだぜ。近衛が桜咲にグイグイ迫ってる位で何もおかしい所はねえな。」

「ああ、桜咲ちゃんと言えば昨日の夜から何と無く元気なさげだけど真面目に護衛はしてるみたい。各班に式神を放ったから何かあったら教えてくれるって」

「ついでに言うなら宮…崎後輩だったか？大人しそうな少女だったが妙にテンションが高い。浮ついた空気とやらはこれが原因ではないか？」

「…うん」

辻は思った以上に詳細に返って来た現状報告に少々気圧されながらも返事を返す。

「なんにしろ関西呪術協会に関わりが無さそうならなにをしても彼女らの自由か。荒事じゃないなら俺らは黙って見ていよう」

「だな」

「まあ昨日忙し過ぎたからね。多少はのんびりしようよ僕らも」

「張り詰めた弦はいつか切れる、か。まあ油断しすぎんようにな」

各々頷き、散開する。

「助けるやお前らあーっ!?？」

無論全員がスルーした。

「気になるのは桜咲だな…」

刹那に話しかけようとする木乃香を撒いて、刹那を探している姿を後から尾けているという奇行をやらかしている後輩が辻は心配だった。なんだか隣にいる明日菜も本気で心配そうにしてるし。いや辻

が心配なのは奇行がではなく沈んでいるように見える所がだ。

：昨日なんかあったのかな：

無論木乃香が誘拐されたという大事件はあった。陽動にまんまと引つ掛かったことを悔やんでいたとは豪徳寺達から聞いている、その関係だろうと辻は思うのだが、

「聞き辛いよなあ…」

へタレなのは俺の悪い所だ、と自分の情けない様に溜息をつく辻。今は何も無いが今後関西呪術協会の過激派とやらが何もしてこないなどということはほぼあり得ない。反省するという行為自体は悪いことでは無いが、気に病み過ぎるようなら一般人とかプロの護衛とかそういうのは関係なく、年上として先輩として諭してやりたいと辻は思っている。

「…うん、尻込みしてる場合じゃないか…」

辻は腹を決めて木陰の刹那と明日菜に向かって歩き出した。

「…辻部長、昨夜は本当にありがとうございます。先輩の機転が無ければ、みすみすお嬢様をかどわかされていたでしょう…」

「あ、ああ気にするなよ。俺にしたって足止め位しか真面にやってないし…」

「いえ、この前まで裏の世界も知らずにいたというのにそれだけ出来れば十分に過ぎます。それに比べて私は…」

：ヤバいでしょう。後輩がガチで思い詰めてる。

颯爽と声をかけ、対話に持ち込んだまではいいが思ったよりも刹那の様子は深刻だった。

「…ね、ねえ桜咲さん。木乃香は無事だったんだからそこまで落ち込まなくてもいいとあたしは思うんだけど…まあ何も出来なかったあたしに言われても説得力無いかもしれないけど、それでもよ」

明日菜もそんな刹那を見兼ねてかフォオローに入る。

「…神楽坂さん、お気持ちは嬉しいですが、結果的に無事だったからよし。では済まされないので護衛というものです。昨日の陽動にしても、存在を秘とする裏の世界の人間があそこまで派手に動いている時点で誘いだと気づかねばならなかったのです。偉そうに先輩達を論

しておきながら、私は…」

「桜咲」

堪りかねて辻は桜咲の言葉を遮る。刹那の生真面目さが悪いループを呼び込んでいる。正してやらねばドツボに嵌ると辻は確信した。「そんなのは全部たら、れば、の話で今思い返してもどうしようもない事だろ？確かにお前は昨日最善手を打てなかったかもしれないが前は全力で頑張ったんだ。重要なのは過程で無く結果守り通せたかどうかだろう？今はお前だけで護衛しているんじゃないんだ、もう少し気を楽に…」

「…頑張った、ですか」

辻の言葉を聞き、刹那が自嘲するように笑う。

「私は頑張つてなどいませんでしたよ、辻部長。自分可愛さに妥協した只の臆病な卑怯者です」

「桜咲…?」

「貴方との約束もこうして碌に守れず、護衛としてもこの有様、やはり私にお嬢様のお側にいる資格など無いのです…」

「っ！桜ぎ、」

「あーっ！もうさつきから聞いてればグダグダネチネチうるっさいわねホントに!!?」

辻よりも早く明日菜がキレた。

「先輩も言ってるんでしようが後悔してたって現在イマがなんか変わったりはしないのよ!!?駄目だったなら次頑張りなさいよ頑張れなかったなら頑張ればいいだけでしょうが馬鹿じゃないのあたしに馬鹿にされてどうすんのよ桜咲さんの馬鹿!!?」

「……神楽坂さん……」

「か、神楽坂、なんて言うか落ち込んでる人間にはもっとデリケートに…」

驚いたように顔を上げる刹那にオロオロと明日菜を宥めようと辻が声をかけるが、明日菜は止まらない。

「大体お嬢様の側にいる資格う?いい、わかってないようなら教えてあげる。友達と一緒にいるのに大層な理由も資格も要らないのよ!!」

？別に今すぐ昔みたいに木乃香と接しろなんて言わない、でも護衛だから何だからって理由付けて会話自体拒否するならそんなの木乃香の為じゃ無くって桜咲さんの言ったとおりの自分の為でしょ!? 護衛として駄目だったとか悩むなら護ってる木乃香にまず悲しい顔させてんじやないわよ馬鹿ア〜ッ!!?!!?」

よく通る叫び声が響き渡った後には気まずい沈黙が辻達を満たした。

…神楽坂ああああつ!!?!!?!!?」

辻は心中明日菜に全力抗議をする。いや、告げた内容自体はいいのだ。辻が言いたいことを大体代弁してくれたのだから。しかし、こういった相手への批判を含む忠告は伝え方というものがある。ここまですぐ喧嘩腰に言ってしまうえば刹那が更に落ち込んだり、場合によっては激昂して諍いになることも充分あり得る。だからこそ、辻はなるべく穏当な言い方で伝えようと思っていたのだが…

…馬鹿正直で真っ直ぐな氣質が悪い方に出てしまった…

明日菜はどうなのよとばかりに刹那を睨み付けたまま視線を外さない。どうにかフオローせねばと辻が口を開きかけたその時、

「ふっ、く…っあは、ははははははっ!…」

刹那は顔を覆い、堪えきれないとばかりに身を屈め笑顔を溢す。くつくつと口端からなおも笑いの欠片を漏らしながら、身振りだけで明日菜に謝った。

「…桜咲さん、あたし面白いこと言った覚え無いんだけど？」

目を物騒に細めつつ明日菜が尋ねる。刹那はようやく笑いを収めながら、改めて明日菜に謝った。

「…すみません、神楽坂さん。神楽坂さんを笑ったのでは無いのです。

…何というか、本当にその通りだなんて…ここまで言われるような様で、何やつてるんだらうって、…思っちゃいました…」

目元を押さえ、桜咲の声が掠れる。

うわ泣いてるって辻がキョドリ、明日菜の顔を見るが、明日菜は困ったような顔になりながらも刹那に言う。

「…桜咲さん、私は桜咲さんにどういう事情があるのかも知らないし、

私あんまり頭良くないから難しいことわかんないんだけどさ……。桜咲さんの悩みが木乃香に関係してるんだったら、木乃香にもちやんと話した方がいいと思うわ。木乃香は勿論だけど桜咲さんもいい人だって私思うし……。どっちにどんな理由があるのかわからないけど、絶対木乃香なら話せばわかってくれるわよ。もう少しさ、狡くなってもいいんじゃないの？一人で悩んで無いで、木乃香と一緒に悩みなさいよ。あの子そんな柔じゃないわよ」

「…わかってます」

小さく震えながらも刹那は言う。

「わかってるんです。お嬢様は悪く無いのです、…信じきれないのは、私の弱さです。全部わかってます、私が動けばいいだけなんだって……。でもごめんなさい、私駄目です。……。まだ、駄目なんです。……。ごめん、なさい」

顔を覆ったまま刹那が体を折る。水滴が地面に落ちる音が聞こえてきた。

……。どうするんだこの状況。

辻は自分の器キャパシテイ量を越える事態に動くことが出来ない。明日菜を見ると、うーんと唸りながら頭を掻き、小さく溜息をつけてから辻の方を見る。

「あたしじゃあこれ以上は、言えないわ。辻先輩、後任せたわ。桜咲さんのフォローお願い」

後輩がキラークラスを出して来た。

「おまつ……。引つ掻き回すだけ引つ掻き回してなんだその鬼振り!!? 巫山戯るなよ!!?」

「あたし程度の付き合いでこれ以上は言っていないことじゃ無いのよ! 辻先輩ぶっちゃけ現在で木乃香をぶっちゃぎつて桜咲さんと一番仲良いでしょ、なんとかしてあげてよ、お願い!!?」

スパン!!?と手を合わせ頭を下げて明日菜が頼み込む。

「いや、だからっってお前……」

「じゃっ、あたしはネギの様子見てくるわ!!? 桜咲さん、ちよつと言い過ぎた、ゴメン。辻先輩、言い遅れたけど昨日は木乃香を助けてくれ



てありがとうございました。これからはあたしも頑張るわ！じゃあっ!!？」

男前な後輩は言いたいことだけ言って颯爽と駆けて行った。後には辻と身を震わせる桜咲が残る。

…いや、無理だろう、これ。

辻は固まっていた体をようやく動かすことに成功したがそこからどうすればいいかわからない。周りを無意味に見渡すが当然解決の糸口など見当たらない。

辻はしばらくウロウロしていたが、やがて一つ息をつき、刹那の座っているベンチの隣に黙って腰掛ける。刹那は僅かに身を震わせただが、言葉は無い。

…拒否されないならそれでいいか。

辻は思い、黙ったまま刹那が落ち着くのを待つことにした。

…何も言えないなら俺が言うべき言葉は今は無いらだろう。

…桜咲なら、大丈夫だ。

黙って空を見る辻にやはり黙ったまま刹那が身を寄せ、その肩に頭を預けた。

……………あれ?……………

思ってもいなかった刹那の行動に辻は一瞬フリーズし、そろりと刹那の顔を覗き込むが、顔を覆ったままの刹那の表情は窺えない。啜り泣きだけがかすかに聞こえた。

……………中学生だもんな、まだ。

まだまだ子どもなのだ、この少女も。

辻は何も言わずに空を向き、刹那も言葉を発さぬまま、辻の肩を枕に、泣いていた。

「…すみません、お見苦しい所をお見せしました…」

少しだけ目元の腫れた刹那が辻に頭を下げる。

「さて何の話か、空が綺麗だったので覚えて無いな」

辻はすっとぼけて答える。それを聞いて刹那は小さくではあるが、ようやく笑った。

「…辻部長」

「…なにさ」

「…約束、守れるよう、努力します」

「……そうか」

「はい」

しばらく二人は沈黙し、少ししてから揃って歩き出した。

「…大豪院も付いてたから近衛ちゃんは大丈夫だとは思うが、少々離れすぎてしまったな…」

「お嬢様には式神をつけてありましたが、そうですね、手早く戻りましょう」

歩きながら刹那が答える。

「…戻ったら隣で護衛するか？桜咲」

「…いえ、今日の所は…」

申し訳無さそうな刹那に辻はそうか、とだけ言って苦笑する。

「ですが…」

「ん？」

続けられた言葉に辻が刹那を見ると、刹那はぎこちないながらも笑みを浮かべ、

「…今日、ホテルに戻ったら…少しだけ、お嬢様と話してみます」

と、小さくだがはつきりと刹那は言った。

「…そうか…」

辻は笑顔を浮かべ、それだけ言った。

「…ネギ君、どうしたんだ、これ？」

何と無く穏やかな空気のまま木乃香のいる所まで戻ったら何故かネギが倒れていた。顔を真っ赤にしてうわ言を呟いており、完全に意識が朦朧としている。明日菜や木乃香は介抱しつつ声をかけているが、返事は無い。

「いやなんて言うかな…」

山下が形容し難い笑顔でネギに濡らして絞ったハンカチを額に当てながら、

「…ネギ君宮崎ちゃんに告白されてさ、知恵熱で倒れちゃったみたい」

「……はあっ!?？」

辻の叫びに豪徳寺、大豪院も微妙な顔で頷く。少し離れた所で何故か伸びていた中村が、ボロボロの顔を僅かに上げ、

「……、リア充爆発、しろあーっ!!?!?!？」

叫んだ後また倒れた。

………今度はなんなんだ、この状況。

辻は空を仰ぎ見る。ムカつく程に晴れ渡った空がこちらを照り返していた。

## 9話 恋の助言 騒動の芽吹き

「…さてどうしよう、ネギ君のこと」

二日目の修学旅行が終了し、ホテルに戻って来た辻は開口一番そう言った。

「…まあ、普通なら笑って暖かく見守ってやる所なんだがなあ……」

豪徳寺が複雑な顔で呟く。

「状況的にネギ君に呆けられたままじやちよつと所が大分困るんたよねえ…」

山下も困ったような顔で言う。

「…宮崎後輩に判れと言うのが酷だが、空気を読んで貰いたかったものだ……」

大豪院は苦い顔で呟く。

「ちよつと大豪院、その言い草は無いでしょ。宮崎ちゃんは真剣に告白したんだよ、見てた僕には解る。こつちが立て込んでるからって恋する乙女に時間も場所も空気も関係無いんだから」

「だから宮崎後輩の気持ちを否定は俺もしない。しかし、やつと生徒達の引率をこなしているような十歳児に更に負担をかけるような真似はよして貰いたかった、と言っている」

「いや大豪院、言いてえことは解るが宮崎だつて14のガキだ。そこまで考えて気持ちを押し殺すなんてのは無理だろ?」

山下達の言い合いを聞きながら辻も小さく溜息をつく。

…正直真正銘の十歳児に本気で告白する女子中学生ってどうなんだろうとは俺も思ったけどなあ…

まあネギ君は格好いいしな、歳の割りに。と辻はなんとなく納得する。歳の割に驚く程しっかりしているし、礼儀正しいし顔もいい。もう五年、いや三年もすれば女子が放っておかないのは理解していたが…

…今の時点でこれか……

正直将来のことを考えると恐ろしくなってくるが、今はそんな先のことを心配している場合では無かった。

「…どうでもいいだろうが、あんなガキのこたあ…」

と、中村が寝転がったまま不貞腐れたような声を出す。

「まだ言ってるのかこの馬鹿は」

「中村、十歳の子どもに本気で嫉妬するってかなりみつともないよ？」

「状況を見てものを言え、チユンツァイ 蠢材」

「中村、俺達がここに来た目的忘れたか？ネギ君のフォローする為だよ」

各々が飛ばす冷たい罵倒にもめげず中村が跳ね起きて吠える。

「うるせー!!？只でさえクソダリイのにガキとはいえイケメンの野郎が希少価値の高い前髪系目隠れ美少女に告白されて困ってる、なんてリア充の勝利者の悩みなんぞ関わってられるかぁ!!？お前らも放つとけや惨めな気分になるぞ?!？」

「惨めなのはお前の性根だよ」

「ネギ君そんな幸せそうな気分じゃありませんから。責任を取らなきゃとかそういう重い方向で悩んでるから」

「大体恋愛方面に全力で関われん状況だから悩んでいるのだろうが阿呆」

「関わりたくないなら寝てていいから黙ってる小物」

集中砲火を喰らって倒れ伏す中村。それに見向きもせず再び相談を始める一同。

「現状、麻帆良からの応援は期待できるか出来ないかはつきりしない状況らしい。やっぱりネギ君はあのままにはしておけないな」

「はつきりしないってのはどういうことだよ辻？」

辻の結論に疑問を上げる豪徳寺。

「桜咲からの情報だ。昨夜既に麻帆良の魔法関係者には連絡を取って現状を報告したらいいんだが、あっちも想定外な状態になってるらしく、対応して場合によっては応援を送るって話らしい。ところが一夜明けても手は打ったらしいが桜咲に何だかはつきりした説明が無いんだと。特に修学旅行を中止して近衛ちゃんを帰らせるとも指示は出てないし、そのまま護衛を続けてくれってことらしい。ちなみにネギ君が協力したことは報告したが俺らのことは報告していない。が、

ネギ君も俺達も特にどうしろ、どうしたと命令や追求は無しだ」

辻の言葉に揃って胡散臭そうな顔になる一同。

「すこぶる違和感のある対応だな」

厳しい顔つきで大豪院が呟く。

「俺でもなんかおかしいってのは解るぜ、これは」

「大事なお孫さんが襲われたのに保護をしない、味方に自軍の情報はつきり伝えない、見習いの筈の魔法使いが思い切り荒事に巻き込まれてるのに関わるのを止めさせず寧ろ巻き込もうとしてる節がある、か……やだなあ本来味方の筈の組織が信用出来ないって」

豪徳寺が呻く様に言い、うんざりした様に山下が畳に倒れ込む。

「……………」

中村も言葉は発しないが、真剣な顔で何事か考えていた。

辻自身もこれは本当にネギ君自身に何かあるかと思いつつも、現状どうするかに話を絞る。

「まあ、そんな訳だから増援は無い方向で考えていた方が変に当てにして対応を誤らなくていいだろう。で、宮崎ちゃんの件だけ……」

一同でうーむと唸る。

「…矢張り返事は最低でも修学旅行が終わるまで待つて貰うのが無難では無いか？正直そんな場合では無い」

「いや、それじゃあ宮崎の奴が生殺しだろ。告白なんてことした以上は早めに返事が欲しい筈だぜ」

「と、言っても安易にYesともNoとも言えないよねえ、ネギ君は。仮にも先生なんだからそれこそ責任問題になっちゃうし、かと言つて脈が完全に無い訳でも無いみたいだし……」

一同の間に沈黙が降りる。辻も頭を捻るが有効そうな手段は思いつかない。

……どうしたもんかな……

「……そんなもん外野がどうこう考えたつて始まらねえだろ」

「中村？」

黙って畳に突つ伏していた中村が不機嫌そうな声で言う。

「お前ら大分保護者的感覚になつちまつてるからあれこれ言つてるけ

どよ。告白したのは宮崎ちゃんできれたのはネギなんだぜ？こんなもん結局はネギがどう思うかなんだよ。考えて付き合いたい、と思つたらハイ、駄目だと思つたらイイエ、そんだけの話だ。答えが出ねえならすいませんまだわかりません、時間を下さいでいいんだよ。正直告白に対する返事としちゃあ最低の部類だが、ネギまだガキだしな。宮崎ちゃんも言つてたけど自分の気持ちを知つて欲しかったつてのは、ネギが宮崎ちゃんをそういう対象として見てねえから今後はちゃんと自分を意識して下さい、つてことだ。言葉をそのまま額面通りに受け取つちやあいけねえが、ネギに早急に恋人同士つつう関係を要求してる訳でも無えんだよ。だからネギはよく考えて答えを出す。言つてやることはこんだけだ。くれぐれも断るのは可哀想だから、とか教師と生徒は付き合つちやいけなから、とか巫山戯た同情や下らねえ建前を理由に答えを決めねえ事も言つとくべきか。以上、結論出たな、文句あつか？」

中村が下らなそうに再び不貞寝に入るが、辻達からは答えが無い。奇妙に思つた中村が顔を上げると、そこには愕然とした表情の四人がいた。

「……え？どしたのおめえら、凄え顔して……？」

中村の問いに、辻が震えながら、

「…お、お前誰だ？中村じゃ無いな!!？」

「はあ!!？」

「中村がこんな真面な意見を言うなんて信じられねえ…どっかで入れ替わつたらろ!!？何処のどいつだ!!？」

「待つて皆!!？中村は昨日精神に直接打撃を喰らう魔法を受けてたよね、その衝撃で思考が一般的な意味で正常に戻つたのかも!!？」

「だとしたら昨夜の敵はなんと素晴らしいことをしてくれたのだ……。中村、一生そのままでもいいぞ。頼むから元に戻つてくれるな」

「巫山戯んなてめえらあつー!!？!!？人が珍しく真面目に考えてやつたらなんだその反応は!!？俺が真面な事言つたらおかしいつかあ!!？!!？」

「おかしいよ」

「おかしいぜ」

「おかしいね」

「おかしいな」

四人一斉の返答に中村ががっくりと倒れ伏す。

「まあ理由はどうあれさっきのお前は非常に良かったからこれからもその調子で頼む」

「おう、なんなら定期的に魔法を喰らって意識を正常にしようぜ」

「て言うか中村、さっきの真面モードだと恋愛事情に妙に詳しくあったからあのままでと女の子にモテるかもしれないよ」

「怪我の功名とはこのことだな、だるさが消えたら言え。再びおかしくなつたとみなす」

「……てめえら死ぬ。氏ねじゃなくて死ぬ」

中村は突っ伏したまま怨嗟の声を洩らした。

「じゃあ基本は中村の方針で。考えて結論出すだけでいいけど僕らが考えを誘導しないようにすること。これでいいね?」

「ああ」

「依存は無い」

「その方針で」

「勝手にしやがれ勝手に、ケツ!!?」

山下の言葉に頷く一同。約一名完全にやさぐれていたが総意は総意である。

「じゃあネギに忠告しに行くか。流石に全員で行く必要は無えよな?」

「豪徳寺の言葉に辻が頷く。」

「行くのは一人でいいだろ。後は今夜こそ侵入されないようにホテルの周りでも見張っていよう。へばらないように交代制で」

辻の提案に頷く面々。

「じゃあ誰が行くかだが…」

「俺はぜってー行かねえ!!? 幾ら相手がネギと言えども俺はこれ以上この身から溢れ出す妬みの心を抑えられる気がしねえもん」

「もん、じゃないよ、もんじゃ」



「まあ、いいんじゃない？中村は発案者だしね、僕が行くよ」

「愛だの恋だの語るのは苦手だからな、頼んだぜ山ちゃん」

「右に同じだ、任せた」

「辻もそれでいい？」

山下の質問に頷く辻。

「ああ。俺も正直そういうの上手く説明できる気がしないからなあ。

一番語って説得力ありそうな山ちゃんだし」

「但しいケメンに限る、という奴ですね、わかりたくありません」

中村が吐き捨てるように合いの手を入れる。

「とりあえず真面目に寝ている中村」

「だな。お前はもう少し回復してから夜中廻った頃に見張り立って貰うからよ」

「じゃあ最初は俺が立つさ。大豪院、適当にローテーションの順番決めておいてくれ」

「心得た」

辻の言葉に大豪院が頷く。辻は日本刀と数本の木剣が入ったゴルフバッグを手に立ち上がり歩き出す。山下もネギに会いに行くべくそれに続いた。

「辻〜」

「ん？」

中村の呼びかけに辻が振り返る。

「…せったんは大丈夫かよ？」

台詞とは裏腹に真面目な顔で中村が尋ねる。

「…あいつは平気だ、強い娘だからな。万一駄目そうなら助けるさ、あいつは俺の後輩だからな」

後せったんは止める、と言い残し辻は部屋を出た。山下も一つ笑ってそれに続く。

残された三人は暫く無言だったがやがて中村が口を開く。

「…あいつあれで桜咲のことマジに恋愛感情無いと思うか？」

「本人に自覚が無いだけでとつくに惚れてるように見えるぜ、俺は」

中村が半眼で宙に向けて呟くと豪徳寺がやってられんとはかりに



つけ、キスをすれば勝ちというややアダルテイな方面に悪ノリが過ぎた旅行先のテンション特有の馬鹿騒ぎだが、その実態は朝倉とカモが手を組んで仕掛けた仮契約カード大量入手作戦であった。

カモは主の補助を主な役割とし、従者との契約において橋渡しを行う古くからある使い魔フエミリアの一種、オコジョ妖精である。ネギの身を守る従者が今だ正式な契約者としていないのを憂慮したカモはこの機会を利用してネギに有力な従者を斡旋しようと今回の作戦を執行したのであった：というのは建前の言い分、嘘では無いがこのオコジョ、純粋に主の為だけを思ってこんなことを行っている訳では無い。カモは一回契約を結ぶ毎に自分の講座に五万オコジョ\$が妖精協会から振り込まれる。そう、ぶっちゃけ言って金目当てであった。

朝倉がカモに協力しているのは、ネギの魔法関係に関するインタビューの独占権の為である。朝倉はネギが魔法使いだという証拠を偶然目撃してしまい、その衝撃的事実が自称記者魂に火をつけ、ネギに突撃インタビューを行った。が、ネギの癩癩によって失敗に終わり、一部始終を目撃していたカモが朝倉の手腕に目を付け、協力を見返りに情報を流す取引を持ちかけたことによりこの性質たちの悪いコンビが誕生した。ちなみに朝倉は誰が優勝するかを対象にトトカルチヨを行い利益を産み出そうとしているが、語るまでも無いことである。

「つーかカモっち、本当にあの先輩達巻こんじゃって大丈夫な訳？あの人達普段は馬鹿やってるけど怒るとメツチャ怖いよ？」

「大丈夫だ心配すんなブン屋の姉さん、旦那方には後で俺っちがきっちり説明しとくからよ」

微妙に不安そうな朝倉に太鼓判を押すカモ。今回のゲームはなんとネギだけが獲物ターゲットで無く、辻達バカレンジャー（高校生ver）までもが対象であった。

：まあ実際旦那方はこんな行い絶対に認めやしないだろうけどな。カモは内心そう考える。ネギの為に伝説の吸血鬼と殺し合い、明日菜を素人だからと荒事の場に絶対に連れて行かなかった辻達である。下手をすれば朝倉はともかくカモは抹殺、あるいは追放の恐れもある。

る。

…済まねえな、兄貴、旦那方、そして巻き込みまうことになる嬢ちゃん達。

…それでも俺はやらなきやならねえ。

カモは腹の底で決心し、朝倉について準備を進める。

…学園側の連中を俺も笑えねえ……

……つくづく格好悪い大人だぜ。

〈第一班〉

「あぶぶぶ、お姉ちゃ〜くん正座嫌です〜」

小柄な少女、鳴滝 史香が涙目で先に行く己と瓜二つな姉に告げる。

対して鳴滝 風香は自信満々に弱気な妹に宣言する。

「大丈夫だって、僕らは楓姉から教わってる秘密の術があるだろ」

「その楓姉と当たったらどうするんですかー!?!」

「なんとかなる!!?」

史香の最もな疑問に根拠の無い断言をし、二人は突き進む。

〈第一班二班〉

「古、本当に参加して良かったのでござるか?」

長瀬 楓は矢鱈と気合いの入っている傍らの少女ー古 菲に問いかける。

「勿論アル!ポチがわざわざこんな所まで現れたのなら勝負を挑まぬ理由が無いアルよ!!?」

古は目にも止まらぬ速度で拳足を虚空に見舞い、闘る気全開で答えた。

「…では古の狙う対象は大豪院殿でいいのでござるか?」

「?、当たり前アル。ポチは普段功夫ゴキウの鍛錬には付き合ってくれても中々尋常の試合はしてくれないアル。麻帆良に戻ってもまた躲されるだけアルから、ここで全力で掛かってやるアルよ!!?」

「…そうでござるか、ならば拙者は何も言わんでござる。古、応援して

いるでござるよ」

「わかったアル!!?」

元気良く答える古に心の中で楓は疑問を溢す。

…古はちゃんとルールを理解しているでござるか?

〜第三班〜

「うぐぐ、なんで私がこんなことを……」

心底ダルそうに呟くのは長谷川

千雨。絶賛やる気0%の参加者である。

「つべこべ言わず援護して下さいな、ネギ先生の唇は私が死守します!!?」

一方対照的にやる気どころか怪気炎を上げてやる気200%の雪広 あやかである。

「つつーかあのバケモンみたいな先輩達も参加してんだろこの馬鹿騒ぎ?普通に命が危ねえんじゃない?」

「あの方達はわざわざ挑みかかりでもしなければ女子どもに暴力は振るいませんわ、行きますわよ長谷川さん!!?」

「うえ〜〜〜」

呻き声を上げる千雨を引きずってあやかは爆進する。

〜第四班〜

「まき絵、誰狙ってるの〜?」

「うーんやっぱリネギ君かなあ?正直他の先輩は、ねえ…?」

明石 裕奈と佐々木 まき絵はゲームで狙う対象を談議しながら進む。

「ああ〜確かにねえ。山下先輩とか凄いい格好いいけど、流石にこんなゲームでキスなんてしちゃったら気まずい所の騒ぎじゃないもん」

「だよね〜……中村先輩は、無いね」

「うん、無いわ。顔は結構好きんだけどねえ…」

「と、いう訳で私はネギ君狙い。えへへーネギ君とキスカーんふふ♡」  
にやけるまき絵をやや呆れ気味に祐奈は見やりながら進む。

〜第五班〜

「まったくウチのクラスは阿呆ばかりなんですから…せつかくのど

かがネギ先生に告白した日の夜にこんな馬鹿騒ぎを…」

「ゆ、ゆえ〜」

綾瀬 夕映は何時もの仏頂面を更にむっとりとした顔に変え、宮崎のどかを連れながら歩いていった。

…それにしても、中村先輩などはまだわかりませんが、辻先輩や大豪院先輩がこのような馬鹿騒ぎに参加するなど違和感が残ります…

と、夕映が考え込んでいるとどかが夕映の袖口を引き、止めようとしてくる。

「ゆえゆえいいよ〜これはゲームなんだし…」

「いいえ、駄目です」

夕映は瞳を力強く輝かせ、どかの言葉を遮る。

「…ネギ先生は私の知る中で最も真面な男性です。どか、貴女の選択は間違つて無いと断言しますよ」

「ゆ、ゆえ…」

感極まったように声を詰まらせるどか。

「それに私達に有利な点はもう一つあるです。経緯はわかりませんが辻先輩達五人は今京都にいて、何故かこの馬鹿騒ぎに参加します。あまつさえ先輩達は昼間公園にいて、こちらの事情を知っているのです。訳を話せば悪ノリで参加しているだけの連中では無くこちらに協力してくれるかもしれません」

夕映は決意を込めてのどかの手を引き、一步を踏み出す。

「絶対勝つてのどかにキスさせてあげます。行くですよ!!?」

「う、うん…!」

かくして役者は揃い、

騒動の種が芽吹く。

「では、ゲームスタート!!?」

「…なんだ、あの光は?」

10話 悲劇的 或いは喜劇的大騒動（上）

ホテルを囲むように仄かな光を放つ魔法陣が地面に展開していた。

「……………」

辻は黙って携帯を取り出し、大豪院に電話をかける。

「…辻、どうし「全員直ちに嵐山に集合!!」? 訳わからない魔法陣がホテル全体を覆ってる!!」?

大豪院が出るのももどかしく辻は叫んだ。

「…了解だ!!」?

短く叫んで大豪院が通話を切る。

…無差別大規模テロでも仕掛けてきたのか、敵は!?!?

辻は刀を手にホテル内へと突っ込んだ。

「…ね、ねえ桜咲さん。本当に大丈夫?」

明日菜が心配そうに傍らの刹那に声をかける。

「…はい、大丈夫です、神楽坂さん」

返事を返す刹那だがその顔色は誰が見ても青く、傍から見ている可哀想な程緊張していた。

刹那が此れ程緊張している理由はただ一つ、木乃香と会話をする為であった。ホテルに帰ってから刹那は明日菜に頼み込み、木乃香と話があったので自由時間になったら木乃香を呼び出して欲しい旨を告げた。明日菜は少し驚いたような顔をしてから笑って快諾、席を用意した。

そして今は約束の時間であり、木乃香は既に待っている。後は刹那が顔を出すだけなのだが、刹那は有り体に言ってしまうえば尻込みしていた。

刹那が木乃香と話したのは千草によって木乃香が攫われたのを奪還してホテルに帰る最中、木乃香が目覚ましての会話が最後である。それから先は逃げ回ってばかりで真面な会話はしていない。ましてや今から刹那はある程度自分の事情を語り、昔のようには今すぐ仲良くは出来ないと、ある意味嫌っていると取られても文句の言えな

いことを伝えようとしているのだ。木乃香に自分がどう思われてしまいかを考えると、刹那はどうしても次の一步が踏み出せなかった。

明日菜はそんな刹那の様子に一つ溜息をつき、腕を振り上げると刹那の背中を思い切り引つ叩いた。

「ひゃあっ!!?」

スパァン!!?!!?と非常にいい音と共に刹那はつんのめる。

「な、か、神楽坂さん何を…?」

「明日菜でいーわよ、私も刹那さんって呼ぶから。あのねえ、もう呼んじやっただから話すしか選択肢無いでしょ?いつまで迷ってるのよ?」

「は、はい…わかってはいるのですが……」

明日菜はふつと笑って言う。

「木乃香なら大丈夫よ、ちゃんと話せば絶対わかってくれるわ。それとも小さい頃からずっと付き合ってた、木乃香のこと信じて無い訳?」

「……いえ」

「ならどーんと言って来なさい!!?こういうのは当たって砕けろよ!!?」

「いえ、砕けても困るのですが……」

言いながらも刹那は先程よりも気持ちが悪くなっていた。

…成る程、本当に気持ちのいい気質の人だ……

刹那は頷き、足を踏み出す。部屋のドアに手をかけながら明日菜を振り返り、刹那は言った。

「ありがとうございます、明日菜さん。…行ってきます」

「ん。頑張つて、刹那さん」

明日菜はニカツと笑って返した。

「今度はなんだ一体!!?」

「知るか、兎に角急げ!」

「辻は正面玄関から入った筈だ、合流するぞ!!?」

中村、豪徳寺、大豪院の三人は嵐山と青山を繋ぐ露天風呂前の通路



を爆走していた。嵐山側の裏手口を開けようとして鍵がかかっていたので中村が蹴りを叩き込み扉を破った。

「っしやアツ!!?」

「どうすんだこれ…」

「後で謝るか場合によつてはばつくれるぞ」

言いながらもホテル内に突入、通路を突き進む一行は曲がり角で何者かの影を視認した。

「誰だオラアツ!!?」

「何者アルか!!?」

飛び出し様身構える両者、が…

「…古か」

「おおつ、ポチ早速逢えるとは幸先いいアル!!?」

「おukiきなりでござるな」

そこに立っていたのは古と楓のバカレンジャー二強の二人だった。

「古、生憎だが今お前に構っている暇は無い。麻帆良に戻ってからでも!!?」

言葉の途中で飛んできた鋭い崩拳を大豪院は化勁で流す。

「…なんの真似だ、古?」

「ふっふっふ、ポチの何時もの誤魔化しには引つかからないアル。また上手いこと言て私から逃げるつもりアルな、そうはさせないアル!!?」

古はそのまま大豪院に打ちかかる。進歩と跟歩が滑らかに繰り返され滑るように、だが半呼吸程の間も無い程に疾く大豪院の懐に飛び込む。小柄な体軀を活かしリーチの長い大豪院の打撃を打たせ難く、同時に躲し難いように胴から足にかけての連打を見舞った。

「ちっ…古、聞け!!?」

攻撃を捌きながら大豪院は呼びかける。

「口ではポチに敵わないから聞かないアル!!?」

古は足払いで大豪院の体勢を崩し、膝をつく大豪院に下段突きを繰り出す。足払いからの転倒後に突きを打ち込む後掃腿撃地捶が大豪院に炸裂した。

「がつ!?？」

大柄な大豪院が優に三mは地面を転がりながら移動し、壁に激突した。

「どうしたアルかポチ!!? 動きが鈍いアルよ?」

「こ、の単純バカ女が……」

大豪院が怨嗟の声と共に起き上がる。それを見ていた中村が半目になりつつ言う。

「…よし、豪徳寺、行くぞ!!? ポチは放つとけ!!?」

「ああ!?？」

「なんだと貴様!?？」

豪徳寺と大豪院が異口同音に声を上げる。

「うるせーこれだから最近のポチは!!? この非常事態に嫁に絡まれてんじやねえよ馬鹿たれ!!?」

「誰が誰の嫁だ巫山戯るな坏蛋!!? そう思うなら貴様も止めろ!!?」

「お前が言っただけ聞かねえなら聞かぬわねーだろ阿呆! 嫁を放つとくからタイミング悪い時に夫婦喧嘩が起こんだよもういいわ嫁とバトつてろ!!? 行くぞ薫つち!」

「ああもうしようがねえ、さっさと追いつけよ大豪院!!?」

「待て巫山戯るな貴様ら!!?」

大豪院の制止も聞かず中村と豪徳寺は奥へ…

「ぶべええええつ!?!!?」

進もうとして中村が足に絡まった鋼線付きの錐によって転倒する。

「まあ待つでござるよ中村殿。拙者も折角参加した以上は強い者とうせなら手合わせがしたいでござる」

犯人は楓であった。あいあいと気楽な顔で頷きながら鋼線を張る。「おめーも捕まっただようすんだよ!?!!?」

豪徳寺のツツコミに答えず中村は平坦な顔でむつくりと起き上がる。そしてコキコキと首を鳴らしながら静かに言った。

「…先行ってる薫つち」

「大豪院と同じじゃねーか!!?」

「一分で片付けたるわあ!!? どうせ言っただけ聞かねえよこつちのバ

カブルーも!!? それにもしかしたらここで起きてんのは襲撃じゃねえかもしれない!!?」

「はあ!!? どういうことだ!!?」

叫んで中村は手刀を足下に振り下ろす。仄かに光るそれは楓へと伸びる鋼線を鋭い音と共に断ち切った。豪徳寺の疑問には答えずに手振りで行けとサインを送る。

「おおっ♪やるでござるな!!?」

ウキウキした調子で楓が鋼線の端を引き戻しつつ言う。それを見て楓に転ばされた時に覚えた疑問からの中村の推測は確信に変わる。

：恐らくなにかを感じ取る感覚は俺以上に鋭え楓ちゃんがかうまで気楽に絡んでくるってことは少なくともホテル内の人間に危害は及んでねえ。つてことは敵の攻撃とかじゃ無くてネギとかの魔法がなんかトラブル起こしてんのかもしれん。あのガキよく暴走して魔法暴発させるらしいし。

中村は考えながら豪徳寺に呼びかける。

「説明してる暇が無え!!? 兎に角辻と合流して山ちゃんと一緒にいるネギ探せ!!? あいつがなんかやってるかもしれない」

叫んで中村は楓に突っ込む。豪徳寺は何か言いたげに口を震わせるが、踵を返し走り出す。

「さっさと追いつけよ馬鹿共!!?」

姿の見えなくなった豪徳寺の去った方向を見つつ大豪院が舌打ちをして構える。

「おおっやる気になたアルかポチ!!?」

「その呼び名は止めろと言ったぞ古。中村、敵では無いのか?」

「この二人が呑気に勝負挑んできてる時点で違和感無えかポツちん!!?」

中村が飛んでくる苦無を叩き落としながら叫ぶ。

「死ね：確かにな」

大豪院は一つ息をつき、古に告げる。

「手早く片付ける、いいだろう本気でやってやる、古!!?」

「望むところアル!!?」

バトル脳二組がぶつかり合いを開始した。

『おおーっつと開始早々トップレベルの戦闘力を持つ二班と武闘派先輩の二人が激突だあーっ!??!』

「うっわすっご……」

「古はやっぱり大豪院先輩狙いかー熱くなつて来たんじゃない?!?!」

「つて言うか楓中村先輩狙い?!?!?なんか激しく意外なんだけど……」

「楓達はバカレンジャー繋がり先輩達と結構仲良いからじゃない?!?!」

「見た所ホテルの中は荒事が起こってる感じじゃ無いんだが……」

辻はホテルのロビーを突っ切りつつ呟いた。人気は無いが真夜中近いなら自然なことである。それにしても物騒な殺気や戦意のようなものを一切感じない。

…妙だな……ん、向こうから誰か……?!?!?

曲がり角に突き当たり辻は唐突に四人の後輩と出くわした。

「あれ……辻先輩、いいっ?!?!」

「か、刀っ?!?!」

「おい何が大丈夫だよ委員長めちやくちや殺る気じゃねーかこの先輩?!?!」

「あ、あの、辻先輩?先輩が桜咲さんに操を立てているのは私達全員承知しておりますので真剣まで持ち出して威嚇せずとも……」

「シヨタが絡まなきや良識派の雪広ちゃんにまで俺はそんな認識かい、いい加減にしろよどいつもこいつも?!?!」

そしてなんの話だよ!!?!」

僅かに怯える四人に辻は刀を一旦降ろしつつ全力のツツコミを放った。

「え、なんの話って……」

「先輩、あたしちにターゲットにされたくないからそんな物持ち出ししてきたんじゃないの?」

「だからなんの話だ?!?!いや、そんなことよりこの近辺に怪しい奴を

見なかったか、君達？」

「いや、どう考えても日本刀片手に女子中学生しか泊まってないホテル内彷徨いてる先輩が一番怪しいんすけど…」

辻の質問に千雨が容赦の無いツツコミを入れる。

「…いや、そうだろうけどそういう事じゃ無くて…」

微妙にダメージを受けつつも説明しようとする辻を遮りあやかが叫ぶ。

「もしや！辻先輩はネギ先生にキスの後その場の勢いで何かをやらなかったか知らない不埒物を警戒してそのような獲物を!?!」

「は?!」

あやかのおぶつ飛んだ予想に間の抜けた声を上げる辻。

「確かにそれはこの上無く怪しい人物でしょう…ですがご安心下さい辻先輩!!?この雪広 あやか、誓ってそのような道に外れた振る舞いをするような低俗な輩ではございません!!?寧ろ辻先輩に私は協力出来る立場ですわ、警戒をしていたならば辻先輩はネギ先生の居場所をご存知なのでは!?!私もネギ先生を警護したく思います、どうか私にネギ先生の位置を…」

「ああーっいいんちよ、善良な辻先輩騙くらかしてなに抜け駆けしようとしてるのーっ!!?!」

「て言うかいいいんちよの言ったこといいんちよが一番実行しそうじゃん!!?!」

「いや、委員長、あたしも流石にそれはどうかと思うんだけどよ…」

「なっ、何を言っているのです皆さん!!?!この私がそのような真似、してかすとも思っているのですか!?!」

「いやまあ…」

「やるよね、ぶっちやけ」

「…まあ、あたしからは何も言えないな…」

帰ってきた返答にあやかはワナワナと全身を震わせ、両手の枕を構える。

「…上等ですわ貴女達、やる気ですわね!?!」

「こつちも上等だよいいんちよ、最初からこつちはそのつもりだった

しね!!?」

「やってやろうじゃん、来なよいいんちよ!!?」

直後、三人による枕を用いた激しい打撃戦が幕を開けた。

…なんだ、この流れ……?」

辻の理解を越えた事態にこの日二度目のフリーズを迎えていると、辻に対して呼びかける声がある。

「辻ーっ……ここにいたか!!?」

現れたのは豪徳寺である。一人蚊帳の外に逃れていた千雨がうわ、増えたと呟くがそれに構わず辻は問う。

「豪徳寺!・中村達は!?!?」

「色々あって少し遅れる。それよりなんだよこの騒ぎつつーか乱闘は?」

「ああ、こつちも話せば長いんだが……」

「あのー先輩方?」

そんな二人に声が掛けられる。

「先輩方、あたしはやってらんねーからもう帰らせてもらいますよ。先輩達を狙ってる人は多分いないと思いますけど、新田先生なんかも彷徨いてますから、そつちの物騒なもの仕舞っておいた方が良いと思います。じゃあ、失礼……」

「待った、確か長谷川ちゃんだよ。頼むからこれがどういう事態なのか説明してくれない?」

踵を返そうとする千雨を捕まえ、辻は説明を請うた。このままでは罅が明かない。

「どういうつて……先輩達もしかして何も聞いていないんですか?」

「だから何かつて何を誰から?」

辻の言葉に千雨は溜息をついて言う。

「あく道理でテンション違い過ぎると思いましたが、辻……先輩でしたよね?あの朝倉の阿呆になに言われてこつち来たのか知りませんけど正直さっさと帰った方がいいですよ」

「朝倉?あのパラッチが何なの?」

「いや実は……」

「矢張りやるアルねポチ!!?でも負けないアル!!?」

古は片手を地面に着き、穿弓腿を放ち大豪院の顎を蹴り上げようとする。

「ちいつ!!?」

大豪院は上体を逸らし垂直に近い軌道で上がってくる蹴りを躲す。足を引き様、地面を鋭く踏み締め大豪院は斧刃脚を繰り出す。本来は足を狙う蹴りだが上体を深く沈めた古に対しては頭部を狙う蹴りとなり、文字通り斧ねのような破壊力を咄嗟に腕でガードした古に発揮した。

「くうつ!!?」

古の身体が冗談のように吹き飛び、壁に激突する。

「化勁の修行が足らんな、古。お前の技はキレがあるが攻め気が過ぎると防御が疎かになりがちだと前に言ったばかりだろうに?」

微妙に先程の蹴りで引き裂かれた衣服の襟を合わせ直しつつ、大豪院が告げる。

「っ痛く、ポチは八極門が専門の癖にゆらゆらと受けも上手くて攻め辛いアル、でもだからこそ燃えるアル!!?」

古は跳ね起き、再び構えを取る。

「っつーかてめえらいつの間にか呑気に指摘し合いながら楽しく組手やってんじゃねーよ!!?さっさと沈めて先に行けやポチ!!?」

中村が四人に分裂した楓と激しい打ち合いをしつつ大豪院に吼える。

「こつちは実力が逼迫しているのだそう簡単に決着が着くか阿呆!!? 貴様こそさっさと勝負を決めろ!!?」

「巫山戯んなこつちの相手は四人に増えてんだぞ!!?単純に言っただけ効打が入んのも四分の一だっただけのにんな早く沈められるわけねーだろがボケえ!!?」

「いやいや、その割りに中村殿は」「拙者の本体に強力な一撃を見舞ってくる割合が多いでござるよ?」「これでも分け身には自信があるでござるが」「どうやって見分けをつけているでござるか?」

休み無く攻撃を繰り返しながら四人の楓が代わる代わる中村に問いかける。

「ああ四方向からうるせえ!!? 知らねえよなんとなくだ勘だこんなも  
んそして多分てめえだオラア!!?」

叫び返して中村の放った三日月蹴りが楓達の一体の水月に吸い込まれる。

「っ!!?」

咄嗟に片手でガードするが堪えきれず吹き飛ぶ楓の一体。同時に、

「当たり前でえだな周りも動き鈍ったぞオラア!!?」

矢継ぎ早に繰り出した首狙いの抜き手、裏拳での脾臓打ち、頭部を蹴り上げる後ろ蹴りが残りの三人を打ち抜き、それぞれを消滅させる。

「……本当に、やるでござるなあ、中村殿」

痺れの残る片腕を振りながら楓が楽しそうに呟く。

「楓ちゃんよお、好い加減にしてくんね? こちとら急いでんよマジ  
で。三分も無駄にしちまったじゃねえのどうしてくれんよ」

中村がウンザリいたように楓に告げる。

「ふむ? 先程も言っておられたようござるがなにをそんなに急ぐの  
でござる中村殿? よもや中に目当ての女子がいて無理矢理に接吻で  
もしでかそうと言うなら拙者も女の端くれとして幾ら何でも止めさ  
せてもらうでござる」

楓は不思議そうに返した後身構える。

「しねえわんな真似!!? 俺は確かにエロいこと大好き女の子好きだ  
が無理矢理は大っ嫌いなんだよ! エロゲでも強姦モノは一切やらね  
えし俺の座右の銘は痴漢は死ねだっつーの!!?」

中村が失礼なこと言うんじゃねえと憤慨する。

「だつたら貴様が繰り返している覗きは何なんだ変態めが!!?」

双掌打を向かって来た古にカウンター気味に叩きつけながら大豪  
院がツッコむ。

「あれはいいんだよ女とは男に見られて羞恥心を感じるにより自  
らの性をより強く意識し、美が磨かれるのだから!!? つまり俺は寧ろ





混沌の舞台は、加速する。

11話 悲劇的 或いは喜劇的大騒動（中）

「お嬢様、私は今までお嬢様のことを避けてきました。でもそれは、お嬢様が嫌いになった訳でも、決して、はい決してです。辻部長と付き合い始めたからでもありません。どうか付き合っていますせん、辻部長はお世話になってる先輩です。…コホン、お嬢様、私にはやるべきことがあります。それは少なくとも私のいる環境では望まれていることで、私自身がやりたいことでもあります。だから私は昔の様に、お嬢様と接することができませんでした」

刹那は言葉を切って目の前の木乃香を見つめる。木乃香は真剣な表情で、刹那の言葉を一語一句聞き漏らさぬとばかりに刹那の目を見つめていた。

正直刹那はまだ木乃香の前に立つのは気後れがする。長年避けてきた反動か、正面から姿を見つめるだけで照れが来るし、口も思考も上手く回ってくれない。それでも、刹那は木乃香と再び話せるようになろうと、決意していた。

刹那一人ならば到底実行には移せなかっただろう。こうして今ここにいられるのは、目の前の不実を重ねていたにも関わらず、変わらぬ友愛を抱いてくれていた木乃香自身と、背中を押してくれた明日菜、そして…

…貴方のお節介のお陰ですね、辻部長……

我知らず刹那は小さく微笑む。刹那は自分でも意外な程自然体で、木乃香に言葉を、自分の気持ちを伝えられていた。

「ですがお嬢様、私はそれを、自分の使命を言い訳にしていました。やろうと思えば何時だって、私はお嬢様と、昔程では無くとも話すことが出来ました。…それをしなかったのは私の怠慢であり、エゴです。お嬢様はご学友も増えられましたし、…私は、もうお嬢様に必要は無いと、…そう思っていました。後ろ暗い事情を抱える私が側にいても、お嬢様の為にならないと考えていたのです。

…そんな考えを、はつきり言葉にした訳ではありませんが、色んな人に遠回しに、或いははつきりと怒られてしまいました。私が思っ



木乃香は刹那の頭部を抱え込むようにして抱きしめた。

「お、お嬢様!? 何を…」

「……かったあ……」

慌てふためく刹那は、木乃香に声をかけようとして、耳元で聞こえる掠れた声にハツとする。

「よかったあ……ウチ、せつちゃんに嫌われて無かったんやなあ……」

「……お嬢様……」

…私は、本当に馬鹿で子どもだ。

…お嬢様は、こういう人だと、ずっと昔からわかっていたのに……

「よかったよおおおつ……」

「お嬢様……申し訳ありません、お嬢様……!」

二人の少女は、抱き合って泣きじやくりながら、数年ぶりに「親友」に戻った。

「あくせつちゃんほつぺた真つ赤やく、ごめんなあ、ウチ強く叩き過ぎたわあ……」

「気にしないで下さい、お嬢様。私がしてきたことを思えば、これ位は当然の仕打ちです」

寧ろ足りない位ですよと笑う刹那に、何故か木乃香はむくれたかおをする。

「? お嬢様、何か……」

「せつちゃん、そのお嬢様、ってゆうんやめへん? 他人行儀や」

「え……」

木乃香は刹那に詰め寄り、自らを指差して言う。

「せつちゃん昔はウチのことこのちゃんって呼んでくれてたやろ? 友達に戻ったんやから、またこのちゃんって呼んでくんな」

「え、それは……」

声を詰まらせる刹那に木乃香が再度むくれ、

「なんやく嫌なんか、せつちゃん?」

「いえ、その、恐れ多いと言いますか、その……」

「と・も・だ・ち・やろ!? 恐れ多いとかあるわけ無いやん、ほらせつちゃん!」

「う、く…」

刹那は追い詰められる。

「あー！せつちゃんさっきのほったパチンで足りてない言うとしたよな!?？じゃあウチのこと避けてた罰としてせつちゃんはこれからウチをこのちゃんと呼ぶこと!!?？決定やく!!?？」

「ええっ!??？」

「はくい、せつちゃん…」

「う、うう、…の…ちゃん」

「せつちゃんせつちゃん！声小さいで」

楽しげに囁し立てる木乃香を若干恨めしそうに刹那は見やり、盛大にテンパリながらも名前を、呼ぶ。

「こ、ここのつ、ちゃんっ!!?？」

これ以上無い程噛み噛みの刹那の呼びかけを受けて、一拍置いた後、ブツツと木乃香が吹き出す。

「ぶっ…あっはっはっはっはっはっ!!?？せつちゃんテンパリ過ぎやく!!?？」

「わ、笑わなくともいいじゃないですか!!?？」

「いやゝゴメン、ゴメンなくせつちゃん」

謝りながらも顔が笑っている木乃香に、まったくもう!!?？と憤慨しながら、刹那の顔にも笑みが広がる。

…そうだ。

…私はずっと、こんな風にこのちゃんと話したかったんだ…

くすくすと二人で笑い合い、部屋の中は穏やかな空気に包まれる。と、その時……

「二」朝倉あああああああああああつ!!?？!!?？!!?？!!?？!!?？!!?？!!?？」

「…?？せつちゃん、今の辻先輩達の声やない？」

「…そのようですね……」

突如ホテル中に轟いた怒声に不思議そうに首を傾げる木乃香と目つきを若干真剣なものに変える刹那。

…辻部長達がホテル内に…?

何かあったな、と刹那は判断し、木乃香に告げる。

「お嬢様、話の途中ですが、私のやること<sup>…</sup>が出来てしまったようです。申し訳ありません。必ずまた、きちんと話す機会を作りますので…」  
木乃香は頷く。

「ん、わかった。なんやわからんけど、それがせつちゃんの事情<sup>…</sup>なんやな？大丈夫や、また話せるなら、ウチはちゃんと待つとるで、せつちゃん」

「…ありがとうございます、お嬢様」

刹那は一つ頭を下げて、部屋の出口へ向かう。

「あ！せつちゃん！！？」

「！はいっ！！？」

やや慌てて刹那が振り返ると、木乃香はにっこり笑って言った。

「お嬢様や無くてこのちゃん、やで」

「…はい！行ってきます、…このちゃん」

やや気恥ずかしそうに刹那は言って、部屋を後にした。

「あ、刹那さん。話してる時に悪いんだけど、さっき…」

「はい、辻部長達の声でしたね」

部屋から出てきた刹那に待機していた明日菜が声を掛け、刹那も頷く。

「なにかあったのかしら…：なんか、朝倉くとか叫んでたけど…」

「結界に綻びはありませんが、異常が発生したのかもしれない。明日菜さん、すみませんがお嬢様をお願いします」

「ん、わかった。何かあったら直ぐに先輩達と刹那さんと呼ぶわ」

「はい、それでは、行ってきます」

刹那は声の響いてきた方向、ホテルのロビーへと走り出した。

「何処に居る麻帆良のパパラッチ！！？今日という今日はもう勘弁ならん、俺がこの手で引導を渡してくれる！！？」

「…ってことは状況的に判断して魔法陣はネギが協力する筈無えから消去法でカモか！！？あんの小動物、いらん騒ぎ起こしやがって！！？」

辻と豪徳寺はホテル内の部屋という部屋を探し回りながらお騒が

せコンビに呪詛を振りまいていた。

大絶叫の後ビビる千雨に大人しく部屋で待機しているように言い含め、辻と豪徳寺は主犯、朝倉とカモを探していた。無論のこと、この馬鹿騒ぎを止めさせる為である。

ちなみに朝倉、死んだな…と呟き、部屋に戻ろうとした千雨だが、接近していた新田先生に気付かず御用となり、更に熱くなって乱闘を繰り広げていたいいんちよ、祐奈、まき絵の三人も敢え無く捕まったのだった。

「フハハハハ何処じゃあこの血も涙もない衆人の好奇心のいう名の暴力に尻尾を振って奉仕する奴隷があつこの中村様が性技の鉄槌を喰らわせてくれるわあつ!!?!!?」

「中村殿中村殿、字が違うでござる」

「ま、ま、まさかポチが私の唇狙てたなんて…そういうのはもつと段階踏んでするものアルよポチ、破廉恥アル!!?」

「なつにを満更でもない的な顔をしている巫山戯るな脳筋馬鹿娘!!? 大体俺はそんな馬鹿げたゲームに参加していないしそもそも襲つて来たのは貴様の方だろうが!!? 参加している癖になぜルールを把握していないもう一度言うぞ阿呆か脳筋馬鹿娘!!?」

疾走しながら怪しいオーラを立ち上げる中村と併走しながらツツコミを入れる楓。頬に手を当て顔を赤らめながら照れ隠しに洒落にならない威力の蹴りを大豪院に入れながら走る古にそれを流しながら怒鳴る大豪院と、なんともカオスな状態で一行が探しているのも無論朝倉とカモである。

楓からゲームの話聞いた中村は勝負は後だーっ!!?と走り出し、およ?と首を傾げてから楓も後を追い走り出した。一番説得に苦労しそうだった古は、なんとゲームのルールを大豪院が参加すると聞いた時点で勝負に思考が吹っ飛び、真面に聞いていなかったらしく赤くなってフリーズした。大豪院は脱力しながらも勝負は預けるぞと言いつつ残して走り出し、我に返った古が後を追い今の状況である。

「ここにも居ねえ!!?後は奥かあポチ!!?」



「ポチと呼ぶなど言っているだろうがカスが！ 虱潰しに探すぞ他に当ては無い!!?。」

「…妙でござるな」

「?何がアル?」

「それは…中村殿?」

「なんじゃあ!!?」

「…何やら不穏な気配を感じてござる」

『お、おおーつと、何やら男性陣の参加者が挙って司会者を血眼になつて探しているうゝ!!? 何やら身の危険を感じる為実況は一旦中断させて頂きます!!?。』

「あーあ、朝倉死んだね」

「事情一切説明せずってそりや怒るわ」

「ちよつとカモっち、やばいじゃん!!? 何あたしどんな目に遭わされんの!!?。」

「ま、まあまあ落ち着けブン屋の姉さん。いきり立つちやあいるが旦那方は懐の広いお方達だ。ちよつと説教喰らうくれえで…」

「到底そんな風に見えないんだけど!!? 兎に角あたしはずらかるわ、後よろしく!!?。」

ガサゴソと食券を袋に詰め込み、朝倉は逃走を図る。

「…逃げらんねえと思うけどなあ、まあいいか。しつかしネギの兄貴も外に出ちまったしこりやあ当てが外れて…んん? なんだこりやあ!!?。」

カモの見つめるモニターの先には、部屋の一室に閉じこもり、扉を破られないように抑える夕映とのどかに鳴滝姉妹、そしてその扉の外側で乱打して扉を開けようとする四人のネギの姿だった。

それは不幸な事故だった、と言つてもいい。身代わりの紙方を渡した刹那も、字を書き間違えて失敗した紙方をゴミ箱に無造作に突っ込んでいたネギも、それぞれがちよつとした不注意をしでかしたただただのだから。

しかし、それにより起こった事象はちよつとした、では済まされない惨事を生んだ。

式神を扱う際に注意しなければいけない点は幾つもあるが、その一つに、呼び出した式神に命令を与えずに放置してはならない、というものがある。何故ならば式神とは、余程高位の自我を確立しているような存在で無い限りは、呼び出した術士の命令に単純に従うだけの極めて薄い心しか持ち合わせていないのだから。

そういった式神は命令を与えることにより、それを実行することに全霊を注ぐため、悪いモノが入ってくる隙を無くすのだ。

それは例えば悪霊や浮遊霊などの、朧な意識を保っているだけの現世になんの影響も及ぼせない微弱な存在。そういったモノたちは、自分が死んだことを認められないもの、現世に未練を残し、それを諦められずに成仏できないモノが大半である。

そのモノ達の共通点は生きたがっていること。

生きた体でも仮初めの体でもなんでもいい、兎に角生き返ることにそのモノ達は腐心している。

だから式神には命令を与えなければならぬ。命を受けて始めて彼らは微弱とはいえ、心を持つものだから。仮初めだろうと生きた体にはどんな方法を使つても心を入れなければならぬ。

それをネギは怠った。書き損じの紙方四枚、例え名が間違おうと書かれた以上は不完全でも紙方は簡易の式として起動する。そしてその紙方達は、成功してベッドに寝ている命を与えられた一体以外は何も命令されていない。そこに雑霊達が取り憑き、紙方を乗っ取ったのは起こるべくして起こったことだった。

「…どうなっているのですか、これは」

夕映は理解できない状況を呪うように呻く。

あちこちが破れ、軋む扉はいつ破壊されてもおかしくない。部屋の机を引きずってきてバリエードを作り、その上から四人がかりで押さえられているが、破られるのは時間の問題である。

夕映とのどかはホテルの外側を通り、非常口を開けてネギの部屋の



まるで本当にゾンビのような呻き声を上げながらネギ擬き、紙方に取り憑いた悪霊は扉を攻撃する。

悪霊が夕映達を狙う理由は簡単、より良い体を手に入れる為である。仮初めの体よりも血肉の通う生きた人間の体を、霊達は当然ながら好む。だから夕映達を殺し、魂が抜け出た後にまだ生気の抜け切らない体に乗っ取ろうとしているのである。

言うまでも無いが、紙方に乗っ取った霊達に扉を破壊する力など無い。かと言って、霊達に乗っ取ったのは身代わりとして待機していること位しかできない低位の式神だ、本来なら十歳のネギの身体能力と同等かそれ以下の出力しか発揮は出来ない。

しかし、不幸なことにその紙方を発動させたのはネギ・スプリングワールドであった。

ネギの魔力は膨大と言っていい潤沢なものである。ネギは慣れない東洋の術式に勝手が解らず、身代わり用の式神に使うにはあり得ない量の魔力を紙方に注ぎ込んでしまった。悪霊達はその魔力を利用して仮初めの体を強化しているのだ。

ミリミリと不気味な音と共に扉がついに裂けて一部が崩落し、虚ろに歪んだネギ擬きの顔が現れる。

「ひ、うう……」

「う、うわあ……」

鳴滝姉妹が怯えた声を上げる。

「ゆ、ゆえゆえ、ゆえだけでも……」

「逃げろ、などと言ったら引つ叩きますよ、のどか。逃げるなら皆です」

「で、でもおっつ!??きやあつ!??」

「のどか!??」

「本屋!??」

扉の隙間から突き出てきたネギ擬きの腕がのどかの手を掴み、引き戻す。のどかは必死に踏ん張って抵抗するが、たちまち引きずられ、扉にぶつかる。更に一人分の抵抗が無くなったことにより、扉が強引に押し開けられ、全員がネギ擬きの射程内に入る。

「ふ、ふええええくくん……」

「史香！この、なんなんだよお前ら!?」

史香が泣きじやくり、風香が震えながらも威嚇する。

「い、痛っ!?」

「のどか!!?放しなさい、この!!?」

腕を強引に引かれて痛みには呻くのどかの姿に夕映は辞典のような暑さの本で殴りかかるが、払い落とされ、床に強引に引き倒される。

「痛っ!?……く……」

呻く夕映の顔に向かい、ネギ擬きが手を伸ばす。

「ゆ、ゆえっ!!?は、放してっ!?」

「ゆえ吉っ!?」

のどかと風香の呼びかけの声を何処か遠くに聞きながら、夕映は観念して目を閉じる。

……ここまで、ですか……

次の瞬間襲いかかるであろう痛みを固くし備える夕映だったが、いつまで経っても痛みは夕映の身を貫かない。

……

うつすら夕映が目を開けると、そこにいたのは、一人は相変わらず不気味な顔のネギ擬き。そしてもう一人は……

「いや〜こうも完璧なタイミングで助けに入れつとよ……」

その人物は奇妙な体勢で固まったネギ擬きの胴体を手刀で貫いていた。

「ヒーロー冥利に尽きると思わねえか、ポチ？」

中村 達也が立っていた。

## 12話 悲劇的 或いは喜劇的大騒動（下）

「中村、先輩…」

「下がつてなりーダー、たったと片付けっから…よ!!?」

言葉と共に胴を貫かれたまま不気味に蠢くネギ擬きに、中村は手加減抜きで蹴りをぶち込んだ。突き刺した手刀が外れ、蹴られた腹回りを凹ませながらネギ擬きが吹き飛ぶ。

「ポくくち!!? そつちはどうだ!!?」

「問題無い、全員無事だ!!? そしてポチと呼ぶな!」

のどかの手を掴んでいた一体を靠撃で壁にめり込ませ、残る二体を牽制しながら大豪院が怒鳴り返す。

「か、楓姉えくく!!?」

「ふええ、こ、怖かつたですうくく!!?」

「おお、よしよし、もう大丈夫でござるよ、二人共」

これまで堪えていた反動か、風香までもが泣きじやくりながら鳴滝姉妹が楓に抱き着く。楓は二人を優しく抱き留めながらも、油断無くネギ擬き達の方を見やっていた。

「本屋…大丈夫アルか!!?」

「く、古さん…はい、大丈夫です」

のどかは掴まれていた手首を軽く振り、特に痛みなどが無いことを確認し、古に答えた。

「古」

「なにアルか?」

大豪院の呼びかけに古が答える。

「その双子と宮崎、綾瀬後輩を連れてロビーで温かいものでも飲ませてやれ。この場は俺と馬鹿で引き受ける」

懐から千円札を古に放りながら大豪院が言った。

「だな、楓ちゃんも行ってくれ、手間だけど怪しい気配を感じたらそつちの様子も見てくれねえか?」

「あいあい、了解でござるよ。しかし、そのネギ坊主擬き、先輩方二人で大丈夫でござるかな?」

中村の言葉に鷹揚に頷きつつ、楓が尋ねる。

「あまり侮るなよ、長瀬後輩、この程度の相手…」

言葉の途中で襲い掛かってきたネギ擬きの一人に大豪院は踏み込む。ホテル内に一瞬振動が走り、体の内側からすくい上げるような裡門頂肘がネギ擬きを歪ませて吹き飛ばし、壁に二つ目のクレーターを作った。

「俺一人でも問題無い」

「ポチよおあんまホテルの中ぶっ壊すなよ、弁償できねえぞ俺ら」

豪語する大豪院に中村がうそ寒気に言う。

「成る程、問題無いようでごさるな。古、行くでござるよ」

「了解アル!!?ポチ、私と楓も何か買ていいアルか?」

「好きにしろ」

楓が鳴滝姉妹を抱え、古はのどかと夕映の手を引き、歩き出す。

「ゆ、ゆえく、大丈夫?」

「問題無いです、のどか。…中村先輩!!?」

「んあ?」

心配するのどかに夕映は返事を返して中村に呼びかける。

「…助けて頂き、ありがとうございます」

「おう、気にすんな。女あ助けんのは野郎の義務だかな」

ケケケと笑って中村が返す。夕映は頭を下げてから、少し躊躇うように尋ねる。

「あの、…これは一体何なのですか?」

中村は少し困ったように頭を掻き、答える。

「リーダーよ、説明できる所は後できつちり説明してやつから、今は休んどけ。怖かったろ?…安心しろ、俺は変態だが、強えからよ」

夕映は暫く中村を見て、やがてもう一度頭を下げて踵を返す。

「行くアルよ、リーダー!!?」

「はい!!?」

足音と共に夕映達は去って行った。

大豪院が小さく笑い中村に言う。

「お前にしては格好のついた対応だったな」

「はあ？巫山戯ろ、俺は何時でも格好いいだろうが。ま、半分巻き込み  
じまったみてえなもんだからな。それに何より、女の子には優しくし  
ねえとよ」

「…フン」

大豪院は笑い、ゆるゆると起き上がるネギ擬きに構える。

「しっかし何だと思うよ、ポチこいつら？」

凹んだ腹、骨格の歪んだ体を一切気にせず立ち上がるネギ擬き  
達を見ながら、中村が気味悪そうに聞く。

「さあな、詳しいことは解らんが関西呪術協会の攻撃では無いだろう」

大豪院は肩を僅かに竦め、答える。

「何ですよ？」

「ネギの形をしているなら、ネギのふりをして俺達を奇襲するなり、生  
徒を人質にするなりもつと上手いやり様があるはずだ。意味も無く  
四人も同じものを作って無秩序に暴れている時点で計画的ななにか  
とは思えまい？」

「あー、成る程」

中村は頷き、

「…じゃあなんだよこれ？」

「知るか、沈めてから考えるぞ」

ネギ擬き達がゆつくりと距離を詰めてくるのに合わせ、中村と  
大豪院も迎え討つ体制を取る。その時、

「ここにいたか!!？」

「悪い、遅くなつたな!!？」

辻と豪徳寺が通路の奥から駆けつける。

「遅っせーぞお前ら」

「すまん。長瀬ちゃんから大体の事情は聞いた。こいつらが暴れてる  
んだな？」

「ああ、辻、お前から見て何かわかるか？」

大豪院の言葉に辻は目を細め、

「全員まともな生き物じゃないな。多分、昨日の女の使ってた式神つ  
てのと同じだ。それ以外はわからん」



「だったら襲撃か？これ。俺はあのお騒がせ女が何かしでかしたかと思っただがよ？」

豪徳寺の言葉に頷きつつも、中村が返す。

「なんにしろ専門家がいなえ状況で俺らが考えてもしようがねえな。ネギやせつたんはどうしたよ、一ちゃん？」

「山ちゃんに連絡取ったらもう相談終わったとき。簡単に事情伝えたら山ちゃんは念の為周辺警戒、ネギ君はホテル入ったらしい。桜咲は知らん、連絡つかなかった」

「O—K—、沈めてから聞こうやどつちかに」

話しながらも辻達はじりじりとネギ擬き達に距離を詰めている。ネギ擬き達は人数が増えたことに戸惑った様に動きを止めていたが、やがてじりじりとこちらは下がり始め…

唐突に全員の体が淡く発光し、先を争うように非常口を叩き破り、外へと飛び出して行った。

「「は？」」

辻達は一瞬硬直し、

「って逃げんのかよ!?!」

「やべえぞあんな連中に一般ピーポー狙われたら!!?」

「兎に角追うぞ、行け!!?」

「って言うか、動き速くなかったか!?!」

辻達も続いて外に飛び出した。ホテルの中庭に着地し擬き達を見ると、庭と道路の境界線で外に出ようとしてもがいているが、見えない何かに弾き返されていた。

「ああ、そうか。桜咲がホテルの敷地に結界張ってるんだった」

「んだよビビらせやがって。バトルフィールド広くなっただけでこっち有利じゃねえか」

「しかしさっきの動き何なんだよ、今も光ってるしよ」

「恐らく残力エネルギーを過剰消費して一時的に身体能力を底上げしているか何かだろう。鼬の最後っ屁のようなものだ、長くは続くまい」

言い合い、辻達は距離を詰める。

「んじや一人一殺で」

「楽勝だな」

「油断はするなよ」

「うし、行くかあ!!?」

四人のネギ擬きに辻達はそれぞれ襲い掛かった。

「……何が起こってんだろ、さつきから?」

「ネギ君の偽物みたいなのが本屋達襲ってたかと思ったら、先輩達がバトル漫画みたいな攻防しだして、外に飛び出してっただけど…」

「朝倉の実況無くなったし…なんかトラブル?」

「うわ、外でめっちゃドカバカやってる!!?」

「なんかもう違うイベントになってない?」

「あくでも夕映ちゃん助けた時の中村先輩はなんか恋愛イベっぽかった!」

「あー確かに!!? 変態なのにちよつと格好良かったし」

「あれ!?!? ネギ君が玄関から入って来てのどかと鉢合わせた!!? こっち本物じゃない!?!?」

「うわ、本当だ!!?」

「…こつちか!!?」

刹那はホテル内で戦闘音のするネギの部屋の近くに辿り着き、非常口が破られているのを見て外に飛び出す。

「…これは……」

そこには辻達がネギの姿をした何かと先頭を繰り広げている。ホテルの外には万が一にも逃げ出せないように山下が駆けつけて控えていた。

「らあつ!!?」

中村の気を引き裂く右中段回し蹴りを両腕でガードするネギ擬きだが、衝撃を受け止めきれず体が左に浮き上がる。

「パワー上がろうが軽いんだよボケえ!!?」

中村の体が跳ね上がり、下方から凄まじい勢いで突き出された

飛び膝蹴りがネギ擬きの顔面を撃ち抜き、頭の形が変わる程の衝撃を与えその体を吹き飛ばす。

「へっー」

「漢魂おとこたまあ!!?」

気弾の爆発をなんとか躲すネギ擬きだが直後に飛んできたもう一発が真面に直撃し、爆発と共に空中へネギ擬きを吹き飛ばす。

「極漢魂きわめおとこたまあ!!?」

駄目押しとばかりに打ち出された巨大な気弾が空中でネギ擬きを捉え、爆発。ズタズタになったネギ擬きが庭木の一本に横から突き刺さる。

「弱えな」

「フン!!?」

大豪院の鋭い突きがネギ擬きの顔面を狙う。

ネギ擬きは頭部を掠めながらも一撃を躲し、大豪院に詰めて打撃を見舞おうとする。が、大豪院が更に踏み込み、躲された突きの腕が曲がつての外門頂肘がネギ擬きの頭を撃ち抜く。更に大豪院が距離を詰め、肩からぶち当たる靠撃がネギ擬きを吹き飛ばす。

「終いだな」

「…なんて言うかなあ……」

辻の面打ちを肩に当て、半ばまで斬り込まれながらも殴りかかってくるネギ擬きに対し、辻は脇を締め、自重を峰に込めて引き斬った。刃物は、取り分け日本刀は引くことにより斬れる。打ち込んだ斬撃の威力が相手の硬度で止められた瞬間に、全体重を刀に乗せながら斜め下方に刀を引き、斬り裂いたのだ。

袈裟懸けに殆ど二枚に下ろされながら倒れるネギ擬き。

「…ネギ君二つにしたみたいで気分悪いなぶふっ!!?!!?」

唐突にネギ擬きの体が弾け、凄まじい爆発が起こり、至近距離で巻き込まれた辻は宙を舞った。

「っ、辻部長ー!!?」

刹那は宙を舞い、落下してくる辻を慌てて受け止め、地面に下

ろして抱き起こす。

「大丈夫ですか!?!?」

「…な、にが……起こった……?」

痙攣し、朦朧としながら辻が尋ねる。

「うおーい!?!?何がどうした!?!?」

「まさか倒すと爆発すんのか、こいつら!?!?」

「ちよつとー!辻大丈夫!?!?」

「お前は見張っている山下!?!?それにしても厄介な……」

口々に言う中村達の声を聞きつつ、刹那がふと爆心地を見やるとヒラヒラと何やら見覚えのある代物が地面に落ちた。

……まさか、あれは……!?!?」

「先輩方!?!?これは身代わりの紙方の暴走か何かです!?!?」

「ああ?」

「なんだそりゃあ!?!?」

事態を何と無く把握し、青ざめながらも刹那は叫ぶ。中村や豪徳寺の問い返しに、片膝について辻の上半身を横抱きにしながら刹那は説明する。

「本人の姿をそっくりに真似る低級の式です!ネギ先生に周辺警戒の助けの為渡したものが、理由はわかりませんが暴走したのかと!?!?」

「結局身内のトラブルか、笑えん、な!?!?」

尚も起き上がり、襲い掛かるネギ擬きを蹴り飛ばしながら大豪院が忌々し気に唸る。

「皆さん、ここは私が……!」

「いや、そのまま辻と下がってろ!?!?大した動きしてねえし攻撃も単純だ、爆発に気をつけりゃあ俺らで充分片が付く!?!?」

中村がネギ擬きを前蹴りで再び蹴り飛ばし、刹那に告げる。

「しかし……!」

「手はある、巻き添えを喰うぞ、言う通りにしろ桜咲後輩!?!?」

大豪院の言葉に刹那は歯噛みするが、辻を抱えてホテルの壁側まで引き下がる。

「よし、中村、山下、一箇所にまとめるぞ!豪徳寺、止めを刺せ!?!?」

「うるせえ命令すんなポツチン!!?」

「はいよ、中村、ガキかお前は!」

「はいはい、今回何もやってないしね」

それぞれ返答し、大豪院と敷居を乗り越えた山下が庭の中心付近に居る二体に向かって距離を詰め、中村が庭木から降りた一体に向かう。

中村は暴れる一体を強引に捕まえると二人のいる中心に蹴り込む。大豪院は膝の関節を蹴り砕き、山下は逆腕を取って肘と肩の関節を破壊する変形の一本背負いで中心の二体を地面に沈めた。

そこに外側から飛んで来た一体が着弾し、三体のネギ擬きが一箇所にまとまった。

「極きわめわたしま漢魂!!?」

そこにじつと気を集中させていた豪徳寺が特大の気弾を放つ。気弾はもがいているネギ擬き達に着弾し、大爆発を起こした。爆心地でネギ擬きが弾けて誘爆するのを中村達は視認した。

「うっし、やったか!!?」

「中村が立ててるじゃん、やって無いフラグ」

「くだらねえ事を言ってるねえでお前ら……」

「いや待て!!? 一体無事だ、ホテル側に飛んで行った!!?」

「「え?」」

見ればボロボロになりながらも臨界点を越えなかったらしい一体が爆風で吹き飛んでいった。

凶つたように辻と刹那の方へ。

誰が悪かったのだろうか。

後に辻は遠い目をして語る。

油断して爆発喰らって昏倒していた自分だろうか、ダメージ与え足りなかった中村達だろうか、気弾を放った豪徳寺だろうか、そもそもこんなものが出現する要因になったネギや桜咲だろうか、それとも馬鹿騒ぎを起こしたカモと朝倉だろうか。

…いや、それぞれに大なり小なり責任はあっても結局悪いのは

運命だか偶然だかを司る糞つたれた神だか女神だろう。あの悲劇には何か大いなる者の悪意を確かに感じたんだ、と辻は力説した。

「くっ!?」

刹那は歯噛みして迎撃に入る。

まさかかなりの距離を取っておきながら狙ったようにこちらに飛んできるとは思わなかった刹那だが文句を言っても始まらない。

…辻部長を巻き込む訳にはいかない!!?

辻を一旦下ろし夕凧で一撃を見舞おうとする。

「おのれ……!」

辻は怨嗟の声を上げる。不覚を取って吹き飛んだが意識はしばらくして明瞭になり、再びこちらに飛んでくるネギ擬きを辻ははつきりと視認していた。

…桜咲を巻き込んでたまるか!!?

辻は桜咲の腕の中から跳ね起き、手に持つ刀で一撃を見舞おうとする。

二人が行動を起こそうとするタイミングは凶つたように同時だった。

「は?」

刹那の辻を降ろそうとする動きと辻の跳ね起きようとする動きが拮抗し、更に体は二人とも前に出ようとしていた為体が纏れ、揃って転倒する。

「うわっ!?」

「しまっ!?」

刹那が辻に覆い被さるようにして転倒し、辻は咄嗟に刹那の体を抱きとめる。

「っ痛…」

「痛った…大丈夫か桜咲?」

「あ、はい…」

辻が見やれば桜咲の顔が自分の直近で止まっており、脂汗が吹き出るのを辻は感じた。

…危つぶねええええっ!!?危うくまた取り返しつかない  
事故を起こす所だった!?!?

一瞬でも刹那を辻が抱きとめるのが遅かったら古典的なラブ  
コメ的ハプニングが起こっていただろう。

…だがそうそう何度も阿呆みたいな事故起こしてたまるか!!  
?

危機はまだ去っていない、このまま呑気に二人で転がっていれ  
ば飛んで来るネギ擬きが自分達に着弾してラツキースケベ発生とか  
そういう流れだ。辻はきちんと危機を認識し、迅速にそれを防ごうと  
行動した。

「桜咲、離れる!!?あれが飛んで来る!!?」

「っ!!?はい!!?」

至近距離で辻の顔を見て若干赤くなっていた刹那も辻の声を  
聞き、跳ね起きようとした。ここまで二人の対処にミスはなんら無  
い。だからやはり恨むなら天の悪戯なのだろう。

刹那が跳ね起きようとしたその瞬間、近づいていたネギ擬き  
が時間差で爆発した。臨界点ギリギリだった状態で余剰魔力を使い  
切ったのが原因である。

「う、わっ!!?」

起き上がりに上方から爆発を喰らい、刹那が辻の方に再び倒れ  
込む。

「ちよっ!!?」

辻の抗議の声が物理的に途中で中断させられた。

「」「……………」

一部始終を目撃した中村達は無言で佇む。ひたすらに重い沈  
黙が辺りを覆っていた。

「……………やっちゃった……………」

やがて中村が絞り出すように呻く。

辻と刹那は正面から真面に唇をしっかりと重ねていた。

「お、カードが出たぜ!!?…あれ?ネギの兄貴はキスしてねえな、じゃあ誰の……………辻の旦那じゃあねえか、コレ…」

カモが手に取る仮契約バクテイオーカードには一振りの日本刀を大上段に構える辻の姿が描かれていた。

称号は、『断斬式分の執行者』



## 閑話 二人の出会い

随分詰まらなそうな顔をした無愛想な女だ、と俺は最初に彼女を見た時に思った。

随分詰まらなそうに剣を振るうな、この人は、と私は最初に剣を合わせた時に思った。

その少女はまだ俺が随分と荒れていて、剣道にも今程熱心に打ち込んでいなかった頃に、俺の前に姿を現した。

「中学一年生の桜咲 刹那だ。京都からこちらに越して来てこの度剣道部に入部することになった。時期外れの入部だが、皆仲良くしてやってくれ」

その桜咲という少女は当時の部長に促され、一礼した後によく通る綺麗な、しかし冷たい温度を感じさせない声で言ったのだった。

「桜咲 刹那です、皆さんよろしくお願いします。早速ですが私は一身上の都合で滅多に部活動に加われません。顔を合わせる機会も少ないとは思われますが、どうかご了承下さい」

：正直に言って第一印象はあまり良くなかった。

まあ誰でも開口一番自分達が熱を上げる活動の場に加わっておきながら、事情か何か知らないがやる気はありませんとでも言うような人物に好感は抱かないだろうが。

桜咲は宣言通り部活動に顔を出すのは一月に数回あればいい方だった。それを悪びれる様子も無く、誰と特別会話をすることも無く、ただ黙々と竹刀を振るう。そんな桜咲が孤立するのは当然だし、一部の部員のシゴキの対象にされてしまうのもまた、仕方のないことと言えた。当時の俺は表立って賛同こそしなかったが、内心少し喝を入れられて取っ付き易くなってくれないか、などとあまり褒められない思考をしていたものだ。

しかし、実際にシゴキが効果を発揮することは無かったし、桜咲の態度が軟化することも無かった。

理由は単純、桜咲は強かったからだ、同年代の同性の部員よりも、異

性の部員よりも。先輩の同性、異性よりも、部長よりも、そして：当時高等部の一年にして部長から五本中三本を取ることが出来、次期部長は間違い無しと期待の星であった俺よりも、遥かに。

：何故この人は懲りずに私に挑むのだろうか？

：勝ちの目など到底単純見えないだろうに。

その辻部長、当時は只の辻先輩は最初に私と試合をして私があっさり勝利した時に一際、下手をしなくても部を束ねる長としての矜持が潰された時の当時の部長よりも愕然と打ち拉がれていたので印象に残っていた。

辻部長の当時の剣は、確かに高等部の部長に勝るとも劣らない高い技術を持つてはいたが、意外なことにその剣には凄みも熱意も気迫も、何も感じなかった。極端に言えば惰性で剣を振るっているような、そんな詰まらない、とでも言うような剣を当時の辻部長は振るっていたのだ。確かに一般人としては当時から頭抜けた腕前だったので、高い実力に慢心し、熱意を失ってしまったのかと、当時私は思っていた。

辻部長は初めて私に負けた後、取り憑かれた様に何度も私に挑み、その度に負けて剣が乱れていった。最後の方は見ていられない有様であり、さしもの当時の私も、少しだけ悪いことをした、と思っただのだ。

最も、当時の私は先輩としてのプライドを潰してしまったことへの罪悪感もあまり強いものでは無く、実力を誇り鼻を明かしてやろうという野心も何も私の中には無かったのだけれど。

私が剣道部に殆ど形だけ入部したのは夕凧を持ち歩くのに言い訳がし易いから、それだけだ。剣道部で孤立していたのも、半分は性分だが、もう半分は態とだ。気に入らない後輩、と思われ、更に剣の腕でも敵わないとなれば、そんな存在に積極的に関わろうとする者などいないだろう。そうなれば、顔を全く出さなくなろうとも不自然では無い、そうなればお嬢様の護衛に専念できる。当時の私はそんな風に考えていたのだった。

…なんとも不遜で自己中心的な人間だったものだ、と私は当時の自分を思い出す度に後悔と羞恥心に見舞われる。どれだけ精神的に余裕が無く、未熟であったかが今ならばよく理解できる。

しかし、当時の自分にも一つだけ想定外の事態があった。

そして、それがあつたからこそ今の私があるのだと確信して私は言える。

それが辻部長の存在だった。意外にもプライドが粉々になり、二度と挑んでこないだろうと思っていた辻部長は、周りが一度負け、二度負けて私を避けるようになって、遂には話を聞きつけて大学の先輩が顔を出し、私に挑み、ことごとくが敗れ去つても、辻部長は私が顔を出す度に、私が帰ると言い出すまで私と試合を続けた。どれだけ手酷く私が叩きのめしても、辻部長が創意工夫を凝らして対抗するために研鑽した努力の技、体捌き、戦法の数々を私が一蹴しても、辻部長は諦めず私に挑み続けた。

「やられっ放しじゃ格好がつかないんだ。なるべく顔を出すようにしてくれないか、桜咲？」

辻部長は決まって帰り際の私にそう言つて私が部に顔を出すことを望んだ。

だから私は半ば惰性ではあるものの、部活に時折顔を出した。別に叩きのめすのが楽しかった訳でも、折れない辻部長に意地になつていたので無い。ただ只管に真剣に、全力で挑んでくる辻部長の熱意は、当時の自分には無いものだったから、何と無く当てられていたのかもしれない。

今ならわかるが、当時の私は辻部長と剣を合わせるのを、心の何処かで楽しんでいたのだ。

「情けねえなお前。三年も下の中学生に負けて負けて負けまくつてよ。俺なら恥ずかしくて外歩けないわいやすげーすげー」

「キャンキャンうるさい馬鹿だな本当に。一昨日俺に負けて悔しそうにしていたのって誰だったかなあ？どうも目の前にいる馬鹿みたいにおレンジっぽい髪の色してた様な気がしたなあ」

「…ヤンのかコラ？」

「お前が売って来たんだろうが、猿」

当時は中村達とも今程仲が良くなって、頻繁に殺し合いみたいな喧嘩をしていたっけな。俺が強くなれた一因はあいつら悪友のお陰でもある。桜咲の来ない日は部活の後にあいつらと闘り合って俺は腕を上げていった。

桜咲に叩きのめされた時は、正直に言ってあいつが憎らしかったし、プライドがズタズタで正直部活にも暫く顔が出せなかった。

でも俺は、今だから言えることだけれどあいつに叩きのめされて良かったと思う。当時の俺は実家から麻帆良に移って来てまだ間が無く、それまでやって来たことが続けたくなくなって、でも結局剣は捨てられなくて。腕前を誇って喧嘩紛いの決闘に明け暮れてあいつらと殴り合い憂さを晴らして。自分のやって来たことが無駄だと認められずに剣道で先輩達に勝利しては自分は凄いい、誇れる力を持っているのだと小さな領域で自慢していた。

正直、小さい人間だったと思う。口に出さなくとも態度に出るのか、実力はあっても部活で親しい人間はあの頃はいなかった。スケールこそ違えど当時の桜咲と同じだったのだ、俺は。

年下の、それも少女に負けたことを認めたくなくて桜咲に勝負を挑んで。叩きのめされては悔しさに震えた後、がむしやりに腕を磨いて再び挑んだ。周りはかつて強さを鼻にかけていた俺の醜態を影で笑っていたけど、そんなことも気にならない位、俺は桜咲に勝ちたかった。

やがて一年近くの歳月が過ぎて、俺はやっと一本、まぐれみたいな形だけど桜咲から一本が取れた。俺は嬉しくて嬉しくて、その場で飛び上がりそうな程だった。そんな俺に桜咲が、少し複雑そうながらも賞賛の言葉をかけてくれたのだ。

「お見事です、辻先輩」

当時、桜咲は俺が何か聞けば答えを返しはしたが、自分から俺に話しかけることは皆無と言ってよかった。だから俺は声をかけてくれる位には気を許してくれたのか、となんだか更に嬉しくなって、同時

に気付いた。

俺の中には桜咲に対する負の感情はとつくに無くなっていて、いつの間にか負けたくない、強くなりたいとそればかりを思っていたのだ。

そして同時に桜咲は、俺が勝ったからもう部活に顔を出さなくなるんじゃないかと思って、気がつけば俺は桜咲に言っていた。

「いや、まだまだだ。やっと一本取っただけでお前には負け越している。だから桜咲、これからも相手をよろしく頼む。時間が空いたらでいいから、これからも部活に顔を出してくれよ？」

そんな俺の言葉に桜咲は少しだけ目を見開いて、すぐに済ました表情に戻った後、時間が空いたら顔を出します、と言ってくれた。

いつしか剣道部に俺を嘲笑う奴は居なくなり、俺に触発された、と以前よりも熱心に剣道に打ち込む連中が増えた。俺に指導を求めてきたり、打倒桜咲の為に協力してくれる奴らが多くなった。俺はいつの間にか他人と普通に触れ合えるようになっていて、部の先達として確かな規範を示そうと自然に思っていた。そして変わらず、桜咲に挑み続けた。

俺はこの頃には、勿論負けたら悔しいが、桜咲との勝負を何処か楽しみに思っていたのだ。

「お前もよく付き合うよな、辻の奴に」

辻部長に十本に一本程は負けてしまう様になった頃、極めて珍しいことに辻部長以外の剣道部員から言われたのがその言葉だった。

そう言われて当時の私は疑問に思ったものだ。確かに、私は何故辻部長と試合をこんなにも行っているのかと。

お嬢様をお守りすることが、私に取って何よりも優先すべき使命であり、それは今も変わっていない。だと言うのに当時の私は、護衛を他の人間に任せ、暇ができれば部活に顔を出して、辻部長と打ち合っていた。当時はたまの休みを貰ってもお嬢様の護衛を自主的に行っていたというのに、だ。

自分の忠誠心が揺らいだのかと焦りを覚えたし、学園での神鳴流の

先輩に相談もした。帰ってきた言葉は、

「貴女に取って悪い変化では無いから続けよう、と思う限りはその先輩との勝負を続けなさい」

というものだったが、納得と言うか、腑に落ちなかったのを今でも覚えている。

それでも、なんだかんだで辻部長と試合を続けたのだから、当時の私も本能的に理解<sup>わか</sup>っていたのだ。辻部長との時間は、幼い頃お嬢様と遊んでいた時間のような暖かさがあると。

その後も試合は続き、辻部長が少しずつ強くなっていくのを、私は見て、何よりも体で感じていた。

そうしてまた暫くの時間が過ぎ去った頃、事件が起こった。私が剣道部を完全に自分の居場所の一つだと思える様になったきつかけの事件が。

俺が桜咲と試合をした日は、必ずと言っていい程時間が遅くなる。俺は桜咲が夜道を帰るのを心配して。…たとえ桜咲が俺よりもずつと強くてもだ。心配して帰り道について行こうと声をかけていた。

桜咲は決まってそれを辞退していた、まあ、自分よりも弱い人間を護衛として当てにする者などいないだろう。立場が逆だったとして俺でもそうする。しかし、そういったものは気持ちの問題だ。俺は桜咲が何度拒否しても声をかけ続けて、ある日なんの気まぐれか、桜咲が俺についてくることを了承した。俺は理由がどうあれ、この取っ付きにくい後輩が僅かに心を開いてくれたような気がして嬉しかった。夜道を二人で歩いて帰って俺と桜咲は帰ったが、会話らしい会話は殆ど無かった。俺は口が回る方では無いし、幾つか出した話題も桜咲の端的な返答ですぐに終わってしまったからだ。

俺が若干気不味い思いを感じ始めた時にその連中は茂みから姿を現した。どいつもこいつも手に木刀を引っ提げその数は十人以上。全員が歪んだ攻撃的な面をしており、明らかに穏やかな用件で待ち伏せていたわけでは無いことを示していた。

「…何か用ですか、先輩達？」

俄に緊迫した事態に身構えつつ、俺は尋ねた。そう、その集団はいずれも大学部の剣道部先輩方だった。

…ああ、やつぱりこうなったか。

その時の私はそう考えていた。

ある意味それは起こるべくして起こった出来事だった。普通に考えて、一回りも年下の、それも女相手に皆がいる前で言い訳のしようも無い程徹底的に敗れて、それを欠片も根に持たない男性がいるだろうか？その稀有な例外が辻部長であり、私に声をかけ続けてくれた優しい人だ。

しかし、そのような人間は圧倒的少数であり、中にはこうして恥をかかされ、プライドを粉々にされたことを恨み、報復を考える者も出てくるだろう。それが何と無くわかっていたからこそ、その連中と辻部長の会話を聞いていた時も私の中に動揺は無かった。

「お前に用は無えよ辻。用があんのはそっちの糞生意気な中坊だ」

「…桜咲は少し無愛想ですが、それ以外は真面目でいい後輩ですよ」

「ハア？馬鹿じゃねーのお前。んなことを言っつてんじや無えんだよこっちは」

「ごちとら散々そのガキに後輩やら女の前で恥かかされたんだ。ちよつとその上を立てられねえ非常識っぷりを矯正してやんねえと、と思っつてよお」

「こうしてわざわざ教育の為に集まった、って訳なんだわ、わかったか辻？お前には恨みも何も無え、大人しく引つ込んでな」

「お前もそのガキに散々やられて正直ムカついてんだろ？安心しろよ、俺らがきっちり指導しといてやつからよお」

「なんならお前も混ざるかあ？そいつ矯正した後はお楽しみの予定だからよお。なんなら一番は譲つてやつてもいいぜ、顔はいいからさぞかし楽しめんだろうよお」

ギヤハハハハ!!？と下品な笑いが弾ける。

…下衆どもめ。

心が冷えていくのをその時の私は感じていた。先程まであった、何

か掛け替えのない大切な何かが消えていくのを感じ取っていた。

：大した腕の人間は一人もいないな。

妖魔退治を仕事のひとつとし、時に人外の群れに刀一本で挑む自分に對して、この程度の人数は相手にならない。そう確信していたからこそ恐怖は無かった。

同時に、日頃から叩きのめしている辻部長が自分に好感情を抱いている筈は無いと私は決めつけていたのだろう。だからこそ辻部長の言葉に、私はあれ程驚いたのだ。

「巫山戯んなゲス野郎共、汚ねえ言葉囀ってんじゃねえよ耳が腐んだろ」

「：今なんつった後輩君？まさかこの状況で喧嘩売る程馬鹿なわけ？お前」

「後輩とかもう呼ぶんじゃねえよ、今からあんたら全員もう剣道家でもなんでも無いんだからさ」

当時の俺はその時、とても腹が立っていた。目の前の元先輩連中の言動は勿論だが、何より桜咲がそんな風にしか見えていない節穴つぷりに、だ。

：こいつの剣に悪意は無い。少なくとも負けた相手をこいつは決して、見下さない。自分の腕に自負はあつても敗者への侮蔑は無い。そういう人間だ、桜咲 刹那は。

そんなことも解らずに、年下に負けたことだけを引きずって御礼参りなんぞを仕出かす目の前の屑共がどうしようもなく気に入らなかつた。

「辻先輩、何を…」

「桜咲、後ろに下がってる。こいつらの相手は俺がする」

桜咲は理解出来ない、とでも言いたそうな顔をしていた。それを見て更に腹が立った。要するに俺はこういう状況で逃げるか最悪あつち側に寝返るような人間だとこの後輩には思われていたらしい。だから俺はますます退く気は無くなった。まあ、何とか意地だったな、あの時は。



「…危険です。相手は十人以上、はつきり言います。私はこの程度、どうということはありません。辻先輩の腕前では無駄に怪我が増えるだけです。先輩は隙を見て逃げて下さい」

俺はそう言われて苦笑した。はつきり言うよな、この後輩は。

そう、その通り。桜咲は俺より強いんだからこの状況で俺が騎士ナイトよろしく出て行く事に意味は無い。守られるまでも無くお姫様プリンセスが強過ぎる。でもさ、桜咲…

…そういうことじゃあ無いだろう。

「桜咲、お前は俺にとってどういった存在だと思う？」

「は？」

「いいから答えろよ、お前俺にどう思われていると思う」

桜咲は暫く黙って考えた後、よりにもよって抜かしやがった。

「…いつか完膚無きまでに叩きのめしたい不倶戴天の憎っくき後輩、でしょうか？」

俺はズツコケそうになった。まあ、正直最初はそんな感じだったのであまり強く反論は出来ないが。

「…最後しか合っていないよ。お前は、俺の、後輩だ」

「…それが」

「黙って聞け。お前は強い。その屑共よりも、俺よりも、だ。そんなことは解ってる、俺程それを解ってる人間はいない。でもお前は俺の、後輩なんだよ」

当時の俺は、そこで視線を切って屑共の方に向き直る。

「後輩がこんな連中に絡まれるのを放って逃げるなり何なりしたらさあ。俺は二度とお前の先輩名乗れないんだよ。こいつらと同じようにな。なんとというか、意地だよ。先輩として、男として。後輩は、女の子は守ってやりたいものなんだ。お前が俺より強かろうと、そんなことは関係無い。と言うかな……」

ナメんな後輩。いいから黙って守られろ、先輩命令だ」

私はその時、不思議と体が動かなかった。

目の前では、乱闘が繰り広げられていた。

「つけんじゃねーぞ糞餓鬼があつ!!？」

耳障りな叫び声をあげながら男の一人が正面の二人と打ち合っている辻部長を後ろから脳天目掛けて振り下ろす。が、辻部長は正面の二人の木刀を力任せに薙ぎ払い、手から木刀を払い落とすと振り向き様に一閃、あえなく打たれた手首を砕かれ、男の奇襲は失敗に終わる。情けない悲鳴を上げて蹲る男を容赦無く打ち据え、辻部長は次々と男達を叩きのめしていく。

私は驚いたものだ。戦えば勝つだろうとは思っていたが、もつと苦戦して、ボロボロになるかと思っていたから。明らかに辻部長は多対一の状況にも、剣道の試合とは違うルール無用の戦闘にも習熟していた。

それでも手傷は出来る。なのに私は、動かなかった。辻部長の言うことに納得した訳でも無いのに、こんな庇い立て、意味は無いのに。私はその時、最後の一人が沈むまで、黙ってその場で、辻部長の奮闘を見ていた。

そこから先は大した話では無い。士道不覚のカス共は広域指導員に引き渡され退学処分になり、ついでに当時の杜崎にズタボロにされたいらしい。いい気味である。

桜咲はあの後格好をつけすぎです、と困ったような顔で俺に言ってきた。まあ正直、見栄を張りすぎた感はある。桜咲なら傷一つ負ってはいないだろうからとんだ道化もいたものだ。

しかし俺は、その時から現在に至るまでそれを後悔していない。同じような場面に出くわせば、何度でも俺は桜咲を庇うだろう。あいつは俺の、後輩だからだ。

それから桜咲は、前よりも剣道部に顔を出してくれるようになったし、俺が三年になって部長になり、中等部女子の指導を任せた時には多少ゴネはしたものの、引き受けてくれた。

全部が俺のおかげだなんて自惚れるつもりは無いが、桜咲が部の皆と触れ合うきっかけになったこと位は誇ってもバチは当たらないだろう。

桜咲、お前には感謝している。お前にへし折られなければ俺は他人も気遣えず、自分の腕前だけひけらかすような詰まらない人間になっていたよ。

辻部長、貴方には感謝しています。こんな私が、曲がりなりにも人と触れ合えるまで成長できたのは、そしてそれを楽しいと思えるようになったのは、貴方のおかげです。

そして二人は、やがて非日常にて交差する。

### 13話 状況整理 問題の解決へ

男は追い詰められていた。幾度も鋭い刃が体を掠め、全身が熱くまるで燃えているようだ、と男は思った。既に逃げ場は無いに等しい、慈悲を請い、這い蹲つて許しを得ようとしても無慈悲な凶刃は止まらない。

ああ……………

「ひいひいひいひいっ!??旦那、願えです、お慈悲をおおおおおっ!??」

「アンシンシロキサマヲコロシテカラオレモセキニヲトツテハラヲワツテクレルワアアアアアツ!!?!!?!!?」

「か、カモクーーンっ!??」

「まああれは死んでもいいとして、桜咲ー、辻の切腹をどうにか、って聞いてねーやこりゃ」

「完全に上の空だな」

「顔が何と無く赤いから昨日のことでも思い出してるんでしょ」

「まあ、それはさて置き安心しろ、貴様は斬り殺されはせんだろう、朝倉後輩」

「…………いや、殺されなければいいって訳でも無いんだけど、先輩方:」  
「半分は自業自得でしょ、反省しなさいよ、つたく:あ、本屋ちゃん、安心してねー、本屋ちゃんに危害は一切加えないから、落ち着いたら説明しようと思って呼んだだけだからねー」

「あわ、あわわわわ……………」

「のどか、気をしっかり持つです。それにしても、無秩序カオスですね:」

昨夜の悲劇から一夜が明け、一同は3ーAの生徒の目を避ける為にホテル『青山』ロビーに集合していた。

現在、カモを視認した辻が狂乱バーサクして、カモを刺身にしようとして絶賛五月雨斬りを実行中である。カモは文字通り必死に避けているが、時間の問題のようである。ネギが追い縋つて止めようとしているが、まあ望みは薄そうである。動きが違いすぎるからだ。

「一はじめちゃん、そいつは輪切りにしていいからお前は死ぬなよー、せつ

たん未亡人にする気がまったく」

「荼化すな阿呆。その俗物はどうでもいいが昨日は大変だったのだ、また変に暴走したらどうする」

「何も言わずに遺書をしたためてから腹切ろうとしたからねえ…」

「言つても聞かねえから一発ぶち込んで寝かしといたがやっぱ落ち着いてはいねえな…」

「旦那方ああああ!!? 呑気に話してねえで辻の旦那を止めてくれええええつ!?!?」

カモの悲痛な呼びかけを聞いて中村達は五月蠅そうな顔をする。

「五月蠅えお前はそのまま死ぬ。この大変な時に下らねえ騒ぎ起こしやがって」

「このパパラッチも大概だが貴様の理由は聞いたぞ、金が入るそうだな」

「一般人を私欲の為に巻き込もうなんて奴はどう考えても悪だよね? 悪党なら死んでも構わないよねえ?」

嗤いながら口々に言う面々を見て朝倉が恐る恐る尋ねる。

「あの、先輩方、結構マジでピキツてる?」

「つたりめーだ!!?」

「別にお前らだけに責任がある訳でもねえが今回は危うく、と言うか最悪死人が出ていたかもしれないねえんだよ!!?」

「というか朝倉ちゃん、真面にカモから説明されて無かったんだから仕方ないといえぼそうなんだけど、それでも魔法なんて胡散臭い力、クラスクラスメートに安易に与えるもんじゃないって判断くらい普通出来るでしよう?」

「あく、いや、はははは………」

「笑い事ではない」

誤魔化すように笑う朝倉が大豪院がピシヤリと告げる。

「貴様も情報を扱う身だ、超常的な力、という不確定要素の塊、手に入るに当たってなんのリスクも無いなどと本気で思っただけはいいまい?」

「厳しい言い方をするなら貴様は好奇心で級友を売ったも同然だ」

「………それ、は………」

表情を固くし、言葉に詰まる朝倉に、珍しく穏やかな表情で中村が告げる。

「朝倉。俺はお前のそのノリ嫌いじゃねえよ。俺らなんざ時折お前以上に馬鹿やるし、他人の事は言えた義理じゃねえ。それでもよ、超えちやいけねえ一線ってのはあると思うぜ？多分お前が思ってるよりこつちに関わんのは危険なことだ。お前は関係無えから関わんな、とは言わねえ。魔法使いのお偉いさん達はどうか知らねえが俺らに止める権利は無え。でもこれだけは言っとくぞ」

中村は言葉を切つて朝倉の顔を正面から見据える。

「何か起こった時に自分でなんとか出来ねえなら権利ってのは主張するな。てめえの尻がてめえで拭けもしねえのに他人を巻き込もうとするな。責任が取れるかどうかすらわかんねえなら、お前は入ってくるな」

何時もの巫山戯た様子は欠片も無く、真剣な顔できつぱりと中村は告げた。

「……………」

朝倉は中村の目を黙って見返していたが、やがて目線を下に落とし、自分の手を見つめる。

「…巫山戯てばかりの方と思っていました、あのような顔も出来るのですね……」

夕映は朝倉を諭す中村の姿を見て誰にとも無く独り言ちる。

「え？」

「なんでもありません、のどか。それにしても……私達の予想よりかなり深刻な事情のようですね」

「う、うん……」

「朝倉、知りたいなら無理には止めねえ。だけど今回は真面目に下手に関わると命が危ねえ。麻帆良に帰った後にでもちやんと説明してやる、修学旅行の間は、大人しくしてろ、いいな？」

中村の言葉に、ややあつて頷く朝倉。

「…わかった。昨日も洒落になんない事故起こしちゃったしね、大人しくしてるよ、先輩方」

その言葉に頷く一同。

「さて、次はお前とネギだな」

「…言い訳の余地もありません」

大豪院の言葉にしようやく現実に戻還していた刹那は頭を下げる。

「うん、でもその前に辻を一旦落ち着かせてから纏めて話そう。ネギ君もあつちだし」

「テンチュウウウウツ!!?」

「ギャーーーーーッ!!?」

「カモクーんっ!!?」

山下の言葉と同時にカモの体に朱の花が咲き、カモネギコンビの悲痛な絶叫が轟いた。

「中村、介錯を頼む。お前達と過ごした日々は悪くなかったよ」

「やらねえよ。普通に俺が捕まるだろうが」

透明な笑顔で話す辻にうんざりした顔で中村が返す。

「って言うか辻さあ、もういいじゃない。今回は、いや今回もどっちかっていうと桜咲ちゃんの方に非があるじゃない」

「やかましいわあ!!?それでもやつちまったら責任取るのは野郎なんだよお!!?」

辻は瞬間的に泣き顔になって吼える。

「泣くなよ!!?全力で詫び入れて、それで相手が許したらいいじゃないか!!?」

「うるせー!!?それで済むような問題かあっ!!?」

「ああ本当に面倒臭いな貴様!!?」

「だったら放っておけ、俺は死ぬ!!?」

「あ!!?ヤベえこいつ予備で短刀を!!?」

ザクッ

「どわあゝゝゝっ!!?」

「っ、辻部長おおっ!!?」

「辻さーん!!?」

「医者呼べ医者あーっ!!?」

「…と、いうことで辻部長。責任云々の話はまた後日改めて、としましょう。今はお嬢様の護衛を果たして下されば私は満足です」

微妙に視線を逸らして気まずそうにしながらも言った刹那にハイライトの消えた瞳のまま辻は頷く。

「わかった。この命、修学旅行が終わるまでお前に預けるぞ、桜咲」

わかりました、と引きつった顔で頷く刹那を見ながら辻を除いたバカレンジャーは囁き合う。

「…とりあえずぶん殴って麻帆良に連れて帰ろうぜ」

「だな。あの顔は死ぬ死ぬ詐欺じゃ無くてマジだ」

「責任感が強いって悪いことじゃない筈なのにね……」

「ドツボに嵌ると本当に面倒臭い奴だな…」

兎にも角にもひと段落つき、やつと全員で相談が始まった。カモは胴体に包帯を巻かれて痙攣していたが、ネギとのどかの他には誰も気にかける者は居ない。因みに、刹那が自殺志願者（by辻）の説得をしている間にネギは中村達に促され、魔法の存在と現在の状況をのどかと夕映に対して説明を終えていた。

「ともかく、急には受け入れられんかもしれないが魔法使い同士の派閥戦争のようなものに俺達は嵌まり込んでいて、非常に危険な状況にある。先程のお前達の反応を見るに、こっちの超常的な力には拒否感が無いらしいな。悪いことでは無いが、少なくとも修学旅行中は好奇心や勇み足でこちらに関わるような事はするな。脅すつもりは無いが、昨日のような事になるかもしれない」

大豪院の忠告に、やや顔色を悪くしつつも頷くのどかと夕映。

「わ、わかりました……」

「朝倉さんへの忠告を聞いていなかった訳ではありません。心躍るものを感じていますが自重は出来るです」

「ネギ君、桜咲ちゃん。もう強くは言わないけど、何故失敗したかはきちんとわかっている筈だ。気を引き締めていこう」

「は、はい!!?」

「心掛けます」

山下の言葉に気合いを入れ直す二人である。反省会も終わり、頃合



いを見計らってまだ少し生気の無い辻が全員に向けて話し出す。

「皆、情報共有の為に本日の目的を話しておくぞ」

「も、目的、ですかー?」

おどおどとしながらも問いを放つのどかに辻は頷き、

「大きく分けて目的は二つ、だけど目的地は一つだ。…俺達は今日、関西呪術協会総本山に向かう」

辻の言葉に一瞬沈黙して、明日菜が慌てたように反論する。

「ええっ!??ちよつと先輩、それって敵の本拠地って奴なんじゃないの!??」

その言葉に辻は頷く。

「勿論、そうだ。しかし同時に…」

「…成る程」

夕映が何かに気づいたように目を見開く。

「話に聞いた限りでは木乃香の実家であり、お父様が組織の長を務めている、と記憶しています。だからですね?」

夕映の確認に刹那が頷く。

「はい。今御実家に近付くとお嬢様が危険だと思っていたのですが…状況を見れば長に直接話を付けに行くのが最善でしょう」

「あ…そっか、襲って来るのと味方が同じとこなのよね…」

明日菜も思い出した風に頷く。

「…あのさ、質問いい?そんな風に手早く話付けられるならちよつと無理してでも昨日のうちに話を付けに行つとけばよかつたんじゃない?」

朝倉が懐疑的な表情で尋ねる。

「そうしようかと俺らも襲われた時点の翌朝には思ったんだけどよ」

中村が顔を顰めて言う。

「こつちの親玉の指示がその時から現在まではつきりしねんだわ。要約すると修学旅行を護衛しながら行え、とでも言うような感じでよ」

「あ、あの…襲われ、たのにですかー?」

のどかが中村に怯えながらも尋ねる。中村がのどかの様子にダメージを受けていたが皆が無視した。

「そうだ。応援が来るか話をつけるかするかと一日待つて様子を見た  
が連絡は何も無い。ならばもうこちらで勝手に解決させて貰おう、と  
いう訳だ。あちらは東の魔法使いと和睦を結びたい側が主流、直談判  
してこちらの保護を嫌とは言えまい」

大豪院が後を引き取り、説明する。

「…それで、もう一つの目的というのが、これですね…」

ネギが懐から親書を取り出す。

「そういうことだ。ナシ付けに行くところも届け物の場所も同じなら  
戦力を固めて襲われないように昼間っから行こうって方針だな」

豪徳寺が話を纏める。

「これ以上3ーAの娘達を巻き添えで危険に晒せないし、修学旅行中  
こんな風にギスギスしながら過ごすのはあんまりだ。今日で面倒臭  
い事は全部終わりにして、残りの日程を満喫しよう」

辻の言葉に頷く面々。

「それで、非、戦闘員の扱いだけど…」

「皆まで言わずともわかっています、先輩」

山下の言葉を遮り、夕映が発言する。

「木乃香を連れて危険かもしれない場所も行くのでしょうか？少なくとも  
私も、のどか、朝倉さんは別行動して巻き込まれないようにする、で  
すね」

夕映の言葉に笑顔で頷く山下。

「理解が早くて助かるよ、綾瀬ちゃん。言っておくけれど、譲歩の余地  
は無いよ？」

確認するように告げる山下に苦笑して頷く朝倉。

「わかってるよ先輩、流石に私も命危ないかも、なんて言われたら自重  
しますって」

「は、はい…わ、私も、足手まといになりますので…」

のどかも頷き、夕映は無論私も理解していますと首肯する。

「ええっと、先輩達、あたしはどうすればいいと思いますか？」

明日菜が困ったように手を上げ、発言する。

「神楽坂ちゃんは難しい所なんだよなあ…」

辻が唸りながら言う。

「明日ニヤン、多分顔見られてつからなー。下手に隔離して人質にでも取られたら目も当てらんねえし…」

「かと言って連れて行けば普通に危険だ。只でさえ近衛後輩を護衛するのだから…」

うーむと悩む辻達。出来ることなら置いていきたいが人数を裂く余裕は無い。連れて行けばそれこそ狙われて人質か何かにされそうである。

と、その時か細い声で提案が入る。

「とり、あえずじゃあります…対処方法として有効な手段が、ありますぜ……」

カモがなんだか凄く辛そうに告げて来た、大分深く刃は入っていたらしい。

「んだよ、また碌でもない話だったら今度こそ皮剥いで蒲焼きにすんぞ」

「お、脅かさねえで下さいや旦那。簡単でさあ姐さんが兄貴と仮契約すりやあいなんだ」

カモの言葉に一斉に行動を始めるバカレンジャー。

「命が要らんというなら望み通りにしてやろう」

「いい度胸してんじやねーか小動物」

「舐められたもんだな、俺達も」

「じゃあ僕、厨房から火を借りて来るよ」

「鉄串も忘れるな」

「ぎゃくくく旦那方、ストップストップ!!?ちゃんと今回は真面に理由があんでさあくく!!?」

「言わんとすることは大体解る。正式にネギ君と契約を結べば魔力強化って奴も強力になるから差し当たり自分の身は守れるようになるかも、だろう?」

辻の言葉に頷くカモ。

「そ、そうでさあ!だから」

「却下だ。初日にも言ったろが、神楽坂は素人の一般人なんだから訳

わからない力を与えて深入りさせられつかよ」

豪徳寺がきつぱり却下して、他のバカレンジャーも頷く。

「己の私欲のみで発言した訳で無いのは解ったが、それでは駄目だ。なんとか別の方法を…」

「…先輩達」

明日菜が静かに言う。

「いいわ、私契約する」

「…ああ？」

「あ、明日菜さん…」

中村が怪訝そうな声を上げ、ネギが驚いたように顔を上げる。

「神楽坂ちゃん。自分が負担になっていているからってそう言ってくれてるなら、気持ち嬉しいけど…」

「違うわ。先輩達の言いたいことも解ってる」

明日菜は山下の言葉を遮り、告げる。

「私は鬨える訳でも無いし、ついていっても役に立てる、なんて言えない。それ所か足を引つ張つちやうかもしれない。でも本屋ちゃん達みたいに引つ込んでることも出来ないなら、一緒に行くしかないでしょ？でもそれで負担になつちやうなら私裏やら何やらに關つて迷惑被るよりそつちの方が嫌よ。それに、木乃香はあたしの親友だもの。あたしだって何かしたいのよ。絶対無茶しないし、言われた通りに動くから、お願いします」

明日菜が頭を下げ、暫し場に沈黙が降りる。

「…心意気を汲んではどうだ…？」

やがて大豪院が嘆息して言う。

「…代案も無いしね……」

「で、でもいいんでしょうか？」

「本人が理解して関わることに決めたなら止める権利は無えって言ったしなあ、俺…」

仕方が無い、とでも言うような場の空気に明日菜が頭を上げる。

「OKって事でいい？」

「まあ、正直ついて来てくれるならこつちは助かるしね、でも神楽坂

ちゃん、これだけははつきりさせておく」

辻は明日菜に告げる。

「諸々問題が解決したら既に契約しちゃってる宮崎ちゃんと一緒にこれからネギ君とどういう関わり方をして行くのかをちゃんと相談しよう。それはなあなあで済ませちゃいけない問題だ」

辻の言葉に明日菜は真剣な表情で頷く。

「そういうことだカモ、お前の案を採用する。後でネギと明日菜の契約を取り行ってくれ」

「了解でさあ！」

大豪院が頼み、カモが傷の痛みで唸りつつも元気よく答える。

「よし、方針は決まったな。詳細を詰めてから出発するぞ」

「ああ、旦那待って下せえ。兄貴と姐さんが契約してからにしようと思っただけですが、先に重要な説明をしときやす」

「なんだよ？」

中村が怪訝そうな顔でカモに尋ねる。

「パクティオー仮契約カードの機能とアーティファクトについてでさあ」

それから一同は、ネギと明日菜の契約を行い、カードの説明を受けてからそれぞれのアーティファクトの確認を行い、木乃香を誘い出発した。

「しっかし辻のアーテフクトとやらなんだったのかねえ。そんな凄えのか普通の魂って？有名な割りにはしよっぱい名前だよなあその刀」  
「全然正確じゃ無いよ中村。まず普通じゃないし、魂じゃなくて御魂だからね？」

## 14話 劇場舞台にて 姫を守る誓いの場

「のどか、やはり心配ですか?」

様々な機体が騒音を奏でるゲームセンター内、ハルナとのカードゲーム対戦を行っていた夕映は、いつの間にか画面ではなく窓の外をぼんやりと見つめていたのどかに声をかける。

「あ……ゆえ、……うん」

のどかはややあつて頷く。

「私なんかがついて行っても、邪魔なだけだって解ってるけど……明日菜さんは一緒に行ってるから……そんなこと言ってる場合じゃないのは解ってるけど、ネギ先生達に手助けできるかもしれない明日菜さんが、ちよつとだけ……羨ましいし、悔しいな、つて……」

恥ずかしそうに仄かな羨望と嫉妬を滲ませるのどかに、夕映も微笑みながら頷いた。

「気持ち解りますよ、のどか。話を聞かされただけの私でも、内心穏やかではありませんから」

夕映は対戦を終え、のどかの隣に並び立つ。

「……今は、無事を祈りましょう、のどか」

「……うん」

「……むむむ、何かしらこの茶化すには抵抗のある真剣な空気ながらも仄かに香るラブ臭は……」

ある意味恐るべき嗅覚を持つハルナはシリアスな二人から敏感にその手の気配を嗅ぎ取っていた。

「どうしたでござるか、古?」

歩きながらも難しい顔をしている古に隣を歩く楓が尋ねる。

「……ポチ達のことアル。絶対何かやてるのに私らには結局詳しい説明が無かったアルよ!」

プンスカと怒りながらこの場に居ない変人集団に抗議の声を上げる古。それに対して楓は苦笑し、告げる。

「こちらは腕に覚えはあれど、在野に身を置く今だ一学生。巻き込ん

で後々迷惑がかかることを嫌ったのでござろうなあ」

「それが水臭い言ってるアル、我和你？ 跟？!!？」

中国語で悪態をつく古に楓は微笑む。

「なに、大局を見誤ってまで助力を拒む器の小さい御仁達ではござらぬ。その時には遠慮なく助けに入ればいいでござるよ。リーダーや宮崎殿には話してこちらには話さずに行くということはある意味判断を誤りはしないとこちらを信頼している、ということござる」

何より…と楓は微かに痕の残る自らの二の腕を見やる。強烈な一撃の感触と、それを打ち放った瞬間の苛烈な顔を思い出して、ズクリ、と微かに疼くものを楓は感じつつ、言う。

「あの御仁らがどうにかなるような事態など、そうそう起こり得ぬでござろう」

「…：確かに、そうアルね」

古もやや氣勢を収め、空を仰ぐ。

「…：今なにしてるアルか、ポチ…？」

「ぶっ、クシユンツ！」

大豪院が大きめのくしやみを洩らす。

「あれ、大丈夫、大豪院？」

隣を歩く山下が声を掛ける。

「大事な。…：それにしても俺達は何故こんな所にいる…？」

「しようがないでしょ、待ち合わせ場所がここなんだから」

辺りには着物や明治初期の洋装、花魁の遊女や黒尽くめの忍者など、多種多様な服装の老若男女で溢れている。

ここは京都シネマ村。様々な時代を模した建築物を見回り、ジャンルに合わせた仮装を行える観光地である。

何故関西呪術協会総本山に向かうと言っていた大豪院達がこんな所にいるかという、出発するにあたって刹那が掛けた電話が原因となる。

「はい…：はい…：、はい？ ですか…：いえ、わかりました、よろしく願います…」

通話を切った刹那に辻が声を掛ける。

「…なんだって?」

刹那はピクリ、と体を震わせるが、平静を装い、言葉を返す。

「…向こうに行く旨を伝えた所、迎えの車を出す、との事でした…」

「へえ、そりやご丁寧な対応ですことで」

ぎこちない二人をニヤニヤしながら眺めていた中村が何と無く胡散臭そうな顔で呟く。

「まあ、何にしろひとまず受け入れてくれるならいいじゃない」

「だな。最悪門ぶち破って入る羽目になるかと思ってたぜ俺は」

山下と豪徳寺が取りなすように言う。

「…腑に落ちない、という顔だが、何かあるのか、桜咲後輩?」

刹那の浮かぬ顔を見て大豪院が問いかける。

「いえ、それが…」

困ったような顔で刹那が言った。

「待ち合わせを京都シネマ村で行う、との事なんです…」

「…はい?」

明日菜がきよとん、とした顔で問い返した。

「何故こんな所で待ち合わせだ?」

「桜咲ちゃんが言うには協会総本山まで比較的距離が近い、人が多いので敵が襲って来にくい、武装していても違和感が無い、からじゃないかって」

山下の返しに胡散臭そうな顔をする大豪院。

「…腑に落ちんな」

「ねえ」

二人で唸っていると背後から声が掛けられる。

「なに難しい顔して唸ってたんだ、考えたってわかる訳無えんだから大人しく待ってるしか無えだろ? どうせなら楽しんで待とうぜ? 今んとこ敵の気配はしないんだしよ」

「あ、あの中村さん、その格好は、忍者ですか?…」



「違うぜ兄貴、もつと珍妙な何かだ」

「ねえ中村先輩、なんで自分からネタに走る訳？先輩芸人じゃ無くて空手家なんですよ？」

中村が鼠小僧の格好をして話しかけて来ていた。顔立ち自体は悪くなく、髪もオレンジとどう考えてもミスマッチな仮装の筈なのに、怖い位様になってる。欠片も羨ましくは無いが。ネギとカモは妙な存在感を放つ中村に冷や汗を流し、明日菜は呆れたように中村を眺めている。

「緊張感が無いのだ、貴様は」

「いいじゃねえかよ、薰っちもやってるしよ」

「え…っとうわあ、何時もの格好と変わらないじゃない」

豪徳寺はというと天に聳え立つポンパドールに裏地に龍の刺繍が入った長ラン姿である。完全に麻帆良にいる時と変わらず、正直真新しいものは何も感じない。が、周りからすれば完成度の高い昭和ヤンキーの仮装に見えるらしく、外国人の観光客などに声をかけられつつこちらにやってくる。

「何のつもりだ貴様は」

「いいじゃねえかどうせ3-Aの奴らにはもう全員に俺らの存在ばれちまったんだし」

何時もの格好の方が気合いが入んだよ、と豪徳寺は言い放つ。

「…まあ、いいんじゃないかな。あっちもあんな感じだしね」

「あ、出て来ましたね、木乃香さんと刹那さん」

「お、木乃香の姉さんは当然として、刹那の姉さんも似合うじゃねえか!!?」

山下が指差す先には絢爛な着物を纏った木乃香と刹那、の二人に挟まれる辻の姿があった。

「どやどや先輩〜！せつちゃん可愛ええやろ〜!!?」

「お、お嬢様！ですから私はこういった服は…!」

「お嬢様やなくてこのちゃんや〜。聞こえんで〜どや辻先輩!!?」

ドツヤアアツ!!?となんとも可愛らしいドヤ顔の木乃香が辻に刹那を示す。

……いや、どうしろと。

辻は数秒間のシンキングタイムを得てから、刹那を見てなるべく感情を込めずに思ったことを言う。

「…よく似合っているぞ、桜咲」

「っ……………ありがとう、ございます…」

刹那はそっぽを向いたまま返事をするがまじまじ見る必要もない位に顔が赤い。

……………なんだこの空気。

辻が足元から蟲が這い上がってくるような怖気を感じていると、木乃香がチツチツと指を振り、

「あかんでっ辻先輩。もつと気持ちを込めて褒めなく、素直に可愛いって言える方が彼氏さんとしてポイント高いとウチ思いますえ？」

「だから俺と桜咲はカップルじゃねーって何遍言やあ解んだよどいつもこいつも!!?俺と桜咲はせ・ん・ぱ・い・と・こ・う・は・い・だ!!?」

「何を寝ぼけたことほざいとるんや辻先輩は、も〜」

「ねえなんか今凄い毒舌飛び出さなかった?君近衛ちゃんだよね?また入れ替わったりしてないよね?」

ゆるふわ天然系が売りじゃないのか君は、と辻が呻いていると、木乃香がそんな辻をスルーしてポン、と手を打ち、にこやかに告げる。

「じゃあ次は辻先輩の番やなく、何がええと思う、せつちゃん?」

……………何?

「待て、俺は着ないぞ」

「なに言っってはるんですか、辻先輩。一人だけ普段着だと浮きますえ?」

「言ったらなんだけど君らが勝手に着たんじゃん!?!?いいよ俺のことは放っておいて!久方ぶりに二人で遊んでるんだろ、俺はひっそりについて行くから!!?」

辻がそろそろと離れながら空気と一体化しようと努力していると、がっしとその袖が掴まれる、振り向くと刹那であった。

「…なによお前まで、なにか俺に恨みでも……………あつたな、つい昨日に特

大のが。わかった、わかったよ桜咲。これはお前の正当な報復の一環だな？俺は何を着ればいい、女装か？お笑い系か？ブルーメランパンツでも着て施設内を一周すればいいのか？」

「一人で勝手に完結しないで下さい、見たくありませんよそんなの。気持ちの整理がついていないだけで恨んではいらないと何度言えば解ってくれるんですか…兎も角、辻部長。お嬢様もああ仰っていますので…一緒にして下さい」

「やだよ!!？俺この調子じゃ完璧邪魔者じゃん!!？折角仲直りしたんだから二人で水入らずに楽しんでこいよ!!？」

「わ、私だけこんな恥ずかしい格好嫌ですよ!!？辻部長だけ逃げないで下さい!!？人数が増えれば何だかマシになるかもしれないじゃ無いですか!!？」

「何それ!?!？自分が恥ずかしいからって他人にも着せるって、+に+しても一緒に見られて倍恥ずかしいだけじゃん!?!？嫌だ俺絶対着ねえーっ!!？」

「はいはい一名様ご案内やく。すいませーん、お願いしまーす」

はい、という朗らかな従業員の声と共に二人に引きずられ辻は更衣室の奥に消えていった。

「わゝ辻先輩、似合いますえゝ！」

「…よく、お似合いかと思えます、辻部長」

「……………」

辻は浅葱色に白いダンダラの背中に「誠」の染め抜かれた羽織に鉢巻を巻いた、所謂新撰組の格好をしていた。

「うんうん、これでせつちゃんとお似合いやな。ウチもコーデイネーターとして鼻が高いわゝ」

「いえ、ですからお嬢様、私と辻部長は…」

刹那の講義を他所に舞い上がっている木乃香をぼんやり見つつ、辻はポツリと呟いた。

「俺、寧ろこいつらをぶった斬った側なんだけどなあ…」

「…なんか端から見てたら両手に花のデートにしか見えないねえ…神楽坂ちゃんも混ざればいいじゃない?」

「いや、なんかお邪魔虫な気がするっていうか、混ざりにくいわよ、今のあの三人」

「木乃香さん、凄く楽しそうにしていますね…状況は大変ですけど、仲直りできて本当に良かったです…!」

「おうおう辻の旦那も憎いねえ、美少女二人、世はまさに春、つてか?」

「…憎しみで人を殺せたら…!!?」

「五月蠅いわ馬鹿。しかしこんなことをしていいのか…?」

「まあ迎えまだ来ねえしなあ…しかし来ないのかね、敵さんは。まあ来ない方がいいに決まってるんだけどよ」

辻達の後をゾロゾロとついていきながら中村達はコメントする。前の三人は木乃香と刹那の艶やかさが一際目立ち、辻も中々見てくれはいいので非常に目立つ一行になっている。

「あ、地元の中学生かな?写真撮ってるや、いいな後で僕も撮っておこ」

「わ、木乃香ちよつと大胆過ぎない?あゝ刹那さんも…何気に刹那さんもノリノリじゃない?」

「美少女二人に両腕抱き着かれて写真撮影とか、あれゝ可笑しいなゝいつの間に世界はラブコメ時空に変わったんですか?あれゝ?」

「その格好で怪気炎を上げるな馬鹿、珍妙を通り越して怖いわ」

「辻の非常に居た堪れなさそうな顔が最早シユールだな…」

「ありがとうございますましたゝ、お兄さん大人しそうな顔して隅に置けませんねゝどっちが本命なんですか?」

「五月蠅いわ用事が済んだら失せろ女子中学生共!?!」

きやー!と楽しそうに叫びながら散って行く女子中学生の群れ。

…何やってんだろ、俺?

虚しさを抱えつつ辻は二人と歩く。

木乃香は楽し気に刹那をイジリ、刹那はあたふたと盛大にテンパリながらもなんとか会話をしている。

…まあ、いいか。

この場に自分が混ざっているのが納得のいかない辻だが、二人が楽しそうだからいいか、と辻は現状を受け入れる。刹那から助けを求め

る視線を向けられている気がするが気の所為だろう、うん。

：楽しめよ、桜咲。二人でずっと遊びたかったんだからさ、近衛ちゃんは。お前もそうだろ？

姦しく、だが楽し気に歩く三人組。だが、唐突にその幸福な空気は破られた。

「ホホホ~~~~~！」

三人の前に一人乗りの馬車が割り込むように停車する。馬車には何処ぞの貴婦人のような格好をした、見覚えのある少女が乗っていた。

「……わざわざこんな回りくどいやり方する必要無いだろ、ああ面倒臭い……」

黒子の格好をした、僅かに見える肌が異様に白い細身の男が気怠そうに呟く。

「まあまあそう言わんで下さい〜他にになにかしてもらおうつもりはありませんので〜」

楽しそうに黒子の男に返し、その少女——月詠はゆつくりと馬車から降りる。

「どうも〜神鳴流です〜」

「違うだろ……」

「じゃなかったです……その東の洋館のお金持ちの貴婦人にございます〜……そこな剣士様、今日こそうちのものになってもらいますえ〜」

「……………なんだ、これ？」

「な……何？なんのつもりだこんな場所で……？」

刹那も唐突過ぎる展開に困惑したように問い返す。

「せつちゃん、辻先輩、これ劇や劇、お芝居や」

木乃香が困惑している辻と刹那に告げる。

：ああ、劇に見せかけて木乃香ちゃんを攫おうとしてんのか……  
「ってそれならなんでモノにするって設定が俺なんだよ!?!?」

致命的な矛盾に気付いた辻が大声で問い返す。月詠は大袈裟な動作で身を振り、顔を覆って悲しみを表現し、言い放つ。

「ああ、貴方様はいけずなお人……どれほどの金銭も、栄誉ある地位も、何を持ってしても貴方様の忠誠心を揺るがすことは出来ません……でもウチは貴方様が愛しい、この想いは諦めのつくものではありません……故にこそ、決闘です」

月詠は左手の手袋を外し、それを辻に向かって投げつける。「っ！」

辻が反射的にそれを受け取り、周りの観客がにわかになぎわめく。

「剣士様を賭けて決闘を申し込ませて頂きます……三十分後、場所はシネマ村正門横「日本橋」にて……」

マイペースで話をどんどん進める月詠に堪らず辻は抗議する。

「おい待て巫山戯るな、こんな決闘、俺は……」

月詠は辻の様子にクスクスと笑う。

「やっぱり貴方様はお姫様方が大事なんですねぇ妬けてしまえますわ……」

「おい聞いて……」

「でもあきまへんよ女の子が決闘なんてもの仕掛けてまで気を惹こうとしてるんですから……」

月詠は一瞬笑みを消し、情念の籠った、怒りのような妬ましいような、憎らしいような形容し難いドロドロした表情になり、辻に告げる。

「……ちゃんとウチを見いや……」

っっっ？！……

殺気にも似た濃密な気に、辻は言葉を失う。刹那は息を呑み、木乃香はビクリと体を震わせ、刹那にしがみ付く。

「ほな♡逃げたらあきまへんえっ剣士様……!!?」

「あゝ阿呆臭い……」

月詠は馬車に乗り込み、馬の嘶きと共に去って行った。

「……桜咲」

「……はっ」

辻の緊迫した呼びかけに刹那は応じる。

「……どうしようめっちゃ怖いんだけどあの女……!!?」

ずるっと刹那はズッコケそうになる。シリアスな表情のまま何を



告げられた言葉にカモが頷く。

「…成る程、合理的っすね」

「で、でもそれって辻先輩が滅茶苦茶危険なんじゃない?」

明日菜の言葉に辻は首を振り、懐からカードを取り出す。

「大丈夫だ。不覚にもこれが役に立つ」

「…カードの転送機能、ですか」

刹那が確認するように呟く。

「ああ、頃合いを見計らって桜咲に喚び出して貰えば、俺はただ粘っているだけでいい。あのイカレ女は強いが、それ位は出来る。…正直顔も合わせたく無いが、ここが正念場だ。俺も腹を決める」

辻の言葉に、刹那は何か言いたげであったが、やがて一つ首を振り辻に告げる。

「…また危険な役目をお任せします。言える立場ではありませんが、無茶はしないで下さい」

「…わかった」

辻は頷く。

「…あの、せつちゃん、明日菜、皆さん……」

話を黙って聞いていた木乃香が口を開く。木乃香には先程、魔法の存在を伏せて、木乃香のお家騒動の関係で木乃香を攫いに来ている輩がいると既に説明がしてあった。木乃香は何かを言おうとするが、暫し迷った挙句、何事も言葉を発せられずに口を閉じる。

「木乃香……」

「木乃香さん……」

明日菜とネギは木乃香を心配して寄り添う。心優しい木乃香が、自分に関係する騒動で皆に迷惑を掛けてしまう事に、心を痛めていることが二人にはわかった。

そんな木乃香に辻は優しく笑って告げる。

「近衛ちゃん、気にする事は無いよ。この場に君を守ることを嫌々やろうとしている奴なんて一人だっていやしない。俺達は皆、望んでここにいるんだ」

辻の言葉に皆が続く。



「そうそう、美少女を守るのは野郎にとって当然の義務だぜ!!? 泥舟に乗ったつもりでない!!?」

「それを言うなら大船だ、阿呆。気にするな、と言っても無理な話だろうが、君が今言うべき言葉は謝罪ではなく礼の言葉だ」

「僕ら、相当強いよ? 心配しないでよ、近衛ちゃん」

「漢としてこんな状況、寧ろ望む所だぜ!!?」

「木乃香さん、僕も精一杯頑張ります!!? 辻さん達はとても強い人達です、安心して下さい!!?」

「木乃香、この人達もあたしも、木乃香が嫌だつて言っても勝手に助けるわ。だからもう、諦めてドーンと任せなさい!!?」

「……皆……」

何かを堪えるように俯く木乃香に、最後に刹那が歩み寄り、告げる。

「安心して下さい木乃香お嬢様。何かあっても私がお嬢様をお守りします。そして信頼して下さい。何かあっても皆さんは私達を守って下さいます。勿論私も、皆さんを守ります。…もう誰も、以前の私のようにいなくなったりしません」

「……せつぢゃん……」

目から熱いものを溢し始めた木乃香がくぐもった声で刹那を呼ぶ。

刹那は木乃香を優しく抱き留め、赤子をあやすように背中をゆつくり撫でる。木乃香はしゃくり上げながらも、はつきりと皆に向けて言った。

「…皆、さん、……ウチの、こと……よろしく、…お願いします…!」

その場にいた全員が、笑って声を揃えた。

「…任せとけ（といて て下さい）!!?!!?」

お姫様木乃香を守る為の戦いが、幕を開ける。

## 15話 キチガイ剣士とキチガイ剣士

「フントフントフンフンフンフンフンフンフンフンフンフン」

月詠はこの上無く上機嫌そうに鼻歌を歌いながら刀の手入れを行う。

「…なんであんなに機嫌いいねん、月詠の奴……」

気味悪いわ、と黒髪の少年―犬上 小太郎は誰にとも無く呟く。

「やる気があるならなんでもええわ。月詠はん、何処の誰にご執心だろうとウチにはどうでもええことや。でも仕事はきっちり果たして貰うで」

千草の言葉に月詠は笑顔のまま頷いた。さこ

「はいくお給料分はきっちり働かせて頂きますわく」

ならええわ、と千草は返し、室内にいる残り二人の人物の方に振り返る。

「……この結果次第。あんさん方はそうだったわなあ」

千草の言葉に並んで腰掛けている内の一人、白髪の少年が返す。

「予想よりも人数が増えているといっても想定範囲内だ。此方がするのはサポートのみ、その条件で一定の戦果を出せるのなら貴方をスカウトしよう。条件は変わっていないよ」

それで文句は無いね？と傍の黒衣の青年に尋ねる。青年は面倒臭そうに片手を振って了解の意を返す。

「ハッ、上等や」

千草は獰猛な笑みを浮かべ、氣勢を上げる。

「目にももの見せたるわ、東の魔法使い共にも、西の日和った平和ボケ共にも、…あんたらにもなあ」

千草は言い捨て、踵を返す。

「…千草姉ちゃん」

部屋から出て行くこうとする千草に小太郎が声を掛ける。

「なんやコタ。あんたもそろそろ準備に入りい」

「解つとる。……千草姉ちゃん、大丈夫なんか？」

「何がや？術のことなら安心しい。魔法使いと違って前準備で八割勝負

が決まるのが陰陽師や。この日の為に積み上げて来たんや、失敗はあり得ん」

自信満々に頷く千草に小太郎は首を振り、何処かもどかし気に言う。

「そないなこと言うとするんちゃうわ…」

「じゃあ何やねん、時間押しとするんや、さっさと言い」

苛立たしげに千草がせつつく。

「千草姉ちゃんは、これでええんか？」

「…何がや」

「居られへんなるで、京都ここに。千草姉ちゃんが協会の連中嫌ってんのはよう解つとる、でも、それでも姉ちゃんはこの場所が好きやうとつたやんか！姉ちゃんの親父さんとお袋さんが…」

「コタ!!?!!?」

千草の一喝に小太郎はビクリと体を竦ませ、言葉を飲み込む。

「下らんこと言うとするんやないわ。とと様もかか様も、もう居らん。ウチがどう生きようと、ウチの勝手や。ビビったんか、コタ?辞める言うんならあんたは参加せんでええ。元々あんたは巻き込むつもりは無かったんやさかいな」

「ちやうわ!!?俺はただ…」

「今更止まれんし、止まるつもりも無いんや、ウチは」

小太郎の抗議を一顧だにせず、千草は再び歩き出す。

「辞めんのやったら黙って言うこと聞きたい。ガキが一丁前に大人の心配せんでええんや」

言い捨て、千草は部屋を後にした。

「……………」

小太郎は俯き、何かを堪えるように拳を握りしめた後、部屋を飛び出して行った。

「…小太郎はんは小太郎はんで大変そうですわ」

言葉とは裏腹に気楽に月詠は言い、手入れの終わった小太刀と短刀を手に立ち上がる。

「ほな、ウチも行つてきますわ…うふふ、楽しみですなくお兄さん

♡」

ルンルンと上機嫌のまま月詠は部屋を後にする。

残された二人は無言のまま身じろぎもしなかつたが、やがて白髪の少年が黒衣の青年にポツリと呟く。

「…大変だね、人間は」

「…どうでもいいがな、俺からすれば」

詰まらなそうに青年は呟く。

「…じゃあ、行つて参ります、姫様」

辻はややぎこちない様子で木乃香と刹那に頭を下げる。日本橋の前、月詠の待つ決闘の場に辻は居た。観客の中には中村達の姿も見える。

…上手くやれよ、あいつら…

辻は礼の為ついていた膝を上げ、立ち上がる。

「…辻先輩、氣いつけて下さい…」

「申し訳ありません、私が見すみす…」

「言いつこ無しだ」

刹那の言葉を遮り、辻は前に向き直る。

「心配召されるな、姫。何があつても私が、姫様達をお守り致します。

…私は、何処にも行きはしません」

辻の言葉に周りの観客が湧き上がる。

…………寒っ!!? って言うか痛い俺!!?

辻は芝居がかつた己に羞恥心を覚える。頼むから知り合いが見て居ないでくれよと祈る辻である。

「うふふく格好よろしいですな〜剣士様〜」

月詠は橋の上で笑いながら刀を手に笑う。

「それでは始めましょうか〜お兄さん、尋常の勝負をお願いします〜」

「…お兄さん、になつてるぞ。お芝居はもういいのか?」

辻の問いかけに月詠は笑って返す。

「ええんです〜元々お遊びでやったことすし〜。それに〜」

エロリ、と抜き身の小太刀を幼い見た目に似合わぬ艶かしい仕草で

ひと舐めして、

「…もう我慢も効かんなくなってしまいそうなんです」

顔を赤らめて陶然とした様子で月詠は言い放つ。

「……やっぱ引き受けなきやよかった……!!?……」

辻はへたれた思考を頭を一拍りして振り払い、月詠に問いかける。

「月詠…だったよな。勝負の前に一つ聞きたいことがある」

「はいくなんですからお兄さんなら何でも答えちゃいますよ」

月詠は朗らかに返す。

「…なんでお前、俺に執着する?」

辻は気になっていたことを問いただす。

「正直お前は強い。俺よりもずつとな。強い奴と闘いたいなら桜咲は俺よりもずつと強いぞ。こつちからすればわざわざ俺に向かつてきてくれるのは助かるが、何故だ?格下に一本取られたのがそんなに悔しいのか?」

辻の問いかけに月詠は笑って言った。

「まあ正直それも無いでは無いですが真面に見ればお兄さんが私よりも剣の腕が下なんは確かだと思いますから」

でもくと、月詠は続ける。

「お兄さん、嘘ついてますやろ?刹那先輩が自分より強いって、本気で言うてはりますか?」

月詠の返しに辻は淡々と返す。

「…当たり前だ。あいつは俺よりも剣の腕は上だ」

辻の返しに月詠は目を細めて言い放つ。

「そうですねお兄さんの言うことは正しいですが、でもそれは剣の腕は、の話ですよ?お兄さんは、本気になったら刹那先輩よりも強いんじゃないですか?」

辻は息を詰める。

「…何を根拠に、」

「わかるんです」

月詠は辻の言葉を遮り、言う。

「お兄さんは何処か普通や無いんです。言葉で説明するんは難しいで

すけど、わかるんです。そういうの。…ですから。お兄さん。お兄さんの本気をウチは見たいんです。下手に遠慮しはったら、ウチ何しでかすかわかりまへんで。？」

嗤って月詠は言う。鬼気迫る様子は宣言した事が冗談でも何でもないと、言葉よりも雄弁に告げていた。

辻はそんな月詠を黙って見つめ、やがて溜息を吐いて言葉を溢す。

「…本当に知り合いが見てなくて助かったよ」

辻は下げていた刀を抜き放つ。

「…月詠、最初で最後の宣告だ」

辻は不思議そうに首を傾げる月詠に続けて告げる。

「降伏しろ。今すぐ近衛ちゃんを狙うのを止めて大人しく縛につくなら危害は加えない、お前は死なずに済む。どうだ？」

月詠は辻の言葉を聞いてキョトン、として目を見開き、やがて硬直から立ち直りケタケタと笑い出す。暫く笑声を響かせた後、辻にやつと向き直り、言った。

「お兄さん、悪い冗談です。…ウチがそないなこと言われて、本気で剣を収めるとでも…思ってはりますか？」

月詠が笑みを消し、能面のような無表情で続く言葉を告げる。

「…萎えることほごくなや……！」

月詠は再び凄まじい気迫を全身から放つが、辻はそれを受け微動だにしない。

「……そうか……！」

辻は、奇妙に感情の籠らない口調で、誰にとも無く言い放つ。

「ならしょうがないな」

「つ……！」

月詠は辻の言葉を聞き、自分の中の何かが震える。

「……これですわ……！」

月詠は歓喜する。やはり自分の見立ては間違っていないかった。この男は自分と同じで何かが狂っていると確信する。

「うふ、うふふふふふふふふふ。ええですよ。お兄さん♡じゃあ殺る気になつた所で、存分に斬り合いましたよ。か」

心底嬉しげな月詠の宣言に、しかし辻は首を振って告げる。

「…残念ながら斬り合いはしない。…俺はこれから、一撃でお前を斬り殺す」

辻はそう宣言する。月詠は驚きに目を見開くが、辻を見て確信する。

…本気で言ってはりませんなくお兄さん……………

それだけに月詠は腑に落ちない。辻程の腕前ならば両者の実力が拮抗している場合、一合なら兎も角、一撃で決着が着くことなどほぼあり得ないと理解している筈だからである。

やや困惑した様子の月詠に構わず、辻は刀を振り上げる。

それは一見して剣術で言う、剣を頭上に振りかぶり、肩の上辺りで刀を構える八相の構えに似ていた。しかし、辻は刀を八相の構えよりも高く、刀の柄を右耳の辺りにまで上げ、刀の刃を体の外側に向ける。左足を前に出し、腰を低く落としたその姿は、月詠をして、不用意に踏み込めぬ凄まじい威圧感を放っていた。

…この構え、何処かで……………

月詠は僅かに記憶の片隅に残るその姿勢に、動悸が早まるのを自覚する。そんな月詠に構わず、刀を構えた辻は、月詠を真っ直ぐ見定める。そして……………

「ちええええええええええええええええいつつ!!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

…………… つつ?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!

己が身が反射的に竦むのを月詠は自覚した。辻の引き締まっただけの細身の体の、一体何処から出たのか不思議な程の凄まじい大音量の絶叫に、先程までざわめいていた観客も水を打ったように静まり返る。

…………… 来る!!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!

月詠は身構え、辻の一挙一動も見逃さぬと全神経を集中させ辻を注視する。本来待ちの構えは斬り合いを史上とする月詠にとって本意では無いが、そんなことを言っていられないだけの何かを辻から月詠は感じ取っていた。

月詠は集中し、辻の姿を見て待ち構え、暫しの時間が過ぎた。だが

月詠は一瞬たりとも辻から目を逸らさず、集中していた。だ……というのに。

気がついた時には辻の刀が恐るべき速度で頭上から降ってきていた。

……え？……

月詠は反射的に小太刀と短刀を掲げ、防御の姿勢を取る。しかし、辻の斬撃はそれをものともせず、短刀を粉々に打ち砕き、続いて間に入った小太刀は砕けはしなかったが、その威力を受けきれず、小太刀は辻の斬撃に押されるような形で……月詠の額に、その峰をめり込ませた。

「いぎつ、あああああああつ？！？」

月詠が己が頭部に喰い込んだ小太刀を取り落とし、両の手で割れた傷口を抑えてのたうち回る様子を辻は冷たい目で見下ろしていたが、その内心は驚きで満たされていた。

……受けたのか、俺のこれを。

辻は殺す覚悟を決めていた。己の中で月詠を両断してしまう事に欠片も躊躇が無かったと言えれば嘘になる、様々な意味で取り返しの付かなくなる事を理解していた辻の一刀は、そういった意味合いでは掛け値無しに全力の一撃とは言えなかったかもしれない。

だとしても、月詠は辻の一刀を受けた。刹那が反応できず、油断していたとはいえエヴァンジェリンが頭部を両断された一撃を、だ。

……こいつ、桜咲よりも上なのか……

辻は戸惑いながらも、地面に転がる月詠に告げる。

「勝負ありだ、降伏しろ。下手をすれば頭蓋が割れて脳に損傷が及んでいる。今から医者にかかれれば命は助かるかもしれない」

だが、月詠は変わらず地面でのたうち、呻き声を上げる。

「うう、うう、うう、ううううう……」

……聞こえる状態じゃないか……

辻が会話を諦め、月詠の小太刀を拾い上げて懐から救急車を呼ぶ為携帯電話を取り出そうとしたその時……

「うう、うう、うふ、うふふ、うふふふふふふふふふふ……」





く。  
「一さあん、ウチ、すいまへん、はしたないとこ見せてしもおて……あ  
あ、駄目や、我慢できひん……すいまへん、本当、すいまへん、ウチ、  
帰ります。こんなナリじゃあ一さんのお相手できひんから、帰らせて  
貰いますう……また、会いに来ます。絶対、また会いに来ますか  
らあああつ……！今は、我慢しますから、いずれまた、一さんのそれ、  
味合わせて下さいいいいいいっ!!??!!?」  
月詠はフラフラと後ずさる。それを見て辻はようやく我に返り、刀  
を構える。

……ようやくわかった、こいつは、逃がしちゃいけない……!!??  
再度斬りかかろうとする辻を見て、月詠は潤んだ瞳を更に輝かせ、  
額から溢れる出血で染まる赤よりもなお紅く熟れた林檎のように紅  
い顔を振り、辻に告げる。

「ああ、あきまへん、一さん、そないにウチを誘わんで下さいいいいっ  
!!?ウチ我慢しとんのに、非道いですわあああつ!!?ウチはまた、会  
いに来ますから、絶対、会いに来ますから、そないにがつつかんで下  
さい、お願いですうううう……!」

「………：会話が通じねえのはよくわかったよ……!!?」

辻は最早言葉を発さず月詠に斬りかかる。だが、月詠は懐から札の  
ようなものを取り出し、それを眼前に掲げて、辻に言い放つ。

「名残惜しいですけど、お別れです……一さん、愛してます……  
!!?」

言葉を終えた瞬間、月詠の姿がかき消える。辻が辺りを見回すが、  
月詠らしき姿は影も形も無い。完全に、逃げられた。

………

辻は無言で佇んでいたが、突然刀を放り出し、四つん這いになって  
己の不幸を嘆く。

「……っ!!?なんつなんだよあの女あああああつ!!?ヤバイよ、絶  
対ヤバイよ。ヤバイ女にロックオンされたあああああつ!!?  
どうすんだよ俺、これからどうやって生きてくん  
だよおおおおあああああつ!!?………」



16話 それぞれの覚悟 キチガイ？ 剣士と奇妙な  
刀

「姉ちゃん、今なら近くには神鳴流の護衛しかおらんで。ましてやあ  
ないな格好や、今がチャンスなんやないか？」

屋根の上、辻と月詠が会話している様を監視していた小太郎が、そ  
こからやや離れた位置にいる木乃香と刹那に視線を移し、千草に提案  
する。

「……………」

千草は答えず、目を細めて木乃香と刹那を見やりながら何事かを考  
える。

そんな千草に業を煮やしたように小太郎は尚も千草をせっつく。

「姉ちゃん！今なら大仰な仕掛け使わんでもお嬢様攫えるで！！？もう  
決闘も始まりそうやわ、姉ちゃんがやらんなら俺が…」

「……妙やな」

小太郎の言葉を遮るように千草が呟く。

「え？何がや？」

怪訝そうに返す小太郎に千草は告げる。

「護衛共の対応がや。全員揃ってついてきておきながら、刀持ちのガ  
キに加勢するでも無くこっちの伏兵を探るでも無く、ただ突っ立って  
眺めとるだけやないか、アンタは妙やと思わんか、コタ？」

千草の言葉に小太郎は唸って首を傾げるが、やがてポンと手を打  
ち、千草に告げる。

「二対一タイマン張つとる奴らの邪魔をするんは男らしくないからや！同じ理  
由で一対一タイマン申し込んできた奴が応援呼ぶとは思つとらんのとちやう  
か姉ちゃん!?!？」

「アンタの思考は昭和の番カラか。そないな奴らが護衛やつとる訳な  
いやろが阿呆」

呆れたように千草がツツコミを入れる。

「阿呆はないやろが阿呆は。木偶人形やあるまいし、突っ立ってるだ

けの連中の考えなんてわかるわけ無いやろ。じゃあ姉ちゃんは何やっちゅうねん？」

不満そうに小太郎が問い返す。

「それがわからんからこうやって……」

そこまで言いかけ、千草は何か引つかかるものを感じ、口を噤む。

「……姉ちゃん？」

不思議そうに尋ねる小太郎を無視して千草は思考を働かせる。

…「なんや、ウチは今何に引つかかった？」

千草は考え、先程の会話を思い返す。

…「連中の考えとる事はわからん、いやその前にコタが………っ？!!」

「まさかあんガキ共っ!!?」

「ね、姉ちゃん？」

急に大声を上げた千草に小太郎が戸惑ったように声を掛けるが、それに構わず千草は文様が描かれ、上部に「遠」と描かれた札を取り出し、額に当てる。

暫くして千草が足下に札を叩きつけ、叫ぶ。

「あんガキ共!」おとっい「昨日の意趣返しのもりかい……!!?」

「ど、どうしたんや千草姉ちゃん!!?」

激しく悪態をつく千草に小太郎が慌てて尋ねる。千草はそんな小太郎に対し、若干の焦りを滲ませつつ、告げる。

「コタ!!?今すぐ移動や、あんガキ共身代わり立ててとつくに逃げよった!!?」

「……っはあっ!!?」

小太郎は驚愕と共に叫ぶ。

「はーっはっはっはっはっはっはあ!!?今頃さぞ吠え面かいてんだらうよあの間抜け共!!?自分もやってた癖に引つかかってやんのプークスクスーぎまああああああっ!!?!!?」

「五月蠅えよ馬鹿村、黙って運転しやがれ!!?」

只管にウザい調子で来ない追手を嘲笑う中村に助手席に座る豪徳

寺が怒鳴る。

中村達一行は辻を決闘に行かせるに当たって、どうせこの場も監視をされているのでコッソリ逃げ出しても直ぐにバレるだろうと予測を立てた。ならばどうすれば時間が稼げるかと考え、刹那が持っている身代わりの紙方に目を付けた。これに辻以外の全員の姿を取らせて辻について行かせれば、上手くすれば気づかれずに逃げおおせし、最悪でも多少の時間稼ぎにはなるだろうと考え、実行したのである。

幸い、人数分の枚数はあつたので辻に身代わり達をつけて日本橋に向かつて出発させ、中村達は目立たないように時間をおいてバラバラに衣装屋から抜け出た。

そして、中村がシネマ村の従業員が使用する古いタイプのワゴン車を直結させてエンジンをかけ、乗り込んでシネマ村を後にしていた。「しっかしなんでお前こんなスパイ映画みたいな特技持ってるんだ？」

「馬鹿何かの役に立つかもしれないねえだろ？ できる男つてのは全てを華麗に行うものなんだよ」

中村は自慢げに答える。

「正直犯罪臭しかしいない特技だけどね…」

「と言うか貴様免許持っていないだろうが、なぜ運転できる？」

「どっかの学園都市出身のチンピラなヒーローも言ってたぜ、運転に必要なのはカードではなく技術だってよ」

ふつと笑って中村は言う。

「この先輩私らの知らない所で何やってんのかしら……」

「ま、まあそのお陰でこうして逃げられているんですから、今回は良しとしましょうよー」

「そうそう、細かい事は言いつこなしだぜ!!？」

明日菜のそら恐ろしげな視線に、ネギが慌ててフォローし、カモがしたり顔で頷く。

「…皆さん、まだ油断は禁物です。術士には様々な追跡手段がありますから」

刹那が車内の真ん中の席で、木乃香と隣合わせた状態で言う。

「…せつちゃん…このまま逃げられるんかな…」

不安そうにする木乃香に、刹那は軽く微笑みかけ、心配は要らないと首を振る。

「とはいえだいたい距離は離しました。この調子なら…」

「あれ？桜崎、次はどっちに曲がればよかつたんだっけ？」

刹那の言葉の途中で中村が刹那に尋ねる。

「……？先程の角を曲がれば後は直線ばかりの筈でしたが…」

「ええ、マジか？道間違えたかねえ？」

「いや、これまで桜崎後輩の指示通りに道を通ってきたはずだ」

中村の疑問の声を大豪院が否定する。

「…つて言うかよ？さつきから景色が変わってなくねえか？」

助手席の豪徳寺が、ふと疑問を上げる。

「…とりあえず、また左に曲がってみるぜ」

首を傾げながらも中村が左にハンドルを切る。

暫く直線が続き、一同の乗った車はまた二股の曲がり角に着く。

「……今度はどっちだよ？」

「…いや、待つてください。その信号機の案内板、さつきと全く同じものですよ！？」

ネギが異変に気づき、指摘する。

「ええ！？ど、どーなってるの！？」

明日菜が狼狽の声を上げる。

「…まさか、これは……」

刹那が何かに気づいたように声を上げる。

「無限方処の呪法？」

黒衣の青年が相変わらず気怠そうに尋ね返す。

「うん、万が一標的に逃げられた時のために、天ヶ崎 千草が総本山へ行く道の途中に仕掛けておいたみたい」

白髪の少年が淡々と返す。

「…はーん、抜けてる所もあるが用意は周到な女だな……」

どうでもいいけどな、と呟きつつ、黒衣の青年は億劫そうに腰を上げる。

「…移動、するかい？」

「手出し無用だったって、最低限やる事はやらないとだろ……」

面倒臭い、と呟き、黒衣の青年と白髪の少年は部屋を後にする。

「…つまり一定の範囲内を、俺たちは延々ループしているってわけか？」

「はい。この空間内の何処かに隠された印がある筈ですが、それを壊さない限りここからは出られないでしょう……」

豪徳寺の言葉に、刹那が歯噛みしながら返す。

「どうしようか……敵の包囲から逃れてきたと思ったら、逆に相手の陣地に誘い込まれた形になったね……」

「…まさか、迎えが一向に来なかったのも同じ理由で何処かの結界に巻き込まれているのでは無いだろうか……」

大豪院が厳しい表情で吐き捨てる。

「明日菜……」

「…大丈夫よ、木乃香……」

不安げな木乃香を安心させるように明日菜は返すが、不安な心の表れか、明日菜の口調にも何処と無く元気が無い。

「兎に角、何とか脱出する手段を考えましょう」

ネギの言葉に頷く一同。

「さっさと抜け出して総本山にいかねえと追いつかれちまいそうだな」

中村はそう言い運転席から外に出て、前触れもなく側にあつた道路標識に蹴りを入れ真つ二つにへし折る。

「…何をやっている、お前は……」

「いや、どっかに脱出するための印みてえなものがあるんだろ？ だつたら手当たり次第ににぶち壊していくしかねーじゃねーか」

大豪院の問いかけに中村はあつけかんと答える。

「風潰しにやっつたらキリが無えだろこんなもの」



「何かしら、ヒントとか法則がなければ厳しいだろうね…」

豪徳寺と山下が難しい顔で唸る。

「…兎に角、行動しなければ始まりません。私とネギ先生あたりを見て回って、術式的な痕跡がないかを調べましょう。先輩方と明日菜さんはお嬢様の護衛をお願いします」

刹那の言葉に従い、一同は脱出の為動き出した。

「…よし、なんとか引つかかってくれたみたいやな」

ハンドルを握り締め、千草は安堵の息をつく。

「呪法に掛ったんやったら急ぐこと無いわ、姉ちゃん。あの連中の合流を待とうや」

隣の小太郎の言葉に首を振る千草。

「連中はサポートはする言うてても結局真面に戦力としては期待出来ひん。それに、本山の連中もいつまで足止めが有効かわからんな。ウチらで畳み掛けて搔っ攫う、ええなコタ」

「…わかったわ」

「それでええ。もう着くで、準備しい」

そう言つて、ハンドルを切る千草を横目に見ながら小太郎は決意する。

…千草姉ちゃんに無理はさせられへん。

…俺がやるんや。

「ああもう面倒臭ええええええつ!!? 何処じや出口はあああああつ!?」

中村が、手当たり次第に脇の電柱や標識や岩などを拳足で破壊していく。

「…だから、闇雲に其処らぶつ壊しても見つかるわけがねえだろうがあの馬鹿は」

豪徳寺が溜息と共に呟く。

「うるせー!!? だからつてじつとしていても出られる訳じゃねえだろうがスカしてんじゃねーぞリーゼント野郎!!?」

聞こえていたらしく中村が怒鳴り返す。

「…中村の言うことにも一理あるけれど、手掛かり無しに探していたんじゃないやっただって敵が追いつくほうが早いよね…」  
厳しい表情で山下が呟く。

「辻から連絡も無い。あちらがどうなっているのかもわからない以上、一刻も早く脱出しなければならぬのだが…」

道路脇の樹木を叩きつつ大豪院がひとりごちる。

と、その時、信号機周りを調べていた刹那が、懐から仮契約カードパクティオーを取り出し額に当てる。

「辻からか!?!?」

「桜崎ちゃん、辻はなんだって?」

刹那は暫く応答をしていたが、やがて額からカードを外し、中村達の方へ向き直る。

「…辻先輩は、月読という神鳴流剣士を激破したそうです」

その言葉に、中村があたりの破壊を止めニヤリと微笑む。

「そうかやったかあいつ、やっぱやる時はやる男だな辻は」

「念話の様子からは、相当に消耗している様子でした。かなりの激戦だったのでしょうか」

僅かに微笑んで桜崎が返す。

「辻の側には、その月詠という女以外に敵はいなかったのか?」

大豪院の質問に刹那は頷く。

「既に辻部長は警戒しながらシネマ村を出たそうですが、今のところ襲撃には遭っていないそうです」

「と、なるとやっぱりこつちに来ているね、敵は」

表情を険しいものに変え、山下が言う。

「そう見るのが妥当でしょう。ですから私の提案ですが、当初の予定を変更して、辻部長にはこのまま直接総本山に向かって頂くというのはいかがでしょうか?」

刹那の言葉に、ネギが成る程と頷く。

「僕たちが通ったコースを避けて、総本山に増援を呼びに行ってもらうんですね」

ネギの言葉に刹那は頷く。

「総本山の術士に対応してもらえばこの結界内から逃れる事は可能でしょう。それまでに敵が追いつくかも知れませんが、私たちが粘っている間に増援が駆けつけてくれれば、こちらの勝利です」

「その案でいこうぜ。正直敵の術士の腕が相当なものなのか、兄貴や刹那の姉さんじゃあ結界から抜け出せそうにはないからな」

カモの言葉に反対を唱えるものは誰もいない。刹那は一つ頷き、再び辻と念話を始める。

「辻部長、追って貴方をお願いします。私たちは、今敵の張った結界に捕らわれて身動きの取れない状況です。辻部長は、今から私の言ったルートを避けて…」

「おっと、そこまでにしとき。どうせ無駄足になるさかいなあ」

刹那が、辻に指示を出している最中に、いきなり道路から外れたところにある、雑木林の中から声がかげられる。

全員が一斉にそちらに身構えると、林の中から出てきたのは、はたして天ヶ崎 千草の姿だった。

「おやおやそちらさんから、しかも一人で出てきてくれるとはまあこちらからすりやありがたいこったぜおい」

バキボキと指を鳴らしながら中村が笑って言う。

「おうおう、威勢いいなあ小僧。自分の状況わかって言っとるんか?」

千草は全く怯まずに、笑ってそう返す。

「西の術士!!? 既に我々は協会において主流の長の一派に連絡をとった! 関西呪術協会に今や貴様の味方をするものは一人としていない、大人しく投降しろ!!?」

刹那の鋭い舌鋒に、しかし千草は動じない。

「阿呆くさ」

詰まらなそうに千草は吐き捨てる。

「ウチが最初<sup>ハナ</sup>つからあんな日和った平和ボケ共に何か期待しとるでも思っとるんか自分? ウチはなあ、己が住んで暮らして、生きてる所を腐らせるような輩共が、吐き気がする程嫌いやから!!? こうしてあんなさんの前に立つとるんや。寝ぼけたこと抜かすなや、ひよっこ剣

士」

千草のすげない拒絶の言葉に、場の空気が一気に緊迫する。

「…なら近衛ちゃんを狙うのは止めないし、この場で僕らと相対する、ってことだよな？」

山下が目を細め、背後に木乃香と明日菜を庇いつつ告げる。

「ウチが何しに出てきたと思てんねん。当たり前やろ」

「…ならば今度こそ、潰させてもらおう」

大豪院が構えを取り鋭く告げる。

「てめえ一人で挑んでくるとは、いい度胸してんじゃねーかよメガネ女あ」

中村がジリジリ間合いを詰める。

「木乃香さん、明日菜さん、下がっていて下さい!!？」

ネギは杖を構え、いつでも呪文を放てる体制を取る。

臨戦態勢に入った中村達一行を見て千草は笑って言う。

「…一人か…まあ確かにそうやな。うちは確かにたった一人で、裸一貫ここに来た…いや裸一貫は間違ってるなあ。知つとるか？ガキ共、使える術の総量が器によって決まるとるんは、東も西も変わらんわ」

でもなあ、と千草は笑い、

「陰陽師が魔法使いと違う点は、事前準備によって、ある程度の力を蓄えておくことができる点や。一般で言う防御のための護符を大量に持つとったりするんがその一例やな」

「…何が言いたい」

滔々と語る千草に、刹那が警戒しつつ尋ねる。

「ああ、回りくどい言い方してすまんなあ。つまり…：…こういうことや」

言葉が終わると同時に、空間内に突風が吹く。千草は懐から大量の札を取り出し、その突風に乗せるようにして空間内に札をばらまいた。

「なんだ攻撃か!?!？」

「数が多すぎて種類の判別がつきません!!?!？下手に動かずに様子を

…」

「ああ、大丈夫や。直ぐにわかるわ」

言葉と同時に樹木や標識、道路や岩に貼り付いた札が淡く発光する。刹那が近くの一枚に目をやると、複雑な文様の中、崩した字で「雷獣」と描かれている。

……式神の召喚符!?? ……

「…まさか、これ全てが……!」

その意味に気づき、青ざめながらの刹那の言葉に、千草はニンマリと笑い、

「ご名答や」

「オン・キリキリ・ヴァジャラ・ウーンハッタ」

ズン…!と、一瞬空間が震える。札が光に包まれ、その中から無数の異形の影が這い出してくる。

ある者は身の丈十尺を越える蒼ざめた肌を持つ、鋭い牙と爪、角を合わせ持った異形の人型。

ある者は闇から抜け出たような漆黒の体毛を持ち、狼と猿を掛け合わせたような、二本足で立つ全身が帯電した異形の獣。

またある者はしなやかな光り輝く金毛を全身に蓄え、あり得ぬ程に吊り上がった赤い瞳を持つ成人男性程の大きさを持つ巨大な狐だった。

総勢にして百を超えそうな妖<sup>あやかし</sup>達が一行を包囲していた。

「つつ!?? ……」

全員から言葉にならない、驚愕の呻き声が洩れる。

……あり得ない!??

刹那は目の前の光景を、夢かと疑った。通常、陰陽師が一度に呼び出せる式神の数は、どれほどの腕の持ち主でも十体を超える事は無い。それが術者の精神力、体力の限界なのだ。だがどう見ても、今の千草はその限界を容易く突破し、下手をすれば一個中隊にも勝る程の戦力を召喚している。

…何故……!??

「鳩が豆鉄砲喰らったような顔をしとんなあ」

額に汗を滲ませながらも、千草がクスクスと笑う。

「なんも不思議な事は無いわ。さつき説明してやったやろが」

…まさか!?!?

「貴様、これ程の式神を呼び出すだけの気力を、前もって保有しておいたと言うのか!?!?」

「そうや」

信じられない、とても言いたげな刹那の問いかけを千草はあっさりと肯定する。

「馬鹿な、ありえねえぜ!?!?何時から準備していたのかしらねえが、こんな数の式神、何もせずに維持しているだけでも相当に消耗するはずだぜ!!?ましてやこの女、陰陽師として仕事をこなしながらこれをやったってのか!?!?下手しなくても命が縮むぞ!?!?」

カモの叫びに千草は僅かに首を傾げ、言う。

「せやなあ小動物。お前の言う通りや。…で、それがどうかしたんか?」

「…イカれてやがるみてえだぜ?」

中村がひきつった顔で言う。

「イカれているでも狂い人でも好きないようにいい、それをあんたらの遺言にしたるわガキ共」

『なんやなんや、こない大量に呼び寄せといて、やらせんのは餓鬼の相手かいな?』

一際巨大な鬼が千草に向かって咎めるように言い放つ。

「油断しとつたら消えるのはあんたらやで。払うものは払たんや、グダグダ言わずに言うこと聞きい」

千草の言葉にゲツゲツと異様な声で笑う妖達。

『おお、主さんは怖いなあ。それで、こんガキ共どうすりやええねん』  
狐の面を被った着物姿の女がおどけた様に尋ねる。

千草は中村達の方に振り向き、尋ねる。

「で、どうするんや?大人しくお嬢様を引き渡すんやったら、なんもせずに見逃したるで?」

千草の言葉に、木乃香がビクリと身を震わせ、隣にいた明日菜に

絶る。

明日菜は木乃香をしつかりと抱き竦めると、中村達の方を向く。中村達は、それぞれ顔を微妙に引き攣らせながらも頷く。明日菜はそれを見てこちらでも微妙に顔を強張らせながらも頷く。そして明日菜は千草の方を向き、微妙に声を震わせながらも、言い切った。

「ナメンじゃ無いわよ、イカれ女」

「…さよか……」

千草は笑みを消し、周りの異形達に手を振り宣言した。

「真ん中にいる黒髪の女の子以外は殺しい」

決戦が、幕を開ける。

「…………ヤベエじゃねえかよおおあつ!?」

狭い車内で辻が上げた叫びに、運転していた初老のタクシードライバーがビクリと体を震わせる。

辻は、刹那たちの後を追ってシネマ村を出て、タクシーを捕まえて総本山の近くへ向かっている所だった。刹那から念話が入り、指示を受けている途中に、向こうに敵が現れ、繋がっていた念話越しに辻は刹那達の状況を把握していた。刹那から念話で既に返事は来ない。それ程向こうの状況がヤバいと言うことだ。

「…あ、あのお客さん……」

「ああ、大声出してすいません。兎に角、最初に伝えた場所の近くまで車を走らせてください」

「は、はい……」

…あく完全にやばい人間だと思われてんだろうなあ……

何しろ辻は普段着にこそ着替えてはいるが、その手には未だ日本刀が握られている。と、いうかよくタクシーが停まってくれたものだ。

…でも、そんなことを気にしている場合じゃない。

辻は考える。今から総本山に向かって応援を呼んだとして、刹那達の状況は相当逼迫している。正直、駆けつけるまで刹那達が無事であるとは思えない。

…だからといって俺だけで駆けつけても、結界内にいる人間にそもそも自分が辿り着けるかどうかすらわからない。

…どうする……………

辻が八方塞がりな状況に半ば絶望していると、何処からか声が聞こえる。

『…随分とつまらないことで悩んでいるな、主よ』

……………ん？

辻は辺りを見回すが、当然タクシードライバー以外に人の影は無い。

……………空耳か？

『何を言っている、私はここだ』

……………まさか……………

『そう、私だ』

その声は、次の持っているカードの中から聞こえてきた。

「……………お前、誰だ？」

その辻の問いかけに、響く声は微かに笑い、辻に言葉を返す。

『誰だ、とはご挨拶だな。貴方の刀だよ主』

……………

「……………フツノミタマ？……………」

『そう、私はフツノミタマだ、以後、よろしくお見知り置きを、主』

その声は、まさかと思った辻の言葉をあっさり肯定してきた。

辻は暫し硬直してから、天を仰いで背もたれによりかかり、大きく息を吐き、思った。

……………ああ、今日から俺、自分の刀に話しかけるような痛い人間にジョブチェンジか。

『何やら失礼なものの言い方だな、主』



## 17話 大乱戦 戦場の武道家達

止まっていたら最初の時点で囲まれて潰される。

武道家達の共通認識だった。

『極きわめおとしだま漢魂あつ!!?』

『裂空掌波つ!!?』

バカレンジャーのうち最も外功に長けた二人が、己の放てる最大限の気弾を異形の群れの一角に打ち放つ。

『ム、オ、オ、ツ!!?』

中村の気功波動オーラウェーブが妖達を薙ぎ倒し、豪徳寺の巨大な一撃がそれらを纏めて吹き飛ばす。

『なんと!』

『ほほ〜う』

見た目からは想像もつかない中村達の熟達した気の扱いに、大鬼が驚愕の声を上げ、荒法師姿の鴉頭が楽しげに声を上げる。

「走れええええええええつ!!?!!?!!?」

山下が中央のネギ達に向かって叫ぶ。

「あ……は、はい!!?」

「こつちよ、木乃香!!?」

「う、うん!」

急展開に咄嗟に反応出来なかったネギが、一瞬惚けた後に慌てて動き出し、明日菜が木乃香の手を引いてそれに続く。向かうは中村と豪徳寺が気弾で開けた包围網の穴である。

『そう易易と…』

『行かせるかい!!?』

その眼前に立ちはだかるのは、真っ赤な肌をした鬼と、一つしか目の無い毛むくじやらの大入道。

『そう易易と、は…』

ネギ達よりも先行して、大豪院が前が出る。鬼と一つ目入道は爪と拳を振り上げ、大豪院に向かって振り下ろす。

「こちらの台詞だ」

大豪院の震脚により、空間内が一瞬震える。踏み込んだ右足を軸に、体全体が半回転。振り落ろされる拳と爪に大豪院の背面が衝突し、豪打爆発。

「ハ!!?」

鉄山靠による強烈な発勁が鬼と一つ目入道の腕をぐしやぐしやにひしやげさせながら弾き返す。

『ガアツ!!?』

『なっ!!?』

驚愕の声を上げる両者の懐に、瞬動により音も無く踏み込んだのは山下。

山下は、仰け反った姿勢の鬼と一つ目入道のもう片腕を取り、身体全体を旋回。下半身からの捻じりの力が力学運動により、足、腰、背中、肩を伝わり、両腕に廻つて来る。山下は掴み取った両腕を思い切り捻じり上げた。

次の瞬間、鬼と一つ目入道の体が、掴まれた腕を軸に、人形か何かのように半回転して逆さに宙を舞う。

『うおおおおおおつ!!?』

『ぬおおおおおおつ!!?』

仲良く悲鳴をあげる鬼と一つ目入道に対し、山下は笑って思い切り地面に振り下ろす。

「小手廻し投げ……なくんて、ねっ!!?!!?」

グシャア!!?!!?と、スイカの潰れるような湿った音が鳴り響き、鬼と一つ目入道が頭を砕かれながら道路にめり込む。

「今の内に彼処まで走れ!!?」

大豪院が指差すのは、道路から外れた雑木林の中でぼっかりと空いた比較的広い空間である。この空間内で逃げ回った所で、また違う場所から式神の群れに戻ってくるだけなのだから、せめて包囲がされ難いように開けた場所で体制を立て直す考えだ。

『待てい!!?』

『逃がすとも…』

「神鳴流奥義……」

後を追おうとする式神たちは、自分達よりも下の位置から響いてくる凜とした少女の声に、ギクリと身を震わせる。

「百烈桜花斬!!?」

刹那の振った刀身から、まるで花びらが舞い散るような気の斬撃の嵐が送り、式神達を切り刻む。無数の式神が痛みに悲鳴を上げ、追おうとした足が止まる。

「お前も早く来い、桜咲!!?」

中村の声に一つ頷き、刹那は跳躍して崩れた包囲網を脱出し、雑木林内に避難した一行の元に降り立つ。

『おおう、必殺の包囲網が見事に抜けられてしもうたなあ』

「ガキヤからて舐めとるからこういう事になるんや。真面目にやりい、あんたら!!?」

グハハハハハ!と笑う大鬼に青筋を立て、式神達を鋭く叱咤する千草。

「よっしや。ネギあれ使え、時間稼ぎ魔法。そこに近衛ちゃん明日菜と一緒に入ってる!!?」

そんな千草達を他所に、中村はネギに対して指示を出す。

「ええっ!??だ、駄目ですそんなの!中村さん達も一緒に!」

「数分しか持たねえんだろアレ?その位の時間引き籠っていたって、あいつらが諦めて帰るわけねえだろ。俺達は護衛対象に危害の及ばねえ間にあそこのバケモン共を出来るだけ潰して、可能なら全滅させる。言い争っている時間は無え、さっさとしろ!!?」

中村の言葉にネギは反論を封じられ、無念そうに唇を噛む。

「済まん。当てにしていけないわけではないが、この乱戦の中で実戦に不慣れな者のフォローまではできない」

「頼んだよネギ君。万が一侵入してくる敵がいたら君と神楽坂ちゃんに任せた」

「安心しろ、こんな連中もの数じゃ無え。出てくる頃には終わらせといてやるよ」

他の面々も安心させようと、言葉をかける。

「:すみません、皆さん。木乃香さんには絶対、手出しはさせません!!

「？」

「…先輩達、刹那さん。役に立てなくてごめん。キツイ役任せちゃうけど、よろしくね」

ネギと明日菜は、頭を下げ中村達に託す。ネギはキツと目線を上げ、呪文を唱え始める。

「せつちゃん!!?先輩達!!?」

木乃香が悲痛な表情で、死戦に向かう中村達と刹那に対して叫ぶ。それに対して刹那は、安心させるように微笑み、木乃香に告げる。

「待っていて下さい、お嬢様。大丈夫です、この人達がいれば百人力ですから」

「……せつちゃん………!」

うつすらと涙を浮かべる木乃香に、笑って中村達は言う。

「甘え甘え、俺らがいりゃあ千人力だつうの」

「不安になるな、と言う方が無理だろうが…任せておけ」

「この戦いが終わったら、皆で美味しい京都料理を食べに行こう。楽しみにしててよ、近衛ちゃん」

「死亡フラグ立てんな山下。安心しろよ近衛、俺ら…強いぜ」

「パリエース ウエンティ ウエルンティス風花旋風風障壁!!?」

ネギの魔法が完成し、ネギ達の周囲で急速に廻り始めた強い風が、たちまち竜巻のような凄まじい旋風となり、ネギ達を包み込む。烈風により、視界が閉ざされる寸前、もう一度頭を下げるネギと明日菜に、咄嗟にこちらに向かって手を伸ばす木乃香の姿が一瞬見え、風の中に消える。

「さーてじゃあ残り約百体、一丁やっかりますかあ!!?」

パン!!?と手の平に拳を叩きつけ、中村が笑って宣言する。

「…皆さん、解っているとは思いますが…」

「ああ」

対照的に緊迫した様子刹那の言葉に、大豪院が頷く。

「中村と豪徳寺の全力の気弾で、十体もやられていない」

「少なくとも、麻帆良の副部長クラスの実力は全員あるってことだな」  
山下と豪徳寺が、その絶望的事実を淡々と口にする。

「はい…いえ、多少氣が使える程度の一般人の実力では明らかにないのですが…」

刹那が頷きかけて、その一見おかしく思える言葉に反論する。

「桜咲後輩…お前は仮にも麻帆良武道系部活の一つ、剣道部に所属しているながら何もわかっていない…」

大豪院がやれやれと首を振って答える。

「麻帆良<sup>ウチ</sup>の連中はバケモンばっかだ。麻帆良武道系部活の五強は俺達バカレンジャー（高校ver）だが、俺達とそこそこの勝負する位の連中なら、部長クラスでごろごろいるぜ」

「え……………」

中村の言葉に声を詰まらせる刹那。

「問題は見た所その部長クラスが、あつちの妖怪共の中に何体かいるみたいなんだよね」

厳しい表情で山下が言う。

「ああは言ったが、普通に軽く絶望的だぜこりゃあ」

苦笑して豪徳寺が呟く。

「だがやるしかあるまい。桜咲後輩、あの鬼<sup>グレイユイ</sup>？ 共と戦い合うに当たって、注意すべき事はあるか？ 大事な点を大雑把でいい」

「は、はい……………全体的には鬼系の妖が多数を占めています。これは脅力だけが取り柄の肉弾戦闘系ですので、先輩達ならば対処を間違えなければ充分に渡り合えるでしょう。…鴉頭の人型も、空を飛ぶだけで脅威そのものは低いです。…問題は、妖術を使う特殊戦闘系でしょう。燃えているもの、体が木や石でできているもの、帯電しているもの。こういった連中は、見た目から大体想像できる通りの魔法のような攻撃を払ってきます。注意して下さい」

麻帆良に人外が群れているという衝撃的事実から、何とか立ち直つた刹那が、最低限注意すべき点を中村達に伝える。

「我知道<sup>ウオーツータオラ</sup>了。それだけわかれば充分だ」

「…いや、注意しろって何をどう注意すりゃあいんだよそれ?」

「豪徳寺なら大丈夫だよ、頑丈だし。中村、わかった?」

「…よくわかんねえがとりあえずRPGの敵キャラと大体同じような

もんだってことだよな!!?」

「…来ます。構えて下さい!」

「あれ、スルーされた?」

間抜けな中村の呟きに、先頭にいる鬼の一体がゲラゲラと笑い、中村達に言い放つ。

『この数相手に、かかってくる気になっただけ大したもんや兄ちゃん達。おっとすまん。おぼこいが姉ちゃんもおったなあ?』

「おぼこいって何だ?」

「幼い、って意味」

「辻の未来嫁、せつたんを子供扱いするとは不屈き千万な……やはり胸が」

「五月蠅いです、先輩。って言うか誰がせつたんですか、誰が」

中村のそれこそ失礼千万な呟きに、刹那がかすかに青筋を浮かべつつ返す。

「ぬっ、しまった!?!? 本人のいない所でしか呼ばないという一ちゃんとの約束が!!?」

「私、皆さんの間ではそんな呼ばれ方してるんですか!?!?」

中村の大きな嘆きの言葉に、刹那が目を剥いて叫ぶ。

「違う、違う」

「んな馴れ馴れしい呼び方してんのはその馬鹿だけだ」

「俺達は関係ないぞ。処刑するならばその馬鹿だけにしてくれ」

「あつてめえら、裏切りやがったな!?!?」

「裏切る、という単語の意味をもう一度調べ直してこい、カスが」

ギャーギャーと漫才のようなやりとりを続ける中村達に、一体の鬼が青筋を浮かべつつ大将格らしき大鬼に尋ねる。

『…舐められてるんすかね、俺ら?』

大鬼はガハハと笑って返す。

『戦の前にあれだけ体から力を抜けるのは大したもんや。それになあ、まるきりこちらを警戒してない訳でも無いみたいやで。見た目よりもはるかに手練や。氣いつけい、お前ら」

応、と歪な声が合唱する。それを聞いて中村が舌打ちをする。

「ちいつ！舐めてかかってくれて最初の数体だけでも楽勝で潰せるか  
と思つたが、当てが外れたな」

…どこからどこまでが作戦だったのだろうか？

傍目からは、最初から最後まで馬鹿をやっていたようにしか見えな  
いバカレンジャー達のやり取りにがっくりと刹那が脱力する。

「んじゃ、行くべ」

「ああ」

「まあそれなり以上に大変だろうけどよ」

「多分エヴァさんとの戦いよりは絶望的じゃないんだよねこれ」

…まあ、ガチガチに緊張してネガティブな気分で挑みかかるよりも  
良いのかもしれないな。

不敵に笑うバカレンジャー達を見て、刹那はそんなことを思い小さ  
くではあるが笑つた。

「…ええ、行きましよう!!?」

先陣を切る中村達に続いて刹那も夕風を振り上げ駆け出した。

「本つ当に大丈夫なんだな!?!」

『私をなんだと思つている。この世に断てないものなど、それこそ、私  
のオリジナル位のものだ』

辻が現在全力で走りながら、総本山の方向へ向かっている理由は、  
総本山の近くまでタクシーを走らせている最中、タクシーがいきなり  
不自然な曲がり方をして最短距離へと続く道から遠ざかり始めたの  
を端と成す。異変に気づいた辻に、フツノミタマがおそらく結果か何  
かの類で、その道を認識できないか又は通りたくないと思わされてい  
るのだと答えた。ならばどうすればいいと尋ねる辻にフツノミタマ  
は、こういった認識を阻害する類の結界は、はっきりとした目的意識  
を持つかそこに結界があること自体を把握している人間には聞きづ  
らいので、車を降りて徒歩で行くしかあるまいと返した。

辻はタクシーをその場で止め、怯えるタクシードライバーに一万円  
札を釣りには要らないと言つて渡した後、逃げるように走り去つたタク  
シーを尻目に、総本山の方向へ向けて全力で走りだし、現在に至るの

だった。

「しかし説明されても言われている意味がよくわからないのだが……」  
「まあ、主は見た所魔法関係に立ち入った事は殆ど無い素人のようであるからな。魔法を日常とする者からの物の見方で説明されても実感は湧かんだろうが、見えぬものであろうと正確に認識しなければ私は扱えぬ。大事な話だ、もう一度繰り返す。たとえ目に見えずとも、五感に何も感じずとも、そこにあるものを意識しろ。そして方法は問わぬ。認識するのだ。そしてそれを断ち切ると決意せよ。そうした上で私を振るえば、主に断てぬものはこの世に無い」

フツノミタマのスケールの大き過ぎる断言に、しかし辻はツツコま  
ず、何事かを思案する。そして、真剣な声でフツノミタマに尋ねる。  
「なあ。それは要するにそこに何かがあると、何でもいいから俺が感じ取ることが出来ればいいんだな？」

『そうだ。たとえそれが事実と異なる感じ方であっても構わない。  
認識出来る と言う事は 世界に存在する ということだ。  
そして私は断つという概念。存在するもので私に断てないものは無い』

辻の言葉にフツノミタマは断言する。

「……そうか……」

眩いたたきり、黙り込んでただ走る辻に、フツノミタマは不思議そうに尋ね返す。

『どうした主。まだ理解が出来ぬか？』

「いや。実際にやってみなければ何とも言えないが、言われた事は大体理解できた。ただな……」

『?』

頭の中に響く声が無くとも、何と無く不思議そうな気配を出しているのが早くも判ってきた辻は、苦笑しつつもフツノミタマに告げる。  
「……これから試したいことがある。俺はちよっと他の人と違う所があつて、おまえの言う認識にそれが役に立つかもしれない。それが本当に上手くいったなら、お前と俺はかなり相性がいいと思つてな」  
そう言つて辻は心の中だけで続きの言葉を呟く。



…お前みたいなのが俺のところに来たって事は、運命なんてものが存在するなら、やっぱり俺はそうなるってことなのか？

それは嫌だなあと辻は心底思う。

…あのキチガイ女を、キチガイと言う資格が無くなるじゃないか。

「裂空掌・散!!?」

中村は、右掌打を振り切り扇状に気弾を飛ばし、数体の式神の体を抉る。

『舐めるな小僧おつ!!?』

一体の鬼が胸に穴を開けながらも、中村に対しその剛腕を振り切る。

「てめえが舐めんな」

冷たく言い捨てると同時に、振り降ろしの一撃を中村は上段外受けで肉の軋む音と共に地面に叩き落とし、カウンターの逆突きを鬼の水月にぶち込んだ。

『ご、フツ!!?』

ゴキベキバキ!!?という異音と共に体の内部が破壊され、鬼が血反吐を吐いて体を落とす。

「馬鹿力だけならボディビル研の連中の方が強えんだよ!!?」

中村の左上段回し蹴りが鬼の首をへし折りつつその体を吹き飛ばし、吹き飛んだ方向の数体を巻き込みながら地面に転がす。

「はっ…どんなもん…うおっ!!?」

蹴り足を下ろしつつ、勝ち誇る中村がふと視界の端に映るものに慌てて後方に跳躍しそれを回避する。

先ほどまで中村の立っていた場所に人一人程の大きさがある巨大な火球が着弾し、轟音を上げて燃え盛る。

「あく惜しいなあ。反応いい坊やわ、ウチの狐火避けるなんて…」

火球が飛んできた方向から声を上げるのは、裾の短い着物を着て狐面をつけた、妙齢の女性に見える姿だった。だがその頭部と尻の部分からはそれぞれ、金色の狐のような耳と尻尾が飛び出ており、ただの女ではないことを示していた。

「ウチが遊んだるわ、坊」

西洋で言う獣ライカンスロープ人の一種、狗族の女性は見える口元だけで艶やかな笑みを浮かべ、中村に言い放った。

「……………」

中村はしばらく黙り込み、左右から襲いかかる巨大な河童と、全身から刃を生やした人間の子供のような式神を、それぞれ手刀と足刀で一撃で首をぶち折って倒した後、全力のガッツポーズをとって叫ぶ。

「いやっはあくくく!!? 京訛り狐耳美人キキ来ました  
ワアアアアアア!!?」

「は?」

思わず素頓狂な声を出す狗族の女性に構わず、中村は両手をワキワキとさせながら女に向かって襲いかかる。

「じゃあお姉さん、俺とくんずほぐれつの取っ組み合いを一丁お願いしま〜す!!?」

「ちよつ、なんやこの坊怖いんやけど!!?」

狗族の女は飛び下がりながら中村に新たな狐火を打ち込む。

「相変わらず阿呆やってんなあいつ、はっ!」

豪徳寺の剛腕が正面から突っ込んできた巨大な蛇の口内になぶち込まれ、蛇の体を引き裂きつつ打ち倒す。

そして豪徳寺は高速で左右の拳から気弾を次々と撃ち放ち、絨毯爆撃を式神達に決める。

「漢、漢漢漢漢漢漢漢漢漢漢魂あつ!!?!!?」

爆発の嵐に式神達は悲鳴をあげながら飲み込まれ、次々と倒れ伏す。

「どうしたあつ!!? 歯応え無えぜ!!?」

『ナラバオデガイガゼデモラオヴ』

背後から響く濁った声に、豪徳寺は振り向きざま気弾をぶち込む。その巨大な影に気弾は着弾して爆発し、その体を弾けさせる。が、

「ああ……………」

豪徳寺が疑問の声を上げる。その巨大な影は、全体的にのっぺりとした印象の茶色い大きな鬼だった。だがその肩口辺りから上半身の半分程が砕けた体が、ボコボコと異音を上げながら再生していく。「…再生能力でも持ってるのか？」

『ズゴシチガウ』

茶色い鬼は笑って返し、自身の足元を指差す。豪徳寺が素直にそれに従い足元を見ると、足元の大地から土が鬼の体に次々と吸い上げられていく光景が目に入った。

『オデハドギョウノオニダ。イツギニゼンブヲ、グダガネバ、オデハダオセナイ』

濁った声で自信満々に告げる鬼に、豪徳寺は肩を一回しして拳を構える。

「わざわざ教えてくれてありがとよ。なら一気にブチ砕いてやる」

「僕、こういう相手は得意じゃ無いんだよなあ…」

上下左右前後からめまぐるしく襲いかかる式神達を、逸らし、捌き、時折手足を取って投げ飛ばしながら山下は溜息をつく。

山下の格闘スタイルは投極術である。人間よりもずっと頑丈な式神達は一発二発脳天から落ちた所で、直ぐに戦闘不能にはならない。倒すのに梃子摺っているうちに直ぐに次が押し寄せてくる為、山下は他の皆よりも苦戦していた。

「…苦手だからって文句言っていれば良いわけでもないんだよなあ……」

後輩の命がかかっているかもしれないのだ、泣き言を言って諦めている場合では無い。

「…じゃあ僕に出来ることをやろうか」

言うなり、山下は飛び上がる。通常ならば空を飛ぶ鳥族達にとつてのいいのだが、山下は何も無い空中を踏みしめ、方向転換して再びこちらに襲いかかろうとしていた一体の鳥族に飛び掛かる。

『又ウツ？』

人が宙を走りこちらに突っ込んでくることに動揺しつつも、鳥族は右手の剣を山下に向けて叩きつける。だが、山下はその剣が届く寸

前にもう一度空中を踏みしめ跳躍。烏族の背後に取り付き翼を両の手で握りしめると、続いてそれに両足を絡め、体全体を捻って一気にその翼を根本からへし折る。

『ガアアアアアッ!??!』

片翼がへし折られ、当然飛べなくなった烏族は叫び声をあげながら落下していった。

「腕ひしぎ逆十字ならぬ翼ひしぎ逆十字?」

山下が誰にともなく呟いた瞬間、自分に対して甲高い風切り音と共に何かが接近するのを山下は察知する。

「くっ!??!」

山下が再び空中跳躍、八m程高度を上げて再び空中着地するが、その二ノ腕が浅くではあるが切断され、血が飛沫いている。

『…虚空瞬動、言うんやったか?』

問いかける声に山下が振り仰ぐと、そこには荒法師姿の鴉頭の男がいた。

「…さっきの烏頭とは格が違う感じだし、もしかして鴉天狗って奴?」

『ほう、若いのによく知つとるなあ坊主。いかにもその通りや』

山下の問いかけに、鴉天狗は笑って肯定する。

『人が自力で空飛べるようになるとは、面白い時代になったもんや。おっちゃんと遊んでくれるかいのう?坊主』

「…拒否権ないでしょ、これ」

山下が身構えつつ、溜息を吐く。

「嘿ハイイイイイ!!?!」

大豪院の川掌が大柄な鬼の胴体を大穴を開けてぶち抜き、後方に吹き飛ばす。大豪院はそのまま流れるように次の動作に繋げ、踏み込んで突き出された裡門頂肘が隣にいた分厚い壁のような式神を正面から碎き割る。

『小僧お!!?!』

全身ぼさぼさの黒い体毛に包まれた、狼男のような式神が素早く大豪院の横合いに回り込み、鋭い爪で抜き手を繰り出す。

「?」

大豪院は左腕を肩と肘を軸にして小さく円状に回し、式神の爪を体の外側に弾き飛ばす。そして腰を入れて突き出された沖捶が狼男の胸を拳大に陥没させ、林の向こうまで吹き飛ばした。

「…キリが無いな……」

大豪院は一つ息を吐き、油断無くあらゆる角度から飛び掛かってくる式神達に注意を配る。と、その時視界の端で何かが光る、その瞬間。

「があっ!??!」

唐突に大豪院の体を衝撃が走り抜ける。危うく膝をつきかけて足を外に踏み出し、堪えた大豪院は、光の飛んできた方向、式神の群れの奥からこちらを睨みつける瞳を睨み返す。

それは猿と狼を掛け合わせて無理矢理二本足で歩かせたような、異形の獣である。先程の光の正体は、その獣が全身に纏う放電現象が正体を現していた。

「…雷撃、か……」

『ヒヒッヒヒッヒヒッヒヒッ!!?!』

忌々し気な大豪院の呟きに、異形の獣は甲高い不快な声で笑い、再びその両腕に火花を散らし始める。

「…上等だ」

大豪院はそちらに向けて拳を構える。

『わはははははははっ!!?!焦つとるなあ、神鳴流の別嬪さん!!?!』

「くっ!??!」

身の丈が二丈を越える巨大な鬼の振り下ろす鉄棍を、刹那は顔を歪めながらも受け流す。

戦いの始まった当初、刹那は順調に式神達をを斬り倒して行った。刹那は神鳴流剣士、妖魔退治は本業の一つである故、中村達よりも対処法は心得ている。刹那としては、いかに強かろうと魔法関係に関わって日の浅い中村達では思わぬ不覚を取り、命を失うことになる危険がある為、自分が一体でも多くの式神を倒さなければならぬと考えていた。が、そこに割り込んできたのが、この式神達の大將格であるらしき鉄棍を巧みに振り回す巨大な鬼である。気を込めた神鳴

流の斬撃を、同じく気を通した棍で力任せに、あるいは巨体からは想像もつかないような繊細な技術で受け流し、刹那に対して当たれば体ごと爆砕しかねないような剛撃を放ってくる。先程から刹那は足止めに徹している鬼に邪魔れて真面に他の式神を倒せていない。

…このままでは……………！

ふと浮かんだ不吉な未来の想像図を思考の外へ追い出し、刹那は全力の斬撃を放つ。

「神鳴流奥義、斬鉄閃!!?」

「おおつと!!?」

文字通り鉄をも断ち切る斬撃は鬼の振り上げた鉄棍に阻まれ、胴体を掠めるだけに終わる。

「おお、危ないのう」

「…くそつ…………」

大げさに息を吐く鬼に、刹那は舌打ちをして再び刀を構える。

…もう少しだけ堪えていて下さい、皆さん!!?

刹那は再び鬼に対して打ち掛かる。

「…その調子や、お前ら」

千草は道路の上から、奮戦する中村達と、襲い掛かる式神達を眺め、汗の浮かんだ額を拭いながら、そう呟く。

油断をすれば倒れてしまいそうな凄まじい疲労感が、千草の全身を苛む。

…長くは持たへんな。

…頼んだで、コタ。

それぞれの思惑が交差し、戦場は加速する。

## 18話 激闘の果て 乱入者

「長！まもなく無限方処<sup>おき</sup>咒式を突破出来ます！御準備を!!？」  
「わかりました」

関西呪術協会の長、近衛 詠春は部下の術士の言葉に頷き、腰を上げると。

大豪院の予測通り、関西呪術協会から木乃香達一行を迎えに来る予定だった迎いの車と道中の護衛は、千草の張った咒式に嵌まりループする空間内に捉えられていた。

千草にとって予想外だったとするなら、近衛 詠春の存在だろう。詠春は、連絡を入れた刹那からの話を聞いて、周囲の反対を押し退けて直々に娘の木乃香を迎えに来たのだった。

詠春は、自身にも理由はわからないが、妙な胸騒ぎを刹那から連絡が入る以前から感じていた。そこに来ての、自分の娘が本山に帰って来るとの連絡である。例えようも無く嫌な予感がした為、詠春は無理を言い出て来たのだった。

：周りは親馬鹿と私を笑うかもしれませんが……

実際に誘拐騒動は起きている。子が攫われかけたと聞いて取り乱さない 親 は い ない。例え何かしら騒動は起こるだろうと予め聞かされていたのだとしても、だ。

：…これ程の騒動になるとは聞いていませんよ、お義父さん。

最も、関東魔法協会にとってもこの状況は予想外なのだろうが。と、詠春は考える。魔法使いとの親善に反対派がいることも、過激派が煽っていることも理解していた。しかし実際にこちらに少なくとも初期段階では気付かれずに誘拐などを企み、実行出来るのは相当の影響力を協会<sup>こ</sup>で持つか、或いは発覚されないような極少数の有能な手勢で無ければ不可能だろう。

木乃香が攫われかけたと聞いた時点で詠春は協会内の関係者を徹底的に洗わせた。結果解ったのは天ヶ崎 千草という若手でありながら腕前は十指に入る有能な陰陽師が犯行に及んだのがほぼ確実だという事実だ。

しかし腑に落ちない点がある。如何に有能であろうと、大した手勢も率いずに一組織の長の娘を攫い、上手く逃げおおせて木乃香の力を利用出来るなどと、都合良く事が運ぶと考えるものだろうか。有能であればある程リスクの大きさを考慮し、事を起こすにしても、もつと慎重に行動するのではないだろうか。

…それ程焦っているのか、或いは、

…こちらを如何にかするだけのなにかがあるのか……

詠春は周りの部下達に呼び掛ける。

「急ぎましょう。ここまであからさまに足止めをしている以上、木乃香と護衛の彼らが危険です！」

「おつ姉いさあ〜くん!!?」

『は、はは。積極的な子おは嫌いや無いで!!?』

狗族の女は下がりながら巨大な火球を連射する。中村はそれらを瞬動の連続で左右に高速移動を繰り返して躲しながら只管に距離を詰めようとする。

…糞がどうにもやりにきいつ!!?」

中村は歯噛みする。気弾と炎という違いはあれど、狗族の女が放つ火球は、豪徳寺のそれと大差ない威力を持っている。それをここまで連射して息切れを起ささないなら、少なく見積もっても遠距離では豪徳寺と互角。更に周りの雑魚とは言えない程度には強い連中までが襲い掛かってくる。

「邪魔だてめえら!!?」

巨大な牙を剥く猿のような式神が飛び掛かるのを飛翔蹴りで撃墜、着地点で待ち受けるやや小柄な鬼を胴廻し回転蹴りで脳天をぶち砕く。着地した瞬間に火球が飛んで来るが、

「きやあああああつ!!?助けてダーリンっ!!?」

『うお、何や気色悪…ぎやあああつ!!?』

傍らにいた大柄な鬼の体の影に飛び込み、気色悪い悲鳴を上げてからその背面を蹴りつけて火球の盾にする。

「ははっ、やるなあ坊!!?」



狗族の女は笑いながら次弾を生成する。

「……やべえな」

先ほどまでのハイテンションとは打って変わって、中村は渋い顔で呟く。正直に言って無理に突っ込めば丸焼きになりそうであり、無理をして勝負を急ぐ訳にはいかない。かと言ってチンタラ時間を掛けてはいられないのだ。

「…エロ方面に素直に走りたい所だけどなあ!!?」

中村は振り下ろされる金棒を躲し様に前蹴りを返しながら毒づいた。

「極漢魂きわめおとこたまあ!!?」

撃ち放たれる巨大な気弾が鬼に直撃、爆砕し、上半身を粉々に打ち砕く。だが豪徳寺の顔は晴れない。

「…駄目か」

鬼の周囲の地面が蠢き、残った下半身に吸い上げられて行く。みるみるうちにそれは、元の上半身を作り上げて行き、数秒後には、攻撃を喰らう前と変わらない鬼の姿があった。

『ムダダ、オデバゾノデイドノゴヴゲギデバヤラレン。』

土行の鬼は笑って言い、丸太のような腕を振り上げ、豪徳寺に殴り掛かる。

「ちいつ!!?」

豪徳寺は舌打ちをして後方へ飛び、その攻撃を躲す。はっきり言って土行の鬼の動きは鈍い。普通に相手をする分には問題にならない相手なのだが…

『オラア!!?』

「ぐうっ!!?」

着地した豪徳寺は、死角から殴り掛かってきた鬼の一体の打撃を頭部に喰らう。

「痛えなゴラア!!?」

『グワツ!!?』

額から血を流しながらも、豪徳寺は気を込めたパンチで鬼を殴り飛ばす。

「糞が、数が多過ぎんだよ…」

豪徳寺は忌々し気に呻く。豪徳寺の戦闘スタイルは我流の喧嘩殺法であり、荒削りな技術を生来のタフさと膨大な気の量でカバーして戦っている。その為一番こつこつした乱戦でダメージが一番溜まるのが豪徳寺であり、それはこういった状況で一番早く消耗するということである。

『グハバババ、ツラゾヴダナ、オオ、オドゴ』

「うるせえよてめえに言われたかねえデカブツがあ!!?」

豪徳寺は正面の群れに気弾を放って吹き飛ばし、土行の鬼に突っ込む。

『しゃあつ!!?』

「うわっ!!?」

鴉天狗が山下に向け腕を一振りすると見えない何かが颯風と共に突き進む。山下は悲鳴と共に虚空瞬動で真横に跳躍し、回避すると直ぐ横を通り抜けた何かが遠くに立つ一際高い樹木の先端を吹き飛ばす。

「…鎌鼬って奴?」

『どつちか言ううと圧縮空気の刃やな』

鴉天狗はカカカと笑って両手を縦横無尽に振るい、発生した無数の見えない刃が山下を襲う。

「っ!ええい!!?」

山下は上下に大きくアップダウンを繰り返し、空気の刃を避ける。躲しながら山下は鴉天狗に距離を詰める。

「喰らつとけ!!?」

『甘いわあ!!?』

鴉天狗が五指を広げた腕を振るう。次の瞬間振るった軌道上に烈風が吹き荒れ、山下の体を押し返す。

「んなあつ!!?」

『貰たわあつ!!?』

体勢を崩した山下に鴉天狗が錫杖片手に突っ込む。

『ヒヤハッ、ヒヤアハハハハッ!!?』

「ちっ……………」

雷獣が両の手から次々と紫電を大豪院に迸らせる。当然雷撃とは雷速、亜光速の秒速約十万km。視認してから躲せる訳が無い。だから大豪院は雷獣を見ずに兎に角全力で移動して雷撃を躲しに掛かる。

『ガッ!?』

『ギャアア!?』

流れ弾が式神達に当たり、各々が悲鳴を上げるが、雷獣の方に味方を巻き込むことに関する躊躇は無い。

「トリガーハッピールか? 無茶苦茶な奴だな…」

大柄な式神達の間を縫うように大豪院は走りながら呆れたように呟く。

『ヒイ? ヒ…………ヒヤヒヤハッ、ヒヤアハハハハ!!?』

一行に当たらない相手の動きに業を煮やしたか、雷獣は暫し動きを止めて首を傾げ、やがて甲高い笑声を響かせながら両手に激しく紫電を瞬かせる。

「何を…………っ!?」

大豪院は雷獣の奇行を見た直後に狙いを悟り、全力で跳躍する。

直後、周囲一帯を覆い尽くすような膨大な雷撃が雷獣から扇状に迸り、多数の式神を巻き込みつつ周りを焼き尽くした。

「…さつきから凄い音してるわね…………」

「せっちゃん…………」

明日菜の不安気な呟きに木乃香が親友の身を案じて祈るように呟く。

「カモ君…………」

「兄貴、俺らの出来ることをやろうぜ。相手がどれだけ数を減らしているかわからねえんだ。いつでも攻撃ができるように準備を整えとくんだ」

ネギの呼びかけに、毅然として答えるカモ。

「…うん、わかってる」

ネギは頷き、明日菜と木乃香に努めて明るく声を掛ける。

「大丈夫です、刹那さんも中村さん達も!!? エヴァンジェリンさんと互角に闘えるような凄い人達ですから、信じて待ちましょう、明日菜さん、木乃香さん!!?」

「ネギ君…」

木乃香が顔を上げ、揺れる瞳でネギを見る。

「…そうね。化け物みたいに強いもの、本物の化け物相手でも負けないわ、きつと!!? 刹那さんなんて辻先輩より強いのはよ、木乃香。前に自分で言ってたじゃない! 暗い顔してちゃ駄目よ!!?」

「明日菜あ……でも、オバケやで、本物のオバケなんやで…。あんなおっかないの相手にせつちやん達…」

「だ、大丈夫よ! あんなの見かけだけで大したこと無いから、凶体だけよあんな化け物共!」

『キキズテナランナア……』

その声は風の渦巻く直ぐ向こう側から聞こえてきた。

「え……?」

「何者だ?!?」

明日菜は思わぬ所から掛けられた声に硬直し、カモが鋭く詰問の声を上げる。

風の中から出て来たのは奇妙に細長い体を持つ、両手に巨大な刃が取り付いている異形の獣だった。口端から歪んだ高い声でその獣——鎌鼬は告げる。

『ヨワイトイウナラワタシテイドワカルクシリゾケテミセロヨケトウノマジユツシ?』

言うなり鎌鼬は細長い尾を引きながら猛然と明日菜に斬りかかる。

「っ、わっ!?!?」

手に持つハマノツルギー——金属製のハリセンで一撃をなんとか受け止める明日菜。

「明日菜!!?」

「明日菜さん!!? 今助……うわっ!?!?」

ネギは明日菜を助けようと呪文を唱えながら鎌鼬に向かい足を踏み出そうとした瞬間、何かに足を取られて転倒する。

「っ、痛…何が……っ!?」

『残念やけどよげな手出ししてもらいとう無いんや、坊。おとなしゅうしといてくれんか?』

ネギが足を取られたのは、何時の間にか足元の地面から湧き出してきた濁った泥の沼から突き出ていた一本の手だった。それに続いて這い出してくるのは全身が泥で構成されている老人のような姿の式神である。

「っ!!?ラス・テル・マっぐぶっ!?」

「あ、兄…ぶわあ!?」

『させへんさせへん。ちよいと寝つてて貰うで、坊共』

詠唱を始めるネギだが、伸びてきた泥の手に口を覆われ、地面に引き倒されて泥に拘束される。飛び降りて泥を躲そうてしたカモもあえなく空中で泥に捕まる。

「明日菜!!?ネギ…きやあっ!?」

『えろうすんませんなあ、お嬢様。痛うしまへんから、一緒に来て頂きますで』

窮地に陥った二人に、思わず駆け寄ろうとした木乃香だが、足元に伸びてきた泥沼に足を取られ、転倒する。そして木乃香に対して新たな泥の手を形成し、木乃香を捕らえようとする泥の老人―泥田坊。

「木乃香、待つてて、今…つきや!?」

『ハハハイカセルトデモオモウノカイ、オジョウチャン!!?』

木乃香に駆け寄ろうとした明日菜に、素早い動きで斬りつける鎌鼬。ハリセンを振るう明日菜だが、鎌鼬は風の妖。凄まじい速度で動き回り、反撃は擦りもしない。

「ぐっ、むうっ!?」

『暴れんで、大人しゅうしとき、坊。お痛が過ぎると…殺してまうで?』

「っ!?………」

耳元で泥田坊に凄まれ、ネギは反射的に身を竦ませる。

ネギはここに至るまで10歳位の少年では考えられない様々な経験をしてきたが、殺意を持って襲われた事は無い。

身が竦む。思考は恐怖で鈍り、それ以上の動きを勝手に止めようと体が抵抗を放棄する。

……！なんで…僕は……！！？

ネギは怯んだ己を叱咤する。自分の生徒が危ないのだ、怯えている場合では無い。

だが、恐怖を覚えた体は、言うことを聞きはしなかった。

……僕は！！？

「ふざっけんじゃ無いわよバケモン共おーっ！！？」

『ウオツ！！？』

明日菜が怒声と共にハリセンを薙ぎ払う。軌道上に飛び込む形になった鎌鼬は慌てて上昇し、辛くもそれを掠めるだけに留めて躲す。

「家の居候と私の親友に何してくれてんのがよ泥塗れの工口爺  
いいいいっ！！？ちよつと待ってて二人共、この鼬直ぐ仕留めるから！！  
？」

明日菜はハリセンを明日菜は構え、堂々と宣言する。

…明日菜さん……

…怖くない筈が無いのに、あんなに……

ネギは明日菜の勇姿を目の当たりにして、気がつけば体の震えは止まっていた。

…そうだ。

…僕は言っただ、中村さん達に。

…木乃香さんに、手出しはさせないって……！！？

『コムスメガ、ナメツ！！？』

苛立ち混じりに再び上空から襲いかかろうとした鎌鼬の体が突然弾ける。慌ててが己の体を振り仰ぐと、胴体の中程から下が煙と消えていた。

…カスツタブブンカ……？

…ソレダケテナゼ！！？

「貰ったああああつ！！？」

あり得ぬ事態に硬直する鎌鼬に、明日菜は全力でハリセンを振り下ろした。

『ガアアアアッ!?!?』

振り下ろされ、打撃を喰らった頭部が弾け、鎌鼬は送り返される。

『なんやと!?!?』

「わ。なんか、凄い…」

泥田坊が驚愕の声を上げ、明日菜が式神一体をあつさり撃破した己の持つハリセンを、驚きと共に見下ろす。

『つちい!!?!?』

「あつ……!?!?」

泥田坊は舌打ちと共に、捕らえた木乃香の体を引き寄せ、ネギと木乃香諸共、泥の中に沈んでいく。

「あつ、待ちなさい!!?!?」

『は、待てと言われて待つ阿呆が……!?!?』

泥田坊が沈降を停止し、傍らのネギを見下ろす。ネギの全身を魔力が覆い、眩い発光を起こしている。同時に泥による拘束が振り払われ、自由になったネギがえずきながら泥を吐き出す。

…そうか、口を塞がれちゃあ魔法は唱えられねえ! 普段から行っている身体強化に、魔力のロスを承知で全力で魔力供給を行って力任せに振り切ったのか!!?!?

拘束され、同じく口を塞がれていたカモがネギの脱出のカラクリを見抜く。同時に、

「うわあああああつ!!?!?」

『ガアッ!?!?』

ネギの駆け寄りつつ放った全力パンチが下半身が泥に沈み、身動きの取れなかった泥田坊の頭を粉碎する。

…このガキ……!!?!?

泥田坊は体が泥で出来た妖だ。体の何処かが潰された所で再び破片が集まれば再生する。だが破壊されたのが頭部だった為、視覚、聴覚などの五感の大部分が一時的に奪われ、動きを止める泥田坊。当然そんな大きな隙を……

「てりやああああつ!!?!?」

明日菜は逃さずハリセンをフルスイング。泥田坊の体が弾け、泥沼

も消え去り元の大地に戻った。

「木乃香さん、大丈夫ですか!?!?」

「う、うん…大丈夫や、ネギ君…」

微かに震えながらも木乃香は答える。駆け寄ってきた明日菜にも領き、心配無いと返す木乃香、ひとまず大丈夫なようだ。

「あ、姐さん…さっきのは…?」

「わかんない…多分このハリセンのお陰だと思っけど…」

解放されたカモの疑問に首を傾げながら答える明日菜。

「もう他には来てないけれど、警戒しましょう、どんな手段で襲って来るかわかりませんから」

「うん。木乃香、大丈夫だからね」

「…うん。ありがとな、ネギ君、明日菜」

いいのよ、と笑う明日菜を見ながらネギは自分に喝を入れる。

…頑張るんだ、僕も。

「…さっきのは、入って行ったな、絶対」

中村は横薙ぎに振るわれた刀を屈んで避けながら竜巻の方を睨む。先程細長い式神が、理屈はわからないが竜巻の中に入って行ったのを中村は見た。

…グズグズしてらんねえ。

こうしている間にもネギか明日菜が危ない。二人は前提として素人だ。

…腹あ括るか。

中村は武者姿の骸骨を蹴り砕いた直後、狗族の女に向けて全力で駆け出した。

『焦ったか? いい的やで坊』

狗族の女は放射状に火球を撃ち放ち、中村の回避の隙間を無くす。

「裂空掌・散!!?」

同じく放射状に気弾を火球に対してぶつけ、誘爆させる中村。

「熱つちくな糞がああつ!!?」

爆炎を裂いて中村は一気に瞬動で近づく。強引に炎を突破した為



あちこちを焦がしながらも狗族の女に対して一撃を放った。

『千重砕き!!?』

当たった瞬間に零距离で相手を爆破する破壊の拳が直撃。体の中央からへし折れる女。

「出来れば一タツチしてから……あ?」

中村は溜息混じりに言いかけ、硬直する。真つ二つになった筈の女の姿が薄れて消え、そこに倒れるのはへし折れた樹木であった。

『ボウボウ燃やすんだけどが能や無いわな』

「っ!!?」

振り向いた中村の眼前に炎の波が迫っていた。

『ふう……』

火炎に飲み込まれた中村を見届け、息をつく狗族の女。

『動きもキレとるし、やり辛かったわ……』

実際周りの式神が前衛の代わりをしていなければ自分の負けだっただろうと狗族の女は冷たい汗を流す。だが、

『勝ちも勝ちや、悪う思わんといてなあ、坊』

踵を返す女。だがその背後で突如炎が裂ける。

『!!?』

慌てて振り返る狗族の女が目にしたのは、腰だめに抜き手を構え、女に迫る中村の姿だった。

『くっ!!?』

飛びすさり、手に火球を生成する狗族の女。

『遅え!!?』

中村の放つ輝く手刀が胴体をぶち抜き、後方へ抜けた。

『……受けて、散らした言うんか?ウチの炎を』

風穴の開いた自らの体を見下ろし、静かに問う女。

「……空手家舐めんや、お姉さん」

焼け焦げた両手を振りながら、笑って告げる中村。それを聞いて笑みを洩らす狗族の女。

『……惜しいなあ、対した益荒男やわ。こないな会い方せんかったら、あつちの相手してやれたんなけどなあ……』



部を、豪徳寺は冷たく吐き捨てて踏み潰した。

「…残りは、雑魚だけだなあオイ」

『死いねえああつ!!?!?!』

無防備に宙を舞う山下に向け、鴉天狗は全力で錫杖を突き出した。

轟音と共に山下の胴を貫く錫杖。だが、

『あ…………?』

「…つぶないな、本当に…………」

貫通したかに見えた錫杖は、脇腹を引き裂きながらも、体の直ぐ横を通り、服を貫通して背中に抜けていた。

「…まあでも」

『?!?!』

ヌルリと、蛇のように山下の両手が鴉天狗の腕に絡みつく。

『…放さんかい、坊主!!?!』

鴉天狗の腕から烈風が放たれ、山下の全身に大小様々な裂傷が出る。

「っ!!?!?!…誰が、放すか!!?!」

山下は鴉天狗を引き寄せ、掴んだ腕を支点に体を旋回。鴉天狗の両翼を蟹挟みの如く両足で固定。更に両腕を捻じり上げながら勢いをつけて真下に落ちる。

『う、おおおおおおおつ?!?!』

「…砕けとけ」

極まりを外そうと暴れる鴉天狗に、山下は冷たく言い捨て、頭から地面に叩きつけた。

爆発したような轟音が鳴り響き、鴉天狗の体が一瞬震え、静かに崩れ落ちる。

「…素直に遠くから斬り刻んでればよかつたのにねえ…」

『ヒヒ、ヒヒヒヒヒヒヒ…』

焼け野原となり、煙となって消える無数の式神の中で、愉快そうに笑う雷獣だが、周りに動くものが無いことを確認して他の戦闘場所に向かう。

『……ヒヤハア!!?』

暫く歩いた所で唐突に跳躍し、飛んで来た瓦礫を避ける雷獣。

「…馬鹿そうだが感覚は鋭いな」

薄れていく巨体の鬼の影から攻撃を行った大豪院は舌打ちをして立ち上がる。

『ヒヤハハハハハハハハ!!?』

再び紫電を閃かせ、大豪院に狙いを定める雷獣。

「…調子に乗るな、狗屎堆ゴウシンドウエイ」

大豪院は腰を落とし、正面から雷獣に対峙する。

「…ハア!!?」

『ヒヤハアアアア!!?』

飛び出した大豪院に対し雷獣から雷撃が迸り、大豪院を雷の奔流が飲み込んだ。

『ヒヤハアハハハハハ、ハ?』

雷獣の勝利を確信しての高笑いが途中で途切れる。何故なら眼前には、身体中から白煙を上げながらも、今だ瞳に強い力を宿した大豪院の姿があったからだ。

「…?!!?!!?」

無防備に立ち尽くす雷獣に、全力で踏み込んだ大豪院。地震が起きたかのような凄まじい震脚の後、大豪院の背面が雷獣に叩きつけられ、雷獣の姿が霞み後方へ吹き飛ぶ。軽く数十mの距離を飛び、大岩に着弾した雷獣は最早原形を留めておらず、一瞬震えた後に薄れて消える。

「…ヌルい火花を浴びせて悦に入るな、雑魚が」

『…こりゃあ、ヤバいな。味方が幾らも残ってへんやないか』

何度目かの激突の後、ふと辺りを見回した大鬼が呻く。

…やってくれましたか、皆さん。

刹那は油断無く夕風を構えつつ、中村達に心中で礼を述べる。どうやら自分はまだ彼らを見くびっていたらしいと小さく苦笑する。

『大将!!?どうするんや、このままじゃ……』

『狼狽えるんや無いわ!!?』

慌てたように叫ぶ鬼の一人に大鬼は喝を入れる。

『まだ数はこつちが上や。それに見てみい、どいつもボロボロやないか!!? 結界もまだ健在なんや、増援は無い!!? ビビらずに決めたいやあ!!?』

大鬼の言葉に浮き足立っていた式神達は一度ざわついた後、固まってこちらに向かって来る。

…一度にかかられると厳しいか?

刹那が腹を決めて神鳴流の大技を決める為、夕風に気を集中し始めた、その時。

空間が一瞬震え、次の瞬間には地続きに何処までも伸びていた前後の道路が元の長さに戻り、静寂に包まれていた周囲に野外の自然な音が戻る。

『なんや!!?』

『これは!!?』

…結界が、破られた?

刹那が疑問を浮かべたその時、端の方にいた鬼の一体に光の線が一瞬走った後、唐竹割りに二つに別れ、消滅する。

『新手か!!?』

『何者や!!?』

大鬼が問いかけたのは一振りの刀を携える、黒髪の青年の姿。

「…お前が対峙してる子の、先輩だよデカブツ」

その青年――辻 はじめ 一は再び刀を構え、返事を返した。

## 19話 一難去つて次絶望

…本当に斬れたなあ。

辻は直前の状況を思い出し苦笑する。

全力で走ること早数分。程なく総本山への一本道へと入ろうかという時に、それは辻の目に飛び込んできた。

『ふむ、ここからが結果の範囲内、一般人はそもそも道を認識出来ない使用になつていようだが……主』

「なんだ？」

『見えているのか？』

「…何が？」

『結界が、だ。ある事を知つていても見つけてここが正しいルートだと認識するのはそこその腕を持つ魔法使いでも難しい。どうやら敵の陰陽師の腕前は相当なものらしいな。私は永いからこの手の幻惑は効かんで主を補助しようかと思つていたのだが……』

フツノミタマは楽しげに辻に対して言い放つ。

『どうやら主には要らぬ氣遣いだったらしい。私が指摘する前から氣付いていたな』

辻は黙つてそれを聞き、苦笑と呼ぶにはどうにも苦味の強い笑みを浮かべて言う。

「普通じゃ無いのは自覚してるよ。それよりも、見えてるものを斬る。それでいいいな？」

『無論。さあ目にももの見せてくれよう、主』

『小僧、舐めるなあ!!?』

辻の横合いにいた中身の無い甲冑が手にする槍で突き掛かる。

「…っ、ふっ!!?」

辻は左に身を流しながらフツノミタマを斬り上げる。

カツ!と枝を裁断するようにあっさり、柄までが鋼性の太槍が二つになった。

…斬れ味が良すぎて逆にやりにくいな。

斬った物の見た目と実際の感触が違う、というのは違和感がある。

…だけど。

体勢を崩した鎧武者に辻は踏み込み様、胴薙ぎを放つ。辻の手に硬いモノを断つ小気味いい感触が残り、鎧武者は綺麗に上下に分かれて消滅する。

…斬った感触はちゃんとある。

『ぬうっ!!??』

人の身長程もある金棒を振り上げ、二匹の鬼が左右から打ち掛かってくる。辻は以前ならばあり得ないことだが、振り下ろされる剛撃に下から刃を振り上げ、真つ向から打ち合いにいった。

言うまでも無く刀で鋼鉄の金棒を斬り裂くなど普通は不可能だ。よしんば刀が折れなくとも、腕力差で吹き飛ばされるのがオチであり、どう考えても悪手である。

だが。

『なあ!?!?』

鬼達は驚愕する。振り下ろした金棒があっさりと両断され、ある筈の手応えを空振った鬼達は前のめりに体勢を崩す。

辻は更に踏み込み、鬼達の首を薙ぐ軌道で斬撃一閃。先程に比べれば何とも軽い手応えと共に、鬼の首が二つ、人形のように地面に転がった。

…認めるのは本当に癪だけど……

辻は瞬く間に味方を斃され、狼狽える式神達に突っ込み、手当たり次第に斬り付ける。まるで藁束のように両断され、次々と斬殺されていく式神達。手に持つ刀や金棒で防御を試みる者もいたが、あっさりと武器ごと両断され、意味を成さない。

…やっぱり断つのは、気持ちいい、な。

『な、なんや。なんなんやあのガキい!?!?』

無双乱舞と言わんばかりに残った群れに斬り掛かり、凄まじいペーすで式神を斬り倒していく辻を見て大鬼が慄く。

…辻部長、ここまで……あれは、アーティファクトの力なのか?

防御がまるで意味を成していない辻の猛攻を見て、刹那は驚きを得

る。

…だが、理由はどうあれこれは好機!!?」

「神鳴流奥義、雷鳴剣!!?」

『ぐおおおおおっ!!?』

刹那が振り下ろした剣先から迸る落雷が大鬼を飲み込む。大鬼は半身を焼かれつつも金棒を避雷針に直撃を避ける。

「決めさせて貰う!!?」

『はっ、舐めるなやあ!!?』

「俺らも行くぜ、もたもたしてるとネギ達出て来ちまう!!?」

「つかさつき何かが入ってっただけけどあいつら大丈夫か!!?」

「僕も見えてたよ。不安だけど連絡手段が無い、今は残党狩りに集中しよう!!?」

「籠らせていれば安全、という考えは甘かったか…だがまずは後顧の憂いを断つ!!?」

中村達は集結して情報を共有し、木乃香達の安否を心配する。だが、悠長に携帯を鳴らせる程の余裕は無い。不安を押し殺し、式神達の残りを狩る方針に移る。

「…何処までも忌々しいガキやな」

猿鬼と熊鬼を傍らに置いた千草は憎々しげに呟く。

元々あそこ迄の数の差があつて直、優勢に事は運んでいなかった。護衛の神鳴流剣士はいい、想定内の戦力だ。だが他のあからさまに素人臭い妙な格好をした四人、この連中が問題だった。

ぎやあぎやあと一般人らしく騒いでいる割には腕前だけは恐ろしい程立つ。端的に言えば「物凄く強い素人」四人の所為で押し切れな所か、主戦力の大半を返り討ちにされて手詰まりになった所に飛び込んできたのは先日戦り合つた日本刀の男である。何やら以前の千草との戦闘とは段違いな暴れっぷりで次々と式神が倒されていく。そもそも千草からすれば月詠とあの男は闘っていた筈だというのに、千草と大した時間差も無く辿り着いている。月詠を苦も無く屠つてこちらに来たと思えず、それ程の戦力を持つ男が今あちらに増援



として駆けつけるこの現状に、千草は理不尽を感じていた。

：お天道様に後ろ指を指されるような事をしている人間に、天は味方をせえへん。つちゆうことかいな…

あわよくば力を温存したまま事を済ませようとすればこれだ。どうやら立て籠もっているお嬢様の所に向かわせた数少ない防壁を越えられる連中もやられたようである。見事に何一つ上手く行っていない現状に千草は思わず笑いが込み上げてくるのを抑えられなかった。

「まあ、ええわ…」

千草は呟く。まだ彼女は、追い詰められてはいなかった。

「うら死ねやーっ!!?」

「しいっ!!?」

『ぐふわあ!!?』

『ぎやああ!!?』

中村の蹴りで首をへし折られ鬼が吹き飛び、辻の袈裟斬りで鬼が二つに分かたれる。

「うわっはははははは!!?」はじめ「一ちゃん随分とナイスなタイミングで格好良く登場してくれんじやねえかよおっ!!?」

「決してタイミング伺っていた訳じゃないぞ!!?」入って来たらああだった、ただだっ!!?」

金属で出来た大蜘蛛を断ち割り、辻が返す。

「とりあえずもう何体も残っていないんだ。近衛ちゃん達が出てくる前にさっさと片付けてしまおう」

「辻、お前はあの眼鏡女を沈めて来い。仕組みは解らんが斬れるのだから、その刀!!?」

「とつとと終わらせちまおうぜ、辻!!?」こんな馬鹿げた騒ぎはよお!!?」

他のバカレンジャーに辻は背中を押される。

「…大丈夫なのか? 大した実力が無さそうとは言え、まだこつち結構な数がいるぞ!!?」

辻の疑問に、不敵に笑って答える一同。

「雑魚共だけだ心配すんな!!? 手強い連中は一通り沈め終わってんだよ、いいから行け!!?」

「桜咲後輩の方にも少くない数が行っている、行き掛けの駄賃だ片付けて行け!!?」

「:わかった!!? 気をつけろよお前ら!!?」

「ああそうだ!!? お前は失うなよ一ちゃん!!? ふぐつ、うう…」

「何泣いてるの中村気味悪いよ、巫山戯ないでよこんな時に」

「うるせー!!? 俺はなあ、千載一遇のチャンスを棒に振っちゃまったんだぞ馬鹿野郎!!?」

「何の話だ馬鹿共!!?」

馬鹿四人の掛け合いを背中に浴びつつ、辻は駆け出した。

「間も無く風の障壁が消えます、明日菜さん、気を付けて下さい!!?」  
「わかってるわよ、ネギ!!? いい、木乃香。絶対私とネギの後ろから離れちゃ駄目よ?」

「う、うん…」

パリエース ウエンティ ウエルンティス  
風花 旋風 風障壁の効果が

切れ、風の壁が薄れて外の状況がネギ達の目に入る。

「あつ……!」

「ははっ…心配要らなかったみたいね……!」

「せつちゃん!!?」

縮尺が元の状態に戻った道路上で、式神達から無数の煙がたなびき、異形の怪物達が薄れて消えていく。奥には千草が十体以下にまで数を減らした式神達に囲まれ、辻達と刹那によって包囲されていた。

「よっしゃあ!!? なんでえ圧倒的じゃねえかよ旦那方!!?」

「ネギ、あたし達も移動する?」

明日菜の言葉にネギは暫く考えてから首を振る。

「いえ、辻さん達があつちのお姉さんを倒してくれるまでここで木乃香さんを守りましょう。下手に近づくと邪魔になってしまうかも…」  
「あつ!!?」

言葉の途中で木乃香が思わず、と言った様子で悲鳴を上げる。

反射的に二人が前を向くと、千草が懐から取り出した大量の札をあたりにはらまく光景が見えた。

「これは……爆符か!?」

刹那は自分達の周りを舞う大量の神札を見て叫ぶ。

「なんじゃそりやあ!?」

「言葉からして爆発するんだろ!? ヤベえぞ!!」

「まだこんなモン隠してたのこの女!?」

「ええい!!」

大豪院が横蹴りを繰り出し、札の一枚を蹴り破るが宙に舞う札の数は五十を超える。

「調子こいた罰やガキ共!! 纏めて吹っ飛びい!!」

千草が気を送り込み、爆符が一斉に輝く。

「っ!!? 神鳴流奥義、百花繚乱!!」

刹那の放つ気の奔流が札の一部を吹き飛ばすが、半路程の札が周囲に残る。

「終わりや!!?」

爆符が弾け、爆風の嵐が辻達を襲う、その寸前。

「神鳴流奥義!!? 斬魔剣 弐の太刀 百花繚乱!!」

剣撃の嵐が辻達の周囲を駆け抜け、舞狂う札を辻達諸共無差別に斬り裂いた。

「なっ!?」

「ぎゃああ斬られた!? お、俺はまだ、死ぬ訳には……! 裏筋から大枚はたいて買った、アダルトDVD…まだ見てねえん、だ……!」

「どうでもいいことを今際の際に言い残すな! 大体斬られてねえよ!!」

「いや、だが確かに斬撃は俺達を通ったぞ……札だけが斬り裂かれて、いる。」

「つていうか助かった……?」

「これは……!!? 神鳴流の斬魔剣、まさか!?」

刹那が振り仰いだ斬撃の飛んできた方向には、多数の剣士と術士を連れ先頭にて剣を構える壮年の男性、近衛 詠春の姿があった。

「近衛、詠春…!!?」

千草は齒噛みしながらその名を口にする。

「天ヶ崎 千草。貴女を捕縛します。抵抗したりこれ以上木乃香達に危害を加えようとするとするようなら、貴女を生死を問わずに此方は制圧する。降伏しなさい」

詠春は峻厳な口調で言い放ち、後ろの配下達が一斉に攻撃体制に入る。

「長<sup>おさ</sup>!!?」

「お父様!!?」

遠くから呼びかける木乃香と刹那の声に詠春は頷き、一転して柔らかない口調で二人に答える。

「木乃香!!? 怖い思いをさせましたね、もう大丈夫ですよ!!? そして刹那君、麻帆良学園の皆さん。よくここまで木乃香を守り抜いてくれました、心から御礼を言わせて頂きます。後は我々にお任せ下さい」

その言葉に、中村が慄いたように一歩後ろに下がる。

「なん、だと…:そんなことが…」

「:中村、何が気に入らないのか知らないけど、大人しく任せようよ。後は、身内の組織の問題だよ」

山下の言葉をスルーして中村は叫んだ。

「めつちや似てねー!!? あの病弱そうなオッサンの遺伝子が混ざっというてどうやったたらあんな美少女が生まれんだ!!? 何やお母さんどんだけ美人なのよヤベエエエエツ!!?!!?」

「そつちかよ!!?」

「手討ちにされるぞ? <sup>ジエンクイチュウバ</sup>鬼去吧!!?」

「でも誰も否定はしないんだな…」

「黙れ辻!!?」

ギヤアギヤアと言い合っている辻達を余所に千草は詠春を睨みつけ、言い放つ。

「…これはこれは長、直々にお出ましとは、余程お嬢様がお大事になさっておられるようで。それとも、やらかしたウチのことがそこまで気に入りませんでしたかなあ?」

憎々しげながらも何処か嘲るような千草の口調に、詠春の背後に控えていた神鳴流剣士の一人が激昂し、激しく千草を糾弾する。

「黙れ罪人風情が!!? 誰が貴様に抗弁を許した、大人しく縛に付け!!」

詠春は尚も言い募ろうとする配下を制し、固い調子ながらも静かに告げる。

「天ヶ崎 千草。大人しく抵抗せずに投降しなさい。この状況で貴女にこれ以上出来ることはありません。此方としてもここまでの事態を引き起こした貴女を問答無用に処刑して済ませはしません。貴女の言い分はゆつくりと時間を取って聞きましょう」

千草は詠春の言葉を聞いてくつくつと笑う。

「寛大なことですなあ、長。私のような末端の味噌つかすにまでそのようなお言葉を掛けて頂けますか…」

千草はそこまで言ってから俯き、一拍置いて上げた顔は、巫山戯ていた中村や怒り心頭の配下達でさえ一瞬たじろぐ程の怒りに満ちていた。

「…そんな甘つちよろいアンタが上に立つとるから、此処がここまで腐れるんや、糞つタレが……!!?」

凄絶な怒気とそれに伴う気の発露に空間がビリビリと震える。

「…話し合う余地は無いようですな……」

詠春が剣を持たぬ左手を上げ、臨戦態勢の配下達が殺気を帯びて前に出る。

その危機的状況において、何故か千草の口元には笑みが浮かんでいた。

…それでええ。

この後に起こった致命的な事態について、辻達や詠春達の中に油断が無かったとは言えないだろう。欲目を言うなら詠春達関西呪術協会の増援が着いた時点で辻達は念には念を入れて木乃香の近くに移動するべきであったろう。そういった意味では、警戒心を薄れさせていたネギや明日菜も、目の前の千草を捕捉した時点で他へ警戒を

止めてしまった詠春達も、それぞれに失態はあった。

だが、矢張りこれについては辻達一行を責めるよりも千草の執念を褒めるべきだろう。失敗の許されないここまでの戦闘で戦力を無駄に温存する意味は無い以上、ここでの奇襲に対応出来なかったのは、無理の無いことだった。

「今やコタ」

千草の呟きに応じるように木乃香の影から滲み出るように学ラン姿の少年が現れる。

「…済まんな、姉ちゃん」

その少年――犬上 小太郎は木乃香の首筋を手刀で一撃する。

「あつ……」

短い悲鳴を上げ、くずおれる木乃香を小太郎は抱きかかえる。

「なつ……」

「あつ、この!!?」

ネギが驚愕して振り向き、明日菜が素早く反応してハリセンを打ち下ろす。が、

「悪いな、姉ちゃん」

パアン!!?と破裂したような音を立てて小太郎の右手があつさりハマノツルギを受け止める。

「ええ!!?」

「なつ、消えねえぞ!!?」

「俺は式神や無いねん。悪いな、ハリセンの姉ちゃん」

小太郎は力任せにハマノツルギを振り捨てる。

「わつ!!?」

「明日菜さん!!?この!!?」

ネギが沈み行く小太郎に駆け寄るが、小太郎の方はそんなネギを見て、僅かに瞳を揺らすものの、取り合いはしない。

「…悪いな、チビ。お前と戦いおうて見たかったけど、相手してる場合や無いんや」

「おい!!?」

「木乃香ちゃん!!?」

「木乃香!!?」

「お嬢様!!?」

その場の全員が悲鳴を上げ、駆け付けようとするが、間近のネギすら辿り付けない内に小太郎は影の中に沈む。

「お嬢様が!!?」

「くっ……貴様あ!!?」

憤る配下に構わず千草は虚空に向け話しかける。

「コタはこのまま転移して指定の場所まで赴くわ。これで文句は無いやろ?」

そんな千草に詠春が刀を構え、千草に鋭く詰問する。

「…木乃香を何処へ連れて行つたのです?」

「長、それ聞いてウチが答え返すと思うとるか?」

クツクツと口元にてを当て笑う千草に、配下の一人が堪えきれずに飛び出した。

「舐めた態度もいい加減にしろ、裏切り者があああつ!!?」

その神鳴流剣士は刀に気を込め必殺の斬撃を繰り出す体制に入る。

「待ちなさい!!?」

「ご心配召されるな、長!!?殺しはしません!!?」

制止の声を上げる詠春に答え、瞬動で間合いを詰めた剣士は斬撃を放つ。

「斬岩剣・式の太刀!!?」

千草は護符も障壁も意味を成さない必殺の一撃を前に、やれやれといった感じに首を振り、告げる。

「やられフラグ立ててやられにくんなや、三下」

ふっ、と唐突に、千草と剣士の間の人影が現れる。その黒衣の青年は剣士に向けて手を翳し、ポツリと呟く。

「なっ!!?」

「解放・闇 竜の息 吹」  
エーミツタム フラットウス ドラコニス テネブラエ

現れた黒い嵐が驚愕する剣士を真面に飲み込み、詠春達の方へ

突き進む。

「っ!!? 斬魔剣 ・ 式の太刀!!?」

先頭の詠春が刀を一閃。黒の濁流が二つに裂けて霧散し、青白い顔で痙攣する剣士が地面に落ちる。

「必殺の斬撃も、放てな意味無いわなあ」

嘲る千草を余所に、黒衣の青年は淡々と詠唱に入る。

「ヴェロス・オニムス・ザムウエルス・来たれ火の精風の精 焼き尽くせ焼き尽くせ焼き尽くせ 猛き風乗りて迸れ 其は陵辱の使徒」

青年が両腕を掲げ、手の中に紅蓮の業火が現れる。

デーウォーレス エレメントウムスアグレッツィオー  
「侵 略 の 猛 火」

言葉と共に凄まじい大火の奔流が詠春達に向け放たれた。

「西洋魔術師か!!?」

「お下がり下さい、長!ここは私達が!!?」

詠春の前に陰陽術師達が立ちほだかり、各々が手に護符を構える。

直後、火炎の嵐が詠春達一行を包み込むが、球状の結界が一行を囲み、猛火は完全に阻まれていた。

「くっ何という威力だ……!」

「だが生憎だな西洋魔術師!!?この人数相手にたかが一人で対抗できると思ってたかあ!!?」

声を掛けられた黒衣の青年は、大儀そうに溜息をつき、面倒臭い、と呟いてからぞんざいに告げる。

「別に……お前らと半端に強いそこの大将を動けなくするのが俺の狙いだからさあ……勝ち誇られても困るんだけど……?」

「なに……?」

黒衣の青年の言葉に意味がわからない、と首を傾げる配下達。そんな中、詠春はハツと周りを見回し、叫ぶ。

「直ぐに防壁を解き、散開しなさい!!?」

「長……?」

「何を……?」

まだ火炎が防壁を炙っている中でのその言葉。周りの配下が



怪訝そうに詠春を振り仰いだ瞬間、その言葉は静かに境界内に響き渡った。

フノエー ベトラス  
「石の息吹」

直後境界内を、灰色の雲が満たした。

「……………は……………?」

中村が掠れた疑問の声を洩らす。

その場の誰もが、目の前の光景を信じられずに固まっていた。

木乃香を油断から攫われた事実を各々受け入れる暇も無く、その失態を悔やむより先にそれは起こった。

「…やったか?」

「まあね」

地面から這い出てきた白髪の少年に黒衣の青年は声を掛け、少年は答える。

「あっさりとしたもんだな、まあ楽に終わったからいいけど…」

「最も、近衛 詠春はレジストが間に合ったみたいだけどね」

「へえー、腐っても大戦期の英雄かー、まあ、長くは無いだろ」

灰雲が晴れ、そこには石像と化した神鳴流剣士、陰陽術士の姿があった。その中央で詠春は、体の各所を灰色に変えつつも、刀を杖にして少年と青年を見据えていた。

「…私が、抵抗すらも碌に出来ない…石化魔法。…何者、ですか…?」

息を切らし、問いかける詠春に、二人は答えを返さない。少年が指を掲げ、朗々と詠唱に入る。

「ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト・小さき王八つ足の蜥蜴邪眼の主よ その光我が手に宿し 災いなる眼差しで射よ」

カコン オンマ ベトロッセ オース  
「石化の邪眼」

少年の指の先に光が宿り、レーザーの如く詠春に突き刺さる。

「…!木乃…香…!!?」

動かぬ体に顔を歪め、娘の名を最後の言葉として、関西呪術協会長の、近衛 詠春は石像と化した。

「……流石の手際やなあ」

言葉の内容とは裏腹に渋い調子と顔で千草が賞賛を送る。

「そらどーも」

「こちらには引き受けよう。貴女は儀式の場所へ」

青年はぞんざいに返礼し、少年は事務的に淡々と必要事項だけを告げる。

「…わかつとるわ」

どうにもすげない対応に千草は肩を竦め、転移符を取り出しつつ、辻達の方を見やる。

「…っ!!?天ヶ崎 千草!!?」

視線を受け、吞まれていた刹那がようやくやく我に返り、千草に向かって吼えるが、千草は気にもせず薄く微笑み、告げる。

「あんたらもこれで終いやなあ。まあ怨むなどは言わへんわ、せいぜい呪詛でも吐いてウチを呪つときい。あんたらに出来るのはそれ位や」

言い捨て、千草の姿がかき消える。

「…はいはい、それじゃあ……」

「君達の相手は、僕達がやらせて貰うよ」

こちらに向き直る黒衣の青年と白髪の少年。その視線を受け、辻が乾いた笑いを浮かべて呟く。

「……なんか、正直無いんじゃないか?この超展開は……」

絶望的状况が、幕を開ける。

## 20話 仮初めの姉弟の懊悩 死闘の幕開け

「ん……………」

木乃香はゆっくりと意識を覚醒させた。頭は霞がかかったように思考が要領を得ず、頭の芯が鈍い痛みを主張している。

……あれ、ウチ何してたんやったっけ……………」

「お目覚めになりましたか、お嬢様」

耳慣れない、しかし僅かに聞き覚えのある声が木乃香の耳に入ってくる。木乃香が霞む目を瞬いて声のした方を見ると、そこには眼鏡をかけた年若の陰陽術士、天ヶ崎 千草の姿があった。

「んっ……………!?…んんっ、んん!?…」

千草を見て、気を失う迄の記憶が蘇り、反射的に悲鳴を上げかけた木乃香は、そこで初めて自分が口を塞がれ、覆い布一枚だけを纏って石の台座の上に寝かされているという異常な状態に気付き、声にならない悲鳴を口内でくぐもらせる。

そんな木乃香を、千草は刺激しないようにゆっくりと宥め、優しいとさえ言える口調で木乃香に言い含める。

「ご安心下さい…ちゅうても安心できる訳あらへんやろうけどお嬢様、これだけは誓います。ウチは誓ってお嬢様に痛いことはしませんし、事が終わったら直ぐにでも家に帰して差し上げます。お嬢様にはウチは何の恨みもあらしまへん。やから、どうか大人しゅうしたってください、お嬢様」

当然そんな言葉を、この状況で額面通りに木乃香が飲み込める筈も無いが、少なく共その真摯な響きを持つ言葉に、今すぐに危害を加えられることは無いと悟り、木乃香は暴れるのを止める。

千草は満足げに微笑み、木乃香に短く言い含めて台座を離れる。

「お嬢様は寝とるだけでよろしやす。繰り返しますが痛いことはあらしまへん……………却って気持ちええかもしれませぬ」

「…姉ちゃん」

「ああ、コタ。…苦勞やったな」

木乃香から離れ、儀式の準備を進める千草に橋を渡って小太郎が声

を掛け、千草が小太郎に労いの言葉を掛ける。

「…別に大したことしとらんわ」

小太郎は何処かブスツとした様子で言葉を返す。その様子を見て、千草はクスリと笑って小太郎の頭をやや荒っぽく撫で回しながら言う。

「あんた女殴るんも逃げるんも嫌いやろ？ 気いの進まんこと頑張つてやってもろたから礼言うとするだけや」

小太郎は照れ臭さから僅かに顔を赤らめながらも、千草の手を払い除ける。

「やめえや姉ちゃん。頭撫でられるほどもうガキや無いわ」

「ガキや無い言うとする内はガキのまんまやコタ。昔と違うて可愛げのうなつたもんやわ本当に」

千草は払われた手をヒラヒラさせつつ、嘆息して小太郎に言う。

「はっ！ 可愛いなんて言葉喰らわずに済むんやったら寧ろ大歓迎やわ可愛げ無うて大いに結構や」

「このガキはホンマに…っゴフツ!?」

舌を出してのたまう小太郎に千草は呆れながら何事かを言いかけ、言葉の途中で血を吐いて地面に膝をつく。

「千草姉ちゃん!?」

顔色を変えて駆け寄る小太郎に、千草は咳き込みながらも片手を上げて、心配ないと小太郎に示す。

「やっぱ無理が祟ったんや!!? あないに沢山式神出して、体が無事で済むはずないやろ!!?」

「大…丈夫や、コタ…。一気に気を持ってかれすぎただけやから、少し休めば問題ないわ…」

千草の言葉に、しかし小太郎の顔は晴れない。

「少し休めばて…千草姉ちゃんこの後スクナの召喚するんやろ!?? そんなん今から碌に休まんで儀式なんぞ行ったらホンマに命に関わるで!?」

「大袈裟や…ちいと寿命が縮む程度のことやろが。そないな事にビビツというて、西と東の鼻を明かせるかい」

千草の言葉に、小太郎は我慢ならない様子で激しく千草に言い募った。

「千草姉ちゃん!!?もう止めえやこないな事!!?姉ちゃんがここまで頑張ったって、誰も喜びやせんや!西の連中も、東のいけ好かん魔法使い共も。死んだ姉ちゃんのお親やかて:俺やかて!!?姉ちゃん自身も楽しかないやろこんなことやとつたつて!!?見てられんならこっから居なくなればええんや!!?どっか離れたとこで静かに暮らしておいたらええやんか!!?」

「やかましいわ!!?そないなことしてイモ引いて、それで気が収まるとても思とんのかい!!?コタ、あんたにウチの何がわかるんや!!?」  
「姉ちゃんの苦労なんざ知らんわ!!?でもな、俺は姉ちゃんのことばよう知っ取るで!!?」

斬りつけるように拒絶を返す千草に、小太郎は負けじと声を張り上げそう言った。

「なんやて……?」

「姉ちゃんは基本面倒臭がりや!!?身の回りの事とか家の事は放つたらかして、何も無い日は家でゴロゴロしながらようわからん縫いぐるみ作ったり訳わからん子ども向けのアニメ見たりして一日中過ごしとる!!?正直姉ちゃんの歳でそないに可愛げなもんばつか弄り回してんのはどうかと思うで、俺は!!?」

「なっ……こんガキ、唐突になんやあ!!?」

突然の小太郎の言葉に、千草は戸惑いつつも何やら自分の趣味嗜好の全否定をする小太郎にたまらず声を荒げる。だが、小太郎は構わず言葉を続ける。

「でも、姉ちゃんは仕事になつたらすごいきちつととする。どないに嫌な奴からの仕事でも、他が受けたがらん面倒な仕事でも、最後の始末まできつちり付けとる。カタギには手を出さんし、どないに面倒臭がっても姉ちゃんのお袋さんの教えや言うて、姉ちゃんは料理だけは毎回きちつと作ってくれた。俺みたいな小生意気で可愛げのない、素性の知れんガキを、色々世話してくれたのが千草姉ちゃん、あんたや!!?」

「……コタ……」

小太郎は目にうつつすらと涙を浮かべながら、必死に千草に告げる。「姉ちゃんらしく無いんや、こんなやり方!!?カタギのお嬢様に手を出して、素人の兄ちゃん達殺そうとして、死ぬほど嫌いやった魔法使い達と手え組んで!そうやって自分殺してまでせなあかんもんなるか、復讐なんてもん!!?姉ちゃんの言った通りや、姉ちゃんの親父さんやお袋さんは、もうおらへんのや!!?どう生きても勝手言うんやったら、もつと自分を大切にせえや!!?姉ちゃんは、自分のこと、どうでもええと思うとるんやろうけどなあ!!?」

小太郎は自らを指し、悲痛な声で千草に問う。

「俺のことは、どうでもええんかい!?俺はよう無いわ!!?俺は、千草姉ちゃんを…本当の姉ちゃんみたいに、思うとるんや。だから俺は、姉ちゃんが心配や!どうでもよくなんか無い!!?姉ちゃんにとって、俺は単に気まぐれで拾っただけの、仕事に使える駒でしか無かったんか?姉ちゃんにとって俺は…家族みたいなもんや、無かったんか…?」

溢れそうになる涙を懸命に堪え、小太郎は千草を正面から見据える。

「…小太郎」

「……なんや…?」

暫しの沈黙の後、静かに千草が小太郎の名を呼ぶ。

「最初に言うとかわ。ウチはあんたのことを、手の掛かる弟みたいに思うとる。どうでもええなんて思つたらんわ」

千草の表情からは感情が伺えなかったが、言葉の響きは何処か柔らかかった。

「あなたの言うことが正しいんやろ、ウチのこれは、詰まらん意地や。なあなあにして、流された方がずっと楽なんやろな」

でもなあ、と千草は続ける。

「多分ウチは、それが納得出来ん人間やから、あんたと一緒に居れたんやと思うで?」

「……姉ちゃん……」

小太郎の呼びかけに千草は僅かに、ではあるが微笑み、

「ウチはなあ。西が東と手え組もうが、矜恃に抱きついて小っさくやっけて行こうが、どっちでもええんや」

「…なら、何でや…なんでここまでやるんや…」

理解出来ないと言った小太郎の様子に、千草は何処か笑みを寂し気なものに変える。

「言うたやろ？ 気に入らんや。落ち目に入ってるゆうんに、身内同士でグダグダ下らん争い続けてる西の連中全てが、ウチは気に入らん。なあなあに全部有耶無耶にして併合しようとしよる穩健派も、グチグチ恨み言垂れるだけで大した行動も起こさん腰抜けの過激派も!!? 筋の通らんやり方を、ウチは認めん!!? と様とかか様が命賭けてまで護りたかったこの場所は、こんな腐った場所じゃあかんのや!!?」

千草は叫ぶように言葉を放つ。

「……姉、ちゃん……」

「せやから引導を渡したるわ…ウチがな。ウチが成功しようが、失敗しようが。…もう西に、選択肢は残されて無いんやからなあ」

小太郎の言葉は届かない。千草は小太郎の頭をクシヤリと撫で、小太郎に告げる。

「ウチは儀式を始める。コタ、周辺の護りは任せたで?」

「っ!!? 姉ちゃん! 俺は……!!?」

「頼むわコタ」

堪らず顔を上げ、抗議しようとする小太郎に、千草は頭を下げる。

「…ウチの、悲願なんや、これは…」

「っくくくく!!?!!?」

小太郎は声にならない唸り声を発し、無茶苦茶に頭を掻き毟る。

「……っ! 勝手にせえやつ!!?!!?」

小太郎は踵を返し、橋の向こうへ走り去っていった。

千草はそれを悲しげな顔で見送っていたが、一つ頭を振り、儀式の準備を再開する。

「…駄目な姉でごめんなあ……コタ」

「どうだろう、ここで大人しくしてくれれば僕達は一切君達に危害を加えない」

「…逆に歯向かうなら最悪死ぬぞ。どっち選ぶべきかぐらい馬鹿じゃあるまいし解んדרろ？」

青年と少年から圧プレッシャー力が噴き上がる。言葉で説明されずとも本能で理解出来た。

…二人共に、遙か格上、だな……

辻の全身から冷たい汗が滲む。数で有利な状況にも関わらず、この場を切り抜けられるイメージが浮かび上がらない。絶対絶命の一手前であった。

……それでも……

辻は周りの悪友と後輩達の顔を見渡す。全員の中には緊張と微かな怯えがあったが、心の折れている者は一人もいなかった。

……頼もしい奴らだな、本当に。

辻は一つ頷き、青年と少年に向き直り、はつきりと宣言した。

「生憎だが俺達は学園でも名うての馬鹿で通っていてなあ……状勢不利だからって諦めつく程、頭良くは無いんだよ」

「……ああ、そう……」

辻の言葉に、黒衣の青年は眩き、面倒臭い、と小さく続けた。

「…では相手をしよう」

白髪の少年は言い、詠唱を始める。

「ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト・小さき王八つ足の蜥蜴邪眼の主よ……」

「来るぞ畜生!!?」

「っーか相変わらず何言ってるかわかんねえ、何が来んだおい!!?」

「…これは、さつきと同じです!!? 石化魔法が…!!?」

「触れたら石になるといふ奴か…!!?」

「ヤバイよ一旦逃げ…!」

「遅っせーよ」

慌てふためく一同に下らなそうに青年が告げる。



「…時を奪う毒の吐息を」

「ブノチー ベトラス石の息吹!!?」

次の瞬間、辻達の周りを纏めて巨大な灰色の雲が満たした。

「…はい、終了了了……」

黒衣の青年が適当な調子で宣言する。

「じゃあ一応儀式の場所まで移動するか…おい、どうした?」

魔法を放った後動かない少年に青年は訝し気に問いかける。

「…いや、何か手応えが……!!?」

白髪の少年が怪訝そうに言いかけたその瞬間、灰色の雲が裂け、千々に千切れて霧散する。

「なっ……!!?」

驚愕と共に青年が振り向いた先には、刀を振り上げ、構える辻の姿があつた。

「っ!!?!!?!!?」

得体の知れない怖気に見舞われ、少年は咄嗟に障壁を全開にしつつ飛び下がる。が、

「ちえええええええええいつ!!?!!?!!?」

怪鳥のような咆哮が響き渡った瞬間には、白髪の少年の左手と左足は、既に懷まで踏み込んだ辻の斬撃により、斬り落とされていた。

「なっ……!!?!!?!!?」

「はあ!!?!!?!!?」

一拍遅れて片足の支えを失ってその場に転倒した少年と一部始終を目の当たりにしていた青年が驚愕の声を上げる。それに構わず辻は叫んだ。

「逃げろおおおおおつ!!?」

その言葉に即座にバカレンジャー達が反応した。

「行くぞオラア!!?!!?!!?」

「わっ!!?」

「こっちだ!!?」

「わ、ちよつと!!?」

「来い、桜咲後輩!!?」

「なっ……!?」

中村がネギの体を抱え上げ、全力で走り出し、山下と大豪院がそれぞれ明日菜と刹那の手を引き走り出す。豪徳寺は殿につき、後ろを警戒しながら一行に続いた。

「てめえら……!?」

反射的にそちらに向かいかけた黒衣の青年が、悪寒を覚えて咄嗟に前方に飛ぶ。直後、青年は背中に熱い感触を覚えた。

…斬られたのか!?

地面に転がりつつも青年は振り向く。そこには一刀を振り下ろした体勢の辻がいた。

……いつの間に……!??

青年はややもたつきながらも身を起こし、魔法を辻に叩きつける。

「黒<sup>カニス</sup>飛<sup>カルクス</sup>礫!!」

青年の手から十を超す黒い散弾が放たれ、辻へと殺到する。

「っ!!」

辻は刀を振り下ろした体勢から一步分体を引き、飛来する弾丸の群れに対してフツノミタマを一閃した。

キン!!?と澄んだ高い音が鳴り響き、刀に裂かれた弾丸は元より、刃に触れていない弾丸までもが一斉に破裂する。

「っな……!?」

…術式が霧散した!?

あり得ぬ事態に混乱する青年に、辻の追撃の一刀が地面スレスレから蛇のように跳ね上がる。黒衣の青年は倒れ込むようにそれを何とか躲すが、掠った腕から血が飛沫く。

「魔法<sup>サギタ</sup>の射<sup>マギカ</sup>手<sup>セリエス</sup>・連<sup>サブ</sup>弾<sup>ローニス</sup>・砂<sup>1</sup>の1<sup>1</sup>矢!!」

倒れ込んだ状態から身を起こした白髪の少年が残った右手を突き付け、そこから砂が圧縮された弾丸を撃ち放つ。その砂の弾丸達は四方八方から辻へと殺到するが、フツノミタマに目を一瞬辻が落とし、刀が一瞬震えて何事かを辻に伝える。応えて辻が飛び出して、フツノミタマを砂の弾丸が飛来する方向の虚空に向かい薙ぎ払った。

直後、少年の操作により、自らぶつかり合った弾丸同士が弾け、無

数の魔力を纏った砂の散弾に変貌する。散弾が辻の立つ周囲の地面毎貫き、弾けさせて蹂躪する。

「…どういふことだ……？」

砂の着弾により僅かに上がった土煙が晴れ、少年は呻くように口を開いた。

無数の穴が空いた蜂の巣のような地面の中心に辻は佇んでいた。幾つかの散弾が体を掠めたらしく、身体の数箇所から血を流している。

だが本来その程度で済む筈が無い。砂の散弾は辻を範囲の中心として、平等にその範囲内を絨毯爆撃した。たまたま大した被害を受けない安全地帯などは存在せず、かと言って護符や障壁などで防いだのは無いことは、その体の負傷が証明していた。

辻は油断無く刀を構え、逆方向の二人を警戒する。不可解な事態の連続に警戒してか、少年、青年共に、起き上がった以降は動きを見せない。

…完全に警戒態勢に入られた。こうなると闇雲に斬り込んでも返り討ちに遭いそうで下手に動けん。

辻はジリジリと位置を変える二人に合わせて身体の向きを微調整しつつ、思う。

…少なく共あつちのガキは見た目通りか、人間じゃあ無いな。

辻が切断した左手と左足の断面からは血が一滴も溢れておらず、少年は右足だけで苦も無く立ち上がり、辻の方を睨み据えている。

『…断った感触からして人形か何かだな。折角の主の一刀も余り堪えておらんらしい。矢張り初太刀で割っておくべきだったなあ、主よ？』

「…そう簡単に割り切れるか」

…歯止めが効かなくなつたらどうするんだ。

辻は小さく呟き内心で抗議してから、うわ、何か詰まらない冗談言つたみたいになった、と気付くが、時既に遅し。フツノミタマはクツクツと笑い、刀身がカタカタと微細に震える。

『中々上手い返しじゃないか、主』

「忘れてくれよ。そんなつもり無かったよ。それよりどうする？上手いこと足止めになつてはいるが、さつきみたいに何時迄も上手いこと行きやしないぞ。特に最後の砂の散弾を当たらなくしたあれは、もう一度やれと言われても自信がない。正直上手くいきすぎた」

『うむ、私からすればこれでも完璧な成功とは言えんのだが、確かに初めてやったにしては上出来すぎる出来。次からは確かにこう上手くはそうそういかんだろうな…』

少年と青年に悟られぬように、小声で呟く辻に、懸念事項を返すフツノミタマ。

「……！ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト・小さき王八つ脚の蜥蜴邪眼の主よ……」

「ヴェロス・オニムス・ザムウエルス・来たれ闇精境界を覆え……」

膠着状態から、意を決したように少年と青年が同時に詠唱を始めた。

「ゲエツ!??!」

『まあ、得体の知れん相手には順当な攻めだな』

小さく悲鳴を上げる辻に、何処か他人事のように呟くフツノミタマ。

「言つてる場合か、こういう場合……!」

「石化カコン オンマ ベトローセ オースの邪眼!!?」

「夜パリーウム ノクテの帳!!?」

「ヤバ……!」

『主!!?』

灰白色の光線が貫き、凝縮された闇の幕、としか形容の出来ないモノが辻を全方位から押し潰す寸前に、辻の足元に魔法陣が浮かび上がり、辻の姿がかき消える。光線と闇は虚しく虚空を穿ち、潰した。

「………転移魔法か……?」

「いや、恐らく仮契約カードバックティオーによる転送機能だろう。……逃げられたね」

白髪の少年は一つ飛んで、自らの左手と左足の落ちている地点に着地すると、左腕を拾い上げ、無造作に左腕の断面に、腕の断面を押し付ける。

「…駄目だね、繋がらない」

暫くその体勢のまま停止していた少年だが、やがて右手を無造作に離すと、左腕がドシヤア!!?と音を立てて地面に落ちる。

「……こっちも傷口が癒着しない。……どうなっている?」

黒衣の青年は背中を手繰り、納得のいかない様子で呟く。

「…戦局から離脱したと思うかい?」

左足の接合は諦め、右足一本で黒衣の青年の傍らに着地して、少年は尋ねる。

「……あの様子からして無いだろ。儀式の場所に向かったか、体制を立て直してこっちに来るな…」

青年は溜息を吐き、面倒臭い、と呟く。

「……何にせよやる事は変わらない。とは言え想定外の状況だ、手を抜いていたつもりは無いけれど…」

「ああ…」

少年の言葉を引き取り、青年は言い放つ。

「面倒臭いが、この身体なりに本気で行くか」

## 21話 少女の告白 少年の返答

辻が転送させられる数分前に時間は遡る。

「ちよつ、待って下さい!!? 辻部長一人を残して逃げる等、これでは足止め所か捨て石です!!? 私も……!」

「目的忘れんな桜咲いえあ!!? 近衛ちゃん奪還すんのが第一目標だろがあつ!!? あのまま居たら今頃ぜってー何人かやられてたぞ!!?」

手を引かれるままにされながら抗議をする刹那に、ネギを小脇に抱えて前方をひた走る中村が怒鳴りつけるように諫める。

「っ!!?…しかし……!」

「落ち着いて桜咲ちゃん! 何も本当に辻を生け贄サクリファイズにしようつて訳じゃ無い!!? 一先ず全員で身を隠せる場所を探すんだ!!?」

「えっ…それって…どういう…ことよ!!?」

山下の言葉に、やや息を切らしながらも懸命に後ろをついて来ていた明日菜が訊き返す。

「桜咲後輩、カードの機能だ!!? 何処かに潜んでから転送機能とやらで辻を召喚しろ!!? こちらの気配を消したり姿を見えなくする術は使えるか!!?」

「…!!? そうか! 相手の足止めをした上で辻の旦那も転移で引き上げさせて全員の居所をわからなくさせるのが狙いですかい!!?」

ネギの肩の上で揺られるままに身を任せていたカモが、合点がいったとばかりに声を上げる。

「っ!!?…そういう、ことですか!!?」

「どうなんだ!!?」

「可能です!!? 最も私の腕前ではあれ程の腕前の術士相手には時間稼ぎにしかならないでしょうが、場所を選んで隠業符を併用すればそう簡単には見つからない筈です!!?」

刹那の言葉に中村達は頷き、足の速度を早める。

「…でも、相談の一つもしないであの一瞬にそこまで打ち合わせたように動けるって、凄いですね……!」

ネギが抱えられたままの姿勢で以心伝心という言葉が相応しく思

えるバカレンジャーの行動に感嘆した様子で言う。だが、中村達はそんなネギを見て何故か微妙な表情を浮かべ、代表して殿の豪徳寺が告げる。

「いや…な。俺達はとりあえず相対出来るのが魔法ぶった斬った時点で辻しかないと思つたから辻の言葉に従つて咄嗟に逃げただけで、辻をどう助けるかは走りながら考えたんだわ…」

「でも、それでも凄いわよ先輩達…私やネギ所か…刹那さんだつて咄嗟に動けなかつたんだもん…」

息を切らしながら、明日菜も感心したように言う。が、中村達は更に顔を微妙なものに変え、一層足を早める。

「…問題はもう一つある。一刻も早く潜伏場所を見つけるぞ！」

「え…それは無論のことですが…？」

大豪院の言葉に同意しつつも刹那は首を傾げる。何やら尋常では無く中村達が焦っている。確かにあれ程の術士二人を相手に足止めを買つて出ているのだから焦るのは当然であり、刹那とて気持ちは一緒である。だが、発案者であるにも関わらず中村達は奇妙に焦りすぎている気が刹那はした。

「…あいつと俺らの認識には多分もう一つ差異があんだよ。俺らは足止めのつもりであいつにあの場を任せただけ…あいつは恐らくこのままあの連中と刺し違える積もりなんじゃないかねえかと俺らは思つてんだよ!!？」

「えええっ!?？」

中村の言葉にネギが驚愕の声を上げる。

「…思い出して見てよ、辻は今朝まで割と本気で死ぬ気だったよね…その挙句桜咲ちゃんに命預けるとか言つてた馬鹿だよ…!??こんな展開になったら、それこそ命捨ててでもあの二人片付けようとしそうじゃない、如何にも!!？」

山下の言葉に一同無言になって辻を思い浮かべる。全員が思い出すのは本当に腹を刺して見せたイッてしまっている辻の瞳である。

「…!!?急いで隠れる場所を探しましょう!!？」

「うん!!?て言うか今頃死んでんじゃないでしょうねあの人!!？」

「わー!!?縁起でもないこと言わないで下さいよ明日菜さん!!?と、  
兎に角急ぎましよう!!?」

「言われるまでも無えわ!!?どっかに洞窟みてえなもん無いか!!?」

「そんなものが都合良く見つかるか!!?焦らず注意深くただ急げえ!!  
?」

一行はすったもんだの末、倒れた巨木で視界が塞がっている窪地を見つ  
つけ、大急ぎで刹那が隠業の術と符を駆使して結界を張り、辻を召  
喚したのだった。

「うう…良かったです、辻さん…!てつきり今頃壮絶な相討ちを遂げ  
ているのかと…!!?」

「よく、よく生きていてくださいました…:辻部長…!!?」

「一はちめゃあん…よく、思い留まってくれたなあ…:おい…:」

「なんなんだよお前ら揃いも揃って!!?何俺が死んでる前提で話して  
んの!!?そりゃナイスなタイミングで呼び出してくれたのは感謝す  
るけど、なんかあんまりな扱いじゃ無いか!!?」

転移した直後に全身を点検された直後に涙ぐみながら方々から生  
を祝福され、辻は思わず絶叫した。

「…兎に角、全体の方針を決めよう。言うまでも無くかなりヤバイ状  
況だ」

ようやく周りが落ち着いた所で、辻は作戦会議を始める。

「…あの西洋魔術師二人は、矢張り…:」

「ああ。どちらにも結構な手傷を負わせたつもりだが、両方ともピン  
ピンしていた。俺達を探しているだろう、恐らく…:」

刹那の問いに頷きつつ、辻は厳しい顔で情勢の厳しさを語る。

「…恐らく天ヶ崎 千草が狙っているのは、かつて長達が封印したと  
伝えられている飛驒の悪鬼、両面宿儺の復活でしょう。この近辺で、  
お嬢様の魔力を利用しての大規模な儀式をしようなどという案件で、  
他に心当たりがありません」

「…それって解放されたらヤバイ感じ?…:」

刹那の推測に、山下が恐る恐るといった様子で問う。



「……ここにいる戦力どころか、東と西の戦力を総動員した所で太刀打ちできるかわからないレベルの化け物です」

「…笑えねえな。出てきたら一卷の終わりって訳かよ」

刹那の言葉に豪徳寺が呻く。

「…二手に分かれるしかねえな」

暫し、沈黙の降りた空気を破って中村が呟く。

「…そうだな。ここで連中を抑える役と、近衛後輩を救出に行く役。あまり時間は残されておらんだろう。一刻も早く近衛後輩の居る場所に辿り着かねばならん」

大豪院の言葉に思案する一同。

「…僕らは基本的に高速移動は出来ない。ネギ君位しか飛んでいけるのはいないよ」

「桜咲、その儀式つっのをやる場所までどんくれー離れてんだ？」

中村の言葉に、少し考えてから刹那は答える。

「…正確な距離はわかりませんが、恐らく六、七kmというところでしようか…」

「突っ走っていくにはキツイ距離だな…時間がかかりすぎちまう」

「でも、他に方法が無いなら今すぐ木乃香の所に向かうべきじゃない？モタモタしてたら木乃香が…」

「最もな意見だが神楽坂後輩、現在追って来ているだろう西洋魔術師二人を考えろ、迂闊に飛び出しては連中のいい的だ。奴らをまず確実に引きつけてから救出組を出さなければならん」

「…足止めは俺が行こう。こいつがあれば魔法を撃ち込まれようと対処できる」

「待ってよ辻。そのアーティファクトがあっても危なかったんでしょ？何かしら対策を考えてからじゃないと…」

「んなことしてる時間が無えから言ってるんだろ。だが一ちゃん。お前は近衛ちゃん助けに行く側だ。あっちには影から出てきた得体の知れないガキもいるし、どれ位の戦力が居るかもわからねえ。西洋魔術師とやらは俺らでなんとかする。確実に近衛ちゃん救出するにはお前はあっちだ」

「ま、待つてください。そこまで戦力に余裕があるんだったら、木乃香さんを誘拐するまでにその予備戦力も投入してくるのが普通じゃないですか？出てきたのがあれだけってことはもう戦力はいないんじゃない？」

「そうかもしれないねえがネギ、万が一あつちに行つて実は増援がいたので駄目でしたでは話が済まねえだろ。ここは確実に近衛ちゃん救出するのが最優先だろ」

「待て、それは言つてもあの西洋魔術師二人は俺達より遙か格上だぞ。仮に辻以外の四人が残つたとして奴らを止められなきや話は同じじゃねえか」

「どちらも少なからず博打である以上、仮に失敗したとしても少しでも近衛後輩を助けられる確率が高い方を選ぶべきだろう、中村に賛成だ。ネギ、辻と桜咲後輩を乗せて飛べるか？」

「…はい、それは大丈夫ですが…」

「いやちよつと待つてよ…」

「山ちゃん、ビビツた訳じゃ無えんだろうけどこんなもん…」

刹那はいつしか言葉を返さなくなり、目の前の論争から抜け出していた。

その場の全員が、近衛 木乃香を助ける為に全身全霊を尽くしていた。

少し前まで魔法の存在を知らなかった一般人と、荒事に関わった経験は皆無と言つていい見習い魔法使い。この中にプロとして、ここまです膨れ上がった事態に責任を取らなければいけない人間は、唯の一人も居はしない。

下手をしなくとも、命の危険がある事は全員が解っている筈なのに、投げ出そうとするような人間は一人もいなかった。

…ああ……………

刹那は思う。

…私だけだ。この中で、全力を出していないのは。

…私はプロの護衛の筈なのに、一番覚悟が無いのが私だった……………

刹那は一瞬目を閉じる。刹那の頭の中で、幼少時から現在までの思

い出が走馬灯のように蘇り、我知らず刹那は笑っていた。

……なんだ……………

…私の人生、殆どお嬢様とおもいでと辻部長の事しか頭に残っていないや……………

寂しい人間だな、と刹那は己を笑う。久しぶりに刹那は、後ろ向きな感情以外で己を見ることが出来ていた。

…ここまで馬鹿なら、後先なんて考え無くていいや…

刹那は、仕方なくでは無く自ら望んで、己の正体を現そう。そう決意した。

桜咲 刹那は近衛 木乃香の為ならば命さえ惜しくは無い。だが今の刹那が正体を明かすのは、それを行う必要に迫られたから、というだけでは無い。目の前の優しく強い人達に対して、恥ずかしく無い自分で在りたいから。その為ならば禁忌も明かして見せようと、刹那は思ったのだった。

「あゝもう五月蠅ええええつ!!? 言い争ってる時間無えだろが!!? 辻と桜咲とネギと神楽坂が先行!!? 残りの俺らで足止め!!? これしか無えだろが決まりだ決まり!!?」

「だから何が飛んで来るかも判らんのお前らが足止めなんか出来るか馬鹿!!? 一分もしない内に黒焦げか石像になって終わりだよ、だったら俺だけ残って残りの戦力で近衛ちゃん奪還に行った方がいいだろ!!?」

「それをやったら貴様ほぼ確実に死ぬだろうが馬鹿者が!!? 命賭けるのが格好いいなどと思っていないだろうなあ!!?」

「ちよつと喧嘩してる場合じゃそれこそ無いでしょーが!!?」

「そ、そうですよ! 皆さん落ちついて下さい!!?」

「ぐあゝゝ駄目だこんなんじや、本気でどうしよう……………」

「ネギ先生」

紛糾している場でその声は、全員が不思議とよく聞こえた。

「あ、はい!!?」

「ネギ先生は、どの位の速さで飛べますか?」

「え？」

突然の刹那の質問に、ネギが戸惑ったように声を上げる。

「…桜咲、何を…」

刹那は辻を手で制して、再びネギに質問する。

「ネギ先生、重要なことなんです。教えて下さい」

「は、はい！……えーと、僕一人でなら多分、八十ノット位は出せると  
思います」

「そうですか…充分ですね。それなら、間に合います」

ネギの返答を聞いて頷く刹那。

「…おい、桜咲よ。一人で納得してねえで、俺らにも解るように説明し  
てくれねえか？」

豪徳寺がせつつくと、刹那は一つ頷き、語り出した。

「これから私が一人、もしくは二人を抱えて飛びます。恐らくそれで、  
救出に必要なだけの人数を連れていけるでしょう。皆さんの言う通  
り時間がありません。手早く人選をして行動に移りましょう」

刹那の言葉に、暫し全員が呆気に取られたように口を開けて刹那を  
見やる。

「…いや、人選は正に今揉めているってのもあるが、桜咲よ…」

「何よりも先に飛ぶって何よ？」

「高速で空を飛べる術みたいなのがあるってこと？それならそうと  
言ってくれば…」

口々に飛び出る疑問の声に刹那は頷き、後ろ足で一步、二歩と後退  
し、全員を見渡せる位置で止まった。

「…皆さん。私は、皆さんにも…木乃香お嬢様にも、秘密にしていたこ  
とがあります」

胸な手を置き、一つ深呼吸をしてから刹那は語り始める。

「これがあるから、お嬢様にも、皆さんにも。一線を引いた付き合いし  
か出来ませんでした…その事をまず、お詫びしておきます…この姿  
を見られたら、もう…お別れしなくてはなりませんから……」

「はっ…」

「いや、どういう…」

「シッ！……黙って聞こう！」

余りにも要領を得ない話に、中村達が問いかけようとするのを、辻は遮って刹那に先を手ぶりで促した。聞かねばならない、そんな予感がしたからだ。

そんな辻に、軽く頭を下げて礼をすると、刹那は続きを話す。

「…私は、お嬢様を守りたいと思う気持ちに偽りはありません。遅過ぎる決意ですが、これから。…私は全力を尽くします……貴方達を見て、ようやく詰まらない我が身可愛さの保身が捨てられました。ありがとうございます」

頭を下げた後に、刹那は辻の方を見た。

「…辻部長、すみません。約束は守れそうにありません」

「……え、……？」

辻が聞き返そうとした時、刹那は背筋を曲げて腰を浮かせ、自らを抱擁するように体の前で腕を交差させる。

「貴方達になら……曝け出せませ、私を」

純白の羽根が辺りに舞い散った。

「……え……？」

誰かの掠れたような眩きを何処か遠くで辻は聞いていた。

白い。唯々抜けるように白い羽根が目の中の少女の背中から生えていた。少女―桜咲 刹那の身の丈を越える程に長大なそれは、緩やかに広がり、堂々とその姿を顕現させた。

驚愕する一同を何処か寂し気に見やりながら、刹那は己の翼を左手で撫ぜる。

「……これが、私の正体です。私は、人間ではありません。ですが、今だけは私を信用して下さい。木乃香お嬢様を助ける為に、人ならぬ私を、今一度私にご助力を!!？」

そう言っつて刹那は深く頭を下げる。

その様子を見て、明日菜の顔がピキリと引き攣る。明日菜はそのまま衝動的に何事かを言いかけ、寸前で思い留まり、周りを見る。



かに吹っ飛んだ刹那がオロオロと辻に声をかける。

「…っ、辻部長……………」

「…ん、あ、ああ!!?なんだ桜咲!!?あ、天使って呼び方がなんか違うのか!!?なんて呼べばいい?天使様か?」

「それは絶対にやめて下さい。……いえ、そうでは無く、辻部長。何ですか、さっきのあれは……………」

「…?さっきのって、何がだ?」

「ですから……………私を、て、天使…だとか言った、あの言葉の意味です!!?」

自ら天使という言葉に、真っ赤になりながら刹那は辻に言葉の真意を尋ねる。

「え?…いや、意味って、見たまんまだろ?天使なんじゃないのか、桜咲?」

「違いますよ!!?何でそうなるんですか!!?!!?」

「ええ!!?違うのか!!?だってどっからどう見ても天使だろ、桜咲!!?」

「これは鳥の羽根です!!?鳥族の HALF なんです、私は!!?」

「…そ、そうか、悪い……………お前は余りにも何か、こう人間出来ているから、てつきり天上の存在なのかと……………」

「……………なんなんですか、それ……………」

がつくりと肩を落として、刹那は脱力する。

「ぶふっ、ふ、ふふふっ……………くっ……………」

「くふっ、くくっふふふ…ぶっ!!?」

「は、ははははは……………」

「あはは、はははは……………」

そんな二人の様子を見て、堪え切れぬとばかりに幾人かが吹き出し、幾人かは辻を呆れと、ある意味尊敬を込めた視線で見、乾いた笑いを響かせる。

「……………辻先輩……………先輩、凄いわ、ホント」

「ひひひ、ひーっひっひっひっひっ!!?凄えわーちゃん、マジはネエ!!?どわははははははははは!!?」

明日菜が呆れつつも感心し、中村が爆笑しながら、それぞれ言う。「なんだよお前ら!!? 誰だつてこんな姿説明も無しに見せられれば天使だと思わ!!? お前らだつて思つてただろ!!?」

「くくつ、いや、そういうことでは無くてな……くくくくつ」

「まあ、何て言うか、褒めてるんだよ、辻の事を。……ふふつ」

「絶対馬鹿にしてるだろ!!? 何なんだよ畜生!!? 真つ先にコメントした人間を皆して叩きやがって!!?」

辻が顔を真つ赤にして地団駄を踏む。

「…え、えつとカモ君、これつてどういう……」

「まあまあ兄貴、辻の旦那は凄えつて事できあ。誰にでも出来ることじゃ無い所か、辻の旦那にしか無理でしょうこんなあの」

訳がわからない、といったネギにしたり顔でカモが告げる。

「…いえ、そうではありません」

死んでいた刹那が復活し、再び辻に問いかける。

「辻部長、この際天使だの鳥族だのといった種族判別は脇に置きますので、答えて下さい」

「ん? ああ、わかった、何だ桜咲?」

辻も一先ず怒りを収め、刹那に応じる。

「…この羽根を見て、どう思いますか?」

「…いや、どうつて……感想を言えればいいのか……?」

「はい、率直に思つた事を仰つて下さい」

刹那の言葉に、辻は僅かに視線を彷徨わせ、仄かに顔を赤らめながらも口を開く。

「あ……何て言うか、あれだ……綺麗だと思つた、物凄く。変な言い方だけど、その翼。お前に似合い過ぎててさ……神秘的で、この世のものとは思えなくて。だから天使だと思つたんだ、俺は」

「………いえ、ですから、そういうことでは無くてですね……」

辻の手放しの賛辞に顔を真つ赤に染めながらも、刹那は望んだ方向とは違う方面の評価を否定し、再度辻に問いかける。

「…気味が悪いとか、恐ろしいとか。…そういう風には思わなかったんですか……?」



刹那の言葉に、辻はキョトンとした後、呆れた様に首を振って刹那に告げる。

「あのなあ桜咲。何をそんなに卑屈になってるか知らないが、俺は綺麗だって言ったんだぞ？何でそんな否定的な印象を俺が持つと思うんだよ？」

「だって!!?.....私は.....私は.....!!?」

.....化け物じゃないですか.....

その一言を刹那は言葉に出来ず、飲み込んだ。事実として異形の血が体内に流れていようとも、自分からそれを言葉にして、認めたくはなかった。

そんな刹那の様子を見て、辻は頭を掻いてから表情を真剣なものに変え、刹那に対して語りかける。

「桜咲。：何と無く、言いたいことはわかるよ。烏族か何か知らないけど、自分には人外の血が流れているから、自分は化け物だ。人じゃ無いから忌み嫌われる。化け物だから近衛ちゃんの隣にいる資格はない。そんな所だろ？」

刹那は答えない。辻は構わず言葉を紡ぐ。

「沈黙は肯定と見なすぞ。：まあ、気持ちが解る、とは言わないよ。苦勞しなかった訳が無いだろうし、当たり前だけど当人にしか解らないよな、その人の苦悩なんてものは。俺は何と無くの想像と、今まで接してきたお前を元にしてしかお前を語れない。でも、そんな俺でも言えることは有るよ」

刹那の目を真っ直ぐに見つめて辻は言った。

「お前は確かに人じゃないんだだろうけど、だからと言って化け物では決してないよ」

「...何を.....」

「いいから聞け。例えお前に化け物の血が流れていたとして、それがイコールお前が化け物だってことには、ならないんだ。化け物って言うのはさ...考えの理解出来ない、異質な存在なんだ。違って怖いものなんだよ...俺はそれを、よく解ってる」

『...此処から消えて無くなれ、化け物が!!?お前が、お前の様な奴が何

故俺の所に……………!!?』

「……………」

脳裏に蘇る苦い記憶を振り払い、辻は刹那に告げる。

「お前は友人との不仲を悲しんで、俺との仲をからかわれたら恥じらって、大切な人が攫われたら怒っていたろ? お前の何が人間と違うんだ。羽根が生えてる位で何でお前は排斥されるんだ。……自分で自分が認められないなら、俺が認めて、断言してやる。お前は人では無いが人間だ。人外の血が流れている桜咲 刹那は近衛 木乃香の親友で……この俺の!!? 自慢の後輩だ!!?!!? 自分を肯定出来ないなら、お前を肯定している他人を肯定しろよ!!?」

指を突き付け、辻は真つ直ぐに刹那を叱咤した。

「……………私、は……………」

刹那は揺れる瞳で辻を見返し、返事を紡ごうとするが、その言葉は声にならないまま掠れて消えた。

「少なくともこの中でお前を人じゃ無いから嫌いになりました、なんて奴は一人もいない!!? ほら、お前らも何か言ってやれよ!!?」

「五月蠅いよ、辻」

「今更何言えってんだ、俺らに」

「あれ?」

暖かい言葉を投げかけるとばかりに思っていた辻は、真逆の自分に対する冷たい視線に思わず疑問符を上げる。

「言うべきことは貴様が全て言ったわ。今から俺達が何を言っても二番煎じだ、そんなにお前は俺達を添え物にしたいか?」

「そんな事思っただけよ!!? え、何? 何で怒ってんのお前ら?」

「けっ、後輩クールサイドテールスレンダー色白属性に翼プラスした萌え要素の数え役満状態だった人と二人の世界作っていた分際で今更こつちに話振るとか白々しいんじゃないか!!? 持つものが持たざるもの哀れんでんじゃねえぞカス野郎があああああ!!?」

「何の話だあああ!!?」

刹那をそつち除けでギャーギャーと言い合いが始まった。その様子に溜息をついてから、明日菜が刹那にネギを連れて歩み寄り、言

葉を掛ける。

「刹那さん、大丈夫？」

「……………はい……………大丈夫、夫です……………」

途切れ途切れに、言葉を返す刹那に、明日菜は優しく笑って言う。

「先輩が言い忘れた事だけ……………木乃香も絶対、綺麗だって言ってくれるわ。刹那さんを嫌ったりなんてしない。長年木乃香を見てたなら、それ位わかりなさいよね、まったく」

「……………ずい、……………ません……………」

いーのよ、と明日菜が言いながら刹那の頭を撫でる。

「…刹那さん……………」

「……………はい……………」

ネギは背中の翼について、何かを言おうとして止める。大豪院の言う通り、言うべきことは全て辻が言った気がしたからだ。

「…木乃香さんを、助けに行きましょう!!？」

だからネギはやるべきことを力強く宣言した。刹那も滲む涙を拭い、やや掠れた声で、はつきりと返事をした。

「……………はいっ!!？!!？」

…馬鹿だな、私。

…あの人がどういふ人か散々思い知らされていたのに。

…底抜けにお人好しで、優しい人なんだ。私の尊敬する、大好きな先輩は。

## 22話 加速する戦場 少年の覚悟

「……あそこだね……」

「よし、手間を喰わされたがこれで終わりだ」

片手片足を失った少年を懐に抱いた青年が、少年の声にやや安堵したように頷く。

辻を仕留め損ねてから少年と青年は千草の近辺を遠視魔法で確認し、辻達の姿が見えないことを確認すると、一定数の人数が自分達の近くにまだ潜んでいると判断して付近を搜索していた。

「……どうする？」

「お前程真面目じゃあ無いんでな」

黒衣の青年は空いている右腕を掲げ、魔法を撃つ体制に入る。

「…連中が死のうと俺は構わない」

「ヴェロス・オニムス・ザムウエルス……」

詠唱に入る青年。その時……

「！」

隠行の式が崩れ、中から二条の閃光が宙に向かって飛び出した。

「ちっ!!?」

黒衣の青年は遠ざかる閃光——杖に乗るネギと光り輝く翼を羽ばたかせ、辻を抱えた刹那に照準を合わせ、魔法を解き放つ。

「奈落の業火!!?」

青年の掌にドス黒い陰惨なオーラを放つ禍々しいとしか表現出来ない、黒い炎が収束し、次の瞬間放射状となって爆発的に広がりながら放たれる。

「裂空掌波あ!!?」

「極漢魂あ!!?」

だが、ネギ達に火炎の波が届く寸前、横合いから飛び出したオーラウェーブが黒い炎の波に着弾し、ネギ達に向かう火炎を遮り、直径3mを超える巨大な気弾は、青年の展開した障壁に阻まれ、ダメージを与えられなかったものの、攻撃を中断させ、ネギ達への追撃を諦めさせた。

「やっぱあつさり防ぎやがった。あの吸血鬼にかなり近いレベルの難敵なんじゃねえか？」

「みてえだなあ…俺のとつときでも相殺仕切れて無えみたいだったしなあ、あのドブ色の炎」

「ま、やれることをやるしかないでしょ。幸い、エヴァさんの時と違って勝つ必要は無いしね」

「とはいえ相手は手負いながらも二人だ。気を引き締めて掛かるぞ」  
言葉を掛け合いながら青年と少年に向かって近づくのは辻を除いたバカレンジャーの四人である。

「…お前ら四人が足止め役か？…舐められたもんだな、俺もこいつも」  
青年は相変わらず気怠そうながらも、目に鋭い光を宿して中村達を睨む。少年は無言のまま青年の手を解いて、片足で地面に着地する。

「リベリオン」

「…なんだ？」

少年の呼びかけに青年が応じる。

「…君は飛び出した彼らを追って。此処は僕が…」

「おいコラ」

少年の言葉の途中でドスの効いた声と同時に、気弾が少年の眼前で障壁に阻まれ弾ける。

「舐めた事言っつてんじゃねーよクソガキ。一本ダタラみてえなナリで俺ら四人相手にしようってかあ？」

会話を遮られた形になった少年は無表情なまま気弾を放った中村を見やり、微かな溜息と共に告げる。

「君達程度なら僕一人で充分だ」

その言葉に、一瞬で血管を三、四本ブチ切った中村が嗤って一歩踏み出す。

「…上等だガキやあ、ぶつ殺して…!?」

言葉の途中で、中村の踏み出した足の近くの地面が罅割れ、隆起する。

「ドリユベトラス石の槍」

一抱えもあろうかという巨大な尖った石柱が、中村の土手っ腹に突

き刺さる。

「中村あつ!!?」

豪徳寺が驚愕と怒りの声を上げ、中村に駆け寄る。だが、

「…もっぺん言うぞクソガキ」

バキリ、と乾いた音を立てて、打ち下ろされた肘によって砕かれた石柱の先端が地面に転がる。

「…なめたことほざいてんじゃねーよ」

中村は、服に穴すら空いていなかった。

「…へえ……」

少年の顔が僅かに興味を持ち、口端が歪む。

「…どつちにしろ直ぐに逃してはくれないようだぜ」

青年は、はあとため息をつき、中村達を見据えて告げる。

「…手早く終わらせよう。そんなに死にたきや殺してやるよ」

物騒な威嚇の言葉に、バカレンジャーは揃って不敵に笑い、言葉を返す。

「上等だ黒づくめ」

「その台詞そのまま返すよ、死んでも文句言わないで欲しいもんだね」

「別に舐めるのは勝手だが後悔するのは貴様らだ、拐<sup>グアイマイ</sup>?人口」

「俺はとっくにサ○ギマンからイ○ズマンじゃボケエ!!?ぶっ殺したらああああああつ!!?」

西洋魔術師と武道家達の、戦いの火蓋が切られた。

「…非常事態に出しこんな所で文句言うのは間違いなのかもしれないけどさあ……」

眼下の緑一色の景色は高速で後方へと流れている。かなりの速度で飛行している証拠である。そんな中、辻は冴えない顔で文句を溢した。

「……っなんで俺はお前に抱きしめられて嬉し恥ずかしのランデブー地味な飛行してるんだよ!!?普通逆だろ立場が、ネギ君の後ろに俺が乗っけて貰えばよかったじゃん!?!」

「しようがないじゃないですか、私だって恥ずかしいですよ!?!?ネギ

先生は私程速度が出ないんですから、余裕のある私が辻部長を担当しなければいけないんです!!？」

辻を脇下から抱えるようにして飛んでいる刹那が、辻からは見えな  
いが赤くなつた顔で叫び返す。仮にも異性に耳元で言葉を告げられ  
ると言うシチュエーションだと言うのに色気もへつたくれもない。

「と言うか飛び出す前にその辺は散々抗議をして決着していたじやな  
いですか、往生際の悪いこと言わないでください!!？」

「ああ悪かったさ、悪かったとも!!？」

「…カモ君、何だか揉めてるね、辻さん達……」

「まああの格好じゃあなあ、大方旦那が恥ずかしさに耐えかねてゴネ  
てるんでしよう」

『なんだか余裕ねー頼もしいんだかなんなんだか』

前方を警戒しながら現在出しうるほぼ最大速度で飛んでいるネギ  
達は、チラリと横の辻を見やりながらそんなやり取りをする。

「しっかし理屈は解らねえが姐さんに乗せて飛ぼうとすると兄貴が上  
手く飛べなくなんのは予想外の事態だったぜ。時間もねから見切り  
発車で来ちまったがどうなることやら……」

「ここまで来た以上はある手札で何とかしてみせるしか無いよカモ  
君。…それにしても、辻さんはあんなに喚き散らす程嫌なのかな、刹  
那さんに抱えてもらつて飛ぶの」

『…まあ、飛び出したあの体勢どう見ても当ててんのがよ状態だから  
ねえ…そりゃ恥ずかしいでしょ、あの先輩なら余計にそうよ』

念話越しに明日菜の苦笑の響きがネギに伝わる。

「いや、刹那の姉さんの胸は当てて判るほ」

『黙んなさいセクハラ小動物、そーゆー問題じゃないし、そこら辺の論  
評していいのは夏休み明けた位の辻先輩だけよ』

カモの言葉を遮り、明日菜の鋭いツツコミが響く。

「…いや、姐さんの言い方も充分親父臭いっつーかセクハラ臭がする  
んすけど……」

『なんですつてこの…』

「わー明日菜さんもカモ君も、そんなこと話してる場合じゃ無いです

よー!!?」

明日菜とカモの段々俗な話題にシフトしていく流れをネギがやや慌てて遮った。

しかし、暫く会話が耐え、先程のそんなやりとりを聞くとは無しに聞いていたネギは、先程の言葉の中で気になった単語をなんとなく明日菜に尋ねる。

「あのー明日菜さん、さっきの当ててんのよとか辻さんが論評とかどういう意味で…」

『あんたがまだ知らなくていいことよ。先輩達にも尋ねたりしないでいいわ、自然に大人になればわかることだから。いい、約束よ?』  
「は、はい……」

約束、の部分だけ、妙にドスを効かせた声で言ってくる明日菜の剣幕に少々ビビりながらもネギは頷いた。

「…ネギ先生!!?」

「ー、はい!!?」

ネギに釘を刺した直後のタイミングで声をかけてきた刹那の声を念話越しに聞いていた明日菜は内心冷や汗をかく。

……やばっ、これから木乃香助けに行くって言うのに、巫山戯すぎてたんで怒ったかしら…でも、刹那さん達も似たようなもんだっかしいわよね? こういう時こそ余裕を待つのもって大事なことだと思うし……

など、内心で明日菜が下らない言い訳を考えている間に、ネギ達の側では刹那が対照的に緊迫した様子でこちらに告げる。

「何やら尋常でない気の高まりを感じます。ある程度ネギ先生の速度に合わせていましたが、私はこれから全力で飛行します、どうやらもう時間がありません!!? ネギ先生は私達の後を続行してください、この距離なら程なくして追いつきます!!?」

その言葉に、ネギは即座に思考を真剣なものに切り替える。

「…少数先行なんざ言うまでもなく危険だが、確かにとんでもねえ魔力を感じる。他に選択肢は無えか…」

カモが難しい顔をしながらもそう判断する。



「…わかりました、気をつけてください刹那さん、辻さん!!?」

ネギの言葉に、辻と刹那は頷き、一瞬顔を見合わせてから刹那が鋭く言葉を放つ。

「…光羽翔翼!!?」

言葉と共に、刹那の羽が一層光を纏って輝き、次の瞬間には光の尾を引いて、二人の姿がたちまち遠ざかっていく。

「は、速いね…」

「日本の神話じゃあ吉祥と靈格の高い順に八咫鳥、赤鳥、青鳥、蒼鳥又は白鳥になっっているらしいが、刹那の姉さんは神通力地味た力を使えるのかもしれないな」

これまでの倍近い速度にネギは驚き、カモは唸りながら見解を述べる。

『ネギ、あんたは…』

「…すいません。今の僕ではこれ以上の速度が出せません。僕が未熟なばかりに…」

『ばか、そういうつもりで言ったんじゃないわよ。あんたは出来ることを全力でやってんだから胸を張りなさい!!?』

僅かに落ち込むネギに、明日菜はそう励まし、前方を見据える。

『…こつちで先輩達も頑張ってる、出来ることをやるのよ。あたしも…あんたも』

「…はい!!?」

「よっしゃ、できるだけ急ごうぜ!!?」

ネギの気持ちに応えてか、飛行速度が僅かに増した。

「…見えたぞ、あの祭壇か!!?」

「はい!!? 木乃香お嬢様も見えます!!?」

辻と刹那が光の矢と化して、僅か数分後、巨大な岩を祀った祭壇と、そこから伸びる光の柱が辻達の目に入る。辻の視力では祭壇に寝かされているらしい木乃香の姿までは視認できないが、刹那は鳥族のハーフらしく、鳥のように遠目が効くらしい。

「悠長に作戦練っている暇は無い、このまま突っ込もう桜咲!!?」

「元よりそのつもりです!!?」

刹那が同意し、さらに速度を上げかけた、その時。

『主、上だ!!?』

『ヒヨヨヨヨヨヨウツ!!?!!?』

それまで黙っていたフツノミタマが鋭く警告を辻に発し、ほぼ同時に甲高い笛のような不気味な鳴き声が響き渡り、斜め上から凄まじい大きさの雷撃が辻と刹那に降り注いだ。

「うおおおおつ!!?」

咄嗟に辻が右手に持っていたフツノミタマを頭上に振り抜き、刀身に雷撃が触れた瞬間、澄んだ金属音を立てて、雷撃が霧散する。

「あ、危ねえ……一体何が……」

「っ！彼処です!!?」

急停止して辻が危機一髪だった状況に冷や汗を拭っていると、刹那が少し離れた場所の空を指差し叫ぶ。

そこには、異形の獣が浮かんでいた。その獣の姿顔は猿に似ており、胴は茶褐色の毛むくじやら、四肢は黄色地に黒の縞模様が入り、尻尾はとぐろを巻く大蛇であった。

「なんだあれ!!?ゲームに出てくる合成獣か!!?」

「……馬鹿な……」

驚愕の叫びを上げる辻に対し、刹那は信じられないものを見た、と言う様子で僅かに体を震わし、目を見開く。

「……あれは、鶴ぬえです!!?」

「……端的に驚異の度合いだけ聞きたい！ヤバい奴か!!?」

悠長に説明を聞いている暇は無いと判断し要点を尋ねる辻に、刹那は顔を歪め、答える。

「……一流の腕を持つ神鳴流剣士と陰陽師が、小規模とは言え部隊を組んで挑まねばならない妖です!!?」

「……冗談じゃないぞ、こんな時にそんな中ボス相手にしている時間は……というかなんでそんな怪物が今更現れる!!?出てくるならさつき出てくるべきだろうが!!?」

「……恐らくですが……」

あまりにも理不尽な状況に辻が、天を呪うと、刹那は苦渋の表情で辻に答える。

「天ヶ崎 千草に新たな戦力を呼び出すだけの余力は残っていないかつたでしょう。今現在も、両面宿儺の封印を解くために儀式を行っているはずですから尚更です」

「じゃあ何でだ、あの学ランの少年が召喚したのか!?!」

「いえ、お嬢様の力を使ったのでしよう」

刹那は種を明かす。

「お嬢様の魔力は莫大なものです。神格を持つとされている大鬼を顕現させてなお余る程に……その余剰魔力で大妖の一匹や二匹、呼び出すのは容易いことです!」

「グアア厄介な、どうするそもそも俺とお前で倒せる保障が……!?!」  
言葉の途中で、祭壇から伸びる光の柱の光量が増し、祀られている大岩から巨大なもう一本の光の柱が宙へと伸びる。

「ヤバい大詰めかあつちは!?!」

「早くお嬢様を……!?!」

刹那があせりと共に口にした瞬間、茫洋と浮かんでいただけの鶴が、高速で辻と刹那に向かって突っ込み始める。

『ヒョヨヨヨウツ!!?!!!?!』

鶴のような鳴き声と共に、鶴の全身が帯電し、再び凄まじい威力の雷撃が繰り出された。

『主、落ち着いて線とやらを断て』

「言われなくてもおとおつ!!?!」

フツノミタマの落ち着いた声での助言に、悲鳴のような声で答え、辻は飛来する雷撃の中心にフツノミタマを振り下ろす。

キーン!!?!と澄んだ音を立て、雷撃が霧散するが、その直ぐ後ろから鶴が高速で体当たりを仕掛けて来た。

「くっ!?!?!」

刹那が羽ばたいて上昇し、辛くも突撃を躲す。

『主、向こうが突っ込んでくるなら寧ろこちらの好機だ、一刀の元に斬り捨ててやれ。半妖の小娘にもそう伝えろ』

「難しいことをサラツと言ふな!!? かなりの速度だぞあの化け物、それから桜咲は気にしてるんだから半妖の何ちやらとか言ふなよお前は!!?。」

『言っている場合か、それに事実だろう。私としてはいくら主が惚れていようとそんな小娘のことなどどうでもいい。…まあ主の言葉なら従うがな』

「くっそ遂に刀にまで言われるか!!? 惚れて無いよ桜咲は後輩だ後輩!!?。」

「辻部長、さつきから誰と話しているんですか!!?。」

祭壇に近づきつつもこちらを追って散発的に小規模な雷撃を放ってくる鶴の攻撃を躲しながら刹那が挙動不審な辻に尋ねる。

「言つて無かったかあ!!? なんか意志を持つてて思考を伝えてくるんだこのアーティファクト!!?。」

「はあ!!?。」

『そんなことはどうでもいい、主、鶴は雷撃の他に人を病魔で侵す害毒を放つ。次に接近した際に放ってくるかもしれない、注意しろ』

驚愕の声を上げる刹那に構わず、フツノミタマはマイペースに辻に注意を促す。

「どうでもよくないだろお前の話だよ!!? ああ桜咲!!? なんか色々ややこしいから全部終わってから説明する! まずはおの気味悪い化物ぶっ殺して近衛ちゃん助けに行くぞ!!?。」

「っ、はい!!?。」

刹那は急旋回して、辻はフツノミタマを構え、鶴に真っ向から相対する。

『ヒョヨヨウ!!?。』

「来いよ猿虎!!?。」

「裂空掌あ!!?。」

「ちっ……!。」

魔法を放つ寸前に中村の気弾が青年に迫り、舌打ちと共に魔法を放つのを中断して青年は障壁でそれを防ぐ。

…マズイな、この状況は…

青年は苦々しい思いで、高速で周囲を移動する四人を睨み据える。

青年からすれば中村達は格下だというのはわかっていたが、同時に状況的に決して余裕はない以上、舐めてかかったつもりは無かった。

まず一つ目に、白髪の少年が片手片足であり、前衛としての戦力が今回に限り失われていることが少年と青年にとって痛かった。青年はさる事情から近接戦闘が得意ではなく、この場合は少年が基本的に前衛として動き、青年は後方から大火力を連発するのが、必要に迫られた時の基本方針であった。それが不可能である以上、二人共に流動的に動き回りながら魔法で敵を仕留めなければならぬ。

二つ目に中村達が非常にわきまえた動きをするのが少年と青年にとって問題だった。血気盛んに向かって来た割には、中村達は決して無理をしようとせず一塊にならないよう常に動き回り、石化魔法を使う少年の動作に常に気を配って、少年が魔法を放つ素振りを見せれば全力で避難して石化の雲や光線から逃れ、そのくせ青年や少年が転移魔法で千草の元へ向かおうとすれば、こちらの攻撃も意に介さず被弾覚悟で突っ込んできての全力攻撃で何が何でも離脱を阻止する。

青年と少年にダメージは殆ど無い。中村達が総出で攻撃してようやく障壁が突破出来るレベルである以上、絶対的に青年達は優勢だ。しかし…

…まんまと時間を稼がれてるってことだ、これは!!?

フルグラティオー・ニグランズ  
「黒き雷!!?’」

苛立ち紛れに青年の放った黒雷は、瞬動で横っ飛びに逃れた中村を掠めて虚しく木々を打ち砕く。

「……フエイト!!?’」

青年の呼びかけに少年は頷き、青年と少年は同時に飛び上がる。

「ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト・来たれ風精 砂の精…」

「ヴェロス・オニムス・ザムウエルス・来たれ火の精 風の精…」

「クソがあのかス共上空に逃れやがった!!?」

「吸血鬼のババアと言ひ発想が同じだな魔法使いつてのは!!?」

「言ってる場合じゃないよ散開ー!!?」

「何が来るかは判別がつかん、距離を開けることにだけ集中するな!!?」

中村達は反撃の手段を失った瞬間、東西南北に全速力で別れて避難する。

ニグルムス テンベスタース クリユスタルス

「結晶の砂嵐!!?」

デーウォーレス エレメントウムスアグレッションオー

「侵略略の猛火!!?」

直後、透明にして微細な超硬度の結晶を内に含んだ全てを削り壊す砂嵐と打ち広がる暴風に乗って全てを焼き尽くす猛火が、挟み込むように眼下の森を呑み込んだ。

「うおおおつ!!?」

不自然な程の速さで迫ってくるドス黒い雲に辻は悲鳴を上げながらもフツノミタマを振るい、粉々に散らす。

「このままでは罅が明きません!!?」

次々に放たれる雷撃を避けながら刹那が怒鳴る。

『下手をすれば小規模の土地神に値する大妖だ。妖術を乱発した所でバテはすまい。かと言って神鳴流とやらの小娘の退魔の技でも余程デカイのを喰らわせねば効果は無い以上、やはり生主と私で仕留める他無いな』

「それを一番警戒されてるからこの有様なんだろうが!!?あのケダモノ右足斬り落とされてから全然こつちを近寄せようとしなないぞ!!?」

『うむ、あれで仕留められなかったのは痛かったな』

「他人事のようにいいいいつ!!?」

「こちらにもわかるように会話をしてください辻部長!!?」

「んなこと言われても…だあああつ!!?」

直径5mを超える巨大な雷球を辻は断ち割り、消滅させる。

「そもそも手数が足りない!!? くそんなことなら山ちゃんから虚空瞬動をもつと熱心に習っておくんだつた!!?」

『後悔先に立たず、だな。兎に角なんとかか……ん?』

フツノミタマが言葉の途中で疑問符を上げる。

「どうした?」

『あれを見る、主』

「あれって何を……!」

「どうしました、辻部長?」

目を見開く辻に、鵜の攻撃を凌ぎながら、刹那が尋ねる。辻はその質問に直接は答えず、しばし考えた後刹那に提案する。

「……博打に近いが桜咲。時間が無い、一つ賭けに出よう」

鵜は宙を泳ぐように身をくねらせて飛行しながら、再度雷撃を放つ準備に入る。すると、辻と刹那が遠ざかるような飛行を止め、鵜に向かつて一直線に突っ込んできた。

鵜はその無謀な特攻をせせら笑い、自分に打てる最大限の雷撃を放つ用意に入る。鵜からすれば、敵対している辻達は雷撃や毒雲を消し去り、尚且つ生半可な刃など通さない自分の体を、あっさりとは断ち切ってくれる油断ならない相手だが、刀を振って迎撃している以上、複数箇所からの同時の攻撃には対応が出来ないことをすでに見抜いていた。故に鵜は、雷撃を一本に纏めるのではなく、中規模の威力の雷撃を放射状に撃ち放つ為に神経を集中し、雷撃を放とうとする。集中が終わり、雷撃を撃ち放とうとした、その時。

「雷ヨウイス テンペスターズ フルグリエンスの暴風!!?」

膨大な雷を纏った烈風が鵜の横合いから現れ、鵜の全身を飲み込む。

『ヒ、ギャヤヤヤヤヤアツ!??』

己が放つものとは違う雷の嵐に身を灼かれ、鵜が絶叫を上げる。そこに、前方から突っ込んでくる影があった。

『ヒヒ……ヒョヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨウ!!?!!?』

鵜は大きなダメージを受けながらも、追撃を仕掛けてくる存在を忘れてはいなかった。己が内に溜め込まれた雷撃を、十数状の雷に





辻の背中を切り裂いたのは、鋭く尖った獣の鉤爪。

「…さつきから凡そ男らしゆう無いやり方で堪忍なあ、刀の兄ちゃん」

でもな、とその長髪を風に靡かせ、体の所々に獣毛を生やした

少年―犬上 小太郎は呟く。

「…絶対に姉ちゃんのとこまで、行かせる訳にはいかんのや」

## 23話 死闘の続行 驚異の顕現

辻の背中が獣化した小太郎に引き裂かれ、空に大量の紅い花が咲いた。

刹那は、その光景を見た瞬間、頭の中から全てが吹き飛び、次の瞬間焼けるような怒りが脳内を支配した。

「っ、貴っ様あああああああああつ!!?!!?」

「せ、刹那さん!!?」

背後のネギの言葉も耳に入らず、刹那は夕風を振りかぶり、小太郎に向かって突撃する。

だが、小太郎はそんな刹那をちらと見やると、体から力が抜け落ちようとする辻の首根っこをひっ掴み、自らの体前に引き上げ、逆の手の鉤爪を辻の首元に突きつけて刹那に大声で告げる。

「…それ以上近づくな、この兄ちゃんの首、掻っ捌かせて貰うで!!?」

「っ!!?……貴様……!」

止む無く急停止しながら、刹那は小太郎を睨みつける。

「直ぐに死んでまうような傷はつけとらん。千草姉ちゃんの儀式が終わったら、この兄ちゃんはそっちに返すわ。その後お嬢様も無事に帰す。俺は嘘は吐かん、大人しゅうしとってくれ!!?」

小太郎の、威圧的だが何処か懇願するような響きを含む言葉に、当然刹那は応じようとはしなかった。しかし、辻を人質に取られている現状下手に動くこともできず、自らの不甲斐なさから刹那は歯を食いしぼる。後方から追いついてきたネギも状況を見て取って、手を拱いている。

「…そんな都合の良い話を、こつちが飲むとでも思ったか……?」

荒い息を吐きながら、告げてくる辻に小太郎は顔を顰め、言い放つ。「喋んなや、兄ちゃん。肋骨引き折って肺を引っ掛けた感触がしたんや。無茶しとるとホンマに死ぬで」

やり取りを聞きながら刹那は己を恥じる。

「……どこまで未熟なのだ、私は……!!?」

打つことの出来る手が何も無い現状に刹那が俯きかけた、その時。辻の強い視線が下がりかけた刹那の眼を捉え、反射的に辻の眼を見返す刹那に、辻は言葉よりも雄弁に眼で告げた。

…行け。

自分は構わず先に行けと目線で語る辻に、刹那は反射的に抗議の声を上げようとしたが、辻は次の瞬間にはもう行動に移っていた。

辻は手捌きでフツノミタマを逆手に持ち替え、小太郎が反応する前に足元の黒い渦のようなものの片割れを一息に突き刺す。

澄んだ音が響き、二つの渦の一つが弾けると同時に空中に静止していた小太郎の体がガクリと沈む。

「うおっ!?」

唐突に支えを失い、体勢を崩す小太郎に辻は振り向き様に肘鉄を叩き込み、右手を振り上げもう片方の黒い渦を霧散させる。

「がっ!?」

よろけると同時に支えを完全に失い、落下する小太郎の首をひっ掴み、共に落ちながら辻は頭上の刹那とネギを見上げ、叫ぶ。

「直ぐに片付けて追いつく!!? 近衛ちゃんを救いに行け!!?」

「辻さん!!?」

「辻部長…!!?」

辻の言葉を受けて、それでもなお前に出ようとする二人に、辻は怒鳴る。

「お前は何をしに来たんだよ、ネギイ!!? お前にとって近衛ちゃんは何だ、刹那あ!!?」

その剣幕よりも、伝えられた言葉の内容に、二人は動きを止める。  
「……行けよ!!?!!?」

辻は最後にそう叫び、引き剥がそうとする小太郎と揉み合いながら小さくなっていき、森の中に落下した。

「っ!!?」

反射的に飛び出そうとするネギを、刹那が手で制した。ハツとしてネギが刹那を見上げると、刹那は血が出るほどに強く唇を噛み締め、苦渋の表情を浮かべていた。

「…行きましょう、ネギ先生」

「…でも、」

「大丈夫です」

刹那はネギの言葉を遮り、強張った口角を無理に上げて、笑顔を作る。

「あの人は最強じゃありません。負けることだってありますし、ちよつと情けない所だつてあるでしょう」

でも、と刹那は続ける。

「いざという時にあの人ほど頼れる人を、私は知りません。辻部長は約束を破らない人です」

ネギはその言葉にハツと目を見開き、ややあつてこつくりと頷いた。

「行きましょう!!?」

「はい!!?」

ネギと刹那は、救出に向かう。祭壇で待つ木乃香の元へ。

「糞つたれが、洒落になんねえもん撃ち込んできやがつて。丸焼きになるかと思つたぞ」

「ちよつと、ホントに大丈夫先輩? 真つ赤になつてるわよ、背中!」

豪徳寺と明日菜は焼け爛れ、一部がまだ盛大に燃え盛っている森の中をそろそろと進んでいた。

砂嵐と火炎の嵐がバカレンジャーを挟み込む様に撃ち込まれた時に、中村達は四方に散つて直撃を躲した。その際に、隠れている明日菜に一番距離の近かつた豪徳寺が明日菜を連れて逃げた。その行動の分逃げるのが遅れ、真面に炎に飲まれそうになった所を、明日菜を懐に抱えて地面に伏せ、襲い掛かる火炎の波に対して全力の気弾で火炎を散らすことにより焼死を回避したのだった。

「エヴァンジェリンの奴と戦りやった時に比べりや、まだまだ余裕だ。俺はあいつらの中でも随一タフだからな。それより本当にお前は怪我してねえんだな神楽坂?」

「私は大丈夫よ。服はちよつと焦げちゃったけど、何故か体は傷一つ

無いわ」

明日菜の言葉通り、上着とスカートの裾が少々焦げてはいるが、体には傷一つ無い。

「…理由はわからねえが、怪我が無いならよしとしとくか」

「もしかしたらアーティファクトのお陰かもね」

そんなやりとりを交わしつつ、二人は静かに森を移動する。

「…先輩、連中は、」

「俺達の死体も確認せずに、行っちゃまう程間抜けな奴らじゃないだろう。だからこそせめて先に見つけて、先制攻撃を叩き込みてえ所なんだが……」

その時、進行方向の右から数十m程離れた地点で、爆発音が轟く。

「……あつちか!!?」

ドリユベトラス  
「石の槍!」

「ツイて無いな、ホント!!?」

大地から湧き上がる石柱の群れを空中に飛び上がって躲しつつ、山下は悪態を吐く。

砂嵐の側に逃げた山下は右手と右足の一部をグラインダーに当てられたかのように削られつつも、大きな負傷は無く砂嵐をやり過ごせたのだが、移動して、仲間と合流を図ろうとした途端に、空から少年と青年が降ってきて現在の有様である。

「…しつこいな、お前らも」

「そっくり返すよ、誘拐犯兼テロリスト!!?」

数十条の闇の矢を撃ち出しつつ青年がウンザリした様に言い、虚空瞬動で更に空中を飛び回って躲しつつ山下が怒鳴り返す。

「ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト・小さき王八つ足の蜥蜴邪眼の主よ……」

黒衣の青年の絶え間無い波状攻撃を何とか躲している山下を尻目に、白髪の少年は離れた位置から淡々と詠唱をし始める。

…あ、ヤバイ………!

山下は、少年の詠唱を聞いて危機感を覚える。山下にラテン語はわからないが、初めに辻を足止めにして逃げる前に少年が使用した、灰

色の雲を生み出した時と同じものだと、音の響きから何となく理解したからだ。

一対一なら何とか躲し様もあるが、黒衣の青年は、前衛代わりに足止めを行うつもりらしく、先ほどから威力が低い代わりに出の早い小規模の魔法ばかりを連発して山下の動きを制限している。無理に石化の雲から逃れようとするれば、代わりに青年の魔法が山下に突き刺さるだろう。

「くうっ!!?」

山下は虚空瞬動で上方に飛び上がり、強引に二人から距離を離そうとする。

「ヴェロス・オニムス・ザムウエルス・温もりと慈悲無き純潔の乙女よ内なる棘にて淫蕩者に報いを」

だが、青年の詠唱により、山下の周囲を取り囲む様に一本一本が大人の腕程もある巨大な漆黒の棘が現れる。

「はあ!??」

驚くと同時に逃げ場を無くし、空中で一瞬動きの止まる山下に、青年は容赦無く魔法を発動させる。

「ウイルギニタース カリュプス鉄の処女」

上下左右前後の棘の檻が、内側の山下に向かい一斉に収束する。

「おおおおおおおっ!!?」

山下は天地を逆になりながら宙を蹴り、一方向の棘の群に全力で突っ込んだ。

「つゝゝゝゝゝ!!?!!?」

直後、身体各所が引き裂け、棘の一発を左肩に貫通させながら山下は地面に降り立ち、全身に走る苦痛に、声にならない呻き声を上げる。

そんな山下を冷めた目で見やりながら、青年は冷たく告げる。

「正解だ。これは単純に障壁で防ぐか、棘と棘の間隔が広い出始めに喰らいながらも強引に抜けるしか無い。…素人が咄嗟によく判断したよ」



…僕の流儀は受けるんじや無い……………！

「っ流、すんだろうがああああつ！！？！！？」

山下は咆哮し、掌の破壊的な力を受け流すべく、沈めた身体を四半回転。まるで掌底を打ち出す様に半身で右腕を突き入れると同時に掌を傾け、右後方に石化の光球を、受け流した。光球は木々の一本に着弾し、たちまちの内に石へと変える。

「…へっ……………大したこと、無いね……………」

山下は嘯き、力尽きた様に地面に蹲る。

「……………！！？！！？」

少年と青年は目を見開き、驚愕をその瞳に宿して山下を見る。

山下が行ったのは、高密度の気を盾にして魔法を一時的に遮断し、魔法そのものの推進力を逆手にとつて軌道を変え、後ろに流した。言葉にすればそれだけだ。

しかし、言うまでもなく口にするほど簡単な行為ではない。気を収束させて魔法受け止めたとしても、その収束させた気を同等の密度を保ったまま維持するのは困難なことであるし、尚且つ受け止めた魔法を拡散させ、余波を喰らわないように山下は収束させた気を操り、手のひらに球状にして留めていた。気を極集中させながらそれを自在に操る、そんな事は気を用いるトップクラスの前衛でも早々は成し得ないことである。

それを魔法も碌に知らない半素人が行い、あまつさえ魔法を術も何も用いず受け流す。奇跡のような山下の所業に、少年と青年は僅かな間我を失った。

そんな戦闘中に見せるにはあまりにも大きな隙を、彼らが見逃す筈はなかった。

「極きわめわとこ漢魂あつ！！？」

「哈ハアアアアアツ！！？！！？」

豪徳寺の放った巨大な気弾が大爆発を起こして青年を、大豪院の鉄山靠が少年を、それぞれ凄まじい勢いで弾き飛ばす。

「ぐっ……………」



「な、に??？」

苦鳴を上げながら宙を舞う二人に、それぞれ影が走り寄る。

「ぶっ飛べやあああああつ!!??」

「死ぬかと思っただでしょうがこのガキいいいい!!??」

黒衣の青年に中村が、白髪少年に明日菜が、それぞれ全力の正拳とハリセンを叩き込んだ。

中村の正拳は回転して飛んでくる青年の背中側に襲い掛かるが、直前で障壁に受け止められる。障壁は軋みながらもその破壊的な威力を受け止め、持ち堪えた。

だが、中村はニヤリと笑い、叩き込んだ左手とは逆の右手で抜き手を作り、後方に引き絞りながら青年に告げる。

「豪徳寺の馬鹿みてえな威力の気弾喰らった状態から俺の全力の正拳受け止める亀みてえな硬さは褒めてやるよ」

でもな、と中村は嗤って続ける。

「何でか知らねえが、脆いぜ!!??」

中村が突き出すのは気を極集中させた無類の貫通力を誇る彼の必殺、千重穿ち。

だが、先の戦闘でこれを用いた中村の攻撃は、青年の障壁を貫けず既に弾き返されていた。いくら吹き飛ばされた直後とはいえ、青年を殺傷出来る威力が通るとは思えない。

しかし。

中村が打ち込んだ輝く抜き手は、青年の障壁をあっさりどぶち抜き、青年の水月を背中から腹側に突き通した。

「ゴッ、ハッ!!??!!??」

苦鳴を上げる青年に構わず、中村は串刺しにした体を腕ごと引き寄せ、再度左の拳に気を集める。

「…一昨日の借りは万倍返した、クソ野郎」

中村は抜き手を引き抜き様、かつては防がれたもう一つの必殺を打ち放つ。

「破碎正拳、千重砕きいい!!??!!??」

人体など簡単に貫く拳が、更に当たった瞬間、凄まじい勢いで、

莫大な量の気を零距离で弾けさせたらどうなるか。

答えは単純明確。

青年の体が打ち込まれた腹を中心に砕け散り、上半身と下半身が別れ別れになって吹き飛んだ。

森の茂みの中に突っ込み、それから動く気配のない青年の残骸を見ながら、中村は静かに呟いた。

「…悪いが、手加減する余裕は無かったんだわ」

中村が戦闘で見抜いた、障壁の脆い箇所、それは辻が青年の背中を斬りつけた際に断ち斬った障壁の位置と同じであった。

無論、青年は斬られてから幾度も障壁を張り直している。辻が断った障壁が中村の破ったそれと同一である筈が無い。

しかし青年の断たれた背中への傷は修復していない。少年が断たれた片手片足も接合しない。

フツノミタマが断つとはそういうことだ。

断たれたものは、余程の例外を除いて、繋がらない。何故ならば断たれたのだから。

青年の障壁は断たれた為、新しいものを張り直してなお、断たれた箇所は十分な強度を持ち得なかった。

概念的な事象までをも断つ。それがフツノミタマである。

さて置き、白髪の少年の末路を語るのに多くの言葉は必要無い。

明日菜が叫びと共に、全力で振り切ったハマノツルギは、明日菜自身が拍子抜けするほどにあっさり少年の障壁を粉々に打ち破り、ズツパアアアアン!!?!!?と只管痛そうな破裂音と共に少年の顔を捉えて、元来た方向にきりもみ回転させながら少年を打ち返した。

「……………あれ?」

自分で思っていた以上に凄まじい一撃となり、明日菜はホームランバッターのようにハマノツルギを振り切って姿勢のまま、やや間抜けな声を上げる。

「上出来だ神楽坂後輩…!!?」

大豪院は、明日菜と同じく一瞬あつげに取られながらも次の瞬間には我に返り、再度こちらに帰ってくる少年に向かい全力で駆け出した。

「イ呀アアアアツ!!？」

カウンターの形となった沖捶が少年の胴体にめり込み、その造形を歪ませる。

大豪院の攻撃は終わらない。更に踏み込んだの裡門頂肘。やや下から突き上げる形になり、宙に浮く少年。

震脚による地響きと共に、止めとして打ち込まれた貼山靠が少年をズタズタに打ち壊し、森の彼方まで吹き飛ばした。

「…一呼吸に三撃は久しいな」

相手を殺してしまうのだから当然かと、大豪院は笑った。

「…はは。何とかやったねえ」

山下が疲労困憊といった体でフラフラと立ちあがりながら、それでも笑みを浮かべて呼びかける。

「応よ山ちゃん!と喜び合って肩でも叩き合いてえ所だが、生憎そんな暇は無え」

中村が山下に応じるが、顔は厳しいままである。

「…だな。正直大分しんどいが、辻達の加勢に行こうぜ」

「今から行って間に合うかは解らんが、盡人事待天命 盡人事而待天命、だ。行くぞ」

豪徳寺と大豪院も早速次の行動に移る旨を全体に告げる。

「…だね、行こうか」

山下も頷き、足を踏み出す。

「無理すんな山ちゃん。あんな離れ業やって見せたんだ、もう碌に動け無えだろ?」

中村がやや覚束ない足取りで歩を進める山下の様子を見て告げる。

「ここが無理のし所だよ。エヴァさんと戦り合った時に比べれば、何てこと無いさ。心配いらない、行こう」

「…ま、正念場だしな」

「今更過ぎる言葉だが、あまり無理はするな、山下」

バカレンジャーは声を掛け合い、移動しようとするが、明日菜が立ち尽くしたまま動かないのを見咎め、豪徳寺が声を掛ける。

「どうした、神楽坂。どこか痛めたか？」

明日菜はその言葉にやや力なく首を振り、恐る恐るといった様子で、中村達に問いを放つ。

「…ねえ、先輩達。…さっきの二人……殺しちゃった、の？」

その言葉に中村達は目を見開き、一瞬後に明日菜の葛藤を理解する。

…そうか、馬鹿だな俺。

…この子を一般人だと言ってたのは、何処のどいつだよ……。

中村は、己の配慮の無さを恥じる。言ってしまうえば、明日菜は人殺しに加担したようなものだ。いくら相手が自分の親友を攫った憎き誘拐犯で、自分達を殺そうとしてきた相手だろうと、平常心でいられるわけが無い。

…駄目だ駄目だ。こんなだから女の子にモテ無えんじやねーか、俺は。

こういうところは辻を見習えよ、俺。と中村は己を叱咤し、明日菜にゆっくりと告げる。

「明日ニヤン、お前さんはムカつくガキに仕返しの一発入れたただけだ。やったのは俺らで、お前さんは悪くない」

中村の言葉に明日菜は顔を上げ、抗議するように言い放つ。

「…そんな都合の良い言い訳、通る筈無いじゃない……」

「そうかもしれない」

大豪院が言葉を続ける。

「状況が加減を許さなかった。お前を戦力に数えて、無理をさせてしまったのは俺たちが未熟な所為だ。申し訳ないと思うが、その上で言おう」

大豪院は明日菜の目を正面から見て言った。

「…お前がいてくれて助かった」

「っ！……………」

明日菜がその言葉に目を見開き、やがて何処か悲しげながらも、どうにか口端に笑みを作り領く。

「…ゴメン、こんな時に。自分でついてくるって言った癖に、情けないわよね」

「そんな事は全く無いよ、神楽坂ちゃん」

山下は優しく、自嘲する明日菜の言葉を否定する。

「僕らだって、見た目ほど内心で割り切れちゃいない。でも必要な事だからやり切っただけなんだ。こんな訳のわからない状況で、自分を制してそんなことが言える明日菜ちゃんは僕らなんかよりよっぽど立派だよ」

豪徳寺が領き、明日菜を促す。

「後で辛くなったり、納得がいかなきゃいくらでも俺らに当たれ。酷な言い方だが今は飲み込んで、近衛の奴を助けに行こうぜ、神楽坂」  
明日菜はその言葉に、ややあつてから領き、バカレンジャーに続いて走り出す。

「よし、こんな訳わかんない状況に巻き込んでくれたんだから、全部終わったら関西呪術協会だか何だか知らないけど、何かしらでパーっとお返ししてもらいましょ！先輩達、木乃香と一緒に皆ではっちゃけるわよ!!?」

多分に空元気を含めているだろうが、それでもこの状況で気持ちを切り替えて見せた明日菜の芯の強さに、全員が目を細め、賞賛の意を心中で送る。

「っしやあ急ぐぜ!!?首を洗って待ってやがれ、眼鏡女……………!!?」

先頭の中村が走りながら拳を突き上げて戦意を言葉にするが、その勢いは途中で途切れ、尻切れ蜻蛉に語尾が消える。

中村だけではなく、勢い込んで走っていた全員が驚愕のあまり声を無くして、遙か前方の光景を見やる。

一際強く光り輝く、開けたその場所には、二面四臂の異形の巨人が堂々とその姿を現していた。

## 24話 化け物との相対 少年少女 覚悟の闘争

時間は少し遡り、両面宿儺が復活してしまう直前の事。刹那とネギは祭壇の手前まで辿り着き、天ヶ崎 千草と対峙していた。

「…まあ、ようもここまで来れたもんやわ、自分ら。魔法使い連中だけでも充分な所を、コタに警戒させてダメ押しに土地神級の化け物無理して呼んだったゆうんに二人も抜けてくるんやからなあ。よう頑張った、褒めたるでガキ共」

呆れながらも小馬鹿にしたような態度で二人に千草は告げる。

「…っ!!?」

追い詰められたと言っても良い状況にも関わらず、不遜な態度の変わらない千草の様子に、ネギが怒りを覚えて詰め寄りかけるが、刹那がそれを手で制して底冷えした口調で言い放つ。

「安い挑発に乗る気は無い。何かしら狙っているのかもしれないが今更無駄だ、気配を探れば判る。貴様立っているのもやっどだろう? 言っておくが傍らの縫いぐるみ擬きでは時間稼ぎにもならんぞ。無駄な抵抗は止めて大人しくお嬢様を解放しろ…お嬢様を攫って利用しただけで貴様は万死に値するが、大恩ある先輩までも傷付いた……この後に及んで斬り捨てるのを躊躇うなどと甘い事を考えるなよ……!」

気迫と殺気の籠った鬼気迫る様子の刹那を前に、しかし千草は動じない。

「…お嬢様を返せ、なあ………」

千草はせせら笑いながら一歩、二歩と下がって祭壇の上に寝ている木乃香から遠ざかり、

「わかったわ。さっさとお嬢様を連れて行きい」

あっさりと木乃香を解放する旨を告げてきた。

「え………」

「…なに……」

最後通牒のつもりで告げた解放要求に、まさかのYesを返されて刹那とネギは驚愕する。そんな二人を見て千草は笑い、尚も言葉を投げかける。

「どないした？お嬢様を解放する言うてるんや、さつさと連れ帰って介抱したりい」

「……何が狙いだ」

そんな千草の言葉に、猜疑心も露わに刹那が低い声で問う。

「狙いつて、何の話や？」

「惚けるな!!？貴様の目的は両面宿儺の封印を解き、お嬢様の力で意のままにそれを操ることだろう!!？それを宿儺が復活してすらいないというのにむざむざお嬢様を解放するだ?!？何か裏があつて当然だろうが!!？」

鋭い刹那の怒喝に、千草は得心のいった顔になり、何でもないことのように言葉を発した。

「ああ…そういうことかいな。安心しい、お嬢様を解放することに裏も何もありやあせんわ。お嬢様には大役をこなして頂いて、お役御免になったからお帰り頂く。それだけや」

「……なに……?？」

「……どういう意味か教えて頂けますか、天ヶ崎 千草さん」

予想外の連続に困惑する刹那に代わって、ネギが自身の戸惑いと動揺を押し殺し、問いを放つ。

「説明する義理は無いんやけど…まあ、ええやろ。ウチがお嬢様を解放するのはさつきも言った通り、お嬢様はもうウチの計画にとつて必要無い存在やからや。…その理由を聞きたいんやろ?まあ、焦るなやめんこい魔法使いの坊。そもそもその神鳴流の護衛が言ったウチの目的は半分しか合つとらんのや」

「…半分、だと……?？」

鸚鵡返しに問い掛ける刹那に千草は頷く。

「そうや。お嬢様に協力して頂いて両面宿儺の解放を行う。ここまでは合つとる。でも、お嬢様の力を利用して宿儺を操る、は見当違いもいいとこやな…そもそも考えてみいや、両面宿儺は日本書紀にも記されとる飛騨の悪鬼にして大鬼神。善悪については諸説あれど正真正銘の鬼『神』や。…そんな存在を、幾ら極東有数の素養を持つとされる木乃香お嬢様の力でも、ただ一人の力で縛り付けておけると思う

かいな？下手こいたら自分がこの世から消し飛ぶかもしれん場当たり的な真似、ウチがするとでも思とるんかい？」

「…なら」

ネギはとうとうと語る千草に口を挟む。

「なら貴女はどうしようというんですか？最初から無理な計画を、意地で遂行していたとでも言うんですか？」

「ちやうわ。察しの悪い奴らやなあ、自分ら。……ウチが何の為にいい好かんあの連中と手組んだと思とるんや？呼び出して餌代払えんなら、欲しがる連中に出して貰えばええだけの話やろ？」

「…何だと？」

刹那が思わず声を上げるが、千草は構わず語り続ける。

「要するにや、お嬢様はあくまで鍵。扉を開けて鬼神を連れ出せたら、最早用済みつちゆうことや。後はこつちでどうとでも出来る用意があるから、お嬢様はお返しする言うとるんや。自分らお嬢様を取り戻しに来たんやろ？よかったやないか、目的達成や。お嬢様連れてさつさと帰りたい。ここは今から大荒れに荒れるさかいなあ、見逃してやるさかいとつと逃げた方が身のためやで？」

千草の言葉に刹那が暫しの沈黙の後、夕凧を構え千草に宣告する。

「…今から大災害を起こすと宣言する相手を、むざむざ私達が見逃すとも思つか？無論お嬢様は返して貰うが、貴様もここで捕らえさせて貰う」

臨戦態勢の刹那に、ネギも杖を構えて千草に向き直るが、千草はそんな二人の様子に失笑し、やれやれと首を振りつつ告げる。

「何処まで鈍いんや、自分ら。ぶつ倒されると解つてて人質返す馬鹿がいるかい。既に儀式は終わつとるに決まつとるやろ」

言葉の終わらぬ内に祭壇の向こうの大岩が輝き始める。

「なつ!?？」

「貴様…!!??」

「だから言ったやろ」

千草は嗤い、その背後から見上げる程の二つの顔と四つの腕を持つ、異形の巨人がゆつくりと姿を現す。



「さっさとお嬢様連れて帰りい、ってなあ」

「……タフやな、兄ちゃん」

「こっちの台詞だ、ガキ」

辻は激痛を訴える背なの傷を無視して目の前の異形の少年に返す。  
辻と小太郎は揉み合いながら森の中に落下し、辻は抵抗する小太郎の鉤爪に身体を切り裂かれるのも構わず、掴んだその手を決して放さなかった。

結果木々をぶち折りながら両者は落ち、辻は地面への激突寸前に小太郎の体を蹴り込んで跳躍し衝突のダメージを減らしたが、対して小太郎は真面に地面に激突し、血を吐き散らしながら地面にクレーターを作った。

遅れて地面に激突しつつも、衝突の瞬間に地面上を転がってダメージを殺した辻は、背中の傷口が広がって吐血しながらも立ち上がり小太郎に近づいたが、辻が接近しきる前に飛び起き、辻に構えて今の状況に至る。

「…死ぬで、兄ちゃん。放つといたら失血死がいいとこや、諦めえや、誰も責めへんわ」

「巫山戯ろ、もつと酷い傷でも俺は鬨り合っていたわ。お前こそダメージは小さく無い筈だぜ？お前みたいなガキが倒れてても誰も責めないよ。大人しく沈んでろ」

小太郎の言葉に、辻がフラつく身体を支えながら言い返す。

「…俺は、負けられん。姉ちゃんの望みや、絶対、こんな所でやられる訳にはいかんのや。兄ちゃんをぶっ倒して、あのチビと護衛の姉ちゃんを追わなあかん。大人しくしてへんなら、潰させて貰うで」

小太郎は牙を剥き、辻に不退転の覚悟を伝える。

「……わからないな。何でお前みたいなガキがこんな事に手を貸している？真つ当なことをやっている訳じゃないって事は、自分で嫌というほどわかっているだろ？そんなにその姉ちゃんとやらが大事か？」

「…当たり前や」

辻の言葉に、小太郎は唸りながら言葉を返す。





み、牙を剥いて辻の右肩に喰らい付く。

最早小太郎の思考は真面に働いていない。朦朧とする意識の中、小太郎は千草を想い、力を振り絞る。

……………姉ちゃん……………

…俺は、……………姉ちゃんと……………

「グウウウウウウツ!!?!!?」

メキメキと異音を上げて牙が肉にめり込んでいく。辻は必死の形相で己が肩に喰らい付く小太郎の顔を見下ろし、苦痛に顔を顰めながらも呟く。

「…見事だよ。お前」

辻の右腕が小太郎の頭を抱え込み、同時に左腕が体をクラツチすると、次の瞬間辻の身体が海老反りになりながら後方へ倒れ込み、全力で小太郎の頭を地面に叩き付けた。

変形のプロントスープレックスを決められ、小太郎の全身から今度こそ力が抜ける。

意識を飛ばしながらも、小太郎は顎の力を緩めようとせず、辻は呻きながら無理矢理顎を腕力でこじ開け、血塗れの肩をようやく引き剥がした。

「…畜生、痛い……………」

辻は服を破いて肩の傷口に巻き付けていく。

『無駄な負傷だ、主よ。私で峰打ちなどをして、情が湧いたか?』

咎めるように、そして何処か詰まらなそうにフツノミタマが問いかける。

「…まあ、な。こういう懸命な子どもは、断ちたく無いんだよ…非常事態だし、甘いこと言ってられないのは解ってるんだけどなあ……………」

『……………ふむ……………』

言葉と共に応急手当を終えて立ち上がる辻を余所に、フツノミタマは何事かを考え、小太郎を一瞥して歩き出した辻に言葉を放つ。

『しかし主。断ちたかったらうう?あの小僧を』

辻は足を止め、右手のフツノミタマを見下ろす。

「……………そうだな……………」

暫しの沈黙の後、苦い声で一言呟いて歩みを再開する。

『ふふふっ……ならばいいさ。行くとしようか、主』

「何がどういいのかさっぱり解らんが、まあいい確かにその通りだ、急ぐと……!?？」

早足から駆け足に移行しようとした辻が思わず足を止め、目を見開いて木々の隙間から空を見上げる。

『…あれは………』

燦々と照りつける太陽よりもなお輝く、両面宿儺の姿があった。

其れは、感情の伺えない表情のままゆっくりと視線を下ろし、ネギと刹那を見やる。

「つゝゝゝゝ!?？」

視線で撫ぜられた。ただそれだけで二人は全身の毛が逆立ち、強制的に理解させられる。

……ああ………

…化け物だ………

と。

奇しくも刹那は思い出す。化け物とは、違うモノだと言う、辻の言葉。  
葉を。

存在感そのものの重<sup>プレッシャー</sup>圧が桁違いに強く、重油のプールに沈められたかのように空気が擬似的な質量を持って纏わり付く。

其れは恐怖であり、畏怖であった。存在そのものの違いを、生物としての格の違いを。ネギと刹那は感じていた。

目の前の両面宿儺<sup>ニ</sup>が、戦慄<sup>おそ</sup>ろしかった。

「……こんなもんやな」

千草は重圧の余波を喰らって青ざめながらも、小さく呟く。

立ち竦む二人に、千草は告げる。

「わかったやろ?勝負を挑むとか、それ以前の問題や。最早お嬢様にも、あんたらにも用は無。もう一度言うで、お嬢様を連れてさっさと逃げえ。地元が形変えてしまうのは悲しいかもしれへんけど、死ぬよりマシやろ?」

「っ!?」

「うっ……うっ!?」

声にならない声を上げる、ネギと刹那。

頭の中の理性的な部分は、大人しく言葉に従って、撤退することを勧めていた。目の前の存在は、勝ち負け以前の、もっと根本的な部分で敵わない化け物だ。これを見て、戦う気になる方がおかしい以上、正常な判断である。

しかし、彼らの善良な、気高い心の部分が、それを認めさせなかった。

ここで逃げれば、木乃香も自分達も助かるかもしれない。しかし、総本山の人間は、千草が恨みを抱く、魔法使い達はどうなるのか。幼いながらにして、他者を思いやる心を持ち育った2人の良心が、踵を返すのをギリギリで押し留めていた。

だが、心が折れずにいたところで、現実は無常である。このままここにいれば、木乃香諸共消し飛ばされる。どう足掻いても、逃げるしか選択肢が無いのは二人共理解できていた。

その時、刹那の頭の中で声が響き渡った。

『…御無事でしたか……辻部長……』

「ああ、何とかな」

辻は昼日中にも鮮やかな、両面宿儺の姿を見ながら念話を飛ばす。向こうの刹那の声は力無く、僅かに震えていた。

……当然か……

遠目に見ただけでもわかる。あれは、正真正銘の化け物だ。平常心でいられる方がどうかしている。

だから辻は、刹那にそう、告げることが出来た。

「桜咲、細かく問答を重ねている暇は無い。単刀直入に言うぞ、俺を召喚しろ」

『……え……』

戸惑う刹那に構わず、辻は言葉を重ねる。

「早くしろ、デカブツの相手は俺がする」

辻の言葉に、暫し沈黙してから力無い刹那の声が流れる。

『…辻部長……無理です。此れは、人が相手を出来るものではありません…』

「解ってる」

辻は決して反則級のアーティファクトを手に入れて増長している訳では無い。見ただけで理解出来ている、あれは化け物だと。

それでも辻は、自分が相手をしなければならぬと確信していた。

……何故なら………

あれが断てると理解わかっているのはきつと自分だけだから。

だから辻は刹那を促す。

「桜咲、今すぐ根拠は示せない。それでも俺を信じてくれ。打つ手が無いんだろう？ どうしようも無いと、諦めかけてたろう？ ……何とかしてやる!!？ 俺がお前に嘘を吐いたことがあるか!!？ …責任取ってやるのが先輩だろうが、ナメんな後輩。いいから黙って言う通りにしろ…」

辻は変わらず、されど以前と少しだけ違う言葉を告げる。

「…部長命令だ」

「…貴方は………」

刹那は何事かを告げようとして、それは言葉にならないまま胸の中で溶けていった。

辻の言葉に刹那が頷く要素は何一つ無い。大戦期の英雄達が終ぞ斃せず、封印することしかできなかった怪物だ。幾ら強力なアーティファクトを持っているようと、魔法戦の経験もまだ碌に無い半素人に何が出来るといえるのか。

しかし、刹那は先程まで諦念と恐怖に縛られていた心が、不思議と静まっていた。辻の嘗てと同じ言葉は、奇妙な迄に刹那を安心させていた。

…何を、考えている……私は………

刹那は嘗て辻に守られた。この修学旅行の中だけでも何度も助けられた。それでも、今の状況はそんな瑣末なトラブルとは訳が違うの

だ。そんな事は、刹那は解っている。

……なのに何故……

……何故貴方の言葉は私を動かすんですか……辻部長……

「……辻部長……」

『……ああ』

返ってくる声は何処迄も落ち着いていて。その響きに押されるように刹那は言葉を口にした。

「……私達に、協力して下さい……助けて、下さい!!?」

刹那の叫びに、返事は一瞬の間を置いて頼もしく響いた。

『……当たり前だ!!?』

「……それで? 何しに来よったんや、あんさんは?」

意識の無い木乃香を抱える刹那と傍らに控えるネギ。その三人を護る様に立つ辻に千草は詰まらなそうに聞いた。

対して辻は何でもなさそうな調子で言葉を放った。

「何、ちよつとそこのデカイのを断ち割ろうかと思ってな」



## 25話 一刀両断

「ぐあああああああ遠い!!? 畜生間に合わねえぞ畜生おおおつ!!?」

「吼えるな馬鹿が!!? 口を動かす暇があつたら足を動かさせ!!?」

「…つていうか何か始まつてるっばいよ!!? ヤバいんじゃないの辻達!!?」

「糞が二重三重に祟りやがるぜあの白黒コンビがあ!!?」

「…なんかゴメンね大豪院先輩」

口々に悪態をつきながら疾走<sup>はし</sup>るバカレンジャー。明日菜は四人の本気の疾走について行けないので大豪院に担がれていた。

「気にするな神楽坂後輩! この程度重量の内に入らん!!?」

「つーか山ちゃんマジで担がなくて大丈夫かあ!!? フラついてんじや無えかよ無理すんな!!?」

「この位無理の内に入らないよ大丈夫!!? それよりも、あれ!!?」

山下の言葉に皆が木々の僅かな隙間からも明瞭に視認できる輝く巨人を見やる。

「なんじやありやあ!!?」

「弓と…矢だよな!!? 何だあのガタイで武器まで使うのかよ巫山戯んな!!?」

「…戦闘姿勢を見せたということは間違い無く誰かが闘り合っているな!!? 神楽坂後輩、ネギと連絡は取れたか!!?」

「…なんか、辻先輩がリョーメンスクナとか言うのと闘おうとしてるっつて!!?」

「んだとう!!?」

明日菜の言葉に騒然となる一同。

「あの馬鹿まーたんな無茶やつてんのか!!?」

「上半身だけで城並みにデカインだぞ!!? 人が相手をするサイズ差じゃ無えだろウ○トラマンでも呼んで来いよ!!?」

「…とうか神楽坂後輩、近衛後輩はどうなったのだ!!?」

「えつと、取り戻すことは取り戻せたらしいわよ!!?」

「はあ!? だったら逃げようぜ幾ら何でもあんな…!?」

豪徳寺の言葉の途中で、両面宿儺が体の割に素早い動きで上腕の弓に矢を番え、斜め下の軌道で矢を打ち込んだ。

刹那世界に、轟音と共に激震が響き渡る。

「うおおおおお!?」

「おわあつ!?」

「キヤアアツ!?」

数km程も離れているというのに、間近に旅客機が墜落してきたような震動を感じ、口々に悲鳴を上げる一同。揺れは一瞬で収まったが、森の彼方此方で異変を感じとった動物達の鳴き声や鳥の羽ばたきが響き渡る、まるで大災害の前触れだ。

「…あんなん放っておいたら、ここら辺一帯が焦土と化すよ!?」

「待て!!? だからつてここら辺を更地にしちまいそうな奴に立ち向かうのか!?? 矛盾が生じてんぞ!!?」

山下の言葉に豪徳寺が反論する。

「…勝ち目が無いとは言いたく無えが、正直あのロリババア以上にヤバいんじゃないのこいつ!??」

中村の言葉に暫しの間沈黙がその場を支配するが、やがて絞り出すように大豪院が言う。

「…辻が闘っているなら、逃げられまい。あれを野放しには出来んと、そういうことだ!!?」

その言葉に、泣き笑いの様な表情を浮かべつつも、バカレンジャーはややあつて頷く。

「…仕方無えよな畜生!!?」

「ロリ吸血鬼の一件からこつち、死にそうになってばかりだなホントに!」

「あのデカブツもまだ戦闘姿勢を解いてない、闘ってるってことだしね辻達が!!?」

大豪院は苦い表情でそれでも無理矢理笑みを浮かべ、自分の背後の神楽坂に言葉を放つ。

「神楽坂後輩、お前はここだ…」

「嫌よ、あたしも行くわ」

言葉を遮り、明日菜がはつきりと宣言する。

「止めとけ阿呆、顔を出したら消し飛ぶかもしれねーんだぞ」

「それは先輩達も同じでしょ!!? てゆうーかあんなのが暴れだしたら何処にいたって対して危険なことになりはしないじゃない!!?」

明日菜の言葉に、唸る一同。

「大体あの女がクラスの皆や町の人に手を出さない保証なんて無いでしょ? 友達や知り合いの人が危ないかもしれないのに、私だけ逃げるなんて御免よ!!? 連れてって、先輩達!!?」

明日菜の決意に、苦虫を噛み潰したような顔になりながら、明日菜をしつかりと大豪院は背負い直す。

「…やむを得ん、掴まってる、神楽坂後輩!!?」

「オツケー!!?」

明日菜が大豪院にしがみ付き、バカレンジャーは加速する。

「待ってるよーちゃん!!?」

中村が氣勢を上げるのを横目に見やりつつ、山下は走りながらふと疑問を浮かべる。

…さっきの激震、一瞬だったからよくわからなかったけど、初期の震動が響いた直後に二つ目が重なってた…ほぼ同時だったから一つの揺れに感じたけど……

だとしたら、まさか。

…矢を斬った、なんて言わないよね、辻……

『何が起こってても対応出来るように充分距離をとって上空で待機してろ』

それがネギと刹那の二人に告げられた辻の指示だった。

当然二人は納得してはいなかったが、両面宿儺が虚空から金色に輝く二振りの達と二対の弓矢を呼び出し、戦闘姿勢に入ったことで反論の機会を無くした。木乃香を抱えたまま黙って攻撃を喰らう訳にはいかないからだ。

両面宿儺が弓に矢を番えるのを見て、ネギは辻を杖に乗せて回避す

る旨を伝えたが、辻は自分で何とかするから早く行け!!?と言い捨て、両面宿儺目掛け駆け出した。思わず後を追おうとしたネギは、刹那に止められ断腸の思いで宙に舞い上がった。

そして、辻目掛けて放たれた巨木のような矢が辻の振るった一刀で二つに断たれ、それぞれが湖に着弾して爆発的に水を巻き上げながら、湖底に突き刺さり激震を起こした。

「ゲホツゲホッ!…ふう、余波だけで死ぬかと思っただぞ……」

『周りが水で寧ろ幸いだったかもしれないぞ、主。土塊や岩であつたら、着弾の衝撃で散弾がこちらに殺到し、意識位は失っていたかも知れん』

飛んできた戦艦主砲が玩具のように思える巨大な矢を断ち割ったはいいが、矢が通り過ぎた衝撃の余波に吹き飛ばされ、湖面が弾けて生じた放水車の放水を喰らったような瀑布を浴びて濡れ鼠になった辻は、億劫そうに立ち上がりながら愚痴を溢し、フツノミタマがそれに応える。

「……そう言われるとそうか。…しかし……」

『何だ?』

「断てたな。凄い刀だ、お前は」

辻の言葉にフツノミタマはくつくつと笑い、言葉を返す。

『無論私で無ければ消し飛んで終わりだろうが、あれを断てると思える主も大したものだ。普通は立ち向かおうとも思えないものだがね』

フツノミタマの言葉に辻は苦笑しながら立ち上がり、両面宿儺に構えを取りながら返す。

「勿論俺だって叶うものなら逃げ出したい。でも、見えるからな」

次弾を弓に番えようとしている両面宿儺を油断無く見やりながら、辻は言葉を続ける。

「奴の持つてる弓も矢も太刀も、奴自身さえも、ちゃんと見える。勝てるとは微塵も思えはしないが、断てるのはわかる。…だったら俺がやらなきゃな。他の皆には、この化け物は勝てない怪物だろうけど、俺にとつては…断てる怪物なんだから」

フツノミタマは、辻の断言を聞いて暫くの間沈黙していたが、やがて大笑いを辻の頭の中に響かせながら、至極楽しそうに辻に対して告げてる。

『ははははははー実に良い!!? 貴方はとても良いなあ主よ!!?!!? それが本当に確信出来ているなら、私が断てぬものは本当にこの世に有りはしない!!? 西洋悪魔で言えば王侯貴族級の一体を迷わず断てるというその狂気! 最高だ、最高だよ主い!!?!!?』

「何にテンション上げてるか知らんが、来るぞ構…えを取るのは俺か」  
『くくくく、安心しろ主よ。一度断った以上、前回よりも楽だぞ弓矢の相手は』

「何? どういう…!??」

聞き返そうとした瞬間に、2発目の矢が辻目掛けて飛んでくる。

「きえええええいつ!!?!!?」

気合の声と共に辻はフツノミタマを一閃、ちよつとした小屋程もありそうな鏝が二つに裂け、そのまま矢の全体が二つに断たれる。

そこまでは初撃と同様であったが、断たれて二つになった矢が霧散し、光の粒子となって霧散した。

「…ん?」

衝撃波や水飛沫に備えていた辻が怪訝そうに声を洩らす。フツノミタマはクスリと笑い、辻に説明する。

『初撃の矢を断った時点であのデカブツの矢は断たれている。新たな矢を用いても概念までをも断ち斬る私が及ぼす結果は無視出来ない。奴が矢を放つ威力に変わりはなからうが、既に断たれている矢を放っていることにより存在に矛盾が生じ、威力が減衰しているのだ。流石に奴ほどの存在が放つ攻撃ともなると、一撃で攻撃そのものを無力化は出来ないようだが、今また矢を断ったことにより、断たれた結果は更に世界へ強く刻みつけられる。このまま奴が馬鹿の一つ覚えのように矢を放っているだけなら、そのうち攻撃そのものに何の威力も無くなることだろうよ』

「…抽象的過ぎてよく実感できんが、つまりお前はどんな攻撃でもお前を用いて切り裂いて防御しているだけで、使えなくなるかもしくは

威力を減衰させていくことが出来るってことか。……薄々感じてはいたが、お前とんでもなく反則級の存在だな。なんで俺の所なんかに来たんだ？」

あまりのフツノミタマのチートっぷりに、顔を引き攣らせながら辻が問う。

『さて、アーティファクトは潜在能力を引き伸ばし、具現化し、発現させられる契約者に送られるらしいのでな。主が私に合っていたというだけの話だろうよ。…人を選ぶセンスは最悪だと思っていたが、初めて当たりを選んでくれたようだな選考を行う精霊共。』

楽し気にフツノミタマが言葉を返す。

一方、両面宿儺は二度に渡る射撃を防がれた事に憤慨してか、総毛立つような咆哮を放ち、上腕と下腕の弓を同時に引き絞って辻に狙いを定める。

「増えたぞおい」

『問題は無い。私と主ならばな』

言葉を交わしながら、一人と一刀は臨戦態勢を取る。

『……行くぞ!!?』

「……あ……………」

「……………つ……………」

「………凄え」

刹那とネギ、カモは目の前の壮絶な攻防を驚愕と共に目にする。

両面宿儺から文字通り矢継ぎ早に放たれるのは超密度のエネルギーで構成された、単純な局所的破壊力ならば極大呪文に匹敵する輝く破壊の矢。

並の魔法使いならば、受ける所か避ける事さえままならない猛撃を、辻は次々と手に持つフツノミタマで断ち斬り、霧散させていく。辻は、初撃の余波で吹き飛んだ以降は一切被害を受けずに、防戦一方ではあるがジリジリと距離を詰めてすらいた。

「……………ここまで凄えアーティファクトだったのかよ、辻の旦那のアレは」

カモが掠れた声で呟く。剣士として腕が立とうと、魔法も使えず最近まで只の高校生だった辻が『神』の名を抱く超越的存在に渡り合え

ているのだから、フツノミタマがこの奇跡のような状況を作り出している要因だとカモが判断するのは当然と言えた。

「…いえ、それだけではありません」

カモの見解を刹那が訂正する。

「確かにあの刀は異常な性能ですが、受け損ねた瞬間に即死するような攻撃をあそこまで完璧に捌いている辻部長も、尋常ではありません」

刹那の言葉に頷きながら、ネギは

……辻部長……

刹那は辻の言葉を思い返す。

任せておくと、何とかしてやると豪語した辻は言葉通りに規格外の化け物と渡り合っている。こうなることを辻が理解していたのかは刹那にわからない。しかし、かつてと同じように辻の背中を見ているしか無い現状に、かつてと異なり刹那は忸怩たる思いを抱える。

…あの時とは、もう違うのに……

今も昔も私は、護られるか弱い小娘では無い筈なのに……

「……刹那さん」

煩悶する刹那に、ネギが声を掛ける。

「…何か僕たちで、辻さんにサポートができないでしょうか？」

ネギの言葉に、刹那は唇を噛み締める。ネギも刹那と同じ気持ちなのだ。刹那は余程、辻の下に行こう、一緒に戦いましょうと言っただけで、まいたかった。

それでも、実際に刹那の口から出たのは制止の言葉であった。

「…あの鬼神に生半可な攻撃は通用しません。ネギ先生の魔法でも、私の神鳴流の決戦級奥義でも。…恐らく奴は然程痛痒を感じないでしょう。それどころか、下手をすればそれで矛先が私達に向いて、なんとか拮抗している現状が一気に崩れてしまうかもしれません。…現状、私達に出来る事はありません」

「でも…じゃあ僕達は何の為にここに居るんですか!?!? 経験の少ない僕にだって解ります! あのままじゃ辻さんは、やられないかもしれないけれど、勝つことなんてできません!!? これじゃあ、みすみす辻さん

を見殺しに……」

「わかつています!!?」

ネギの言葉を遮り、刹那は叫んだ。

「でも、どうしろって言うんですか、先生!!? 私達の攻撃は通用しない、お嬢様を抱えてもいる! いやそれ以前に、私たちは奴に竦んでしまっているんです! こんな状態で手助けに行って、何ができると言うんですか!!? 私だって……私だって……!!?」

「…刹那さん……」

……最低だ、私は。

……ネギ先生に当たってどうする……

……どうすればいい、私は……!!?」

その時。

「……う……。ううん……」

「っ!!? お嬢様!!?」

「木乃香さん! 気がつきましたか!!?」

軽く呻きながらも、眠っていた木乃香が覚醒し、ぼんやりと薄く目を開く。

「……あ? セつちゃん……? ネギ君……? あれ、ウチ……あ!!?」

木乃香は急に顔を赤くして、両手で顔を抑え悶え始める。

「あひやくアカンわ! ウチホントにあの人の言う通り、気持ちええだけやったあ……!!?」

「は?」

「え……?」

唐突な木乃香の言葉に、戸惑う刹那とネギ。尚も暫く木乃香は悶えていたが、やがて多少落ち着きを取り戻し、新ためて刹那の姿を見て目を見開く。

「わ……セつちゃん、その羽根……!」

「っ!!?……」

刹那は、反射的に身を竦める。もし木乃香から、拒絶の言葉を吐かれたら……

しかし、暫く刹那の翼を見つめていた木乃香は、笑みを溢して刹那



に行った。

「キレイな羽根……なんか、天使みたいやなあ……」

「……お嬢……様……!!?」

刹那は、反射的に溢れそうになる涙を必死に堪えた。

刹那の心配は杞憂であった。近衛 木乃香は、桜咲 刹那の親友である事にもはや疑いの余地は無くなった。

滲む視界を袖口で拭い、刹那は決意する。

…矢張り、お嬢様を危険な目に遭わせる訳にはいかない。

刹那は、目を輝かせる木乃香にゆつくりと言葉を伝え始める。

「お嬢様、これからお嬢様を安全な場所までお連れします。しっかりと私に掴まっていて下さい」

刹那の言葉に、ネギは驚く。

「刹那さん！でも……」

刹那は、ネギを見て頷く。

「仰りたいことはわかります、ネギ先生。ですが、これが私の結論です。お嬢様を危険な目には遭わせられない。…きつと辻部長も、本当は逃げろと言いたかったんだと思います。時間が無くて私達を納得させられないから、あんな言い方をしたんです…あの人は」  
辻部長ならこうしろと言うだろう。

刹那には確信があった。

「…でも……」

尚も何かを言いかけたネギが、肩の上のカモによって制される。

「それ以上は言ってやるな、兄貴。刹那の姉さんだつて辛い訳が無えんだ…」

ネギはカモの言葉に、口端を噛んで続く言葉を飲み込む。

無論、刹那も完全に割り切れた訳ではない。だが、お前にとって近衛ちゃんは何だと言う辻の言葉に対する、刹那の答えがこれだった。

…お嬢様は、私の親友だ。絶対に、傷つけるわけにはいかない。

木乃香は、刹那の言葉を聞いて暫し何事かを考え、刹那に問う。

「…せつちゃん。あの…でつかいのはどうするんや?」

そんな木乃香に、刹那はなんとか微笑みを返し、告げる。

「…あの怪物は、辻部長がなんとかしてくれませう。お嬢様がここに居ては危険ですから、私がお嬢様を安全な場所まで連れて」 「駄目や」

刹那の言葉に被せるように、木乃香が真剣な顔と口調で言い放つ。

「え……？」

「せつちゃん、無理したらあかん。ウチには今何がどうなってる、どのくらいここが危ないかなんてわからん。でも、せつちゃんがどんな気持ちで辻先輩を置いて行こうって言ったのかは、わかるで」

「っ!!?……」

木乃香の言葉に刹那は目を見開き、言葉を失う。

「助けに行きたいんやろ、辻先輩を。なら、ウチの事はいいから、行くんやせつちゃん。このままじゃせつちゃん、また後悔するで」

「っそんな……!!? そんなことが出来る訳無いやろ、このちゃん!!?」

思わず刹那の口調が崩れる。木乃香の言葉は正しい。刹那とて行けるものなら助けに行きたかった。

……それでも……!!?」

刹那にとつては木乃香も、順番がつけられない程に大切な存在なのだ。放り出していくことなど、出来る筈が無かった。

木乃香はそんな刹那の様子を見て微笑むと、ゆつくりと噛んで言い含めるように刹那に告げる。

「なあせつちゃん。そうやってウチのこと大事に想ってくれるんは、凄く嬉しいんや。でもせつちゃんにとつては辻先輩も、負けない位大事な人の筈やで? ……それにウチも……」

木乃香は自らの胸に、手を当てる。

「ウチかて、辻先輩は大事な人や。ウチは辻先輩に、いつぱいお世話になった。……せつちゃんとネギ君の顔見ればわかるわ。辻先輩、無理しとるんやろ? ……せつちゃん、辻先輩を助けてあげて! ……せつちゃんの為だけやない、ウチも先輩を助けたいんや!!?」

「この……ちゃん……!!?」

刹那は暫し顔を俯かせ、新ためて自分の未熟さを恥じる。

……また、逃げようとしていたのか……私は……

木乃香が大事だという気持ちにも危険な目にも合わせたくない



「はい!!?」

「応よ!!?」

刹那の呼び掛けに、一人と一匹は元気よく応じる。

「辻部長を今から助けに行きます。力を貸してください!!?」

「了解です(だぜ)!!?」

「…流石に慣れてきたがなあ!!?」

『ああ、向こうも本気らしいな』

すでに二桁を超える矢を撃墜した辻は、両面宿儺の気配の変化を敏感に感じ取っていた。

それを証明するように、両面宿儺は二振りの弓を虚空に投げ返し、腰に手挟んでいた二振りの太刀を引き抜き、対の両手で握り締め、辻を睨み据える。

「…接近戦か」

『あの大きさでは、こちらからすれば遠距離攻撃も近距離攻撃も変わりはないがな』

違いない、と辻は呟き、口端を歪めて笑う。

『…主よ』

「何だ?」

『…流石の私も鬼神を断つたことは、無い』

「…俺も当然無いな」

『だから…』

「ああ、わかっている」

『…断ってみたいな…こいつを』

…桜咲達を遠ざけておいて良かったよ。とても今の顔は見せられまいから。

…ああ、こいつを断ったら…どれ程気持ちいいんだろうなあ……!!?」

辻は棧橋を全力で駆け出し、水面に降り立ち尚疾走<sup>はし</sup>る。

バカレンジャーの中で虚空瞬動が使えるのは山下だけだが、水などの液体が足場としてあるならば、所謂水面走りを他の四人も可能

とする。飛び跳ねるように水面を走りながら、辻は両面宿儺に肉薄する。

『主よ、両面宿儺の剣撃は断とうとするな』

「…何故？断てないものは無いんだろう、お前？」

『無論。だが、奴の初撃の断った矢が尚大地を揺るがしたことから解る様に、私をもってしても奴の力は相殺仕切れん。奴が莫大な気を込めて放つ斬撃は一撃で断てない可能性がある。私は折れはせんだらうがそうなれば待っているのは主とあのでかブツの力比べだ。身長差五十倍以上の巨人に腕相撲で勝てるというなら止めはせんがな』  
「…了解だ！」

一際長く跳躍する辻に、両面宿儺は雄叫びと共に右の太刀を振り下ろす。容易く太刀が音速を越え、大気が爆発して巨大なギロチン断頭刃が落ちてくる。

辻は全力の瞬動で左に飛び、斬撃の範囲から逃れる。

直後、再び世界が激震する。

甲高く、巨大な破裂音と共に湖面が二つに割れ、両側に津波の様な水飛沫が発生する。斬撃を喰らった湖底は海溝の如き深い亀裂が生じ、一拍遅れて湖の水が滝の様に流れ込む。

そんな超絶的な一撃を辻は何とか躲したが、発生した津波のような水飛沫によって、水の中に飲み込まれそうになっていた。

「おおおおおおおっ!?」

牙を剥く急角度の水面を山を駆け上るようにして走り抜け、両面宿儺へと近づくと辻。

『水煙に紛れて近づけるかと思ったが、どうやらこちらの気配を察知しているらしいな』

大時化のように荒れる湖面の中、的確にこちらを視界に捉えている両面宿儺を確認して、嘆息と共にフツノミタマが呟く。

「アリンコみたいなサイズの生き物も見逃さないとか、デカイ図体の割に気の小さい野郎だ、な!!?」

一際大きな波を乗り越え、辻は怒鳴るように言い返す。

両面宿儺の返す左の斬撃が、次は横殴りの軌道で湖面上を薙ぎ

払う様に放たれる。

『届くまでもう一息だ……!!?』

「その前に真つ二つにされそうだが、な!!?」

辻は斬撃の届く直前、水面を全力で蹴って斜め上に跳躍、横薙ぎの斬撃を飛び越えて躲す。最早長大過ぎる両面宿儺のリーチでは、上手く辻に太刀で攻撃することは不可能なまでの懐に、潜り込むことに成功する。

しかし。

「何い!!?」

『…しまった、な……!!?』

両面宿儺の前面の口内に、莫大な気が収束し、明らかに辻に狙いを定めている。直後、放たれるのは極大呪文一步手前の威力である鬼哭咆哮。破壊の波が、辻に迫る。

「おあああああああつ!!?!!?!!?」

今だ体が空中に有り、回避する術の無い辻はフツノミタマを全力で振り下ろし、破壊の波を両断する。またしても割れた衝撃波に湖面が爆砕し、余波を喰らって辻は弾き飛ばされ水面に叩きつけられた。

「ガハツ!!?」

『主!!?』

全身を走る衝撃に辻が苦鳴を漏らす。フツノミタマの鋭い呼び掛けに痛みを押し殺して目を開くと、両面宿儺が引き戻した右の太刀を辻目掛けて、今にも振り下ろそうとしている姿が見えた。

…ヤバい、避けられる体勢じゃ、無い……!!?」

これでフツノミタマを斬り上げても、先程フツノミタマが言った通り圧倒的な膂力差で潰される未来しか辻には見えない。かといって不完全な体勢で跳躍しても、振り下ろされる剣圧の破壊範囲内は広大だ。掠めたで人など簡単に弾け飛ぶだろう。

つまり、打つ手は無い。

…それでも……!!?」

辻は覚悟を決めてフツノミタマを振って来る斬撃に対して構

える。辻は諦めるなど選択肢に入れるつもりは無かった。

死の一撃が辻に届く、その寸前。

『っ!!?!?』

「うおお!!?!?」

何者かに辻の身体が横抱きに攫われ、間一髪のタイミングで斬撃は湖面を烈断するだけに終わった。

「な、何…!!?!?」

『…小娘?』

急激に上昇する視界に軽くパニックになつていた辻は、フツノミタマの疑念の声にハツとして自分を抱えている存在を仰ぎ見る。

「大丈夫ですか、辻部長?」

白い翼を羽ばたかせ、高速で空に舞い上がる少女―桜咲 刹那は、心配そうな顔で辻の顔を見返した。

「桜咲!!?お前、なんでここにいろ!!?!?」

「まず辻部長の体勢を入れ替えます、身体を起こして下さい」

「あ、はい…」

上体を起こした辻の腹を抱え込む様に刹那が抱き着き、体勢が安定する。

「オホン…近衛ちゃんはどうしたんだよ桜咲!!?!?」

『締まらないなあ』

「五月蠅いよ!!?!?」

仕切り直してから問い詰める辻にフツノミタマがツッコむ。

「お嬢様は現状で私が張れる最強の対魔結界内でお待ち頂いています。私とネギ先生も両面宿讎撃破に協力します、一緒に戦いましょう、辻部長」

「馬鹿かお前は!!?!?」

辻は思わず刹那に怒鳴り返す。

「お前は近衛ちゃんの護衛で、親友なんだろうが!!?!?こんな所で一人にして、まかり間違つて攻撃が飛んでいったらどうするんだ!!?!?中途半端な真似をするなよ!今すぐ戻つて一層の事一緒に逃げる!!?!?!!」

「お断りします!!?」

辻の怒喝に刹那は大声で言い返す。

「なっ…」

「これはお嬢様を含めて私達全員の総意です。貴方だけに危ない思いはさせません。辻部長が両面宿儺を倒せる算段があるなら、私達がサポートします!」

「そんなの、お前…」

「そもそも今しがたやられそうになっていたじゃないですか!一人で何とか出来ないなら大きな口を叩かないで下さい!!?」

「ぐう!??」

痛い所をつかれて、辻は言葉に詰まる。

「…辻部長。私は確かにお嬢様の護衛で、親友です。何に変えても私はお嬢様を守りたい。…でも辻部長。貴方だって捨て石みたいな扱いが出来る様な、どうでもいい存在じゃ無いんです」

「…桜咲…」

刹那は語気を緩め、辻に優しく語りかける。

「貴方は確かにやってみせる人です、私も何度も助けられました。本当に感謝しています。…でも、それは貴方に全て負担を押し付けていい理由には、ならないでしょう?私はもう、貴方の背中を守れます。…ようやくそう、自信を持って言えます。こればかりは譲れません。私も一緒に、戦います」

…こいつは、本当に…

辻はこんな状況にも関わらず、笑い出しそうになった。何処まで人間出来ているのだろうか、この少女は。

「…お前なあ…今からそんなにいい女になってどうするんだ…嫁の貰い手、いなくなるぞ?」

刹那は虚をつかれたように、少し目を見開くが、

「…その時は、辻部長に責任を取ってもらいますよ…」

クスリと笑って言い返した。

『…二人の世界を作っている所悪いがな、主』

何処と無く面白く無さそうな口調でフツノミタマが告げる。



「いや、そんなんじや無い妙なこと言うなよ。何だ？」

『洒落にならん一撃が飛んできているぞ』

両面宿儺の鬼哭咆哮が辻達に迫っていた。

「うおおおおおお!?? 避ける桜咲ー!??」

「え? うわあああああつ!??」

刹那は慌てて旋回し、何とか回避に成功する。

「辻さーん、刹那さーん!!? 大丈夫ですか!??」

「イチヤつくのは後にしろよ二人共!!?」

ネギとカモがこちらに飛んで来ながら声をかける。

「五月蠅いよイチヤついて無いわ!?? 兎に角助かった、ありがとうフツノミタマ!??」

『…まあ、いいのだがなどうでも……』

「と、兎も角!!? 私達がサポートします、辻部長!!?」

刹那が若干赤い顔になりながらも、助力の旨を告げる。

「……わかった、確かに俺とフツノミタマだけじゃ厳しかった所だ。

…命預けるぞ、皆!!?」

「二はい (応よ) !!?」

辻達は両面宿儺に向き直り、仕切り直す。決着の時は、近い。

「…つくづくツキが無いんかわからんが、上手くいかんもんや……」

千草は両面宿儺の肩の上で愚痴を溢す。

無謀にも挑みかかって来る男を潰そうと試みればどういふことか両面宿儺の攻撃はことごとく凌がれる。ようやく潰せるかと思えば逃げ出したと思っていた神鳴流剣士と少年魔法使いが男を助け出し、どうやら全員でこちらに挑むつもりのようなのである。

「…舐められたもんやわ……」

千草は忌々しげに呟き、並行していた作業の進捗状況を確認する。

…もう、少しやな……

「…最悪西の馬鹿共に一撃かますんは、諦めないかんかもなあ……」

業腹だが、それならそれで構わない。だがその前に……

「散々邪魔してくさったガキ共には、お返しせえへんとなあ……」

千草は両面宿儺に指示を出す。

ここから先は、全力だ。

「ウアルキュリアールム コントウベルナリーア風霊召還・剣を執る戦友!!?」

ネギの周囲に複数の武器を手にしたネギそっくりの風精が現れる。

「…行きます、辻部長!!?」

「ああ!!?任せたぞネギ君!!?」

「はい!!?」

「武運を祈るぜ、お二方!!?」

「…光羽翔翼!!?」

刹那と辻が光の矢となり飛び出し、その後を追うように風精が散開して飛ぶ。

両面宿儺の口内に再び気が収束し、鬼哭咆哮が放たれる。扇状に展開するそれは、しかし高速でありながら機動力の凄まじい刹那の全力飛行を前に掠りもせず虚しく大気を引き裂く。

両面宿儺は苛立った様に鬼哭咆哮を連射し、両の太刀を、鋭い爪を振り回すが、纏わり付くように周囲を飛び回る刹那を捉えられずに空を切る。また、合間を縫って風精達が両面宿儺の顔面や千草に向かって殺到し、それへの対処で狙いが絞りきれないのも一因であった。

『ゴアアアアアアアアア!!?!!?!!?』

一際大きな咆哮を両面宿儺が上げ、口内にこれまでとは比べものにならない量の気が収束する。

「…デカイのが来る!!?任せたぞ桜咲!!?」

「はい!!?」

刹那は対抗するように翼の光量を増し、最大速度で両面宿儺に突っ込む。迎え撃つ両面宿儺は、口内の気を拡散させて鬼哭咆哮を吐き出す。最早光の爆発が刹那と辻に迫る。

「命預けます、辻部長!!?」

「任せて、おけええええええええ!!?」

辻のフツノミタマによる迎撃。爆発全体がかき消えはしなかったが、二つに裂けた爆発の中心を刹那は抜けた。

目も眩むような光の中を抜けた刹那達を待ち構えていたのは、二振りの太刀と二本の腕を構える両面宿儺。絶対に叩き落とすという殺気が刹那達を叩いた。

「フランス サルタテイオーフルウエレア風花 風塵乱舞!!?」

左を大きく回って近づいて来ていたネギが魔法で烈風を巻き起こし、水面に着弾した風が水を巻き上げて水煙を作り、刹那が急降下して水煙の中に紛れ込む。

両面宿儺は一瞬動きが止まるが、肩の千草が指示を出して空いている腕を一闪、巻き起こった爆風が水煙を吹き飛ばす。

しかし、水煙の晴れた先に刹那の姿は見え、煙と一緒に消えたかのように姿を消していた。

「ちっ…小細工仕掛けよって…!!?」

千草は唸りながら、全方位を知覚する。何処から仕掛けて来るのか知らないが、刀を持った男の斬撃でしか両面宿儺にダメージは入らないと千草は推測している。ならば接近して斬りつける過程を踏む以上、どう不意をついても直前には姿を現す筈だと千草は予想していた。

果たして直後、全身に光を纏った刹那が下から両面宿儺の背面に向かって飛び出して来た。

…水の中から!?!?

千草は驚愕する。空を飛ぶ相手が水中を通って来るという意識上の死角をつかれ、千草の対応が遅れた。

…だが、甘いわ!!?

「宿儺あ!!?」

千草の声に応え、両面宿儺の後面の口内に気が収束し、鬼哭咆哮が放たれる。

…これを防御させれば一瞬隙が出来るわ!!?

そうなれば、両面宿儺の迎撃体勢が整い、奇襲は失敗する。そうなれば再び千草のペースで殲滅を行える、という算段だった。

しかし。

刹那は襲い来る鬼哭咆哮に対しあっさりと背を向け、両面宿儺から遠ざかり一撃を躲した。

「は……………う？」

渾身の奇襲の機会をあっさりと棒に振る行為に、千草は訳が解らず疑問の声を上げる。二度同じような手段は使えない以上、相手の考えが千草には理解出来なかった。

『ゴアアアツ!!?』

その時、両面宿儺が頭上を仰ぎ、鋭く咆哮を上げる。

…っ!!?

反射的に宙を見上げた千草はその光景に驚愕する。

「なっ……………!!?」

そこには生き残った風精が浮かんでいる。しかし、それだけならば千草はここまで驚きはしない。

千草が驚愕したのは、その風精の身体にしがみつくようにして共に浮かんでいる——辻はじめ一が原因であった。

仕掛けはネギが水煙を作り、刹那が突っ込んだ時の事だった。

刹那は水中を通過して両面宿儺の背面に抜ける前に辻を水面に落とし、ネギが風精の生き残りに指示を出して辻を拾い上げた。後は刹那が背後から奇襲して注意を引いている間に、辻は風精に掴まって両面宿儺の上方に移動したのだった。

「…終わりだよ」

辻は呟き、風精を蹴り付けて逆落として両面宿儺へ落下する。両面宿儺が迎撃しようと口内に気を収束させ始め、二本の腕が

辻に伸びるが、

「ヨウイス テンペスターズ フルグリエンス雷ライの暴風!!?」

「神鳴流決戦奥義、真・雷光剣!!?」



## 26話 動乱する世界の始まり

「此処までやな……」

「貴様、何処へ……!?」

「…頼める義理や無いのは重々承知やけど……伝言頼まれてくれんか、神鳴流の護衛?」

転移符を片手に、千草は何処か寂し気な笑みと共に刹那に言った。

「…はは、はははは……良かったなあ……凄く、綺麗に断てたなあ……カミサマって、あんな感触がするんだなあ……あは、ひひひひ……!!」

「……あゝゝゝゝ疲れた……!!? 散々な京都旅行だったぜマジで……」

「そもそも旅行に来たんじゃ無えけどな……」

関西呪術協会の用意された客間の一室で、死んだように寝転がりながら呻く中村に、豪徳寺がツツコミを入れた。

辻が両面宿讎を両断してから程なくして中村達は無事合流した。全員揃って下山して関西技術協会の総本山に向かった所、途中でようやく駆けつけてきた増援達と合流し、一先ずの一見落着と相成った。全員疲労していた為、増援の手によって石化を解かれた近衛 詠春に勧められて協会内の客室で一夜を明かし、現在は早朝である。

「しっかし途中から連絡入れる暇もなかったとは言え、想定外だったの一言じゃ済まされないでしょホントに……」

「言うな。この件に関しては何としても帰ってから学園長本人を捕まえて詳細を聞き出してくれ……!!?」

不満気な山下の愚痴に大豪院が物騒な顔で物騒なことを口にする。

「止めようぜ今そういう話は。只でさえ昨日、中村が大々的に喧嘩売っちまってから微妙にここ居辛いんだからよ……」

豪徳寺がウンザリした顔で言う。

「しよーがねえだろマジで役に立って無えんだから連中!!? おっとり

刀で駆けつけてきてだーんと格好付けたと思つたら一網打尽にされましたとか何処のやられ役だよあいつら……」

「それは長殿を含めた術士と剣士の連中が本当に実力があつたから初見殺しの詰み技で潰されたんだと昨日も説明したろうが阿呆」

不満気な中村の言葉をバツサリと切り捨てる大豪院。

「そうそう。僕らが同じことされたら対応できなかつたのは明らかかなんだから、長さん達を責めるのはフェアじゃ無いんじゃないかな中村？」

「そういうこつた。連中もやられたくてやられた訳じゃ無えんだし、こうして傷も癒して貰つて寝るとこと飯の世話までして貰つてんだ。文句言うのは筋違いだぜ」

「わーつたわーつた、俺が悪かつたつーの！……まあ個人的に巫女さんハーレム作つてる近衛パパンの性癖は嫌いじゃ無えし、こんぐらいにしといてやつか!!?」

「最後の何の関係があつたんだ……?」

「その馬鹿にしか解らん、理解を諦めろ」

大豪院が投げやりに締めくくつた所で、ふと山下が呟く。

「……そう言えば辻は？僕がうたた寝してる間に姿が見えなくなつてい  
るんだけど……?」

「……あー、一ちゃんならせつたんに呼び出し喰らつてどっか行つた  
ぜー?尾けてこうとしたらあの野郎俺の股間に蹴りくれやがって、悶  
絶してる間にどっか行つちまった……あの童貞野郎帰つて来たら覚え  
てるや……!!?」

「自業自得だ、クス。どうせあの二人のことだ、真面目に何か相談でも  
して終わりだろうよ」

「逆説的に変な信頼あるよなああの二人……」

「……ま、確かにねえ……」

山下は豪徳寺に同意しつつも、何と無く引つかかっていた。

……辻、大丈夫かなあ……?」

「辻部長、本当に何処も異常はありませんか……?」

「だから大丈夫だって言ってるだろ桜咲。怪我は全て治ったし、変な違和感や怠さも何も無しだ」

「…すみません、少々しつこかったですね。しかし、仮にも神と名の付く物を斃したのですから、どのような理由や切っ掛けで祟られたり、呪い殺される事があっても不思議は無いのです。用心に越したことは無かったもので…」

「…よくよく考えると、日本書紀に載ってる様な知名度の鬼神を断つたんだよなあ、俺…」

神殺しとか、一カ月前までの俺が聞いたらどんな顔するだろうなあ…と辻は遠い目をする。そんな辻の様子に苦笑しながらも、刹那は話を続ける。

「…兎に角、辻部長。今回は部長を含めた皆さんが居てくれて本当に助かりました。私だけでは到底、お嬢様をお守りすることなど出来なかつたでしょう。心より御礼を申し上げます」

深々と頭を下げる刹那に今度は辻が苦笑して、手を振りながら返事を返す。

「そんな改まった礼は止めてくれ。元々ネギ君を助けたくて、自主的に来たんだ。近衛ちゃんを助けたのも、お前を助けたのも。俺達は武道家で、何より先輩なんだから当たり前だろ？」

真面目な顔でそんなことを言う辻に刹那は目を細め、ポツリと呟く。

「…本当に、凄い人ですね、貴方は…」

「うん？」

「いいえ、何でもありません。…時に辻部長、昨日の朝、交わした約束を覚えていますか…？」

何故か恐る恐る、という風に聞いてきた刹那に、辻は自信満々に頷く。

「ああ！勿論だ。俺を呼び出したのはその点についての話では無いかと思っていたよ。安心しろ、桜咲。俺は逃げも隠れもせん、潔く腹を切ってみせよう」

「寧ろ忘れていて欲しかったんですが…そうですね、貴方はそういう



人でした…」

何故か疲れたように言う刹那を不思議そうに見やりながら、辻は言葉が続ける。

「それで、俺は何時切腹しようか桜咲？お前が望むのならこの場で一席設けるぞー！」

「止めて下さいお願いします。…どうあつても退かない気ですね、辻部長……」

刹那の言葉に、辻は頷く。

「ああ。この後に及んで俺の心配をしてくれるお前の優しさには頭が下がるが、俺も男だ。言ったことには責任を取らねばならん!!？」

「そんな所でだけ男らしさを発揮しないでください!!？……わかりました、そちらがどうあつても責任を取ろうと言うなら私も考えがあります」

「うん?。」

何やら妙な気迫の籠った様子の刹那に辻は首を傾げるが、刹那はそんな辻の様子に構わず、何故かもしもじとした様子で辻に向かって躊躇いがちに言葉を放つ。

「…辻部長。私は鳥族のハーフです。それに関しては、昨日簡単に説明をしましたね?。」

「ああ、でもそれがどうした?。」

「実は、鳥族の掟には真の姿を見られた者の元からは姿を消さねばならない、というものがありません?。」

「…ほう」

「ですから、私は皆さんの前から…」

「無視してしまえそんな糞の様な掟は!!?。」

「早いですね!?!?…と、兎に角、辻部長がどうしても腹を切ると言うのなら、私も皆さんの前から姿を消させて貰います!!?。」

きつぱりと言い切った刹那の言葉に、辻は慌てふためきながら反論する。

「なんだその条件は、全然話が繋がってないぞ!?!?馬鹿な真似はやめろ、俺が死ねばいいだけの話だ!!?。」

「それが嫌だからこんな話をわざわざ持つてきているんでしょが!!  
?それに、繋がりが無い訳ではありません、此処から私は交換条件を  
提示します!!?」

「…何?」

問い返す辻に、刹那は顔を赤くしながら言い放った。

「…そ、そもそも、辻部長が責任云々と言っているのは、私と…その、  
接吻行為を、事故でしてしまったから言っているのでしょうか?!?」

「……あ、ああ……」

…うわあ当人から改めて話題に出されると壮絶に気まずい……!  
顔を引き攣らせる辻に構わず、刹那は続ける。

「で、でしたら、その一件と、私の正体を黙っていると言う条件で、こ  
の二つを相殺します!!?」

「……うん?……」

訳がわからない、といった辻の様子に、刹那は完全に顔を真っ赤に  
しながら叫ぶように言い放つ。

「ですから!!?辻部長が私と接吻した行為を代償に私の正体を秘密に  
して頂くということですよ!!?……も、文字通りの、…口止め料、です  
……うう……」

刹那は耐え切れないとばかりに俯き、辻の返答を待つ。しかし、辻  
は一向に言葉を返さない。

……も、もしかして、盛大に引かれてしまったのでしょうか……?

刹那が恐る恐る顔を上げると、辻は目を見開き、体を小刻みに震わ  
せながら刹那を見ていた。

「あ、あの…辻部長……?」

「………は」

「はい?」

何事かを呟いた辻に、刹那が聞き返すと、

「っなんっつかお前はもおおおおおおおおお!!?!!?!!  
?」

ガバシイッ!!?と辻は目にも止まらぬ速度で前に出て、刹那を正面  
から抱き締めると、その体を抱え上げる。



フィールドの別荘を詠春の案内でネギが率いる五班の面々とバカレ  
ンジャー、そして何故かついてきた二班の一部は訪れていた。

「い、いえ!!? 頭を上げて下さい長さん、僕達は当然のことをしただけ  
です!!?」

低姿勢の詠春に、ネギが慌てたように声をかけるが、豪徳寺はそんな  
ネギを制して持論を語る。

「まあ、漢には黙って頭を下げなきゃいけない時もあるんだよ、ネギ。  
こういう時は、こつちも黙って謝罪を受けときゃいいんだ」

「まあ、此方も頼まれてやったことではありませんので、助けになつた  
のなら幸いです」

辻が静かに笑みを浮かべながらそつなく言葉を返す。

「…なーんかなあー……」

「中村、気持ちが悪くはないとは言わんが今は黙っておけ」

「…へーいへい」

辻達のやり取りを見て、微妙な顔をしながら納得がいかなそうに呟  
く中村に、大豪院が釘を刺す。

「…まあまあ、双方蟠りはあるでしょうけど、堅苦しいやり取りはそれ  
位にして僕らも見学に移りましょう。長さん、僕らも見えて回って構わ  
ないですかね?」

山下の確認に柔和な笑みを浮かべて頷く詠春。

「勿論です。ただ、故人の所有物ですので余り荒らす様な真似は控え  
て頂けると助かります」

「当然ですね。じゃあネギ君、待望のお父さんの手掛かりが見つかる  
かもしれないんだ、僕らも手伝うから頑張つて探そう」

優しく声を掛ける山下に、ネギは慌てて頭を下げる。

「は、はい! ありがとうございます、皆さん」

「いいっていいって。此処まで来といて今更だろ?」

「どうせやる事も無いからな」

「野郎の家なんざ見て何が楽しいんだつーの…つーかポオチ。オメ  
暇だつうんなら健気について来た古ちゃんの相手してやれよ、ツレ  
ない態度お前がとってたから前髪ちゃん達の方へ剥れて行つちまっ

たじゃねーか」

「知るか。遊びでやってたのでは無いのだ、混ぜろと言われても出来る訳があるまい。彼奴には関係の無い話だ」

「…亭主関白だなあ〜大豪院。よくもまあ、ほぼ毎日顔を合わせる相手にそんな態度を取れるもんだ」

呆れたような感心したような辻の台詞に、僅かに青筋を立てながら大豪院が言葉を返す。

「…そういう貴様はここ数日で随分桜咲後輩と仲良くなったようだなあ？貴様こそさっさと機嫌を取りに行け、朝方から碌に会話をしておらんだらう貴様？」

「ぐっ!?…いや、何か桜咲があまりにな、いじらしいから、ちよつとこう、溢れるものがだな……」

「その言い訳になっていない言い訳は桜咲後輩本人にしろ。隣室に居るぞ、行ってこい」

「無理だろ!??どんな顔して会話すればいいんだよ!??」

「変わんねえ〜こいつ…」

「いや、まあ急に変わったら逆に恐ろしいからこれぐらいでいいんじゃないかな…」

「にしたってもう少し、あるだろ何か、こうなあ…」

「五月蠅いよお前ら!!?さあネギ君、お父さんの手掛かりを探そう!!」

「あ、はい!!?」

辻はネギの手を引いて部屋にあった本棚の元へ駆け寄っていく。

「逃げたね」

「まあこれぐらいにしておいてやるか…」

「じゃ、俺らも搜索すつかね…」

「うげえええ面倒臭……」

言い合いながら各々搜索に加わった。

そんな一同を黙って眺めていた詠春は、ふと小さく笑みを溢して呟く。

「…ネギ君は、良い関係を持った様ですね……」

あの手の漢達に好かれるのは血筋ですかね…と詠春はかつての悪友を想った。

「むううううう!!?ポチのアホ、ボケ、フエツエ 廢 チャアエ 柴!アルくく!!?」  
古はプリプリと怒りながら虚空に向けて拳足を見舞う。

「まあまあ、落ち着くでござるよ、古」

対照的にこちらはのほほんとした様子の楓が、ベンチに腰掛けながら古を諫める。

「昨日はこつちにまでなんか地震の余波みたいなのが来てたしねく相  
当ヤバい事態だったみたいだから、先輩達が声かけなかったのも解  
るってもんだけど?」

朝倉も、怒髪天をつく様子の古をカメラに収めつつ苦笑して言う。

三人が居るのは別荘の狭い裏庭だ。大豪院のツレない返答に完全に臍を曲げた古が、鬱憤晴らしに体を動かして外に飛び出して行ったのを二人が追ってきた形である。

「私だて鬨えるアルよ!!?ポチは私を何時も子ども扱いするアル!!  
?」

「声を掛けて貰えなかったのは拙者も多少寂しいでござるが…聞いた  
限りの話では命の危険もあったとのこととでござる。古を危険な目に  
遭わせたくなかったのでござるよ、ポチ殿は」

「まあ、矜持って奴の問題からしても、女子中学生に頼る男子高校生つ  
てなんかどうかとは思うしねえ…」

「うがー!!?難しいことはわかんないアルが、とにかくムカつくアル  
!!?」

一向に怒りの冷めやらない古に、朝倉がやうんざりしたように嘆息しつつ、告げる。

「そんなに置いてかれたのが不満ならさあ、古ちゃん。次こんなこと  
があつたら、問答無用で追いつちやえばいいだけの話じゃん?なん  
で許可取る必要があるのさ?」

朝倉の言葉に、古はピタリと動きを止め、

「…それもそうアルな!!?」

あつさりと納得した。

「…朝倉殿……」

「…あく、全力で余計なこと言っちゃった？私……？」

ジト目で朝倉の方を見やる楓に、少々引きつった顔で朝倉が溢した。

「…なにはともあれ、無事で何よりです、中村先輩」

別荘の一室で机の引き出しを片っ端からひっくり返している中村に、夕映は声を掛けた。

「おーう!!？心配掛けちゃったみてえだなりーダー！でえーじよぶでえーじよぶ、この通りピンピンだぜ!!？」

力瘤を作って、ケラケラ笑いながら中村が夕映に返す。

「いいえ、私が半地球外生命体のような先輩を心配などおこがましい話です。先輩の生き汚なさど性欲の強さと無駄な行動力だけは、私認めているですから」

「うおーい非道え言われようだなオイ！野郎だったら半殺しにしておく所だが美少女相手だから俺は勿論笑って許すぜ!!？おっと俺の度量の広さに惚れちゃったら火傷するぜえ夕映っち!!？」

「…矢張り、無いですね。どうしてこれが一昨日は不覚にも少し格好良く見えてしまったのでしょうか、私は……」

「んあ？なんか言ったか夕映っち？」

「いえ、何でもありません。それより、何をなさっているのですか中村先輩？」

引き出しを全てひっくり返した後、机の下に潜り込んで、ゴソゴソと何かを探っている中村に、夕映が不思議そうに声を掛ける。

「ああ!!？決まってるんだろエロ本の搜索だよエロ本の!!？本棚とか見てたら外国語ばかりだから、隠してるエロ本も外国版の無修正の超レアなものも隠してあるかもしれねえからな!!？」

「最低ですね……」

半眼になりながら絶対零度の視線で中村を睨む夕映だが、中村はそれしきの事では怯まない。そんなやり取りをしていると、部屋の扉を開けて楓が入ってきた。

「いよう楓ちゆわん!!？今日も中学生とは思えない t a w a w a なバ

ストがお美しい!!?」

「その女子中学生にセクハラから挨拶に入る中村殿も絶好調の様でござるな」

苦笑しながら楓が言葉を返す。中村の左斜め後ろの夕映が、胸の話題になった時にちよつぴりむつとしたのはご愛嬌だ。

「中村殿、唐突で申し訳ないが、一つお願いがあるのでござるが…」

「おうなんじゃあ?!?美少女の頼みならこの中村火の中水の中、女子のパンツの中だけ!!?」

「死んで下さいです、先輩」

辛辣な夕映の宣告に苦笑を深めながらも、楓は意外な言葉を口にす  
る。

「そのような事は起こらないのが一番でござるが…次にこのような事件が起こったら、拙者にも一声、声を掛けて貰えるとありがたいでござる」

「んあ?」

中村は間抜けな声を上げ、夕映も少し驚いたように目を見開く。

「…なんでよう?」

「無論、拙者にとつてもクラスメートは大事な友人だからでござるよ。拙者、これでも少しは腕に覚えがあるつもりでござる。中村先輩達とも知らぬ仲では無く、従つて難しい理由はござらん。有事の際は手を貸したい。それだけの話でござる」

年齢不相応に豊かな胸を張り、楓が堂々と言い切る。強調された胸をしつかり視界に収めながらも、中村は少しばかり真面目な顔になり頷いた。

「…わかった。腕前の方は一昨日俺が身を持って確かめたしな。危険性やら何やらを理解した上で自分の意思で来るってんなら、俺に止める理由は無え。ありがたく頼りにさせてもらうぜ?」

「承知したでござる。話のわかる御仁でござるなあ、中村殿は」

「なーに、弱者を守るのが武道家つつつても、俺は腕が立つなら女だろ  
うと子供だろうと差別はしねえ。そこら辺が辻やら大豪院やらとは微妙に意見が合わねえんだなあ…ま、兎も角話は了解したけど夜、な



んでわざわざそれを俺に言う訳？」

首を傾げて問う中村に対して、楓は僅かに微笑みながら、言葉を返した。

「ん〜：現状では中村殿を、一番気に入ってるからでござるかな？」

「…何？」

「は…!?？」

中村と夕映が同時に声を上げる。

「なにいいいいい!?？こ、これはどんな急展開だ!?？俺にもついに春の兆しが…!?？」

「あ、そういった意味合いでは無いでござる」

「グフアアアアア!?？」

言葉の途中で放たれた無慈悲な宣告に、中村が血を吐きながら床に倒れる。

「…ふ、ふふ…：解っていたさあ、そんな美味い話が俺にある訳無えってよう…：ふぐううう…：!!？」

床の上で奇妙な形に丸まりながら、すすり泣き初める中村を笑って見やりながら、楓は内心でそつと付け加える。

…：今の所は、でござるが、な…：……

楽しげに笑う楓と、ベそをかく中村を視界に収めつつ、夕映は思った。

…：何でしょう…：……？

…：何と無く、面白く無いですね…：……

「…何をしているのですか、山下先輩？」

「なに撮つとるん？山下先輩〜？」

「ん〜？ちよつとね〜…：……」

部屋全体を写すように、ゆつくりとハンデイクメラを回している山下に、木乃香と刹那が不思議そうに声を掛ける。

「ほら、ここってネギくんのお父さんの別荘でしょ？来たくても、事情があつて来れなかった人がいるから、その人のためにお土産に持っていこうと思つてね…：」

「え〜？誰なん、それ〜？」

「本人の名誉の為に、名前は出せないかなー」

「え〜気になるやんか〜」

尚も木乃香がせがむが、山下は笑顔であしらって、一通り取り終わると、部屋を出て行く。

「あーん、イケズやなあ山下先輩。なあなあ、せつちゃんはしつとる〜？」

「いえ、私も心当たりはありませんね…」

そう木乃香に返しつつも、刹那には、何と無く山下の言っている人物のことが判明した。

……………。

「お嬢様。私ちよつと、お花を摘んできます」

「ん、了解やく〜せつちゃん、ウチのことはこのちゃんて呼んでって、朝から何度も言うてるやろ〜？」

「す、すみません、お嬢…こ、このちゃん」

軽く頬を膨らませた木乃香に見送られつつ、刹那は部屋の外に出て、少し前を歩く山下の元に歩み寄る。

「…山下先輩」

「ん？あれ桜咲ちゃん、どうしたの？」

廊下の天井にカメラを向けつつ、山下が不思議そうに尋ねる。

「いえ…不躰な問いですが、そのビデオはエヴァンジェリンさんの為に撮っているのですか？」

刹那の言葉に、山下は一瞬だけ動きを止める。

「…驚いたな、よくわかったね桜咲ちゃん」

「多少なりとも、あの方の事情は知っていますので。…いきなり申し訳ありません、ただ、山下先輩達はエヴァンジェリンさんと死闘を繰り広げた間柄の筈です。そんな相手に、こんな風に気を効かせるのが意外だと感じまして…」

刹那の言葉に、山下は何処か困ったように笑い、返事を返す。

「うん、まあ普通はそう思うのが当然だよな。…でもさ、詳しい事情はエヴァさんの名誉の為に秘するけど、僕からすれば話を聞くと悪いのはネギ君のお父さんの方なんじゃないかって思えてさ…」

こんなこと、ネギくんや辻達には言えないんだけどね、と苦笑して、「エヴァさんは、闘った時は普通に怖かったけど、それ以前の様子やネギ君に改めて事情を聞いてからは、案外吸血鬼なんて言っても普通の人間と考えてる事はそんなに変わらないうんじやないかって思ってたね：そんな女性の、好きな男の別荘に寄つたんだからこれ位はしてあげてもいいんじゃないかって、それだけの話だよ」

笑って言う山下に、刹那が目を細める。

「…普通は殺されかけた相手に、そんな風に気は使えませんか。優しい人ですね、山下先輩は」

「やめてやめて。そんな格好いいものじゃないから。大体優しいって言うなら、僕なんかより辻の方がずっと優しいよ。…身をもって実感してるでしょ？」

悪戯っぽく問い掛ける山下の言葉に、刹那は顔を赤くして俯く。

…うわー可愛い。辻も幸せ者だなあ……………

遠い目になって果報者の友人を想う山下に、気を取り直して刹那が言う。

「と、兎に角、理由は納得できました。手数をお掛けして申し訳ありませんでした、山下先輩」

「全然構わないよ、気にしないで桜咲ちゃん」

刹那が一礼して、元居た部屋に戻っていく。

「…さて、ちよつと急ぐか。長さんに聞きたいこともあるしね…………」

「ふふふふふ、何時か目に物見せてやるアルよポチ…ふふふふふ…」

「…まあ、拙者も同じ志ゆえ、止めはせんでござるが、程々にするでござるよ、古」

「…なあ、なんかいつの間にか古ちゃん機嫌直つてる所か、なんか怪しいテンションなんだが…何かやったのか大豪院？」

「知るか。大方別荘にいた時に、誰かに何か吹き込まれたのだろうかよ。単純な奴だからな…」

何やら含み笑いをしつつ、上機嫌に歩く遙か前方の古を気味悪げ

に見て豪徳寺が尋ねるが、大豪院の返答はすげないものである。

「あくらポチつたら!?!?嫁に対して流石の理解度よね…でも、男の子だったらもう少し、女の子に優しくしてあげるべきだとお姉さん思うわよお…?」

中村が大通りの中央を、腰を不気味にくねらせながら歩きつつ、気持ちの悪いオネエ言葉で大豪院に言う。

「死にたい様だなワンバードン王八蛋…」

「沸点低いよ大豪院。ほら、ネギ君と宮崎ちゃんを見習ってもうちよつとほのぼのしようよ」

土産物を漁りつつ、一生懸命にネギに対して声を掛けている宮崎を、目を細めて見つっ山下がとりなす。

「…青春してるなあ…それに比べて俺達は、殺伐した京都滞在だったなあ本当に…」

溜息をついて呟く辻に、周りにいた全員の視線が殺到する。

「……なんだよ?」

「お前も充分青春してたよ、色男」

代表して豪徳寺が呆れた様に告げた。

「はあ?俺の何処がだ?」

「…駄目だな、こいつは」

「…あれだけやっておいて自覚なしって、もう脳に障害があるんじゃないかと疑うレベルだよね……」

「なんていうかなあ、向こうも向こうだからお前だけをあまり責めたくは無けれどよ、流石に解れや朴念仁」

「これだからヘタレは!!?しょうがねえなここは一つ、近衛ちゃんを助けたってことでやたらと好意的だった巫女さんに快く許可を貰い記念写真を撮りまくった俺が、記念に一枚写真を分けてやろう!!?」

やれやれと首を振って中村が、懐から大量の写真を取り出して辻に告げる。

「なんだよその脈絡の無さ過ぎる話題転換は。巫女さんの写真がなんだっていうんだお前…?」

「バツカ関係ありまくりだよ!!?お前がそうも恋愛関係に関して鈍い

のは、真面目くさってエロい事を考えて無えからだ!!?だからお前には特別にこのもの凄え巨乳の美人巫女さんの写真をやろう!!?どうだ見ただけで興奮してぶべええ!!?」

言葉の途中で辻の容赦無い正拳を顔面に喰らい、中村は後方に吹き飛んだ。ヒラヒラと宙に舞った写真を溜息をつきながらキャッチする辻。

「何しやがるこの野郎!!?人が折角善意でお前の性欲の心配をしてやったと言うのに!!?」

「もうお前の存在が何なんだよ」

「本当にわかりやすく最悪な男だなお前は」

「許可を貰って撮ったんだったら何も言う筋合いは無いけど、とりあえず黙ればいいと思うよ中村」

「んだとこの野郎共おー!!?」

ギャアギャアと乱闘を始めた四人を静かにスルーして、辻は先行している刹那達に追いつくべく歩を進める。

：長殿から聞いた限りでは、ネギ君に対して何か企みを学園が抱いているのはほぼ確定。宮崎ちゃんや綾瀬ちゃん、朝倉の、魔法を知って今後どうするかも話を聞いて考えなければいけないし、麻帆良に戻る前から頭が痛いなあ…

詠春は、別荘内をネギたちが搜索している最中、辻達がこっそり集まって、今回の修学旅行で不自然だった点を示しながら、何か思惑があるのではないかと尋ねた時に、確かに言った。

『私の立場では、貴方達に対して事情の全てを話すことが出来ません。：言えた立場ではありませんが、ネギ君のことをよく見て、支えになってあげて下さい。あの子には何ら非はありません。ですが難儀な宿命を背負わされようとしています…』

「…結局詳しい話は聞けなかつたけど、これは本当に帰ってから魔法使いの皆さんとの直談判が必要かもなあ…」

気が重い、と辻は俯く。

『…やれやれ、要らん気苦労を背負い込んでいるな、主?』

あまりに元気のない辻を見兼ねてか、背中のゴルフバッグに入っ

たフツノミタマが声を掛ける。

「まあ、しようがないさ。なんだかんだ文句は言っても、望んでやつてることだからな……」

『…望んで、ね……』

辻の返答に対して、フツノミタマは含みのある言い方をして、それきり押し黙る。

「…なんだよ、何か言いたげだな、お前？」

『…いや、な……』

フツノミタマは、彼女にしては珍しく、躊躇うように言葉を濁しつつ辻に尋ねた。

『…主を見ていて、どうにも解らなくてな。あのイカレ女や私が気に入るような狂気的なものを持ちながら、普段の主はお節介の好青年そのものだ。猫を被っているにしては、主の様子には無理をしている所や不自然な点が全く無い。つまり主は、素でお人好しなのだ。…だとこののに、人斬りを楽しむ様な感性が同居しているのが不思議でならなくてな……』

フツノミタマの言葉を黙って聞いていた辻は、やがて小さく笑って言葉を返す。

「…お前の疑問はわかるよ。傍から見えていたら、気味の悪い男だよな、俺は」

でもな、と辻は続ける。

「その疑問の答えは、割と単純なものだよフツノミタマ。自分で言うのも何だが、俺は常識的で、ごく普通に善良的な感性をしていると思っている。……ただ一点を、除いてな」

辻は何と無く返す機会を失って手に持ったままだった、巨乳美人巫女の写真に視線を落とす。

「唐突だが俺は中村の馬鹿が言う程枯れている訳じゃ無い。普通にそっちの系統の本も持っているし、グラビアなんかも偶に買う」

『…本当に唐突だが、それが一体どうしたというのだ、主……？』

まあ焦るな、と辻は制して、おもむろに懐から短刀を取り出す。「さっきの異常な感性っていう話さ。開けっぴろげな言い方をしてし



『はははははははは素晴らしい!!?なんて狂った存在だ貴方は、はははははははははははは!!?』

「…お前突然テンション上がるよな……言われなくとも解ってるよ、異常な感性だつていうのは…」

『違う!!?確かに異常な性癖だが、そんな人間は太古の昔から一定数存在した!!?私が主を狂っていると言う点は、そんな感性をしていながら貴方が正常だという点だ!!?自身の異常を正常に認識し、それでいて精神は極めて安定している!!?なんと矛盾して、狂った存在なのだ貴方は!!?はははははははは!!?』

「…ボロクソに言われてるな、俺……反論出来ないけど……」

凹んだ様子の辻に、フツノミタマは笑ってそれを否定する。

『まさかまさか?!?私は主を絶賛しているのだ!!?好ましく思つてはいたが確定だ!!?私の運命は貴方と共に在る事だったのだ!!?主、是非とも貴方はそのまま生きてくれ、そのまま生きてくれ!!?ああ、貴方が人の身で在るのが残念でならない!!?何らかの方法で不老不死になってくれないか、主?!?私は、貴方と。…何時か世界を断つてみたい……!!?』

辻は黙ってフツノミタマの熱弁を聞いていたが、やがて小さく吹き出し、言葉を返す。

「…全く他人の事は言えないがなあ、フツノミタマ。……お前も大概危ない奴だなあ…ホント」

かくして、異常な主従は歩き出す。

「…さよならつて、何や……何やねん、姉ちゃん!!?!!?」

『苦労ばかり掛けて済まんかった。お前はもう、自由に生きい。…楽しかった、ありがとう小太郎。…天ヶ崎 千草がお前宛に、私に託した伝言だ』

「…巫山つ戯んなあああああつ!!?!!?」



「…じゃあ、行くよ。これからよろしく、千草さん」

「…帰ってからのあの剣士のアーティファクト、調べないとなあ…回収した両面宿儺も再構成しなくちやだし、あく面倒臭い…」

「…上等や、こちらこそよろしゅう、クソ魔法使い共」

…サヨナラや、コタ…。

これより世界は、荒れ始める。

## 関章

### 閑話 話し合いと決裂 想いの行き場

「……では、彼らに対する処遇は此度の件の謝罪と賠償、及び褒賞を執行する。その上で今後は儂等を通して活動を取り行つて貰える様に打診を行う。こんな所で良いかのう？」

近右衛門は周りを見回すが、納得していない様子の顔は数有れど、反対意見を唱える者はいなかった。

近右衛門は満足気に頷くと、ポンと一つ手を叩き、解散の旨を告げた。

「……ふう、そんな訳でなんとか此度は事が収まったわい」

近右衛門は携帯電話の向こうの相手に一件落着を告げながら、手元の報告書に目を落とす。

報告書は、『近衛 木乃香誘拐未遂事件における概要と関係者の行動を記載』の一文で始まっていた。

……まさかここまで事が大きくなるとはのう……

己の見通しの甘さを悔やむ近右衛門に、電話の相手——高畑・T・タカミチは申し訳無さそうな声を上げる。

『すみません、学園長。僕が出払っていなければもう少し事態が大きくなる前に収束出来ていたかもしれません……』

「いや、タカミチ君がおつても儂等の側で真面な対応は出来なかったじやろうて。今回の事件は余りに事が起こるのが早過ぎた。責められるべきは東と西の確執を甘く見過ぎた儂じやろう……」

近右衛門はタカミチの言葉を否定する。

今回の誘拐騒動は、魔法使い達彼らの常識からすれば全てが異常と言えた。

取り分け主犯、天ヶ崎 千草に加担した西洋魔術師二人は、一夜明けた現在に至っても身元が割れていない。関西呪術協会の長にしてかつての大戦の英雄が一人、近衛 詠春を容易く無力化するような凄腕の魔法使いの情報が全く割れていないという現状は、この事件が一筋縄ではいかないことを象徴していた。

『…それにしても、不幸中の幸いという言い方はおかしいかもしれませんが、彼らには感謝してもきれいませぬね…まさか詠春さんがやられる様な強敵を退けた挙句、あのナギが封印することしか出来なかつたあの宿儺を斃すとは…彼らが強いのは身をもつて知つていたつもりですが、僕の見極めは随分と甘かつたようです…』

タカミチの言葉には驚きと戸惑いに満ちていたが、それも無理からぬことだった。

詠春は、一戦を退いて久しいとはいえ、今だ超一流の剣士であることに変わりはない、例え不意をついたとはいえ、そこらの馬の骨にやられる様なことは断じてあり得ない。ましてや両面宿儺は真正銘の『神』の一柱であり、仮に関東魔法協会と関西呪術協会の戦力が集結したとして、再封印を行える迄にどれほどの犠牲が出るか、想像が付かない神格存在だ。

そんな難敵、という言葉が生温い化け物達を、見習い魔法使いと末席の神鳴流剣士、魔法を碌に知らない半素人五人が打倒したのだ。直接現場を見ていない魔法使いの一部が妄言の一言で片付けるのも、決して理解出来ないことでは無い。

「うむ…規格外のアーティファクトが大きな要因であつたとはいえ、彼ら無くして木乃香は無事でいられなかつたじやろう…公の立場を抜きにしても彼らには充分な礼を尽くすつもりじゃ…」

近右衛門はきっぱりと断言する。

裏あつて介入を遅らせたとはいえ、近右衛門の木乃香に対する愛情は本物だ。危機を未然に防いでくれた辻達には組織の長としても一人の祖父としても、近右衛門は感謝していた。

『…僕も当然、異論はありません。ネギ君に彼らは随分と良くしてくれている様ですしね…』

タカミチは近右衛門に同意する。

彼にしても辻達はかつての偉大なる友人の息子を救つてくれた恩人である。例えこれから厄介事に巻き込んでしまうのがほぼ確定してしまっているにしても、出来得る限りの礼は尽くしたかつた。

「うむ…それにしても、フツノミタマか…辻君が彼女に殺されねば

いいがのう……」

「…納得がいかん……」

「杜崎先生、ここまでの事態に発展してしまった以上、彼らはどうあっても我々に無関係ではいられませんよ。学園長は彼らに最大限の便宜を図ろうとしているのかと…」

「解っていますよ、そんな事は…」

明石教授のとりなしの言葉に、杜崎は不機嫌そうに応じる。

「…あの馬鹿共め………」

杜崎は不機嫌だった。彼にとつてバカレンジャーは下らない騒ぎを引き起こしては鎮圧される、麻帆良の馬鹿さ加減を象徴する元気な学生に過ぎなかった。

…これで彼奴らは目出度く魔法関係者、か……

杜崎は苦々しく思う。辻達がネギに今後関わらないという選択肢があり得ない以上、それはほぼ確定した未来だった。

…馬鹿らしく騒ぎながら学生をやつていればよかったものを……

無論、辻達の将来に干渉する権利は杜崎には無い。ましてや現場に居らず、何もしていない杜崎が結果として木乃香を救つてみせたバカレンジャーに対して何も言う資格など無いだろう。だが、それでも……

「…ままならんな、本当に……」

やり切れない思いで溜息を吐く杜崎に、明石教授が微笑みながら告げる。

「杜崎先生は彼らを随分と気にかけていますね、やっぱり手が掛かる程情が芽生えますか？」

その言葉に、杜崎は渋面を更に不機嫌そうに歪めつつ、低い声で返事を返す。

「…個人の生徒を特別扱いはしませんよ。彼奴らが良くも悪くも出張るのに付き合っているのでそう見えるだけです」

…さて、帰って来た彼奴らに、何を言つてやれるのかな、今の俺は…。

「まったく！学園長先生は何を考えているのですか!!？」

「お、お姉様、声が大きいです！落ち着いて下さい…！」

豊かな金髪を冠いた整った顔立ちの少女ー高音・D・グッドマンが、その折角の美貌を憤りに歪ませながら革靴を廊下に響かせ、足早に進む。その少女を宥める様に声を掛ける栗色の髪をした少女ー佐倉 愛衣<sup>メイ</sup>は、此方はまだあどけない、愛くるしいという表現がぴつたりな可愛らしい顔立ちだが、同様に焦りを顔に滲ませていては魅力半減というものだ。

…まあ、美人はどんな顔しても美人だけだな。

その二人の更に後ろを続きながら、篠村 薊<sup>あざみ</sup>はなんとは無しにそんな事を思いながら高音を落ち着かせるべく声を掛ける。

「高音さんよ、愛衣のいう通りちつと落ち着けや。お前ががなっただ上での決定は変わんないんだからさあ」

「そんなことは貴方に言われる迄も無く解っています！口を挟まないで下さい劣等生!!？」

「お、お姉様…!!？」

愛衣の泡を食った反応を横目に篠村は溜息を吐く。

……相当イラついてんなーこいつ…

篠村が高音と共に麻帆良に来てからの劣等生呼ばわりは警備のチームを組む時以来である。

…まあ面白く無え、つてのは解らなくも無いけどなあ……

辻達バカレンジャーの警備員への組み込み。言ってしまうえば高音達魔法生徒と気が扱えるとはいえ最近まで一般人だった素人達が同列に扱われるという事である。プライドの高い高音からすればそれは納得がいかないだろう。篠村とて、思う所が無いと言えれば嘘になる。

…まあこいつの場合は無自覚な上から目線の心配も兼ねてるんだろうけど、拗れ無いといいなあ連中と。

「へいへい解りました。黙っとくよ俺はな」

肩を竦めて篠村が返すと、何故か高音は益々苛立たし気な顔になり、フン！と一つ鼻を鳴らすと前を向きズカズカと足を早める。

再度溜息を吐く篠村に、こっそりと愛衣が忍び寄り、申し訳無さそ

うに囁く。

「すみません、お兄様。お姉様は気が立っているだけですから、余りにされないで下さい……」

「今更だろ？別にどうとも思わんよ。…それより愛衣よ。好い加減俺をお兄様呼ばわりすんの止めれや。お前みたいな娘にお兄様と呼ばせてるみたいないな悪評立ったら俺相当ヤバいことになるからな？」

割と切実なものを込めた篠村の言葉に、愛衣は首を傾げて言い返す。

「え…でもお兄様はお兄様ですし、それこそ今更ですよ？なんで今になって…？」

「いや俺もぶつちやけそんなに気にして無かったんだが、今度紹介される通称バカレンジャーの中に…」

「愛衣！何をやっているの、行きますよ!!？」

篠村の言葉の途中で遅れている愛衣に気付き、高音が声を掛ける。

「あっはい!!？…すみません、お兄様…」

「ああ、いいから行け。…まあ兎に角お兄様は止めてくれ、いいな？」

「はい……」

納得していない様子ながら、愛衣は一礼して高音の後を追う。

「ふう………それにしても世界一の英雄の息子に、どっかに持つて行かれたとはいえ鬼神を斬った剣士か…どうなるのかね、これから………？」

「………ふう………」

自販機で買ったコーヒー片手に、葛葉 刀子は溜息を吐く。

「…流石に古巣の惨状は気が重いか、葛葉？」

神多羅木は紫煙を空に吐き出し、浮かない様子の刀子に問い掛ける。

「神多羅木さん……まあ、それも勿論あります。此方に嫁いで来てから実質絶縁状態とはいえ、生家ですから思う所はあります」

「取り潰しにはならんだろうが今回の一件で半強制的にこっちとの融和は進むだろうからな。主犯の女、此処まで考えて事件を起こしたならかなりあれな女だな、あー怖い怖い」

大袈裟な仕草で肩を抱く神多羅木を半目で見やるが、刀子はやがて視線を落として僅かに項垂れる。

「…本当に元氣無いな、どうした?…」

「…決まってるじゃないですか……」

刀子は恨めし気な視線を神多羅木に向け、

「刹那のことですよ刹那の!?!」

叫ぶ様にそう言い放つ。

「刹那?刹那ちゃんてあの……あゝ」

合点がいったとばかりに手を打つ神多羅木に構わず、刀子は堪えていたものを吐き出す。

「なんなんですかあの娘は!?!?つい最近まで部活動の先輩相手にどう考えても気がある様にしか聞こえない聞いてるこつちがヤキモキする様な無自覚っぷりで話をしていて、全くまだまだ子どもね、って感覚で微笑ましく見ていたのに!!?!それがこの三日間で仮契約バクテイオーって何ですかこの短期間でどこまで進展してるんですか!?!?きっかけがあると今の子達ってどこまで進んじやうんですか神多羅木さん!?!?」

「俺に聞かれても知らんよ……」  
呆れた様な神多羅木の返答も気にせず刀子は取り乱した様子で捲し立てる。

「なんででしょうかこれが若さなんでしょうか……私が元旦那と西を飛び出した時にそこまでの勢いがあったのかしら……ああ羨ましいわ、今の彼もそれ位の積極性があれば私も今頃……」

「おーい葛葉、戻って来い」

いつしかブツブツと現在の彼氏への恨み言をトランス状態で呟く刀子を神多羅木が呼び戻す。

「……っていか仮にも生まれ育ちの故郷があれな状態なのにお前にとってはそつちの方が衝撃的なのか……?」

「あ……すみません、神多羅木さん……」

「まあ落ち着けよ、若い奴らの様子はどうせ今夜には解るさ。……噂に聞く麻帆良トップクラスの問題児達、果たしてどんな奴らなのかね?」

「…糞が、糞野郎がああゴリエツティ杜崎がああああつ!!? 仮にも美少女の危機を颯爽と助けて見せた俺達に対して反省文と補習だど!!? あの類人猿には血も涙も無えのか!!?!!? 別に英雄然としたもてなしをしろってんじや無えがもうちよつと何かあんだろうが畜生おおおおおつ!!? しかも帰って来たその日の夜に全員集合しろ拒否権は無いとか何様じやあああああああつ!!?!!?!!?」

「ギャーギャー五月蠅えよ!!? 覚悟の上でのサボりだったろうが今更喚くんじやねえつ!!?!!?」

夜空に向けて無念を叫ぶ中村に、豪徳寺がこちら半ギレでツツコむ。

「まあ気持ちは解るよ、もしかしたら、なんて淡い期待を抱いていたけど、さすがにそこら辺はきっちりするよねえモツさんは…」

「無断欠席に無断外泊だ、無理もない所か当然の話なのだが、気持ちの上で納得がいかと言うのは確かにあるな…」

隣を歩く山下と大豪院も珍しく気持ちの整理がついていないのか、愚痴めいたことを呟きながら歩を進める。

「…そりゃないだろうとは俺も思うけど、もう言いつこ無しにしようぜそういうのは。賞賛されたくてやったわけでもなければ謝礼が欲しかった訳でも無いんだから… っていうか、謝礼めいたものはもう貰ってしまったし…」

辻は微妙な顔をしながらも、他四人を宥めにかかる。

三泊四日の修学旅行を終え、ネギ達と一緒に帰って来た辻達をホームで待ち受けていたのは生物災害バイオハザード杜崎の姿だった。

反射的に戦闘姿勢を取るバカレンジャーに構わず、杜崎が行ったのはただ一言、良くやった、という言葉を告げると一人一枚の封筒を渡す事だけだった。それきり踵を返し、姿を消した杜崎の静かな対応を、全員不気味を通り越して戦慄さえ覚えながらも貰った封筒を開いてみると、その中には、一枚の小切手と、各々に宛てた手紙が入っていた。手紙の内容は、明日からの放課後の補修の日程と、本日200



0に世界樹前広場に集合というものだった。

「貰った小切手は報酬と賠償ってことらしいけど過剰でしょ明らかに。0が六つついてただけどどういう事？」

「書いてはいなかったが口止め料を込み、ということなのだろうよ。話したところで誰かに信じてもらえらると思わないが、組織というものはこういった手順を踏まねばならないものなのだろう…」

山下の疑問に、大豪院が渋面を作りながら答える。

「いいじゃねえかよ別に。金が欲しくてやったわけじゃ無えが、くれるつつうなら貰つとこうぜ？」

「…ま、確かにな。要らねえってんなら孤児院にでも寄付すりゃいいんだしよ」

中村と豪徳寺が、さしたる金に執着も見せずそんな事をのたまう。

「…それにしてもこの集合ってなんなんだろうな。補習を受けさせるって事は俺たち停学や退学になる訳でも無さそうだし、わざわざ広場に集める要件が想像出来ないんだが…？」

遠目に見えてきた広場を前に、不安そうな声で辻が呟く。

「…あんまり考えたくは無いけど、越権行為も甚だしいつて事で、魔法教師とかが全員で出張ってきて潰されたりしないよね…？」

顔を歪めながら山下が言う。

「はっ、そんな時はこの溜まってる鬱憤を叩きつけて、最低でも半分は道連れにしてやらあ…！」

「まあわざわざ集める以上、そんなことにはならんと思うが…苦言を言われる位の事は覚悟したほうがいいな」

「ま、行ってみればわかることだろう？つべこべ言わずにさっさと行くぜ？」

言い合いながらも、バカレンジャー一行は世界樹前広場に辿り着く。

そこで待っていたのは、老若男女様々な姿の集団だった。

「…おおっと…？」

「…恐らく魔法関係者、だろうね。全員かどわかにはわからないけど、そ

れにしてもこんなに数がいたんだ…」

想像していたよりも大人数の出迎えに、驚いたように声を洩らす豪徳寺に、呆れた様な感心した様な声で感想を吐く山下。

「…よく来てくれたのう、五人共。知っているとは思いますが、僕は近衛近右衛門。麻帆良学園の学園長にして、関東魔法協会の長を兼任しております。話すのはほぼ初めてじゃな? どうか楽にしてください」

バカレンジャーの姿を見て、僅かにざわめく魔法関係者達を手で制し、近右衛門が代表して声を掛ける。

「…どうも、学園長先生。初めまして、辻 はじめ 一です。本日この場に私達が呼ばれたのは、学園長先生の孫娘である近衛さんの一件に関わることを思います…」

無難に挨拶を返し、探りを入れる辻に近右衛門は頷き、言葉を返す。

「まさしくその通りじゃ。先ずは色々ややこしい組織の長としての建前や、情勢なんぞは脇において、一人の孫馬鹿の祖父として礼を述べさせて貰うぞい。…此度の一件、うちの木乃香を助けてくれて本当にありがとう。心から御礼を言う」

そう言つて深々と頭を下げる近右衛門に、バカレンジャー一行は毒気を抜かれる。とりあえず姿を見せたら、不審な対応について洗いざらい文句を述べてやろうと身構えていた中村さえも、真摯に礼を述べていることが一目で解る近右衛門に対して、流石に罵倒からは入れなかつたようだ。

「…此方としては、自らの義に依じて行動をした迄です。礼はありがたい受け取らせてもらいますが、失礼ながら学園長先生。それだけのためにここまで俺達を呼び寄せた訳では無いでしょう? 早速ですが事の真意を述べて頂きたい」

大豪院が礼を受け取るのもそこそこに、集会の目的を単刀直入に問い直す。

「おい、君…」

「些か失礼なものの言いようじゃ無いかね、それは…」

見ようによっては近右衛門を軽んじているとも取れる大豪院の態度に、魔法関係者の一部が咎める様な声を上げる。

だが、近右衛門は再び手を上げてそれを制する。

「よい、大変な苦勞をして帰って来た矢先にこんな時間に呼び出されたのでは疑問、不満が出るのは最もな事じゃ。それについては改めて無作法を詫びよう…君達については要点だけを簡潔に話した方がいい様じゃから、ならば早速本題に入らせて貰おう」

近右衛門は辻達の顔を順繰りに見やりながら話し出した。

「初めに言っておくが、これから君達に行く提案は決して強制するものではない。あくまで聞いて貰えれば此方側が助かるというだけの話で、断つてもなんら君達に危害は加えないと約束しよう」

それから近右衛門が話し出した内容を要点だけで纏めると、辻達の腕を見込んで、学園で魔法関係者の一員として今後は働いてみないか、というものだった。辻達が近右衛門を中心とした魔法関係者達の対応に色々と納得のいかない点があるのは理解している。しかし、言葉を選ばなければ単なる部外者である辻達に踏み込んだ話は今の立場では出来ない。故に組織の一員として参入して貰えれば、事情を説明することも出来るしネギを助きたい、という辻達の希望にも可能な限り組織的に協力も出来る、とのことだ。

「…つまり自分達の側に取り込んで、下手な事仕出かさ無え様にしてからじゃねえと、事情も説明しねえってか？」

一通り話を聞き終えて、中村が剣呑な口調で近右衛門に問い直す。「そうキツイ見方に取り込んで欲しいものじゃが…そうじゃな。言い方はアレじゃが中村君の言う通りじゃ。差し障りの無い範囲で言い訳をさせて貰うなら、月並みな言葉じゃが儂等にも事情がある。軽々しく話せぬ内容である以上、恩がある君達相手といえど此処は譲れぬ点じゃ。儂等は決して悪意があつてネギ君に対し傍觀を決め込んでいた訳では無い。納得し難いじゃろうがこの提案、飲んで貰えんかのう？」

「巫山戯んなジジィー!!?」

中村が爆発する。

「黙って聞いてりゃ調子良いことばっか抜かしやがつて!!? 結局当たりの柔らかい言い方してただけで要はこつちを黙らせて今後も良い

ようにやっつてこうつてだけの話じゃねえか!!? つべこべ抜かしてねえで今直ぐネギに対する盛大な集団放置プレイの訳を説明しやがれオラア!!? 人数揃えときや言うこと聞くと思ってたんなよジジイ!!? !!?」

「おい、止めろ馬鹿!!?」

「此処で喧嘩売って良い事なんて何も無いって!!?」

その他の四人が暴言を吐き散らす中村を止めにかかる。近右衛門は苦笑し、いきり立つ中村を宥め様とする。

「フオッフオッフオッフ、中村君や、君の」「いい加減になさい、この無礼者!!?」「フオッフ!!?」

しかし、近右衛門の言葉を遮って魔法関係者の人垣の中から一人の少女が現れる。

「先程から黙って聞いていれば何ですかこの野蛮人!!? 学園長先生が下手に出て話していれば付け上がって好き勝手なことをベラベラと!!? 事情と顛末も真面に理解し得ない素人が調子に乗るのも大概にすることね!!?」

その少女――高音は後ろで引き留めようとする少女と少年を振り切って前に進み出ると中村に対峙する。

「ああ!!? 誰だてめえは、今の俺あかつて無い程に氣い立ってんだ、別嬪だからって承知しねえぞオラア!!?」

「承知しないとは此方の台詞ですわチンピラ!!? 何も知らない癖に偉そうにベラベラと、だから貴方達のような勘違いした素人を無私の心で公の為に心身を尽くす、私達魔法使いの側に迎え入れようなどという話には反対だったのです!!?」

「は!!? 言うに事欠いて何ほごくかと思えば自分らを正義の味方だとも思ってたのか笑わせてくれんぜ幼気なガキ見殺しにしようとした弱い者虐め集団がどの面下げてほざいてんだバアアアアアアカ!!?」

中村の罵倒に高音の怒りに歪んだ顔が無表情になり、身体の各所で黒い何かが蠢く。

「…その汚い口を今すぐ閉じないと私が口を聞けなくして差し上げま

すわよ……!」

対する中村も剣呑に目を細めると、腰を落として構えを取る。

「上等だオラ、そつちこそ舐めた口聞けなくしてやんよ……!!?」

高音と中村が今にも激突せんとした、その時。

「止めろつつってんだろ中村!!?」

「先走んな落ち着け高音!!?」

辻と篠村がほぼ同時に二人の間に割って入る。

「つ!どけや一ちゃん!!?あんな舐めた口上、聞き逃していいと思つてんのかおい!!?」

「んなことは言つて無い、兎に角今は下がれ中村!!?ここでムキになつて噛み付いた所でこつちの要求が通る筈無いだろうが!!?」

「誰が貴方に出て来いと言いましたか!!?下がつていなさい、劣等生!!?」

「巫山戯るな!!?それを言うなら誰がお前に前に出ろつて言つたよ!!?気持ち解らんとは言わねえが、分を弁えろバカ女!!?」

尚も言い募ろうとする両者を双方の陣営が止めにかかり、場が混然と成り始める。

「静まれい!!?!!?」

近右衛門の鋭い一喝が広場に響き渡り、揉み合いになりかけていた両者と周りがピタリと動きを止める。

近右衛門は一つ息をつき、静かに場を平定しに掛かる。

「中村君、辻君達。話を進めるには少々性急に事を運び過ぎた様じゃ。必ず改めて場を設ける。呼び出しておいて済まんが、今日の所は帰つて貰えんかのう?」

「…はい、こちらこそ無礼な言動の数々、お許し下さい」

「おい……!!?」

「黙れと言つている、馬鹿が!!?今日の所は帰るぞ!!?」

近右衛門の謝罪に、辻も頭を下げて謝罪を返し、尚も文句あり気な中村の首根つこを大豪院が締め上げ、黙らせる。

「うむ、それでは皆の衆。今日の所は解散じゃ」

「学園長先生!!?」

思わず声を上げる高音の方を静かに近右衛門は見やり、語りかける。

「高音君、君が誇りを持って麻帆良で勉強に、職務に励んでいるのは理解しているつもりじゃ。しかしそれと同じだけの理解をを前提に、他人に意見を押し付けるのは少々いただけんのう。君の言い分も解かるが、彼らは事情も知らぬながらに、こちらの失態をカバーしてくれた言わば恩人じゃ。正当性を笠に此方の主張ばかりを認めさせようと言う言い方は控えなさい」

「っ!!?……申し訳、ありません……」

近右衛門の静かな、しかし力強い叱責に、高音は一瞬悔しそうに唇を噛むが、やがて深々と頭を下げ、謝罪した。

近右衛門は頷くと、改めて全体に解散の旨を告げた。

「……っていう感じでさあ。一気に魔法関係者の反感を買っちゃったんだよねえ、多分……」

「ははははは!!? 仮にも関東最大の魔法組織の本営を相手になんとも威勢のいいことだ!!? 矢張り貴様らは面白いなあ、おい!!?」

山下の話を聞き終えて、エヴァンジェリンがさも愉快そうに笑い転げる。

山下は話し合いが決裂に近い形で終わった次の日に、エヴァンジェリンに修学旅行での土産を届けるべくエヴァンジェリン宅を訪れていた。エヴァンジェリンは山下の姿に眉根を上げ、決して歓迎はしていなかったが、山下のお土産の内容と、昨晚の話の顛末の概要を聞かせると、暫し考えた後に訪問を許した。まずは話の方を聞かせろとせがむエヴァンジェリンに山下が語って聞かせた挙句が先程の反応である。

「色々笑い事じゃ無いんだけどねえ……絶対口に出さなかったけど僕らに不満がある人間、一人や二人じゃなかったと思うんだ……」

「ふん、私の知ったことでは無いな。連中の正義面は私としても気に食わん、空手屋の小僧を心情的には応援してやりたい気分だ」

「勘弁してよ……そりゃ僕らも学園長達の対応は引っ掛かるけどさあ

…」

他人事なのをいいことに面白がつているエヴァンジェリンにゲンナリしながら山下は力無く反論する。

「…まあそれはいい。貴様も私に意見を請いに来た訳では無いだろう？それよりも、一体貴様どういうつもりだ？」

「どういふつもりって？…ああ、お土産のこと？別に他意は無いよ。ネギ君から話を聞いて、何と無く持ってきてあげたくなっただけだから」

山下のあつけかんらんとした物言いに、エヴァンジェリンは苛立たし気に目を細める。

「それが解せんと言っている。私と貴様らは殺し合った仲だぞ？貴様が私にこの様な気を使う理由が無かるうに？」

「あはは、それ桜咲ちゃんにも言われたなあ。まあ理由なんて何でもいいじゃない。僕はこれに対して何の見返りも要求しない。本当に唯の善意だからね。っていうか、エヴァさんは見たく無いの？だったら持つて帰るけど？」

「ぬ……………」

悔し気に唸るエヴァンジェリンに、はい決まり、と朗らかに山下は告げ、黙って傍に控えていた茶々丸にビデオデッキある？と問い掛けた。

「…これが多分ネギ君のお父さんの書斎でさ……………」

「…ふん……………」

山下は茶々丸が用意したビデオデッキで撮つて来た映像を流しながら場面の解説をエヴァンジェリンにする。エヴァンジェリンは大きな反応こそ返さないものの、目はしっかりと見開き、大人しく山下の解説を聞いていた。

山下は内心そんなエヴァンジェリンの様子を微笑ましく思いながら熱心に解説を続ける。

「それでさ、ほら写真が映ってるでしょ？随分若いけどこれネギ君のお父さんだよな？ネギ君ったらこれを見て長さんに熱心に質問を繰り返してさあ…」

その時の様子を思い返ししながら、山下はふとエヴァンジェリンの顔を見て、思わず続く言葉を失った。

エヴァンジェリンは映像に映る写真を見やりながらなんとも形容し難い、愛しさと切なさ、憎しみの入り混じった、なんとも言いえない人臭い表情で、ナギ・スプリングフィールドの写真に見入っていた。

暫く無言のまま時が流れ、ふと我に返ったエヴァンジェリンが、黙り込んだ山下に不審そうに声を掛ける。

「…おい、どうした？人の顔をぼけつと眺めて…？」

山下はエヴァンジェリンの言葉にハッと我に返り、慌てて無作法を詫げる。

「あ、ごめんなさい…！女性の顔をジロジロ眺めて、失礼な真似をしました！」

頭を下げる山下を鬱陶しそうに手を振って不問に処し、エヴァンジェリンは続きを促す。

「…別に構わん。惚けていたのはこつちだからな。それよりも続きを話せ」

「了解。それでね…」

解説を再開しつつ山下は、先程のエヴァンジェリンの様子を内心で思い返す。

…なんだろう…：…凄く真摯に恋してるんだなあ…この女性ひとは

……

…こんなに想われながら、何してるんだよ、ネギ君のお父さんは

……

… 僕なら絶対、放って置かないのになあ……



### 三章 武道家達と少年の転機

#### 1話 現在把握 少年の望む力

「昨日はやってくれたな馬鹿共」

魔法関係者との話し合いから一夜明け、休日だというのに朝から学校で無断外泊分の補習を行っているバカレンジャーに対して、教室に入ってくるなり杜崎が開口一番に放った言葉がそれだった。

「違うんだよモツさん。あれは中村が先走っただけで、僕らの総意じゃないってば」

「あそこまで全面的に喧嘩売るつもりは無かったんだよ俺らは」

「そちらに対して思う所はありますが、先ず話を聞いてからでなければ否定も肯定もできませんので。完全にその阿呆の所為です」

「…まあ全部言われてしまったので俺から言う事は何もありませんが…とりあえず中村が馬鹿です」

「うるせええええええああ!!?だから悪かったつつつてんだろが昨晚から何遍もよおおおおお!!?」

他四人からの総スカンに、中村が絶叫を轟かせた。

「昨夜の一件で主に若手と古残の連中から貴様らは反感を買ったな。少なくとも人数がお前達の関係者入り再検討を具申しているらしい」「はっ!!? 元から入りたいたいなんて言ってますく〜!」

バカレンジャーに補習のプリントを黙々と解かせながら、合間に昨晩からの状況説明を行った杜崎の言葉に、中村が子どものように舌を出して反論する。

「だから何遍も言ってるだろ。どっちにしろネギの奴に関わってくのに、魔法関係者とやらとノータッチじゃいられ無えんだよ俺らは」

「どうやったって僕らより、関東魔法協会の組織の方がネギ君に対して干渉する時の権限が強いんだから、言ってしまうえば最低でも協力関係まで漕ぎ着けないと、多分僕らこのまま締め出されるよ?」

「そういうこと。だからキれるな熱くなるなと言ったのにお前って奴は…」

「……………う……………む……………」

中村が辻達の意見を受けて考え込む。思考回路がとことん単純に出来ている中村でも、状況があまり思わしくなくことを理解出来てきたらしい。

「…というか貴様ら、どう取っても組織に諸手を挙げて協力しない旨を、その組織の一員である俺の前でよくもまあベラベラと言えるものだな……………」

黙って辻達の言い合いを聞いていた杜崎が呆れた様にそう告げる。

「…杜崎教諭はわざわざ俺達に告げなくてもいい己の組織の内情を晒しているのです。それは俺達に一定以上の信用を置いてくれていて、尚且つ心配もしてくれているのでしよう？告げ口のような真似はしないと、こちら勝手に信用させてもらいますよ」

「……………ふん」

大豪院の返しに何故か不機嫌そうな顔で鼻を鳴らし、杜崎は追加のプリントを用意し始める。

「…あ……………もう面倒臭え!!？ゴリポン先生よ、そっちの事情とやらをもう説明しちまってくれよう!!？」

暫し黙ってプリントを仕上げていたバカレンジャーだが、やがて色々鬱憤の溜まった中村が立ち上がって杜崎に両の人差し指を突き付け叫ぶが、直後にゴガン!!？という轟音と共に脳天に杜崎の拳骨を喰らって再び座席に沈む。

「杜崎先生と呼べ、馬鹿が。そしてその要望に対しての答えはNOだ」  
「痛つてえ……………この暴力教師が!!？この中村様に対しての不当なぶべっ!!？」

言葉の途中で杜崎の正拳突きを顔面に喰らい、中村の頭が後方に跳ね飛び、バネ仕掛けの人形のように戻ってくる。

「なんで殴つたんだよ今!!？」

「何と無くだ」

すげ無く返して杜崎は新たなプリントを中村の前に積み上げる。

中村はうげえ……………という顔をしながら、杜崎に対して疑問をぶつける。

「らしく無えぜモリモリ……………何時もの糞がつく程厳しい教師っぷりは

どうしたよ？ガキ苛めて楽しいかよ？」

「楽しい訳が無かろうが」

中村に負けず劣らず渋い顔つきで、吐き捨てる様に杜崎は返す。

「ゴリ…」

「杜崎…」

「モツさん…」

「先生…」

「杜崎教諭…」

「貴様らは辻と大豪院以外揃いも揃って……!!？」

青筋を立てる杜崎だが、やがて脱力したようになりと頭を落とすと、後ろを向いて静かに語り始める。

「…貴様らへの対応は上と相談して決めるものだ、俺の独断で勝手に情報は流せん。…俺から言えるのは例え話を聞いても貴様らは此方に賛同などしないだろうということだ」

「…碌でもない話かよ？」

豪徳寺が尋ねる。

「……そうだな、碌でもない話だ。個人的にはお前らと同じ気分だよ、糞食らえとな。…だが俺は麻帆良学園の教師であると同時に関東魔法協会に属する一魔法使いだ。組織に属すると決めた時に、個人の意見が全体と食い違った時、己を無いものにする<sup>……</sup>と決めている。…集団に組するとは、そして働くとは少なからずそういう部分がある。お前達もその内解るだろう。だが、勘違いするな？俺は上を言い訳に使うつもりは無い。組織の決定に従う事は、俺が自分で納得して決めたことだ」

背を向けた杜崎の体に力が入る。

「お前達は未だ曲がらず正しい。俺を汚い大人と罵倒する権利がお前達にはある。…現状に納得がいていない気持ちにはよく解る、だから文句があるならば好きに俺に言え。その上で、本気でネギ・スプリングフィールドの力になりたいと思うのなら全体を見て一時的な妥協も覚えろ。特に中村、お前だ」

「ぬぐっ……」

呻く中村に構わず、杜崎は話を続ける。

「俺達の手は長い。はつきり言うが、お前たちがどう頑張った所でネギ・スプリングフィールドへの干渉を防ぐなど不可能だ。…だから自分達が出来ることを精一杯考えろ。俺はお前達に協力出来ん、言つてやれるのはそれだけだ」

杜崎は辻達に向き直り、変わらぬ厳しい表情のまま最後に告げた。「俺は無論だが、貴様らも暇ではあるまい？ さっさと課題を終わらせろ」

「思ったより時間が掛かっちゃった

な畜生…」

「時間ギリギリだねえ」

辻達は陽が落ちてから暫くしてようやく課題を終わらせ、ネギ達との待ち合わせ場所に急いでいた。

今朝方ネギから全員宛にメールで連絡があり、内容は『本日会つてお話し出来ませんか？明日菜さんやのどかさん達の事、そして僕自身のことでは是非とも皆さんと相談がしたいのです』というものだった。補習が入っていた為日中時間を開けられなかった辻達は、午後遅い時間に待ち合わせ時間を設定し、こうして急いでいるのだった。

「ここまで余裕が無いのは貴様の頭が悪すぎるからだ、バカ村が」

「本当にな、なんでお前はかけ算も満足に出来ないんだ小学生以下！」

「うっせー!!？生きていく上で必要無えんだよあんなもん!!？」

「かけ算は要るだろう、流石によ…」

馬鹿なやり取りを続けつつ、待ち合わせ場所の公園に赴くと、すでにネギ達は到着していた。

「ようネギ、悪いいな脳無しの所為で遅くなったわ」

「本当にごめんね、ネギ君、神楽坂ちゃん達も。頭の出来だけ小学生な男の所為で。待たせちゃったかな？」

「此方から時間を指定しておきながら申し訳ない。全ては阿斗アドウの所為

だ」

「うん、脳味噌お花畑男の所為だからどうか俺達を責めないでくれな  
いか?」

「喧嘩売ってんのか殺すぞお前ら!?」

「…成る程。ネギ君の要望は一先ず置いておくとして、宮崎ちゃんと  
綾瀬ちゃんは魔法の関わる世界について知りたい、もつと言うなら宮  
崎ちゃんは出来ればネギ君の力になりたい。ゆえにこのまま知らな  
いふりをして、ネギ君と僕らの関わる裏事情から遠ざかりたくは無  
い。纏めるとそんな所かな?」

昼間、既に自分達だけで軽く話し合っていたらしく、意思の固まっ  
ているのどかと夕映の意見を聞いて山下が要点を纏める。

「は、はい…私なんか何かお役に立てるなんて思えないですけど、  
…それでも、少しでもネギせんせーのお役に立てるならって、…そ  
う考えています…」

余程恥ずかしいらしく、後半の台詞は後のネギ達に聞こえないよう  
に囁くような声量になりつつも、のどかは最後まで言い切った。そん  
なのどかを見て薄く微笑みながら、夕映もはつきりと辻達に告げる。

「私はのどか程褒められるべき高尚な動機はありませんが…この学  
園、私達が飽くなき探究心を持って挑んでいる図書館島。これらには  
全て魔法使いが関わっていると、私は推測しています。まだ見ぬ新し  
い世界、私はそれらについて少しでも多くのことを知りたいのです。  
…危険があるのは素人なりに理解しているつもりです。私に出来得  
る範囲で皆さんにご迷惑がかからないよう、最大限の努力を尽くしま  
す。私も仲間に、入れて頂けませんでしょうか…?」

のどかと夕映はこの上無く真剣に辻達を見据える。

「…うーん…」

バカレンジャーは各々何事かを考え込み、代表するように山下が  
困ったような唸り声を上げる。

「あ、あの、僕は危険だからって止めたんですけど…」

「いや、ネギ君。単純に僕達も駄目だと言いたい訳じゃないんだ。ま  
あ二人共、言いたい事はしっかり理解したから、先ずは少し落ち着い

て。僕らの返答は、まずは話をしなきゃいけない全員のことを聞いてからにしよう。じゃあ、次は神楽坂ちゃん」

「あ、あたし?」

やや面食らった様に自身の顔を指差す明日菜に、山下は頷く。

「うん。神楽坂ちゃんは既にぼっちり荒事に巻き込んでしまったけど、だからって今後も事件が起こった時に戦力として当てにする気なんて僕らには無いよ。神楽坂ちゃんはあくまで一般人なんだから。まあ、宮崎ちゃんと神楽坂ちゃんはネギ君と仮契約パクテイオウを交わしちゃってるからまるつきり無関係ではられないんだけど、それもやり方次第でどうしても出来る話だからさ。神楽坂ちゃんのしつかりした希望を聞きたいんだ」

明日菜は山下の言葉を聞いて、目を閉じて考え込む。やがて目を見開いた明日菜は、しつかりとした強い視線で山下の目を見返し語り始める。

「…ありがと、山下先輩。でもさ、私の意思は、もう決まっちゃってるんだ」

明日菜はネギの頭に軽く手を置き、髪を緩く梳きながら言葉が続ける。

「こいつ、何かあったらすぐにわたわた慌てて、なくんか頼り無いところあんよ。まあ、まだガキなんだから当たり前なんだけどさ。その癖なんか色々頑張ってるじゃない? あたしガキは嫌いだけど、頑張ってる奴のことは、ガキだろうが何だろうが嫌いじゃ無いのよ。本屋ちゃんや夕映ちゃんに偉そうに何か言える程、あたしも何か出来る訳じゃ無いけど……ネギの事、助けてやりたいって思うの。だから先輩達、先輩達の邪魔にならない様にあたしも努力する。だからあたしも力にならせて」

明日菜ははつきり、そう言い切った。

「あ…明日菜さん……!」

「な、なによ……って何で涙ぐんでんのよ大袈裟なガキねー!」

明日菜の言葉に感動して目を潤ませているネギの頭を、顔を赤らめながら照れたように明日菜がかき回す。それをのどかが微妙にやき

もきした様子で眺めているのが、なんとも青春という感じである。

「…へーいへい、ご馳走様です」

「僻むなバカ村。ならば朝倉、貴様はどうだ？」

大豪院の問いかけに、朝倉は苦笑しながらも答えを返す。

「うーん、明日菜つちの言葉の後じゃあ、なんとも巫山戯て聞こえるかもしれないけどさ…あたしはあたしのジャーナリスト魂つて奴の元に、夕映つちとはまた違う理由で魔法使い達の世界つてのを知りたいんだ。あ、心配しなくても先輩達の忠告も意見もしっかり覚えてるよ。…その上であたしは関わりたいて思う。あたしもさー、伊達や酔狂でジャーナリストこんなことやってるんじゃないのよ。巫山戯て……することは時折あるけど、あたしはあたしなりに、真剣にこの道歩んでるつもり。だからこんな特大ネタ、放っておくなんてあり得ないのよ。あ、勿論ネギ君の事情は解ってるから記事にしたりはしないからさ、お願い！あたしも一口噛ませてよ、先輩達」

口調は軽いながらも、真剣な顔で朝倉が手を合わせて頭を下げる。

「…んーじゃ、近衛ちゆわんよ。あと桜咲ー？、お前らは？」

中村の問いを聞いて、木乃香は困った様に微笑み、言葉を紡ぐ。

「んー……ゴメンなあ先輩達……ネギ君らから話聞いて、ウチなりに考えてはいたんですけど、ウチはまだどうしたいか……って具体的に決められへんのです……」

「お嬢様…」

心配気に声を掛ける刹那の手を、木乃香は小さく笑って握りしめ、言葉を続ける。

「ネギ君達にも、先輩達にもウチはすんごいお世話になりました。せやからウチも力になれたらなあ……とは思うとるんです。…でも、ウチは正直修学旅行の事思いつくと、怖くなつてしもて……またあんな事あつたらしく思うと、明日菜やのどかみたいに胸張つて力になりたい、なんていう覚悟はあれへんし、かと言って夕映や朝倉みたいに、好奇心や知識欲、なんてものに任せて飛び込もうと思える程の情熱も無いんや、つて自覚出来てもおて……でも、ネギ君や先輩達がなんや危ない目えに遭うつてなつたなら、ウチはそれを知らんふりして過ごして

たくは無いです。まとまった返事にはなつてへんのですけど、これがウチの今の正直な気持ちです……」

「…OKー、全然それでいいぜ、近衛ちゃん」

中村の言葉に刹那も頷き、続いて語り始める。

「私の意思は既に決まっています。修学旅行の一件ではネギ先生や先輩方には多大な恩を受けました。皆さんは、恩に着せるつもりは無い、などと仰るのでしょうか、恩や貸し借りなどと言う言葉に囚われず、私はネギ先生や先輩方に協力したいと思っています。お嬢様」「せつちゃん……」「……、このちゃんがどういった選択肢を選ぼうと、私は私に出来る範囲で、全面的に力をお貸しします！」

刹那は迷い無く宣言した。

「……じゃあ長瀬は中村から一応話を聞いちゃあいるからいいとしてよ……」

「……古、貴様がここに居る訳も一切切包み隠さずに話せ……！」

豪徳寺が苦笑しながら放った言葉を大豪院が低い声で遮り、古に問い掛ける。

「ふつ、ポチ風情に語る口は持たないアルが、仕方ないアルねく特別アルよ……？」

「叩き返すぞ貴様……！」

「キレるなよ大豪院。それで？古ちゃん」

いきり立つ大豪院を手で押さえ、辻が促す。

「うむ、私の理由は簡単アル。ネギ坊主が、明日菜や木乃香達が危ない目に遭うならば、一人の武人として見過ごせない。それだけアル!!？ポチは私を子ども扱いして遠ざけるアルが、私だて鬨えるアル！大体楓の参戦を中村は少なく共認めたと聞いているアルよ！楓が良くて私が駄目な理由は無い筈アル!!？」

「貴様は……！」

「へいへい、嫁が心配なのも解るがポツチン。先ずは全員にあべし!!？」

「誰が誰の嫁だ!!？」

「何故に私がポチの？人アルかあ!!？」



茶化しながらも大豪院を宥め様とした中村が大豪院の冲挿と古の炮拳を喰らって宙を舞う。錐揉み回転しながら八m程も飛んだ中村が、潰れる様に着地しながら怒鳴る。

「仲良く殺人的なツッコミ入れてんじゃねーよカン夫婦!? 折角人が珍しく真面目に話進めようとしてたのに!? あ、カン夫婦つてのはカンフーと連中の出身の中華の前時代の漢の、二つを夫婦にかけてだな…」

「どうでもいいし、そもそも大して上手く無いよ馬鹿」

辻が面倒臭そうに遮る。

「…ま、まあ兎に角、一応皆の主張は解ったかな?」

唐突に目の前で繰り広げられたバイオレンスな光景にのどかがアワアワと震え、夕映が目を丸くしているのを見て、引きつった笑みを浮かべつつも山下が軌道修正を図る。

「だな。ちっと待ってろよお前ら」

豪徳寺がネギ達に待ったを掛け、遠くの中村を呼び寄せてバカレンジャー五人で車座になり相談を始める。

「な、なに話してるんだらう、ゆえく…?」

「…まあ中八九私達をどうあしらうか、でしょう。仮契約バクテイオーとやらをしているのどかは兎も角、私等のはつきり言って、現状邪魔にしかならないですからね…」

微妙に悔しそうな表情になりながらも、夕映はのどかの疑問に答える。

「まーまー、んな悲観的にならなくてもいいじゃん? それを言ったらあたしもあんま役に立たないし、あの先輩達のことだから悪いようにしないって」

朝倉がそれを聞いて苦笑しながらフオローする。

やがて辻達が相談を終え、ネギ達の元に帰って来る。

「皆。俺達で皆の要望を検討してみた。別に俺たちはこの中では年長者だけど、俺達の決定に絶対に従えとは言わない。でも君たちの性格や実力を加味して、検討した上で出した結論だから、できれば素直に言うことを聞いてほしい」

辻の言葉に、その場の全員が固唾を呑んで次の言葉を待つ。

「…手っ取り早く結論だけを先に言う…基本的に皆魔法には関わっていないと俺達は判断する」

「……は………？」

夕映は思わず間の抜けた声を上げる。諦めるつもりは毛頭無かつたとはいえ、一発で色良い返事が貰えるとは思っていなかった故にある。

「理由としては、先ず大事なものを一つ。別に君達に魔法の事を教えて共に過ぐすのと、危険な目に遭わせることはイコールじゃ無いからだ」

次の言葉に、全員あまりよく意味が理解出来ない、という顔で辻を見返す。

「…詳しく説明するとね。君達が勘違いしている点として、別に魔法関係について見聞を広めたい、現状役には立たないが力をつけて戦力になりたい。それ自体は別に俺達に止める権限も無ければ拒否する様な無謀な言い分でも無いんだ。別に俺達は長瀬ちゃんや古ちゃんみたいに即戦力になる存在を求めている訳じゃ無い。俺達は戦力なんて君達に現状求めていないんだ。別に戦闘に君達を駆り出さなければ、魔法について学ぼうが何をさせようが基本的に問題は無いだろう？…長瀬ちゃんや古ちゃん、桜咲は、それを望んでいるみたいだけど、基本的にこの三人は力を持っていて荒事でも自分の面倒は最低限自分で見られる、だから問題は無い。綾瀬ちゃん、宮崎ちゃん。朝倉や神楽坂ちゃんは、荒事にさえ参加させない様にすれば関わるだけなら問題無いさ」

言い切る辻に、ネギが躊躇いながらも不安そうに声を上げる。

「……でも、辻さん………」

辻は安心させるようにネギに微笑み、話を続ける。

「…勿論、俺達が関わらせないようにしたからといって、絶対に危険が無い訳じゃない。勘違しないで貰いたいが、俺達は絶対に安全を保証出来る訳では無い。無論君達の安全において全力を尽くすつもりだけど、物事に絶対は無い。君達が危惧した通り、危険な目に遭うこと

もあるかもしれない。もう一度言うけれど覚悟を決めて自ら望んで踏み入るなら、俺達に止める権限は無い、好きにすればいいんだ。：それを覚悟の上で関わるなら、俺達はこれ以上何も言わない。：近衛ちゃん」

「は、はい!!?」

唐突に声を掛けられ、やや慌てて返事をする木乃香に、優しく笑い掛けながら辻は告げる。

「俺達は答えを急かすつもりは無い。君の善意からの気持ちも、修学旅行で味わった恐怖も、俺達はよく理解しているつもりだ。自らの方針を決められないからといって、俺達は君を蔑ろにはしない。ゆっくり考えて、答えを出してくれ」

「…辻先輩……」

瞳を揺らしながら呟く木乃香に辻は頷き、改めて全体に告げる。

「以上だ。俺達の意見を踏まえた上で、改めて関わるかどうかをよく考えてくれ」

辻の言葉に、全員が真剣な顔で頷いた。

「……さて、話が一段落した所でネギ、改めてお前に対して質問がある」

全体の方針が決まり、一息着いた所で大豪院がネギに問い掛ける。

「は、はい!!?」

緊張した顔で返事を返すネギ。

「お前は最初に言ったな。修学旅行で自分の力不足を痛感した。だから周りの皆を守る程に強くなりたいと」

「…はい……!」

ネギは大豪院の言葉に頷きを返す。

「…その志自体は立派なものだ。男の子ならば、守られるままで居たく無いという気持ちも、守りたいという決意も、子どもだからといって俺達は否定はしない。：しかし、ならばネギよ。お前はどのような強さを身に付けたいのだ?」

「えっ?」

想定外の問いに、疑問を返すネギに、大豪院は続けて告げる。

「改めて宣言するまでも無いことだが、達は今後もお前や周りの皆に何かあったのなら無条件で手を貸そう。まだまだ至らぬ所のある俺達だが、今後は長瀬や、認めたつもりは無いが古までもが力を貸すと言っている。つまり現状立派に戦力は整っていると言えるのだ。：この状況でお前はどんな力を望むというのだ？」

## 2話 特訓 特訓 更に特訓

巨大なボクシンググローブを付けた右拳がネギの眼前に迫る。

「う…わっ!!?」

ネギは疎みかける体を何とか動かし、半ば倒れ込む様になりながらも、一撃を右に躲した。

「わぶっ!!?」

しかし、直後に突き出された矢張りグローブ付きの左拳がネギの顔を捉え、ボスリという鈍い打撃音と共にネギは後ろに倒れ込んだ。

「大丈夫かくネギ?」

残心を取ってからネギを打ち倒したグローブの少年―中村がネギの腕を掴んで立ち上がらせつつ、尋ねる。

「は、はい…大丈夫です」

ネギは赤くなった鼻の頭を空いている方の手で押さえながら返事を返した。実際に打撃を喰らったにしては何処も痣になったり出血してはおらず、先程の一撃が相当に手加減されていた事を伺わせていた。

「ん、ならいい。但しナンボ怪我になんねえ様に力抜いてるからって、当たり所が悪けりや最悪障害が残る様なダメージ入んだ。少しでも調子が悪いと思ったら隠さずに言えよ?」

「はい」

ネギの返答に満足気に中村は頷くと、ネギに対して先程の動きで何がいけなかったかを伝え始める。

「いいかネギ。さっき俺の右拳をお前は俺から見て左に躲したけど、そうすると空いた俺の左拳が届き易い俺の正面にお前は移動しちまうだろ? こういう場合は俺の外側へ逃れる様にした方が良く。今の場合だと俺から見て右だな。勿論最善な回避位置なんてのは時と場合で違うから常にそうしろなんて言わねえ。動いた先の展開で自分が少しでも有利になる様に考えて動くんだ、ネギ」

「はい!!?」

ネギは元気良く返事をする。

「よつしや!!?まだ時間あつからもう一回行くぞ!構えい!!?」

「はい!!?」

「ネ、ネギせんせく……」

「大丈夫です、のどか。中村先輩はこういう所でいい加減な人では無いですよ。大事にならない様に手加減してくれている筈です」

「…にしてもやっぱり全然駄目ね…避けるだけでもあんな難しいんだ……」

「それはそうだよ。言つてしまえば人をぶつ倒すことだけ考えて生きてる人種だもの、おれたち武道家は。ドーピング魔力強化で付きとはいえ真面に喧嘩もしたことが無い十歳児なんて勝負さえ成立させない位じゃ無ければこれまでの修行が浮かばない。寧ろ始めて数日であそこまで動けてるネギ君、破格に筋が良いんだけどね…」

時間帯はまだ陽も登り切らぬ早朝、話し合いから早数日、ネギは辻達と強くなる為の修行を開始していた。現在は兎に角真面な対人戦闘経験の全く無いネギを、一先ず戦闘において動ける様にする訓練を行っている。

話し合いの際、ネギは大豪院の質問に対して明確な答えを返せなかった。

「強さの違い……ですか…?」

「ああ」

大豪院は頷く。

「一口に強さと言つても色々な定義がある。肉体的だけでなく精神的なものも指すが、この場合でお前が求めているのは所謂『腕っ節』の強さだろう」

「は、はい…」

ネギは戸惑いながらも頷く。

「…おそらく今のお前は漠然と力を着けたいと思つているのだろう。しかしな、目的意識を持たずに闇雲に鍛錬をしても、ある一定以上の強さは身につかないものだ、ネギ」

大豪院はキツパリと言う。

「お前はこういった理由で、どういう風に、どれ位強くなりたいのか？  
：今直ぐに答えを固めろとは言わん。お前の歳ではつきりとそれ等  
が定まっている方がおかしいのだから。しかし、常に答えを探す様に  
しておけ。強くなるにおいて非常に大事な事だからな」

「…まあ、はつきり言つて十歳児に考えさせるような事じゃあ無いよ  
ねえ」

山下が豪徳寺との組手の差中、溜息混じりに呟く。

「まあな…：俺らがあん位の頃は難しいこと考えずに、ただ強くなる  
!!?…つて一念だけで修行してたもんだぜ」

獲られた腕が振じられるのを筋力で強引に抵抗しながら豪徳寺が  
返す。

「それでも場合が場合だ。十年掛かりでゆっくり鍛えるのがネギ君の  
年齢考えれば良いんだらうけど、流石にそこまで俺達関わっていら  
れる保証も無いし、大きな声で言えないけど事態は多分、急を要する。  
鍛錬に近道無しとは言うけれど、幸いネギ君には魔法つて下地があ  
る。手つ取り早く直せる所と鍛えられる部分を優先しよう…ああ、神  
楽坂ちゃん、別に俺が喋ってる差中でも打ち込んできていいよ。勝負  
勘をまず養う為にやってることだから、いけると思ったらどんどん来  
て。不味かつたらちゃんと解説した上で修正するから」

辻が山下達に意見を飛ばしながら、正面でハリセンを構える明日菜  
に声を掛ける。

「イ呀アアアツ!!?」  
フン  
「?!?」

その後ろでは大豪院と古がブ〇ース・リーもビツクリの凄まじい打  
ち合いを繰り広げていた。

「…なんて言うか、ホント今更ながら人間離れしてるわね、先輩達  
……」

「わぶるるつ!!?」

「あ、ヤベ」

「せんせー!!?」

「ちよ、先生が吹き飛んだですよ!?」

辻の向こうで騒いでいるネギ達の喧騒をBGMに、明日菜はしみじみと呟いた。

目立った外傷は無いとはいえ、殴られて転がされて幾分へたつた印象のネギと3-A女子達を見送ってからバカレンジャーは学校に登校した。

「しっかし何なのかねネギきゅんは。ホントに最低限の体捌きしか教えて無えのにそこそこ攻撃捌くしよ。いくらこつちが気無しあつちが魔力強化済みとはいえ、あり得ねえぜ普通?」

昼休み、中村が椅子に寄りかかりながら呆れた様に言い放つ。

「天賦の才…と、言えるのかもしれない。実際齡十にして先生など、考えるまでも無く普通は不可能だ。要領と飲み込みが良いのだろうよ」「相当才能ありつてことだな、魔法も体術もよ。何だ普通に天才じゃねえか」

「本人は謙遜してるけど、実際そんな感じだねえ…」

山下が苦笑しながら肯定する。

「…さすれば問題は魔法方面の指導者か……」

辻がが顔を顰めて問題点を告げる。

「まあなー。そればかりは俺様ちゃん達一切力になれねえしなあ…」

中村も渋い顔になりながら言葉を返す。

「そもそも俺達の個人的な魔法関係者の知り合いなど、ネギを除けばあの女吸血鬼位だろうが」

「あの女にだきやあ死んでも頼りたく無いぞ、俺あ…」

「あ、僕らが頼む頼まない以前に無理っぽいよエヴァさんを頼るの」

大豪院と豪徳寺の会話に山下が割り込む。

「ん? どういうこと、山ちゃん?」

辻が不思議そうに尋ねる。

「いや前に顔出した時の帰り際にエヴァさんが言ってたんだけどさ。ほらネギ君って修学旅行に行く前からエヴァさんに血を分割で分け



与えていたじゃない。こっちに帰って来てからの献血分で一先ず封印つてのを解くのに必要量が溜まったらしくくてさ、待ちに待った封印解除の為の儀式用意に入るから、くれぐれも面倒事を持ち込むな、つて釘刺されてたんだよ。何やら色んな意味で魔法関係者達の期待の星のネギ君を今のタイミングでエヴァさんとこ連れてつたら、絶対魔法関係者達が黙ってないから。……つて事なんじゃないかな？」

山下の説明にその場が沈黙する。あれ？と首を傾げる山下に、中村がワナワナと体を震わせながら言い放つ。

「山ちゃん……お前、ロリコンだったのか!?!?」  
「なんでそうなるのさ……」

また馬鹿が馬鹿なこと言い出したと半目で中村を見やる山下だが、何時もと違つて何やら辻達も懐疑的な目線で山下を見ている。

「いや、そもそも何で会いに行つてんだよ山下?」

「お土産があつてさ。まあ言いたいことは解るけど、何が何でも敵対して殺し合ひしなければいけない状況でももう無いじゃない、エヴァさんとは」

「…まあ、そうだがな……」

「いやしかし殺しかけて殺されかけた相手によく平気な顔で会いにいけるよな山ちゃん……」

俺には無理だと身を震わせる辻に苦笑しながら山下は締めくくる。

「そんな訳だから、エヴァさんに頼るのは無理だと思ふな」

「いや、元々頼る気は薄かったけどな……」

「山ちゃん、あのロリババア狙うなら只野の野郎に気い付けろや。あの人間失格教師、唯でさえ貧乳ロリ体型美少女の一人リーダーと多少交流有るんで目の敵にされてんだからよ」

「だからそんなんじゃないよ馬鹿。大体エヴァさんも僕なんて眼中に無いよ、ネギ君のお父さんにベタ惚れなんだから」

山下が若干不愉快そうに中村を睨み付ける。

「なくんだよ山ちゃん、珍しくイラついて。あれ真逆マジでええええええつ!?!?」

中村が言葉の途中で座っていた椅子ごと宙に舞い、首から床に叩き

つけられた。

「まあ馬鹿は放つといて。現状麻帆良の魔法関係者に頼るのは彼方の目的が解らない以上避けたいし、残念ながら俺達に現状出来ることは無いな」

首を奇妙な角度に捻じ曲げながら床で痙攣している中村を綺麗に無視して、辻が結論を纏める。

「だな」

「そうだねえ……」

「…頼るにしても、彼方の出方が解ってから、だな……」

他の面々も同意し、昼休みの終わりも近いので、各々授業の準備を始めようと散会しかける。

「…ま、待てや……!」

が、中村が頭を真横に傾けたまま復活し、他のバカレンジャーを睨み付ける。

「なんだ馬鹿村、いいから寝てろ」

「そうそう。どうせ聞いてても聞いてなくても理解度は同じでしょ？」

「生きてても…おっと、起きてても有害なだけだから沈んでろよ」

「お前の生きる権利ってお前が自分で思っている以上に周りから認められていないぞ」

「黙れや冷血漢共ああ!!?てめえら如きカス共に認められずとも俺様は薔薇色の人生生き抜いてやるわ!!?兎に角そんな話じゃ無え、何とかなるかもしれねえぞネギの魔法方面強化」

「何?」

大豪院が怪訝そうに声を上げる。

「どういう…」

「貴様ら席に着け、授業始めるぞ」

豪徳寺の言葉の途中で昼休み終了のチャイムが鳴り、教室の扉を開けて杜崎が入ってくる。

「ほれ」

ビシッ!と中村が杜崎を指差す。

「……あ~~~~~……」

山下が納得の呟きを洩らす。

「居るじゃねえか、相談しても唯一話拗らせそうに無えゴリラがよ」

「人を指差すなカス村」

「キヤアアアアアアアアアア?」

突き付けたままの中村の指を杜崎が捻じ曲げ、乾いた音を指が立て、甲高い悲鳴を中村が上げた。

「畜生あの猿人ゴリが。覚えてやがれ毎度毎度……!」

「モツさんも全く同じことを中村に対して思ってると思うけどね。何せよいいじゃない気前良く貸してくれたんだから、魔道書とやら」

放課後、ネギと約束している夜の部の修行を行う為公園に向かいながら怨嗟の声を上げる中村を山下が取りなす。

「直接指導して貰えりゃ話は早えんだけどなあ、それは無理か」

「そうだな。何度も言うが魔法関係者の出方が決まらん内はネギと杜崎教諭、双方の為にならん。無責任な言い方になるが、暫くはネギ本人に頑張つて貰うしかなからう」

豪徳寺の呟きを大豪院が肯定する。

「……まあ、貸して貰った魔道書も初級者向けの物らしいし、魔法を習得するだけなら難しくは無いらしいから、ネギ君なら大丈夫なんじゃないか?…と、いたいた。おーいネギ君、待たせたね!」

辻が公園で準備運動をしていたネギに声を掛ける。

「いえ、殆ど待っていません!よろしくお願いします、皆さん!!?」

薄らと汗を滲ませながらネギが元気良く返事をする。

「こんばんわ、先輩達。今回は朝倉と刹那さん、用事があるから不参加らしいわよ」

「よ、宜しくお願いします……」

「こんばんわです。今回は何をしますか?」

ペコリと頭を下げるのどかの傍ら、夕映がそんな事を問うてくる。因みに古はその場に居はしたが、站椿たんとくによる気の自己鍛錬の差中らしく、辻達に一礼してまた中腰の様な姿勢に戻る。楓は山に設けている

拠点に用があるらしく、遅れて来るとの事だ。

「んー、まだまだ修行らしい修行には入れないけれど、重要な要素を鍛えるつもりだよ」

辻は背負っていた木剣とフツノミタマの入ったケースを降ろしつつ、宣言した。

「おら逃げろー！戦場では足を止めた奴から死ぬんだよー！」

「うわーん!?？」

鬼の形相で追いかけてくる豪徳寺から必死に逃げつつ、ネギは泣いている様な悲鳴を上げる。

「…見た目はアレですが、これも体力鍛錬、という訳ですね……」

悲鳴を上げているネギの様子を、そわそわと落ち着かなさ気に見守るのどかを宥めつつ、夕映が呟く。

「そう。ネギ君に足りていないのは戦闘技術云々は勿論だけど、何よ  
り体力、というか身体能力フィジカル全般が足りて無い。僕らみたいなのを基準  
に考えたら、十歳児がその基準に達してないのは当たり前なんだけ  
ど、いざと言う時になったらそんなこと言っちゃられないからね。直ぐ  
には効果は現れなくとも、こういった事はサボらずにやっておくべき  
なんだ」

山下が解説を行う。

「アイヤ、でも何故に鬼ごっこアルか？」

鍛錬を一段落つけた古が大豪院に尋ねる。

「せめてお前達程度に体が育っていれば、単純に筋力トレーニングや  
走り込みを行っても良いのだが、成長期真っ盛りの小学生にそれを行  
わせても成長の障害にしかならん。最悪骨格を痛めて障害が残るこ  
ともあるからな。だから子供でも行う様な遊びの延長で、動き回りな  
がら体力を付けさせる」

大豪院が理由を語る。

「それに加えて、どうもネギ君、同年代の子供とこういった感じの遊び  
をやったことが無いみたいだからね。実はこういった遊びで身に付  
く勝負勘や駆け引きって、案外重要なものなんだ。僅かながらもネギ  
君を指導して解った事は、ネギ君は兎に角素直で、こつちの言ったこ

とを忠実に守って鍛錬をするんだけど、組手擬きではそれが悪い方に  
出ていてね。フェイントにも引つかかり易いし、自分で考えるように  
していても、一度見せたこっちの動きをパターン化して覚えてるの  
か、どうしても前回の俺達を基準に対応しようとして失敗している。  
これは物覚えの良い悪いじゃなくて、遊びでも何でも、競い合うこと  
を殆どしていないから、相手がいることを前提とした考え方が出来て  
いない所為なんだ。だからこういういった遊びの延長で、先ず争うと言  
う事はそれを行う相手が居て、尚且つそれは自分と同じでちゃんと思考  
している、と言う事を実感してもらおう。そんな狙いもあるんだ」

大豪院に続いての辻の補足に、一同が感心した様に頷く。

「…想像以上です。凄く緻密に内容を考えての指導ですね」

「うんうん。凄いわ辻先輩」

夕映と木乃香が感心した様子で辻を褒め称える。

「いや、俺だけで考えた訳じゃ無いし……仮にも弟子として鍛える以  
上は考えて当然だろう？」

賞賛の視線に若干照れ臭そうにしながら辻が答える。

「そういうこつちゃ。ゴリラからかっぱらって来た魔道書まどうしょも含めて、  
指導方針を決めようぜ早いところ」

「捕獲ーっ!!?」

「わーっ!!?」

捕まえられた罰として空中で振り回されるネギを見やりながら中  
村が纏めた。

その後ものどか達への指導やトレーニングを交えつつ、ネギの修行  
は続いた。

「ネギ!!?何回も言っているだろう、予想外の事態に遭っても思考を  
止めるな!!?擦り傷ならば支障無く動ける。軽傷ならば後に手当て  
をすれば良い。重傷でもまだその場を乗り越えれば次に繋がり、助か  
る芽もある。致命傷でも目の前の敵は少なくとも斃せる。そして考  
えるのを止めず咄嗟に動けば、致命傷を重傷に、重傷を軽傷に、軽傷  
を擦り傷に、擦り傷を無傷に出来る!!?死にたくなければ動き続けろ  
!!?」

「うん。ネギ君は物覚えが破格に良いから、ある程度武道における体捌きを身に付けておくことは悪いことじゃない。でもあらゆる攻防においてこれを覚えておけば間違いない、なんて技術は存在しない。習得したらそれを頼るのは自然な事だけど、それだけに頼りすぎない様に。それにあくまで現段階では、君は格闘を行おうとするよりも相手の攻撃をどう捌き、如何にして自分の距離：魔法を放つ時間を稼ぐかを考えた方がいい。現在の自分の長所を理解して、それを戦闘においてどう活かせるかを考えよう」

「…で、これを貸してくれた魔法使いによると……え？一体それは誰かって？…ええとね…」

「とある人語を理解し、魔法までも使い熟す、麻帆良の森林に生息するマジカル☆ゴリラだ。そのゴリラからかっぱらっただけだから心配すんなネあふんっ!!?」

「お前は黙ってる。まあ、それに関しては本人に口止めされてね。何れ紹介出来ると思うよ。兎に角、ネギ君が習得し易い様な各方面の魔法が記載されてる魔道書を借りて来たから、この中で役に立ちそうなものを見繕って覚えてみよう。特に身体能力強化の魔法は、是非とも正式なものを習得した方が良くいらしくてさ。簡易魔力強化の術式は燃費も悪くて負担も大きいから、まずはこの……」

そしてネギが修行を始めて一週間が経過した頃。

「TEGAKARI?」

「は、はいー……」

「何故にカタコトかは知りませんが…その通りです。恐らくネギ先生のお父上に関する手掛かりに相違ないかと」

のどかと夕映の手によって、一つの転機が訪れる。

### 3話 危険な話と危険な遭遇

「桜咲、今日決行する予定だけど話は聞いてるか？お前は どうする？  
まあ聞くまでも無いと思うけどな」

剣道場での部活動中、休憩時間に辻は刹那に問いかける。対して刹那は小さく笑い、愚問ですね、と言り返す。

「お嬢様が是非とも同行したいと仰っている以上、私も行きます。しかし辻部長や先輩方は大丈夫なのですか？修学旅行の無断外泊で処罰を喰らったばかりと聞きましたが…」

「その話、ネギ君には禁止な、絶対気にするからさ。ともあれ問題無いさ。俺達が今更門限破り程度気にする輩と思うか？…そりゃ俺達だって出来れば違反行為なぞ進んでやらかしたくは無いが、生き別れの父親と再開出来るかもしれないだろ？ネギ君凄く張り切ってたじゃないか。力になってやりたいだろ、そんな事情を聞いたら」

辻の言葉に、刹那は薄く微笑み、小さく呟きを洩らす。

「…なんだか辻部長、という感じですね…」

「ん？何だって？」

「いえ、何でもありませんよ」

聞き返す辻に刹那は笑って首を振る。

…えくなんだ？悪口か、何かやってしまったか…？

矢張り台詞が臭かったかと落ち込む辻に刹那は声を掛け立ち上がる。  
る。

「そろそろ再開ですよ、辻部長。では、私は女子の部の方の指導に行つて来ます」

「あ、ああ…」

一礼して歩み去る刹那の後ろ姿を辻がぼんやりと眺めていると、災厄が後ろからやって来た。

「部くっつ長おくっくん…」

「ちよくっつとお話し宜しいですかあくくくん？」

「いや、今忙しい。練習再開するぞバカップル」

辻は振り向かず竹刀片手に立ち上がりかけるが、物凄い力で両肩を

掴まれ再度床に座らされる。

「…なんなんだよお前ら……」

ウンザリした様な辻に構わず副部長☒Sは目をギラギラと輝かせながら辻を両側から挟み込む。

「ちよつとちよつと部長く何よさっきの様子は、なんだかすつかり仲良さげになつちやつて。いつの間に進展した訳私らの居ない所で進展しないでよもう!!?」

「で?なにになに何があつてどこまで行つちやつた訳?キス位はもうやつちやつた?」

「そんな訳があるか馬鹿野郎!!?」

何とか辻は即答で返す。無論本当の所事故とはいえキス所か裸で抱き合つてまでいるが、言わない。言える筈が無い。

「ちつ詰まらん……」

「部長つて本当にヘタレですねえ……」

「お前らにそこまで言われる筋合いは無えよ!!?休憩終わりださつきと練習再開だ再開!!?」

「わかつたわかつたわかりましたよ部長。あと一つだけ答えて頂いたら私ら超真面目にやりますから、これだけお答え下さいな」

「なんなんだよ……」

副部長(男)の言葉に面倒臭そうに応じる辻。

「部長、いくらなんでも桜咲の奴と多少仲良くなったのは認めるでしよう?」

「…ああ、前よりはな。言つておくが俺と桜咲は……」

「はいはい解つてますつて」

お定まりな否定の言葉を副部長(女)はぞんざいに遮る。

「じゃあそれを踏まえた上で部長…一体どのタイミングで桜咲と仲良くなったので?」

ニヤニヤしながら言い放つた副部長(男)の言葉を聞いて、辻は顔から血の気が引いたのを実感した。

……あ、ヤバイ……………

何がヤバイといつて、刹那達3ーA女子中等部はつい先日まで修学



旅行に行っており、麻帆良には居なかったのだ。更に辻はそれとタイミングを同じくして学校にも部活にも顔を出していない。副部長Sの顔からしてそれを勘付いて辻を詰問しに来たのだろう。

「まさか、ま・さ・か・とは思います。部長おん、桜咲が愛おし過ぎて態々学校サボって桜咲と京都デート満喫しに追いかけてったとかですかあー!?？」

「解答を拒否する!!?？」

辻は副部長Sの腕を払い落とし、剣道部員達の方へと逃げ出した。

「あゝ逃げた……」

「いいもんね。後で中ちゃんにでも聞けば済むことだもんね。」

辻は後ろのバカツプルの言動に頭の線が切れるのを感じた。

「よーしお前ら、今から副部長二人と延々打ち合い稽古だ、一对多で掛かって構わないぞ、副部長は強いからなあ。因みに拒否した奴は俺が本気で三十本取るまで稽古相手になってもらう」

「「喜んで掛からせて頂きます!!?？」」

剣道部員達は竹刀片手に副部長Sに群がっていった。

「ちよー!??部長職権乱用でしょそれえ!??」

「きやー待って待って部長、誰にも言わないからあー!??」

「引きこもりの明日から本気出す発言並みに信用ならんわ!死んでいろお前らは!!?？」

「「きやああああああつ!??」」

「…何をやっているんですか、皆さん……」

刹那が呆れた様に呟いた。

「…そんな訳だ中村、俺達が京都に着いていった旨が連中にバレたらお前を潰す」

「唐突に理不尽だなオイ!??」

放課後、図書館島へ向かうべく準備を整えての集合場所にて顔を合わせた中村に、辻は極太の釘を刺していた。

「…まあでも広まるとしたら確かに中村からしか無いよねえ……」

「いや、それは置いといても一緒のタイミングで居なくなってるんだか

ら勘付く奴は勘付くだろ、正直無駄な抵抗の気がするぜ?」

「貴様は嘘が付けんからなあ…」

「五月蠅いわ!!? 兎に角緘口令を敷くぞ、字面だけ見たらまるつきり俺がストーカーだろ!!?」

何とも言えない表情の他四人に辻は叫び返す。

この場に居るのは先日の人員に加えて刹那と朝倉も居る。現状で何らかの形でネギ達に関わっている全員がこの日の夜は集結していた。

「まあまあ旦那、その話は一旦置いておくとして、先に俺っちの話を決ませちまつてもいいですかい?」

いきり立つ辻を制してかもが声を掛ける。

「それで、初めに話したいことって何なのよエロガモ?」

「ここ一週間程で見違える様に動きの良くなった明日菜がハリセン片手にやや胡乱げに問う。

「その呼び方は止めてくださいえ姐さん…まあこれからこの面子で仮にもゴーレムやら何やらが出現するダンジョンみてえな未知の空間に突撃するにあたって、今一認識が統一されて無えアーティファクトの能力について擦り合わせを行いたいでさあ」

カモの言葉に成る程ね、と山下が呟く。

「何と無く辻の刀なんかは兎に角凄いい刀、みたいな認識しか皆して無いし、宮崎ちゃんや神楽坂ちゃんのアーティファクト?にしても軽く解説は聞いたけど現状の訓練でホイホイ使う様なものじゃ無いから何と無く御座成りになってたね。味方の能力はきっちり把握しておく、そういうことでしょエロガモ君?」

「いや、旦那ですから…いや、いいつす。そういうことつすね、まあ兄貴と姐さん達だけでなんとか脱出出来たと聞いてやすから、警戒し過ぎではあるんでしょうが、どうせやっておくべきことつすから」

カモの言葉にバカレンジャーは頷き、話を進める。

「アデアット…!」

のどかと明日菜、それぞれの手元が光り輝き、のどかの手にはラテン語で表題の描かれた美しい装丁の本が、明日菜の手には同じく側面

にラテン語での刻印が刻まれた、金属製のハリセンが現れる。

「へく、こういうのを見るといかにも魔法に関わっているって感じだねえ」

朝倉が感心した様に呟く。

「ん、じゃあ宮崎ちゃんから自分のアーティファクトで解っていることを説明してみよう」

「は、はい……私のアーティファクトは『いどのえにつき』という名前です、この本には、他人の心を読むことが、出来るみたいです……」

ややつつかえながらもどかは説明を始める。

「心を読みたい人の名前を呼ぶと、この本のページにその人の思考が文章と簡単なイラスト？見たいなものであらわされ、ます。その人に質問したりすれば、それに対する答えが本に表示されますので、そういう風に、何か相手に関して知りたいことがある時に、使えるアーティファクトだと思います……！」

のどかの説明を聞いて、大豪院が手を挙げて質問をする。

「それはどの位の距離まで使えるのだ？遠距離から使えるならば現時点でも有効に扱えるが……」

「え、ええと……」

「残念ながらそれは難しい様です、大豪院先輩」

強面の大豪院に微妙に萎縮しているのどかを見かねて、夕映が代わりに答えを返す。

「時間のある時に私達で検証してみたのですが、対象の思考を読める間合いは大体八m弱の様です。先輩方が何を考えているかは大体解りますが、現状では荒事での直接的な運用は難しいでしょう……」

「ほかほか、まあ問題無えよ。使い方によっては相当強力なアーテフクト？」「アーティファクトだ阿呆」

「そうそうそれ。な事に変わりは無しな。前も言っただけど別に今からドンパチやらせる訳じゃねんだし気にすんなよー本屋ちゃんや」

「は、はい……」

微妙に気を落としているのどかを中村がツツコまれながらもフオーする。

「まあ調べた限りじゃあそれなりに知名度のある、強力なアーティファクトみたいでしてね。旦那の言う通り使い方次第じゃあ異様に強力なもんだ、一先ず当たりを引いたって認識でいいでしょうや。因みに正確には思考じゃあ無くて表層意識を読むらしいですぜ」

「なんだ表層意識って?」

「うーん、物凄く大雑把に説明するなら人が自分で意識して考えていること全ての部分かな……?」

豪徳寺の疑問に山下がザツクリした説明をする。

「おおー!……それって凄いいアルか?」

「今の説明で解らんなら戦闘の駆け引きで自分の頭の中が覗かれていたらどういふことになるかを考える脳筋娘」

感嘆の声を上げてからボケたことを言う古に溜息混じりに大豪院が告げる。

「うーん……厄介アルな!?!?」

「だからそう言っているだろうが!?!?」

「言て無いアル!?!?」

「五月蠅せーっ!!? 夫婦漫才は他所でやりやがれ他所でーっ!!?」

中村がツツコみ、大豪院と古が突き込む。宙を舞う中村をその場の全員が無視しつつ、話を進める。

「…じゃあ次。神楽坂ちゃん、いいかい?」

「オツケー先輩」

軽く了承して明日菜が前に出る。

「あたしのアーティファクトは『ハマノツルギ』…でもって、能力はどうもはつきりしないんだけど、魔法とかそういう普通じゃ無い力を消し去るみたい。あの変なガキの障壁っていうのも破壊出来たし、妖怪みたいなのに襲われた時も叩くだけで相手が消えてた。自分で言うのもなんだけど、結構な反則級の代物だと思うわ」

明日菜の説明に辻が苦笑して言う。

「…他人の事は言えないけど、これはまた解りやすくチートだな……」  
「で、ごぎるなー。確認した所拙者らの扱う気に対しても消去の力は有効な様でごぎるし、術士のタイプによつては何も出来ずに一方的に

討ち斃されるでござろう」

楓も首を縦に振り、同意する。

「付け加えんなら、あのガキと黒尽くめに炙られ削られされかけた時に、神楽坂には衣服以外に被害がいつて無かった。直接防がなくても効果を減衰させられんのかもしれねえ」

「そうそう、それもあつたわ、先輩」

豪徳寺が付け加え、明日菜が頷く。

「……なんだか凄いねえ。アーティファクトって皆ここまで強力なの？」

「いえ、僕も調べてみましたけどこんなに強力なアーティファクトは滅多に現れないそうです。大抵のものは能力のちよつとした補助を行うもので、こんな戦局を一変しかねない物は一流の魔法使い達でも珍しいとか……」

「姐さんの方は過去使用者記録は無えが、嬢ちゃんの方のは数十年から百年単位で所有者が過去に現れてまさあ。実績からすればかなり物凄いですが、嬢ちゃんのアーティファクトは」

山下の呆れた様な感心した様な疑問にネギとカモが順繰りに答える。何れにせよ、ネギの従者は当人達の素養を含めてかなりの潜在能力ポテンシャルを秘めている様である。

「んじゃ辻、最後おめえだ。つっつかあれ？お前はパーッと召喚しねえのフツノのみたまとかいうの」

「フツノミタマだ馬鹿野郎。ちゃんと人格…刀格？が有るんだから名前を覚える。フツはなるべく本来の刀の状態で顕在していたいから状況が許す限りは呼び出したままで居るんだよ。…ああ、フツノミタマじゃ長くて呼び難いから縮めた愛称で呼んでるんだ。…ん、何？…あー済まん、お前達は気安く名を呼ぶなってさ。悪いなちよつとこいつ気位が高いのかなんのか……」

「…質問、というか提案だが……」

右手の刀と問答を繰り返して大豪院が告げる。

「お前と話しているなら俺達にも念話とやらを届かせることは出来るのか？そのフツノミタマは。一々辻を通して会話をしていたのでは

手間だろう、主の苦勞を省くと思って一つ頼めないだろうか、フツノミタマよ」

大豪院の嘆願に、ややあつてその場の全員の頭にややハスキーな女性性の声が響く。

『…まあ、いいだろう。この場に限り、繋<sup>つ</sup>げてやろうか、貴様らにもな。但し私は人との交流に興味は無い。今後とも用が無い時は話しかけるな、人間共』

「なんでお前はそう偉そうなんだよ……」

尊大な調子のフツノミタマに呆れた様子で辻が言う。

『偉ぶるつもりは無いよ、主。ただ興味が無いだけだ』

「いえ、それは尚悪いのでは……？」

「なんだよなんだよ一ちやくん。クール系後輩とヤンデレ系ロリ剣士だけじゃ飽き足らず高慢才女系器物ヒロインにまで手エ出すのかよ！ 上級者だな!!？」

「お前は死んでろ!!？ そしてあのキチガイ女とは俺は金輪際関わるつもりは無いわ!!？ ……じゃあフツ、お前から説明を頼めるか？」

『了承した、主…聞け、貴様ら。私はフツノミタマ。記紀神話における、建御雷神が神武天皇に齎したとされる、靈劍布都御魂をモチーフに黒い小人の生き残りが製作したアーティファクトだ。レプリカとはいえ、性能は人が振るえる位の神劍、魔劍に匹敵する能力があるだろう。正しくアーティファクト<sup>神格武装</sup>と言える』

フツノミタマの自身の解説に、刹那が唸る。

「真正銘の幻想級<sup>ファンタズム</sup>、という事ですね…」

『そういうことになるな。我が銘は《断ち切る存在<sup>もの</sup>》、その名の通り断つ、という概念が刀と化したのが私だ。私に断てないものは無く、万物を切断出来る。戦闘においては高位魔法<sup>ハイマジックユーザー</sup>使いの多重障壁だろうが超一級の前衛の気で練り上げられた身体だろうが関係無しに一刀両断が可能。最も超一流の全力ならば防げぬまでも逸らすか受けるかは可能だ、二撃目以降は保証せんがな。…更に性能について述べるなら、古来の魔除けの象徴としての劍の概念が組み込まれている。降りかかる災厄、不遇を断ち、持ち主を守護するのが原初の劍。故に主を

襲う攻撃を災厄と認識し、それを断つことにより攻撃を無効化する。これにより、弾幕や広範囲攻撃からも私は持ち主を守護することが可能だ」

「……悪いブレード系ヒロイン、意味がよく解んねえ……」

フツノミタマの多分に象徴的な説明に石でも飲み込んだ様な顔で中村が手を上げる。

『ふう……平たく言えば矢の嵐が来ようが火炎の波が来ようが、正しく私を振るえばそれらは全て主に届くことは無いのだ、理解したか、馬鹿面？』

「アイ、マム!!? 罵ってくれてありがとうございますございます高压系女子!!? !!?」

なんとというか、一言で言えば駄目な中村をフツノミタマを含めて全員がスルーする。

『断つとは切り離し、遮り、止めさせること。断たれて尚在り方を変えないモノはこの世に存在しない。私は断つことにより対象を絶ち、終わらせるものだ。概念をも断ち切る私は癒えぬ傷痕を対象へ刻み込む。私に断ち切られ、別たれたものは余程の奇跡か何かでも起こさず限り元には戻らん。断たれた手足は繋がらず、絶たれた障壁は脆く、弱い。曲がりなりにも神格である鬼神の武器や身体にすら私は有効だったのだからな。自画自賛になるが、正に反則級の決戦武装という訳だ』

フツノミタマが一旦言葉を切り、なんとも言えない空気がその場を満たす。

「…大まかに話は聞いていたが、反則などという言葉が生易しく聞こえるな、この刀は……」

呻く様に大豪院が呟く。

「…俺も解ったつもりでいたけど、改めて本人、いや刀の口から聞くとくるものがあるなあ……」

「……この様な言い方は何ですが、ぼくのかんがえたさいきょうのぶき、的な凄まじさですね……」

夕映が呆れた様子で言う。

「……?……」

一方小難しい単語の並びに脳味噌が理解を放棄したらしい中村を筆頭とした脳筋組は頭から煙を上げて首を傾げている。

「……あゝ、要するにだ!!?相手の防御力無視、上級回復魔法でも治すのが難しい呪い効果付き相手の攻撃無効化能力付きの刀つてことだ!!?」

「うわひつど……このクソゲー仕様よ……」

朝倉が思わずといった感じに呟く。

「……まあ、それはさて置き、概念云々の部分が抽象的過ぎてちよつと解り難いかな?僕は」

気を取り直して山下が疑問を上げ、辻もそれに同意する。

『ふむ……まあ概念とは多数の人間の概括的な認識に基づくもので私の起こす現象に対しては余り正確な表現では無いかもしれないから……私が行うのはあくまで断つた個別の対象を別つことで、世界の限定的な事象に対して断つという変更を行う、という方が幾らか正確か。例えるなら人を断つたとして、私は世界において人が断たれた状態を正常な状態であると書き換えてしまうのだ。この例で言えば元通りに傷が癒える状態こそが世界にとって異常と認識される為、治癒が極めて困難になる。……まあ理解出来んなら主が纏めた通り、斬つたものを治せなくするだけでも認識していればいい』

「はあ……」

復帰した豪徳寺が呆れたような声を出す。

「……凄いですね、辻さん。何よりも意思のあるアーティファクトなんてそれ自体が数える程しか存在しないらしいですよ」

「……それも勿論凄えっちゃあ凄えんですが……そのツノミタマつつうアーティファクトは知名度の方も相当なもんでしてね。あれから調べてみたんですが、公式で存在が確認されたのは数える程しか無えにも関わらず、……何と言うか、その……」

ネギに続いて話し始めたカモが何事かを言い淀み、それに対してツノミタマが思念に笑いを含ませ言い放つ。

『はつきり言って構わないがな小動物。私が売れているのは名声では



無く悪声なのだろう？まあそれはそうだ、所有者を殺すアーティファクトなど問題以外の何物でもないからなあ』

「は？……」

「…何？」

聞き捨てならないその言葉に、刹那と辻が反応する。

「…ええ、その通りです。フツノミタマはその強力な性能から過去の所有者は大なり小なり皆功績を上げてやすが、例外無く皆最終的にはフツノミタマに殺されてるんです。有名なものではヘラス帝国内において最終的に三百人以上の犠牲者を出し、その中にはヘラスの王族も含まれていたとされる『鬼斬りシャルドネ』がフツノミタマを所持してやした。この事件は魔法世界最悪の連続通り魔事件とされてやしたが、シャルドネ自身は公に捕まる前に路地裏でフツノミタマを用いた斬撃が元になり死体となって発見されてやす。またメガロメセンブリアでの国境大障壁破壊。大魔獣の頻発する地域におけるこの事件で、メガロメセンブリアでは多数の死傷者が出やした。この事件の犯人のメガロメセンブリアの衛士だったアレイウスが矢張りフツノミタマを使用してやしたが、事件直後に行方を眩ませた後に、フツノミタマを用いた傷が死因で死体が上がってやす……シャルドネは超一流の前衛戦士、アレイウスも名の知れた魔法剣士で、二人共に己のアーティファクトを奪われて殺されるなどということがほぼあり得ないってんで、フツノミタマの崇りと魔法世界じゃ語り継がれてやす。はつきり確認されてませんがその他にも魔法世界で幾つかフツノミタマが目撃されてやすが、持ち主はほぼ全員が自身のアーティファクトにより非業の死を遂げてやす。…故にフツノミタマについた異名は持ち主さえも断つ非情の刀、『所有者殺しのアーティファクト』です……」

カモの説明に、一同は騒然となる。

「…ねえフツノミタマさん、この話本当？」

「おい待て巫山戯んな、その展開だと目出度く辻も御陀仏じゃねーか」  
「…いやいやいや待て！？何お前そんな物騒な過去背負ってんの！？俺も殺す気かおい生涯を共に過ごそう的なニュアンスの言葉吐

「いって!!?」

「えくなんやそれ!!?せつちゃんピンチや先越されとるで!!?」

「いや、そんなことよりも今直ぐに契約の解除を、辻部長の身が危険です!!?」

『まあ待て貴様ら、そして安心しろ主よ』

フツノミタマは場を取り成し、言葉を放つ。

『心配せずとも私は主を断つ気は無い、やっと巡り会えたのだからそんな真似をするものか。だから安心しろ、過去の詰まらん連中と今代の主は違うのだからな』

「信用ならねえな」

中村が目を細めて言い放つ。

「なんで一ちゃんはじめと前の連中が同じ結果にならねえと言い切れる。口ぶりからしてお前を使用する代償とかじや無くて単にお前の気分次第で死んでるみてえじゃねーか。一ちゃんはじめを死んだ連中の様に殺さねえ根拠が有るってのか?」

『有るとも』

フツノミタマは即答する。

『まず私が持ち主を断つた理由は私が詰まらんからだ。一々詰まらん所有者のことなど覚えていないが、連続通り魔と大障壁破壊とやらは辛うじて記憶にある。通り魔の方はまあ頻繁に私を振るうので悪くはなかったが、殺しを愉しんでる感が強過ぎるのと同じ事の繰り返しで私の方が飽きてきてなあ。説得したが聞かんで殺してやった。大障壁破壊の方はなんだ、私の扱いが慎重過ぎて滅多に出番は無いし主に術の防御でしか私を使用せんしで、矢張り飽きた。だから殺した。私は仕舞われるのは無論嫌いだが断つことに付随するオマケに拘り過ぎる奴も同様に嫌いだ。殺人鬼だの愉快犯だのいい加減ウンザリなんだよ…私は断つ者でありそれだけを求めるものだ。刀は斬るのが仕事だろう?私は断つのが存在意義だ。不純で無粋な連中はもう懲り懲りだ…だから主はイイぞ、主は私に、私は主に誂えた様にぴったりだ…私は主に振るわれる為にこの世に生み出されたのだよ。主は私で鬼神を断つた、神を断つたのだぞ!!?素晴らしいよ、私

は心底打ち震えた…主ならばいつかそれ以上を私と共に成し遂げる!!?だから主を殺そうなどとんでも無い、寧ろ殺そうとする奴を私が殺してやりたい位だ。だから安心しろ、私は主の味方だよ、何せこれ以上の存在は居はしないからなあ。主のあの異常性!主の性質は…』  
「フツ」

静かに辻がフツノミタマの思念を遮る。フツノミタマは途端にピタリと語るのを止めた。

……なんだ……………

辻は極めて穏やかな様子であるにも関わらず、刹那は何故かそんな辻を見て寒気が走った。

「ちよつと落ち着け、お前は」

『……ああ、そうだな。濟まない主よ、少し喋り過ぎてしまったようだ……』

フツノミタマはこれまでの狂騒が嘘の様に落ち着いた思念に戻る。

「……ま、まあとりあえず問題はありまくりな気がするけど、辻が死ぬことは無いのかな…?」

「…いや、だからといって流してはいかんだろう。如何にかして引き剥がした方が……」

「いや、止めとけポチ。あの様子からして下手に干渉したらそいつが殺されそうだ…」

「じゃあどうすんだよおい……」

辻以外のバカレンジャーがヒソヒソと相談を行う。

「…まあ俺のことはよくないけどいいよ。兎に角フツは現状危険は無いつつで流してくれ」

「辻部長、しかし…」

尚も難色を示す刹那にフツノミタマが嘲る様に思念を飛ばす。

『想い人が心配か小娘?心配するなよ、殺しも盗りもせんから、なあ?』

「お前は何を言っているんだ…」

その挑発に木乃香がひゃくとワクテカしながら拳を握り、刹那が無言で目を細める。

「じ、じゃあ擦り合わせも終わりましたし、図書館島へ向かいましたよ！皆さんよろしくお願います!!?」

「そ、そうっすね!!?モタモタしていると日が変わっちゃまいやすから出発しやしよう!!?」

なにやら剣呑な空気を纏い始めた雰囲気を一掃するべくカモネギコンビが行動開始を促す。周りもそれに追従し、一行は出発の用意を始めた。

「…待て、気になることがある」

しかし、大豪院が疑問を提し、一行の動きが止まる。

「どしたん、ポツチン?」

中村の問いに、大豪院はフツノミタマを見据えて問い掛ける。

「先程の説明で貴様は自らの手で所有者を殺していたと述べていた。しかし、貴様は刀だ。他者の手を借りずには紙一枚斬れぬその成りでのようにして所有者を貴様は殺していた?その方法如何によつては、矢張り貴様を辻に持たせておく訳にはいかん」

大豪院の指摘に、幾人かが目を見開く。言われてみれば刀が独りで動き出す道理が無い以上、何者かの手を借りるか、フツノミタマ自身が何らかの手段を持ちいて宿主を操りでもない限り所有者が殺害される事態などあり得ないので。

『…ああ、その話か。安心しろよ武道家、簡単なことさ。…こういうことだ』

言い終えるなり、フツノミタマの刀身が淡く発光し、辻の傍に人影が現れる。

それは腰まである長い黒髪を靡かせた、古式の道着を身に纏う切れ長の瞳の美女だった。小作りに纏まった造形はいつそ非人間的に神秘的な、透明な美貌を持つその女性は、無機質な光を讃える眼光を大豪院に向け、告げる。

「私以上に私の扱い方を心得る者など居はしまいか?これが答えだよ拳法家、私は私を自ら振るえる。自慰行動以外の何者でもないから自身で活動をしないだけの話さ…」

フツノミタマの言葉に、しかし皆は即座に反応を返さない。奇妙な

雰囲気にも首を傾げるフツノミタマに、震えながら中村が叫ぶ。

「…マジでヒロイン枠だったー!!? しかも巨乳!?!? やべえぞせったん!!?」

「知りませんよ!?!?」

刹那は堪らず叫び返した。

「正、拳!!?」

「?!?!?」

中村と大豪院が放った一撃が通路一杯に広がる大きさの、此方に転がってくる大岩を粉々に破碎する。

「うわー…流石ね先輩達…」

明日菜の呆れた様な表情が底の見えない奈落の通路に木霊する。

あれから一騒動あった後、気を取り直した一行は図書館島地下へと乗り込んでいた。

詠春からネギが受け取ったナギ・スプリングフィールドに関する手掛かりの地図はここ、麻帆良図書館島のものであった。更に夕映とどこかが解析した結果とある地下深くの一点が絞り込めた為、こうして何やらトラップ満載の道無き道を一行は進んでいた。

「しっかしなんなんだよこのイ○デイ・ジョーンズも驚愕の毘共は。何よりリーダーいっつも部活でこんなところ攻略してんの?」

「いえ…私達が普段潜っているのは地下二階迄の浅い階層だけですから…流石にここ迄の深層階は前回の期末テストの一件以来です」

中村の疑問に夕映が答える。先程から足元のスイッチを踏んだら矢の雨が飛んで来る、壁に手を付けば槍が飛び出す等、矢鱈と殺意の高い仕掛が満載である。こんな所に日常的に出入りしている図書館探検部（高等部 ver）は下手なトレジャーハンターよりも凄まじそうではある。

「にしてもどんだけ広いのよこの空間…」

「いやーあたしみたいな嫺やかな美少女は追いてくだけで精一杯だわ、こりゃ」

「何処の誰が嫺やかだハイエナ根性剥き出しのパパラッチが。寝言が

言いたいなら帰って寝ている」

「アイヤ、キッツイアルねポチ。まだ私が追いて来てること怒てるアルか？全体で決まったんだからいい加減諦めるアル、それでも男アルかー？」

「貴様……」

「はいはい喧嘩止めようねー二人共、先刻からこちら辺のトラップ洒落になって無いからねーってことで集中しようよ」

「せ、せんせー、その床は罠があるので、気をつけて下さいー…」

「わ、ありがとうございます、のどかさん」

「んふふーのどかもええ感じにネギ君と会話出来とるなく、せつちやんも負けてられへんでー！フツちゃんあのダイナマイトボディは現在のウチらには無いもんやから積極性でカバーや!!？」

「いえ、ですからお嬢様私と辻部長は……」

「なんとも賑やかでござるなくこれもまた良い学生の青春活動でござるか…」

「いや、これが日常的な学生は色々ヤバイだろ」

「四六時中殺し合いみたいな手合わせやってた中学時代送った俺らが言えないだろ豪徳寺…」

『よく五体満足で生きているな、主』

なんともダンジョン地味た場所を通っているとは思えない姦しきで一行は奥へ奥へと進む。

「すみません、こんな大事になってしまって…」

「ネギヤー、水臭えこと言いつこなしつつたろーが。これも鍛錬と思えば楽しいもんだぜ」

申し訳無さそうに謝るネギを中村が嗜める。

「そうそう、荒事になったらどうやっても非戦闘員護るには数が居るしね」

「気にするな、どの道とつくに乗りかかった船だ」

山下、大豪院が追従し、豪徳寺と辻も頷く。

「…もうじき到着する筈です、皆さん。何があるかはわかりませんが気を引き締めて行きましよう」

夕映が地図と通路を見比べながら全体に告げる。

「いよいよねー、でも今回は前のでっかい石像とか止めに来て無いか  
らそろそろ何か出てくるかも知れないわよ?」

「ちよつと不吉なこと言わないでよ明日菜っちー!」

油断無く道の出っ張りを跨ぎながらそんなことを明日菜がのたま  
い、朝倉が文句を言う。

「まあでも如何にもダンジョン臭えからファンタジー地味な門番とか  
居たりしてなー」

「あるいはダンジョンボスとかな。こういう場合の定番はゴーレムと  
か悪魔とかか?」

「いやマジで洒落になって無いから止めるよそういうの!」

中村達の不吉な予想を嫌そうに辻が制止する。

「:ダンジョンボスの王道っていったら竜ドラゴンとかかな?」

「止める」

大豪院がピシヤリと遮る。

「いやファンタジーとかだと普通に迷宮とかにいるけど、あんなデカ  
イ生き物どうやって現実じゃあ生きてけないでしょ、普通は」

「で、ごぎるな。兎に角進むでごぎるよ」

朝倉の言葉に楓が頷き、再び一行は歩を進める。

その後もリッ○ーのような謎生物の集団に襲われたり、吊り天井を  
馬鹿力要員が支えている間に脱出したり硫酸の溜まった落とし穴に  
中村が落下して直後にシンクロナイズドスイミングの如く飛び出し  
て床で転げ回ったりしながらも、一行はなんとか無事に進んで行く。

そして。

「……山ちゃん、お前の所為だ……」

「……バツチリフラグ立てちゃったね……」

図書館島地下最奥部。巨大な扉の前の大広間。その中央に其れ  
は居た。

艶のある緋色の甲殻に全身が覆われ、体高八m、体長は翼を広げ  
れば三十mはあるだろうか。一抱えはありそうな鉤爪のついた太い

両足が足元の石畳に亀裂を生じさせながらゆっくりと伸び上がる。刀剣のような牙の生え揃う顎の口端からは真紅の炎が漏れ出ほむらては消える。凶悪な形状の剣角が生えた頭部の中央に宿る体格からすれば小さな瞳は、黄玉色の縦に割れた瞳孔が危険な輝きを讃えていた。

一行の目の前で其れは翼を広げ、聞いた者の五体を凍り付かせる様な咆哮を放つ。

紅蓮の飛竜が、其処に居た。



## 4話 性別不明の竜と人

飛竜の口内に紅蓮の炎が燃え盛る。

「躲せええええええええええっ!!?」

山下がネギ、中村が夕映、楓がのどか、大豪院が朝倉、刹那が木乃香をそれぞれ抱え上げ、左右に飛ぶ。

『グオオオオオオオオオオオオ!!?!!?!!?』

直後、飛竜から竜の吐息ドラゴンブレスが飛来、上級呪文に匹敵する威力の火炎の波が分断された辻達の間を焼き焦がしながら壁に着弾、爆炎を周囲に巻き上げる。

『ガアアアアアア!!?』

火炎を吐き出した直後に飛竜は石畳を粉碎しながら前方に向けて突進。左右に分かれた内の片側、山下、中村、楓側へと突き進む。

「げえこつち来た!!? 修学旅行からこつち、僕こういう方面の運勢にとことん恵まれて無いんだけど!!?」

「言ってるバヤイか山ちゃん!へいブルー!!?リーダー頼めつか!!?」

「無論でござるが……よもや一人でアレを相手取るつもりでござるか?」

中村の言葉に頷きながらも楓がやや非難するように問い返す。

「生憎虎殺しは出来ても竜殺し名乗るにやあ修行不足だあな。つっても心配すんな、多分こいつ、強えは強えんだが…」

「京都の鬼達以上エヴァさん以下って所かな?」

山下がネギを地面に降ろしつつ言葉を繋ぐ。

「中村先輩…」

「心配すんな」

夕映の呼びかけを中村が遮り、宣言する。

「兎に角退避!!?言い争ってる時間が無い、ネギ君も!!?」

「っはい!!?」

「無理は禁物でござるよ、捕まっているでござる、のどか殿!」

「は、はい!!?」

楓が片腕で夕映を抱えて上方へ跳躍、ネギも杖に跨り楓に続く。

「合わせてよ中村!!?」

「応ともよお!!?」

眼前に迫る飛竜に山下と中村は短く言葉を掛け合い飛び出す。

「極きわめわと漢魂あ!!?」

飛竜の剣角が中村と山下に届く寸前、横合いから豪徳寺の放った巨大な気弾が飛竜に炸裂、甲殻を軋ませつつも外傷は与えられなかったが、その衝撃で飛竜が僅かにバランスを崩す。

「つるああああああ!!?」

それに合わせて中村が大質量の一撃を躲し様、瞬動で飛竜の踏み出した左足前に移動。全力の二段踵蹴りが飛竜の足の甲を踏み抜き、刹那の時間飛竜の足を地面に縫い止める。

『グアアア!!?』

気弾の衝撃に続いて中村の一撃により更に体勢を崩された飛竜は、元々前のめりで頭部の剣角にて貫かんとしていた姿勢も災いし、つんのめる様にして前方に倒れ込む。

「ふんっ…ぬああああ!!?!!?」

その倒れ込む飛竜の真下に陣取っていた山下は、両手を頭上に掲げた姿勢で落下して来た飛竜の体を掴む。その瞬間、莫大な重量により潰される前の一瞬で山下は全身を捻転駆動。下半身からの運動エネルギーをフルに使用しながら飛竜の前方に倒れ込む動きに干渉、その勢いを加速させながら更に真横に運動のベクトルを変える。

『グアアアアアアアア!!?』

結果飛竜は吹き飛ぶ様に水平に疾駆して、辻達一行が入ってきた通路の入り口に着弾。轟音を上げながら通路の壁を粉々に砕き、半ば瓦礫に埋もれる様に飛竜は体を横たえる。

「痛ったたた…流石に無理があったね、…名付けて竜ドラゴンの投擲?」

「へいお見事山ちゃん。…まあ状況が悪化した気がしないでも無えが…」

腰骨の辺りを押さえて呻きながらも戯けたことを宣う山下に中村は賞賛を送りつつも、厳しい表情で飛竜を見据える。

向きを左右方向にも変えられるだけの余裕が山下に残っていないかったので仕方が無いが、恐らく大したダメージを与えられていない上に結果的にはあるが入ってきた入り口が今の攻防で潰れてしまった。上の空間は開けているが、空を飛べる人員が不足している現状では、このどう見ても空飛ぶ方が走るよりも得意です。的な形状の飛竜相手に逃げられるとは思えない。

「大丈夫かお前ら!!?」

「おお山下やるアルな!あのでかい龍吹っ飛んだアルよ!!?」

反対側の辻達が駆けつけ、古が目を輝かせながら山下に告げる。

「龍というよりは飛龍フエイロンだろう:はしゃいでいる場合では無い兎に角逃げるぞ、ここ迄の化物は想定外だ」

「賛成だが:偶然とはいえ入ってきた通路は絶賛あのデカブツが占領中だぜ、何処に逃げんだよ?」

瓦礫を身体中から振り落としつつ、ゆっくり立ち上がる飛竜を見やりながら豪徳寺が大豪院に返す。

「あの手の西洋竜は非常にタフです。専用の装備を整えても討伐には最低でも目を跨ぎますよ」

木乃香を抱えたまま刹那が顔を顰めて言う。どう考えても現状真面にやり合える体勢では無い。

「:しゃあねえここは一つ俺が奴を翻弄する!!?ここは俺に任せて先に行け、お前ら!!?」

中村がバーンと無意味な決めポーズ(○ヨジョ立ち ○ツチ神父ver)を取りつつ堂々と宣言した。

「よしわかった、任せたぞ中村」

「じゃあ中村、その勇気に免じてこの前貸した三千円返さなくていいよ、頑張ってる!!?」

「頼んだぞ、中村。なあに非戦闘員を逃がしたら俺達も直ぐに戻ってくるさ!!?」

ネタのつもりで言い放った台詞にあっさり他のバカレンジャーが同意して、他の面々が反応を返す前に身体を引っ張って奥の巨大な扉へと走り出す。

「……………あれ?」

ネタで言った筈の台詞が受け入れられて呆ける中村。

「よく言っただぜ、それでこそ漢つてもんだわなあ中村!!?」が、お前一人にいい格好はさせねえぜ!!?」

ある意味王道なシチュエーションに若干ウキウキしている豪徳寺。二人の元へ、怒れる飛竜が襲い掛かる。

「ま、待って下さい!!? あんな怪物の前にたった二人を残して置いていくつもりですか!!?」

夕映が半ば浮いたような状態で引つ張られながら抗議する。考える迄も無く無茶な戦力比だ、他一部の面々も非難する様に辻達を見やる。

「長々説明してる暇は無いが大丈夫だ!!? 見た目は確かに無茶な構図だが、倒すんじや無く足止めの時間稼ぎならあいつら二人で充分なんだよ!」

辻がフツノミタマ片手に先頭を走りながら説明する。

「でも辻さん、飛竜ワイブロンですよ!!? 下級とはいえ竜族を倒すのなんて一流の魔法使いでも難しいんです!!? 今からでも戻って…!」

「落ち着けネギ。別に中村辺りはあれで死んでもそれはそれで構わんが」「構フエイロンいますよ!!?」「ああ悪かったよ。兎に角時間稼ぎと言ったろう? あの飛龍は、動きはそれ程速く無い。火を吹くだけなら幾らでも躲し様はある、寧ろ大勢で群れる現状が危険だ! 先に最低でも宮崎と綾瀬と朝倉を逃がす!!?」

「でも退路が無いからあの扉の向こうに退避する!!? あんな門番の守ってる場所だから下手すれば此処よりヤバいかも知れないけど逆に安全地帯かも知れない! どっちにしても僕らが着いて行けば最低でも逃げることは出来ると判断しての行動だよ!!?」

立て続けの山下と大豪院の解説に、沈黙する一同。

「…敢えて拙者が問わせて貰うでござるが、それでも大丈夫なのでござるか…?」

やがて、のどかの手を引きながら楓が細い目を見開き、真剣な声色で尋ねる。それに対して辻は、走りながら振り向き様に笑顔を浮か

べ、自信を持って返す。

「伊達に三桁を超える数の殺し合い地味な勝負をしちやあいない。あいつらの実力なら、大丈夫だ！」

「のわああああああつ!??!」

仲良く悲鳴を揃えて中村と豪徳寺は左右に飛び離れ、伸びてきた火炎放射を回避する。

「畜生ネタのつもりのは俺に任せて先に行け発言に便乗して俺を見捨てやがって！覚えとけや薄情者共がアアアツ!!?!」

「五月蠅え馬鹿が本来ならそのまま丸焼けになっちまっても一向にこちとら構わねえのに、こうして俺が加勢に来てやっただけでも有難いと思いやがれ!!?!」

ギヤアギヤアと喚く中村に豪徳寺が目を剥いて怒鳴り返す。

『グオオオオオオオオオオツ!!?!!!?!』

飛竜は苛立った様に頭を振り、咆哮を上げるが、辻達が奥の扉へと向かっているのを目にした瞬間、瞳孔を見開き翼を広げて、全速力での突進を辻達へ敢行する。

「やっぱ門番みてえなもんかコイツ!!?!」

「行かせねえよデカ蜥蜴!!?!」

自分達の間を突っ切ろうとする飛竜に対して中村と豪徳寺は全力の気弾を放つ。

「裂空掌波あ!!?!」  
れつくうしょうは

「極漢魂あ!!?!」  
きわめおとこだま

飛竜を挟み込む様にオーラウエーブ気功波動と大光球が炸裂して凄まじい衝撃が飛竜を打ちのめす。

『ガアア!??!』

然しもの飛竜もこれは効いたのか、苦鳴を上げてよろめく飛竜に中村が全速力での助走の後跳躍。砲弾のような勢いの飛翔蹴りを飛竜の頭部に叩き込む。

「漢魂あ!!?!」  
おとしだま

同時に反対側から豪徳寺の放つ気弾が飛竜の頭部に着弾、身体に続いて頭部をサンドイッチされた飛竜は脳震盪でも起こしたか、グラリ

と身体を傾がせ倒れかける。

『グ…アアアアアアアツ!!?』

しかし寸前で踏みとどまった飛竜は顎を開き、空中の中村へ喰らい付く。

「おわあああああつ!!?」

中村は噛み砕かれる寸前に両手足を突っ張り、上顎と下顎を支えて真つ二つを免れる。

『グウウウウウウウ…!』

飛竜は顎に全力を込めて中村を噛み潰そうとしながら、喉頭の奥に火炎を呼び込む。

「うおおおヤべえええええつ!!?」

中村はB B Q一直線の未来に焦るが、全身の力を振り絞っても飛竜の咬筋力とほぼ拮抗している為に身動きが取れない。

「何やってんだ馬鹿野郎!!?」

豪徳寺が気弾を連射して脱出の隙を作ろうとするが、飛竜は中村を啜え込んだまま再び辻達の方へと突進を再開、胴体に数発が当たるものの脱出の機会を中村に与える迄には至らない。チロチロと中村の身体の全面を上ってきた炎が舐め始める。

「う熱つちちちちちちつ!!?…:…ンの女メそつちがその気なら肚決めたるわこつちもおおおおつ!!?」

叫ぶと同時に中村は支えていた上顎から手を放し、噛み砕かれる一瞬前に全力で飛竜の口内に飛び込んだ。

『グボウグツ!!?』

飛竜にとつて予想だにしない中村の行動。既に溢れ出てきている火炎に炙られるのも構わず、中村は気を込めた全力の正拳を飛竜の喉奥へとぶち込んだ。せり上がる火炎と衝撃波がぶつかり合って弾け、飛竜はくぐもつた苦鳴を洩らして堪らず顎を開き、中村を吐き出す。  
「つあああああああつ…痛でつ!!?熱つちいいいいいいつ!!?」

間延びした悲鳴を上げながら地面に激突して苦鳴を上げ、更に火傷の痛みで転げ回る忙しい中村。

「油断すんな阿呆!! あんなガタイの生き物相手に隙のデカイ技を軽々

しく使うんじゃねえよ!!?」

「あく悪かったなコン畜生!!? つうか一ちゃん達はじめはどうなったよ薰っち?」

悪態を吐きつつも跳ね起きた中村が豪徳寺に尋ねる。

「よくわからねえが如何にか扉の奥に行けたみてえだ。ちよつと目を離した隙に居なくなっていたからな」

豪徳寺が背後の大開きになった巨大な扉を親指で指して告げる。

「うおマジだ…まあだっいたら後は……」

「応、このデカブツをあしらうだけだぜ」

『グルルルルルルル…!』

一方、頭を振りながらも飛竜は開いた扉の奥に向かったであろう辻達の方を睨み付けている。その様子に中村が目を細め、右手に気弾を精製すると飛竜の頭部目掛けて叩き付ける。

『グルウアア!!?』

ダメージは無いに等しいものの、露骨な迄の挑発に飛竜が怒気を露わに中村を睨み付けるが、中村は構わず不敵な態度で宣告する。

「余所見してんじゃねえよ色女。お前は俺だけ見てりやいいんだよ」

中村の言葉に、飛竜は何処か人臭い仕草で目を細め、完全に中村に向き直る。

「極自然に俺を忘れんじゃねえよ馬鹿野郎。てめえも俺を忘れんじゃ……女!??メスなのかコイツ!??」

文句を言いながら飛竜に言葉を発していた豪徳寺が聞き捨てならない中村の言葉にやや裏返った声で叫ぶ様に問いかける。

「はあ?何言ってるんだ薰っち、見りゃわかんたろ」

「わかるか阿呆!!?こんなデカイ蜥蜴始めて見たんだぞ、ましてや爬虫類の性別なんざ見分けがつくか!!?」

無茶なことを言つてのける中村に豪徳寺が堪らず抗議する。

「はっ!だからてめえは朴念仁の喧嘩馬鹿だっつってんだ馬鹿!!?爬虫類ってのは尻尾の付け根付近に生殖器が収納されてん場合が多いんだよ!オスなら凹んでてメスなら平べってえ、更に見ろあの尾っぽを!!?全体と比較すつとややスマートで仄かに色香の様なものを





しよう。脳が痛くなるだけです」

先頭で何処か虚ろな目付きになりながら懐中電灯とフツノミタマを手に進み、呟く辻に刹那が労るようにフォローを入れる。

時間は少し遡り、堅く閉ざされている扉に対して、辻はフツノミタマによる断裁で強引に押し通ろうとした。

「つーか斬っちゃって大丈夫な訳、この扉!!?」

息を切らしながら朝倉が辻に問い掛ける。

「中に居るかもしれない何かと接触した場合を考えると得策じゃ無いかもしれんが緊急事態だ!まさか押しただけで開きはすまい、責任は俺が取る!!?」

辻は走りながら近づく扉目掛けてフツノミタマを振り上げる。

「よもや断てないとは言わんよなフツ!!?」

『愚問だな主、一刀両断にして見せよう!!?』

フツノミタマはウキウキと辻に返す。辻が今にも斬撃を振り下ろそうとした、その瞬間。

扉の紋様が光り輝いたかと思うと、軋み、擦れるような異音を上げつつも扉がゆつくりと観音開きに関き始める。

「なに…….☒」

「え、なんで……!!?」

驚く一同を他所に扉は緩慢に、だが確実に開いていき、やがて完全に開け放たれて、奥へと続く暗い通路を覗かせる。

「…….またあからさまな迄に誘われてるね…….」

「…….だが行くしかあるまい。少なくとも此方を迎え入れる意思はあるらしいからな」

「…….ねえ先輩方、その人?がフレンドリーな可能性ってどん位だと思っう?」

「他者に対して友好的な人間は家の前に竜ドラゴン住み着かせないだろ…….兎に角、油断しないように」

「言われるまでもありません。のどか、行きましょう」

「う、うん…….」

「ひゃくなんやドキドキするなあ…….」

「お嬢様、お気をつけて…」

「行きましよ、中村先輩達逃げらんないわよこのままじゃ」

「そ、そうですね……！」

「まあ、チラツと見た限りじゃ大丈夫そうっすけどね、旦那方……」

辻達は僅かに迷いながらも、扉の奥へ入り、そして現在に至る。

「……そろそろ出口が見えてきた、先に言っておくけど、何があっても一人で勝手に行動しないように。戦えない人は俺達の後ろにいないこと、いいね？」

辻の言葉に全員が頷く。それを確認して辻は前に向き直り、僅かに足を早める。

「……うわぁ……！」

明日菜が思わず、といった様子で上げた感嘆の声が広い空間に響き渡る。

暗い通路を抜けたその先は、黄昏時の陽光が降り注ぎ、一面が茜色に染まった優美なテラスだった。天井の一切が開けているようであり、一面の壁からは滝が飛沫を上げて雪崩落ちているにも関わらず、完璧に空調の整った広大な空間のなかには品の良いテーブルセットが揃えられており、入って来た過程を考えなければ、大富豪の庭先にも迷い込んだと錯覚してしまいそうな光景であった。

「……なんか、凄い所に出ちゃったね……」

「あのまま迷宮の主に遭遇する様な展開よりは遥かにマシだが、な……」

山下と大豪院が予想外に平和な光景にやや氣勢を削がれつつも、警戒は解かずに呟き合う。

「綺麗な場所ですね……何処か前に訪れた秘密の小部屋に近い雰囲気がありますか……」

「う、うん……あ、見てゆえ……！あそこ、本棚が一杯……！」

「わ、本当や……!!?彼処と同じで珍しい本仰山あるんやないか……!!?」

「お、お嬢様!!?迂闊に動かないようにして下さい……！」

図書館探検部の面々が絶景に感嘆を覚えつつも本好きの性を覗かせる。

「は……半端無く金掛かってるねこの空間。どんなリッチマンが使って

んのかしら…」

「ちよつと朝倉、刹那さんも言ってるけど、勝手にどつか行っちゃ駄目よ?。」

「兄貴、何か感じるか?。」

「:うーん、多分強力な結果が空間内に張られてる。ここの空気が静謐に感じるのもその所為だと思う。だけど:他には何も感じない。あんな風に狙い澄ましたタイミングで扉が空いた以上、絶対にこの中には誰か居ると思うんだけど……。」

ハンディカメラ片手に周りを撮影する朝倉に明日菜が釘を刺し、ネギとカモはこの空間内に存在するであろう何者かを密かに探る。

「楓、どうアルか?。」

「……ふむ……。」

古の問い掛けに楓は細い目を微かに見開いて辺りを見渡す。

「居所迄は判らぬが:居るでござるな、なにかが」

『なんとも拍子抜けだな:爵位級上位悪魔でも現れるかと期待していたのだが……』

「さつきその手の呟きに見事にフラグが立ったんだからそういうこと言うの止める!!?。本当に出てきたらどうすんだ!?!?。」

物騒な呟きを洩らすフツノミタマに堪らず抗議する辻。

『両断してやればよからう。鬼神を断っておきながら今更なにを恐れるというのだ、主よ?。』

何でもなさそうに言い返すフツノミタマに、一つ溜息を吐いて辻は語り始める。

「お前が俺になにを望んでいるかは解るが、俺はお前のご機嫌取りの為だけに行動する気は無い。態々危険に飛び込む様な真似をしてたまるか」

辻はきつぱりと断言する。フツノミタマは気分次第で持ち主を殺す危険な存在だと辻は理解しているが、それでも不興を買わない事だけを考えて言うことを聞いているだけでは、フツノミタマが擬体で自らを振るうのと何も変わりはない。未だ琴線が何処にあるのか解らない以上、上手い付き合い方を手探りで摸索して行くしか無かつ

た。

『ふむ……まあ、いいだろうさ。それはさて置き主よ。半ば途中から避難が優先事項に成り果てていたが、此処は目的の場所でもあるのだろうか？私の感じた所でも危険は無い。探索を始めるなり、戻ってあの飛竜ワイバーンを二枚に下ろすなり、行動に移ってはどうか？』

「ああ……まあ、そうだな……」

やけにあっさり引き下がったフツノミタマの態度に疑問を覚えつつも、言っていることは最もなので辻は動き始める。

「まあ皆、兎に角今直ぐに危険は無いみたいだから最低限の調査をして、異常が無かったら非戦闘員を此処に護衛付きで残して中村達を助けに返ろう。正直豪徳寺は兎も角中村は野垂れ死んでも別にいいんだがあんなんでも一応仮にも友人だ。戻る他無いな」

「まあ確かに。見捨てるのも寝覚めが悪く……なる所か寧ろ爽快になりそうだけど、一応今回は役に立ったんだし、しょうがない、助けに行こう」

「心の底から気は進まんが……まあ後輩達の前で仮にも人間というカテゴリーに爪の先程は引つ掛かる生き物を見捨てたとあつては先輩として沽券に関わる。行くしかあるまい……不本意だが」

「ねえ先輩達、そこまで言う？」

明らかに吐き捨てられたガム並みの扱いを受けている中村の言葉に引きつった顔で明日菜がツッコむ。

「蛇蝎の如く嫌われてんな中村の旦那……」

「ねえ先輩達、友人なんだよね中村先輩って？」

「……まあ普段の言動を鑑みるに自業自得という気はしますが……」

口々にツッコまれながらも辻達は行動に移る。

「じゃあ何組かに別れて調査を……」

「その必要はありませんよ、皆さん」

唐突に辻達に向けて、男にしては高く、女にしては低い、落ち着いた声色の声声が掛けられる。反射的に声のした方を振り仰いだ一同が目にしたのは、テラスの奥からゆっくりと歩み出てくる、フード付きのローブを頭からすっぽりと被って顔や体型を隠した背の高い人

物の姿だった。

「此処には皆さんに危害を加えるような者は私を含めて存在しません。招待状は出してはいませんが、実に久方ぶりのお客様ですね、歓迎しますよ」

ローブの人物は何処か芝居掛かった動作で両腕を広げ、柔らかい口調で歓迎を示す。だが、辻達は警戒を解かず、各々が身構える。

ローブの人物はおやおや、と肩を竦めて頭を振り、申し訳なきように告げる。

「表の彼女のインパクトが強過ぎたでしょうか？直ぐには信用出来ないのも無理からぬことでしょうが、私に害意が無いのは本当ですよ、どうか肩の力を抜いて頂けないでしょうか？」

「…そうしたいのは山々だが、こちとら刺激の強い状況が続き過ぎていたものでしてね」

辻が一応はフツノミタマを下げつつもローブの人物の一挙一動を油断無く見やりながら応答する。

「勝手に入ってきた此方にも落ち度はありますが、ドラゴン竜を門番に立たせる様な人間に対して直ぐに友好的に接せる程平和な頭はしていませんですよ。申し遅れましたが、俺は辻 はじめ一といいます…お名前を教えてくださいても？」

「ああ、これは此方こそお招きした立場でありながら失礼しました」

ローブの人物は優雅に頭を下げ、名乗りを上げる。

「私はクウネル・サンダースと申します。この図書館島の司書を勤めております、皆さんどうぞお見知り置きを」

その人物ークウネルは唯一見える口元で弧を描き、にこやかに笑った。

## 5話 課される条件 武道会に向けて

……胡散臭いなあ……

辻は目の前の芳醇な香りを立てる紅茶のカップに目線を落としながらも、折を見て目の前で茶菓子を振舞う性別不明人相不明目的不明、即ち正体不明の怪人物に視線を向ける。

中村と豪徳寺の安否を気にする一同に、クウネルは表の飛竜に話を通してこれ以上の敵対を止めさせる旨を伝え、中村達も中に招き入れるから安心するように、と告げて一同を半ば強引に茶会の席に着かせた。

無論辻達は敵意が無く、此方を害さないというクウネルの主張をハイそうですかと頭から信用した訳では無いが、楓の感知能力を持つても直前まで現れるのを察知できなかったクウネルはかなりの実力者だと理解していた。

…そんな奴がこちらをどうかしようとするなら、初めの時点で俺達はやられてる……

だからこそ、辻達はクウネルを下手に刺激しないようにする意図も兼ねて、一先ず大人しく歓待を受けていた。

「…ふむ、どうやらお連れのお二方は相当に腕が立つ様ですね。彼女が酷く興奮していて宥めるのが大変でしたよ」

茶菓子を出し終え、暫し黙って額に指を当てていたクウネルが一つ息を吐いて辻達に告げる。

「中村さん達は大丈夫なんですか?」

出された紅茶に口も付けずにソワソワと落ち着かなさ気だったネギが半ば叫ぶ様にクウネルを問い詰める。

「…ええ。何やらオレンジ髪の少年がやらかしたらしく、もう暫くは彼女もじゃれ合う気のようにですが、私が通行を許可した事を既に承諾した様ですので当初のような死闘にはならないでしょう。安心して下さい、ネギ君」

クウネルはローブの奥の目を細めてネギを一瞥した後、柔らかい口調で心配無い旨を告げる。

「そ、そうですか…よかった……！」

「いや、じゃれられるだけでも普通に死にそうじゃない？あんなでつかい蜥蜴……」

ネギが安堵した様に息を吐くが、明日菜は引きつり気味の顔で懸念を口にする。

「あのゴキブリ並みに生き汚ない有害生物ならば問題無い。それにしても今度は何をやらかしたあのクズは……」

「…っというか彼女って……メスだったんだ、あの飛竜……」

「おお、だからアルか！流石中村アルね!!？」

「いやいや、流石に中村も巨大な爬虫類は守備範囲じゃ無い…無い……あり得るかもな、アイツなら」

「…そこまでですか……」

言外に女相手だから中村がセクハラ地味た事を仕出かしたのだと言う古の主張を反射的に否定しかけた辻が口箆り、やがて静かに肯定するのを聞いて、夕映が一筋の汗を頬にかきつつ戦慄する。

クウネルはそんな辻達のやり取りを楽し気に眺めつつ、頃合いを見計らって軽く手を叩いて注目を集める。

「さて、外のお客様は一段落した時点で私から改めて迎えを出しましょう。そろそろ皆さんが本日此処へ出向かれた理由を、お聞かせ願えませんでしょうか？」

クウネルの言葉に一同は互いに視線を幾度か交わらせ、やがてネギが一つ息を吐いてからゆっくりと話し出した。

「クウネルさん。先ずは知らなかったとはいえ前触れも無しにお邪魔した件を謝罪します、申し訳ありませんでした。…本日は、僕の父について手掛かりを得る為に、ここまで来ました」

「ほう……」

クウネルは微笑みながら興味深そうに相槌を打つ。

「…詳しく話を聞かせて頂いても宜しいでしょうか？」

「はい」

それからネギは自らの出自、此処に来るまでに至った経緯を辻達の補足を受けつつ簡単に話した。

「…だから、この場所に父さん…ナギ・スプリングフィールドの手がかりがあると判断したんです。クウネルさん、この場所に住んでいるなら何か心当たりはありませんか？…いえ、もっと言うなら、門番に飛竜フイバインなんて存在を立たせてまで侵入を拒んでおきながら、入ってきた僕達に敵意を見せず歓迎してくれる貴方の対応は、失礼ですがおかしいです。…貴方は、父さんについて何か知っているんじゃないでしょうか？」

ネギはローブの奥に見えるクウネルの目を見据えて問いを放つ。

「…ふむ……………」

周りの目線がクウネルに集中する中、クウネルは一つ頷きネギに向けて言葉を返す。

「ご名答です、ネギ君。確かに私はナギ・スプリングフィールドについて少なくとも情報を知っています。近衛詠春がこの場所を教えた理由も私あつてのことでしょう」

クウネルの言葉に、俄かに辻達は色めき立ち、ネギは勢い込んでクウネルに尋ねかける。

「ほ、本当ですか？！？父さんは今、何処に…!!？」

「落ち着いて下さい、ネギ君」

クウネルはあくまで泰然とした態度を崩さないままネギを宥める。

「す、すみません、僕…」

「いえいえ、行方不明の父に関わる話なのですから、焦るのも意気込むのも当然のことですよ」

鷹揚に返しながらも、そこでクウネルは口調を困ったような、僅かに申し訳なさそうなものに変える。

「しかしネギ君、申し上げ難いことですが、貴方の父親に関する情報を今直ぐ貴方に教える訳にはいきません」

「え……………？」

「なに……………？」

まさかの拒絶の意に、ネギが愕然とした顔でクウネルを見返し、辻や大豪院、山下は表情を厳しいものに変える。そして到底納得のいかないその台詞にネギが食って掛かろうとするのを大豪院が押し留め



る。

「落ち着け、ネギ」

「大豪院さん!??なんで……!」

「もう一度言う。落ち着け、ネギ」

大豪院は強い口調でネギの抗議の声を封殺し、肩に手を置いてやや強引にクールダウンを図り、耳元で言い含める。

「気持ち俺達も同じだ、遥々来ておいて教えられない、と言われておめおめ引き下がるつもりは無い。しかしだ、熱くなつて闇雲に噛み付いてもいい結果は得られん。奴を見ろ、どう考えても一筋縄ではいかん相手だ…一先ず俺達に任せておけ」

大豪院はネギから離れ、変わらず笑みを湛えるクウネルに問い掛ける。

「…訳を聞いてもいいだろうか?」

「勿論ですとも…ナギ・スプリングフィールドの手掛かりが手に入つたとして、ネギ君は当然彼を探そうとしますよね?」

「は、はい…」

クウネルに問われ、ネギは頷く。

「だからです、ネギ君。貴方はその歳にしては破格の能力ちからを持っていますが、今のままでは、まだ足りません」

「それは何に対しての不足なんですかね?」

今度はネギが何か言う前に、山下が何時もの笑みを浮かべつつ、ただ目のみが笑わぬままに尋ねる。

「子どもが親に逢いに行くのに何の危険があるっていうんですか?仮になんらかの事情で危険が有るっていうなら、大人達が護つてあげるのが筋つてもものだと僕は思いますよ?…別にそれを貴方にやれって言ってるんじゃないやしません。ただ、危険だだの力が無いだのなんてのは理由にならないんじゃないかと言ってるんです」

山下の言葉を大豪院が引き継ぐ。

「俺達はネギに無条件で協力する。荒事が起こるといふなら降りかかる火の粉は俺達が払おう。それでもどうにもならないなら魔法関係者に頭を下げよう。…もう一度問わせて頂く、俺達では、足りないか

？」

鋭い目線と共に問いを突きつける大豪院。クウネルは暫し沈黙したままネギや辻達バカレンジャー、明日菜達3-A女子を順繰りに見るが、反対を唱える者は、いない。

「…足りないとは言いません」

クウネルは口を開いた。

「正味の話、表の彼女を抜けて来られるなら貴方がたは既に戦闘力では一廉の戦士でしょう。そして皆さんは皮肉でなく立派な志をお持ちしています。通常ならば、何ら躊躇うこと無く、皆さんにお任せするでしょうね…」

しかし、とクウネルは続ける。

「ナギ・スプリングフィールドへと到達するまでの道のりは、尋常でなく苛酷なものです…私は今現在の貴方がたでは、彼へと辿り着くことならず、道半ばで力尽きる事となると判断します。故に…私は口を開けません」

クウネルの言葉に、幾人かが抗議の言葉を唱えようとして、皆一様に口をつぐむ。クウネルは何処か芝居がかった、掴み所の無い雰囲気纏う人物であり、事情を一切語らないその態度は現時点で到底信用の置けるものではない。

しかし、今の言葉を放つクウネルは全身から怖い程に真剣なオーラが漂っていた。口元からは曖昧な笑みが消え、ローブの奥の視線は真っ直ぐな光を湛えて辻達を射抜いている。その様子からはクウネルが、少なく共、ネギを含めた辻達全員の身を案じて言葉を発したことが伺えた。

…それでも……………

辻は傍らのネギを見やる。ネギはクウネルの言葉と気迫に気圧されながらも、到底納得をしていないことが、表情から見てとれた。

…そうだよな……………

危険だろうが、何だろうが。子どもが親に会うのを諦めるなどということが、あつていい筈が無い。

「クウネルさん…詳しい事情は話して頂けないんですね？」

辻の確認の言葉に、クウネルは頷く。

「はい、お話し出来ない事情があります。話は出来ない、訳も話さない、では納得出来ないであろうことは重々承知ですが、この点について譲歩の余地はありません」

「…わかりました」

辻はそれを承諾する。

「つ、辻さん……」

「先輩……」

抗議の声を上げようとするネギ達を手で制し、辻は言葉が続ける。

「ではクウネルさん、その他の点で譲歩して頂けませんか？」

「…どういうことでしょうか？」

訝しむクウネルに辻は告げる。

「貴方が俺達に一切の話が出来ないのは、要するに俺達が弱いから、実力が足りないからなのでしょう？」

「…そうですね。大まかに言うならばその通りです」

「ならば俺達が貴方を納得させるだけの力を示せば、貴方はネギ君のお父さんに関する情報を明かしてくれるのですね？」

「…そうなりますね……」

辻は頷き、言い放つ。

「ならば条件を提示して下さい。俺達は何をすれば貴方が俺達の実力を認めるのかの条件を。その条件を俺達は満たしてみせましょう。その時に貴方は俺達に情報を明かすことを約束して下さい」

辻の言葉に、クウネルはローブの奥の目を僅かに見開く。

「…本気ですか？」

「冗談でこんなことは言いません。どうです、認めて頂けますか？」

辻はクウネルを見据えて念を押す。

「ち、ちよつと先輩……！」

「…少々短絡に過ぎる結論ではござらぬか？」

「そうだよ辻。こういうことはもつと慎重に……」

「皆が言いたいことは解る。確かに俺は端から見れば結論を急ぎ過ぎているように見えるかもしれない」

辻は掛けられる複数の声を遮り、告げる。

「でも理解してくれ。どんなに話し合っても結局俺達にはこの方法しか残されていないんだ」

「…どういうことですか…?」

夕映が辻に疑問を放つ。

「考えてもみてくれ。現状どうあってもネギ君に情報を明かす訳にはいかないなら、そもそもこの人は情報を知っていること自体を隠すのが賢明な手段だと思わないか？」

辻はクウネルを見る目線を厳しいものに変え、言葉を紡ぐ。

「ネギ君や俺達が説得に応じずに無理にでも事実を知ろうとすれば、万が一情報が漏洩してクウネルさんが危惧したように俺達が逸って最悪命を落とす様な事態が有り得るかもしれない。ならば何故俺達に自らが情報を握っている旨を教えるんだ？単にそこまで気が廻らなかつたのか？…俺はそうは思わない。理由はわからないが、クウネルさんは情報という餌をぶら下げて俺達をその気にさせようとしていると、俺は感じた」

…ネギに対する麻帆良の魔法関係者と同じように、な……………

言葉を受けたクウネルは、黙したまま続きを促す。

「先程俺達の身を案じた貴方の言葉が全て偽りとは思えない。それでも貴方は、現時点で絶対に教えられない、では無く実力が足りないから教えられないと言った。…つまりはそういうことでしょうか？」

「…私からは肯定も否定もせずにおきましょう」

クウネルは明言を避け、視線を辻一人に絞り言い放つ。

「ならば貴方は、私が仮に機会を作ったとして、ネギ君の為にそれを果たそうというのですか？そうまでして、貴方がネギ君に手を差し伸べる理由は何ですか？」

「…まあ、理由を挙げようとするれば色々ありますけどね、一番の理由は簡単です」

辻は大豪院と山下の方を向く。山下は笑って頷き、大豪院は軽く鼻を鳴らして肩を竦める。辻は二人の無言の肯定を受けて再びクウネルに向き直ると、顔を正面から見据えてきっぱりと言い放つ。

「俺達は武道家だからです。子どもが親に会いたがるのが何かおかしなことですか？親子なんてものは一緒に居て当然でしょう。仁義を尽くすのが俺達だ。…それに今更関係無いような言い方は止めて貰いたいですね」

辻は傍らのネギの肩に手を置き、宣言する。

「とつくに俺らは、ネギ君の友人なんですから」

「…辻さん………」

ネギは瞳を潤ませ、辻を見上げる。

泣くなよネギ君、と苦笑しながら頭を撫ぜる辻を見て、明日菜が笑い、感受性の強いのかは貰い泣きで目を潤ませ、夕映がこちらも微笑みながら介抱を行う。

「…いやはや、素晴らしい心意気です。感銘を受けましたよ、矢張り若者とはこうでなくてはなりません」

クウネルが両手を叩きながら賞賛を送る。

「…なーんか胡っ散臭いわねこの人……」

「うーむ怪しいと言えば始めから最大級に怪しいから無理ないアル」  
「まあ明らかに偽名と解る名乗りに顔の伺えぬ装い、挙句の果てに話の内容に具体的なものが一切無いのでは当然でござるな」

「あははく確かにそやなく」

「…いや、皆さん。曲がりなりにも交渉中なんですからそういうことは思っても口に出さない様に…」

「構いませんよ、神鳴流のお嬢さん」

「っわ!?？」

事実とはいえ中々に失礼なことを言う朝倉達に刹那が釘を刺そうと口を開いた瞬間、クウネルに声を掛けられビクリと背中が跳ねる。

「自身を客観視してこの上無く胡散臭い人物像であると自覚はありますからね」

「ならば直しては如何か…?」

フフフフと何故か自慢気な含み笑いと共に告げるクウネルに大豪院がツツコむ。

「いえ、私はこのキャラが気に入っているものでして…」

「…いい性格してますよ、貴方…」

辻が顔を引きつらせながらも言う。

「…それで、若干話が逸れましたが…」

「ええ、わかっています。流石の私もそこを煙に巻くつもりはありません」

山下の仕切り直しにクウネルは応じて、本題に入る。

「貴方がたの覚悟はよくわかりました。その尊い在り方に免じて、私も譲歩を行わせて頂きましょう。ナギ・スプリングフィールドの情報をお渡しする条件は…」

ピンと一本指を立て、語り始めたクウネルだったが、言葉の途中で口を噤み、宙を仰ぎ見る。

「……………」

首を傾げる辻達だったが、直後入ってきた通路の奥からドカドカと荒々しい足音が響くのを耳に入れて、疑問が氷解する。

…ああ、中村達が来たのか。

辻は内心胸を撫で下ろす。熱くなりやすい直情傾向の中村が先程迄のやり取りを聞いていれば、まず間違いなく交渉の途中でキレていただろうからだ。その意味ではベストなタイミングでやって来たと言える。

「たあああああのおおおお!!?!?!?!?飛竜女史の飼い主はどいつだあああああ?!?!?!?」

しかし、やって来た中村は何故か怒髪天をついていた。

「なんでキレてるんだよお前は?!?!?」

つくづく思い通りに動いてくれない馬鹿の日本代表に思わず辻は叫び返す。しかし中村は辻のツツコミを見事にスルーし、テラスを血走った目で見渡してクウネルをロツクオンする。

「てめえかあああああ?!?!?」

「はい、彼女はペットではありませんが、食事などを提供しているのは私ですね」

凄まじい剣幕の中村が放つ唐突な質問にも一切怯まずに、クウネルはにこやかに応答する。

「ほおおおおおう、ならばてめえは己の罪が自覚できているかあああ？」

「ええ、彼女に襲われた件に関しては無礼をお詫びします。しかし、彼女は有象無象の人物が入ってこない様

に入口を警備するのが仕事ですからね。どうか寛大な心で容赦して頂けませんでしょうか？」

飛竜に襲われた事を憤っていると当たりをつけたクウネルは頭を下げて許しを乞う。しかし、中村 達也という男はそんなわかりやすい反応をしない男であった。

「んな事はどうでもいいわああああああ!!?!!?」

「……は?」

「いやよくねえよ」

予想外の言葉にローブの奥の目を丸くするクウネルに、遅れて入ってきて、ツツコミを入れる豪徳寺。

「てめえ、飛竜女史の名前を言ってみろああ!!?」

「は?名前、ですか?」

戸惑いながらも受け答えをして考え込むクウネルだったが、ややあつて顔を上げ、返答する。

「:私の知る限りでは彼女に人が呼び掛ける類の名称はついていない筈ですが……?」

「何が筈ですが、だこの大馬鹿野郎があああああ!!?!!?」

クウネルの言葉に再度激昂する中村。

「いえ、あの何を怒って……」

「わからねえなら教えてやるこの無責任飼い主が!!?なんと無く鳴き声のニューアンスとジェスチャーから理解した限りじゃあ、飛竜女史はどうやらここで門番をするようになってかなり永いみてえだなあ……!!?」

「…え、ええ………」

「うわゝあの怪人が完全に気圧されてるわよ……」

「流石と言うべきか馬鹿がと言うべきか……」

「完全に後者だろう。そもそも蜥蜴の鳴き声とジェスチャーだけで何

故そんなことが解る？」

「知らねえよ、メスだからじゃねえか？」

中村とクウネルを除いた全員の呆れた様な会話を一切気にせず、中村は尚も言い募る。

「それだけ永い時間面倒を見ておきながら名前もつけてやらねえとは何事じゃああ!!?? てめえみたいな無責任な野郎が多いから山では野犬が増殖し、公園の生態系はブラックバスに壊されんだこのカスがあああああ!!??」

「はあ!!?? いえ、彼女は別に気にしては……そもそもそんな会話する程私と彼女に接点は……」

「それは単にてめえの怠慢だタコがあああああ!!?? さつき話した感じでは名前欲しいかって質問に満更でもなさそうだったぞこの外道が!!?。」

「何者ですか貴方は!!??」

クウネルの珍しい大音量によるツツコミが広いテラスに木霊した。

「なんだそりやあ? あの野郎巫山戯たことを抜かしやがって……!」

「やっぱキャシーの件も含めて二三発叩き殴つとくべきだったぜ!!?。」

「向こうからすりやお前の存在の方が余程巫山戯てん様に思えてるだろうよ。……つていなかんだキャシーつて?。」

「察し悪いいなあ薫つちい、飛竜女史に俺がつけた名前だよ名前はキャサリン、愛称でキャシーな」

「えらい可愛い名前だなあおい!!??」

図書館島からの帰り道、中村の返答に対する辻の叫びが辺りに轟く。

あれからグダグダになった流れを辻と刹那、大豪院の奮戦によりなんとか元に戻し、クウネルとの交渉を終えて一同は暗くなった寮への帰り道を歩んでいた。

「しかし平然と無茶言うねえあの怪人ローブ男。あと何ヶ月も無いっていうのにどうしようかホント?。」

山下が困り果てた様子で溜息を吐く。



「…あのさあ。あたし腕っ節とかそういう方面とんと疎いからよくわかんないんだけど、そんなに強い訳、あのローブ男だか女だか？」

「多分野郎だぜ？俺にはなんと無く解る」

「竜の性別を見破った人間？が言うと言説得力が違いますね……」

朝倉の末尾の疑問に答えた中村の言葉に、夕映が一筋の汗を流して呟く。

「いや、それはどうでもよく無いけどいいとして、あたしもよくわかんないわ先輩達、あの胡散臭い奴強いのか？」

後を引き取った明日菜の疑問に、バカレンジャーは一様に浮かぬ顔で頷く。

「…まあ、俺達はおろか楓ちゅわんにすら直前まで気配を悟らせずにあの場に現れた時点で既にタダモンじゃ無えんだけどよ……」

「座つていながら立ち振る舞いの一切に隙が無かった。多分肉弾戦でも相当強いね、あの人……」

「加えてネギに魔道書を余裕綽々でわざわざ貸してくれた際の口ぶりからして明らかに魔法使い。そちらの腕前は想像すら付かん」

「ム力つく対応だが、仮に俺らがあそこで一齐に襲い掛かっても対処出来る自信があったからこそそのあの腹立つ態度なんだろうぜ」

口々に告げられるのはあまり愉快でない状況を指す内容だ。

『今度の麻帆良学園祭にて、麻帆良武道会という名称の伝統ある格闘大会が行われます。その大会でどなたでも構いません。私から見事一本取ることができれば、ナギ・スプリングフィールドに関する情報を貴方がたにお教えしましょう』

それがクウネルからネギ達に対して告げられた条件だった。

「…現状で勝ち目が無いから期間を置いてくれたのは解るが、何故学祭の、それも殆ど名前も聞いたことが無い様なマイナーな大会で試験を行うんだ？更に言うならどなたでも、なんて言っただけで見事にボカしちゃいるが、明らかにネギ君に向けた条件だぞこれは」

「え…僕、ですか？」

辻の言葉に、ネギが驚いた様に自らの顔を指で指す。ネギにしてみれば、自身の父親に関する話したのだから当然辻達に黙って全てを

委ねるつもりは無く、自分自身でも出来る限りのことをするつもりはあったが、同時に現時点で自分は辻達よりも一部の限定的な状況を除けば実力が劣ることをはっきりと自覚していた。その為、何と無く自分は蚊帳の外に置かれる気がしていたのに、辻のこの言葉である。

「どういうことですか、辻部長？」

刹那の疑問に辻が答える。

「考えても見ろ、格闘大会なんて場所で試験を行う以上一対一での戦闘になる。この時点で複数人の力を合わせてクウネルを沈めるのは暗にルール違反とされている。即ち個々の実力であるの怪人を上回らなければいけない訳だが、こんな条件を出す以上あの男？はこの場の全員に一対一で勝つ自信があるんだ。そして武の道を志す者なら嫌になる程理解していると思うが…」

「アイヤ、強くなるのに近道無し、そういうことアルね」

古が珍しく察しの良い返事をする。何気に大豪院が驚愕していた。「そういうこと。たったの数ヶ月で実力は劇的に上昇したりはしない。つまり始める前から理屈の上ではこの試験、合格するのが非常に困難な訳だが……」

「…成る程、そこでネギ坊主でござるか」

得心した様に楓が頷く。

「…そう、まだまだ修行を始めたばかりで伸び代が大量に残ってるネギ君なら、もしかしたらこれからの成長具合によっては、あの怪人を打倒出来るかもしれないって話だ」

「…お言葉はわかりましたが……」

夕映が僅かに眉を顰めつつ、反論する。

「戦闘方面に関しては私も素人ですのでよく解りませんが、漫画や小説では無いのですから素人に近い人間がたった数ヶ月の修行で達人を打倒する、などというところが現実にあるのですか？」

「まあはつきり言って無いに等しい」

きっぱりと中村が断言する。

「勝負は実力だけで決まるもんじゃ無えが、同時に全体で八、九割の勝因は実力で勝ることだ。普通に考えりゃ、あと数ヶ月でネギが俺らよ

り強くなるなんざアリエツテイだぜ」

「だが、前にも少し言及したが、ネギの上達の早さは異常の域だ。恐らく奴は何らかの方法でそれを知っていたからこそ、こんな条件を出してきたのだろう」

中村の後を大豪院が引き継ぎ、渋い顔で締めくくる。

…またか……………

辻はうそ寒いものを感じ、首を縮める。

魔法関係者達と同じだ、クウネル・サンダースという怪人までもが、ネギに試練を投げかけ、成長を図ってくる。

…：一体裏ではどういう扱いになってるんだ、ネギ・スプリングファイルドって存在は……………！！

辻が考え込みながらもふと視線を落とすと、ネギが何事かを考えながらブツブツと小さな声で呟いている。

…：あ、ヤバイ。

辻はネギの思考が良くない方向へ向かっているのを感じ、ネギの頭に手を置いて語りかける。

「ネギ君、大体何を考えているかは解るけど、さつき君が強くなってあのクウネルさんを打倒する云々の話はあくまでクウネルさんが望んでいるであろう展開の話だ。今から君がうんと無理をして強くなるうなんてのは、俺達は認めるつもりは無いよ」

「えっ!? な、なんでわかったんですか僕の考えていることが!?」

ネギが頭に置かれている辻の手もそのままに、驚愕の声を上げる。

「誰でも解るわ阿呆」

「いつかも言ったけどネギ君、僕らは何時でも君の味方でいるつもりだ。まだ幼い君が無理をする必要は何処にも無いんだよ」

「大体さつきは勝ち目が薄いみたいだな話してたが、俺達はそうそうたる化け物どもと渡り合って此処にいるんだぜ? こつから絞り込んで行けばあんな野郎にこつちが負けるなんてことは無えよ。何せこつちが最低五人もいるんだぜ?」

「第一お前が幾ら無理をした所で、身に付く力はあくまで付け焼き刃

だ。可能性が無くはないというだけで、勝率など無いに等しいぞ？」  
口々に諫められてネギは言葉を詰まらせるが、それでもその顔は到底納得したそれでは無い。辻はこっそりと溜息を吐く。

……ネギ君も案外頑固だからなあ……………

この場で幾ら言い含めても納得することは無いだろうと辻は判断し、中村達に目配せをすると一旦話を終わらせに掛かる。

「…まあネギ君、今後も修行は継続するし、まだ時間もある。何にしろ俺達は全力で協力するから、ゆっくり勝つ為の方針を決めて行こうか？」

「は、はい!!? 皆さん、ありがとうございます!!?」

いいよ、と辻が笑っていると、のどかが緊張しながらも前に出てくると、何時もの彼女よりも大きな声で、つつかえながらもネギに告げる。

「せ、せんせ〜!!? わ、私も及ばずながら、協力しますー!!?」

「のどかさん…」

「そうそう。何が出来るかはわかんないけどさ、あたしらも出来ることはやっちゃおうよ、ネギ君?」

「先輩達だけでカツコ付けんのは無しよ無し! 私も協力するわよ、ネギ!!?」

「ふふふ、修行とかそういう方面なら私も力になれるアルよ!!?」

「此処まで話を聞いてさようなら、ではいささか寝覚めが悪いでござるからなあ。及ばずながら、拙者も協力するでござるよ」

「ん、ウチもご飯作ったり、色々できるえ〜ネギ君。せつちゃんも力になつてくれるわ〜」

「無論です。得体の知れない相手ですが、まだまだ時間はありますからね」

「…と、まあ、言いたいことは皆さんに言われてしまいました。私も気持ちと同じです。頑張りましょう、先輩方、ネギ先生」

「…は、はい!!?」

夕映の言葉に、ネギは声を詰まらせながらも笑顔で頷いた。

「…ふふ、健やかに育っていましたねえ、ネギ君も、アスナ嬢も」

月明かりが照らす中、ティーカップ片手にクウネルは誰にとも無く呟いた。

「…世界は貴方達に決して優しくはありません。強くなりなさい、ネギ君、アスナ嬢。…そうでなければ、意に沿わぬ一生を送る羽目になるでしょう…」

或いは、とクウネルは思う。あの真っ直ぐな若き武道家達が二人の行く末に、良いものを齎してくれるだろうか。

…こんな形でしか、貴方の息子と妹分に関われない私を恨みますか？ナギ、アリカ様……………

## 6話 苦勞人の情報提供 武道と魔法の交わる一歩？

「……ああ……気が重いぜ畜生……」

篠村 薊は世界樹広場近くの公園へと続く道を重い足取りで歩きながら消え入る様な調子で独り言ちた。

……なんで俺が謝りに来てんだろうな……

晴れ渡った空を仰ぎ、早朝のやや冷たい澄んだ空気を胸一杯に吸い込むが、矢張り篠村の気分は晴れない。

辻達バカレンジャーと麻帆良の魔法関係者達の話し合いから早二週間、篠村は辻達に面通しを改めて行う必要性を感じて、早朝よく鍛錬を行っているらしいこの場所に向かっていた。

理由の一つとして、どうも辻達バカレンジャーの魔法関係者としての参加が内輪で決定しそうな流れがあった。あの夜の交渉めいた話し合いが決裂してから、魔法関係者の間では辻達を自分達の組織の一員に加えるかどうかについて、少なく無い数の議論が行われてはいる。

しかし篠村は理解していた。結局下の者が幾ら騒いで反対した所で、上の者がこうする、と決めれば従うしか無いのだ、こういうものは。

……学園長があの変人共を加えるのに乗り気な以上、遠からぬ内に連中はほぼ間違い無くこちら側にやって来る。

……だからこそ、今のままでは不味いんだよなあ……

篠村が危惧しているのは腐れ縁のお堅い現在の仮パートナー、高音の存在だった。高音の性格上、上が決定したからといって絶対に割り切つての無難な対応など、バカレンジャーに対してはしないだろうという確信が、篠村にはあった。

……特にあの気が短そうな学園最大最低の変態とは賭けてもいい程確実に衝突する、というか既にしてるし……！

故に篠村は少しでも辻達バカレンジャーとの関係を良好なもの

する為、先日の無礼を謝罪に来たのである。本当は高音本人が頭を下げに来るのが一番いいのだが、散々説得しても高音は自分からの謝罪を拒否した。余程中村の態度が腹に据えかねたらしい。

：まあ俺もイラつと来たし、高音の気持ちも解るだけに難しい所だよなあ……

篠村としては向こうの言動にも普通に問題があったと思うだけに、こちら側が先に折れることに対して抵抗が無くは無いが、こういう両者に非がある場合の事案は意地を張って関係修復を先延ばしにしても良いことは何も無い。ましてこれから協力して仕事に当たる羽目になる相手ならば尚更だ。

：ネギ・スプリングフィールドへの構いつぶりを見るに、真っ直ぐ過ぎるだけで人の良い連中みだし、自分達の側にも非があったことを認めてくれれば、高音も軟化してくれるだろ。：俺の安い頭下げで解決するならそれでいいわな……

そんなことを考えながら公園内に入っていく篠村。さて連中は何処に居るかと敷地内を見回す篠村の目に、とある光景が飛び込んで来た。

「エンヤアアアアアアアアアアアア!!?!?!?!」

「わああああああああつ!!?!?!」

必死で逃げ回るネギの後ろを、何処ぞの未開の地に住む原住民の呪術師か何かが付いていそうな派手で怪しい巨大な仮面を被った腰ミノ一丁の怪人が、両手に燃え盛る松明を持ってそれを振り回しながら追いかけていた。怪人の放つ奇声とネギの悲鳴が、人気の無い朝の公園内に木霊する。

「……………」

篠村は暫し無言でその珍景を眺めていたが、やがて腰の後ろに手挟んでいた金属製の棒のようなものを取り出して片手に持つと、それを一振りする。

ジャキン!!?という小気味いい音と共に棒が伸長して、全長五尺少々の片端が槍の様に尖った、全体に紋様の刻み込まれた長杖ワンドが現れた。

「…そこを動くな変態野郎おお!!?」

篠村は獲物を振り上げ、怪人へと突撃した。

「…ったくこの慌てんぼさんが。朝っぱらから少年を鍛えるべく指導に勤しむ好青年に向かつて問答無用で殴り掛かって来やがってからに、状況を判断する時はもつと落ち着いて見極めれやお前…」

「誰がどれ程時間を掛けて判断した所で変質者に小学生が襲われている以外の判断は下せんわあの状況は!!?何を偉そうに説教くれてやるこのパプアニューギニアの呪術師が!!?」

「矢張り意地でも止めるべきだったな……」

「まあそりやそうよねえあの状況見てれば……」

仮面を地面に置きながらやれやれといった様子で言い放つ腰ミノ一丁の変態——中村の言葉に篠村が青筋を立てて反論し、大豪院と明日菜がやり切れなさそうに呟く。

あれから篠村の大上段からの一撃を片方の松明で受け止めた怪人が反撃の為に空いた方の松明をフルスイングしようとした所でネギが慌てて割り込み、騒ぎを聞き付けた辻達が制圧（主に中村を）して一先ず事は収まった。

「…他人の行動にとやかく口挟みたくは無いが、もう少し他人の目線をものを考えた稽古の付け方しろよお前ら。端から見ていれば年端も行かない少年を集団でいじめている外道集団以外の何物でもないぞ?」

篠村の指摘に、中村を除いた面々は恥じ入る様に俯く。

「この恥知らずを止められず申し訳ない……」

「普段はもう少し、健全な見た目なんだがな、俺達の修業風景は……」

大豪院が頭を下げ、豪徳寺が呻く。

「んだよ人の行動に文句ばっか付けやがっててめえ等は……ん?そういやお前は誰だよ?さっきの杖捌きは結構出来そうだったから杖術部かなんかの奴かと思ってたけど、お前なんざ知らねえぞ?お前レベルなら確実に俺の記憶に残ってる筈だがな……?」

自覚と反省という単語を母親の腹の中に置いて来た中村がふと悪



態を途中で止め、訝しげに篠村の顔を覗き込む。

篠村はがつくり肩を落とすが、中村は顔を合わせた時にかなり激昂していたし、高音が主に突つかかっていたから無理も無いかと思いき、改めて自己紹介をしようとする、が…

「…えーと誰だっけ？なんか見覚えは有るんだよね……？」

「そうなんだよな…それも割と最近見た気がすんだよ……」

「ふむ………思い出せんな」

「おいお前ら失礼だろ！この人は……えーと………ほら!!？一ヶ月前に麻帆良の武道家なにするもので、って言いながら麻帆良武道系部活に道場破りに来た怪しげな武術集団の中に、多分……」

「…確かに名乗ってはいなかったけどよ………影が薄くて悪かったなあ!!？俺の名前は篠村 薊だ!!？お前らが京都から帰って来た日に顔合わせてその変態と喧嘩した金髪女を止めに入ったのが俺だよ畜生!!？」

中村はおろか、他のバカレンジャーにまで顔すら碌に覚えられていない事実へヘコみながら、篠村は半ばヤケクソ気味に名乗りを上げた。

「ああー………んだこの野郎、てめえの女の仇討ちに来たってか、ああ？」

篠村の正体を聞いて中村がドスの効いた声で凄んでみせる。

「高音は俺とはなんでも無えよ！単なる警備上の仮パートナーだ、間違っても本人の前で言うなよ!!？俺が半殺しにされる!!？」

冗談じゃないとばかりに目を剥いて篠村が叫び返す。

「…ねえ、いまいち話が見えないんだけどこの人は誰で何しに来た訳、先輩達？」

それまでのやり取りを黙って見ていた朝倉が怪訝そうに辻達へと尋ねる。

「あ………」

辻が言葉を詰まらせ、呻く。魔法教師、魔法生徒と会合した件についてはネギを含めて、3-Aの人間では刹那以外に知る者はこの場がない。どうにもきな臭い話を聞かせて不安にさせない為と、バカレ

ンジャー達にも事情が判っていないこの段階で、バカレンジャーの主観が混ざった説明により魔法関係者達が一方的に悪いかの様な誤解を与えない為である。

…と、言ってもどうしようか、この状況……

上手くボカした説明が出来ないものかと辻が内心懸命に頭を捻っている、そんな様子を黙って見ていた篠村が皆に対して語り始める。

「ああ、自己紹介もせずに失礼、俺は篠村 薊。そのバカレンジャー達の知り合い……っていう程でも無いな、顔見知り位の関係だ。こいつらが噂の子供先生を寄って集ってイジメてる、なんて噂が最近流れてたもんでさ、気になって確かめに来たんだよ」

「……ああ……」

「ええっ!? ち、違いますよ!?」

普段の修業風景を思い出して、明日葉が遠い目になり、ネギが焦ったように否定の声を上げる。

「辻さん達には僕の方から望んで稽古をつけて貰ってるんです!!? イジメなんてそんな……!」

「ああわかったわかった、落ち着いてくれネギ先生。正直見た目はアレだったけど先生自身は真面目にやっているようだったしね。双方合意の元にやっているんだったら俺からとやかく言う筋合いは無いさ。騒ぎ立てたりもしないから安心してくれ」

ネギを宥めながら、篠村は辻の方に目配せをした後、踵を返す。

「じゃあ皆さん、邪魔しちやって悪かったね、部外者はこれで退散させてもらうよ。ご縁があればまた近いうちに」

ヒラヒラと後ろ手に手を振りながら退散する篠村。

「……ん〜! どう思うアル、楓?」

「ふむ……負ける気はせんでござるが、中々得体の知れない御仁でござるなあ……」

「喧嘩も売っていない相手の力を図るのはいい加減に止めろ」

「ほんとそればっかだなお前は……」

立ち去る篠村を見てやや興奮気味に問い掛ける古にニンニン♪と

楽し気に笑いながら楓が答え、そんな戦闘<sup>バトルジャンキー</sup>狂二人に呆れながら大豪院と豪徳寺がツツコむ。

「…まあ普段の僕らもあんまり人のこと言えない気がするけどね……」

「言うなよ山ちゃん……」

苦笑しながらの山下の言葉に、頭痛がするかのように頭を押さえながら辻が力無く言う。

「…で？結局あいつは何しに来たんだ？」

「含みのある視線と台詞をしてたろうが、少しは相手の言動の裏を讀むということをしろよお前は」

ハテナ

「？マークを頭に浮かべながら言う中村に、やれやれと首を振りながら辻が返す。

「…こつちの様子に気を遣って一旦退いてくれたんだろう。多分また近いうちに会いに来るよ、何か話があったんだらうな…こつちに」

「よう、朝方ぶりだな、お前さん達」

朝方の鍛錬を終えてから登校したバカレンジャー。朝の辻の予想通り篠村は昼休みに辻達の元へ現れた。

「来るとは思っていたけど早いな」

「急を要する話でも有るのか、貴様？」

僅かに驚きながら辻が言葉を掛け、僅かに疑念の籠った目で見やりながら大豪院が尋ねるが、篠村はその言葉に苦笑いを浮かべながら手を軽く左右に振りつつ否定する。

「物騒な話を持ち込むつもりは無いし、今の所上が何かあんなたちに對する方針を決めたわけでもないから、情報を伝えられる権限を持って無い俺はそもそもそつちの方面では何も言えないな。いや簡単だ、この前の一件を謝りに来たんだよ俺は」

「この前の一件…つつうとウチの馬鹿とお前んとこの金髪女が衝突したアレか？」

豪徳寺の言葉に篠村は頷き、頭を下げる。

「この前は高音が失礼な事を言っつて悪かった。こつちにどんな事情が

あろうが命懸けで子どもや少女救ったあんたらに対して敬意の足りない発言だった、許して欲しい」

殊勝な篠村の態度に、戸惑った様に互いの顔を見合わせるバカレンジャーだったが、

「…此方こそ、話も全て聞き終えもしない内に失礼な態度を取った。謝罪させて貰おう」

「そっちの対応に引つかかるものはあるけどよ、俺らも現時点で全面的に喧嘩売りたい訳じゃ無いんだよ」

「熱くなり易い奴がこつちに居てさ、売り言葉に買い言葉で言い過ぎちゃったんだ。寧ろこっちの方が短絡的で非が有るよ」

「……中村?」

「つゝ!!? わーってんよ畜生俺が悪かったつつうの!!? 餓鬼みてえに文句言うだけ言って空気悪くしてすみませんでしたあくゝつ!!?」

各々自分達の側にも非があった事を認め、中村は辻に促されて不本意そうに、だがしつかりと頭を下げた。

「スマンな、こんな奴で…」

「いや、俺の方も喧嘩した本人が頭を下げて来ていない以上筋を通しちゃいないんだ、気にしないでくれ」

苦笑して返す篠村にお互い大変だな、と辻も苦笑いを返し、一先ずバカレンジャーと魔法生徒の一端は和解を迎えた。

「…で、伸ばし伸ばしになっちゃったけど、お前さん何しに来たのよ?」

一旦仕切り直し、昼食を迎えた一同が各々食事を取る中、巨大な弁当箱の中身を掻き込みながら中村が尋ねる。

「いやな、流石に謝罪に来るときながら頭下げただけで帰るのも誠意が足りないと思つてな。詳しい事情は話せないけど、せめてこっち側の大まかな情勢だけでも教えようと思つたんだ」

購買で買ったらしきパンを適当に噛み千切って飲み込みながら篠村がわざわざ顔を出した理由を語る。

「それは願つても無いが…貴様はそんなことをして大丈夫なのか?」

大豪院が箸を休め、怪訝そうに疑問を放つ。

「味噌っカスの俺が知っている情報なんざ大した重要性も無い、その気になって調べればわかる程度のものだよ。単にあんた方の手間を省く以上のもんでは無いさ。それに、確かにあんた方は一部で相当敵視されちゃあいるが、交流を持つなと命令された覚えは無い」

「…そういうことなら遠慮無く、と言わせて貰おうかな?」

山下がタコさんウインナー(タコが三匹並んで脳天串刺しで口からケチャップの血糊を吐き出している)の串からタコを外しつつ言う。

「ああ…所であんたの食い物の悪趣味な装飾はツツコミ待ちか?」

「いや、この残念イケメンはこれが素だから触れないでやってくれ、調子に乗っから」

「いやあく可愛いよね、タコさんウインナーって」

「…スルーな、スルー……」

のほほんと串を掲げて笑う山下を半目で見やりながら辻が呟く。

「オッホン…まずあんた方に対する魔法関係者の評価、というか印象だけど、まあ概ね良く思われちゃいない。言っちゃなんだがここは一癖有るが有能な連中が集まる、相応にプライドの高い連中も多くてね。勿論全体がそうだと言う訳じゃ無いんだが、魔法使い以外を下に見るといふか、一般人に対して優越感にも似た感情を持っている奴らが居る。そういった連中からは先の喧嘩騒ぎもあつてあんた方みたいな素人の餓鬼なんぞ不必要だとさ」

「ハッ…だから俺らは混ざりたいなんざ言っちゃいねつつうのお」

「結果的に混ざらなきゃならんのだから意味無えよその反論」

「いい気はせんが概ね予想通りの反応だな」

「ま、普通に組織のトップに暴言吐いてるからねえ。闇討ちされないだけマシな方じゃない?」

悪態を吐く中村の頭を豪徳寺が小突き、半ば諦め混じりに呟く大豪院と山下。篠村は苦笑して双方の側に対するフォローを入れる。

「誤解しないで欲しいんだが、あんた方の存在も功績も認めていないのはほんの一部だけだ。大半はあんた方の先の一件の態度にこそ不快感を得ちやいるが、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと京

都の事件でのあんた方の行動方針と実績を評価してる。中村、でいいよな？に噛み付いた高音だって、あんた方の参戦にこそいい顔をしちゃいないが、あんた方の実力と弱者の為に奮戦した精神性には手放しで評価してただぜ？ただ、自分らの領域に畑違いの人間が急に入って来そうなんで受け入れられて無いただけなんだ。それをあんた方に解ってくれとは言わないが、決してあんた方を見下している連中が全てでも主流でも無いってことは頭の隅にでも置いといてくれ」

余り真面目な印象は受けない口調とは裏腹に、真剣な表情と真摯な言葉を放つ篠村に対する評価を辻は内心で上方修正していた。

…やる気無さそうな態度取っていたけど、朝の様子からして気は回るし同僚へのフォロワーには来るし、随分と弁えたというか、大人びた男だなあ、こいつ……

そんな感心した様な辻の視線に気付いてか、若干照れ臭そうに首を竦めながらも篠村は話を続ける。

「…学園長があんた方の警備員入りに乗り気な以上、遠からぬ内に再び勧誘を受けると思う。無論俺は行動に口を出す権利なんて無い以上、あんた方が話を突っぱねるのも自由なんだが、ネギ・スプリングフィールドの助けに今後もなりたいなら……」

「篠村と言ったな、皆まで言うな」

篠村の言葉を大豪院が静かに遮る。

「俺達もそこ迄馬鹿じゃ無え。ネギの奴と今後も関わって行くならそうするしか無えって解ってんよ」

「愚痴るつもりは無いけれど先の一件はあくまで中村の暴走で、僕らは最終的にそうなるしか無いとは考えてたから」

「へえへえ全部俺が悪いんですう……今度は途中でキレねえ様にするよ、マジでな」

「そんな訳だよ、篠村さん」

辻がバカレンジャーの言葉を引き取り、告げる。

「貴方と基本的に考えは同じだ。此方としては二度と事を荒立てるつもりは無い。安心してくれ」

辻達の言葉を聞き、篠村はホツとした様子で椅子に凭れ掛かる。

「…そうか。それならこつちも気が楽だ。あんた方相手に武力行使なんて事態はほぼあり得ない話だが、世の中に絶対なんざあり得ないからな」

「確かになあ……」

絶対だと思っていた常識をここの一ヶ月足らずでぶち壊されまくっている辻は何処か遠い目で同意する。

何と無く会話が途切れ、暫し食物を咀嚼する音だけが場に響く。

「……ああ、先程あんな事を言っておいてなんだが、多分あんた方に勧誘の話が来るのもう少し先になるぜ」

一足先に食事を終えた篠村が、パック入りのコーヒー牛乳を啜るのを止め、思い出した様に告げる。

「ん？どういふことった？んな揉めてんのか、俺らの受け入れ云々？」

中村が不思議そうに尋ねる。

「いや、それも無いでは無いんだが…まあ端的に言つて、今はそれ所じゃあ無い大変な問題が迫っているんだな…」

篠村がゲンナリした様子で呟く。

「…話が見えんが、端的に言つてトラブルに見舞われているということか？」

尋ねる大豪院に対して、何故か篠村は恨めし気な視線を返す。

「他人事みたいに言いやがって…ある意味あんた方が元凶だぞ、この問題……」

「ああ？」

「…どういふことだ？」

中村と辻が唐突に告げられた穏やかでは無い台詞に眉根を寄せて聞き返す。

「あー何て言うかな……」

「エヴァさんの件でしょ、きつと」

僅かに言い淀み、迷う様に口を開きかけた篠村の言葉を遮り、山下が言い放つ。

「…??…どういふことよ、山ちゃん？」

意味がわからないといった様子の中村が尋ねる。

「思い出してよ中村…僕が前に言ったでしよ、エヴァさんもうすぐ封印が解けるんだって」

「…ああ、そういうことか…」

大豪院が得心を得たと頷く。篠村も山下の言葉に頷きを返す。

「そう。かの『闇の福音』の封印が解け、六百万\$の賞金首として魔法世界全土になを馳せた伝説クラスの悪の魔法使いが全盛期の力を取り戻すんだ。言い方は悪いが、力を備えているとはいえたかが学生数人の処遇なんて議論している時間は無い、今は手の空いてる連中は洩れなくエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの警戒に当たってるって寸法さ」

「はー大層な話だな吸血鬼のババア一人に」

豪徳寺が呆れた様に呟く。

「こつちとしちやその無警戒っぷりが信じらん無えよ殺し合った間柄なんだろうが、報復に来るとか考えないのか?」

篠村の言葉に辻達は顔を見合わせる。

「…何と無くあのババアそういうキャラじゃ無んだよな」

「来るにしても宣戦布告してから襲ってきそうな感じだよな」

「あれで僕らの事は評価してるらしいからねえ、こつちから喧嘩売らない限りは大丈夫でしょ?」

口々に言うバカレンジャーに、篠村は頭痛がしたかのように頭を押さえる。

「…生きてる世界が違うってのはこういうことかね。脅威の度合いがわかって無いのかただ単に肝が太いのか……」

「おそらく両方だろうな」

肩を竦めて大豪院が返す。

「…兎に角情報ありがとう篠村さん。かなり助かった」

「篠村でいいよ、同い年だろう?こつちこそたいした情報もくれてやれないで悪いな、他に何かあれば出来る限りは手伝うんだが…」

「お、そういうことならよお」

中村がニヤリと笑って言い放つ。

「そつちの立場に支障ない範囲でいいから、力あ貸してくんねえ?魔



法使い」

「……何？」

「……何でこんな事になってんだ……」

長杖ワンドを構え、体を開いて半身の姿勢を取りながら、篠村は遠い目で呟く。

「グオツフオツフオツフオツ、んじゃそれなりに本気で行くぜえ篠ちゃんよお？」

真正面に立つのは道着姿の中村、既に臨戦態勢で篠村に不敵な笑みを見せている。

「大丈夫なんでしょうか、あれ……」

「ん〜結構出来そうだから大事にはなんないと思うけどねえ？」

「お、お兄様！頑張って下さい!!？」

「お兄様は止めろつつつたる愛衣い!!？」

何故か居る愛衣に対して怒鳴り返ししながら、篠村は溜息を吐く。

「ホントなんでこうなった……？」

「っしや!!？そろそろ始めるぜ、手合わせ！」

## 7話 サギタマギカマスター

「…それで、何故朝方のお知り合いと殺し合いをする羽目になったのですか？」

「人聞きの悪い言い方止めろ綾瀬ちゃん。単なる手合わせ、いわば腕比べというか試合だよ。篠村の実力を見たいって話になったんだ」

『新鮮朝市大間のマグロ使用 八倍濃縮魚醤スープ ああつ、喉に！喉に！！？』とラベルの張られたジュース？を啜りつつ尋ねる夕映を苦い声で辻が諫める。

「あ、あのくなんでそんな話に……？」

「ぼ、僕もその辺りの経緯がよくわからないんですが……？」

のどかに問われてネギが戸惑いながら更に辻達へと質問を回す。

「ああ、まあ話せばそれなりに長いんだが、要約するなら手詰まりを感じ始めてる修業の助けに篠村あいつがなってくれないかと思つてな」

二人の疑問を受けて豪徳寺が答える。

「手詰まりつて……？なんか私には順調に進んでる様に見えるけど、何か問題あつたの先輩？」

明日菜が不思議そうに尋ねる。

「うん、まあネギ君は僕らの教えを凄いい勢いで吸収してて、あくまで実戦では無いとはいえそれなりに動ける様になって来た。僕らが思つていた以上に順調だし、そちらには何の問題もない……んだけどねえ……」

「問題は魔法関係の指導なのだ」

山下の説明を大豪院が引き継ぐ。

「知つての通り俺たちの中でネギ以外に真面な魔法知識を持った者など存在しない。そしてあいつは武道家ではない、魔法使いだ。強くなる、というのなら当然魔法使いとしてのスキルも上げていかねばならんが、それに関して現状俺達は出来ることがほぼ無いと言つていい」

「かといつて」

「俺達の知り合いの魔法使いなんてのはそれこそ指を詰めたヤクザで

も数えられる程しか心当たりは無い。しかも現状、どの人も頼れないっぽいしね。だから篠村の存在はある種のテコ入れになるかもしれない」

辻の言葉に成る程、と女性陣が頷く。

「…しかし辻部長、言い方はなんですが篠村先輩は一魔法生徒に過ぎず、私や部長達と同じく修業中の身です。他者に対して指導を行えるほどの、実力と知識が期待できるとお思いですか…?」

「…んーまあそれは「お兄様は凄い人ですから問題ありません!!?」のおお!!?」

刹那の疑問に何事かを答えようとした辻は、横合いから飛び込んできた愛衣の叫びによって遮られる。

「お兄様はとても素晴らしい人なんです!!? 魔力量も魔力を扱う上での感覚でも、お姉様はおろか私にも劣っているのに、弛まぬ努力を小さい頃からずっと続けられて、遂には難関と言われたこの麻帆良の地での研修参加資格をもぎ取ってみせた不屈のお人です!!? 自己を磨くことに関しては他の追隨を許さないお兄様ならば、必ずやネギ先生の修業の助けになります! 先輩!!?」

愛衣は爛々と輝く瞳で辻を射抜き、力強く断言した。

「…あゝ熱烈なPRをどうもありがとう。俺は辻 はじめ 一、失礼だけど君の名前を聞いても構わないかい?」

多少引きながらの辻の自己紹介に愛衣はハッと我に返り、真っ赤になりながら慌てて頭を下げ、言葉を返す。

「すすすみません私ったら名前も名乗らないでベラベラと…麻帆良女子中等部二年の佐倉 愛衣と申します! えと、本日はお兄様の付き添いで…」

「へ〜地味めな顔して隅に置けないじゃんあの先輩! いや待って、さっきの話しぶりだとこの子と仲良さそうなお姉様、の存在も気になるし、真逆三角関係なんて展開あっちゃいますかあ〜!!?」

「聞こえてんだよパラッチ!!? 愛衣は単なる後輩でそれ以外の関係は断じて無い! 俺はきっちり否定したぞこれで高音の件も含めて妙な噂やゴシップ記事が出回ってみろ、名誉毀損で訴えてやるからなあ

!!?後愛衣!過大評価も甚だしい美辞麗句でおれを持ち上げるな!!  
?お前がそんな調子だから俺はお前を可愛がつてる高音に睨ませる  
し、ガンドルフィーニの堅物に不順異性交遊を疑われるんだよお!!  
?」

篠村を褒め殺す愛衣と、愛衣の熱弁にテンションを上げてメモ帳に  
何事かを凄まじい勢いで書き殴っていた朝倉に、緊迫し始めた立ち会  
いの空気をぶち切って篠村が叫ぶ。

「…なんだろう、篠村とは凄くいい友人になれそうな気がしてきたぞ  
……」

「だろうね、今のテンパリ気味の絶叫、桜咲ちゃんとの関係でいじられ  
てる時の辻とそっくりだもん」

「まあお前は最近結構な割合でボケと惚気をかます様になったから純  
粋にツッコミキャラっぽいあいつとは微妙に違うけどな」

しみじみ共感を込めて呟く辻に山下と豪徳寺の容赦ないツッコミ  
が飛ぶ。

「…何処の誰が何時ボケて惚気たつて?」

傍らの二人を睨み付ける辻だが、当然の如く堪えた様子はない。

「アイヤ、自覚が無いとは末期アル」  
モッヂー

「あるいは薄々勘付いていながら往生際が悪いだけかもしれないでござ  
るな」

「うくん抵抗してももう意味ないのになあ〜やっぱり辻先輩微妙にへ  
タレやわあ〜」

「五月つ蠅いなお前らは寄って集って!!?」

古と楓、木乃香の無慈悲な追撃に辻はどうとうキれて怒鳴り散ら  
す。

「…なんか辻の奴とは仲良くなれそうだな何と無く。物騒極りない  
アーティファクト手に入れてるからもつと危なそうな奴かと思つて  
たんだがな……」

うら若い美少女二人(黒人メガネも居るが)とのチームに所属して  
いる所為で日頃からやつかまれたり冷やかされたりする篠村はなん  
だか他人事とは思えない辻の様子に同情を禁じえなかった。

「…おいコラ……」

「ん？」

ドスの効いた声に呼び掛けられ、振り向いた篠村の視線の先には偉くピキっている中村がいた。

「てめえ金髪巨乳高飛車高慢系女子だけに飽き足らずあんなツインテール赤毛素直系後輩属性持ちのキャワイ娘ちゃんにまで慕われてっとはどういう了見だこの大富豪野郎!!?」<sup>はじめ</sup>「ちゃんと違ってヤバめの属性の女がいねえ以上「余計なお世話だ馬鹿野郎!!?」…純粋に羨ましいだけじゃ無いかクソ野郎!!?」

「たった今否定したばっかだよな俺!!?」

途中で挟み込まれた辻の悲痛な絶叫にもめげず、メラメラと嫉妬の炎を纏いながら糾弾する中村に篠村は全力で反論する。

「っーかお前高音とはかなり険悪な感じに喧嘩してたろ！それで羨ましいとか言ってることがおかしいぞこの野郎!!?」

「バアアアカが!!?曲がりなりにも面倒みてるガキが関係してるから怒っただけで本来優等生っぽい気位高いの委員長タイプ的一种に近い女の子なんざ大好物に決まってんだろ馬鹿かお前は!!?」

「馬鹿はお前だろ!!?」

中村の妄言に堪らず篠村は叫び返す。

「駄目だ、中村に対する耐性がまだ出来ていない」

「日ごろから付き合ひのある僕らでも二、三日に一回はキツイのがあるんだから仕方ないよ、あれは…」

「兎に角俺は悲モテ男の代表として貴様を許さん!!?多少は手加減した状態で始めようかと思ってたが死なねえ程度に全力でボコる!!?!!?」

「単に俺の実力測る為の軽い模擬戦じゃ無えのかよ!!?みつとも無えぞてめえの宣言!!?」

「篠村ー、馬鹿に正論は言うだけ無駄だから止めとけ体力消耗するだけだから」

「そうそう、狂犬病付きの野良ドーベルマンにでも噛まれたと思って諦めて相手をするしかないんだから」

律儀にツツコミを返す篠村に外野からのちつとも有難くない助言が届く。

「下手すりや死ぬレベルの災難じゃ無えかそれは!!?というか止めろよお前ら、目が完全に殺る気だぞこの野郎!!?」

「ああ、今後俺らと仮に付き合いを続けて貰う場合中村の理不尽に耐えられない様だと到底続かないからさ。悪いが一回は自力でなんとかしてみせてくれ」

辻が申し訳なきそうながらも堂々と篠村を見捨てる。

「て、ためえ人がシンパシー感じてたのにやっぱりこの問題児の仲間って事かよ!!?評価を改めるぜ常識人ぶってるお前も絶対真面じゃ無え!!?」

「前を向け篠村同級生、来るぞ」

「お兄様ー!!?前!前です!!?」

襲い掛かる理不尽に絶叫していた篠村に大豪院と愛衣の助言が飛ぶ。

「つつ!!?」

素早く振り向いた篠村の眼前には立っていた地点から飛ぶ様な勢いで踏み込んだ中村の刻み突きが迫っていた。

「おっ!.....」

「へえ...やるね...」

「中々出来るな...」

「中村の特別手を抜いてない初撃を不意打ちに近い状態で受けられるなら麻帆良の副部長クラスの実力はあるな...」

振り向き様に長杖フンドを跳ね上げ、中村の突きを紙一重で逸らした篠村を見てバカレンジャーは感心する。

「...その台詞には色々ツツコみたい気分ですが、あれでは.....」

刹那が呟く。

なんとか攻撃を捌いたのはいいが篠村の体勢は大きく崩れていた。中村は即座に腰を回転させて左の逆突きを打ち込む体勢に入っている、あれでは次撃の回避は不可能だろう。

中村の突きは並の魔法使いが常時展開している障壁で防げる威力

では無いし、身のこなしからして篠村は魔法剣士の様だが、一目見て刹那や辻達よりも近接戦闘の技量は劣る。つまりは終わりという事だ。

「お兄様ーっ!!?」

愛衣は絶対絶命の篠村に対して悲痛な絶叫を上げていたが、最早勝敗は決した。

……かと思われた、が。

篠村は長杖から片手を外し、指先を中村に突き付ける。

直後。

高速で飛び出した帯電する三つの光球が中村の体を捉え、中村が雷撃のスタン効果で僅かに動きが鈍る。

「おっ!!?」

それでも尚突き出された正拳に対して、篠村は中村の胴体に照準していた指先を今度はそちらに合わせ、新たに先程よりも遥かに大きな一つの光球を発射。正拳と激突した瞬間弾けて衝撃波を撒き散らし、一撃を相殺する。

「はあっ!!?」

驚愕の声を上げる中村に構わず、篠村は長杖を持った左手側から右足を軸に半回転しつつ、動きの止まった中村に右手の指を突き付け、新たに三つの光球を放つ。

「っ、ンなるっ!!?」

中村が短く叫び、弾かれた左手を素早く戻し、両手で迫り来る光球を全て叩き落とす、が。

「うおお!!?」

光球は中村が接触した際に弾けたが、そのまま霧散する事無く数条の帯となって腕に纏わり付き、中村に纏わり付いた側とは逆の先端が地面にめり込み、固定。あつという間に中村は両腕を拘束された状態でその場に縛りつけられる。

そこに、一回転して遠心力を乗せた篠村の長杖による一撃が中村の首筋に迫る。

「っんがっ!!?」

中村は咄嗟に拘束された左手側の肩を強引に上げ、受けに入る。

「ああ無駄だよ」

しかし篠村はポツリと眩き、直後中村に激突する寸前の長杖ワンドの側面に帯電する巨大な光球が出現する。

「速度差は有れど今の俺が一瞬と呼んでいい時間で呼び出せる限度は七矢有るからな」

肩にぶち当たる光球付きの長杖ワンド。直後雷撃が弾け、中村の全身に走る。

「があっ!?」

雷撃と肩に喰らった長杖ワンドの衝撃で篠村から見て左に吹き飛ぶ中村に、篠村は長杖ワンドを突き付け、言い放つ。

「魔法の射手・戒めの風矢」

放たれた七条の風の矢が、今だ空中で身動きの取れない中村に着弾し、縛鎖となつて全身を拘束。中村は地面に縫い止められ、動きを止めた。

「……」

「お、お兄様ー!!? お見事ですー!!?」

観戦していた一同は、愛衣を除いて絶句していた。

「お兄様は止めろつて言つてるだろうが愛衣ーつ!!? こいつのボルテージが上がったのお前の所為だぞ!? うあああ危なかった!!? 初撃が凌げて無きや今頃悶絶してのたうち回つてたぞ俺!?」

声援を送る愛衣に叫び返し、篠村は半ば力尽きた様に地面にしゃがみ込み、自身の無事を喜ぶ。

……中村が、負けた……? こんなにあつさり……?」

辻は目の前の光景が信じられなかつた。確かに中村は邪念というか雑念に囚われており、全身全霊で油断無く挑み掛かつたとは言いがたい。それでも中村は攻防に決して手を抜いてはいなかつたし、二撃目を弾かれてからは完全に気の出力以外は本気だつた。にも関わらず勝負は結果だけ見れば篠村の完勝と言つていい。

……こいつ……強い……!!?」



「…質問をしていいだろうか？篠村同級生？」

その後一分弱で中村の拘束は解け、魂の抜けている中村をとりあえず座らせた後、一同は車座になり芝生の上に座り込む。そしてまず口火を切ったのは大豪院だった。

「勿論だ、まあ大体聞かれる事の見当はつくけどな」

篠村は受諾し、大豪院を促す。

「…貴様が中村に放ったあれは、魔法の射手と呼ばれるそれか？」

問いの内容に篠村は少し意外そうな顔をする。

「へえ…魔法使いでもない近接専門の前衛に、即座に看過されるとは思わなかったな」

「無論魔法的な根拠などわからんが、こちらも魔法使いと言う人種には短いながらも相当な密度で関わっている。加えてネギの指導をするに中って、最低限未満ではあるのだろうが魔法の知識を学んでいく。乏しい知識の中から照らし合わせて、該当するようなものがそれ以外無い、というだけの話だ」

大豪院の説明に篠村は軽く拍手して、肯定の言葉を放つ。

「…名答。俺が先の模擬戦で使用した魔法は全てが魔法の射手だ。初めの中村に杖と一緒に打ち込んだ一撃が雷、攻撃を弾いたのが光、捕縛二回が風。と属性の違いは有るけどな」

「…こっちからそうだと決めつけておいてなんだけど、本当にそれって魔法の射手って魔法？僕らが今まで見てきたのと全然違うんだけど？」

「あ、あのそれは、お兄様が無詠唱魔法と呼ばれる技術を得意としているからです…」

一頻り騒いで興奮のおさまった愛衣が、篠村の隣でおずおずと手を上げ、答える。

「無詠唱魔法？」

「えっと、魔法を使う際には詠唱と呼ばれる、世界の魔力や精霊に対しての呼び掛けを行い、自然のエネルギーを使用者に従わせる為の一連の手順が存在するんです。無詠唱魔法は、魔法の使用に習熟すること

によって、その手順を省略して心の中で念ずるだけで魔法を発動する高度な技術なんです」

聞き慣れない単語に鸚鵡返しで疑問を発した豪徳寺に対して、ネギが解説を行う。

「な、なんか凄そうな技術ね…」

「実際に凄いです、篠村さんは!!?魔法を放つ時に殆どタイムラグも技後硬直も無く、本当に流れるように魔法の射手を連続使用していました!!? 無詠唱魔法が使えるだけでも凄いのに、僕、感動しました!!?」

「へえー、何さ篠村、大したこと無いみたいなの謙遜しておきながら凄く強いんじゃないか」

明日菜の眩きに対して、目を輝かせながらネギが行った解説を聞き、山下が感心した様に篠村を称賛する。

しかし当の篠村本人は苦い笑みを浮かべて言葉を返す。

「止めてくれよそんな手放しでの高評価は。俺はそんな大したもんじゃないんだ」

「過ぎた謙遜は嫌味にしかならないぞ」

辻がやや眉を顰めながら篠村に言う。

「俺たちは確かに魔法に関してはまだ半素人もいい所だが、普通以上の激戦を潜り抜けてきたつもりだ。中村は格別油断をしていた訳でも無かったのに、結果としてお前に封殺された。お前が特別強くも無いなら、俺達は雑魚以下とでも?」

辻にしては強い言葉での反論に、篠村は苦笑の度合いを強くしながら、首を振りその言葉を否定する。

「そういう意味じゃあ無いんだ。確かに俺の無詠唱魔法による魔法の射手は、一流の魔法剣士と比較しても劣るものではないという自負がある。…でもなあ、俺は、それだけなんだ」

「…どういうことアルか?」

要領を得ない言葉に、古が尋ねる。

「言葉通りさ。俺は、魔法の射手以外に、殆ど使える魔法が存在しないんだ」

「……え？」

篠村の言葉に、ネギが目を見開く。

「お兄様……！」

「いいよ愛衣。なんだかんだで長い付き合いになるかもしれない連中だ」

心配そうに見やる愛衣に篠村は笑って手を振り、問題無い旨を告げる。

「俺は生まれつき精霊との接触が下手糞コソタケでな。真面に交流出来るのは下位精霊まで、中位精霊以上には、どんなに頑張っても呼び掛けても碌に反応が返ってこないんだ。おかげで、魔法学校を卒業して麻帆良で実戦に就いていながら、未だに俺は中位呪文も真面に使えない。加えて各方面の魔法に特別秀でた才も無く、魔力量も並程度。……劣等生なのさ、俺は」

高音の言葉を思い出しつつ、自嘲気味に篠村は言う。

「……ま、そんな俺でも、なんとか戦う術を身につけられないかとあれこれ考えた挙句、目をつけたのが魔法サギタの射手だ。俺が真面に交流出来る下位精霊を用いた魔法でありながら、兎に角応用性が広くて多数を撃てばある程度火力不足も補える。だから俺は色々頑張ってる、魔法サギタの射手の応用と無詠唱魔法技術、おまけに近接戦闘術を身に付けて、如何にか一端に闘えるだけの実力を手にした。……お陰で何とか、まほら此処でもやっていけるよ」

語り終え、篠村が周りを見回すと、皆形容し難い表情で黙りこくっている。

……まあ、こんな話聞かされてもリアクションに困るよな……

篠村は再度苦笑して全員に語りかける。

「暗い話になってしまっただけ悪いな。別に同情して貰いたくて自分語りをした訳じゃないから、気を使わないでくれ。ただ俺は手放しで賞賛される程大した人間じゃないと……」

「……当たり前だ、誰が同情なんてするかよ……」

篠村の言葉を遮って、復活した中村が低い声で告げる。

「……ん？」

「てめえはどう言い繕おうと俺に勝つただろうが!!? そんだけ強え癖して自分が大したことないとか、負けた俺を馬鹿にしてんのかあ!!?」

「ええ!!? いや、俺の戦法は初見殺しの感が強いから、次やったら普通にお前が勝つと思うが…」

「ンなもんが慰めになるかオラア!!? 兎に角てめえは俺に勝つた時点で俺のライバル認定だあ! 俺が同格と見なしたからには、二度と詰まんねえ謙遜を入れるんじゃねーぞ!!?」

「……ええー……」

無茶苦茶な中村の言葉に、篠村は呻く。

「…おいあんた方からも何か言って…」

「確かにそうだな、お前は強ええ」

辻達に助けを求める篠村の言葉を豪徳寺が遮る。

「あんたもか!!?」

「あんたじゃ無え、ちゃんと名乗りをあげて無かったな、俺の名前は豪徳寺薫だ。俺もお前を今日からライバルとみなすぜ」

「うんうん、じゃあ僕も。山下慶一だよ、よろしく篠村。いやーいい先生見つけたね」

「全くだ、篠村同級生、いや篠村よ。俺は大豪院「そいつの名前はポチでーす!!?」貴様中村あ!!? ……兎も角今後とも、俺たちとネギの指導員としてよろしく頼むぞ」

「いや待て、なんだお前らこの格闘漫画での強敵と書いて戦友と呼ぶみたいな流れは…? っていうか先生? 指導員? 何の話だ?」

言葉の途中で、辻達の言葉尻のなんとも嫌な響きの単語を認識し、恐る恐る聞き返す篠村。

「簡単な話だ。これから貴様は魔法関係の指導員として、俺達の修業に付き合ってもらおう」

「はあ!!?」

大豪院からの余りにも唐突すぎるその提案に、篠村は目を剥いて驚きを表す。

「なんだその超展開は!!?」

「いや元々手合わせして相応しい実力があるなら頼み込むつもりだったしな」

「聞いてないぞ!?!?」

「そりや言つて無いからな」

辻のあつけかんらんとした言葉に反論する篠村に、あつさりと豪徳寺が告げる。

「俺らも魔法使いとの戦闘経験はまだまだ足りねえからなあ。お前はまさにうってつけなんだわ、何より俺に勝っておきながら勝ち逃げは許さねえ!!?!?」

「そつちから仕掛けてきた癖になんて言い草だ!?!?勝手に決めるなよ!!?!?」

「僕らに謝罪する時にできる事は何でもするって言つたじゃない。それに今ネギ君に必要なのって、ドッカーンとした大技よりも、正にこういう小手先の技だと思うんだよね。そういう意味でも篠村はうってつけの教師なんだ」

「小手先で悪かったな小手先ばかり上手くて!!?!?確かに何でもするとは言つたが、俺に負担が大きすぎる!?!?この話断らせて…」

「お兄様、おめでとうございます!!?!?」

「愛衣!?!?」

拒否しようとした篠村に、愛衣が目を輝かせながら賛辞を送る。

「お兄様の頑張りが遂に認められたんですよ!!?!?魔法世界でも此方でも、周りの人は才能で劣るからといってお兄様の技術や戦法を馬鹿にする人が殆どでした!!?!?逆境にもめげずに淡々と積み上げて来たお兄様の努力が遂に実を結んだんです!!?!?是非ともこの話受けましょう!?!?ここからお兄様の力が世に広まっていくんです!!?!?」

「何トランス状態で夢見てんだ落ち着け愛衣!!?!?大体、自分で言うのもなんだかこんなせこい技術、あの英雄の息子たるネギ先生が習いたがる訳…」

「僕からも是非お願いします!!?!?」

「ブルートウス、お前もか!?!?」

目を輝かせたネギが愛衣の隣に並んで頭を下げ、篠村は絶叫す

る。

「僕、篠村さんの話を聞いて感動しました!!?生まれついでての不利な条件にもめげずに、自分に何ができるのかを一生懸命考えて、あんなに強い中村さんを倒せるような実力を身につける篠村さんは本当に凄いです!!?僕は、篠村さんよりも遥かに恵まれた条件にあつたのに、本当に漠然とした感覚でしか魔法を学んで来ませんでした:今の僕に足りないものの一つは、篠村さんの持つような気概なんだと思います!!?そんな篠村さんが磨き上げた技術、是非とも僕に習わせて下さい!!?」

「止めるーっ!!?俺に全身が痒くなる様な賞賛を送るのは!!?俺お前が思うような立派な動機で魔法を身に付けてなんていないからな!!?考え直せ頼むから!!?」

「何を言ってるんですかお兄様!!?正当な評価ですよ!!?」  
「お前ちよつと黙ってる愛衣!!?」

ギヤーギヤーと喚く篠村を中心に、騒ぎは加速する。

「しつかしこれだけの実力を持つてるお前を馬鹿にするとか、周りはよっぽど節穴ばっかだったんだな」

「そうです!お兄様は魔法サギタ マギカ マスターの射手の達人と二つ名を付けられる程の実力者なのに周りの人達は揃いも揃って……!!?」

「その通り名を俺に付けたのはまさしく俺をバカにしていた連中だよ!!?皮肉で言われてたんだその二つ名は!!?つうか格好悪いから言うなつて言っただろうがその呼び名はあ!!?」

「いいじやねえか格好いいぜ魔法サギタ マギカ マスターの射手の達人。よつし魔法サギタ マギカ マスターの射手の達人!!?早速俺と再戦じゃあ!今度こそは俺が勝つ!!?」

「連呼すんな殺すぞ変態野郎!!?誰がやるか今度こそ挽肉にされるわ俺が!!?」

「ああズルいよ中村!一回戦ったんだから次は僕だつて!!?」

「ああなら俺が先だ俺が!!?この俺の漠魂と弾幕勝負と行こうじゃねえか篠村あ!!?」

「引っ込んでいろ貴様ら。次に戦るのはこの俺だ」

「ああズルいアルポチ!!? 私魔法使いと闘たことないアルから私が最初アル!!?」

「およ? その論法なら拙者にも最初に闘える資格があるのでござるな」

「黙りやがれ戦闘バトルジャンキー狂共俺は誰とも闘わねえよ!!? 辻、辻さん助けてくれこの中で唯一と言つてもいい常識人!!?」

「いやあ俺は常識人振ってるだけの実は真面じゃ無い奴らしいからちよつと無理かなあ」

「畜生意外に根に持ってやがるこいつ!!?」

「…ま、なんにせよ良かったわねネギ」

「せやなくなんや優しそうな人やし、ええ師匠見つけたなあネギ君」

「はい!!? これ以上ないほど今の僕に相応しい師匠が見つけれました!!?」

「勝手に決めるな俺はまだ承諾してないぞ!!?」

「篠村先輩。この人たちは一度決めたらテコでも動かないので諦めた方ががいいと思います」

「往生際が悪いぜえ、篠村の旦那?」

「いやあいい話だったねえ宮崎。記事にできないのが残念だよほんとに」

「は、はい、凄いなと思います、篠村先輩…」

「……私も立場上賛成ですので、申し訳ありませんがよろしくお願ひします、篠村先輩……」

「てめえらあゝゝゝ!!?!!?!!?!!?!!?」

篠村の絶叫は夜空に虚しく消えていった。

## 8話 気になる彼女の恋愛模様

蒼く、冷たく澄んだ真円の月が仄かな光を闇に包まれた広場を浮かび上がらせている。

間も無く日が変わろうかという真夜中にも関わらず、その場には多種多様な人間の姿があった。老若男女の端から見れば何の統一性も無い様に見えるその集団は、一目でそれと解る程に緊迫した空気に満ちていた。

「…やっぱり皆ピリピリしてますねえ、杜崎先生」

そんな張り詰めた雰囲気には耐えられなくなつてか、顔立ちの整った若い男性――麻帆良中等部の教師、瀬流彦が傍らの厳つい男性教師、杜崎に小声で話しかける。

「当然だ」

杜崎は短く答え、集団――魔法教師と生徒が円状に取り囲んでいる中心を見やる。

其処には幾重にも連なり、繋がり、重なって描かれた複雑にして緻密な魔法陣が鎮座し、その手前で儀式を行うのはこの麻帆良学園最高の実力者、近衛 近右衛門。傍らに黙して控えるは緑髪を僅かな夜風に流す、侍女服メイドに身を包んだ絡繰 茶々丸。

そして、魔法陣の中央で静かに目を閉じ、正に解呪の儀を受けている金髪碧眼の最高級のビスクドールの如き見目麗しい少女――エヴァンジェリン・A・Kマクダウエルが居た。

「幾ら不戦協定を誓約ギアスペーパーで結んでいようが相手は元六百万\$の特A級賞金首にして間違い無く世界有数の魔法使いだ。そんな存在がこれから全盛期の力を取り戻すのだから、差し詰め餌を絶つて5日目の飛竜種を裸で前にする気分だろうよ」

「死ぬって事じゃないですか……まあ誓約ギアスにしても絶対的にあらゆる場合において完全非暴力を課すような一方的な内容じゃありませんでしたからねえ。…というか、そう仰る杜崎先生は余り緊張してないみたいですけど……」

不思議そうに尋ねる瀬流彦の言葉に杜崎は鼻を鳴らす。



「仮に全面戦争になったとしても高畑先生と学園長が居るのだから何とかなるだろう。二、三人死人は出るかもしれんがな」

「全然良くないですって…僕こんな若い身空で死にたくありませんよ……」

情けない声で告げてくる瀬流彦に杜崎は溜息を吐く。

「もう少し貴様はしゃっきりとしろしゃっきりと。それでも同世代で結界や防護術式では右に出る者無しと謳われて揚々と赴任して来た秀才か？」

「魔法の射手はおろか中級魔法が直撃してもピンピンしながら反撃をぶち込める何処かの鉄人先生とは負傷に対する意識が違うんですよ痛いっ!?前触れも無しに殴らないで下さいよ!?」

「お前は何時も一言余計だな。山下が残念イケメンなら貴様はうっかりイケメンだ空気の読めん輩め」

拳骨を落とされた頭を押さえて抗議する瀬流彦に、杜崎は呆れた様に言い放つ。

「ちよつ、イケメン呼ばわりは嬉しいですけど誰がKYですか失礼な！」

「自覚が無いのがまた救えんな。周りを見てみる周りを」

杜崎の言葉に瀬流彦が周囲を見回すと、近辺の魔法教師達が警戒態勢の中大声を上げている瀬流彦を睨み付けていた。

「…うわ………」

周囲にペコペコと頭を下げる瀬流彦の傍らに立つ杜崎は、自分の後輩の頼りなさに、もう一度深い溜息を吐いた。

「……どうじゃ、エヴァンジェリン？」

長い儀式を終え、額に滲んだ汗を拭いながら近右衛門が問い掛ける。

「……ふ」

己が両手を確認する様に握り開きを繰り返していたエヴァンジェリンが吐息の様な笑顔を洩らす。

「ふはははははははははは!!?!!? 実に清々しい気分だよジジイ!!? 何者にも縛られぬ自由な体がここまで心良いものだとは久しく忘れ

ていた！今回ばかりは素直に礼を言っておくとしようか、古狸!!？」  
「それが他人に礼を言う態度かい」

あくまで尊大なエヴァンジェリンに近右衛門は溜息を吐く。あくまで普段通りの態度を変えない近右衛門と違い、周りの魔法関係者は気圧された様に及び腰になっていた。

それも無理は無い話で、登校地獄と学園都市結界の封印の両方が解き放たれたエヴァンジェリンは、周囲に溢れ出る魔力の余波だけで空間を震わせる程の圧力を形成していた。敵意に近い視線をエヴァンジェリンに向けていた魔法関係者の一部も動揺して視線が彷徨っていた。

「エヴァ、十五年振りの自由にテンションが上がるのは解るんだけど、もう少し魔力を抑えてくれないかい？他の皆の負担になっているみたいだからね」

周囲の様子を見かねてか、高畑がエヴァンジェリンに声を掛ける。  
「ふん、知ったことか。頼んでもおらんのに人様の大事な転機の場合感じの悪い視線で睨み付けながら何をする訳でもなく突っ立っているだけの連中など、こちらが気を遣ってやる義理は無い」

エヴァンジェリンは高畑の頼みをすげ無く突っぱねる。

「き、貴様が力を取り戻し、よもや反逆を企てはせんかと監視していたのだ!!？」

エヴァンジェリンの皮肉な言葉に、包囲していた一人の中年の魔法使いが顔を真っ赤にして反論する。うわあ勇氣あるなああの人：とわり合い近くにいた瀬流彦が呟き、蛮勇と言うのだ、あれは、と呆れた様に杜崎が返す。

「はっ、誓約ギアスペーパーでわざわざ在籍期間内はみだりに人を害せん様にしてやったというのに要らん苦勞をご苦勞なことだ。貴様らの勤勉ぶりには頭が下がるよ、本当になあ？」

「っ!!??…私を侮辱するか!!??」  
「侮辱?…おいおい勘違いするなよ小僧」

私は今気分がいいんだ、だからこそ相手をしてやっている、とエヴァンジェリンは返しながら右の掌で顔を覆い拭う様に上から下へ

一撫でする。

「…なんで私がお前程度をわざわざ評価して馬鹿にしてやらねばいかんのだ？」

「っ!?…う、ああ……………!?」

強膜と前眼房奥の水晶体の色彩が逆転した、600年を生きた真祖の吸血鬼、闇の福音ダーク エヴァンジェルとしての眼が魔法使いを捉え、殺気とも怒気とも敵意とも、どれとも違う排除する意思そのもののような濃厚な何かを彼を萎縮させ、一瞬で飲み込む。

「…こちら側の無礼は謝るわい。それぐらいにしておいてやってくれんかのう、エヴァンジェリン？」

「…ふん」

近右衛門の言葉に従ったと言うよりは、その言葉により興が削がれた、と言う感じで詰まらなそうにエヴァンジェリンが纏う空気と眼光を元に戻し、魔法使いから視線を外す。圧力から逃れて荒い息を吐く男を最早一顧だにせず、帰るぞ茶々丸、と従者に声を掛け、踵を返す。

「…エヴァンジェリンよ……」

「なんだ、ジジイ？」

「…お主、これからどうするつもりじゃ？」

近右衛門の言葉にエヴァンジェリンは一瞬動きを止め、

「……さあな……」

短く言い捨て歩みを再開した。

「…解散ということの様だな……」

去って行くエヴァンジェリンの背を睨み付けていた杜崎だが、学園長の解散の旨を伝える言葉にふっと身体から力を抜き、呟く。

「……杜崎先生……………」

瀬流彦が色の無い声で杜崎に呼び掛ける。

「なんだ？真逆漏らしていないだろうな」

「なんて事言うんですか？なりませんよ!!?…まあ実際チビリそんな迫力でしたけど」

瀬流彦はうそ寒気に首を竦める。

「いや、なんて言うんですか？今のエヴァンジェリン・A・K・マクダ

ウエルよりはマシな状態だったんでしようけど……辻君達よくあんなのに挑めましたね幾ら五対一とはいえ。流石は杜崎先生の教え子って事ですかね……」

怖い物知らずというか、クソ度胸が本当にそっくりですよ。と瀬流彦が感心した様に言う。

「…俺は奴等と始めて衝突した赴任当時から現在に至るまで、何かを教えられた自信が全く有りはしないがな」

対する杜崎は忌々し気な顔で返事をする。

「は……う？」

「俺達も帰るぞ。もう日が変わっている」

困惑する瀬流彦に構わず杜崎は足早に広場を後にした。

「……私らしくも無いな……」

「マスター？」

「何でもない、茶々丸」

……今暫く学園に留まるとはいえ、私のやる事など決まっているというのにな……

「エヴァさん、晴れて自由の身の奪還、本当におめでとーう!!?」

パン！パパン!!?

満面の笑みの山下と奇妙に歪んだ辻達の引いたクラッカーが鳴り響き、

「いえあああああああああつ!!?!!?」

ダララララララララララ!!?!!?ジャジャーン!!?!!?とパンクなファツションに身を包み、顔にデー○ン閣下の様なメイクを施した中村が身体全体を振りたくりながら鳴らすドラムセットが響き渡る。唯只管にやかましい。

「……………」

自分<sup>自</sup>の家<sup>分</sup>の家にログハウスに入った瞬間にその様な歓待?を受けたエヴァンジェリンは苦虫を噛み潰したと同時に糞でも踏んずけた様な顔で沈黙する。

「ケケケケケケケケケケ」

エヴァンジェリン  
自らの主人のそんな表情を見て愉快気に小さな木製の人形ーチャ

チャゼロは笑声を響かせた。

「…まず初めに聞いておこう。…どういふつもりだこの茶番は？」  
テーブルの上に所狭しと並べられた料理や飾り立てられた室内。  
どう見てもこれからパーティーでも開こうとしている様にしか見え  
ない状況の我が家の様子の一席に腰掛けながらエヴァンジェリンは  
無表情で尋ねる。

「え？…どういふつもりって見たまんまだよ。エヴァさんの快気祝い」  
山下は笑って返す。

「まあ言いたいことは解る。俺も正直この場に居るのに違和感しか感  
じん」

大豪院が渋い表情で言う。

「まああんたの解放に関しちや俺らは一枚噛んでるからよ。様子を見  
に来たってのを兼ねて、な」

豪徳寺が苦笑しながら返す。

「…山ちゃん一人じゃ心配だったもんで」

居心地悪そうに端にちよこんと座り、微妙に萎縮しながら辻。

「あああんたの俺らを見た時の顔がすげー面白そうだと思つたからだ  
よゲバハハハハハハハハバア<sup>ワ</sup>？」

ドラムスティックを頭上で交差させながらおかしな高笑いを上げ  
る中村の顔面に小規模の氷<sup>ニウイス カース</sup> 瀑が炸裂し、後方へ倒れる中村。

「…そうか死にたい様な貴様ら…!!？」

鳴動と共に身体から膨大な魔力を立ち上がらせつつエヴァンジェ  
リンが魔物の笑みで言い放つ。

「人が祝ってやろうつてのに物騒だなオイ」

「誰も頼んでおらんわ。大体誰が立ち入りを許可した不法侵入者共  
が」

呆れた様に呟く豪徳寺に嗤い顔を見せながらエヴァンジェリンが  
凄む。

「そいつだ」

「ケケケゴ主人感謝シナ。ボッチノゴ主人ヲ盛大ニ祝ツテヤル為ニソ  
コノ優男ノ立チ入りヲ許可シトイテヤツタゼ」

「貴様チャチャゼロオオオオ!!?」

大豪院に親指で指差されケタケタと笑う殺人人形キリングドールの真逆の裏切り  
にエヴァンジェリンは激昂する。

「と、いう訳でお家の人にきちんと許可を取って用意しているよエ  
ヴアさん。これなら問題無いよね?」

「大有りだこの優男!!? 肝心な私の許可を取っておらんだろうが!!  
?」

「え、何言ってるのエヴァさん。こういう行為は祝われる本人に秘密  
裏で用意して直前に伝えて喜ばせるものでしょ? エヴァさんに事前  
に言う訳無いじゃない?」

「そつとしいてやれ山ちゃん。ボツチだからこのロリババアにはそ  
ういうお約束が解らねえんだよ」

むつくりと中村が起き上がって顔にへばり付いた氷を剥がしながら  
（何故かメイクは落ちない）哀れむ様に告げる。

「.....よし貴様ら其処の庭先に並べ。貴様らに瓜二つの氷の彫像を  
作ってやろう」

最早溢れる殺意を隠そうともせずエヴァンジェリンが凶相で微  
笑む。

「:そうカツカするなよマクダウエル女史。俺達は兎も角山ちゃんは  
純粹にあんたの快気祝いをしたくてこの場を作ったんだ。気に入ら  
ないなら俺達は出て行くから山ちゃんは残してやってくれ、これにか  
かった費用の大半山ちゃんの懐から出てるんだから」

辻が前回の死闘と比べて少なく共一段階は増している圧力に青褪  
めながらも言い募る。

「「.....」」

凶眼で一同を睨みやるエヴァンジェリンとふにやりと笑み崩れて  
いる山下を除いて大小緊張しているものの逃げ腰にはならずエヴァ  
ンジェリンを見返しているバカレンジャー。

「.....好きにしろ、馬鹿共が.....」

一分近い沈黙の後エヴァンジェリンが脱力し、盛大な溜息と共に呟  
く。

「はいエヴァさん。じゃあ乾杯の用意をしよう。あ、茶々ちゃん、こちらの食器で何か使っちゃいけないものとかある?」

「特にその様な制限は設けてありません。ですが、祝いの席ではこちらのグラスを…」

「おお成る程、ありがとう茶々ちゃん」

「…やっぱ帰った方が良くないか?」

「まあ確かに馴染んでいるあいつが異端な訳だが…出席を許可されてから帰ると言うのもそれはそれで気まずいぞ」

「仲良くない奴帰らせてから仲良い奴だけでパーティーってなんかあれだしなあ」

「いいじゃねえか今から帰っても門限ぶち切ってる事に変わりは無えし。朝まで騒いでから登校しようぜ?」

バカレンジャー達は是の返答を聞いて一齐に動き出し、何故か茶々丸までが若干嬉しそうに山下と最終準備を進めていく。

……私に味方はいないのか………

「オイオイゴ主人、俺ガ居ルジヤネエカ…水臭イゼ?」

「貴様が一番の裏切り者だボケ人形!!?」

エヴァンジェリンの腰をポンと叩いて声を掛けるチャチャゼロにエヴァンジェリンは堪らず怒鳴り返す。

「大体どういうつもりだ貴様は……」

「ア?ダカラ言ッテンジヤネエカ。友達ガイナクテココ最近デ一等目出度イ日ダツテノニ、セイゼイ無口ナ妹トヒツソリワインボトルデモ開ケテ寂シク乾杯スルノガ関ノ山ノ可哀想ナゴ主人ノ為ニ、俺ガ気ヲ効カセテヤツタンダヨ」

「粉々にしてやろうか貴様…!!?そんなもの貴様の柄ではあるまい、裏の目論見は何だと聞いている!!?」

とても主人に対しての言葉とは思えない無礼千番なチャチャゼロの物言いに、額に青筋を浮かべながらもエヴァンジェリンはチャチャゼロの真意を問い質す。

「ソー本気デ大シタ理由ハ無イゼ?俺モコノ馬鹿共ニ興味ガアルツテダケノ話ダヨ。前ハゴ主人ガ全部殺ツチマツテ俺ハ全然楽シメ無

カッタジャネエカ。殺サレカケテモ戦意ハ失ナワズ、落着シタ後モ  
コツチニ媚ビズ、ソレデイテフツーニコツチニ接ツシテクル奴ラナン  
ザ滅多ニイヤシ無エゼ？」

「……………」

チャチャゼロの言葉に、エヴァンジェリンは続く言葉を飲み込む。

「マア馴レ合ウツモリハゴ主人ニハ無エカモシレネエケドヨ。俺ハ俺  
ナリニコノ馬鹿共ト接シテミテーンダヨ。何ト無クアノ馬鹿ヲ思イ  
出スノリダシヨ、コイツラ」

「…似ても似つかんと言つとろうが」

エヴァンジェリンは不機嫌そうに言い捨て、しかしそれ以上の抗弁  
はせずに茶々丸からワイングラスを受け取った。

「はいエヴァさんこれお祝いの品」

「あん？私は安い酒なぞ…つておい。コルトン・シャルルマーニュつ  
て学生が贈れるレベルの酒では無いぞ」

「いやどうせ泡銭だしね。なんかエヴァさんグルメっぽいイメージ  
あつたから半端な物は贈れないかなあ…つて。あ、丁度飲み頃らしい  
からこの場で飲んじやおうよ」

「……………ふん」

「…デレてんじやね、あれデレてんじやね？」

「無いだろ。そもそも山下はンな意図であのババアと接してんじや無  
えんじやねえか？」

「いや解らんが…仮にそうだとしてあの女ネギ君のお父さんに惚れて  
るんだろ？望み無いぞ、最初から」

「下衆な勘繰りは止めておけ。この場は諸々因縁のある相手とはい  
え、祝いの席だぞ貴様ら」

「ほいよロリババア。取り分けてやったぜ受けとんな」

「殺すぞ化石化した番カラが…おいこれは何処の店のだ？」

「さっちゃんに頼み込んで作って貰ったんだ。いやあの子中華料理だ  
けじゃなくて色々作れるんだねえ」

「ふん、当然だ。五月はガキしかいないあのクラスで唯一私が認めて  
いる存在だからな」



「へえーエヴァさんがそんな高評価珍しいねえ…」

「…なんであいつはあそこまで馴染んでいる？」

「時々というか割とこまめに顔出してたらしいぜ。主に京都から帰った位から」

「俺からすりやとても信じらんねえけどな…よく仲良くしようと思うぜあんな取っ付き難そうな無愛想ババア」

「どうでも良くね？山ちゃんの自由だぜロリに走ろうが年増に走ろうが。やっぱさっちゃん飯は美味えなあー嫁に欲しいぜマジで。きやわいいしよおーあの娘」

「ケケケオ前ミテエナ根無シ草ニヤ無理ナ話ダゼ」

「んだとこのチビ人形あ!!？」

「茶々丸!!？次だ、次の酒を持ってこい!!？シャトー・ラシット・ロートシルト辺りの飲み頃だ!!？」

「マスター…余り飲み過ぎますと翌日の登校に差し障りが…」

「構わん、忌々しい呪いももう無いのだ！一日や二日サボった所で今更卒業に差し障りは無い、今まで皆勤だったのだからなあ!!？」

「ははは悪だねえエヴァさん。さあさあグラスが空だよどうぞどうぞ…」

「フフハハ当然だ、私は悪の魔法使いだからなあ!!？」

「…吸血鬼つて酒で酔う訳？」

「酔ってんだから酔うんだろ。まあお前もいつとけ辻。あそこら辺の高い酒なんざどうせ味分からねえから買って来た地ビールでもよ…」

「…貴様ら堂々と飲むな、未成年だぞ」

「固てえ事言うなやポチ目出度い席だぜえ？老酒も買って来たからてめえもグイツと行けオラア!!？」

「ガボツ!?!? 貴様あ!!？」

「オーイイネ、偶ニヤアコウイウチープナ酒モイイモンダ。オラソツチノ生ハム取りヤガレヘタレ剣士」

「…人形にまで馬鹿にされる俺って一体……」

「マスターもうこれ位に…」

「ワハハハハなんだその柔軟性は!?!? 気持ち悪いぞ山下あ!!？」

「ははは見たかいエヴァさん僕の関節駆動域を活かした一発芸、百舌の早贄!!?」

「ドツチカツツト串刺シ公ノ処刑ダゼケケケケケケ!!?」

「:あつちはもう駄目だ、関わらない様にヒック!!?:ああ?大丈夫大丈夫、酔ってないよフツ」

「お前も駄目だよ充分に。刀に心配されてどうすんだオイ」

「他人の事は、言えん状態グフツ:!!?」

「ヨイヨイ吐くなよポツチイーん、情けねえぞ老酒一気飲み位でえーん?」

「人によつては死ぬだろが阿呆。:駄目だ聞いてねえ、普段からウザいのに酔うと十倍はウザいなこの馬鹿:」

「ヒヨオオオオオオオオオオウ!!?!!?」

「ワハハハ馬鹿が来たぞ馬鹿が!!?」

「ははは中村いらっしやーい!!?」

「マスター:ああ、どうすれば:」

「諦メテ現状ヲ記録デモシトケヤ妹。ケケケ見口鯨銚立チデ組ミ体操始メテゴ主人ガ上デ仁王立チシテンゾケケケケケケケケケケケケ!!?」

「ぐおお:頭が痛い、どれだけ飲んだんだ私は:」

「タベハオ楽シミダツタナゴ主人ケケケケケケ」

「紛らわしい言い方をするなアホ人形!!?:ぐうう:!!」

「二日酔いで叫ぶからだよエヴァさん、はいお水」

嵐の過ぎ去った後の様な室内の中央で頭を押さえて呻くエヴァンジェリンに山下がコップに入った水を差し出す。

「山下様は他の皆様と違いお元気ですね」

「ははは酒の強さでいったら僕は五人の中でダントツだからねえ。小さい頃から爺ちゃんに付き合わされてたお陰だよ」

茶々丸の言葉に酔い潰れて爆睡している辻達を見ながらカラカラと笑う山下。

:明らかにもう朝っぱいけど今日はサボりかなー皆で。

後でモツさんに殺されなきゃいいけど、と思案する山下にエヴァンジェリンが不機嫌そうに水を煽りながら尋ねる。

「…それで？ 貴様結局何が目的でこの場を設けた？」

「エヴァさんしつこいなあ、純粹に祝う為だつて本当に」

「貴様らが私にそこまでする理由が無かろうが。私はまだるっこしいのは嫌いなんだよキリキリ吐け優男」

ギロリと睨み付けられ山下は苦笑する。

…他人の好意っていうものが自分に向けられるとは欠片も思っていない人の言葉だよねえ、これつて。

そういう人生を歩んで来たのだろうし、無理もないといえれば無いのだろう、が。

…貴女が今ここにこうして居るのは他人の好意を信じた結果じゃ無いのかなあ、エヴァさん……

まあその好意は、理由は解らないが無にされた為にエヴァンジェリンは自力でこの場を抜け出そうとしてそれを成し遂げたのだが。

…だからかなあ……

エヴァンジェリンは他人の好意を受け取りたく無いのだろう。また裏切られるのが怖いからか、それとも想い人以外の好意など欲しくは無いからか、そこまでは山下には解らない。しかし。

…どつちにしろネギ君のお父さんが原因で意固地になっている、と。…それで僕が拒否されるのはなんだか癪だよねえ……

山下はこの妙な所で人臭い一途な吸血鬼が気に入って顔を合わせに来ている、ただそれだけなのだ。ただそれを正直に告げてもエヴァンジェリンは納得しないだろう。

しかし適当な誤魔化しも思いつかないので山下は正直に伝えることにした。

「うん、まあ一言で言うなら僕がエヴァさんを好きだからだねえ」  
「……………あ……………」

…普段纏め役に回る事が多いので忘れがちだが、山下は天然であった。

想定外の斜め上遙か上空の返答に硬直するエヴァンジェリン。両脇

では二人の従者がまあ、と口に両手を当てたり、オホ♡と目を輝かせたりしている。

「ねえエヴァアさん、エヴァアさんはこれから何するの？やっぱりネギ君のお父さんを探しに行くの？」

「が、ぐ、いや待て貴様、さっきのはどういう…」

モロに動揺しつつエヴァンジェリンは山下を問い質す。

「？、さっきって？」

「き、貴様言うだけ言っておいて誤魔化すつもりか！？」

「ケケケゴ主人モテテンナ。子持チノ薄情者ジャ無クテ若イコツチニ乗り換エタラドウヨ？」

「貴様は黙つとれ！！？」

「マスター、お水が零れています」

山下は目の前の騒ぎに首を傾げる。

…何騒いでんだろ、エヴァアさんは……………？

「まあなんだかわからないけどエヴァアさん落ち着きなよ、茶々ちゃん困ってるよ？」

「貴様の所為だろうが優男！！？…ええいもういいわ！！？貴様がどんな腹積もりで先の言葉を吐いたか知らんが、私はナギを好いている！それだけだ！！？」

「ああ、うん。まあそれはネギ君から聞いてるけど……………」

「なっ……………！！？」

それを理解した上での宣言か！！？とエヴァンジェリンが戦慄する。

「ホーヤルジャネエカ。見直シタゼ顔ダケジャ無エナ色男」

「…？まあなんだか解らないけどお褒めの言葉どうもゼロさん」

首を傾げながらも山下は礼を言う。

「エヴァアさん。さっきの宣言からしてもやっぱりエヴァアさんはナギさんを追うつもりなんだよね？」

「なんなんだ貴様は…………ああそうだよ、奴が生きているかもしれない以上私は奴を諦めるつもりは無い。何処まで本気か知らんが残念だったな優男」

残念って何？と山下はエヴァンジェリンの言葉に首を傾げるが、と

もあれエヴァンジェリンの言葉を聞いて一つ頷き、

「でもエヴァアさん、ぶつちやけ今そこまでナギさんに執心して無いよね?」

と言い放った。

「……どういう意味だ?」

痴態を収め、目を細めて問い返すエヴァンジェリン。

「ああ、昨夜大分出上がり始めた頃だったかな?言っただじやない、卒業するのに一日や二日サボろうとも問題無いみたいな事。あれって要するに少なく共中学を卒業するまでは麻帆良に居るって事でしょ?ナギさんに執心なら一刻も早く飛び出そうと逸るものなんじゃ無いかと思っただけ。それともそこら辺の感覚は長く生きてると違うものなのかい?」

「…馬鹿馬鹿しい」

エヴァンジェリンは山下の疑問を鼻で笑う。

「それは単に私がジジイとそういう契約を交わしているだけの話だ。私は奴ら正義の魔法使いから睨まれる様な事を腐る程やらかしているからな。解放されます、はいそうですか、とはいかんのだ。ジジイはナギとの約定を知っているから私が自由になることに文句は無いが、それでは下が納得せんからな。ほとぼりが冷めるまでは私は今暫く麻帆良で警備員をしながら学校通いだ。…十五年通ってにおいて中退では腹も立つからな」

「ああーそういうことか。ゴメンね勘違いしてたよ」

苦笑してエヴァンジェリンに片手を上げて謝る山下。しかしエヴァンジェリンはそんな山下を見て更に言葉を紡いだ。

「…貴様まだ何か言いたそうだな?顔を見れば解るぞ、吐け」

…わあ鋭い……………!

山下は少し意外に思う。こちらの事をてつきりエヴァンジェリンはどうでもいい存在と思っただけか、少しは関心を持っているにしても個人個人の細かい機微まで把握しているとは思ってはいなかったからだ。

「…ん、これ言ったらエヴァアさんは怒るかもよ?」

「内容が私にとって不当な侮辱なれば貴様の身体に代償を刻み付けてやるよ。だがそれが正しい指摘なら私は私なりにそれを噛み砕いて受け入れよう。私は悪だが、誇りある悪の魔法使いだ。筋も通さずに自分の要求だけ通そうとする三流のチンピラとは違うんだよ」

「立派だねえ」

エヴァンジェリンの言葉に山下は感心し、じゃあ言うよ、と前置きして語り出す。

「エヴァさんは事情があつて出られないことを踏まえてもやっぱりナギさんを探すのを何処か本気で無いんだと思うな」

「…続ける」

エヴァンジェリンはピクリと眉を上げるが、山下を促した。

「僕がそう思ったのはやっぱり昨夜の言動を踏まえてだね。エヴァさんはストレス溜まっていたのか相当はっちゃけていたけど「それは忘れる」…ははは。まあ兎も角やつと解放されたー的な喜びをエヴァさんは現してただけだよ」

山下は一旦言葉を切つてエヴァンジェリンの顔を見つめる。

「またこれからも学園で缶詰だ、やつてられない、とか早くナギさんを追いかけてい、とか。…そういう不満を一回も口にしなかつたんだよね」

「……………!」

エヴァンジェリンは表情こそ崩さなかったが、体が僅かに揺れ動いた。

「個人差はあるけど、基本的に酒に酔つた時は本音が出るもんだよ。ましてや僕らに嘘を吐く理由は無いんだからエヴァさんは、自分で気づいてないかもしれないけれど、麻帆良で缶詰になっている現状がそんなに不満じゃないんだ。さっきも中学をちゃんと卒業したいって最後に言つてたでしょ?…ナギさんを本気で探したいんなら、正直言つてエヴァさんはそこら辺どうでもいいと思うんだ。エヴァさんはナギさんを見つけれたいと思つてるけど、少なく共今はいまいちそれに乗り気じゃ無い。そう思つたんだ、僕は」

「…………飛躍しているな」

エヴァンジェリンは静かに反論する。

「私が仮に此処を出るのを何かの理由で疎んでいるとしよう。それで？何故私がナギを探すことを嫌がっていることになる？それに関する理由が何一つ無いぞ、貴様の推論はな」

「僕もそこまで言つて無いんだけどなあ……」

静かだが、確かに拒絶の意思を伝えてくるエヴァンジェリンに山下は苦笑する。

「エヴァさんがナギさんを探す……ん〜回りくどいからナギさんに対する好意がかつてに比べて薄れてる、と僕が考えてる理由が解らない。そう言いたいんだよね、エヴァさん？」

「そうだ」

短く肯定するエヴァンジェリン。

「いや、それは現場を思えば、当然そう考えるところうんだけどなあ……わからない？エヴァさん」

「…何がだ？」

「いや要するにね」

眉根を寄せるエヴァンジェリンに、あっさりとして山下は告げる。

「迎えにくるって言っておきながら十五年もほったらかしにされているんだから、少し位愛想尽かして当然だと思ふよ僕は」

エヴァンジェリンは山下の言葉に、何故か息が詰まる様な感覚を覚えていた。

「連絡一つ寄越さないで挙句の果てに好意を寄せていた女性に対して何の連絡も無く他の女と子どもまで作ってるしねえ、腹が立って当然だし、まあ恨んで当たり前だよ」

「…止めろ」

「まあエヴァさんとしては、何も告げられずにフられて挙句放つたらかしだから自由になってしまった現状、以前のように純粋に好意を向けていいものかどうか迷ってるんだと僕は……」

「黙れ!!?!!?」

エヴァンジェリンの叫びが室内に木霊し、山下は言葉を飲み込む。

「ふお!?？」

「…なんだ今の音量?」

「…ぐう、気分が悪い……」

「…うああ、頭が……」

なんだかんだで武道家だからか、エヴァンジェリンの叫びで覚醒したバカレンジャー達が起き上がってくる。

「…うん、わかった。ゴメンねエヴァさん。急に色々言い過ぎて混乱させちゃって。話はここまでにしようか」

山下は頭を下げて謝罪し、立ち上がって辻達の介抱に向かう。

エヴァンジェリンは僅かに荒い息を吐きながら、黙ってその背を睨み付けていた。

「ぐおお二日酔いだけ、俺様としたことが……」

「酒の席の片付かってあんなにだるいもんだと思わなかったぜ……」

「…馬鹿村、全快したらとりあえず貴様殺してやる……!!?」

「……あゝ、ネギ君の朝練すっぱかして無いか、ヤバイな……」

「はいはい皆とりあえず帰ろうね。後辻、僕が篠村に連絡していたから、とりあえず今朝は魔法の修練をやってたろうから大丈夫だよ、ネギ君は」

バカレンジャーは荷物を抱え、エヴァンジェリンの家を後にしようとしていた。時刻を見るととつくに学校は始まっていたので、とりあえず全員酒が抜けるまでは学校をサボるつもりである。

…うーんモツさんの襲撃に警戒しないとなあ……

山下は学校の教師に対する対応とは思えないことを考えつつ、口グハウスの玄関の階段を降りていく。

「……待て」

バン!!?という扉を乱暴に開ける音と共に、エヴァンジェリンの声が響き、山下は足を止めて振り返る。

エヴァンジェリンは不機嫌そうな顔で山下の顔を睨み、僅かに躊躇った後、言葉を投げ掛ける。

「…貴様は、ナギが思うに値しない男だから、追うのを止めろと、自分



に乗り換えろと。…そう言いたいのか？」

「……………」

なんで僕がが口説いてるみたいに変換されてるんだろう、と山下は怪訝に思いつつも、笑って首を振り、返事をする。

「そんなつもりは全くないよ、少なくとも今は。六百年生きて来て初めて好きになった人なんでしょう？会ったこともない僕が分からないような魅力が一杯あるんだろうし、何よりもエヴァさんの気持ちを決められるのはエヴァさんだけだよ。エヴァさんがそう決めたなら僕はそれに無理に干渉するつもりも権利もない」

「…ならば」

「ただ、さ…」

何事かを言いかけたエヴァンジェリンを遮り、山下は続ける。

「今のエヴァさんはナギさんを好きだ、つてかつての気持ちも大事にし過ぎて、思い出からナギさんを美化しすぎていて、今の自分の気持ちを封じ込めてる様に、考えないようにしていると思ったからさ。…好きなら好きでいいんだよ。でもそこら辺の想いにもし迷いが出来てるんだったら、はつきりさせないままに惰性で追い続けたら…後悔することになると思ったんだ」

「っ!!?……………」

エヴァンジェリンは反射的に何かを叫び掛けて、しかし噛み締める様に言葉を飲み込む。

山下は苦笑して、ゴメンね、と告げて、歩き出す。

「…………山ちゃん、なんかあった？」

「後で説明するよ、皆にもね」

酒が残っている所為か、シリアスな空気の所為か。珍しく低いテンションで尋ねてくる中村に山下は今直ぐの説明を拒み、全員を促して歩み去る。

「…また来るよ、エヴァさん」

「…二度と来るな」

## 9話 それぞれの在り方

「魔法の射手 連弾 光の17矢!!?」

ネギの打ち出した光の弾幕が宙を斬り裂き、悠然と杖を構える篠村に突き進む。

「魔法あの射手 連弾 光の7矢」

対する篠村はネギの放った弾幕の半数以下の光球を生みだし、ネギの放った弾幕目掛け射出する。通常ならば数の差で篠村の弾幕を振り伏せ、篠村を攻撃出来る筈のネギの弾幕は、縦横無尽にあらゆる方向から襲い掛かった光球がまず外側にぶつかり内側へとその衝撃を弾けさせる。その衝撃が内側のネギの光球にぶつかり合って誘爆し、更に弾けた光球の衝撃が内側の光球を撃墜する。

結果、ネギの弾幕は全てが撃墜、又は誘爆して篠村に届くこと無く弾けて散った。

「ええっ!?」

あつさりと無力化された己の攻撃に狼狽の声を上げるネギ。そんな隙を当然篠村は見逃さず、反撃の一手をネギに向け放った。

「魔法の射手 戒めの風矢」

新たな光球の弾幕がネギに襲い掛かる。

「くっ!」

ネギは咄嗟に杖に跨り、高速で上空に飛翔。まるで光弾一つ一つに意志が有るかの様に正確にネギを追尾してくる弾幕を曲芸の様な飛行で何とか躲しつつ、詠唱を始める。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル!!? 光の精霊47柱 集い来りて我が敵を討て!!? 魔法の射手 連弾 光の47矢!!?」

ネギの放った光の弾幕がネギを追尾していた篠村の弾幕を打ち壊し、その後大回りしながらも軌道を変えた残りの弾幕が篠村目掛けて殺到する。

「風花 風障壁」

が、篠村の張った大気の壁が光弾を阻み、ネギの攻撃は無効化される。

「……！」

しかし、今度のネギは動じた様子は無く、寧ろ勢い込んで新たに詠唱を始めつつ、上空から急降下を始める。

対する篠村は接近してくるネギを見上げ、一つ苦笑する。

「良くなつたがまだまだ甘いな」

篠村が上空のネギに告げると同時に、ネギの身体に流動する風で出来た帯が纏わり付き、動きを阻害する。

「うわあっ!?？」

ネギがバランスを崩し、杖から落下する。空中でもがき、何とか拘束を外そうとするが、

「魔法の射手 戒めの風矢」  
サギタ マギカ アエール カプトウーラエ

更に追加で篠村から撃ち放たれた風の束縛がネギの身体を雁字搦めにして抵抗を封殺する。

「わあああああっ!?？」

頭から地面に真つ逆さまに落下するネギ。

「風よ」  
ウエンテ

激突寸前で強風がネギの身体を持ち上げ、落下速度が鈍った所で篠村がネギの体をキャッチし、反転させて地面に降ろす。

「…勝負ありだな、ネギ先生」

「あうう……」

「そう落ち込むなよネギ先生。先生は凄い速度で上達してるんだから」

「はい……」

模擬戦が終わって辻達の待つ広場の中央に戻つての反省会で篠村はネギを慰めていた。

「そーだそーだ。始めの方に比べりゃ格段に戦闘が長引いてんじやねえか」

「実際致命的なミスは先の戦闘でも無かった。後は場数と技術の練度の問題だ」

手合わせをしていなかった中村と大豪院もフォローに回る。実際ネギは自分なりに考えての立ち回りを行える様になってきているし、

魔法や体術の上達速度も申し分無い。端から見ても順調に強くなっているのだから指導している側からすれば気を落とす要素など何も無いのだ。

しかしネギにとっては現状の自分は不満でしか無いらしい。

「…いえ、まだまだです。攻撃のチャンスを貰っているのに簡単に防がれちゃいますし、防御の方も無防備に攻撃を喰らっちゃってますし……」

「おいおいネギ先生。言っちゃなんだが、それはいささか傲慢な物言いだぜ?」

少し呆れた様に篠村がネギを諫めにかかる。

「先生位の歳で実戦を想定した訓練をしている方が稀なんだ。こっちがある程度手加減しているとはいえ、戦闘が形になっただけでも凄い話だぜ?俺は確かに大した実力は無いけれど、それでもここでプロの侵入者たちを相手に立ち回っている、裏の方面で仕事を受けられるだけの実力がある魔法使いなんだ。そんな俺に、換算して修業を始めてから一ヶ月も立っていない見習い魔法使いがもつといい勝負が出来なきやいけないなんて、少し自惚れ過ぎだぞネギ先生」

篠村の言葉にネギはハッと顔を上げ、わたわたと両手を振って弁明する。

「ち、違うんです!篠村さんを馬鹿にするつもりなんて全然!!?……ただ、僕は……」

「まあ気持ちにはわかんぜ、ネギ」

言葉にならないもどかしさに語尾を濁すネギに中村が声を掛ける。「なまじっか頑張った成果が出てきて実力が着いてきてる実感があるからこそ、及ばない現状が不満なんだよな。俺もガキの頃は試合で勝てないのが悔しくて相手の所に必ず自分が勝ち越せるまで勝負を挑んでは、お願いですからもう付き纏わないで下さいと頭を下げられるまで朝練夜練時には相手の自宅まで押しかけていたからな。ネギが今より上へ行こうと焦る気持ちはわかるぜ」

「単にお前がストーカー地味な性根を身に付けるきつかけの話に過ぎん気もするが…馬鹿の分析が正しいだろう。男として気持ちは解る

が、学問に王道なしと言うように鍛錬に近道は無い。地道に功夫を積み上げていくしかない以上、気ばかり急いても強くなれんぞ」

「……はい」

気を落としながらも返事は素直にするネギに苦笑しながら篠村が纏めに入る。

「まあ根を詰め過ぎるなって話だよ。何時迄も落ち込んでないで、先の戦闘の反省点を考えようか？」

「は、はい!!？」

「まず欠点という訳じゃ無いがネギ先生。先生の魔法の射手の使い方はまだまだ単調で牽制にしても満足に活用が出来ていない」

「はい……」

篠村の指摘にネギは項垂れながらも肯定する。

「でも先輩。ネギは先輩みたいにサギタマガタ？だけ使わなきゃいけない訳じゃないんだから、その上達だけにこだわらなくてもいいんじゃない？」

脇で聞いていた明日菜が疑問を挟む。

「魔法の射手マガタな。まあ確かに牽制や先制攻撃に使える魔法なんて他にマガタごまんとあるし、これだけに拘る必要は無いんだが…俺が魔法の射手マガタに詳しくて教え易い事を除いても、これを使いこなせるのとせないのとじゃ、実力において大きな差が出てくる程に重要な魔法だと俺は思ってる」

疑問に対して、篠村は自身満々に答えた。

「そうなのですか？確かに見聞きした限りでは汎用性がある便利な魔法だとは思いますが…」

夕映が今一納得仕切れないと言う様子で尋ねる。

「うーんそうだな、じゃあ先の戦闘における俺の活用法を元に順を追って説明していこう」

篠村は小さな黒板に図や説明文を描きつつ、解説を始める。

「まずこの魔法は他の魔法に比べて慣れれば誘導性、操作性が桁違いに良い。だから習熟してる俺はネギ先生の弾幕に横からぶつけて誘爆させたり、こっそり一矢だけ先生の迎撃から逃れさせて背後から奇

襲させたりが出来る」

「ああ、攻撃に移ろうとしていたネギ先生が拘束された下りは矢張りアエールアエールカフトウーラエカフトウーラエ戒めの風矢を分けて操作していたのですね」

刹那が感心した様に言う。

「そう。更に魔法サギタの射手マギカは少数なら出が早いので手数を増やす、牽制なんかには持つてこい、遅延呪文ディレイなんて高等技術スベルわざわざ使わなくてもある程度なら撃たずに溜めておける。下級呪文だから魔力コストも低い、おまけにネギ先生は光、風、雷の三属性を撃ち分けられる：とまあこんな風に、ざっと利点を上げててもこれだけ使い勝手がいい魔法なんだ」

「はあく流石魔法学校で唯一教えてる戦闘用魔法っすね」

滔々と語る篠村の解説にカモが感心した様に呟く。

「ああ。凄いんだよ魔法サギタの射手マギカは。俺の魔法学校で書いた卒業論文、

『魔法の射手のみを用いた子どもでも出来る飛竜の討伐方法』っていう物だったんだが…」

「凄まじいタイトルだね、篠村…」

豪徳寺との手合わせを終えて戻ってきていた山下がやや引きつった顔でツツコむ。

「うん、当時は俺もどうかしてたんだ、きつと。まあ教師にも爆笑された後鼻で笑われたがよく出来た妄想だから受理って感じで誰も本気で認めちゃくれなかったんだが…いや愛衣は信じたか。兎に角その論文見てその気になった馬鹿ガキ共が本気で飛竜に喧嘩を売るという事件が俺が卒業した後が発生した」

「ええっ!?」

「だ、大丈夫だったんですかー?」

ネギが驚きの声を上げ、のどかが心配そうに聞いてくる。

「ああ幸い軽い怪我人が出ただけで大事には至らなかつたらしい。ただ問題は実際にそれで飛竜が本当に倒せてしまった事であ…」

「本気かよ!?」

驚愕する豪徳寺。

「本気だ。いや理論上可能だと思っただから書いたんだが真逆実践する

馬鹿、それもガキがいるとは思わなかったわ。当然そのガキ共はこつぴどく叱られたらしいが、何故か俺の所にまで抗議文が来てなあ……この場合俺は悪くないと思わないか？」

「大分責任があるだろ……」

辻が呆れた様に呟く。

「悪いのは学校の管理体制の甘さとガキ共の頭の悪さだと思うが……まあ兎に角話が脱線したがネギ先生。俺の挙げた事件からしても、魔法の射手の潜在能力の凄まじく高い魔法だと俺は思ってる。俺の様に使用魔法に制限が無く、魔力量も魔法威力も高いネギ先生なら俺には不可能な分野、魔法の射手を効率的に運用して、援護などもこなせつつ、砲台としての役割も果たすマルチな魔法使いを目指せるだろう。基本魔法と馬鹿にすること無く、真剣に学んでいってほしい」

「……はい！頑張ります!!？」

篠村の真剣な様子で放った言葉に、姿勢を正して元氣良く返答するネギ。その勢いに篠村は機嫌良さ気に笑って一つ頷く。

「よし!!？なら先ずは先程の戦闘でネギ先生が放った魔法の射手について改善点を述べよう！先生は魔法の射手を同じタイミングで同時に敵に着弾する様に撃っているよな？これは同時に衝撃が伝わるから瞬間的なダメージも増すし、何より弾丸一つ一つに細かい操作を加える必要が無いから使い易い。敵が無防備で、間違いなく弾幕を直撃させられる様な場合には、このパターンで撃つといい。しかし、ちよつと体術が出来たり、動きの速い敵に対しては、この撃ち方はあまり良くない。そういう場合は、弾丸の速度に微妙に緩急を付けたり、同時に発射せずに段階に分けて撃ち込んだり、弾幕の間隔にバラつきを作ったりして、敵が回避し難い様な形を色々考えるんだ。例えば……」

喰いつきが良く熱心なネギの反応に心なしか嬉し気な様子で、篠村は黒板を使用しながらイキイキと語り始める。

その様子を眺めつつ、中村がポツリと呟く。

「……やっぱあいつ魔法の射手の達人でいいだろ」

その言葉に反論する者は誰もいなかった。

そうして打倒、『某チキンのおじさんの紛い物』に向けてのネギとバカレンジャー、そして3ーA女子達の修業は進んでいった。

「神鳴流奥義 斬岩剣!!?」

振り下ろされる重撃を辻は顔を歪めながらも受け流し、踏み込み様胴薙ぎを刹那に打ち込む。刹那は打ち下ろした木剣の勢いを利用して地面を蹴って、剣を支点に一回転。辻の斬撃を躲すと同時にその身を飛び越え、辻の背後に回る。

「っ!!?」

振り向き様に木剣を薙ぎ払う辻だが、倒すよりも寧ろ受けさせて動きを止める為に放った、上半身を狙う横薙ぎは、着地と同時に身を屈めていた刹那の頭上を空しく薙ぐ。

「ぐはっ!!?」

次の瞬間刹那が繰り出した逆胴が辻にめり込み、辻はその場から吹き飛んで決着した。

「辻部長、なまじ剣道部での私との手合わせが多い分、神鳴流としての私の剣術に対応出来ない様です。…京都で遭遇した月詠のような輩は業界では異端な方で、魔法という要素の関わる裏社会は真正面から打ち掛かって来るような者は寧ろ少数です。どの様な攻撃にも素早く対応出来なければ前衛は務まりません、場数の少ない辻部長には、先ず私の剣に慣れて頂きます…まだいけそうですか?」

地面に転がった後に上体を起こし、顔を顰めて胴体をさすっている辻に、刹那は宣言する。

「…勿論だ。俺の粘り強さと諦めの悪さは誰よりお前が知っているはずだろ?」

辻は勢い良く立ち上がって木剣を構え、小さく笑いながら刹那に返す。刹那もそれに笑い返し、構えを取る。

「…行きます!!?」

「応!!?」

互いに瞬動を用いて一瞬で距離を詰めた二人は、激しい打ち合い



を開始した。

「漢魂あ！漢漢漢漢漢漢漢漢漢漢漢魂あ！！？」

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！？」

豪徳寺が連射する直径一m程の気弾の雨を、気を極集中させて強化した左右の拳で迎撃しつつ距離を詰める中村。

「ンな馬鹿の一つ覚えみてえな乱射が効く訳ねえだろがあ！！？」

「てめえに馬鹿なんて言われちやお終いだなオイ！！？ならこれでどうだオラア！！？」

豪徳寺は連射を止め、左右の拳を腰溜めに構える。

「多少デカい一撃くれえじや止まん無えよ俺ア！！？」

弾幕が止み、一気に距離を詰める中村だったが、

「二重極…漢魂あ！！？」

撃ち放たれたのは直径三mを超える巨大な気弾が二発だった。

「ゲエエ！！？」

中村は慌てて急停止し、両腕を開いて己の最大級の気を撃ち放つた。

「裂空掌波つ！！？」

生まれた高さ二m、幅四m程の気功波動が気弾とぶつかり合い、

双方が弾けて大爆発を起こす。

「ぬがっ…！！」

衝撃の余波を思わず腕を顔前に掲げやり過ぎす中村。だが次の瞬間、弾けた気弾の衝撃の中を強引に突っ切ってきた豪徳寺が、振りかぶった大振りの一撃を中村の鳩尾にぶち込む。

「気合パンチ！！？」

「ゴフツ！！？」

重撃に中村の骨が軋むが、怯まず中村は返しの逆突きを豪徳寺の顔面に打ち込む。

「ガツ！！？」

豪徳寺は呻くがこちらも怯まず、両者の戦いは激しい乱打戦に発展する。

「てめえは今だにそんな防御も碌に出来ねえ喧嘩殺法でこっからどうするつもりだよ!?」

豪徳寺のテレフォンアッパーを捌き様下段回し蹴りを打ち込んで体勢を崩し、頭の下がった豪徳寺の頭に左の肘打ちを叩き込みながら怒鳴る様に告げる中村。

「ぐうっ!…今更ちまちま型の練習した所でどれだけそれが身に着くってんだ、おい!?半端な真似する位なら俺はこのタフさと、漢魂をお!!?…極める為に進む!そんだけだオラア!!?」

豪徳寺の打ち下ろしの左が中村のガードを打ち破り顔面にめり込む。

「ブガツ!!?…上等だ受け切ってみろや俺の殺人打撃い!!?」

「望む所だオラア!!?」

二人は血塗れになりながらも尚打ち合いを続けた。

「山下は最近夜の修業にあんまり顔出さないアルが何処に行てるアル!?」

活歩からの鋭く、重い崩拳を打ち込みつつ、古は大豪院に問う。

「対練中に質問をするな、阿呆娘。」

…エヴァンジェリンの元に顔を出しているらしい」

崩拳を纏で捌き、返しの冲捶を古の胴目掛け叩き込みつつ、大豪院は答える。

「エヴァにやんのトコアルか?修業放ったらかして?恋?アルか…山下も変わってしまったアルな…」

「阿呆。山下は山下なりに功夫ゴソフに行っているのだ」

化勁で冲捶を流し様、溜息と共に呟く古に呆れた顔で大豪院は告げる。

「?、なんでエヴァにやんのトコへ行くのが功夫ゴソフアルか?」

「あの吸血鬼、俺達とやり合った時に合気柔術めいた体術を使っているな。山下が雑談の際に尋ねた所、あの女郎なんと武田惣角の直弟子であることが判明したのだ」

「?、武田惣角って誰アルか?」

古の言葉に大豪院は脱力し、危うく突き出された单把を喰らいかけて慌てて身を捌く。

「貴様………大東流合気柔術、中興の祖と言われる高名な武術家だ」  
「凄い人アルか？」

古の質問に大豪院は梱鎖歩で古の身を崩そうとしながら答える。

「当然会ったことは無い。文献でしか知らんが、全国行脚をして己の流派の有用性を広める様なもの武士だ。達人と呼んで差し支え無かろう」  
「おお!!?それで山下は稽古をつけて貰いに行てるアルな!!?」

古は軽やかな足捌きで身崩しを躲し、感心した様な声を上げる。

「そういうことだ、上手く稽古をつけて貰えているかは知らんが……そろそろ対練に集中するぞ、古」

「明白了」

大豪院の言葉を古は笑って数歩後退して構えを取り、肯定する。

拳法家の二人は静かに、されど激しく。淡々と功夫を積み重ねる。

「ギヤアアアアアッ!!?」

「ははは逃げてばかりでは勝てんでござるよ篠村殿」

情けない悲鳴を上げて全力疾走で逃走する篠村を十二人に分裂した楓が苦無などを投擲しながら追いかける。

「巫山戯んなこんな使い手がなんで呑気に女子中学生やってんだよ!!  
?やっぱ麻帆良は色々おかしいぞ畜生!!?」

篠村は叫びつつ無詠唱で呼び出した十数個の光球を放射状に楓達へと撃ち放つ。

「魔法使いからすれば見事な速度での迎撃なのでござろうが……」

楓とその分身達はそれぞれが軽やかな身捌きで光球を躲してのける。一人につきほぼ一つの光球では楓を捉えるには至らない。

「そう簡単に当たってやれんでござるな」

「当たって貰え無くて結構だ…自力で当てる!!?」

篠村は叫び、右手を掲げて力ある言葉を唱える。

「大渦!!?」

楓達を捉えられず飛んで行くかと思われた光球の群れがピタリと空中で一瞬静止し、次の瞬間まるで竜巻か何かの様に、ある一点を軸にして不規則な円運動を高速で開始する。

「…い…なんと!!?」

楓とその分身達は回避を行うが、微妙に軌道を変えながら高速回転する光球を幾人かが躲しきれず、着弾して風の帯に捕らわれる。

「魔法の射手 連弾 雷の9矢!!?」

篠村が追撃を放ち、大蛇の如くうねりながら突き進んだ光球が尚も渦巻く光球の回避を続ける楓達に襲い掛かる。

「おおっ♪やるでござるな篠村殿!!?」

分身達が次々と貫かれ、消滅する中、本体の楓は苦無を向かって来る光球に投げ付けて相殺し、虚空瞬動で渦と雷の追尾から逃れると再び影分身で分体を作りつつ篠村に襲い掛かる。

「ギャアア振り出しに戻ったああー!!?」

篠村は再び全力で走り出し、楓はそれに追いつがる。

ネギの指導に戦闘狂の相手。苦勞の尽きない篠村であった。

「いやー想像以上に難敵だねえー魔法使いの組織って奴は」

報道部の自分のデスクにて、朝倉は広がる資料の山を前に苦笑する。朝倉はネギと辻達へと己が一番役に立つ分野ー魔法関係者の情報収集を買って出た。敵対する可能性は今や限りなく低下したが、これまでの行動を見るに魔法関係者と辻達は、完全に志を同じくして行動を共にする事は恐らく無い。故に万が一反目する事態になった時の為に、朝倉は少しでも相手取る際の助けとなる様に魔法教師、魔法生徒の情報収集しているのであった。

「朝倉あーこれ生物災害の奥さんの近況及び人と成りを纏めた奴な。大した事は書いてないけどよ」

「はいーありがとね先輩。このお礼は必ずするから」

「いいよ。お前の事だからまたデカイスクープでも狙ってんだろ？記事を賑わせてくれりやそれで満足よ俺はな」

わはははは、と豪快に笑い声を上げながら去っていく高等部の先輩に頭を下げ、朝倉は早速資料の統合に掛かる。

「幾ら秘密裏に活動しよう<sup>この地</sup>と麻帆良で生活している以上、全く痕跡も個人情報も残さずに行動するなんて不可能だ、ってね」

朝倉は資料に追記事項を記入し、パソコンで検索を掛け、少しづつ情報を纏めていく。

「…いやー腕が鳴るねえ、いい所に一枚噛んだよ、私も」

「綾瀬君、宮崎君。この辺りは足場が悪い上に魔物<sup>モンスター</sup>が襲い掛かってくる危険な地帯だ。くれぐれも僕達の側から離れない様にしてくれ」

「了解です、部長」

「は、はいー」

道というよりも溝と表現した方が相応しい様な断崖絶壁の僅かな隙間を、夕映とのどかは図書館探検部の部長と主力部員達により率いられて通り抜けていた。

ここは図書館島の地下四階層。図書館探検部曰く、『即死系の罾<sup>トラップ</sup>が増え始め、魔物<sup>モンスター</sup>の強さも一気に跳ね上がる。この階層を越えられるかどうか<sup>トラスター</sup>が図書館探検部レギュラーへの分水嶺』との事である。

…図書館探検部で地下二階層よりも下の階層へ潜れるのは、高校生以上且つ相応の実力がある者だけとされている。下の情報は部員の間で徹底して情報規制が敷かれている為、漏れ聞く部長達の実力などは話半分に聞いていましたか…

夕映は此処に至るまでの光景を思い返し、頭痛を覚える。なにせこの図書館探検部部長及び部長の率いるレギュラー達の立ち回りといったらまるで…

「…来たな、総員戦闘態勢！綾瀬君と宮崎君は僕がいいと言うまで壁にしっかりしがみ付いて動かない様に!!？」

先頭を進んでいた部長が右手側の薄暗く広大な空間の彼方を睨み据え、鋭く叫ぶ。

「了解よ、部長!!?」

「懲り無え連中だぜ、本当によ!」

「ま、所詮ケダモノとかとノーミソの出来そんな変わらんいでしよ  
うしー」

レギュラー部員…正確には副部長とNo. 3、No. 4のラン  
クが部の中で付けられている図書館探検部の最精鋭達が各々頼もし  
い返事を返す。

「夕映ちゃん、のどかちゃん。こんな場所での戦闘だから不安に思う  
かもしれないけれど、この階層で私達を手こずらせる様な強さの  
魔物は出現しないわ。じっとしていれば傷一つ付けさせないから、  
安心して頂戴」

艶やかな黒髪を後ろで纏めた、クールビューティーという言葉  
がピッタリと当てはまりそうな美貌を持つ副部長が、怜悧な顔を柔ら  
かく微笑ませて夕映とのどかに告げる。

「…御迷惑をおかけしますです」  
「よ、よろしくお願いしますー」

夕映とのどかは色々ツツコミ所の多い状況と台詞に戸惑いな  
がらも、頭を下げて返事をする。

「ん、任せておいて」

「逢崎、来るぞ!」

「後輩ちゃん達、足手まといになんないですよ!!?」

胸を叩いて請け負う副部長に部長以外の二人が声を掛ける。

「わかってるわ…部長!!?」

「ああ、先ずは数を減らす、一斉射撃!!?」

宙を舞いながら接近していた無数の黒い影に対し、探検部パー  
ティーの内三人が片手を突き出し、叫ぶ。

「炎よ!!?」

「疾走れ雷!!?」

「アクアショット!!?」

部長の手からは三つの炎球が、副部長の手からは十個近い帯電  
する光球が、No. 4のショートカットの小柄な女性部員からは数個

の水球がそれぞれ放たれ、黒い影——蛇と鳥が合わさった様な不気味な獣に着弾する。

『ギシャアアアアアア!!?』

何匹かは飛来する攻撃を躲したものの、弾丸の大半は着弾して弾け、異形の獣を撃ち落とす。

「上々だ、蛇鴉相手ならオーソドックスな対応で押し切れる！僕と里中は近接戦闘用意！二人は次弾を!!?」

「応よ!!?」

背負っていた長剣を引き抜きながら指示を出す部長にN.O.の筋肉質な巨漢の部員が短く答え、手に持つ片手斧を構える。他の二人は既に呪文を発動する為の集中に入っていた。

『ギヤオアアアア!!?』

モンスター

魔物——蛇鴉は耳障りな鳴き声を上げると一列に並ぶ図書館探検部一行の中衛、夕映とのどか目掛けて大半が殺到する。

「ひ……………!」

自分達を狙って近づいてくる魔物モンスターの群れに、のどかが僅かに怯えた様な声を上げる。

「安心しな、嬢ちゃん。俺達は…」

「こんな雑魚にやられはしないよ」

部長と里中と呼ばれた部員は、腰に巻き付けたザイルの端に付いたカラビナを断崖絶壁の壁に一定の間隔を置いて取り付けられていた鋼鉄の輪に取り付けて命綱を作ると、ほぼ同時に壁面を蹴って跳躍して蛇鴉の群れの前に躍り出る。

「はあっ!!?」

「オラア!!?」

気の光を纏った部長の長剣が一閃して数匹の蛇鴉を斬り裂き、里中の巨大な片手斧が縦横無尽に振り回されて蛇鴉達を血煙に変える。

「煌めけ光よ!!?」

「ウインドスラッシュ!!?」

部長と里中によって殆どが蹴散らされた蛇鴉の残りに光球と

圧縮空気の刃が殺到し、砕き、斬り裂いて駆逐する。

『ギシャアアアアアア!!?』

あつという間に残り数匹になった蛇鴉は、鳴き喚きながら踵を返し、遠ざかって行く。

「あーらら、逃げちまった」

「放っておけ、里中。今は非戦闘員を抱える身だ」

己が身に繋がる長さを調節したザイルを引いて軽やかに元の道へと着地した部長と里中が言葉を交わす。

「歯応え無いねえくま、蛇鴉じゃあなあ〜」

「出てきたのが雑魚で幸いよ、この悪路で余り無茶はしたく無いもの。…二人共、何処か怪我して無い?」

副部長の確認に、半ば呆けながら戦闘を眺めていた夕映とのかは慌てて返事をする。

「だ、大丈夫です!」

「そもそもこちらにあの化け物共は届いていませんでしたから」

「ま、そーなんだけど念の為にね。なんか体調に異常があつたり小さくても怪我したらあたしに言いなよ。よっぽど酷いのじゃ無きや癒してあげられっから」

二人の返事に肩を竦めながらNo. 4の部員が告げる。

「……癒す、ですか……」

「ああ、到底見えねえだろうが氷室の奴はゲームなんかで言う治療術師<sup>ヒール</sup>って奴なんだわ似合わ無えよなあガハハハハハ!!?」

里中が戸惑う夕映に笑いながら解説する。

「うっさいよ筋肉以外能が無い馬鹿力だけの役立たず。探検の際に総合力で一番役に立ってないのあんたからね」

氷室と呼ばれた女性部員は鼻で笑いながら辛辣に言い返す。

「このアマ……」

「ホントの事でしょ?」

「ほら止めなさい二人共。幾ら魔物<sup>モンスター</sup>が居ないからって、こんな所で騒いでたら危ないわ」

「そうだ。早くこの断崖絶壁を抜けて、目的のエリアまで到達しよう。」



ぐずぐずしては綾瀬君と宮崎君に負担が大きい」

睨み合う二人を副部長と部長が諫める。

「じゃあ綾瀬君、宮崎君、進行を再開するよ。この階層メインの書物棚は此処を抜ければ直ぐだ」

「…はい」

「わ、わかりましたー…」

一行は再び進み始める。

「…部長、差し支えなければ質問をして宜しいでしょうか？」

慎重に壁に手を這わせて罨が無いかを確認しつつ、夕映は部長に尋ねる。

「ああ、罨の類に気をつけながら話を聞けるなら勿論答えるよ。聞きたいことは大体予想がつく、僕らが使っていた魔法の事についてどう？」

部長は朗らかに笑いながらなんでもない事の様言い返す。

「…魔法…ですか」

「うん、便宜上そう呼んでるね。綾瀬君、宮崎君が探しているという魔法道書を読み込んで我らが先代達が独学で仕上げた、図書館探検部最大の秘密にして目玉だ。最も27代目になる僕の段階でも魔法道書の研究は殆ど進んでいないけれどね」

後半の台詞を苦笑しながら部長は告げる。

「綾瀬ちゃんやのどかちゃんも部活の訓練で精神統一みたいな事を週何回かやっているでしょう？実はあれは、高等部が上がってから魔法を習得する為の下準備なのよ。備わる力は個人差があるけれど、どんなに才能が無くても高等部を卒業する位にはマッチみたいな火ぐらい起こせる様になってるわ」

「まあその中で特別筋が良くて尚且つ本人が望んだ場合において、図書館島深層部探検の為の訓練をさせることになってるな。さっきの見りやわかると思うが、最悪本当に命の危機があるかもしれねえ危険な探索だから、もちろん全員が望む訳じゃ無いんだけどな」

「ま、魔法に才能無くても麻帆良の武道系部活のバケモンみたいに気を発現させればそのマッチョみたいになれちゃうしね。ホ

ントは高等部に入るまで秘密なんだよ、これって。まあ君達は事情が事情だし特別って事さ」

口々に図書館探検部レギュラーの面々が衝撃の事実を明かしていく。

：図書館探検部は麻帆良の奇妙奇天烈な部活の中では大人しい方だと思っていましたか……

どうやらトップクラスにトンデモ系の部活だったらしいと夕映は内心頭を抱える。

：なんですか独学での魔法習得って。

確かに夕映が見る限り、先程部長達が放った魔法の射手らしき魔法一つ取っても、威力や発動速度など篠村やネギの放つそれと比べて明らかに劣る。それも当然で、恐らく図書館探検部の面々は、呪文らしきものを放つ瞬間に叫んでいるが、それは単なる掛け声の様なもので、実質無詠唱魔法で魔法を放っているのである。

「あ、あのー…皆さん、魔法を使う時に、言葉がバラバラだったんですかー……」

のどかも同じ点が気になってか、質問を投げかける。

「ああそれはね、言ってしまうと僕らの魔法は声を出さなくても念じれば発動出来るんだ。ただ自分が使う魔法のイメージを口に出して唱えると魔法が使いやすいからね。それぞれが好きな『名前』を自分の魔法に付けて使用しているんだよ」

「だから中二臭い技名唱える様な奴が出てくんだよなあー、アクアシヨット!!?とかなんかのゲームかつつのプッククククク……!」

「何あんた陸で溺れ死にたい訳?って言うか使えない奴の嫉妬が透けて見える発言だわねえあくやだやだ器の小っさい男!」

「はいはい貴方達、喧嘩は探索を終えてからにしなさい、毎回言ってるでしょ」

のどかに対する部長達の返答が夕映の推測を裏付ける。

「…部長」

「なんだい、綾瀬君?」

色々言いたいことも聞きたいこともあったが、夕映は一番の疑

問を部長に尋ねた。

「魔道書がそれ程力のある物だと知っていながら何故、それを探しに行きたいという私達の無茶な願いにこうしてわざわざ護衛についてまで応えて下さったのですか？」

図書館探検部が中等部以下に存在を秘匿しているのは魔法が少なからず危険な側面を持つことを理解している故にだと夕映は事情を聞いた今推測していた。だというのに何故自分やのどかの様な何の力も無い中学生が魔道書に触れる機会を妨げる所か協力してくれるのか、夕映にはわからなかった。

「うーん、理由を説明するには少し長くなるけど構わないかい？」

部長の確認に夕映が頷くと、部長はゆっくりと語り出す。

「まず僕達は部内における情報規制をしっかりと行っている自信がある。だから綾瀬君達が部内で魔法の存在を知る可能性は極めて低い。そして、綾瀬君達はしっかりとした目的があつて魔道書を探していると、僕達に搜索を依頼しに来た時の口ぶりで解る。…つまり綾瀬君達は部内以外の何処かで魔法の存在を知って、その魔法に関係する何らかの事情で魔道書が必要になり、僕達の元へ来た。此処までは合っているかな？」

何う様な部長の言葉に夕映は一瞬煙に巻くことも考えたが、この聡明な部長を前に下手な誤魔化しは通用しないだろうと思ひ直す。

「…はい、その通りです」

夕映の肯定に部長は満足そうに頷き、続きを話す。

「それならば綾瀬君達は僕達とは別の…そう、もしかしたら本物の魔法使いと知り合いなんじゃないか、と僕は推測した。これも君達の話からして自分で魔道書を扱おうとしている様には思えなかったからね。綾瀬君はこの探索において僕達に何らメリットが存在しない点を不思議に思っていたみたいだが、僕らのメリットとはズバリそこだ。君達を通じて僕達の様な我流で技術を強引に習得したのとは違う、正式に一から知識を学び、正しいやり方で魔法を身に付けている魔法使いの存在が明らかになるんじゃないかと僕達は期待しているんだ」

部長の言葉に夕映は僅かに身を固くする。

「…つまり、部長は私達を通じて魔法使いとコネクションを持ちたい、ということですか？」

「…ゆ、ゆえ〜……………」

夕映の言葉にのどかが何かを言いたげに声を掛ける。

「わかつてはいるです、のどか」

夕映はのどかの方を振り向き、安心させるべく僅かに微笑んでから前方の部長の方に向き直り、はつきりと宣言する。

「部長、先に申し上げておくです。私達は確かに魔法使いの存在を知っているですが、その魔法使いにも色々と事情があるです。場合によつては私達からその魔法使いを紹介することが難しくなると思いますが、部長はそれでも私達に協力して頂けるですか？」

夕映の言葉に部長は、はつきりと頷いた。

「勿論だ。何がなんでも紹介しろと言うなら、初めにそれをはつきり条件として突き付けているよ。今回の所は部活の更なる躍進となるかもしれない存在の、実在が明らかになっただけで良しとするさ」

「…部活の為、ですかー、部長？」

のどかが部長の言葉を不思議に思い、尋ね返す。

「ああそうさ。僕達図書館探検部は魔法を純粋に図書館最深部攻略の為だけに磨いている……まあ、魔法そのものに関心を置いている部員もいるが、攻略レギュラーの面々は少なく共そうだ。しかし現在僕達はどうしても突破出来ない階層があり、足踏みをしている状態だ。<sup>モンスター</sup>魔物が強力なものもあるが、魔法を使わねば突破出来ないであろう罠や仕掛けが多数あってね。不完全な魔法の習得のツケが回ってきているんだ」

部長は僅かに悔しそうに声の調子を変え、罠などが無いか確認して慎重に道を進みながら言葉を紡ぐ。

「だからこそ魔道書の解説も進んでいない現状、本物の魔法使いの実在は嬉しいニュースだ。君達に紹介して貰えればそれが一番だが、駄目だった場合は他に魔法使いへの接触手段を考えるさ。魔法という一種の技術が本という媒体に記されている以上、魔法使いとは一定以

上の人数が世の中に存在するのだろうか」

「…そう、ですね……」

…真逆学園だけでも数十人単位で居るとは言えませんね、少なく共今は……

額に鈍い汗を掻きつつ相槌を打つ夕映。

「だから夕映ちゃん、のどかちゃん。安心してくれていいわ。今しがたの質問に答えてくれただけで私達は充分よ。貴女達の知る魔法使いさんが顔を合わせてくれるかどうかは、また別の話としましょう？」

「…恩に着るです、皆さん」

「あ、ありがとうございます！」

副部長の言葉に頭を下げて礼を言う夕映とのどか。

「いいってことよ。魔法使い云々を抜きにしてもこんな地下深くまで潜って書物を求めるその姿勢、図書館探検部の鏡だぜ！先輩としちゃあ損得抜きで手助けしたくなるってもんだ」

「うわカツコつけー」

「五月蠅えよお前はいちいち……」

ぎやあぎやあど喧嘩を始めた里中と氷室を部長、副部長は溜息をついてスルーする。

「ともあれ里中の言うことも一理ある。図書館探検部に必要なのは本に対する情熱とまだ見ぬ本を探しに行く飽くなきバイタリティ。理由がどうあれ君達が本を求める以上、僕達は全力で協力しよう。さあ、此処を一刻も早く抜けようか」

「はいー！」

「は、はいー！」

二人は部長の喝に勢い良く応え、一步一步を慎重に踏み出し、進み始める。

「…頑張りましょう、のどか。ネギ先生の為にも」

「…うん！」

「明日菜ー、大丈夫なんー？」

「痛たたたた…大丈夫よ、木乃香。単なる筋肉痛だし、寝れば治るわ」  
身体中を襲いくる痛みに呻き声を上げながらもストレッツチで  
身体をほぐす明日菜に木乃香が心配して声を掛ける。

「辻先輩も刹那さんも鬼みたいに強いし、私の動きが良くなって来た  
とか言って段々訓練メニューがハードになって来るし…そりや自分  
が望んでやってる事だけど愚痴の一つも出るわよ…ねっど！」

開脚しての前屈に移行する明日菜を木乃香は何とは無しに眺  
め、やがてポツリと呟く。

「…皆、頑張つとるな…」

「んー？」

明日菜は暫く黙って俯せになっていたが、

「…別に、無理して何かしようなんて焦らなくていいと思うわよ」  
なるべる気楽に聞こえる様に明日菜は告げる。

「!……明日菜……」

木乃香ははつと顔を上げて明日菜を見やる。

「別にあの先輩達も、刹那さん達も。そりやあの融通が効かないマジ  
メ過ぎるお子ちゃまの為に、って気持ちは勿論あるんだろうけどさ。  
何より自分がやりたいからやってんのよ。だから皆木乃香に強制し  
て何かやらせようとはしないんだわ」

「……でも、明日菜……」

あくまで声の調子の暗い木乃香に、苦笑しながら言葉を掛ける  
明日菜。

「ん、解るわ。逆に辛いわよね、そういうの。誰かに決められた方が楽  
なことって、確かにあるから。…でもね木乃香。そんなに難しく考え  
ないでいいんじゃないかしら？」

「え？」

意外そうに聞き返す木乃香に、明日菜は告げる。

「先輩達は、危険な場合があることを身を持って実感してるから、  
こっちの道には、きちんと覚悟を決めてやって来いって言うでしょ？  
それはもちろんあたしもその通りだと思っけれど、でも木乃香、今何  
を始めたらいいのかすらまだ分からない状態でしょ？」

「……うん」

明日菜の言葉にこっくり頷く木乃香。

「だったらさ、とりあえず少しでも興味の湧いた事をとりあえずやってみればいいんじゃないかしら。別に始めたら止められない訳でも何でもないんだから。深刻に考え過ぎなのよ」

明日菜は笑って語る。

「無理だと思ったら止めていい。あの人は誰もそれに文句なんて言わないわ。万が一ブー垂れる奴がいたらあたしがぶっ飛ばしてあげるわよ！だから木乃香、もつと気軽にやりたいこと始めなさい！迷ってる位だから何かあるんでしょ？大丈夫よ。何かあっても、鬼より強い先輩達と、刹那さんが居るでしょ？」

勿論あたしもね、と明日菜は笑顔で締めくくる。

「……明日菜あ………！」

「ちよ、何よ木乃香、大げさねー！」

目尻に指を当て、涙ぐむ木乃香に、照れ臭そうに呼び掛ける明日菜だった。

「…刹那さんにも相談してさ。もつと気楽に行きなさいよ」  
「……うん」

「……よくもまあ、おめおめと顔が出せたものだな、優男」

「あれ、僕そこまで嫌われてたかい、エヴァさんに」

傷付くなあ、と山下は苦笑する。

「…二度と顔を出すなど言ったらろうが」  
「エヴァさんそれ何日前の話さ？あれから何回も顔出してるじゃない」

「…稽古はつけん。何故私がそんな面倒な真似をせにやならん」

「ええーいいじゃないエヴァさん。武田惣角の直弟子との組手なんて、今の時代で願ったって絶対に叶わない凄い事なんだよ。お願いだから付き合ってよ、別に毎日じゃ無くていいんだ」

「巫山戯るな、私に何の得がある？」

両手を合わせての山下の懇願を、けんもほろろに突っぱねるエ

ヴアンジエリン。

「んーじやあ謝礼を払うよ、一日幾ら？」

「金などいるか、阿呆」

「じゃあどうすればいいのさ？」

「諦めろ」

「そこを何とか!!？」

ズバツ！と勢い良く頭を下げて頼み込む山下。エヴァンジェリンはうんざりした様に溜息を吐く。と、そこに奥の部屋からチヨコチヨコと可愛らしい足取りでチャチャゼロが歩み出てくる。

「イイジャンネーカゴ主人、ドウセ暇ダロ？」

「貴様は黙つとれ、何故こいつの味方をする？」

「理由ハ同ジダゼ、暇ナンダヨ、俺モ。折角自由ノ身ダツテノ二相変ワラズツマンネー警備バツカデ雑魚ヲ斬リ刻メモデキネー。ダツタラ優男ガ手足ヤ首ノ骨バキボキヘシ折レルノヲ見テル方ガナンボカ楽シイカラヨ」

「いやゼロさん、手足は兎も角首が折れたら死んじやうんだけど……」  
ケケケケ手足笑いながら物騒な事を言う殺人人形キリングドールにツツコミを入れる山下。

「アア？ソナモン根性デナントカシヤガレ」

「無茶言うなあ、ゼロさんは……」

妙に気安く配下と話す山下を見てエヴァンジェリンはまた苛立ちが募る。

…こいつは何故私に構う？……………

…好きだから？……………

「……ハッ！」

馬鹿馬鹿しいとエヴァンジェリンは鼻を鳴らす。そんなものは信用がならない。仮に本当だったとして、受け入れられない。

……私はナギが好きだ。それが答えだ……

エヴァンジェリンはチャチャゼロと漫才の様なやり取りを続けている山下に、言葉を投げ掛ける。今度こそ、鬱陶しい人間を追い払う為に。



「おい優男。お前はどうしても私に稽古をつけて貰いたいか？」  
「え？あ、うん!!？何、エヴァさんその気になってくれた？」

勢い込んで尋ねる山下に、エヴァンジェリンはニヤリと邪悪に笑って答える。

「ああ、貴様が私の言う対価を支払ったのなら、よかろう稽古をつけてやろうじゃないか」

「何なに？なんでもするよ、僕は？」

「ほう、何でも言ったな、よかろうならば…」

エヴァンジェリンはきつぱりと告げる。

「お前の血を私に寄越せ」

「……え？」

思ってもみなかった言葉に、山下は目を丸くする。

「稽古をつける度に貴様の血を私が頂く。無論失血死するまで吸い取ったりはせんさ。その後の増血処理もきっちりしてやる。簡単な条件だろう？一つを除けばな」

「……それって……」

「そうだ」

何事かに思い当たった山下の顔を見て、エヴァンジェリンは嗤って告げる。

「映画か何かで見たことはあろう？吸血鬼に血を吸われた者は吸血鬼になる。一度に吸い尽くさねば即座に吸血鬼化はせんだろうが、それでも私が稽古をつける度に血を吸われるならば、遠からず貴様は化け物の仲間入りだ。暖かい血の通わぬカインの末裔になる覚悟が有るならば、貴様の修業に幾らでも付き合っただろうではないか」

さあどうだ？とエヴァンジェリンは山下を促すが、山下は何事かを呟きながら顔を伏せて答える様子は無い。

……まあ当然だな……

たかが稽古で人間辞めろと言われていたのだから受け入れる筈が無い。エヴァンジェリンは始めから不可能な条件を出して山下を追い払おうとしていた。

「…オイゴ主人……」

「チャチャゼロ、黙っている」

何事かを言いかけたチャチャゼロを制するエヴァンジェリン。この一件に関しては、誰にも邪魔立てをさせる気は無かった。

「どうした優男？無理だと思うなら帰るがいい。始めからここは貴様のいる場所じゃ無いんだよ」

「…あく、うん……」

エヴァンジェリンの言葉に山下は顔を上げ、曖昧な笑みを浮かべつつ返事をした。

「……わかった、エヴァさん。その条件、受け入れるよ」

「……………何？……………」

エヴァンジェリンは思わず聞き返す。聞き間違いだ、と己に言い聞かせながら。

「いや、だからその条件、飲むよ。幾らでも付き合ってくれるんだよね？早速今日からよろしくね」

「なっ、貴様…巫山戯るな!!？」

あまりにも平然と話を続ける山下にエヴァンジェリンは怒鳴り返す。

「なに怒ってるのさエヴァさん?」

「貴様の言動に決まっているだろうが!!？私の言葉を脅しか何かとも思っているのか!!？私は詰まらん嘘はつかんぞ、貴様は！化け物に!!？成り果てると言っているんだ私はあ!!？!!？」

徐々にボルテージを上げながら叫ぶエヴァンジェリンを、若干五月蠅そうに眉を顰めながら山下は言葉を返す。

「わかっているって、僕はエヴァさんと同じで吸血鬼になるんでしょ？はつきり言わなきゃわからないなら言うけど、僕は吸血鬼になっていから貴女の稽古を受けたいんだよ」

「っ!!？……貴様……………!!？」

「逆に聞けどや」

激昂するエヴァンジェリンの瞳を静かに見返しながら山下は告げる。

「エヴァさんは何がそんなに気に入らないのさ？そりゃ僕も馬鹿じや

無い、エヴァさんが僕を追い払う為に無理な条件を出した事位解るよ。…でも、それでもエヴァさんは条件を出したんだ。エヴァさんは言うだけ言っておいて都合が悪くなったら前言を翻す様な詰まらない小悪党とは違うんでしょ？ だったら僕がそれを受け入れたなら二言は無い筈だ。エヴァさんが誇るエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルはそうじゃなきゃいけない。…：僕の言っていることは何か間違っているかい、エヴァさん？」

「~~~~~!!?!!?!!?」

エヴァンジェリンは言葉にならない憤りにギチギチと歯を喰いしぼり、頭を掻き毟る。

「ケケケ一本取ラレタナゴ主人」

無言で殺気立った視線を向けてくるエヴァンジェリンに、チャチャゼロは首を竦めて無い息を吐く。

「シナ怖エー目デ睨ムナヨ。埒ガ明カネーカラ俺ガ纏メテヤンヨ、ゴ主人」

テクテクと前に出てチャチャゼロは山下に尋ねる。

「要スルニゴ主人ガ言イテノハヨ、タカガ稽古ニテメエハアル意味命ヲ賭ケルヨリモ重大ナ事ヲアツサリト了承シヤガツタカラ、オメーガソコヲ辺ヲマルデ考エズニ軽クイ覚悟デOKシタ様ニシカ見えエエ、ダカラ受け入レラレネエ。ソウ言イテーンダ」

いつの間にかチャチャゼロの手には、己の身長を遥かに超える大鉈が握られ、その刃は椅子に座る山下に向いている。

「化ケ物ニナルツツノハオ前ガ想像スルヨリ、ズット重イコトダ。ゴ主人ハソノ重責ヲ、六百年背負ツテ生キテンダ。オ前ハマダ若造ダ、全テガ理解デキナイノハ当たり前ダワナ。ダガ足り無いナリニオ前ハソノ意味ヲ、少ナク共理解シヨウトスル姿勢ガ無クチャイケネエ。…ソコヲ辺ヲマルデ考エズニサツキノ言葉ヲ吐イタンナラ…」

ヒュン!!?と風切り音と共に大鉈が山下の首筋に突き付けられる。

「…刻ムゾ、クソガキ。ゴ主人ヲ虚仮ニスルツテノハ俺ヲモ虚仮ニスルツテコトダ」

チャチャゼロはドスの効いた声で山下に告げる。エヴァンジェリンもまた、そんな従者の言動を咎めずに、山下を灼ける様な視線で睨み据える。

山下は大鉦を突き付けられている状況にも動じずに暫し何事かを考え、やがてゆつくりと口を開く。

「…確かにあつさり了承した様に見えたかもしれないけどさ。僕は僕なりに、考えて吐いた言葉だよ」

山下はエヴァンジェリンな目をしっかりと見返し、言葉を紡ぐ。

「ゼロさんの言う通り、僕はエヴァさんの苦渋も何も、全然解ってないんだろう。そんな僕が貴女に、上っ面だけの薄い言葉を吐く気は無いよ。同情なんてまっぴらごめんだろうしね。…だけど僕は僕以外の何者でも無い。今までの経験からしか貴女を判断出来ないし、そうした上で覚悟を決めるしかない。だから僕は考えてその上で貴女と同类になってもいいと思ったんだ」

「……解らんな」

剣呑な空気を緩めないままエヴァンジェリンは呟く。

「何がお前をそうまでさせる。それ程までに強くなりたいか、貴様は」  
「勿論それもある。僕は武道家だ、己を磨く為なら何でもするよ。人を辞めてまで修練を積むかどうかについては、流石に人によるだろうけどね」

「…ならば」

「だけどそれだけじゃない」

何事かを言いかけたエヴァンジェリンを遮り、山下は言葉を続ける。

「エヴァさんが何処まで本気で言ったかは知らないけれど、貴女と同類になるかと言われて、僕は嫌な気はしなかった。自分でもこれだけ人の身に執着が薄いなんて驚いてるけど、兎に角僕は、吸血鬼になる事が、嫌じゃ無いんだ」

「だから…それが何故だと聞いている!!？」

「知らないよ、そんなの」

苛立った様に問いかけるエヴァンジェリンに、山下はあつさりとそう言った。

「なっ!!?.....」

「理由なんか知らないよ。そんなものは思い起こせば何とでも言える。僕が何も知らないから何を言っても薄っぺらいと言ったのはそっちじゃないか。僕は自分の心に問うただけだ、エヴァさんに血を吸われて、吸血鬼になってもいいかって。僕の心はその問いに応と答えた。だからそれが答えだ！細かいことはいんだよ、男にウダウダと語らせるな。僕は貴女が嫌いじゃない、だから血を吸われても構わない！僕が言えるのはこれだけだ!!?.....後は貴女が応か否かだ、答えろよ、エヴァさん!!?!!?」

山下の叫びが室内に木霊する。エヴァンジェリンは目を見開いた驚愕の表情のまま固まっており、反応は無いが山下は構わずエヴァンジェリンを見つめ続ける。と、その時……

「…ク、ククク………!」

「?、ゼロさん……?」

大鉦を突き付けたまま微動だにしなかったチャチャゼロが、カタカタと震えながら声を洩らし、

「クケケケケケケケケケケケケケケケ!!?!!?」

大鉦を取り落とし、天井を向いて大音量の笑声を響かせた。

「……ゼロ、さん……?」

「…チャチャゼロ……」

「クケケケケゴ主人、アンタノ負けダナ」

「な、何……?」

己が従者の高笑いにようやく硬直を脱して戸惑う様に声を掛けたエヴァンジェリンだったが、チャチャゼロの敗北宣言に、更に戸惑いを増して声を上げる。

「男ハ不言実行ガ魅力的ツテナ。イヤハヤ、確カニヤボナ問イヲ言ツチマツタミタイダゼ。コウマデ言ワレタラ受け入レルシカ無エナゴ主人。ナニセ吸血鬼ニナルナンテ嘘ツパチナンダカラヨ」

「……………は?……………」

チャチャゼロのネタばらしに目が点になる山下。

「チャチャゼロっ!!?」

「諦メナゴ主人。コイツノ宣言ヲ聞イタダロ?コイツハ本当ニ化ケ物ニナルトシテモ条件ヲ飲ムゼ。マサカコウマデコンナ若造ニ覺悟云々トカ言ツテオイテ、自分ハヤツパ無シナンテ言ワネエヨナ誇リ高キ悪ガヨオ?」

「ぬ、ぐう……!!?」

「……あのく……」

悔し気に唸るエヴァンジェリンを横目に、山下はそつと手を上げてチャチャゼロに質問する。

「ンダヨ?」

「さつき言つてた、吸血鬼になるのが嘘って……?」

「アア、簡単ナ話ダ」

チャチャゼロはあつさりと言明を行う。

「吸血鬼ガ眷属ヲ増ヤスニハタダ単ニ相手ノ血ヲ吸ウダケジャナクテソレナリニ複雑ナ儀式ミテ一ナ事ヲ一緒に行ワナキヤイケネーンダ。ダカラ稽古ノ代価トシテ血ヲ吸ツタダケジャ、ゴ主人ガソノ氣ニナンネー限り百遍吸ツテモテメーハ人間ノママツテコツタナ」

「……」

山下はチャチャゼロの言葉を聞いて暫し無言で言葉を反芻していたが、やがて勢い良く立ち上がると顔を赤くしながらエヴァンジェリンに指を突き付け、叫ぶ。

「騙したなエヴァさん、僕を追っ払いたいのが為に大法螺吹いて!!?僕の覚悟は一体何だったんだよ恥ずかしい真似人にさせやがって!!?」

「五月つ蠅いわ黙れええええ!!?」

山下に負けず劣らず大きな声でエヴァンジェリンはヤケクソ気味に叫び返した。

「……じゃあエヴァさん、僕が血を提供する代わりに僕に稽古をつけてくれるって事で、契約成立でいいね?」

「……」

すったもんだでしばらくした後、騒ぎを聞きつけて掃除を放り出して駆けつけた茶々丸までを動員し、どうにか落ち着いた場で改めて山下はエヴァンジェリンに確認を取る。エヴァンジェリンはムスツとした顔で頬杖をつき、返事を返さない。

「…エヴァさくくん？……」

「マスター……」

「ゴ主人ヨオ、往生際ガ悪イゼ？」

「五月蠅いぞどいつもこいつも!!? ええい解ったわ!!? 契約成立だ感謝しろ優男!!?」

山下所か二人の従者にまで責める様な口調で話し掛けられて、エヴァンジェリンは遂に折れた。

「うん、感謝するよエヴァさん」

「つ~~~~~~~~!!?!!?」

ふにやりと柔らかく笑う山下にエヴァンジェリンは怒りのやり場を失って地団駄を踏み、山下の顔面に鋭い指を突き付けると宣言した。

「いいか優男、いや山下!!? 私は指導を請け負った以上半端な真似はせん!!? 打ち身所か骨がへし折れるのを覚悟しておけ!!? 私の憂さ晴らしを兼ねて早速今から組み手だ組み手!!? 口答えは許さん!!?」

山下は多分に横暴なその言葉も気にせず、笑顔で立ち上がると元気良く答える。

「望む所だよエヴァさん!!? 会津の小天狗と謳われた達人の技を受け継いだその実力、是非とも僕に見せてくれ!!?」

「上等だクソガキ!!? 表に出ろ!!?」

「承知!!?」

ドタバタと慌ただしくログハウスを出て行く二人を見て、ケケケと愉快気に笑いながらチャチャゼロはポツリと呟いた。

「…本気デ見込ミアルカモシレネーナ…期待シテルゼ、山下……」

## 10話 雨の中の来訪者

「…糞がっ!!?」

短く悪態を吐き、小太郎は全力で道無き道を直走る。

「…シブトイ上ニスバシツコイナ、狗族トハ」

「んん、やっぱり男の子って元気いい方が可愛いわねえ」

藪の向こう側からくぐもった低い声と甲高いオネエ言葉が響いてくる、小太郎から然程距離は離れていない。

「張つとつた…ちゆう訳かい、なんや端から欠片も信用しとらんのないか、連中……!」

小太郎は苦々しく呟き、位置が捕捉されない様静かに、しかし高速で木々を掻き分けその場を逃れる。

京都での一件による懲罰から牢に入れられ、謹慎状態にあった小太郎の元へ白髪の少年がやって来たのは約一日前のことであった。

「…裏切れ、言うんか、あの兄ちゃん達を……」

「僕の発案じゃあ無いけれど決まった事だからね。彼らに取り入って学園への侵入及び特定対象の無力化に手を貸すならば君をここから出した上で僕達の組織にスカウトしよう」

牢の木格子越しに強い視線で睨みやる小太郎を黙殺し、少年――フェイトは淡々と要件だけを小太郎へと伝える。

「…なんで俺にそないな話を持ち込む?お前らが自分でやった方が成功し易いちゃうんか?」

「それは君には関係の無い話だ。君が考え、そして答えるべきはこの一件を受けるか否か。それだけだよ」

わざわざ捕まっている自分を手間をかけてまで使いたがる理由が解らず、訳を尋ねる小太郎だが、フェイトはすげなく質問を無視して小太郎に決断を迫る。

「…一つ聞かせろや」

「なんだい?」

「千草姉ちゃんは俺を使ううちゆう事に賛成したんか?」



小太郎の問いにフェイトは軽く息を吐き、暫しの間を置いて答える。

「…いや。彼女は君を作戦に起用する事に最後まで反対していた」

「フェイトの答えを聞き、小太郎は少し寂し気に、そうか…、と呟くが、暫くしてくつくつと笑い始める。

「…何が可笑しいんだい？」

「いやあ、まあ姉ちゃんらしい答えや思うてな」

小太郎は笑みを噛み殺しながらフェイトに答える。

「俺を置いてく決めたなら姉ちゃんは今更俺を引つ張り出すなんちゆう半端はせえへん思とつたわ、予想通りやな…：先の話、答えはNOや。姉ちゃんが来い言うんなら俺は地獄の果てまで駆け参じたるが、俺に来んなつちゆうなら俺が行つても得ないわ。あの兄ちゃん達にはとびきりの不義理働いたんや。これ以上迷惑掛けんのは俺の流儀に反するわ」

「…そうかい、じゃあ別の手を考えるよ」

きつぱりと断る小太郎の返答に然程残念そうな様子も見せず、あつさりそう告げるとフェイトは踵を返し牢の出口へと歩いて行く。

「…おい!!？」

呼び掛ける小太郎に対してフェイトは反応を返さないが、構わず小太郎はドスの効いた声で告げる。

「そつちが声掛けてスカウトしたんや、ちゃんと姉ちゃんに気い使えや。…強いけど脆いんや、姉ちゃんは」

その言葉にフェイトは一旦足を止め、小太郎の方を振り返り告げる。

「彼女が僕達の目的に対して賛同し有用な戦力で有り続ける限りは、僕達も彼女の要求に出来得る限り答えよう」

そう言い放ち、フェイトは再び歩みを再開し、牢獄を後にする。

「…：そら用済みになつたらポイツちゆうことやろが…：」

小太郎は吐き捨て、床に寝転がる。

「…：やっぱ駄目やな、姉ちゃんをどうにか連れ出さなあかん…：」

そして現在、小太郎は牢獄を脱走し、東の地、麻帆良に向けてひた走っている。恐らくフェイトの組織が掛けた追手らしき、複数の異形の影から攻撃を受けながら。

「…痛う……このままやったら振り切れるか……？……妙に追撃が緩い気いするんは気の所為やとええんやが……」

背面の火傷と身体の各所に受けた裂傷の痛みに呻きつつも小太郎は声が聞こえなくなる程に遠ざかった追手の存在を気にしつつ足を緩めずに森の中を征く。

…人や無いのは明らかやが、俺が普段仕事で相手取る妖の連中とも雰囲気が違う……やっぱあの白髪のがキの仕業やろな……

追手の正体を考えながら繁茂する雑草の中を走り抜けていた小太郎は、小さな泉の湧き出る小さく開けた空間に出る。

「…獣の水飲み場かい。熊とは言わんからせめて鹿やら兎でも居ってくれりやあ腹搾え出来るんやが……」

ま、そう上手くいかんわな、と呟きつつ、小太郎は泉の水に口をつける。手早く水分だけでも補給して先を急がねばならないからだ。が……

「んぐっ……ふう……ん？」

水を流し込み一息吐いた小太郎は、泉の水面に己が起こしたもので無いさざ波が立っているのを見咎める。

「…地震……う……いや、これは……っ……？」

小太郎は咄嗟に身を捻りながら飛び退り、水面のうねりの中心から飛び出した閃光の様な何かを危うく回避する。

「っ!!??……糞があ!!??」

小太郎は転がっていた地面から素早く跳ね起きると、再び全速力で走り出す。

…早くあの兄ちゃんらに伝えんと……!!??

「あー駄目ですよちゃんと狙って下さー」

「いやいや私はちゃんと狙ったとも。ここは彼の反応の良さを褒めるべきだろうっ。」

「なんでもいいから追おうぜ、逃げちまう。伯爵、後ろの御二方にも本

「気ださせろヨ」

「…負け犬ならぬ逃げ犬？」

「篠村…お前自分の分つてもんをちゃんと弁えてるか…?」

そろそろ中年に差し掛かるうかという男性教師の、薄くなり始めた頭頂の下の両眼は、どう鼻肩目に見ても好意的では無い視線を眼前に立つ篠村に向けていた。

…何時か釘刺されるとは思ってたが、面倒臭いことになったなオイ  
…

篠村は内心溜息を吐き、目の前で佇む数人の男女…何れも魔法関係者、それも先の一件でバカレンジャーに対してかなりの反発心を抱いている、麻帆良の魔法関係者の中でのバカレンジャー起用反対派の面々を見やる。

「自分の分…ですか、理解しているつもりですがね？私は何か皆様のお気に障る様な真似でもしましたか？」

「惚けるのはおよしなさい」

それなりに美人だが、ツリ目がキツイ印象を与える女教師がピシヤリと言いつつ。

「…最近のあなたのネギ・スプリングフィールドへの干渉、及び辻はじめ一達要注意対象への交遊の件です」

…まーるで俺が進んでちよっかい出したみたい言い方されてんなあ…

実際は無理矢理引つ張り込まれたんだがなあと篠村が小さく溜息を吐くと、それを目敏く見咎めた学園警備員の一人が怒鳴り声を上げる。

「貴様、なんだその態度は!!?自分が重大な計画を破綻させかねない行動を取っているのが解っていないのか!?!」

「穏やかじゃ無いですねえ」

篠村は苦笑しながら言い返す。

「俺みたいな下っ端は上の命令にただ従うのみですとも。実際俺が何か命令違反を仕出かしましたか？」

「俺達が言いたいのは暗黙の了解を貴様が破った事だ!!?」

ダン!と手元のテーブルを殴りつけ、警備員は怒号を上げる。

「ネギ・スプリングフィールドを正しい方向へ導き、尚且つ英雄として相応しい育成を施す!!? 貴様もその大役の任を請け負う為に、各方面が調整を重ねていた事を知らんとは言わせんぞ!!? 出しゃばつている素人共の事はこの際どうでもいい! 所詮は魔法も碌に知らん一般人が偶々大層なアーティファクトを手に入れて偶然戦果を上げただけだからな!!? だが貴様が抜け駆けをして教育者に収まっている件に関しては無言で見過ごしはせんぞ!!?」

警備員の言葉を引き継いで、まだ歳若い、大学生と見られる青年が言葉を紡ぐ。

「篠村君が自分の不名誉なレッテルを何とか払拭したいというのは理解できなくも無いんだが…はつきり言わせて貰おう、魔法行使に欠陥を抱える君ではかの英雄の息子に対する指導者としては不資格だ。君の偏った教育であの子が歪んでしまう前に指導を中断し、私達が出する者に後を引継ぎたまえ。ネギ先生は君に大層な信頼を寄せていると聞く、君の言うことならば素直に従うだろう?」

「大人しく指示に従うならば貴方の立場も一件の功労者とし、悪い様にはしません。貴方も公の為に働く学園の一魔法生徒ならば、身の程を弁えて…」

「ちよつといいですかね」

篠村は女教師の言葉を遮る。

…駄目だな、この連中は……

篠村は今度ははつきりと溜息を吐き、全体に向けて言い放つ。

「まあこの際私が落ちこぼれ呼ばわりを挽回したいと思ってるのだ、評価を受けたいが為にネギ先生に関わりに行っただのといった言い掛かりに着いてはまあ、いいですよ。言っても無駄でしょうから」  
ただね、と篠村は続ける。

「俺が教育役である事が不資格ってんならそれを決めるのは上の人でしようよ? それとも貴方がたの言葉は、学園長辺りから同意を得ての意見ですか?」

「…………いや…………」

男性教師が苦々し気に否定する。

「ですよねえ、だったら俺は言っちゃなんですけど、私と同じ魔法教師や魔法生徒に過ぎない皆様の言葉をお言葉を聞く訳にいきませんねえ。皆様が知っている私の行動を真逆上の方々が知らない訳はありませんし。指示が出ていないなら上は俺が関わるのに文句は無いって事でしょう?というか、私がネギ先生達と修業始めてからそれなりに時間経ってますけど、今頃になって私個人を諫めようってのは、ひよつとして初めに上の方々に抗議してそれが通らなかつたから私本人から辞退させようって事ですか?」

厳密に言ったらそれ上からの指示に逆らってる事になりませんか?と篠村は笑う、笑みの奥で嘲笑う。その場の全員を。

「黙れ!!?」

警備員が怒鳴り散らす。

「そうだとして貴様が相応しく無いのは誰が見ても明らかだろうがこの落ちこぼれが!!?上がどう言おうが教育に不適格な者を除けるのが何か間違っているか!!?」

その言葉に篠村は笑うのを止め、はつきりと全員に向けて告げる。

「まあ皆様の考える通り、そうでしょう、あの子は私のチンケな指導で伸びきる様な器じゃ無い。あの子の才能は桁外れだ。私より相応しい奴が居るのも確かでしょうよ」

「…ならば君は…………」

「だったらさあ…」

何か言いかけた青年を遮り、篠村は続ける。

「あんたらが来いよ、直接。そんなに自分の方が上手く教えられると思つてならさあ。ネギ先生の所に顔出して指導役を申し出るよ。相応しいかどうかは本人と兄貴分達が判断してくれんだろうさ…………下らねえ本国への点数稼ぎに俺を巻き込むんじゃないやねえよ、正しい魔法使い様方?」

「…貴様!」

青年が杖を抜き掛け、眼前に突き付けられた篠村の輝く二本指にギ

クリと動きを止める。

「遅えよ、わざわざ魔法発動媒体を弄って一々取り出す様な輩が俺にこの距離で喧嘩売んなよ……そもそもあんたらに胸張って指導出来るだけの実力が有ると思えねえ、杜崎先生やら高畑先生やらに任せといたら？ 功名心でガキの将来左右させんなよ、いい歳した大人共がよ」

篠村は踵を返し、扉へ向かって歩き出す。

「篠村っ!!？」

男性教師の呼びかけに篠村は首だけで振り返り、告げる。

「上に言われただけで一人で行動も起こせねえ癖に偉そうに物申すんじや無えよ腰抜け共」

言い捨てて篠村は部屋を後にした。

「あく面倒臭かった、出世争いは他所でやりやがれ自分らが腐れてる自覚の無え正義馬鹿共が……」

「陰口を叩くのは止めなさい。自分で自分を、悪態を吐いた対象の連中と同じ位置まで貶める行為に他ならないわ」

部屋を出て暫くしてから一つ伸びをして、吐き捨てる篠村に声が掛けられる。

「…高音に、愛衣か。なんだ聞いてやがったのかもしかして？」

篠村が振り向くと、そこには厳しい表情の高音と珍しく怒り顔の愛衣がいた。

「追いてくるなって言っただろうが」

「何故私が貴方の命令を聞かなければいけないのかしら？」

「盗み聞きとは優等生の高音さんらしくもない下世話な行為ですことで」

やれやれと首を振りながら言う篠村に、高音の額に青筋が浮かぶ。「…つくづく口の減らない男ね。先程の件にしても、黙って流していれば要らぬ反感も買わないでしょうに。気に入らない存在に喧嘩を売りたいくなる子どもの様な精神性は全く成長していないわね、貴方は」

高音の言葉に、キツイねえと篠村が苦笑する。そんな飄々とした態

度に高音が益々苛立ちを募らせ、何事かを言いかけるが……

「お兄様っ!!?」

「うおお!!?」

大音量で叫ぶ愛衣によって遮られた。

「ネギ先生の指導、頑張つて下さいね!!? あんなお兄様の苦勞も知らないで才能だなんだなんて上部の部分だけ見て、自分は何もしていないのにお兄様の努力を全否定するような連中を、ネギ先生を立派に育てあげて、鼻を明かしてやってくださいお兄様!!?」

「だからなんでお前は高音は兎も角俺にまで尊敬通り越して崇拜が入ってたんだ、そんな大した人間じゃないっつーの俺は」

「…ええ、まあそれはその通りね」

愛衣の様子に気が抜けたらしく、頭を押さえながら幾分口調を和らげ高音が言う、吐いた言葉の内容は辛辣だったが。

「五月蠅え。それから愛衣、ネギ先生をダシに連中見返してやれなんて言うもんじゃ無えよ。それじゃあの子利用してのし上がるようにしてるあいつらと同んなじだろ?」

「う……ごめんなさい、お兄様……」

愛衣は篠村の指摘に素直に謝罪する。その様子を見て高音は、愛衣を励ます様に頭を撫でながら篠村に言い放つ。

「…あの方達の功名心の強さと他者を貶める精神性は私も好んでいないわ。そしてなんだかんだで貴方の実力は短くない期間チームを組んでいるから私も認めている。確かに愛衣の言う通り、才能がどうあれ貴方の実力に対する先の評価は不当なものでしょう」

実力、の部分強調しながら高音はそう言った。

「お、お姉様……!!? 遂にお兄様を認めて下さる気になったのですね!!?」

「勘違いしないで愛衣。私が認めているのはこの男の実力だけよ。それにそれを踏まえて尚、私も貴方が単独でネギ先生に魔法の指導をする事に反対なのだから」

何やら顔を輝かせる愛衣を押しとどめ、高音は篠村の顔を見ながらきつぱりと言いつ切る。

「お、お姉様!?」

「愛衣、落ち着きなさい。篠村、貴方は確かに現時点のネギ先生よりも実力は上でしようし、高めた魔法サギタマキカの射手の技術は学び取るに値するわ。…でも、それだけよ。身につけた技術が特殊過ぎる故に指導役に向かない私が言えることでは無いけれど、貴方の知識と能力は尖りすぎている。ネギ先生は才に優れ、妙な偏りも無くオーソドックスに魔法を学んでいた癖の無い魔法使いの卵と聞いているわ、貴方はきつと知らず知らずの内に彼の方向性を歪めてしまう。貴方が意識しなくともね。…学園にも実力と良識を兼ね揃えている立派な先生は大勢居るわ。あの方達の意見じゃ無いけれど、もっと幅広く魔法を教えられる人に指導を任せるべきよ。…接していれば情も移るでしょうけれど、これ以上貴方だけが指導を行うのはネギ先生の為にもならないわ」

「……お姉様……」

高音の言葉に愛衣は何も言えなくなる。高音は単なる篠村への反抗心だけで言葉を発したので無い事は愛衣にも解ったからだ。

…まあ、正論だよな……

篠村は内心高音の言葉に賛同する。現在ネギに指導するにあたって、篠村が実践して教えられるのは魔法サギタマキカの射手関連の技術のみ。何故か図書館島で夕映とのどかが借りてきた魔道書（何故図書館に魔道書が、魔道書とは借りてこられるものなのか、と衝撃を受けた）等を用いて必要と思われる魔法を習得させようとはしているが、教える側が出来ない事を教えようとするなどナンセンスだ、一定の成果が出るのはネギがズバ抜けた才を持っているからに他ならない。

…そんなのは指導しているなんて言えないわな……

遠からぬ内に篠村がネギに教えられる事は無くなるだろう。ならば高音の言う通り、指導役を選考してネギに紹介するのが一番ネギの為になるだろう。

しかし篠村が実際に吐いた言葉は単純に指導者を辞退するものは無かった。

「高音、俺も全面的にお前の意見には賛成だ。俺が教えられる事はい



かにも狭い、英雄がどうたらと言う事情は無視しても俺と同じ様な成長している子じゃ無いよ、ネギ先生は。早めに真面な指導者を見繕うべきだろう」

「だけどな、と前置きして篠村は高音に告げる。」

「後一ヶ月と少し。その期間が過ぎるまで俺はあの子に指導を続けようと思う。だからそれまでお前も、上に物申すのは待ってくれるか？勿論それまでに指導者は探しとくつもりだからよ」

高音は黙して聞いていたが、篠村が語り終えると厳しい表情で問いを放つ。

「何故？いえ、理由は解るわ。その期間でネギ先生に、貴方の魔法サギタマギカの射手を最低限扱えるだけの技術を身に付けさせようと言うのでしょう。でもそれは、本当に今身に付けさせなければならぬ事なの？別に私は貴方に今後ネギ先生に関わりを持つなど言っている訳じゃ無いわ。ただ貴方が単独で指導を続けていてはネギ先生が偏り過ぎてしまうと私は言いたいよ。別に今から貴方の技だけを専攻して教えなくても…」

「それが違うんだよ、高音」

高音の言葉を遮り、篠村は反論する。

「ネギ先生には今、一刻も早く。身も蓋もない言い方をすれば手っ取り早く身に付けられて戦力になる……そんな力が必要なんだ。あの子は紛うこと無き天才だけど、幾らなんでもこの短時間で本物にも通用する様な力を身に付けるには、一から仕込んでいる暇は無い。元から持っているものを磨くしか無い。…身の程知らずにも限度つてものがあらあが、今学園でそれが出来るのは、俺しか居ないと思ってる」

「…篠村」

「お前の言う事は一部の反論の余地も無く正論なんだが、今回ばかりはその正論じゃまかり通らない、普通じゃ無い事情が有るんだ」

「篠村」

「納得しろって方が無理な話なのは解ってるが、これは俺の独断じゃ無くあの子を鍛えてる全員と話し合って決めた事で…」

「篠村!!?!!?」

篠村の言葉を今度は高音が遮り、その場は僅かな間静寂に包まれた。

「…色々言いたい事は有るけれど、先ず一つ答えなさい」

「…何よ？」

「それは本当にネギ先生自身が力を付けて解決しなければならぬ様な事情なの？他の、もっと実力のある人間が代行してはいけない様なこと？」

曖昧な物言いや誤魔化しは許さないと目に力を込め、高音は篠村を睨みやる。対する篠村はひよいと肩を竦め、あつさりとした様子で答える。

「いいや全く？寧ろ俺達はネギ先生が無茶な真似をしないで済む様にしたいと考えているね」

「っ!!??…なら!!?ネギ先生をわざわざそんな急場凌ぎの歪な鍛え方をする必要は全く無いでしょう!!?貴方真逆、それを承知で本当に自分の汚名返上の為にネギ先生を利用しようと言うんじや無いでしやうね!!?」

「違う」

語気を荒げる高音の言葉を篠村は短く否定する。

「言っても女のお前には解らんかもしれないが、あの子は自分の為に強くなるうとしてる。…最も、それはあの年頃の子が当たり前に持つてなきやいけないもので、だからあいつらは任せておけど。わざわざ苦勞せずとも自分達がやるってあの子に言ったんだ…でもあの子は自分の我儘だから人任せにしたくないって、自分の力で何とかしたいらしいんだなあ…まあ、本当に十歳児かって位責任感が強いとか一人で抱え込み易いというか。あんな小さいのに損な性分らしいんだよ、あの子」

やれやれと篠村は軽い調子で語るが、その眼だけは軽々に受け流せない、強い光を讃えて高音に言葉を挟ませない。

「ただ、あの子が自力で何とかしようとするのは、単なる出来た性分だけが原因じゃ無くて、意地っていうのも有ると俺は思うよ」

「…意地、ですか?お兄様」

それまで黙って話を聞いていた愛衣が聞き返す。

「ああ、男の意地、つて奴。あんななりでも男の子でさあ。教えて出来なきや落ち込んで、それでもやって出来なきや悔しがる。そして弱いとズバリ言われればちゃんとうかついた顔するんだよ。ネギ先生が頑張ってる理由は、俺達に迷惑を掛けたくないって良識だけじゃ無くて、周りに負んぶに抱つこのままで居たく無いって負けん気もあると俺は思う」

「…だから黙って見過ごせと？俺達と貴方が言うからには、あのいけ好かない連中の意見でもあるのでしょうか？本人の希望だからといって、危険に飛び込むのを黙認するなら私達をどうこう言う資格はあちら側にも無いと思うのだけれど？」

高音が辻達の事を引き合いに出して、篠村を問い詰める。が、篠村は怯まず、笑って言葉を返した。

「いや、あいつらは過保護な兄ちゃんのままさ。ネギ先生に危険が迫ったら、きつとまた身体を張ってそれを防ぐさ。…ただ少年の、強くなりたいてって想いに応えようとしてるだけなんだよ」

篠村は高音から視線を外し、己の掌を見つめてポツリと言った。

「…その気持ちは俺も、よく解る」

「……………」

「…………お兄様……………」

高音はそんな篠村を黙って見やり、愛衣は瞳を潤ませながら悲哀に満ちた声で小さく呼び掛ける。

「…愛衣、何に感極まつてるかは知らんがオーバーなんだよ一々お前は」

苦笑して己の後輩の頭を軽く小突いて、篠村は高音に改めて向き直る。

「俺に言えるのはこれで全部だ。これ以上はネギ先生のプライベートな話から何から、軽々に話せない内容のものがわんさか有るからな。…とはいえ、納得出来てはいないよな高音？」

「…そうね」

短く高音は肯定する。

「ならさ。お前も一度、顔を出してみないか、あの子と俺らの修業の場に」

「……何故？」

「百聞は一見に如かず、って言うだろ？実際に見れば納得出来る部分も新たに出てくるかもしれないぜ？それでも駄目なら直接尋ねればいいさ、別に疚しい事をしてる訳じゃ無い。……それに、あいつらはほぼ確実に俺らと一緒に働くことになるんだ。そろそろ蟠りを解いておくべきだと思うぞ」

「っ……………」

高音は痛い所を突かれた様に小さく顔を顰め、篠村を睨みながら呟く様に問い掛ける。

「……私の謝罪も兼ねて、ということ？」

「自分も熱くなり過ぎた、って後に言ってたろうが。あの空手馬鹿も反省してたんだから、いい加減水に流せよ。自分の主張を譲れとまでは言わないし言う資格も無い、ただ非がある部分はきちんと認めなければ筋が通らない。違うか？」

高音は眉根を寄せ、暫し目を瞑って何事かを呟く。その後に見開いた時には、気持ちに整理が付いたのか、静かな表情で篠村を真っ直ぐ見据えていた。

「…解ったわ、都合を着けて私も顔を出しに行く。紹介はして貰えるのかしら？」

「そりゃあな」

「ならいいわ。どちらにせよ貴方から話を聞いただけではその情報が正しいかどうかもわからない。私自ら見聞きして判断するとしてましよう」

「信用無えなあ」

「当たり前よ」

苦笑して言う篠村に高音はきっぱりと告げる。

「あんな事を仕出かした貴方を私は今でも許していないし信用してない。それだけの話よ」

その言葉に篠村は小さく顔を顰め、愛衣は咄嗟に何事かを言いかけ

てそれをぐつと堪える。

「…だったな」

「ええ、ただ私はそれで貴方を全否定する気は無いし私が全面的に正しいと言うつもりも無いわ。…貴方の言う通り、彼らに謝罪はするべきでしょうから。…：話は一応わかったわ」

後で顔を出す日時を取り決めて連絡するわね、と言い残し、高音は歩き去る。珍しく愛衣を付き添わせ様とはしなかった。

「……お兄様」

「ん？」

高音が去って暫くした後、ポツリと愛衣が篠村を呼ぶ。

「…お姉様に本当の事を話すつもりは無いんですか？」

「無いなあ」

篠村は即座に、決して強い口調では無いがきっぱりと言い切った。

「それに愛衣、あいつの認識は間違ってる訳じゃ無いぞ。…青臭いガキの頃にやらかした、聞くに耐えない黒歴史だ」

「…それでも私、お兄様とお姉様がこのまますれ違ったままなのは嫌です」

「…こればかりは、な……」

篠村は言葉を濁し、もどかし気な様子の愛衣を促して歩き出す。

……悪いな、愛衣。

「裂れつ空くう掌しょう！」

「くつ!!?」

中村が弱めに放った気弾を間一髪でネギは躲し、杖を振り上げ単発が出の早い光弾を撃ち出す。

「あらよつと」

しかし中村は光弾を喰らう寸前でひらりと身を躲す。光弾が後ろで弾けた頃には既にネギの懐まで中村は瞬動により潜り込んでいた。

「っ！デフレクシオー風 盾!!?」

「ふんっ!!?」

ネギが咄嗟に展開した風の防壁を中村の中段正拳突きが強引に打

ち破り、僅かに勢いを緩めながらも尚一人倒すのに十分な威力を持った拳がネギに迫る。

ネギは杖を地面に突き刺して両手を空け、中村の正拳を上段受けで辛くも流す。

「おっ!!?」

意外そうに声を上げる中村に構わず、ネギは両手で中村の打ち手を掴み、身体全体で地面に倒れ込む様に引き込みながら左足で中村の足を掛けて体勢を崩そうとする。

「ん〜そりゃ悪手だネギ」

しかし、中村が腰を落として払われかけた前足に重心を移すと、引つ掛けにいったネギの足が弾かれ、逆にネギがバランスを崩す。

「わっ…へぶっ!!?」

倒れ掛かる様な体勢が災いし、前につんのめるネギの頭を中村が押さえ、そのまま地面に押し潰した。

「勝負ありだ、ネギ」

「…はい」

「ネギきゅんや。体格差がある相手に対して下手に打撃勝負に持ち込まなかつたのは丸をやるが、相手が少し体術が出来たりすると、ああいう風に「崩し」に対して抵抗出来る奴は結構いる。ましてや俺は日夜投げの達人山ちゃんと組手してんだ。お前レベルの投げじゃまだ決まらねえよ」

「はい……」

どんよりした様子でネギが覇気の無い返事をする。本日は外が大雨なので、一同は屋根付きのコートを借りて修業を行っていた。天候が悪いで主に女性陣を早めに返した為、残っているのはバカレンジャーの他刹那位である。

「そう暗い顔をするなネギ。体術の鍛錬を始めて一月足らずのお前が曲がりなりににも格闘戦が出来ているのは凄まじい事だぞ」

「そうだぜ、手を抜いているとはいえ中村の正拳を一撃捌けるのはや…や…つてる奴誰もが出来る事じゃ無えぞ」

「そうだよネギ君、僕から見ても余計な力が入ってない中々見事な

痛あつ!!?」

大豪院、豪徳寺に続いて山下がフオローに入り、先程のネギの投げを再現する様に身体を落とした瞬間悲鳴を上げてぼったり倒れる。

「や、山下さん大丈夫ですか!?」

「おいおい生きてつかー山ちゃん?」

「だ…大丈夫。外されかけた肩と膝が力込めて痛んだだけだから…！」

ネギと中村の声に、山下は地面から顔を上げ、引きつった顔で笑いつつ答える。

「大丈夫とは言わないだろそれは」

溜息混じりに辻がツツコみ、山下の手を取って立ち上がらせる。

「ありがと。まあ覚悟はしてたけどエヴァさんの指導がキツくてね、オール実戦形式の曲げて捻じって投げて極めてへし折って、の連続だよ。受け身も出来てない奴が習ったら最初の一発で死ぬね、多分。少しでも気を抜くとグシャリかボキリだもん、もう片手で数えられない位には骨が折れたねえ」

「物騒な…」

「やっぱあのババアに指導役頼まないで正解だったかもな…」

鍛えているのか処刑しているのかわからない山下の凄絶な稽古内容に引いた様子で大豪院と豪徳寺が囁き合う。どうでもいいが傍目には暑苦しい光景だ。

「皆さんの普段の手合わせも、それ程内容に差が無い気がしますけど…」

苦笑しながら刹那が言う。ほぼ全力で闘り合って血塗れになりながら欠点を喧嘩腰で言い合うバカレンジャーの手合わせは、刹那からすれば先程山下が語ったそれと大差無い。

「…いや、かつての俺達の手合わせはもつと容赦が無かったぞ」

辻が当時の地獄を思い出してか、いささか顔を青ざめながら刹那に返す。

「だわなあ、闘り合うっつーか殺り合うって感じだったからなあれ」

「はははは今だから言うが本気で殺す気でやってたぞ中学の頃の俺

は」

「ははははは気にしないでよ豪徳寺。僕なんかも、別に再起不能にしたっていいよな生きてても何の役にも立たないんだからこいつら、とか思ってたから」

「他人に喧嘩を売ってくるようなクズは、もし死んでしまったとしてもむしろ社会貢献だろうと考えて進んで殺しに行っていた俺が言えた台詞では無いが、当時の貴様ら荒み過ぎだろう」

「…これでも大人になったんだよなあ、お前ら…」

キレ易い十代所ではない犯罪者予備軍地味たことを言い合っているバカレンジャーを見て辻がしみじみと呟く。

「…因みに辻部長は当時ほどのようなことを考えて、手合わせに挑んでいましたか？」

「…俺だけ武器を持っていて、警察沙汰になったりすると不利そうだから、どうやったらぶち殺してから正当防衛、もしくは過剰防衛を扱いにできるだろうかと」

恐る恐るといった様子で尋ねる刹那に対して、少し考えた後辻はそう答えた。

「わははは寧ろお前が一番タチが悪いじゃねえかはじめ一ちゃん！」

「チンピラ時代でもその後の身の振り方とか細々考えてる辺り、辻らしいよねえ」

「いや、んな感じで軽く流していい話じゃ無えと思うんですけど…」

笑いながら言う中村と山下にカモが冷や汗を流しながらツッコむ。

「え、ええと皆さん！今みたいに仲良くなったのは何かきっかけがあっただんですか？」

何やら不穏な空気が漂い始めた会話の流れを変えるべく、ネギがまだしもも平和そうな方向へ話題を逸らす。

「仲良く？ふつ馬鹿言っちゃいけねえよネギきゅん。この頭脳明晰容姿端麗、完全無欠の王者中村 達也様とそこの犯罪者予備軍共を同じ次元で語って貰あべしっ？？」

額にかかる髪をキザな仕草で掻き上げつつ語る中村に最後まで言わずにバカレンジャー残り四人の拳と蹴りが飛ぶ。顎と鳩尾と腎



臓と股間に同時に打撃を喰らった中村は地面に崩れ落ちて痙攣し始めるが、刹那すらそれを無視して話を続ける。

「まあ、今の喧嘩仲間みたいな感じには時間掛けてゆっくりなっていっただんだが、きっかけはあったな、杜崎先生だ」

「だねえ。中学三年の春に突然赴任して来たと思ったら高畑先生に続く二人目の災害と化して…」

「殺し合ってる俺らを容赦無く纏めて潰してその上罰を与えやがる無敵のストッパーだったな、あの頃は」

「殺し合いをする人間を半殺しにしていくのだから何がしたいのかよくわからなかったな、あの暴力教師は」

物騒極まりない過去を懐かしそうに思い返すバカレンジャーに若干引きながらもネギが先を促す。

「…あの、それで……」

「ああ、悪いネギ君。まあそんな事が何度も続いて決着つける所じやなくなってた俺達は、相談の末まず杜崎先生を殺そうという事になってな」

「結託してあのゴリラ教師に挑んだんだがこれが勝てねえ勝てねえ。それが悔しくて五人で打倒杜崎の為に協力して腕磨こうぜって話になった」

「後はいがみ合いながらも段々ウマが合ってきてね。それで全員腕が上がって来たら、今度は当時の麻帆良四天王を始めとする麻帆良武道系の化け物共に目を付けられてさ。毎日毎日杜崎を何とか撃退して部長クラス副部長クラスを返り討ちにするっていう何処かの世紀末世界みたいな生活してたよ。いや中学三年から高校一年位までが一番大変だったね」

「間違い無く単独で居れば誰かに潰される環境だったから嫌でも一緒に居ることになる、四六時中顔を合わせていれば仲は自然と深まるものだ。四天王全てを打ち倒し、二、三人の犠牲で杜崎教諭を追い返せる様になった頃には自然と丸くなっていたよ、俺達は」

人に歴史ありだな、と大豪院は締めくくる。

「…それは人格が成長して丸くなったのでは無く、戦いに疲れて精神

が磨耗しただけでは無いですか?」

刹那が引きつった顔でツツコミを入れた。

「言うなよ桜咲、薄々思ってたことを」

「どんよりした顔で辻が抗議する。」

「まあ一ちゃんはじめが丸くなったのはせつたんと出会って無自覚ラブコメ  
イチャイチャ空間形成しまくったのも一因だろうけどぶひゅ?」

「誰が復活していいと言ったカス村」

潰れた蛙の様に地面に倒れて沈黙していた所をいきなり上半身だけ跳ね起こし、逆エクソシストの様な体勢でのたまう中村を容赦無く踏み潰す辻。

「ぬむう……まあ碌でもない日々だったがよ、あの頃の殺し合いとゴリラとの遭遇と世紀末学園モードが無けりや俺らはきつとあのロリババアと殺し合った時に死んでたからな。そういう意味では強くしてくれた災難共に感謝だぜ」

仁王に踏みつけられた天邪鬼の様な体勢になりながらも、気にせず中村は語る。この男にしては真面目な話をしているのだが、体勢の所為で只管にシニールであるのがらしいと言えはらしいのだろう。

「……まあ確かにな」

「修羅場を潜った分強くなったなら本望だよねえほくら武道家は」

「限度はあるけどな、京都のあれみたいによ」

確かになあ、と辻は豪徳寺の言葉に苦笑する。あんな生きるか死ぬかの大事件は正直生涯で二度と体験したく無いものだ。

『本当にそうかな、主?』

「……つ?」

辻の心臓が跳ね上がる。生じた動揺を押し殺しながら、唐突に思念を飛ばして来たフツノミタマに辻は小声で話し掛ける。

「……どうしたフツ、急に。……何が言いたい?」

『くくくく、いや何でも無いさ主。忘れてくれ、問うまでも無いことだ』

しかしフツノミタマは笑いながら返答をボカす。訳を語るつもりは無いらしい。

……厄介だなあ、この刀は……

辻は溜息を吐く。物凄く頼りになるのだが思考が物騒な方面に傾き過ぎている。その内フツノミタマの為だけに要らぬ血を流す羽目にならない様、辻は切に祈った。

「…やっぱり皆さんも沢山努力をして、沢山闘ったから強くなれたんですよね……」

ネギが真剣な「ー」というよりは何処か思い詰めた表情で誰にとも無く呟いた。

その言葉に辻達は顔を見合わせ、代表して辻がネギに告げる。

「ネギ君、まさかやらないとは思うが、俺達を見習って学園の連中に誰彼構わず喧嘩を売るのはやめておけ。中には冗談の通じない奴もいるから、リアルに殺されるぞ」

「え？」

ネギは一瞬言われた意味が解らずポカンしてから慌てて両手を振り否定する。

「ぼ、僕そんなことしませんよ!!? 辻さん達でも危ないなら今の僕なんか挑んだら粉々にされちゃいますって!!?」

「兄貴、魔王軍か何かに挑むんじや無えんだから……」

「…強ち話を聞いていると大差が無い様な気がしてきますが……」

「……何処の宇津帆島に立つトンデモ学園だよ、此処は……」

カモと刹那が煤けた空気を纏って会話をする。刹那は兎も角カモはそれなりに世の理不尽というものを知っている筈だが、麻帆良の非常識っぷりには多少の人生経験など免疫になりはしないらしい。

「まあネギよ。何を考えているのかは大体解る。傍目に順調に見えるが、お前は早くも自分の強さに伸び悩みを感じ始めている。違うか？」

大豪院の言葉にハッと顔を上げるネギ。

「何で……?」

「何故解るか? 恐らく強くなる為に誰もが体験する過程プロセスだからだろ  
うな」

大豪院は語る。

「個人差はあれど、鍛錬を続けていくと伸び悩む時期がある。努力しているのに成果が現れない苦しい時期だ。：お前の上達は頭抜けて早い。なまじ教わった事が直ぐに身に付く分、師事する対象が多い分。今のお前は単に技術を雑多に取り込むだけでそれを己が振るう技として活かせていない状態にある。武術の継承は模倣から始まる、というが、ネギよ。お前は早くも次の段階に移らなければいけないらしい」

「：僕は、どうすればいいんでしょうか？」

大豪院が滔々と語る話を噛み砕きながら聞いていたネギは、静かに問うた。

「お前がまずやるべき事は、以前出した宿題の答えを出すことだな」

「：何故強くなりたいか、そして、どんな風に強くなりたいか、ですか……」

「そうだ。今の時点での答えでいい、お前はまだまだ心身共に成長するからな。現時点で人生の方向性を決定する事は無い。：強くなる事に直接関係が無いと思うかもしれないが、実の所は重要だ。到達点が決まらず、何故走っているのかも解らなければモチベーションは下がるし、迷走するに決まっているのだから」

だからネギ、と大豪院は屈み込んでネギと目線の高さを合わせ、告げる。

「何故お前は此処まで頑張る？それをゆっくり考えて見ろ」

「でえじよぶかねえ、あのガキは」

鍛錬が終わり、土砂降りの雨の中を疾走しながら中村が溢す。

「あの歳で理解しろという方が無理だろうよ。俺も開き直って己の道を進める様になるまでに時間が掛かったものだ」

隣を走る大豪院がそう返す。山下は買い物、辻は刹那を女子寮まで送迎、豪徳寺は飯を食ってから帰るとの事で男子寮に直帰しているのはこの二人だけである。

「所詮教えられた通りにしか教えられはせん。本人からすればたまっ

たもので無いだろうが、停滞するならするで焦らずじっくり伸ばしてやるしか無かろう?」

「まっ、そうなんだけだよ…おっしや着いた着いた、いやー濡れ濡れだぜビデえ雨だな」

中村は悪態を吐きながら男子寮の階段を上がり、大豪院もそれに続く。

「ではな馬鹿。一応身体をきちんと拭けよ、風邪を…馬鹿は引かんな。気にするな」

「ぶち殺すぞタラコ唇。じゃあ…むむっ!!?」

大豪院の言葉に中指を立てて返しつつ部屋に入ろうとした中村が、突然奇妙な唸り声を上げつつ周りを見渡し何かを探し始める。

「…どうした脳足らず、遂に狂ったか?」

「黙ってるソース顔。美少女…いや、美少女の気配か?がするんだよ、なんか」

「どんな気配だ。ここは男子寮だぞ、居る訳が無かろう」

「いや、俺の美人センサーに間違いは無え…そこだあつ!!?」

中村は唐突に飛び上がり、男子寮の廊下にある換気口に飛び付くとヘッドバットで金蓋を跳ね飛ばし、中に首を突っ込んで覗き見る。

「……………誰も居ねえ」

「当たり前だ阿呆」

愕然とした中村の声に呆れて大豪院がツッコむ。

「おかしい…いや今は気配も消えているし俺としたことが本当に誤認を…………?」

「気が済んだならとつと降りろ、また取っ捕まるぞ。ではな」

大豪院は言い捨てて部屋に入り、中村も首を傾げながら部屋に戻っていった。

「…びつくりしましたー…よくわかりませんが、只者じゃ無いのは本当みたいデスー」

「はははそう来なくてはね。やりがいのある仕事で嬉しいよ。では、最重要ターゲットの無力化に掛かるとしでしょうか」

新たな災厄<sup>てき</sup>が、忍び寄る。

「…何やってんだ、お前ら。確かネギの奴のクラスだろう？」

「…あら、豪徳寺先輩、でよろしかったかしら？」

「あああの！何だか犬が倒れてて…!!？」

## 11話 犬と少女と老人の来訪 即ち千客万来

その男について千鶴は詳しく何かを知っている訳では無かった。ルームメイトの親しい友人の親友（頑なに認めようとはしないが）のその又知り合い、である事を知っている程度。正直な話、会話所か挨拶をした事さえひよつとしたら無かったかもしれない、という程薄い関係である。

それでも千鶴がその男——豪徳寺 薫を知っていたのは、単に豪徳寺が此処、麻帆良の地では有名人だからだ。

バカレンジャーと呼ばれる五人組にして、超人所か人外地味た逸般人だらけのこの麻帆良で、腕っ節において小中高大の学生全ての間で最強を誇るといふ武道家集団の一員。その中でも外見のインパクトからかなりの知名度を誇るのが豪徳寺である。

ただ、千鶴は正直豪徳寺に対して、というよりバカレンジャー全員に対してあまりいい感情を抱いていなかった。と、いつてもこれは千鶴だけで無く真面な感性を持った人間ならば誰でも同じ感情を抱くだろう。

何せ授業のエスケープなど日常茶飯事、日夜暴力行為を繰り広げ拳句の果てに覗きをやらかす（やっているのは中村だけだが悲しいかな事情を知らない人間とは犯罪者とするんでいるだけで同類と見なす）。暴力沙汰を好まない一般的女性ならば特に好印象を抱き様が無いイメージがバカレンジャーには満載なのである。

寧ろ千鶴は3-A女子の中でも精神的に大人びているからか、あらあら高校生にもなってガキ大将みたいに元気の良い人達ねえ、と苦笑混じりに見やる様な、一般的女性の中ではかなり好意的な部類に入る。

それでも、千鶴が雨の中豪徳寺と繰り広げた会話は、そんな彼女をして彼への印象を大きく変えるものだった。

「野良なのか？そいつは…」

「首輪も着けていないので、恐らくは……」

毛並みの黒い子犬を抱き上げながら千鶴が豪徳寺の質問に答える。豪徳寺は側で傘を千鶴に差し掛けていている夏美に視線を移すが、夏美は目線が合った瞬間に小さく身体を跳ねさせ、落ち着かなさ気にそつと顔を逸らしつつそわそわと体を動かす。

：そうだった、最近俺と話しても物怖じしない根性のある女子としか接して無えから忘れてたが、基本俺のような男らし過ぎる漢は、ケツの青い女共には怖がられてんだっただけ……

豪徳寺は失敗したな、と内心臍を噛む。真の漢の魅力とは酸いも甘いも知り尽くしたオトナの女にしか解り得ないものであり、故にこそ他の変態だったりまだまだお子ちゃまであったりするバカレンジャーの面々と違い、自分は恐怖の対象として女に避けられるのだ、と豪徳寺は考えていた。：中村と違い特に女にモテたいとは考えていない豪徳寺ではあるが、矢張り彼もバカレンジャーの名に偽りは無いらしい。

ともあれ豪徳寺はこれ以上夏美を怖がらせない様に視線を外し、自分に対してそれ程怯えていない千鶴を対象に話を進める。

「飼い犬でも無い単なる野犬を行き倒れているからと心配するその心根は素晴らしいことだ、根性あるじゃねえかよ……那波だったか？」

「ふふ、ありがとうございます。はい、那波 千鶴と申しますわ。こちらには夏美ちゃん」

「む、村上 夏美です……」

千鶴に促され、ぎこちなく夏美が挨拶する。

「ごめんなさいね先輩。夏美ちゃんちよつと人見知りの気があるんです。：豪徳寺先輩でよろしかったでしょうか？」

「ああそうだ。：取り敢えずお前ら、その犬は俺が責任持つて預かったから寮に返りな。凄え雨だから解り難いがもう陽が落ちるぞ」

豪徳寺是那波に抱えられた子犬を見つつそう告げた。

「え……でも先輩、見つけたの私達ですし……」

「つつてもその犬、見た所怪我してるんだろ？お前らが獣医の知り合いで居るなら話は早えが、そうじゃ無いなら遠慮しないで俺に任せとけ、日頃馬鹿に振り回されてるお陰でこちとら顔が広いからな。気



になるなら後でどうなったか教えてやるからよ」

意外な提案に驚きながらも遠慮を見せる夏美に、妙な気を回させない為に豪徳寺は話を畳み掛ける。豪徳寺は女に興味は無いが、女子供は庇護すべき対象として気にはかける。それが漢としての豪徳寺の信念だった。

「…よろしいのですか？碌に会話をしたことも無い私達の事情でそこまで御手を煩わせてしまって…」

「気にすんな、対した手間じゃ無えよ。それより犬コロ構ってずぶ濡れじゃねえかお前。早く帰って風呂にでも入ってろ、女が身体冷やすもんじゃ無え。その犬は責任持って面倒見てやるから」

ほら、寄越せ。と豪徳寺は千鶴に対して両手を差し伸べる。千鶴は暫しその手を見つめ、次いで豪徳寺の眼をじっと見つめ返した。

「？、どうしたよ？」

「いえ……」

千鶴は小さく笑い、歩み寄って豪徳寺にそつと子犬を預けた。

「よろしく願います、豪徳寺先輩」

「応、任されたぜ」

微笑みながら言う千鶴に笑い返しながら豪徳寺はしかと請け負う。

「よし、じゃあお前らはさっさと帰んな。危ねえから気をつけて…」

「あ、すみません先輩、ちよつと…」

子犬を取り出した大きめの手拭いで手早く包み、長ランの懐に入れて走り去ろうとした豪徳寺は千鶴に呼び止められる。

「ん？」

「ちづ姉、どうしたの？」

怪訝そうに振り返る豪徳寺。夏美も不思議そうに千鶴へ問い掛ける。

「いえ、先輩の連絡先を教えて頂くこうと思ひまして。後でその子の容体を教えて頂けるのでしょうか？」

「ああ、確かにな」

豪徳寺は納得し、懐から筆記用具を取り出すとサラサラと番号を書き付け、千切って千鶴に手渡す。

「落ち着いたら連絡入れな。先ず体の手入れをしろよ、じゃあな」

「はい、ありがとうございます」

「先輩、ありがとうございます！」

頭を下げる千鶴と夏美に軽く手を振り、豪徳寺は高速で走り去った。

「…うふふ、何だか思っていたより優しい人だったわねえ夏美？」

「そうだねー。なんかもっと怖い感じの人だと思ってたんだけど…だからちづ姉もあの子を任せたの？」

「ええ、正直子犬をダシにしてどうこう、なんて考えてたらお断りしたけれど…失礼だけど笑っちゃったわ、全く下心なんて感じない眼をしてたもの」

「だよねー、連絡先をこつちが聞いているのにちづ姉の番号は聞こうともしなかったもん」

「そうね…じゃあ帰りましょう夏美。折角ご好意を受けたのだから、話し込んで風邪を引いたら本末転倒よ」

「そうだね」

「…じゃ、居所が割れているからお仕事始めちゃうわね伯爵？」

くねくねと身体を動かしつつ、長身瘦躯の派手な化粧とドレス姿の男は、黒の外套を纏う老人に対して宣言した。

「うむ、よろしく頼むよセルウア君。神鳴流の剣士は兎も角、フツノミタマを持つ彼は今回の最も警戒すべき対象だ。くれぐれも油断せずに事に当たってくれたまえ」

黒衣の老人は真剣な声でドレスの男？に對し念を押す。

「だくいじよぶよ伯爵！あたしお仕事に対しては真面目な女だもの!!？それよりニテンス？貴方こそ真つ正面から当たれないからって手を抜いたりしないで頂戴ね？」

「…愚問だな」

答えたのは二m近い筋骨隆々の鋭い目付きの男。両の瞳は剣呑な光を湛え淡々と言葉を返す。

「仕事で喚ばれた以上契約者の意に俺は殉ずるのみだ。伯爵よ、小僧

の居所を探りに行くのでしょうか」

「うむ」

男の言葉に黒衣の老人は頷き、足元の半透明に透けている三人の幼女に告げる。

「では君達は手筈通りに動いてくれたまえ。ハイ・デイルイトウォーカーに悟られぬ様にね」

「りよーかいだ、伯爵」

「ステルス完璧テスラ」

「気配の無い誘拐犯…ふふ、犯罪チック」

「で、どうなんだよ犬飼。その犬コロの具合は？」

「やれやれ、いきなり押しかけてきいて態度がでかいねえ豪徳寺君。こつちにも色々都合というものがあるんだよ？」

部屋の隅に座り込み、腕を組んで尋ねる豪徳寺に闘獣部部长、犬飼碎牙は溜息を吐いて応じる。

個々は麻帆良男子高等部の男子寮の一室、豪徳寺の部屋の隣室、犬飼の部屋である。那波から子犬を受け取った豪徳寺はその足で隣室の、下手をすればそこらの獣医よりも怪我をした動物に詳しい闘獣部の長を尋ね、すったもんだの末子犬の治療に漕ぎ着けていた。

「ちゃんと治療代は払うからよ。で、どうなんだ？」

「はあ……取り敢えず命に別条は無いよ、各部の外傷も治療済みだ。栄養失調で少し衰弱気味だから栄養剤も打ったし、大丈夫だろうさ」

その言葉に豪徳寺はそうか…と呟き、壁に寄り掛かって息を吐く。「なんだいなんだい？やけにこの犬が大事な様じゃないか。遂に豪徳寺君も犬の魅力に目覚めたかい？獅子崎や他の部員は直ぐ安直に強そうなネコ科猛獣類ばかり育てるたがるから私は仲間が少ないんだ、どうだい今ならミオスタチンレベルを下げて筋力増強中のシエパードの子犬の育成主が決まって無いけど？」

「誰がやるか。つうか動物虐待にならねえのかその遺伝子レベルで弄った改良は？」

豪徳寺はうそ寒気にツツコむ。麻帆良には様々な意味で突き抜け

た変態が居るが中でも化学、生物を扱う連中は総じてマッドな雰囲気  
が漂う。

「失礼な事を言うなあ、私はきちんと闘争を求める犬だけを育て上げ  
ているとも。その中で一番育成が上手く行ったのが其処にいるサー  
ベラスさ。現に彼は僕にとても良く懐いている、妙な言い掛かりは止  
めてほしいね」

少々憤慨した様子で犬飼は部屋の隅で寝そべりながらも豪徳寺を  
油断無く見つめる、子牛程もありそうなドーベルマンを手で指し示  
す。恐ろしい事に、明らかに異常なサイズだというのに体型のバラ  
ンスが一切崩れていない。ド○えもんのビツ○ライトで大きくしまし  
たと言われれば納得してしまいそうな、不自然な自然さである。

「…子犬が餌にならねえよな?」

「安心したまえ、犬は共食いをしないし餌はしつかり与えてあるよ。  
余り失礼な事を言っていると君の方がサーベラスのオヤツになるぞ、  
彼は誇り高いんだ」

言われて豪徳寺がサーベラスを見ると先程よりも僅かに目が細め  
られている。

「…悪かった」

豪徳寺は素直に頭を下げる。迫力に臆した訳では無く、人語を理解  
出来る程頭がいいなら犬コロ扱いは失礼だと思っただからである。  
サーベラスは軽く顎を引き、頷く様な仕草をすると軽く浮かせていた  
身体を再びシートに沈める。

「ははは、ありがとう豪徳寺君。サーベラスは僕の相棒だからね、きち  
んと接してくれて嬉しいよ」

「なーに、中村よかよっぽど頭が良さそうだからな。あいつ以上の扱  
いを心掛けるのは当然……ん?」

言葉の途中で懐の携帯が鳴り響き、豪徳寺は犬飼に一礼してから電  
話に出る。

「はい、もしもし…」

「不用心ですよ豪徳寺先輩、知らない番号から掛かってるんですから

…」

千鶴はクスクスと笑いながら電話越しの豪徳寺に言う。

『お前か那波。不用心も何も番号知らないお前から掛かってくるかもしれないから出たんだろうがよ』

豪徳寺の不満気な声が千鶴に届く。

「ふふ、そうでしたわね、申し訳ありません。…あの、あの子の容体は如何でしょうか？」

千鶴は微笑みながらもからかう様な物言いをしたことを謝罪する、そして尋ねるのは子犬の容体だ。

『ああ、大丈夫だ。知り合いの獣医：では無いが獣医並みに詳しい知識を持つてるやつがしつかり専門的な治療をした。今は落ち着いて寝てんよ』

豪徳寺の言葉に千鶴は安堵の息を吐く。たかが行きずりに拾った子犬、と言ってしまったえばそれまでだが、関わった以上千鶴は中途半端な真似をしたくなかった。

「ありがとうございます、豪徳寺先輩。すっかりお世話になってしまいましたね、この御礼は必ず…」

『いいよ、俺も知り合いに丸投げしただけだしな。こいつは元氣になつたら適当な引き取り手を探しとくから後は任せとけ』

「いえ、そこまでお世話になる訳には…」

『うおおおおお!!?? バウツ!!?? グルルルウ……!!??』

千鶴がそこまで言いかけた時、電話越しに豪徳寺では無い男性の悲鳴が小さく響き、また猛獣の様な唸り声が千鶴の耳に届いた。

「つ!!?? 豪徳寺先輩、何かありましたか!!??」

千鶴が少し慌てて尋ねるも、何やら豪徳寺の方は混乱した騒ぎになつている様で断片的な会話と犬の唸り声しか千鶴の耳には入ってこない。尋常でない千鶴が様子を見咎めて同室の夏美が何事かと声を掛けてくるのを制して尚も千鶴が呼び掛けること数回、ようやく豪徳寺が通話に戻った。

『……ああ、すまん那波。ちよつと予想外な事態があつてな』

豪徳寺の声は電話越しにも力が無く、相当な何かが起こつたらしい

と千鶴に予感させた。

「どうされたんですか？真逆あの子の容体が急変したとか……」

それならば電話越しに聞こえた犬の唸り声も辻褄が合う。

『…いや、元気は元気そうなんだ、よく寝てるしな……』

「でも、明らかに何かありましたよね。なら一体どうされたんです？」

千鶴の問いに豪徳寺はあー…と言葉を濁してから、

『いや、何て説明したら…んぐ、犬が犬じゃ無くなった…いや……』

「は？」

意味不明な豪徳寺の言葉に千鶴はキョトン、とする。

『!!?、ああいや何でもない!!? 兎に角犬…犬は元気だ！何も心配は  
いらぬ。引き取り先が決まったら連絡するからな、じゃあ!』

「あつ、せんぱ……」

ブツリと電話が切れる。千鶴は豪徳寺の番号に掛け直したが、繋がらない。どうやら電源を切った様だ。

「…ち、ちづ姉、一体どうしたの？」

声を掛けてくる夏美に千鶴はゆっくりと携帯電話を降ろしつつ振り向く。

「夏美、ちよつと私用事が出来ちゃったから出掛けて来るわね。あやかが帰ってきたら上手く言っておいて頂戴」

「ええっ!?!?ちづ姉、もう陽は暮れてるし、こんな雨だよ危ないって!!」

「大丈夫よ、そんなに遠い所に行かないから」

言いつつ千鶴は手早く身支度を整え始める。

「いやでもちづ姉……」

「夏美?」

にっこり笑いながら振り返った千鶴の、えも知れぬ迫力の様なものに夏美は気圧される。歳などを聞かれて怒った時などと違い、妙なプレッシャー  
重 圧は感じないのに不思議と抗議の声が夏美は発せられなかった。

「大丈夫だから、ね?」

「は、はい……」

夏美は頷くことしか出来なかった。

「…どうなつてんだ……」

「私が聞きたいよ……」

豪徳寺と犬飼は頭を突き合わせ、下に寝ている十歳過ぎの犬耳と尻尾の生えた少年を見下ろして同時に溜息を吐く。

「遺伝子工学部の連中が遂に犬から人に変メタモルフオーゼ身出来る新種生物でも造つたのかな？」

「幾らあのマッド共でもそこまで行つてねえだろ。ついでに言えば俺こいつに何と無く見覚えあんだよな……」

犬飼の推測を否定して、豪徳寺が首を傾げる。

…言うまでも無くこの少年は犬上 小太郎であるが、豪徳寺が顔を殆ど覚えていないのは、京都の一件でまともに顔を合わせて会話をしたのが直接対峙した辻とネギ、そして千草の伝言を伝えた刹那位しか居ないのが原因である。事件が終わつた後に小太郎を回収したのも関西呪術協会の者である為、豪徳寺は小太郎を木乃香が攫われる時に遠目に一度きりしか見ていない。その後はそんな奴がいた、と言うことを聞かされただけであつた為、この場で小太郎を見て豪徳寺が誰だかわからなかつたのも無理はないと言える。

「豪徳寺君達は本当に顔が広いなあ。…時にこの子は犬なのか人なのかどつちなんだろうね？…もし人に近い構造をしてるなら、人に対して使つたら不味い成分の薬を使つちやつたんだけど……」

「そういうことは早く言えよ。どうすんだマジで急変したら……」

豪徳寺の言葉に犬飼は一つ息を吐き、聴診器を取り出しながら言った。

「…再検査だね」

「…で？」

「特に異常は無いね。熱があるみたいで体温は四十度を超えてるけど……」

「ヤバイじゃねえかよ」

人間ならば死ぬ寸前の高熱に豪徳寺がツッコむ。

「それがそうとも言えないんだよねえ。この子は明らかに犬じゃ無い

けど純粹に人でも無さそうだし。もし犬と多少似通った構造してるなら、犬の平均的な体温は三十八度手前から三十九度位はあるし。まあどちらにしても熱は有るんだけどねえ……高熱の割に発汗量が少ないし、真逆本当に人犬……この子が伝説に聞く人<sup>ヴェアウオルフ</sup>狼だともいうのか……？」

「解ったから考察はそんな位にしとけ」

豪徳寺は段々とマズい方向へ向いていく犬飼の思考を遮る。

……そうだ、いきなりだったんで混乱したがどう考えてもこれは魔法使いかそつちの領分だろ……

何処かで見覚えがあるのもその所為かもしれない、と豪徳寺は考える。

「なんにしる素性がはつきりしないなら後で広域指導員か何かに連絡して引き取って貰えばいいだろ」

「……ま、そうか」

犬飼は未だ小太郎を警戒して唸るサーベラスの背中を撫でて落ち着かせつつ納得する。

「じゃあとりあえずこいつを……ん？」

「どうした、豪徳寺君？」

何事かを言いかけた豪徳寺が疑問符を上げて部屋の外を向くのを見て、犬飼が怪訝そうに尋ねる。

「いや、チャイムの音がしてな。しかも方向からして俺の部屋みたいなんだよ」

「ふうん？……ああ、本当だ」

犬飼が耳を澄ませていると、部屋の中まで微かに響いてきた二回目のチャイムの音に頷く。

「こんな時間に客か？中村辺りの訳分からん襲撃じゃ無えだろうな……？」

「彼ならそもそもチャイムを鳴らさないとと思うけど……気になるなら見てくればいいじゃないか」

犬飼の言葉に暫しして豪徳寺が頷く。

「……だな、行ってくる」



「はいはい」

部屋を出た豪徳寺に構わず犬飼はさて先生方に突き出すにしても裸じゃ不味いよなあ…と眩きながら衣装ダンスを漁り始める。が…「?、何を騒いでるのかねえ豪徳寺君は?」

男子寮の部屋壁はチャイムが微かに聞こえてきたことから分かる通り、それほど防音性にしつかりした作りはしていないが、部屋の奥の犬飼にはつきり聞こえる以上かなりの音量で豪徳寺は話している事になる。

「誰が来たのやら…ん、戻ってきたか」

ガチャリと自らの部屋扉が開く音に犬飼は入り口に居るであろう豪徳寺に向かって声を掛ける。

「おかえり、誰だった?」

「邪魔するぜ…とんだ来客だったよ」

「失礼致します、犬飼先輩」

「……………ん?」

豪徳寺の野太い声の後に聞こえてきた鈴を転がす様な女性の声に犬飼が一白遅れて疑問の声を上げた時、既に二人は部屋に入って来ていた。

「…まあ、なんだ。悪いな勝手に入れて」

「お初に御目に掛かります、那波 千鶴と申します。……………まあ、ではその子が?」

いささか気まずそうに頭を下げる豪徳寺と丁寧に挨拶をした後小太郎の姿を見て驚きの声を上げる千鶴が其処にいた。

「……………どういふこと?」

「…はあく豪徳寺君にも春が来たか……………」

千鶴がここに至る迄の顛末を簡単に聞き、また千鶴に拾った子犬が男の子に変身した旨を伝えるだけ伝えた犬飼は、感心した様にサーベラスを撫でながら唸る。

「訳のわからねえことを言ってるじゃ無え、阿呆」

「あらあら、そういう風に見られてしまうのかしら?」

不機嫌そうに悪態を吐く豪徳寺とにこにこ笑いながら受け流す千

鶴。

「いや、まあそれはさて置くとして、那波さん。到底信じられないとは思うけれども、間違い無く君が拾った子犬はその子だ」

犬飼が指差すのはダボダボのスウェットを着せられ、今だ目を覚まさない小太郎である。

「…何を馬鹿げたことを、と初めは思いましたけれど……」

千鶴は困惑気味に笑いながらも床に寝る小太郎と仏頂面の豪徳寺を見比べ、やがて一つ頷き言葉を紡ぐ。

「…まあ嘘を吐くならもう少し上手い嘘を吐きますわよね、お二人共……」

「…信じんのか？」

疑わし気に豪徳寺が返す。

「自分で説明しといて何だが相当に荒唐無稽な話だぞ？」

「あらあら、騙そうとする方はその様な事は言わないのですよ、豪徳寺先輩？」

笑顔の反論に豪徳寺がぬう、と唸る。

「それに、仮に私を騙す事が目的だったとして、余りにやり方が不確実過ぎますもの。私が此処まほらに来たのも突発的に私が思い立ったからですし…それに、」

笑みを苦笑に変え、サーベラスを見ながら千鶴は告げる。

「そんな大きな犬を育てられてしまうのが此処まほらですもの。信じ難い話でも、あり得ないことでは無い、なんて思えてしまいますわ」

その言葉に二人は沈黙し、顔を突き合わせて囁き合う。

「…出たぞ、謎の説得力を持つ台詞、『麻帆良だからしょうがない』」

「まあ実際反論の余地はないけどね。工学部の連中巨大ロボとか造ってるし、とつくに麻帆良は空ファンタジー想を半ば実現させてるよ…っていうか信じて貰いたく無い訳じゃ無いんだから、納得してくれるならいいじゃない」

「…まあなあ……」

複雑な気持ちで曖昧に答える豪徳寺。現実感が無いから目の前の事実をただ受け止めているだけ、にしても動じなさすぎだとは思う

が、別にそれが悪いことである訳でも無い。

「…まあ、信じてくれたならいい。何にしろこいつの事情が解らないのは同じだから、回復を待つて学園側に対処して貰う事になると思うが、異存は無いな？」

豪徳寺の確認に千鶴は頷く。

「はい、子犬の里親探しならまだしも明らかに私の手に余る事態ですから。…でも一応、目が覚めて元気になったら、私にも教えていただけますか？」

「解った、約束しよう」

「よし、一先ず一件落着だねえ」

豪徳寺が了承し、犬飼がホッと一息吐く。

「そうだな。…さて、話が一段落した所で那波、お前には言いたい事がある」

豪徳寺は千鶴に向き直り、目を合わせながら低い声を出す。

「はい？」

「まず電話での対応がしつかり出来ていなかったからお前はこんな所まで足を運んだんだろ、それについては俺に非があった、すまん」

豪徳寺は頭を下げ、再び千鶴を見て話し出す。

「だけどな、こんな時間に一人、歳上の男を尋ねてくるなんざお前さんには危機意識つてもんが足りねえぞ。あまつさえ男の部屋に無防備に上がり込みやがって。お前は事態の流れからして俺達が邪な企みでお前を連れ込んだんじゃ無いと当たりを付けてたみたいだが、物事に絶対なんてもんは無い。あり得ん過程だがもし俺が途中でその気になつたらお前みたいな弱い女に抵抗の術なんて無えんだぞ？」

豪徳寺は厳しい口調で千鶴を諫める。千鶴は黙って豪徳寺の言葉を聞いていたが、一旦豪徳寺が言葉を切ったタイミングで笑みを浮かべながら言葉を返す。

「…ありがとうございます、豪徳寺先輩。確かに女子として軽率な行動でした。でも、私は先輩に子犬を託した時に、何と無く先輩を見て思ったんです。この人はそういう下心を持って接して来ていない人だって。私、これでも家柄が少々特殊なものですから、人を見る目に

は自信が有るんです。…豪徳寺先輩の言動を見聞きして、信用出来ると思つたからお尋ねしたんです、私」

……おやおや………

微笑みながら告げる千鶴に、犬飼は内心目を見張る。冗談で言つた豪徳寺への春到来発言が真になりそうな好意的発言である、犬飼は微妙に不謹慎ながらウキウキするものを感じていた。

…さて、こんな普通の野郎なら勘違いしかねない様な言葉を聞いて、この男はどうするのかな？……

しかし、犬飼の期待する様なリアクションを豪徳寺が取る事は無かつた。

「…あのなあ……」

豪徳寺は半ば呆れた様に息を吐いて千鶴に前よりも厳しい口調で言い放つ。

「軽々しく他人を見定めんな。今日あつたばかりの俺を信用？尻軽と思われても文句が言えんぞ、言葉には気をつけろ那波」

「……え、………」

豪徳寺の言葉が予想外だったか、笑みを収めて驚いた表情をする千鶴を見て、やや慌てて犬飼が豪徳寺を宥めに入る。

「いやいや豪徳寺君、好意的に見てくれてるんだから、そこまで言わなかつたっていいじゃないか…」

「違う。今さつき会つたばかりの人間の言動を少しばかり見聞きした位で向ける好意なんぞ、好意と言わねえ。見立てに自信があるうがなんだらうが、女が男の部屋を訪ねるつてのはそう軽々と決めていいものじゃ無いんだぞ」

豪徳寺は犬飼のフォローを跳ね除け、更に千鶴に言い募る。

「自分でどう思つていてもお前はまだ十五の小娘だ。どんな経験をしてきたにしても、自分の貞操が危なくなるかもしれない様な行動の判断基準を、印象なんぞに委ねるな。大丈夫だと思つても念を押せ、お前の理屈じゃお前の見立て以上に猫を被るのが上手い奴が居たら終わりだろ…ガキが他人を見ただけで解つた気になるな、もつと女として自覚ある行動を心掛ける、那波」

豪徳寺はきつぱりと言いつつ切った。

……あああの馬鹿はまったく……………

犬飼は思わず額を押さえて呻く。元から格好と同じ位に頭の中も古風な男だと理解していたが、今の説教はいささか言い過ぎ、というより踏み込み過ぎだろうと犬飼は思う。言葉自体は間違つたものでは無いかもしれないが現代女子にそこ迄かつちりした行動を求めるとも酷な話だろう。豪徳寺の理屈では究極的に言えば恋愛など発展しようが無いし、そもそも千鶴を知らないのは豪徳寺も同じなのだから上から目線が過ぎるだろう。戦前の良妻賢母なら納得してくれるかもしれないが女学生でこんな高圧的な物言いをされたら大体が気を悪くするに決まっている、と犬飼は考える。

怒って帰ってしまうんじゃないかと恐る恐る千鶴を伺つた犬飼は、予想とは違う姿を目にする。

千鶴はパチクリ、と目を瞬かせ、外見よりもあどけない雰囲気でも豪徳寺を見つめている。本当に思つてもみなかったことを言われた、と言う感じだ。

「…おい、いつ迄惚けてんだ。俺の言つた事は解つたのか、那波？」

反応が無い千鶴に業を煮やしてか、豪徳寺が千鶴を促すと、千鶴ははつとして、ようやく動き出す。

「……………はい……………あの……………今、豪徳寺先輩は私を、…私のことを叱つたんです、よね……………？」

「あん？」

おずおずと尋ねてくる千鶴に豪徳寺は首を傾げ、

「それ以外の何だつてんだ？頭ごなしに言われちゃ腹が立つかもしれないねえが、歳下なのに解つた様な物言いをするからだぞ」

前言を翻す事は無く、寧ろ豪徳寺は念を押す。

「…歳下……………ですか…」

「なんだ？違うとでも言いてえのかよ？確かに同じ歳の女子と比べりゃ大人びてるかもしれないねえが俺からすりやまだまだガキだぞ」

「…いえ……………はい、そうですね」

千鶴は何か納得したように数度頷き、顔を綻ばせる。

「…そうですね、年端もいかぬ小娘が、偉そうなことを言いました。申し訳ありません、猛省します」

「…お、おう……？」

豪徳寺は首を捻りながらも頷く。素直に受け止めてくれたのはいいが、何故笑顔なのか解らないからだ。

頭を上げてからも何故か千鶴は上機嫌で、何事かを呟きながらクスクスと笑っている。

「……………」

豪徳寺は無言で犬飼の元に身を寄せ、小声で問い掛ける。

「…おい、なんであいつは上機嫌なんだ？」

「知るかよ私が」

にべも無く犬飼が返す。

「私は犬心は解つても女心は解らんよ。どうもはつきり怒られたのが嬉しかったんじゃないかな？」

「…なんだそりゃあ？」

「だから私を知るかよ。しかし豪徳寺君、気を悪くするかもしれな  
いって解つてたなら、なんであんなキツイ物言いをしたんだい？」

反対に問い掛ける犬飼に、豪徳寺は答える。

「話ぶりからして頭の回る大人びた娘だ。俺の言い方に腹を立てても、それで言葉の内容を無視するほど愚かじゃないさ。例え俺が嫌われようが、それで気をつけるようになるならそれでいいだろう？」

「…なんだいそれは。少し格好をつけ過ぎだろうに？」

「五月蠅いわ」

少し顔を赤くしながらも、豪徳寺は答えた。

「…しかし起きねえな、本当に大丈夫か？こいつ」

暫くして、千鶴への忠告も済んだので千鶴を女子寮まで豪徳寺が送って行く事になったのだが、結構な時間が過ぎても尚眠り続ける小太郎に、豪徳寺が不安そうに呟く。

「ああ、傷が結構多かったんで、途中で目を覚まして暴れない様、多めに麻酔を打ったからねえ。熱は小康状態の様だが流石にまだ寝てる

だろう」

犬飼の説明に一先ず納得する豪徳寺と千鶴。

「じゃあ、犬飼先輩。心苦しいですがこの子をお願いします」

「俺も那波を送り届けたらまた来るから、少しの間頼むぞ」

「はい、任されたよお二方」

犬飼が二人の頼みを快く了解する。頷いて豪徳寺と千鶴が立ち上がり、玄関に向かおうとしたその時、それまで犬飼の傍らで伏せて身動きもしなかったサーベラスがピクリと耳を動かし、音も無く身体を起こすと前に出て、玄関に向かって唸り始める。

「あらっ？」

「…おい、どうしたんだこい…」

唐突なサーベラスの行動に犬飼へと振り返りながら訳を尋ねた豪徳寺は、犬飼の緊迫した表情に思わず言葉を飲み込む。するとその時、玄関でチャイムが鳴った。

「？、お客様でしょうか…他人の事は言えませんがこんな時間に…？」  
怪訝そうに呟く千鶴を余所に、サーベラスは益々唸り声を強くなる。

「…二人共、玄関に近づかないでくれ」

犬飼が張り詰めた声で豪徳寺と千鶴に呼び掛ける。

「…犬が見知らぬ来客を警戒するのはおかしな事じゃ無えが、ヤバいのか？」

「豪徳寺君やこの子が来た時も、那波ちゃんが来た時もサーベラスはここまで過剰に反応しなかっただろう？…こんな激しい警戒、麻帆良の森林で麻帆良四大魔獣の一体、体長六m強の魔狼フェンリルに遭遇する直前以来だ。…外にヤバい奴が居るよ」

何やら聞き流せない部分もあったが、犬飼の声は真剣そのものだ。話している間にもう一度チャイムが鳴った。

「…どうするんだ？」

「…逃げよう」

犬飼は言い放つ。

「ベランダ越しに建物の端まで移って非常階段から外へ出よう。少な

くともチャイムを鳴らしているんだから、直ぐさま強引に入ってこようとはしないはずだ」

その来客に対して余りに過剰な反応に千鶴が眉を顰めて何事かを言おうとしたが、それを豪徳寺が遮る。

「…馬鹿馬鹿しいと思うかもしれないねえが麻帆良の部長クラスの判断だ。納得出来なくても黙って言う通りにしてくれ、那波」

「…ですが……」

「話は後だ、静かに……」

犬飼が忍び足でベランダへ続く窓を開け、小太郎を抱き上げ様とした、その瞬間。

ゴガアン!!?!!?と何の前触れも無く玄関から轟音が響き、何かの倒れる音と共に部屋の中へ何者かが入ってくる足音が響く。

「!、……遅かったか……!!?」

「那波!!?俺の後ろにいろ!!?」

「は、はい!!?」

犬飼が小太郎を抱え上げながら唇を噛み、豪徳寺が千鶴を庇って一歩前に出る。サーベラスは鋭い声で侵入者に吠え立てる。

三人と一匹の視線が集中する中、上がり框を土足で上がりながら姿を現したのは、黒革製の上下に黒いロングコートを羽織り、頭には唾が広めの、矢張り黒いソフトハットを被った黒衣の老人だった。

「……どちら様?……」

やや乾いた声で問い掛けた犬飼の声に対して、老人は優雅にハットを手に取り一礼する。

「夜分に、しかもこんな荒々しい入り方をして申し訳ない。少々お騒がせするかもしれない、……そちらの腕の中の少年に用があるのでね」

物腰は穏やかながら、その眼に危険な輝きを見せつつ老人ーヴィルヘルム ヨーゼフ・フォン ヘルマン伯爵はその場の全員に、そう告げた。



## 12話 降りかかる災難

「なんだか仲良きそうですねーあの二人、そう思いませんセルウア様？」

相合傘でゆつくりと寮への道を歩む辻と刹那を見て半透明の幼女ーあめ子と名のついたハイ・スライムと呼ばれる魔物の一種は、傍らのドレスのオカマへと声を掛ける。

「相合傘…アイアイ…猿。 ……ふふ、猿の様にベッドで盛ル…」

あめ子の横の同種ーぷりんと呼ばれる幼女はよくわからないこじつけの様な連想ゲームの末に無表情のまま含み笑いをして右手で下品なサインを作っている。見た目が半透明とはいえ愛らしい幼女なだけに酷いギャップだ。

「……ふっ…」

呼び掛けられた当のセルウアは両の瞳を輝かせて無意味に決めポーズを取り、自信満々にあめ子に答える。

「…仲がいい所じゃ無いわね、あの二人、近い内にS○Xする程の仲よ!!?ぷりんちゃん大正解ね!!?」

ぷりんが無表情なままぐっと人差し指と中指の間に親指を挟んだサインをセルウアに突き出すと、セルウアも無駄にイイ笑顔で同じサインを突き出す。あめ子はそれをやや呆れた目で見やりながらも監視は続けつつ、暫く経った後に改めて問う。

「所でどうやって攫いますかー?どっちも腕利きなんでしょうしー、両方を素早く無力化出来ないとのあの二人、主従らしいですから何か勘付かれるかもしれマセンヨー?」

「そうねえ……」

セルウアは思案する様に尖った顎に手を当て、暫く考え込むが、やがて大きく頷きながらポン、と手を打ち、二人?に告げる。

「いい方法を思いついたわ!!?愛し合ってる男女ならば必ず有効な騙し討ちよん♪」

「騙し討ち……バック○入…」

「イイわよぷりんちゃん!とつても危険な感じだわあー!!?」

「騒ぎ過ぎてまず魔法使い達に見つかからない様にしましょうねー、私はこれからお嬢様達の方に行きマスカラー」

騒がしい一団は、やがて水の幕が垂れ下がった様な豪雨の中に消えて行く。

…とりあえず誰かはわからんが明日×て殺る畜生共めが………!!  
?

豪雨の中に刹那と一つの傘の中、言葉少なに寮への道を歩きながら辻の心の内半分は、とても武道家とは思えない澱んだ殺意に満ちていた。後の半分は気まずさと照れと緊張であるが、それは今更語っても詮無いことだろう。

辻は今朝の時点で天気予報を見る迄も無く、雨が降り続けるであろう事を解っていた。(現時点で既に大雨だから)そして今や習慣になりつつある刹那の送迎。…この二つの要素が組み合わさった時に発生するのは、やってる事自体は身体がそれ程密着する訳でも甘く言葉や吐く必要がある訳でも無い、他愛もないモノの筈なのに、何故かそれをやっているだけで周囲から『付き合っちゃってるっぽい二人』の烙印を押されてしまう恐るべき行為アクション。ぶっちゃけ相合傘である。

辻は自分と愛すべき後輩刹那の間に立つ流言飛語にも程がある噂(そう思っているのは辻位だろうが)『二人は恋人同士である』にわざわざ自分から燃料を喰わせに行くつもりはさらさら無かった。

ならば辻の取るべき戦術タクティクスは自然、幾つかに絞られる。

① 送迎自体を行わない(敵前逃亡)

↓却下。刹那を送るのは誰に頼まれた訳では無い、自らが課した己のやりたい事である。天候状態が悪い程度で断念などあり得ない。

② こっさり帰る(見られなければどうという事は無い!)

↓却下。例え豪雨の中だろうと絶対に誰かしら目撃者が発生する。麻帆良とはそういう所である。

③ 傘を持たずに送迎する(捨て身のノーガード戦法)

↓却下。二人揃って風を引きたいのか、阿呆。

④ レインコート等、代用品を持参(武装変更)

↓却下。見てくれを気にする訳では無いが、そもそも刹那が傘を持っていた場合わざわざ傘を取り上げてレインコートを押し付けるのは馬鹿らし過ぎる。

⑤傘を複数本持参（重装備）

↓採用。どうかこの雨で刹那が傘を持ってこない可能性が極めて低い以上、辻も傘を持って行けば済む話であった。相合傘とは人数が二人で傘が一本しか無い場合においてしか出現しない選択肢である。

…ここまで考えて自分の空回りっぷりが全力で馬鹿らしくなった辻であったが、それでも辻は相合傘を回避すべく全力を尽くした。万が一にも使用途中で壊れぬ様すっかりした作りの傘を、刹那が傘を忘れた場合に備え二本。更に念を入れて折り畳み傘を鞆に二本。そして駄目押しにポケットサイズのレインコートを二つと、辻は万全の用意を持って一日の始まりを迎えた。だというのに……

…何故俺の傘とレインコートが傘一本を残して消え、そして桜咲は傘を無くしている……!!??

どう考えても偶然では無く何者かによる妨害行為である。しかも工作が行われたのは夜の部の修業の差中であつたらしい。無事に装備品の数々を持ち込めた事で安堵し、盗難への警戒が緩んだ頃合いを見計らつての無慈悲な犯行であつた。

かくして辻は刹那を自らの傘に入れ、まんまと相合傘での移動を実行中である。

「…しかし酷い雨だな。そういう時期だと言つたらそれで終わりだが、今日のは桁外れだ。砂部の連中はさぞかし苦しんでいるだろうよ」

「…前々から小耳に挟んではいましたが、砂部とは一体……?」

「うーん一言で言うなら砂のエキスパートだな。世界中の砂を觀賞したいという奴らの訳わからん野望に巻き込まれて、俺達は高校二年の修学旅行にゴビ砂漠へ……」

辻は微妙に気まずい空気を変えようと頻繁に話題を振るが、麻帆良の非、常識人達をダシに盛り上がるには連中の在り方が鋭角過ぎるら

しく、今一つ会話は弾まない。

…駄目だな、これは。ここまで会話が続かないなど何時ぶりの…  
そこ迄考え、ふと辻は気付く。

…何時の間にか、普通に話せる様になったもんだ、桜咲とも。

かつての刹那といえば凍った能面の様な完全無欠の無表情で、話しかけても無視こそされないが素っ気ない一言を返されるのが精々だったと辻は思い返し、感慨深いものを覚える。人とは違う身体、親友である木乃香とのすれ違いなど、悩んでいた事の多くが解決したからこそなのだろうが、随分可愛いらしくなったものだ、と辻は歩く刹那の横顔を見て笑みを溢した。

「……っ、な、何ですか辻部長、人の顔を見てニヤニヤと…」

視線に気付いてか、刹那が恥ずかしそうに尋ねてくる。

「ああいやすまん！……ちよつと昔を思い出してな。短い間に随分色々あったもんだと思わないか？」

辻は、ヤバいセクハラと思われる！と若干焦りながらも弁明する。

「…そうです、ね……本当に、様変わりしたものです…」

辻の言葉に同意しながら、目を細めて宙を見つめる刹那。

「…まあだからって昔の方が良いとは思わないけどな。いいことばかりあった訳じゃ無いが、自分の意志で前進して来た、と自信を持てるよ今の俺は……それに、桜咲も態度を軟化させてくれたからな。正直挨拶一つするのも緊張する尖ったナイフみたいな頃のお前に、もう一度上手く歩み寄れる自信が俺は無い」

少ししんみりした空気を払拭する為に、悪戯っぽく笑いながら辻は刹那をからかいに走る。

「…忘れて下さい。あの頃は辻部長にも先輩の皆さんにも、本当に失礼な態度を……」

「待て待てリアルに落ち込むな。ちよつとからかうつもりだったというか、軽く巫山戯ただけというかええと…」

軽く怒って反論してくるかと構えていた辻はどんよりした空気を纏い始めた刹那に慌てて弁明に走る。

「大体お前は年頃の娘なんだからそれ位の失敗は当たり前前だろ？俺が

お前位の頃はもつと傲慢で自分本位で、未熟などうしようもない餓鬼だったよ。お前は寧ろ破格に大人しい反抗期だ」

辻はいささか自嘲気味にそう言っただけで刹那を慰める。それを聞いて刹那は、僅かに躊躇った後に辻へ尋ねる。

「…辻部長は、麻帆良へ来る前はどのような事をしていらしたのですか？」

辻が刹那と同じ中学三年生の頃に麻帆良へ転校してきたのを刹那は前に聞いていた。辻から昔の話を今迄刹那は聞いたことが無かったので、いい機会として聞いてみたかった。

「…そうだな……」

辻は僅かに表情を固くして押し黙り、何事かを考える。

「…あの、気が進まないのでしたら……」

「いや、いいんだ。別に隠している訳でも無い」

気を使う刹那に問題無いと告げ、辻は尚も暫く考えた後に語り出す。

「別に大した話でも無いんだが…俺が薩摩出身で剣術道場の長男なのは前に話したよな？」

辻の確認に刹那は頷く。

「薬丸自顕流、二の太刀要らずと謳われる九州の雄なる流派ですね？」  
「そうだ、そこで俺は幼少時から剣に打ち込んだ。そこそこ才能もあったらしくてな、中学生の半ば位には道場の大人顔負けの腕前を身に付けていた」

そこまで語ってから辻は少し言い淀み、言葉少なに続きを話す。  
「増長していた…っっていうのも何か違うんだが、格好付けるなら力に酔っていた…とでも言うのかな。調子に乗ってやらかして、逃げる様にならないうちにやっ来て来た」

辻がやや唐突に話を終わらせ、暫し二人は無言で雨の中を歩く。

……何が、あったのですか？……

その一言を刹那は口に出せなかった。明らかに気が進まない辻の様子からして、到底明るい話では無いだろう。自らも必要に迫られるまで秘密としていた事を頑として語らなかつたのだから、臆面も無く

辻へ尋ねる事など刹那には出来なかった。

「…碌でも無い話だよ……」

そんな刹那の何とも言えない視線を受けて、苦笑した後辻は言った。

「…弟をな……斬ってしまったんだ……」

「……………はっ……………」

刹那は辻の言葉に瞠目する。

「今も元気にしているけどな。流石に実家には居られなかった」

「…あの、それはどういう……」

思わず刹那は問いただそうとしたが、辻が足を止めた事により続く言葉を飲み込む。

「さ、着いたぞ。ちゃんと体を温めろよ?」

気が付けばそこは女子寮の手前だった。

「…あの、辻部長……」

「…悪いな、ああ言っておいて何だが、今はまだ詳しく話せない」

口ごもる刹那に、少し寂しそうに笑って辻は入り口まで刹那を誘い、言う。

「…何時か機会があったら、そしてお前が聞きたいなら話すさ」

「…辻部長……」

「じゃあな、桜咲」

屋根の下まで刹那を送り、辻は踵を返した。ゆっくりと遠ざかる辻の背中を刹那は黙って見送り、雨の中に辻の姿が消え去ったの境に、溜息を吐き、門へと向かう。

『主らしくも無い。あんな尻切れ蜻蛉な話の仕方では小娘が思い悩むだけだろうに?』

男子寮へと続く道を歩む辻に背中の中のフツノミタマが訝し気に尋ねる。辻は歩きながら一つ息を吐き、淡々と返した。

「…俺は桜咲が危険なら、万難を排して駆け付けるつもりだけどな。…あいつは俺を信用し過ぎない様にさせておきたいんだ。もう自分で自分を、肯定出来る環境が出来つつあるからな」

『……ふむっ。』

フツノミタマは疑問符を上げ、ややあつてから今度は何処か楽し気に辻に問い掛ける。

『なんだ、あのお人好し共と縁を切つて、私と共に修羅道にでも堕ちてくれるのか、主？』

「違う、悪鬼羅刹の見本みたいになるつもりはさらさら無い。…無いんだが、そうなってしまうかもしれないからな」

辻は己の手を見つめ、そして背中の中のフツノミタマをバッグから取り出して鞆付きのまま眼前に掲げ、告げる。

「お前であるデカブツを断つてからだ。…衝動が大きくなっている」

『……そうか、主には悪いが私にとっては……ん？…主、後ろだ』

「何？」

言葉の途中で振り向く様に言ってくるフツノミタマに疑問の声を上げる辻だったが、ふと後ろから微かに聞こえる声に足を止め、訝し気に振り返る。

「…私では、辻部長を支えるにはまだ至らないのだろうか……」

見えてきた女子寮の入り口を力無く見やりながら刹那は溜息を吐く。今更思い返すまでも無く、常日頃から刹那は辻に多大なる恩義を感じていた。木乃香との仲立ちの件、京都の事件で矢面に立たせてしまった件、人外の自分を受け入れてくれた件。刹那はなんとかして恩に報いたかった。辻が見返りなど望んでいないことなど解っているが、これは刹那の気持ちの問題なのである。

…私を信じてくれるのなら、もつと私を頼って下さい。辻部長……再度息を吐き、刹那はやや力無い足取りで寮の入り口に向かう。

「……ん？」

しかし、後方から微かに聞こえる声に刹那は足を止め、俄かに警戒心を強めながら振り返る。

その二人は全く同じ時間帯にそれぞれ辻と刹那に声を掛けていた。

「……桜咲？お前、どうした？」

「辻部長!?! 帰られたのでは無かったんですか?」

「…このケモミミ少年に? 一体どの様な御用件で? ……」

犬飼は今だ意識の無い小太郎を抱え直し、警戒心も露わにヘルマンと名乗った老人へ問い掛ける。

「いやなに、大した話では無いのだが「漢魂わたこたま あ!!?」ぐはあああああつ!!?」

手に持つ帽子を被り直しながらあくまで物腰は穏やかに何事かを言いかけたヘルマンは、唐突に豪徳寺が放った気弾を土手つ腹に真面に受け、爆発と共に玄関へと吹き飛び、見えなくなる。

「ええつ!!?」

「グウ?」

「うおい!!? いきなり何をやってるんだよ豪徳寺君!!?」

揃って驚愕の声を上げる二人と一匹に構わず、豪徳寺は吹き飛んだヘルマンを追ってゆつくりと前進しながら犬飼に呼び掛ける。

「犬飼、ベランダ伝いに移動して四部屋先の中村の所まで那波を連れて逃げてくれ。このジジイの相手は俺がする」

「え……」

「…知り合いなのかい、その爺さん?」

「いや、だがヤバイ奴なのはお前の相棒が解ってんだろ? おまけにどう見ても穏便に話し合いしに来たとは行動からして思えねえ。…お前は兎も角那波を巻き込む訳にいかねえ、頼む」

豪徳寺の嘆願に犬飼はややあつて頷く。

「…後で事情の説明と、ドアの修理費を要求するよ」

「安心しな。このジジイから取り立ててやらあ」

「…豪徳寺先輩……」

犬飼の言葉に豪徳寺が軽口で応酬した後千鶴が何か言いた気に口を挟むが、

「…悪いな那波、今は説明してる時間が無え。後できつちり説明するし幾らでも文句を聞く。ここは俺を信じて言う通りにしてくれ。此処にいと、危ねえんだ」



豪徳寺の真剣な口調に千鶴は続く言葉を飲み込んだ。

「…気を付けて下さい、豪徳寺先輩」

「…応」

千鶴は困惑や文句等様々なものを飲み下し、状況解らないなりに豪徳寺の身を案ずる。豪徳寺は太い笑みを浮かべて短く応じた。

…全く、いい女っぷりじゃねえかよ、那波……

犬飼に促され、ベランダへ那波が、続いてヘルマンを警戒して後じさりしながらサーベラスが向かったのと時を同じくして、粉碎されたシューズラックの破片を払い落としながらヘルマンが再びリビングに姿を現す。

「…やれやれ、いきなり「漢魂おとこたまあ!!？」っ!!?ぬうう!!？」

息を吐き、抗議の声を上げようとしたヘルマンは、再度言葉の途中で飛んできた気弾を交差させた両腕で受け止め、弾けた衝撃で後方へ滑りながら呻く。

「チツ…」

あわよくば再度吹き飛ばして時間を稼ごうとしていた豪徳寺は、当てにが外れて舌打ちする。

「…乱暴にも程があるね。老人には優しくするように教わってこなかったのかな？」

「チャイム数回鳴らしただけで痺れ切らして玄関ぶち破るような短絡ジジイがどの口でほざきやがる。麻帆こほ良こじゃあ他人様の家へ勝手に侵入する様な無法者は半殺しにされても文句は言えねえんだよ」

呆れた様に呟くヘルマンにすげ無く返し、豪徳寺は両の拳を掲げて戦闘姿勢を取る。

「…で?何が目的だよあんなガキ一人の為にわざわざこんな所くんだりに来て?どう見てもめえカタギには見えねえぞ」

「…ふふ」

ヘルマンは豪徳寺に呼応して半身に緩く握った両手を掲げる、ボクシングの様な構えを取りながら含み笑う。

「確かに彼、イヌガミ コタロー君と君達の関係性では私の目的に見当がつかなくても無理は無いね。彼自身に用は無いと言えは無いの

だが、出来ることならスムーズに仕事をこなしたいと私は思っている。だから黙らせに来た次第なのだが、ね…」

困った事態になったものだ、と呟くヘルマンを他所に、豪徳寺の脳内では先程聞いた小太郎の名前を皮切りに、ようやく小太郎が何者かを思い出していた。

…そうだあのガキ、近衛を攫って辻と闘り合ったとかいう京都にいた猿眼鏡女の手先じゃねえか……

「…関西呪術協会、の人間じゃ無えわな。連れ戻してこいつでんて雇われたか？」

「さて、どうだろうね？」

ヘルマンは答えをはぐらかし、ジリジリと豪徳寺へにじり寄る。だが、豪徳寺はこれまでのヘルマンの言葉からして、目の前の怪しい老人は西の人間でも西に雇われた訳でも無いだろうと考えていた。

…関西呪術協会は大失態を仕出かしたんで、魔法使い連中に対してデカイ態度を取れねえ筈だ。脱走か何か知らねえが連れ戻すのにここまで荒っぽい手段は選ばねえ。…更にこのジジイは、小太郎とかいうガキは主な狙いじゃない様な事を言っていたわな……まあ、いいか。

そこまで考えて豪徳寺は一旦思考を放棄する。

「てめえをぶちのめして聞けばいいだけだわなあ!!？」

「ははは威勢がいいね！おじさん君みたいな若者は好きだよ!!？」

獰猛な表情で嗤う豪徳寺の気迫にも臆さず、快活に笑うヘルマンに豪徳寺は右腕を振りかぶりながら突撃した。

「おらああああ!!？」

「っ…っ!!？」

鋭い呼気と共にヘルマンの左拳が閃く。速射砲の如きジャブが無防備に突っ込む豪徳寺の顔面で弾け、余り腰を入れずに打ったとは思えない衝撃の連打が豪徳寺の頭を揺るがす。

「…ぬう!!？」

「温いんだよ!!？」

しかし豪徳寺はまるで堪えた様子を見せずヘルマンの懐に飛び込

み、打ち下ろし気味の右ストレートをヘルマンの顔面に放つ。

「…っ、ふん!!?」

ヘルマンは首を捻じって掠めただけで攻撃を躲し、カウンターの左フックが豪徳寺の顎を真面に捉えた。

…手応え有りだ!!?……

「動きに無駄が……なっ!!?」

豪徳寺が倒れ伏すだろうと確信し、捨て台詞を吐こうとしたヘルマンは、伸びきっていた豪徳寺の右手が己の襟首を掴み取ったのを感じ、驚愕する。

「…捕まえた、ぜっ!!?」

豪徳寺の左拳がヘルマンの鳩尾を捉え、大柄なヘルマンの身体が一瞬浮き上がる。

「がっ!!?」

「うおらあああああつ!!?」

豪徳寺はそのままヘルマンの胴体と襟首を掴んだままその身体を持ち上げると、玄関口へと突進して壊れたドアを踏み越え、廊下から三階下の正面玄関へとヘルマンを投げ下ろす。

「おおおおおお!!?」

驚愕の声を上げながらもヘルマンは両足を振り、蜻蛉を切って着地の体勢を整えるが…

「死んどけオラア!!?」

「がはあつ!!?」

ベランダの手摺りを蹴って砲弾の様に飛び出して来た豪徳寺に拳を打ち下ろされ、ヘルマンは回転しながら地面に叩きつけられる。

「ぐっ……!!?」

「沈んどけ」

呻きながら立ち上がろうとするヘルマンに、着地しながら豪徳寺は冷たく言い捨て、両の拳から煌めく気弾を撃ち放つ。

「二重極漢魂あ!!?!!?」  
ふたえきわみおとこだま

直後、麻帆良男子寮の玄関先で大爆発が大気を揺るがした。

「……………おし」

白目を剥いているヘルマンをゴスゴスと足裏で踏み付け、反応が無いのを確認してから豪徳寺は踵を返す。

…大分大騒ぎしちまったな……

ジジイを突き出せばお咎め無しにならないかね、などと考えつつ豪徳寺は犬飼と千鶴に合流すべく男子寮の裏へと足を向ける。

…にしても中村の野郎、那波の奴が来たからって妙な暴走してなきやいいが………待て。

そこまで考えて豪徳寺は猛烈な違和感に襲われ、動きを止める。

違和感の元は正にその中村だ。先程はああ思ったが、あれで非常時は空気の読める男である。それが何故か、犬飼と千鶴を送ってから数分が過ぎていくというのに何のリアクションも返さない。他のバカレンジャーに連絡を取る位ならば、戦闘パートの中村は当然やっつけるというのに。

…いや、それ以前に………!

何故寮の間際で大爆発が起こったのに誰も顔を出さないのだろうか。

「いやいや大した一撃だ、一瞬本当に気を失ってしまったよ」

「つつっ!?」

背後から聞こえた声に反射的に振り返った豪徳寺は、次の瞬間腹を中心に身体をくの字に折り曲げ、男子寮の壁まで吹き飛ばされた。

「つ~~~~~~~~っ!?っ!?」

壁に激突し、一瞬の間を置いて地面に落ちた豪徳寺は、胴体の中心で爆発した痛みにならぬ苦鳴を口端から洩らす。人外地味たタフさを持つ豪徳寺にして身体から力の奪われる、滅多に味わうことの無い大打撃だ。

咳き込む豪徳寺を他所に、ヘルマンは光の残滓が纏わる拳を振ってから背面の泥と濁った水を払い落とし、破れた服やコートを再生させて、相変わらず穏やかなままの口調で豪徳寺に語りかける。

「その歳にして素晴らしい気の練りだね、あちらの世界と比べてもちよつとしたものだよ、ゴウトクジ カオル君。ツジ ハジメの他は素人にしては上出来な、単なる気の使い手に過ぎないと聞いていたが…これは君達の事もきちんと無力化しておく必要があるそうだ」

「っ！……ゴホツ!!？……何…？」

豪徳寺は腹を押さえて立ち上がりつつ、ヘルマンの言葉を聞き咎める。明らかにヘルマンは今し方、辻や豪徳寺の個人に対して何かしらを成す為に接触してきた旨を口に出した。つまり初めからバカレンジャーを含むネギ達の集団が狙いだったということである。

「不意を突かれた状態からの私の一撃を喰らい、立ち上がるタフネスは賞賛に値する。しかし、本気の私を果たして君一人で相手取れるかね？」

ヘルマンは拳を構え、全身から圧プレッシャー力を放つ。その威圧感先程の戦闘が全力で無かった事を雄弁に現していた。

「…っ、聞いていいか？」

豪徳寺は再び拳を振り上げながらヘルマンに尋ねる。

「私が答えられることならば答えよう」

「…男子寮の連中に何をした？魔法か何かで眠らせたとかか？」

豪徳寺の質問が想像していたものと違ったからか、ヘルマンは僅かに目を見開くが、ニコリと笑って豪徳寺に答える。

「御名答だ。騒ぎになつてはこちらの立場が不味いからね、ここの人達には魔法の霧で眠りについて貰っているよ。しかし、他人の心配をしている場合では無いと思うがね？」

「いいや」

ヘルマンの指摘に豪徳寺はニヤリと笑って返す。

「…お前は襲撃する場所を間違えた。此処は麻帆良の男子寮。確かにパンピーも居るには居るが、純然たるキワモノが多く住む麻帆良の魔窟だつてのによ」

「…？、何を言っているのかね？」

突然あらぬ事を語り出した豪徳寺にヘルマンは怪訝そうに尋ねる。が、豪徳寺は構わず話を続ける。

「実戦慣れして無え連中も多いから動けるのはそれ程いねえだろうが、それでもてめえを沈めるには充分だろうよ」

「だから…何を言ってる…」

「つまりは」

その声はヘルマンの背後から唐突に響き渡った。

「っ!?」

ヘルマンは無駄に振り返り隙を晒す愚を犯さず、軸足を振り凄まじい勢いの後ろ回し蹴りを背後に叩き込む、が。

「貴殿は麻帆良を舐め過ぎだ」

声の主は軽いダッキングで蹴りの一撃を躲す。その姿はゆったりとした黒装束に包まれ、顔を何故か頭部の半ば迄を覆う、合成樹脂製のケブラーマスクで覆っている。面の男は攻撃を躲し様に手に持つ武器――自動拳銃のシグザウエルP226をヘルマンの胴体に撃ち込んだ。

「おおおっ!?」

悲鳴を上げるヘルマンを他所に計五発を撃ち込んだ面の男は、瞬動を用いて一瞬で豪徳寺の横に移動する。

「大事無いか、豪徳寺?」

「…やっぱお前は起きてたか、忍足」

「無論」

豪徳寺の言葉に短く答える面の男こと忍足。

「……何者、かね?……」

撃たれた箇所を押さえながら尋ねるヘルマンに、肩を竦めて豪徳寺が答える。

「我流で忍術極めてる変態だよ」

「否……麻帆良忍術部部长、忍足 将門。…貴殿は何故昏倒しない?」

忍足は短く名乗り、唯一覗く切れ長の目を細めてヘルマンに尋ねる。

「昏倒?…ああそれ麻酔弾かよ?」

「是…常人ならば既に倒れている」

豪徳寺の質問を肯定する忍足。

「…生憎と普通で無い身でね。成る程増援という訳かい、ゴウトクジ君?」

「いいや?睡眠ガスか何か知らねえが最初に喧嘩を売ったのはそっちだろうがジジイ。麻帆良の武闘派達は、売られた喧嘩は借金してでも

必ず買うぜ？」

若干憎々し気に問うヘルマンにあつさり答える豪徳寺。そう言っている内に玄関から窓から、何れも普通で無い格好の変態達が姿を現す。

「H A H A H A !!? 忍足君に聞いたよ豪徳寺君、不審者だつて? これは一つ僕の広背筋と大円筋と上腕二頭筋が唸りを上げるべきだろうね!!?」

無駄に馬鹿でかく、テンションの高い声を上げながら玄関先から姿を現すのは身長二m五十二cm、体重四百十二kgの、ダブルバイセツプスを決めている筋肉達磨だった。黒のマイクロビキニパンツ一枚しか履いていないその全身は謎の光沢をテラテラと放ち、黒光りしている。

「…よう金剛、元氣そうだな」

「H A H A H A、何だか筋トレをしていたら眠気が襲って来たから、これは僕の筋肉に対する愛が足りないんだと奮起して本気のメニューをこなしていた次第さ!!? 僕の全身は今、美しい筋肉が程良いビルドアップを果たしている…!!?」

そう言つてダブルバイセツプスからアドミナブルアンドサイへ移行するボディビル研究会部長、金剛 力也。

「…筋肉馬鹿はさて置き、巫山戯た真似をしてくれたのはその爺さんか? とりあえず銃殺してやるからそこに直れや」

外に面した窓から身を乗り出してきたのはボディアーマーを私服の上から身に纏い、顔にNBC防護マスクを装着したAK-47を構える長身の男である。

「…:…なあ、お前の所に行った霧って防護マスクで防げんのか一番合戦?」

「あん? 何を訳解らん事言つてんだ軍艦頭。麻帆良の軍事研が使用する対NBC防護用品が催眠ガスなぞ通すかよ」

マスクの下で鼻を鳴らして答える軍事研究会部長、一番合戦

勝鬨。

「どういう状況だ、豪徳寺?」

「おう、やっと比較的真面なのが来たな」

二階の廊下から飛び降り、豪徳寺の傍らに着地した功夫服の大豪院。

「襲撃だ、犬飼の部屋でそのジジイに襲われた。那波が一緒だったんで犬飼に中村の部屋まで行かせてる」

「…那波？ああ古のクラスの。あの馬鹿が出てこないのはそういうことか」

大豪院は首肯し、ヘルマンへと一歩進み出て構える。豪徳寺を初めとして忍足、金剛、一番合戦も各々が戦闘姿勢を取った。

「…で、まだ大口叩く余裕はあるかジジイ？」

豪徳寺の問い掛けにヘルマンはやや引きつった笑みを浮かべる。

「…この様な人間が何故一所に集中して居るのかね？」

「別に女子寮襲撃しても教員寮襲撃してもキワモノはゴロゴロ居んですよ。麻帆良を舐めんな、クソジジイ」

鼻を鳴らして言い放つ豪徳寺。

「…成る程、私の想定が甘かったということだろうね、いやはや恐れ入ったよ。ならば私は一旦引かせて貰うとしようか」

ぬけぬけとそんなことを言うヘルマンに、周りが俄かに色めき立つ。

「…爺さんよ。何がしたいのか知らねえが、集団昏睡事件なんて舐めた真似仕出かしといて俺らが黙って返すとも思ってたのか？」

「Yes indeed! 御老体には優しくするのが世の習いとはいえ、時と場合によるよ？」

「…同意」

各部長が言い放ち、大豪院も無言のまま眼光鋭くヘルマンの一挙一動を見張る。尋常でない重<sup>プレッシャー</sup>圧がヘルマンに叩きつけられるが、ヘルマンは怯まずに笑みを浮かべて豪徳寺を見やり、言葉を投げ掛ける。

「豪徳寺君、唐突で済まないが聞かせてくれたまえ。部屋にいた美しいお嬢さんは君の好きな人かね？」

「……あ？」



本当に脈絡も無い質問に豪徳寺は間拔けな声を上げる。

「…部屋にいた」

「beautiful woman？」

「…恋人？」

「違えよ!!？」

「…話がややこしくなるから流せ貴様ら」

リレーの様に代わる代わる疑問を向ける三人に目を剥いて豪徳寺が怒鳴り、嘆息して大豪院が制する。その様子を見てヘルマンは笑いながら言葉を続ける。

「おや、違うのかね？随分と気にかけているようだから当たりを付けて見たのだがね、これは失敗だったかもしれないな」

その含み有る様子にある予感を感じた豪徳寺は、顔立ちを厳しいものに変え、低い声でヘルマンに問い掛ける。

「…てめえ。まさか那波を……！」

「おや、……察しがいいねゴウトクジ君。その通りだ、あの女性は今、私達が身柄を預かっている。更に言うならば、コノエコノカ嬢、カグラザカアスナ嬢、サクラザキセツナ嬢の三人も、だがね」

ヘルマンは帽子を深く被り直しながら、見えている口元だけで囁い、言い放った。

「……辻部長……」

刹那は半ば呆然と辻の名を呟いた。

「桜咲……さっきの今で済まない。でも、矢張りお前には俺のことを聞いて貰いたくて、な」

辻はゆっくりと歩み寄りながら、何処か思い詰めた様子で刹那に告げる。

「…何故です？」

刹那は緩く首を振り、辻に問う。自ら先程、この状況を望んでいたというのに刹那は納得がいかなかった。

「…私に、全てを話して頂けなかったのは、私がまだ未熟だから……辻部長が頼るに値しないと判断したから、なのではないですか？……自分が

まだまだ至らないのは理解しています。それなのに何故、突然心変わりを……?」

刹那が引つ掛かっているのはそこだった。辻は理由はどうあれ、刹那に自身の事情を話すには時期尚早だと判断した。或いは、辻が単に話したく無い話題だっただけなのかもしれない。それでも辻は刹那には今、打ち明けられないと判断したのだ。

…この人はまた、私に気を使って、私が要らぬ気を回さない様に自分にとって辛い話を無理にしようとしているのでは無いだろうか……

辻の性格ならば充分にあり得る事だと刹那は思う。ならばこそ刹那は、自分の悩み位は自分の都合を優先して貰いたかった。辻には唯でさえ返しきれない程の恩がある。これ以上自らの事で、刹那は辻に負担を掛けたくは無かった。

刹那の言葉を聞いて、辻は何処か寂し気に笑うと更に刹那へ距離を詰め、ゆっくりと刹那に告げる。

「桜咲…それは誤解だ。俺はお前の事を信頼している。でなければ俺の、立ち入った事情を話そうとしたりはしないさ。…只、俺は話してお前に嫌われるのが怖かった」

辻は手を伸ばせば顔に触れられる位置で、刹那の顔を正面から見据える。

「俺は、かなり真面目じゃ無い部分がある。お前に対して偉そうな事を言っておきながら、俺もお前と同じだったよ。…受け入れて貰えないかもしれないと思ったら、急に怖くなって、な。お前の前から、逃げてしまった」

「……何を、馬鹿な……!」

刹那は思わず取りすぎる様に辻へ詰め寄ると、下から辻の目を見てはつきり告げる。

「私は、辻部長に私を受け入れて頂きました!私がそれで、どれだけ救われたことか、どれだけ勇気を貰ったのか、解っているんですか辻部長!!?……私は大袈裟で無く辻部長に命に代えても、恩義に報いたいと考えています。貴方がどのような人であろうと、掌を返す様な真似

を私は絶対にしません!!?…だからどうか、私が少しでもお役に立てるなら、私にそれを打ち明けて下さい、辻部長!!?」

刹那の言葉を聞き、辻は束の間目を閉じて何かに感じ入る。やがて目を開いた辻は、潤んだ瞳で刹那に礼を言う。

「…済まない。ありがとう、桜咲」

「当然の事です」

自分の言葉に照れてか、刹那は顔を赤らめながらも言葉を返す。

「…唯、な、桜咲。恩に報いるとか、役に立ちたいとか、そういう堅苦しい理由でお前には動いて欲しく無いんだ、俺は」

「…え……………」

辻の思いもよらない言葉に、刹那は戸惑う様に声を上げる。

「俺の事情を知らないのは、ネギ君は無論あの馬鹿達も同じだ。…なんで俺がお前に一番に打ち明けようとしたか、解るか?」

「い、いえ……………」

微笑みながら刹那の顔を覗き込む様にして囁く辻に、刹那は若干ドギマギしながら答える。

「…周りで散々言われてるよな、俺とお前は恋人同士だって」

「な、何を仰りたいんですか、辻部長?」

「簡単さ。…今の俺はそれを、デマにしたくなくなってる。意味が、解るか?」

「……………え?」

刹那は告げられた言葉が理解出来ず、数秒固まってから沸騰したかのように顔を赤く染めた。

「え、ええっ!!?そ、それはつまり……………ほ、本気ですか、辻部長!!?!!?」

刹那は間違い無く過去最大級に慌てふためきながら問い返す。  
……………つ、辻部長が、私に!!?……………

「…嫌か?」

「い、いえ!!?嫌というか何と言うか…!!?と、突然のことで、な、なんと云っていいか…☒」

言葉の途中で刹那は辻の手が自らの顔へと伸びているのに気が付き、ビクン！と一度身体を震わせてから硬直する。

「…桜咲……………」

「は……………はい……………」

ゆつくりと辻の手が刹那の頬に添えられ、辻の顔が近づき……………

刹那の身体を抱きすくめる様な体勢で辻の身体がドロリと蕩け液状になって刹那を包み込む。

「……………え……………!?」

刹那は碌に何が起こったかも解らぬまま、半液体の膜に包まれ、転送される。

やがて液体が立ち上がり、身の丈よりも長い長髪を地面に垂らす幼女——ぷりんの姿を形取る。

「…セルウア様の言う通り……………せめて、『好き』の言葉は本人から、神鳴流剣士……………」

「…桜咲……………」

「…どうかされたんですか、辻部長、それはフツ……………さんでは？」

敵か何かか？と刹那は周りを警戒する様に見回す。

「……………いや、何でもない。ちよつとフツと話をしてな……………それよりどうかしたのかはこっちの台詞だ。傘も差さないで何をやってんだ、お前……………!!?」

辻は急いで刹那へと走り寄り、己が持つ傘の中へ刹那を引き入れる。

「…すみません……………」

「気にするな。それよりどうした?……………何故、俺を追って来た？」

辻の問い掛けに、刹那は濡れた顔を俯かせると、口端からポツリと言葉を洩らす。

「……………先程の話を、辻部長から伺いたくて、来ました……………」

「……………桜咲……………」

「我儘だというのは理解しています」

刹那は顔を上げ、一歩辻に詰め寄ると、下から辻の顔を見上げ、思い詰めた様子で辻に言葉を投げる。

「ですが、辻部長は先程私に、辻部長の事情を…打ち明けようとして下さったのではないですか？……思いとどまられた理由は、解りません。ですが、辻部長は話して、楽になろうとしたのでは、ないですか……？」

「……………」

辻は刹那の問い掛けに無言のまま、答えない。

「…もし、そうなら。それで辻部長が少しでも気が晴れるなら……どうか私に、話して頂けませんでしょうか？私は、少しでも辻部長のお役に立ちたいのです。…少しでも、辻部長がそれで…」

「桜咲」

刹那の言葉の途中で辻は刹那に呼び掛け、刹那は小さく震えて続く言葉を飲み込む。

「……すみません。ですが、私は……」

「もういい」

辻は再度刹那の言葉を遮り、刹那から一歩距離を取って告げた。

「黙って聞いてたがそろそろ限界だから」

辻は何の前触れも無く、左手に持ったままだったフツノミタマを瞬時に抜き放ち、唐竹割りに刹那を斬りつけた。

「……………ああら…なんで気付いたのかしら、これでもあたし、変装にはぷりんちゃん達にも負けない位自信あったのに？」

間一髪、前髪に掠めただけで辻の斬撃を躲した刹那は、姿に似合わぬオネエ言葉で辻に問い掛ける。

「…答えてやる義理も無いけど、解るんだよ、俺は。お前断つても桜咲程気持ち良さそうじゃ無いから」

ゴキリ、と首を鳴らして据わった目付きで辻は答える。

「…うふふ。何よ、情報と全然違うじゃない、坊や。アーティファクトだけ気を付けてればいいなんて何処のボンクラが言った訳？」

刹那の姿が霞んで消え、ドレスを身に纏う長身の男が姿を現し

て嘆息と共に言い放つ。

「…京都の一件の関係者か」

「ごめんなさいね、それはあたしの口からは教えられないわあ。…：それにしても坊や、案外クールねえ。理由は解らないけれど、あたしを偽物だと解っていたにしても今の太刀筋、迷いが微塵も伺え無かつたわあ。…気を掛けてる女の子の姿を斬る事に、いささかの抵抗も無いってことなのかしらあ？」

笑いながらドレスの男―セルウアが辻に問い掛ける。

「…逆だよ」

辻は静かにセルウアの言葉を否定する。

「え？」

「お前が桜咲の姿で、偽物だと解っていたから全力で振り下ろせた」

「…：どういふことかしらあ？」

怪訝そうに問い返すセルウアに、辻は笑って告げる。

「だってお前、偽物であるにしろ桜咲の姿をしてるんだぞ？俺が日頃から断ちたくて断ちたくて仕方無い

桜咲の姿だ。…偽物なら遠慮無く断つてもいいだろ？勿論本物には及ばないけど、欲求不満の足しにはなるんだから、なあ？」

にこやかに告げる辻に、セルウアは暫くの間黙り込んでから、絞り出す様に言い放つ。

「…あたし本気で人間相手に怖気が立ったの、もしかしたら産まれて初めてよ…：」

辻はそれを聞いても然程気にした様子も無く、セルウアに問い掛ける。

「そうかよ。所でお前は何が目的でこんなことをしてる？真逆桜咲をどうにかしてお前は桜咲の姿に化けていたんじや無いよな？だとしたら俺は、必ずお前を断ち割るが？なあどうなんだ？おい？」

辻は無造作に一步踏み出しながらそう告げる。口調は静かだというのに、得体の知れない鬼気迫る何か、セルウアの全身に叩き付けられる。

…：成る程、ヤバいわね、この子…：…：…！！？

セルウアはゾクリと全身を総毛立たせながらも、ニヤリと楽し気に嗤う。

「…心配しなくていいわ。確かに私が化けてた子や、貴方と仲の良い子を拉致してるけど、傷一つ付けちゃあいないから」

セルウアの言葉に辻は目を細め、得体の知れない重<sup>プレッシャー</sup>圧が一層増すが、セルウアは怯まず言葉を続ける。

「怖い顔しても無駄よ☒取り返したかったら学園中央の巨木の下、ステージの上にいらっしやい。来てもいいのはバカレンジャーって呼ばれてる五人とネギ君…おまけするとしたら、伯爵が気に入ってる小太郎君位かしら？じゃあ、確かに伝えたわよ？」

セルウアが言葉を終えると共に、その身体を半透明の液体が包み始める。

「…おい」

「何かしら？」

辻の問い掛けにこやかに答えるセルウアに、辻は静かに告げる。

「後悔するぞ」

「…怖いわねえ……」

セルウアは眩き、水の中へと姿を消す。辻はセルウアが消えてからも、暫らく無言でその場に佇んでいた。

『…どうやらまた厄介事のようなな、主？』

何処か楽し気に言ってくるフツノミタマに、溜息を吐いて辻は答える。

「…とりあえず全員集合するか……」

「…てめえ……!!？」

ヘルマンから辻に対してと同様の説明を聞いた豪徳寺は敵意も露わにヘルマンを睨み付ける。

「言うまでも無いが魔法関係者には増援を頼まない事をお勧めするよ。人質の身が大事ならば、ね…」

ヘルマンの身体が半透明の液体に包まれ始める。

「……貴様、何が目的だ？」

大豪院が鋭くヘルマンに問い掛ける。

「何、私は知りたいただけだよ。君達とあの子の、今の実力を、ね」

そう告げると共に、ヘルマンは水溜りの中に沈む様にしてかき消える。

「「「……………」」」

ヘルマンが消えてからも、その場の全員は無言で佇んでいた。

「…………あれ？どうしたの皆？勢ぞろいで？」

掛けられた言葉にその場の全員が声の主に視線を向ける。

「…………え？なにどうしたのさ？」

その声の主ー山下は買い物袋片手に気圧された様に半身を引く。大豪院は溜息を吐き、山下に首を振りながら告げる。

「…緊急事態だ、山下。……また厄介事だぞ」



### 13話 大いなる変態

「……………郎」

……………なんや、五月蠅いな……………

「……………太郎」

…ああ、わかつとるわ姉ちゃん。今日は早いんやろ、でももうちょい……………

「…小太郎!」

…だからわかつとるて……………

「いい加減に起きろやクソガキやあああああつ!!?!!?」

「うおおおおおおおつ!!?」

小太郎は耳元で響き渡る大音量の怒号に慌てて跳ね起き、声の主から飛び退って身構える。

「なんやお前は!?!? 耳元でデカイ声出すんやな……………ああああんたらは!?!?」

小太郎は寝起きの急な運動で多少フラつく身体を支えつつ文句を吐きかけて、構えた先に並んでいる中村達を見て驚愕の声を上げる。

「起きて早々元気がいいじゃねえの、この坊主は」

「おい小太郎とか言うガキ。病み上がりの寝起きで悪いが早速知ってる事を全部話しやがれ。全部がお前の所為とは言わんがこつちの身内と一般人が巻き込まれてんだよ」

そんな小太郎に対してお世辞にも友好的とは言い難い目付きで中村と豪徳寺が言い募る。

「な、何……………?」

小太郎はいきなりの要望に目を白黒させる。小太郎からしてみれば追っ手を何とか振り切った果てに傷が元で意識を失い、気が付けば探していた集団の一員が目の前だ。混乱するのも無理からぬ事である。

最もバカレンジャー、特に豪徳寺からしてみればレスポンスの遅い小太郎の反応は苛立ちを募らせるものでしかなかったらしい、女子供には大らかな態度で接する豪徳寺が、らしくもない荒い態度で小太郎

をせつつく。

「おい！ボサつとしてる暇は無えんだよ、早く経緯と事情を説明しやがれ!!?」

詰め寄る豪徳寺を山下と大豪院が制する。

「落ち着いて豪徳寺、話すものも話せないよその剣幕じゃ」

「この小僧は最前まで意識が無かったのだ、寧ろこちらが先に状況を説明するべきだろう」

諫められ、反射的に口を開きかけた豪徳寺は寸前で思い留まり、一つ深呼吸して僅かに落ち着きを取り戻す。

「つゝゝ！……だな、悪りいお前ら。そっちもな、小太郎…でいいわな?」

「……そうや。なんやわからんが、俺が寝こけてる間に色々あったみたいやな……兄ちゃん達の仲間とカタギが巻き込まれた言うもつたが、もしかせんでも、やったのは黒尽くめの爺さんか?」

小太郎の問いに、豪徳寺と大豪院は一度視線を絡めてから同時に頷く。

「つゝゝ！……糞が、やっぱ彼奴らかい!!?…スマン、兄ちゃん達。迷惑かけん様に片付けるつもりが、へまこいた所為でものごつつい面倒掛ける羽目になったわ……!!?」

小太郎は怒りを表しながらも呻き、豪徳寺達に頭を下げる。

「……詳しい話を聞かせてくれ、小太郎」

豪徳寺の言葉に小太郎は頷き、口を開きかけるが、山下がそれを手で制する。

「山ちゃんどした?」

「時間が惜しいのは解るけど、来たみたいだよ辻が。電話によるとネギ君も直ぐに来る、説明は全員が揃ってからにしよう」

分厚い雨の幕の向こうから険しい表情で歩いてくる辻を指しながら山下が告げた。

「…山下君、なし崩しとはいえ到底この状況で部屋に帰るなんて出来ない。協力出来るかどうかはさて置いて、僕達にも explaination をしてくれるかい?」

金剛が右腕に巨岩の如き力瘤を無意味に作りながら、巫山戯た動作とは対照的に真剣な表情で尋ねる。後ろの面々も同様の顔付きだ。

「…ま、僕が同じ立場なら無視しろって言われても聞けないだろうからね……」

ただ、恐らく聞いても納得は出来ないと思うよ、と山下は苦笑しながらも注釈した。

「…つまり君を追って奴らは此処にやって来たと言うよりは、寧ろ奴らがネギ君を含む僕達に対して、何かを仕掛ける為に此処に来て、君は寧ろそれを知ってしまったが故に始末されかかっていたと、そんな所かい？」

眉を顰めるながら山下が纏めた経緯に対して小太郎ははつきりと頷く。

辻が合流して刹那がオカマと液体生物に攫われた旨を伝え、一同に衝撃が走って程なく。これ以上無い程焦りを全面に押し出しながらずぶ濡れになるのも構わず全力で飛んで来たネギと、何故か追いついた楓と古の口から木乃香と明日菜が何処にも居ないとの報告を聞き、一同はヘルマン達の誘拐宣言が紛れも無い事実である事を実感した。小太郎の姿を見てネギが慌てふためいたり、のこのこ非常事態に顔を出した古に大豪院が憤ったりと全体が情報の擦り合わせを行うのにやや時間を喰いはしたが、現在一同はようやく腰を落ち着けて小太郎から事情を聞いている所であった。

「…あの白髪のがキが生きていたってのがまず驚きだけどよ、お前なんであのガキの申し出を断ったんだよ？聞いた話だとあの眼鏡の姉ちゃんに置いていかれたことを相当恨んでたらしいじゃねえか。奴らが俺らに何するつもりだったか知らねえが一度は敵対した仲だ、こつちに義理立てする必要も無えだろ？」

中村が首を傾げながら小太郎に問う。あれだけ千草に対して尽力しておきながら、その姉貴分の元へ行ける千載一遇の機会を潰してまでネギ達の側に協力する様な真似をするのか、中村はわからなかった。

小太郎はその問いに鼻を鳴らし、ぶつきらぼうながらも答えを返す。

「そうやな、實際話を聞いた時は俺も迷ったわ。せやけど勘違いせんて欲しいんは、俺自身は千草姉ちゃんが連中の組織とやらに入つとるんを納得しててる訳や無い、いうことや。彼奴らが何考えて動いとるかには正直どうでもええ、けど姉ちゃんはそのれに賛同して追つてもうた。：彼奴らはヤバいわ、やり口から見ても大いなる目的の為には小さな犠牲は仕方が無いゝなんて台詞を平気で吐ける奴らや。：姉ちゃんはもしかしたらそれでも

ええ、思てるかもしれへんが、必要があつたら姉ちゃんも切り捨てられる、俺はそいつが我慢ならんや。：俺は姉ちゃんを彼処から連れ戻したい、姉ちゃんには普通に生きて欲しいんや。だから俺はあの連中、潰したろうと思うとる」

小太郎ははつきりとそう言った。

「：ちゆうても俺一人でそんな真似出来る訳無いからな、落ち目になるんが決まつとる西に居るより、手の長さじゃあこの国で勝る所は無、東の此処に付きたかつたんや。連中はそのネギと兄ちゃんらを狙つとる。理由は解らん、単に計画潰された腹いせかもしれへんな。兎も角俺はこの一件、東の魔法使い達に伝えて一つ借りを返す腹づもりやつたんや」

「：つまり俺達への襲撃を未然に防ぐ事で功績を作り、京都の一件に対する恩赦を貰って関東魔法協会に所属しようと画策していたのだな、お前は」

大豪院の言葉に小太郎は頷く。

「そうや。：ちゆうてもそれだけや無い。俺は京都の一件、悪いことしたと思うとる、兄ちゃんらに詫びを入れたい、ちゆう気持ちもある。でも俺が京都でお嬢様の誘拐に加担したんは自分で望んでのことや、本意や無かつたとか姉ちゃんの為やとか、今更何ほざいた所でしらこいわ。俺に罪が有るんは変わらん話や。せやから詫びは、行動で示す：：つもりやつたんけどな：：」

小太郎は胡座をかいた姿勢のまま深々と頭を下げる。

「スマン。結局却ってややこしい形で兄ちゃんらに迷惑かけとるわ」

小太郎の行動に、辻達は顔をそれぞれ見合わせる。

「…頭あ上げな、小太郎。近衛を攫った事、辻を闇討った事。何れも簡単に水に流せることじゃ無え。それでもお前の心意気、無下にする奴もこの場にはいねえ。少なくとも今回の一件、お前に悪意が無えのは解った。漢なら吐いた言葉の通り、行動で責任を取って貰うぜ」

その言葉に静かに顔を上げた小太郎に、豪徳寺は手を差し伸べる。

「…上等や!!？」

ガツシ!!?と力強くその手を握り返した小太郎は、引き上げられる勢いに乗って威勢良く立ち上がった。

「…まあ、蟠りが解けたなら何よりだがよ」

会話に一段落着いたタイミングで軍事研部長、一番合戦いちばんがせが微妙な表情で辻達に問いかける。

「結局何がどうしてどうなってるんだよお前ら?俺達からすればお前らは以前に大事件に巻き込まれていて、その犯人の一人がその犬耳のガキで、その一件が尾を引いて今回人質を取られて、明らかに碌でも無い事態が待ってる世界樹前広場にこれから行かなきゃならねえ位の事しか解らんのだが?」

「…大体そういう認識で間違い無いし、悪いがそれ以上こつちから軽々しく言えることは無いんだ、一番合戦」

一番合戦の要約を辻は肯定しつつ、申し訳なさそうながら遠回しに説明を拒む。

「…言えない事情があるということだ、そうなんだろう?辻君」

「お、犬飼。起きて大丈夫かよ?」

「問題無いさ。元々僕は吹っ飛ばされて頭を少々強く打っただけで、向かって傷を負ったのは主にサーベラスだからね」

クッションを枕に、黙って全員の話聞いていた犬飼がムツクリ起き上がり、心配して声を掛ける中村に応え、辻の方を見やる。

「…から説明すると話がややこしくなるから詳しくは言わないが、この少年、普通に無かったよ。皆もあのご老体が水の中にかき消えたのを見たそうじゃないか。…辻君達が関わっているのは大抵の理不

尽は踏み潰して押し通る、僕らをして完全に洒落になつていない裏社会の場だ。軽々しく僕らを巻き込めない理由があるんだろう、辻君達？」

犬飼の確認に、代表して辻が前に出て答えを返す。

「…済まない、皆。後で納得の行く説明をちやんとする。今は一刻を争う事態だ、奴らは人質を取っていて俺達以外に増援が来るのを望んでいない。…黙ってここは行かせてくれ」

頭を下げてそう告げる辻に部長達は顔を見合わせ、代表して犬飼が答えを返す。

「真剣な話だ。邪魔になるなら口は挟まないよ…だけど何か手伝えることがあるなら、遠慮無く言ってくれ」

「…ありがとう……」

辻は更に深く、頭を下げた。

「…んで、敵は豪徳寺とタイムマン張って互角以上の爺さんと変身能力があるらしいオカマ野郎、更に闘獣部部長の熊をも咬み殺す怪物ドーベルマンを一蹴するマツチヨ。ついでに訳わかめな液体生物か……盛り沢山だなオイ」

一同は人質救出の為に逸る気持ちを抑えて、敵の戦力分析に入っていた。ネギなどは特に直ぐにでも飛んで行きたがったのだが、

「馬鹿野郎、誘拐犯の言うことを鵜呑みにすんな。ノコノコ出て行つた所で『はははよく来たね、素直に言う通りにしたご褒美に人質は解放しよう』…なくんて上手い話がある訳無えだろが。反撃すれば人質を殺す、なんて言われて罅り殺しにされたらそれで俺達お終いじゃねえか。どうにかして人質搔つ攫う算段建てるんだよ頭は帽子乗せる為だけに付いてるんじゃ無えぞ」

「その頭の中身が空洞化している中村に言われたくは無いだろうが、こいつの言い分が正しいぞネギ。人質は無事だから意味がある。そう易々と人質に危害は加えないだろう。奴らは時間制限を特に言つてはいなかった、こういう時こそ落ち着いて作戦を建てるんだ」

と諫められ、焦りを顔に浮かべながらも席に着いていた。

「…余りゆつくりともして居られんでござろう。矢張りここは素直に

呼び出された面子が顔を出し、彼奴等

の相手をしている間に、顔の割れていない拙者達が隙を突いて人質を救出するしか無いのではござらんか？」

楓が腕を組みながらそう発案する。実際各々が遭遇した相手の特徴を共有してしまえば新たにこの場で得られる情報は無く、人質が居る為下手に増援を呼んだり奇襲を仕掛けたり出来ない以上、対策の建て様が無い。既に機先を制されて人質という大きなアドバンテージを握られているのだから、多少場当たりの方針が挙げられるのも致し方の無い事だった。

「…そのやり方ならスニーキングに長けている俺や其処の忍者バカも協力出来ると思うぜ」

「…同意」

一番合戦と忍足が楓の案に同意する。

「ふむ…犬飼君はパートナーと共に負傷、僕は身を潜め様にも、この輝かしい筋肉が否が応にも attraction を発してしまうからねえ…残念ながらそういう方面ではお役に立てないよ…：…実に残念だ!!？」

「…解ったからもう少し声を絞ってくれ金剛君…：傷に響くよ…：…」

「ああ、済まないね犬飼君！」

無念そうな顔でサイドチェストを決めつつ金剛がデカい声で言い放ち、唸るサーベラスを撫でつつ自身の頭を押さえる犬飼に文句を吐かれる。

「き、危険ですよ部長さん達!!？詳しくは言えないですけど、相手は凄く危ない世界の人達なんです!!？」

「ネギ、皆まで言ってやんな。こいつ等はんな事百も承知だよ。本当に協力してもらうかどうかは別として、覚悟の上で言い出してくれたなら、心意気を組んでやるのが漢ってもんだ」

ネギの魔法使いとしての立場からすればある意味当然な制止の言葉をやんわりと豪徳寺が遮る。

「…大体ネギ君、何も知らない素人だから、って言うなら、俺達もそうだったろう？」

「そ、そうですねど……」

苦笑しつつの辻の言葉に、語尾を濁らせるネギ。

「やられたらやり返す、は麻帆良の基本方針だ。しかし貴様ら、もし俺達が協力を仰ぐにしても、先走った真似は絶対に許さんぞ」

「…愚問」

大豪院の念押しに短く答える忍足。

「…ま、それは置いておくにしても長瀬ちゃんの言う通り時間が無いし他に代案も無い。ついでに言うなら大豪院が古ちゃんを説得して諦めさせる時間も無いね」

「そういうことアル、ポチ!!?」

「きさ……いや、確かにこれ以上は俺の? チャンズウ 制に過ぎん

………古」

「はいアル」

抗議をしかけた大豪院が思いとどまって数秒程も沈黙し、何時になく重い調子で古を呼ぶ。古は茶化さず、畏まって返事をした。

「もうお前の参戦には、何も言わん。……だが常に最悪命が危ない場であると心掛ける。単なる対練とは、訳が違うのだ」

「…明白了」ミンバイラ

この上無く真剣な様子で告げる大豪院に、古は左拳を右掌で包み込む包拳礼を持って、恭しく応えた。

「……大豪院、話進めていい?」

「桜咲達が攫われてるんで苛ついている精神状態を自覚している上で敢えて言わせて貰うが、他所でやれよ二人共」

「てめえらは極めて真剣なんだろうがぶっちゃけ見せつけてる様にか見えねえ」

「ポチいい……イチャイチャしてんじや無えU・Z E・E・Y O !!」

「…まあぶっちゃけとつくの昔から公認夫婦だろこいつら、今更じやね?」

「確かに、認めていないのは中武研の他部員達位でござろうなあ……」

「…まあ古菲君は格闘系の男子から人気高いしねえ……」



「:One should not interfere in lo  
ver's quarrels」

「H A H A H A !!? 確かにそうだね忍足君!!?」

「貴様ら（お前達）其処に並べ（アル）……!!?」

「あ、あの皆さん！時間が無いんですつて!!?」

「……大丈夫なんか、この連中……」

「……何時ものノリじゃねえですか、兄貴。ある意味余裕ありやすぜ？それから小太郎つつたか？腕だけは確かだぜ、この人達はよ……」

閑話休題。

「…気を取り直してもう一度。増援を呼ぶなど言ってる以上奴らに僕は監視されてると思った方がいい。流石に今この場の話まで聞かれてるとは思わないけれど、救出組は隠密能力に長けた人だけがタイミングを僕らが出て行く時とずらして細心の注意を払って近付いて貰う。…これ位しか出来る事は無いね。不安は残るけどもう時間が無い、今直ぐ行動を……」

「待てい、山ちゃん」

方針を纏めに掛かった山下の言葉を、先程から何事かを一心に考えていた中村がおもむろに遮る。

「なんだ馬鹿、山下の言った通り時間が無いのだ。妄言を吐くならまた今度に……」

「馬鹿野郎ポチ、この状況で巫山戯る程俺も事態を軽く見ちゃいねえ。更に今言った方針にも反対するつもりは無え。…ただ、それだけじゃ弱えんだよ」

「弱い?」

「…どゆことや、兄ちゃん?」

中村の発言に辻が首を傾げ、小太郎が尋ね返す。

「隙を突いて人達を奪還、つてのはいいが奴らだって当然んな当たり前の戦略はお見通しの筈だ。普通に考えてどれ程俺らが派手にぶっかけた所で人質のガードを緩めるとは思えねえんだよ」

中村が発したとは思えない穿った意見に、思わず一同が唖る。

「…確かに人質を前提とした場合の対人戦のセオリーを相手が理解していないなんてのは希望的観測に過ぎねえな……」

「……でもよ中村、それを言っても始まらねえだろ。今直ぐ行動するしか選択肢は無え以上何とかして隙を作るしか……」

「それだよ」

反論する豪徳寺を遮り中村が指を立てて立ち上がる。

「この俺様が出鼻で奴らから隙を作る。そこで一気に人質搔つ攫って決めるぜ、てめえら」

中村の言葉に各々は顔を見合わせ、代表して楓が尋ねる。

「中村殿。それが出来れば苦労は無いでござるが……具体的に方法は決まっているのでござるか？」

「愚問だな」

中村は不敵に笑い、言い放つ。

「俺様にいい考えがある」

「……なあ兄ちゃん、巫山戯とんのか？アンタは………？」

小太郎が怒りを通り越して呆れを抱きつつ、疲れた様に問い掛ける。周りも一部を除いて大体似た様なりアクションだ。

「俺は至極大真面目だ。これで度肝を抜かれねえ奴はいない」

中村はきつぱりと断言する。

「…中村さん！巫山戯ている場合じゃ無いんです!!？明日菜さん達が攫われて今にも酷い目に遭わされようとしているかもしれないんですよ!!？」

ネギが怒りさえ口調に交えつつ、立ち上がって中村に猛抗議する。

「ネギい!!？言ってるんだろうが、俺様は大真面目だ!!？あのゴリラ教師をも束の間行動不能とした俺様の秘技だぞ!!？信じろ、絶対に上手く行く!!？」

「いや無謀を通り越して無茶苦茶だぜ旦那!!？ほら、他の皆さんも何か言っちゃって下せえ!!？」

カモの促しに、しかし意外な言葉がバカレンジャーから返ってくる。

「…いや、それで行こう」

「ええ!??!?!」

真逆の辻からのGOサインにネギが絶叫する。

「そこの変態の言う通り、あの冗談が一切通じねえ杜崎が怒り心頭の状態で数秒呆ける程の破壊力だ。もしかしたら本当に上手く行くかもしれない」

「仮に失敗してもそこの変態が殺されるだけだからデメリットは何も無いよ」

「一種の陽動と考えるネギ。囷は派手な方が敵も引つ掛かり易い」

「……本気で言ってるのかお前ら?」

バカレンジャーの言葉に、一番合戦がキチガイを見る目で尋ねる。

「…いや、案外いけるかもしれないよ一番合戦君」

続いて賛成したのは無意味にオリバーポーズを取りつつ話を聞いていた金剛だ。

「…いや、私も巫山戯ている様にしか思えないんだが……」

「その気持ちはよく解るよ犬飼君。これ以上無い程に非、常識的且つ変態的な意見「お前にだけは変態呼ばわりされる筋合い無えよ」H A H A H A、僕の筋肉に嫉妬しているのかい、中村君?それはさて置き、まあ考えてもてくれたまえ二人共?いきなり今話した様な存在が現れて、即座に迎撃出来る自信が果たしてあるかい?」

「……ぬう……」

「……確かにサーベラスさえ硬直するだろうね、そんな中村君は……」

金剛の問い掛けに唸りながらも否定の言葉が出ない二人。

「…本当にやる気かい、兄ちゃん……?」

「中村……変態だ変態だとは思ってたアルが、そこまで変態だとは思わなかつたアル」

「ククク何とでも言うがいい!!?お利口さんでいい子ぶってるお行儀の良いてめえらには真似の出来ん行為だろうよ!この俺をして変態的と思われる必殺の一撃、見事決めて今回のMVPとなってくれるわあ!!?」

「…開き直った馬鹿は強い」

高笑いをする中村を見て、忍足はポツリと呟いた。

「……まあ更に不安な要素が増えたけどネギ君。その変態はどうなるのが構わないように。君は生徒の救出だけを考えていればいいよ」  
「……ほ、本当にやるんですか……?」

構わず話を進める山下に、ネギは途方に暮れた様子で聞き返す。

「くどいでネギ。俺もどうかとは思うけど兄ちゃんらの言う通り失敗しても無視して俺らが人質救えばええんや。あの変態な兄ちゃんはいないモンとして扱えばええわ」

「そういう事だ」

小太郎の無情な宣言に大豪院が同意する。

「……中村の案は受け入れるとしてももう行動に移ろう。大分時間を喰った。……こう言っておいて何だが俺からもう一つ、犬飼、頼みがある」  
「……なんだい?」

辻の言葉に、怪訝そうに犬飼が答える。

「……バレない様な保険の掛け方を、お前達に実行して貰いたい」  
そうして、更に幾ばくかの打ち合わせをしてから、ネギと小太郎、バカレンジャーは世界樹広場に向かって移動を始めた。

「……遅いな……」

「焦らないのよニテンス、がつつく男はモテないわよおく?」

「ははは、刺激の無い瓶の中に比べればこうした待ち時間すらも楽しいものだよニテンス君。……しかし囚われのお姫様には少々負担を掛けてしまっているかな?その格好ではいささか冷えるだろう、一応境界を張ってはいるが、無体を強いて申し訳ないねえ」

「自分で着せた癖に何ほざいてんのよこのエロジジイ!!?そんな風を気を使うんなら初めっからこんな真似するんじゃないわよー!!?」

何処かズレているヘルマンの気遣いに、触手の様なものに捕らわれたセクシーランジェリー姿の明日菜による全力のツツコミが炸裂する。

巨大な世界樹の鎮座する広場のステージ上、一段高い壇上に明日菜、木乃香、刹那、千鶴の四人は拘束されていた。

明日菜が立った状態で個別に拘束されているのに対して、他の三人は半球状にせり上がった水のドームの様なものの中に閉じ込められていた。

「…申し訳ありません、お嬢様…!!?その身をお護りする立場でありながら、卑劣な騙し討ちなどにやられ、この様な醜態を…」

「せつちゃんせつちゃん、もう言いつこ無しや。こっからどうするか考えた方がずうつと前向きやで〜?」

「…ふふ、強いわね木乃香さん。流石に私は、この状況に狼狽えてる自覚があるわ……」

手足を縛られて身動きも碌に取れない状態ながらも、自責の念に駆られて頭を下げる刹那を木乃香が慰め、千鶴は現実離れした展開の連続にやや乾いた笑みを浮かべる。

「ま、慌てず騒がず大人しくしてるだけ大したモンだぜ、アンタ」

「一般人とは、思えませンネー」

「肝っ玉母ちゃん…」

「うくんちよつと遠いわねぷりんちゃん!」

すらむい、あめ子、ぷりんの三体とセルウアは千鶴に声を掛けつつそんなやり取りを行う。

「…貴様ら、一体何が目的だ!!?関係者でも無い那波さんまで巻き込んで、わざわざこの地に乗り込んで回りくどい真似をして!そうまでして何故ネギ先生達を狙っているんだ!!?」

刹那の激しい語気での問いに、セルウアが肩を竦めて言葉を返す。

「んもう!そんな顔して怒つちや駄目よサイドテールちゃん。可愛いお顔が台無しじゃない」

「巫山戯るな!!?」

からかう様なセルウアの返しに刹那は激昂する。

「怖いわねえ……やっぱり乙女心を弄ぶ様な真似をしちゃったのが良くなかったかしら?あの彼氏、普段は奥手そうだものねえ。あんまり時間が無かったとはいえ、夕轟な心を引っ掻いちゃったのは謝るわあ、ごめんなさいね?」

「……真面に答える気は無いということか……!!?」

刹那は更なる悪態が飛び出そうになる口を嚙み、呼吸を落ち着かせる。刹那一人ならば兎も角、木乃香を初めとして他にも人質が居るのだ、余り挑発的な物言いは避けなければならぬ。

最もセルウアはそんな事を気にした様子は無く、自分の謝罪が誤魔化しと取られた事の方が不満らしかった。

「心外ねえ、貴方達への行いについては、焦らなくてもあの子達が来たらちゃんとして伯爵が説明してくれるわよお。そんな事より、アタシは結構真剣に悪いと思ってるのよ馬に蹴られる様な真似をしちゃったの。勝手な言い分だけれど、下げた頭をあんまり安く見て欲しくないものだわねえ？」

身体をくねらせながらも本気で不本意そうに息を吐くセルウアに對して、刹那は鼻を鳴らして吐き捨てる。

「貴様の様な輩にまでありもしない仲を言及されるとは私の方こそ不本意だ。辻部長もさぞかし迷惑だろうよ、俗な見方をされていて」

「…せつちゃん、誘拐犯の人にまで言われとるんやなあ……」

「あらあら……」

こんな状況にも関わらず、何だか微笑ましいものを見る様な表情で不機嫌そうな刹那を見やる木乃香と千鶴。一方セルウアはそんな刹那の物言いに首を傾げた後、暫しして得心がいったとばかりに頷き、言い放つ。

「…そっか、自分でまだ気付いて無いのねえ、それとも無意識で否定しちゃってるのかしら？何にしても可愛いわねえあんなにあからさまなのに……」

「…何が言いたい……」

クスクスと笑うセルウアに、目を細めて刹那が問いかける。

「サイドテールちゃん、告白紛いの事言われた時にどう思ったかしら？きつと悪い気はしなかったわよねえ、モテて嬉しくない女の子はいないもの。…貴女は結局告げられた相手が偽物だったからあんな事が起こるのにはあり得ない、だからこれ以上考える必要は無い。…って風に思ってしまったわあ、きつと」

でもねえ、とセルウアは長い睫毛の奥の瞳を悪戯っぽく煌めかせ、

刹那に告げる。

「じゃあさっきのシチュエーションが本当に起こったらどうかしら？  
：貴女の答えはどう？彼みたいなのはタイプじゃ無いかしら？」

その問いかけに刹那は心臓が一つ、脈打つのを確かに感じた。セル  
ウアに言われた通り、偽物だったから、騙し討ちの手段に過ぎなかつ  
たから。と、あり得ない想定に狼狽えて捕まった、単なる恥ずべき失  
態として押しやろうとしていた、そんな心を見抜かれた様な気がして  
いた。

「：別に今直ぐアタシに何か言わなくていいわよお、いきなりこんな  
こと言われたら混乱するものねえ…」

それでも一つお節介、とセルウアは何処か楽し気に。

「女の子って現金よ。相手に悪いな、何て思っても結局タイプで無  
いなら嫌って言えちゃうもの。：だから男の子に告白されたとして、  
理由や動機なんて考えられなくともいいわ。それが嫌だと思わな  
かったなら…」

セルウアは両手で作ったハートマークを胸に当て、ビシィツ!!?と  
半身のポーズを決めて宣言した。

「：L・O・V・E!! LOVEしちやってるってことよ!!?!!?」

「：どうやら来た様だね」

「：待ち侘びたぞ」

「んふふふ、囚われのお姫様がこんなにいるんだもの、王子様は何人  
いるかしらねえ？」

遠方に微かに見えてきた、ヘルマン達に向かって疾走してくる厚手  
のレインコートを羽織った人影に、何れも楽し気に笑いながら臨戦態  
勢を取るヘルマン達。

「：せつちゃん、言われてしもたなあ…」

「あらあら、大丈夫かしら桜咲さん？」

「：頭から湯気出したまま動かねえぞあの神鳴流剣士…」

「こんな状況で乙女やってる場合じゃあ無いと思いますケドネー？」

「：ラブコメ時空…」

…何やら緊張感の無い空気が水牢の周りでは満ちているが、戦況は動き始めた。

「…一人か？他の連中はどうした？」

「んー？逃げた訳でも何処ぞに応援呼びに行つた訳でも無いのは遠視で確認してるけど……」

「猪の様にただ突っ込んでくる訳では無いということだよ二人共。楽しみじゃないか、どのような策を練ってきたのか、ね！」

ニテンスの言う通り、ヘルマン達目掛け突っ込んでくるのは一人を除いて姿が視認出来ない。その背格好からして男性らしい、フード付きのレインコートを着ているため表情さえ伺えない人物は、更に一段階加速すると同時にヘルマン達から残り四百m程の位置で、着ていたレインコートを勢い良く脱ぎ捨て、その姿を露わにした。

後に明日菜はその時の凄まじい光景についてこう語る。

「いやもう何て言うか……ヤバいわねあの人。うん、ホントそれしか言えないわ、うん。確かにあのエロジジイ達が揃って呆気に取られてたんだから、確かに有効な手段だったと思うわよ？でも普通あんな場面であんな事仕出かそうなんて誰も考えないでしょ頭おかしいんじゃないかと本気で思ったわ……まあだからこそ成功したんだし、それで助かったんだから文句言うのは筋違いだってわかってるんだけど……やっぱりねえ……」

その人物は先ず股間の逸物に相当する部分に金の鯨鏝がそびえ立つ、ピッチピチの黒いビキニパンツを履いていた。凶悪に振り返った鯨鏝に持ち上げられてめくれ上がり、風に翻るのはマイクロミニのシフォンミニスカート。丸見えになっていて意味の無い絶対領域を強調する様にニーソックスを身に付けた足元で一步足を踏み出す毎にプギユプギユと愛らしい音を鳴らすのは、可愛らしくデフォルメされた熊さんスリッパだ。

上半身には『やらないか』の文字と共にとある悪っぽいツナギ姿の自動車修理工の姿が印刷されたTシャツを纏い、駄目押しに乳首の部



分が丸く切り落とされて男の綺麗なピンク色のそれが露出している。剥き出しの首元には何故か金ラメの蝶ネクタイ、赤いシユシユの付いた左右の手には左手に特太のキュウリを逆手に、右手には獅子舞の頭を持ち、歯を絶えずカタカタと鳴らしながら上下左右に振り回す。顔にはエロマークの記入された女物の純白パンティを仮面の様に被り、頭には無数の細い三つ編みにされて先端がピンクのリボンで結ばれた紫色の長髪カツラ。七色の発光ダイオードが塗られたマントをたなびかせながら走るその人物は、鳴き声の様な奇声を発しつつ、一直線に突っ込んで来た。

「モポオオオオオオオオオオオオオオオオ!!??!!??!!??」

どう控えめに表現しても史上最大の変態が其処に居た。

「……………は??……………」

ヘルマン達は揃って間の抜けた声を上げ、近付いてくる怪人をポカんと見つめる。怪人がヘルマン達から残り百mを切った所で、同じく呆然としながら見入っていた明日菜がハッと我に返り、叫ぶ。

「な、なんか来たあああああつ!!??!!??」

その叫び声に各々が正気に戻り、その場は大混乱に包まれた。

「なななな、なんやあれ、なんなんや!!??」

「お、お嬢様!!??私の後ろに!早く!!??」

「……………何かしら…あれ……………」

「ギヤアアアアなんか来たゾオオオ!!??」

「気持ち悪いデスウウウ!!??」

「……………オオー……………!!??」

「キヤアアア!!??何、ド級の変態!!??」

「迎撃だ、迎撃しろ!!??」

「ぬううううう!!??デーモンツンエア シュラーク悪魔パンチ!!??!!??」

得体の知れない悪寒に突き動かされ、ヘルマンの放ったエネルギー波の様な一撃が怪人目掛けて突き進む。

「ちよわっ!!??」

しかし怪人はバネ時掛けのオモチヤの如く、尻を横合いに突き出した反動で後ろ向きに跳躍、攻撃を紙一重で躲すと半回転してガニ股

で着地、そのまま腰を左右に振りたくり、身体全体をくねらせた気持ちの悪い女の子走りでも尚もステージに接近する。

「……巫山戯た真似をおおお!!?」

「ベッコ・アドーネ・ダメリーノ 闇の精霊97柱……」

「ぬうん!!?」

何処までも巫山戯たその動きにニテンスは激昂して虚空から大剣を引き抜いて突進し、セルウアは呪文の詠唱に入る。ヘルマンは怪人を近付けさせまいと先程よりも小振りなエネルギー波をジャブの動きで連射し始める。

「ふふふ…当たらないよ………!」

怪人はクネクネした動きで器用にエネルギー波を躲し、突っ込んでくるニテンスに対して獅子舞の頭を盾のように構え、キュウリをナイフの様にチラつかせる。

「っ……!!?真っ二つにしてくれる!!?」

あからさまな挑発にニテンスは青筋を浮かべ、大剣を大上段に振りかぶり全力で突き進む。

「魔法の射手 連弾 闇の97矢!!?」

「……………!」

セルウアが全方位から半円状に魔法の射手を放ってニテンスを援護し、ヘルマンはニテンスの右翼に移動して畳み掛ける姿勢に入る。混乱しながらも息の合った連携は流石と言うべきか。

しかしヘルマン達は余りに予想外なナマモノが現れたからか、冷静に対処しているようで冷静では無かった。怪人の格好は確かに超絶的な衝撃で、何がしたいのかよく解らない動きは確かに混乱を誘う為、浮き足立つのも無理は無い事ではあるが、これ程派手な動きをする輩は、普通の精神状態ならば陽動だと看破して然るべきだったであらうからだ。

襲いかかる驚異を前に、怪人ー言うまでも無い事だが中村であるーは不敵に笑い、叫んだ。

「今だてめえ等あつ!!?!!?」

その瞬間、ステージ脇の座席を乗り越え茂みを掻き分け、中村以

外のバカレンジャーとネギ達が人質に向かって飛び出してきた。

「「なっ……!!?」」

フルグラティオーアルビカンス

「白き雷!!?」

振り返って驚愕するヘルマン達に構わずネギの放った雷撃がすらむい達に炸裂、麻痺<sup>スタン</sup>効果を伴う一撃がハイ・スライムの動きを止める。

「ぬワアー!!?」

「痺レマスウー!!?」

「っ……!!? 感電プレ、イ……!!?」

スライム達のガードが空いたその隙に、大豪院と豪徳寺が水牢を叩き壊し、辻は明日菜を拘束する触手のようなものを一刀の元に斬り払う。

「先輩!!?」

「え、ええ!!?」

「あ、あれは陽動……!!? な、中村先輩ですかあの変態は!!?」

「あの……豪徳寺先輩?」

「色々ツツコみたい事はあるだろうがまず逃げるぞ!!?」

「豪徳寺是那波ちゃんを!!? 近衛ちゃんは僕が、小太郎君!!?」

「直ぐや……千切れたで! 走れるか神鳴流の姉ちゃん!!?」

「ええ!!? 明日菜さんは!!?」

「俺達が連れて行く、全員散れええええつ!!?」

辻の号令と共に、豪徳寺が千鶴を、山下が木乃香をそれぞれ抱き上げ、手足の拘束を小太郎に解いて貰った刹那、ネギと小太郎を共に一丸となつて走り出す。途中で明日菜を抱えた古の傍らで追撃を警戒する辻と合流し、一目散に麻帆良の本校舎方面へ一同は駆け出した。

「ツガアアアアアア!!?!!?」

怒りの咆哮を上げたニテンスが身体を急旋回させて逃げた辻達の方へ向かおうとするが、

「どっち向いてんだゴリマッチョオオオ!!?」

「ガアア!!?」

魔法の射手の雨を潜り抜けてキュウリと獅子舞を投げ捨てた中村が放った気弾を背中に喰らい、バランスを崩して転倒する。

「っ!!?行かせないわ、よおおおっ!!?」

「済まぬがそれは、此方の台詞でござる……忍!!?」

一番辻達に距離の近かったセルウアが足止めをしようとした矢先、唐突に目の前に巨大手裏剣が現れてセルウアに叩き付けられる。同時に手裏剣に括り付けられた爆符が楓の掛け声と共に炸裂。衝撃と爆風で逆にセルウアはヘルマンの側へ吹き飛ばされる。

「っ……!!?悪魔パンチ!!?」

「当たるかボケエ!!?」

ヘルマンが歯噛みしながらも中村へ攻撃を仕掛けるが中村は素早く瞬動でその場を飛び離れ、攻撃を回避する。

中村は傍らの楓と共に数回の瞬動であつという間にヘルマン達から距離を離すと、観客席の最上段で振り返ってミニスカに包まれた尻を左右に振り、心底ムカつく口調でヘルマン達を嘲笑った。

「へっ、馬ああ鹿 馬あああ鹿!!?きつちり俺様の陽動に引つ掛かりやがって間抜け集団がザ・マ、アアアアアア!!?!!?格好付けていざ迎え撃たんと気炎上げてた所を勝負さえして貰えずにスルーされてねえ今どんな気持ち?どんな気持ちですかあああん!!?…うおつと!!?」

「お怒りの様でござるなあ……無理も無いでござるが」

憤怒の形相でニテンスが投げ付けた観客席の一部を中村は軽やかに躲し、尚も挑発を重ねる。

「兎も角これでてめえ等と潰し合う理由も消えたわなあ!!?大人しく尻尾巻いてお家に帰って、マンマのおっぱいに顔埋めて悔し泣きでもしてろや凸凹トリオ!!?それではこれにて私失礼致しまあアす!ア デュー!!?」

「人を怒らせることにかけては天才でござるな、中村殿。…最も単刀直入に言つてその格好は気持ち悪いでござる」

「ヒデエ!!?」

最後に尻を二回叩いて中村は楓と言い合いながら観客席を飛び降

り、森の中へ消えた。

「……………」

残されたヘルマン達は暫しの間無言で佇む。

「……………伯爵……………」

「……………なんだね？……………」

軋る様なニテンスの呼び掛けに、奇妙な迄の無表情でヘルマンは答える。

「……………あの巫山戯た餓鬼は俺に殺らせてくれ、…八つ裂きにしてくれる…!!?…」

全身から壮絶な殺気を漏らしながら、ニテンスは宣言する。

「あああら、じゃあまだやるのね？」

「…なんだ？貴様はこのまま引くともも言いたいのかセルウア？」

「睨まないで頂戴な、勿論アタシも追っかけるわよん☒……………ここまでコケにされたのは産まれて初めてだもの。ねえ伯爵？」

「無論だ。すらむい、あめ子、ぷりん。動けるかね？」

「応よ伯爵ー」

「これ位のダメージでしたらまだまだイケマスー」

「…第二ラウンド…」

「うむ」

ヘルマンは両の拳を打ち合わせて轟音を発し、何時もの笑みを消して言い放つ。

「麻帆良の流儀は売られた喧嘩は借金をしてでも買え…だそうだ。ここは一つ、郷に入っては郷に従うとしようか？」

## 14話 因縁の相手

「ゆえ〜…大丈夫かなあ、ネギ先生達……」

のどかは浮かない顔で、変わらず豪雨の降り注ぐ外を見やりながら息を吐く。

「べらぼうに強いという桜咲さん迄もが攫われてしまったらしいですから、生易しい相手では無いでしょうね……」

夕映もまた渋い表情でベランダの手摺りに凭れ、気難しい顔のままタレるといふ奇行を行う。どちらも落ち着いてなどいられない、といった様子だ。

「まあまあ。大丈夫だって、あの鬼みたいな先輩達だよ？しかも人質なんてあの人達が一番怒り狂いそうなやり方じゃない、あたしは寧ろ先輩方の誰かが前科持ちにならないかが心配だねえ」

朝倉は苦笑して不景気な面の二人に言い放つ。

「ま、私は村上やいいんちよを上手いこと誤魔化してくるから、思い詰め過ぎなさんな二人共。何たってあの人らガチの神殺し…あれ？誰だろ？」

朝倉が席を立ち、帰りが遅い千鶴を心配しているであろう夏美とあやかをフォローしに行こうとしたタイミングで、部屋のチャイムが鳴り響く。

「…朝倉さん、まさかとは思いますが……」

「…わかってるよ」

ハラハラして席を立つのどかと警戒して鈍器の様な分厚い本を掲げる夕映。朝倉自身も何時でも逃げられる様に腰を引き気味になりながらドアホンに出る。

「…はい、どちら様ですか？」

『闘獣部副部長の獅子崎と言えば判るかしら？』

「……ああーこれはどうも……」

受話器から聞こえてきた女性にしては低めのハスキーな声に、朝倉は予想外な人物の登場からか若干棒読み口調で応対する。

獅子崎 麗華。まるで名を体で表すかの如く、ポリユームのある金

髪を持つ伶俐な美貌のクォーターであり、常に体長5m近いシベリアトラ並みの雄獅子を連れている事で有名な女性である。朝倉は部活の取材で何度か顔を合わせた事こそあるが、部屋にわざわざ訪ねてこられる程の仲では断じて無い。反応に困るのも当然だろう。

「あの、すみませんがどのようなご用件で……」

「安心して頂戴、貴女の所が何かデマ記事でもでっち上げて報復をしに来た……なんて物騒な話じゃ無いから」

素っ気なく遮ると獅子崎は一つ息を吐き、朝倉に獅子崎は告げる。

「普通じゃない方法での伝言を貴女宛に頼まれたのよ」

「だーははははは!!? 上手く行ったなお前らあっ!!?」

「話し掛けないでくれ変態、知り合いと思われたくない」

「右に同じく、気持ち悪いから失せてよ」

「吐き気がしてきた、そのまま死に晒せ」

「その無条件に殺したくなってくる格好で寄るな、殴り殺すぞ」

「アんだてめえらあああああつ!!?」

藪を掻き分け、楓と共に合流した中村に対して浴びせられたのは冷たい拒絶の言葉だった。

「いや先輩、無理も無いって、ヤバいわよホント……本屋ちゃん辺りが見たらショック死するんじゃない?」

「ごめんなく中村先輩助けて貰たのに……でもウチも流石にそれはドン引きやわあ……」

「あの、中村先輩……大変申し上げ難いのですが余りお嬢様の視界に入らないで頂けると……」

「……ええと、ノーコメントでよろしいかしら、中村先輩?」

そしてそれは幾分オブラートに包んでいるとはいえ人質勢も同様であった。

「畜生おおおおつ!!?!!? なんだいなんだいお前らまで!!? 誰が一番身体張ったかなんて一目瞭然じゃねえかよ誰のお陰でスムーズに救出出来たと思ってるんだ!!?」

「アイヤ、仕方ないアルよ中村。今の格好だと女の敵所か人類の敵ア

ル」

「というかい加減その奇天烈な衣装を脱いだら如何でござるか？満場一致で不評なのは理解出来たでござろう」

「馬鹿め!!？俺の格好を見て替えの服なぞ携帯しているように見えるのか貴様らあ!!？」

「偉そうに言うなカテゴリ・人間のクズ」

冷たく吐き捨てる辻。中村は気にした様子も無くしようがねえな、などと呟きながらその場でフィギュアスケート選手の様になりながら跳躍して大回転。着地した時には鯨鉾付きビキニパンツ一丁になっており、丁寧に畳まれた変態グッズをそっと枝の上に置き何事も無かったかの様に走り続ける。

「今だ格好はどう見ても変態やのにえらいマシになった感があるのは何でやろうな……」

「張りもの付きのビキニパンツ一枚ってどう考えてもおかしな人の筈なのにね……」

「グダグダ五月蠅えぞガキ共！ともあれ人質は奪還したから後は逃げただけだなオイ!!？」

ひそひそと言い合うネギと小太郎を一喝して解決を謳う中村。しかしヘルマン達と事前に相対していた辻や豪徳寺は今だ警戒を緩めない。

「それがそうともいかなそうなんだよ中村。推測だが単純に距離を離しても奴らにはあの半透明の幼女がいる、多分奴らは京都で白髪の少年やら黒尽くめやらが使っていたワープ能力か魔法かと同様のものを使えるらしい。桜咲、お前が「は、はい!!？何ですか辻部長!!？」うおっ!!？」

情報を共有しようとして声を掛けた途端、爆発した様に高速反応して叫ぶ様な声で返答する刹那の勢いに辻は小さく悲鳴を上げて、並列走行していた位置から一分距離を取る。

「…どうした桜咲？」

「ど、どうしたとは何ですか？私は至って平常心ですが!!？」

「何がどうしたとまで尋ねていないのにそんな答え返してる時点で明



らかに平常心とは逆の状態だろ。本当にどうした?…真逆あの連中に神楽坂ちゃんみたいに妙な事されて無いだろうな!?!」

顔を紅潮させて、走りながらもバタバタと手足を無意味に動かす明らかに落ち着きの無い挙動不審な刹那に、辻は悪い予感を覚え問い詰める。

「あたしみたいにな、って何よあたしみたいにな!!?!」

「明日菜落ち着くアル、辻も刹那が心配で余裕が無いだけアルよ。明日菜に追い打ち掛けようとかそんな陰険な意図は辻には無いアル、許してあげるヨロシ」

「そ、そうですよ明日菜さん!!?!辻さんは明日菜さんに起こった悲劇に関して悲しんできちんと憤っていました!!?!ただ刹那さんが心配なだけです、許してあげて下さい!!?!」

下着姿で裸足の明日菜は足場の悪い森林の中を走れない為、救出した段階から依然として明日菜を抱え上げて走っていた古と平行していたネギが辻のフォローをする。

「待ちなさいアンタら!!?!まるであたしがあの変態ジジイ共にかにも何かされちゃったみたいない方はやめなさいよ!?!」

「ええーだって他の人質が攫われたまんまの格好で纏めて閉じ込められてんのに一人だけ別に吊るされてて触手っぽい謎エロ生物がいておまけにエロ下着に着替えさせられてんだぜ?…何も言うな、自分で傷口を広げようとしなくていいんだ、アスニヤン。大丈夫、俺達は何かあっても友達だからよ?」

「アンタは今から先輩後輩の仲ですら無いわよこの史上最強の変態!!?!勝手に人をエロ担当に決め付けんじや無いわよーっ!!?!」

明日菜は真っ赤になって怒りながら、抱えられた体勢のまますれ違いう枝や細木を引っこ抜いてしたり顔の中村へ投げ付ける。

「危ねっ?!?!何しやがんだ折角人が氣イ使つてやつてんのに!!?!」

「的外れにして心底余計なお世話よこのド変態!!?!」

ぎゃあぎゃあと言い争う二人に介入する者は無く、各所で問い掛けや話し合いが勃発していた。

「い、いえですから本当に何も!!?!それよりも辻部長、色々とまだ整理

が着いていないので余り近寄らないで下さい!?!」

「何だよそれは!?!?単に攫われる前の俺の人生録に引いた訳でも無いならお前のその距離感は一切何があったんだよ!?!?」

「……悪かったな、那波。俺の不注意でお前をこんな荒事に巻き込んじゃまった。護ろうと大言吐いておきながら情けねえ……」

「……いいえ、こうして助けに来て下さったんですからお気になさらないで下さい。半分は、先輩の言う通り不用意に顔を出した私の責任ですから……」

「助けに来るのなんざ当たり前の話だ、一般人のお前にこんな事態が予測出来る筈も無え。……こんな状況で頭下げた位でチャラにする気は無い。お前を必ず無傷で返して、後で必ず詫びを入れに行く。一度裏切つて安くなつちまった漢の言葉だが、もう一回だけ俺を信じて、身を任せてくれ、那波」

「……ふふ、承りましたわ豪徳寺先輩。エスコートをよろしくお願ひします」

「応。……エスコートなんて柄じゃ無えがな」

「……なんか短い間に友人達の間関係が色々変化してるなあ。僕が買ひ物行つてる差中に一体何があったのやら?」

「俺にもわからん。今回の事件を鑑みれば不謹慎な言い方だろうが、双方にとつて悪いものでは無かろうよ」

「そうアル!!?刹那の鈍感と豪徳寺の女つ気の無さは私から見てもヤキモキするアルから……明日菜、その枝アシナガバチの巣が付いてるアル!?!?」

「おおく中村殿も大変でござるなあ。あれは麻帆良の変種、テアシナガバチでござる。中村殿ー!!?その蜂は長い手足のホールドで木の皮位はあつさり剥ぎ取る力があるでござるから気をつけるでござるよ」

「遅いわああおあつ!?!?」

「ひゃあああ中村先輩が蜂に吊り上げられたで〜☒」

「な、中村さーん!?!?」

「うおっ気味悪りい!?!?この角度だと丁度旦那の股間が真下から!?!」

？」

「おどれら敵から逃げとるんやからもう少し静かに纏まって逃げれんのかい阿呆共おおおおお!!?!!?」

小太郎のキレ気味なツツコミが薄暗い森林の中に轟いた。

「…兎に角あの液体生物共が使ってんのは恐らく水を利用した、陰陽道で言う飛梅の一種や。ある程度量のある水の所へなら自由に移動が出来るんやろ…：俺が追跡を振り切れなかったんもあのチビ共が居たからなんが大きいわ」

気を取り直して追跡の余念を語るのは実際に追いかけられた経験が前にもある小太郎である。

「…飛梅っていうのは…」

「…西洋魔術で言う転移魔法ゲートです。水、若しくは液体が媒体ならこの大雨は最悪のシチュエーションです」

辻の疑問に、まだ直接顔は向けられないながらも何とか平静を取り戻した刹那が答える。

「…連中が直ぐに追ってこない理由はなんだ？ああ迄見事に初手から潰された以上、遊んでいる余裕はあるまい？」

大豪院が眉間に皺を寄せて呟く。

「…奇襲する隙を狙っているんじゃない？奴等の手の内は今だに割れていない以上、どういった攻撃をして来るのか僕らには予測が困難だからね」

「小太郎。お前を追っていた時の奴等はオカマが普通の魔法使いっぽい攻撃、ジジイが手足と口から怪光線、でかブツが剣を振り回す他に目から怪光線だったな？」

「ビーム率高くね？」

山下の推測を受けて豪徳寺が小太郎に再確認を行い、中村が茶々を入れる。

「ああ…強いて言うなら爺さんの口から出る怪光線は手足のと違ってもっとヤバそうで、マッチョ野郎の怪光線は、なんつうか超強力なサーチライトみたいな感じやった。それこそ肌が焼ける位のや」

苦々し気に背中への火傷に触れながら小太郎が補足する。

「……この分だとオカマは股間からビームを出しそうだな……」

「中村、死ぬ。考えていても仕方が無い、追撃が来ないなら今の内に距離を稼ごう。幸いこの時間帯なら此処らを縄張りにしてるスレイプニルも寝ぐらに戻っているだろうし早く市街地に……」

「それは困るね」

辻の言葉の途中で全員の背後から聞き覚えのある老人の声が響き渡る。慌てて振り返る一同の目に飛び込むのはいつの間にもやらずぐそこまで距離を詰めていたヘルマン、セルウア、ニテンスの姿だ。足元には半透明の液体に姿を変えたハイ・スライムの姿もある。

「操<sup>カオ</sup>!!?」

「言ってる側から追いついて来やがったか!!?」

憎々し気に叫びながら一行は抱えていた人質を下ろして陣の中央に導き、大豪院や豪徳寺、ネギに刹那達は構えを取る。そして、

「ああ、やっぱりな」

「来ると思ったぜ」

振り向いた全員の背後から突き出されるニテンスの大剣とセルウアの黒雷を、ヘルマン達から瞬時に視線を外して再び振り返った辻と中村が、黒雷をフツノミタマで斬り裂き、大剣を蹴り上げてそれぞれ防いだ。

「……ああ!!?」

「う、後ろ!!?」

「辻達が対処してる、正面から目を離さないの二人共!!?」

予想外の奇襲に慌てるネギ達を鋭く諫めるのは山下。あくまで大豪院や豪徳寺も正面のヘルマンから視線を外さない。

「……つ!!?」

「あらあゝ!!?」

ニテンスとセルウアはそれぞれ驚愕の声を上げながらも、反撃の刺突と気弾を躲し様飛び下がって辻達から距離を取る。そのままヘルマン達が辻達を挟み込む様な構図のまま、暫し両者は睨み合う。

「……ふむ、絶好の奇襲だと思ったがね。外見によらず余程場数を踏んでいる、ということかな?」

ヘルマンの何処か残念そうな問い掛けに応ずる様にヘルマンの側に立っていたニテンスとセルウアの姿が崩れ、それぞれが半透明の身体を持つ幼女、あめ子とぷりんの姿になり、ヘルマンの足元で蠢いていた残る一体、すらむいも詰まらなそうな表情で幼女の姿を形取る。「…まあこの歳にしちや奇つ怪な経験積んでるけどよ、奇襲が読めた原因は他にあるぜ」

中央の千鶴達を庇う様に両腕を広げながら、豪徳寺が皮肉気に言う。

「先ずそのオカマは俺に一度見破られて知っている筈だが、姿形だけ似せても俺は線の違いで別人と解る」

辻が冷ややかに、

「次に貴様らの存在を我々は認識していなかったというのにわざわざ声を掛けて奇襲の機会を無意味に潰す理由が無い」

大豪院が鼻を鳴らし、

「更にその半透明幼女は三人居たのに、声掛けてきた時にジジイの足元に蠢いてた液体幼女はどう多く見積もっても二人分しか居なかった」

中村が舌を出し、

「後は桜咲ちゃんからの情報でその液体幼女が返身能力を持っているのは知ってたから、態々奇襲の機会を潰した事実と合わせて鑑みればマッチョかオカマのどちらか、又は両方の姿に液体幼女が化けさせてるんじゃないかと推測出来る。後はカモフラージュの為にご老体の足元で液体幼女の最後の一人を、何人が纏まっているのか判別し難い液体の渦状に変化させた上で、背後から僕らに声を掛ける。振り向いた僕らに自軍の全員が居ると思わせておいてから、今迄僕達が進んでいた方向であるという理由も兼ねて、二重の意味での死角である背後から不意打ちが来るんじゃないかと読んだだけだよ」

山下が薄く微笑んでそれぞれが告げる。

「単に認識されない状態から不意を討つても直前で察知されて何人かには迎撃されると踏んで挟み撃ち状態での奇襲から混乱の後の殲滅戦に移りたかったんだろうが、生憎だったなてめえら」

豪徳寺の締めくくりにヘルマンは言葉を返さない。逆方向の二テンスやセルウア、ハイ・スライム達も顔を歪めつつ、無言のままだ。「…どうかしたのか、あいつら?」

「驚いているんですよ一瞬で戦術を見切って打ち合わせも掛け声も無しに完璧な連携を取って対処して見せた先輩達の腕前に!!?!!?」  
訝し気に呟く辻に対して、堪り兼ねた様子で刹那が叫び返す。

「…あの状態からの奇襲では拙者も直前の気配から回避を行うのが精一杯でござるな」

「迎撃所か反撃してるポチ達が異常アル!!?」

武闘派女子の面々からのツツコミにバカレンジャーは各々不満そうな顔で返す。

「え〜…こん位の奇襲なら中学時代から軍事研の奴等や刀剣甲冑部の集団に中学時代からされてたぜ?」

「エヴァさんやら京都の鬼達に白黒コンビも波状攻撃が得意だったり集団で潰しに來たりコンビプレイが凄まじかったりと多方面からの攻撃はここ最近でも喰らい慣れてるし…」

「連携に関しては何と無く誰がどう動くか解るとしか言えねえし…」

「そもそも事前に人質を取るような輩が正面から來る筈も無し、常に死角は警戒していた」

「凄いだけで敵の頭数を減らせた訳でも無いんだから、そんなに過剰に評価されるようなことかなあ、こんなもの?」

「ベテランでも瞬時にんな行動は中々取れんわい、何なんや兄ちゃん達は!!?」

「…うん、もう辻さん達だからしょうがないんじゃないかな、小太郎君」

「兄貴!!?んな風に諦め混じりの悟りを掴むにはまだ早えですぜ!!?」

得体の知れない者を見る様な目付きでツツコミを入れる小太郎に何処か遠い目付きでネギが答え、

「…ま、そうよねえ、先輩達だもんねえ…」

「なんや解らんけどえらい説得力ある台詞やなあ、それ」

「…なんだか凄い、って事位しか解らないわね、私だと……」

明日菜と木乃香は笑い、千鶴は苦笑した。

「フ、フハハハハハハハハ!!?!!?」

周囲に浮かんだなんとも言えない空気を裂いてヘルマンが愉快そうに高笑いを上げる。

「フ、フフフフ……!……ニテンス君、どうだね? 只の色物集団で無いことは証明された様だが!?!」

ヘルマンの言葉を受け、ニテンスは大剣を上段に構え直しつつ、薄れた怒りに反比例して真剣味の増した目線を辻達に向けて返答する。

「…そうだな伯爵。俺もいささか怒りで目が曇っていたようだ」

「良かったじゃないニテンス! 強敵と殺し合いたってアンタの願、叶いそうよこれだと!!?」

「…ま、確かに単なる変態集団では無いみたいだな」

「舐めてたつもりは無いですが、今回も楽な仕事じゃありませんネー」

「…抵抗された方が野郎は燃える…フフ……」

「ぷりん、貴様の言動は何時もながらズレている、黙っている」

「あらこれが良いんじゃない天然電波系幼女なんて稀有な属性よ!?!? 萌えが解って無いわねえ相変わらず!!?」

漫才の様なやり取りを聞きながら、辻達は中心の非戦闘員を守る様に陣形を前後に厚くする。

「…さてあつさり追い付かれた訳だがここからどうする?」

「…とりあえずあのオカマ野郎は同志の匂いがするからあんまり闘り合いたく無えな…」

「どうでもいいわ阿呆。何とかして非戦闘員を逃がすのが第一だが…」

「長瀬ちゃんと古ちゃん桜咲ちゃんに、ネギ君小太郎君を付けて僕らがつかつた隙に市街地方面に進ませよう。魔法使いの後衛に前衛後衛を兼ねた退魔剣士、一定以上の実力がある前衛三人が居れば新手がいても対応は出来るよ」

「…それしか無えな。総員聞いた通りだ、文句を聞いている暇は無え。那波、巻き込まれんのも初めてなお前は一等訳解らんだろうが、こい

つらと一緒には逃げてくれ」

ものの数秒で方針を決めてしまったバカレンジャーに、ある意味当然ながら反論が飛ぶ。

「冗談や無いで兄ちゃん達!!? やられっぱなしでこのまま逃げろ言うんかい!!?」

「奴等の実力は未知数です、辻部長達だけでは危険です!!?」

「魔法知識の不足している辻さん達だけじゃ危ないですよ!!?」

「ポチ!!? また自分達だけで格好つけるつもりアルか!!?」

「五月蠅え!!?!!?」

豪徳寺の怒喝に、反論の言葉がピタリと止む。

「言い争ってる時間は無えんだよ、先ず何を優先するかを間違えんな!!? 身内を助けに来たんなら先ず身内を護るのが当たり前だろうが!!?」

「…で、でも先輩達……」

先程抗議した面々には居なかったが、矢張り納得しかねる明日菜が声を掛ける。言う迄も無く、辻達が告げた配置では五人組の方に負担が大き過ぎるのだ。

「言いたいことは解る、でもお前は近衛ちゃんの護衛で親友だろ、桜咲。どっちを優先するかなんて、言う迄も無いだろ?」

「小太郎、お前は俺らに迷惑掛けた借りを返すんだろうが。なら個人の感情は捨てて言うこと聞け! カタギの安否を先ず気遣うのがお前の姉ちゃんのやり方じゃ無えのか!!?」

「ネギ君、僕らは奴等を殲滅する訳じゃ無いしある程度は小太郎君から聞いて戦力も解ってる。何より君は明日菜ちゃん達を助けに来たんだろう? 前にも言ったよ、僕達を、信頼してくれ」

「古、言った筈だぞ。これは対練では無い、下手を打てば命の危ない場だ。魔法戦の経験が無い貴様を真正面から敵主力にぶつけるにはリスクが大き過ぎるのだ、漏れるかもしれない残敵に備えろ!!?」

「それぞれが反論を封じられ、それでも何かを言い募ろうとするが、…任せるのが最適でござろう。まだ実戦で連携を取った事の無い拙者達が下手に混ざれば、下手をすると先の連携を乱す事にもなりかね



んでござる」

それまで黙って考え込んでいた楓が辻達に賛同する。

「楓!!?」

「楓さん!!?」

刹那やネギは咎める様に声を上げる。が、楓は敢えて答えず、中村へ向けて言葉を放つ。

「面倒な事態ばかりでござるな。主に信じて任せろ、としか言われていない気がするでござるよ」

言外にまだまだ信頼はして貰えていない様でござるな、とでも言いた気な楓に中村は苦笑して軽く頭を下げる。

「済まねえな。でも迷わずかわい子ちゃん達を任せられんのは、楓ちゃんを信じてっからこそだぜ?」

その言葉に楓は僅かに目を見開き、中村を見やるが、やがて小さく吹き出して中村に告げる。

「…その格好では真面目な事を言っても説得力は無いでござるよ、中村殿」

「人を見かけで判断するなよ楓ちゃん!男にとって重要なのは中身だぜ中身!!?」

「先ず中身が腐っている様な男が戯言をほごくな」

「こんな時に巫山戯んなやポチい!!?」

「巫山戯てんのはおめえの格好だボケ!!?」

中村の抗議を一蹴して豪徳寺は千鶴を促す。

「重ねて済まねえ、行ってくれ」

「…あまりに世界が違い過ぎて今の私からは言えることなんて無いのでしようけれど……」

少し悲し気にそう返しながらも千鶴は怒った顔を作り、豪徳寺に告げる。

「女の子に心配ばかり掛けさせるのはいい漢なんかじゃありませんよ?…無事に戻って下さいね」

「……応、約束するぜ」

豪徳寺は重々しく頷き、はっきりと答えた。

「……そんな訳だ。納得出来なからうが行け、行つてくれ皆。まだ俺達には勝算がある。考え無しに身体を張る訳じゃ無いんだ」

辻が最後にそう言い放ち、会話は終わりだ、と言わんばかりにバカレンジャーの全員がヘルマン達に向かい距離を詰め始める。

「……伯爵？どうも逃げちゃうみたいよお姫様達」

途中から大声での言い合いになってしまった為、ヘルマン達にも辻達の行動は伝わってしまった。セルウアが大仰な動作で嘆きながらヘルマンに問い掛ける。

「ふむ、その若さで自らの実力を過信せず、冷静に対応する判断力は私をしてとでも好ましいものだが、こちらとしてもそれでは少々困った事態を招くのでね…本意では無いが、陳腐な三流悪党の台詞を吐かせて貰おうか」

ヘルマンはさも残念そうに溜息を吐きながら辻達に向けて、滴る毒の言葉を投げ掛ける。

「私達の闘争における見物人ギャラリを簡単に引かせて貰っては困るね。心配せずともか弱い淑女に暴力など振るいはしないよ、バカレンジャーの諸君？」

その戯けた物言いに辻達は一斉にがなり立てる。

「巫山戯ろジジイ!!？」

「誘拐すんのが暴力行為じゃ無えとでも思つてんのかボケ!!？」

「二つに下ろされたいのかアンタは？」

「そもそも貴方がバカレンジャー呼ばわりしないでよ普通にムカつく」

「他那厚？无耻的？度令人吃？……!!？」

罵倒の嵐にも動じず、ヘルマンは涼しい顔で言葉を続ける。

「まあ落ち着いてくれたまえ。…時にカグラザカアスナ嬢の衣装は気に入ってくれたかね？私的には中々良いチョイスだと自負しているのだが…？」

「……変態臭い発言だ」

「きゃくく！伯爵ちよつと所か完全にセクハラよセクハラ!!？」

「流石だぜ伯爵」

「悪役の方向性違つて来てマセン？」

「…公開処刑」

実にイイ笑顔でのたまうヘルマンを囁し立てるセルウア達。対照的に明日菜は静かに目を細め、小さく呟いた。

「……………殺す」

「あ、明日菜さん冷静に!!?冷静になつて下さい!!?」

「はっ！確かにアスニヤンのセクシャルアピールポイントが脚から尻にかけてのラインに有ると見て下半身をシンプルなショート一枚で強調したてめえのセンスは中々だがまだまだ甘えな!!?ワンポイントアクセの使用でまだまだ幾らでもアスニヤンの美しい尻からぶばああああ!!?」

「アンタから死ねえええええ!!?」

「オー綺麗に飛んだアル…」

「真面目にやれやアンタらああ!!?」

コントのようなやり取りを他所に、辻はヘルマンの発言の真意を探る。

……真逆本当にセクハラ目的での発言じゃあるまい。しかしなんの意図が……………!!?」

辻はネギをコツソリと引き寄せ、耳元で囁く様に尋ねる。

「…ネギ君、神楽坂ちゃんの衣装から何か魔法的な要素とか気配みたいなものを感じないかい？」

「え……………!!?」

ネギは驚きに目を見張るが、辻に促されて明日菜を見やり、暫くして再び目を見開く。

「…感じます。多分ペンダントが何かの魔法具で、明日菜さんと繋がつて…います」

「…やつぱりか」

辻はヘルマンを正面から睨みやり、ヘルマンも辻を見返す。

「結局無事に返すつもりは無いと？」

「それは誤解だ。彼女のそれは私達の要求に伝えてくれさえすれば、発動しない。どうかね?…おっと、もう少しの間でいい、キレずに話

を聞いてくれたまえ、諸君」

全員の目が据わったのを見てヘルマンが少々慌てて釘を刺す。

「要求といっても理不尽な事を言うつもりは無いよ。君達の実力が知りたい、私達を倒すことが出来たらカグラザカアスナ嬢に取り付けた仕掛けは直ちに解除しよう。君達好みのシンプルな条件だと思うが、如何かな?」

「……仕掛け、つてのはあたしの首に付いてるこれよね」

明日菜はヘルマンの言葉を受けて、首元の華奢なペンダントを握る。

「そうだね」

「…無理矢理外すとヤバい事になるつてのがお約束のパターンだねなあ……」

「さて、私の口からは何も言えないね」

低い声で問う中村にも動じず、ヘルマンは答えをはぐらかす。

「…糞が。結局逃げられません、つてか?」

豪徳寺が吐き捨て、一同の退去は中断を余儀無くされる。

……よくやるわよねえ伯爵も……

セルウアは一連のやり取りを聞きながら内心でほくそ笑む。

何せあのペンダントは明日菜の魔法無効果能力をヘルマンに移し変える為の魔法具。それも普通に取り外すだけで効力を失ってしまう様な脆い仕組みのものなのだ。

…私達は決して嘘は吐かない。ただ往々にして真実を語らないことが多いただけ、とは言うけれどこれは伯爵の手腕を褒めるべきよねえ……

本来ならばあんな形で奇襲を喰らい、人質を奪還された時点で詰んでいたのだ。それを巧みなブラフで有りもしない仕掛けを意識させ、全員をこの場に縫い止めた。

「……こういう所はもつと見習わなきやよねえニテンス?」

「…私は好かんが、お前が正しいだろう」

ニテンスは苦い表情ながらもセルウアの言葉に同意する。

「…確かになあ。ぶつ倒せば終わりってのは俺達好みだぜ、ちったあ  
気に入った」

「そうかね、ならば…」

「但しその百倍、気に入ら無えがなああ!!??!!??」

静かに呟いた豪徳寺は、ヘルマンの合いの手を掻き消して咆哮す  
る。

「てめえはそれだけの為に、女共を攫ってこんな大掛かりな真似しや  
がったってかあ!!??つ戯んなよ糞野郎が!!?そんなもんなあ、俺らは  
挑まれりやあ、何時でも無条件で受けてる話なんだよ!!??!!??…それ  
を、カタギを巻き込んでまでコトを広げやがって…!!??」

憤怒の形相で豪徳寺は叫ぶ。同調する様に辻達は目を細め、戦意を  
傍目にも明らかに、増加させて行く。

「私達を倒せたら?上等だオラア!!?舐めた宣言した事を、地べたで  
のたうちまわらせながら後悔させてやるぜ…!!??」

ゴン!!?!!?と破裂した様な音を立てて拳を打ち合わせる豪徳寺。  
その隣に並ぶは彼の悪友達。皆が豪徳寺に負けず劣らずの闘気、いや  
殺気に近い壮絶な気を撒き散らしていた。

「…良い気を放つね……」

ヘルマンは嗤う。

「才有る若者はこうで無くてはいけない。勇氣と無謀、その刹那の差  
を行き交うある種向こう見ずとも取れる言動の勢い。…矢張り有能  
な人間とは……美しいね……!!??」

グニヤリ、と。刹那の間、ヘルマンを見ていた者は、その顔がヒト  
では無いナニカに歪んで見えた。

「……地が出かけてるわよお、伯爵?」

「ああ」

クスクスと笑うセルウアの指摘に、左右に長く裂ける、まるで鮫の  
様な笑みを無理矢理に収め、ヘルマンは言い放つ。

「どうかねニテンス君、セルウア君?もつと趣向を凝らして闘おうと  
私はつい先程まで考えていた。それもある意味私達らしさだからね。  
…しかし彼らのこの純粋な闘志。何を置いても私達を殲滅せんとす

る必殺の覚悟だ。…私達は既に一本取られた身でもある。ここは一つ、彼らの胸を借りるつもりで全力を、最初から出してみないかね？」

ヘルマンの言葉に、呼び掛けられた両者は目を見開き。

そしてヘルマンと同様に、ある種陰惨な、捕食者の笑みを浮かべる。

「…丁度私も煩わしい制限抜きで殺り合いたかった所だよ伯爵」

「あらあらあら。…若い子達相手に本気って、イイのかしらねちよつと、どうしちやおうかしらウフフフフフフ…!!?」

「っ……………!!?」

ネギは、小太郎は。そして刹那達は。三人から発せられる異様な気配にある種吞まれかけるのを自覚した。

「……………どうして……………!!?」「なんなんや……………!!?」「……………これ、は……………!!?」

齒噛みする。言葉を発しなかったとはいえ、彼らの、彼女らの怒りは辻達と同様だった。誘拐騒ぎまで起こして態々腕試しに来たなどと言う巫山戯た言動に対する怒りは本物であった。だというのに、彼らが発する得体の知れない圧プレッシャー力は、ともすれば足を引いてしまいうな弱気を生む、異形の迫力に満ちていた。

「…人や無い、ンなことは、わかっとなる!!?」

言葉にして形容するならば恐怖と名が付くのだろう。そんな怖気を振り払う様に、小太郎が叫ぶ。

「俺も闘るで!!?元はと言えば俺から繋がる因縁や!!?兄ちゃん達だけにええ格好はさせへんわ!!?」

「…戦闘には私も参加します」

続いて刹那が、緊迫した表情ながらも申し出る。

「…せつちゃん……………」

「お嬢様……………いえ、このちゃん。安心して下さい。二度不覚は取りません」

不安そうに声を掛ける木乃香にきっぱりと宣言し、刹那はヘルマンに問い掛ける。

「よもやそこまで大仰な宣言をするからには、相對する人数に制限など付けまいな?」

「勿論だとも」

笑顔のままヘルマンは快諾し、ネギへと視線を向ける。

「ネギ君、君は…どうするかね？」

「っ…!!？」

ネギは不可視の圧力に顔を歪めるが、僅かに震えが残る、されど力強い声で宣言する。

「…戦います、明日菜さん達を攫った貴方達には僕だって怒ってる!!  
?絶対に僕の生徒に、手出しはさせない!!？」

「…イイね…!!？」

ヘルマンは一層愉快そうに嗤うと、楓と古の方へと向き直る。

「この際だから総出でかかって来て構わないがね？」

「…貴殿らの言葉はいささか信用に欠けるものでござるからな…」

「…口惜しいものも感じるアルが…」

視線を向けられた二人は辻達に視線を向け、頷きを返されると、木乃香達非戦闘員を連れて脇の方へと移動し始める。

「最低限の保険として拙者達は皆の護衛に着かせて貰うでござる」

「誘拐犯の宣言なんて当てにならないアル」

ヘルマンはある種挑発めいた言葉に気を害した様子も無く、肩を竦めて了承する。

「構わないよ、私達からすれば無用な心配だが、君達からすれば当然の用心だろうからね」

そしてヘルマンはゆっくりとした歩みで辻達の脇を抜け、ニテンスとセルウアの方へと移動する。

「すらむい、あめ子、ぷりん。君達も下がっていたまえ…このレベルの闘いに巻き込むのも僥倖ないからかね」

スライム三人娘は言葉を受けて、各々反応を返しながらも素直に下がる。

「舐めんな、と書いてえ所ダガヨ…」

「お楽しみみたいですカラネー」

「…間男的扱い…」

「ハハハ絶好調だねぷりん」

「…舐められてっか？俺達もよ……！」

中村は青筋を立てつつ呟く。辻達には全力で掛かって来いと言いつつながら向こうは戦力の温存と来たものだ。余裕の言動に怒りを感じるのも無理からぬことではある。

「誤解にならないように言っておくが…すらむい達は確かにこの環境下では著しく戦闘力を増す一端の戦力となるだろう存在だ。しかしそれを持つとしても、悪いが私達には誤差と言っている範囲でしか戦力の増強にはならない。それでも彼女らは限界してから長年付き合っている可愛い使い魔フェアミリアでね。出来れば危険に晒したくは無いのだよ」

悠々と語るヘルマンが一拍間を置いたタイミングで、ニテンスが一歩前に出て言い放つ。

「これ以上の言葉は無粋だ伯爵。…私はもう待ち切れない。始めようではないか、闘争の宴を!!？」

「あらあらせっかちなねえニテンス。…いいかしら、伯爵」

「ハハハ済まないねニテンス君。歳を取るといつい長話をしたくなる。ならばあと一言だけ…ネギ君、予定とは大分異なった形ではあるが、私達はこれから君を試させて貰う。無論それは辻君達に対しても同じ事が言えるが、君にとっては正しく人生における一つの転機となり得るだろうからね」

「……どういう、意味ですか？」

意味不明なヘルマンの言葉に、ネギは思わず問い返す。

「なに、簡単な事だ。…君は悪魔が憎いだろうから、ねえ」

「……………え？……………」

その言葉にネギは一瞬呆け、辻達は意味を謀りねて眉根を寄せる。

しかし誰かがそれに問い掛けるよりも早く、ヘルマンに変化が訪れた。

三人の全身が一瞬ブレると、身体が異形へと変貌を始める。

ニテンスの身体は急速に膨張を始め、手足や胴体が今迄の数倍の大ききさへと膨れ上がる。肌は鉄錆の様な楠んだ赤色に変わり、剥き出しになった下半身には肌と同色の短い獣毛が生え揃う。両の足先は馬



や羊のそれに似た、黒檀の輝きを放つ蹄に変わり、人のままの造形を保った両の手には、しかし刀剣の如き鋭い鉤爪が生え揃う。

何よりも大きく変貌したのは頭部。巖の様な厳めしい面相は人のものですら無くなり、螺子くれた二本の角を頂く巨大な山羊のそれとなる。両の眼にまなこ瞳は無く、ただ熾火の様な青白い光が洩れていた。

セルウアの全身は金属質の輝きを放つ黒い装甲の様なものに覆われて行く。何処か昆虫めいた妙に生物的な外見を持ち、湿った輝きを放つ其れは頭頂から足先迄を完全に覆い尽くし、セルウアの外見を異形の昆虫の様な、騎士の様な姿へと変貌させた。背中からは蝙蝠にも似た翼が現れ、頭部には僅かに湾曲した四本の角が王冠の様に生え揃う。尻から垂れ下がる多関節を持った蛇の様な尾が、まるで一個の生命体の如く自らの全身を這い回る。

ヘルマンの衣服は軽装の甲冑へと姿を変え、十指には鉤爪が、背部には蝙蝠の羽根が、尻からは滑らかな質感の、三角形の先を持つ尾がそれぞれ現れる。つるりとした卵の様な質感を持つ楕円状の球体めいた形状になった頭部には二重に折れ曲がる二本の角。その下の瞳はまるでランタンジャックオーランタン持ちの男が掲げる灯籠の様な、茫洋として何処か不気味な光を放つ。歯車の様な凹凸を持つ四辺形の歯の奥では、まるで核融合の如き不気味な白い光が時折瞬いていた。

三体の異形は整然と横に並び、人の姿をしていた頃と変わらぬ確かな知性体の動きで、呆然とする一同に名乗りを上げる。

7mを超える巨体と化したニテンスは、己と同じく巨大化した片刃の大剣を地面に突き刺し、剣の柄に両の手を組み、雄々しく名乗る。「序列503番、階級は男爵、称号は《輝く瞳》人の界にて名乗る名は無い。さあ始めよう、純粹なる闘争を」

セルウアは全身を滑る様に光らせながら以前と変わらぬ物腰でしなを作り、右の人差し指を頬に当てながら軽快に名乗る。

「序列498番、階級は子爵、称号は《霸王の従僕》さあ可愛子ちゃん達、アタシを愉しませて頂戴、色んな意味で…ね」

ヘルマンは優雅に一礼し、正しく異形の身に相応しい歪んだ笑みを浮かべながら、朗々と名乗る。

「序列328番、階級は伯爵、称号は《未来の狩り手》《これまで通りヘルマンで構わないよ諸君。…一つ付け加えるならば…」

立ち尽くすネギを見据えて嗤い、ヘルマンははつきりと告げた。

「君の仇ということになるね、私達は」

## 15話 超常的な悪魔と非、常識的人間

それは年端もいかぬ幼い頃、遠く離れた故郷での忌まわしい出来事だった。

雪深い山奥の淋村、遠縁の叔父を頼って僕は其処に住んでいた。今にして思えば、歳の離れた姉と幼馴染の少女の他、村の皆は親切に接してはくれるものの、何処か隔たりのある。…悪く言うならば腫れ物に触る様な接し方をされて来たと今にしてみれば思う。

僕が両親のいない子供だからか、それとも村の人間にしてみればあの意味馴染み深く、だからこそ今は亡き英雄の忘れ形見だからか。当時の僕は決してそんな環境を辛いと思つた事は無かったが、きつと自らも意識していない所で不満はあつたのだろう。だからこそ猛犬の綱を切つたり、真冬の湖で泳いでみせたりして父親を望んだ。

姉に止められて無謀な行動こそ辞めたが、心の奥底で僕は常に千の呪文の男とまで呼ばれた偉大な魔法使いである父親の事を求めていたのだろう。別に赤の他人が嫌な訳じゃ無かった。ただ自分を構つてくれる人を望んでいた。まだ見ぬ父は、世界を救つた英雄は、きつと優しい人だと、そう思つていたから。ただ一心に望んでいた、父親が飛んで来てくれるような情景を。

だからこそあんなことが起こつた。僕は今でもそう考えている。魔法旅団の一個大隊にもひけを取らない程の腕前を持つた一廉の村の魔法使い達が為す術も無くやられていつたあの悪夢の様な光景は、自分自身に罪咎の一端があるのではないかと。

『…張り合いの無い。こんなものか？それなりの実力者もいると聞いていたが？』

その異形の影、巨軀の山羊頭の眼光は比喻で無く視線の先を焼き焦がしていた。眩い光の中、手にしている巨大な剣が一閃する度に村の人達が血飛沫を上げて斃れていく。

『そんなこと言うもんじゃ無いわよ○△∥\*★≡?。どれだけ手練れの魔法使いでも、こんな田舎に引つ込んじやったら鈍らない訳無いん

だから。大体脂が乗ってる時期は過ぎちゃってるお年寄りが大半占めてる集団相手に強さひけらかしたつてそれこそ詰まんないと思わない？豊かさと平和は臆病者を作る…なくんて言うけれど、平穩は戰士を只の人に換えちゃうわねえ……まあ穩やかな顔したロマンスグレーもアタシは割と好みの範疇だ・け・ど？』

炎上する民家の屋根の上、異形の甲冑が姿に似合わない甲高い声で笑う。戯けた態度の彼か彼女は、しかし異形の群を指揮しつつ、自身も多くの村人を踊る炎で、蠢く流水で、轟く雷で薙ぎ払ったのだ。

『やれやれ、二人共無慘に仕上げたものだね。私が奪えばそれで済むだろうに』

やれやれ、とでも語尾に付きそうな呆れた調子で、何処かユーモラスにも感じる卵状の頭部と丸い目を持った黒い影が言い放つ。その姿と穩やかな物腰は周りの惨状と乖離し過ぎていて、形容し難い禍々しさを生んでいた。

『先程はああ言ったが、片手間であしらえる程腑抜けた連中でも無かったのだな』

『だーいたい伯爵に掛かったら死ぬより辛い石佛行きじゃないのよう。…殺してあげた方が慈悲つてもんじゃないかしらあ？』

魔眼の羊と甲冑の男女が嗤う。それを受けて伯爵と呼ばれた魔の者は――その悪魔は口を愉し気に真横へと引き裂いた。

『例え既に選択肢の閉じてしまった壮年、老年の者達でも、己に明日がもう来ないと理解する瞬間は実に良い表情を浮かべるものでね。余り年寄りの楽しみを奪わないでくれたまえ、二人共？』

『…あーら、それはゴメンなさい伯爵？』

『なんとも悪魔らしいことだ、貴殿はな』

揃った動作で肩を竦めつつ、二人の異形は言葉を返した。

僕はそんな悪夢の様な光景――血塗れの村人達が冷たくなっている、彼方では恐怖と絶望の表情で固まっている。只の一人も生き残りの居ない炎上する村を、声すら漏らせずに震えながら目にしていった。僕は、無力だった。

『……さて、少年』

悪魔の群の主が僕へ静かに呼び掛け、僕は身体を跳ねる様に一度震わせた。

『残念ながら君には特に念入りに眠ってもらわなければならない。二度と目を覚まさぬ程に、深くね』

そう言つて悪魔は、再び凸凹の口を左右に裂く様にして、僕へと笑いかけた。

あるいはあの歪んだ笑みは、僕の醜態を嗤つたのかもしれない。た。

「……仇、だと……?」

異形の姿に変貌したヘルマン達に対する衝撃も抜けないままに言い放たれた更なる衝撃的な言葉の内容を、辻達は俄かに咀嚼して意味を飲み込むことが出来ず、動揺によって僅かに揺れた声で疑問を上げる。

ヘルマン達が人では無いであろうことは小太郎等から話を聞いて予想していた。しかしあまりにもその姿は人からかけ離れて、禍々しかった。

只、人の容姿と違う異形の造形をしているというだけならば辻達は今更怯みはしない。京都の一件だけでも鬼や妖狐等の妖達、拳句の果てには鬼神まで目になっているのだ。化物が現れただけならば麻帆良の猛者達をしてクソ度胸と言わしめるバカレンジャーが外見だけで疎む事などあり得ない。

しかし、ヘルマン達から滲み出る、形容し難い悪意そのものの様な重<sup>プレッシャー</sup>圧が、百を越える妖の群れに囲まれた時にすら感じなかつた危機感を一行に与えていた。力の差云々では無く、もつと根本的な人としての本能が辻達に警鐘を鳴らしていた。

アレに関わつてはいけないと。

それでも、先のヘルマンの発言は聞き捨てならないと彼らは動く。

「……どういう意味だ?お前らが、ネギ君の仇つていうのは……?」

既にフツノミタマを抜き放ち、頭上に振り上げた体勢で辻は尋ねる。問いに対しヘルマンは、表情の伺えない顔の口元を歪めつつも答

えを返す。

「言葉通りの意味だよ、ツジ ハジメ君。私達はネギ君が今よりも一層幼き頃、彼の住まう村を襲い、彼と彼の姉以外全員の未来を奪った。言葉にするなら只それだけの事だ」

ヘルマンの言葉に、青褪めた顔で目を見開きながら固まっていたネギが反応した。心根の優しい彼が、見たことも無い敵意と憎悪をその瞳に浮かべさせる。

「…それだけの事、ですって?」

「気に障ったかね、ネギ君?しかし事実だ。誰かの生を阻む事など、私達にとっては実に当たり前のことなのだよ」

ヘルマンは謳う様な声でネギに告げた。

「それが悪魔というものだ」

「…ツ!!?あああああああああああああつ!!?!!?」

ネギは憤怒の叫びを上げた。杖を掲げると同時に、怒りによる制御し切れない魔力が身体各所から小さな雷撃にも似た発光現象に具現化して弾ける。ネギは叫ぶ様に、己の持てる最大の魔法を詠唱し始めた。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル!!?来たれ雷精 風の精!!?」

「おいネギ!!?」

「落ち着けよお前…つ、駄目だ聞こえる状態じゃ無え!!?」

「ネギ君!!?」

「無理にでも止め…!!?」

「駄目だ、止める旦那!!?今の兄貴は普段じゃあり得ねえ位の過剰出力で魔法を編んでる!下手に詠唱を止めちまうと未制御の暴発魔力が兄貴を打ち据える!!?!!?」

「…っ!!?見ているしか無いのか!??」

辻達はネギを止めに入るが、ある種キレた状態に分類できる今のネギに声は届かない。

辻達がネギを止めに入るのは、無論ヘルマン達の身を心配している訳では無い。ただバカレンジャーの全員は身に染みて理解しているだけである。

余程に相手の実力が低い様な場合を除いて、キレたら戦闘は終わるだけだということ。

感情が理性を振り切つて暴走すれば成る程、一時的に普段では持ち得ない様な馬力が出せる。勢いや強引さという要素は時に手詰まりに思えた戦況を打破する要因となり得るのは事実だ。

しかし無理矢理な力押しとは大抵の場合に置いて文字通り、何処かで無謀か無理をする事で成り立つものだ。そして冷静に状況を見極められる者は決してそれにより生じる隙を見逃さない。

だからこそ辻達はネギに指導をするにあたって、実力を伸ばすのと同様かそれ以上にネギに対して戦場での心構えの重要性を説いていた。

『戦いの場では考えることを止めるな。相手は自分に都合が良い様に動いてくれるお人形さんじゃ無え。予想外の動きをされたからつて死んでやる訳にはいかねえだろ』『常に動きを止めず、まだ動いている敵には警戒を緩めるな。お前には強い意志があり、並大抵の事ではへこたれないだろう。しかし戦おうなんて奴は誰でもお前と同じ様に相応の負けられない理由を持って臨んでる。相手もお前と同等かそれ以上にへこたれなかつたら気が緩んだ時にお前は死ぬんだからな』『敵を攻撃する時には決して容赦をするな。手加減や慈悲の心なんてもんを見せるのは、せめてお前が今の倍以上に強くなつてから見せるもんだ』『油断を捨てろ、慢心を捨てろ。状況は常に自分にとって最悪に都合が悪い様に回ると思っている位で丁度いい。どんなに地力が有つても、人間は負傷すれば弱り、何れ死ぬ。戦いとは相手を倒すよりも生き残る事が肝要だ』『劣勢でも決して諦めるな、物分りの良い頭で自分の限界なんてものを考えるな、そして生きようとすることを止めるな。足掻いた人間にしか奇跡なんてものは降り注がない。何処ぞの監督も言つてる様に、諦めたらそれで可能性は零になるんだよ』

戦意を捨てない事は無論だが、同様に思考し、冷静に勝因を積み上げられなければ勝負に勝つことは出来ない。ましてや相手は未だ実力の全容を見せない、人外の悪魔の集団だ。闇雲に大火力をぶっ放してどうにかなる相手だとは到底思えないからこそ、明らかに暴発気味

なネギの行動を辻達は正常に戻したかった。

しかしある意味皮肉なことに、完全に辻達の教えがネギの頭からトんでいた訳では無いからこそ、ネギは激しながらもある種冷静に攻撃の為、詠唱を行う事が出来たのだった。冷静でいろとの忠告こそ守れなかったものの、ネギは決して正気を失ってはいなかった。

「あらあらああ…！以外と積極的ねえあの子っ!!？怯えて竦んじやうかと思つてたわアタシ」

「…一方で冷静では無いな。前衛との連携も距離を取る事も無しにいきなり大呪文の行使とは」

ニテンスとセルウアは言い合いつつもヘルマンの左右から抜け出て前方へ立ち塞がる。

「おや、中々大した威力の様だから、此処で手札を切つて私が受けるのも視野に入れていたのだがね？」

首を傾げるヘルマンに、二体は軽く首を振つて答える。

「駄々目よ伯爵、最初っから女の子に無理させちやあ。徐々に慣らし上げてないと可哀想でしょ？…結構イイモノ持つてるわよお今のネギちゃん」

「過剰接触でトばれて外野に怒り狂われても説明が面倒だ。これ以上無粋な邪魔は要らん」

「…ふむ、ならば大人しく君達に任せるとしようか」

ヘルマンが軽く肩を竦めて出掛けていた足を戻すと同じくして、ネギの魔法が完成する。

ヨウイス テンペスターズ フルグリエンズ  
「雷の暴風!!？」

人の背丈を遥かに超える、巨大な雷撃の柱が一直線にネギの手から迸る。それは正しく雷の嵐。もしかすればその威力は、かの両面宿儺へ放った時の一撃よりも強力であっただろう。並大抵の妖魔百鬼ならば瞬く間に燃え尽き、吹き飛ばされるであろう情け容赦の無い一撃。

しかし。

ネギの前に立つ者は並では無かった。

「ベツロ・アドーネ・ダメリーノ 報復の主にして偽りなる慈しみの



女神よ」

謳う様にセルウアが唱えると、セルウアの正面に蛇の髪と犬の頭部を持ち蝙蝠の翼を生やす、鞭を持つ異形の老女が描かれた歪んだ幕の様な鏡面が展開する。

「……詰まらん」

「仇為す者へ正しき報いを」

「復讐の女神」

言葉通り興醒めした様にニテンスが吐き捨てると同時、ネギの雷ヨウイス テンベスターズ フルグリエンスの暴風が歪んだ鏡に着弾、幕の鏡が吹き飛ばされる事も貫かれる事も無く一瞬震え。

次の瞬間莫大なエネルギーを秘めた破壊球に変化した雷撃の嵐は、通ってきた軌道をそっくりなぞる様に反転してネギへと襲い掛かった。

「……………あ……………?」

「ネギイ!!?」

己が放った魔法に自分自身が喰い尽くされようとしているその状況を、理解出来ぬとばかりにネギが掠れた疑問の声を洩らし、明日菜は楓と古に庇われた外野の場から悲痛な声を上げる。

しかし、己の魔法による自爆等というある種間抜けな結末を許す程、ネギの周りの兄貴分達は腑抜けていなかった。

「…っ!!? 裂空掌波あつ!!?」

「極漢魂あ!!?」

「破アアツ!!?」

中村の気功波動オーラウエーブ、豪徳寺の特大気弾が雷球と喰らい合って威力を減衰させ、大豪院の発勁が完全にそれを吹き飛ばす。

「あらあ?」

「…ッ、フン!!?」

同時に音も無くセルウアに迫り、手に持つ一刀でその身を二つに断たんと刃を降り降ろした辻の一撃が、一瞬でセルウアの前に立ち塞がったニテンスの巨刃に受け止められる。辻は舌打ちしながら下がる…と見せかけて背後から抜け出た山下がニテンスの握る大剣の端

を掴む。

「ぬ……？」

「……っ!!??はあっ!!??!!??」

疑問の声を上げるニテンスに構わず、山下が裂帛の気合いと共に両の手で挟んだ巨大にして長大なる刃を一捻りすると、グラリとニテンスの身体全体が斜めに傾ぐ。

「っ!!??…ガアツ!!??」

大きく片足を横に踏み出し、転倒を防いだニテンスに再度、踏み込んでの辻による斬撃と、上空からの雷撃が襲い掛かった。

「ちええええええええええええええええ!!??!!??」

「神鳴流奥義 雷鳴剣!!??」

しかし、その二重連撃に対してニテンスは慌てずに大剣を頭上に掲げると、熾火の様に輝く両の瞳を辻に向ける。

次の瞬間、その両眼から軍用のサーチライト遙かに上回る、間近に太陽が出現したかのような閃光が照射され、突貫する辻の目を灼いた。

「っ!!??ぐあっ……!!??」

反射的に顔を背けた辻は手元を狂わせ、直後に振り下ろした斬撃は軽く飛び下がるニテンスを捉えられずに虚しく大地を裂く。時を同じくして降り注いだ雷撃を大剣でガードしたニテンスは、一連の攻撃を結果としてほぼ無傷でやり過ごした。

「……やるな、貴様ら」

相殺仕切れずに焦げた両手を、光量の弱まった目で見やりながら愉し気に笑うニテンス。一方、反撃を貰わぬように後退した辻に、残心を終えた中村達が集まる。

「辻部長っ!!??」

「おい大丈夫か「はじめちゃん!!??」

対して、辻は目元を押さえながらも領きを返し、答える。

「大、丈夫だ、目は潰れていない。…ただ、流石に暫らく視界は戻りそうに無い……」

「……だろうな……」

「て言うか何今の!!??目玉の代わりにサーチライトでも入ってるの!!

「？」

「あんの山羊頭、デケえ図体して狡い真似を……!!?」

芳しくない辻の状態に悪態を吐く豪徳寺だが、そんな弱り目を悪魔一行は当然見逃すつもりは無いらしい。

「…さて、いささか私好みの趣向では無いが、一番の脅威対象を弱体化させることが出来た以上、ここは攻めさせて貰おうか」

「唯一の砲台も意識を何処ぞへ忘失中とは、確かに詰まらん展開だ」

「あらあら二人共、そういう発言敗北フラグよお?なんだかんで一度は人質奪還されてるんだから、気合い入れて掛からないと駄目よん

⊠

言い合いながらニテンスを先頭に、ゆるりと散開して距離を詰めてくるヘルマン一行。

「…立て直す時間はくれない、か…まあ当たり前だよね……」

山下は苦々しく呟く。出来る事なら明らかに暴走していたネギに言葉を掛けて落ち着かせ、一時的とはいえ視界を奪われた辻を下がらせたい所だったが、余裕綽々な態度を取っているとはいえそこで甘さを見せる気は無いらしい。

「…やるしか無いらしい!!?」

「辻部長は私が!!?遊撃役を買います!!?」

「任せた正妻、サーチライトメエちゃんは俺がやらあ!!?」

「せつ……!!?」

「ツツコむな桜咲、ツツコんだら負けだ!!?オカマ野郎はどうやら魔法使い系だ、ゴリ押すぞポチ!!?」

「致し方ない、山下!済まんが変態のフォローと同時にジジイの面倒を頼む!!?」

「…しようがないね!!?小太郎君、ネギ君を任せる!!?」

即興で布陣を決め、辻達は襲い来るヘルマン達を迎え撃った。

「はは、起きて来ると思っかね、ネギ君は!!?」

「右から来ます、上段打ち下ろし!!?」

「つぐう……!!?……舐めるな、お前が思う程弱くは無いよあの子は!!?」

ヘルマンが打ち下ろした拳を危うい所で躲しつつ、辻は刹那と同時に斬り掛かる。

「……………っ!!っ……………」

その場の戦力で唯一、即座の反撃に移れなかった小太郎は不甲斐なさを感じると同時、目の前で攻防を行った敵味方双方の動きに戦慄していた。

……………どつちも動きのキレが半端無い。悪魔の連中はわからんでも無いが、あの兄ちゃんらは学生や無いんかい……………!!?

唯の一人で自分を打ち倒し、両面宿儺等という神話の怪物をも斃してみせた辻達の実力を侮っているつもりは毛頭無かった小太郎だが、同時に経験の浅い素人である為、突発的な襲撃等では裏でそれなりに年季を積んでいる自分がフォローしなければならぬだろうと予想してもいた。

しかしいざ蓋を開けてみれば、辻達の援護をする所か、奇襲から救われる始末である。見栄を張りたくて同行した訳では断じて無いが、自らが事の原因の一つであるとの自覚がある小太郎は、現状役に立っていないことに忸怩たる思いを感じていた。

だが小太郎は暫しして頭を小さく左右に振り、頬をピシヤリと叩いて己に喝を入れる。

……………阿呆か、余計な事考えんな。…っちゅうかこの思考自体が無駄や。

…やれることをやる。これ迄そうしてきたし、それしか出来へん筈や、俺は…!!?

小太郎は本格化し始めた戦闘を尻目に、魔法を弾き返された時点から動きの無いネギをフォローしに行く。

「おい、ネギ。大丈夫か…?」

しかし声を掛けられたネギは正に茫然自失といった体で、自らの手―魔法を撃ち放った手を見つめながら慄く様に声を上げている。

「あ……………あ、ああ……………!!?」

「ち、ちよつとネギ!大丈夫なのアンタ!?」

「ネギくくん!?」

離れた位置に居る明日菜や木乃香が、尋常でない様子のネギに声を掛けるが、ネギは反応を返さない。

「あ……ぼ、僕は………!!?」

…軽いパニック状態やな………

小太郎はネギの様子を見てそう判断する。恐らくは怨恨のあるらしいヘルマン達への怒りや、自分の抱いた敵意、或いは殺意やらが緋い交ぜになって混乱しているのだろう、と小太郎は推測した。

「ま、戦闘所か喧嘩すら碌にしたこと無さ気な顔しとるもんなあ……」

小太郎は嘆息しつつ小さく呟き、

「呆けとる場合ちゃうんや起きんかい、ガキ」

ゴズン!!?という轟音と共にネギに対して頭突きをかました。

「はううっ!!?」

強烈な衝撃に、ネギが打たれた額を抑えて呻く。暫し苦痛に震えてからネギは、驚きに見開いた目を自分と同じく額を抑えて呻く小太郎に向ける。

「っ痛うくなんやどんだけ石頭やねんお前。…まあ頭でつかちでグダグダ考えそうな顔しとるからか……」

「……、小太郎、君……?」

「おうそうや、犬上 小太郎や。そういうお前は自分の事がちゃんと解つとるか?」

「え………あ、…僕は………!」

小太郎の荒っぽい気付けによってパニックからは抜け出したネギだが、我を忘れた己の行動を思い出し、再び慄いた様子で小さく震える。

「そこまでや、落ち着きい。まあ、なんやあのジジイ共に因縁あるみたいやし、動揺すんなつちゆうんが無理やろな」

それでもや、と小太郎はネギの肩に手を乗せ、真つ直ぐにネギの眼を見据えながら、一言一言噛んで含める様にネギへ告げる。

「別にお前があのジジイ達に何かあるんは別にええ。神さんやあるまいし生きてりや恨み辛みもそりやあるもんやからな。でもそれでキレるんは止めえ。よしんば普段で良くても此処では、駄目や」

「…此、処……………」

今だに呆然としたネギは、小太郎の言葉を鸚鵡返しに呟く。

「そうや。お前がどういう気持ちで此処に来たかは知らん。でも此の場は既に、大袈裟な言い方すんなら戦場や。呆けとる暇もグダグダ会話しとる暇も無い、鈍間と間抜けの生きてけん世界や」

小太郎の、肩を掴む力が強まる。

「無理でもなんでも、今は強い鎮めるんやネギ。自慢や無いが俺はこの歳で結構危ない橋を渡つて来た。だから理解しとる、キレたら終わりなんや戦闘は。…今、お前があのだジジイ達をぶつ飛ばしたいんか、それとも殺そうとした自分の行動を責めたいんか、それは解らん。ただ言えるんは、あの兄ちゃん達が今、闘つとるで、ネギ」

「っ!!?」

小太郎の言葉に、ネギはハツと顔を上げる。

「あのだジジイ達をどうしたいか決まったらんなら、それならぶつ倒してから考ええや、ンなもんは。少なく共、あそこの姉ちゃん達を連れ戻しとう無くなった訳やあらへんやろ?俺はこれから兄ちゃん達の加勢に入るわ。個人的な借りもあるさかいな。…お前はどうかするんや、ネギ?」

問いを受けて、ネギは一度深く目を瞑り、聞き取れぬ程小さな声で何事かを呟く。暫しの間を置いて開かれたネギの眼には、迷いは消えぬものの、最早崩れそうな危うい何かは姿を消していた。

「…僕も行くよ、小太郎君。いや、僕に力を貸して欲しい。僕一人じゃまだ、あのレベルの闘いには割って入れないんだ」

「…へっ、上等や。ようやっとならしくなつて来たやんか、天才児?」

小太郎は不敵に笑ってそう返した。

「ゴアアアツ!!?」

「くっ!!?」

「危つぶね!!?」

雄叫びと共にニテンスが横薙ぎに繰り出した大剣の一撃を、中村と山下が際どいタイミングで回避する。それを見てセルウアが豪徳寺

の放つ気弾を跳ね飛んで回避し様、腰の落ちている中村達に紡いでいた魔法を解き放つ。

「…我が手に宿りて敵を喰らえ

フルグラティオー ニグランズ  
黒き雷！」

セルウアの手から闇夜を凝縮したかの様な漆黒の雷撃が無数に飛び出し、二人へと網の様に広がりながら襲い掛かる。

「っ！裂空<sup>れつくうそうしよう</sup>双掌あ！！？」

「っの！！？」

中村が振り抜いた両の手から放たれる気弾が黒の雷と喰らい合うが、雷の一部が相殺仕切れずに二人へと抜けてくる。中村は気を込めた廻し受けて雷を弾き、山下は気を込めた両掌で雷を受け流すが、そのタイミングで辻の一次的な盲目状態により精彩を欠く、辻・刹那コンビの攻撃から後方へ飛んで逃れたヘルマンが、空中で拳からエネルギー波を更に追撃として打ち下ろす。

デーモンツシエア シュラーク  
「悪魔ハンチ！！？」

「ぐばあっ！！？」

「中村！！？」

腕を翳して急所こそ護ったものの、衝撃の大部分を真面に喰らって中村が濁った悲鳴を上げつつ吹き飛ばす。

「斬空閃！！？」

「ふっ！！？」

技後硬直を狙った刹那の飛ぶ斬撃を、翼をはためかせて躲すヘルマン。空中で両の腕が霞み、衝撃波の弾幕が援護に回ろうとした豪徳寺や大豪院に降り注ぐ。

「くっ！」

「ぬうっ！！？」

出足を挫かれた二人が呻き、一拍遅れて豪徳寺が巨大な気弾をニテンスに撃ち放つが、その一瞬で中村達の背面側に回り込んで気弾を回避したニテンスは、閃光の瞳で豪徳寺達の側を視線で薙ぎ払って追撃を封じつつ、倒れている中村を両断せんと、唐竹割りに大剣を振り下ろす。

「うおおおおおお！！？」

「だあああああつ!!?」

一番距離の近かった山下が大剣の横つ腹に飛び蹴りを叩き込み、中村は山下の側へ全力で転がり込む。衝撃で僅かにブレた大剣は中村の横合い十cmの地面を叩き斬り、刀身の半ば迄を埋め込んだ。

「てめえ死ぬかと思つたろがサーチライト山羊いいいい!!?」

「ぬうつ!!?」

転がりながらも掌から撃ち出された気弾がニテンスの顔面を襲い、頭を逸らしてニテンスが躲した隙に、跳ね起きた中村は山下と間合いを離れる。

「とりあえずオカマの手え塞げ!!? 純後衛の砲台はそいつだけだ!!?」

豪徳寺が気弾を乱射して三次元的な動きで宙を舞うセルウアを牽制する。

「あくらアタシを御指名とは見る目有るわねえ番長ちゃん!!? でもいいのおこんな堂々と浮気しちゃつてえ、彼女が見つてるわよん!!?」

「那・波・は・俺の何でも無えつつうのお!!?」

「あらあアタシあそこの母性溢れる娘が見てるなんて言つたかしらあくん?」

「…ぶつ殺す!!?!!?」

誘導尋問に引つ掛かった豪徳寺が怒号を上げて連射の回転を上げる。一抱え程もありそうな気弾がさながら魔法の<sup>サギタ</sup>射手の<sup>マギカ</sup>弾幕並の群れとなってセルウアを急襲する。

「いやんもう、強引なんだから♡」

セルウアの眼前に再び歪んだ鏡面が展開する。

「<sup>エクスイキスイ</sup>復讐の<sup>エリニユース</sup>女神!」

鏡面に着弾した気弾の群れが、端から跳ね返され後の気弾と衝突して相殺、一部の気弾は正確に豪徳寺へと反射する。

「魔法だけじゃ無えのかよ弾き返せんのは!!?」

吐き捨てながら横っ飛びに自らの弾幕を回避する豪徳寺、更に動きの鈍ったその隙を悪魔の集団は見逃さない。

「避ける豪徳寺!!?」



「何…!?…うああ!?」

大豪院の警告に己が背後を振り仰いだ豪徳寺の目に飛び込んできたのは、閃光から閃熱に威力を上げた光の波である。反射的に顔を庇う豪徳寺だが、ニテンスの熱光線は御構い無しにその身体を焼き焦がして行く。

「豪徳寺…：…ぐう!?」

助けに飛び込もうとした大豪院へ、ニテンスが首を振って閃熱の視線を叩き付ける。矢張り視界を庇い両腕の塞がった大豪院は、為す術も無く身体を焼かれる。

しかし大豪院は、豪徳寺と同じ轍は踏まんとばかりに顔を庇いながらも斜め前方へ疾走り、最前までヘルマンの居た方角へと移動する。同士討ちを避ける為か、眼光の光量が弱まり閃光程度となる。

「おおおおおおつ!!?」

「ほう、賢い判断だ。しかしその状態で私の手をしようとは…舐められたものだ、ね!!?」

雄叫びを上げながら突進する大豪院へ言葉と共にヘルマンの腕が霞み、上位魔法に匹敵するであろう威力の衝撃波が己目掛けて突っ込む大豪院へと放たれる。

「…貴様こそ、俺達を舐めるな」

大豪院へと突き進む衝撃波の軌道上に、割り込む人影。それは閃光を真面に喰らって目が見えない筈の辻だった。

「何…!??」

「そんなにデカい声で解説しながら派手な音立てて攻撃してくれるなら、見えなくとも位置調整くらいは可能なんだよ!!?」

驚愕するヘルマンに嘯きつつ、迫り来る衝撃波の音に合わせて辻はフツノミタマを一閃。済んだ音と共に衝撃波は二つに断たれて霧散する。

「今だ桜咲い!!?」

「神鳴流奥義、雷光剣!!?」

辻の声に従い、刹那の刀身から破壊的な威力を秘めた雷球が撃ち出されヘルマンへと突き進む。

「ぬうううううう!!?」

ヘルマンは両の腕から衝撃波を放ち、雷球を撃ち落とそうとするが、フツノミタマにより断たれたヘルマンの魔力変換式 物理衝撃波は著しく威力が減衰している。相殺も碌にままならないまま雷球はヘルマンに直撃した。

「よっし!!?」

「これで…待て、様子がおか…」

喝采を上げた中村に続いて安堵の息を洩らしかけた大豪院だが、ヘルマンを包む雷撃が揺らめき、端から霧散していくのを見て疑問の声を上げかけ、

「ひ、いやああああああんっ!!?!!?!!?」

傍らで見守っていた明日菜が上げた悲鳴に掻き消される。

「ああ!!?」

「なんだよ!!?」

「神楽坂ちゃん!!?」

振り仰いだ一同の目に入ったのは悲鳴を上げて仰け反る明日菜の姿。尋常でない様子の訳は胸に付いたペンダントが激しく発光している故か。

「ふむ…伸ばし伸ばしになってしまったが、実験は成功の様だね」

散り散りに霧散した雷光の残滓を破ってヘルマンが姿を現し、

「そして隙あり、よん☒」

「迂闊と責めるのは酷だろうがな」

全員の視線が明日菜と無傷のヘルマンに集中した一瞬の隙に、辻達を大きく囲い込む位置へと、ニテンスとセルウアは移動していた。ヘルマンを加えれば、三者の配置はほぼ正三角形の、辻達を中に置く包囲網。

「しまっ……!!?」

「ベッコ・アドーネ・ダメリーノ 来たれ炎精 闇の精 蠢く闇従えて  
燃え盛れ 昏き世の煌炎 闇イグナ トウツリス オブスクーリタースの 火 柱!!?」

「……………!!?」

「カ、ハアツ!!?」

セルウアの手からドス黒い巨大な火柱が、ニテンスの両眼からこれ迄で最大の閃熱が、ヘルマンの口腔から白濁した不吉な白い光の奔流が。

三方向から辻達に襲い掛かった。

…不味い…!!?」

反射的に刀を構え、迎撃を試みようとする動きながらも刹那は内心で焦燥の声を上げる。

完全に脱出路を全て塞がれた状態からの大技が三種類。刹那が現時点から対応出来たとして精々が一つに対して、それも不完全な成果にしかならないだろう。

如何に連携が上手かろうと近接戦闘を主とするバカレンジャーは、遠距離攻撃に対する有効な対応手段を持たない。唯一防衛手段を持つ辻は目をやられている。

即ち、この多重攻撃を完全に防ぎ切るのは不可能である。

「ヤバいアル!!?」

「せつちゃん!!?」

「つ…!!…先輩!!?」

傍らで崩おれた明日菜を支えていた古達も絶対絶命の辻達に各々声を上げるが、為す術は無い。

しかし荒い息を吐く明日菜と、明日菜の肩に腕を回していた楓はそれぞれがこの状況においても、笑みを浮かべていた。

「っ、はあ…、舐めてんじや、無いわよあの変態爺い共」

「左様でござるなあ、幼子だからと言って侮り過ぎてござる」

二人の目線の先に居るのは、悪魔達が詰みの手に移行する直前に飛び出した二つの小さな影。

「「「つらああああああつ!!?」「」」」

ヨウイス テンペスターズ フルグリエンス  
「雷の暴風!!?」

幾重にもその身を分かれさせた小太郎と、雷嵐の奔流を撃ち出すネギの姿だった。

影分身により五人に数を増やした小太郎の内分体の四人がヘルマンの吐き出した光の砲撃に突っ込み、その身を盾にして次々とぶつか

り、弾け散る。

威力の弱まった光に対して最後尾の本体である小太郎が、腰溜めに手刀を構え、狼の形をした気弾を無数に撃ち放った。

「狗音嚙鹿尖!!?」

ネギの放った一撃は、セルウアの黒炎と真つ向から衝突し、ネギとセルウアのほぼ中間点で喰らい合いながら拮抗する。

「っ!!? やって、くれるじゃないチェリーボーイ!!?」

「う、ああああ……!!?」

両者は自らの魔法で押し切らんと、更に術に魔力を籠めて威力を跳ね上げさせていく。

「ぼ、くは……もう、怯えて泣いてるだけの……子どもじゃ、無いんだああああ!!?!!?」

ネギは何かを振り切る様にそう叫び、暴発寸前の魔法に対し更なる魔力の一押しを注ぎ込む。一歩間違えれば自らを弾き飛ばしかねない捨て身の一撃。

結果として小太郎の気弾の群れは白濁の光を蹴散らしてヘルマンに殺到し、ネギの雷嵐はセルウアの黒炎を呑み込んで突き抜けた。

「ぬうつ……!!?」

「ちよ、嘘待つ……きやああああ!!?」

ヘルマンへ襲い掛かった気弾は着弾寸前に次々と掻き消え、追撃で負傷を与えるには至らない。しかし、セルウアの方は迫り来る雷撃に目を剥き回避を試みるが、如何せん押し合っていた状態からでは体勢に無理がある。半端な姿勢で身体の大半を巻き込まれ、濁流に押し流される様にして後方へ吹き飛ばされた。

そして当然、三連撃から単発に減少した一方向からの熱波などを、馬鹿正直に喰らう辻達ではなかった。

「裂空掌波あ!!?」

「?!!?」

「極漠魂あつ!!?」

中村と大豪院の一撃が閃熱を押し破り引き裂き、豪徳寺の反撃の大気弾が二テンスへ襲い掛かる。

「…チツ……!!?」

舌打ちと共にニテンス大剣を掲げて一撃をガードする。

衝撃を流してニテンスが目を向けたその先には、セルウアが吹き飛んで広がった包囲網の穴から脱出し、ヘルマン達に対して油断無く身構える辻達の姿があった。

「つしや!!?どんなもんや糞ジジイ、そないに簡単に決められると思うなやあ!!?」

「はあつはあつ……み、皆さん!!?」

ヘルマンに向かって中指を突き立てる小太郎と、二度の過剰出力による大魔法の行使で息を切らしながらも辻達へ呼び掛けるネギ。

「……へっ！呆けてたかと思いきや、オイシイ登場をしてくれるじゃねえかよネギ!!?」

「済まねえな、助かったぜ小太郎!!?当たったら不味いんだったなあ爺さんの光線!!?」

「いや、そんなことよりネギ君、大丈夫なの!!?」

「落ち着け山下、…顔を見れば判る。色々言うことも問うべきこともあるが、これが終わってからだろう」

「そうだな。ネギ君、小太郎。…一緒に戦おう、力を貸してくれ」

「…はい!!?」

「応よ!!?」

ネギと小太郎は勢い良く返事をする。

二人の復帰に対して声を掛けてから、辻はようやく薄ぼんやりと物の輪郭が掴める様になった目をしばつかせ、隣で控える刹那に尋ねる。

「…一旦追撃が止んだ様だが、どうなっている、桜咲?」

「…奴等も奴等で集まって何事かを話しているようです。…残念ながらあのおかしな口調の悪魔も致命傷に至っていないようですし、確実に追撃は来るかと……」

心配気に辻を時折見やりながらも、警戒を怠らずにヘルマン達を監視しながら刹那は答える。

「…正念場、だな。お前ら、ネギ君達。聞いてくれ、勝つ算段を建てる

ぞ」

辻は暫し何事かを考えてからそう呟き、中村と豪徳寺の荒っぽい祝福から解放されたネギと小太郎を含めた全員に呼び掛ける。

「…さて、どう見るねこの状況を？」

ヘルマンは声に苦笑の響きを滲ませ、尋ねる。

「どうもこうも無いわよ伯爵、素直に想定していた以上の難敵だって認めましょうよん。…今に至るまで特別手を抜いたつもりはアタシ無いわよ？」

甲殻甲冑に無数のヒビを入れ、要所から煙を上げつつも笑ってセルウアが答える。

「…そうだな。伯爵、貴方にとっては喜ぶべき事かどうかは知らないが、連中は強い。…あの幼子も大分揉まれたらしいな」

楽し気に輝く瞳を揺らしながらニテンスは言う。

「愚問だね、ニテンス君。前途ある若者の輝かしい力の発起は、私にとって何より好ましいものだよ…些かクライアントの要望には応え難い状況であるのは確かだが、ね」

今度は明確に笑いの響きを滲ませたヘルマンは、自らを鋭い目で睨み上げるネギと、その周囲に身構える辻達へ呼び掛ける。

「見事なものだね、ネギ君。君の師であり頼れる兄貴分である辻君達は、実に優れた使い手達だ！徒党を組んでいる爵位級の上位悪魔三体を、倍程度の人数差で人間が互角以上に渡り合うとはねえ。私が断言しよう、一向こうの世界でも彼ら個人個人の力量は充分に一流の名を冠するとね！…惜しむらくは裏社会での実戦経験の少なさか、それとも武道家という生き様の性かな？」

「…何が言いてえんだよグダグダと。んな事よりもめえ今どうやってせったんの攻撃防ぎやがった？明日ニヤンのさっきのあれが、関係ありやがんのか？」

話し掛けられて身を固くするネギの前に中村が立ってヘルマンの視線を遮り、低い声で唸る様に問い返す。如何に悪魔とやらが超常の

存在でも、刹那の放った神鳴流の大技、雷光剣は上級クラスの妖魔にも重傷を負わせ得る一撃だ。不意を突かれて無傷で居られる筈は無いのである。加えて攻撃が炸裂したタイミングでの明日菜の悲鳴。関係が無いと思う方がおかしい。

「ああ、簡単な話だよ。私は今とある魔法具によってカグラザカアスナ嬢の力を纏っている。故に今の私に放出系の魔法や気は通用しないんだ」

「はあ？」

あつさりと告げられた言葉に、中村のみならず外野を含めた全員が眉根を寄せて疑問符を上げる。

「…どういふことよ、エロジジイ？」

当の本人である明日菜が、無意識に胸元のペンダントを握りながら尋ねる。

「魔法無効化能力《マジック キャンセル》。向こうの世界でも最大限に希少な能力だ。先の京都の一件でも、それらしい心当たりが有るのでは無いかな諸君？」

ヘルマンの言葉に、中村達は白髪の少年の障壁を明日菜が軽々と打ち破った事を思い出す。

「それで……！」

「そうだ。余り私自身はこういうものは好かないのだが、これもクライアントの意向でね。…さて、そちらの疑問に答えた所で、少々年寄りが口幅つたい事を言わせて貰うよ」

ヘルマンは教授でもするかと様に指を立て講釈を垂れ始める。

「君達は強いが、単純に惜しい。君達通称バカレンジャーの個々の戦力は恐ろしいことに我々一体と互角か少し及ばない程度だろう。つまり君達は戦力を単純に加算して考えるなら余裕で私達に勝っている。にもかかわらず、君達が寧ろ要所要所で私達に押されているのは何故だと思ふね？」

答えは単純だ、とヘルマンは謳う様に告げる。

「君達はとても息の合った一団だが集団戦闘に長けていない。ただ限定的な一対一、若しくは一対多を繰り返し、誰かが危険になったら

フォローをする。なまじ個々の戦力が強い為に成立こそしているが、その戦い方ではこれより先、ボロを出すことになるね」

足並みが揃っていても、チームワーク連繋がなっていない。ヘルマンはそう指摘していた。

辻達とて何も、馬鹿正直に武道家の理念に則って戦っている訳では無い。単に鍛えた技術わざの方向性の違いであり、平たく言うならば『腕っぷしで最強になる』事を目的とする辻達は、兵士や傭兵の様な『何を持ってしても損害を軽微に抑えて対象を排除する』方面に長けてはいないというだけの話である。攻防の体系が己一人で完結している故に、連繋を組んで戦闘を行っても、極端に言えば一人がぶん殴ったら次が殴りに行く、という様な形になる事が多いのだ。

故にヘルマン達は、複数から攻撃を仕掛けられない様に動き回りながら、辻達に乏しい遠距離からの攻撃を主に行い、誰かが崩れたらでき得る限りそこに集中砲火を浴びせる事により、あわやネギと小太郎の助けが無ければ誰かが致命傷を喰らう域まで追い詰めた。

それは、戦闘力に格段の差があるとはいえ百を超える妖の群れにも出来なかつたことであつた。

「…で？それが正しいとして、俺らの欠点を指摘する事でめえらに何の得がある？人を襲つといて一手御指南たあ、本当に何がしたいんだ、お前は？」

ヘルマンの言葉を受けて、豪徳寺が険しい表情で訊き返す。少なくとも、口から出任せを言っている訳で無いのは雰囲気で判つたが、ならば尚更敵対する相手に指導めいた事をする理由が、豪徳寺には解らなかつた。

「確かに、一見して私の行動は支離滅裂に見えるだろうね。しかし豪徳寺君、君は、君達は考えが若すぎる。私のような年寄りには単純な損得勘定だけで動きはしない、日々を過ごすのに刺激的な愉しみが必要なのだよ」

ヘルマンは両手を広げ、爛々と輝く瞳をネギ達に向けて語り出す。

「私は才能のある若者が好きだ。時に悩み、壁に当たりながらもまるで伸びゆく新芽の様に、殻を破り成長していく生命力に溢れた君達の



様な者達を、とてもとても愛おしく思っている。どのような成長を遂げるのか何処までの高みに昇れるのか？…君達の将来を見てみたい」  
しかし、とヘルマンは嗤う。表情の窺えない茫洋とした形状の顔であるのに、そこには明確に悪意が透けて見えていた。

「そういつた才能が潰えるのを見ることを、私は何よりの楽しみとしている。年季を経て己の分を悟った者では、どれほどの力を持っているようと駄目なのだよ。己が何処までも伸びて行けると、自らの限界を定めない果敢な未来への挑戦者で無ければならない。…そんな若者が私に未来を奪われる時、将来に希望を持つ者程、成すべきことを大きく持つ者程、己が本懐を果たせなくなる失意、絶望、己の至らなさへの怒り、理不尽な終焉を突き付けてくる私への憎悪。といった様々な感情に彩られたイイ表情を浮かべる。…私はそれを見たくて生きている、といつても過言では無い」

ヘルマンは戯ける様に一礼し、己が胸に手を当て高らかに名を告げる。

「私は未来の狩り手。故に尊い玉体の君達には、最大限の可能性を發揮した上で散って貰いたい。私のより大きな快樂の為にね。…もつと全力で足掻きたまえ」

ヘルマンから発せられる不可視の重<sup>プレッシャー</sup>圧に、ネギや明日菜達は息を呑む。余りにも理不尽で傲慢なその物言いに、しかし反論が出来なかった。

成る程、と辻は奇妙な迄に屈いだ気分ですんなり納得を覚える。

…これが悪魔と呼ばれるものか……………と。

「…てめえの青い果実主義はまあ、どうでもいいわ」

重圧を振り切る様に中村が静かに呟き、一歩前に出て構えを取る。

「んなことよりよ、ジジイ。挑発のつもりか何か知らねーが、俺らのモチベ上げてえんならもつと単純な方法があつから、一つ答えろや」

「何かね？」

ヘルマンの促しに、中村は一段階低い声で問いを放つ。

「お前が、いやお前らがネギの仇つてのは、本当なんだな？」

その言葉にネギは顔を上げ、中村を見やるが、中村は視線を返さずにヘルマンを凝視している。ヘルマンは双眸を細め、静かに肯定する。

「ああ、本当だ。彼の村を焼き払い、村人達を石に変え、ネギ君自身の命をも脅かした。これで満足のいく答えになるかね？」

「おうおう、百点満点だぜ。回りくどい真似しやがってからによお……」  
ヘルマンの重圧に負けず劣らず凄まじい圧力が、中村から噴き上がる。他の面々も戦意を表情に浮かべ、両者の間の空気が急速に張り詰めていく。

「二々確認しねえでも、こいつは既に俺らの身内同然だ。……その仇ってんならてめえを擦り潰す理由としては釣りが来んだよ、ボケ……痛めつけてぶっ殺してやらあ

、辞世の句でも読んどけや、糞ジジイ!!？」

殺気地味た激しい闘気の発露に、悪魔達は身体を恐怖とは別の理由で震わせ、ニテンスを戦闘に展開する。

「良い気迫だ!!？」ならば因縁の決着をつけようか、千の呪文サウザンドマスターの男の後継とその友柄よ!!？」

「最早語らず……闘争こそ我が存在意義なり!!？」

「熱いわねえ皆……ま、ガツチリ付き合っちゃう訳だ・け・ど♪」

両者は布陣を組み、ジリジリと間合いを詰めていく。

「戦力分析、先ず山羊頭」

「あの光る目ん玉を向けられるとまず間合いの近い攻防は出来ねえ。かといってスカすには奴の図体がデカすぎる、上手い対応策じゃねえが二人ばかりを足止めにしてなんとかあのサーチライト野郎を引っぺがそう」

「それしか無いか……オカマは魔法やら気弾をよりによって反射してくる。こっちも牽制は効き難い、前衛数人で引き剥がすしか無い、かな……」

「どうにも上手く無い。それが出来たとしてあの首領格は近接戦闘も強ければ口から吐き出すのは防御不能の一撃必殺だ。手数が足りんな」

「…あのヘルマンという悪魔の石ペトリファイケーション。化は世界有数の治癒術師の解呪を持ってしても解くことの出来ない超高等の呪詛です。喰らえば終わり、思っただけで下さい」

「糞厄介やな…おまけにあの爺さん、あすこの姉ちゃんの力とやらのお蔭で魔法や気いは掻き消されるんやろ？…となると俺がネギの奴に渡したアレも通じへんのやろし…」

「結論としてヘルマン伯爵とやらにも近接戦闘によるゴリ押ししか対応策がありません。…三体中二体に魔法が通じ難いならば、山羊頭を私とネギ先生が相手取るのが順当でしょうが…」

「あのジジイの連繋云々の講釈は気にすんな、例え事実としても今直ぐなんとかなる問題じゃ無え。…一ちゃんはじめ、良くも悪くもお前と武装系ヒロインフツちゃんが頼りなんだが、どうよ？」

「…輪郭ははつきりしてきたがどうにも網膜に光の残滓が焼き付いている。一対一なら兎も角、乱戦になれば足手まといだろう、俺は」

『…今にして思えば主に対しては妙に連中、牽制ですら遠距離攻撃を仕掛けていなかった。その上で不意を突いてのこの無力化、どうやら私と主は相応の対策を積まれていたらしい』

フツノミタマの思念を最後に、一同は暫し沈黙する。歯が立たないでは無いだろうがどうにも決め手に欠けた状態であり、このままゴリ押しで仕掛ければ相応の負傷を負う事になるのだが他に手段も無い。

「…やるしか無えか…!!?」

中村の喝を入れる呟きに一同は頷き、改めてヘルマン達に向き直る。

「来るか…。私は不覚にも魔力の放出系を断たれて近接戦闘は兎も角遠距離支援が難しい。オーソドックスに行くのでしょうか」

「是ぜ」

「了解っ！」

ヘルマンに二体は短く答え、前衛のニテンス、後衛のセルウア、遊撃役のヘルマンが中衛を兼ねて、二体の間に入る。

「…それ以上に近寄るならばこちらとしても荒っぽい対応をさせて貰

うでござるよ」

緊迫した空気の漂う対峙を固唾を飲んで明日菜達が見守る中、やや離れた位置で観戦していたすらむい達が無造作に近付いて来たのを見咎めて、楓と古が構えを取りつつ警告する。

「気張んなよ、何もする気は無えからヨ」

「伯爵達は余裕見せてますけど、実質余裕はありませんからー。貴女達にまで参戦されると劣勢にも程があるので、牽制に来たんデスー」  
「…シリアスな表情で金鯢付きパンいち姿…ウケる……」

フ、と無表情のまま笑いを洩らすぷりんに、すらむいが関係無えこ  
と言うナー!とツツコミを入れ、あめ子が笑う。

何処か毒気を抜かれる愛らしい様子に、敵意を感じなかった楓と古は一旦拳を下ろすが、警戒は止めない。

「…なーおチビちゃん達、ちよつとええかー?」

そんな中、木乃香が僅かに腰を落としながら、すらむい達に呼び掛ける。

「なんですカー?」

「…おチビちゃん達も、さつきあの悪魔の人が言ってた、ネギ君の仇、言うんに関係してるん?」

木乃香の問いに、三体のハイ・スライムは僅かに押し黙った後、言葉  
葉を返す。

「そうだけ。村の襲撃に適した能力を持つってー使ファミリアい魔の契約で喚ばれたのがアタシらだったカラナー」

「お聞きしたいことは大体わかりますので先に答えますけど、私達はあの少年に悪いことをしたって自覚はちゃんとあります。でも責任転嫁する訳じゃありませんが、私らが仮に契約を受けなかった所で結果は変わらなかつたでしょうシー…」

「…どうせ伯爵達が負ければ虜囚の身。煮るなり焼くなり犯すなり、なんでもして憂さを晴らさせればいい。エロ同人みたいに、エロ同人みみたいに…」

一言余計ダー!五月蠅いデスウー!と再びじやれ始めるハイ・スライム達。木乃香は続けようとした言葉を飲み込み、明日菜達の方へ向

き直る。

「…何も言えないなら言えないなりに、祈りましょうか。先輩達の無事を」

千鶴が穏やかで無い話に鼻の頭へ小さく皺を寄せつつ、やや疲労の濃い顔にそれでも笑みを浮かべて言う。

「むう…」

「那波さん、何だか余裕ある、って訳じゃ無いけど、凄く強いわね…あたしが初めてこんなのに関わった時は、もつとすっごくわたたしてたもんだけど……」

木乃香が唸り、明日菜が何処か感心した様に千鶴に告げる。慣れない環境と未経験の暴力の場に晒された千鶴は、体力こそ消耗してはいるものの、常人ならば取り乱して騒ぎ立てかねない様な非日常そのものの光景を目にしても、千鶴の目は冷静さを保っていた。

「…見た日程冷静でも落ち着いてもいないわ。混乱しているし、怖いとも思っているもの。…それでも、一人の男に任せておくと、断言されちゃったから、ね……」

薄く微笑んで、千鶴は締めくくる。

「信じて待つのが、女の役目でしよう？だから信じて、祈りましょう」

千鶴の覚悟に、スライム娘達が感心した様にその身を揺らめかせ、楓は口元だけで笑みを作る。

「…いい？<sup>ジュエウ</sup>悟アルな。流石は年の功アルか」

「古さん…何か仰いました？」

「なんでも無いアル!!？」

顔の陰影が裏返った様な迫力ある笑みを浮かべて表面上穏やかに尋ね返す千鶴に、余計な事を呟いた古は背筋を伸ばして断言する。

「緊張感が無いでござるな…むっ…これは……」

楓は苦笑しながらある意味何時も通りの光景を眺めやっていたが、ふと何かに気付いた様に梢の間の彼方を見た。

それは今にも両陣営の先頭の間合いが触れ合おうとする、一触即発の状況において飛んで来た。

「……………ん？」

「……………お？」

「…よし間に合った」

「……………う……………」

先頭に立っていた中村と豪徳寺は目にした光景にやや間の抜けた様な声を上げ、同じくそれを見た山下は明確に安堵の声を洩らす。中村達のリアクションを訝しく思ったか、同じくヘルマン側の先頭に立つニテンスは警戒しながらも視線を後ろに向け、驚愕に目から零れる光が増加した。

鈍い風切り音を立てながら、鈍色に輝く中型の普通乗用車が緩やかに回転しながら、ヘルマン達に向かって飛んで来ていたのだ。

「…なっ!?？」

同じく振り返ったヘルマンやニテンスが驚愕に目を見開く中、動揺して声を洩らしながらもニテンスは飛来する乗用車を左の裏拳で殴りつけて横合いに吹き飛ばす。二トン近い重量があらうと重機並みの大きさとそれ以上の怪力を持つ今のニテンスならば造作も無い迎撃である。

しかし拳を振り切ったニテンスと眼下のヘルマン達は再度目を見開くことになった。ニテンスの迎撃が車体に炸裂し、車体がひしゃげて吹き飛ぶ寸前に、その後部座席から飛び降りた一人の若いスーツ姿の男性が居たが故に。

その男——麻帆良学園の魔法教師、皇至道 瀬流彦は引きつった顔をしながらも、杖を体前に掲げながら詠唱を続け、ヘルマンに向かって落下する。

「っ!??!いかん!!?!」

「…に希望の川底、叫びの石より来れ、貪り喰らうもの!!?!」

状況を理解するよりも早く、本能が継承を発したヘルマンは衝撃波を打ち出し、瀬流彦を遠ざけようとするが、僅かにそれよりも早く瀬流彦の魔法が完成する。

「魔狼囚えし縛鎖!!?!」

瀬流彦の持つ杖から迸る無数の光り輝く鎖がヘルマンの身体に纏

わり付き、瞬きする間に複雑な編まれ方の緊縛となり地面に縫い付く。

「こ、これは……!??!」

ヘルマンが身体に魔力を充填させようとして、まず魔力の発現が行えない事に気付く、驚愕の声を上げる。

「…ゴアアアアツ!!?!?!」

「うお危つぶな!??!」

憤怒の声を上げながらのニテンスの斬撃を、障壁を砕かれながらも跳びすきつて躲した瀬流彦は、冷や汗を流しながらも不敵な笑みを見せ、高らかに宣言する。

「…お前が例え老<sup>エルダードラゴン</sup>竜だろうが君主級一步手前の公爵級だろうがそいつからは抜け出せないし如何なる能力も行使出来ない!!?!何せ対個人クラスの封呪・結界系ではこいつを越える魔法はこの世に存在しないからなあ!!?!」

瀬流彦はそのままジリジリと後退しながら、辻達には笑顔を向けて言葉を放つ。

「遅くなって済まない、君達!!?!魔法教師 瀬流彦!!?!生徒の窮地に、只今参上だ!!?!」

その大見得に中村が身体を震わせながら指を指し、叫ぶ様に言い放つ。

「嘘だ!!?!あ、あのイケメンの癖に残念臭漂って頼りねえセルピーが普通にちよつと格好良い、だと!??!」

「くつそ僕はやつぱりそんな評価か!!?!まあいいや格好良く見えたならポイント上昇だよね!!?!」

早速漫才地味たやり取りを繰り広げる両者とは対照的に、驚きと怒り、そして僅かな焦りを浮かべながらニテンスが怒鳴りつける様に問い掛ける。

「馬鹿な、魔法教師だと!??!どうやってこの状況を察知した!!?!?!?!」  
それに対して瀬流彦は肩を竦め、ぞんざいな仕草で杖を振りながら言葉を放つ。

「答える義理は無いし、動揺して吠えてる暇があるのかな? 僕が車と

飛んできた、つてことは、車を飛ばした人間がいるとは思わないのかな？……杜崎先生、今です!!？」

「っ!!？」

叫んで瀬流彦がニテンスの背後に向かって合図を送り、ニテンスが歯噛みしながらも急旋回、背後に対して刃を振るう、が。

「上々だ、奇襲による捕縛から言葉による狡い陽動。よくやったぞ瀬流彦」

そんな言葉と共に飛び出して来た杜崎の出現位置は、ニテンスの横合いの茂みからだった。

「!!？」

「ニテンスっ…:⊠」

「狡いは余計です…:態々奇襲を声に出して知らせる訳無いだろうが、阿呆山羊頭」

メローディア ベラークス ウィース マーキンマ  
「戦いの旋律 最大出力!!？」

セルウアの警告は遅く、嘲る様に瀬流彦が吐き捨て。

顔を歪めるニテンスの土手っ腹に全身から激しく魔力強化の光を噴出する杜崎の殺人右フックが轟音と共に突き刺さる。

「ガッ……!!？」

「おおおおおおおおお!!?!?!？」

苦鳴を上げるニテンスを他所にミシミシと全身を軋ませながらも杜崎は腰を軸にして上半身を捻転。雄叫びと共に右拳を振り切り。ニテンスの巨体がくの字に折れ曲がって人形のように吹き飛んだ。

「……うおおおおお……!」

中村が冗談の様なその光景に、引きつった声で呻き声を洩らす。何時も喰らっていた拳骨が、全くもって兎戯に等しい超腕力である。日頃から打撃をよく喰らうが故に、他人事では無いらしかった。

「…ふむ、やっと真面にお前達を助けられるな。よく頑張ったぞ、お前達」

杜崎は魔力の残滓を身体中から零しつつ、穏やかな声でそう告げた。

「…もっさんよ、一つ聞いていいか？」



「杜崎先生と呼べ軍艦頭。なんだ？」

「…俺の記憶が間違つて無えなら、今飛んできた車つて変態只野のクルマじゃねえか？」

その問いに杜崎はあっさり首肯した。

「そうだ。あのクズの車なら別に壊れた所で心は全く痛まんからな。他に瀬流彦を入れたまま投擲武器として使えそうなものが無かったから投げた。それだけの事だ」

「やっぱりかよ!!？」

「つていうか投げたのかよあの車!!？」

ギヤアギヤアと中村達が騒ぐ中、辻は前に出て杜崎と瀬流彦に頭を下げる。

「…よく来て下さいました、瀬流彦先生、杜崎先生」

安堵の息と共に辻は言い、他の面々も警戒は止めないながらも緊張が解けている。

「良かった良かった。間に合う確証も救援が来る保証も無い救助要請だったから当てに出来ないのはしんどかったよ」

「予想よりも寧ろ到着は早い。これで一先ず安泰だな」

「……す、凄いですねやっぱり一人前の魔法教師は……」

「……あのゴリラみたいなおっさん本当に教師なんか？あのでかブツが玩具みたいに吹っ飛んだで……!!？」

杜崎と瀬流彦はゆっくりと残るセルウアへ拳と杖を向けながら歩んで辻達を守る様に立ち塞がり、最後通牒を突き付ける。

「二形勢、逆転だ（つてね）」

「え……え、ええええええええええ!!？」

「……………あらあら……………」

真逆のあつという間な逆転劇に、明日菜は混乱して叫び、千鶴は目を丸くして声を洩らす。

「げえええええええつ!!？どうなつてンダ!!？」

「魔法使い達には連絡を入れてない筈ですよ!!？監視してたんですから間違いありません!!？」

「……………奇襲からの輪姦?」

「いや、今迄以上に意味わからへんど〜?」

すらむいやあめ子も同様に驚愕し、無表情ながらもしつかり動揺はしているのか、普段以上に支離滅裂なぷりんの呟きに、同じく驚いている筈の木乃香がツツコミを入れる。

「…事情を説明出来ず、済まなかったでござるな、皆。実の話、救援に来る前に魔法関係者に対して救援を求めていたのでござる」

「助けてから〜こまでは説明してる暇が無かたアルし、そのぷよぷよ娘達が側で観戦してる以上迂闊に説明は出来なかつたアル。許して欲しいアルな」

訳知り顔の楓と古に、すらむいが猛然と噛み付く。

「馬鹿な、不可能だぜ!!?魔法的な念話等の通信術式から、器用なセルウアの姐さんは局地的な電波妨害までしてたんだ!!?魔法関係者の位置にも監視の目は置いてたから物理的にも接触はしてねえ筈だぜ!?!?」

その言葉に楓は一つ頷く。すらむいの言ったように、通常の方法での連絡手段は警戒されていると辻達も予想していた為、そういった手段はそもそも試してすらいない。

そんな常識的な方法での連絡しか警戒していない時点で、思えばヘルマン達の敗北は決まっていたのかもしれない。

楓は苦笑しながらも、狼狽するスライム娘達に宣言する。

「…何処ぞの御仁も言ったらしいでござるが、麻帆良を舐め過ぎでござるよ、貴殿らは。…この都市には動物の言葉を理解する御仁が存在するのでござる」

「……………いやしつかし驚きましたよ、獅子崎先輩が仲の悪い事で有名な犬飼先輩の頼みを聞き入れたのもそうですけど、犬とライオンが鳴き声で意思疎通した上でそれを一語一句正確に読み取ることが出来るとか。…本当半端無いですね麻帆良の部長クラスって」

部屋の中、コーヒー片手に感心した様な呆れた様な声を上げる朝倉に対して、獅子崎はフン、と詰まらなそうに小さく鼻を鳴らして優雅

な動作でカップに口を付け、些か煩わしそうにしながらも合いの手を入れる。

「普段なら頼み所か声を聞くのも嫌だけれど、非常事態のようだから、ね。私のネメアがあの下賤な犬コロの言語程度、理解出来ない筈も無いし、相棒パートナーの声も聞けないで闘獣士は名乗れないわ。……まあ、意思疎通を完璧に出来るレベルで動物を愛しているのは私と、癪だけれどあの男位だけれど、ね」

「……………そうですか……………」

「すすす凄いい、でですね……………!!?」

面白くなさそうに呟く獅子崎の足元で、金色の体毛も鮮やかな巨軀の獅子が喉を鳴らす。先程からのどかや夕映の発言が極度の緊張を帯びているのはそのネコ科猛獣が原因だが、獅子崎に気にした様子は無い。矢張り麻帆良マホウで何か突き抜けた人間というのは、何処かがズレているらしかった。

「…大体私に言わせれば貴女が情報を受け取ってからの、あの異常な伝達速度と手段の多さの方こそ非常識よ。報道部期待のホープの異名は伊達じゃ無いわね」

呆れた様な獅子崎の声に、少し照れ臭そうにしながらも朝倉の自己評価は低い。

「いやいや私なんてまだまだですよ。ウチの部長なんか、世界中へ一時間以内には情報を伝えるだけじゃなくて刻みつけるまでやってみせるでしょうから。右から左へ送るしか出来てない私はまだまだ修行の途中でつす!!?」

朝倉のある意味物騒な発言に苦笑してネメアの喉を搔く獅子崎。巨大な獅子は気持ち良さげに猫の様な声を上げる。

「……………動いてくれたでしょうか、関係者の方達は……………」

「…んゝそれはまあ、全員は動かなくても何人かは大丈夫だよ、と……………」

夕映の懸念に朝倉は難し気に唸るも、パラパラと手元の資料を捲りながら安心させる様にそう返す。

「何せ先輩達のお墨付き、あの生物災害バイオハザードにも連絡はしたし、何たって

お師匠様にも送ったからねん」

「……やってくれるじゃないの、本当に…!!?」

事のあらましを聞き、セルウアは憤りの声を上げる。

「強がっても無駄だよ、その妙な口調のオカマ。警備の関係上全員は動けなくても、間も無く更なる増援が来る。いくら爵位級でも今や二体、日本最大の魔法組織お膝元で生き残れるなんて思わないことだ」

「…それでハイそうですか、と俺達が引き下がると思つか組織のイヌ…!!?」

ニテンスが脇腹を抑えながらも大剣を背負い、唸る様に反論する。

「思つてはいないとも、悪魔使いのイヌ」

鼻を鳴らして杜崎は告げ、ゴキリと肩を鳴らしながら拳を構えつつ、更なる言葉を突き付ける。

「思い上がるな化物共。脳みその総じて腐っている貴様ら悪意の塊に人間様が降伏勧告などしてやるものか…：既にトップは拘束してある以上貴様らは用済みだ。痛めつけた上で暗く湿った故郷に叩き返してくれるわ」

「うっわ物騒な…：」

杜崎の不敵な宣言に首を竦めさせながら瀬流彦がボヤク。

ジリジリと辻達も含めた包囲網が縮まる中、ある時期から微動だにしていなかったヘルマンが目を見開き、鋭い声で吠える。

「後ろだ、二人共!!?」

「っ!!?」

「またあ!!?」

二体が振り向く先には、マスクラにも似た仮面を着けた巨大な使い魔を背中に負う、黒いデザインスカート姿の金髪の少女が影から湧き出る所であった。背後の使い魔は巨大な両腕を広げ、今にも殴り掛からんとする体勢に移っている。

しかし、奇襲を仕掛けられた二体は常人の及びもつかぬ爵位級上位悪魔。何度も単純な奇襲は通用しない。

「グルアアツ!!?」

「…舐めんじや、ないわよ!…解放!!?」  
エーミツタム

ニテンスは膨大な魔力を大剣に宿しつつ抜き打ち気味に大剣を薙ぎ払い、セルウアは無詠唱で紡ぎ、遅延させていた大魔法を解き放つ。

大剣が使い魔に横合いから突き刺さり、黒い炎の奔流が本体の少女ごと爆炎で包み込み、後方の木々を焼き払いながら抜ける。

「おい!!?」

「ヤバイっ!!?」

登場と同時に致命的な攻撃を喰らった少女に、血相を変えて中村達  
が飛び出しかけるが、杜崎が手を広げてそれを押し留める。

「おいゴリエツテイ…!!?」

「杜崎先生だ変態が、何だその格好は?…なに、心配は要らん。彼女は  
防御だけなら学園屈指だ」

「それでも通常なら僕らも加勢に行くのが当然だけど…ある意味君達  
に実力を見せておいた方が今後仲良くし易いと思ってる」

瀬流彦の言葉と共に爆炎が流れ、噴煙を風が払う。

「な…!!?」

思わずセルウアが声を洩らし、ニテンスも驚愕に身体を一つ震わせ  
る。

大剣の一撃は使い魔の腕を半ばまで切断しながらも黒い布状の防  
壁に巻き取られて静止し、少女の周りには焼け焦げながら今だ幾重に  
も数を重ねる同様の防壁が爆炎を完全に防いでいたからだ。

「…私の展開した八重奏の黒衣の盾は理論上極大呪文をも不完全とは  
いえ防ぎます。生憎ながら、火力不足、ですよ、悪魔達」  
ダイモンズ

金髪の少女―高音の言葉と共に、使い魔の身体が中央から縦に割  
れ、中から黒髪の青年と赤毛の少女が飛び出す。

「侵入略の猛火!!?」  
デーウオワールス エレメントウムスアグレッッシオー

赤毛の少女―愛衣が紡いでいた大火の奔流が、攻撃直後で碌に防  
御も整わないニテンスとセルウアを真面に捉える。

「グ、アルアアアツ!!?」

「キヤアアアアツ!!?」

それぞれが苦鳴を上げながらも、魔法抵抗力を全開に高め、防壁を展開して耐えるニテンスとセルウア。

しかし、ある種無常な事に愛衣の傍らの青年――篠村は悠長に攻撃の終わりを待たずに動く。

「魔法の射手 連弾 光の101矢」

青年の周囲に光弾の群れが展開し。

「…貫 通 !!?」

更なる青年の力ある言葉により、光弾の全てが鋭い槍状に変形する。

「……!!?」

ニテンスが猛火の奥で目を見開き、今だ使い魔に突き刺さる大剣へと、焼け焦げるのも構わずに腕を伸ばすが。

「遅いんだよ」

青年の酷薄な呟きと共に光の槍が両者に向けて殺到した。

光の槍は間隔を置いて、ニテンスとセルウアの頭や胸等の急所へ突き進んで防壁と魔法抵抗を喰い破って消失。その着弾点に後続の槍が進出して、悪魔の強靱な肉体を破壊していく。

光の槍の射撃が止み、猛火が消え去る頃には、全身が焼け焦げ、頭部の半ばを失い胴体と手足の各所に大穴の空いた、変わり果てた姿のニテンスとセルウアがいた。

「…お、れが……こんな……!!?」

「…駄目、ねえ、これは……」

無念の声と共にニテンスが膝を付き、苦笑地味た響きの呟きを洩らし、大の字にセルウアが倒れた。

篠村は一つ息を吐き、仏頂面と輝いた表情の対照的な高音と愛衣を後ろに、辻達へと手を振り、言い放つ。

「…悪いな、美味しい所持って行って」

「…それで、お主らは抵抗するでござるか……?」

楓の問いに、すらむい達は両手を挙げて宣言する。

「降伏だ。逆立ちしても勝てねえシ」

「大人しく縛に着きますよー……勝算は充分にあつた筈なんですケド  
ネー……」

「……まあ悪役デスシ……」

「ぷりんが普通に喋ツタ（リマシタ）!?？」

そんなやり取りを他所に、千鶴が首を傾げて明日菜へ問う。

「……終わりということ、いいのかしら……？」

「あー……うん……」

明日菜は苦笑しながらも頷き、色々と怒濤の展開が過ぎたこの場に  
相応しい感想で締めくくつた。

「……まあ、なんて言うか……やっぱりとんでもない所よね、麻帆良って  
……」

## 16話 それぞれの征く道

煌眼の魔人が剣を振るい、燃え盛る死の視線を浴びせるも、そのローブの男には何ら痛痒を感じさせられない。甲冑の魔道士が、触れた物を溶かし尽くす死の霧を放射するが、男のローブの裾すら害せない。二体と一人が激しく争うその下では、異形の悪魔達が残骸となり敷き詰められていた。

男の力は圧倒的で、人外の悪魔達よりもいつそ化物地味ていた。少年は悪魔よりも男に対して恐怖を覚え逃げ出して。その先で男が自らの父であると知った。

少年にはよく解らない。自分の故郷が襲われた理由も、父が自分の前から消えた理由も。自分に咎があるのか、ならばどうすればいいのかも、解らない。

ただ少年は、もう一度父に会いたかった。自分の側に居てくれなかった、しかし自分を助けてくれた。英雄と呼ばれる、自分の父親に。

「……これが事のあらましです。見聞きしてて愉快的話じゃ無かったと思います……」

「……………」

悪魔達との闘争から一夜明け、ヘルマン達との間に何があつたのかをネギは全員の前で曝露した。記憶の情景と共に語られた、ネギの幼少期の惨劇を聞き終えて、バカレンジャーは皆が難しい、或いは沈痛な表情を浮かべている。感受性の強い女子達は目に大粒の涙を浮かべていた。

「……あなたの所為だなんて、そんな事ある訳無いでしょ馬鹿ネギ!!」

明日菜が目尻の涙を拭いながら叫ぶ様に言い放つ。世の片隅でひっそりと育ち、生きていただけのネギは純粹なる被害者であり、一端の責任もある筈が無い。少なく共それは聞いていた者の総意だった。



た。

ネギは少し寂し気に笑い、言葉を返す。

「明日菜さん、ありがとうございます。助かったお姉ちゃんも、学校の先生達も、そう言ってくれました。でも、今回の一件であの悪魔達は、僕と、辻さん達についての調査を請負っていました。：調査を依頼したのが何者かはまだ解っていないようですが、かつて村を襲った悪魔達が、その生存者である僕の元へ八年もの時を経て再び現れました。：僕はこれを、偶然だとは思えないんです」

ネギは俯きながら拳を握り締め、険しい表情で言葉を紡ぐ。

「：僕には何かがあるのかもしれませんが。ひよつとしたら、今回の件だけじゃなくて、木乃香さんが攫われたことだって……！」

「そこまでだ、ネギ君」

辻は決して強い口調では無いが、きっぱりとネギの言葉を遮った。

「下手の考え休むに似たりつて言うよ、単なる状況証拠だけで悪い方ばかり決め付けるもんじゃ無い。京都の一件と今回の事件が関連しているかもまだ解らないんだからね」

しかし、ネギを擁護する様な辻の言葉に、他ならぬネギ自身が納得しない。

「でも！実際に僕はあの悪魔達に……!!？」

「止めい、ちゅうとろうが」

「はうっ!!？」

勢い込んで捲し立て様とするネギの脳天に、中村が空手チョップを叩き込む。

「な、中村さん!!？」

「：先輩、もう少しやり様があると思いますが？」

頭を押さえて抗議めいた響きの声を上げるネギ。ネギの過去語りで流していた涙も今だ消えやらぬままにのどかはアワアワと身を震わせ、夕映が目尻の涙を拭いながら非難する。

「口で言っても聞かねえだろがこんな状態だと。兎に角ネギよ、気に入んなつってもまあ無理だろうが、そこら辺の裏事情だのなんなのは考えんな。<sup>はじめ</sup>一ちゃんの言う通り話のウラもあの爺いからは取れて

無えんだ、思い悩むだけ時間の無駄だ無駄」

あつけらかんとした中村の言葉に、ネギは抗議する。

「…そんなに簡単に割り切れませんよ。僕だって馬鹿じゃありません……一人前の魔法使いでも手に負えない様な規模の事件に、僕達は関わり過ぎています。何者かの作為を何と無く感じるんです、僕は……」

ネギの考えはある意味で正しい。少なく共ネギの所属する関東魔法協会は、ネギの成長を促す為に魔法使いとの交戦を仕組んだり、意図的に救援を遅らせることがあった。魔法使い達の思惑がどうあれ、半人前の、それも十に満たない魔法使いの少年に対して行う試練としては過酷に過ぎるものであり、仮に善意からの行いであったとしても、其処に有るのは悪意無き悪意だ。その上関東、関西の二大魔法組織を出し抜いて鬼神復活を目論んだ、得体の知れない凄腕の魔法使い達に今回の悪魔を遣わせた謎の術士。ネギの周囲は彼を害する意思に溢れていた。まだ幼く、基本として人を善意的に見る育ちの良い彼であつてもそれに感付く程に。

辻達は、そんなネギの認識を否定するつもりは無かったが、同時に事態を悲観的に見過ぎ無い様にして欲しかった。そもそもが所属している組織からして何やらきな臭いものが漂うが、杜崎の言葉などを鑑みるに決してネギに悪い扱いを望んで強いている訳では無い。自分達の他にも、この学園には魔法教師や生徒、そして逸般人の中にも、潜在的なものを含めれば多くの味方が居るのだと、ネギに理解<sup>わか</sup>って貰いたいのだ。

「…まあ、そうかもしれないねえな」

故に語り出した豪徳寺は、ネギの言葉を否定しなかった。

「だけだよ、ネギ。仮にお前の言う通り、お前の因縁やら何やらが原因で妙な事件が起きているにしたって、お前がそれを何とかする必要は無えんだぜ？」

「……えっ？」

豪徳寺の言葉に俯いていた顔を上げるネギに、豪然と腕を組みながら豪徳寺は告げる。

「お前はさつき言ったよな、俺らが関わったのは一人前の魔法使い達でも手に負えない様な事件だって」

「…は、はい……」

「ならば」

大豪院が先を続ける。

「今だ半人前のお前がそもそも事態を上手く収取出来る筈もあるまい。だというのにお前は事の責任の在処を思い悩む、矛盾しているぞお前の言動は」

大豪院の口調は厳しいものであったが、その表情はどちらかと言えば悲し気な、ネギのことを慮る様子のそれだった。

「前にも似た様な事を俺達はお前に述べたかもしれないが、お前が理解し、実感出来ていないならばもう一度言おう。ネギ、お前はまだ子供だ。その歳で魔法学校とやらを卒業していようが、相応の実力を有していようが、俺達はお前にケツを持たせる様な真似はしない。それはお前が、子供だからだ。お前の能力を、人となりを低く見積る訳では無い。十に満たない年齢でよくそこまでやっている。…寧ろお前は良くやり過ぎているのだ」

「……よく、解りません」

ネギは暫し悩んだ挙句、正直にそう溢した。

「よく出来ていては、頑張っていたらいけないって言うんですか…?」

「頑張る事、それ事態は勿論悪い事なんかじゃ無いさ」

途方に暮れているネギに山下が優しく言う。

「でもね、ネギ君。君は大豪院が言った様に少しばかり出来過ぎていて、頑張り過ぎてるんだ。俺達が君と出会ってから、まだほんの僅かな時間しか経っちゃいないけど、その僅かな間に幾つも大変な事があったね。…どれをとっても君どころか、幾らか長く生きていて荒事慣れしてる僕達を持ってしても、遥かに手に余る事件ばかりだ。はつきり言ってこれまでの事件、当事者になったとして真面に責任を取れる、事態を収集出来る人間なんて、世界全体を見渡したって殆ど居やしないと僕は思う」

僕達をもっと頼る様にしろなんて偉そうに言っておいて何だけど

ね、と少し恥ずかしそうに笑いながら山下は言葉を続ける。

「僕達が言いたいのね、君より歳食ってる僕らでも帳尻を合わせる  
ことがやつとな塩梅なんだから、君が何にも出来なくなつて気にする  
な、つて事なのさ。君は子供だ、例えば君がどれほど有能でも、君は周  
りで起こつた事にまだ責任を取ろうなんてことは考えなくていい。  
子供の後始末は、大人が着けるものだよ。君は自分の手で仕出かした  
事には、きちんと始末を着けている。それさえ出来ない様な大人が世  
に蔓延してる中、君は本当によくやっている。……だからそれ以上は  
考えなくていい。君に、君の周囲に迷惑が掛からない様に、きちんと  
大人が身体を張るからさ」

「……そう言つてもネギ君は真面目で優しいから、納得しはしないん  
だらうけどね」

苦笑しながら辻が言葉を繋ぎ、戸惑うネギと視線を合わせる。

「君の出生を見聞きした今では尚更強く思うよ。ネギ君、君はもう少  
し好い加減に生きていい。やりたい事をやって、後の始末は大人に任  
せる位の心持ちで丁度いい位だ。：君が頑張る理由は何と無く解つ  
たし、引き続き俺達は協力を惜しまない。でもいくらやりたい事と  
目的の為の手段が一致しているからって、その歳で頑張つてばかりい  
るんじゃない。状況が中々許してくれないかもしれないけど、君は楽  
と遊びを覚えるべきだ」

「重症だぜあの坊ちゃんは」

ある喫茶店の屋外席にてふうと溜息を吐き、中村が珍しく低いテン  
ションで呟く。

「皆の手前、真面な言及は避けたけど、突っ込み所満載だったからね  
え、あの記憶映像は」

こちらにも沈んだ調子で、山下が答える。

「幼稚園に通つてる様な歳で離れでのほぼ一人暮らし、同年代の友人  
は時折訪れる幼馴染の少女のみ、猛犬に悪戯しようと思冬に湖に飛び  
込もうと子供を『叱らない』大人達……言いたくは無いが環境が異常  
だ。あれではネグレクト音見放棄一歩手前だろう」

「仏や石になつて連中をあまり悪く言いたか無え。が、村での環境をスルーしても、あいつの今の状態を見るとあの事件の後も真面に精神面のフォローが入つてゐるかは疑わしいぜ……」

「…断定は出来ない、が……英雄の息子という色眼鏡が悪い方向に作用しているのかもしれないな……」

大豪院、豪徳寺に続いて重苦しい口調で辻が溢し、一同は沈んだ空気に包まれた。

「……俺らはあの悪魔爺いから聞いたただだから今一実感が湧かねえけどよ……」

「健やか且つ真面目に偉大な魔法使いを目指す関心な魔法使い見習いの少年、と一概に肯定的な見方が出来なくなった感はあるわね……」

「……私達の対応、間違つていたんでしようか……？」

対面にて愛衣を挟んで座る篠村と高音の三人衆も、場の空気を払拭出来ずに重い息を吐いていた。

ネギは結局辻達の忠告に対して、明確に肯定の意を返さなかった。始業の時刻が迫るが故に一行は解散したが、明日菜達にネギの様子をよく見て、思い詰める様な事の無いよう、バカレンジャーは頼み込んだ。3-A女子一行は快諾し、一先ず時間を置く結果となったが、五人の内誰もがネギの心持ちは容易に変わらないであろうと感じていた。

ネギの境遇は悲惨の一言であり、そんな過去を背負っているにも関わらずその人となりは生真面目で早熟な努力家、という正常も正常な範疇だ。

しかし、ネギの過去を知る以前から辻達はネギの行動、言うなればその歳にして常軌を逸していると言つても強ち過言で無い責任感と向上心に対して、ある種異様なものを感じていた。優秀だ、天才だからだ、と断じてしまえばそれ迄であるし、実際に資質の高さも要因の一つだろうとは辻達も考えていた。

しかし人は理由無くして肉体、精神を年齢に比する以上に成長し得ない事を、彼らは実感を持って理解している。故にネギの根幹、其れ程迄にその身を駆り立てるのは如何なるものかと、辻達は疑問を抱い

ていた。

そして、その理由は第三者ヘルマンによつて彼らの知る事となつた。決してそれが彼らがそうあつてくれと望んでいた様な、幼さから成る純粹さ故の憧憬等では無かつたとしても、否応無しに。

辻達は、ネギがある意味で心のバランスを崩していると確信していた。

まだ自我も確立仕切っていない様な幼少期に故郷の地、遠縁といえ育ての親、周りの知人といった、少年一人の世界を形成するほぼ全ての要素を失つたのだ。精神に対して何らかの悪影響が無い方がおかしいことであり、下手をすれば精神崩壊、PTSD等の日常生活も儘ならないレベルの障害を負つてもおかしくない。

幸いに、と言うべきかネギは人格が歪む様な事も無く、立派な魔法使いを目指す純真な少年としてこれまで生きてきた。

が、目立つた異常が無い事こそが異常であり、変化は、歪みは確かにあつた。

「ネギは、あの事件での悲惨な記憶を、全部引つくるめて意識しない様に心の隅にでもやっちまつて、空いた空白にその時助けてくれた親父への憧れとか愛情とかが殆どを詰めちまつてるから、あんなに強くなるうとしてんじやねえかな、つて俺あ思うんだな……」

ぐでぐで行儀悪くテーブルに突つ伏しながらも声色と表情は真面目に中村は言う。流石にこの状況で中村が真面に話している事の異常をツツコむつもりは辻達にも無いらしく、相槌を打っている。そのお陰か、高音の評価は真面目な話も出来るのね、と少しだけ持ち直した様だつた。

それはさておき  
閑話休題。

「だから親父さんの事が言つちまえばネギの全部になつていて、そんな親父がバカ強えから自分が親父に追いつく為にああまでやる、つてか？」

理由になつている様でなつて無え気がするけどな、と豪徳寺は腕を組んで言い放つ。

「勿論、お父さんの事が全てなんていうのは極論だろうね。それなら

ネギ君は、こんな所で教師として頑張ろうなんて考えちゃいないよ。  
：他人をあの子はしつかり思いやれているからこそ、ああやって一人  
で抱え込もうとするんだろうから、それも良し悪しだけどね」

山下が、苦笑と呼ぶには苦みの強い笑みを浮かべて答えた。そんな  
やり取りにやや躊躇いながらではあるが、高音が言葉を挟んでくる。

「ネギ先生は、所謂ACCOA《アダルト・チルドレン・オブ・アルコホ  
リックス》に近い状態にあると言いたいのかしら、貴方達は？」

「……高音、悪い。何だそれ？」

顔を顰めての篠村の質問に、高音はキツイ目線を一瞬向けるが、バ  
カレンジャーの大半も疑問符を頭に浮かべているのを見て、小言を少  
し述べるに留め、解説を始める。

「他はまだしも、貴方は将来NGO団体での活動を視野に入れての受  
講を共に受けているのだからこれ位は解りなさい。……幼い頃に家  
庭内の問題等で何らかのトラウマを抱えて育った子供が、成長した後  
に心の傷を負った幼少期と同じ様な環境にしばしば身を置いてしま  
う心理的な傾向よ。例えばアルコール中毒の親に苦しんだ少女が、成  
人した後にアルコール中毒の配偶者を得てしまう、といった具合の  
ね。…ネギ先生は幼くして、魔法を暴虐を尽くす為の手段として振る  
う唾棄すべき魔法使いの鼻つまみ者により不幸な体験をしたわ。だ  
というのにネギ先生は主に戦闘用の魔法をしばしば決まりを破って  
まで習得しに走り、貴方達に強くなる為の修業を打診したのでしょ  
う？貴方達の話聞いた限りでは、幾分放置されて育った時点で家庭環  
境に問題無しとは言えないでしょうし、生命の危機なんていうとびき  
りの恐怖体験を肉親に助けられた。英雄ナギ・スプリングフィールド  
への心理的な依存や、無意識での絶対者としての崇拜も併発している  
かもしれないわ。魔法の暴力的な一面を目にしながら自ら戦闘  
技能を高める。細かい差異はあっても症例は当てはまると思わない  
かしら？」

高音が水を向けると、中村と豪徳寺が轟沈していた。

「……話が難しくよく解んねえ」

「…エロ親父を嫌う娘が買春しちまうみてえな例え話か？」

「え、ええと…大雑把に括るならそれも合っています…」

頭から立ち昇る煙が幻視出来る二人の様子を嘆息混じりに眺めていた大豪院が、話の筋を戻しに掛かる。

「心理学は門外漢故によく解らんが、あのままネギが進むのを個人的には良しと出来ん」

「ああ」

辻が頷いて大豪院に同意する。

「色々と身に覚えがある身としては憧れを目指すのも敵を見据えて報復の為に力を研ぐのも否定はしない、いや出来ない。でもその為に自分を削るのは駄目だ。…きっとあの子は、倒れるまで無理をするだろうし、それでは周りに心労と心痛を与えるだけだろうから」

辻の言葉に頷きを返すバカレンジャー。愛衣も賛成です！とばかりに首を縦に振り、高音も何か慮ることがあるのか、積極的に賛意は示さない迄も否定はしない。ただ篠村は難しい表情で一つ唸り、辻達に向けて言葉を放つ。

「言い分は良く解るし、方針自体は俺も賛成だ。無茶をすんのは若者の特権と言うがあの子供先生のそれはなんかベクトル違うからな。…でも脛に傷持つオーバーワークの先任者としては他人事じゃ無いから何と無く判るんだが…多分言った所で根っここの部分で納得しないだろ、ネギ先生変に頑固な所あるぞ？」

短い期間とはいえネギに師事をしていた篠村はネギの性分についてある程度理解している。ネギは基本的に素直で指導を飲み込み良く吸収するのだが、時折妙に自論を曲げたがらずに所謂自己流を通そうとすることがある。きちんと要不要や効率を説けば納得するものの、案外大人しそうな見た目と性格に似合わず私の強い一面もあるのだ。

……いや、ちよつと違うか………

そこまで考えて、篠村は己の思考の流れに待ったを掛ける。

ネギのそれは頑固と言うよりは単なる自信、とでも呼ぶべきものだ。本人に直接問えばアタフタとしながら否定するのだろうが、あれで案外ネギ・スプリングフィールドという少年は、己の能力に結構な



自負を抱いているのである。

考えても見れば、ネギは魔法学校へ入学してから猛勉強に打ち込み、僅か数え年十歳にして首席での卒業を果たした紛うこと無き秀才にして天才なのである。その努力の陰には、己に降りかかった辛い惨劇を忘れる為の逃避的な意味合いとあっただろうが、それでもネギにとって魔法とは、物心ついて間も無い頃から一心に打ち込んで身に付けた、己の半身に等しいものだ。故にこそ未熟を認めながらも、ただ唯々諾々と物知らずな初心者如く教えを受けるのが無意識的にする気に入らない部分があるのだろう。

辻達が一方的に構っているとはいえ、幾多の助けを受けておきながら傲慢とも取れる考えではあるが、

……傲慢っつーかガキなら当たり前なんだよなあ、自分の力を疑わないなんてのは……………

小学生をやっている様な年齢の頃から何に対しても自信の無い、ネガティブ意識に満たされた子供などまず居はしない。多くの少年少女は、幼さからくる全能感を持ち、自分には何でも出来る、叶わない夢は無いと無邪気に信じているものだ。

子供だ子供だと自分達で言っておきながら忘れそうになるが、ネギは幾ら優秀でも大人びていても、十歳に満たない少年なのだ。寧ろ負けず嫌いで自信家などという一面は、年相応な部分として喜ばしいことである。

「…まあ篠村の言うことも解る。が、それなりに俺達もあの子と付き合い合つて人となりは理解してるつもりだ。元より一朝一夕にどうにかしようという気は無いよ。一人の人生に関する問題だからな」

「…そうかい、なら俺は何も言わんよ」

辻の返答に、篠村は一つ息を吐き、この場での言及を終わらせる。

「…貴方達がネギ先生の将来について真剣に考え、真摯に教え導こうと心身を砕いているのは理解出来ました。改めて初対面での非礼を詫びましょう」

話し合いが一段落して暫し会話が途切れた後、高音は何処か渋いものを滲ませながらも、改めて己の落ち度を謝罪し、辻達バカレン

ジャーへの部外者扱いを捨てる。正義感の強さとプライドの高さから容易に下げる頭を持たない高音ではあるが、己の非も認められない程凝り固まった思考はしていない。

それでも、謝罪の後に上げた高音の双眸は、未だ友好的とは言いが光を湛え、語気も鋭く問いを放つ。

「…それで、そろそろ私達をわざわざこの場に招いた理由を聞かせて貰えないかしら？今の話をするだけならば、顔を出していた篠村や愛衣はまだしも、私迄を呼び出す理由は無いでしょう。……何か聞きたい事でも有るのではなくて？」

高音は篠村が頭を下げてこの場に自分呼び込んでくれたことを何と無く察している。やる気の無さそうな態度を普段取ってはいるが、細やかな気配りの出来る男だということを高音は知っていた。篠村との確執を未だ引き摺る身からすれば、それは複雑な気分させられるものであったが、プライドの高さを自覚している高音は、こんな機会が無ければ中々綺麗な関係改善が自分には出来ないだろうことも、また理解していた。

故に高音は、思う所はあれど辻達バカレンジャーに対して、己の立場からの分を超えない範囲で協力することを決めた。辻達は敵では無く、近い内に協力して仕事に当たることがほぼ決まっている、言うなれば既に同僚であり味方なのだ。己の非を棚に上げて感情的に相手を否定する程、高音・D・グッドマンという少女は愚かにはなれなかったのである。

……頭で割り切れても、私もまだまだ子供ね……………

その上で威圧的な態度をつい取ってしまう所は、彼女が思うように未熟な部分であるかもしれない。なかつた。

ともあれ、高音の言葉を受けて辻達は軽く目配せを交わし合うと、代表して向かいの位置にいる辻が答えを返す。

「…高音さんも既に知っているとと思うが、今日の昼に改めて麻帆良の魔法関係者と俺達の間で話し合いの場が設けられる。あんな事件が起こったばかりで急な話だが、その事件そのものの説明を兼ねてと、俺達の立ち位置が不明確だったが故に悪魔達への対応が後手後手

になったのを重く見て、互いの関係性をはつきりさせようというのが理由らしい。：篠村から、俺達の今後の扱いについて話はそれとなく聞いている。ほぼ間違い無く俺達は再び勧誘を受けるだろうし、中村を含めてこっちは全員それを受けるつもりだ」

「……、そう。そこまで決めているなら、尚更何故私をここに？言っておきますが、共に働くことが決まったからといって私は立場を逸脱して何か情報を洩らしたりはしませんよ？」

辻達の真意が見えないからか、一層態度を硬化させる高音の姿に辻は苦笑するが、気にした様子も無く話を続ける。

「そんなことは考えていない。唯でさえ篠村には無理な頼み事をきいて貰って色々と苦勞を掛けている。これ以上貴女達の立場を危うくする様なことは俺達も望んでいない」

「……今は熱を入れて指導をしてる身だから大きく言えんが……：そういう真つ当な氣遣いは俺を巻き込む前にしてくれよ……」

呻く様に愚痴を放つ篠村に辻は苦笑を深めて頭を下げる。

「悪いな。：俺が、俺達が聞きたいのはそういった組織の思惑などに関係の無い、貴女達自身の考えなんだ」

「……貴女達ということは、この男や愛衣をも対象にした質問、ということかしら？」

辻は高音の問いに一つ頷き、三人に対して言葉を告げる。

「……先に断っておくが、今からする質問は魔法使い達を否定したり侮辱したりする様な意図は無い。唯、これから魔法使い達とより深く関わっていくに当たって、どうしても知っておきたい認識の違いについてなんだ」

辻は一拍置いて静かに息を吸い込み、その質問を投げ掛けた。

「ネギ君は魔法使いを目指すべきだと思っっているか？」

「どうだった瀬流彦、あの爺い悪魔の様子は？」

浮かない顔をして職員室の扉を開け、隣の机に着いた瀬流彦へ、テ

スト作成を片手間に杜崎は半ば答えの解っている問いを放つ。

「駄目ですね。普段とつ捕まえてる侵入者達みたいは何を聞いてもだんまりならまだやりようもあるんですが、あの爺さんときたら関係の無い雑談ばかりベラベラ喋くって、こつちが脅そうがすかそうがまるで堪えません。挙句の果てには僕の顔を見て、『おや、私を見事捕らえてみせた魔法使いだね、まだ若いのに大したものだ。時にあの魔法は防護用の御守アミュレットや護符タリスマンの発動すら阻害して完全確実に対象を捕縛するかの名高い貪り喰らいグレイブ喰らいニールの術式だね?』…なんて具合に逆に質問かまされる始末です」

あの余裕はなんなんですかねえ、と溜息を吐き、机に突っ伏する瀬流彦。

「何をされた訳でも無いならシヤンとしていろみつともない。…ふむ、あのでかブツとオカマも案の定再召喚には応じんらしいしな…ハイ・スライムの三体はどうだ?」

「あつちのはエラく素直に尋問に応じてますけど…まあ望み薄ですね。あの爺さん達は専ら移動及び偵察にしかあのスライム達を使役して無かつたらしいですし、使い魔ファミリアだからといって大事な情報を共有してはいなかった様です。スライム達が言ってる通り、大した事は知ってませんね」

「もしやと思つたが流石に穴は無いか…元より爵位級、それも伯爵級なぞ捕縛して現界させている時点で出来過ぎの域だ。悪魔が一方的な交渉に応じる筈も無し、か…」

元より厳つい顔を更に険しくして杜崎が軽く息を吐く。

「杜崎先生杜崎先生。棺桶に片足突っ込んでる爺婆位だったら恐怖で昇天しそうな顔するの止めて下さいよ怖いですって本当に」

「黙れ。…この分では収穫無しのまま臨むことになりそうだな、まったく…」

「は?何が…ってああ、辻君達との交渉のアレですか。…あの子達、こつちに来る気ですかねえ?」

僅かに表情を曇らせ、瀬流彦は尋ねる。

「…来るだろうさ。奴等はこの上無く馬鹿ではあるが愚かでは無い。

そうした方がやり易いし、拒めばどうなるかも理解は出来ているだろう。…言っておいてなんだがまるでヤクザの恫喝だな」

只管に面白く無さそうな表情で杜崎が肯定する。それ以上の言葉は杜崎から発せられなかつたが、明らかに百言を越す反対や文句がその仕事ぶりからは透けて見えた。

そんな杜崎を見て触らぬ神に祟りなしとでも考えたか、隣から発せられる圧力にやや肩を窄めながらも己の教師として残っている仕事に取り掛かる瀬流彦。暫し二人の間に会話が途絶える。

「……杜崎先生」

「…なんだ？」

どれほど時間が経った頃か、資料作成にキーボードへと打ち込む手をふと休め、呼び掛ける瀬流彦に普段よりも低い声で返事をする杜崎。

「なんていうか、僕は武闘派じゃ無いもんで辻君達の事、評判と遠目に暴れてる所を目撃した位でしか知らなかつたんですよ」

「…それがどうした？」

視線を向けぬまま、僅かに訝し気な声で尋ね返す杜崎に、瀬流彦は苦笑しながら告げる。

「だからまあ、あんまりいいイメージは無かつたんですよ。力ばかりは半端に一丁前なガキ共が狭い世界で粹がつてるなあ、つて具合に、正直言つて見下した感じで見てました」

偉そうな考えでしたねえ、今にして思えば、と少し遠い目になる瀬流彦。

「そうしたらまあ、なんですかあの子達は。縁もゆかりも無いネギ君の為に吸血鬼にナシを着けて陰陽師に魔法使いに鬼神を叩きのめして。今回は爵位級の悪魔が相手と来たもんですよ。……あの子ら助けに行く前に遠見で、あの爺さん達に堂々と対峙してる彼らを見ました」

滲む苦笑が深みを増して、瀬流彦は呟く様に言った。

「…僕よりずっと、純粹に誰かを守ろうって気迫が伝わってくる感じがしました。……凄いですねえ、あの子達」

言葉を終えてパソコンに向き直り、仕事を再開する瀬流彦。杜崎は黙ったまま手元の参考書を眺めていたが、本を閉じる音を皮切りに、言葉が洩れる。

「…その真摯な心持ちを普段から発揮して欲しいものだな、まったく」

「…今回の一件は警備を掻い潜られた儂等に全面的な落ち度がある。京都の一件からこちら、不手際ばかりが目立って見える儂等に不満や不審は当然あるじやろう。が、厚かましさを承知で言いたいのだ。儂等と君達の間で協力的な関係を築けておれば、此度の一件は未然に防げぬ迄も、もつと確実な勝算を持って人質の奪還に臨めたのでは無いかと思う」

昼下がりの学園長室、近右衛門の言葉が中央にて並び立つ辻達へ掛けられる。部屋の左右には魔法教師、生徒達があるものは興味深げな、またあるものは剣呑な光を湛えてバカレンジャーを見据えている。その中には杜崎や瀬流彦、そして刹那の姿もあった。

「…だから話を拗らせた発端のこちら側にも非はある、ということでしょうか…?」

嫌味な響きは無いが、探る様に辻が近右衛門に問う。近右衛門は仙人の様な顔を柔和に緩め、務めて柔らかい調子で辻に答える。

「それは誤解じゃ、先の話し合いにおいて君達に非が無い、とは言えんが元より急に事を運ぼうとしたこちらも配慮が足りなかったわい。…君達は本来この麻帆良学園に通う一生徒じゃ。裏の事件は儂等が対処をして当然なれば、孫娘の木乃香やネギ君、学園の生徒達の為骨を折ってくれた者達にこの上尻拭い等どうして行わせようか。この場に至る迄の因縁は清算されたものとして、話を聞いて貰いたいのじゃが…?」

如何かのう?と近右衛門は辻達に問い掛ける。

「…なんか譲歩された代わりに話を前向きに受けなきゃならなくなつたみてえな感じじゃね?」

「単なる言葉の選択と話の持つて行き方でそう感じさせられてるだけ

だよ。魔法使い側は非を認めているし、こつちを陥れようなんて意図は無いんだろうけど、それでもこれは交渉だ。ぼうつと聞いてられる話じゃ無いよ」

首を捻りながらの中村の疑問に、山下が緊張した様子で答える。

「……こちらの非礼にも目を瞑って下さるならば、私達としても異論はありません。お話というのは、私達を魔法関係者の一員として招き入れ、仕事の一端を担う代わりに、今後ネギ君へ関わる事を認めて頂き、また諸々の事情についてもお話し願える、という事で間違いは無いでしょうか？」

辻の確認に学園長は些か苦笑混じりの笑みを浮かべながらも、はつきりと頷いた。

「うむ。認識には少々語弊がある、と言いたい所じやが……纏めるならばその様な条件になるかのう。長々とした丁々発止のやり取りを君達は好まぬ様じやから、此方も単刀直入に訊かせて貰うとしよう」

近右衛門は文机に両肘をつけて口前で手を組み、好々爺とした面立ちを鋭いものに変え、辻達五人に問い掛ける。

「既に並の魔法使い等及びもつかぬ様な裏の世界の修羅場を潜り抜けた君達じや、今更危険性だの覚悟の有無等といった野暮なことを訊くつもりは無い。百も承知の上で話を呑んでいるのじやろうからな。じやがそれでも、この世界は君達が思うより遙かに狭く深い穴が随所に空く所じや。気付かずに踏み出せば、後戻りの出来ん事態が往々にして起こり得る。曲がりなりにも組織に加わる以上は、嫌になろうとも後悔を得ようとも、簡単に抜けることは許されぬ。我を通すなどいうのでは無い、君達を懐柔したり飼い殺しにする気は儂等には無いのけう。それでも、個人の力でもなんならん事態に遭遇した場合、君達は苦渋の決断を強いられる羽目になるやもしれぬ。……そんな幸いならぬ未来を掴み取る可能性があるぞと知った上で、君達は此方に組み入る事を望んでくれるかね？」

曖昧な誤魔化しは許さない、と言わんばかりの鋭い眼差しで近右衛門は答えを迫る。

それに対しての五人の答えは、即座にして簡潔なものであった。

「ここで引いたら悔いが残りますので」

「BADENDなんざぶん殴って追いつ返すよ俺あ」

「苦難上等、黙って乗り越えてこそ漢だぜ」

「はは、僕の場合なんて言うかもう手遅れっぽいんで」

「見義不為、無勇也。一端の武道家を名乗る以上他に道はありません」

三者三様ならぬ五者五様な答えであったが、退かぬという点では一致したものであった。

周りに控える魔法関係者の中には、中村等の余りにも軽い受け答えに舐めているのかと憤慨する者も居たが、杜崎や瀬流彦、篠村達等一部の者は溜息を吐き、苦笑しながらも辻達を受け入れた。何より問うた近右衛門自身が何処と無く楽し気に言葉を返すので咎め様が無い。「あい解った、ならばこれ以上何も言うまい。元はと言えば此方から願ひ出た申し出じゃ。歓迎させて貰うぞい、五人共。先の辻君の条件に幾つか補足と説明を加えるなれば、君達に行つて貰いたいのは主に夜間の学園警備じゃ。詳しい内容は後々説明するとして、既存の班へ試験的に君達を個別に加えて防衛に当たつて貰うつもりじゃ。その他にも細々と幾つかあるのじゃが、今はいいじやろう。気にしていた犬上 小太郎君やあの悪魔達の処遇と今後の対処も、儂の口頭で説明するにはやや時間が掛かるので、解散した後にもまた改めて場を設けよう」

「……、えー学園長先生よ、それらも気になるっちゃ気になるんすけど、俺らが一番に聞きたいのはネギに関するあれなんすよ。…今度は何聞いてもブチ切れやしませんし、失礼な真似はもうしないつすから、お願いしやす」

中村が焦れた様子で、朗々と話を進めていた近右衛門が一旦言葉を切つたのを機に口を挟む。見れば他の四人も、せつかちな中村の行動を睨んではいても止めには入らない。気持ちは、同じなのだ。

近右衛門は一つ頷き、それまでの話を切り上げて、言わばこの話し合いにおける本題に入る。

「うむ、まず其処を話さんことには君達も落ち着かんようじゃし、話す



としようかのう。ネギ君に対する我々の、君達からすれば奇異に映るであろう対応の訳を」

そこまで言ってから近右衛門は、俄かにしかつめらしい表情になり、真剣な響きの声で言葉を放つ。

「初めに言っておくが、これから耳にする内容がどんなに君達の常識からして馬鹿げた振る舞いをしている様に思えても、どうか魔法使いという存在全てを悪く思わんで欲しい。儂は他に比べて永く生きておるから解る：いや、比べられる故に歪さを感じられる。じゃが、多くの魔法使いにとつては、その違いは常識に近いものでのう：此処に居る大半の者には、個人としての打算は大小有れど、悪意は無いのじゃ……」

その要領を得ない抽象的な前置きに、言葉の中で引き合いに出された当の魔法教師や生徒は、大部分が訳が解らない様子で僅かに狼狽える雰囲気 が漂った。

しかし辻達五人は、まるでそれが予期していた話であるかの様に戸惑い無く言葉を受けると、山下が幾分力の無い笑みで返す。

「魔法使いとは既に意見を交えて来ました。覚悟はしています、学園長先生」

「……そうか。ならば後顧の憂いは無いのう……」

近右衛門は笑み返し、ゆっくりと語り始めた。

紛争と迫害が絶え間無く続く、悲しみと憎しみの連鎖に彩られた疲弊する世界に必要なものとは何なのか？

言い換えれば人類の歴史における負の象徴足るこの問題に、唯一にして絶対なる解はおそらく存在し得ない。正解は一つでは無いが、答えの一つは象徴であり、強力なる絶対者の存在だ。人は人と解り合えぬ存在だが、皆に共通する何かという要素は時に強大な結束を生む。その存在は、時に君主であり、神で、教祖であり、虐殺者であり。

そして英雄だった。

魔法世界と呼ばれる世界がある。面積は約地球の三分の一、総人口は約十二億人。その名の通り魔法を要に置いた独特の法律体系、経済

体系、交通・通信機構、教育制度を形成する正しい意味での異世界であり、現在進行形で多くの地が戦乱を抱える、争いの世界である。

そんな世界はかつて一つに纏まりかけた時期があった。理由は至極単純、世界の終わりを防ぐ為に。

人と人が纏まりを得るには共通の敵を作る方法も挙げられる。敵の敵は味方、と言う様に、共通する敵対者は争いを止めさせる。それは新たな敵へと向かうだけで争いが無くなる訳では無いにしても、世界が南北に分断される大分<sup>ベルム・スキスマテイクム</sup>、烈戦が終結し、曲がりなりにも諸国家が講和に至った訳に、世界の敵を無関係として語る事は出来ない。

矛盾した話だが、争い合いながらも平和を人は望む。望むが故に、平和の為に殺し合うのだ。

世界を再び一つに纏めるにはどうするか？ある者は考えた。共通の敵は最早いない、ならばその敵を斃した、平和の象徴を前に立てれば良いではないかと、その者は考えた。

しかしその象徴たる英雄達は、既に殆どがいない。存命する者達では足りない。人格が、実力が。足りないのだ。

象徴として世界を纏め上げ、救いに導くには矢張り彼でなくてはならない。

一騎当千の猛者達の上に立ち、たった数人で世界の敵対者である大組織<sup>コスモエンテレケイア</sup>、完全なる世界を打ち破った英雄の集い、紅き翼<sup>アラルブラ</sup>を率いた千の呪文の男<sup>サウザンドマスター</sup>。

ナギ・スプリングフィールドでなくては。

されどナギは既に死んだと見られている。少なく共生している証拠は無い。

ならば息子が居るじゃあ無いか。誰かが再び言った。

ナギ・スプリングフィールドの正統なる血縁者であり、彼に劣らぬ魔法の才を持ち、自身も父に憧れ立派な魔法使い<sup>マキステルマキ</sup>を目指しているという、詠えた様に後継者として相応しい息子が、と。

ならば、そうだ。

手伝ってやればいいではないか、彼は英雄に憧れているのだから。

「……本国はネギ君をナギ・スプリングフィールドの後継者として育成する事を望んでおる。先程話した通り、紛争の絶えない魔法世界ムンドゥス マギクスを平和に導く為のう……。故に儂等はネギ君の心身に危険の及ばない範囲で魔法使いとして様々な経験を積ませようと、意図的に初動を遅らせたり、コントロール出来る範囲で事件を仕組んだりしていたのじゃ」

近右衛門の長い話が終わると、場には沈黙が降りる。それはあからさまに威圧を掛けている様な者がいないにもかかわらず、奇妙な迄に重苦しい空気であった。

実の所、辻達は何の為にかは解らないが、無用に面倒事を押し付ける様な魔法使い達の対応から、ネギに経験、又は実績を積ませて何かを利用してしようとしているのではないかと当たりを付けていた。だからこそ、予想以上理由のスケールは大きかったものの、それ程大きな動揺を現さずに済んだ。

しかし、予想出来ていた事と感情が納得するかという事は、また別の問題なのである。

……そんなとんでもない事をあんな子供に押し付けておいて、悪意が無い、か……

憤りにも似た感情が辻の腹の底を舐め尽くす。知らず知らずの内に力の入り過ぎていた拳を何とか開き、一つ息を吐いて頭の血を降ろす。

感情的になつて暴れてはいけない。言うまでも無く立場を悪くするだけであり、それで何を変えられる訳でも無いからだが、理由はそれだけでは無い。

……立派な魔法使いマギだの英雄だの。要は凄い魔法使いに関する認識つてもものが、ズレているんだ、俺達とは。

それを辻は、辻達は高音達との話し合いで理解していた。

「なるべきも何も……ネギ先生にそれ以外の道が何か有るといふのか

しら？」

ネギが魔法使いになるべきか、という問いに対して、聞かれた内容の意味がわからない、といった様子で些か困惑気味に高音が答える。

「…いや、端から見ても魔法が関わる事で酷い目に遭ってんだから、魔法なんかには関わらせない様にしよう、って意見もあると思うんだけどよ…」

「…ああ、そういうった意味合いね」

豪徳寺の言葉に得心がいったという様子で高音は頷く。

「確かに心的外傷を、程度はわからないけれど抱えているのがほぼ間違いないのだから、余り直接的に戦闘行為に関わる様な指導、教育をするべきで無いということね。ネギ先生は術科全般において優秀な成績を納めていると聞かし、魔法理論の確立等を行う学術系の進路を視野に入れた方が良いのかもしれないわ。確かに貴方達の言うことにも一理あるわね」

しかし、豪徳寺の意見を受け入れた上で、高音の返答は何かズレていた。

「いやいや、もっと根本的に魔法使いを止めさせよう、って話にはなんねえのかと、俺らあ言いてんだけどよ？」

中村の台詞に、高音はキョトンとした様子で目を瞬かせる。大人びた容貌を持つ彼女の何処か幼気なその様子は大変に可愛らしいものであったが、話の行末はそれ程に可愛い方向には向かわないようだった。

「……どういう意味かしら？」

「いやどうも何も言ったそのまんまの意味だがよ…？？」

話の噛み合わない二人に、愛衣や豪徳寺が声を掛けようとした矢先、篠村がポツリと呟く様に言葉を洩らす。

「…ああ……そういうことか……」

静かだが何処か重い響きを持つその台詞に、高音や中村も続く言葉を飲み込み、篠村の方を見やる。篠村は相對している辻達の方を向き、言葉を放った。

「認識の違い、ってのはこのことだろ？お前ら、予想出来てたのか、こ

の流れが？」

その問いに辻は首を振り、答えを返す。

「いや。ただ、此方にとつて全く馴染みの無い、魔法なんてものを当然として生きてきたのが魔法使いなんだろう？…考え方というか、常識としているものが俺達とは大きく違っていて、おかしくは無いと思つてき。…今回の話し合いで肝になる、ネギ君の話で関係のありそうな部分の、魔法使いとしての認識を知っておきたかったんだ」

その言葉に、篠村は苦笑いを浮かべて両手を軽く挙げ、降参のジェスチャーを取る。

「脱帽するよ、ご明察だ。普段バキドカやってる癖に、本当に一部は頭回るなお前達つて」

くつくつと笑う篠村に、少し苛立った様子で高音が問い掛ける。

「…なんなの？一人で納得していないで説明しなさい、篠村」

「お、お兄様…私も解らないです、教えて頂けませんか…？」

「ああ、解つた解つた。今説明するよ、どっちにしろちゃんとした此方側の見解、つてもんをレンジャーの皆さんに伝えなきゃいけないからな。…あと愛衣、お兄様は止めるつつつたろ」

篠村は愛衣に釘を刺してから座り直して、順を追つての説明を始めた。

「まずそちらの質問、ネギ先生は魔法使いになるべきかって質問にきちんと答えよう。言つてしまえば、その質問は魔法使い、つて輩に対しては前提が先ず違うんだな」

「…どういうこつちや？解る様に言えよ魔法の射手の達人」

「その二つ名で次呼んだらブチのめすぞ鯨付きのパン一で闘う超色物の変態が。…話を戻すと、ネギ先生はまず魔法使いとして生きていくつてのは当然も自然の大前提。魔法を捨てて生きるつて発想が魔法使いには無いんだ。…何故かと言われれば、魔法使いにとつて魔法、つてのは日常、非日常を問わずに、あまりにも当然として己の傍に在り続けるもんだからさ。空気の次位には在るのが当たり前で、尚且つ無くなることなんて想像もしていない。魔法使いの家に産まれ落ちて、魔法に一切関わり無く生きている奴なんて存在しないと断言

してもいい位だ」

「そうだろう？」と篠村は高音や愛衣に尋ねると、ようやく話の軸が見えてきた二人は、難しい顔をしながらも問いに頷く。

「だからネギ先生がどんなに魔法関連で酷い目に遭っているように、魔法使い達は魔法を遠ざけようなんて発想は浮かばない。魔法は在るのが当たり前だから。：お前達からすれば歪な話だろうが、これを魔法使い達は意識すらしていない。常識以前にそういうものだからだ。：…ついでに言うなら、なんでネギ先生が親父さん、英雄ナギ・スプリングフィールド様に執着、と言っている程拘って、あの歳であそこまで努力を重ねて立派な魔法使いなんて大層なものを目指しているのか、お前達は疑問だったよな？」

「…ああ」

短く肯定する大豪院。篠村は理由となり得る一端を告げる。

「ネギ先生の理由に、お前らと高音が分析した過去の一件が強い起因になっている、っていうのは多分間違っていない。ただ、ナギ・スプリングフィールドに憧れる、立派な魔法使いを目指す。：っていうのは、魔法使いからしてみればある意味珍しくない目標や夢なんだ」

篠村は魔法使いを語る。

「ナギ・スプリングフィールドっていう人物は、魔法使い達からしてみれば事実はどうあれ、大雑把に言えば一番凄い人、だ。こつちでいうなら大リーガーと大統領を掛け合わせたのと同様かそれ以上に凄い、ってイメージ。そんな人間に憧れるのはある意味当然だし、立派な魔法使いの称号にしても、英雄の肩書きとして引けを取らない最大級の栄誉称号。お前達武道家はその道で天辺抑えた：は言い過ぎでもそれに近い名誉なものなんだ。ネギ先生は色々普通じゃ無いが、魔法使いの子供がナギ・スプリングフィールドに憧れてる、立派な魔法使いになりたい。なんて言うのは、普通の子供が宇宙飛行士やプロサッカー選手に憧れて、なりたいたいと言うのと同じようなものさ。なれるかどうかは別として、多くが夢見る有名人と、有名職。：ネギ先生が父親に拘っているのは、親子だとか精神的な問題とかの他にも、魔法使いとしての育て方も一因だと思っぜ？」

参考になればいいけどな、と篠村は締めくくる。

「…篠村もその、魔法使いの家に生まれ落ちた魔法使い、なんでしょ？ そんなに僕らと魔法使いの違いについてそこまで分析できるのは何故なんだい？」

疑問に思った山下が尋ねる。魔法使いの一員でありながら、篠村の視線はどちらかというど辻達の側に近い様に思えたからだ。篠村はあー、と言いつたのだが、四方八方からの視線に負け、渋々話し出す。

「…俺は早くに才能が無いって親に見限られてたから魔法使いとしての正しい教育つてのに余り縁が無かつたんだよ。魔法学校に居た時も、正直何度も魔法を諦めて他の道へ進もうかと考えてたからな。魔法使いに染まって無い分、客観的な視線で魔法使いを見れるからだと思っぜ？」

「……………」

「…………お兄様……………」

努めて軽い調子で篠村は語るが、その言葉に高音は何か思う所があるのか無言で目を閉じ、愛衣は悲痛な調子で兄と慕う男に呼び掛ける。

「…お兄様は止めろよ愛衣…」

其処の変態が五月蠅えからな、と篠村は戯けて笑った。

事前に篠村達と話していたからこそ、バカレンジャーの五人は誰もが激昂せずに済んだ。篠村に言わせれば、麻帆良の、そして本国の魔法使いはこう言っている。

魔法使いとは公の為に正しく魔法を使用する者。ネギ・スプリングフィールドは偉大な父親に習い立派な魔法使いを目指し、またそう成り得るだけの確かな才能を持った将来有望な少年だ。

ならば一時でも早く、ネギ・スプリングフィールドが英雄の後継として活躍出来るよう、その成長を手助けしよう。幼い少年にとっては少なからず大変な道程となるだろうが、それも本人の為なのだ。……と。

……巫山戯た話だとは思う。しかし、これは多くの魔法使いにとつ

ての、正常な思考なんだ……

言つてしまえばどこまでも文化の違い。

例えば、オーストラリ

アの先住民、アボリジニはウォークアウトと呼ばれる通過儀礼イニシエーションにおいて、子供を過酷な原野で一人放浪させ、生きて返ってきた者を成人として迎え入れる。

ネギはあくまで魔法使い達により育てられた以上、どのような教育を受けても、どのように将来を望まれようとも、知り合つてまだ半年にも満たない辻達が文句をつける資格は無いのだろう。魔法関係者の中には、杜崎の様にやり方に不満を抱いている者も居る。京都の一件のようなトラブルが起こらない限りネギの身に危険は無いのかもしれないし、何よりもネギ自身が、父親の様に英雄となりたいかは別として、魔法使いとして力をつけたいと考えているのだ。一方的とは言えギブ&テイクの関係は成立しており、現状誰も不満は無いのだ。気に入らないからといって文句を付けるのは正しくは無いのだろうし、賢いやり方では無い。

しかし彼らは馬鹿であり、また武道家でもあつた。

「…学園長先生、お話は解りました。色々と思う所はありますが、これからよろしくお願いします」

「…うむ、こちらこそよろしく頼むぞい」

辻が頭を下げ、近右衛門が応じる。残りの四人も頭を下げ、話し合いは終了した。その後、警備員として共に仕事をするであろう魔法教師、生徒の自己紹介があつたが、五人の記憶には余り残らなかつた様である。

程度の差はあれ、腑の中は大分煮立っていたからだ。

「やっぱ外道の群れじゃねえか巫山戯んなあの野郎共ああ!!?!?!」

「大の漢が揃いも揃つて!!?!?ガキ一人の成長をチンタラ期待せねばやっていけないというなら今直ぐ滅びろそんな世界は!!?!?」

「落ち着けよお前ら」

無事に?会談は終わり、校舎から男子寮に帰ってきた途端、烈火の



形相で吠え猛る中村と豪徳寺を、疲れた声で辻が諫める。

「落ち着いてられるかこん糞ボケがあ！あの場でキレなかつた俺様を寧ろ褒めろや、なんなんだ魔法使いってイキモンは全員ドタマイカれてんのか!?？」

「知らないし落ち着けと言ったぞ俺は。…怒ってるのがお前らだけだと思っくんじゃない」

辻の言葉に首肯する大豪院と山下。なんだかんだで全員鬱憤は溜っているのだ。

「…しつかしあの連中は。自演で事件起こしてガキ放り込んで放置してきた。しかもそれが本人の為とか頭沸いてんのか本気に?」

「はいはいムカついてるのは解ったからそれ位にしなよ。魔法使いつて肩書きを全員が共通している故の連帯性の悪い方面が出てるんだよ。同じ魔法使いだから、自分の幸いは相手の幸いでもあるって論理だね。…ネギ君の親父さんは魔法使いにとつての尊敬と崇拝を一身に集める、言わば象徴だ。成れるものなら誰だってなりたい。だから成れそうなネギ君は、成ることこそが幸いでそれ以外に道は無いと考えてるんじゃないかな?」

「下らんな」

吐き捨てる様に大豪院が言う。

「そもそもなろうと思つてなるものではあるまい、英雄などというもののは。職業で無く単なる肩書きであり、敬称なのだから」

「正しく山ちゃんの言う通り、象徴としての英雄を求めているんだろうよ。自分達の意のままに動かせて、高い倫理観と責任感を持つ故に世界の生贄になることを拒まない、都合のいい偶像が。だからこそ、必要なのは英雄の息子っていう血筋と場慣れにある程度の実力、そして何よりも実績と。…それ位なんだろうさ」

「…けつー!」

中村が悪態と共に床に寝転がり、天井を睨み付けながら言い放つ。

「…兎に角、俺ああの連中の思い通りになんざさせるつもりは無えぞ。

ガキの将来、大人が勝手に決めていいもんじゃ無えだろ」

「ああ」

「だね」

「偶にはいいこと言うじゃねえか馬鹿村」

中村の言葉に皆が頷いた。自らの人生は自らの手で切り開く。他人が敷いたレールの上で一流に成れはしないと、この場の全員が思うことだ。

「別に魔法使い達の全てが間違っているとは思わない、けれどネギ君の人生はネギ君のものだ。…俺達はあの子に色んな事を教えよう、苦楽を共にしてこそ人生だ。…そうして広い世界を知った後に、あの子が改めて親父さんの後を継ぎたいなら、それはそれでいい」

「うん」

山下が頷き、眼前に掲げた手を握り締め、宣言する。

「皆であの子を、ネギ君を。自分で将来を選べる様に強くしてあげよう」

バカレンジャーは新たな誓いを胸に本日、魔法関係者の一員と相成った。

「はあっ!!?」

「まだだまだだネギい!!?そんな突きじゃ蠅も殺せねえぞこうだこう!!?」

話し合いから一夜明け、ヘルマン達との死闘から早数日。激闘の後遺症の抜けたネギは辻達との鍛錬を再開していた。中村が矢継ぎ早に繰り出す拳足を必死に避けながらネギは懸命に反撃を繰り出す。

中村は休まず攻防を繰り広げながら、ネギに対して尋ねた。

「なあネギよ!お前なんか知らねえが偉い魔法使いになりてえんだよな!!?ヌギステル・マギだっけ!!?」

「立派な魔法使いです!!?中村さんじゃ無いんですから!!?」

「お前も言うようになったなオイ!!?……それがお前の現在の夢か?」

「…?、夢、ですか!!?」

「おう」

素早く足の甲目掛けて打ち出される足刀を半身に引いて躲し様、中

村は尚も尋ねる。

「ポチのお前は何の為に修業をくの質問の続きつてことでもいい。やりたいこと、楽しそうなこと…別にそれを言ったから将来が決まっちゃう訳じゃ無え。何でもいいからなんか無いか？」

その問いにネギは暫く手を休めないながらも沈黙していたが、やがて顔を上げ、中村の突きを捌いて距離を取ると、宣言する。

「…僕はやっぱり、父さんにもう一度会いたいです。話したいこと、聞きたいことが沢山ありますから」

「ん、そか…」

ある意味当然の主張に、予想していた中村は頷く。しかしネギはその後に一つ、やりたいことを付け足した。

「後は…今の教師の仕事を、最後まで続けたいです。僕の生徒は、皆凄く良い人達で…教師をやっている、大変なこともありますけど、楽しいでもから…」

「……へへ、そうかよ…」

「はい…あの、この質問は何が…」

「気にすんな。…うん、いいぜネギ。今は、それでいい」

戸惑うネギへ満足気に笑いかけ、中村は両手を前羽に構えるとネギ目掛けて突っ込んだ。

「はあ、はあっ……はああ……!!？」

「やり過ぎだよボケ」

「悪い悪い、ついテンションが上がってよお」

息も絶え絶えに地面に生傷だらけで転がるネギ。半ば呆れた顔で豪徳寺がツツコみ、悪びれた様子も無く中村が軽く謝罪する。

「…まあ悪いニユースばかりでも無いさ。ネギ君、今日から修業仲間が増えるからそのつもりで居てくれ」

「……えっ…ゴホッ……どう、いう……☒」

「喋らなくていいから耳だけこっちに向けておいてネギ君。……ああ、丁度来たみたいだね」

辻の言葉に咳き込みながら言葉を返そうとするネギを山下制して、

公園に繋がる一本道を指す。

道を歩いて辻達の方へ近付いて来るのは、篠村に愛衣、そして高音に小太郎の姿だった。

「…え、ええっ!?」

ネギが驚愕の声を上げる中、その四人は足を止め、辻達の近くに佇む。

「ほら、高音さんや。お前が始めねえと愛衣も名乗れねえよ?」

「解っているから少し黙っていなさい!…オホン、既に顔合わせは皆さん済んでいるようなものだけど、改めて自己紹介をさせて頂きます。聖ウルスラ女子高等学校二年生、高音・D・グッドマンと申します。横のいい加減な男の指導の補佐を基本的にやらせて頂くつもりです、以後、よろしくお見知り置きを…ネギ先生」

「あ、はい!!?」

一礼して丁寧に自己紹介を終えてから、高音はネギに向き直る。

「本来ならば先生への指導は、心技体共に円熟した大人の魔法教師の方が行うべきと思います。が、私も多少なりとも事情を知る身です。少なく共学園祭が終わるまでこの体制を解けないというのならば、せめて私もサポートをさせて頂きます。私の魔法は個の才能が強く起因する、癖の強い魔法ですので余り直接的に先生の参考にはならないでしょうから、主に魔法知識の面でお役に立たせて下さい。…よろしくお願いします」

「いえ、そんな…こちらこそ、よろしくお願いします!!?…あの、先日は助けてくれてありがとうございます!!?」

どういたしまして、と笑って高音が退き、続いて愛衣が緊張した様子で前が出る。

「あ、あの…佐倉 愛衣と申します!!?得意な魔法は火系統の攻撃呪文です、未だ指導役などおこがましい未熟な身ですが、精一杯やらせて頂きます!どうか、よろしくお願いします!!?」

「…はい、よろしく願います、佐倉さん」

「…俺達と組んだ悪影響か、愛衣は火力バカな一面があるから、余り魔力の効率消費面以外で参考にするなよネギ先生」

「ちよ!??その紹介の仕方は非道いですお兄様!!?」

「お兄様は止めろつちゆうに!!?」

「……全く、こんな時位チャラついた態度を改めなさい、篠村!!?」

「なんで俺だけに言うんだよお前は!!?」

ギヤアギヤアとネギや辻達をそつちのけで騒ぎ出した篠村を尻目に、やや呆れた目で脇の騒動を見つつも、小太郎が出てくる。

「ようネギ、兄ちゃんらも暫くやったな」

「こ、小太郎君、僕はてつきり京都に帰ったのかと……」

「俺達もそうなるのではと予想していたが、今回の悪魔襲来を通達しようとした件や、一般人救出に助力した件の功績が認められて罪一等、人出の足りん麻帆良学園での労働に着く事で贖罪とするらしい」

大豪院が困惑するネギに、先日の話し合いで決まった小太郎の処分について語る。

「なんや唇の兄ちゃん、俺の言うことが無くなったやないか。……ネギ、京都の一件、水に流せとは言わん。俺は姉ちゃんの為に動いた事を後悔しとらんからや。でもお前や兄ちゃん姉ちゃん等には悪いことをしたとは思つとる。グダグダ語るんは性に合わんから、詫びは行動で示すわ。……よろしゅう頼む」

「……うん!よろしく、小太郎君!!?」

ガツシ!と手を組み合わせ、ネギと小太郎が笑い合う。

「……早乙女辺りにこの写真流せば高く売れると思わね?」

「……そうだ、お前が真面目に事をメようとする訳が無かったな……」

いつの間にか撮影していたデジカメ片手にニヤニヤと笑う中村に、疲れた声で辻がツツコんだ。

「……というか誰が唇の兄ちゃんだ」

夕暮れ時のとある小洒落たカフェテリア。テーブルの上には彩りよく取り分けられた料理が並んでいるが、席に座る二人の人物は手を付けようとはしない。それ以前にその片方、長ランにリーゼント姿の頭を下げる大男は、店自体にそぐわなかった。

「頭を上げて下さい、豪徳寺先輩。既に謝罪の意は充分に受け取りま

したから」

向かい側に座る少女――千鶴の言葉にゆっくりと頭を上げる大男、豪徳寺。

「寛大な言葉、痛み入るぜ。今回みてえな一件で余り頭ばかり下げられんのもお前の本意じゃ無えだろうとは思ったが、なら頭を下げないでいいなんてことは断じて無えからよ。…受けてくれて感謝するぜ」  
「あらあら、義理堅い方ですわね、先輩は」

千鶴はクスクスと笑いながらも、手早く小皿に取り分けた料理を豪徳寺に手渡す。

「さあ、折角ご馳走して頂けるのですから、これくらいにして食事にしましょう。どうぞ」

「悪いな。まあ女にじゃんじゃん食ってくれとは言えねえが、好きにやってくれ。これでナシにする気も無いからよ」

「では遠慮無く。…本当にお気になさらなくていいんですよ、先輩。あの場に私が居たのは私が無理を言った所為なんですし、先輩達はしっかりと私を助けて下さいました。寧ろ私の方からお礼を伝えねばなりませんのに……」

「それを言うならあの爺さんがあそこに来たのは俺らの因縁の所為だ。お前は一切事情を知らずに押しかけたんだから危険かどうかの判断なんて出来る訳が無えよ。お前に責任は無い、俺の勝手だ」

頑なに己の非しか認めない豪徳寺に、千鶴は頬に手を当て息を吐く。

「…頑固ですわね、豪徳寺先輩」

「面倒臭い性分で悪いな、迷惑になっちゃあ本末転倒なのは解っちゃいるが、俺にとつて筋を通すのは、譲れないことなんだ」

「そうですか……」

千鶴は仕方が無いですね、とでも副音が付きそうな顔で苦笑していたが、ふと良いことを思い付いたとばかりに顔が若干の喜色を帯びる。

「…それでしたら豪徳寺先輩。一つ私のお願いを聞いて頂けませんでしょうか？」

「お願い？」

唐突な提案に首を傾げる豪徳寺に対して、にこやかに千鶴は告げる。

「はい。それを叶えて頂ければ仰られる筋は通した、という事で如何でしょうか？私としても、聞いて頂ければ非常に嬉しいです」

千鶴の言葉に、豪徳寺は即座に戸惑いを捨てて快諾する。

「わかったぜ那波。その頼み、引き受ける」

「あらあら、まだ話もお聞きしていませんのに、そんなに軽々と受けましてよろしいんですか？」

軽く驚いたかのように目を見開く千鶴に、骨太な笑みを浮かべて豪徳寺は頷く。

「当たり前だ。やらかしちまった漢に心の広い女が掛けてくれた詫び入れの機会、話聞いてから受けるのは野暮つてもんだ。俺に出来ることなら…なんて弱つちい台詞を吐く気は無え！なんでも言ってくれ、那波!!？」

勢い込む豪徳寺に千鶴は笑みを浮かべ、上機嫌な様子で楽し気に返す。

「流石ですね、豪徳寺先輩。先輩ならばそう言っ頂けると思っていました」

「応よ。それで、お願いってのは何なんだ？」

「ええ…」

千鶴は居住まいを直し、にこやかな表情のまま言い放った。

「今度の学祭で私のエスコートをして一緒に回って下さい。何処に行くかはお任せ致しますわ」

「……………んっ……………」

耳にした言葉が理解出来ずに、豪徳寺は間抜けな声を上げる。千鶴は気にした様子も無く、理解をしていないであろう豪徳寺にあくまで微笑みながら、トドメの念押しを行った。

「ですから、今度の学祭で私をデートに誘って下さい、豪徳寺先輩？」

## 17話 恋路の道は険しさを増す

「……………はあ……………」

「ぬううう……………」

憂鬱そうな顔で片肘を着いて溜息を吐く辻と情報誌『月間まほら』を片手に唸る豪徳寺。共通項はズバリ、私とっても困っていますのオーラだった。

「…どうしたんだ、あれは」

「…まあ、青春かなあ？」

如何にも関わり合いになりたくなさそうな大豪院の嫌々ながら口に出した問い掛けに、最近頓にロリ吸血鬼の殺人稽古の所為か全身ズタボロな山下が心無し投げやりに答える。

「気にすんな気にすんなポチ。リア充のリア充的悩みに付き合ってやることあ無え。解決した時に人生満喫組の幸せオーラに当てられて突発的に死にたくなっからな」

一ちゃんはしめは兎も角リーゼントはリーゼントの分際で生意気なんだよ、とやさぐれている中村である。

正味な話、五人の内殆どが何かしらの要素で気が沈むか立つかしている為に、教室内の空気も重く張り詰めている。基本的に所属している部活動やサークルが奇っ怪な他は普通に近い精神面メンタルを持つ麻帆良一般学生では奇人変人に割り込むだけの胆力は搾り出せない様である。

「おーいお前ら。ちっと相談してえ事が……………なんだこの空気？」

其処へ間が悪く（良く？）入って来たのは魔法生徒が一人にして苦勞人、篠村 薊である。教室内の生徒の視線が一斉に絶好の救世主イケニエに注がれた。

「うおっ！…なんだどうした何があつたよ」

「丁度いい所に来たなしのっち。如何にかしやがれあの連中」

無言の圧力に思わず一步下がった篠村に、妙にイイ笑顔を浮かべて中村が言う。

「如何にかつて……………何があつたよ彼奴ら？」



「お前さんが自分で聞いてくれ。んじや頼むわ…そいやあ!!?」  
「は…うおええ!!?」

中村が言い終えると同時に篠村の下半身を払うと同時に身体を掴んで投げ飛ばす。いきなりの暴拳に珍妙な悲鳴を上げながらも篠村は空中で身を捻って足から着地。篠村は笑顔で手を振る中村を振り向いて怒鳴りつけようとして、自分の眼前に瘴気を発している辻と豪徳寺を視認して顔を引き攣らせる。

そんな篠村の派手な着地音に反応してか、辻と豪徳寺が緩慢な動作で首を向け、篠村の姿を認めると顔が輝く。

…ヤバい、面倒な事に巻き込まれる…!!?」

瞬時にそう判断して撤退を試みた篠村の反応は一步遅く、閃いた二人の手に両腕を掴まれて敢え無く話を聞く羽目になった。

「丁度いい所に篠村! 助けてくれ、俺は年頃の中学生女子がとんと理解出来なくて困ってるんだ!!?」

「奇遇だな、辻。俺も全く同じ悩みだぜ。思春期の女つてのは何考えてるのか全く解らねえ! 篠村、ちよつと相談に乗ってくれ!!?」

「なんかこの時点で世界の中心で愛でも叫んでると吐き捨てて帰りたいって仕方ねえんだけど!!? 大体俺が女関連の相談役に適しているとも思ってるのか他当たれよ!!?」

尋常で無い力で拘束された両腕を外そうともがきながら勝手な事を喚く二人に篠村は抗議する。

「何言ってるんだ。あの扱いに難儀しそうな高音女史とその高音女史に首ったけの百合の花系女子佐倉ちゃんの二人を同時にいなして見事にグループの一員に篠村は溶け込んでいるじゃないか。お前に聞かずして誰に女の子の扱いを聞くんだよ?」

「本来ならお前のチャラついた一面なぞ参考にしたく無えんだが、今回ばかりは筋を通さなきゃいけねえ以上形振り構っちゃいらねえ。一つ女の喜びそうな連れ回し方を俺に伝授してくれ」

「喧嘩売ってるのかお前ら!!? 俺の普段の何を見て女慣れしてるのか思えんだよ!!? それから愛衣はレズじゃ無え滅多なことをほざくな阿呆!!? …大体何があったかも知らんのにどうとも言える訳が無い

だろうが馬鹿共があ!!?!!?」

目を剥いて怒る篠村に辻と豪徳寺は苦渋の顔で言つてのけた。

「桜咲が最近俺と会話所か顔も碌に合わせようとしてくれないんだ。何かあったのか聞こうとしても顔を真っ赤にして逃げるだけで一向に要領を得ない。近衛ちゃん達に聞いてもはぐらかされるし、部活の連中には囁かれるしで程々困り果てるんだ、頼む力を貸してくれ」

「那波の奴が何をとち狂ったか俺と学祭を回りたいとか言ってきてんだよ。俺は喧嘩一辺倒で女の事なんざ全く解らねえから周りに聞こうとしても、変態や朴念仁に天然ばっかで役に立ちそうな奴がいねえ。常識人にして女と普段から一緒に行動してるお前位しか頼れそうに無えんだよ、協力してくれ」

「黙れリア充共2chにでも逝つて炎上してろ」

篠村が脊椎反射で冷たく吐き出した台詞にクラス全員が無言で同意した。

「…返す返すもムカつく。お前らマブダチなら何とかしてあしらえよ！」

授業が終わって最早日課と化している修業の為に公園へと向かいつつ、篠村がズカズカと荒い足音を立てながら苛立たし気に言い放つ。

「誰があんな面倒な状態の奴等を面倒みるものか。唯でさえ古が前にも増して俺に昼夜問わず絡んでくる所為で、筋違いの嫉妬に燃える中武研の暑苦しい連中による襲撃に苦慮しているのだ。他人の恋路にまで首を突っ込む程余裕は無い」

「だねえ、僕の方はエヴァさんが一向に稽古で根を上げない僕に業を煮やして最近じゃ動き過ぎて貧血だとかで、血まで吸ってくるもんだから貧血気味なんだ。…茶々ちゃんの鉄分補充料理は美味しいけれど正直身が持たないんだよねえ…覚悟してた事だけども…あ、因みに一応言っておくけど、吸血は腕からで色っぽい要素や雰囲気欠片も無いよ」

「俺は女の子とイチヤイチャできる機会を寧ろ疎ましがる様な玉無し

の根性無しなんぞにまかり間違っても手なんぞ貸さん！ああ妬ましいモゲればよかろうに!!？大体俺は不定形娘達の様子を見に行ったりキャシーの差し入れ用に山狩りに行ったりで忙しいんじやボケエ!!？」

篠村はなんとも言えない表情になつて道端に唾を吐く。

「…そうだそうだった。基本的にお前らフラグの立つてる勝ち組だったな……一人ド〇クエのMMが魔物勧誘してんのと見分けのつかない奴はいるにしても……」

「あ？何言つてんだお前は？」

「わりかし全力で篠村に言われたく無いよね」

「同感だ」

「なんだと……？」

「どうか俺達は真剣に困つてるのに茶化すなよお前ら!!？」

「そうだ女相手つつたらお前らにする様に適当にあしらえ無えんだぞ!!？」

そんな自覚が無いのは当人ばかりな会話の応酬を繰り広げながら、

一同は定位置の公園内広場へと到着する。其処には既にネギ達3-

A組と高音、愛衣の姿があった。

「皆さん、今日もよろしくお願いします！」

「遅いわよ、貴方達。時間は有限なのだから、可能な限り効率的な行動規範スケジュールで動くことを心掛けなさい」

「うえー、すんませんジャーマネ。…マジに優等生って感じだなオイ」

「…面と向かつては言うなよそういう事は。プライドの高い女なんだ、ああ見えてムキになり易い」

ネギの挨拶の後に苦言を定する高音に対してそんなことを呟く中村に釘を刺す篠村だった。

修業が始められる前に、改めて全員が集まった段階で篠村達魔法使い組から提案が齎された。則ち明日菜や木乃香を始めとした、魔法関連の事柄に巻き込まれながらも戦闘力の無い3-A女子達に対する今後の扱いについてである。

魔法使いの例に漏れず、新たに加わった高音や愛衣にしても、一般人を自分達の世界へ引き込む事には難色を示した。木乃香や明日菜の様に、血筋や身に付ける能力故に事件に巻き込まれた者達に対しては、今後もフォローが必要な為まだ理解出来る。しかし、魔法関係に対して元々なんの関わりも無かった真正正銘の一般人を、言い方は悪いが単なる好奇心だけで立ち入らせるのは如何なのか。というのが高音達の言い分であった。

これに対して篠村が、記憶操作等による対処は未然の事故や魔法の存在の露呈防止に対して有効な手段ではあるが、魔法使いは少し安易に一般人を遠ざけ過ぎではないか、と反論。

魔法とは魔法使いにとつての根幹を成す至高の力にして、その扱いは高度な知識と技術を要する。故に魔法を熱心に学ぼうとする者に、魔法使いは敬意を表する。

事件に巻き込まれる等して心に傷を負った様な者に対しては記憶を消して、関わらせないよう取り計らうのも間違っではないだろう。しかし単に魔法を知ってしまっただけの者の記憶まで問答無用で消してしまうのでは、何時迄経っても素晴らしき魔法を学べるのは、元々魔法に関わっている者の関係者だけではないか。

彼女らの中には、純粹に魔法へ興味と憧れを持ち、学びたいという意思を持つ者が、力及ばない自らの非力を悔やみながらも、少しでも力になればと、熱心に学ぶ意思を持つ者がいる。

そんな人間の心意気を無視して、全てを無かったことにするのは果たして正しい魔法使いを目指す者として、相応しいことなのか？

勿論秘密の保持の為、そんな悠長な事を言っていられない場合もあるだろう、魔法使いの今迄を全て否定する気は無い。しかしこの場合はそうでは無いし彼女らがしっかりした人間で口も固いであろうことは自分が保証する。無論自分達の間だけで話を終わらせずに、何れ上にも報告して判断を仰ぐ。

だからもう少しだけ様子を見て、その上で判断してくれないか、と篠村は高音達に言ったのであった。

「…ですから貴方達一般生徒達に対しては、要監察付きが条件ではあ

りますが、魔法に関わる事に対して目を瞑ろうと思います。…あくまでこれは私達魔法生徒の暫定的な方針ですので、改めて組織内で問題となった時は記憶を消されて、日常生活に戻らなければならぬことも覚悟しておいて下さい」

高音の宣言にのどかや夕映達は戸惑い、顔を見合わせる。その様子を見て申し訳無きそうにしながらも、傍の愛衣が補足する。

「…こちらの対応を一方的で理不尽に思われたならすみません。でも魔法の秘匿は、それだけ魔法使いにとっては大事なんです。本来ならば一般人が魔法の存在を知った場合、無条件での記憶改竄が魔法使いの間では義務付けられています。皆さんのお気持ちも事情も理解していますけど…」

「大丈夫です、佐倉さん」

愛衣の言葉を途中で遮り、夕映が安心させる様に告げる。

「元より無理を言って輪に加えて頂いているのは理解していましたが、全て無かったことにされるのを良しとできるか、と問われれば、納得するのも現時点では無理ですが、お気持ちと温情は有難く思うですよ」

「あ、あの…ありがとうございます」

「…礼には及びません。その私達を説得した男に言っておあげなさい、宮崎さん」

慣れない他人との会話からか、やや吃りながらも感謝を告げるのどかに、些か苦い顔をして高音が言う。

「三人で考えての結論だ、誰が特別良いこととした訳でも無えよ。…まあ兎に角この場の全員が何かしらの特訓をする事に異論は無くなつた。そこで、だ。折角こうして俺の他にも魔法使いが来て監督側の人手も増えたことだし、これからはより個人個人に合わせた鍛錬をさせようと思つてな」

篠村の言葉に一同が首を傾げる。

「個人に合った鍛錬…って例えばどんなことするのよ先輩？」

怪訝そうに尋ねる明日菜に対して、篠村は我が意を得たりとばかりに頷いてビシツと明日菜を指差し…高音がその指を払い落とす。

「人を指差すのは止めなさい、それでも年長者なの？」

「高音お前……」

何とも嫌な顔で笑っている辻達を篠村は思い切り睨み付けてから、咳払いを一つして仕切り直す。

「まさに神楽坂、お前さんは鍛錬内容要見直しの筆頭なんだよ」

「……………え……………？」

「魔法無効化能力……………？なんなんですかそれ？」

明日菜が戸惑った様子で聞き慣れぬ言葉の意味を尋ね返す。

「あの爺い悪魔が言ってたろ？神楽坂の能力ちからを使って桜咲の攻撃を防いだって。あの夜に爺いが魔法具によって間接的に使用していたのが神楽坂、お前の持つ魔法無効化能力マジックキャンセルの力なんだよ。お前は、己に向かう魔法や気の類いを完全に消失させる体質なんだ」

「……………あたしが……………？」

「でも篠村さん。魔法無効化能力マジックキャンセルは確か、魔法世界ムンドウス マギクスを含めても数人しか能力所持者が確認されていない、極めて希少な能力レアの筈です。本当に明日菜さんが、そんな力を……………？」

篠村の説明に、ネギが驚いた、というよりは信じられないという様子で言葉を返す。

「俺も真逆とは思ったが調べてみた所本当マジだった。あの事件の後に神楽坂達攫われた人間は一通り魔法的な呪縛や霊障の類いが残されていないか確かめたからな、神楽坂にはその際に本体へ害を成す類の魔法が一切発動しない事が判明したんだよ。…正真正銘、本物の魔法無効化能力マジックキャンセルだ」

篠村はネギの疑問に断言を持って返し、高音や愛衣も難しい顔で頷く。

「……………そーういやそれらしい現象に心当たりがあんな……………」

「うむ。あの白い子供の障壁を突破したのはアーティファクトの力だけでは無かったということか…」

豪徳寺は黒衣リベリオンの青年に打ち込まれた火炎魔法から明日菜を庇った際に、明日菜は衣服以外に一切被害が及んでいなかった事を思い出し、大豪院も白髪フュエイの少年を打倒する決め手になった明日菜の一撃を同

様に浮かべていた。

「……えっと、要するにあたしは魔法とかそういうのが効かないってことなんですよ？それってそんなに凄い事なの……？」

明日菜が今一事の大きさが解っていないという顔で篠村達に尋ねる。

「凄いも何も…魔法無効化能力者は私達魔法使いの言わば天敵ですよ。貴女の前では魔法という超常の力を振るう優越種…失礼、古い選民思想的な言葉を使ってしまったわね…魔法使いは只の人、場合によつてはそれ以下と成り果てるのだから」

「魔法世界で公式に活躍している魔法無効化能力者の方は皆優れた戦士であったり対魔法使いをしてらっしゃるんです！神楽坂さんは能力を極めれば世界有数の実力者になれるかもしれない力を秘めているんですよ!!？」

「……う〜ん……………」

明日菜が一つ唸って腕を組み、頭を傾げる。花の女子中学生には少々住んでいる世界の違い過ぎる話だったらしい。

「…まあ実感湧かないのも無理は無いが…神楽坂、お前はまた何かあった時に、ネギ先生の力になりたいから鍛えてんだよな？」

「…んー面と向かって言われるとなんか照れ臭いけど、まあ、そうよ。あ、後最近は何に負けず劣らず辻先輩達も無茶するから、先輩達の為にも、っていうのもあるかも」

篠村の確認に、明日菜はほんのり頬を染めながらも頷き、答える。

「…へっ、泣かせるじゃねえかよ明日ニヤン」

「泣かなくていいわよ、あんたは理由に入ってないから、変態先輩」

「あんだとコラア!!？だあーという意味だてめえうるああ!!？」

「日本語喋りなさいよ!!？日頃の行いが理由に決まってんでしょこのセクハラ男!!？…で、それがどうしたのよ、先輩？」

尚も何か喚こうとした中村が辻と山下のツープラトンで頭から落とされるのを横目に、明日菜が尋ねる。

「ああなんだ、それならそれで辻に剣道だか剣術だかを習うよりも先に、貴重な才能を鍛えてみないか、って提案だ」

空中に複数の魔法サギタの射手マギカがあるものはゆつくりと円運動を、あるものはピタリと静止してそれぞれ浮遊している。その中心には明日菜が立ち、難しい顔で周囲の光球を睨んでいた。

「神楽坂ー、さつきー、二発ぶつけた魔法サギタの射手マギカを掻き消した時の感覚を思い出せ。何分文献が少な過ぎて能力行使のアドバイスは出来ないが、自分を害する魔法を無意識にしる無効化している以上お前は能力を使ってるんだ。心配しなくてもお前に魔法は効かない。怖がらずに落ち着いて集中しろー」

「解ってるわよー……ねえ先輩ー、本当に離れてる魔法を消すなんてこと出来るわけ？」

助言を送る篠村に答えた明日菜だが、取り組む姿勢は何処か懐疑的である。

「まあいきなりはまず無理だろー。魔法無効化能力者は何れも接触した魔法・気の類は消せるらしいが、自分から離れた所にある魔法を消せるようになるには余程訓練を積まなきゃ出来ないらしい。兎に角出来るってことは判明してはいる。成果が見えなくても拗ねたり焦ったりしないことだー」

「了解。まあやってみるわよー」

言って明日菜は再び己から最も近い場所をゆつくり移動している光球に視線を戻して唸り始める。

図らずも悪魔ヘルマンから判明した明日菜の能力ちから。篠村達は、もし上手く発言出来れば対魔法戦において大きな力となるであろう魔法無効化能力マジックキャンセルを何とか習熟させられないかと考え、魔法世界ムンドウスに散逸する資料を組織の電子媒体を検索。調べた内容を明日菜に伝えての訓練を開始していた。先例が少な過ぎる故に些か以上手探りな方法ではあるが、試してみるだけの価値を篠村は感じていた。

その他、篠村の手が空かない故に中々本腰を入れて教えられなかった夕映、のどか、木乃香組には愛衣が基礎中の基礎、魔力の発現を。

篠村よりも座学方面全般で優れた知識を持つ高音が、ネギに有用な魔法習得の為の選択講義を行うと同時に、バカレンジャー及び楓、古、



小太郎らに魔法戦闘についての従者げんえいの定石を叩き込んでいた。

なお、高音と愛衣が加わっても今だ教育方面の人手が不足している為に、基礎的な講義の必要無い刹那が千鶴に対して一から魔法、麻帆良の魔法組織、現在に至るまでのネギ達の経緯等を、情報収集及びその編集を得手とする朝倉を交えて説明していた。

「「プラクテ・ビギ・ナル……」」

「ええと、漫然と力ある言葉を唱えずに己の中にある魔力の存在を意識してそれを杖に対して集めて、詠唱によってその魔力を弾けさせる様なイメージをしっかりと持って練習して下さい！」

やや辿々しいながらもポイントを押さえた愛衣の指導に夕映達は領き、己が中の力を意識する。

まず魔法を習得しようとする者が初めにぶち当たる壁が、己の魔力を感じ取る事であり、人によってはこれを成すのに半年以上を要する者もいる。それだけ今迄意識していなかったものを意識するのは難しい、ということであり、本来ならば全くの素人である筈の夕映達が一朝一夕に成し得る事では無い。

しかし、夕映達は既に最初の壁を乗り越え、己が中の魔力を現象として現そうとする段階に入っていた。何故ならば夕映達は、所属する部活において魔力を感じ取る訓練を入部した中学一年生の頃から、既に二年以上も続けていたからだ。

「それにしても、皆さん凄いですね…事前にお兄様から少しだけ指導を受けていたといつても、こんなに早く魔力を感覚として捉えられる様になるなんて普通じゃ考えられません。幼少期から魔法による治療や検査の一切を受けていない皆さんは、身体が魔素に晒されて感じを掴んでいない分、魔法学校の初等生よりも更に条件が厳しい筈なんですが……」

驚きを通り越して疑念を抱き始めている愛衣に、心当たりのある三人は慌ててフオローに掛かる。

「え、えくとそれはやなあ〜そう！篠村先輩の教え方がえらい解り易かったからなんよー、なあ夕映ー!?!?」

「そ、そうなんです!!?先輩の指導は的確且つ理解し易く、私達にたちまちコツを掴ませてしまったのですよ、佐倉さん!殆ど私達に時間を割く事は出来なかつたというのに、努力の人とはあんなにも深く取り組んでいるものの事を知り抜いているものかと感動したものです、そうですね、のどか!!?」

「ふえ!!?あ、う、うん、そうなんだ、佐倉さん。し、篠村先輩って、本当に凄い人、だね……?」

三人揃って慌てふためきながら不自然な程に篠村のことを誉め殺す様は、誰がどう見ても怪しいものだつた。しかし、佐倉 愛衣という少女は基本的に育ちが良く素直な娘であり、そして篠村を心の底から尊敬していた。

「…そうですか……!やつぱり、やつぱりお兄様は素晴らしい人なんですネ!!?ネギ先生の指導でお忙しくしていられたのに、皆さんへの指導もこれ程までに熱心に……しかも短期間でこれ程の成果が!お兄様に才能が無いなんて宣つた見る目の無い魔法使い達に、この光景を見せてやりたいです!!?」

感極まって涙ぐんでさえいる愛衣の様子に、多分に気まずい心持ちでひそひそと囁き合う夕映達。

「…どうしましょう、今更嘘でした等とは口が裂けても言えない具合になつていますが……」

「こうなつたらウチらが頑張つて嘘をホントにするしかないなあー……」

「…部活で練習してた、なんて言つても、信じて貰えないと、思うし……皆さんっ!!?」…ひやつ!!?」

言葉の途中で愛衣が上げた大声にのどかが小さく跳ねる。

「お兄様の心意気は無駄にしない様に私も全力で皆さんのサポートに取り組みます!!?先ずは魔力を、使う魔法の燃料として使える様にイメージを明確に持つて行きましょう!!?」

「り、了解や愛衣ちゃん……」

張り切る余り怪気炎を身体から立ち昇らせる愛衣に、引きつった顔で木乃香が返事をした。

「…ですから先生。篠村から出足の早い魔法の射手サギタマギカ関連の技術を習得し、また雷系統の上位精霊魔法が手札として有る現状、必要なのは比較的詠唱時間が短く、且つ威力又は掃討力の何れかを持つ取り回しの広い、応用性ある魔法なのです。私としては先生の潜在能力を鑑みて、上位古代語魔法ハイエイシエンの習得にそろそろ取り掛かっても宜しいかと。先生の手持ち魔法は属性系統がやや偏り過ぎですので、主に習得している雷の他に適性の高い風、光系統のどちらかをお勧め致します」

「はい……」

淀み無くネギの戦力分析から今後の方向性迄を語る高音の言葉を真剣に聞きながらメモを取るネギ。

「…はあくよくも自分以外の魔法使いの能力から傾向までこれだけ理解、分析して的確にアドバイス出来るもんだぜこの姉さん。篠村の旦那の、『ある分野に関しては天才であり尚且つ勤勉な秀才』ってな評価に偽り無しだな。……に比べてこっちはなあ……」

高音の能力に感心したカモが一転して微妙な目線を向けるのはバカレンジャー（中高合同ver）＋小太郎達に対してである。

「…何なんだよこの分厚い鈍器は……」

「専門用語が多過ぎて内容頭に入ってこねえぞ……」

「…つていうか所々ラテン語のまま翻訳されて無いんだけど……」

「明らかに俺達の戦闘技法とはかけ離れたものが大半なのだが本当に全て読み解く必要があるのか……?」

「…まず俺は表紙に貼られている『ラテン語学必修』の付箋にツツコミたいんだが……」

「…古、生きているでござるか……?」

「……駄目アル……」

「…ちゆうか何で俺まで……」

辻達は広辞苑程もありそうな分厚い資料の束を相手に頭から煙を上げていた。

「情けないですね大の男が揃いも揃って。ネギ先生や愛衣はおるか篠村でも内容の一通りは理解していますよ。その資料はあくまで近接

戦闘を行う魔法使いの間での最低限の知識です。この段階で音を上げていた様では到底この世界ではやっていけませんよ。」

あまりの醜態に高音がネギへの解説を一時中断して声を掛ける。その声色には多分に呆れた響きが含まれていた。

「五月蠅えよ！大体なんで俺らがこんなもん学ばなきゃいけないんだ俺らあ魔法使いじゃ無んだぞオイ!!？」

中村が堪らず吠えたてる。が、高音は柳眉を逆立て逆に中村を怒鳴りつける。

「お黙りなさい！貴方達は魔法関係者としてこれより魔法を当然とする裏の世界に関わる身です!!？貴方達は魔法に関して無知である以上、貴方達が早急に取り入れなければならないのは魔法に関する知識でしょう!!？ネギ先生があれだけ熱心に取り組んでいるのを見て己を恥ずかしく思わないのですか!!？…先程ラテン語を学ぶ意義が解らないと言いましたね？貴方達が魔法使いと対峙して戦闘になったとします。その時に相手の唱える魔法の詠唱が理解出来るのと出来ないのとはどちらが有利かなど論ずる迄も無いことでしょうか？」

「…ぬう……………」

理路整然とした反論に、中村は文字通りぐうの音も出ない。

「貴方達が下手をすれば私達と同等かそれ以上に強いのは解ります、しかし何時迄も無知なまま場当たり的な対応で凌いでいける程、魔法使いとは甘い存在ではありません。ネギ先生の為に闘い、導くと言うのならば、先ずは教える側として足りないものを補ってみせなさい。学べば済む欠点を面倒だからと放置するならば、遠慮無く私はネギ先生に関わる資格無しと、上の方に報告させて頂きますが、如何しますか？」

高音の宣告に、辻達は不敵に笑い、姿勢を正す。

「上等だDグ○イマン。そうまで言うならやっつたろうじゃねえかよオラア!!？」

「啖呵を切られて黙って引き下がる様じゃあ漢が廃るってもんだぜ」

「仰る事はごもつとも。泣きごとと言ってないでやろうか、うん」

「少々気が抜けていたようだ。仮にも師として恥は晒せまい」

「…じゃあ大変そうな語学習得は一先ず置いて、資料読み解こうか……」

その切り替えの早さに、高音は満足そうに頷く。

「良い心掛けです……私や私の親類にエクソシストは居ませんからね」

「ジ○ンプ読んでるアルか!?!?」

「貴女が読むのはその資料です…長瀬さんでしたか?分身を置いて逃げないように」

「ふううアル〜…」

「ござつ!?!?」

ツツコミを鋭く切り替えられて沈む古とインチキを見抜かれ動揺する楓であった。

「…おい小太郎、読み飛ばすなよそんなに進んでる訳無えだろ?」

「生憎やけど俺姉ちゃんに叩き込まれてこういう基本はある程度頭に入っとるんや」

「………何?」

因みに、意外にも一番この場で知識を備えていたのは、打倒西洋魔術士を謳っていた千草の力になる為、苦手ながらも小さい頃から勉強を重ねていた小太郎だった。

「…俄かには信じ難い話ねえ」

千鶴は説明の一段落した後、感心した様な呆れた様な声で刹那と朝倉に言う。

「まー那波さんからすれば何だか解らない内に巻き込まれて、その後こんな荒唐無稽な話されても正直訳解らん、って感じだろうから一気に理解しようとしなくていいと思うよ私は。麻帆良の非常識っぷりを常日頃の取材で嫌という程理解してる私からしてもこれはとびつきりだもん」

ペラペラと魔法関連の情報が記載されている手帳を捲る朝倉が苦笑気味に笑って忠告する。実の所自分達の暮らす学園都市は魔法使いの組織が治めていた等、普通の人間が聞いたら与太話も程々にし



医者に連れて行かなければならないんだけど……」

「な!?? 何故です!??」

「何故も何も無いでしょーが!!? 辻先輩意外にアンタの婿が居るとでも思ってる訳桜咲い!??」

「…そ、そそれなら那波さんはどうなんですか!?? 豪徳寺先輩と何やら非常に親しげにしていたと伺っていますよ!??」

追い詰められた刹那は苦し紛れに千鶴へと矛先を逸らそうとする。

「…桜咲く、そんな見え見えの話題逸らしに誰も「ええ、豪徳寺先輩とは今度学祭巡りを御一緒する予定なのよ」…ええ!??」

何やら魔法関連の裏事情そっちのけで恋バナ? に盛り上がる三人だった。

「あー結局何も成果は出なかったわねえ……」

「気にすんなや明日ニヤン。試みてからまだ初日だろ? 成果が出る方がおかしいべや」

「明日も朝から時間を作りましょう!!? 皆さんなら学祭迄に初級魔法の発動に成功するかもしれませぬ!!?」

「愛衣、余り気負い過ぎないように……駄目ね、聞こえてないわ。…篠村! 貴方愛衣に一体何をしたのか今直ぐ言いなさい!!?」

「何でお前は愛衣になんかあつたら俺が原因だと決め付けんだよ!?? 俺はずっと神楽坂に付いてたろうが何か出来る訳あるかあつ!!?」

「私、お兄様の心意気を無にしない為にも頑張ります!!?」

「…やつぱり貴方じゃない!!?」

「何でだよオイ!??」

「あ、あわわわわ………!」

「あー…いらんとぼつちり被せてしもたなあ……」

「篠村先輩、申し訳ありません…元凶として名乗り出はしませんか」

「いやー先輩、学祭デート頑張つてね、那波さん満足させるの大変だと思っけどさっ!」

「お前に心配される筋合いは無えよ!!? 那波あ! お前はお前で話広めんな!!?」

「あらあら先輩、別に悪いことをしている訳では無いのですから宜しいではないですか」

「今日も行くのか、山下？日増しに生傷が増えているぞ、本当に大丈夫なのか？」

「ん、大丈夫大丈夫。キツイはキツイけど手応えも有るからやめられないさ。…それに、偉そうな言い方になるけれど放っておけないんだよねえあの人…じゃない吸血鬼。曲がりなりにも問題提起したのは僕だから、さ」

「うう〜充実した修業出来るかと思てたのになんで勉強アルか……」

「首を突っ込むには実績や実力だけで無く知識も必要、という事でござるよ。気が進まんのは接写も同じでござる」

「せつちゃん、このままじゃ色々あかん事位解つとるやろ？那波さんを見習ってGOやGO！」

「お、お嬢……このちゃん無理、無理です私には!?!?というか辻部長に聞こえますもつと小さな声で……!!?」

「……桜咲の距離感が最早初めの頃よりも遠いんだが……俺何かやらかしたかなあ……」

「うーん……やっぱりあの悪魔達に攫われてからああいう状態になったんですから、その時に何かあったと考えるのが妥当だと思いますね……」

「……いや兄貴、辻の旦那もよお……」

「カモ言うたか、無駄や無駄。新参者の俺がパツと見て解るもんが解らんなら辻の兄ちゃんは相当なニブチンや。ネギはまあ、ガキやからやろ」

「そんなに変わんねーだろ小太郎の方も」

「兎にも角にも高音達を加えての修業初日を終え、一同は喧々囂々に騒ぎながらも帰路に就く。

「じゃ、皆また明日ね」

山下が軽く手を振り、エヴァンジェリンの家へと続く小道で一同と別れる。



「氣いつけるよ山ちゃん！自分で解つてつと思うが下手こくと死ぬぞマジで!!？」

中村の忠告？に後ろ手を上げ、山下は歩き去る。

「…本当に大丈夫かあいつは？」

「…闇ダークの福音エヴァンジェルに師事を仰ぐ等気が狂っているのかと思いましたが……」

「それに関しちや俺もお前と同意見なんだが…こいつらによると俺らが想像してるより話が解んだとよ、悪党だが悪党故の義理は通す…だっけ？」

「ある意味俺達が道を突き詰めるか誤るかした末の姿…と俺は思うかな。考えるよりも遠い存在ではないぞ、あの女は」

理解不能、といった感の高音に篠村が同意しながらも注釈を入れ、何やら複雑そうに大豪院が告げる。と、話している者達をさて置いて、辻がフラリと道を逸れ、エヴァンジェリンの家がある方面とは逆の森へと足を踏み入れる。

「あれ？辻先輩何処行くの？」

「…ちよつと身体を動かし足りないからさ。主さままさまに挑む気は無いけど、少し森を巡って来るよ。皆は先に帰っててくれ」

明日菜の疑問に辻は普段の彼からすればやや素っ気ない様子で答え、歩みを進める。

「オイオイ山ちゃんの無茶が移ったかよ一ちゃん止めとけつて。そつちはよりにちよつとヨルムンガンドの縄張りだぜあのデカ蛇唯でさえ容赦無えんだから、半年前にプロレス研の部長が全身複雑骨折で郊外の細道に放り出されてたの忘れた訳じゃ無えだろに」

「そうだそうだ、この前の爺い悪魔達程じゃ無えにしてもそれに準ずる位には強えぞ麻帆良四大魔獣は」

「だからどんな魔境だよ麻帆良は!!？」

唐突な辻の宣言に中村と豪徳寺が止めに入り、日本の学園内を語っているとは思えないその説得内容にカモが絶叫地味な声でツツコミを入れる。

辻は二人の言葉にも足を止めず、呟く様に告げる。

「……ちよつとした気分転換だよ。俺の難儀な性分だ」

それを聞き、バカレンジャーの面々の顔が僅かに緊張を帯びる。が、それも一瞬の事で、大豪院が他を遮る様に応じて辻を行かせに掛かった。

「解つた、余り無茶をするなよ?」

「ああ。…また明日な、皆。…桜咲」

「は、はいっ!?」

唐突に掛けられた声に裏返った声で返してしまう刹那。

「…すまんが明日、部活の朝練は欠席する。副部長達にそう言っておいてくれ」

「……わ、解りました」

真面目な辻のサボタージュ宣言に、刹那は訝しく思いながらも返事を返した。頼む、と短く応じて森の中に入っていく辻を黙って見送った一同だったが、辻の姿が見えなくなると、帰路を歩みながらも会話を再開する。

「…何か、様子がおかしく無かたアルか、辻は?」

「仕方が無いのだ、古。桜咲後輩がヘタレて辻を避けた所為であの鈍い男は自分が何か仕出かして避けられているのかと傷心なのだから」

?マークを頭に浮かべながらの古の疑問に、嘆息交じりに大豪院が返す。

「な!??違いますよ!何で私が原因なんですか!!?」

「桜咲よお鈍いもそこ迄行くと犯罪だぜまあ辻も他人の事言えねえからこの場合お互い様だけだよお」

心外な様子の刹那に半眼で中村がツツコミ、当然とばかりに他の面々も刹那を追撃する。

「せやせやせつちゃん、辻先輩ナイーブなところあるんやから一旦距離置くにしてももつとさり気無くやらんとく」

「やっぱり早目に学祭で蹴りを着けた方がいいな。というか見えていてイライラするからさっさとくっつけよお前ら二人」

「何なんですか皆さん揃って!?」

「いや刹那さん、この学祭で乙女の大半は腹を括らなきやいけないの

よ。…そう、あたしもね……………」

「な、なんだか神楽坂さんが沈んでますよ!!?」

「無自覚ラブラブカップルの余波喰らって己の現状を思い出して死にたくなつてんだよ! お前らみたいな奴等が居る所為でモテない男が苦渋を噛みしめるんじゃあ!!?」

「五月蠅えぞ馬鹿急かす様な真似ばつかすんな!!?」

ギャアギャアと此処の所顔ばかり赤くしている刹那を中心に言い争う面々を見やりつつ、夕映は蚊帳の外で首を傾げる。

……有耶無耶にされた感がありますが、辻先輩は何をしに森へ……?

大方腕試しという名の謎生物との大乱闘なのだろうが、普段口数の少ない大豪院までもが積極的に茶化しに行き、誤魔化しに掛かったのが夕映にはどうにも気になった。

「…まあ、いいです。のどか、遅くなりましたが学祭の準備に参加しましょうか、後の日数から言つて余裕がありません」

「う、うん…」

一見して緩やかに動いている様に見える少女と青年の動きは、然し無駄な動作や無理な動きをした瞬間相手に絡め取られ、叩き落とされて致命傷を負いかねない、悪手の許されぬ詰め将棋にも似た緊迫感溢れる手合わせだった。

「…面倒な男だ。幾ら元の才覚が違ふとはいえ短期間で此処まで腕上げおつて」

踊る様に身体を回し、片手に掴む山下を己から左側へと流し、山下が反射的に倒れまいと踏ん張った瞬間に急制動。己の右側へと全く逆の回転を掛け、両足から片足に偏り、重心の上がつた山下をまるで玩具の様に浮かせて投げ落とす。

片手での変形空気投げの様な技で容赦無く山下を地面へと叩きつけたエヴァンジェリンは、振られた遠心力を利用して腕を切り、転

がって受け身を取って跳ね起きた活きの良さっぷりを見て、ウンザリした様に呟いた。

「そんな事を言われた直後にこうも軽々と投げられてたんじゃ僕はちっとも褒められた感は無いんだけど？エヴァさん」

擦り傷塗れの泥塗れな山下は、しかしへたばった様子も無く苦笑と共に返す。

「褒めていないのだから当たり前だな……少し休みだ。元気の良さとか才能ではお前に軍配を上げてやるよ、山下」

鼻を鳴らしてそう言つてのけると、エヴァンジェリンは傍らに控えていた茶々丸からタオルを受け取り、軒先のベンチに腰を降ろす。

エヴァンジェリンはそうか休憩かいやあ流石に疲れたねえ、と快活に笑いつつ身体中の汚れを払い落としている山下を睨む様に見やり、山下の動きが一段落した所で声を掛ける。

「…貴様はよく平気な面をしているな」

「うん？何がだいいエヴァさん？稽古の事なら最近骨折や脱臼も無くなってきたから寧ろやる気満々なんだけど？」

「それもだが違う。…仮にもすっぱりフツてやったというのにその後も顔を出して剩え稽古の算段まで取り付けて。好意の欠片も伺えぬ位に痛め付けてやっても辛そうな顔もせん。…貴様洒落や冗句のつもりで私に想いを告げたんではあるまいな？」

「……………うん？」

山下は首を傾げ、エヴァンジェリンから放たれた言葉を脳内で反芻する。

……僕は何時エヴァさんに告白をしたというのだろうか？

……………

何かの比喩表現かな？と思いつつもエヴァンジェリンの様子が真剣そのものなので、真面目に答える山下。

「エヴァさんとの稽古が辛く無いのはまあ、強くなる為に自ら望んで来たからだねえ。僕は鍛錬と称して殺し合い地味な手合わせまでやったこともあるから、傷や痛みじゃ嫌にはならないよ。成果が出ない方がよっぽど御免だしねえ」

「…私が聞いているのはそういう事じゃ無いのは理解わかるよな?」

イライラした調子でエヴァンジェリンは先を促す。

「おっかないなあ。……まあ、あれだね。エヴァさん例え男をふるにしてもそんな遠回しなやり方しないで直接口に出してふるでしょ? 約束反故にはしなくてもそれはそれとして宣言するよね多分?」

「……………、ちっ……………」

だから芯から嫌われてると思つて無いねえ、と笑う山下を見て心底忌々し気にエヴァンジェリンは舌を鳴らす。

「オーゴ主人若エ男トイチャツイテ楽シソウジヤネエカ羨マシイゼ」

「いやー照れるね零さんははは」

「腐つとんのか貴様の目玉は!!? 山下貴様も反応するなというか否定をしろ阿呆!!?」

ケケケと笑いながらからからかに走る茶々零とのほほんと笑う山下を同時に怒鳴りつけるエヴァンジェリン。

「オイオイゴ主人俺ノ目玉ガ腐ル訳無ーダロ人形ナンダカラヨ、熱デモアンノカ?」

「よし今日こそ粉々にしてくれる其処に直れ毒舌人形!!?」

山下は全身から魔力を垂れ流すエヴァンジェリンと笑い続けながらも長大な鉈を取り出した茶々零を見ながら笑みを溢し、傍らの茶々丸に話し掛ける。

「エヴァさんと零さんは仲が良いねえ茶々ちゃん」

「はい、姉さんはマスターがまだ若く未熟であつた頃から苦楽を共にして来た一番最初の家族だと、前にマスターが言つておられました」  
無表情な中にも何処か身内を誇る様な喜びを滲ませ、茶々丸は答える。

「…そっか……………」

……………最初の家族か……………

吸血鬼には親つて居ないもののかなあ、と山下はぼんやり考えるが、何とは無しに違ふと感じていた。

……………超歳上の女性に対して失礼なものの見方だけど、家庭環境碌でも無かつた人間が拳句に致命的に身内との関係拗らせて終わった人

間特有の人格してるもんなあ、エヴァさんって……………

麻帆良にキワモノが多く出揃っているのは一部の麻帆良人達が良く知る事だが、そのキワモノ達は何の理由も無く、自然と麻帆良に集まり行く訳では無い。

何かが突出してしまった人間で周囲と上手く折り合ってその場で生きていける人間は、思うよりもずっと少ない。変わり者の集う街には、望んで来る人間と来ざるを得ない人間が存在するのであった。

ある意味でそんな強烈で外れた人間の筆頭、麻帆良武道系部活のお歴々とつるんで来た山下には、エヴァンジェリンの頑なな態度は見覚えの無いそれでは無かった。

……まあそんな事例の中でもとびっきりの何かなんだろうけどね、この女性ひとは……………

ギアアギアアと言い争うエヴァンジェリンの横顔を見つつ、山下は問いを放った。

「エヴァさん、エヴァさんはナギさんの事、どうするか決めた？」

それまでのピタリと動きを止め、エヴァンジェリンは山下を睨み付ける。その表情には少なからず苛立ちと怒気が滲み出ていたが、山下は怯まない。

「…貴様は何故それを気にする。よしんば理由があったとして私がお前にわざわざ教えてやる義理があるのか？」

「つれないなあ。……まあ何故かと言われるれば問題提起をしたのは僕だからねえ、悩みの元凶はナギさんでも悩みの原因は僕だから気にするのは当然だと思わない？…それと、答えが決まってるなら僕に語る必要は確かに無いねえ。だから決まってるならいいよ、僕に馬鹿めと吐き捨てて我が道を進んで下さいなエヴァさん。唯決まってもいいのに僕を黙らせる為だけに嘘は吐かないで欲しいかなあ」

他ならぬ貴女の言葉が安くなるからね、と微笑む山下をエヴァンジェリンは無言で見やり。

「…私はナギが爺いになる前に見付け出し、私のモノにする。答えは変わらん」

顔を歪めながらも意外に静かな口調で山下に告げる。

「あ、教えてくれるんだ?」

「訊いておいて何だ貴様は。ほら満足かフラれ男?」

だから僕何でフラれたことになってんのさ?と首を傾げながらも、山下は尚問いを放つ。

何だか今の彼女は見ていられないなかつたから。

「気を悪くしちゃうのを承知で言うけどフラれ女はそつちもでしょ? 略奪愛でもかますのかいエヴァさん?」

本当に遠慮の無い山下の言葉に小さく青筋を浮かべながらも、エヴァンジェリンは答える。

「だったらなんだ? みつともないから止めろとでも言いたいのか山下慶一?」

「いいや。愛情に貴賤は無いと思うしこの場合悪いのは男の方だし。そうしたいなら好きにすればいい、と僕は思う。…けどねえ……」

「何だ?」

またもイラつき始めるエヴァンジェリンに、山下は暫し迷った後に言い放った。

「エヴァさんってそもそも、幸せになりたいって思ってる?」

「……………!!?……………」

透徹した眼差しと共に叩きつけられた言葉に、エヴァンジェリンは何故か激しく一つ、動かぬ筈の心臓が鳴り響いた様な錯覚を覚えた。

「…何を……」

「透けて見えるんだよねえ、悪いけど。諦念と惰性って奴が。出会った頃の親友と、その親友の未来の嫁さんが最近までしていた顔だからよく解るよ」

山下はエヴァンジェリンの抗弁を遮り、先を続ける。何時の間にかその顔からは笑みが消え、何処か不愉快そうな表情が浮かんでいた。「エヴァさんにナギさんしか居ないだけならまだいいさ。気に入らない答えではあるけれど僕の意見はそれこそどうでもいい。半ば貴女の愛情が惰性に見えようと貴女がいいならそれで良い。後になって苦しみを得ようと、貴女は受け入れて進むだろうからね」

唯、と山下は遂に睨み付ける様に眼光鋭く、エヴァンジェリンを見

て告げる。

「貴女が幸いを得ようとしていないのははつきり言つて無いだろう。貴女はそんな投げやりな生き様で愛する男に共に生きようと告げるのかい？愛する女性ネギ君のお母さんが側にいるかもしれない男に対して？……だとしたらその様で愛なんて語らないでくれよ、エヴァさん。幸せになりたくないのに惚れた男を探そうなんて、そんな巫山戯た真似は自分自身すら救えないから」

言い終えた山下の頬を何か掠め、後ろの芝生を抉り取る。

「黙れ糞餓鬼」

エヴァンジェリンが凍える瞳で山下を宙から見下ろしていた。全身からは膨大な魔力とそれ以上の殺気が溢れ、山下を腹の底からの悪寒が襲う。

「少しばかり相手をしてやった程度で訳知り顔で私の理解者気取りか？巫山戯ているのはお前の方だ小僧。私の、何が、解る訳でも無い若造が。知った風な口を叩くな……殺すぞ？」

「……それだけ怒るならさあ、少なくとも言った事の幾らかは凶星だろう、エヴァさん」

ひよつとしたら死ぬかもしれないな、と山下は思うが、それにしては奇妙な程の落ち着きを保っていた。

「僕にこんなことを言う資格が無いのなんて百も承知だよ、エヴァさん。というか僕だつてできれば言いなく無いさ。僕が殺されたくてこんなこと言っているとでも思つてるのか」

エヴァンジェリンの目が更に細まり、山下は叩きつけられる圧力に顔を歪めた。しかし、言葉は止まらず、溢れ出る。

「それでも誰かが言わなきゃそのまま進むだろう、貴女は。自分から不幸せになりに行くだろうが、エヴァさんは!!？だから後ろ向きなその面せめて引つ込めてから進めつて言いたいだけなんだよ、こつちはあ!!？小僧に知った風な口叩かれたく無いなら、いい歳して人生に血迷つてんじや無いよアンタは!!？」

「黙れ!!？」

エヴァンジェリンは目にも止まらぬ速さで山下の首をひつ掴むと



後頭部から地面に叩きつけ、衝撃に歪む山下の顔を射殺す様な視線で睨みながら、押し潰す様に叫ぶ。

「お前に私の何が解る!!? 私が何をして、どんな思いで生きて来たかを知りませんガキがあ!!? 私は、もう人並みの幸せなんてものを得るには、それを拾い上げられない程に手を染め過ぎたし、長すぎる生は自分にそんなもの<sup>幸</sup>が舞い降りてくるなんて幻想も殺し尽くしたんだよ!!? そんな腐れた生の中で、唯一私を見てくれた男に!!? …側に居て欲しいと、それだけを願って何が悪い!!? ポツと現れて浅い同情で言葉を吐いているだけのガキは黙っているとおおおつ!!?!!?」

ギリギリと、エヴァンジェリンは吸血鬼の剛力で山下の首を締め上げる。何故か突き刺さる山下の言葉は、エヴァンジェリン自身も到底信じられない程に、その心を揺さぶっていた。

「か、あゝつ……!!? ……つ山戯んなよ……其処まで、一人の男が拠り所、なら!!?」

山下はエヴァンジェリンの両手を掴み取り、渾身の力で抵抗しながら必死に言葉を紡ぐ。

「其処から先の未来をどうして紡げ無いんだよ!!? 俺みたいなの、若造にだつて解つてることがある! 人を、殺したのだの、なんだのと後ろめたいなら! …最初<sup>ハナ</sup>から惚れた男と添い遂げたいなんて願うなよ!!? 好きな男と一緒に居たいのに、幸せを望まないなんて矛盾してると思わないのかよ!!? 半端に虫の良い事を願えるなら、凶々しいのを貫き通せばいいだろうが!!?」

「っ! わかつた様な口をおお!!?」

「身の上話の一つも話さない癖にお前に何が解るだあ!!? 話してから言えよそんな台詞は!!?」

「っ、五月蠅い…五月蠅い!!? 黙れえええええ!!?!!?」

エヴァンジェリンは山下の腕を無理矢理に振りほどき、固めた拳を山下の顔面へと振り下ろした。

「オウオウ、死ンダカト思ツタゼ。案外タフジヤネエカ」

「…どうも零さん」

山下が目を覚ました時にはエヴァンジェリンの姿は既に無く、茶々零がひよつこりと顔を覗き込んでいた。

「随分ナ男前二ナツテンゼ？無茶スンナアオ前モ」

「っ痛!!?…些か熱くなり過ぎたのは認めるけどね。吐いた言葉を撤回する気は無いよ。零さんはエヴァさんに代わってトドメでも刺す気であるのかい？」

見事に腫れ上がって視界を塞いでいる右目周辺を抑えつつ、山下は茶々零に問う。

「マサカナ、ソレナラテメエガ寝テル間ニ殺ツチマツテンヨ。…ブツチャケ俺ハドツチカツテートオ前寄りナンダヨ」

ゴ主人ニハ言エネエケドナ、と肩を竦める茶々零を山下は意外そうに見やる。

「…そりやまた何で？」

「短イナガラナギノ野郎トハ俺モ付キ合イアツカラナ。アノ男ハ摩カネエヨ、女ニ餓鬼マデ産マセテンナラ尚更ダ」

「……そう」

山下は俯き、何事かを考え込むが、暫くして徐に立ち上がると茶々零へ告げる。

「…まあ兎に角僕は一旦帰るよ。とてもエヴァさん今日は話を聞いてちやくれないだろうから。零さん、すまないけどエヴァさんによろしくね」

「……待テヤ」

踵を返そうとする山下を茶々零は引き止め、振り返る山下に静かに尋ねる。

「オ前ハドウシテゴ主人ニココマデ絡ム？オ節介ニシテモ度ガ過ギテルゼ。ウダウダ余計ナ理由ハ要ラネエ、ズバリ聞クゼ。…オ前ハゴ主人ニ惚レテンノカ？」

山下はその言葉に天を仰ぎ、下された言葉を胸の内に投げ掛ける。やがて顔を下ろした山下は、困った様な中にしかし決意を秘めて、茶々零へ言葉を返した。

「今になって疑問だったよ。…本当、僕はどうしてあんなに熱くなっ

てたのかつてね」

告げた理由の他に、自覚していない。否、無意識に認めようとしていなかった理由があった。

「僕は単純に、甲斐性の無いコブ付き男に熱を上げてるエヴァさんが面白くなくて、僕につれないエヴァさんにムカついてたんだよねえ」

「：ソレハヨ」

「うん」

何う様な茶々零の言葉に山下は頷く。

「何時の間にやら。：好きになつていたんだねえ、エヴァさんを」

いやはや辻や桜咲ちゃんを笑えないや、と苦笑する山下の姿を見て茶々零は笑う。

「ケケケケ。：ナラ踏ミ込ム理由ニヤ充分過ギンナ」

「だねえ。：：：零さん」

「オウ」

山下はボロボロの顔で、しかし爽やかに笑い、宣言する。

「また来るよ、今度はきちんと口説きにね」

「ゴ主人ニハ幸セニナツテ貰イテエ。期待シテンゼ、モノニ出来ルモンナラヤツテミテクレ、優男」

「：：：山ちゃんよ、何があつたや？」

「まあ気にしないでよ、私的な事情さ。おまけに助けも必要無いんだ」

昨日にも増してズタボロで首には締められた様な赤い痕。拳句の果てに鈍器で殴られた様に腫れた右顔面とあつては氣にならない訳が無い。中村達のみならず入室して来た杜崎にまで心配されたが、山下は自分で解決せねばならない問題だから、と頑として事情を話さなかつた。

「それより僕が顔を出す前に皆で話し込んでたじゃない。何かあつたんでしょう？今朝は顔の見えない辻の件？」

「いや、それも少なからず問題だし、問題つていやあお前の方がよっぽどみてえだが：：：まあ何かネギ達のクラスで出たらしくてよ」

豪徳寺が山下を心配気に見やりつつも促され、事情を語る。

「出た？」

首を傾げる山下に、大豪院が嘆息して両手を胸の前で垂らし、告げた。

「鬼だよ。…日本語ならば幽霊の事か」

18話 中村 達也という偉大な馬鹿

「…そういうえばお前は雌だったつけ、ヨルムンガンド」

『この凶体の蛇と交尾を出来る様な大きさの蛇がいるならばそちらも驚異認定をすべきだと私は思うぞ、主？』

「あくまで噂だが番いの雄蛇がもう一匹居るらしくてな、二匹の大蛇つてことに因んでウロボロスと呼ぶ連中もいるぞ。その場合は麻帆良五大魔獣になるけどな」

緑の匂いでむせ返りそうな草木の繁茂する、麻帆良の東端に位置する深き森林。枝葉が鬱蒼と生い茂り、視界の悪い木々の間、胴回りが成人男性のそれ程もある巨大な蛇が無惨にも頭頂部から真つ二つにされ、胴体の半ば迄が二枚に卸されている。

その死せる大蛇を挟み、横たわる死骸よりも優に胴回りで1.5倍、体長は2倍を超えるであろう麻帆良四大魔獣の一匹ヨルムンガンドが。

絡み付かれた木々が上げる軋んだ悲鳴の中、尚鋭い威嚇音を喉から鳴らして、フツノミタマを振り上げる辻はじめ一を見下ろしていた。

「スレイプニルにしてもフェンリルにしてもフレースウエルグにしても、真面に生殖出来る番いとなれる個体がまず居ない為に、麻帆良の方でも半ば天然記念保護動物みたいな扱いをしているらしくてな。加えて、今挙げた三匹はそれなりに理性的で、縄張りに入り込む敵意のある対象以外を襲ったりしない件も鑑みて、麻帆良が発足してから数百年、討伐辞令が発令された事は無いらしい」

『…つまりこの爬虫類は他と違って問題がある訳だな？』

フツノミタマの思念を、辻は蜻蛉の姿勢を解かないまま頷いて肯定する。

「頭の程度こそ他の個体と大差は無いが、ヨルムンガンドは凶暴にして残忍、尚且つ狡猾だ。積極的に縄張り内の獲物を狩り尽くし、誤って侵入してしまった戦意の無い人間に対しても容赦無く牙を剥く。人死にが出た事例では麻帆良当時の腕自慢達が山狩りを行い、見事討

伐に成功したとあるが実際は……」

『今しがた主が搔つ捌いた子蛇の様に、そのそれ本体では無かつたのではないか、ということだろうか？』

「そうだ」

ゆらり、と擡げた鎌首をゆつくりと左右に振るヨルムンガンドの動きに合わせて足取りを微調整しつつ、辻は言葉を紡ぐ。

「何より厄介な点としてヨルムンガンドは何処かに居るとされる番いとの生殖によって子供を産む。産まれた子蛇は知能が低く凶暴だから、大抵がデカク成長する前に麻帆良の腕自慢か他の動物に殺されるが、稀にこうやって成長した個体が現れる。ヨルムンガンド自身が殺される我が子についてどう思っているかは知らんが、子蛇を殺した対象へ御礼参りに来たという話は聞かない。あまり母性愛溢れるママさんでは無いらしいな」

『…しかしつくづく話を聞いていても旧世界の出来事とは思えないな。まったく愉快な地だよ、麻帆良というこの土地は』

愉し気な感情の窺えるフツノミタマの思念へ応ずる様に辻は口端を吊り上げ、ヨルムンガンドへと呼び掛ける。

「そんな風に悪名高いお前だから、断つてしまっても鬻蹙は買わないだろうさ。下手すれば麻帆良図書館地下に居た飛竜…ああ、今はキャサリンって名前があるらしいが。に準ずる位にはヨルムンガンドおまは強いんだろうけれど、それ位なら問題は無い。だから来るなら来いよ、俺は子供の仇だぞ。それとも怖気付いたなら追いはしないから消えてくれ。お前の子供を早くちゃん綺麗にしてやりたいんだ俺は」

感情が昂つているのか僅かに頬を紅潮させながら、辻は半ばまで両断された子蛇を熱の籠った視線で撫ぜる。

「折角綺麗に真ん中から断つたのに、尾っぽまで通っていないなんて文字通り竜頭蛇尾に過ぎる。半端に通った線は見ていて堪らなくなるし同じ位に苛つくんだ。…どちらかという忠告めいた心持ちで俺はものを言っている。お前みたいな普通じゃ無いのはどいつもこいつも良きそうで、二つにしたくしょうがない。俺がまだ理性的な内に消えておけよ、お前の子供で一先ず治まりそうだから、さ……」

己が子の死体を両断すると聞いてもヨルムンガンドの眼に怒りの色は無く、爬虫類特有の感情が窺えない無機質な光を湛えて辻の姿を見続ける。

と、複数の木々に巻き付いていた身体が音も無く蠢き、その巨体から信じられない程の滑らかな動きで地面に降り立つ。下の雑草に擦れ僅かな擦過音を上げさせながら、その巨体が後退を始める。が…

次の瞬間爆発した様にヨルムンガンドの上半体が跳ね上がり、辻との間の木々に身体を叩きつけながら強引に長い身体を方向転換。辻の斜め上方に一瞬で頭部を移動させたヨルムンガンドは逆落として辻を呑み込もうと牙を剥き…

高速で振り下ろされたフツノミタマの迎撃<sup>カウンター</sup>を前に強引に身体を捻り、鱗数枚を削らせるだけに留めて素早くその身を引つ込める。

『迅いな…！』

「蛇は全身が筋肉の塊というが、明らかに常識外の身体能力だ。魔獣の名は伊達じゃあ無いな」

奇襲に失敗し、一層威嚇の音を高く鳴らしながら退くヨルムンガンドの前に、泰然と言葉を交わす異質な主従。

「それで？」

首を捻じって乾いた音を鳴らしつつ、嗤い顔の辻が尋ねる。

『……………、フシユツツ!!？』

ヨルムンガンドは最後に一際高く喉を鳴らし、その巨体を濁流の如き速さと勢いで動かし、後方へと退いて行った。

黒い口を開ける夜の森へと大蛇の尾が吞まれていくのを辻は油断なく見続け、完全に気配が消えたのを感じ取りようやく残心を解いた。

「やれやれ流石に緊張したな」

『そうかな？随分と余裕を感じたぞ主よ』

肩から力を抜き、一息を吐く辻に対してからかう様に思念を飛ばすフツノミタマ。

「馬鹿言うな、下手すれば竜種並みに強いとはお前の台詞だろうに。愉しんでるから乗り気なだけだよ、俺は」

辻は軽い足取りで血溜まりに沈む子蛇の死体へと歩み寄り、裂けた顔をひつ掴むと、血で汚れるのも構わずにそのまま胴体の中央を走る傷口に沿って、蛇を二つに裂きながら歩み始める。

実に愉し気に死骸を損壊する辻の狂氣的な行動にフツノミタマは一切否定的な言葉を投げ掛けず、逆に鼻歌でも歌い出しそうな上機嫌を思念に滲ませながら、辻へと問いを放つ。

『時に主よ、私を使わずに綺麗に断てるのか？主になれば包丁やカッター代りに使われようと私は頓着しないぞ？』

「んー？」

笑みを浮かべながら辻は投げ掛けられた言葉を咀嚼するが、「いや大丈夫だ、得意なんだよ等分に何かを断つのは。特に意識しなくてもケーキを切り分ければ同じ大きさになるし、無造作に饅頭なんかを手で裂いてもやっぱり等量に分かれる。つくづく俺は真つ二つという概念に愛されているらしいから…なと！」

話している内に辻は傷口の根元へ達し、ビチビチと胸の悪くなる音を立てながら死骸を二つに裂いて行く。奇妙な事に、力任せに引き裂いている様にしか見えないそれは中心線に位置する鱗までもが均等に裂け、まるで予め切れ込みが入っていたかの様に死骸を真つ二つにしていた。

『…これは確かに才能と現すよりは、呪いの如き世界の鼻肩だな。あ本本当に愉しいよ貴方と居るのは。…たかが畜生を弄ぶ、ただそれだけの事で、私はこんなにも退屈しない。ふ、は…あははははははは!!?』

歪んだ主従の狂宴は、夜も更けた深い森の中、止める者も居ないまま続いていった。

「幽霊ねえ……まあ昨年交霊部の連中が衆人環視の中射殺されたア○リカ前大統領の靈魂を呼び出してた段階で麻帆良の中で存在を信じない者は少なくなっていた様な存在ではあるけど、幾ら何でも何でも



あり過ぎじゃないかネギ君のクラスは？」

あくる日の放課後、ネギ達3ーAの面々から昨夜起こった事件のあらましを聞き終えた後、辻は呆れた様な声でそんなコメントを洩らした。

昨日の修業を終えてバカレンジャー及び篠村達と別れた後、3ーAの面々は学園祭に向けてクラスで行うお化け屋敷の準備製作に赴いていたらしい。出し物の決定に時間を取られた3ーAは作業が遅れ気味だったらしく、校内規定をぶち切って夜中まで一部の生徒が作業を行っていた。そして其処におどろおどろしい空気と共に現れ、その場を恐怖と混沌の渦に叩き込んだのが……

「この女？幽霊って訳か……」

広げられた麻帆良報道部の朝刊一面の大見出しに載っている心霊写真を見て、豪徳寺が胡散臭そうに呟く。

其処にはセーラー服を着た髪の長い女らしき姿が虚空から滲み出る様はつきりと写し出されていた。ピンボケでも掛かっているかの如くブレた顔から虚ろな視線が撮影者に突き刺さり、全体のディテールが歪んでいる様は十人が十人見て悪霊だと断言するだろう。

「あれは何と言うか、本物と言う感じがしました。魔法関連のそれとはまた違った感じがしましたが……？」

目撃者の一人である夕映が『魔界名物 横島殺し \*ノンアルコール飲料』と銘打たれた、最早ジュースなのか毒物なのかも定かでは無いパックの中身を啜りつつ語る。ネギはその時席を外していた為、その幽霊がどういったものなのかは解らないとの事である。

「<sup>ゴースト</sup>霊的存在の中でも生者に対して悪意を持つ様な者はレイスやスペクターなんて呼ばれたりします。なんでこのクラスに現れたのかは解りませんが、生徒達に悪さをする様なら放ってはおけないと思うんです」

ネギは真剣な表情でそう語るが、バカレンジャーの反応は今一鈍い。

「つつつてもなあ……」

「幽霊退治って魔法使いやら武道家よりもゴーストバスターズの仕事

「じゃない？」

「そもそも現れただけで危害を加えられた訳では無いのだろうか？ 荒事に向かうのは些か早計かと思うぞ」

「第一に何故今、3-Aの元に現れたのかを考えるべきだろうなあ…」  
その様に乗る気では無い辻達の反応にカモがその気にさせようと反論を試みる。

「いやいや旦那方、この写真を見てくださえどう見ても悪霊じゃねえですかい？」

「見た目で人を判断すんな阿呆」

先程唯一コメントが無く、霊の写る写真を眺めていた中村がムツとした表情でカモの言葉をぶった斬る。

「てめえら揃いも揃ってうら若き乙女に随分な事言ってるんじやねー」

ぞオラ、その腐った目ん玉見開いてよく見やがれ可愛子ちゃんじやねえかよ」

「……………」

中村を除いた一同はまず新聞の写真に視線を降ろし、次いで中村を無言のまま見やる。

「あん？」

「いや、何つうか凄えわお前……」

怪訝そうに見返してくる中村に、馬鹿にするのを通り越して敬意すら抱いた豪徳寺が勇者を讃える様にそう告げた。一方猛然と、では無いが明らかに納得のいかない様子で抗議するのは主に居合わせた当事者達である。

「中村先輩、流石にそこまで節操が無いのは正直に言っただけですよ？」

「俺が他人よりも多い愛を持つのは自明の理として、何が問題なのよ可愛い娘を可愛いって言っただけじゃん…おっ、もしかして「いいえ違います」せめて最後まで言わせろよ夕映っち!!？」

「気安いですよ先輩、不愉快です」

「棘があんなありーダー、まあ何にしる安心せいや。リーダーはリーダーでキャワいらしい女の子だからよ」

「竜はおろか悪霊地味た外見の死人迄を可愛いと断言する様な人に容姿を褒められても寧ろ不安です」

応酬の果てに出した夕映の結論に周りがしみじみと頷く。

「楓ちゅわくん！助けてくれい、可愛いけど可愛くない後輩が俺を苛めるんだ!!？」

「そこで拙者に振るでござるか」

足元にスライディングしてくる中村をヒョイと躲しつつ楓は苦笑する。

「まあ幽霊相手だろうと女性なれば恐れたり疎んじたりせずに発情するのは真、中村殿らしいので拙者は嫌いでは無いでござる」

「褒められてる気いすっけど流石に発情はヒデーなり!!？」

畜生俺が変態みてえじゃ無えか!!？、と無念の表情で中村が地面をローリングする。

「まあ自覚の欠片も無い馬鹿は捨てておくとして、具体的にどうするんだいネギ君？単純に追っ払うなりなんなりするなら、麻帆良オカルト系部活に依頼でもすればどういう形にしる解決はするけど……？」

何時ものように中村を完全スルーして行う辻の確認に、ネギは思案顔で3ーAクラス名簿を取り出し、生徒達の顔写真が掲載されているページを開いてみせた。

「うん？」

「さつき僕はこの幽霊ゴーストが危害を加える様な危険な存在なら、って言いましたけど……目的は別として、3ーAうちに現れた理由は何と無く解るので、僕もどうしようか悩んでるんです……」

ネギの言葉に一同は開いたページの周りに集まり、並ぶ顔写真の内、ネギが指差す一枚の写真を注視する。

「…多分、この人ですよね？この幽霊って……？」

「………あつ………」

そこには新聞に掲載されている幽霊と同じ古いデザインの制服を身に纏い、デイトールが崩れた中でも唯一はつきりした特徴である、前髪の切り揃えられたロングの印象的な女生徒、出席番号一番、相坂さよの写真があった。

「これ見りやおめえ等にも解つたる、可愛い娘だろうがこの節穴共」  
最後にむつくり起き上がってクラス名簿を覗き込んだ中村が、勝ち誇って周りを鼻息も荒く見下した。

「……………うううう……………」

心の底から沈んだ様子で力無く呻きつつ、下半身の無いセーラー服姿で長髪の幽霊―相坂 さよが、校舎の掲示板に張り出された、どう見ても悪霊としか思えないような、嫌な方向に迫力満点な己の写真を見てガツクリと肩を落とす。

「……………何で私って、何時もこうなんだろう……………」

さよは涙ぐみ、揺れる声音でそう溢した。

昔からさよは存在感の無い少女だった。さよ自身の性格の良し悪しは別にして、兎に角クラスの中で目立たない、言ってしまうえばその場に居ようが居るまいが何も変わらない様な、そんな少女であった。

奇しくもそんな性分は事故により死亡して幽霊となってからも変わらず、TVで本物だと騒がれた霊能力者も、麻帆良で怪し気な活動を続ける奇妙な部活集団も。さよがどれ程に勇気を振り絞り声を掛けようと、認識してもらおう事すら叶わなかった。

季節が移り変わる度、教室には新しいクラスメイトが溢れたが、さよの姿を見ることの出来る生徒は現れない。いつしか教室に縛られていたその身が、ある程度自由に辺りを彷徨えるようになったその頃には、さよが死んでから実に六十年の歳月が過ぎ去っていた。

学園の各所に散見する、己が身と同様にその身をこの世ならざるモノへと変えた幽霊どうるいに声を掛けようともさよは考えた。しかし学園に留まるそういったモノ達からは、荒事や暴力沙汰からは大凡縁遠い生涯を送ったさよにですら感じるこの出来る、悪意が凝り固まっているとしか表現の出来ない何かを感じた。それに触れてしまえば、良くない感情が身体を満たして、クラスの皆に害を成してしまうかもしれないと、本能的にさよは理解し、霊達から距離を取った。

その結果、幸か不幸かさよは人格を歪めることも無く、形だけとはいえ現在も3―A出席番号一番の生徒として、この世に存在すること

が出来ている。

しかし確かに其処に居ながら、誰にも認識されず、蚊帳の外から楽し気な同年代の少女達をただ眺めるだけの日々は、ゆつくりと鑢で削られるようにさよの心を虚しさで蝕んでいった。

相坂 さよは、孤独であった。

そんな失意を失意とすら感じられなくなるような、ゆつくりとした絶望の日々に転機が訪れる。

新年度に新たな3-Aの教師として赴任してきたネギ・スプリングフィールド。まだ幼い子供の様であるこの少年教師は、クラスの出し物を決める際、さよの挙手を人数として数えることが出来たのである。

さよは驚き、同時に大いなる期待に胸を躍らせた。年月すらも真面に数える気にならなくなる程に永い停滞の日々が、遂に終わりを迎えられるのでは無いかと喜んだ。

だからこそ、はつきりと自分を気付いて貰おうと自ら行動を起こしたさよを、誰も責められはしないだろう。

しかし気弱な彼女が最大限に振り絞った、勇気を伴ったのクラスメイトへの接触は、まるでさよが悪霊の如き認識をされてしまう様な結果に終わってしまったのである。

「…そんなに、私の願いつて許されない様なことなのかな……………」

暗澹とした気持ちのまま、さよは呟く。

目の前の記事にした所で、このような写り方をしているさよ自身に問題があるのであって、誰かの悪気があってさよの事を貶めようとしている訳では無い。それはさよも理解していた。

……………  
……………  
……………  
……………  
……………  
……………

さよは好意も悪意も向けられた事が殆ど無いと言っている。さよは何も向けられた事が無い。

それは悪意無き悪意、無関心という名の拒絶の壁であった。

さよはその壁を乗り越えられなかったから、或いは乗り越えようとするしていなかったから。他人との関わりに飢え、それを未練として

この世に残留している。

さよの境遇は不憫なものであるが、さよ自身に問題が無かった訳では無い。さよはきちんとそれを、理解出来ていた。

しかしまた、誰かが少しだけ優しければ、相坂 さよはこのような状況に陥っていなかったのでは無いか、という過程も領けるものなのだ。

永い永い孤独の中、さよが一度たりともそれを怨まなかったかと言われれば答えはNOであり、より大きな期待を抱いた分、落胆も大きかった今回の結果を踏まえて尚、半ば自業自得だから仕方が無いと、これ迄の如く、則ち何時もの様に。

さよが割り切れ無かったとして、それを責めるのは酷な話だろう。

その黒い感情に浸るのは、悪いものだと感じ、それ故に避けていた学園の同類あくりようと同じものに成りかねない行為だと何は無しに理解しつつも、さよは怨みを自覚し始めていた。

……なんで私だけ、こんな目に………!!?

モゾリと瞋恚の衝動が、さよの心の中で鎌首を擡げたその時、3-Aの教室で、さよを呼ぶ声があった。

「あついさつかちやくん!!? 何処ですかああああ!!? 貴女のおっ話聞かせて下さはああい!!?」

「五月蠅いわ、貴様は」

教卓の上に仁王立ちをして、其処に居るかも解らないさよに対して喧しく呼び掛ける中村に対して、黙って様子を見ていた者の一人、大豪院が堪りかねた様にツツコんだ。

ネギ達から事のあらましを聴き終えた中村は、その相坂ちゃんを目的を確かめてえ、ってんなら俺様はその役買って出てやるぜい!!?、と立候補し、朝倉の調べによりかつて事故死した昔の3-A生徒がさよ本人であると確定したのを駄目押しに、『美少女幽霊とチャネリングしてあわよくば仲良くなっちゃおう大作戦』という頭の悪そうな企画を立ち上げた中村が金ラメタキシード姿で夜の教室に突撃、他の面々もなし崩し的に巻き込まれて現在に至る。

「…なあ、あんな真似して危くないん？中村先輩は？」

もし何かあつても俺様がしつかりカバーすつから安心して学祭準備を進めな!!？、と豪語した中村の勢いに吞まれて作業を進めていた3-A生徒の一人、和泉 亜子が恐る恐るといった様子で、呆れた様に中村を眺める夕映に尋ねる。

「さあ？私としてはホラー映画などで真っ先に死にそうな真似を仕出かしている中村先輩は明らかに良くないフラグが立っているかと思えますが…まあ殺しても死なないような人ですから大丈夫でしょう」

「いやいやそれヤバいじゃん!?!」

「私達にもとぼつちり来たらどうすんのさく!?!」

「…いや、まず中村先輩の心配をした方がいいと思うんだけど…?」しれつと洒落にならなそうな事を言う夕映にまき絵と祐奈が猛抗議し、アキラが遠慮がちにはあるが真つ当な事を言つてのける。

「気にしないでよ大河内ちゃん、あの馬鹿の事は。綾瀬ちゃんの言う通りどんな崇りにあつた所で死ぬ所か大して堪えもしないだろうから」

「心配するだけ時間の無駄だ。只でさえ作業遅れてんだろ？立ち寄つたついでに俺らも手伝うからよ、持ち場に戻りな、悪いことは言わねえ」

「ありがとうございます、御手を煩わせてしまつてすみませんね、豪徳寺先輩」

「別に構わねえから態々寄つてくんよ那波、向こうで作業してやがれ」

「あらあら、照れていらつしやるんですか豪徳寺先輩？」

「この女……!」

「豪徳寺、ラブコメなら向こうでやつてよ今の僕には見てて辛いから」さらりと友達甲斐の無い発言をした山下と豪徳寺は騒ぐ中村を見向きもせずに、後輩にちよつかいを出されながらも周りの塗装や釘打ち作業を手伝い始める。大豪院も中村が妙な暴走を仕出かさないう監視に付いている為、真面に霊現象を解決しようとしているのは辻

とネギパーティー位のものだが、こちらはこちらで要領を得ない状況になっていた。

「降霊部や退魔部の連中追い返しちやつてよかたアルか？連中何だかんだでプロアルよ？」

「降霊部は兎も角、退魔部のとこの部長は何処ぞの極楽な大作戦の世界でゴースト○イーパーでもやってそんな感じでおまけに悪霊だろうがそうで無かろうが容赦しないらしいからなあ。曲がりなりにも交流試みてるんだから居させると面倒だろうってのが理由だね」

古の疑問に辻がそう答え、それとなく木乃香達の方向―実際は刹那に視線を向けるが、サイドテールの後輩は材木の切り出しに集中しているふりをして一向に会話に加わりうとする様子が無い。

「…何だかなあ……………」

「大丈夫や、辻先輩。せつちゃんは近い内にスーパードグレードせつちゃんに進化して先輩に目にも見せる予定やから！」

相も変わらずつれない様子の後輩に一つ溜息を吐く辻に、木乃香がやけにテンション高く親友のフォロー？に入る。

「いや木乃香、ガ○ダムの機体更新じゃ無いんだから…っていうか桜咲さんが何か妙な感じになってんのはあれでしょ？先輩が甘酸っぱい青春のカホリ的な何か引き起こしちゃったんでしょもくっ！」

木乃香にツッコみつつも、ハルナは眼鏡をクイツと持ち上げ、両の瞳を爛々と輝かせながら辻をビシィツ!!？と指差し、高らかに追求を行う。

「人を指差すなど両親に教わらなかったか早乙女？おまけにプライバシーに関わる事に関する詮索屋は麻帆良のパパラッチ一人で充分だよ」

「うーんつまんない反応だねえ辻先輩、ちよつと前までの先輩は一々純な反応してくれて面白かったんだけど？」

半眼になった辻の取りつく島も無い返しに、ハルナはブルー垂れた表情で文句を言う。

「仮にも先輩をからかって楽しむなよ…………俺の事は置いておくとして、どうだい、宮崎ちゃん？」



尚も絡んでこようとするハルナをぶち切って、辻はいどのえにつきを構えるのどかに声を掛けた。のどかは本のページに落としていた視線を上げ、静かに首を振る。

「えっと、今のところ相坂さんの内心は表れてません……教室には居ないのかもしれないですし、もしかしたら幽霊さんの思考は読み取れないの、かもしれませんー……」

「それならそれで、別の方法を考えるつきや無えなあ。嬢ちゃんのアーティファクトに反応がありやあ一番手っ取り早いと思っただがよ？まあ、いざとなったら旦那方の怪し気なツテを頼りやあいんだからあんま気負わずにやるといいぜ」

やや自信なさ気なのどかに、ネギの肩の上にいるカモが前足を振ってフオローの言葉を投げる。

「…にしてもへんた…中村先輩騒ぎ過ぎじゃない？新田とかが現れたらどうやって誤魔化すのよ？」

「その時は拙者達が一時身を隠して、目立つ格好の中村殿が新田先生を挑発しつつ囷となつて一旦校外へ逃げる手筈でござるな」

「…あたしが気にすることじゃ無いかもしれないけど、幾ら何でもあの人の扱い雑過ぎない？」

余りにも大々的に声を張り上げている中村を明日菜が危惧し、それに対して楓がさらりと外道な対処法を口にして本来外道寄りの筈の朝倉にツツコミを食らっていた。

何だかんだでその場の大半は半分お祭り騒ぎのノリで学祭準備と並行しての幽霊問題解決作戦を見物していた。が、若者らしいと言えばそれまでである者の、浮かれた楽し気なその空気は、今の彼女には毒であったかもしれない。

「…あ………あの、反応があり……まし……た………た………」

短く驚きの声を上げ、さよとコンタクトが取れた事を告げるのどかだが、何故か呼び掛ける声が尻窄みに小さくなっていき、明らかに顔が青くなる。

「…？、のどか、どうしました…た…!!？」

「え、なによなによ？」

「どうしたアルか？」

「……………」

親友の様子を訝しんだ夕映が隣に立ってページを覗き込み、同様に硬直したのを見て、周りの女子達や少し離れた所で作業をしていた山下、豪徳寺に辻も近寄ってページを見やる。

『お友達になりましたよう……中村さん……あなたも……こっちへ……ずっと……ずっと……楽しいことを……一緒に……一人……さみしい……さみしいさみしいさみしい……』

明らかにのどかが使用したことのある状況とは違い絵のタッチがおどろおどろしいものに変わっており、真つ暗な背景をバックにこちらを引き摺りこまんとばかりに手を伸ばす、暗い瞳の噛み顔をしたさよの姿がそこには写し出されていた。下に表れる文字も所々が歪に撥ね震え、最期辺りの文書は我武者羅に勢いだけで書き殴った様な字幅も字形も何もかもが無茶苦茶なものになっていた。

「……………」

余りの禍々しさに水を打ったように静まり返る面々、気の弱いのかななどは既に半泣きである。

「んあ？……おっ、もしや反応あったかオイ？……つとう！！？」

静まり返った一角を訝しく思った中村が教壇から跳躍、見事な月面宙返りムーンサルトを決めてのどかの後方に着地していどのえにつきを除き込んだ。

「……ほくくう……………」

中村は小刻みに何度か頷き、

「へい相坂ちゃん、さよちゃんって呼んでもいいかい？？俺あ中村達也、俺で良けりやあ是非お友達ブハアツ！！？」

「応えるな中村、霊界に引き摺り込まれんぞ！！？！！？」

満面の笑みで返答を終えかけた中村の首元を若干青褪めた豪徳寺の繰り出したラリアットが薙ぎ払い、言葉を強引に遮った。

「や、やっぱり悪霊じゃねえか出会えー!!?」

「ええー!!? 何、なんなの!!?」

「な、中村先輩が霊に、幽霊の崇りに!!?」

「ひいいっぱり怒らせてんじゃん悪霊をお!!?」

周囲も中村の行動をきっかけに金縛りが解け、事情を半端に理解した周りの生徒に動揺が伝染して、辺りは蜂の巣を突ついた様な騒ぎに発展した。

「何しやがる糞リーゼントあ!!? 俺様と美少女幽霊との親睦を邪魔するんのかオラア!!?」

「てめえはこれを見て何で欠片もヤバいと感じねえんだよ!!? 本当に俺らと同じモンが見えてんのか!!?」

「中村が取り殺されようがどうでもいいけど僕らまで被害が来たらどうするんだよ!!?」

「ぎやあああなんか机が、材木が飛んでるうう!!?」

「ポ、ポルターガイスト騒霊現象です!!?」

「うおあつぶな!!?」

「わひやあ!!?」

「つ、辻部長申し訳…お、お嬢様!!? 此方へ!!?」

「わあ窓に血文字がー!!?」

「ゆーなが取り憑かれたー!!?」

一言で言うならば大混乱であった。

「あ、あああああああつ………!!?」

一方こちらはこちらで、相坂 さよは絶讚パニック状態であった。

机等の重量物が飛び交ったり祐奈が半憑依トランス状態になったりしている原因は、無論の事さよにあった。が、悪意に囚われかけていたとはいえ、さよは中村の呼び掛けに応えようとした当初からこの大混乱に至る迄に、害意を伴っての行動を起こした訳では無かった。懸命に自らへと呼び掛けてくれている中村に、さよは再び他者との交流を頑張ってみようと奮い立っていたのだ。

ただ、さよは自分で思っていたよりもコミュニケーションが下手く

そであつた。

中村に応えようとすれば先程まで心が澱んでいた影響か、移し取られた心の声は死んだ自らの道連れを作ろうとしている様にしか見えないし、悪い流れを建て直そうと気合いを入れれば力が溢れ、ポルターガイスト騒霊現象が起る。誤解を解こうと動けば文字は血文字になり、憑依は半端に成功し対象の意識が残つてトんだ表情になりと、端から見れば狙っているのではないかと思える程のすれ違いっぷりである。

「…な、なんで…！なんで私…！？」

さよはあまりの情けなさに涙を溢れさせる。自分なりに一生懸命やっているのに、チャンスを掴もうと頑張っているつもりなのにこの有様だ。

「…やっぱり…私なんかがお友達を作ろうなんて、おこがましいことなのか…？」

元々さよは行動力がある訳でも気が強い訳でも無い。そんなものがあるならばそもそも孤独に人生を終おわらせてはいない。なんとか絞り出したなけなしの勇気も窄み、さよの心は再び諦念が支配しようとしていた。

だが、そんなさよに対して更なる追い打ちが掛かる。

「え…、っ！？きやあああ！？」

いつしか俯いていたさよは、自らに向かう不穏な気配に顔を上げると、目の前に飛んで来ていた良くない力を感じる鉾に、反射的に悲鳴を上げた。

「対象の姿が殆ど視認出来ないぞ！！？」

「私達がこれまで同じ教室内で過ごしていて気付かなかつたんだ、恐ろしく隠密性の高い霊だよ！」

「きやああー！！？きやあきやあ！！？」

「ゴラ待ててめえらあーっ！！？キャットファイトなら腕に覚えのある奴だけでやりやがれ止めろっつってんだろがあ！！？！！？」

「馬鹿野郎中村、危ねえよ！！？下手に手出すな！！？」

夕風を手に持つ刹那と二丁拳銃を構えた真名が悲鳴を上げながら

逃げ惑うさよを着実に校舎の隅へと追い詰めていく。その二人を止めようと直ぐ後方から、憤怒の形相の中村が走り、更に後ろをバカレンジャーとネギ達が追いかけていた。

こんな展開になった一因としては、カモが事前に聞いていた金次第であらゆる仕事を請け負う傭兵稼業を学生の傍らに営む凄腕スナイパー、龍宮 真名にいざという時の保険で幽霊退治を依頼していた事、もう一つにさよが起こしてしまった騒霊現象ポルターガイストによって木乃香に机の一つが飛来してしまつた事だろう。

幸い机は辻が打ち落としたものの、これにより木乃香の親友にして主従の刹那おじょうさまがぜったいしゅぎ一氣にさよを敵認定、真名の攻撃でさよが逃げ出したのを皮切りにこの追跡劇が幕を開けたのであった。

「止・ま・れ・つてのが聞こえねーのかてめえらあ!!?!?!」

「っ!!?!」

「くっ!!?!」

怒号と共に中村の飛翔脚が曲がり角を左折しようとしていた真名と刹那の眼前を掠める様にして壁に突き刺さり、二人はたたらを踏んで急停止する。中村は直ぐ様足を壁から引き抜き、さよの逃げた先の通路へ仁王立ちに立ちはだかる。

「…退いてくれないかい中村先輩? 依頼を受けた以上私はあの霊を退治しなければならぬでね」

「巫山戯ろ。…あの子が悪いことして無えたあ言わねえ。木乃香ちゃんに机が飛んでつたりしたのはまあ、さよちゃんが悪いやな。だから桜咲が過剰に対処したくなんのも解る」

「っ!ならば、道を開けて下さい、中村先輩。理由はどうあれ、あの霊はお嬢様に危害を加えようとはしました。更に私達から攻撃を加えてしまった以上、今は逃げているだけのあの霊が逆襲に出て、お嬢様達を害する可能性もあります。事は既に予断を許さない状況なのです!」

一応拳銃の銃口を向けてはいないものの、いざとなれば押して通る気満々の真名を説得する様に、中村は極力落ち着いて会話を試みる。が、目標さよに刻一刻と距離を開けられている現状、プロの二人は中村に

時間を稼がせるつもりは無かった。

「いや、桜咲。さよちゃんは多分こっちに危害を加えようとするつもりであんなことになったんじゃないや無えんだ、多分こっちが悪霊扱いしちゃってギャアギャア騒ぐから、慌てて物飛ばしたりしちまったんだよ」

「何を根拠にです!!?」

「何と無くだよ、女の子に関する俺のセンサーを信じろ!!?」

「…話にならない、ね!」

理由になつていない理由を堂々と宣言する中村に、真名が一つ息を吐いて中村の足元に銃撃、強行突破に掛かる。

「うお龍宮……!!? つ痛え!!?」

「すみません中村先輩、この状況では流石に信用が出来ません!!?」

足元に撃ち込まれた弾丸に反射的に足を半歩引きながらも、中村は腕を伸ばして脇を抜けようとする真名を掴んで止めようとするが、銃撃に合わせて逆側から踏み込んだ刹那が、夕風の背で中村の引いた足とは逆の足を痛撃。バランスを崩した中村の両脇を二人が抜ける。

「あの霊は何処へ行った龍宮!!?」

「…微かだが霊体の残滓が見える、こっちだ!」

「痛つ!!? ……あんにやろう共……!!?」

「中村、桜咲達は!!?」

転倒状態から跳ね起きて唸る中村に後方の辻達が追いついてくる。

「其処の奥を多分右だお前らも手伝えや!!?」

「こちとらどっちが正しいかも解らねえんだよ、そう簡単に一方へ加担出来るか!!?」

「…寧ろ状況的には桜咲後輩の対処が正しいぞ中村。お前の勘では理由にならん」

「まあ一笑に伏すには中村の感覚は変な所で鋭過ぎるからあれだけど……」

「五月蠅えー!!?!!?」

どっち付かずな言葉を吐くバカレンジャーを中村は一喝する。

「もういいわ役立たず共が!!?俺が止めりやあ、いいだけだからなあ

!!？」

「……なんで、だろうな……」

校舎の片隅、一階廊下の最奥部でさよは力無く、座り込む様にして浮かんでいた。

さよはただ、自分と話をしてくれる相手が欲しかった。今日の天気でも何でも、どんな詰まらない事でもいい。正にそんな、ありふれた友人とのなんでもない日常こそをさよは望んでいたのだから。

友達が欲しい。生前から変わらぬ願い。引っ込み事案で、生きている時からその一言が言い出せず、気がつけば勇気を振り絞り、声を掛けようとその声すら届かない身に成り果てた。

自分も悪いのだと解っている。己から積極的に自分を表そうとせず、勝手に引いてしまった自分が、無関心を貫いた周りを一方的に責める資格は無い。

しかし、今でもさよは覚えていることがある。

不幸な事故としか言えない様な有様で、呆気無く人生の幕が降りた後。気がつけばさよは学校の制服を着たまま、3ーAの教室

の、自分の席に座り込んでいた。目の前の机の上には、花瓶に一輪の花が生けられていて、さよは不思議とすんなり、自らが死んでしまったのだと理解出来ていた。

或いはさよは、その言葉を聞かずに居たならば。ぼんやりとクラス内で座り込んだまま、何れ曖昧なものに成り果てて、静かに消えていったかもしれない。

それは自分の葬式が終わったの、クラスで最初の登校日、ある一人の男子生徒の言葉だった。

その生徒はクラス総員で出席したさよの葬式の日にか何か予定があったらしく、友人に対して不満気なイラついた態度でさよの事をこう言った。

「どうせ居ても居なくても一緒なんだから、死んだ位の事でクラスメイトに手間掛けさせるなよな」

その言葉には真面な悪意すら碌に存在せず、さよの事をひたすらに

どうでもいいと。そんな投げ遣りで、おざなりに扱うものだった。

流石に不謹慎に過ぎる発言だと思っただけらしいその生徒の友人は、男子生徒の事を諫めたが、その友人にしてもさよの身を尊重していた訳では無い。さよの身を貶める発言を黙ってそのまま良しとするのが少しばかり気不味いと、その程度の軽い気持ち。

その友人だけで無く、クラスの誰もがつい先日亡くなったさよの事を話題に出す者はいない。つい先日、その葬式に出席したばかりだと言うのに。本当に居なくなってしまうてすら、さよは誰にも気にされていなかった。

見て、聞いて貰おうとしなかった私は悪い。

でも私のことを、生きていようが死んでいようが同じだなんて。

そんな風に私という人間を、人生を。

私そのものを否定するなんてことは、許さない。

さよはそんな怒りと嘆きと、憎しみと悲しみを抱いたからこそ、今日まで存在していられたのかもしれない。

「…なんで私ばかり、こんな目に……!!?」

「…見つけたぞ。私達相手に良く頑張ったよ」

俯いて座り込む様に動きを止めているさよに対して、暫しの間を開けて追い付いた真名と刹那は、さよに逃げ場を与えぬように、ゆっくりと左右から回り込む。

詰めめの体制が整おうかという、その数歩前。不意に真名が足を止めて目を見開き、両手の拳銃を体前に素早く構える。

「…?真名、どうした?」

「…どうやら追い詰めた挙句、半端に猶予を与えたのが悪い展開を呼んだらしい」

訝し気な刹那に答える真名の様子は、油断や焦燥とは程遠いものであったが、だからと言って目の前のさよを脅威と認識していないそれでは無かった。



「…もうお前にも解るだろう、刹那？」

「…何が…：…っ！！？」

問い返そうとする寸前、刹那は素早く夕風を振り上げ、油断無く構えを取る。それを横目で確認した真名は小さく頷き、

「瘴気の総量が増している。気配こそ異常に薄いポルターガイストが、騒霊現象で動かした物体の重量や、一般人相手とはいえ憑依ホゼッションを行って見せた様からして、下手をすれば並の死霊程度レイスの霊格は持ち合わせている。油断するなよ、刹那」

そう告げて僅かに真名はさよへとにじり寄る。

「ああ」

刹那は短く応え、退魔稼業を生業とする、神鳴流の対悪霊用剣技を放つ為に、気を収束させつつ静かに距離を詰める。

「…何で私を…：…何で、貴方達は…あ、ああああああ！！？！！？」

小さくかぶりを振りつつ、上げられたさよの顔は、荒事慣れした二人が一瞬息を呑む程の凄まじい形相となっていた。

他者への怨みと憎しみに囚われた時に、屢々人はこういう顔をするのだった。

死んでいようとも。否、生きていないからこそ。

幽霊は生者よりも、時に純粹になにかを呪うのだ。

しかし、さよの前に立つのは何れも百戦錬磨の戦闘におけるプロである。軽く目配せを送り合った真名と刹那は、さよが明確に攻撃的な動きを見せない内が先手を取る好機と見計らい、呼吸を合わせて攻撃に移った。

「…：…ふっ！！？」

「神鳴流奥義、斬魔剣！！？」

真名の二丁拳銃が魔弾をばら撒き、飛び上がった刹那が祓魔の斬撃を振り下ろす。

その攻撃は一瞬の後に繰り出された。如何にそれなりの力を持ち合わせた霊であろうと、さよは戦う者として見た場合、ようやく戦闘を行う上での最低条件——相手に敵意を持ち、排除する意志を固める事——をクリアした段階である。そんな戦闘の初心者が二人の動き

に反応出来る筈も無く、襲い掛かる凶撃を前にさよは為す術も無  
く――

「のがあああああつ!!??!!??」

――消滅する様な事がある筈も無かった、突き抜けた馬鹿中村が居るこ  
の場では。

中村はさよに対して覆い被さる様にその体前へと飛び込み、弾丸の  
全てを背中を受け止め斬撃を頭上で交差させた両腕で防いだ。

「つ!!??」

「なに!!??」

「な、中村先輩!!??」

「ごわああああ痛つてええええええつ!!??!!??」

さよは唐突に現れた中村の姿に目を見開き、真名と刹那は中村の捨  
て身の庇い立てに驚愕する。

当の中村は全身に気を込めて防御したとはいえ、弾丸がタキシード  
を破って喰い込んだ背中と、かなり深くまで肉を斬り裂かれた両腕の  
痛みに、叫びながら転げ回る。

「ぬおおおおお……つたく、何とか、間に合ったな糞が」

のたうちまわっていた中村は暫らくして身を起こすと、さよを背中  
に庇う様に真つ直ぐと立ち、正面の真名と刹那に相對した。

「…中村先輩!!??なんて無茶をするんですか!!?? 対霊用の斬撃とはい  
え、生身の人間に害が無い訳では無いんですよ!!?? 真名の弾丸にして  
も……」

「やつかましいわこのサイドテールムツツリおじはーちゃんの嫁が」

「…つな!!??」

中村の無茶苦茶な行動を咎めようとした刹那は、言葉を遮られた事  
にか中村の言葉の内容にか。気色ばんだ様子で口を噤む。

「…つたくてめえ等は後輩の癖に言う事聞かねえで剩え美少女幽霊を  
消滅させよう等とこの神たる中村様も恐れぬ所業をやらかしやがっ  
て。野郎だったら八割殺しくれえにしてんぞマジで。美少女だから  
止めるだけで許すけどな」

つたくよー、と中村は如何にも嘆かわしいと言わんばかりにしかつ

めらしい表情で、真名と刹那へ徐に宣言する。

「お前らの対応は頗る正しいんだろうが、別に正しけりや物事なんでも罷り通る訳じゃねえだろ。一旦俺に、任せとけ。荒っぽい手段に出んのはよ、もし俺がやられちまったら、でいいだろ？」

自らの身の安全すらも賭けて迄、何処までも中村はさよを庇い立つ。

そんな中村の様子に頭痛でも覚え始めたのか、真名が顰めた眉の下、いつそ忌々し気ですらある睨む様な目付きと共に、中村へと言葉を放った。

「先輩、貴方の博愛精神がどれほど大きかろうと私には関係無いさ、好きにすればいい。だが先輩も感じているだろう？その霊は既に瘴気を放ち始めている、即ち悪霊と化しているんだ。：個人的には貴方の無差別主義は嫌いじゃない。とはいえ何事にも、限度はあるものだよ？」

「そうかもな、でもこの場合はその限度を過ぎちゃいねえぜ」

中村は真名の言い分を否定しなかったが、その主張に従いもしなかった。

「さよちゃんの方からやらかしちまったとはいえ、ガツガツ追い立てて追い込んだのはこっちだろ？誰だつて攻撃されて、敵意向けられりやあこの野郎こいつつて、相手を睨むもんだぜ。いいから黙って見てろよ後輩共、無難な対応は決して最適解じゃ無えつてのを、今から俺が証明してやらあ」

それ以上の問答を良しとせず、中村は背後へ振り返りさよに正対する。さよは中村達が話している間、茫洋とした目で中村の背中を眺めたまま、中村が振り返る今現在まで一切の動きを見せていなかった。

「へい、さよちゃん。俺の言葉聞こえてるかい？」

「……………」

さよは目線こそ中村の顔に合わせたものの、虚ろな表情のまま言葉を返そうとはしない。そんな拒絶とも取れる反応にも一切怯まず、中村は更に言葉を重ねた。

「先ず何よりも先に謝らなきゃならねえ。：追いかけて回して、暴力振

るって悪かった。言い訳になっちまうが、俺らとさよちやんの間にはすれ違いがあったんだ。先走った後輩達は俺がきちんとメとくし、今後一切こんな真似はしやしねえ。怒りをすぐ様鎮めてくれなんて都合のいい事は言わねえから、先ずちよつとだけ、落ち着いてくれねえか？」

「……………すれ……………違い……………？」

黙ったまま中村の言葉を聞いていたさよが、語りかけられた言葉の一つに反応を見せる。

「ああ、そうだ。見解の相違つつうか、兎に角悪いのは…っ!!？」

唐突にさよから瘴気が膨れ上がり、まるでスイッチが切り替わったかの様に再び憎悪の形相へ変わったさよが両腕を中村の首目掛けて伸ばし、虚空を掴む様にその手を握り締めると、中村の首に見えない手形が浮き上がり、中村の身体が宙に浮かび上がる。

「貴方達はそうやって…!!？私のことを!!？…そんなに私!!？どうでも良くなんて、無いいい!!？」

「か……………ああ…っ……………!!？」

支離滅裂な内容の言葉を叫び、中村を掴む見えない手に、更なる力を込めるさよ。どれ程の力で締められているのか、掠れた呻き声を洩らす中村の顔がみるみる蒼白になっていく。

「…っ!!？言わない事じゃない!!？」

「中村先輩!!？」

真名と刹那がそれぞれ武器を構え、両側からさよに攻撃を仕掛けようとする、が。

「…黙っで…見てろっ…っつたろが……………」

中村は両の掌を突き出し、二人の攻撃を止めさせる。

「無茶です、中村先輩!!？」

「づっせ……………そうだよ…な…怒って…当然……………だよ、な…さよちやん」  
刹那の呼び掛けを一蹴し、中村は酸欠で青白い顔にそれでも笑みを浮かべ、睨み上げてくるさよに視線を合わせて語りかける。

「俺…らが……………いや。俺が、悪かった。こつちから…呼び掛けた……………の…に。…悪霊扱い…して、追い回して……………本当にすまなかつ

た……」

中村はぶら下げられたまま無理に首を曲げ、頭を下げる。

「……虫のいい……話かもしれないねえけど……さ……ゲホツ!!?……ん……つ……俺の呼び掛けに、応えて、くれたん……だろ……?……さよちゃん、何を言いたくて……出て来たんだ?……話を……ぐっ……聞かせて、くないかい?」

途切れ途切れに伝えられた中村の問いかけ。その質問に、さよの悪鬼の様な形相が僅かに揺らぎ、混乱した様にバラバラな言葉がその口から漏れ出す。

「い……あ?……わた、私……無視されて、貴方が憎くて、さみし……?……何で、何で私が、こんな、あ、ああ?……追いかけられた、許さない。でも、私、私は、あ、ああ、あ……!!?」

さよは何事かを拒む様に頭を左右に振り、ふと怒りと憎しみがその表情から影を潜める。残ったのは迷子の子供の様な、寂し気で切ない、まるで泣き出しそうな表情。

「……寂しいん、です。独りで……誰も、気付いて、くれなくて……お話しが、したい。……私、私はただ、お友達が、欲しくて……!」

「……そっ……か……」

中村は朦朧とし始めた思考の中、さよの言葉を聞き、ニカツと笑う。

「……ちゃんと、自己紹介……してなかった……よな……?……俺、中村……達也……ってゆうんだ……さよちゃん」

「……え……?」

潤む瞳を上げ、訳のわからない様子で中村の顔を見上げるさよ。中村はそんなさよの目を、霞む視界の中、なおしっかりと見つめて告げる。

「さよちゃん……俺と、友達に……なってくれないかね?」

「……あ……!!?」

その言葉を聞いた瞬間、黒く澱んでいたさよの思考は一気に晴れ渡った。

……そうだ……この人は……!!?

さよに対して、一生懸命呼び掛けて、話をしようとしてくれた。クラスメイトからさよを、身体を張ってまで庇ってくれたのだ。た。

「あ……あ……!!? わ、私なんてこと……!!?」

「ん? おわつ!!?」

正気を取り戻したさよは、中村の首を絞めて今まさにくびり殺そうとしている現状に気付き、慌てて中村を取り落とす。

「あ……ゲッホゲホゲホツ!!?」

「あ、ああああのつ!!? すみつ、すすすみませつ……!!?」

尻餅を着きながら激しく咳き込む中村に対して、ワタワタと全身で狼狽を表しながらも米搗き飛蝗の様に頭を下げるさよ。

「ほ、本当にごめんなさいっ!!? 私、私なんだかよく、判らなくなっちゃつて、その……!!?」

……なにを……なにをやってるんだろう……私……!!?」

……これじゃあ、本当に只の悪霊そのものじゃない……!!?」

さよは激しい自責の念に囚われていた。こんな自分に対して友好的に接してくれようとして、危ない所を助けてまでくれた人を、危うく殺してしまう所だったのである。さよは小刻みに身体を震わせ、そのまま消えてしまいたいと思う程の後悔と自己嫌悪を感じていた。

そんなさよに対して、ようやく咳が治まった中村が身体を起こし、穏やかな口調で話し掛ける。

「へいさよちゃん、落ち着いたかね?」

「……あの……謝って許されることじゃ無いんですけど……」

「うんにゃ許すぜ?」

「……え?」

あつさりとしたその言葉に、さよは一瞬己を責めることも忘れて呆気にとられる。

「相手が野郎なら兆倍返しでやり返すのみだが、さよちゃんみたいな可愛い女の子なら例え九割九部殺しにされようが俺あ笑って許すね。だから気にすんな……つてのは無理だろうけど、俺に対してやっちゃまった事は一旦置いてくれよ、さよちゃん。もっ回聞かせ、落ち着い

て考えられるようになったかい？」

「え……あ、は、はい！」

中村節の炸裂に、さよは目を白黒させながらも、黒い感情がなりを潜めたのは確かだったので、慌てて頷く。

「ほうかいほうかい。ならさ、さっきの俺の申し出の、答えをくれねえかな？」

「……………あ……………」

さよは、先程の中村が言った、永い間待ち望んでいた、その一言を思い出し、今更ながら自分に対してその言葉が告げられた事実に対して驚きを得る。

「…で、でも…でも私、貴方に……………」

「さよちゃん」

さよは先程中村のことを殺し掛けた。そんな自分にその資格は無いと、そう纏まらない思考でそれでも考えるさよの言葉を遮り、中村は言葉を紡ぐ。

「俺みたいなのは友人としてお呼びじゃ無いかね？」

「そ、そんな!!? そんなことありません!!?」

思わずさよは叫ぶ様に、中村の問いを否定する。中村は我が意を得たりとばかりに頷き、何時もおちやらけている顔に意外な程優しい笑みを浮かべて、さよへと告げる。

「だったらいいじゃんか。喧嘩しようがいがみ合おうが、ごめんなさいつ、ついたら仲直り出来んのが友達って奴なんだからさ。さよちゃんがやらかしちまったと思うんなら、まず知り合ってから、納得いくまで謝るなりなんなり、すればいいじゃんよ」

だからさ、と中村は居住まいを正し、さよに対して右手を差し出しながら、改めてその言葉を告げた。

「俺の名前は中村 達也。相坂 さよちゃん、俺と友達になつて頂けないでしょうか？」

「あ……………あ……………!!?」

さよは遂にその瞳から涙を溢れさせ、顔をぐしやぐしやにしながらも、その透ける右手を中村の右手に重ね、無い筈の感触を、それでも

何故か暖かいと感じつつ。

数十年間待ち望んでいた言葉を、ありつただけの勇気を振り絞りはっきりと返した。

「私、私!!? 相坂 さよと、申します!!? 中村さん、私と、友達になつて下さい!!?」

中村はにっかりとその笑みを悪戯めいたものに変え、戯けたように肯定の言葉を返した。

「さよちゃんみたいな可愛子ちゃんならこつちからお願いしたい位だぜ。これからどうぞ、よろしくな!!?」

「……………まあ、なんて言うんだろうなあ、この気持ち……………」

辻は本当に言葉にならない感情を持って余し、泣き崩れるさよを抱き止めようとして通り抜けてしまったので、顔を真っ赤にする程力んでなんとか根性で触れようとしている中村の姿を見やる。周りのネギ達も、なんとも言えない表情で中村とさよを見つめていた。

中村がさよと正対し、首を絞められ出した辺りから、追つて来た一同は既にこの場に到着していたが、中村の呼び掛けに反応して正気に戻り、普通の女の子の様子に話すさよの様子を見て、出る幕で無いと感じて傍観者となっていた。

「……………私は……………」

「…あまり気にしないことだ、刹那。あんなものは偶々上手くいっただけで、下手をしなくてもあのまま死ぬ可能性の方が高かった。根拠も何も無しにあんなことが出来るのは勇気だの優しさだのという言葉で現してはいけない…只無謀なだけさ」

結果として非が無い、とは言えないが、到底斬り捨てる事が相応しいとは間違いなく言えないさよの様子に、自らの境遇を重ねて己が所業を責める刹那に、真名が慰める様な言葉を掛ける。最も、真名自身言葉こそ厳しいものだが、その顔には苦笑の他、微かにだが中村への賞賛が覗いていた。

「…なんていうかもう凄いとしか言えないわね、あの人は」

「はい……………やっぱり凄い人だと思います、中村さんは」



呆れ、感心する明日菜の言葉に、ネギがこちらは純粹な尊敬の念を込めて頷く。

「ネギ君、確かに凄いとしか言えない様なあれだけど、見習おうなんて考えないですよ？あの馬鹿の行動は人類が真似できるような代物じゃ無いんだから」

「同感だ。この場で彼女をああも丸く納められたのは奴だけだろうが、だからと言って到底勝算の見込める考えで無いのは龍宮後輩の言う通りなのだ。失敗した時に責任の取り様が無い勢いだけの行動など、先達者として取ってはならぬのだから」

「賞賛されるべきだが正しくは無い中村の行動に難を言う二人だが、何時もの様に馬鹿を馬鹿にする様な響きはその口調には含まれていない。」

「まあ、確かにあいつは滅茶苦茶な考え無しではあるけどよ」

「豪徳寺は苦笑しつつも、一人の少女をしかと救ってみせた偉大な馬鹿へ頭を下げ、その場を締めくくる。」

「今日の所はあの漢に、大人しく兜を脱ぐとしようや」

「……………わからなく、なりましたね……………なんなんでしょうか、あの人は……………」

「……………ふむ、矢張り大した益荒男と言う他無いでござるなあ……………」

「…で、なんだか桜咲は随分気落ちしてたよ」

「幽霊騒動から一夜明け、あくる日の朝。何時もの様に集まったバカレンジャーは、ネギ達が来る迄に篠村達へ事のあらましを説明していた。」

「まあ聞いた話だけでもあの娘色々あるらしいからな、その相坂ちゃんとかやらを自分に重ねちゃったんじゃないやねえの？」

「篠村は本日姿を現していない刹那の話を辻に振られてそう返す。」

「生真面目だからなあ、あいつ。近衛ちゃんが付いてるからおかしな

風に思い詰め過ぎないとは思いますが、最近様子がおかしかったのも合わせて心配だ……なんだ篠村、その顔？」

「…いや、お前はそれでいいわ。間も無くあっちの女子達から発破がかかると思うしな」

生暖かい表情を浮かべる篠村に辻が尋ねるが、篠村は笑って取り合わない。

「なんにしろあの男は、つくづく非常識な男ですね……」

「お、お姉様……少し位は評価を改めてもいいんじゃないかと私思うんですけど……いい話だと思いますし……」

頭痛を堪える様に頭を押さえながら中村の事を表す高音。お世辞にも高評価とは言えない高音の言い様に、身体を張って不幸な幽霊を救ったという美談に感銘を受けていた愛衣が中村のフォローを試みる。

「魔法関係者としてはいい話、で終わらせてはいけないのよ、愛衣。私も、あの男の心意気や曲がりなりにも事を落着かせたその手腕自体を評価しない訳では無いわ。……でも私達には、失敗が許されてはいけないのよ」

「…はい……」

「まあまあ、その件に関しては各々思う所はあるけれど、相坂ちゃんの場合はもう解決してるんだからさ。中村に免じて余り五月蠅い事は口に出さずにおこうよ」

諫める高音と落ち込む愛衣を、山下が取りなした。

「…それに、僕としても何だか、今更ながらに中村の行動力に教えられた気がしたからね。難しい状況なら、想いのままに突っ走って解決することもあるって、中村は証明してくれたよ」

「…なんだか解らんが、無茶はするなよ、山ちゃん」

何かを吹っ切った様に爽やかな笑みを浮かべる山下に、顰め面で豪徳寺が釘を刺す。

「よーう、遅れてすまねえなてめえら。ちっと探し物に時間喰ってよ。ネギ達ももう来てたか」

それから暫くして、ネギと3-A陣が集合した後、最後に中村が姿

を現した。喉元には今だくつきりと赤い跡が残り、両腕と背中にも包帯が巻かれたままだというのになんとも元気である。

「来ましたね中村 達也、貴方には集合時間に遅れた件も含めて言いたいことが腐る程あります」

「おーい篠村、お前の嫁がなんか五月蠅え、どうにかしろ」

「何てこといいやがるてめえ!!?」

「なっ…!!? 誰が貴方の嫁ですか、巫山戯ないで頂戴!!?」

「流れる様に理不尽な展開になったなオイ!!?」

「お、お姉様落ち着いて下さい!!?」

「うわー照れ隠しじゃ無くてガチギレしとるわあ高音さん…」

最早熟練の技で高音を篠村に押し付けた中村は、何故か小脇に携帯用の黒板とチョークを手挟んでいる。

「…中村先輩、その黒板は何ですか?」

早速疑問に思った夕映がそれは何のつもりかと尋ねる。

「おーうリーダー、こいつはなあ…んん? どうかしたかよリーダー、悩んでぞげじゃん?」

矢鱈と自慢気に答えかけた中村が、夕映を一目見て首を傾げ、様子がおかしいと指摘をする。

「…そういう所だけ鋭く無くていいんですよ、この男は…」

「あんだって?」

「なんでもありません。私の事はお気になさらず、私的な悩みです。それよりも、それは?」

「おうおうそうだったな。フフン、俺が口で説明するよりも見た方が早かろうて」

中村は勿体ぶって黒板を体前に持ってくる、何故か虚空を見やり、呼び掛ける。

「へーいさよちゃん、こいつらに挨拶してやってー」

「…」

思わぬ台詞に皆が固まる中、黒板に添えられたチョークがフワリと浮かび、カカカツ!と素早く文字が描かれる。

『はい、解りました中村さん! 皆さん、お早う御座います。昨日は本当

にぐ)迷惑をおかけしました』

「だとよ?」

チヨークが再び黒板の脇に仕舞われた後、中村が黒板をネギ達に翳した。

「成仏したんじゃないやなかったんですか相坂さん!?!?」

「こらネギヤ、てめえ自分の生徒があの世界に行くことを望むたあそれでも教師かゴラ?」

「そういう意味じゃ無えだろボケ!だって気がついたら消えてたじゃねえか相坂って娘!?!?」

「なんか力使って疲れたから再び見えなくなっただと。あの時は感情が爆発してたから皆にも見えてただけで、今はどう力んでも見える様にはならねって」

「…:…というか中村殿は見えているでござるか?」

「うんにゃ?ただ美少女センサーが反応すつから、近くに居ると何と無く居るって解るな」

「…:…なんともまあ」

「まあ中村、友達が欲しいっていうのが願いだっただよ、相坂ちゃんって。中村が友達になったから満足して成仏したんだと思っただよ、少なく共僕は」

「あのなあ山ちゃん。友達が欲しいとは確かにさよちゃんは思ってたが、じゃあ友達って何よ?一緒に遊んで駄弁ってたまに助けて助けられて、そんなもって何と無く一緒に居るもんだんじゃないやねえか?さよちゃんは俺と何一つ友達らしいことしてねえのに、成仏なんざする訳無えだろが、なあさよちゃん?」

『はい…:お恥ずかしながら…』

「なーにが恥ずかしいもんかよ。消えんのなんざ何時でも出来らあ、先ずは目一杯遊ぼうぜさよちゃん!!?」

「まず先に修業と登校だ馬鹿が!!?」

楽し気に虚空へ話し掛ける中村と生き生きと黒板に踊るチヨークを見て、辻はなんとはなしに脱力する。

「……うん、まあ凄い奴だよ、お前は」

『…中村さん』

「何よ？」

『…ありがとうございます』

「なくに、いいってことよ」

## 閑話 盛大な祭りに向けて

「…ってな訳でさ、俺らあこれから学祭でその怪しげローブなペットの世話しない駄目男をぶちのめさなきやいけねえのよ」

『…なんだか大変そうですね?』

教室に響き渡る中村の声とチョークの音。思いつきり授業中であり、英語担当の中年教師が怯えた目付きで中村と見えない隣人の方を見ているが、中村は塵程も気にせずさよとお喋りを続ける。

「なくにこの最強にして無敵且つ知的な完璧超人、中村様に掛かりやああんな女男二秒でペシヤンコよ!ド派手な祭りになっからさよちゃんも見に来な、俺様の勇姿をしかと見せつけてやっぜい!!?」

『はい!私中村さんを応援しますね、頑張つて下さい!!?』

「フハハハハ応ともこの俺様が本気を出しやあ有象無象の雑魚連中などペシヤ「ペシヤンコにはお前がなっている」アバア!!?」

『中村さん!?!?』

高笑いをしている中村の顔面に教卓が突き刺さり踏ん反り返っていた椅子ごと巻き込んで床に沈む中村。宙に浮く黒板がさよの驚愕を表すかの様に上下に揺れていた。

中村はガバツ!と教卓を撥ね退け、オロオロしている中年教師の隣に何時の間にか佇んでいた杜崎を睨み付ける。

「何すんじゃゴリ崎いーっ?!?美少女と楽し気に会話をするこの俺様に嫉妬したかてめえオラア!!?」

「授業中に心霊現象起こしながら堂々と喋くるなカスが!!?俺が担当していない授業だからといって調子に乗りくさると顔面を四つにするぞ覚えておけ。北見先生、授業を続けて下さい」

「は、はい……………」

中村に冷たく言葉を吐き捨てた杜崎は北見を促すと二つ隣の教室へと戻っていった。

「…つたくあのゴリラはちつと人語が理解出来る程度で調子こいてんじや無えぞ全くよおおおらあ!」

「ぬあつ!!?」

放課後、組手で昼間の杜崎に対しての怒りを吐き出しつつ繰り出される怒濤の連撃を相手の小太郎が必死に捌いていた。

「自業自得だろうが阿呆。大体相坂って娘にまで校則破って授業中に喋らせんなよ」

「五月蠅せー授業なんざウン十年聞いてて絶対飽き飽きしてんだろがさよちゃんは!!? 授業そっちのけでお友達とお喋りなんざいかにも青春って感じだろがあ!!?」

豪徳寺に叫び返し様、中村は小太郎の首目掛け鉈の様な中段回し蹴りを繰り出す。小太郎はそれを何とか沈んで回避し、一旦落とした腰を跳ね上げ中村の蹴り足側から飛び掛かる。その目には小さくない憤りが宿っていた。

「おい兄ちゃん!!? ベラベラ喋りくさる片手間で相手しようなんざ、あんま俺を舐めんなやあつ!!?」

鉤爪の生えた鋭い手刀が、中村の脇腹を抉り取らんと伸び上がる。が、中村はあつさりその一撃を下段受けて払い落とし、蹴り足を下ろすと同時に踏み込み、槍の様な正拳突きを小太郎の顔面に打ち出した。

「舐めて無えよ。今のお前相手なら喋んながらでも余裕なんだよ」

高速で迫り来る鉄拳を前に小太郎は牙を噛み締め、

「…そういうんが舐めとるっちゅうんやろがああ!!?」

払い落とされた腕を勢いに逆らわずそのまま地面に着け、片腕を軸に身体を回転。変形の浴びせ蹴りで中村の拳を外側へと蹴り付け、一撃を逸らす。

「おっ..」

やや意外そうに声を上げる中村を余所に、小太郎は回転終わりに蹴りで使用した足でそのまま地面を蹴立て、懐の開いた中村へ全力の抜き手を放った。

「うん、動きは目つ茶苦茶だがイイもん持ってただよお前は。唯..」

紛れもない本気の小太郎を前に、しかし中村は動じない。するりと伸びた左手がスナップを効かせて小太郎の突きを上から下へ払い落

とし、同時に素早く戻った逆の手が手刀を作り、小太郎の脳天目掛け稲妻の如く落とされた。

「ぐっ!!?…?がぁ!!?」

「俺に勝つにやあ足んねえよ、先ずそれを理解れや」

頭上に腕を掲げガードを試みた小太郎は、鉄槌で殴られたかの如く地面に叩き落とされる。斬れ味の鈍い斧か何かで強引に叩き斬られたかの様な、手刀を受けた箇所から噴き上がる激痛みに脂汗を滲ませながらも、小太郎は歯を食いしばって跳ね起きようとする。

しかし、その一瞬前に打ち込まれた中村の足刀が小太郎の首筋を掠めて地面に突き刺さり、小太郎は一度身体を震わせてから、全身の力を抜く。

「勝負ありだ小太郎」

「……おう……」

「……糞が…………!!」

「……小太郎君、大丈夫?」

「あ?どってこと無いわ!お前も他人の心配しとらんでさっさと修業戻れや」

小太郎は無念そうに呻きながらようやく感覚の戻ってきた片手の指を開閉し、動作に支障が無いかを確かめる。その様子を心配そうに見ていたネギが声を掛けるが、小太郎は苛立ちからか何時に無く対応が荒い。

「オラ小太郎、ネギに当たんじやねえよネギは今休憩中だっつーの。イラついてねえで今の組手、何が悪かったのか反省点を言ってみやがれ」

中村はやれやれと肩を竦める動作と共に小太郎へ釘を刺し、先程の組手の如何を問う。小太郎はなんとも軽い中村の言動にイラツとしながらも、不承不承口を開く。

「兄ちゃんが喋くつとんのにムカついて、カッとなって突っ込み過ぎたのがアカン言いたいんやろが。解つとるわ」

その返答を聞いて、しかし中村はヒラヒラと手首を横に振り、違う



違うと小太郎にジェスチャーを返す。

「そうだ、と言いてえとこだが違えんだなこれが。もつと根本的な話だ」

「ああ?」

訳が解らん、と顔に表して小太郎は中村を睨み付ける。

「なんや言うとする事が意味わかれへんわ中村の兄ちゃん。兄ちゃんは馬鹿なんやから無理して助言めいた事言おうとせんでええで?」

「足刀は外さねえで首にくれてやりやあよかつたよ糞ガキやあ!!?」  
「……まあ聞けや、洒落や冗句じゃ無んだよ。確かにお前のキレ易い短気さは良く無え点かもしれねえ」短気云々は中村が言えた台詞じゃ無いけどねえ……黙ってるロリコンが!!?」

茶々を入れる山下に心を抉る一喝を返してから、中村は穏やかで無い目付きの小太郎を悠然と見返し、あっさりとその言葉を吐いた。

「そもそもお前は根本的に全部が足りて無えんだよ」

「……なんやと?」

小太郎の眼に怒気と若干の殺気が絡むが、中村は構わず言葉を続ける。

「事実を言っただけだ、キレんな。……言つとくがお前を弱えと言ってる訳じゃ無えぞ、勘違いすんな?お前は年齢としの割に実戦慣れしてっし気の練りも上出来だし、我流にせよ普段の俺らと組手出来てる時点で体術の方も花丸やりてえ位なんだよ、いっそな」

でもよ、と中村は小太郎を見下ろし、

「お前は現時点で俺らに叶う要素はほぼ無いと言っつていいわな?」  
と宣告した。

「っ!!?……」

小太郎は反射的に何事かを言いかけ、唇を噛み締めて言葉を呑み込んだ。中村はその様子を見てうんうんと頷き、続く言葉を告げる。

「まあぶっちゃけそれは当たり前前の話でよ、お前は単純にまだ成長期の真っ只中で身体が出来て無えし、気にしたって体術にしたって俺らの方が永く鍛錬積んでんだからお前が敵わ無えのは当たり前なんだよ。余程の天才様でも無けりやあ普通に年季積んだ奴の方が強えわ

なあ」

「…何が言いたいんや、兄ちゃん」

小太郎の唸る様な反拍に、中村は一つ頷いて本題に入る。

「でもよ、お前が俺らに叶わ無えのは至極当然の理屈にしても、お前はじゃあしようがないなんつって努力を止める様な奴じゃ無えよなあ？」

「当たり前や」

小太郎は即答する。

「確かに現状、兄ちゃんらには色々及んどらんのは確かやろ。でも俺は強い奴の序列が年功序列で決まっとるなんて阿呆な話は聞かんわ。俺は今よりもっとガキの頃からいい大人張っ倒してきとんねん、兄ちゃん達が相手でも隙あらば容赦無くぶっ倒そう思うて俺は挑んどる。そうでなくて強くなんぞ成れるかい」

中村は小太郎の言葉を聞いてうんうん、と同意する様に頷く。

「そうだな、男つてのはそうでなくちやいけねえよ。鍛錬なんだから勝てなくてもいいやー、なんて負け犬根性でいたんじゃあ上達なんざする訳無えよ。…でもな小太郎」

「なんや？」

「そう思ってんならお前はもう少し必死でやれや」

「…なんやて？」

中村の言葉に、小太郎が心外だと抗議する。

「冗談や無いわ！俺が手え抜いてる様に見える言うんかい!?」

「そうじゃ無え」

中村はいきり立つ小太郎を宥める様に手を翳し、言葉が続ける。

「お前が全力なのは相手した俺らもよく解ってんよ。ただ、そのまま我流殺法を続けてても先は嶮しいって言いてえんだ俺は。お前は豪徳寺程不細工な闘い方はしてねえが「漢の真っ向勝負にケチをつけんな変態野郎!!」…五月蠅えよフランケン擬きは黙ってる!!?…まあ兎に角お前はまだまだ動きが甘え。組手でまともに打ち合えないから強引に前に出て返り討ちになるパターンが殆どだろ、お前」

「……………」

指摘されて小太郎は、口をへの字に結びながらも反論をしない。思い当たる節は多々あるようだ。

「どうしたって地力に差があり過ぎる以上、一か八かの一発逆転で強引に流れを変えるしかお前に勝ちの目は無え。それじゃお前は強くは成れねえよ。いざという時身を投げ出せるのは勝負強い奴の特徴だが、それだけで勝てる筈も無いしな」

「……ならどうせい、っちゅうねん……」

小太郎が、ふと不貞腐れた様に剥れた面をしながら視線を中村から外す。お前のやり方は駄目だとはつきり宣言されて闇雲に反発する程、小太郎というは幼くなかったが、直ぐにどうしようと割り切れる程大人になつてもいなかった。

「簡単だ、もつと学べるもんをキチンと学ぼうとしてみる、お前は」

中村はあつけらかんと告げる。

「既にある程度出来上がってるお前に俺らの技術を一から教え込むつもりは無え。どうしたって半端になるし、お前はネギみたいに気味悪い程飲み込み良くも無さ気だからなあ。それでもお前は、組手の中でもつとくがあれば、つて所が幾つもあるんだろが？…強くなる気があんなら俺らから使えそうなモノを盗んで、学べよ小太郎。訊きやあ教えてやるし、悪いと思つたところは叩き直してやるよ。俺達はそうして、強くなつてきたんだぜ」

なあ？と中村が後ろを促せば、辻達は明々に手を止め、仄かに苦笑を滲ませながらも頷きを返す。

「先ずタツパも気も足りねえお前が手つ取り早く強くなるには技術わざを磨くしか無え。どうしてもやだつてんなら無理強いはいしねえけど、どうするよ小太郎？」

問いかけられた小太郎は、暫し苦虫を噛み潰した様な顔で唸っていたが、やがて勢い良く立ち上がると中村を見上げ、指を突き付けて宣言する。

「…上等や!!？師匠気取りで接してきたんを後悔する位にあつという間に強なつて、逆にプライド叩き折つたるから覚悟しいや!!？んな訳で宜しくお願いされたるわあ!!？」

「仮にも教えを乞う身でなんじゃあその態度はあ!!?」  
「のわあつ!!?」

中村がすかさず蹴り上げた足を危うく躲した小太郎はそのままギャアギャアと喚き合いながら喧嘩だか組手だか判別が付かない様な取っ組み合いを始めた。その様子を、傍で見聞きしていたネギがアタフタと止めに入ろうとして、二人からツープラトンを喰らう迄がワンセットと言った所だろうか。

「…ネギ坊主とコタロは、足して二で割れば丁度いいアルね」

「珍しく意見が合ったな、古?」

対練で大豪院と向き合っていた古が騒がしい彼方を見てポツリと呟き、嘆息交じりに大豪院が同意した。

「じゃあなおめえら。おい豪徳寺、小太郎の世話が面倒いからつてためえの未来嫁に放り投げんなよ、幾ら妙齡美人に見えようと実質十五の美少女だぜ……糞憎らしい死ねや時代錯誤番長ぐらあーっ!!  
?!!?」

「色々言いてえ事はあるが纏めるとためえが死ねやクズが!!?」

「はいはい豪徳寺、馬鹿相手に熱くならないの時間が無駄だから」

「……やれやれ……」

「お前の方が余程やれやれだ、辻。色々言いたいことはあるが、思い詰めずに楽しめ」

修業を終えて暗くなった夜道を各々帰ろうという間際、中村達にズタバロに叩きのめされてグツタリしている小太郎を背負った豪徳寺に中村が奇声を発し、目を剥いて怒鳴り返す豪徳寺を山下が若干面倒臭そうに宥める。

「なんかあの人達の周りは無茶するガキが溢れるわね……」

「類友言うんやでー明日菜」

「お、お嬢様…流石にそれは……」

「否定は出来ないの言い得て妙、でござるかな?」

「いやいい事じゃ無いつて絶対それ」

「…なんにしろ修業も結構ですが、これから皆さん学祭準備も並行し

てやらねばならないのですから、余り無理をし過ぎない方がいいかと思うのですが…」

「ゆ、ゆえも他人の事言えないよ、相当無茶してるの、私知ってるんだからね〜?」

明日菜の苦笑交じりな感想に木乃香がほにやりと笑みながら何気に辛辣な事を言い、色んな意味で最近遠慮の無い親友の言動に刹那が慌てる。

楓の眩きにツツコミつつ夕映にのどかが釘を刺すという、いささか珍しい場面を見る朝倉は、ごく僅かな間に随分と様変わりした日時の風景にふと呆れと感心を含む笑みが口元に浮かぶのを感じていた。

…何処かのバトル系アニメかラノベで主役張れそうな人外格闘家から始まって魔法使いやら怪物やら竜やら悪魔やら。最近は幽霊まで出揃って、賑やかになったもんよねえホント…

態々振り返る迄も無く世界は不思議に溢れていたと朝倉は嬉しい様な恐ろしい様な複雑な気分で並ぶ級友達を見渡す。魔法使い見習いにカンフー少女にトンデモ退魔剣士に忍者にとアクの強い面々を見ていると、不思議と麻帆良ここなら不思議じゃ無いか、などと思えてくるのが報道部にて色々知り抜いていた朝倉をして複雑な気分だが、退屈では無いが変わりない、平凡な日常を厭う記者霊を持つと自認する朝倉にとつては現在の環境は悪いものでも無かった。

「…ま、今度の学祭は色んな意味で見逃せないものになりそうだしねん、常に情報に飢えた大衆の味方たるジャーナリストを目指す身としては、面白おかしくやって行きますか!」

「…いや頼むからお前は俺に限らず引つ掻き回すのを止めろよパパラッチ。絶対に碌でもないことになる確信があつから…」

自己完結して満足気に頷く朝倉へ、ゲンナリした顔で黒板を持ち近づいてきた篠村が力無く釘を刺す。

「あれえ篠村先輩、ご自分の女達を構わなくていい訳?釣った魚だからって餌を上げないでいると離れて行っちゃうよホントに」

「その目減りしない黒ずんだ性根が透けて見える口を縫い付けてやりたい所だがとりあえずコレを受け取れ」

半眼になりながらも篠村は黒板を差し出し、付属したチョークがカタカタと揺れる。言う迄も無く相坂 さよとのコミュニケーション用携帯黒板であった。

「…うん？なんで私にこれを？」

「中村の阿呆が今晚どつか行くらしいからとりあえず一番こういうのに物怖じし無さそうな常識と遠慮の欠落した、もし億が一何かあつても欠片程も良心の痛まないお前に預けとけとのご命令だよ」

「うっわあ中々言うねえあの脳無し先輩も」

僅かに乾いた笑いを浮かべる朝倉に、一人でに浮き上がったチョークが黒板に描いた女性らしい丸文字が、見えない筈の気弱そうな少女の顔を浮かばせつつ問いを放つ。

『えっと、あの…やっぱり御迷惑だったでしょうか、朝倉さん』

「ん？イヤイヤ、迷惑って事は全然無いんから其処ら辺の遠慮は無用だよさよちゃん？幽霊生活ってどんな感じなのか取材してみたから私もあつたから」

「ブレねえなあお前は。相坂？って娘には悪いけど、俺は正直害意が無いと解つてもちよつと怖いぞ」

遠慮がち？なさよに物怖じせず言葉を返す朝倉をうそ寒気に見やり、篠村が呟く。

「其処ら辺の感性真面なまんまだとあの人達バカレンジャーについてくのは苦勞するよ篠村先輩。なにせちよつとでも目を離してるとあり得ない様な驚愕の事態を引き起こしてくれる、麻帆良人の筆頭だからね」

「麻帆良の変人共をラ○ユタ人びとみたいなニュアンスで言うなや…」

ケラケラと笑う朝倉を見て更に脱力する篠村を余所に、さよが微妙に弾んだ様子（チョークが活発にポルターガイスト筆談をしている）で朝倉に尋ねる。

『中村さん達はどんな事を普段しているんですか、朝倉さん？』

「あ、聞きたいさよちゃん？んっふっふっふ、最近の事柄だけでも色んな意味で現在いまは記事に出来ない様な面白おかしいネタが沢山あるからさあ、私としてはもう誰かにこれらをバラ撒き…ゴホン、まあ記者としての義務を果たしたくて仕方がなかったんだよね」

『そ、そうなんですか……？』

「お前はもう金輪際自分のことを記者等と名乗るな。お前はやっぱり麻帆良のパパラッチだ阿婆擦れめが」

ウキウキした様子の朝倉に、困惑したように文字を書くさよと、怨嗟の呻き声を洩らしながら悪態を吐く篠村であった。

そんな二人の様子に全く頓着すること無く、朝倉は手帳を開き、ここ最近のバカレンジャー及びネギ達の出来事を嬉々として語り始めた。

「ん〜そうだね〜、先ずはさよちゃんが気になる中村先輩の近況から語っちゃおうかな？」

その場所は悲哀と怨嗟に満ちていた。絶対に起こってはならないことが、この場所で今、正に起こり得ていたのだから、それも当然の話であった。

その光景は、某軍事国家で核ミサイルの発射スイッチを管理しているお偉いさんが一斉に精神異常をきたしたとか、自分の住む地でマグニチュード9クラスの極大地震がほんの半時間後に発生するとう二ユースを耳にしたとか、その位の衝撃だったのである。何か、人知を超えた凄まじい災厄が自らに襲い掛かることが確定した様な、身体から否応無しに力を奪っていく、そんな圧倒的な絶望を感じさせる様な。

そう。

中村 達也が如何にも難解そうな分厚い外国語のタイトルが描かれた、どう考えてもその道の専門家スペシャリストで無ければ到底読み解く事は不可能だと見て理解する書物を、頭から煙でも上げそうな程に悪戦苦闘しつつも懸命に理解しようと努めるその光景は、それ程にクラス全体、いや全人類にとって衝撃的だったのだ。

「もう終わりだ!!?きつと今に槍所か、灼けた鉄とか自動車位ありそうな電が全世界に降り注ぐぞおおお!!?」

「嫌だ、こんな若い身空で死にたくねえ!!?高一の頃から憧れてた

先輩と学祭デート出来るチャンスを、折角、折角掴んだつてのにいい!?？」

「…そうか、お前もそう思うか砂サンドマンの小人よ。…こんな事ならばかの月面の如き美しいアタカマ砂漠へ、無理をしても赴くべきであったな……」

「嫌あああつ!!?まだ、まだ生きていたいよおおおつ!!?お母さあああああああん!!?!!?」

阿鼻叫喚という形容が相応しいクラス内にて、事情を知るバカレンジャー他四人と担任の杜崎だけが騒ぎ立ててはいなかったが、だからといって周りの狂乱を馬鹿にする気も諫めるつもりも無かった。納得出来る訳を理解していて尚、思わず叫び出したくなる猛烈な違和感が彼らを苛んでいたからである。

「…騒がしいな、如何にかならんのかこの乱痴気騒ぎは?」

「無茶言うなよ大豪院、泣き叫ぶなって諭せる方がイかれてるぜ、中村の勉強風景なんざ!」

「だなあ。正直あの生理的な違和感の塊をさつきから両断したくて堪らない」

「早まらないでよ辻、僕だって我慢してるんだから。あんなのでも死んで悲しむ人は信じられないけどいるんだよ?」

「…俺も教職に就く身でありながら嫌悪感を覚えている以上、貴様らに説教する資格など無いのだろうが、せめて暖かく見守る位のことはしてやれよ、仮にも友人だろうが」

体長二mの蜚ヒを見るかの様に顔を歪める辻達に溜息と共にそう告げてから、杜崎は心底気の進まない様子でクラス中央にポツカリと開けた中村の着く席へと歩み寄る。

「…霊……魂?は、世界に存在する魔法……いやこれ魔素か?あー糞わっかんねえ……まあいいや魔力的なニュアンスの代物とは似て非なるモンである……と。それ故にこの系統は特殊な……な……ウガアアアアアブファアルツ!!?」

「五月蠅いわ、阿呆」

ブツブツと呟きながら熱心にメモを取る中村だが、そもそも文字の



解説からして満足に出来ていないらしく、和羅辞典を睨みながらとうとう癩癩を起こしかけた所で杜崎の鉄鎚により頭蓋骨が陥没しかねない勢いで机に沈む。直後にガバリと勢い良く跳ね起き、中村は猛然と杜崎に噛み付いた。

「てめえ何すんじやゴリポンがああああ!!? 俺様は勉強してたんだぞンでぶん殴んだよオラア!!?」

「確かに貴様が机に向かっていているというだけで奇蹟や靈験を通り越して世界平和が成された様な感動だ、大袈裟で無く俺は泣きそうだよ。本来ならば暖かい支援を約束してやりたい所だが、中村」

「ンダヨ?」

「それはどう見ても今俺が説いている授業内容に属したものではありませんか?」

最も過ぎる言い分と共に半眼で見下ろす杜崎に対して中村は何故か胸を張り、私何も疚しい事はございませんとばかりに堂々と言いつつ放った。

「おいおいゴリエツティモリモリ、んな詰まらねえ事でこの俺様の勉強を邪魔するたあ、いよいよ筋肉率99.99999%のお固いお脳に焼きが回ったかよ? あんたのゴリラ語による解説不明な類人猿の原始的社会の掟講座なんつう今後人生においてなんの役にも立たねえ事が確定している無駄授業を受けるよりも、今の限りなく完璧に近い俺様にとって唯一足りねえ必須知識を学ぶ方が何兆倍も為になんだろう? その筋肉ばかり足り過ぎて肝心な脳細胞の足りねえ頭で理解出来たら黙って中村様の優雅な learning time を邪魔せずと粛々と失せやがれ」

「そうかそうか」

果てしなくウザいドヤ顔と共に傲然と言い放つ中村に対して杜崎は不気味な程柔かな顔で二、三度頷き、

「最後まで戯言を聞いてやっただけ感謝しろこのユニバーサルクラスの糞虫が!!?!!?」

「げぼあああああつ!!?!!?」

光り輝く全力の右ストレートを中村の鳩尾へ打ち込み、その身体を

教室の壁数枚を纏めてぶち抜き、校舎の外にある学生食堂の外壁に磔にする程の一撃を持って、制裁を中村へと齎した。

「アノサイシユウヘイキゴリラハイツカカナラズコロシテクレル」

「話を聞く限りでは自業自得かと。そもそも先輩が今、死にそうですが…」

フラフラと腹を押さえながら歩き、ゼンマイの切れたからくり仕掛けの様に角ばった調子で怨念を込めて呟く中村に、傍らを歩く夕映が呆れた顔で律儀にツッコんだ。

時間帯は既に放課後、学祭まで一週間を切ったこの時期には、通路を引つ切り無しに人と人の姿をしたナニカと異形が縦横無尽に通り過ぎる。混沌としつつも賑やかな、何時もより少しだけズレでは不味い方向へズレた麻帆良の日常だ。

「プロレス研をいよろしくうっ!!? 単分子ワイヤーリンググローブ、大銃火器及び刀剣類一揃い、リングの外には人喰い鮫を張り巡らした壮絶デスマッチ、学祭初日十時から十五時に掛けて、二回に分かれ行うぜえ!!? 事前配布のチラシを持ってきてくれたお客さんにはリングに好きなタイミングで投げ込める手榴弾をプレゼントだ!!?」

「其処の君…そう、艶やかな黒髪のロングヘアがとてもチャーミングな君の事だよ…よければ私の所属するフェンシング部の学祭企画に足を運んでくれないかな…? 君のような可憐な花が、その美しく有ることに限られた貴重な時間を僕の為に裂いてくれると言うならば、この穢れた世界にて優雅に、秀麗に…そして艶美に咲き誇る、私という一輪の華をお見せしよう…美しい存在<sup>も</sup>を、目の当たりにしたくは無いかい…?」

「はい位相幾何学研究部の今年の企画はなんとあのワームホールの生成実験だ。かの博士の打ち出した負のエネルギーが存在し得なければ実現不可能、との断言を見事覆す我が部活近年の集大成となる世紀の大実験、歴史が変わる瞬間の目撃者に、貴方はなりたくないかい?」

「ハイハイハイハイ!!? 剣道部の今年の企画はなんと恋のキューピツ

ドだ!!?とつてもいじらしくてじれつたい、我らが部長とエースの純恋花!咲かせてみせます今年こそ!!?…え?部活と欠片も関係ない?馬鹿が、俺らは半分以上これが面白くて剣道部に居るんだよ素人が!!?剣道とかぶっちゃけ興味無くても是非是非御参加あれ!猛烈な気恥ずかしさに転げ回りたくなくてその後自分を振り返ってちよつと死にたくなくて、最後になんとも言えない生暖かーい気分になりますから、癖になるよこの感覚!!?女子校ブロックの方でも俺の嫁がチラシ配ってるからお知り合いの女子に宣伝よろしくー!!?」

などと、各部活やサークルの熱心な呼び込みもあつて、既にあたりは祭の様な熱気に満ち満ちている。

「何時聞いてもバリエーションに富んでて聞いてただけでも愉快だよなあ麻帆良の引き込みは。さしもの俺様も感心の一言だけ」

「もう復活したのですか…まあ、そうですね。中には放っておくと世界規模の大災害が発生しそうな内容のものもありますが…」

「なーに本気でヤバけりやどつかの誰かが止めんべ。どんだけ規模のデカそうな騒ぎだろうと学園より外に被害が広がった事は無んだからよ。きつとそういう風に来てんだ、麻帆良は」

「そんな大雑把な括り方には到底納得が行きませんがそれはまあ、さておき…あの方は辻先輩の…」

「一ちゃんはじめとせつたんには絶対バラすなよ?余りにも煮え切らねーから大規模にハッパ掛ける事になったんだわ、うん」

あつさりとそんなことを言う中村に、隣を歩く夕映は僅かに非難する様な目付きになり、苦言を呈する。

「今が大事な時期なのではないですか、あの二人は。下手に囃し立てて拗れたらどうするのですか?」

中村はまあまあ、と夕映を宥める様に手を翳し、あつけらかんと言葉  
葉を放つ。

「大丈夫だってリーダー、拗れたらーなんてあの二人もう大分拗れまくってっから。両想いなのは見てりや解んだから、今奴等がやらなきゃいけねえのは多少強引でも無理矢理でもいいからステツプアツプすることなんだよ。恋人になる為に必要なのは、好きです、私もは

「いこれだけ!!?あと一歩ずつ踏み込めば勝手に上手く行くよ絶対―」  
「そんな無責任な……」

呆れた様に夕映は呟くが中村は確信があるらしい。再び大丈夫だからと念を押して先へと進む。

なんととはなしに三步程離れた位置から後ろを続く夕映は、別に中村と学園内の様子見に練り歩いている訳では無い。学祭準備の休憩中にたまたま遭遇し、なんとなく中村と話し歩いていただけである。

夕映はつい先程聞いた中村の用事を思い起こし、何とも形容し難いモシヤモシヤした気持ちが胸の内首を擡げる。

「…中村先輩」

「はいな」

ひよこひよここと踊る様に歩く背中へと、夕映は言葉を投げ掛けた。

「…相坂さんの為に、其処まで先輩が頑張る必要があるのですか?」

中村はそれを聞いて一瞬動きを止めるが、夕映を振り返りはしないまま歩みを再開する。今度は軸をブレさせず静かに足を進めつつ、中村は穏やかな声音で夕映に尋ね返した。

「どうしたい、リーダー、さよちゃんについて思う所でもあんのか?いい娘だぜあの幽霊美少女は」

「理解っています…などと断言出来る程に私は相坂さんと交流してはいませんが、その通りなのでしょう。私から相坂さんに何かある、という訳ではありません」

「じゃあ何ですよ?」

「言葉通りですよ。中村先輩が一人で其処までする必要性があるのか、疑問なのです」

歩みを止めず、背中越しに尋ねる中村に、夕映はそう言った。

中村にさよが取り憑いて?から暫くして、中村はネギにある相談を持ち掛けていた。

曰く、さよを視認出来る様にしたたり、声を聞こえる様にする類の魔

法は無いか、というものであった。

さよは気配が物凄く薄い幽霊であり、そちらの方面で感覚の鋭い人間でも認識する事の叶わない存在である。その為、謎の超感覚を備える中村以外に依然としてさよは気付いて貰えず、中村の携帯する小型黒板を用いなければコミュニケーションを取ることが出来ない。

中村は、その現状を何とかして改善したいと主張しているのだ。

「俺一人居るか居ないかだけでもそりや大違いだけだよ。さよちゃんも年頃の女の子なんだからガールズトークの一つもしたくて当然だろ？誰かに見て貰うだの会話して貰えるだの、ンなもん生きてる…いやさよちゃん死んでつか、存在してる上で当たり前に有つていい権利だろ？なんとかしてやれねえか、このままじゃあ不憫じゃねえかよ」

そんな中村に対してネギは暫く悩んだ上で、死霊魔法系統の魔法ならば、魔力によつて霊体を活性化させる類の術があるだろうと答えを返した。

死霊魔法とは日本で言うイタコの口寄せ等が属する、魔力をもつて靈魂に働きかける類の魔法を指す。

一般的に死体に雑霊を取り憑かせ、動屍肉リビングデッドや動白骨スケルトンを使役する、如何にも悪逆非道なひとでなしが使う術として印象深い為に、魔法系統の中では兎に角イメージの悪い魔法系統だが、意外にも禁術として学ぶ事を禁止されてはいない。

理由として、死霊魔法ネクロマンシーは使用する術士こそ少数であるものの、日本における神鳴流の様に退魔士の様な役割をもつて魔法社会に必要とされているからである。

レイスやスペクター等の悪霊を討伐するのに有効な術を保有していたり、無念を残して死んだ者が悪霊化しない様浄化したり、霊と交信して生前その霊と関わりの深い者へ、届かずに潰えた言葉を代弁したりと、所謂一般社会における霊能力者の様な存在として大半の死霊術士ネクロマンサーは何恥じる事無く生活しているのだ。

故に付き纏うイメージによりしばしば蔑視の眼を向けられる、といった危惧こそ存在するものの、さよに対して死霊魔法ネクロマンシーを働きかける事はなんら問題は無い。

しかし、先程述べられた様に、ネクロマンシー死霊魔法とは大分マイナーな系統の魔法であり、言うまでも無くその術士は絶対数が少ない。どれほど少ないかと言うと、日本最大の魔法組織である関東魔法協会においても、正式に所属している術士は一人も居ないという有様であった。

それでもネギは、自分の生徒の問題なのだから合間を縫ってネクロマンシー死霊魔法を習得すると申し出たのだが、中村はそれに首を振り、答えたのだ。

「只でさえ教師に修業にと忙しいお前にこれ以上負担は掛けられねえ。言い出しつぺの俺がなんとかするから任しとけ」

「中村先輩は私達以上に魔法に対して素人な状態だったのでしよう？ それなのに一から魔法を発動する段階からさよさんにネクロマンシー死霊魔法を使用出来る様になる迄どれほどの時間が掛かると思っているのですか。確かに相坂さんの境遇は放っておいていいものではありません、…しかし魔法教師の方からツテを頼るなりなんなりして任せてしまった方が、様々な意味で現実的です。女性に優しいのは先輩の美点だと思いますが、自分だけで何とかしようとムキになってはいませんか？…ネギ先生に他人を頼れと言ったのは、貴方達ではないですか、中村先輩。一度よく考えてみて下さい。貴方がそこまで、やる義務は無いでしよう？」

夕映は言い終わると一息を吐く。普段口数の少ない夕映からすれば、近年稀に見る程の長講となった。いささか結論を急いで一気に捲し立て過ぎたかと反省しながらも、中村に吐いた言葉は紛れもなく夕映の本心である。口ではなんだかんだと悪し様に罵りつつも、どうしようも無く馬鹿で助平で短絡ではあるが、底抜けに女の子に対して優しい

中村達也  
この男を夕映は嫌いでは無いのであった。

中村は夕映の言葉に口を挟まず、ゆっくりとしま歩調のまま最後まで聞いていた。夕映が意見を終えて暫らくした後、変わらず穏やかな声で夕映に語り始める。

「まずありがとよ夕映っち。よもやさよちゃんが嫌いと言ってんじや

無えとは思ってたが、心配してくれたんだなあ」

その何時もの様な巫山戯た調子で無い、真面な感謝の言葉に夕映は少々では無く戸惑うが、はぐらかさずに本心を告げる。

「中村先輩には危ない所を助けて頂きましたし、些か気恥ずかしい物言いですが、私達は同志や仲間の様なものでしょう?…頑張り過ぎた位で倒れる程先輩がひ弱だとは断じて思いませんが、気にかける位はしますよ、私の様な人間でも」

謙遜すんな、と中村は笑って、言葉を紡ぐ。

「気持ちとはとってもありがてえんだけどよ、夕映っち。別に俺がやってる事はさよちゃんがそうして欲しいって言い出した訳じゃ無え、俺が勝手に一人でやってんことだ。だったら頑張ってるネギやらシノシノやらに丸投げしてこれ以上負担掛けらんねえし、魔法使い共は個人的にさよちゃん任せられる程信用出来ん。俺が独断で氣い回して出した提案なら俺がやるのが筋ってもんだべ?」

それになあ、と中村はここでようやく夕映の方を振り返り、悪戯っぽい笑みを浮かべて、

「俺あ苦戦はしてるが無理してるつもりはこれっぽっちも無んだぜ? 何故ならばさよちゃんは美少女だったし、声なんかも綺麗で可愛かったからな。俺は他の誰の為でも無く俺の為に、もう一度きやわいい女の子の姿を見て、鈴を転がす様な声とお喋りしたいからやってんだ。そりゃあ義務も義理も初めっから無えさ」

まるで勝ち誇るかの様に拳を掲げ、こう言った。

「俺がやりてえからやってるだけだ」

我知らず、可々と笑う男の姿に。

胸の奥、遠い所が高鳴った。

「…それに魔法の基礎を習得出来りやあいよいよ俺の野望、魔法を使ってバレない覗き大百景計画も始動するからなあグバババババババアア!??夕映っち、なんでいきなり鈍器みてえな本を顔面投擲してくんだよ!?!?」

「五月蠅いですこのド変態!!?キメるんでしたら最後まで格好良くキ

メられないのですか、私が、私としたことが不覚にもおおおおお!!  
?!!?」

「ギャー待て其処がどれだけ痛えか女子のお前さんにはホデユア  
アアアアアア〜ツ!!?!?!?!」

「:そんな訳で中村先輩、何だか魔法使いにまでなろうとしてんのよ」  
『わあああ……!中村さんって凄い努力家なんですね!!?』

流石に当の本人よに中村のお節介は明かせない為(さよ)の性格上、中村がなんとさ言おうと絶対に気に病む)、中村が日々の修業の上に魔法まで並行して学ぼうとしている、という方針で所々をぼかして説明した朝倉である。根が素直なさよは疑うこと無くそれを信じ、中村の株価を超絶空景気に上げまくっていた。

「:まあそんな感じであの人頑張ってるみたいなんだよねえ」

「なんとさ言おうか、馬鹿だな彼奴は。普段遠慮の欠片も無え癖に変な所で気を使いやがる」

舞い上がっているのであろうさよを余所にコツソリと囁く朝倉に、苦笑を浮かべて小さく首を左右に振る篠村。

「まあ女が絡むとあの人軽く人智を超えるからねえ。最後に聞いた話だと、なんかもう初級魔法の発動には成功して現在死ネクロマンシー霊魔法の基礎を訓練中なんだってさ」

「マジかおい……この短期間でよくもそこまで……待て、おかしいだろそれは」

呆れ混じりに感嘆しかけて篠村はそのあり得ない話に待ったをかける。

「幾ら何でもそれは無いぜ、あいつがその相坂さんと出会ってまだ一週間やそこらだろ?ましてや仲良くなつたその日から魔法の訓練を始めた訳でも無い以上、あいつは魔法を習い始めてまだ数日の筈だ。普通に習っていても下手をすれば魔法現象の発現まで半年以上かかるんだぞ?あいつが余程の大天才でも無い限りそんな急成長はあり得ない、何かの間違いじゃないのか?」

篠村の言葉を受けて、ああその事ね、と朝倉は得心した様に頷き、篠





「エヴァちゃんがそのダイオラマ球とかいう代物の中に別荘持つてるから使わせて貰ってるんだって」

「ぶっ……!?？」

篠村は思わず噴き出した。暫くの間パクパクと金魚の様に無言で口を開閉し、やがて絞り出す様に言葉を返す。

「……いや……確かにあの闇ダークの福音エヴァンジェルなら所有していても不思議じゃないけどよ……また何だつてあの恐つそろしい女傑に頼るよ、比較的友好的なもの山下だろ?……あれは等価価値を原則に厳正な契約を重視する古き魔法使いだ。何を要求されるか解ったもんじゃねえつてのに……」

「なんか悪魔との契約みたいなノリだねえ」

「似た様なもんだ。それであの馬鹿なにを支払ったよ……?」

恐る恐るといった様子で問う篠村に、朝倉はあっさりと言いつつ放った。

「いや、何も要求されなかったって」

「………んな訳無えだろ、オイ」

「いやホントに。つていうか中村先輩が眼中に無い感じで、勝手にしてろつて風に話を打ち切られたから、勝手に使ってるんだつてさ」

「……いや何があつたんだよあの吸血鬼?………」

理解不能、と顔に現しながら、頭痛がするらしく渋い顔で頭を押さえる篠村。朝倉はご愁傷様、と苦笑しながら手帳を見直して、詳しい理由わけを話し始める。

「まあ、理由は検討がついてる……つていうか多分これしか無いでしょ、つてネタがあるんだよね。山下先輩の、漢気爆発が原因かな?」

「……エヴァさん、怒ってるかい?」

「………貴様はよくあれだけのことがあつておめおめと顔が出せる

な、本当に……」

気不味そうに笑う山下に対して、エヴァンジェリンは深い溜息を吐き、脱力した様に力無く声を掛ける。

前回エヴァンジェリンが爆発し、喧嘩別れの様な形で終わってから暫し日が経ち、山下は話の続きをする為にエヴァンジェリンのログハウスマで再び足を踏み入れた。当然友好的とは言いがたいエヴァンジェリンの様子に、山下が気後れしなかったかと言えば嘘になるが、山下は此処で引いては駄目だと感じていた。相手の機嫌を伺い、空気を読んで接する事も関係を深める上で必要な事だろう。

しかし、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルという女性は、何処かのタイミングで踏み込まなければ心を開くことが出来ない、山下はこれまでの付き合いで確信していた。

「この前は僕も熱くなって失礼な言い方をしたから、それに関しては謝罪するよエヴァさん。申し訳ありませんでした」

短い間ではあるが深く、真摯に頭を下げる山下。

「…頭を上げろ。年甲斐も無く激昂した私の方が非は大きいだろうさ」

不機嫌そうに顔を歪めながらも、エヴァンジェリンは存外寛大な態度で山下に告げた。

山下は素直に頭を上げるが、その顔にはやや意外そうな表情が浮かんでいる。

「…なんだ？」

「いや、失礼だけでもっと取り付く島も無い感じの対応を覚悟してたからねえ」

ポツと出のガキなのは事実なだけに拒絶されても文句を言う資格は無いからさ、と苦笑する山下に、エヴァンジェリンはフン、と鼻を鳴らして言葉を投げる。

「ズケズケとものを言われて無論腹は立った。…それでも、頭が冷めればお前の言葉が正鵠を得ている点もあると、認めずにはいられない。私が私で在る為には、課さねばならん矜恃がある。己の不全を認めず感情に任せて拒絶し、殻に籠るなんて恥知らずな真似は御免なん

だよ」

そこまで言ってからエヴァンジェリンは打って変わって表情を翳らせ、いつそ気弱とすら表現出来そうな様子で言葉を紡ぐ。

「私はナギの事が好きだ。…少なく共、好きだった。好意が薄れた訳では無いが、そうだな。迎えに来なかった奴を、何処かで恨んでもいるし、失望もしたのだろう…、それであつさり見限れんのは惚れた弱みという奴か。厄介なものだな、恋慕の情は」

自嘲する様にエヴァンジェリンは笑みを浮かべる。

「まあしかし、そういうものなんだろうよ山下。恋愛などに限らなくとも、心の動きなんてものはそう明確に筋道立てた理由付けで動いちゃくれないのだろう。私はナギが迎えに来てくれなくて彼奴が恨めしいし憎らしい。私を袖にして女とくつついた事に怒りを覚えるし、その女の事が妬ましい。…私を光の中に放り出しておきなながら、無責任に姿を晦ましたナギに対して、愛想を尽かした私は確かに私の中にいて、それでも私は奴が嫌いで好きだ。ぐしゃぐしゃだよ、私の心は」

「…エヴァさん…」

これまでに無く、恐らくはエヴァンジェリンの半生を遡ろうとも前例が無い程に、思うままの心情を吐露してみせたエヴァンジェリンの前に、山下はその名をポツリと呟いた。聞いていて思う所はある、しかしこれがエヴァンジェリンの素直な気持ちだというのならば、それを否定する資格も、つもりも山下には無かった。

「…エヴァさんの想いを蔑ろにするつもりは無い、誤解せずに聞いてくれ。…人一人待つのに十五年は永いよ。…投げ出したくは、ならなかったのかいエヴァさん？」

「なったとも」

エヴァンジェリンは笑う。山下にそれは些か自棄の混じっている様に見えたが、エヴァンジェリンはおかし気に笑うのだ。

「人並み以上には碌でもない人生を送ってきた自覚があるからな。期待をし過ぎれば、叶わなかった際に惨めな気分になるのは身に滲みて理解している。五年を過ぎた頃には私に王子様はやって来ないだろ

うと、何と無く感じていた。出来過ぎた話だったんだよ、私が今更、光の元で生きていけるなんて話は。私にそんな資格は無い、百も承知だった。……それでもな」

エヴァンジェリはふと笑みを消して、天を仰ぐ。その細い頤に一筋の金糸を垂らし、微かな音が見えぬ口元から洩れた。

「…初めて好きになった男の語る夢位、信じてみたくなっただよ：私は……………」

「…そっか……………」

「そうだ」

エヴァンジェリンは視線を山下に戻し、何時もの不敵な様子で山下に言葉を投げ掛ける。

「お前の内心がどうあれ、身体を張ってまで私に忠告をしてくれた事には感謝する。自覚して、受け入れた代物は碌でもないが、確かに私が理解<sup>わか</sup>っていないなければならない事だった。それを踏まえた上で、返礼としてお前に言う」

エヴァンジェリンは山下の眼を見てはつきりと告げる。

「他人に言われてどうこう揺らいでいる時点で私はもう、ナギの事を其れ程好きでは無いのだろう。感情と見栄のお蔭で受け入れられていないが、そうなんだ。それでも、私は奴にもう一度会ってみたい。恨み言を吐きたいのか、痛めつけてやりたいのか、無理矢理にでも振り向かせたいのか最早自分でも解らんが。…会いたいんだ。お前の言う通り、私は幸いを望んでいない。だからナギを見つけた所で、私の望むようにはきつといかないのだろう。だが私はもうそれでいい。私の執着はもう、ナギにしか残っていないから。彼奴を見つけて、どうにかなる。…結局私は変わらないよ、今更変わることは出来ない」

エヴァンジェリンは語り終えて一息吐くと、黙って話を聞いていた山下に問いを放った。

「これが私の答えだ。おそらくお前の気に入る答えでは無いのだろうが、どうだ山下？私の人生は私のものだ、これ以上お前に口を挟まれる謂れは無い。これ以上のお節介は止めておくと、私はお前に言わせ

て貰うが？」

「聞けない話だねえ」

と、口調は穏やかだがきつぱりと山下は断言した。

エヴァンジェリンはその返答を聞いても前回の様に怒りを表しはしなかったが、代わりに対象の奥底までも暴き出さんとするかの様に、怜悯な眼差しを持って山下を貫く。

「ほう……何故だ？先に言っておくが、私自身の問題を理由にして語るならば、これ以上は何を聞いても貴様には関係無い、で終わらせるぞ？今のお前は、所詮行きずりの他人に過ぎないのだから」

エヴァンジェリンの冷たい突き放しの言動に、思わず山下の口端に苦笑が浮かぶ。

……山嵐所か針山地獄だな、この人は……

そうして壁を作らなければ生きられなかったのだらうと考えて、だからこそ、その壁の内側へ入り込むことの出来たナギ・スプリングフィールドを、己の感情はどうあれ評価する。

しかし、今の山下にとってそれは退く理由にはならず、寧ろその内に猛り狂うものにより一層の火を焼べる。

……そうだ、恋敵が英雄だろうがなんだろうが、負けられないんだよ

……

そう、現在の山下には、壁の内側へ飛び込もうとするだけの理由があった。

山下は深く澄んだ瞳で自らを見やるエヴァンジェリンをしかと見返し、己の理由を語り始めた。

「回りくどい前口上は潰して貰えたみたいだから、単刀直入に言わせて貰うよ。…エヴァさん、僕は貴女に幸せに生きて欲しい。確かに貴女の生き様も、価値観もなにもかも僕は解っていないのだろう。でもそれでも。…僕は僕の為にこの我儘を通したい」

「…私の幸いに」

エヴァンジェリンは敢えて山下の言葉に問いを挟まず、淡々と先を促しに掛かる。

「お前の何が関わるといふのだ、山下？」

「現在はまだ、何も」

正直に山下はそう答える。

「今迄の僕の動機は、貴女の言う通りどこまでいってもお節介に過ぎなかった。それなら確かに、貴女の人生に忠告以上の干渉はする資格が無い。僕は貴女と、もうそんな他人行儀な関係でいたく無いんだ。貴女のこれからの事柄全てに、僕は関わっていききたい」

山下は告げた。

「貴女のこと好きだから」

山下の告白に対し、エヴァンジェリンは否とも応とも直ぐには答えず、静かに目を閉じて暫し動かずに何事かを考え、やがて目を開いたエヴァンジェリンの瞳には、言語化し得ない複雑な感情が渦巻いていた。

「……この人外の矮軀を、お前は伴侶に選びたいと、そう言っているのか？ 貴様は」

「そうだエヴァさん。僕が貴女を、幸せにしてみせる。だからナギさんを追わずに、僕と生きて欲しい」

「……無理だよ、お前には」

軋る様にエヴァンジェリンは呟く。不思議な程に制御出来ない感情に揺れるその表情は、いつそ苦し気ですらあった。

「お前では、私と共に歩めはしない」

「なら、何故ナギさんを選んだんだい、エヴァさん？」

否定の言に、しかし山下は怯まず返す。

「容貌や人柄に惚れたのなら、それはどうしようも無いよ。でも貴女は、自分を拒絶せずに、ただ一人の女の子として自分を扱ってくれたから、ナギさんに惹かれたんじゃないのか？ 勘違いしないで欲しいけど、僕はナギさんに成り代わるつもりは毛頭無い。中途半端な真似をして行方晦ませた妻子持ちの無責任男よりも！ 貴女を幸せにして上げられると思っているから、貴女に想いを告げているんだ!!？ 同情でこんな台詞は吐きはしない、僕は嘘偽り無く、貴女が好きだ!!？ 不足があるというんなら、何をしたらってそれを埋めてみせる。だからエヴァさん、どうか真剣に考えてくれ。僕は、貴女の隣に、本当に相応

しくは無いのかい？……………」

エヴァンジェリンが山下の告白を聞いたきり黙り込み、既にかかなりの時間が経過していたが、山下は声を掛け様とはせずに黙して待つ。更に其処から長い沈黙が場を支配し、ようやくエヴァンジェリンが何時の間にか瞑っていた眼を見開き、その帳を破った。

「……山下」

「うん」

やつとのことと絞り出した様なその呟きに、答えを待ち侘びていた筈の山下は焦らず穏やかに先を促す。それに勇気付けられてか、エヴァンジェリンの続く言葉は滑らかに流れ出した。

「お前の事は、そうだな。好ましく思っている。飄々とした言動には苛つくこともあったが、私の自由を祝いに来た時、私の手によつてならば人外に堕ちても構わないと言った時。…ああ、そうだ。少なからず私は嬉しいと、そう思う私が確かに居たよ」

だから、とエヴァンジェリンはこれ迄に無い程に穏やかな表情で先を続ける。

「お前の想いに嘘偽りは無いと私は思う。お前とならば、と考える私は、確かにいる」

でも、とエヴァンジェリンは悲し気に後を続ける。何時もの威厳はその顔には無く、まるで外見同様の幼子であるかのように、力無く。「永い、年月を生きるとな。変わることに、臆病になる。私は、世の中に不変のものなど無いということ嫌という程目の当たりにしてきた。お前がどれ程に愛を誓ってくれても、そうだ。…また裏切られたらと、そう考えてしまうんだ。ナギの時の様に、また」

「…僕はナギさんじゃあ無い」

「ああ、そうだ、解っている。…解っているのだ、そんなことは……」  
山下の抗議する様な短い断言に、エヴァンジェリンは顔を片手で覆い呻く様に返す。

「期待をな。…裏切られるのが一番堪えるんだ。ナギに選ばれなかった私は、こうして何処へ行けば良いかも解らない、無様



な様に成り果てている。…お前が悪いんじゃないよ、山下。こんなのは理屈になっていないって私も解ってる。…でもそれでも、お前の不義が…怖いんだ、私は……………!」

何時しか俯き、嗚咽する様に身体を震わせるエヴァンジェリン。六百年を生きた吸血鬼が、魔法世界にその名を轟かせる悪の魔法使いが。

山下にはこの時、泣いている只のか弱い少女にしか見えなかった。

「…………だから、お前の気持ちには応えられない。ナギは、少なくとも私を嫌わない。無様だろうが何だろうが、私はもう裏切られたく無い、幸せなど私は要らない。…私はこのままで、いたいんだ…………」

エヴァンジェリンが語り終えると、再び場に沈黙が降りる。今度は山下がそれを破り、エヴァンジェリンは応える。

「僕はエヴァさんになんか変わって欲しいよ」

「私はこのまま、変わらずに居たい」

「…平行線だね」

「…ああ」

うん、と山下は一つ頷き、幾つかの問いをエヴァンジェリンに投げ掛ける。

「エヴァさんは僕を、嫌ってはいないんだね？」

「…そうだ。だがそれは…………」

「解ってるよ。…自分の器量不足が恨めしいねえ」

ふ、と溜息を吐く山下。

「意味の無いIFではあるけれど。…僕が最初に出会ってれば、貴女は僕に振り向いてくれたかな？」

「…………解らんよ。だが、そうだな…………或いはお前に、熱を上げていたかもしれない…………」

そっか、と山下は僅かに頬を綻ばせる。

「それさえ聞ければ充分だ」

「…………何？」

そういつて椅子から立ち上がった山下を、エヴァンジェリンは訝し気に見やる。先程の弱々しい様子こそ無くなっているが、まだその身

体には何時もの覇気が感じられないでいた。

「エヴァさん。残念ながら僕の甲斐性不足の所為で、これ以上は多分どれだけ話し合っても結論は出ないと思う」

「…そうだな。面倒臭い女でこちらこそ申し訳ありません、とでも言っておくとするか?」

「あはは、エヴァさん少し調子戻ってきたみたいだねえ。…エヴァさん。僕はこのまま納得のいかない状態でふられたくは無だけれど、そつちも折れる気はさらさら無いよね?…だったらエヴァさん。一度だけ、一回だけ馬鹿になつて、馬鹿な提案を呑んでみてくれないかい?」

「……………、…言ってみろ…………」

促すエヴァンジェリンに、山下は苦笑を浮かべつつ己の迷案を唱える。

「あまりに言葉にしてみると馬鹿げて聞こえるだろうから申し訳ないんだけど…どうだろう、勝負をして、負けた方が勝った方に従うつていうのは」

「……………お前は何を言っているんだ……………?」

エヴァンジェリンはあんまりと言えばあんまりなその言葉に、引きつった顔でそう返す。

「あ、やっぱり気に障ったかい?」

「いや、それ以前に理解不明だ。何がどうして直前までの会話からそうなる?」

あまりに驚き過ぎて一時的に弱気の虫と共に普段の余裕まで吹っ飛んだのか、エヴァンジェリンは珍しく素のあどけない表情で山下に尋ねる。

「いや、面倒になったから適当に決めたんじや無いよ?このまま行つたら、どうせ最後にはそうなつちやうかと思つたから、さ…」

山下は巫山戯ていると取られない様に真剣な表情を作ると、一聞突拍子もない提案の理由を語る。

「エヴァさんはこのまま僕が譲らなければどうするんだい?今は弱気の虫が騒いでいるみたいだけれど、きつとエヴァさんは立ち直つたら

僕を實力行使で黙らせに掛かると僕は思うな。…今の弱い貴女エヴァさんを否定する気は毛頭無いけれど、僕が好きになったエヴァさんは何時も堂々としていて、真摯に恋をしているエヴァさんだから、さ。エヴァさんの悪の誇りが、見え張りや洒落の類で無いのなら、エヴァさんはきつと押し通るよ」

「だったら僕も流儀に習うさ、と山下は軽く掲げた拳を握る。

「僕は、武道家だから。どれだけ考えて口にした言葉でも、貴女を解きほぐせはしなかった。やっぱり語るなら僕はこつちが向いてるよ。本気で、鬪やつて。…貴女を振り向かせてみせる」

「どうかな？」と首を傾げて尋ねる山下に対して、エヴァンジェリンは暫し呆気に取りられていたが、今度こそ明確に頭痛を覚え始めたらし、両手で側頭部を押さえて低く呻く。

「あれ？おーいエヴァさん、大丈夫かい？」

「誰の所為だと思つとる天然優男が…：本当に貴様は、何なんだ全く…：……………」

エヴァンジェリンはやおら頭から手を放すと、殆ど睨み付けているに等しい目付きで山下を突き刺す。

「確かにらしくも無い所を見せた。私は確かにそういう存在ものだろう。しかしお前の提案は、なんというかあまりに馬鹿馬鹿し過ぎる」

「馬鹿馬鹿しいか…：最もな意見だけど、具体的に何処がだい？」  
「全部だ」

呆れた様子でエヴァンジェリンはツッコむ。

「先ず第一に貴様私に稽古をつけられてる身だろうが。加えて私は最高クラスの魔法使いだぞ？率直に言つて貴様に勝機は無い。更に言うなら、いくら貴様が武道バカにしても、惚れた相手を振り向かすのに惚れた相手自身を叩きのめしてどうする。仮に成功したとして、その後私と円満にやって行けると思うのか？…：馬鹿の集団に属しているとはいえ、貴様はもう少しマシな頭を持っているかと思つていたが…？」

何を考えている、とエヴァンジェリンは山下を問い詰める。対して山下は困った様に笑いながら、その言葉を口にした。

「何を……っていうかね。深く考えていない、ってというのが答えかな？」  
「……何だと？」

眉根を寄せて一層表情を険しくするエヴァンジェリンに、山下は適当にやっってるって訳じゃ無いよ、と前置きしてから続きを語る。

「此処に来る前にさ、どうすればあなたを口説けるかって、くる日もくる日も延々と考えてたんだ。僕の精一杯で気持ちを表したつもりだったけど、やっぱりそれだけじゃ貴女は心を動かさなかった。……しばらく前にさ、友人の偉大なる馬鹿に、教わったことがあるんだ。勢いのまま突っ走った方が、時に良い結果を生むこともある、ってね。僕にあれ以上の言葉は出せはしない。じゃあ後は僕に残っているものは何かと考えたら、自信を持って答えられるのは、この腕っ節しかないから。これで貴女に想いを届けることにした。さっきのエヴァさんと同じだよ、理屈になつてないのは百も承知だ。馬鹿な事と言われても、それは全く仕方が無い。……でも、その馬鹿に救われることがあるんだよ、本当に」

お願いだエヴァさん、と山下は真つ直ぐ頭を下げる。

「この一度だけでいい。僕に付き合つて、馬鹿をやってみてくれないか。その一回の中で、必ず僕はエヴァさんに何かを伝えて見せる」

エヴァンジェリンは頭を下げたまま動かない山下の後頭部を見下ろし、やがて一つ大きく息を吐くと、静かに山下へ言葉を掛ける。

「……頭を上げろ、元々はつきり理由を示せていないのは此方が先だ。その詫び替わり、と言つてはなんだが、いいだろう付き合つてやる」  
「……エヴァさん……」

「唯、そうだな。解つているとは思うが言っておく」

フワリ、と、風の無い筈の室内で山下の前髪が踊る。

エヴァンジェリンは底冷えする様な冷たい表情で顔を覆い隠し、全身から余剰魔力が物理的な圧力となつて周囲の空気を押し退ける程に、全身に鬼気を漲らせていた。

「わたし自身の進退を決める以上、当然貴様に対して手は抜かない。以前貴様らは五対一で私に敗れたのを忘れた訳ではあるまい？……下手をしなくても貴様は死ぬ羽目になる。それを理解<sup>わか</sup>つて言葉を吐い

ているんだよな、山下……?」

ビリビリと腹の底から震えるものが這い上がってくる。

エヴァンジェリンは本気だと、それこそ言われる迄も無く、山下は実感出来た。

しかし腹を括る程度の事なら、山下は此処に来る前から既に出来ていた事だった。

…添い遂げるには最低限の前提条件で命を賭けなければいけない女性、か……

…上等だよ、惚れ甲斐があるつてもんだ……!!?

「ああ。解っているよ、エヴァさん」

「……そうか……」

エヴァンジェリンが表情を緩め、同時に放射していた圧力も消える。

「ならば私から言う事はもう何も無い」

「そっか。じゃあよろしく、エヴァさん」

「よろしくしてやるつもりは無いがな。私はお前をフった、答えは変わらない」

「きつついなあ、相変わらず。まあエヴァさんって感じだけどね、これも……ああ、そうだエヴァさん」

「今度はなんだ?」

つれないエヴァンジェリンの言動に溜息を吐いた山下が、ふと何事かに気付き、エヴァンジェリンへ呼び掛ける。

「悲しいことに僕をふるのが確定しているみたいだけど、僕は本気で貴女が好きだ。我儘な言い分だけれど、僕の事をエヴァさんにもつと意識して貰いたいんだ。一方が相手を障害扱いにしかしていないなんてのは何だか悲し過ぎるからねえ」

僕の事を見て、考えてはくれないかい?と山下は片目を瞑り、戯けた風を装ってエヴァンジェリンに願い出る。

それに対してエヴァンジェリンは、鼻白んだ様に眉を潜め、そっぽを向くが、改めて注視するまでも無く耳が赤い。

「…あれ?」

「っ！………何だ？………」

鼻で笑われて終わりかと予想していた山下は、そのある種<sup>ウブ</sup>初心な反応に思わず疑問の声を漏らし、それを耳聴く聞き付けたエヴァンジェリンが一瞬ビクリと身体を震わせた後に低い声で問うてくる。

「あーいや、エヴァさん、ひよつとして今更照れていらっしやいますか？」

蹴り出された。

振り返った山下の眼前で扉がバタン！！？と騒々しい音を上げて閉まる。

「痛ったく………意外に反応<sup>ウブ</sup>初心だなあの人………ああ、そりや初心<sup>ウブ</sup>か………六百年の半生で男を一人しか好きになっっていないんだっつたよ………」

どっころしよ、と立ち上がり、ログハウスを見上げて山下は一度全身を大きく震わせる。

「っし………それじゃあ死ぬ気で頑張っつて、………振り向かせてみせますか、愛しい人を」

「………そんな感じで、決闘を何時やるかは決まっつて無いんだけど、山下先輩はエヴァちゃんと学祭を回っつてみたいから学祭初日辺りにケリを付ける気で見たい。なんていうか強気だよねえ？………あれ、どしたの篠村先輩？」

「洒落にならねえ話の展開に驚いてんだよこっちは！！？」

事の顛末を所々掻い摘んで語り終えた後、朝倉は蒼褪めた表情で黙りこくっつている篠村に声を掛けると、殆ど叫び声に近い声でそんな言葉が帰っつてきた。

「えー確かに一大スクープではあるけどさ、なんか先輩驚きのベクトルが違わない？」

「おっ前………！！？こっちからすれば魔王の趣味が編みぐるみと家庭菜園の栽培だっつて聞いたみてえな衝撃だっつてのに………！！？」

「いや先輩、混乱してるんだろうけど例えの意味が解んないって」  
「どうかいいのかオイ!?? そりゃあ面と向かって文句言える様な奴は居ないだろうがいいのかこれは!??」

かつてない混乱に見舞われているらしい篠村の乱心具合を取り敢えず一枚デジカメに収めると、朝倉はパラパラと手帳を見直して独りごちる。

「うん、でっかいネタはこれ位かな」

「!? 後は桜咲が辻先輩デートに誘えてたり明日菜と高畑先生、豪徳寺先輩と那波さんが同上、芹沢先輩が遂に動き出したのと、只野の変態教師が遂に禁固刑が決定、と。：うーんいいネタばかりなのになんてこう記事に出来ない話が大半なのかなー? :」

「おい待てなんかサラツと流せねえ様な話が幾つか紛れてたぞオイ！」

軽く頭を抱えてかぶりを振っていた篠村が、朝倉の洩らすある意味で物騒な呟きに我に返って噛み付く。

「おおっ先輩もやつぱり気になるよね!?? 安心してよ、今は色んな制限があつて厳しいけど、何時か必ず三面記事に推し出してみせるから！」

「お前は頼むから何もするなもう。つていうかお前はなんでそんな諸事情を仔細に知つてんだよ!??」

篠村の叫びに朝倉は首を傾げ、

「別に取材内容を一語一句漏れ無く記憶する位は報道部レギュラークラスなら普通にやるよ?」

などと言う。

「それはそれで恐ろしいが違う!!? 普通そんな当人達にとっての一大事は軽々しく語られるもんじゃ無えだろ! 誰から聞き出しやがった、よもや盗聴器か!??」

「やっだなー先輩、そんな事したら犯罪じゃない。当の本人に自発的に話したくなる様にちよつと思考誘：つんつ! ご機嫌取りをしただけだつてー、ネタを聞き出すのは報道部の基本にして極意なんだから：」

「何なんだ報道部怖えー!??!?」

麻帆良の中でも一段と闇の深そうなハイエナの群れの実態に篠村は思わず絶叫する。

「そんな訳で先輩も学祭の御予定とか喋ウタっちゃわない?こちらとしては新しい読者層の開拓の為にも記事に出来る範囲の適度に猥雑な話が聞きたいかなーって…」

「今迄の話を聞いていて誰が自分のプライベートを晒すかボケ!!?もういいわくつそ聞くんじゃ無かったー!??!?」

そろそろと水を差し向ける朝倉の魔の手をぶち切つて一目散に逃げ出す篠村であった。朝倉はあーあ、と眩きながら手帳をしまい、周りの友人、先輩達の喧騒を耳にして笑う。

「今年は例年以上に盛り上がりそうだね……始まるよ、祭りが」



## 四章 お馬鹿な武道家達の恋と戦模様

### 1話 祭りの始まりは混沌と

「……私には、無理です……」

少女は力無くそう零す。

「……大丈夫や」

静かに、されど力強く少女を励ますもう一人の少女は、膝を着く己が掛け替えの無い親友の弱々しい瞳をしつかりと見つめ、再び告げた。

「せつちゃんならあんじよう行くわきばりやさあ早くう〜!」

「無理や、無理なんやこのちゃん〜!!?前立っただけで口聞けへん自信があるねん〜!!?」

「……駄目かもな、こりやあ……」

腰の辺りに縫り付いていやいやと首を振る半泣きの刹那と、力付くで二十m?先を歩く辻に刹那をけしかけようと愛らしい顔を必死の形相に歪める木乃香を見て、アワアワと状況を見守るネギの肩上的力モはそう呟いた。

「…にしても刹那さん。半ば他人事なのは承知の上で言わせて貰うけれど、今更デートに誘う位で何でそこまで狼狽えてんのよ……」

「解つてます、解つてるんです意識し過ぎて勝手に追い詰められてるだけなのは……!!?」

噂があかないので一旦突貫作戦は中断して、道を歩く辻の後方から全員でコソコソと後を尾けながら呆れた様に傍らの明日菜が言い、青白い顔で頭を抱えながらテンパった声で刹那が返す。

「せつちゃん、何度も言うけど大丈夫やく、別に今直ぐ告白するわけや無いんやから、一緒に学祭廻りしましょうってだけなら100%OKしてくれるえ〜?」

大仰に考えすぎるな、と逆隣りの木乃香も告げるが、刹那の表情は晴れない。

「いえ、私去年までお嬢様の警護を名目に辻部長のお誘いを素気無く

払い除けて来ているんです。絶対にこの件では相当に悪い感情を持たれてしまっていますし、考えてみれば辻部長とは鍛錬以外の話題を進んで話した事ありませんし、剣の道に邁進する脳筋女子だとか、辻部長の私に対する女子的な評価って底辺を通り越してマイナスに至っているに違いないんです、……うううう………!!?」

終いには唸り始めた刹那を見て一同はなんとも言えない感慨に包まれる。

「…あのせつちゃんが良いけどここまで、とも思うけどなあ……」

「つていうかテンパって勝手にネガティブ方面に流れ出す一連の流れが辻先輩にそっくりよねえ……」

「…なんだか僕でももういいからさっさと引き合わせれば解決するのに、つて投げやりになりそうですよ……」

兎にも角にもぐったりしている刹那を半ば引き摺る様に尚も辻の後を追う一同。

「刹那さん、なんて言うか気持ちは痛い程よ……く解るけどさ。…ぶっちゃけ辻先輩って結構モテるのよ?」

ピクリと俯いて歩く刹那が反応する。明日菜は木乃香に目配せし、そのまま二人は代わる代わるに辻 はじめ PRを始める。

「そりゃあのお馬鹿集団に属してるから一般受けは最悪に近いんだけどね、ほら、辻先輩ってあの人らの中だと良識的で指導なんかも丁寧でしょ? 武道系部活の女子達の間では密かに人気あるんだって」

「せやせや、辻先輩勉強も出来るし顔の造りもすつきりしてて綺麗な方やし、基本スペック高いんよ。中村先輩達が何やオヒョヒョな感じやし、相対的にイメージ良く見えるんもあるんやとウチは思うわ」

「…あ、あの、明日菜さんも木乃香さんも急にどう……」

「黙ってな兄貴。これもその気にさせる為の作戦よ作戦」

ヒソヒソと話すカモノネギを余所に、漸く顔を上げた刹那には明らかに動揺が見てとれた。

好意を自覚したばかりの想い人が、学祭前という如何にもな青春炸裂期間に異性からの人気が大などと聞いては内心穏やかでいられな

いのはある意味当然ではあるが、実際にはそれは無用の心配というものである。

確かに辻はバカレンジャーの中において、単純に顔のいい山下に次いで女子人気が高い。本来ならば明日菜達の言うように、こういったイベントで粉をかけられることもあったかもしれない。

しかし実際には、辻の隣りに刹那がいる。二人は四六時中連れ立っている訳では無いが、つい最近まで辻は鍛錬の虫であり（無論それは現在もだが）、口から出る言葉は桜咲はくく、である。そりゃあ話題自体は色気の欠片も無いとはいえ、少しでも見る目のある人間ならば二人が単なる先輩後輩の間柄で終わらないであろうことなど、簡単に予想がつく。麻帆良生徒の中で辻はじめ一と桜咲 刹那とは、既にセツトで捉えられて久しいのである。

故に刹那が此処で焦る必要など微塵も無いのだが、そんな周囲の認識など当然刹那は知る由も無い。取り敢えずその気にさせれば万事解決すると確信しているこそその、明日菜と木乃香による少々手洗い発破であった。

「い、いえまあ、辻部長は確かに魅力的な方ではありますが……し、しかしですよ、明日菜さん、お嬢様。私はそれなりに辻部長と付き合いは長いですが、あの人がそういった浮ついた話題を出した事など一度も……」

「うーんそれはほら、あれやせつちゃん。せつちゃんかて立派な一人の女の子やし、辻先輩はデリカシーとかそういうところは人一倍きちんとしてる人やろ？ 恋仲で無いとはいえ、女の子と話しとるに他の娘の話題出すなんて失礼な事辻先輩はまずせえへんと思うわあ〜」

「そ、それは、そうかもしれませんが……」

「だからさ、刹那さん。辻先輩って押し弱い所あるでしょ？ 今迄は幸いそういう声が掛らなかつたかもしれないけれど、辻先輩も来年には卒業した大学部に移るか、ひよつとしたら就職して麻帆良を出ちゃうかもしれないのよ？ 一念発起して想いを告げようなんて娘がいても、おかしくないとは思わない？」

「な、あ、……そ、それは確かに…………！」

再びオロオロと頭を抱え出した刹那。なんというか色々余裕が無さ過ぎる姿である。

「あ、明日菜くん位にしとくで、あんまり急かし過ぎると暴走して変な方向行きそうや」

「OK。……にしても発破かけてて言ってる事の半分位が己が身に突き刺さって痛いわ……心が……」

「おいおい姐さん、自爆してる場合じゃねえぜ、仕上げはこっからなんだからよお？」

「え……まだ何かやるの、カモ君？」

ネギの問い掛けにカモはニヤリと悪どい笑みを浮かべ、手にした煙草で辻のいる方角を指し示す。

「寧ろこっからが本番だぜ兄貴。見てくませえや、中村の旦那方まで抱き込んで、細工は流流仕上げを御覧じろ、ってな」

「ヤッホー辻君、暫くだったねえ。お姉さん会えて嬉しいよお」

「…太刀嵐先輩、お久しぶりです。また急にどうしました？」

目の前に立つ、薙刀袋を背負う黒髪のロングヘアの鮮やかさとは対照的に、なんともほんわかした雰囲気たちあらしおろちを纏った女性、薙刀部部长太刀嵐大蛇を、何とも言えない嫌そうな目付きで辻は見返していた。

「あく何だか傷付くなあその反応。別にちよつとした昔みたいいきなり斬り掛かったりしないから、楽にしてよ」

「寧ろ口ぶりからその行為をきちんと非常識なことだと自覚していながら、平然と声を掛けてくる先輩の肝の太さにこそ気圧されてますよ。…それで本当に何のご要件でしょうか？」

引き攣り気味の笑みを浮かべながらあくまで話を急かす辻に、太刀嵐はぶうー、と子どもの様に頬を膨らませる。

「つれないなあ辻君。まあ、いいかあ…確かに戦線せんせん布告に来てあんまり仲良くしても雰囲気出ないしねえ」

「待って下さい、戦線布告とは何事ですかちよつと!?？」

うんうん、と一人で納得している太刀嵐の吐いた不吉な単語を聞き咎め、辻は堪らずツツコみを入れる。

「何事も何も…辻君出場するんでしよう、まほら武道会。私も出場  
からさあ、負けないよ、って言いに来たの」

「って言いに来たの」

あつげらかんと太刀嵐は言い、背中の薙刀を袋入りのまま引き抜く  
と体前でヒユウ!!?と風切り音を上げさせながら素早く一振りする。  
「んふふ、武器持ち麻帆良最強の栄冠は辻君に永らく明け渡し  
ちやってるけど、私だって何時までも遅れを取り続けるつもりは無い  
からね。…進化した結界刃、その眼に焼き付けてあげるよ。…敗  
北って烙印でね」

ビシイツ!!?と薙刀を突き付けての決め台詞に、辻は暫し頭を片手  
で押さえて項垂れていたが、やがて顔を上げると不承不承、といった  
体で頷く。

「…元々俺は学園最強を名乗った覚えはありませんし、今回は勝たな  
きやいけない事情があるんで先輩みたいな強い人とはやり合いたく  
ないのが本音ですが……わかりましたよ、もし闘り合う機会がありま  
したら、存分に」

「…辻君ってなんていうか、めっちゃめっちゃ腕は立つ癖に、争い事に乗り  
気じゃ無い所とかまるで普通の人みたいだよね。彩華ちゃんとか  
はそこら辺が余裕ぶってる、なくって感じるから気に入らないらしい  
けどさ……気取らない感じが私は割と好きかな」

どう見てもあまり乗り気では無い次の返答に、太刀嵐は笑みを深め  
て呟き、じゃあ大会でね、とヒラヒラ手を振りつつ踵を返す。

「…あああ、色々大変そうなのにもまた厄介な人が…」

と、辻はバトルジャンキーの増加に頭を悩ませていたが、その辻の  
後方ではこれまた大変な事態になっていた。

「……………つっ!??…」

「うわー何か随分親しそうな感じじゃなかった、ちよつと木乃香?」

「せやなくなんや大人っぽい見た目の割にほんわかした感じがギャツ  
プでえらい可愛らしい先輩やったな」

「そうね、何話してたかはよく聞こえなかったけど、ひよつとして

モーシヨンかけられてたのかもね辻先輩ったらー」

「いえ、あのどう見ても一触即発みたいなムグツ!!?」

「兄貴兄貴、ここは沈黙が吉だぜ」

ワナワナと全身を小刻みに震わせつつ、無言で一連のやりとりを目撃していた刹那。その傍では明日菜と木乃香が何処か態とらしい応酬をやり合い、ネギの冷静な意見はカモによって妨げられる。

「い、いえ…き、きつとアレはアレですよ!、太刀嵐先輩は獲物持ちの武道系部活の中では有数の使い手と確か前に副部長が言っておられましたし、今度の武道会での意気込みを語りに来たとか、そのような感じの話かと……!」

「えくでもせつちゃん、態々辻先輩にそれを伝えに来るんやったら、どっちにしても辻先輩をなんかの形で意識してるゆーことやないかな〜?」

「え……う……!!?」

木乃香の切り返しにタジタジになる刹那。実は予想の通りであるのだが、今の刹那に冷静な判断力は残されていなかった。

「……ねえ木乃香、大丈夫なの刹那さん?なんか動揺の度合いが半端無いんだけど……?」

「大丈夫や明日菜。追い詰め過ぎるのもアレやて確かに言うたけど、せつちゃんは割と引つ込み思案で理由付けて物事を諦められる様にしとる一面あるからなー。此処は勢いで行動して貰わんとせつちゃん前には進めへんのや」

「…でもやり方が何だか『辻 はあじめええええええええつ!!?!!?』…わあつ!!?」

ハラハラしながら何事かを言いかけたネギの呟きを、遠方から上がった叫びが打ち消す。

「え、何々!!?」

「明日菜、あっちゃや!!?」

「え……あ!!?つ、辻部長にまた、女性の方が……!!?」

震える指で刹那が指し示した先には、途方に暮れて佇んでいた辻に向かつて爆走する、シヨートヘアの女性がいた。

「……うわあ……」

「ぎ、貴様辻はじめ——!!?人の顔を見るなり呻き声を上げるとは、礼儀と  
いうものを知らんのか!??」

心底嫌そうに呻く辻のあんまりといえばあんまりなりアクションに堪らず抗議の声を上げるのは全長5m、刃の部分が畳半畳程もあり  
そうな巨大なハルバードを無理矢理斜めに背負った、長身で三白眼気  
味の切れ長な眼がやや威圧的なボーイッシュの女性、刀剣甲冑部部長  
鎧塚よろいづか彩華である。

「そりゃあ嫌そうにもするだろ彩華さん。鎧と刃物で完全武装した殺  
戮集団を指揮して定期的に襲い掛かってくる通り魔擬きの長を前に  
して、まさか歓迎の笑顔を浮かべるとでも思うのかい?」

「ぬ……つ!ま、麻帆良では強者は常につけ狙われる運命さだめなのだ!!?そ  
れに貴様に対して私は一対一でしか挑んだことは無いだろうが!!?」  
「そのイカれた世紀末理論をそもそも俺は受け入れてないって話なん  
だよ前提として!!?それで今日は何の用だこの馬鹿力女、まさか  
そんな格好で挑戦なんぞと吐かさないだろうな!??」

曲がりなりにも丁寧な応対を心掛けていた辻だったが、押し掛かる  
諸々の事情から精神的な余裕が欠けているらしく、格別親しくも無い  
女性相手にはは何時に無く言葉が荒い。鎧塚はそんな初めてみる  
辻の様子にやや面食らったようであったが、気を取り直す様に小さく  
被りを振り、ビシィツ!!?と人差し指を辻に突き付けると、清々しい  
迄に堂々と宣言した。

「辻はじめ——えっ!!?どうやら太刀嵐のゆるふわ女に先を越された様だ  
が、貴様を打ち倒し武器持ちの頂点に立つのはこの私だ!!?そして私  
が貴様に勝利した暁には、予てからの私の要求、貴様を我が刀剣甲冑  
部への転部を果たさせて貰おうか!!?」

「俺がその滅茶苦茶な話にはいと頷くとも思ったか脳筋女」

「ふん、貴様がどう思おうが関係は無い!!?私は何をしてでも刀剣甲  
冑部を麻帆良一の強集団としてみせる!首を洗って待っている、辻

はじめ  
——!!?」

「なんで麻帆良は他人の話を聞かない奴がこうも多いんだ畜生」

最早色々なものを諦めたのか力無く呟く辻に構わず、不敵な笑みを口端に鎧塚は去って行く。

「ではな、武道会で会おう我がライバルよ!!?」

「フリースウエルグにでも攫われて巢のグラデーションになってしまえ鋼鉄女が」

ボヤク様に吐き捨て、ふらふらと歩みを再開する辻。

「…なんなんだ今日は、学祭が近いにしても変人が集まり過ぎだろうに。誰かの陰謀じゃあるまいな……?」

「……………このちゃん、ウチ如何したらええん……?」

「……行動するんや、せつちゃん。ウチとの時も、身い引いてしもてせつちゃんは、いっぱい後悔したんやろ……?」

泣きそうな刹那の揺れる瞳を胸の中に閉じ込め、柔らかくその頭を抱え込んだ木乃香は優しく、諭す様にゆっくりと告げる。

「…刹那さん大丈夫かしら……」

「だからやり過ぎなんじやって僕は……」

「ま、まあハッパが効き過ぎた感はあるが悪くねえ状況だぜ。今の旦那なら強引な女共との対比で刹那の姉さんがより可憐に見えたりなんかするかもしれねえ!」

きまり悪げなネギ達を脇目に木乃香は懐中の刹那に語り掛ける。

「せつちゃん、辻先輩のこと好きやろ?」

「そ、それは……………、…はい……」

真つ向からの問い掛けに、刹那は赤面しつつも小さく肯定する。木乃香は想いをきちんと口に出せる様になった親友を嬉しそうに見て、言葉を紡ぐ。

「ウチな、まだせつちゃんと仲直りする前に、せつちゃんのこと辻先輩に聞きに行ったことあるんよ。…碌に話したことも無いようなウチ相手に、辻先輩凄く親身になってくれてなく…優しくて、頼りになる人やって、そう思ったわ。……なあせつちゃん」

「…はい」



「辻先輩って、いい加減なこと言うような人やあらへんやろ?」

「え……、は、はい、そうですね……」

木乃香のやや唐突な質問に、戸惑いながらも刹那は肯定を返す。木乃香は我が意を得たりとばかりに笑って、刹那に告げる。

「そんな先輩がなあ、せつちゃんなら大丈夫だ。ウチとまた仲良うしてくれようになる、ってのはつきり言うてくれたんや。…辻先輩はせつちゃんのこと、ちゃんと見とるとウチは思う。只の先輩後輩だなんてこと、絶対無いわ。…自信持って行きいやせつちゃん!辻先輩と一番仲直うしとつたんは、せつちゃんやろ!!?」

「……………このちゃん……………!!?」

眈をキリリと可愛らしく上げて、木乃香は刹那を激励する。刹那が胸の奥から込み上げるものを堪えつつも、親友の名を呼んだ時、傍らから明日菜の声が響く。

「あ!!?も、もしもし、高畑先生ですか!!?」

「……………え?」

「あ、明日菜?」

携帯電話を耳に当て、ガチゴチに緊張しながら想い人、自らの前担任高畑・T・タカミチと会話をする明日菜の唐突に過ぎる行動に、木乃香達だけでなく傍らのネギもポカンとして見つめているが、明日菜は構わずに突っ走る。

「あの!!?高畑先生、今度の麻帆良学園祭なんですけど!高畑先生はお暇な時間とかがありますか!!?」

「はい、あの…!!?もし宜しければ、私と学園祭、一緒に廻って頂けませんでしょうか!!?」

「いえ、本当に、そんなこと無いです!!?……………はい、はい…そ、そうですか!ありがとうございます!!?…はい、また連絡させて頂きます、失礼します!!?」

ピツ!と電話を切ると同時に、盛大に溜め込んでいた息を吐き出しつつガツクリと膝を着く明日菜。

「あ、明日菜さん、大丈夫ですか!!?」

「…だ……大丈夫よ、ネギ……………緊張の糸が一気に、切れて…ちよっ

と力抜けたただけだから……、刹那さん!!?」

「は、はい!!?」

息も絶え絶えにネギへ返事をした明日菜は、一つ大きく深呼吸をした後、大声で刹那へと呼び掛ける。小さく跳ねる様に身体を震わせて応える刹那に、明日菜は無理に笑顔を浮かべつつも言葉を放った。

「私、今高畑先生と学祭巡る約束、取り付けたわ!!?」

「…は、はい……あの、明日菜さん何を……?」

「あたしが成功したから、刹那さんも大丈夫よ!!?」

「…ええ!!?」

トンデモな理屈を唱え始めた明日菜に、堪らず刹那は驚愕の声を上げるが、明日菜は構わず先を続ける。

「なんていうか、あたし刹那さんと同じ様な立場だったのに、自分は何も動しないで無責任に発破掛けてたから、さ。他人に対して自分が出来ないこと言うなって、言うじゃない?…だからもう真つ正面から、偉そうに言わせて貰うわよ刹那さん!!?あたしに出来たんだから、刹那さんも大丈夫!!?私も勇気出したんだから、刹那さんも勇気出さない!!?辻先輩と刹那さん、すつごくお似合いだとあたし思うから。…一歩でいい、踏み出してみよ、刹那さん」

「ドーン!!?と息を整え、立ち上がって仁王立ちに構えつつ明日菜は宣告した。

「……明日菜……」

「明日菜さん、あの……」

「なんつうか、姐さん。……理屈になってねえんじゃないですかい……?」

「つつさいわね!!?恋は理屈じゃ無いのよエロガモ!!?」

「ええ……?」

理不尽な切り返しにカモが大層不満気に呻く。

「……明日菜さん……」

「うっ!!?……いや、刹那さん。私はこう、あのね……」

刹那に呼び掛けられ、明日菜は先程までの勢いが嘘の様にへどもどと言葉を濁す。

「……………ありがとうございます」

「いや、だからね……………へ？」

刹那は明日菜の手をがっしりと握り締め、真摯にそう告げた。

「今の私なら、解ります。先程の明日菜さんが、どれだけ不安で、どれ程の勇気を振り絞って前に踏み出したのかを」

「え……………うん。そうなんだけど……………」

「そんな、途方も無い行動を、私を激励する為に……………私は、明日菜さんの心意気に、返す言葉が見つかりません……………!!？」

「いや刹那さん、私もなんか、場の勢いに乗った見たいな感があるし、結果的に成功したんだからそんなに思い詰めなくても……………」

感激して目から涙を零す刹那を前にして、対照的にテンションの落ち着いてきた明日菜は凄まじく気不味い様子で首を振るが、言葉は届いていない様だ。

「お嬢様!!？」

「ふえっ!!? な、なんやせつちゃん!!?」

ぐりんと急速に首を向け、異様に輝く瞳で見据えてくる刹那に、ややどもりながらも返事をする木乃香。

「お嬢様と明日菜さんの温かいお言葉、確かにお受け取りしました!!? こんな意気地の無い私を、奮い立たせて下さり、本当にありがとうございます!!?」

「私、行ってきます!!? 見ていて下さい、二人共、ネギ先生と、カモさんも!!?」

「わ、わかったえせつちゃん……………」

「う、うん……………ファイトよ、刹那さん……………」

「え、ええつと……………が、頑張つて下さい!!?」

「健闘を、祈るぜ……………」

「はい!!?」

刹那は瞳に炎を宿し、確かな足取りで辻の元に駆けて行った。

「……………明日菜」

「……………うん……………」

「……………ちよつと、やり過ぎたな……………」

「……………そうね……………」

最早結果は語る迄も無いだろう。各所に恋の花を芽生えさせつつ、その他大小様々な悲喜交々を飲み込んで。

混沌の麻帆良学園祭は幕を開ける。

「麻帆良戦隊、ま「二」バカー!!?」「二」レンジャー!!?…ってオンドウ  
ルアアアクソガキ共あーっ!!?毎回毎回人様を馬鹿にした合いの手  
入れてんじゃねーよ馬鹿って言う方が馬鹿なんだぞ馬鹿馬鹿鹿!!  
?」

「隣に立っついていて恥ずかしいから小学生以下の文句を止める超の付く  
馬鹿が!!?曲がりなりにも金貰ってやってんだから真面目にやれ!!  
?」

世界樹前広場に仮設された舞台の上、五色カラーの戦隊物の衣装に  
身を包んだ五人がヒーロー見参を決めた後に、自らの名乗りを上げる  
シーンにて。

シヨーを見ている子供達が名乗りの一部を息の合った斉唱で掻き  
消し、戦隊ヒーローのレッドが両腕を振り上げて観客席に怒鳴り声を  
張り上げる。如何にも馬鹿の見本の様な言動を取る麻帆良戦隊、  
まほレンジャーレッドの中身は中村 達也という馬鹿であり、吠え立  
てる中村の首根っこを引っ掴んでいるまほブルーは豪徳寺 薫とい  
う番長だった。

ならば残りのイエロー、グリーン、ブラックは言うまでも無く残りの  
バカレンジャー三人であり、結論を言ってしまうえば辻達バカレン  
ジャーは麻帆良学園祭開始時に行われるヒーローシヨーにてアルバ  
イトをしていた。

『おおっといきなり出ましたここ数年の麻帆良戦隊バカレンジャー名  
物の一つ、ヒーロー同士の仲間割れーっ!!?』

「わああすつげー!!?」

「馬鹿じゃねーの?まだ怪人も出て無いぜー?」

「それが面白いんじゃないか!」

司会がギャアギャアとやり合っている中村達を囃し立て、子供達は早速妙な方向性で盛り上がっている。

「:噂には聞いていましたが、何をやっているのですかあの方達は?」

「ええやん夕映ー、ハマリ役やと思うでウチ。あ、戦闘員出てきたで、そこやブラックー!!?」

「:つていうか妙にあの黒尽くめ達動きが良くない?ああいう下っ端つて弱いものなんじゃないの?」

「ああ、あれ?なんか麻帆良武道系部活の部員達を有志で募って配役してるらしいから、そりや強いんだろね。見なさいよあの縦横無尽な殺人攻撃の嵐、あの人達でなきやとつくにボコボコになると思うわよ?」

夕映が 『麻帆良農業部栽培極大カボチャ使用 720倍超濃縮

パンプキングジュース』と記入されたパックジュースを啜りつつ呆れた声で呟き、隣の木乃香が突っ込んで来た戦闘員の胴回し回転蹴りをゴテゴテした近未来的なブレードで叩き落とすレンジャーブラック、辻に対して声援を送り、やたらキレのある動きで四方八方から襲いかかる、雑魚である筈の戦闘員に対する明日菜の疑問をハルナが解説する。その後ろにはポカンとした表情でショーなんだか乱闘なんだかよく解らないドンチャン騒ぎを見る、ネギや小太郎の姿もあった。

学園祭の前日、ネギ達の元へ止めようとする大豪院や辻を振り切つて中村が現れ、自分達が高校に上がってから毎回主役をやっているヒーローショーが学祭初日いの一番にあるから見に来いよ、と全員にチケットを配った。学祭開始直後からギユウギユウに予定を詰めている者はいなかった為、3ーAの面々はこうして特等席で見物をしている訳である。

「この麻帆良戦隊まほレンジャーって、当初は麻帆良学祭期間限定で複数の弱小サークルがやってたなんの変哲もない興行の一つだったんだけど、雑魚役の戦闘員募集に麻帆良の腕っ節が強い奴らが応え

て、ヒーロー役の人達を返り討ちにしちゃってから流れがおかしくなり始めてさー。

そこからは何故か競う様にヒーロー側怪人側に腕自慢達を呼び寄せて、ガチンコの対決をするショーだか乱闘劇だかわからない代物になり果ててるって訳。それでお客の方も唯のヒーローショーよりよっぽど面白いって人気が出たもんだから、現在では麻帆良学祭三日間で毎日朝晩に公演を行う学祭メインイベントの一つ。んで圧倒的に他より強いんで三年前位からヒーロー側でレギュラーやってるのが、バカレンジャーこと我らが先輩って訳だねー」

「確か近年では、学祭期間以外でも麻帆良の近隣県で地方公演を行っているらしいのよね？」

凄絶な乱闘を繰り広げている中村達を余所に解説をする朝倉に、千鶴が楽し気な様子で気弾を連射して戦闘員達を吹き飛ばす、まほぶルーこと豪徳寺を見やりながら補足する。

「そうそう、あの人らの滅法強い暴れっぷりと漫才地味た掛け合いが大人気でさー、全国的な興行も視野に入れてるんだって。もうケーブルTVでは放送されてるし、ひよつとしたら次は映画化するかもねー？」

「…もうこれ仕事にした方がええんちゃうか？ 兄ちゃん達」

小太郎が呆れた顔でそう呟いた。

「ああもう今畜生!!？ 俺は今日大事な予定があるのに、こんなことやってる暇無いってのに!!？」

使い慣れない装飾過多のブレードで、鋭い横突ヨブチャキ蹴チルギりを叩き落とすつつ嘆くまほブラックこと辻。短く悲鳴を上げて地面に転がる黒尽くめはどうやらテコンドー部の部員であるようだ。

「五月蠅えよ泣き事ほごくな中学生に手を出さんとしているエロ剣士があ!!？ 全員が全員貴様のリア充街道を祝福すると思うなよ!!？」

「我ら色恋に現を抜かし武道家としての本分、飽くなき強さへの求道心を忘れた愚かなる武人に制裁を加えるべくして集いし真なる武道家達!!？」

「とりわけ最近の貴様らの不順異性交遊は目に余る！そんな羨ま…ゲ  
フンゲフン!!？もとい唾棄すべき墮落に心身を貶めた貴様らは、我々  
『し〇と団』が成敗してくれるわ!!？」

「名が体を現してんじやねえかボケ共があつ!!？」

口々に小難しい言い回しで『美少女とお付き合っているこいつら  
が妬ましい』との本音をオブラートに包みながら飛び掛かって来る見  
苦しい連中へんたい共に、ゴテゴテした籠カントレット手を装着した両腕から気弾をぶち  
かましつつまほブルーこと豪徳寺が吼える。

「雑音アドリブを相手にするな豪徳寺、引き受けた以上これは仕事だ。早急に  
全員沈めれば済む話だ」

金銀に彩られた三叉鉾の様な槍を構えてまほイエローこと大豪院  
が宣言すると、各々に襲い掛かっていた戦闘員達は一旦動きを止めて  
不敵に笑い(マスクで見えないが)、まほレンジャーを半包围するかの  
様に半円状で散らばる。その上で一人の戦闘員が態とらしく高笑い  
など上げながら指をまほレッドに突き付け、口上を放つ。

「フハハハハまほレンジャーよ！今日という今日こそは貴様ら忌ま  
わしき正義の味方に引導を渡してやろうぞ!!？」

「今更台本に倣いやがったぞあの戦闘員…」

「まあまあ、予定通りに進むならいいことじゃない」

まほブラックの呟きにまほグリーン(w i t h山下)が苦笑して返  
す。

「憎つくき貴様らへ冥土への案内役を果たすのはこのクソやろ…：お  
方だ！出番です、無垢なる者の守護人よ!!？」

「ねえなんか今クソ野郎って言いかけなかったあの戦闘員？」

「いや、そんな事よりも今回の怪人ゲストは誰だ？なんか酷く不安な前口上  
が…」

何やら本音の洩れかけた戦闘員にグリーンがツツコミ、ブラックが  
果てしなく嫌な予感と共に呟きを洩らしたその時、舞台奥の幕が開  
き、一人の男がまほレンジャーに歩み寄ってくる。

その姿は馬をモチーフにしたらしい面長の兜に白銀の各所へ同色  
のフサフサした体毛が生えた全身装甲。目立つ特徴として、額の部分

から螺旋状に溝が刻まれた一本の角を生やしていた。

男の登場と同時ににおどろおどろしいBGMが流れ出し、スモークマシンによって発生した霧の中でその馬怪人が眩いライトアップを遂げる。

そして司会者は、高らかにその名を告げたのだった。

『いよいよ真打ち登場です！穢れた大人を憎み、純真なる幼子を慈しむと彼は常々言い募る！故に今回のゲストに我々は彼を選んだ!!？無垢な子供達の為ならばと快諾したその麻帆良一とも呼ばれる変態…いいやもう変態で!!？その名はああああ!!？…只野 富永地こと、怪人ロリコーンダアアアアツ!!？!!？』

「オイ司会者!!？私をその理解と愛情の足りない呼び名で表すな！私は単に年増の中学生以上が到底持ち得ない、幼い少女のなんとも言えないあのプニプニとした肌の質感をこの上無く愛しているだけの健全な一市民だ!!？」

「!!「ギャアアアアアアアアアア!!？!!？!!？」!!」

なんかもう取り繕うのを諦めた司会者の若干投げやりな紹介に対して、怒りを滲ませながらも尚耳に心地良く響く見事なバリトンボイスで色々アレな言葉を返した一角馬怪人——只野の存在に、まほレンジャーことバカレンジャーの面々は一斉に焦りと恐怖の悲鳴を上げた。

「バ、バツカヤローズスタッフ、何でこいつをよりにもよって子供向けヒーローショーこんな場所に招き入れてんだ阿呆か!!？」

「直ぐに女子小生以下の女の子をここから逃がせ、襲われんぞ!!？」

「ここは僕達が食い止めるから早く!!？くっそ、本当になんでこの下手をすれば中村以上の変態がここに……!!？」

「考えるのは後だ、何がなんでもこの屑を殲滅するぞ、忌々しいがこいつは強い!!？」

「…ようやく俺は躊躇わずに断てる、そんな都合のいい存在を目にすることが叶ったみたいだな……」

辻達は一人残らず只野をボロクソに言い捨てると一斉に構えを取り、戦闘員達には最早目もくれずにジリジリと只野との距離を詰め始



める。その身体からは、下手をすればエヴァンジェリンや京都の一件以上に激しく立ち昇る戦意が見て取れた。

「…ゲツ!??あの怪人の中身あの超絶変態教師!?!?」

「ゆ、ゆえ〜今直ぐ逃げて!!?私は兎も角ゆえが危ないよ〜!??」

「そうアル!!?万が一ゆえ吉達狙いで来たんだとしたらヤバイアル!!」

「…くっ!??不本意ですが一旦逃げる他無いようですね!!?」

「拙者は風香達がシヨールを見に来ていないか確認に行ってくるでござる!!?」

等と3-A一行の間でも散々にこき下ろされる只野であったが、この男にはその様に扱われるだけの立派な前科があった。

只野 富永地、三十一歳。見た目は切れ長の目が映える細面の二枚目であり、撫で付けたオールバックから額に一房垂れた髪がなんとも言えない色気を醸し出す美丈夫である。

が、黙っていればイケメン人気教師と成れたであろうこの男は、純度100%混じりっ気無しペドフィリアの少児性愛者であった。麻帆良に赴任して来た経緯からして魔法世界の獣人系亜人種の少女（ヘラス帝国の高官の一人娘だったらしい）に対して『お医者さんごっこ』をやらかして追放されたという猛者であり、当然の如く学園での目線は冷たかった。

しかし、教職に就いてからの只野はその前科と前評判から伝わる性犯罪者というレッテルとは裏腹に、実に真面目に授業や生徒指導へと取り組み、周囲に対する人当たりも良く、幼稚園児や小学生女子に対して問題行動を起こすことも皆無であった。

これはキチンと反省が済んで改心出来たのでは?と周囲も徐々に警戒を緩め、只野が真面目なイケメン教師として評判を得始めてから三年、新任教師として瀬流彦が麻帆良に赴任して来た年に、只野はやらかした。

その事件、生物災害バイオハザードや死デスマガネの眼鏡といった広域指導員の猛者十数名及びほぼ総員の魔法教師、生徒により、本当に麻帆良のあらゆる住人にとって幸いな事に未遂で終わったその計画、『麻帆良全未成熟肢体補完計画』は、何故こ只野いつが野放しになっているのか?という疑問と共に

に麻帆良七不思議、麻帆良衝撃事件Best5の一つとして語り継がれている。

故に、平たく言えば超の付くロリコンが子供の集まるヒーローショー等に出現したのだからこの大騒ぎはある意味当然と言えた。

「フツ、安心するがいい罪深き愚か者の集団、バカレンジャーよ。今日は後ろの麗しき果実達や夕映たん、鳴滝たん達に、至極残念ながら愛を囁きに來た訳では無い」

「殺していいな?」

「まあ待て、全面的に同意だが一応言い分を聞いておこう」

一角馬怪人（with只野）の戯けた言動にまほレッドが早くも拳に気を収束させて進み出ようとするが、まほブラックが肩を掴んで押し留め、油断無くブレードを構えながらも一角馬怪人に先を促す。

「今日私が此処に出向いたのはそう、貴様らを処刑する為だ!まほレッド、まほグリーンよ!!?」

「……はあ?……」

ビシイツ!!?と指を突き付けられ、そう宣告されたレッドとグリーンは揃って訳が解らんと疑問符を上げるが、他の三人は暫く考えた後、そつちかー!とでも言わんばかりにピシヤリと額に手をやる。

「…え、何?どういう事?」

「変態は変態同士で独自の言語を発達させてつからこのパーフェクツまほレッド様にはあいつが何言ってつか解らねえ!変態予備軍のお前らが解説しやがれ」

「そうだとしたら貴様と只野はパーフェクトコミュニケーションが可能な筈だがな麻帆良一、二を争う変態が」

「まあ色々面倒だからもう答えるが、レッドにグリーン、最近割と仲良くしている女性、若しくは女の子を各々思い浮かべてみるよ」

イエローがレッドに吐き捨てるのを余所にブラックが告げた言葉に、レッドとグリーンが僅かに頭を捻り、

「…ああ……」

と二人揃って納得した様に眩きを洩らす。

一角馬怪人はそんな二人をマスク越しでも解る位に憎々し気な眼

差しで睨みやると、憎悪滴る怨声にて言葉を紡ぐ。

「ようやく己の罪が自覚出来た様だな変態共が!!?」

「お前にだけは変態とか言われたくはないよ!!?」

「黙れ!無垢なる幼児を愛する我等真実の愛を求める者達にとっての  
数少ない希望!!?永遠にその愛らしい肢体を保ち続ける究極の身体  
を持つエヴァたんにもう数年、その美を保ち続けてくれれば晴れて合  
法にお突き合い:ゲフン!お付き合いする事が可能となる夕映た  
ん!!?貴様ら二人がそんなダイヤモンドよりも貴重な奇跡の女体達  
を誑かし、我が物にしようとして最近暗躍しているのをこの私が知らぬと  
でも思うたかあ!!?私の望む合法的なチヨメチヨメの機会を潰さん  
とする者には、この幼愛怪人ロリコーンが成敗してくれるわあ!!?!!  
?」

ドドーン!!?と背後に演出の爆発音を響かせながら史上最低のロ  
リコンは高らかに宣言した。

「気持ち悪いからもう殺していいよな?」

「まったくゴミをゴミ箱にちゃんと入れとかねえからこんな臭え台詞  
をわざわざ聞かなきゃならねえ羽目になんだよなあ?」

「とりあえず貴様はもう要らないから黙っている只野教員」

余りの気持ち悪さにレッドとグリーンが吐き気を堪えている中、ブ  
ラック、ブルー、イエローの三名は手早く只野ゴミを排除しようと歩み寄  
る。

「フン、黙っている異常性愛者共が!初老の中華娘やブヨブヨした脂  
肪をぶら下げているババアと付き合っている年増趣味の貴様らに用  
は無えんだよ!!?…しかしブラック!!?少々臺が立っているとはい  
え貴様の女の趣味は悪くない!貴様が望むのならば我が軍団に入り、  
共にこの罪人共を滅ぼす機会を授けてやろうでは…」

「」「死ね!!?」「」

「な、貴様ら五人がかりとは卑怯な:ギヤアアアアアアアツ!!?」

怒りの魔神と化したまほレンジャーの全力攻撃の元に、怪人ロリ  
コーンは瞬く間に湿った赤黒い肉の塊へと変貌した。

「いや悪かったなお前ら、まさかゲストにあんな変態呼び込む程スタッフ連中が阿呆だとは思わなかったからよお……」

「バイト料を水増ししてふんだくってやったからとりあえずこの場は俺らのオゴリだ、食え」

「はい、それじゃ遠慮なくー!」

「学祭開始早々にケチが付きましたね……」

「まー私は学祭初日の夕刊発行に向けてさっそくいいネタが入ったからいいけどねえ?」

「というか私も一発ぶち込んでやりたかったアル!誰が初老アルか!?!」

只野を血祭りに上げた後、何とかショーを無事に終えて一行はカフェテリアで一息吐いていた。

「:なんちゆうか、この街には変態しかおらんのかい?」

「今更だと思うな、小太郎君……」

「失礼な、ちゃんと常識人も存在しているわ……全体の三割いかねえかもしれないけど」

「まあまあ、イカレポンチが大勢居るから学祭は楽しいんだしいじゃない」

「色々それで済ませてしまっているのではありませんか……うっ……」

「ゆ、ゆえくまだ動いちや駄目だよ、安静にしてて……」

「そーだよあんな間近に只野菌の元がいたんだから対象者のアンタは安静にしてなっ……」

『わ、私お水持つてきましようか?』

「いや、此処らの連中が今更物体浮遊位で騒ぐとは思わないけど一応止めといてさよちゃん、私行ってくるわ」

「:取り敢えず九割九分殺し位にはしておいたけど、どうせ学祭二日目には復活してるんだらうなあ……」

「何故変態とはいつもこいつも不死身なのだ?」

「というか車ぶっ壊された件で杜崎先生に襲い掛かって半殺しになってたんじゃなかったのかあの屑は……うん、言っておいてなんだけど止めようか屑の話題は、お茶が不味くなるし」

ワイワイと何だかんで一部が楽しそうに繰り広げる害虫只野の話題を打ち切りつつも、辻は先程からある考えを頭の中で巡らせていた。

…どうやってこいつらに気付かれない様に桜咲と学祭を廻ろうか

……

すなわちデートの算段である。何処の店行こうかとか服装どうしようかとか、それ以前の問題に關してではあるにしろ。

朝倉麻帆良のパラッチ和美は言うまでも無いが、中村達も恋バナ関連に對する喰い付きっぷりはそれこそ現役女子中高生以上である。記事にしない噂を広めないと誓約書まで書かせた朝倉以外に知られてはいない筈だが（実際はどうの昔に手遅れである）、辻がおかしな素振りを見せれば間違いなく尾行してくるし、それを仮に撒いたとしても、実際に手を繋いだけでもホテルでS○Xしたとか噂が広まりかねない。普段そこまで悪ノリしなかつと、祭りの熱気で半分脳味噌のトロけた現在いまの麻帆良人ならば有り得ると。辻は実に嫌な確信を得ていた。

…かといって……

と、辻は昼前から学祭巡りを共にする予定である、先程からソワソワとやたら落ち着かなさ気な後輩へと目を向け、こつそりと話し掛ける。

「…おーい、桜咲?」

「ひやつり?…あ、は、はい辻部長!!?な、なんででしょうか!?!」

が、刹那は照れているのかテンパっているのか、小声で掛けられた辻の呼び掛けに、まるで怒鳴り付けられたかの様に過剰反応して大声で返してくる。結果一瞬で集まる周りの視線に、思わず頭を抱えそうになった辻である。

…駄目だ、桜咲がこの調子では最初ハナから注目して下さいと言っている様なモンだぞ……!

「何ななに!…つちゆわくくん?二人で仲良くデートの算段くうわしらあああん?」

「ああああら二人してコソコソと…これはとても人前では言えない様な過激なプレイの計画を立てていると見たわ!!?」

「断じて違う!俺に絡むな黙つとれい貴様ら!!?」

中村やハルナ<sup>ハ イ エ ナ 共</sup>を追い払いつつ、八方塞がりな現状に溜息を洩らす辻である。

しかし、悩める青少年辻 一に思わぬ方面から助け船が出た。

「……、…あーせやせやせつちゃん!!? ウチ占い部の会場設営で場所が移動になってしもおてな! ちいと人手が足りひんでかなんものやく悪いんやけど手伝つてくれへんか?」

「え? あ、はいお嬢様!!? 願っても無い…い、いえ、それは大変ですね、手伝わせて頂きます! 皆さん、申し訳ありませんが私達はここで…」

木乃香の何だか今更な感が無いでもない取って付けた様な頼み事に、一瞬呆けてから勢い込んで立ち上がる刹那。

「はいはい了ー解」

「また後でね木乃香ー?」

それに対して特に誰が何を言うことも無く、全員がにこやかな笑顔のまま二人を見送る。

「んー悪いな皆々」

「すみません、失礼します…!!?」

自然に別れの仕草を醸し出す木乃香と違い何だか慌しい刹那<sup>ナチュラル</sup>であったが、出て行く際のすれ違い様、物言いた気な視線を辻はしっかりと捉え、また後でな、と小さく呟く。刹那は顔を瞬時に赤く染め上げながらもやはり小さくはい、と返してその場を後にした。

「…じゃあ私も、そろそろ失礼させて頂きますね?」

木乃香達が出て行ってから間をおかず、千鶴がそう言い出した。

「あれ? 那波さん何か予定あるの?」

「いや、神楽坂、追及すんな」

「は?…なんで豪徳寺先輩が言うわけ?…なんでかなあ〜ん?」

「てめえ朝倉…!!?」

明日菜の問い掛けを豪徳寺が遮り、朝倉が態とらしく怪訝そうな顔で尋ねる。千鶴はうふふと笑うと、その笑みを悪戯っぽいものに変えて、そう言った。

「だって少ししたら豪徳寺先輩に学祭を連れて頂くんですもの、お化粧も直さないのじゃあ失礼でしょう?」

「……おお……」

にこにこ余裕の笑顔のまま言つてのけた千鶴に、思わず一同が感嘆の声を洩らし、豪徳寺はやっちまったとばかりに顔を片手で覆う。

「豪徳寺先輩、ではまた後で」

「……………おおよ……………」

力無くも何とか応える豪徳寺に満足そうな顔でひとつ頷くと、千鶴はご機嫌な様子でカフェテリアを後にした。

残された人員は暫し無言でグツタリと項垂れる豪徳寺を見ていたが、

「……んだよ、文句あんのか？」

「……いえいえ……」

と追い詰められた獣を思わせる目付きの豪徳寺に、とぼつちりは御免だと張り付いた様な笑みで首を振る。

「うっしや男性陣移動ー、金は置いてくからレディ達はまた後でなー」  
中村がそんな言葉と共に他のバカレンジャー及びネギコタを促して立ち上がる。

「……何を企んでいるのですか？中村先輩？」

そんな中村にグツタリしていた夕映がムツクリと半身を起こし、目の濡れタオルを取りながら尋ねる。

「ヨイヨイ夕映っち、無理すんなもう暫く寝てろってー、なんも企んで無えよ、ほら誰とは言わねえがこつからデートよD・E・T・E！」

「正しくはDATEだ阿呆」

「黙つてろタラコどうでもいいわ!!？ンなもんで男子で作戦会議だよ作戦会議ーなもんだから追いてくんなよ女性陣!!？」

「はいはい了解」

「にひひひ結果報告楽しみにしてるよん豪徳寺せ・ん・ぱいっ!!？」

「中村殿の発案は自動的に却下でお願いするでござる先輩方、碌なことにならんでござるからな」

「五月蠅え腐れた同人作家が腐界に埋もれてろ!!？」

「どうどう豪徳寺、任せておいて長瀬ちゃん」

「屑は調子に乗らせん、安心しろ」

「信用無えなあくわえでちゅわあん!!?この俺様のふがっ!!?」

「黙つてろ。…じゃあ、また」

「おいなんで俺まで…」

「あ、あの大豪院さん、僕色々予定が…」

「いいから来い」

やや慌しく出て行つた男性陣一行の後ろ姿を見やりつつ、明日菜がポツリと呟く。

「……、大丈夫かしらねーあの人達…」

「んー千鶴と豪徳寺の方はどうなるかわからないアルが、辻と刹那の方は失敗する方が難しいから大丈夫だと思うアル」

「な、那波さん凄いですよね……私も、あれ位勇気が、あればなつて…」

「…のどかは充分勇気があるですよ。まあ他人事で無いから焦る気持ちは解るですが…」

「まああの人はねえー…つていうか他人事じゃないのはアンタもでしよ明日菜」

「づっ!!?…いい、いいのよ私はまだ時間あるんだから……!!?」

「うん、当日に死にそうな顔でワタワタしてんのが目に浮かぶわねー」

『なんだか青春、つて感じですよね!!?私今何だかすっごく嬉しいです、こんな風な、恋バナっていうんですよね!ずっとやってみたかったんです!!?』

「…さよちゃんの経緯知ってる身としては文句付け辛いんだけどさ……こっちは楽しんでる余裕なんて欠片もありやしなのよー!!?」

「暴れなさんなって、成るように成んでしよー?」

「全力で他人事な感じで言うなあー!!?」

「…何なんだ那波の奴はそんなに俺がテンパってんのが面白えか畜生ーっ!!?」

「暴れんなや豪徳寺。俺の見たところあの娘も案外余裕は無さ気なんだがなー……」



異形溢れる街並みを歩きつつ憤懣やるかないといった様子で怒れる豪徳寺の横で、此方は気楽に宥めに入る中村。

「まあ那波ちゃん遊んでる感じの娘じゃ無いものねえ。結構無理して気張ってるかもしれないんだからあんまりキツイ態度で接しちゃう駄目だよ豪徳寺?」

「貴様の女の扱いが熟達しているとも思えん。デリカシーの無い言動にだけ気を付けて後は慌てず騒がず、オマケにキレずに思うままに接してやれ。ガチガチに畏まった貴様が見たい訳でもあるまい、那波後輩も」

「……五月蠅えな、解ってるんだよそんな事は」

山下と大豪院の助言にふて腐れた様に唸りながらも、豪徳寺は素直で無い了承の意を返す。その様子を何処か眩し気に見やりながら、辻は静かに言葉を述べる。

「…言っておくが、俺の方には間違っても貴様ら余計な茶々を入れに来るなよ? 尾行なんざ持ったの他だぞ」

「え〜一ちゃん何よ何よ? 俺の方にはって何か大事な要件でもあるのかしら?」

「白々しいわ」

辻はピシヤリと中村のグネグネした言語を遮り、告げる。

「今日桜咲と俺が学祭廻りするの知ってるだろ、お前ら」

「……」

ネギと小太郎を含めて、その場の全員共通の感想は、まさか知られていないとも思っていたのかこの鈍チンは。であったが、辻は構わず言葉を続ける。

「いいか、俺と桜咲の間に何があるうとお前らには関係無いんだからな。普段の悪ふざけはまだしも今日まで邪魔をしやがったら承知せんど」

「…色々言いたいことはあつけど、まあいいや、俺達は付いて行きやしねえ、約束すんよ。…ただな、一ちゃん、一つ答えやがれ」

中村は頭をガシガシと掻きながらも辻の言葉に了解を返し、ただその先に言葉を続ける。

「…女の子はさあ。どうでもいいと思ってる奴をデートに誘ったりな  
んざしねえからな？」

そこら辺、解ってんのか？と中村は最前までのヘラヘラした顔を  
引つ込め、告げる。辻は何時に無く真剣な中村の目から視線を逸らさ  
ず、言葉を聞き終えると小さく、されどはつきりと返した。

「……理解わかってるつもりだ、俺は」

「………そか」

中村は頷くと、ヘニヤリと表情を崩して前に向き直り、歩みを再開  
する。

「うっし、なら俺らが心配すつことは本気になにも無えな。その軍  
艦頭はどうしようも無え童貞野郎だがそこら辺は弁えてっからいい  
として…」

「…本気に今日辺り決着つけてやろうか脳無し野郎？」

「極めて遺憾な事に全体的には真面目に話しているから、抑えろ豪徳  
寺」

息を吸うように他人を *d i s*る中村に豪徳寺が右拳を光らせつつ  
ドスの効いた声で唸るが、大豪院が心の底から不本意そうな顔をしな  
がらも押し留める。当然中村はそんなやり取りを気にせず言葉を紡  
ぐ。

「後はネギ、てめえだオラ」

「え、っ、僕ですか？」

黙って小太郎と後方を付いてきたネギが驚いた様に声を上げる。

「つたりめえだコラ、お前も午後から本屋ちゃんとデートだろうがよ」

「デ、デートじゃ無いですよ…!!？」

ネギが言葉を言い終えぬその内に、ゴドギャン!!?と中村の踵落と  
しがネギの鼻先を掠めて地面に小規模なクレーターを作る。

「んんんん？何か戯けた戯言が聞こえた気がしやがりましたけどネギ  
ちゆわん、何か言ったかしらあくん？」

「……いえ、そうですね、僕、午後からのどかさんとデートでした……」

目が全く笑っていない中村の濁りニツゴリした笑みを向けられて、ネギは脂  
汗が背中を流れるのを感じつつ最前の言葉を撤回する。

「それでいんだよネギ。正直お前の歳じやまだまだピンとこなくて当然かもしれないねえがな、本屋ちゃんはお前に告白してんだ。…想いに応えろなんぞと強要は間違ってもしねえが、その辺りを意識して、ちゃんと接してやれ。いいな？」

「……はい!!？」

「うし、いい返事だ」

中村が普通の笑顔に戻り、ワシヤワシヤとネギの頭を掻き回す。

「……………」

「何か言いたげだねえ、小太郎？」

その様子を心無しかムスツとした表情で眺める小太郎に、山下が尋ねる。小太郎は山下の顔を若干鬱陶し気に睨むが、邪気の無いほんわかした笑みを返されてガツクリと肩を落とし、唸る様に内心を語り出す。

「…まあ、アレや。兄ちゃんらやネギのあれそれを下らんとか、んな事言いたい訳や無いんや」

「あれ？そうなんだ、小太郎位の年頃ならそんな風に考えてても不思議は無いからさあ、てつきり女なんぞに現抜かしとらんで今日の大会予選の事考ええやー!!？…とか思ってるのかと」

何やら矢鱈と上手い小太郎の声真似を交えつつ返してくる山下を半眼で見やりながらも、小太郎は言葉を紡ぐ。

「…前に姉ちゃんに拳骨喰らわされとるからな。『アンタが家族大事にしたいんやったら、家族になる前の段階大事にしとる連中軽く見るんを止めえ。男女の付き合い言うんは、アンタが考えとるより万倍大変なモンなんやから』…言うて」

「…ハハッ、そつかあ良いお姉さんだねえ」

懐かしさの中に一抹の寂寥感を滲ませつつも、今は別れ別れな義姉との思い出を語った小太郎に対して、山下は余計なものは考えずに、ただ小太郎の家族としての千草を褒める。

「ふん、自分が実践出来とらん行き遅れやけどな……まあ兎に角、正直面白う無いけど文句付ける気は無いんや。ただなあ……」

「ただ、何だ？」

唸る小太郎の逆隣を並走していた大豪院が先を促す。

「いやな？あの団子頭の姉ちゃんも意味深な事言うよつたやろ。無粋  
なんか承知の上で、なんや呑気にラブコメしててええんかと思うん  
や」

「……………」

小太郎の言葉に、俄かに表情を曇らせて山下と大豪院は口を噤む。

「い、いやな兄ちゃんら。せやから俺も女関連のそれに文句言いたい  
訳や無いねん、ただ…」

「いや、小太郎。お前の意見にも一理あるのだ。のつぴきならない事  
態をあいっは起こしかねんから、な……」

空気を一変させた二人の様子にやや焦りつつ弁明する小太郎を宥  
め、大豪院が心持ち厳しい表情のままそう返す。

「…まあ、超ちゃん如何にも訳有り、って感じだったからねえ。…出来  
ればぼぼ初仕事が可愛い後輩の捕縛、何て事にならなきやいいけど  
……………」

山下も顰めた表情のまま何とは無しに空を見上げる。対照的に地  
面へ視線を落とす大豪院だが、二人が思い返すのは、数日前の情景で  
ある。

「…フム、私が何を企んでいるか…と。そう聞きたいネ、大豪院？」

「そうだ。此処まで迷惑を掛けた以上、黙りは通用せんと思え」

ムムム、と何処か態とらしく、戯けた様子で唸る超<sup>チャオ</sup> 鈴音<sup>リンシエン</sup>に対し  
て、怒った様に眉間に皺を寄せ、真剣そのものに尋ねるのは大豪院で  
ある。

事はネギが魔法関係者に正式に紹介され、学祭中の仕事に於ける説  
明を受けての帰り道。黒尽くめに追われるローブ姿の人物を、美少女  
センサー反応、乙女の危機じゃあー!!?との奇声と共に突貫した中村  
に引き摺られる様に助けに入れば黒尽くめの集団はピタリと静止。  
暫しして現れたのは高音を始めとする三人組とガンドルフィーニと

いう名の黒人教師。ローブの中身を確認すればあらビツクリ、3ーAの一員にして大豪院、古の良き拳の道に於ける？シンジエンドウイシヨウ争？手、超 鈴音であつたのだつた。

超は今回の会合のみならず、以前から手を変え品を変え魔法関係者の秘匿する案件に対してピーピング《覗き行為》をやらかしていた。魔法使いにとって魔法の秘匿は何よりも重んじねばならないものであり、再三の通告を無視して再犯に及んだ超に最早情状酌量の余地は無し。規則ルールに従い超の魔法に関する記憶を消す、というのがガンドルフイーニ達魔法関係者の言い分だつた。

それに待つたをかけ、超を庇い立てたのがネギと大豪院である。言い合いの末、最終的に超が身柄を拘束される事は無くなつたが、規律に関して厳格な高音等はかなり立腹な様子で去つて行つた。

未だ魔法関係者の大部分と関係が良好とは言えない中でのこの一件は、小さく無いしこりを両者の間に残してしまつたと言える状況である。

故にこそ大豪院は、超の真意を確かめるべく動いたのだつた。

「そうネ、確かに今の一件は一つ借りが出来たと言てイイ。しかしスマナイね大豪院、軽々には話せぬ問題ヨ、私のこれは」

「…それでは筋が通らぬと解らぬお前ではあるまい。あまり見損う様な真似をするなよ、超」

「…フム……」

「待て待てんな喧嘩腰で尋ねちや聞き出せるモンも聞き出せ無えよポチ」

尚もはぐらかす超の言葉に一段階目を細め、剣呑な口調で告げる大豪院に、困つた様に小さく唸る超。膠着状態になり掛けた両者の間に中村が割り込み、大豪院を宥めに掛かつた。

「ならば如何様に取り計らうというのだ脳無し？」

「何時に無く口が悪いなタラコ。簡単だ、お前が超ちゃんを庇つた時に、何でそうしようと思つたかを正直に言つてやりやあいい」

「…何だと？」

あつげらかんと言う中村に眉根を寄せる大豪院だつたが、

「情に訴えろ、ってんじや無えよ。単純にお前は超ちゃんとかん中でいつちやん付き合い長えだろが?…お前の友達<sup>ダチ</sup>は好意を無にする様な奴なのかよ?」

との言葉に一瞬目を見開き、暫しして頷く。

「…最近やたら真面じやないか、馬鹿村めが…」

照れ隠しの様にそう言い捨てると、大豪院は超に向き直る。

「…超」

「何かな?」

「俺はお前を先程庇った。しかしそれは、お前が友だからと無条件でそうしたのでは無い。…俺は関係性そのものを免罪符であり理由として語る、友人を助けるのに理由は要らない、などという思考停止の言葉を正直好いていないからだ」

「フッフ、大豪院のそういう所は嫌いではナイヨ、私は」

ある意味友達甲斐の無い台詞をはつきりと告げる大豪院を愉快そうに笑って、超は先を促す。

「例え竹馬の友であろうと、いや、友だからこそ諫めるべき所は諫めてこそその友胞だ。…お前は他人よりもずつと頭が良いからか、誰に何も言わずにしばしばとんでもない事を仕出かす。天才の性<sup>さが</sup>と言えどもれまでだが、ならばこそお前を此処で野放しにすべきでは無い、と思う俺がいる」

「…ならば何故、私を庇い立てしてくれたのカナ?」

淡々と告げる大豪院に超は動じた様子は無く、寧ろ楽しんでるかの様に尋ね返す。その問いに対して、大豪院は真っ直ぐに己の思うがままを告げた。

「お前が本当に他人を害する前提で何かをやらかす女では無いと俺が信じているからだ」

「……………おお……………」

「茶化さずに聞け、この場で巫山戯た返答は要らん」

ストレートに告げられた信頼の言葉に超は目を丸くして驚くが、大豪院は照れるでも無く釘を刺すと言葉を続ける。

「お前は意地こそ悪いが性根が腐っている訳では無く、<sup>マッドサイエンティスト</sup>狂化学者特

有の倫理観欠如も見られない。ならば今回の一件にしても已むを得ない訳があり、必要に迫られて行っているものだと思える迄だ。友を助けるのに俺は理由が要る。お前は助けるに足る理由を持つから助けた、それだけだ」

大豪院は一旦言葉を切ると超の目を新たためて見据え、真つ直ぐに言葉を放つ。

「超、一体何をしようとしている？魔法使いについて知っているならば俺達の立場も知っているだろう。事の次第によつては力になつてやる。曲がりなりにもお前の言う通り貸しを作つたのだ。：俺達は少なからず関わつた、ならばお前も説明責任を果たせ」

超はそれまでの飄々とした笑みを消し、僅かに細めた目で静かに大豪院とその後ろのネギ達を見つめる。

「：フム、後ろの皆さんも同じ意見カナ？」

超の確認に、言うまでも無いと辻達は頷く。刹那や小太郎は超に対して、バカレンジャー程に面識は無い。しかし、この人が良い男達が信じている以上は、自分達も信用する。そのつもりであった。

「アイ、解たよ。条件云々を前に出した交渉事ならば幾らでも煙に巻くつもりだが、私を朋友ポンヨウとして信を置く、などと言われてしまてはネ。私も誠意に応えぬ訳にはいかないヨ」

ポン、と手を打ち、応じる姿勢を見せた超に、大豪院も表情を僅かに緩ませる。

「：：そうか」

「ただ、ネ。誠、申し訳無いがポチ、少しの間でいい。事情わけを話すのは待つてくれないカ？」

「何？」

再び渋面に戻る大豪院に、超はまあ落ち着くネ、と制して話し出す。「私が関わっているものは私一人で行っている訳では無いヨ、話して良い事、悪い事も纏めねばならない。それに大豪院達は、ネギ先生達と学祭の大会に向けて修業をしていると聞くネ。今、話しても話さなくとも、どちらにしる私の案件にまで取り掛かる余裕は無いのではないカナ？」

「……むう……」

ある意味最もな事を指摘され唸る大豪院だったが、暫ししてから再び超に呼び掛ける。

「後に真実を語ると誓えるか、超？」

「無論だとも。私も拳士の端くれだ、拳に賭けて誓おうじゃナイカ」

「……わかった」

俺に免じて引いてくれ、と大豪院の言葉に、一同は超への追求を止めたのであった。

「……まあ大豪院、同門っていうのかな？の超ちゃんを信頼する気持ちは理解<sup>わか</sup>るけれど……」

「皆まで言うな。問題を起こしている時期からして、超はこの学祭期間中に何かを仕出かそうとしているのは間違いないだろう。こと今日に至るまでこちらに訪れてはいない以上、問い詰めに行くのが筋だとは俺も解っている、が……」

「超ちゃんは思わせぶりな言動こそするが嘘をつくような奴ではない。もう少しだけ様子を見させてくれ、ってなトコだろポツチン？」

何時の間にかネギへの忠告を終えて近付いてきていた中村が、大豪院の台詞を遮ってそう言った。

「……………」

「何だかんだでもう長い付き合いだ、これぐれえは解るつちゆうのと。野郎のことなんざ解つても全然嬉しか無えがな」

何も言わずに半眼で睨み付けてくる大豪院をケタケタと笑ってそう告げる中村。

「ま、いいんじゃないやねえか？あの中華娘 part 2 が何企んでつかは知らねえが、学祭中にやらかすなら何やらかそうが祭りの華だぜ。それこそ麻帆良存亡の危機なんざ毎年の様にあるからな」

「そんな所が自分の生活している場所だなんて認めたくないが、事実なんだよなあ……」



気楽そうに中村に賛同する豪徳寺と今更ながらにトンデモ都市な麻帆良の実態に遠い目をする辻である。

更にはネギが進み出て、大豪院に対して言葉を放った。

「恥ずかしい話ですけど、超さんがどういう人なのかは大豪院さんの方がよく理解していると思います。大豪院さんが大丈夫だと思っただったら、超さんを信じて待つのがいいんだと思います。短い期間ですけど、教師として僕も超さんと接してきました。悪い人じゃないって、僕も思います」

そう言われて大豪院は、少しきまり悪げに頭を掻くと、ネギの頭にポン、と手を乗せ、ややあつて頷いた。

「…逢引には準備も重要だろう。もう行け、辻に豪徳寺」

「解つてんよ、冷やかしに来るんじやねえぞでめえら」

「右に同じく。一刀両断にされたきや話は別だけどな」

それから暫く歩いて、大豪院が午の刻に入ろうかという大時計を見咎めて二人を促す。辻と豪徳寺は出歯亀行為に対してこれでもかと言う程に釘を刺してから、足早にその場を後にする。

「…で？本当に中村は尾行したりしないのミスター出歯亀の癖に」

日頃の行いを鑑みるに到底大人しくしてはいないだろうと、半ば確信に近い思いを抱いていただけに山下は疑わし気な口ぶりで中村に尋ね掛ける。

「……フツ！」

中村は無意味に前髪をかき上げて格好付けると、ドジャアアアン!!?、と効果音の聞こえてきそうな程見事な〇ヨ〇ヨ立ち(ヴァレンタイン大統領ver)を決め、高らかに宣言する。

「ブアカめが!!?こんな一ちゃんはじめと薫つちのデート風景なんつうクソ面白え事態を黙って見送るなんざ例えトムが許そうともこの俺様が許さねえつてもんよヌアハハハハハハハハ!!?!!?!!?」

「誰だよトムって」

「ゴダイヴァ夫人を覗き見たピーピング・トムのトムではないか?」

端から見れば狂人の様なテンションの上がり様を見せている中村

を冷めた目で見やりつつどうでもいい会話を交わす山下と大豪院。

「で？実際どうするつもりだ覗き魔。彼奴らはやると言ったら殺るのはそのミジンコ並の知能でも解つていように？」

「フオッフオッフオッフ、なーに俺あ約束はきっちり守るぜ、あいつらの後は追いていかねえ誓つてな」

半目の大豪院の疑問に不気味に笑いながら中村は自慢気に策を披露する。

「何故ならば一ちゃんには俺が何か企むまでも無く剣道部の副部長、Sを主体とする盗撮…もとい、サポート集団が万全の体制で追いて廻るからなあ!!？軍艦頭にや俺がシヨアの時に制裁加えてデート中は決して手を出さねえ様に調教しといた○つとマスク共を同じく向かわせた、後はリアルタイムで映像公開のオ・タ・ノ・シ・ミつて訳よフオオオオオオオオオツ!!？」

「本当に今更だが最悪だなこいつは」

「殺して埋めておいた方が世の為人の為なんだろうけどねえ……」

「なんだなんだよおめえ様方、いい子ちゃんぶつてもぶつちやけ興味あんだろお？俺様に対してそんな態度取つてるとトンデモ衝撃リアルタイム映像見してやんないんだゾ」

「要らんわ（ないよ）」

クネクネとウザつたい中村に声を揃えて吐き捨てると、二人は別々の方向へ足を向ける。

「およ？何処行くのよおめえら？」

ムンクの叫びを270度斜め下に捻った様なポーズを取りつつ尋ねる中村。

「中武研で昼前から演武を行うからな、下準備だ。どうせ何時もの様に連中を一通りブチのめさねば俺の言うことなど聞かんだろうしな」

「僕は夕方の予選に向けて最後の調整。…正直今回は、他に構つてる余裕は無いからね」

「…ほうかいほうかい」

中村はやや真面目な顔に戻って頷き(振れたままではあるが)、親指を立てて激励を送る。

「まあカンフー美少女嫁にしてんだからそのしつとマスク共の襲撃は甘んじて受け止めやがれリア充タラコが。山ちゃんはあれだ、死ぬなや本気に」

「死ね」

「うん、じゃあまた」

何とも温度差のある返答を各々返しつつ、二人は雑踏に紛れていった。

一人残った中村は、うくと奇妙な体勢からバキボキと身体中の骨を鳴らして二足歩行に戻ると、ブラブラと無意味に左右へ揺れつつ歩き出す。

「さくてデート開始迄トキターにブラついてますかねじゃあ。なんだかんだで全員予定詰まってるから午前のパトロール俺だけになってるしよお……さーよちゃんも今日はクラスの子とはしやぎてえみたいだし……あくあなんか俺だけ侘しいねえ……」

スライム娘共迎えに行きがてらキャシーの土産見繕うか……待てよ、学祭中ならあいつ連れ出して空飛ばせてやってもいんじゃないか？、などと微妙に不穏な呟きを洩らしつつも自称非リア充は歩き出した。

「おおお嬢様、私何か変では無いでしょうか……!?」

『大丈夫や大丈夫やせつちゃん。テンパリ過ぎてるテンション以外は超可愛く決まってるで〜』

時刻は待ち合わせ時間の十八分前、刹那はガチガチに緊張しながら、待ち合わせ場所の麻帆良大庭園噴水前にて頼みの綱である木乃香に携帯電話にて縋っていた。

刹那の服装は格子の細かなグレンチェックスカートで知的且つ上品な印象を出しつつも丈はちよっぴり短めに。トップスはショーツ丈のシャツを選ぶ事でメリハリを持たせ、ボディラインを強調することでスレンダーな刹那の魅力をよく現していた。何時ものサイドテールを下ろし、ワンポイントに可愛らしい花飾りの髪留めを付けた

その姿は木乃香の言う通り、年頃の女の子らしく愛らしい魅力に溢れているが、生まれてこの方デートなどした事の無い刹那は何もかもが不安で仕方が無いらしい。

『せつちゃん〜？そんなにガツチガチやと辻先輩まで気不味くなるえ〜？あの人へタレな所があるんやから、せつちゃんも出来るだけ自然体で居らんと竦み上がってまうで〜？』

「そ、それは重々承知しているのですが……!!？」

何気に辻をdisりつつの木乃香のアドバイスだが、残念ながら言われて直るものならば、デートのデの字始まってもいないのここまでテンパリはしないのである。

……未だに実感が湧かない……これから辻部長と、……で、デートをするだなんて……

…自覚してから、まるで私が私じゃ無い……!!？……本当に、どうすれば……

どうにも制御出来ない想いに悩む刹那だったが、そんな様子を遠くから眺めていた木乃香は、何やら当事者で無い自らにまで伝染して来た緊張を一震いして打ち消すと、柔らかな声色で刹那に告げる。

『せつちゃん、辻先輩とデートすることになって嬉しいやんなあ？』

「お、お嬢様、正直今真面に喜べる様な余裕は……!？」

『ええから考えてみてえな、せつちゃん。辻先輩と学祭廻れるんは、嬉しいと思うんか？』

ある意味悠長な木乃香の質問に遠回しに噛み付く刹那だが、再度尋ねられたその問いを黙って胸の内反芻する。

「……はい、嬉しいです」

『ん、そか……』

木乃香は笑い、徐に刹那へ言葉を放つ。

『せやったらせつちゃん。その気持ちを表に現す様にして、辻先輩と楽しめるせつちゃんに自分を持ってくんや』

「…楽、しむ……」

『せや。せつちゃん、当たり前やけどデートは嫌なもんや無い、好きな人と楽しむもんや。辻先輩もせつちゃんと同じ位緊張しとるやろけ』

ど、せつちゃん楽しくデートしたいから来るんや。…あないに緊張って掴んだデートやで。せつちゃん、目一杯楽しんでえな』

木乃香の言葉に、刹那は僅かだが緊張が解けるのを感じた。

……そうだ、私は……

…好きな人と、デートに来てるんだ……

楽しまないでどうするこのだ。それ程迄に焦っていたことを自覚して、ふとそんな自分をおかしく思う。

クスリと密かに笑った刹那を見たか聞いたか、木乃香は漸く人心地をつく。

そして。

『…あー来たでせつちゃん!!? 流石辻先輩やな、十五分前びつたりやー』

「え、い、いらつしやったのですか!!? ま、まだ私心の準備が……!!?」  
『せつちゃん、その準備は未来永劫決まらへんから後は当たって砕けろや。じゃあ切るで、あんじょうきばりや、せつちゃん』

「お、お嬢様、待つ!!?」

ブツリ、と無情にも電話は切れ、再び最大限に緊張した刹那の視界に、刹那の姿に気付いて片手を上げる辻の姿が映る。

「……済まない、待ったか桜咲?」

「い、いえ!!? 私も、今来た所です!!?」

「あの～すいませくん、これに載っているこの建物は～此方の道で合ってはいりますか?」

「ん?……ああ、そうだよ。真っ直ぐ行って、自由の女神像のレプリカがあるから、それを目印に左へ曲がればいい」

「そうですか? どうも～親切に、ありがとうございます～」

「いやいや、じゃあね」

ぺこりと頭を下げて去っていく少女の後ろ姿を見やりながら、

道を訊かれた麻帆良の一般教師は、なんとは無しに思った事を口に出す。

「…やっぱり年々派手になってきてるよなあ、麻帆良の学園祭は。外部から来る人までコスプレして来るんだから……」

でも、ゴスロリ衣装に日本刀だなんて、ちよつと何を狙つての扮装か解らないなあ、と教師は残りの感想を己の内で呟き、巡回に戻る。

「うふふふ〜」<sup>め</sup>「さん…漸く逢えますなあ〜……」

## 2話 少年少女の恋模様 〱辻と刹那〱

「……其処の二人！何を白昼堂々と不純異性交遊に勤しもうとしているのですか!!？麻帆良の一学生としてもつと清廉且つ健全な付き合いを……！」

「すいません本つ当すいません!!？この女真面目過ぎるだけで決してケンカ売ろうとかそういう話じゃないんで盛り上がっている所申し訳ありませんがちよつといいつすかねえ!!？」

「キャアツ!!？」

「な、何だ一体君達は!!？」

麻帆良学祭初日の昼前とある公園の一角にて、見つめ合いながら何だかひどく良い雰囲気醸し出している一組のカップル。そんなこれでもかという程に第三者お断りな空気を完全無視した形で形の良い柳眉をキリリと上げて。高圧的な空気を出しながら詰問する高音・D・グッドマンを押し退け、必死に頭を下げながらも二人の間に割り込むのは篠村 薊であった。

「よ、良樹君…何この人達？」

「愛美ちゃん下がっててくれ。オイ君達、何が気に入らないか知らないが常識を考えてくれたまえ!!？取り込み中と見て解らないか!!？」  
「それは一目見て重々承知の上ですとも！…それを押し上げていた事があるんすよ。一つ堪えて、どうかお耳を……！」

背後に彼女を庇って警戒心も露わに篠村と高音を睨み付けるカップルの男子。篠村は睨み殺さんとでもする様な隣りの視線も合さる非、友好的目線の十字砲火にもめげず、低姿勢のまま男子に近寄り、耳打ちをする。

「…実はもうすぐこの通りを『しつ〇団』のクソ野郎共が見回りに来るとお伝えしたくてですね……！」

「…何だと!!？」

篠村の言葉に、俄かに顔を青く染め上げるカップル男子。

『し〇と団』とは、麻帆良内では言わずと知れたモテない男達の極めて後ろ向きな友情で結成されたりア充逆恨み集団である。色々小難し

い理屈で理論武装してはいるが、その実態は単なる僻みを燃料とした、カップルに私刑を行いただけの醜い男共の集まり。当然ながら毎回広域指導員達の肅清対象になっていくが、何度壊滅させられても蜚言の如く湧き出しては事あるイベントの毎にカップルの男子のみをリンチしに現れる、シリーズ人間のクズ共だ。

当然ながらそんな連中に絡まれる事を良しとしないカップル男子は、俄かに真剣な表情となり篠村の言葉に耳を傾ける。

「…どの程度で此処へ？」

「もう間もなく。俺らも絡まれかけたのを逃げてきた口つすよ……実の所そつちが機嫌悪いのも奴らに邪魔された所為でしてね、すいません……」

「いや……よく教えてくれた、礼を言う。そういうことなら直ぐに退避をさせて貰うよ」

頭を下げようとする篠村を手で制し、軽く頭を下げ返して彼女へ振り向くカップル男子。

「愛美ちゃん、今直ぐ此処から移動しよう。少し厄介な連中にこのままでは絡まれてしまうからね」

「え……？、一体どうしたの良樹君……？」

「道すがら話すよ、兎に角早く……」

戸惑う彼女の肩に腕を回してそつと先へと導きつつ、カップル男子は最後に篠村達の方へと振り返り、一つ頭を下げ去っていった。

「……………ふう……………」

「…篠村、何ですか今の事実無根な出鱈目は？」

如何にか上手くいった世界樹の魔力影響地点からの追い出しに篠村が安堵の息を吐き切る間も無く、高音が相変わらずのキツツイ視線で篠村の方便を詰る。そう、『〇つと団』が来ている等という情報は真つ赤な嘘なのであった。

「嘘も方便って言うだろうが。大体漏れ無くカップルに喧嘩売って、拗れて終わるのが目に見えてるお前にどうこう文句を言われる筋合いはないわ」

「私達は何も疚しい行為をしているわけでは無い以上、たとえ事情を



解さない一般生徒達に恨まれることになるうとも、可能な限り正々堂々と事に当たるのが筋というものでしょう!!? 私たちは誉れ高き関東魔法協会最大の一派、麻帆良学園魔法組織の一員なのよ!!?」

「…の・純粹培養おせう様はボケた誇り翳しやがって……!!? ンな訳の解んねえ矜持よりも俺は今後の安寧な学園生活と円満な人間関係を取りてえんだよ石頭女が!!? 融通が利かねえのもいい加減にしやがれ却って時間掛かつしい事無えのお前のやり方は!!?」

篠村と高音は額を突き合わせる様な至近距離で睨み合い、意見を衝突させる。

「っ…それでも篠村……!!?」

「しかしも案山子も無えんだよ高音!!?、っっか忘れて無えだろうな、お前の習得魔法構成じゃ今回の仕事に向かねえから、緊急時の移動以外において今回ばかりはお前は俺のサポートなの!!? 黙って従えとは言わねえけど少しは俺に協力してくれよ!!?」

「……………!!? ……っくっ!!? ……」

「つくじやねーよ!!? ……あーくせめて愛衣がいりやもう少しスムーズだつてのに……………」

どうにも噛み合わない高音との連携に、天を仰いで嘆く苦勞人、篠村である、ちなみに良き後輩である佐倉 愛衣はガンドルフィーニ教師と別の区域を巡回中なのであった。

そんな風に険悪になり掛けている二人の間の空気を、ピーピーという無粋な電子音が掻き乱す。

「…っ、また告白生徒か休む間も無え……!どっちだ高音!!?」

「南南西、距離約700!!? ……多い上に距離があるわ、緊急移動するわよ篠村!!?」

「…わかつたしょうが無え!!?」

緊迫した高音の言葉に篠村は頷くと、高音が足元にある己の影を媒体に展開したゲート転移魔法の中へ高音と身を寄せ合って飛び込んだ。

「…其処の広場!!? 探知機の反応からして少なくとも十数組が一斉に告白行為へ及ぼうとしているわ!!?」

「十数組ってなんだよ畜生!!? ねるとんパーティーでもやってんのか

バカ学生共人の気も知らねえで!!?」

学園中に予め予定していたポイントの一つ、高台に位置する校舎に繋がる階段下から湧き出した二人は寄せ合っていた身を解く間ももどかしく前方へと疾走り出す。

『ねるとんパーティー告白タイムに入りまーす♡』

『『『わーっ♡』』』

「マジでかよ!??...ええい高音、洩れた奴がいたら任せたぞ!!?」

「ちよ、篠村!??」

駆け付けた場にて正しく集団見合いパーティーに勤しむ男女の集団に篠村は絶叫するが直後に首を振って気を取り直し、高音に一声掛けると集団目掛けて飛び出す。

「魔法の射手...!??」

「ふっ!!?...!??」

己の周囲に無数の光球を生み出しながら前進する篠村は、タイミングをほぼ同じくして別方向から踏み込んできた肌の黒い二丁拳銃使いー龍宮 真名と視線が合い、互いに目を見開く。

「...（右翼任せた!!?）、連弾セリエス 雷の11矢フルグラリス!!?」

「...（了解だ!）はあっ...!!?」

困惑も一瞬、刹那のアイコンタクトで互いに担当範囲を分担した二人は、ねるとんパーティー集団の懐へ飛び込むとそれぞれ魔弾と銃弾にて前後左右の罪人要告白警戒者を雷撃と神経毒の副次効果によって流れる様に行動不能に変えた。

「た、大量殺人だーっ!??」

「し、篠村、無茶をし過ぎよ!??」

「映画の撮影です、お気になさらないで下さいー...:仕事のうえでは時に冷酷になることも必要だ、ネギ先生」

「気になる点、要望等ありましたら麻帆良映研までご一報をー...:のタイミングで他にどう止めようがあったってんだ、高音?」

「二に（それに）しても...:」

宙を舞い、人形の様に崩折れる男女を目の当たりにして慄くネギと

高音へ事も無げに返してから、篠村と真名は互いを振り向き、言葉を交わす。

「やあ篠村先輩、奇遇だね。そういえば此処らのポイントはどちらかという先輩達の担当だったね、差し出がましい真似をして申し訳ない」

「いや、告白生徒の数に予想のつかない、しかも警備区域の境に位置する曖昧なこのポイントでの反応だ、咄嗟のお前の判断は至極全うだよ。こちらこそ煩わせて申し訳ない」

「そうかい、そう言つて貰えると助かるよ。…しかし一般人相手とはいえこの制圧力、魔法生徒内白兵戦最強の名は伊達じゃないらしいね？」

「ンな実際に試せる訳も無い根拠ゼロの噂を信じんなよ。大体その口ぶりじゃあ、どう見ても俺と互角以下の仕事をした様には見えないお前自身の遠回しな自画自賛に聞こえるぜ？」

「おっと失礼、そんなつもりは無いんだけどね…」  
「まあいいさ、そんなことは。…それよりもネギ先生、妙な所で遭遇うなあ。パトロールご苦労様だ」

軽く頭を下げる龍宮を制して礼を返し、篠村はネギへ水を向ける。  
「い、いえ…これも僕の仕事ですから…：…それよりも篠村さん、一般人相手に攻撃魔法はちよつと…：…」

「…これでも電撃傷や高圧電による心臓停止等のリスクを最大限考慮して、一時的な麻痺スタンの他は後遺症の残らない様に調整を掛けた雷サギタの矢をこの男は使用しています。心配は無用、と迄は言いませんが、一先ず安心して下さい、ネギ先生」

曲がりなりにも己が生徒である龍宮 真名が同じ様な暴挙に臨んでいるからか、やや後ろめたい様子で抗議してくるネギに、高音が仏頂面ながらそうサポートする。

その様子を若干おかしげに口元を緩めながら、射撃後の銃を点検しつつ真名が高音に声を掛ける。

「随分と面白く無さそうだね、高音先輩？…この仕事において告白警戒パトロールは自分がサポート役にしか撤せないのが不満なのかな？」

「…口を慎みなさい、龍宮さん。私は点数稼ぎの為に任務を遂行している訳ではありません。第一特別親しくも無い貴女に、そこまで詮索される筋合いはありませんよ?」

「おっと、確かに余計な口出しだったね、申し訳ない。どうか忘れてくれ、高音先輩」

「……………」

「ほらほら喧嘩腰になんな高音。龍宮も、こいつは生真面目な性分たちなんだ。余りつつかかってくれるなよ」

穏やかでない目付きと、何処か見透かした様な眼差しをそれぞれ交わす高音と真名の間、辟易した様子で篠村が割り込み、仲裁に入った。

そんな敵対している訳でも無いのに妙な緊迫感の漂う空気を、ピーピーという本日この場に居る全員が何度も耳にした電子音が切り裂く。

「む!??…まだ一人残ってるぜ!??」

「何!??」

「あれ……龍宮君?」

「っ!??……………」

計器を持つカモの言葉に反応した真名に対して、清涼な響きを伴うイケメンボイスにて声が掛けられる。

その声を聞いて真名が僅かに表情を崩し、やや慌てた様子で振り向いたその先には、カジュアルな服装に身を包んだ、爽やか系のイケメンが立っていた。

「どうしたんだい?こんな所で……………」

「せ、芹沢部長……………」

真名は普段冷静沈着な彼女にしては珍しく、動揺が顔に表れていた。

「姉御!!?その男だ間違い無え!!?」

「なんだ龍宮の知り合いか?…まあ多少なりともやり辛えだろうから俺が……………」

「だ、駄目です!待って下さい篠村さん!!?あの人って、龍宮さんが好

きな人なんですよー!!?」

「なんですって!!?……つまり、相思相愛と、いうこと……?」

無意識的に数歩下がって状況を把握していた篠村がおもむろに雷球を掌に作り出すのをネギは必死に押し留め、事情を説明する。それを聞いて高音が芹沢へ目を向け、苦々しい表情で呟いた。

「……可哀想だけれど、魔法関係者だからといって特例扱いは出来な  
いわ」

「……だな。散々カップルの邪魔をしといて自分だけ文句を言えねえ  
さ」

しかし、篠村と高音は一瞬の間を置いてネギの制止にそう答え、芹沢の後方へ回り込もうと動き出す。

「え、でも……!!?」

「兄貴、旦那方の意見が正しいぜ。赤の他人を取り締まろうって側はその権利を振り回す以上、公正明大でなきやいけねえんだ」

そんなある種非情とも取れる判断にネギは抗議の声を上げかけるが、肩に乗るカモが静かにネギを諭し、その足を止めさせる。

そんな篠村達の動きを真名は横目に見て、それから緊張した様子で僅かに顔を紅潮させた、目の前の芹沢に視線を戻す。そして真名は何かを吹っ切る様に両眼を閉じ、意を決して言葉を紡いだ芹沢を遮り、告げた。

「実は俺……君のことを……!!?」

「ありがとうございます、先輩。お気持ちだけ頂いておきます……」

「……え?……つうわっ!!?」

怪訝そうに問い返した芹沢は、真名が素早く抜き放った拳銃の射撃を反射的に崩折れる様に屈み込んで躲す。

「た、龍宮く……がはあっ!!?」

しかしすかさず追撃で放たれた二丁目の射撃を土手つ腹に喰らい、苦鳴を上げながら吹き飛んで倒れ伏した。

「……!!?……貴女……!!?」

「……龍宮、無理してやらなくても俺らが居たろうが……」

「……気を使ってくれて礼を言うよ、先輩達。でも心配は無用さ……」

篠村の言葉に真名はふつ、と微笑み、振り向きざまの流し目をくれながら宣言した。

「私の戦場に男は不要だから、ね…」

バーン!!?と、映画か何かなら効果音でも聞こえてきそうな決め台詞に、遠巻きに眺めていた見物人ギャラリからおお……!と半ば気圧された様な感嘆の声が湧き上がる。

「……………そうかよ……………」

多少ならず引き攣った顔でそう返した篠村は、隣で何か言いたげな高音を促してネギの方へ戻りつつ、まだまだ始まったばかりの麻帆良学園の喧噪を遠くに、ふ、と溜息を吐く。

……………どうか今年はこれ以上妙な面倒事が無い様に願いたいもんだ……………

最も、それが不可能であろうことは、願った本人が一番良く理解わかっていたかもしれないが。

「……………桜咲……………」

「は、はい!!?」

「…服、似合ってるな。可愛らしいと、思うぞ、うん」

「っ!!?……………あ、ありがとうございます…っ、辻部長も良くお似合いで……………」

「ああ、そうか。うん、ありがとう」

「……………」

……………どうしよう、どうすればいい、本気で?

辻は連れ立って歩いている刹那の顔を横目でこっそり盗み見つつ、先程からどうにも盛り上がらない会話に頭を悩ませる。

…こういう場合は歳上がリードして雰囲気をよくしなきゃいけないってのに、何で俺という男はこう微妙に対人会話能力が低いんだ、これじゃ桜咲も内心誘わなきゃよかったとか思ってるんじゃないだ

ろうかああ……いや違う、止めるネガティブな考えは！

ブンブンと頭かぶりを振り、辻はヘタレた思考を追い払う。

…あの桜咲が自分から学祭を廻ろうなんて言い出してくれたんだ。  
…俺とのデートを…そうだ、誰にどう口で誤魔化そうがこれはデートだ。

…楽しみに、してくれていた筈なんだ。

…楽しませてやらなきゃいけないし、俺も楽しまなきゃいけないだろうが……！

「……よし!!？」

ピシヤリと一つ頬を叩き、辻は気合を入れ直す。

…今日だけは何処かに行ってしまうえ、俺の中の弱気の虫よ!!？

一人決意を新たにする辻の斜め後方から、か細く不安に満ちた声が聞こえてくる。

「あ、あの……辻、部長……」

「……あ、っ……!!？」

ヤバい桜咲を放つたらかしだったと慌てて振り返った辻の目に、極度の緊張と不安で今にも倒れそうな刹那の様子が飛び込んで来た。

……何故私は、戦闘や護衛関連の他でこうも気がまわらないのだろうか……

待ち合わせ場所から辻と連れ立って歩き始めて早数分。ガチガチで会話も碌に儘ならない刹那を解きほぐそうとしてか辻から、こちらもう少し固い様子ながらも幾つか話題を振るものの、刹那は緊張が焦りを呼んで真面な返答を返せずにいた。

…学祭を廻ってくれと言い出したのは、私の方だというのに……！  
せめて普段通りの言動を取り戻そうとしても、それすら今の刹那には儘ならない。焦りが焦りを呼ぶ典型的な悪循環に刹那は陥っていた。そうこうしている間に黙り込んだ辻は難しい顔をして何やら唸り始めてしまった。

…駄目だ、これでは………！

刹那はそれを見ていつそ泣きそうになる。そしてそんな自分に驚

いた、こんなにも自分は弱かったのかと。情緒不安定な自分に嫌気が差してくるが、同時に向きながら腹が決まった。みつともなくても無様でもいい、辻にこれ以上気を使わせてはならないと刹那は己を叱咤し、震える声で辻に呼び掛けた。

「…すまん桜咲、ちよつと考え事をしていてな」

「い、いえ……」

苦笑して軽く頭を下げる辻に、ひとまず自らの醜態に愛想を尽かされた訳では無いようだと言っただけに安堵しながら答える刹那。

「…なあ、桜咲。何と言うか、お互い慣れないことしているからか、ぎこちないし、気まずい所があるよな。…こういう時、本来なら俺の方から引つ張つていかなきゃならないのに、グダグダしてた所為で不安にさせた。…悪いな」

「いえー辻部長は悪くありません!!?…私の方こそ、お誘いしておきながらこんな体たらくで……申し訳ありません……」

沈んだ調子で謝罪する刹那の言葉に、辻はゆっくりと首を振り、刹那に告げる。

「桜咲。それを言うならこつちこそ…と俺は思う。けどさ、こんなのキリが無いだろ？折角のほら…学祭なんだ。頭を下げ合つて沈んだ調子でいるのも勿体無いと思わないか?…お互い悪かった、つてことにしてさ、楽しいこうじゃないか…切羽詰まった顔してるなよ」

「……辻、部長……」

努めて明るく、何でも無いような調子で語りかけてくる辻の気遣いに、刹那は胸にくるものを感じていた。

暫しして軽く頭を振った刹那の表情は、まだ緊張の色は抜け切らないものの、先程までよりも大分明るいものになっていた。その表情を見て幾分ホツとした様子で、辻は刹那を促す。

「…行こうか、桜咲。昼飯には少し早いし、手始めにあつちのアトラクションパークつて所に足を運ぼうと思つてたんだが…」

「あ、はい！私もそういったものには縁がありませんでしたので、行つてみたいです！」



未だぎこちない様子を見せつつも、初々しい二人は連れ添って歩き出した。

「…ふう。一時はどうなるかと思ったが何とかスタートを切った、って感じだな…」

「まったく二人共初心アップなんだから、今時隣歩くだけで小学生の初カツプルでもあそこまで緊張しないわよねえ？」

「副部長ー、取り敢えず部長が目星付けてた『スクリーム・ザ・ワールド』のめぼしい乗り物には人並ばせて整理券確保してありまーす。配布人も抱き込みましたし、一先ず準備完了ですなねー」

「こっちも範囲内の悪質に囃し立てそうな部長、副部長クラスの搜索、誘導終わりましたよ！その他諸々の不確定妨害要素も可能な限り排除に成功です!!？」

「宜しい。それではあのなんだか放っておけない二人の行く末を…」

「見守りに行くとしましようか！皆の者、私達に続きなさあーい!!？」

「「「おおおおおおつ!!？」」」」

「…先輩ら、こういうの余計なお世話言うんやで？」

と、辻と刹那の数10m後方に位置する茂みの中でその様な完全データー支援計画を始動する、副部長、Sを筆頭とした剣道部一同に対して木乃香は、ジト目でツツコミを入れた。

木乃香がこの余計なお世話集団剣道部員と行動を何故共にしているかといえば、刹那に激励を送って通話を切った直後、周囲に剣道部員達が群がって捕捉されたからに他ならない。副部長(男)曰く、『桜咲と部長の両方について詳しい故に今回のサポートにおいてアドバイザーになってほしい』とのことだったが、木乃香からしてみれば出歯亀行為以外の何物でも無い悪趣味な催しに参加する気は毛頭無かった。

「ウチかてせつちゃんと辻先輩は心配です、不器用な二人の事やから、万事スマートには行かへんと思うから…でもそういうトコを含めて、こっからは二人の問題やと思うんです。先輩達も面白おかしく騒ぎ立てたいだけなんや無いんでしようけど、もうちよつと二人を信用してもええと思います、ウチは」

木乃香の言葉をうんうんと頷きながら聞いていた副部長、Sは、やたらとシンクロした動きで片手を恋人繋ぎしたまま逆の手を広げ、木乃香を包み込まんとする様に揃ってイイ笑顔を浮かべながら言葉を紡いだ。

「近衛ちゃん、君の言うことは至極尤もだ。俺達も今やつてる事が余計なお世話だっていうのはちゃんと理解してるさ」

「でもね……私達はこの日が来るのを何年も前からずっと、ずうずうと心待ちにしていたのよ」

副部長（女）の言葉に万感の思いを込めて頷く、後ろの剣道部員一同。

「下世話な真似をしているのは承知の上よ。それでもあの二人、なんて言うか放っておけなくてね……凄く努力してて、下にも丁寧で。人柄もスペックも優良物件のくせして、近衛ちゃんの言う通り変な所で不器用で引っ込み思案。お前らさっさとくつついちゃえよ、って何度思ったか知れたもんじゃないわ」

ふう、と肩を竦めて溜息を吐く副部長（女）。

「そんな二人が今年の春から漸くジワジワ進展始めて、満を持してこの麻帆良学園祭だ。此処で手を出さずに何処で出す!? ってのが俺等の正直な気持ちさ。……変な意味じゃ無くて、あの二人が大好きなんだよ、剣道部一同全員がさ。外野の行動としては行き過ぎを承知の上で、出来得るだけ楽しいデートをあの二人にはしてもらいたいんだ。二人の行動を誘導するつもりは断じて無いし、手を出すのは無粋な邪魔が入りそうな場合のみに限定する。あくまで純粋に、二人の仲が深まることを俺達は願っているんだ」

「端から見ていたら不愉快な行動に見えるかもしれないけれど、どうかこの御節介、黙認してくれないかな、近衛ちゃん?……お願い」

揃って頭を下げる副部長、Sに続いて深々と頭を垂れる剣道部一同。

木乃香はそんな剣道部員一同の後頭部を黙って見つめていたが、やがて長い嘆息を吐き出し、不承不承、といった体で言葉を放つ。

「……わかりました。辻先輩に関しては、ウチ以上に皆さんお付き合

いも長いんでしようし、ウチだけが身内気分でどうこう言うんも筋違いでしようから、この一件黙認させて頂きます。：でもやり過ぎやとウチが思うようやったら、辻先輩とせつちゃんに告げ口させてもらいますえ？」

結論として見逃す旨を告げながらもキチンと暴走しないよう釘を刺す木乃香であった。

剣道部員一同は許しを得て皆一様に嬉し気に顔を輝かせ、代表して副部長、Sが礼を告げる。

「寛大なる裁決に感謝するぜ、近衛ちゃん」

「お礼と言っては何だけど、部長と桜咲へのサポート。全力を尽くさせてもらうわ。……それじゃあ改めて皆、作戦決行ううううう!!」

「二「つしやあああああ!!?!!?」」

気合いの咆哮を上げ、麻帆良男女混合剣道部総勢38名は動き出した。

「……まあ最も、二人のレジエンドクラスに初々しくて甘酸っぱいデート風景を覗き見たいという願望も勿論持ち合わせているがなあ!!?」

「むず痒さの余り七転八倒したくなる様な良景を当方希望する者なり!!?中ちゃんとの約束もあるしねえ!!?」

「……台無しや。やっぱ通報しとけば良かったんかもなく……」

「……大丈夫か桜咲?正直初めはもう少し大人しい乗り物から試してもよかったんだぞ……?」

「お気遣いはありがたいですが、辻部長。余り私を侮って頂いては困ります」

少しでも普段通りの空気を取り戻すべく適当に雑談を繰り広げながら『スクリーム・ザ・ワールド』に入った辻先輩と刹那。何故か並んでいる人数に反して異様に早い時間帯での整理券を受け取ることの出来たこのアトラクションパーク目玉の一つ、『ラディカル トルネードコースター』の最前列にて、如何にも不安そうに傍らを見て

声を掛ける辻に対して、刹那は自信あり気に微笑んで返した。

「いや、このジェットコースター、最初の坂を下りる降りで降下開始3秒200kmオーバー、120度の超急角度上昇から90度の直滑降の最中に540度のひねりを加えるとかいう失神必至のお化けコースターだと触れ込みにあったからさ……もしほんの少しでも気が進まないなら……」

ガシヤリと物々しい音と共に下された安全レバーを落ち着か無さ気に弄りながら尚も隣の刹那を気遣う辻である。それに対して刹那は、珍しく自信有り気に胸を僅かに張りながら答える。

「辻部長、お忘れですか？大きな声では言えませんが、辻部長は修学旅行の一件でこの大層な触れ込みのコースターよりも数段速い、私の全力飛行を体験された筈ですよ？私は正体をひた隠しにしていた故に、専門の種族からすれば経験全てがお粗末なものでしょうが、完全に無軌道で動き回る訳でも無い絶叫マシン等、幾ら最先端技術の粋を結集した麻帆良学園のそれだろうと恐るるに足りません。……それよりも辻部長こそ、実はこういう物が苦手なものでしたら遠慮なさらずに……」

「いや。俺の方は全然問題は無い。解った、桜咲が大丈夫なら素直に程よいスリルを楽しもうじゃないか」

言葉の最後の方で逆に辻の方を心配してきた刹那に対して、辻はキツパリと宣言して会話を終わらせる。

正直に言えば辻は絶叫マシンに乗った経験が無く、どれほど凄まじいのかの想像が付かないので多分に不安はあったが、そこら辺は男の意地である。

……正直搭乗経験も無いだろうに余裕をかましている桜咲の様子に、フラグが立っている気がしないでもないが……

本人が大丈夫だと言っているのだからこれ以上は無粋かと思いい、辻は己の腹をくくって桜咲に微笑みかける。

「そうか、ことういった遊具で可愛らしく悲鳴を上げる桜咲というものも見てみたかった気もするけどな？」

「ふふっ、希望に添えなくてすみませんね、辻部長？」

…この無自覚バカップル、さつきまでガチガチの緊張っぷりを見せてた癖にこのラブい感じの会話を繰り広げていて何か思う所は無いただろうか……………?

二人の真後ろに座る監視役の剣道部員は何ともいえない表情でそう独りごちた。

「……………や、やや…想像してた以上に怖いぞこれ!!? 桜咲大「ひやあああああああああつ!!?!!?」…ああ、やっぱりかって何だこの急回転…おわああああ!!?」

「つ、つつつ辻部長、なん、何ですかこれえええ!!?」

「だから言つたら人間のスリル欲求舐めすぎだうわああああ!!?」

「きやああああ!!?きやああああ!!?辻部長、手を!お願いですから手をおおとおお!!?」

「握ってる!!?絶対放さないから気をしつかり持って桜咲いいああああああ!!?!!?」

しばらくお待ち下さい……

精魂尽き果てたという表現がしつくりくる様子で、辻と刹那はジエツトコースター脇のベンチに並んで腰掛けていた、因みに手はまだ握り合わされたままである。軽い肉体的接触による羞恥心程度を軽く上回る様な恐怖が未だ二人を包み込んでいる様であった。

「すみません…すみませんでした…舐めていました麻帆良の本気を……」

「…いや…強く止めなかった俺も同罪だろ…ともあれ大丈夫か、桜咲……?」

「はい…何とか……」

ゼイゼイと喘ぎながらも何とか一心地着いた二人は、漸く繋がったままの手に気付いてお互い火の出そうな顔色でズバン!!?と高速で結束を解き、気不味そうな表情で謝罪合戦を繰り広げる。

「…兎に角だ!!?次はもう少し大人しそうなアトラクションを選ぼう

!!?初っ端からこれじゃ身が持たない!!?」

「そ、そうですね!!?…あ!でしたらあの回転ブランコなんて如何でしょうか、高さも其れ程じゃなさそうですし…」

「あ、いいな。それにしよう、行こうか桜咲」

「はいー!」

「…っあゝゝゝ!!?!!?何だ何なんだよあの二人は開始からもおおおおつ!!?」

「予想以上のむず痒さだわコレ…!!?正直空気悪くなるかつて予想してたけど何よもう可っ愛いいなもうううう!!?」

「ああゝゝせつちゃん可愛ええわあゝ…!!?って駄目やゝゝ!!?ウチまですトリップしてたらアカンやゝゝん!!?」

いじらしさ全開の辻と刹那のデート風景にのたうちまわる副部长，Sと木乃香である。周りでも剣道部員達が思い思いに転げ回ったり奇声を上げたりして悶えていた。

「…まあ良し!!?正直予想以上の破壊力で身が持つか心配になつてきたが、デート自体は順調だな!!?」

「そうね…もう幾つかアトラクションを廻ったら昼食に向かう筈よ。此処のパーク内は飲食店も充実しているから此処で食事にする可能性は高いけれど、付近のグルメエリアに移る可能性も高格率だから、油断しないでね皆!!?」

「了解です副部长!!?にしても可愛いなあ部長は…」

「あゝ桜咲健気可愛いわあゝ抱き締めてやりたいこの溢れる母性どうしてくれようかしらホント…!!?」

「カメラ回してろよしっかり!中村先輩にドヤされんぞ!!?」

「…うゝん、止めるべきなんやろけど正直楽しいわあ出歯亀…!!?ゴメンなあせつちゃん、辻先輩…」

∞の軌道を描き、座席自体も不規則に回転をする回転ブランコに、リアルに空中に投げ出されて地面直前まで自由落下フリーフォールしてからキャッチされるフリーフォール。トドメに高速回転している最中に

何故か海賊衣装に身を包んだ骸骨達が身動きの取れない乗客達に襲い掛かってくるバイキングを廻り終えた辻と刹那は、魂の抜けた顔でパーク内のイタリアンレストランに向かい合って座っていた。

「すまん…すまない桜咲…完全に入る所を間違えた…変に気張らずに映画とか行つてれば良かったな…」

「いえ…私の方も途中から意地になってましたから…。辻部長だけが悪い訳ではありませんよ…」

片手で顔を覆つて、今にも嗚咽しそうな様子で謝罪する辻に、力の抜けた締まりの無い笑顔でフォローをする刹那である。

「…それに、なんだかんだで楽しかったです、私…あんな風に慌てて騒ぐのなんて初めてでしたから…こんな言い方したらなんですか、凄くスツキリしました。ああいったものを楽しんで乗りこなす人つて、堂々と叫べる免罪符を得られるから夢中になるのかも、しませんね…」

「……桜咲………」

やや疲労した様子ながらも微笑んでそう告げてくる刹那に、辻はどう答えて良いかが判断できずにただ、名を呟く。

「あ…すみません、何だか暗い話になりますよね、こんな言い方だと」

「…いや、理由はどうあれ、楽しかったなら良いじゃないか。こんなもの、楽しみ方なんて人それぞれでいい筈だ。そうか、楽しかったなら俺の阿保な采配も少しは救われたよ……」

ホツとした様子でそう返してくる辻を刹那はじつと見やり、僅かに表情を暗くして呟く様に言葉を放つ。

「…すみません、結局お気を使わせて、しまっていますね、私……」

「あ、いや……」

「申し訳ありません、本当に、こういった風に遊ぶなんて私は初めてなもので…もつと年相応に振舞えれば辻部長に負担を掛けずに済むのに……」

「桜咲」

刹那の言葉を途中で遮り、辻はやや強い調子で刹那に対して言葉

を紡ぐ。

「俺は自分自身好きで、もつと言うなら望んで頭悩ませてるんだ。言っちゃなんだが筋違いな謝罪は不愉快だぞ」

「え……」

「勘違いしないでくれ、こんな調子で情けないエスコートになって不甲斐なさこそ味わっちゃいるが、俺はちゃんと楽しんでる。お前と一緒にキヤアキヤア騒げて、楽しかったよ。大体初めに言っただろ、折角の学祭巡り、詰まらない事で一々頭下げてちゃ勿体無いって。楽しくないなら、他にしたいことがあるならどんどん言ってくれていい。でも楽しめているなら、勝手に負い目感じて他人行儀に頭下げないでくれよ、桜咲。そういうもんじゃ、無いだろう。俺とお前は……」

僅かに寂し気な顔になり、告げてくる辻の姿に、刹那は自身の愚かさを悟る。

……そうだ、何をやっている、私は……

……こんな風ないい方をしたら、結局更に気を使わせるだけだろうに……

……二人で楽しめていれば、それで何の問題も無い。当たり前の話なのに……!!?

そうして暗く沈み込もうとする自身の思考を強引に切り替え、刹那は決意を新たにす。

……反省も後悔も、終わってから好きなだけすればいい。

……今は楽しもう、そして私以上に楽しんで貰おう。私には勿体無い、この優しい人に……!!?

刹那は何時の間にか下がっていた頭を勢い良く上げ、その剣幕に驚いた辻の顔を真っ直ぐ見据えて、言い放った。

「すみません、些か自分に酔って恥ずかしい事を口にしました。……私は楽しいです。凄く、楽しいんです、辻部長」

「……俺もだよ」

明るく笑う刹那の言葉に、辻は穏やかな微笑みを返した。

「……何だろうな、このいじらしさと気恥ずかしさと虚しさが入り混



じりに混ざり合って、一周廻って多幸感の押し寄せてくる、この感じは……」

「その感情に名前を授けるには、人類の言語は未発達すぎるわ……もう、いいじゃない……私もういろんな意味でお腹一杯で、幸せだわ……」

「……せつちゃん……良かったなあ……せつちゃん……」

辻と刹那から数席離れた対角線上にて、揃って遠い目をする副部長、Sを尻目に、親友の言葉に目尻へ涙を浮かべる木乃香が居た。

「……今の所妨害勢力も無し、ここから先は、本当に余計な手出しは無用だな……」

「そうね……付き合ってくれてありがとう、近衛ちゃん。これにて真正銘、単純な覗き行為の他は、我々剣道部員＋αは干渉をしないと誓うわ」

「それを一番止めて欲しいんやけど……まあウチもここまで覗いてたからどうこう言えへんなく……変なトコにばら撒いたらあかんよ、先輩達？」

「勿論!!？」

と、軽く釘を刺す木乃香に対して、声を揃えて返した二人だった。

「……っていうか、先輩達はデートとかせえへんの？」

「近衛ちゃん、心が通じ合ったらばこういつたある種下世話な真似も一緒に楽しめるもんだよ、恋人同士なら何やっても愛情表現の応酬なのさ」

「勿論最終日には一日デートで愛し合ってる予定だから大丈夫。彼処の初心者カップルと違って、最早磐石だからねえ、私達」

「……先輩達の方がよっぽど御馳走様な感じやない？」

「桜咲、あれなんてどうだ？お前に似合うと思うんだが、ちよつと着けてみないか？気に入ったならプレゼントさせてもらうぞ」

「つ、辻部長、先程服を贈って頂いたばかりです。流石にこれ以上何かを買って頂くのは心苦しいので……」

「こういうのは男の器量と甲斐性って奴だろ？気にするなよ、幸いと

言うべきか、学園側からの度重なるトラブル解決の報酬で大いに懐が暖かいんだから」

昼食を終えてアトラクションパークを出た辻と刹那は暫く賑やかな学園内をあちこち見物しながら歩き、立ち寄った服飾関係の露店が立ち並ぶ通りにてショッピングと洒落込んでいた。その中で美麗なアクセサリーの並ぶ、露店の中でも一際値段の張りそうな品揃えを誇る店前にてそんなやり取りをする二人は、最早周囲の恋人達に違和感無く溶け込んでいる。

「しかしそれでは余りにも……それでしたら、私もある程度持ち合わせはあります。私からも何か贈らせて下さい、辻部長」

「ええ？ いやいや、誕生日か何かでもないのに後輩からものをもらうのはなあ……なんだか悪いだろ？」

行っている事はすっかりデートだと言うのにまだそんなことを吐かす辻に、ややムツとした様子で刹那は返す。

「その論法では、私の方こそ特別な何かも無いのに、先輩から物を贈られる道理はありません。……それとも辻部長は、私からの贈り物など、品に関わらず受け取りたくなどありませんか？」

「いやそんな事は決してないが……」

「それでしたら是非。実はもう目星は付けてあるのです。……少しだけ此処で待つて頂けますか？ 目当てのものを、買ってきます」

刹那はニツコリ微笑むと困惑する辻を他所に、元来た道の方を小走りで駆け戻っていった。

所在無き気に佇む辻に、目の前の露天商がからかう様に声を掛けてきた。

「いやいやラブラブだねえ兄さん達。商売柄男に貢がせようと躍起になつてる女ばっかり見てる身としては輝いて見えるよ兄さんの良い人は。どうだい素敵な彼女に一つ更なる愛の証をプレゼントするのは？ 愛は金に変えられないなんて言うが、気持ちはある程度金を払って表せるとおじさんは思うがね？」

純粹に感心した様子ながらも商魂逞しくものを買わせようとしてくる露天商に苦笑し、俺とあの子はそんなんじゃないですよ、と

何時もの台詞を返しかけ、辻はふと出掛けた言葉を飲み込む。

……なら何だつて言うんだ？俺と桜咲の関係は？……………

辻が何と言おうが思おうが、これはデートだ。只の先輩と後輩が行う行為では無い。

『女の子はさあ。どうでもいいと思ってる奴をデートに誘ったりなんざしねえからな？』

此処に来る前、中村から掛けられた言葉が辻の頭に浮かび上がる。

「……………解ってた、つもりだったんだけど……………」

知っていてこの有様なら随分と非道い男だ自分は、と自嘲して笑う辻。

「…兄さん？どうしたよ、黙り込んで？」

「……………ああ、いや。サプライズは如何にも自信が無くてね。品定めは彼女が帰ってきてからやらせて貰いますよ」

訝し気な露天商にそう答え、辻は店の前から少し離れた建物の壁に背中を預けて刹那の帰りを待つ。

「……………、俺は……………」

『随分と思いい悩んでいるな、主よ？』

誰にとも無く呟いた辻に、懐から思念が飛んだ。辻は僅かに驚いて目を瞬かせ、胸の内を見下ろすと言葉を返した。

「今日はやけに静かだと思っていたけどフツ。今頃になって何だ？」

『興味が無いとはいえ私は空気が読めぬ訳では無いさ。逢引中に意中の男他の女と会話をして、いい顔をする女など居るまいよ』

最も私を女と見なして良いかは解らんがな、と続ける珍しく戯けた様なフツノミタマに、辻は小さく苦笑するが、次に放たれた思念にその笑みも消える。

『打ち明けずともいいではないか、主？』

「……………何だと？」

辻は思わず懐からカードを取り出し、睨む様な目付きでフツノミタマを見やるが、意に介さずに意思持つ刀は思念を続ける。

『主のお人好しは、無理をしているので無く素なのだろう？あの小娘

は主のそういった所に惹かれていた様に私は思えるぞ。…主も小娘を憎からず想うのなら、性癖なぞ黙ったまま添い遂げてしまえば良いのだ。好き合つていようと、所帯を持つようと。…全てを良人に告げる必要はあるまいて』

「…馬鹿な事を言うな……」

辻は顔を歪め、思わずフツノミタマを誹る様に声を荒げる、

「……そんな不誠実な真似が出来るか！」

『ならば主よ。正直に己のあるがままを告げて、嫌われるのを良しとしてはおらんか？それは言い換えれば、主が小娘を受け入れる気が無いとも言える。このような逢引の真似事までしておいて、そのような考えを抱いているのは不実では無いのか？』

「……っ！」

フツノミタマの返しに、辻は反論出来ずに歯を喰い縛る。そんな辻の様子を感じ取り、僅かにこれまでよりも柔らかい調子で、フツノミタマは思念を放った。

『責めるような調子になってしまったな、すまない主よ。別に私は小娘に同情している訳でも、主に不快を覚えている訳でも無いのだ。私は主に振るわれる以外の事はどうでもいい。しかし、主の腕が迷いで鈍られては敵わんのでな。誠実である事は人の間では美德とされるそうだが、人間関係でそれがすべての場合において良いほうに働くとは限らんだろう？小娘と付き合おうと付き合うまいと、主がそれを伝える義務は無い、と私は言いたいのだ』

「……お前なりの慰めの言葉だと思っておくよ…でもな、フツ」

辻以外に対してドライであるにも程があるフツノミタマの提案に、辻は首を縦には振らない。

「やっぱり俺は、俺の本性を隠して恋愛なんてしたくないんだ。相手に不誠実だ、つて話だけじゃ無い。…俺が嫌だから。伝えてヒかない女なんて居ないって解つてるのに、矛盾した話だけどさ…俺は俺を受け入れてくれた人と一緒になりたいって、そう思うよ」

馬鹿だよなあ、と辻は笑った。

それに対してフツノミタマが思念を返すよりも早く、その女は

辻に声を掛けてきた。

「そうですからそれやったらやつぱり、ウチと一さんはしめの出会いは運命やっただのかもしれないな」

その何処か間の抜けた、可憐な少女の声を耳にした瞬間、ゾクリ…!!?と辻の背に悪寒が走った。

『……貴様は……』

「お初にお目にかかります〜フツノミタマさん〜。ウチ、月詠言います。どうぞ宜しゅうお願いしますわ〜」

硬直する辻に変わってフツノミタマの発した思念に返された言葉に辻はゆっくりと壁から背を離し、己が左方に向き直る。

果たして其処には、情欲と剣気の入り混じった蕩けそうな表情を辻に向ける、ゴスロリ衣装に刀を履く小柄な少女——月詠が立っていた。

「お久しぶりです〜一さんはしめ…ウチ、一さんはしめが恋しゅうて恋しゅうて、来てしまいましたわ〜」

### 3話 少年少女の恋模様 〱辻と刹那その2〱

「ギョツギョツギョツギョツ！其処の不純異性交遊男女、我が名は〇つとマスク！リア充への憎しみを燃やし己の中に存在する正義のみに従う性技の味方よ！そんなイケメン、我が怒りの正拳を喰らって反吐を撒き散らしたく無ければ、お前の女置いていけえええい！！？」

「バーン！！？と〇ヨ〇ヨ立ち（東方 仗〇ver）でポージングを決めながらとあるカップルの前に現れたのは、真っ赤なパンツとリングシューズを身に付け、頭に白マスクを被った覆面レスラーの様な男だった。更には男の首の後ろ辺りで、不定形にして半透明な触手の塊の様な謎生物がウネウネと何処か卑猥な動きをしながら蠢いている。

結論を言えばどう控え目に見ても変態と痴漢の相乗効果を効かせた災厄の出現にカップルの女は悲鳴も上げられずに腰を抜かして座り込み、男の方は得体の知れない恐怖感を煽る変態の迫力に足をガクガクと震わせながらも、健気に彼女を庇って立ち塞がる。

「だ、駄目だよ誠君！！？私のことはいいから逃げて！！？」

「そ、そんなこと出来る訳無いだろ！！？腕っ節なんて全然でも、僕は男なんだ！こんな怪人の前に女の子一人放って逃げ出してたまるもんか！！？」

「震えながらも拳を握り、し〇とマスクを睨み付けるカップル男こと誠君。」

「佳奈さん、早く逃げてくれ！何とか僕が時間を稼ぐから！！？」

「……誠君……！！？」

「イチヤイチャしてんじゃねー！！？」

細い身体に精一杯の力を込め、毅然と言い放つ誠君の一世一代の漢気に、カップル女こと佳奈さんがこの様な危機的状况にもかかわらず、ポツと顔を朱色に染める。そんなラブイ感じの雰囲気が入らなかつたのかしつ〇マスクは覆面越しの双眸にドス黒い炎を燃やし、叫びと共に天高く跳躍。まるで怪鳥の様に両腕を広げながら誠君に向かって落下する。

「きゃあああああつ!?」

「う、うあ…っ! うおおおおおつ!!」

「きええええつ…!? オバア!!」

佳奈さんの悲鳴が響き渡る中、恐怖に下がりがかけた足を無理矢理前に出し、無謀な迎撃を試みようとした誠君の前で、雄叫びを上げながら落下してきていたし〇とマスクが、横合いから飛んで来た何かを真面に喰らって吹き飛んだ。その一撃は余程の威力だったのか、しっ〇マスクはクルクルと不規則な円運動を身体全体で行いながら放物線を描き、道端のガードレールへ轟音を上げながら衝突。暫くの間潰れたカエルの様にへばりついていてその身体が、力無く地面に落下する。

「……………え、ええ? ……………」

「い、いったい誰が…っは!? か、佳奈さん今の内に! 早く立って、此処から逃げよう!!」

「…あ、う、うん!!? ……う、ごめん誠君、腰が抜けて…!」

「ええ!?? えーと…っ! ごめん佳奈さん、少しの間我慢してて!!」

「え? ……きゃあつ!?」

誠君は意を決して足に力の入らない佳奈さんをお姫様抱つこの形で抱き上げ、顔の赤くして固まっている腕の中の彼女に構わず、ややフラつきながらも結構な速度でその場から逃走する。

「何処の何方か知りませんが、ありがとうございます!!?!!?」

必死の形相で走りながらも、誠君は変態を迎撃してくれた何物かに対して、去り際叫ぶ様にお礼を言った。

「……………行ったか?」

「応ヨ」

「逃げてく方向にも警戒ポイントはありませんシ、大丈夫デスネー」

「…ふ。吊り橋効果でこの後ズツポシ」

「だとしたら後日改めて野郎の方だけ半殺しに行かなけりやなあ…あらよつと!!?」

カップルが去ってから暫く。先程〇つとマスクを迎撃した方向か

ら年端もいかない幼女が二人、テコテコと歩いて来て死体の様に転がるし〇とマスクの前で立ち止まる。すると地面に転がってから身動き一つしなかったしっ〇マスクがムクリと半身を起こして幼女にカップルの塩梅を尋ね、し〇とマスクの首にくっついていた触手生物のコメントに物騒な返答を返して勢い良く立ち上がる。

「いや〜これにて一仕事終わりだな、これで7件目だけ？真面目に働く俺って美男子はなんてイイ男なんだろうか……」

「今の茶番劇の何処らへんが真面目な仕事っぷりなんだよボケ」

「ついでに言うとな美男子でも無いデスウー」

「…エロウイルスによるパンデミック系エロゲで主人公の親友役で出てくる系の顔」

「ツツコミ辛え表現すんなやプリン体めが!!？」

覆面を取り去ってキメ顔をキメる変態へ幼女二人と謎生物が総ツツコミを入れ、謎生物からの難解なツツコミにのみ反応して吼えるオレンジ髪の変態ーそう、言わずと知れた中村 達也であり、傍目には幼稚園児にしか見えない二人と中村の首元の謎生物は、すらむい、あめ子、ぷりんのハイ・スライム三人娘であった。

ヘルマン伯爵をマスターとして悪魔達と共にネギ達へ襲撃を掛け、事件解決の際に捕らえられた筈の三人娘が何故に中村と行動を共にしているかと言えば、話は少々昔へ遡る。

「…このスライムさん、達の処遇…ですか？」

「その通りだ、ネギ先生」

麻帆良のとある校舎の一室にて、神妙な表情（ぷりんの顔は何時も通りの無表情だったが）で並ぶ三人娘を前にして、杜崎から告げられた言葉に戸惑うネギ。周りにはバカレンジャーと篠村、高音に愛衣の姿があった。

「このスライム達は人間並の知能こそ持ち合わせてはいるが、区分としては言うまでも無く魔物だ。<sup>モンスター</sup>通常ならば学園内に浸入した場合問答無用での駆除が許されている。ましてや悪魔に使役されていたとはいえ、魔法関係者に対して襲撃を行ったのだから尚更だ。知っての



通り、このスライム達はネギ先生が過去に遭遇した悪魔襲撃事件に関与していた。その一件と今回の一件に関してこのスライム達が知っている事は全て聞き出した以上、こいつらは言ってしまうと用済みであり、殺処分が予定されている」

「…おいモリー……」

「杜崎先生と呼べ馬鹿村。最後まで黙って聞け、まだ話は終わっていない」

淡々と害虫駆除の様な口ぶりで話を進める杜崎に中村が抗議する様に口を開くが、杜崎はピシヤリとそれを撥ね除けて話を続ける。

「しかし、こいつらの処遇を決めるのに当事者であつたネギ先生とお前達を外して話を進めるのは筋が通らないと、一部の連中から意見が出てな。こうして意見を伺いに来たという訳だ。…本来ならば未だ成人を迎えていないネギ先生に、いかな当事者と言えど生殺与奪の決定権は存在しないのだが、見習いとはいえネギ先生は魔法学校を卒業した一端の魔法使いであり、そこに年齢差は理由とならない。故にこれを決める行為は、ネギ先生にとって権利であると同時に義務でもある」

ほんの一瞬苦々しい表情を浮かべた杜崎だが、直ぐに元の厳めしい顔に戻ると、ネギの顔を真っ直ぐに見据えて言い放つ。

「報復行為を助長する様な言動、平たく言うならば復讐を煽る様な行いは、公の立場に属する以上認められない。故にネギ先生が過去にこのスライム達と何が有ろうとも、私怨に基づいた公正に欠ける処断を下してはならない……しかし、だ」

そこまで言ってから杜崎はフン、と鼻を鳴らし、それまでの厳格な話し方を放棄してネギに言葉を投げ掛ける。

「そんな建前はクソ喰らえ、とまでは言わんが、そんな綺麗事で納得出来る程聖人地味な思考はしてしまい、ネギ先生？はつきり言つて貴方はこのスライム達が、糞つたれた悪魔と比べて程度の差はあれ、憎い筈だ」

「……………、僕は……………」

オブラートに包まらずに直球で投げられた問いに、ネギは顔を顰めて

言葉に詰まり、明確な言語を紡げなかった。その様子を見かねてか、それとも有り体に言つてぶつちやけ過ぎている杜崎の言動を咎めか。傍らの高音が眉を顰めて抗議する。

「杜崎先生、そのような言い方では結局の所煽っているのと変わりありません。ネギ先生が心情を吐露してもいない内から決め付ける様な物言いは控えて頂けませんでしょうか？」

「……お前の真っ直ぐさは美德だが、融通を少しは覚えんとこの先辛いぞ、高音。……まあしかし、正論だ。俺とて別に、ネギ先生に鬼と化せなどと言いたい訳では無い」

仄かに苦笑しつつも杜崎は高音の言い分を認め、改めてネギに向き直る。

「つまりはネギ先生、君なりにケジメを付けてみないかと俺は言いたいんだ。君の意見を確実に100%取り入れるとは言えないが、この件について君には少なくとも発言力がある。……言い方は何だが、元々殺すのが自然な流れだ。君が仇討ちを望んでも誰も責めはしないし、君を悪く思う輩もおるまい。……許すというならば何らかの罰が下りはするだろうが、恐らくこいつらは死なずには済むだろう。所詮は単なる使い魔だ、捕まえてある主犯ヘルマンに比べれば扱いは至極軽いものだからな」

杜崎が説明を終えると、その場には沈黙が降りた。ネギは唇を噛んで一心に何事かを考えており、そんなネギの思考に口を出す者もない。

そのまま短くない時間が流れた後にネギは顔を上げ、おずおずと辻達に声を掛ける。

「……皆さん、僕は……」

「最初に言っておくよ、ネギ君」

迷いを伺わせるネギの言葉を辻が静かに制して、バカレンジャーは思い思いにネギへ言葉を放つ。

「俺達はネギ君に対して意見をするつもりは無い、必要な事は杜崎先生が言ってくれたからね。俺達だとしてもネギ君の側に立った判断を押し付けてしまうことになってしまふんだ」

「お前に一人で考える、なんて言いたかねえけどよ。多分必要なことなんだわ。あんま深く考えんなや、お前がそのロリッ娘達をどうしたいのかを、素直に述べてみな」

「それでどうしても決められない、ってんならネギ。俺らに全部丸投げしちまえ。きっちり尻ケツは持ってやるから」

「それで結果が如何であろうと、僕達はネギ君を恨まないし不利益を被ったら責任は取るよ。だからネギ君、この件に関しては周りのことは気にしないで、自分だけのことを考えてほしい」

「文字通りの意味で好きにしろ、お前には決めない自由も有る。：俺達は味方だ、言うだけならタダだろう。思うままを告げるがいい」

「……………っ!!??」

優しく突き離されて、いよいよネギは答えに窮する。そんなネギに声を掛けたのは、他ならぬ裁かれようとしている張本人達スライムだった。

「何をそんなに迷ってんだよ坊っちゃん。俺らが憎いだろうガ? イイ子ぶってねえで素直に殺させりゃいいじゃねーカ。お前が手を汚す訳じゃねえんだ、それで万事解決ダロ?」

すらむいの言葉にネギは下がっていた顔を上げ、面倒臭いと顔に書いてあるすらむいの顔をマジマジと見据える。

「おいコラ、お前等に発言権は無えぞ?」

「いいじゃないですか、間怠っこしいのは嫌いデス」

「……………早漏……………」

「お前は(ぷりん)は黙っテロ(ナサイ)」

究極的に場の空気を読まないぷりん不思議ちゃんを揃って嗜めるすらむいとあめ子に、ネギは少なからず困惑を露わにして問い掛ける。

「…どういう、ことですか…………? スライムさん達は、命が惜しくないんですか?…………」

「そりゃ惜しいサ。死にたいならわざわざ苦勞してまで悪魔ファミリアの使い魔やってねえヨ」

「……………ならどうして!??」

「そうですネ……………」

怒った様に声を荒げてのネギの問いに、あめ子はうーんと軽く腕を

組んで小首を傾げ、やや間を置いた後に答える。

「人間の感覚で言えばお仕事だから、というのが一番近いですかネー？…そのマツシブな人の言う通り、私達はなまじ人間並みに知能が近い分、価値観は違っても人の倫理観や道德観といったものを理解は出来マス。だから非道い事をしたとは思ってますヨ、私だつてすらむいやぷりんが死んだら悲しいでしょうカラー」

「…：…なら、それが理解するなら！どうしてあんなことをしたんですか!?？」

ネギは悲痛に顔を歪めて叫ぶ。痛々しいネギの様子に、思わず愛衣が前に出掛けるが、それを篠村が制する。抗議する様な愛衣の視線に、篠村は緩やかに首を振り、呟く。

「…吐き出すのは必要なことだ。色々溜め込み過ぎなんだよ、あの子は。何より連中も口出したいのを堪えてるんだ。俺達が先走っちゃ、いけないだろう?」

その言葉に愛衣が辻達の方を見やると、皆一様に落ち着かなさ気な様子で身体を揺らし、顔を歪めながらも黙ってネギを見守っていた。それを目にして愛衣は、ややあつて小さく頷くと、元居た高音の側に下がる。そんな健気な後輩の様子に高音は小さく微笑み、愛衣の頭を数度優しく撫でた。

そうしている間にも、スライム達とネギの問答は続く。

「どうして…：か、答えはあめ子が初めに言っただけ？仕事だから、ダ」

「…：…そんな、そんな理由が!!？」

「馬鹿げた理由に聞こえるナラ、契約だから、と言い換えてもいいデス。私達は使い魔として伯爵と契約を交わし、様々な恩恵を得る代わりに伯爵の手足となって働いていまシタ。これは一般的な魔法使いのそれと何ら変わりの無いごく平凡なものデス。ただやる事が貴方達の行う慈善行為では無く、非道であるというダケ。…契約を交わした以上嫌な仕事だから止めますなんて、私達に言う権利は無いんデスヨ」

いきり立つネギに対して、あくまで淡々と事実のみを紡ぐあめ子。

「それに、だ。…これは決してオレ達の行いを正当化したいから言う

んじや無えぜ？もし仮にオレ達が坊っちゃんの村を襲撃するのに加担しなかつたとしてモ、結果は変わらなかつたらうヨ。俺達位の助力なんゾ、有つても無くても伯爵達は仕事を完遂したろうサ」  
「っ………」

すらむいの言葉に、ネギは反論出来ず押し黙る。ネギの故郷を襲つたのは数百の下級悪魔レッサーデーモンと三体の爵位級上位悪魔グレートアーデーモンである。すらむいの言う通り、スライム達は襲撃に対して格別何かを成した訳では無いのだろう。

「……勘違いしないデ。だからといって私達に罪が無イ、なんて言いたい訳では断じて無イ」

それまで黙っていたぷりんが、無表情のままネギへと語り掛ける。無言のまま顔を向けるネギに、ぷりんは静かに言葉を紡いでいく。

「私達が主張したいのハ、私達なりに筋を通して生きてきたつもりだというコト。伯爵に拾われたカラ、上位種とはいえ一介のスライムにすぎない私達の様な存在デモ、一端の力を持つことが出来タ。望むことばかりやって生きていけないのは当然のコト、伯爵に恩義を感じていたからこそ、私達は襲撃に加担シタ。…私達は理由も無く人を襲う様ナ、知性の欠片も無い化け物じゃナイ。きちんと思考して物事に判断をツケ、自らの中に規範ルールを持って生きてキタ。…本位で無かつたのは確力。それでも私達は義によつて自らの意思で非道に加担シタ。死にたくは無イケレド、己の罪を誤魔化すつもりも無イ。だから甘んじて裁きは受けル。君に決定権が有るのなら、好きにすればイイ……私達が言いたいのはそれダケ」

滔々と語り終えたぷりんに対して、すらむいとあめ子が近寄ると、それぞれがぷりんの口端を掴んで思いつきり左右に引き伸ばした。

「お前そんなに真面な語りが出来んなラ、普段からもつと意思疎通を明確にシロヨ!!？」

「訳解らない謎言語を訳して伝えるのニ、私達が普段どれだけ苦労してると思ってるんデスカ!?？」

「……ふえん電波はへいふ系無ひよう表情ひよう口ほり。…ふふふふほへ萌えほく属性へい」

「喧しいわ貴様ら」

ドタバタと取っ組み合うスライム達の頭に杜崎が鉄拳を振り下ろすと、三人娘は揃ってグニヤリと奇妙な形に頭を変形させ、呻き声を上げながらしやがみ込んだ。軟体生物だからといって、完全に打撃が効かない訳でもないのである。

「貴様らにも言い分があるのは解ったが、あくまで貴様らは捕虜であり、また法に則った権利保護の存在しない魔物モンスターに過ぎん。余り調子に乗って騒ぎ立てるな、貴様らはいくまで裁きを待つ身だ。……ともあれ、被害者側加害者側から意見は大方出尽くしたな」

杜崎はネギに視線を移し、改めて尋ねに掛かる。

「この連中の主張を踏まえた上で、どうだネギ先生。こいつらを君は如何したい？先程馬鹿共が言った様に、君には主張をしない自由もある。大体の物事は明確に方針を決めずとも、案外廻り廻っていくものだ。少なくとも俺は、それが悪いことばかりとは思わん。言われた通りだ、好きにしてみるといい」

ネギは先程までの昂った状態から既に落ち着きを取り戻しており、眼を瞑って何事かを考え込む。そんなネギに、今度こそ声を掛けるものはいない。皆、ネギの言葉を待っていた。

やがてネギは静かに眼を見開くと、

三人娘に視線を落としてゆっくりと口を開いた。

「……僕は、……………」

「……甘いですよネー、あの子…」

「ダナー」

「……チェリーボーイ……」

「喧しやあ」

一仕事終えて告白生徒のパトロールを再開する中村の両肩と頭の上に腰掛けたスライム三人娘は、つい先日まで自分達が「襲う」側の立場だったというのに、現在こうして一般生徒を守る側に立っていることをふと可笑しく思いながら、仇である筈の自分達に、ネギが告げた言葉を思い出していた。

『…あの日の事を思い返していて、貴女達の話聞いて。…僕は、貴女達がそんなに悪い人じゃないんじゃないか、って思います。悪魔達と違って村の人達に手を出しては居なかつたし、さっきの悪いことをした、って言っていた貴女達は、嘘を吐いたり誤魔化しをしようとしている様には見えませんでしたから。…それでもまだ僕は、貴女達を許すとは言えません。怨みがないと言えば、嘘になります。…でも僕は、貴女達に死んで欲しくは無いんです。そんなことをしても、叔父さんやスタンさん、村の人達は喜ばないと思いますから。…だから、本当に貴女達が僕に、僕達に悪いことをしたって、思っているなら。…償う為に、何かをして下さい。如何すれば償いになるのかは僕にだって解りません、だから無責任な言い方になりますけれど…如何にか、頑張ってください』

「如何にかしろ、か…：難しい話ダヨナー」

右肩のすらむいが顔を顰めてポツリと呟く。

「まあやるしかねえべやお前らは。実際ゴリラの台詞じゃ無えけど聖人レベルに甘くい裁決だぜこりゃあ。ここまで来ると人間出来てる通り越してちつとおかしいあれだ。…ネギがそうなった原因の一端がおめえらにあんなら、出来ることからやつてきやがれや」

中村はすらむいの頬を指先でプニプニと突つきながらあつけらかと告げる。触んじやネーヨと指先を払い除けるすらむいを余所に、左肩のあめ子と頭の上のぷりんは中村の言葉に応じて答える。

「解ってますヨ、多大な温情によって私達がこうして生きていられているのハ。だからこうしてお仕事手伝ってるんですカラ」

「…：兎にも角にモ、私達はチェリーボーイに全面協力を約束スル」

「ま、とりあえずはそれでいんじやね？それから無表情軟体ロリ、チェリーボーイは止めれや確かにチェリーだろうけどよ」

ビシツとぷりんに突っ込みを入れつつ、中村は賑やかな学祭の喧噪を抜けて行く。中村の進行方向に居る人間がまるでモーセの海割りか如く左右に分かれて行くのは、覆面を被ったパンーレスラーが三人

の幼女を乗せて闊歩しているという奇天烈な光景故にだろう。因みにスライム三人娘達はカモフラージュの為に肌の質感と色彩を人の肌のそれと変わりなく見えるように能力で擬装している為、見た目は唯の幼女である。だからこそ中村の見た目に犯罪性が増しているとも言えるが。

「まあ何はともあれ仕事じゃ仕事。給料貰ってる以上いかな俺とてやることあやるぜい。次はより威圧感を出す為にお前ら全員触手に変形してカップル遁走させようぜ?」

「誰がやるかボケ」

「ヨゴレ系はぷりんと中村だけで充分デスウ」

「……水をもっと蓄えないト、女の子のナカでクチュクチュさせたくても触手の強度が足りナイ。でも下手に水分子を圧縮した触手を作るト、何かの拍子に制御を失った瞬間、圧縮していた水が弾ケテ女の子のナカで炸裂……フッフ……」

「フッフじゃ無ーよ!??リアル触手プレイ実現可能かと夢を膨らませていた俺の心を裏切るなああああ!?!?」

「……馬鹿ですネエ……」

「ダナア……」

無駄に相性抜群な中ぷりコンビのコント地味たやり取りにすらむいとあめ子が嘆息していると、パンツの中に仕舞い込んでいた中村の携帯がブーブー、とバイブモードで震えた。

「あふん!!?」

「最悪デス」

「死ネ」

「……フル勃〇?」

「ちやうわ」

奇声を上げて仰け反りつつ股間を弄って携帯を取り出す中村にすらむいとあめ子が冷たく吐き捨て、放送禁止用語をサラリと口にするぷりんに通話ボタンを押しつつ中村がツッコむ。

「はいはいこちらし〇とマスク。憎しみで野郎が殺せたらいいなと二十四時間夢見てる性技の使徒なり」





いのか?』

カードから刀に戻ったフツノミタマが、己が身体をバトンの様に激しく上下に振りたくりながら疾走<sup>はし</sup>る辻に対して、訝し気に思念を飛ばす。辻はその疑問に口角泡を飛ばしそうな勢いで叫ぶ様に答えた。

「あんのなあ!!?あの女は殺されかけたのに発情しながらその下手人である俺に対する好感度爆上げする様な完璧なイかれなんだよお前の言う通り!!?狂ってる人間の思考回路なんざ読める訳が無いんだ、どんな些細な理由で機嫌損ねて周りの人間ブツスリやらかすか解つたもんじゃ無いだろう!!?俺が狙いなら一先ず人混みから引き剥がさなきゃいけねえだろうが!!?…それから桜咲にはこいつの相手はさせられん、確証は無いがこいつの腕前、桜咲より上かもしれないんだ!何よりさつきまでデートしてた憎からず思ってる後輩をこんなイかれと引き合わせてたまるか畜生!!?」

事情説明すりや駆け付けて来るに決まってるんだから、俺が一人で始末付けてみせる!!?と盛大に震えながらも意気込む辻に、フツノミタマは暫し沈黙した後、何故かやや躊躇いながら思念を放つ。

『…主よ、気付いているか?』

「ああ!!?何が!!?」

『主は……』

フツノミタマが何事か伝えかけた瞬間。

「……あん、非道いですわ〜一さん〜……」

そんな、つれない彼氏に対して軽く拗ね、構って貰おうとする様な、甘い響きの声が辻の直ぐ真後ろから耳朶を震わせた。

「フツノミタマさんとはっかかり楽しくお喋りされはって、ウチのことも構って下さいな〜?」

「っ!!?~~~~!!?!!?」

強烈な悪寒に従い、辻が身を捻って全力の跳躍を遙か下の道路に敢行した直後。ギャリイン!!?と鋼の打ち合う高音を響かせて、一瞬前まで辻の居た場所を小太刀と短刀の非対称な刃の顎が斬り裂いた。

「〜!!?あんのイかれ女あああああつ!!?」

空中で蜻蛉を切って着地の体勢を整えつつ、辻は改めて月詠の異常

性に身体を震わせる。

当たり前と言えば当たり前な話だが、辻は疾走しながらも常に背後の月詠を警戒していた。背後の気配を読み、殺気や戦意が膨れ上がる様なら何時でも振り向いて迎撃出来る様、辻は一瞬たりとも気を抜いてはいなかった。

だというのに辻が容易く背中に張り付かれ、あわや斬られかけた理由は、月詠が攻撃をするつもりで斬撃を放ったのでは無かったからである。

月詠は言葉通り、一心に追い掛けているというのに自分の事を一顧だにせず逃げてばかりの辻に不満を覚え、じゃれつく様な感覚で斬撃を見舞った。

殺気が無いのも道理である。月詠にとっては構って貰おうとする為に斬り掛かるのは、なんらおかしなことでは無いのだから。

辻が路面に着地し、受け身を取って転がる間に、月詠もふわりと体重を感じさせない動きで少し辻から離れた場所に舞い降りる。

「くっそ……!!…その連中、早く此処から遠ざかれ!!? 映画やドラマの撮影じゃ無いぞ、早く逃げろ!!?」

中心街からは幾分距離を離れたとはいえ、まだまだ郊外へは程遠い街の一角。当然それなりに観光客や一般生徒は点在している現状に辻は焦りを覚え、切迫した声色で呼び掛ける。

しかし、普段の麻帆良ならば兎も角現在は麻帆良学園祭の真っ只中。月詠の格好が多分に浮世離れしている事も手伝って、大多数の間は祭りのイベントの一環だと認識している。辻の避難勧告も効果は薄いようだった。

「おい、洒落じや濟まない状況なんだよ!!? 早く「ふ、うふふふふふ……大丈夫ですよー」<sup>はじめ</sup>さあん……。ウチ今は一さん<sup>はじめ</sup>にしか興味ありませんから」…遠ざか、ってひい怖い! 怖いぞこの女!」

大分テンパった様子の辻をおかしく思ってたか、クスクスクスと笑いながらの月詠の執着宣言に、思わず周りへの勧告を中断して悲鳴を上げる辻。

『…埒があかん。おい人斬り、貴様はそれで一体主に何用だ? 下ら

ん斬った張ったがしたいのならば余所のイかれを追い掛けていろ。  
主はそんな低俗な次元に収まる存在でないのだ』

「フツ！お前は常に上から目線でナチュラルに挑発的な物言いになんだから余計な事言うなよ!!? こういった手合いは何がきつかけで暴れ出すか知れたもんじゃねえんだから!!?」

『わざわざ訪ねて来ている時点で穩便に帰りなどせんだろうさ。下らん手間をかけられるようならおめおめ危険人物を招いた警備の間抜け共に対処させれば良い』

多少ならず苛ついた様子でフツノミタマが思念を月詠に飛ばし、その一切遠慮の無い物言いに辻が泡を喰って制止に掛かるが、フツノミタマは素気無くあしらって現実的な対処法を示す。

「あくんもう、つれないこと言わんといて欲しいですわ〜フツノミタマさん〜。ウチ遙々京都みやこから訪ねて来たんですから〜…一はじめさあん、ウチとイイことしませんか? 我慢は身体に毒ですえ〜」

「誤っ解を招く様な言い回しは止める!!? 誰がお前とチャンバラするか、他人害さなきや生きてけない様なお前みたいなのと一緒にするな」「嘔吐き」

辻が拒絶の言葉を吐き切る前に、何処か嫌な嗤いを浮かべた月詠の断定が突き刺さる。

辻の動きが、一瞬制止した。

月詠はそんな辻を愛おし気に見ながら、歪んだ世界を語り出す。

「ええんです〜一はじめさん、ウチ相手には取り繕わんでも…この意味の見出せん世の中で、綺麗で美味しそうな人を見ると、斬りたくなりますよね〜? 怨みやら怒りやら、後ろ向きな感情持たな剣も振るえん奴等と違って、ウチらは人を斬るのに理由は要りません〜…斬りたいから斬る、それだけのこと。独りぼっちが寂しいなら、ウチを斬ればよろしいんですわ〜、そうしたらウチも、一はじめさんが愛しいから。…綺麗に一はじめさんを斬って差し上げます〜」

常人には、何がどうしたらそう話が繋がるのか理解の及ばない月詠の狂った理論に、辻は直前の取り乱した様子が嘘のような、奇妙に屈いだ表情で月詠を見返していた。ややあって、表情と同じく平坦な声

音で辻は言葉を返す。

「…悲しいよ、イかれた屁理屈にも満たない壞論が理解出来てしまう自分がない。…まあ、そうだ。考えてみれば、お前の頭叩き割る前からお前は俺を同類認定していたからなあ」

辻は疲れた様になつて、息を吐く。

「お前の鼻は正しいよ。お前と俺は、違うけれど同じなんだろう…認めてやる。俺は確かに真面じゃ無い感性をしていて、箍が外れればお前みたいな通り魔に成り果てる。なにせ俺は、人は真つ二つになつてゐる状態が一番美しいと、そんな認識が正しい訳が無いと理解つてゐるのに本気でそう思つてゐる様な奴だからなあ」

辻の曝露カミングアウトに月詠はさも嬉しそうに顔を輝かせ、嬉々とした様子で辻に尋ね掛ける。

「う、ふふ、ふふふふふ、そう…そうですか、一さんは竹割りがお好きですか、道理で…ふひひ…消えん傷を刻んでくれる訳ですわ…!!?」

瞳孔を開き、時折笑顔を漏らしながら喜悅する月詠の姿には、例えようも無い不気味な迫力が伴つてゐた。結局半ば観客ギャラリと化してしまつた元通行人達も、その狂態に不穩なものを感じてか、人集りの輪が大きさを増した。

「じゃあ先輩との逢引は辛かつたんですよ、今日は…いえ、今迄ずうつと、あない近くに居ながらお預けやなんて…ウチやつたら氣い触れてしまいますわ…」

一通り喰ひ終えた月詠は、一転して眉を顰め、さも心配そうに辻へ氣遣う様な言葉を掛ける。

…感情の振れ幅が極端に大きかつたり切り替えが早過ぎたりするもの、精神異常の一種だつてな…

辻は静かな心持ちでそんなことを考えながら応じて答える。

「既に半ばを越えた程度には触れてる女が何を言う。…そりゃあ辛さ、苦しいとも。欲望が果たせないことがじゃあ無く、本能と理性がてんで噛み合つてくれない自分という男が情けなくてな」

勘違いするなよ?と、辻は意外そうに目を見開く月詠へ強い視線を向け、決然と言葉を叩き付ける。

「我慢している身は辛くないか?笑わせるなよ、氣遣うタイミングが十年遅いぞ?…物心付いてから俺はずっとこの有様で、イかれた感性を何年宥めて生きてきたと思ってる。俺は、異常だ。若氣のいたりでやらかして、親にも半ば見限られてるロクデナシに過ぎない。でも、そんな俺でもそれなりに頑張ってる結果、今此処麻帆良に居る。俺は馬鹿共と連んで馬鹿やって、可愛い後輩と放っておけない弟分を構えてる現状に満足してるんだ。…お前と俺が違う点はそこだよ月詠。お前の人生に何があつて、どう歪んだ結果そうなったかは知らないし興味もさして無い。ただお前は、歪んでいる方の自分を肯定して生きてるんだろう?俺は異常な自分を否定して、普通の俺を肯定して生きている。真に狂った人間は自分をおかしいなんて認識出来ない、お前も俺も、狂い切つてなどいないんだ。やり直せた筈だし、俺はそうしてる。逸れ者同士馴れ合いか舐め合いがしたかったか、それとも理解者だからこそ殺し合いがしたかったか知らないが、俺はお前に付き合うつもりは無い。感慨も無く、とはいかないだろうが、普通の侵入者としてお前を捕らえるし、抵抗するなら抑止力として刀を振るう。…思い通りになぞ、行かせるかよ」

長い語りを終えると同時に、辻はフツノミタマをゆるりと振り上げ、己が生家の流派、薬丸自顕流における右蜻蛉の体勢を取る。先程辻自身が言った通り、イかれた人間は何時どのような原因で弾けるか解つたものではない。拒絶されたことよって月詠が激発し、周りの一般人達に襲い掛かるような場合を危惧した辻は、月詠が妙な動きをしたら即座に斬り掛かる覚悟でいた。

月詠は辻の言葉を黙って聞いていたが、戦意を漲らせるでも無く、落ち着いてフツノミタマを構える辻の姿に落胆したかの如く、目を伏せて溜息を吐く。

「……「さんはじめ、ウチには態々堪えたがる心持ちなんてウチには理解出来ませんが…それを一生、続けられると思つてはりますか?」「続けてみせるや」

辻は断言する。

「俺は誰とも真の意味で比翼連理とはなれないかもしれないが、イカれた人間として生きるより独りの方がマシだ」

「……そうですか？なら、仕方ありませんな〜」

月詠は一つ息を吐き、ゆるりとした動きで腰の二刀を抜き放つ。

「……戦る気か」

「口で理解って頂けんなら、こっちで語る迄ですわ〜。一はじめさんの言うてはることがどれだけ無謀で困難なことか〜：ウチが教えて差し上げます〜」

口端を三日月の様に吊り上げた狂笑を浮かべ、月詠は構えを取る。

『…主よ、殺るつもりか？』

「お前の口ぶりだと殺らない方が良さな感じだな？……ともあれ、殺す気は無い。手足の一本斬り落としても、此麻帆良処なら何とか死なせずに持たせられそうだしな」

辻は矢鱈含みのある物言いをするフツノミタマを訝しみながらもそう返してから、随分と思考が物騒になっていいるな、と内心で独りごちる。

…引き摺られるな。籠が緩み出してる現状、下手打つと戻れなくなるぞ……

辻は自らを戒める様に自身へと言い聞かせ、目の前の月詠の動勢に全神経を集中する。

触れれば斬れそうな鬼気を発する辻を前に、月詠は意外な行動に出た。

「え〜〜いつ!!?」

「……っつ〜」

気の抜ける掛け声と共に、月詠は軽く助走をつけた後に辻に向かって跳躍した。それも意表を突かんとする様な素早い動作では無く、ふわりと宙を漂う様に緩やかな放物線を描いて、辻の立つ位置へ斜め上方から緩やかに落下して行く。

言うまでも無く、方向転換の効かない空中でのそんな鈍重な落下はこの状況においては自殺行為である。

故に辻は刹那の時間迷いを得た。今の月詠は隙だらけ過ぎて、下手に斬撃を見舞えば殺してしまうかもしれない。辻の納める剣術は加減に向かず、また手にしている武器も殺傷力が過剰に過ぎたのもこの場合は一因か。

それでも辻は、次の瞬間にはフツノミタマを唐竹割りに落ちて来る月詠目掛け繰り出していた。月詠の意図が読めない以上、単純に当て易さと相手の避け難さを重視して身体の中心線を狙ったその一撃は、この場合において妥当な選択であっただろう。

しかし、機先を制されて更に奇襲めいた奇行により動かされた形の辻のそれは、拍子や動作こそ適切であれど、言わば気の抜けた一撃と相成ったのだろう。動揺が動作に見られずとも、かつて月詠の頭をかち割った時の一撃に比べて、あまりに今の辻は氣迫に欠けていた。

故にだろうか。

月詠は豪速の斬撃を寸前で見切り、空中を蹴り抜いて辻の左後方へと跳躍。攻撃を回避すると同時に反撃を見舞うのに最適な死角へと廻り込んだ。

「っ!!??……おああ!!??!!??」

しかし辻は己の一撃を躲された衝撃に浸ること無く、即座に振り下ろす最中のフツノミタマを手首を捻って横薙ぎの軌道に変化。同時に膝のバネと腰の超駆動で

、無理矢理に振り下ろしの一刀を月詠を追っての次撃に変える。無理な動きを課した身体の節々からは鈍い痛みが返ってくるが、その甲斐あって辻は月詠の振り上げた小太刀の一撃を受けることに成功する。

「あは」

「な……!!??」

しかし、決死の思いで防御に成功した月詠の一撃は、崩れた姿勢で受けを行った辻にして余りに軽い、牽制にも満たない様な粗末な



斬撃であった。千載一遇の好機にそんな加減の過ぎる一撃を打ち込んでおきながら、何が楽しいのか裂けるような笑みを深める月詠に、辻が困惑の呻きを思わず洩らした、次の瞬間。

『…!?、距離を取れ、主!!?』

「っ!??なん…!!?」

フツノミタマの鋭い警告が辻の頭に響いたその時には、既に月詠の仕込みは完全に辻を捉えていた。

辻が目にする、笑う月詠の姿が周囲の風景ごとグニヤリと歪んだかと思うと、直後明瞭になった辻の視界に飛び込んで来たのは、燦然と輝く太陽と目の覚める様な青空だった。

「……は?……」

辻が思わず呆けた眩きを洩らした次の瞬間には、辻の身体は重力に捕らえられ、地上十m近い位置から正しく物理法則に従って落下を始めた。

「おおおおおおお!??」

訳の解らない状況と落下の恐怖感から叫び声を上げつつも、辻は蜻蛉を切って落下の姿勢を整え、着地する体制に入りながら手持つツノミタマに問い掛ける。

「何がどうなったフツ!??」

『転移魔法符とやらだ!!?あの女は最初から主を飛ばす狙いで距離を詰める為にあのような奇行に出たのだろう』

「転移てお前、要するに瞬間移動か!??何処だよ此処!!?…って待て!あの女<sup>月詠</sup>一体何処へ…!??」

ようやく事の元凶の存在を思い出しながらも、辻は迫る地面に膝のバネを活かして衝撃を殺しつつ何とか無傷で着地。素早く周囲を見回すと、其処は麻帆良の敷地内。諸学校と出店等の立ち並ぶ街路の丁度境目に位置する場所だった。

「……さっきの場所から距離にして一km少々って所か、然程離れてないぞ?」

『当然だ。転移符系の代物は特注の希少且つ高額な物を除いて、一般的に使われる様な代物の転移距離は精々が数百から遠くとも数km。

ましてや此の地は境界が張られているのだから、敷地の外へは魔法具の類いを使つては出られぬよ』

「……だったら何だ？何の意味があつてあの女は……」

「一さくさん、えろうすいませんでしたく、転移対象の一さくさんが転移に同意を得とらんかつた所為で、少々飛ばすポイントがズレてしもうたみたいですよ」

フツノミタマの解説に、益々月詠の意図が解らなくなり混乱する辻に対して、当の本人から声が掛かった。

辻はゆつくりと振り返り、相も変わらず楽し気に口端を吊り上げる月詠を睨み付けて問いを放つ。

「……お前一体何がしたいんだ？」

「うくん、言葉にすれば色々長うなつてしまふんですけど……一言で言うなら、一さくさんに素直になつてもらふ為です」

月詠の返答に、辻は眉根を寄せてその言葉の真意を考える。要するに月詠は、一度拒絶された程度で諦める様な物分かりのいい輩で無いということなのだろうが、それと最前の移動劇にはどう考えても繋がりが見出せない。

「これから一さくさんには、ちいとばかし辛い目に遭つて貰いますくえろうすいません……でも、一さくさんが強情なんがあかんですえ、ウチにあんまりつれなくするから……せやからこれは、お仕置きですわ」

「……訳が解らん上に勝手なことを……!!？もう我慢ならん、今度こそ脳天かち割つて『主よ』くれる、わつて何だよフツ？」

謎めいた月詠の言動に苛ついた辻が戦意を露わに言葉を投げ付けていた最中、割り込んで来たフツノミタマの呼び掛けに氣勢を削がれた形になった辻は、やや慄然とした声音で応じる。

『何か、聞こえぬか？主の腰元からだ』

「それが何だよこんな時に……いや……待て」

携帯か何かの着信程度の話かと、非常事態な現状を前に一蹴しようとした辻だったが、その聞こえて来た色気の無い、ピーピー、という無機質な電子音に引つ掛かりを覚えて、月詠の方を警戒しながら

もポケットからその機器を引っ張り出す。

それはあくまで念の為に持って来たに過ぎない、告白行為要警戒者を探知する為の好感度センサーだった。画面の数値はとつくに危険域を通り越し、メーターの針は振り切れんばかりに右端で震えている。

……告白警戒者が、居るから何だつて……言っちゃ何だが今それ所じゃ……待て、俺は何に引っ掛かりを覚えた？……

辻の頭は高速で回転し、センサーに関する事前説明の一項を脳裏に蘇えらせる。

則ち、センサーは好感度が高い数値を持つ告白警戒者が告白警戒ポイント内に存在した場合においてのみ、警告音を発生させる。という条件項目を。

「……………っ！っ？……………」

明確に何が危険なのかをはっきりと形にして現せた訳では無い。

しかし、背筋を撫で上げる様な錯覚と共に襲って来た猛烈な悪寒に、辻は今直ぐにこの場を離れるべきだ、と理屈で無く本能で理解した。

だが、目の前の脅威月詠は生憎と、鈍間かな辻の決断を待つてはくれなかつたようだった。

「止め……………っ！っ？」

「一さあん」

蕩ける様な、上気した満面の笑みで月詠は。

「一さんが望むやり方で……………ウチのことを、愛して下さい……………」

辻にとつての、破滅へのトリガーを引いた。

遠くで、世界樹が発光する。

#### 4話 少年少女の恋模様 〱辻と刹那その3〱

物心付いた頃から、俺の眼に映る世界は自然に不自然だった。家族の身体にも、家や道場の壁面にも、庭の植木にも。家のテレビにも贈り物の銀食器にも森の中の岩にも近所の猫にも買って貰った絵本にも道行く自動車にも通行人森工場熊ビル道路小鳥時計台  
.....

眼に映るもの一切に、線が入っていた。他の誰に見えるかと聞いても皆が首を横に振る、対象の中心を縦に真っ直ぐ走った細くて黒い線が。

「.....ねー、お父さん。なんで皆、お顔の真ん中に線が入っているの？」

「.....何を言っているんだ？」はじめ

どういう訳か俺以外に見えてはいないその線は無性に気になる代物で、堪らなくその境界から二つに分けたくなる衝動を沸き起こす。幼い俺は絵本や布切れ等、破れ易いものを弄んではそれを気味が悪い程綺麗に二つに裂いていたらしい。今にして思えば、気味の悪い子供だったものだ。

中でも俺は、小さい頃から鍛錬の一環で申し付けられていた、薪割りの手伝いが好きだった。

今でも初めて薪を割った瞬間のことを鮮明に覚えている。その幼い身体には持て余す両手持ちの重い斧をやつとの思いで振り下ろし、立てていた薪が鈍い手応えと共に真つ二つになった時のことを。

刃が薪に喰い込んだ瞬間の感触に、何よりも二つに分かれて倒れた薪の形そのものに。言葉に表せない程の高揚と興奮を幼い俺は覚えたのだ。

剣の師匠にして実の父であるあの男の着ける鍛錬の日々は過酷にして厳しいものだったが、好きなことをより上手に、完璧に成せる様にする為にそれは鍛錬うってつけだったから、投げ出そう等とは一度も考えず、只管に励んだ。俺は才にも恵まれていたらしく、中学生の半ばを越える頃には、腕前で俺に敵う様な人は師である父を含めて片手で

数える程にしか居なくなっていた。

「兄さん……なんで、兄さんは……」

「…もう放っておけよ。俺がおかしいのは俺自身よく解ってる。でもしょうがないだろ、毎日毎日毎日毎日人と顔合わせる度に見えるんだ。お前にも解る様に言うなら、俺にとって線の入ってる人間は裸でいる女と同じなんだよ。更に言うなら好ましく思う人間ほど、俺はそれがたまらなくイイ女のように見える。俺はお前弟のことすら今最も手を出したい、極上の美人に感じるんだ。…もう俺はどうにかなるよ。だから俺のことはもう、気にするな…ひと丁」

それと同じ頃だったろうか、何かを真つ二つにする行為に対して、高揚や歓喜の他に性的興奮を覚え始めたのは。薪割りでも興奮して股間を弄った思春期男子など全国広しと言えども俺位のものだろう。

その欲求が人を断つてみたい、とエスカレートするのに其れ程時間は掛からなかったし、色々悩みも躊躇いもしたが、結局あの時の俺は、衝動を我慢できなかった。

だってあまりに人の正中線を眩しく見せつけてくるあの線は、きつと俺の本能が見せている幻覚なのだ。ガイドラインを引いてやるから、やってしまえと声無き声が俺に囁くのだ。

俺は弟の文字通り身体を張った制止によつて踏み止まることが出来、家族の縁は遠のいたが、別の地麻帆良で再起も成せた。

「兄さんは優しい人だよ。だから僕に負い目があつて出て行くのを否定はしない。…此処に居ても今は兄さんの方が辛いだろうから。でも兄さん。そうやって僕を気遣ってくれるんなら、兄さんには幸せになつてほしい。いつか誇れるような立派なお嫁さんでも連れて、胸を張つて帰つて来てよ」

……悪いな、ひと丁。

…約束、守れないかもしれないよ……

「中村先輩!!? 反応は!!?」

「距離はもう三百も無えはずだ!!? お前の位置からだとその角右の左で信号二つ目を右で多分らしい建物無えから上だ上!!?」

刹那は電話越しに聞こえてくる中村の指示に従って、右手の細い路地を全速力で爆進する。通路中でどうやら昼間から酔っ払っていた中年親父が赤い顔を恐怖に歪ませて迫る刹那を見ていたが、生憎刹那には構っている余裕も時間も無い。地面を蹴って路地の左壁面に足を掛け、三角飛びの要領で酔っ払いを飛び越すと表通りに着地。再び左手に向かって疾走<sup>はし</sup>り出す。

中年親父の目から見えていたら、片手に日本刀引っ提げた焦りと怒りで顔が鬼の様な形相の可愛らしい少女があり得ない速度で突っ込んで来たと思ったら一瞬で掻き消えた様にしか見えなかったであろうから、酔い過ぎて幻覚でも見たようにしか思えなかつただろう。

豈図らんや、紆余曲折あつたとはいえデートを乙女状態で全身全霊に満喫していた筈の刹那が何故右手に物騒<sup>日本刀</sup>なものを持つて恐い顔で急いでいるのかと言え、それこそ言うまでも無く刹那の意中の人、<sup>はしめ</sup>辻一が恋敵? 月詠に追い回されて何処かへ消えた旨を、<sup>剣道部員一同</sup>出歯亀集団から緊急報告として知らされたからに他ならない。

『桜咲桜咲ヤバイヤバイ!!? ゴスロリ来た日本刀持つてる、部長と話してる時の顔とかからして明らかにイッちゃってる系の白髪長髪女が刀抜いて逃げた部長追っ掛けてっっちゃった!!?』

辻に贈る為のプレゼントを購入した直後に副部長(女)からそんな電話を受けて一瞬呆然とした桜咲は、直ぐに風体からそのゴスロリ女がかつて京都の一件で関わった逸れの神鳴流剣士、月詠であると確信を持った。

：何故あの女が此処に……そして何故今……!!?」

刹那は考えかけたが、何故今かは兎も角、何故辻の前に現れたのかは明白だと、混乱で頭の回らなくなっている己を叱咤して、刹那が辻と一旦別れた場所に集まっているという剣道部員一同と合流する為に走り出す。

そう、辻は京都の一件から暫くの間は折に触れてガタガタと震えな

がら刹那に弱音を零していたものだ。

『あのイカれ女は絶対にまたやって来る。他の馬鹿共は気にし過ぎだの怯え過ぎだの好き勝手言うが、あの女のあの時の狂態見てないからそんな事が言えるんだ。…頭がち割られて好感度上がるとかどう異次元にズレた世界のお人ですかあ!?!?!:そんな女がまた顔を出すと言ったんだ、絶対に俺の心臓に悪い登場の仕方と台詞で俺の精神を殺しに来る。例えば風呂上がりにはバスタオル一丁で涼んでたらふと風を感じて振り向いて、閉めた筈の窓が細く開いてて訝しく思いながら閉めに立ったら窓越しに光が反射して映る背後の部屋の中で、ベッドの下から刃物片手に首だけ出してニタリと笑ったりとかヒイイイ……!!?!?』

等と、妙に具体的な例を上げながら頭を抱えていたが、要するに辻はかなり歪な形ではあるものの、月詠に好意を持たれて少なからず執着されているということである。刹那は辻の安否を様々な意味で案じながら焦りを押し殺して駆け付けると、待機していた剣道部員一同を代表して副部長、Sと何故か居た木乃香が矢継ぎ早に捲し立てる。「二人共凄まじい勢いであっちの方へ駆けてった!!?!?速過ぎて追いかけたウチの奴らも直ぐ見失ったんで今部長の携帯のGPSを探索中!!?!?」

「私らこれ以上無い邪魔者が現れた感じだったから割って入ろうとしたんだけどその暇も無しに部長が逃げ出して…:ゴメン桜咲、なんだかんだで尾け回してた件は後で幾らでも怒られるから今は協力させて!見た感じ、あの娘凄くヤバい感じだった。雰囲気っていうか、部長と話してた時の纏ってた空気が尋常じゃない!正直幸せ浸ってた桜咲に気付かれないように片付けたいとも思ってたけど…:多分私らじゃ相手になんない。部長を助けてあげて、桜咲!!?!?」

「せつちゃん、ゴメンなく…:あの人、ウチの事件があった時の人や、間違いない。今手の開いとった中村先輩に連絡取って来て貰てることや。…:行くんやろ、せつちゃん?ウチは止めへんよ、好きな人との恋路が賭かっとなる。…:でも、気いつけてな?」

色々と勢揃いしているこの状況に言いたいことは沢山あったが、今

だけはその余計なお世話ぶりがトラブルの早期発見に繋がったことに感謝して、部員の一人が『物分かりの悪い奴が現れた時に手っ取り早く言う事を聞かせる為』携帯していた刃渡り二尺二寸の打刀を拝借し、刹那は駆け始めた。そうしてから連絡があつた中村の指示で辻の位置目掛けて疾走<sup>はし</sup>る現在に至る。

『桜咲、これは決して巫山戯て言ってるじゃ無えが、もし一ちゃん<sup>はじめ</sup>発見した時にR-18的な展開にヤンデレロリとなつても反射的に纏めて団子にしようとするなよ?世〇様じゃ無えんだ、Bad Endだぞそれ』

「その言動が巫山戯て無くて何なんですか!??縁起でもない話は止めて下さい!!?」

『まあ落ち着け、まだ浮気相手:じゃねえ、ヤンロリが現れてからそんなに時間は経って無えそうだ。一ちゃん<sup>はじめ</sup>の腕前ならこんな短時間でやられやしねえよ。魔法関係者の連中にも応援頼んだしきつと大丈夫だ。:流石に各所に散ってるレンジャーは間に合わ無えだろうが、場所が確定したら俺はそっちに飛べる。冷静に行けよ、せつたん』

「……とりあえずその呼び方は止めて下さい」

緊迫した状況にも拘わらず茶化す様な物言いを止めない中村に刹那は思わず電話越しに歯を剥くが、中村は口調を変えずに飄々と刹那を宥める。言葉通り落ち着かせてくれようとしているのだろうし、普段通りの言動を変えないのは、余裕を表して刹那に安心感を与える為なのだろうが、どうにも刹那はその気遣いをしてくる余裕が中村にある事自体にもどかしいものを感じる。

……解っている、言われる迄も無いことだ。非常時だからこそ冷静に力を振るい、十全を成す。私がこれまで当たり前前の様にして来たこと、だ……

……なのに、何故。:こんなにも心が定まらない……剩え、歳上といえ遙かに私よりも裏の経験が浅い中村先輩にまで当たりかけて……

……まるでこれでは、本当に唯の小娘でないか……

『せつたん』



通りを駆けながらも己の変容に忸怩たるものを覚える刹那に、電話の向こうの中村が静かに呼び掛ける。

「……中村先輩、ですからその……」

「何考えてるか知らねえけど、好きな男の側に他の女の子が居て、しかも刃物持つてるシチュエーションで焦らねえ恋する乙女は居ねえからな？」

性懲りもなく妙な呼び名を続ける中村に力無く抗議しかけた刹那は、次の中村の言葉に口を噤む。

「……中村先輩……」

『照れ臭えんだろが今は変な誤魔化しは無しだ無し。：お前は焦っていいんだよ、せったん。プロっつーか戦うモンとしては確かに良い変化たあ言い難いかもしんねえが、一つ教えといてやるよ』

中村は不敵な笑いと共に一旦言葉を切り、高らかにその言葉を電話越しの刹那に届かせる。

『この世で一等強え生き物は子供守るお母さんと恋する乙女だ。俺の母さんがそうだもん。母さんの乙女時代の武勇伝聞いて、俺を育ててる母親時代の母さん見てきた俺の言う事に間違いは無え』

自信満々に言い切った中村の自慢気な声音を余所に、刹那はガツクりと脱力する。

「……中村先輩、それとこれとは……」

『話が別だ、って言ってるんだろ？違わねえんだなあコレが。まあ俺の母さんがどれだけの凄ま美しいのかは今度ゆっくり聞かせてやんよ。今言ってるのはな、せったん』

中村は否定的な刹那の台詞を最後まで言わずに搔っ攫い、言葉を続ける。

『さつきはBe c o o r くわいえつと的な感じのこと言ったが、せったんがああヤンロリと対峙した時に発しなきやいけねえのは腕っ節の強さじゃ無くて「ちちゃんへの想いの丈なのよ。……あのヤンロリは話聞いてつと中々重い感じにヤンでるけどよ、ヤンデレていようがツンデレていようがLOVEはLOVEなのよL・O・V・E !!?』

「…それが…」

『聞け。…気持ちで負けちゃいけないだよ、せつたん。野郎と女が恋に落ちるのに時間も経緯も関係無え！大和撫子的な奥ゆかしさはこの際NG!!?…何時もの自分じゃ無えなんてんなモン当たり前なんだよ。何処の世界に済ました顔で恋愛してる女の子が居んだ？これは侵入者の撃退若しくは捕縛なんつう色気の欠片も無え事態じゃ無え、恋の戦争だウラア!!?無様でも何でもいいから向こうの迫力にイモ引くんじゃ無…ああ!!?』

刹那に発破を掛けていた中村が唐突に言葉を切り、驚愕の声を上げる。

「!!?、どうしました、中村先輩!!?」

只事でない様子その声音に、刹那が俄かに緊迫して尋ねる。

…まさか月詠の他にも襲撃者が麻帆良の中に!!?」

「中村先輩!!?」

『…桜咲、お前んとこから見えるか、世界樹……』

やがて中村が呻く様な声で世界樹を注視する様告げて来る。

「……………」

刹那は何の脈絡も無いその要請に首を傾げるが、冗談を言っている様子でも状況でも無いので、予め指示のあった裏通りへの曲がりを跳躍して屋根の上を通るルートに変更する。

「…つな!!?」

着地して世界樹の方角へ顔を向けた刹那は、思わず驚愕の声を洩らして足を止める。

全長百mを優に越える、青々と生い茂る枝葉を天に向かって伸ばす雄大な常緑樹。その迫力から通り名を世界樹、正式名称を神木・仙桃という、麻帆良の表裏を問わず象徴シンボルとして其処に有る一本の巨大樹木。

その世界樹が、全体から淡い光を発光させ、光の粒子の様なものを輝く枝から麻帆良の一角へと、細く何かの線ラインの様に、繋げながら降りていた。

『例年の発光にや早えし、こりや若しかしなくても告白者出たぞ糞っ

たれ、こんな時だつてのに……」

「……中村、先輩……」

刹那は己の声が僅かに震えているのを自覚しながら、災難の畳み掛ける状況に愚痴を溢す中村へ呼び掛ける。

『……どした？』

只ならぬ様子の刹那に、即座に愚痴を切り上げて真剣な声で尋ね返す中村。

刹那は単に告白者が出ただけのことならば声音に現れる程の動揺はしない。ならば何が其れ程に刹那を揺るがしているかといえ、その答えは真に単純明解だ。

世界樹の放つ光の粒子は刹那の立つ位置からそう遠くない所に細く降り注いでいた。平時ならば通学路の一本なのだろうその通りの中心では

、遠目に薄らと見える刀を手に持つ男性がその光の粒子に包まれていたのである。

「……中村先輩、辻部長は今何処へ……」

『おう……？……すぐ近くだ、お前んとこから北東に数百……待て、オイもしかしてこれ……？』

その、悲痛な響きさえ混じる刹那の問い掛けに気圧され、やや慌てて辻の位置を確認した中村が告げた言葉は、半ば事実だと理解<sup>わか</sup>つていた最悪の状況が本当に起こり得ているだと確信させるものだった。

「……私は行きます!!……中村先輩も早く!!……」

『ちよい待て慌てて突っ込むな桜……!!……』

最早電話を切るのもどかしく、刹那は打刀を手に全速力で月詠と対峙する辻の元へ駆け出した。

「気分は如何ですか、一さん……？」

月詠がまるで、ご馳走を前に「待て」をさせられている犬の様に、愛欲の滲み出る期待で歪に歪んだ笑みを浮かべながら弾んだ声で問う。それに対して辻は、世界樹の魔力が身体に浸透仕切ってから伏せていた顔を上げる。

別に、辻の顔には思わず逃げ出したくなるような凶相等は浮かんでおらず、従来の柔和な表情を浮かべたままだった。

「っ!!? あは、あはは!!? ええですよお一さあん!!? ますます素敵に  
ならはりましたわあゝ!!?」

にも関わらず、その佇まいには、人を見ただけで不安にさせるような、得体の知れない何かがあった。

例えるならば、折り目正しいスーツ姿の男性が町中に立っ  
ていても何ら違和感はない。しかし、同じ姿の男性が鬱蒼と草木の生い茂る暗  
い森の中から現れたら、不気味なものを感じるだろう。

今の辻はそのような、歪にしてその場にそぐわない、  
いてはいけないものであると人に感じさせるような雰囲気  
を漂わせているのである。

そして月詠はそんな不気味な辻の変貌を心の底から嬉しく思い、祝  
福していた。

「……月詠……」

「はいゝ」

静かに、それまで一度も真面に呼びはしなかった名を呼びかける辻  
に、うっとりしながらツクヨミが答える。

「…いじらしい奴だな、お前は…こうまでして俺の気が曳きたかった  
のか?」

「二さんが先輩とばかりイチャイチャしてるからいけないんですわゝ  
あないに仲睦まじい様子を見せつけられたら、やきもち焼くに決まっ  
とりますゝ」

ぷう、と可愛らしく頬を膨らませる月詠に辻は優しく微笑みかけ  
て、

「そうかそうか。確かにお前を邪険にし過ぎたなあ、悪いことをした  
よゴメンな月詠」

お詫びと言っちゃ何だけど…、と辻は少し気恥ずかし気にはにかみ  
ながら静かにフツノミタマを振り上げる。

「お前をもっと綺麗にしてやりたいんだ、いいかな?…お前は殆ど完

壁に綺麗な対称シンメトリーの面立ちオモてをしてるから、これ以上無く綺麗な分かれ身にしてやれると思うんだ」

お前さえ良ければだけれど、どうだろう？と照れ臭そうに顔を赤らめつつ告げる辻。

その様子は、彼女とショツピングをしている最中にプレゼントをしたいと提案している彼氏そのものだった。

辻は本当の本気で、好意的に思っている対象に好意を表す手段として、対象自身の両断リョウタンするという行為を選択することを、欠片も疑問に感じてはいなかった。

「はい…はい…!!? 無論ですう勿論ですううううっ!!? 一さんはじめのがウチをお頭から端ない股座までおろしてくるなんて、そんな素敵な愛のお言葉ウチ産まれて初めてですわああ、あはははははははははは!!? ……来て下さいい、一さはじめあん。ウチもキツチリお返ししますからあり、斬って斬られて愛し合えるなんて夢みたいですよ…ウふ、うひはあははははははははあ!!? …!!?」

狂わされた男の言葉に狂った女が答え、二人の周囲は薄気味悪い迄に濃密な、言葉にするならば愛念と欲情とよく解らない何かグチャグチャに混ざり合ったとしか形容出来ない感情の渦に満たされる。

辻が微笑みながら傍目にはそれと解らぬ、その軋みを挙げかねない程に柄を絞り込み、蕩けた表情かおの月詠へ斬り掛かろうとした、正にその瞬間。

「済まんな、主」

「……………」

何の前触れも無く辻の真横まらわに出現あらわれた長い黒髪くろかみの女が辻の腕かひなに己が両腕を絡み付け、腕の自由を奪った上でフツノミタマの刀身を持つ辻の手に、袴はかまに包まれた膝をかち上げた。

結果天高く跳ね上がったフツノミタマの刀身。それに素早く反応したのは月詠であり、回転しながら放物線を描いて辻の斜め前方に飛んで行くフツノミタマへ飛び付く様に跳躍し、手の中に収めようとするが。

「お呼びで無い、失せろたぶれが」

「な……っ!?？」

瞬間移動したかの様にフツノミタマの柄を逆手に取った体勢で空中から滲み出る様に現れた黒髪の女に蹴りの一撃を喰らい、敢え無く地面に叩き落された。見れば、拘束を振り解こうともがきかけていた辻の傍らから、既に黒髪の女の姿は無い。

そう、一触即発の状況に割り込み、辻を武装解除して月詠を蹴り剥がしたのはフツノミタマの擬体である女性の魔力構成式擬似人体だった。

フツノミタマは己が本体を掌上でくると反転させて順手に持ち替えると、余分な力の抜けている堂に行った青眼の構えを取り、辻と月詠を底角とした二等辺三角形の頂角地点で二人を睥睨する。

「……フツ、何をするんだお前。どうして邪魔をする?」

「……なにしてくれはるんですか〜フツノミタマさ〜ん……?」

辻が戸惑った様な表情で、月詠が俄かに殺気を帯びた、細めた目の顔でそれぞれ抗議の言葉を送る。フツノミタマは構えを崩さないまま僅かに肩を竦め、月詠を視線すら向けずに黙殺して辻のみに答えを返す。

「決まっているさ、貴方に其処のたぶれを断たせない為だよ主」

「……だから、何故だ?よもやお前が、人を断つてはいけないなんて言いはしないだろうに。…お前は俺の斬撃に、惹かれているんじゃないのか?」

辻は怒気こそ発していないが、その顔には少なからず苛立ちが浮かんでいる。一般的な感覚で言うならば、恋人との触れ合いに突然割り込まれた様なものだから、怒らない方がおかしい話だろう。

…それでも尚、短慮に向かって来る様な事はしない、か。…矢張り人格を変えられたというよりは、一部の認識をズラされた、といった感じなのだろうな。…面倒な事態に陥ったものだ……

あくまで物腰自体は以前と変わらぬ辻の言動にそう見立てを付けて、フツノミタマは嘆息でもしたい気分には駆られる。

それでも尚、彼女には彼女なりの譲れないものがあつた。

「ああ、そうだ。確かに私は貴方の一閃に惚れ込んだ性質タチさ、主。しかし生憎私は好みが五月蠅く理想の高い面倒な地雷女でね」

戯けた物言いと裏腹に、凍える様な視線を据わった目付きの月詠に向けてフツノミタマは語る。

「正気の貴方に振るわれるならば例え何千何万だろうと、人風情ヒトふせいなど藁束の如く搔つ捌いてくれて構わないさ、如何でもいいことだからな。しかし今の主は正気で無い。自らの意思で他人を断つと、定めていないのだよ。私と貴方の栄えある第一歩を、其処のたぶれ如きの姑息な仕掛けで台無しにしてみたまるものか。…やつと見つけた私の主だ。詰まらん真似は、させもやらせも、してたまるものかよ……!!?」

だから生憎だ、たぶれ。と嘲る様にフツノミタマは月詠へ告げる。「主はお前程度と墮ちるには勿体無さ過ぎる良い男だ。好きにはやらせんよ、失せるがいい」

「……………鬱陶しい女やなあ、自分……………!!?」

月詠は崩れた口調で軋る様に呟き、瞳孔の開いた崩れた表情かおでフツノミタマを殺気の籠った視線で突き刺す。

「落ち着くんだ、月詠。フツはこういう所がある奴だからな、俺も時折振り回されるんだ。フツはやると言ったら殺るからな、無闇に突っ掛けたりするんじゃないぞ?」

「……………さあん……………」

そんな今にも弾けそうな月詠を優しく制したのは他ならぬ辻であった。僅かに殺気を収め、拗ねた様に名を呼ぶ月詠に微笑みかけてから、改めて困った様な顔で辻はフツノミタマへ言葉を投げ掛ける。「フツ、俺は正気なつもりだぞ? そう頑なにならずに、お前で月詠を断たせちゃくれないか? お前じゃ無いところ、入ってから胸骨へイツた辺りでの抜ける感触が違いそうなんだよ。今迄人を斬ったことは無いけれど、何と無く解るんだ、そういうの。お前が一番気持ち良さそうだし、綺麗に出来そうなんだ。なあ、頼むよフツ」

全くの正気で狂気を吐く辻にフツノミタマは静かに首を振り、答える。

「本当に正気で吐いてくれたならば嬉しい言葉だったのだがな、主。

造られた認識<sup>想</sup>で無く本心だと理解していても、貴方が望んで吐いたの  
で無くば、その言葉を受け入れる訳にはいかんよ主」

「……………そうか……………」

フツノミタマの言葉に辻は残念そうに肩を落として、

「じゃあしようがない、本意じゃ無いが手荒に行くしかないな」

「……………っ!?」

そう言い終えるか終えないかの内に辻はフツノミタマの懐近くま  
で踏み込み、無造作な抜手の一撃をフツノミタマの水月辺りに突き刺  
していた。

刹那がその場へ飛び込んだ瞬間目に入って来たのは、辻と月詠がフ  
ツノミタマを二人掛かりで潰そうとしている光景だった。

「……………つちい!!?」

「あははははははあ!!?これはこれで愉しいですわあ、宛らデエトミ  
たいですう〜!!?」

「やり過ぎるなよ、月詠。擬体とか言ってるけど、ダメージが入り過ぎ  
たら何か悪影響があるかもしれないからな」

舌打ちをしながら滑る様な動きで後退するフツノミタマに左右か  
ら襲い掛かる辻と月詠という状況に、刹那は理解が追いつかず思わず  
その場に立ち竦む。そうしている間にも奇妙な戦闘は激化して  
いった。

フツノミタマは一切の容赦無く月詠に斬撃を見舞うが、月詠は興奮  
してテンションが振り切れていても思考そのものは冷静らしく、刀の  
間合いギリギリから牽制をかけるだけで決して無理に攻撃を仕掛け  
ようとはしない。対して辻はフツノミタマを殺そうとはしていない  
らしく、攻撃そのものに殺気は無いがその代わり一切の容赦が無い。  
目にも止まらぬ踏み込みからの拳足は徐々にフツノミタマの擬体に  
ダメージを蓄積させて行く。

……………なんだ……………これは……………

……………辻部長が……………違っている……………!??



刹那はこの状況がどういう経緯で成り立っているのか、見当すらもつかない。つくよみの狂態は兎も角、目の前の辻は、振る舞いがあまりに普段とかけ離れてしまっている。

まぎれもなく辻本人だと理解していながら、刹那には目の前の辻が別人のように見えて仕方がなかった。

「……………っ!!?、辻部長おおおっ!!?…!!?」

様々な意味で目の前の光景を見ていられなくなった刹那は、あらゆる限りの大声でフツノミタマへ飛び掛からんとしていた辻に呼び掛ける。

「あや〜?」

「……………小娘?」

「……………桜咲」

思いがけない闖入者の登場に月詠とフツノミタマが目を見開く中、辻は躍り掛かろうとしていた体勢をピタリと止めて刹那に向き直り、静かにその名を呼ぶ。刹那は自分の方を見向いた辻の姿を見て小さな、されど無視することの出来ない違和感を感じた。

……………当たり前だが、姿形は変わっていない。物腰も先程までと変わらない。…普段の辻部長だ……………しかし。

その普段通りの辻が平然と忌避していた月詠と並んで自らの相棒パートナーと言ってもいいフツノミタマを痛めつけているという矛盾に、刹那は全身の産毛が逆立つ様な緊張と、恐怖を得ていた。

「……………何を、しているんですか。辻部長……………」

「……………あ……………」

僅かに掠れた刹那の問いに辻は気まずい様子で頬を掻き、困ったように一つ呟いてから話し出す。

「なんというか、すまん桜咲。そうだな、何も言わずにお前を放っ出して、何やってるんだなんて当然の疑問だよなあ……………うん、本当にすまなかった桜咲。急に月詠が押し掛けて来たから伝言する余裕も無くてな。…それで、何だ、桜咲。重ねて本当に申し訳ないんだが、この

後お前と学祭を巡れるか保証が出来なくなってしまつてさ……」

「そんなことは!!?……如何でもいいとは言いません、……でも私はそんなことを聞いているんじゃないやありません!!?」

よりにもよつてデートが中断したことを詫び、更に今後の予定が立ち行かなくなるかもしれない旨を謝罪してくるズレた辻に、堪り兼ねて刹那は叫ぶ様に告げる。

「何をこれから……しようとしているんですか辻部長!!?」

辻はむ、と呻いて再度頬を搔き、眉根を寄せて言葉に詰まった様子を見せる。

すると言い淀む辻の後方で、油断無く刀を向けるフツノミタマに、こちらにも二刀を構えて対峙していた月詠がクスクスと笑声を洩らす。そのまま月詠は、一步の踏み込みで斬られないよう用心深く距離をフツノミタマから取りつつ、刹那へと声を掛ける。

「あんまりそないにして一さんはじめを急かしたらんであげて下さいく先輩く?」

「月詠……!!?」

矢鱈と辻に対して馴れ馴れしい月詠の言動に小さくない苛立ちを覚えながらも、刹那は月詠事の元凶へ鋭い舌鋒を返す。

「……貴様、辻部長に何をした」

「……んく、惚ける意味もありませんからお答えしますけどく多分、先輩が聞いてももう、如何にもならしはりませんえく?」

「いいから答えろ!!?」

のらりくらりと間延びした調子で話す月詠の何処か堪に障る薄笑いに、冷静で居ると自身を戒めながらもつい語気の荒くなる刹那。

「苛ついていますなく先輩く?……まあお気持ちは解りますく、愛しい人が他の女と仲良うしとつたら気に喰わんのは当たり前前の話ですわく……でも先輩が一さんはじめとデートしはつとるんを見た時は、うちもそういう気分になつたんですから、これでおあいこですえく?」

「……つ!!?」

あくまでも本題に入らず、挑発する様な言葉を投げ掛けてくる月詠に、刹那は思わず一步足を踏み出しかける。

「止めておけ」

しかし、月詠の注意が一旦逸れた隙を突いて刹那の側に瞬動を用いて現れたフツノミタマが、刹那の肩に手を置いて制止する。

「…!!? フツノミタマさん、これは一体…!!?」

「話せば長い様で短いが…：簡単に纏めるならば、今の主は正気に見えて正気じゃ無い。あのたぶれ女の策略で世界樹の魔力の影響を受け、一部の認識が書き換えられて暴走している状態だ」

「っ!!? ……やはりですか…!!?」

駆け付ける前に見ていた光景からしてそうではないか、と予想していた事を肯定されて、刹那は歯噛みする。

しかし、元凶の月詠と他ならぬ辻本人によってフツノミタマの説明は否定される。

「その言い方はあんまり適切やありません。フツノミタマさん。確かに世界樹の魔力をウチは利用しましたけど、ウチがやったんは、単に辻部長を素直に振る舞える様にしただけですええ〜?」

「…：そうだな、月詠の言う通りだ。確かにきつかけこそ後押しされてだけれど、これは紛れも無く俺の意思なんだよ、桜咲」

「……………、何を……………!!?」

要領を得ない二人の言葉に、刹那が混乱する。その横でフツノミタマは目を細め、不機嫌な様子で鼻を鳴らして言葉を返す。

「何をほざく。貴様は主に自分を愛する様思考を誘導していただろうが。…：小娘、私からすれば貴様の心情など如何でもいいことだが、主がそれを望まぬ以上急速に暴露を進めることを私はしなかった。…：しかしどうせ主は今日にでも話すつもりだった様であるし、今は非常事態だ。私の口から告げさせてもらおうぞ」

「……………何の話をしようと言うのですか?」

自己完結の感が著しいフツノミタマの言葉を聞いて、先程から話にさっぱり要領を得ない刹那が戸惑った様子で問い掛ける。フツノミタマはフン、と鼻を鳴らし、辻にとっての重大な秘密を刹那に対して語り出す。

「話を手早く進める為に状況説明を先に進めるぞ。主は現在あのたぶ

れ女に、主のやり方でたぶれ女を愛してくれ、という一種の告白を受けて世界樹の魔力によりそれを実行する為行動している」

その台詞に刹那は齒噛みするが、直後に状況の異常性に気づき、問いを重ねる。

「……ならば何故、辻部長は月詠と結託してあなたを襲っていたのですか？」

「それだ」

苦々し気にフツノミタマは言葉をはき捨てる。

「…通常ならば貴様らが警戒していた凡人共の様に、主があなたぶれ女に愛の言葉でも囁いて、貴様辺りがやきもきするだけで終わったのだろうよ。…しかしそういった方面の感性において、主のそれは些か異常に過ぎたのだ」

「……如何いう……」

「いいよ、フツ。そこから先は自分で言うから」

中々本題に入らないフツノミタマの説明に業を煮やし、先を促しかけた刹那の言葉に、辻の静かな宣言が覆い被さった。

刹那が思わず視線を辻に戻すと、辻は何処か寂し気な微笑みを浮かべながらも、しっかりと刹那を見据えて言葉を紡いでいた。

「…本当なら学祭を廻り終えた後辺りに伝えるつもりだったんだけどな。こんなことになってしまったから、この場で言わせてもらおうよ、桜咲」

俺はさあ、と辻は両手を広げ、まるで己の恥部を晒しているかの様に、恥ずかし気に顔を染めながらも、刹那にその秘密を告げた。

「人や物が真つ二つになった姿に興奮を覚えるんだ」

「……………は？……………」

告げられた言葉の意味が俄かに理解出来ず、刹那は呆けた疑問符を返すことしかできなかつた。その様子を見て辻は口元に苦笑を浮かべ、そうだよなあ、と眩きを洩らす。

「まあ、理解出来ないよな。当たり前前の話だ。俺自身もこれが真面で常識的な感性だとは思っていない。……ただ、まあ俺から言わせて貰えば仕方が無いんだよ。イカれた嗜好と理解<sup>わか</sup>ってようが、どんなに生

きていく上で害にしかならない代物だと解っていても……」

希望を持つことを投げ出してしまった様な、諦念に満ちた寂しげな微笑みを浮かべながらも、辻ははっきり言ったその言葉を言い切った。

「好きなものはしょうがないんだよ」

「……………辻、部長……………!!？」

いろいろ聞きたいことがあった。言いたい事はそれ以上に。

しかし刹那は、その憂いを帯びた表情を確かに過去、豪雨の降りしきる中、女子寮の前にて見たことがあったが故に、辻が紛れもなく正気で、かつて話すことのなかった本音を語っているのだと、理解してしまっていた。

「……………俺は他人に好意を抱けば抱く程、そいつを頭頂から股下まで一直線に斬り下ろしたくなる。中村達馬鹿共も、ネギ君も杜崎先生も近衛ちゃんも明日菜ちゃんも綾瀬ちゃんも宮崎ちゃんも朝倉も古ちゃんも那波ちゃんも長瀬ちゃんも小太郎君も篠村も高音さんも愛衣ちゃんも相坂ちゃんも……………そしてお前もだ、桜咲」

イかれてるだろう？と辻は苦笑を深めて呟く。

「言うまでもなく人は半分に分かれてしまったら生きていられないよな？……………だから俺は今まで、欲求を押し殺して生きてきた。笑顔で他人と接している裏で、他人を斬り殺すことしか考えていない、真正正銘の異常者が俺だ。……………だからお前といい加減に離れなきゃいけないと思っていた。このまま接していたら、いずれ歯止めが効かなくなるのは目に見えてたからな。……………見方によっちゃあ、丁度良かったんだと思うよ、この一件は。勝手な事を言っているのは承知の上だけれど、もう俺に構うな桜咲。お前に好意を抱くからこそお前を殺してしまいかねない俺の様な異常者など見限って、もつといい男を見つけてくれ。お前なら、男なんぞ引く手数多だろうから、さ……………」

俺は俺で、相応しいだろう相手が見つかったからさ、と、辻は若干寂し気に笑いながらも月詠へ向き直る。月詠はそんな辻を愛おし気に見返した後、呆然と立ち竦む刹那へ憐れむような視線を向け、言葉を投げ掛ける。

「そういうことで、先輩。いきなりこないなフラれ方してお気の毒ですけれど、一さんの言う通り、先輩と一さんが付き合うのは、無理があったんやと思いますわ。…先輩、一さんの普通と違うトコ、その様子やと全く理解してませんでしたでしょう？一さんを単に優しくて包容力のある人、なんて風に見てはりましたなら、先輩に一さんの相手は到底務まらんと思えますわ。ですから先輩、悪いことは言いませんから…「五月蠅い黙れ」…っ!?？」

唐突に発せられた、斬りつける様な低く、短いその一喝に、捲し立てていた月詠は思わず口を噤んだ。

それ程の威圧感が言葉を発した刹那からは発していた。思わず辻が振り返り、傍らのツツノミタマが目を見開いた後に薄く微笑む程の。

刹那は完全に据わった目付きで月詠を睨み付け、更には横の辻をも冷たく見据える。

「…先ずは辻部長、貴方の言葉が十割私への気遣いから出たものだと私は勝手に確信していますが、間違っではいませんか？」

「…桜ぎい、」

「黙っていて下さい」

ピシヤリと何事かを告げ様とした辻を制して、刹那は手に持つ打刀を辻に突き付けると、怒気の混ざった声で辻を糾弾する。

「今度ばかりはその空回りぶりに怒りが込み上げましたからはつきり言わせてもらいますが、辻部長。…私ってそんなに頼りないですか？」

刹那は怒っていた。下手をすれば木乃香が攫われた時と同等か、それ以上に。

「三年近くも同じ部活動に所属してお互い腕を磨き合って。頼んでもいないのに人の交友関係をわざわざ気にして裏から手を回して仲直りまでさせて、私の親友と私自身を英雄みたいに助けて見せて。挙句の果てに私が嫌っている化け物地味た外見まで受け入れて!…:貴方は其処までやって見せて、私が貴方の異常的だか少数的だか知りませんが、たかが少々一般的じゃない性癖一つで貴方を病的に毛嫌い

するようになるでも？……どれだけ私を安い女だと思っ  
ているんですか」

実のところ刹那は、辻が何か普通ではないものを抱えていて、辻がそれをひた隠しにして周り付き合っているのを何とは無しに察していた。

それは中村達が時折辻に対する言動に不自然な遠慮が見え隠れしていたからかもしれないし、あるいは刹那自身が重大な隠し事をこれまで続けて、人生を過ごしてきたからこそかもしれない。

いずれにせよ刹那は、辻に対してそれを無理に聞き出そうとは思っていなかった。刹那の問題に対して、辻は決して無遠慮に踏み込もうとはしていなかったし、何より辻はそれを隠すことに少々の無理はしていても、隠し続ける行為自体を厭うてはいなかったからだ。

「先ほど語っていただいたことがあなたの秘密であり負い目だと言うのなら、それを隠していたことを私は不義だとは思いませんし、それ一つでああなたの価値を決めようだなどとも思わない。……貴方の凶抜けたお人好しぶりが、ただの演技だったなんて私は思えない。貴方自身が理解していないのなら、私のはつきりと断言して差し上げます」

刹那はその両眼に強い意志の光を込め、辻の両の瞳を見て宣言する。

「貴方の本性が人でなしに近いそれなのだとしても、貴方という人は紛れもなく立派な人間だ。私はあなた程優しく、頼りになって、……格好良い人を他に知りません。寧ろ貴方にも疚しい部分があると知って、私はホツとした気分です。欠点の無い人なんて、付き合っても息苦しいですから」

そうして刹那は、呆然と目を見開いている辻から視線を月詠に移し、その目線に激しい敵意を乗せて、言葉を叩きつける。

「先ほどは随分と私に対して、辻部長の事で偉そうに講釈を垂れていたが、貴様こそまだ出会って如何程の言葉を交わしたわけでもない顔見知り程度の付き合いで、辻部長の何を知っていると言うんだよ勘違い女。貴様はたまたま感性がほんの僅か似通っているから、此の人の

心をわずかに揺らせただけの話だろ？…現にお前は世界樹の魔力に頼って姑息に辻部長を洗脳して、無理矢理本懐を遂げようとしているだけじゃないか。辻部長は貴様の誘いに乗らなかつたのだろうか？内に秘めたものがどれだけ周りと外れていようと、その上でどう生きるかは本人の勝手だ。…お前の独りよがりです辻部長を碌でもない道へ踏み外させようとするな、イカれ女が」

刹那は一方向的に吐き捨てるも月詠の返事も待たずに、再度辻へと向き直る。

「今現在正気でもない貴方にこんなことを伝えて、どれほどあなたの響くかなんて判りませんけどね、辻部長……」

……ああ、こんな滅茶苦茶な状況で、ムードの欠片も無い緊迫した空気の中で。更には外野が一人と一刀も居るのに、言ってしまうのか、私は。…勢いで……

あんまりと言えればあんまりな自分の恋外下手さ加減に思わず苦笑が滲み出る。

……でも、いいか……

元より上手な駆け引きなんて自分に出来るとは思っていない。好きならば方振り構っていられないと言ったのは、木乃香だったろうか、それとも明日菜だっただろうか。まさしく今、そういう気分だった。

それに、と、刹那は辻を見据えていた視線を僅かな間だけ横合いに居る月詠に移し、顔から完全に笑みの消えた、なんとも厭な視線を向けてくる気に入らない顔を視界に収め、新ためて強く思う。

……こんな女に辻部長は渡せない……!!？

だからこそ、刹那は想いの丈を吐き出した。

「…私はもう、自分でもどうしようもない位に……貴方のことが、好きなんです」

辻は目を見開いた驚愕の表情で固まっていた。やがてその身体は瘡が掛かったかの様に震え始めて、辻は頭を両手で抑えて譫言の様な



眩きを洩らし始める。

「俺、は…俺は桜咲が…でも俺は月詠を愛していて、でも、俺桜咲と…なんだ、なんで俺、二人のことが……………!?？」

「……………辻部長……………」

「無茶な描き<sup>認識変更</sup>変えが魔力によつて為された所為で生来の主の性格と思考形態に齟齬が生じて混乱し始めているな。まあ主の性分からして二人の女を同時に愛する様な甲斐性は様々な意味であるまいから当然の矛盾だな」

様子のおかしい辻の安否を気遣う刹那の横で、それまで特に興味も無さ気に刹那の告白を聞いていたフツノミタマが形だけの嘆息と共に言い放つ。

「……………小娘。正直貴様の恋慕の情が実るかどうか等は私にとつてどうでもいい話だが、あの勝手にヒトの主を誑かすたぶれ女に持つていかれるよりは貴様のほうが幾分マシだ。…主をこれから正気に戻す、手伝え」

「貴女は貴女で気に入らない物言いですが…同じくあのイかれ女よりは貴女の方が万倍はマシです。貴女が言い出さなければ私が申し出ていましたよ、異論などある筈がありません」

刹那の返答にフツノミタマは僅かに目を細めて頼もしいことだと嘯き、肩を並べて策を語る。

「策という程のモノでは無いがな。私が主を断てばそれで終わりだ」

「……………辻部長に浸透している世界樹の魔力のみを断ち切る、ということですね?…出来るのですか?」

「愚問だな、私が出来ずに他の誰が出来得る?或いは極まった主ならば可能かもしれんがな。…問題は一つ、だ」

「ええ……………現状不安定な辻部長は兎も角、あちらは確実に邪魔をしに来るでしょうから、ね……………」

言葉と共に刹那が目線を向けると、其処には能面のような無表情の中面の瞳に物騒な輝きを秘めて、月詠が刹那とフツノミタマを見据えていた。

「……………あ……………正直言つてムカつきましたわ、一<sup>はじ</sup>さんもこない

になってしまいましたし……他人を斬る理由に怒りがついてくるなんて、本当に何年ぶりでしょうか……」

月詠はぬらりとした輝きを放つ小太刀と短刀を眼前に掲げ、首をゴキリ、と音を立てて鳴らしながら真横に頭を傾けると、殺意に濡れた声音で宣言する。

「人の恋路を邪魔しはるなら、蹴られる前にウチが搔っ捌いて差し上げますわ……!!?」

「……だ、そうだぞ小娘?」

「流石キチガイは言うことが自分本意に過ぎますね……!!?」

刹那はフツノミタマと頷き合い、同時に辻と月詠目掛けて踏み込んだ。

「たぶれ女を止めていろ!手早く決着<sup>ケツ</sup>を着けてやる!!?」

「辻部長は任せましたよ、フツさん!!?」

叫び様刹那は瞬動で一氣に打刀の届く間合いまで距離を詰め、容赦の欠片も無しに月詠へと神鳴流の斬撃を打ち込んだ。

「神鳴流奥義、斬岩剣!!?」

「……ざんがざんけざん!!?」

大上段からの一撃を同じく氣の込められた右手の小太刀で打ち流した月詠は、左の短刀を逆手に持ち替えて振り上げ、刹那の内腿を裂きに行く。

軸足を変えて踏み込んだ足を引き、反撃を躲した刹那は胴薙ぎの一撃を見舞う。地を這う様な低姿勢で斬撃を潜った月詠は二刀を輝かせ、伸び上がりながら必殺の連撃を見舞う。

「にとくれんげきざんてつせくん!!?」

「っ!神鳴流奥義、拡散斬光閃!!?」

螺旋状の斬撃を二刀から連続で飛ばし、たとえそれらを交わしたとしても距離を詰めた月詠が体勢を崩した相手に致命の斬撃を見舞う詰みの連撃。生来の神鳴流では成し得ない圧倒的な手数を誇る月詠だからこそ可能とする物量の暴力に対し、刹那は真面に全ての迎撃をしようとはせずに手にした打刀を横薙ぎに一閃。瞬時に発生した拡

散する光の刃が遅い来る螺旋の斬撃とぶつかり合い、双方が弾けて消える。

相殺された互いの気がまるで靄の様に散る中、刹那は挟み込むように左右から斬り付けて来た月詠の二刀を後ろへ退いて躲し、逆袈裟の斬り上げを打ち込むが、月詠は滑るような動きで身を捻って躲し、突きで反撃。捌いた刹那も斬り返す。

徐々に大きく場所を動かないようになった二人は、火花の散るような剣戟の応酬を始めた。

「貴様は!!?…一体何がしたいと言うんだ月詠!!?」

「先輩に言うても解らへん話ですわ〜」

至近距離から顔面への短刀による突きを鏢元で弾き返し様、刹那は月詠を怒喝するが、その圧力に全く怯んだ様子の無い月詠は飄々と返し、斬撃を見舞う。

「何やら綺麗事でええ感じに纏めてはりましたけど、一さんは紛れも無く此方側の人間です〜…あのまま善い人続けさせると、いつか絶対に一さんは壊れてしまいますよ〜…理解つとらんのは、アంతの方や」

「……それである人の認識まで弄って手を汚させた拳句に心中か?巫山戯るな!!?死にたいならば勝手に他所で野垂れ死ね!!?」

「そないなことを言うとするから、先輩は理解つていないと言うんです〜」

激昂する刹那に対して月詠は嘲る様に嗤い、歪んだ想いを叩きつける。

「この意味のない詰まらん世界で、何かを成す事になんて意味はありません。人はただやりたいことをやって、それなりに生きて死ねばいいんですわ〜…その最期が愛する人に斬られて、愛する人を斬って終われるんだったら…それはなんて素敵なことなんでしょう〜…」

「っ!!?…異常者め!!?」

クスクスと楽し気に嗤う月詠に、最早言葉は通じないと悟り、一層激しい剣戟を見舞う刹那。月詠は刹那の気迫に応ずる様に一層楽しそうな笑顔となり、両の手が霞むほどの勢いでの斬撃の嵐によって応える。

「先輩も素直になれば楽しいですよ？先輩のそれは義憤や正義感なんて嘘臭くて薄っぺらいものやありませんよ…愛しい人の側に他の女が寄り添ってることが死ぬほど気に喰わんで燃え盛つとる…只の女の嫉妬ですわ〜」

「知ったような口を叩くなああ!!？」

表と裏、二人の神鳴流剣士の戦闘は激化していく。

「……やれやれ、小娘に大口を叩いた以上さっさと片付けたい所だったのだがな……」

「……フツ、邪魔を…するなよ…!!？俺は、そうだ。……月詠を、月詠を愛してやらなきや、いけないんだよ!!？」

「…主よ。正直今の貴方は見るに堪えんし聞くに値しない。元に戻してやるからそこに直るがいい」

己が斬撃を易々、と言えるほど余裕のある動きでは無いが、それでも身体に掠めもさせずに躲し続けてみせる辻の歪んだ表情を見やりつつ、フツノミタマは一つ息を吐く。

辻は現在真面な武器を所持しておらず、近場に散乱していた屋台の支柱か何かの余りなのであろう鉄棒を一本手に持っているきりだ。当然ながら気を込めていようとフツノミタマの刀身と打ち合える様な代物では無く、先程から辻はフツノミタマの繰り出す斬撃を真面に受けもせず、無理な回避を続けている有様である。

とはいえ、状況はフツノミタマにとってそれ程有利に傾いている訳では無かった。

……当たらん、な。主の実力を舐めていたつもりは無かったが、一流前衛クラスの技術が備わっている私の全力で真面に当てられもせんとは……それだけならばまだしも、下手に獲物が半端な所為で主の斬撃に加減が一切無い。今の状況で擬体を潰されては終わりだとい

うのに……

そう。決戦兵器級のアーティファクトたるフツノミタマの能力を十全活かせ、剣の腕前でも一流選手のそれに何ら劣るもの無い、端的に言って最強の一角に名を連ねる程度には手の付けられない反則的戦力を持つフツノミタマと、片や万全な状態とは程遠い、魔法の存在をつい最近まで知りもしなかった一剣士に過ぎない辻 はじめ

両者の戦闘力は、この場に限り拮抗していた。

辻は目にも留まらない運足を用いての瞬動で自在に間合いを操っている。フツノミタマが踏み込めば逃げ水の如く遠ざかり、かと思えば遠間から稲妻の様に、コマ落としてのフィルム宛らの様子で瞬時に懐近くに現れ、強大無比な一閃で頭部を叩き割ろうとしてくる。相手取るフツノミタマが擬体であり、身体を損壊させても死に至る事は無いと、辻が理解している事を差し引いても遠慮容赦の欠片も無い殺す為の戦闘法だ。

……これが本来、と言つては何だが、殺す事を前提にした場合の主の実力、か……

些か想定が甘かったな、とフツノミタマは内心で臍を噛む。

最もフツノミタマが辻を単に殺せばいいだけならばここまでフツノミタマは苦戦していない。剣の技術だけで言えば現時点でフツノミタマが上であるし、遠間からの全力雲羅を持つてする一刀太刀以外に辻の技術で驚異と呼べるものは無いのだから。

しかしフツノミタマは辻を斬り殺すのが目的では無く、辻の体内に浸透している世界樹の魔力のみを断ち斬る為に対峙している。断つものを限定するのは非常に高度且つ繊細な技術が必要であり、いかなアーティファクトそのものであるフツノミタマ自身でも鼻歌交じりの片手間で行える代物では無い。故にその余計な手間選別行為が剣の冴えを僅かに鈍らせ、結果としてその差が戦況を拮抗状態に追い込んだ。

……分がいい賭けとは言えんが、捨身になる必要がありそうだな  
……

フツノミタマの攻撃はギリギリで躲される。辻の斬撃は何時ま

でも躲し続けられる保証が無い以上、遠からぬ内にこの拮抗は崩れ去る。フツノミタマは一撃で擬体が破壊されるだろうことを理解しながらも相討ちを検討し始めていた。

「……やれやれ、世話の焼ける主だよ、貴方は……」

「フツ……退いてくれないなら、潰して行くぞ」

「遠慮無しにやっても殺すことが無いと解った途端に強気だな主？そんな相手によって態度を変えるようなチンピラの如き体たらくならば、前の甘い状態の方が幾らかマシというものだ」

一旦動きを止め、天に向かって獲物を伸ばし、低く腰を落とした右蜻蛉の姿勢を取る辻。その表情には未だ迷いが見て取れたが、動きを止めるつもりは無いらしい。

これまでとは違う、全身全霊の一撃が来るとフツノミタマは悟り、後の先を取ることに方針を決める。

……私の斬撃が届きさえすれば、それで私の勝利条件は達成だ  
……

フツノミタマは剣先をだらりと脇に下げた無形の構えを取り、飛び込んで来る辻を待ち構える。フツノミタマを持ってしても辻の雲耀は見切れ無いが、擬体がダメージで崩壊する前に一撃を決める目算である。

「……………つ!!?」

暫しの沈黙が両者の間に満ち、やがて辻が雄叫び地味猿叫と共に神速の踏み込みに移ろうとした、正にその瞬間。

「呼ばれて飛び出てええええええつ!!?!!?」

「……ジャツジャジャーン」

「ビミョーに違エ!!?」

「どうでもいいデス!!?」

「……………つ!!?」

ゴパアツ!!?という、液体が高圧を掛けられて弾けた様な異音と共に、辻の斜め下方、雨水管に繋がるマンホールの蓋が爆発したよ

うに吹き飛ぶ。

その内部、半透明の液状物質が織り成す渦の中から高速で飛び出して来たのは、白覆面にパンツ一枚の怪人だった。

「事情はサツパリ呑み込め無えが取り敢えず美人に獲物振りかざしとるお前が悪で決定じやあああつ!!?」

「つ!!?…あ、あ、あ、あ、つ!!?…!!?」

極めて主観的かつ横暴な台詞を吐き出しながら躍り掛かる覆面レスラーに、辻は助走と共に振り下ろす予定だった鉄棒を、身体毎大地に投げ出す様な勢いで、全身の捻りを使って打ち下ろす。刀と共に腰から落ち、打ち込んだ瞬間に左膝が大地に着くその一撃は紛れも無く薬丸自顕流が雲耀の太刀。「一の太刀を疑わず、二の太刀は負け」なる、一撃必殺の精神を尊ぶ万物を断ち斬らんとする一刀だ。

しかし。

「……つ!!?…:…へつ、如何したよ一ちやあん……?」

「……つ!!?」

その一撃は覆面レスラーこと中村が頭上に掲げた両腕。空手にに言う十字受けにてしっかりと防禦うけられていた。

「随分ヌルい一発じゃあ無えか?これなら中坊の頃の方がまだ怖え一刀だったぜ」

「中、村……!!?邪魔を……!!?」

「良くやったぞ変態。褒めて遣わしてやる」

左腕に走る激痛に顔を歪めながらも、気迫の籠っていないその一撃を噛った中村に、辻が負けず劣らずその細面を歪め、何事かを吐き出そうとしたその時には、既にフツノミタマが辻の背後へ瞬動で廻り込んでいた。

「……!!?フツ……!!?」

「悪い悪夢ユメだったのだよ、主。……暫し眠れ」

フツノミタマの一刀が、辻の身体を袈裟懸けに斬り下ろした。

「……すまなかつた、桜咲。……結局こんなことに巻き込んでしまっ

て……………」

「……………辻部長に責任はありませんよ」

とある美麗な情景の臨める夕暮れ前の公園のベンチにて。打ち沈んだ表情の辻を、少し悲しげな微笑を浮かべつつ刹那が慰めていた。

あの後、結果として辻は暫しの昏倒の後に正気となって目覚め、事態は一応の落着を得た。

月詠は辻がフツノミタマに斬られるのを見るなり、刹那の追撃を振り切つてあつさりと麻帆良を後にした。

『また逢いに来ます』という極めて不穏な言葉を残して。

辻立ちに非は無いとは言え、世界樹の魔力に関する事件を引起こした張本人である辻達は、遅れて駆けつけた魔法教師達に半ば連行のような形で保護。処罰などは何もくだされなかったものの、長い長い事情聴取をつい先程終えたばかりの辻と刹那は、事件における精神的な疲労も相まってグツタリと憔悴していた。

因みに中村とスライム娘達は事情聴取が終わった時点で、『他の連中への説明は任しとけ』との言葉と共に、ネギ達の元へ赴いており、フツノミタマは既に擬体を消し去つて辻の懐に収まっている。

『……………中村、迷惑を掛けた』

『つたりめえだ馬鹿野郎斯くなる上は学祭期間中限定販売の映研自作裏ビデオ選奢りやがれ!!?……………』と聞いてえとこだがまあ気にすんなや、あんなもん防ぎようが無えべ。…俺に謝るぐれいだったら、せつたんへのフォロー頑張んな。……………あのまま放つぽつとくのが無えつてこと位はお前も解んだろ?』

『……………ああ……………』

……………そうだな、ケジメを着けるよ中村……………

去り際の中村との会話を思い出し、辻は内心でその場に居ない友人に対して語り掛けた。

「……………桜咲……………」



「……はい……」

二人はどれほどの時間を、麻帆良のまるで異国の様な街並みを眺めて黙りこくって居ただろうか。

静かに名を呼び掛けて来た辻に、刹那は一瞬の間を置いて答える。

「……事情聴取でも言ったけどさ……正気を無くしていた頃の記憶はしっかり残っているんだ、俺は……」

「っ!!?……はい……」

辻の言葉に刹那は僅かに身を跳ねさせ、如何にも気不味い表情を浮かべて小さく返事をする。

辻に一連の記憶が残っているということは、刹那が辻へと行った告白の記憶も当然残っている、ということである。

「……すみません、と謝るのも妙な話ですが……世にも最低な告白に、なってしまうでしたね……」

短くない沈黙を挟んだ後、意を決して刹那は言葉を紡ぎ、己が告白をしたことを確かに肯定した。

「……それに関しちゃ原因の一端である俺の方が謝らなきゃいけないだろうけど……確かに、頭を下げるのは何か違うな…………いや、違う。こんなことが言いたいんじゃないよ……」

苦笑と呼ぶには如何にも苦味の強い、力無い笑みを浮かべて辻は語っていたが、台詞の途中で僅かな笑みすら顔から消し、片手で顔を押しさえて消え入る様に呟く。

「……辻部長」

そんな辻を刹那は痛まし気に見ていたが、やがて小さく頭かぶりを振って微かに震える身体を宥め、小さな声で、しかしはつきりと辻に呼び掛けた。

「……宜しければ私に、返事を聞かせて頂けないでしょうか?」

「……桜咲」

その言葉に、今度は短い沈黙を挟んだ後、辻は尋ねる。

「問いに対して問いを返すことになるし、こんなことを尋ねるのは無粋の極みだと解っているんだが……お前は一体、俺の何処を好きに

なつてくれたのかな？」

「……………そう…ですね……………」

刹那は僅かに空を仰いで、早くもその姿を浮かび上がらせている朧の月を視界に入れたまま考えていたが、程無くして顔を辻の方へと向け直して、口端を僅かに上げた小さな笑みと共に、想いを語る。

「……………思い返せば、大学の悪漢共から庇って頂いた時にはもう惹かれていたのかもしれませんが。貴方はお世辞にも可愛気が有るとは言えない私を、嫌な顔一つせずに面倒を見てくれました。……………私、中々屈折して育つてしまいましたから。お嬢様の時と、似ているのかもありません。優しくされるのに、弱いんですよ。私が心無い扱いをして、どんなに迷惑を掛けても。……………人でない姿を見せてすらも、貴方は私に優しく接してくれました。……………理由なんて、それだけで充分です。貴方程私を受け入れてくれる男性を、私は他に知りません」

それが私の理由です、と刹那は告げた。

「……………ですから辻部長、教えて下さい」

「如何して私を受け入れてくれないのかを」

俄かに二人の間に、張り詰めた空気が流れ始める。

「……………俺はまだ、答えちゃいない筈だったんだけどな……………」

如何して解つた？と、辻は尋ねる。刹那は眉根を下げて、表情を落胆と悲しみに染めつつも、その理由<sup>わけ</sup>を語る。

「……………何と無く、としか言い様がありません。きっと今日が始まる前の私ならば、理解<sup>わか</sup>りはしなかったでしょう。……………ただ今は、知らなかった貴方を知ることが出来ましたから。……………その上で貴方が何を考えているのか、大体予想が着くんです」

「……………そうか、解つた……………」

辻は目を伏せて小さく頷くと、刹那を拒む理由を明かし始める。

「……………俺はさ、異常な男だよ。お前の事を、多分普通の人間と同じ様な感覚を元に好きだと思っている。お前は真面目で、責任感があって。友達想いで、とても凜として強いのに、年相応に脆い所があつてさ。……………お前を見てるととてもいじらしくて、支えてやりたくなる。俺は、

桜咲 刹那という女の子が大好きだ。寄り添って、生きて行きたいと思っている……」

「……………辻部長……………」

もはや愛の告白としか思えないその言葉に、されど刹那は胸を熱くするよりも先に奇妙な焦燥感を抱いた。

それは語っている辻の顔が、想いの丈を伝える表情としてあまりにもふさわしくない、とても悲痛に歪んだものであったからかもしれない。なかった。

「……………だが、俺はそれと同時にお前に対して歪んだ欲望を抱いている。こうしている今、この瞬間もだ。……………お前を頭頂から股間まで、綺麗な対称形シンメトリに断ち分けたい。二つに分けたお前の身体の真ん中に挟まって、零れ落ちる内蔵や血に浸りたい。左右に分かれたお前の唇に順番に接吻キスをしてやりたい。……………他にも、とても口に出せない様な薄汚い欲望が、お前と接している時は常に俺の頭の中で渦巻いているよ」

その、人としての感覚からすればあまりに悍ましい歪んだ熱の籠った言葉に、我知らず刹那は息を呑み、小さく身体を震わせていた。

それを見ても辻は怒りはせず、寧ろ労るような視線を刹那に向けて、項垂れる様に頭を下げる。

「……………ごめんな、気味が悪いよなあ、こんなことを言われたら。……………でも、今のは紛れも無く俺の本心なんだ。お前を幸せにしてやりたい俺と、お前を二つに断ち割りたい俺は、俺の中で同時に存在していて、矛盾だらけなのに相反せず収まっている。……………お前は昼間に俺を擁護してくれたけれど、月詠の言うことが正しいんだ、きつと。……………今現在俺は、お前のことは勿論だけれど、他人を害するつもりは無い。真面に生きていきたいと、俺は思っているから。……………でもそれが一生続く保証なんて、無いだろう？何かの拍子で誘惑に負けてしまったら、俺はもう、唯の異常快樂殺人犯、だ。……………だから、だから桜咲……………」

「言わないでトヤコ」

声を上擦らせながらも決定的な一言を口にしようとした辻にしがみつき、辻の胸元に顔を埋めて刹那は懇願した。

「……私には、辻部長の感覚が理解できません。それがどれほど耐え難くて、どれほど苦しいことなのか、想像すら出来ない……!!?」

だけれど、と刹那は必死に続ける。自分が途轍もなく自分本意で、辻にとつて残酷なことを言おうとしていると理解しつつも、刹那は辻を、目の前の愛しい男を諦められなかった。

「…それでも、辻部長は今まで立派にやってこれていたじゃないですか!!?...恥ずかしいけれど、私は今話を聞くまで、貴方が其れ程苦しんでいることを知りもしなかった!!?...辻部長なら...大丈夫だって、私...!!?...:...私もこれから、貴方を支えますから!...:...苦しい時は、側に居ますから、だから...!!?」

言葉が進むにつれて支離滅裂になりながらも、刹那は辻に縋った。自分の言葉が何の気休めにもならないと、頭の隅の冷静な部分で理解できていても。

それでも諦め切れない程、桜咲 刹那は辻はじめのことが好きだった。

辻は苦しそうに眉を歪めて、そつと縋り付く刹那を抱き締め

る。  
辻とて刹那のことを愛しく想っていた。出来ることならば、異常な自分を一生押し殺してでも、刹那の側に辻は居たかった。

それでも現実には、残酷だった。

「……無理なんだ、桜咲……。……両面宿儺を断った辺りからかな：俺の中で、タガが外れて来ている感覚があるんだ。前まで堪えられていた欲求が、徐々に強いものになってきている。：暴走するつもりなんて無い。でもそれには何の保証も付いていない。：確証がないのに試してみても駄目で。：お前が死んでしまったら、それこそ俺は死んでも耐えられやしない」

辻はそつと懐から刹那を引き離し、泣きそうな顔で見上げてくる刹那に優しく微笑んだ。

「……俺のことは、忘れてくれ。お前なら、俺みたいなイカれた男よりも、もつと良い人を見つけられるさ」

「……居ませんよ、そんな人が、居る筈がありません!!?」

刹那の双眸から、遂に涙の雫が零れ落ちる。辻の両腕に取り纏る様にして、刹那は叫ぶ。

「貴方の他に、私を受け入れてくれる人なんて居ない!!?」  
「居るさ、必ず居る」

辻はキツパリと言い切り、刹那を腕から引き離す。

「恨んでくれ、憎んでくれ。期待をさせるだけさせておいて、想いに応えようとしない最低な俺のことを。……酷い先輩で、すまない、桜咲」

辻は一度、深く頭を下げると、踵を返して歩き出した。

「辻部長!!?!!?」

叫ぶ様に名を呼ぶ刹那に、しかし辻は振り返らずに公園から歩き去った。

「……他の連中からも絶交されるかもな……俺の、自業自得か……本当にごめん、桜咲……」

辻が去ってから暫くの間、刹那は力無くベンチに腰掛け、啜り泣いていた。

……私、……ふられちゃったんだ……

刹那は次から次へと溢れ出る涙を拭いもせずに、虚ろな眼を空へと向ける。

理解わかっていた。辻は刹那のことを想うからこそ、己の側に置かないことを選択したということは。

事の問題は人としての本能に根付く、努力をしてもどうにもならない根幹の問題だ。実際に刹那にも、問題を解決する為の方法など思い浮かびはしない。

……じゃあ、どうしようも、ないんだろうか……

辻は優しく、強い男だ。刹那の命が賭かっているのならば、情や欲に絆されて前言を翻すことなど決してありえないだろう。

……駄目……なのかな……

刹那が絶望に沈み掛けたその時。刹那の中の深い場所で、囁くような声が、洩れた気がした。

『じゃあ、また独りになるんだ、お前は？』

「……………違う、私には、お嬢様が、明日菜さん達が、居る……………!!?」  
『そうだね、だけれどお前が今欲しい愛って…友達で満たされるものなの?』

「……………それは……………でも、しようがないだろ、こんなもの……………!!?」

『何が?お互いがお互いを好きなのに、何がしようがないことなの?』

「……………私は!!?」

『要するにさ。……………諦められるの?あの人のことを?』

それは刹那の声だった。

刹那が嫌う、けだもの 獣としての自分の声だった。

「……………諦め、られない……………」

初めて人を、好きになったのだ。

「……………諦められる、訳が無い……………!」

彼以外に、誰がこんな自分を受け入れてくれるというのか。

「……………許さない……………認めない……………!!?」

例え好きな男自身が望んだことだとしても、別れ別れになる事など冗談ではない。

「……………貴方を何処にも、行かせない」

刹那はゆつくりとベンチから立ち上がり、涙の残滓を拭って歩き出す。

「……………少しだけ、お前の言っていたことが理解わかったよ、月詠……………」

「愛する人と共に居られるならば、確かに死ぬかもしれない位は大した事じゃあ無いな」

刹那の眼には、何かを決意した強い光が宿っていた。

10万U A突破記念SS 第1弾 辻と刹那のイ  
チャイチャ

「……羽根繕い？」

「は、はい……」

怪訝な顔で訊き返した辻に、刹那は仄かに顔を赤くしながらも小さく頷いた。

休日の昼下がりに、辻と刹那の二人は何をするでも無くのんびりと、辻の部屋にて寛いでいた。十代のカップルが折角の休日に過ごす内容としては些か枯れているような気もするが、何と無く外に出る気分では二人とも無かったのだから仕方がない。誰に迷惑を掛けている訳でも無い以上、文句を言われる筋合いもまた無いのだから。

そのような訳で、二人は取り留めの無い会話を時折交わしながらクツシヨンを敷いた床に寝転がり、何ともまったりした時間を過ごしていたのだが、そんな折に辻がふと投げ掛けた『なにか俺にして欲しいことかあるか?』という中々おアツい台詞に、暫し迷った後刹那が告げたのが冒頭の台詞であった。

「……それは、お前の背中の中を、つてことだよな？」

「はい……あの、やはり迷惑で……」

「刹那」

身を引きかけた刹那を嗜める様に辻は短く恋人の名を呼ぶ。

「そういう遠慮はお互い止めようって約束したろ？あんまり人の事は言えないが、お前は少し遠慮しいが過ぎるんだよ。…お前が望むならなんでもやってやるさ。唯、なんで態々羽根なのかが少し気になっただけだ」

直接聞くのもどうかと思うが、婉曲にもっと積極的になってくれと

かそういう誘いじゃないよな？との辻の言葉に真つ赤になつて首を振りながらも、刹那はそれをねだつた理由<sup>わけ</sup>を語る。

「既に<sup>ご</sup>存知の通り、私には半分鳥族の血が流れているのですが……鳥族に限らず大抵の有翼種の亜人にとって翼とは命の次に、種族によつては命よりも大切なものなのです。…その、鳥族の羽根に触れるのは、血を分けた肉親、若しくは寄り添いて生きることを誓つた伴侶でも無ければ許されないものでして……」

「……成る程……」

其処に至つて漸く辻は刹那の意図を察することが出来た。

要するに鳥族にとつて羽根というのは酷く重要にしてデリケートな代物であり、羽根に触れさせるというのは、人間の女性で喩えるなら胸や尻に触られるまで行かずとも、髪を梳かれたり背中にサンオイルでも塗られるよりはハードルの高い行為なのだろう。

故に刹那は辻に対する親愛の表しと、『恋人らしい』二人へのステツプアップとして一段階踏み込んだスキンシップを図ろうということである。

何ともいじらしい恋人の心意気に、辻は面映ゆい気分になりながらも一つ頷いて腰を上げ、刹那を促す。

「言わば羽根を預けてくれるのは信頼の証、か……ありがとう刹那。誠心誠意、グルーミングに取り掛かせてもらうぞ」

「その言い方では私が猫か犬みたいですから止めて下さいよ……」

そう言つて刹那は苦笑しながらも、お願いしますと着ていたシャツの背面を、羞恥からか僅かに顔を赤く染めながら捲り上げた。

「ひゃっ……!!??」

「うお……!!??す、すまん刹那、痛かったか……?」

「い、いえ……いきなりだったので少し、びつくりしただけです……」

「あ、ああ悪い。次からはちゃんと声を掛けるよ……」

刹那の露わになった抜ける様に白いきめ細やかな背中に多少動悸を早くしながらも、意を決して肩甲骨の辺りから生える刹那のこれまた初雪の如く純白の羽根に、辻が手を掛けた時の刹那の第一声<sup>が</sup>上記



の悲鳴であった。

……たしか鳥の羽根には神経が通っていない筈だし、生え変わって成長途中の羽を除いて血も通っていないって前に何かで読んだ気がしたんだが……

まあそれは普通の鳥の話だし、刹那は半分人間の血も入っているわけだからいろいろ勝手が違うのか、と辻は気を取り直して、毛の柔らかなブラシ片手に改めて刹那の羽根へと向き直る。

「……触るぞ、刹那？」

「は、はい……うんっ……！」

頷きながらも辻の手が触れた瞬間、鼻に掛かった艶っぽい声を洩らす刹那に、辻は手を柔らかな羽毛に半ば埋ませたまま動きを止めるが、

「す、すみません……！……あの、大丈夫ですから……！」

と、顔の赤い刹那に先を促されて、辻は雲行きが怪しくなってきたような何かを感じつつも、逆の手に持ったブラシでひとまず刹那の右羽根の根元近くを軽く梳く。

「ふ、くうんっ!!？」

………うん………

「……刹那、幾ら何でも敏感過ぎないか？……！」

「ち、違うんです!!？…これにはちよつと、訳がありました……!!？」

一旦ブラシと手を羽根から離して辻は刹那に問い掛ける。刹那は茹で蛸の様になりながらしどろもどろに弁解を始めた。

曰く、鳥族は空を飛ぶ際に翼で主に風の流れを感じ取り、羽の一本一本を精密に動かしての微細な調整を駆使して風を掴むことを得手としているらしく、それが故に空中飛行においては他の飛行種族よりも高い機動性を誇るらしい。

その為に鳥族の羽根は通常の鳥と違い、羽の先までに発達した神経網が張り巡らされているらしく、その羽根は極めて鋭敏な感覚器官の一つである。取分け感覚の鋭い鳥族ならば、視覚や聴覚を塞がれていても羽根さえ外気に触れていれば、空気を介して伝わる情報のみで、支障無く戦闘や飛行を行えるらしい。

一聞したただけでは良いことづくめのように思える烏族の羽根だが、感覚が鋭過ぎるといふのは時としてデメリットにもなり得る。

大気に撫ぜられる程度ならばなんら行動に支障は無いが、何かに触れられる等の一定以上強い刺激を加えられると、脇や足の裏を擦られた刺激を数倍したような、むず痒く、それでいて心地よいような何とも言えない感覚が羽根を通して伝わってくるらしい。

更に刹那はハーフであるというのに羽根の感覚は通常の烏族よりも寧ろ鋭敏な方であり、加えて刹那は普段から羽根を外に晒していない為、中に仕舞い込まれている羽は偶に外に出すと感覚が一層鋭敏なものになっていくらしい。

つまり、結論を簡潔に述べるならば、刹那は羽根に限って有り得ない程刺激に対して超敏感ということである。

「……ならなんで羽根を俺に任せようとしたんだよ、お前は……」

「い、いえ、今まで誰にも羽根に触れさせた事が無かったものでして……自分で時折手入れは行っていたので、まさか自分以外に触れるとこんなに、その、感じるとは思わなくて……」

刹那は赤い顔を俯かせ、モジモジと身体を振る。背中の羽根は小さく羽搏く様にユラユラと左右に揺れていた。

……犬が尻尾振つてるみたいなきだ………

些か逃避気味にそんなことを考えながら辻は動悸の早まって来た胸にそつと手を当てる。何だか知らないが先程から色っぽい声を聞かされたり感じるなどと端からすればそつちの意味合いにしか聞こえないような台詞を聞いたりで、性的嗜好が少々特殊であるものの健全な男子高校生である辻からしてみれば正直大分妙な気分にはさせられていた。

「……刹那、そんなに耐え難いなら羽根繕いは一旦中止するか？別に急ぐようなことじゃないんだ、お前が羽根を出している状況にもう少し小慣れてからでも充分に……」

「……………いえ」

これ以上の続行は何やら危険な方向に流れそうだったので、刹那を止めにかかった辻だが、刹那は暫く考え込んだ後に首を横に振った。

「やっぱり続けて下さい。羽根繕いは親子や伴侶の間で行なわれる、鳥族にとつて至上にして至高の親愛の表しです。誰が見ている訳で無くとも、中途に終わらせたとあれば私の中の私が愛情に疑いありと訝ります。迷惑で無ければ、どうか」

「……迷惑では無い、迷惑では無いが……」

「だ、大丈夫です！行為自体が嫌な訳では決してありませんので!!？少々むず痒くはあるんですが、…寧ろ気持ち良い、と言いますか……あの……」

「……………」

恥じらいながらもそんなことを言いながら健気に身体を張る旨を告げてくる刹那。辻に退路は残されていなかった。

ブラシが羽と羽の隙間にその細く、柔かな毛を入り込ませ、優しく上から下へとなぞり下ろして間隔を整え、羽の生え際の肌とその下の肉に程良い刺激を送る。

「あ、はあっ………っう………っん!!??……」

そのまま全体を軽く梳き終わると、動かしていない時間が長かった為にやや張り詰めて硬くなっている、翼を動かす根本の筋肉を解す為、前側に回した片腕で翼を抱きかかえるようにしながら先程よりもやや強めに、毛を立てる様にしてブラシで梳く。

「い……ひっ!!??……あっ………や、はあっ………!!??……」

自然、刺激を受け続けて反射的に小さく閉じようとしている羽根の関節部を優しく押し留め、ストレッチをするかのように軽い力で駆動域一杯まで羽根を開かせると、如何しても構造上羽と羽の重なってしまふ汚れの溜まり易い部分をブラシで丹念に梳く、梳く、梳く。

「あ………やあっ、あ、あああ………!!??……っじ、ぶちよ……ふっ、くうん!!？」

……落ち着けよー、兎に角落ち着けよー俺。幾ら可愛らしかろうと色っぽかろうとプツリ行くなよー……押し倒して一線越えるだけなら良くないけど良いとして、ザツクリ行ったら死ぬからなー、お前の

恋人死ぬからなー！

……！！？

上気した顔の双眸は絶え間無い刺激にすっかりと蕩け、必死に嬌声を洩らすまいときつく引き結んだ口元からは透明な唾液が一筋、いやらしく喉元へ滑り輝く道を残しながら垂れていくのを辻の眼は確かに捉えていた。快感に抗わんと力の限り握り締められた両の拳は胸元でフルフルと小刻みに震え、対照的に力無く投げ出された足の太腿辺りが時折擦り合わされる様な動きをするのは気の所為か見間違いだと辻は思うようにした。時折痙攣する様に振るわれる純白の羽根の、サラサラと絹の様な手触りでありながら同時に綿の如くフワフワしたポリウレームを感じられる、何とも言えず心地良い感触を手で楽しみながらも、辻の理性は大分追い詰められていた。

……なんだこの状況……

他愛無い恋人同士のスキンシップ程度の心持ちで臨んだというのに、はつきり言つて雰囲気は完全にS○Xの前戯か何かである。かといって今更止めるのは片手落ちにも程があり、すっかり止め時を見失った辻であった。

……… 兎に角右羽根はもう終わってる！後は可能な限り早く、されど丁寧にこの新手の苦行と化したいかがわしい行為を終わらせるのみ！！？……

畜生あの烏頭の連中は普段からこんなエロいことやってるのかあのエロ妖怪共が！！？と、烏族にとつて相当に不名誉な八つ当たり地味な思考をしつつも辻は天国羽根のような地獄いを終わらせに掛かる。

「ひ、いあつ！！？つ、つじぶちよう、ひん！！？も、もう少しゆっくり……っああん！！？」

「もう少し耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ俺えええええ………！！？！！？（煩惱を頭の中から追っ払うために集中しすぎて刹那の声が届いていない）」

「ふあ、もう、もう無理、あんっ！！？だ、だめ……やつ、らめれすつじ……ひや、っあああああんっ！！？！！？………」

暫くの間お待ち下さい。

「……………」

「……………本つ当に申し訳ありませんでした……………!!?!!?」

有り体に言つて刹那が○つてしまつてから役五分後。腰が抜けたような女の子座りの姿勢で今だ荒い息を吐きながら。真つ赤なままの顔で半泣きになりつつも睨み付けてくる刹那の前で、これ以上姿勢はこの世に無いのではないかと言う事見事な土下座を辻は披露していた。

「……………っすん……………もういいです、明らかに堪えるのが無理だと途中で理解できていながら、強行した私も悪いですから……………」

「いや、それは途中で俺が暴走していい理由にはならん。本当にすまなかつた、刹那……………!!?」

「ですからもういいですつて。快か不快かと言えば……………あれでしたから!!?もうこの話は終わりにしましょう!!?……………でも次はもう少し、優しくしてくださいね……………」

「……………わかつた、許してくれてありがとう…」

果たして次があつたとして俺と刹那は生きていられるのだろうか、と何時か再び訪れるであろう試練の時を暗澹たる気分で想像していたのだが、一先ず先のことは置いておこうとある意味恋の思考放棄をかまして起き上がり、様々な意味で消耗したであろう恋人の為に冷たい飲み物でも持つてこようと、台所へ向かう。

「刹那、煮出した麦茶とオレンジジュースと泡の出る麦の飲み物と綾瀬ちゃんから押し付け…貰つた『愛欲の use 茶、アツー!』とかいう謎ドリンクがあるけど何がいい?」

「とりあえず最後のは絶対に要りません、なんですかそのいかがわしい代物は?……………というか何故お酒があるんですか……………」

「間違つても大きな声では言えないが、酒はそんなに好きじゃ無いけど○ールだけは好きなんだよなあ俺。特に夏場はあの喉越しが……………」

不良な彼氏ですまないなあ、と戯けた様に笑う辻に苦笑を返しつつ、アルコールの入っていない麦の方を頂く刹那だつた。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。……ああ、そうだ刹那。まあ事が事だから無理ないかもしれないけれど、戻ってたぞさつき」

氷の入ったグラスを手に、律儀に礼を告げてくる刹那に応えつつ、ふと先程の痴態……では無く、恋人のとある台詞を思い出した辻は、刹那にその旨を伝える。

刹那は一瞬キョトンと目を見開くが、直ぐに思い当たったのか若干気恥ずかしそうにしながらも、微笑みと共に恋人の名を呼んだ。

「すみません、いい加減慣れなきやいけませんね……一さん」

こうして少々過激な恋人達の触れ合いは幕を閉じた。

「ユウベハオタノシミデシタネ？」

「黙れ、殺すぞ」

「恥ずかしがんなよ一ちゃん、もう彼氏彼女の仲間なんだし何恥じることも無えじゃんよおくく？…にしても一ちゃんったら案外テクニシャンねえ!!？男を知らないであろうせつたんを初めっからあんなに喘がせて、大人しい顔してやることはヤっちゃやうんだからこのムツツリスケベ!!？」

「よし解った綺麗におろして……待て、なんでお前そんな微妙に具体的に話を……」

「なんでってそりや聞こえてたからに決まってるじゃん。最も最後の方の一際デカかったのであろう絶○カマした時のだけだけどなー、麻帆良の男子寮は野郎ばっかの建物にしちや防音しっかりしてっけどあんまりアテにし過ぎちや駄目よ一ちゃん……おわあ!!？」

「トリアエズテメエヲコロシテギャクドナリノヤロウモコロシニイクカ……!!？」

「ワイワイ一ちゃんちいと落ち着……おいマジで待てやフツちゃんて斬られたら死んじまうだろーが!!？」

「シネヤアアアアアア!!？」

「ギヤーーーーーッ!?!?」  
麻帆良は今日も平和である。

5話 少年少女の恋模様 〔豪徳寺と千鶴〕

「…?!!?」

「が、はあああああつ!!?」

鋭く打ち込まれた崩拳を懐に飛び込むようにして躲し様、大豪院の放った撃統頂肘が功夫服を来た大柄な男を真面に捉え、男はまるで巨人の掌に薙ぎ払われたかの様な勢いで宙を舞い、地面に激突して倒れ伏す。

「それまでアル!!?」

その様子を最後まで見届けた大豪院が掌に拳を合わせ、緩やかに一礼すると、古の鋭い決着を告げる声が辺りに響き渡り、直後に周りの観客から歓声が降り注いだ。

時刻は正午を過ぎて程無く、中武研が行う演武及び対練の場にて古と大豪院は、それぞれ部長と副部長としての役割を果たしていた。

「アイヤ、ご苦労だたアルねポチ」

「労う気があるのならばまずお前がキチンとこの分からず屋共にいい加減妙な逆恨みで俺を潰しに来るのを止めさせろ。揃いも揃って対練とは名ばかりな殺気を纏って突っ込んで来る脳無し共の相手はいい加減ウンザリだ。……それからこれも言い飽きたが、俺のことをポチと呼ぶな。渾名にした所で良い歳をしてそんな可愛らしい名を付けられて喜ぶ男は居ない」

まず大盛況と言っている客の入り様と湧き具合に気を良くしているらしく、明るい声で大豪院に声を掛ける古に、大豪院は対象的にゲンナリした表情で文句を返す。

中武研、正式名称中国武術研究会は、形意拳、八卦掌に心意六合拳、太極拳等を収める部長 古菲と、八極拳一門を主体とする大豪院を副部長とした二枚看板を中心に内家、外家拳を問わず様々な中国武術を収めた猛者の集う、麻帆良武道系部活の中でも総合的戦力を見ればかなりの上位にランクインする強豪である。

そんな中武研の、より正確に言えば副部長としての大豪院の目



下の悩みは、古以外のほぼ全部員と軒並み険悪な状態にあることだった。

その理由は大豪院にあると言えばあるのだが、大豪院からしてみればとんだ濡れ衣にしてとぼっちりであるその理由とは。

「さあポチ！我等が部員達が全員やられてる以上、対練の相手は私しか居ないアルな!!? 掛かって来るアル!!?」

「貴様部員達を止めなかったのは最初からこの状況に持っていこうと企んでいたからだな鍛錬馬鹿めが!!?」

…そう。他ならぬ中武研部長にして部の中で圧倒的人気を誇る古が大豪院にばかり絡んでいることが原因であり、則ち理由とは部員達の嫉妬に他ならなかった。

古は中武研の男子部員（全体の9割を超える）に対して、その天真爛漫な性格と愛らしい容貌からある種カルト的な人気を誇る。中武研のみならず一部の武道系部活男子勢すらもファンの存在するその古が、口を開けばポチはポチはと一人の男しか目に入っていない様な言動をしていけば、それは同じ団体に所属している野郎共からすれば面白くは無いだろう。

……古は決して俺だけに構っている訳では無いし、そもそも鍛錬相手にならん程弱い貴様等が悪いのだろうか……

大豪院は憮然としながら腹の中で毒を吐く。あまり親しくない相手に関しては無愛想で辛辣な面のある大豪院である。

古は決して部活での指導や部員達とのコミュニケーションを蔑ろにしている訳では無い。裏表の無い古はほぼ何事に対しても（勉強を除く）全力で取り組む。そもそも大豪院は寧ろ自分の所に来ないで他の奴に絡んでいろと明言しているのだから、大豪院の現状は理不尽極まりないのだが、理屈で納得出来るのなら人間戦争など起こさないのである。感情の赴くままに今日も元気に大豪院を打ち倒そうとした連中は、若さ溢れる学生らしい、という面ではある意味学園都市という環境には相応しいのかもしれない。

「どうしたアルかポチ!!? この私に怖れを成して産気付いたアルか!!?」

「凄まじい用文の誤りを聞いたな!? 何処の誰を妊婦扱いしているこの馬鹿が! 正しくは怖気付くだこの馬鹿めが!!?」

「とうとう私を唯の馬鹿扱いしたアルね!? ポチは相変わらず口が悪いアル!!?」

「いい加減喧しいわ! 大体止める止めろと言っているのに人を望まん渾名で呼び続けるのは口どころか性根が悪いわこの馬鹿が!!?」

ギャアギャアと子供地味た言い合いを繰り広げる大豪院と古に、観客はやんややんやと歓声を送る。基本盛り上がるなら何でもいとお祭り人間が多いのが麻帆良という地である。

「くっ……! おのれ犬畜生の名を冠する唇如きが、我等が菲部長とイチヤイチャしおって……!!?」

「糞おつ……!!?……我未熟哉! 今少しの力があればあんな鱈子に好きな様にはさせないのに!!?」

「次に俺を蔑称で呼んだら本気で勁を打ち込むぞ影でグチグチと恨言を叩き、功夫が足りんからと複数で一人に押し掛ける卑怯人共が」

這い蹲っていた地面から、何とか上体を起こして呪いの視線を送る中武研部員達に冷たく吐き捨てた後、大豪院は心の底から疲れた様子で嘆息する。

……少しは他の連中の? 人 共のように女らしい部分を欠片程度でも良いから出してくれんものか、この脳筋娘は……

大豪院からしてみれば、古がこのバトルジャンキーっぷりで何故ここまでのカルト的人気を武道系男子達から得ているのが本気で理解出来ない。容姿は確かに悪くないかもしれないが中身は狂乱大猿もい所だ、と内心で毒付いていると、一向にやる気を見せようとしない大豪院に業を煮やしてか、古が他人を小馬鹿にするような目を細めた笑みを浮かべて大豪院を挑発に掛かる。

「フツ……そうやってグダグダと言ひ逃れをして逃げるつもりアルな、肝小鬼アル!!?」

「今時そんな幼稚な挑? なぞ小学生でも乗らんわ阿呆らしい」

古の企みを一蹴した大豪院は両手を広げ、周りの観客達にこれ

にて演舞と対練を終了する旨を伝えた。一部の観客は二人の対練が行われないことに不満の声を上げたが、大半の観客——特に麻帆良の住人や、麻帆良学園祭に通い詰めて長い通の人物程物分かり良く解散をし始めていた。

「…つむう〜！！？ポチはホントにツレないアル！！？」

それは彼らが麻帆良学園祭という盛大な祭りの実態を知り抜いているからに他ならない。

「ポチと呼ぶなど言っておろすがバカンフー娘が。…それに焦らんでも相手は近々してやる」

中武研が行った程度のデモンストラーション模擬戦闘ならば至る所で行われているから？学園祭を楽しむ上でのメインは麻帆良の異常とも言えるレベルで発達した各種の超技術を用いた各種のテーマパークだから？

「ん？どういふことアルか？」

それらは理由の一つではあるが、一番の理由は違う。

「自分で出場しようとして誘っておきながら忘れたか？今日の夕暮れ時にはまほら武道会の予選、勝ち上がれば明日には本戦が行われる。…お前の功夫が相応しい域に達していれば、必ず巡り会うだろうよ」

熱き武道家同士のぶつかり合いが見たいのならば、学祭初日の午後五時を以って開催される『まほら武道会』を見物しに行けば良いからだ。

まほら武道会とは、今から数十年前の麻帆良において隆盛を誇った古い歴史を持つ大会だ。最も現在は麻帆良の近代化に伴い規模が縮小され、現在では大会エントリー数が十人集まれば上等という程度の、麻帆良学園祭イベントの中では極小規模な大会でしかない。

しかし今回ばかりは事情が異なり、まほら武道会には麻帆良学園内有数の猛者が続々とエントリーしており、その数は百人を軽く上回っていた。あまりの参加人数の多さに、急遽麻帆良学園祭で行われる予定だった複数の格闘大会にM&A（合併と買収）が行われ、まほら武道会はかつての盛況を取り戻したかの様な一大イベントと化していた。

「…ふ、そうだったアルね。なんだかそこらの部長クラスが後からぞろ

ぞろ入って来たからポチと試合するには苦勞しそうアル」

「…まあある意味俺達全員の知名度を軽く見過ぎだ故の自業自得ではあるがな……」

そう。寂れた伝統だけが売りの小規模大会に、今年に限って強豪が集った原因は大豪院達バカレンジャー及びネギ達3ーA一行にあった。

空手における腕前は麻帆良一、かつて中学二年にして『外』の全日本無差別級空手選手権大会において優勝を果たしたが、試合において対した選手を全て病院送りに、一部を選手として再起不能に追いやったが為に表の大会を永久追放された、『破壊旋風』中村 達也。

自称喧嘩三十段、中学生の頃から全国行脚にて各地の腕自慢を喧嘩にてぶちのめし、とうとう著名な格闘選手迄を半殺しにしてしまったが為に地元の学校を退学になった、『不沈戦艦』豪徳寺 薫。

ある日ふらりと麻帆良に現れ、当時の柔術部に道場破りを仕掛けて激闘の末全部員を打ち倒し、麻帆良に入学した以降は誰彼構わず道行く武道家に絡んでは決闘を繰り返していたかつての狂犬、『流麗武踏』山下 慶一。

転校初日に当時既に幅を利かせていた中村と通称『ポチ事件』を起こし、その際に中村を意識不明の重体に追い込み、その後も決闘を挑まれる度に必ず相手に全力での打ち込みを行い、武道家としての再起不能者を山と造ったやり過ぎていた男、『崩山裂海』大豪院 ポチ。

中学時代に転校して来てから現在に至るまでに一貫して麻帆良武道家武器組の頂点に立ち続け、その実力はバカレンジャー随一との呼び声も高いが、近年では大会そのものに顔を出すことの無かった素手組、武器組を問わず垂涎的、『疾風刃雷』辻 はじめ 一。

麻帆良の武道家達にとってとてもないネームバリューを誇るこの五人に加えて、その実力は豪院と互角以上の名も高い中武研部長、古 菲。麻帆良忍術部部長がその実力に太鼓判を押し、忍術部副部長から一方的に敵視されている紛れもない実力者でありながら武道とは全く関係の無いさんぽ部に属し、これまで大会の類いに一

切顔を出すことの無かった長瀬 楓。大会の類いには楓と同じく一切出場経験が無いながら、バカレンジャーの一人、辻 はじめ一が部長を務める剣道部内において最強を誇り、武器組No. 1は彼女にこそ相応しいとの声もある桜咲 刹那といった面々の全員が全員、まほら武道会に参加を表明したのである。

知り合いの武道家、麻帆良報道部等が理由を尋ねるも、『倒さねばならない奴がいる』との言葉以外を告げないバカレンジャー+αに、麻帆良の武道家達は色めき立った。

……あの麻帆良5強の名を欲しいままにするバカレンジャーに加えて、対戦を望もうとも叶うことの無かった未知なる実力者の二人までもが同一の大会に出場する……………

……しかもこの錚々たる面子が揃って打倒目標として挙げるようなまだ見ぬ実力者がまほら武道会には出場する、ということだ……………

どこまでも己が強くなることを望み、強者との相対を至上の喜びと公言して憚らない純粹なる武道バトルジャンキーバカ達は歓喜に奮え、我も我もと挙つてまほら武道会へ己のエントリーを捻じ込んだ。その結果が最早当初の原型を留めていない、一大武道会と化したまほら武道会であつた。

「まあ誰が立ちかはかだろうとも私は負けないアル!!? ポチ、私と当たるまでに負けたら承知しないアルよ!!?」

「正しくは立ちはだから、だ日本語は正確に覚えろ。俺達の目的はあくまでクウネル・サンダーズなる巫山戯た名の男を打倒し、ネギの父親の情報を得ることだ、忘れるなよ? 唯でさえ山下が最悪戦力としてアテに出来んかもしれんのだ」

怪気炎を上げる古を洩い顔で諫める大豪院。エヴァンジェリオンとの恋路に決着を着けるとの山下の他にも、負けられない一戦の直前にデートをかましているある意味不誠実な輩が三人も居るのである。正直大豪院としてはそれぞれ上手くいかなかった場合、試合において実力の発揮に著しい悪影響が出そうなので不安要素を増やす様な真似は止めて欲しいのだが、どいつもこいつも今後の人生が賭かっ

ていそうな以上文句を言う訳にもいかず、一人悶々とする大豪院であつた。

「そうアルねー……でも山下に限らず皆上手くいけばラブラブパワーみたいな何かを發揮して凄く強くなるかもしれないアルよ？」

「そんなテンションが振り切れた様な高揚状態での試合なぞ危険以外の何物でも無いわ。武道家に求められるのは感情に左右されない実力だ」

ふと洩らした古の戯言を素気無く切つて捨て、大豪院は今時分、年頃の学生らしく青春しているのであろう悪友達のことをふと想つた。

……色恋沙汰は俺には解らん……が、上手く行くことを祈るぞ、貴様らの為で無く女共の為にな……

最も、その祈りは一組には届かず、もう一組は未だ今後の関係を如何するのか決めかねている状態なので、結果として無駄なものであつたのかもしれない。

「……悪いな、待たせたか？」

「いえ。私が待ちたい気分だったので、お気になさらず」

待ち合わせに指定した時刻の十五分前。公園の噴水前に淑やかに腰掛けていた千鶴に対して豪徳寺は謝罪したが、柔かな笑顔の千鶴にそう返された。

豪徳寺 薫と那波 千鶴。普段の二人を知る者がこの場に居たとしたら、二人の余りな変わり様に声の一つでも上げていたかもしれない。

千鶴は自分の外見年齢が実年齢15歳の女子中学生よりも上に見られがちだとの自覚がある為、普段はモノトーン系の配色を主に、派手派手しい色合いのものや過度の露出を嫌った落ち着いた雰囲気のアツションを好み、所謂年相応15歳の格好をせずに居た。如何に大人びて見えようとも

千鶴はまだ多感な年頃の中学生なのである。他者の評価で似合っていない、ならばまだしも、若作りしている、等と欠片でも思われる様な事態になったら当分立ち直れない確信があった。

だが、今日の千鶴はピンクのフェミニンデザインな、シフォン生地を生かした膝丈のプリーツスカートを履き、ネイビーのテーラードジャケットを合わせたフェミニンかつ柔らかな印象の若者らしい服装に身を包んでいた。それでも年齢不相応な成熟したスタイルと落ち着いた佇まいから女子中学生には見え難いが、千鶴の余所行き姿などほぼ初めて見ると言つていい豪徳寺からすれば、千鶴の姿は何処にも無理をしている感じの無い、魅力的な女子として映っていた。

「…なんだ、ちゃんと年相応の格好も出来るじゃねえか。普段の格好が似合っていないとは言わねえが、こつちの方が自然な感じで良いと思うぜ？」

「……ふふつ、豪徳寺先輩、嬉しいことを仰ってくださいけれど、それは些か褒め過ぎと言いますか、お世辞の感が強いですよ？私下手をしなくとも大学生以上に見られることなんてザラにありますから、寧ろ今のファッションが無理をしている様に見られていないか、実の所気が気でないんです。…出掛ける時もこの服装で本当に良いのか、結構迷ったんですから」

千鶴は自然体でまず服装を褒めてくれた豪徳寺に、実は結構こなれていのかしら？と内心で苦笑しながらも、大人びて見られることにコンプレックスの様なものを抱いている千鶴としては素直に豪徳寺の言葉は嬉しかったので、微笑みを返しながらつい言うつもりが無かった台詞を口に出す。すると豪徳寺は眉根を寄せて軽く鼻を鳴らし、やれやれ、とでも副音声の付きそうな態度で首を振りつつ言葉を紡いだ。

「前にも言つたら？お前んとこの騒がしい連中と比べればそりやお前は大人びて見えるがよ、俺からすればお前は普通に歳下の女の子でしか無えぞ？」

というか上に見られんのが嫌なら普段からそういう格好貫いてりやいいんだよ、と続ける豪徳寺だったが、堪えきれないといった

様子でクスクスと笑う千鶴に口をへの字に曲げて軽くドスの効いた声で尋ねた。

「……おい、何が可笑しいんだよお前は？」

「女の子に凄んじや駄目ですよ、豪徳寺先輩？…失礼しました、何だか余りにも先輩らしいなあ、なんて思ってしまったよ…」

「だから俺のことについて知ったような口を利くなど言ってるのにお前は……」

渋い顔をする豪徳寺は、おそらく自分が不快だからと言うのは無く、以前注意したように男を勘違いさせかねない様な言葉を軽々しく吐くなど言いたいのだろう。

…無骨で、誤解され易そうだけれど…ちゃんと気が使えて、思っていたよりもキチンと合わせてくれて、でも譲らない自分をしっかり持っている人……

確かに、こんな短い時間で解ることなど、その人の一面でしかないのだろうし、それだけで相手のことを理解わかったつもりになるのは失礼だし、また危ない話なのだろう。

……でも女の子がイイな、と感じて、その感覚が間違いじゃ無いつて確信するには……

そんなに時間なんて要らないんですからね、と口の中で小さく呟いてから、千鶴は渋面の豪徳寺に悪戯っぽい微笑みと共に宣言した。

「あら、でも豪徳寺先輩って案外分かり易い人ですよ？」

「………そうかよ……」

矢鱈と楽し気な千鶴の様子に、これ以上苦言めいたことを言う気が失せて、豪徳寺はやや力無く、そう締め括った。

「……初っ端からイチャイチャした会話を繰り広げておるなああの軍艦頭は………!!？」

「オノレ硬派を謳っていながら所詮は奴も軽薄にして惰弱な現代っ子か!!？日の本の国に産まれ落ちた日本男児の心は何処へ行った!!？」  
「不純異性交遊が何故取り締まられているのか奴らには解らんのか!!」



「……それが取り締まられるべき悪しき所業だからに決まっておろ  
うが!!?」

「じゃあ行くか?、はい、との軽いやり取りと共に連れ立って歩  
き出した豪徳寺と千鶴に建物の影から怨嗟と嫉妬のドロドロした視  
線を送りつつ聞き苦しい台詞を吐いているのは何の変哲も無い極一  
般的な服装をした高校生から大学生程度の男達である。……首から  
上を除いては。」

その男達は頭から覆面レスラーが使用<sup>っ</sup>う様な白いマスクを  
被っており、更にマスク男達の内一人はハンディのビデオカメラを並  
んで歩く二人に向けて廻していた。

見た目はどう鼻肩目に見た所で変質者であるが、この湿った男  
達が何かといえ、その名は『し〇と団』。異性にモテない侘しい己の  
現実から目を背け、リアルを充実させているカップルの野郎側に襲い  
掛かつては袋叩きにして風のように消えて行く、紛う事無き変質者に  
して犯罪者集団であった。

最も現在<sup>いま</sup>の彼等<sup>ま</sup>は中村 達也という名のもつと凄<sup>ま</sup>い変態によ  
る、思想修正という名を持った容赦の無い暴力によって心をへし折ら  
れており、自分達からちよつかいを出すことも許されない陰湿な盗撮  
ストーカーにまで堕<sup>お</sup>ちているのだが。

「……心の底より無念だが、今は黙って奴等のデート風景を追け回す  
他あるまい……!!?」

「ああ、もう殴られたく無いもんな……」

「次に奴の正拳を腹に喰らったら一週間はメシが食えん自信があるぞ  
……」

一瞬仰々しい喋り方を止めて素の口調で怯えた様に呟くマス  
ク男。平気で野郎をフクロにする割に自分達がやられるのは嫌らし  
い、勝手な連中である。

「……む? 奴等を見失ってしまう。行くぞ同志達よ」

「承知」

「無様にデートコースの選択に失敗して気不味くなるがいい豪徳寺よ  
……!!?」

「……そういえば、今日は髪を下ろしていらっしゃるんですね、豪徳寺先輩？」

「……ああ、まあな……」

千鶴に並ぶ豪徳寺は、何よりも特徴的なポンパドールを下ろして髪を後ろで一括りに纏めていた。服装も長ランからジーンズにきっちりと糊の効いたポロシャツ姿であり、顔立ち自体は少々厳つい印象を与えはするものの意外に整っている為に、今の豪徳寺は一般的に美少女と文句無しに評されるであろう千鶴と並んでいる事自体に違和感はない。ポンパドール及びリーゼントのヘアースタイルに長ラン、ボンタン等という一昔前の番長スタイルは格好良い、悪い以前に時代錯誤だというのが一般的な意見である以上、デートを行う身として何も間違った選択では無いのだが、豪徳寺は少しばかり浮かない顔である。

「そりゃあ女とデートに行くんだ、何時もの格好は俺のポリシーだが、女受けしないと解ってるのに押し通すのは例え己が定めたルールだろうと漢らしくは無えからな」

「あら、私としては何時もの番長さんスタイルで現れて下さってもよかったですよ？ 私にはあちらの豪徳寺先輩も格好よろしいと思っていますから」

拳を握り締めて豪徳寺自身が口頃から唱える漢とはく、の言動、通称漢道を語る豪徳寺に対して千鶴はそんなことを言う。

「…あのなあ那波。お前の言うそれこそ見え見えの世辞つてもんだろうが？俺は凡そ小学六年からこの格好始めて、一度も女子供から格好良いなんて言われた覚えは無えぞ？」

社交辞令は要らん、と豪徳寺は素気無く返す。豪徳寺本人は普段の格好がこの世で一番キマっている、と信じて疑わないが、世間一般の流行からは逆走している自覚が無い訳では無い。如何にバカレンジャーという枠で中村<sup>本物の</sup>馬鹿<sup>達也</sup>と一括りにされていようとも、豪徳寺はそれ程自身を中心に世界が回っていると考えてはいないのである。

千鶴はそんな豪徳寺の言葉にまたクスリと笑みを洩らし、心外

ですね、と言葉の割には弾んだ声で返事をする。

「私がデートに誘って下さいとお願ひしたのはいつもの豪徳寺先輩だったのに、ですか？」

「……………ぬう……………」

私、デートの際の服装を指定した覚えはありませんよ？と言ひ放ち、上機嫌な様子で豪徳寺よりも二、三步前へ先行し、歩き出す。豪徳寺は一見すると怒っているような顰めっ面で背中を見せる千鶴を暫し睨んでいたが、やがて一つ息を吐いて緩く首を左右に振り、恨めし気に呟いた。

「…やっぱり女には口じゃ勝てねえな……………楽しそうだからいいけどよ」

……………よかった、特別怒っている様子じゃ無さそうね……………

千鶴は直ぐ後方を歩く豪徳寺の表情をこっそりと盗み見て、内心で安堵の息を吐く。

傍目には余裕の貫禄で豪徳寺を翻弄しているように見えた千鶴だが、内心ではそれ程、というか全く余裕など有りはしなかった。

3ーAのみならず麻帆良の女子校生徒全般に言えることだが、女子校という年頃の異性と普段接触する機会の無い環境故に、交際所か異性の手を握ったことも無い純粹培養な女子中学生というのは麻帆良にはザラに居る。ましてや千鶴は那波重工という大企業の一人娘であり、言わば良い所のお嬢様である。どちらかといえば子煩悩に該当する千鶴の父親は、実家に千鶴が居る際等にも可愛い一人娘に悪い虫が付かないよう目を光らせていたが為に、千鶴はこれまでに恋人が出来た事はただの一度も無い。千鶴にとっては豪徳寺とのデートが産まれて始めての異性交遊なのだから、余裕など抱き様が有る筈も無かった。

それでも千鶴が刹那の様に盛大にテンパってアタフタした様子が欠片も無いのは、良家の令嬢に生まれ落ちた故の教育と経験の賜物だろう。淑女としての英才教育と誕生パーティーや社交パーティー等で人間経験によって、千鶴は異性との付き合いは知らずと



を沸き上がらせつつのたうち回っていた、見苦しい連中である。

「ハーツハアアアツ……!!?…ともあれ、この距離ならば流石にある元軍艦頭も我々には気付けん様だな。このまま続行だ」

「生きとし生ける全てのリア充男子に制裁を加えるべくして集う我等正義の集団が、獲物を前にしてただ手をこまねいているこの現状は何だ!??…私にもつと力があれば……!!?」

「耐えるのだ、同志よ！夕方だ、夕刻までの時間を乗り切りさえすれば奴はまほら武道会に出場する!!?その時に如何なる手を用いてもズタズタにすれば良いのだ!!?」

「ぐう……無念だ、神は何故我等に此れ程の試練を……!!?」

聴く者が聞いていれば満場一致で『日頃の行いの所為に決まっ  
てんだろボケ』とツツコミの飛んできそうな自覚の無い台詞を吐きつ  
つも無駄に高めなスペックを用いて隠行へ励みつつ、しつ○団は豪徳  
寺と千鶴を再び追け回しに掛かる。

「……むう、奴等どうやらバーチャルゾーンへ向かう様だな」

「ふんっ!!?初デートでついつい選びがちだが、時間ばかり掛かる割  
に会話などが殆ど出来ない為進展の難しい映画を観に行かん辺りは  
多少弁えているらしいが、然りとてこの麻帆良科学の粹たる超技術が  
ふんだんに発揮された夢の空間とて、初心者の貴様らに適した空間と  
は言い難いのだよ!!?」

「問答無用のど迫力でお客を楽しませる様々なゲーム要素を詰め込ん  
だ超空間!!?間違い無く楽しめはするが、男女の価値観の違い故につ  
いつい一方が彼氏彼女そっちのけでハマりし、後ほど気不味くなつ  
たり喧嘩になるパターンがしばしば麻帆良学祭では見られる光景  
よお!!?」

「クハハハハア!!?貴様もどうしようも無い男の性を発揮した拳句、  
巨乳美少女から愛想を尽かされるがいいわあ!!?」

「やあ豪徳寺君！そちらの美しいお嬢さんは初めました!!?僕の名は  
金剛 力也、己が人生の全てを筋肉の為に捧げ、筋肉の筋肉による筋  
肉の為の理想の筋肉国家をc r e a t i o nする為に日々筋肉ト

レーニングに勤しむ、己の身体に発達する筋肉のみの味方さ!!?」

「那波、悪いな入る通りを間違えた。戻るぞ」

「あの、豪徳寺先輩?」

バーチャル恋愛空間やら世界の格闘家とリアル格ゲーやら空想ゾンビパニックエクスペリエンスやら。もう近未来のSF空間に迷い込んだと錯覚しそうな電脳世界を売りとする通りで入る店を物色していた豪徳寺と千鶴だったが、唐突に目の前へ飛び出して来たこの場のサイバーパンクな空気に対して不釣り合いにも程がある筋肉の塊を前にして豪徳寺は迷わず千鶴の手を掴んで回れ右をしようとし、千鶴は己と同じホモサピエンスに属しているとは到底信じられない筋肉ダルマの迫力に半ば呆然としながらもいきなり豪徳寺から手を繋がれたことに頬を染めて恥らっていた。

そんな二人の様子を見て何やら訳知り顔でウンウンと頷いていた黒光りする筋肉の小山は、自分の方を一瞥もせず立ち去ろうとする豪徳寺へ快活な野太い声を張り上げる。

「H A H A H A H A !!? つれないねえ豪徳寺君!!? 僕のmuscle bodyを前に己の貧弱な筋肉量を恥じてこの場に立ってられない気持ちは良く解るけれど、些かそれはc o u r t e s yに欠ける行為じゃ無いかい?」

「五月蠅えよ筋肉ダルマが!!? 普段ならもう少し相手してやらねえでも無えが今は取り込み中なんだよ見て解らねえか!!?」

シャツ!!?という擬音が聞こえてきそうな程機敏な動作で豪徳寺達の前へと回り込みサイドチェストをキメる金剛を豪徳寺は堪らず怒鳴り付ける。金剛はその剣幕に怯んだ様子も無しにポーズを解くと、見事に括れてはいるが艶かしさの欠片も無い腰に手を当ててチツチツ、と指を左右に振る。

「豪徳寺君、言わんとすることを察せない僕では無いが取り込み中などとまるで面倒事を片付けている様な言い方は止すべきだよ? それにl a d yの前で声を荒げてはいけないよ」

「…………この野郎……………」

「豪徳寺先輩、落ち着いて下さい。気を使って頂けるのは嬉しいです

が、こちらの先輩に失礼ですよ?…初めまして、金剛先輩。私は那波千鶴と申します、…先程は失礼致しました、先輩の外見が力強く精悍な迫力に満ちているものですから少々驚いてしまいましたわ」

マイペースな金剛の言動に豪徳寺が青筋を浮かべながら一歩前に出ようとするのをやんわりと制して、千鶴はにこやかに金剛へ自己紹介を終える。少々大人気ないように思える豪徳寺の態度だが、ボデビル研部長金剛 力也の格好は学祭中でありながら普段と変わらぬピチピチのブーメランパンツ一丁。筋肉を美しく見せる為、と公言して身体中にオイルを塗り込んでいるその発達し過ぎた筋肉はテラテラと黒光りしており、一言で言うならば悪い意味での18禁猥褻生物である。筋肉フェチを除くあらゆる女子にとつて大凡ゴリマツチョのパン一姿など精神に多大なるダメージを与えるセクハラ映像でしか無いのだから、一刻も早く千鶴を遠ざけようとした豪徳寺の対応は寧ろ当然の部類だろう。内心はどうあれ微笑みつつ挨拶を交わしている千鶴が凄いのだ。

「ふう〜む礼儀正しいお嬢さんだ、感心してしまったよ。では那波さんと呼ばせて貰おう、那波さん。豪徳寺君は少し誤解され易い所があるがとてもattractiveな男だ。多少つれなくても諦めずにmotionを掛ける価値はあると保証するよ!」

「あらあら、嬉しい太鼓判ですね。ありがとうございます」  
「てめえら……………」

HAHAHA!!?、あらあらうふふ。と笑い合っている二人を前にして豪徳寺は脱力するものを覚えていたが、気を取り直して下がついていた頭を金剛へ向け、言葉を放つ。

「……金剛、言いたいことがそれだけなら失せるぞ俺らは。急いでる訳じゃあ無えが、ビルダーの筋肉観察に来たんじゃ無えんだからよ」  
「ああいやいや。待つてくれたまえ豪徳寺君、二人に声を掛けたのは別に理由があつてね。……どうだろう、此処で会ったのも何かの縁だ。僕達ボデビル研の主催するゲームに参加してみないかい?」  
「考える余地も無え、お断りだ」

にこやかな金剛の勧誘を一蹴する豪徳寺。別段この対応は先

程の件を引きずっている訳では無く、ボディビル研の企画する催しが例年碌でもないからである。

昨々年はボディビル研の筋肉ダルマ共の観点から細い男性（場合によってはカップル）を半強制的にかつ攫つての筋トレ講座『目指せ貴方もボディ美ルダー』、昨年は過激派の報道部と結託により学園都市内の報道機関全てをジャックしての、パンーゴリマッチョ共が延々と暑苦しいポージングを決めまくる光景を放送媒体から延々と映し続ける『電脳ステージ マッスルカーニバル』という下手をしなくても犯罪である問題行為をやらかしているのがボディビル研<sup>脳筋集</sup>なのだ。そういった阿呆な前歴を鑑みれば金剛の言うゲームとやらも真面目な代物である筈も無いと判断した豪徳寺の思考は至極尤もと言えるだろう。

しかし金剛はまあまあ話だけでも聞いてくれたまえ、と再び立ち去りかけた豪徳寺達の前方へ回り込み、両手を広げて公正明大を主張しながら語り出す。

「豪徳寺君は僕達ボディビル研の企画がここ数年、teacher森崎を中心とした広域指導員の方々に今一つ理解を得られず潰されているという事実を知ってしまったからね。そのことで僕達の催し物が害悪な代物だというminus方面の誤解を抱いてしまうのは致し方ないことだ」

「誤解じゃ無えよ、それこそが事実だよ」

「H A H A H A！豪徳寺君、大丈夫だ僕はちやんと解っているよ。何だかんだで婦女子の前だ、筋肉こそがこの世の理<sup>ことわり</sup>全てを司る、という一聞ただけでは男根コンプレックスに類似した歪な価値観に毒されていると感じられがちな真理を素直に認めるのは抵抗があるのだろうか？しかし彼女は聡明な女性だ、きつと話せば解ってくれるとも！！？」

「筋肉至上主義という意味合いの脳筋たるためえと真面目な意思疎通が不可能だつてことだけは今理解したよこの全身ポパイが！！？」

したり顔で理解者面をしてくる金剛<sup>褐色のお肉</sup>力也に吼える豪徳寺だったが金剛には効きもしないし聞きはしない。多かれ少なかれ



突き抜けた人間は自分本意で他人の話を聞かない奴が多いのだ。

「兎に角だ、豪徳寺君。流石に我々も事ある毎に筋肉の素晴らしさを伝える為の機会チャンスを潰されるのは問題だと方針を少々見直してね。先ずは遊び心に富んだ楽しいゲーム性を企画に取り入れて、第一に日々鍛え上げている我々の筋肉の魅力を見せ付け、image upを図ることにしたのだよ!!？」

「……この際筋肉の魅力云々の話は一旦脇に置くとして、改善策としては至極妥当なものだと思いますね……」

さしもの千鶴もキチガイ筋肉バカの毒に当てられてか、微妙に引き攣つた笑顔で若干棘のある台詞を吐くが、金剛は意に介さず我が意を得たりと頷く。

「H A H A H A H A !!? そういうことさ那波さん! さしもの僕も馬に蹴られて馬の脚を折りたくはない、君達に筋肉の素晴らしさについて make outしてもらおう機会はまた日を改めて設けるよ」要らねえよ」…今日の君達にはあくまで純粋なゲームをenjoyして貰いたいんだ!!?」

「無視かてめえは!!?」

「あの、此方ではどのようなゲームを行っていらっしやるんですか?」  
「那波!!?!!?」

ウルトラマイペースに話を進める金剛へ激しくツツコミを入れるも届かない豪徳寺を余所に、千鶴は綺麗な微笑みを取り戻して金剛に尋ねる。

「あら、いいじゃないですか豪徳寺先輩。金剛先輩が改善した、と仰っているのですから、お話だけでもお聞きしてみれば……恐らく一通り付き合うまで解放して頂けないと思いますし……」

「……………ぬう……………」

後半の台詞を豪徳寺の耳元に口を寄せて囁く千鶴に、豪徳寺は唸る。そう、この世界は筋肉を中心に回っていると信じて疑わない陽気な馬鹿は、確かにこのまま無視しようとして出来る様な存在では無い。有り体に言って存在感があり過ぎるのだ。無いとは思いますが、このまま強引に逃げ出したとしてその無駄な筋力にものを言わせて引つ

付いて来る可能性もあるにはあるのだ。

「……っっていうかお前も嫌は嫌なんだな？」

「…面白い方だとは思いますがすけれど、流石に長時間このまま筋肉のお話しかされずに過ごすのはちよつと……」

「至極当たり前の感覚だ、寧ろ誇れ。……よし解つた、ゲームの説明を聞こうじゃねえか金剛」

千鶴の意見も最もだと豪徳寺は頷いて、ある種野良犬に噛まれる様な心持ちで金剛に問い掛ける。内心であまり内容がヤバそうだったら全力の気弾ブチかましてから那波抱えて逃げよう等と考えつつ。

そんなある意味物騒な豪徳寺の内心など知る由も無い金剛は破顔して何故かボデイビルのポージング、アドミナブルアンドサイをキメつつ説明を始めた。

「よくぞ言ってくれたね二人共!!? ならば張り切って行つてみようおおおう!!? 我等ボデイビル研の栄えある今年の企画は、『迫り来る筋肉星人を退ける!!? スペースマッスルインベエエダアアアゲエエエエエエム!!? だああ!!?』」

「……結局こうなんだよな…」

「あら、面白そうですね、豪徳寺先輩?」

豪徳寺は体育館程のただっ広いスペースの一端に取り付けられている、ゴテゴテとSFチックな装飾が施された横一列のレーンにスライドするらしき移動砲台の座席にて呻く様に言った。その声に応じる千鶴は豪徳寺の真上、レーンは付いていないが、砲身の角度が手元のパネルで調整出来るらしき固定砲台の座席でコロコロと笑う。

「さあさあ豪徳寺君、那波さん! ルールは先程説明した通りだ!!? ゲーム開始の合図で奥から我が部員こと筋肉星人達が space shipに乗って現れる!!? 二人はそれぞれタイプの違う二つの砲台でそれらを迎撃し、見事 destructionさせられたのならば豪華景品をプレゼントだ!!? 豪徳寺君の搭乗している砲台は横に移動が可能で全体を制圧し易いが、ステージと砲台の間に視界窓を兼

ねた弾を発射する port のみを空けた壁が展開している為に、豪徳寺君は敵が何処にどれ位居るのかが解らない！当てずっぽうに射撃して倒される程筋肉星人達は甘く無いよ!!? 一方高所に座する那波さん側の砲台は視界が開けている為に敵の位置が be quite obvious だが、固定式の砲台であるが為に制圧力に欠ける！いちいち砲身の角度を調整して射撃していたのではとても全てを shoot down 出来ないからね!!? 長短兼ね揃える二つの砲台！上手くクリアする為のコツはズハリ love だよ L・O・V・E!! ? 敵の見える那波さんが豪徳寺君に敵の位置を伝え、豪徳寺君は的確に伝えられた point で射撃し、敵を倒す！二人の cooperation が重要となるこのゲーム、君達カップルの仲がどれだけ深いか、いざ試練の時だよ二人共!!?」

「……本当に存外真面なゲームで驚きだが……まず何よりも先に言っておく、俺達あカップルじゃ無えよ!!?」

ステージ脇の実況席にて大胸筋のみでマイクを挟み込み、改めてのルール説明を行う金剛に豪徳寺はツツコむ。ちなみにステージ周りは観客席となっており、それなりの人数が入っている為に豪徳寺もあらぬ噂が流れぬよう必死であった。

最も千鶴の方は慌てふためく豪徳寺を楽し気に眺めるだけで肯定も否定もしない、堪らず豪徳寺が加勢を頼むが何やら思わせぶりである。

「お前もちったあ否定しやがれ那波！俺だけ騒いでて馬鹿みたいじゃねーか!!?」

「あらあら豪徳寺先輩。こういったことはムキになって否定すると却って疑わしく思われますよ?…それに、確かに私と先輩はお付き合いなんでしてはいませんか、そうあっさりと関係性を否定されるのも女の側からすれば複雑な気持ちになるんですよ? そんなに躍起になって否定なさらずともよろしいじゃないですか」

「肯定したらもつと問題だろうが!!?…ともあれ悪かったな女心なんて解らねえんだよ俺は!!?」

「H A H A H A H A!!? 二人共仲が良いのはよおく理解<sup>わか</sup>ったけれども

う game start さ!!? 砲身を構えておくことをお勧めするよ!!?」

金剛はジャレ合っている様にしか聞こえない二人の会話を爽やかにスルーしてゲーム開始の合図を舞台裏のスタッフへと送る。それに応じてステージの各所に取り付けられた電飾が光り輝いでスモークが焚かれ、重々しい音と共に奥の扉が開いて中からガツシャガツシャと機械音が響いてくる。

「…ええいこの話は後だ!やるからには勝つぞ、那波!!?」

「承知しました豪徳寺先輩、頑張りましょうね…うふふ」

この名称し難きやり場の無い感情を筋肉ダルマ共に叩きつけてくれるわ!!?と怪気炎を上げる豪徳寺にひどく楽しそうに応じる千鶴。そんな二人の前に硬質な足音を響かせながら筋肉星人達は現れた。

「……………」

ステージ上は本物の戦場が如く砲弾が飛び交い、緊迫した空気の流れる空間となっていた。ステージの奥からは途切れ無く、巨大な二本の機械脚を動かして敵が豪徳寺達へと迫り来る。

「…豪徳寺先輩…三列分右へ、固まっています!!?」

「……………」

千鶴が、彼女にしては非常に珍しいことにはつきりと引き攣った表情で端的に下の豪徳寺へと指示を出し、自らもパネルを手早く操作して後列の敵へ狙いを定める。豪徳寺は何かを堪える様に押し殺した声で短く応じると素早い操作で横へスライド。指示された位置に着くと発射ボタンへ拳を振り上げる。

「なんで……………」

豪徳寺は視線の先、接近してくる異形の機械を睨み殺さんばかりに凝視し、叫ぶ様に言い放つと同時に発射ボタンへ拳を叩き下ろした。

「なんでビルダー共がヘンテコ機械の上でポージングキメてんだよなんの意味があんだボケエエエエエ!!?!!?」

言葉と共に放たれた鋼鉄の砲弾が、小さな円形ステージに機械の両足が付いているとしか表現しようの無い謎機械の上でダブルバ イセツプスをキメていた褐色の筋肉男の顔面に突き刺さり、血飛沫（鼻血）を上げさせながら吹き飛ばした。ゲームが始まってから早数分、息吐く間も無い筋肉の奔流への対処で余裕が無かったとはいえ、流石にスルー力にも限度があつたらしい。

そんな豪徳寺の魂の叫びに朗らかな調子で答えを返すのは当然、モストマスキュラーにポージングを変えた金剛である。

「H A H A H A！豪徳寺君、よくぞ訊いてくれた！！？あれこそは麻帆良工學部に頼み込んで製作して貰ったボディビルダー専用の移動機械、名付けて『ポージングリフト』さ！！？一定基準を超えた筋量<sup>バルク</sup>を持つ人物が搭乗した場合にのみ launch し、あのステージ上にて取ったポージングの種類に応じて移動を行うまさに夢の machine だ！！？」

「なんなんだその死ぬ程汎用性の無いクソマシンは！！？ほぼ間違いないくてめえらにしか使えねえじゃねえかよどれだけ深刻な馬鹿だ馬鹿共が！！？しかも態々専用に作らせときながら遅えぞこいつら！！？」

豪徳寺の言葉通り、筋肉ダルマ達の乗り込む？四脚メカの速度は精々が人間の早歩き程度であり、言うまでも無くこれならば自力で走った方が速いだろう。

「H A H A H A！それは今回のゲームの為に速度制限を設定してあるのさ。『ポージングリフト』は搭乗する者の筋量<sup>バルク</sup>、ポージングの level of beauty に応じてポージングを取った際の速度が上がる仕組みだね。僕が本気のポージングをキメれば時速200km 越えは造作も無いし、平部員達でも100km位は出るんだけど、それではゲームにならないだろう豪徳寺君？」

「ああそうだな如何でもいいこと聞いたわこの論理的な馬鹿が！！？」

したり顔で告げてくる金剛に怒鳴り返す豪徳寺。色々余裕の無さ過ぎる対応だが、豪徳寺 薫という男、少々価値観が特殊なだけで意外に根は常識的というか真面目な部分がある為に、実は理不尽な馬鹿に対する耐性は低めなのである。（筆頭の中村に関しては巻き込ま

れ過ぎて慣れた)

「あの…!!? 如何でもいいついでにお聞きしますが、金剛先輩!!?」

「うん? なにかな那波さん!」

豪徳寺が右端から急接近してきた筋肉ダルマの土手つ腹に砲弾を炸裂させているのを尻目に、千鶴は未だ引き攣り気味ながらも微笑みを取り戻して金剛へ呼び掛け、金剛は矢張り無意味にポーピングをサイドチェストに変更しながら応える。

「明らかに撃ち出している砲弾が実弾みたいなのですが、危なくは無いですか!!?」

そう、工学部の謎技術の所為か火薬の匂いや発射時の衝撃、轟音が一切感じられはしないが、先程から筋肉ダルマの群れに容赦無く炸裂しているのはどこをどう見ても海賊映画等で使用つかわれる様な火薬の炸裂で金属の砲弾を撃ち出す、旧式とはいえカノン砲の砲撃であった。言うまでも無く人体に当たれば爆裂四散、とまではいかないが余程打ち所が良くも無い限りは大体死んでしまうような代物だ、千鶴の心配は至極全うなものだったが……。

「HHHHHH!!? 心配してくれてありがとう那波さん、心優しい女性だね君は! b k a d、それは無用な気遣いというものさ! 我等ボディビルダーが鍛えているのは巷の weak-kneed

な男子達がモテようとして少しばかり筋トレをして身に付けた様な細マツチョ等とは一線を画するのだからね!!? 麻帆良ボディビル研の very hardな trainingの果てに身に付きし剛柔兼ね揃えた perfectな黄金の筋肉は、時に PVC materialの如く、時に tungstenの如く性質を変えあらゆる衝撃を無効化するのさ! だから遠慮なく筋肉星人達に砲撃を浴びせてくれたまえ那波さん、これは我がボディビル研の demonstration ionも兼ねているのだよ!!?」

「その通りです、部長ううう!!?」

「さあ遠慮なく!!? 遠慮なく撃ち込んでえ!!? 僕達の鋼の筋肉を、そんな豆鉄砲で破れはしないんだからねえ!!?」

筋肉至上主義者達からすれば余計なお世話でしかないらしい。

思い思いにポーズングを取りながら爽やかなドヤ顔で接近してくるボディビル研の部員達は皆一様にスキンヘッド&褐色肌にブーメラパンツ一丁なので、遠目に見ていると個人の判別が出来ずまるでクローン人間の様である。そのクローン筋肉共による余りに常識外れなその言葉に、千鶴は困惑したように眉根を寄せるが、

「構うことは無えぞ那波！こんな脳筋集団気遣うだけ時間と精神力の無駄だ無駄!!? いいから左翼辺りに展開してららしい馬鹿の群れの鼻先に砲弾ぶちかませ！音からして結構な数が居んだろ!!?」

豪徳寺のある意味気遣いの欠片も無い言葉に一度ガツクリと肩を落とし、暫らくしてからしようがないですね、とでも副音声の付きそうな苦笑を浮かべて砲門を言われた通り左翼に固まる筋肉ダルマ達へと向ける。

……こういう時、紳士的に気遣って貰えたらさぞかし素敵だと思わないでもないけれど……

……こうして気安く接してくれるのも、それはそれで嬉しいから困りものね……

「わかりました、豪徳寺先輩。張り切って行きましょう」

「おうよ!!? 何なら股間に当ててやれ股間に!!? 幾らお肉が増量しまくってようが流石に耐えられまい!!?」

「H A H A H A ! 豪徳寺君、女性の前で c r o t c h 発言は感心しないよ!!?」

「二ぬうううううん!!?!!?!!」

かくして、何やらDSな香りの漂う微笑みの千鶴と悪鬼羅刹の如き形相の豪徳寺による連携射撃は、急増とは思えない見事なコンビネーションで筋肉の群れを見事に撃退したのだった。

「H A H A H A H A !!? いやはや見事な

c o o r d i n a t i o n だったね二人共！こうまで完膚なきまでにやられては正に t a k e o n e , s h a t o f f t o s o m e b o d y と言うに相応しいね!!? これは初めに言っていた豪華景品、服飾部部长謹製のペアネックレスだよ!!? m o n e y に

換算するのは無粋な話だけれど、宝飾品の類いを使っていないとはいえ0が最低でも7つ付いて、上の数字は1では利かないらしいから大事にしてくれると嬉しいね!!?」

「あらあら、宜しいんですかこのようなものを頂いて?」

「ゲームの景品にしちや高価すぎねえか?……とはいえ良かったぜ、お前らにとつての豪華景品とか言つて筋トレマシンの高級プロテイン一年分とか出てこなくてよ……」

死屍累々とイイ笑顔を浮かべながら横たわる筋肉ダルマの群れを放置して、様々な意味で濃い空間から出て来た豪徳寺と千鶴は、自分の部員が軒並み薙ぎ倒されたというのに爽やかな笑顔を浮かべる金剛から、何かの花が咲き乱れている様子をモチーフとしたらしい大振りなネックレスを受け取っていた。

「にしても花のネックレスって、那波はともかく俺には厳しくねえか……?」

「いやいや豪徳寺君、なんでもこれは敢えて大振りなデザインにすることと花という女性向けの motif を使用したことによって、男女どちらに対しても違和感無く fashion に取り込める代物らしいよ。是非とも着けてみてくれたまえ!!?」

「いや俺は……」

「どうぞ、後ろを向いて下さい豪徳寺先輩」

「おい那波……」

「あら、とてもお似合いですわ豪徳寺先輩」

「全くだね! cast pearls before swine とはこのことだよー!」

「おいコラ肉ダルマ。英語は解らねえが今悪口言いやがったな?……まあいい、那波、お前も後ろ向け。着けてやるよ」

「え?……あの、私は自分で……」

「寄越せ」

「……………はい」

「お前こそよく似合うぜ那波。やっぱりこういうのは女の子が着けてねえとな」



「……ありがとうございます……」

「……？如何した、那波？」

「H A H A H A！中々豪徳寺君も、a guilty manだねえ  
!!？」

「じゃあな金剛、あまり言いたくは無えが中々楽しかったぜ」

「ありがとうございますございました金剛先輩。機会がありましたら、次は友人と遊びに来ますね」

「いやいやこちらこそ、二人がnice playをしてくれたお陰で良いpresentationになったよありがとう!!？」

ちなみに今年のまほら武道会には僕もparticipationするから宜しく頼むよ豪徳寺君！という、豪徳寺からすれば楽しみなながらもネギの事情を考えると気の重い台詞と共に金剛ことボデビル研の魔窟から別れを告げて、二人は祭りの空気を冷やかしつつ並んで歩く。

「少し早いが飯にするか？買い物巡り位ならまだ出来なくも無えが……」

「そうですねえ……」

豪徳寺の問い掛けに返事を返しながらも、千鶴は別れ際にこっそり金剛から告げられた言葉をなんとは無しに思い返していた。

『このネックレスのmotifになった花はプリムラ。非常に種類の多い花でね、品種や色によって様々なmeaning

を持つんだよ。プリムラ・シネンシスやポリアンサならば『永遠の愛情』や『無言の愛』、またプリムラ・ジュリアンなら『青春の喜びと悲しみ』というやや悲観的なイメージを持つんだ。……プリムラ全体の花言葉には『early youth (青春のはじめ)』『young love (青春の恋)』なんて意味合いがある。正に英名Primroseの如く美しく、また豪徳寺君との距離間を定めかねている今の君には相応しいflowerだと僕は思うね！  
……豪徳寺君は気難しい所があるけれど非常にnice guyだ！  
惹かれる自分を感じたならば、いっそ流れに身を委ねてpositi

veにアプローチを掛けてみてもいいと僕は思うよ!!? 何にせよ君も豪徳寺君もまだまだ adolescentだ! 後悔しない様にこの麻帆良祭を過ごして欲しいね!」

命短し恋せよ乙女、と言うじゃないか!!? と爽やかに締め括った金剛の分厚く巨大な存在感を思い出しつつ、千鶴はフ、と口元が緩むのを感じる。

……フイーリングを重視して、なんて如何にも博打めいて感じられるから、領けなかつた恋愛観だけれど……

もう少し気軽に、気楽に考えてみてもいいのかもしれない、と千鶴は思う。考えてみれば豪徳寺へモーションを掛ける様な事をしたきっかけは、何となくいいな、なんて軽い気持ちだった気もする。

言ってしまったえば千鶴にとって今回のデートは、豪徳寺がどんな男なのか確かめたい、というある意味お試し感覚の様なものであったが、千鶴はこれまでのふれ合いから後少しだけ、踏み込んでみても良いんじゃないかと考え始めていた。

「……波、おい那波?」

「……あつ、はい!」

そんなことをツラツラと考えていた千鶴は、自らに対して呼び掛けている豪徳寺の声によく気付いて、やや慌てて返事をする。

「大丈夫か? 此処らは随分人が多いからな、気分が悪いなら……」

「いえ、大丈夫です豪徳寺先輩、少し考え事をしていただけですから。心配をお掛けして申し訳ありません」

「そうか? ならいいけどよ……」

言いつつも若干眉根を寄せて、千鶴を心配気に見やる豪徳寺の様子を見て、千鶴は心の中に今日何度目かの浮き立つものを感じる。

……そうね……恋なんて頭で考えてするものでは無いし

……

……折角楽しい時間なんだから、単純に楽しめばいいのよね

……

クスリ、とアプローチめいたことは散々行っている割にいざ接するとなると頭の固い自らを軽く笑うと、千鶴はなるべく気軽な様子

に見えるよう、努めてさりげなさを装って豪徳寺の腕を取る。いきなりな千鶴の行動に目を白黒させる豪徳寺に、千鶴は微かに高鳴る鼓動を抑えながら微笑み掛ける。

「…とあ行きましよう、豪徳寺先輩？楽しいデートは始まったばかりですよ？」

6話 少年少女の恋模様 豪徳寺と千鶴その2

「フム……流石と言うべきか、世界全体の常識とは余りにも懸け離れた非常識振りを発揮してくれるネ。決して馬鹿にする意味で言うのでは無いが、天才の天敵は何時の世も馬鹿ということカ」

どう思うネ?と無数の画面に囲まれながら彼女ー超 鈴音は後方の一人と一体に軽い調子で尋ね掛けた。

「どうと言われましてもあれですよ、あの人達の行動の全部が全部超さんの計画において邪魔になっている訳でも無いですから何とも言えない、っていうのが正直な感想ですねー。現に『まほら武道会』の件なんかはほら、此方が動くまでも無くM&Aが進んでましたから、此方は主催者との交渉だけで済んだじゃ無いですか」

考え過ぎじゃ無いですかねー?と、ややサイズの大きい白衣を纏った丸眼鏡に三つ編みの少女ー葉加瀬 聡美は手元のタブレットに目を落としながら気の無い様子で返した。超はフム、と肯定とも否定とも取れない相槌を打つと、機械とケーブルに埋め尽くされた部屋の中央に座る無表情な少女ー否、女性型人造人間、先程は言葉を返さなかった絡繰 茶々丸へと再度問い掛ける。

「茶々丸はどう思うネ?」

「…申し訳ありません、超。私には 超の言う『馬鹿』がどの様な意味を持つのが理解出来ません。故に先程の質問にはお答えしかねます」

表情を動かさずに淡々と返してくる茶々丸の、あまりと言えばあまりな無機質的返答に、超は振り向かぬまま苦笑を浮かべる。

……さて、これは本来の歴史と比べて茶々丸の心は発達していないと見るべきか、それとも彼の影響で違う方面へ育っていると見るべきかネ……?」

超は自問し、直後にこんな適当な質問一つで判断出来るものでも無いとその無意味な思考を shut out してから超は質問の仕方を

変える。

「ならば茶々丸、何でも構わないヨ、彼らについて何か思う所は無いカ？ 全員に対してでも個人に対してでも、計画に関係有ることも無いことでも何でもいい。どうかナ？」

アバウトと言えばアバウト過ぎるそんな問いに茶々丸は暫し沈黙して何事かを思考する。ハカセ、要るカナ？ ああ、ありがとうございます、と超が容器から移したコーヒーを自らと葉加瀬へ用意するだけの時間を掛けた後僅かに顔を上げた茶々丸は、彼女にしては珍しく躊躇う様な素振りを見せながらも静かにそれを口にした。

「個体としての感想では無く希望となりますが……」

「ホウ、それは興味深いネ？」

「：強いて挙げるのならば、山下先輩の従者及びメイドとして今後駆動して行く未来を望みます」

「ぶふうっ!!?」

完全に予想外だったその台詞に、超と葉加瀬は揃って口にしていたコーヒーを噴き出した。幸いにも彼女らが使用しているパソコンやタブレットは彼女ら特製の代物であり、コーヒーの飛沫程度ものともしない防水性に優れてはいたが、そんな備品の些末時などこの時の二人からは抜け落ちていた。

「ちよちよちよ、茶々、茶々丸!!? それどういう意味で言ってるのちよつと!!?」

「ハカセ、落ち着くヨ。スマナイ茶々丸、何がどうしてそういう結論に至ったのか説明してくれないカ？」

動揺の余り手にしていたコーヒーカップから中身を床にぶち撒けつつ堰を切ったように問い掛ける葉加瀬を超はパソコン群の前から立ち上がって制し、ハンカチで口元と、序でに動揺からか額に浮かんだ汗を一拭いしてから茶々丸へ告げた。茶々丸は表情は変わらないまま僅かに首を傾げると、言葉にも若干ながら疑問を乗せて返答する。

「?、：了解しました。約三日と三時間二分三十二秒前において二人に話した山下先輩とマスターの間柄に関する話を覚えているでしょ

うか？」

「三日前：ああその話力。……成る程、言わんとすることは解たヨ茶々丸」

「え!?? 解ったんですか超さん!?? そりやあ私もあんなインパクトのある話忘れちゃいませんけど、どう繋がるかが今一理解出来ないんですけど!」

己が創造した言わば我が子に等しい茶々丸の非常に思わせぶりな発言に未だ混乱したままの葉加瀬に超が小さく息を吐いてから落ちて着くヨ、と再度声を掛け、コーヒーを淹れ直して葉加瀬に手渡しつつ、超は茶々丸へ確認する様に言葉を放つ。

「要するに茶々丸はエヴァンジェリンさんと山下さんが結ばれることを願う、という訳力」

「現時点において山下先輩が最もマスターの同伴として相応しいと判断しました」

「……ああ、山下先輩がエヴァンジェリンさんと上手く恋人：夫婦かな? になったら山下先輩はセカンドマスターとでも言うべき存在になるから、茶々丸は山下先輩の従者になる。だから山下先輩のメイド云々：つてこと? 茶々丸」

「はい」

端的に肯定の意を返してくる茶々丸に、葉加瀬は一気に脱力した様子でぐでりと傍らのテーブルに寄り掛かった。

「なんだもうビックリしたー：まさか人工知能が一足跳びで恋に至った、なんてよくあるSFストーリーがまかり間違つて展開したかと思つたよもう……：ていうかこんな誤解を与えかねない様な言語パターン組み込んだっけなー、言語アルゴリズムに則つて常に最適な解答を算出できる茶々丸に限つてこんな：いや学習サンプルの類型が極度に偏れば……いやでも……」

「ハカセハカセ? ……まあいい力、差し迫つた案件は無いしネ。なんにしても茶々丸、お前の創造に関わった者の一人としては喜ばしいが、エヴァンジェリンさんは山下さんを拒んでいた筈ネ。定めた主人<sup>あるし</sup>の意に反する様な発言になるが、いいの力ナ?」

愚痴る様に疑問を呟く中で明後日の方向に閃きを感じ、タブレットに別の画面を展開させてブツブツと何事かを呟きながら高速で打ち込みを始めた葉加瀬。超は幾度か呼び掛けるが、反応が返ってこない様子に嘆息すると茶々丸へ向き直り、揶揄う様にそう尋ねた。茶々丸の、一聞して主人や先輩の恋愛成就を願っている様に聞こえる先程の台詞には、彼女の女性型人造人間という性質に鑑みれば驚いて然るべき意味合いが込められているからだ。

SF作家アイザック・アシモフの小説において Three Laws of Robotics という概念が登場する。フランケンシュタイン・コンプレックスをテーマとした作中のロボット達への安全装置として設定される、人間への安全性、命令への服従、自己防衛がその内容だ。この概念は現在のロボット工学にも深い影響を与えている代物であり、最新鋭の工学技術（+魔法）を用いて創り出された世界最高峰と言っても過言で無い茶々丸に対しても、一部を改変、或いは細分化したプログラムが組み込まれている。

茶々丸は自らの意思を無視して主人と定めた対象へ盲目的に従う、といった様にはプログラミングされていない。しかし超や葉加瀬の知る限りで、茶々丸はエヴァンジェリンに提案や補足は行えど、命令に逆らったり意に添わぬ真似をしたことは一度も無い。そんな茶々丸が、主人の拒んだ男を傅く主人の一人として迎えたいなどと言うのだ。超が興味を抱くのも当然と言えよう。

茶々丸は超の問い掛けに、無表情ながらも困惑した様に小首を傾げ押し黙る。再び短くない時間の沈黙が流れるが、超は茶々丸を急かす様な真似はせずにニコニコと微笑みながら黙して待つ。やがて首の角度を戻した茶々丸は、尚も迷う様にその動作にぎこちなさを残しながらも超へと向き直り、はつきりと言葉を返す。

「…超。確かにマスターは山下先輩を受け入れてはいません。…然し、現状においてマスターを対等の立場で支えられる存在は、山下先輩を置いて他に存在しないと私は判断します」

「フム、ナギ・スプリングフィールドは駄目か？」

超は笑みを浮かべたまま、腕を組んで尋ねる。

「はい。ナギ・スプリングフィールドは以前にマスターを受け入れず、依然として拒んだままと記憶しています。またそれ以前の問題として、現在行方不明の人物に何か期待を抱くのは愚かなことかと」  
「確かにネ」

ピシヤリと言い切る茶々丸に笑みを苦笑へ変えて超は肯定した。

「しかし聞いた話ではよりもよって私の大会で闘い、決着と来たものダ。出来るカナ？山下さんニ」

「……可能性は低いかと。然し、私の判断は彼我の能力差を分析して数値を比べただけの机上の計算です。山下先輩を含め、あの方達の特異点、敵方に回った場合においての脅威は、数値として表せない部分にあるものかと」

「……フフフッ！」

茶々丸の言葉に超は笑声を溢し、愉快気に会話を締め括った。

「お前の口からそんな言葉を聞けて嬉しいヨ茶々丸。矢張りお前は成長していないのでは無く、私の知るお前とは異なるお前に成り行く最中なのダロウ。ならばお前に影響を与えたのは紛れもなく彼らダ。常識に縛られず諦念を打ち破り周りヲ無理矢理引つ張り上げル、得体の知れない力ヲ持ったお人好し……自分達との利益が一致した場合において、それを英雄と表す人がいるヨ、茶々丸」

樂し気に超は自分のパソコンへ向き直り、何事かを入力しながらポツリと呟く。

「……さて、貴方達は私の敵力味方カ。どうなるのカネ……<sup>イエン</sup>焰」

「ぬあああああああああああつ!!?!?!?」

「連打終了まで後三十八秒です、頑張つて下さいね豪徳寺先輩♪」

ズダダダダダダダツ!!?と豪徳寺の両掌が霞む程の速度で目の前の太鼓の形をした入力デバイスへと振り下ろされ、画面には F u l l h i t 一分三十二秒目の文字が踊る。その傍らで千鶴は



意外に手際の良い動きで、豪徳寺側の延々と続く黄色い連打コマンドに伴って流れてくる赤色、青色の時折風船形状、芋形状等が入り混じって流れてくる入力コマンドを見事に打ち漏らし無く入力していた。

筋肉ダルマ共の魔窟を出てから、二人はちよつとしたシヨツピングを経て、現在はゲーム制作部の主催する一大ゲームパークで音ゲーに興じていた。

「なん…なんだよこの、終わり無い連打コマンドはあ!!??もう…一分半は!!??…叩き続けてん、ぞお!!??」

「難易度で『鬼』を選ぶと!…この曲は最後のサビ迄の間奏が二倍に伸びてしまうんだそうです、よ!!??」

半ば以上人を止めていると称される豪徳寺の身体能力を持って尚、Best hitを保ち続けるには過酷過ぎる連打速度要求を前に、息も絶え絶えになりながらもそれでも途切れ途切れに悪態を吐く豪徳寺に、同じくこちらも絶え間無く押し寄せる膨大な数の入力コマンドを処理するのに必死な千鶴が、額に汗を浮かべながらも何処か楽し気に答えた。

『さあーっ今の所点数状況では歴代3位を叩き出している嵐の如きNew gamersは何処までポイントを稼げるかあ!!??』『鬼』難易度の難所、心臓破りの連打坂を見事Full hit状態のままラストパートに入れるかあ!!??』

「うおおおおおおおおお!!??」

「あらあら、何だか注目、されていますねっ!」

「知った事じゃ無えええええ!!??那波あつ最後の津波みてえな、二人同時の!…追いてこいよおっ!!??」

初参戦とは思えない二人のハイレベルなPlayに湧き上がる外野の喧騒の中、豪徳寺と千鶴はfinale<sup>終</sup>馬<sup>馬</sup>に向けて加速する。

「……なあ、同志よ……」

「……なんだ、同志……」

「誰もが心沸き立つこの麻帆良学園祭の活気溢れる世界の中、ああ

やってはしゃいでいるカップルを黙って物陰から眺めている我々は一体何なんだろうな……」

「言うな!!?……惨めな気持ちになるだろうが……!」

巨大なるゲームパークの中央人集りから約10mの距離を置いて物陰から監視及び盗撮を続けている○と団の面々は、揃いも揃って暗澹たる面持ちでボソボソと言葉を交わしていた。

女心を欠片も理解し得ないであろう軍艦頭の不良と如何にも良家のお嬢様然とした美少女という、コテコテの少女漫画世界の中でも無ければ到底上手く行かないであろう二人のデートは、多分な願望の混ざった非モテ集団の予測を裏切り順調に進んでいた。とは言っても、別に豪徳寺のエスコートが特別上手いものだったと言う訳では無い。傍目に見れば豪徳寺の先導は、千鶴に気を使う素振りこそ見せはするものの、如何にも言葉足らずであり不器用であり、恐らく世間一般に言う年頃の女学生を相手にしていたならば目も当てられない結果に終わったであろうことは想像に難くない。そういう意味ではしつ○団の面々は、其れ程根拠の無い予測を立てていた訳でも無い。

しかし豪徳寺の連れ合いは那波 千鶴。変わり者揃いの3-A内でもある意味一目置かれていた女傑とも言える存在であった。男性経験そのものは皆無にも関わらず、その感性は矢鱈酸いも甘いも噛み分けた大人のI a d y女に通ずるものがあり、上辺の容姿と言動に左右されずしっかりと豪徳寺の解り難い良い所を見出して、実に心地良き気に時に身を委ね、時に委ねられを繰り返していた。有り体に言うならば、二人の相性が良かったということなのだろう。

「糞……これでまだ昼食も済んでいないとはどういう拷問だ……」

「ああ……なんとというか楽しそうだな……」

「……俺も、あんな風に女の子と遊んでみたかった……な……」

「落ち着け同志達よ、段々素に戻ってきてきているぞ」

元々ネガティブの上無い動機で集まっているだけに、指を咥えてリア充の青春風景を見ている現状にテンションまで落ち始めてきた○と団である。白マスクの一人が胸の奥から湧き出てくる虚しさを飲み込みつつ士気高揚を図るが、効果は薄いようだ。

「もういい…今回は見逃してやるからとつとと終わりやがれ畜生め……」

「要領が良くしてお羨ましいことだ、男は所詮顔なのか……」

「俺は太っているんじゃない、骨太で元々太い体格なんだ…今時のチャラチャラした女共は外見しか見ようとしねえ……」

「……………う、むう……………」

……………いかな、同志達のダメージも限界に近い……………

いつそのこと何時もの様に突撃出来るものならば、突っ込んで豪徳寺に返り討ちに遭った方が何倍もマシだと男達は考える。しかしデートの邪魔をすれば巷で噂の岩どころか鉄柱ネジ曲げる中村の正しい拳、則ち正拳が炸裂する。結局の所黙って盗撮と監視を続ける他に選択肢は残されていないのである。

「…ああ、何しに生まれて来たんだ俺は……………ん？……………同志達よ、どうやら移動する様だ」

「漸くか……………」

「時間的に食事所だろう。一旦離れるとしようか」

周囲の観客から大歓声を浴びながら豪徳寺と千鶴が人混みを掻き分けて移動を始める。しつ○団が失意のドン底にいる間に複数のゲームをプレイし、時に観客の中から現れた挑戦者チャレンジャーを打ち負かしていた二人だが、時間帯が午後一時半を過ぎるに至り、流石に昼食へ向かうつもりのものであった。

「……………しかしあの娘はあのリーゼントの何がいいのだろうか……………」

「矢張り顔か。あの化石番長は見ての通り頭を下せば精悍なイケメンだからな」

「ああ見えて女には丁寧だからな、ギャップ萌えという奴か？」

「知らんし如何でもいい……………動くぞ」

「流石に少しはしやぎ過ぎましたね、付き合ってくれてありがとうございます  
ぎゃいます」

「気にすんな、俺も中々楽しかったからな。…しかしお前の台詞じや無いが本当乗りに乗っていたなお前は。実はゲームの類いとか好き

だったのか？」

大学の料理研究部が催している小洒落たレストランへ入った豪徳寺と千鶴。席に着いて注文を終え、人心地ついたという風情で軽く息を吐き、微笑みながら告げる千鶴に豪徳寺も口端をニヤリと持ち上げ返してから、予想以上の積極性を見せた千鶴の姿を思い返してふと尋ねる。すると千鶴は僅かにバツの悪そうな表情になり、気不味そうに言葉を紡ぐ。

「…いえ。あの様なゲームと名の付くものを触った事自体、殆ど初めてのことです」

「あん？」

豪徳寺は千鶴の言葉に首を傾げる。

千鶴のそれは初めての体験にしては矢鱈堂の入った動きではあったが、別に豪徳寺はその点に疑問を覚えた訳では無い。所詮はゲームであり、要領の良いものは何をやらせても少しコツさえ掴めばあの位の動きはするからだ。豪徳寺が首を傾げた理由は千鶴の如何にもきまり悪気な態度にである。

豪徳寺の怪訝そうな態度を察してか、千鶴は苦笑を浮かべながら説明を始める。

「すみません、己の痴態を思い返して、少々呆れを抱いたものですから。：私にあの様な奔放な振る舞いは似合わないとお思いではありませんか、豪徳寺先輩？」

千鶴の問いに、豪徳寺は顔を顰めると諫める様な言葉を紡いだ。

「あのなあ那波、折に触れて何回も言ってるだろうが。お前は幾ら外見がちつとばかし育つていようが齢十五の乙女だ、羽目を外して何が悪いんだよ？立ち振舞いに似合おうが似合わまいが、お前がやりたいならやっていいんだよ。それだけのことでお前を嘲る様な詰まらぬ奴は自分から縁を切っちゃえ。：どうせ嫌でも大人になるんだ、大っぴらにはしゃげるのなんぎ逆に現在いましか無え：なんて風に考えてみたらどうだよ、那波？」

この日何度目かになる『外見不相応』へのコンプレックスについての千鶴の言葉だったが、豪徳寺に同じ様な話を繰り返されることへの

苛立ちは無い。それだけ千鶴にとっては根の深い問題であり、それならば一朝一夕に知り合って間も無い男の言葉一つで簡単に覆る道理は無いと考えているからだ。

それでも、千鶴の弱音にも似た独白についてキツチリと豪徳寺は否定を送る。人における大概の悩み事に対して言えることだが、端から見れば些細な問題でも、当人の中で大袈裟に捉え、必要以上に思い悩む傾向は誰にでも多かれ少なかれある。千鶴のそれは根も葉も無い被害妄想の類いでは無いにしろ、他人の振る舞いに態々ケチを付けて悪意を振り撒く程大多数の人間は暇を持て余しても非、常識敵でも良心が無い訳でも無いのである。千鶴の状態は一言で言うならば気に過ぎというものだ。

しかし、千鶴は豪徳寺の言葉を受けて僅かに頬を緩めはするものの、その顔から完全に暗いものが消えはしなかった。

「……解ってはいるつもり、なのですけどね。幼少期から培った可愛気の無い猫被りは、簡単に覆る代物でも無いみたいです……」  
「……まあ、青春期間つてのは長い様で短い、それでもまだ時間はあるんだ。俺からすれば姉さん肌で面倒見の良い普段いっつものお前は嫌いじゃあ無えし、別に嫌々やっている訳じゃあお前も無いんだろうが？  
：時折羽目を外したくなるつてのは誰にでもあるこつた。今回はしやげたのは祭りの空気も手伝つてんだろうが、細かいことを気にしねえ俺の前だから、つて面もあると思うぜ」

だからよ、と豪徳寺は言葉を切つてズドン！と重く鈍い音を上げさせながら分厚い胸板を拳で叩き、少し驚いた様な顔の千鶴へ宣言する。

「息が詰まるなら俺に言え。ガス抜き位なは何時でも何処でもどんな時でも、サツと連れ出して、遊んでやるよ」

伊達にアウトローは気取つて無え、と豪徳寺は不敵に笑んでそう締め括つた。

……全く、この人は………

食事が運ばれて来て一旦会話が打ち切られ、デンと豪快に盛り付け

られた山盛りのご飯と刺身の丼物、『海山道楽』を、意外に丁寧な箸使いながらモシヤモシヤと凄まじい勢いで平らげている豪徳寺を見やりながら、千鶴は最前の会話を思い返して苦笑する。

仮にも人の数年越しの悩みに対して、随分簡単に言い切ってくれるものだ、とも思ったが、別に千鶴のことを適当に軽い考えであしらおうとしているわけでは無いのだろう。

それ位のこととは軽く成し遂げてみせると、自分に対して絶対の自信を持つからこそ、あつさりと言千鶴にそう告げられるのだ。自信過剰と言えばそれまでの話だし、根拠を示せと言われれば恐らく具体的な何かは出てはこないだろう。

それでも、いやだからこそ千鶴は、そんな風にゴチャゴチャと理詰めで考えずに自分を信じられる豪徳寺を羨ましく思った。

……男女の恋愛の相性は類似性か相補性 の関係が望ましい、なんて聞くけれど……本当なのかも知れないわね……

似た者同士や性格が真逆、正反対の対極的なカップルなどがうまくいき易いという、ヤンキーとお嬢様、ギャルと仕事人間の組み合わせに代表される、人間は自分が持っていないものを 持っている人に魅力を感じる心理傾向の一種を思い出しながら千鶴はクスクスと笑み溢す。

「おい、どうしたよ那波？早いところ食わねえと冷めるぞ」

「ええ、そうですね、失礼しました」

「いや謝ることじゃ無えけどよ……」

訝し気な豪徳寺の表情にまた溢れそうになる笑みを抑えて、千鶴は己の食事に箸をつけ始めつつ、益体も無い思考を及ぼせる。

……普段の格好の先輩をお父様に紹介したら、どんな反応が返ってくるかしら……

「……なあ、同志よ……」

「……なんだ、同志よ……」

「……楽しそうだな……」

「……ああ……」

「……何を、しているんだろうな……俺達は……」

食事を終え、何時の間にか自然に豪徳寺の腕を取って楽し気に話し、笑う千鶴。時折顔を顰めながらも同じく笑んで歩く豪徳寺。デートを始めた当初はぎこちない所もあった二人だが、今では周りの男女と比べても遜色無い、一組の立派なカップルであった。

そんな二人を尾け回すし〇と団の面々は、相も変わらずこの上無く低いテンションで沈んだ様子であったが、その空気には最前迄の妬み嫉みに満ちたものとは些か方向性の異なるものである。

「……なんて言うか……小さいな、俺達……」

「ああ……会話を聞いていて情けなくなってきたよ……」

「度量の違いか器の違いか……解らないけど何と無く理解わかったよ、なんで自分がモテないのか……」

「惨めな気分だな……凄く自分が卑小な存在に感じるぞ……」

元々が嫉妬の心を抑えられずにカップルを闇討ちする様な忍耐力の無い集団である。揃いも揃ってカップルをここまで長時間観察するなど彼らは行ったことが無かった。現実の恋愛とは楽しいことばかりとは限らない、千鶴の苦悩と豪徳寺の真摯にある種の尊さを見出した〇つと団の面々は、二人と比しての己らの所業に居た堪れないものを感じていた。

「もう……止めるか？軍艦頭はまだしも、心からデートを楽しんでいる様子のお嬢さんに悪い」

「だが……そんなことをすれば馬鹿から制裁を……」

「俺は……構わんよ。今迄のツケが回って来たとも思うさ……」

「……いいんだな？」

白マスクの一人が発した確認に、各々首を縦に振る。そうか、とマスクの下で微かに口端を曲げ、便宜上まとめ役を担っていた白マスクは解散を宣言する――

「……それでは同志達よ、これにて……」

「待て、同志よ。何やら様子がおかしいぞ」

寸前、一人が発した言葉に白マスク達は揃って豪徳寺と千鶴の方へ向き直る。

「……あれは!?？」

そこには、着崩した服装に鉄パイプな木刀で武装した、見るからにガラの悪そうな集団に半包围されている二人の姿があった。

「……なんだてめえら、遊んで欲しいなら余所へ行きやがれ。生憎こちとら女連れなんだよ」

豪徳寺は低く唸る様な声で周りのチンピラへ言い放つ。周囲を非、友好的な輩に囲まれつつも、千鶴が然程怯えを見せていない様子で無ければ豪徳寺の沸点をアツサリ越えていたであろうことを鑑みれば、チンピラ達は運が良かったと見るべきだろう。なにせ本物の悪魔につき最近攫われたばかりなのだ、元より肝の据わり方が一般女子中学生の比では無い千鶴からしてみれば、単なる粹がついているだけの一般人など脅威に値しなくて当然だ。

それでも実際に武力を持たない身としては不安なのか、僅かに表情を曇らせながら手に取っている豪徳寺の腕に込める力が強まる。

「……久方ぶりの御対面だつてのに随分なご挨拶じゃねえかよ、豪徳寺い？」

素っ気ないにも程がある豪徳寺の面倒臭そうな台詞に囲んでいるチンピラ達の殺気と怒気が一段階強くなる。そんな中で豪徳寺の正面に位置するチンピラ達が左右に分かれ、後ろから現れた、金髪を肩まで伸ばしたガタイの良い男が態とらしい猫撫で声で言い放つ。それなりに整った表情を怒りによって醜く歪ませていることを見ても、上辺だけの冷静さであることは明白である。

「……う、誰だてめえは、とは言わねえよ。集まってる頭の悪そうな顔々と祭り時の麻帆良なんてタイミングであからさまにチンピラ然とした振る舞いしてる物知らずっぷりと命知らずっぷりからして、余所からやってきた…多分俺がヤンチャしてた中学の頃に潰した族かなんかだろお前ら? 悪…いとも思わねえが、面あ覚えてねえのは本気だよ自意識過剰野郎」

最も豪徳寺からすれば脅威どころか文字通りの木偶の坊が人数分立っているに等しい、お話にならない雑魚集団である。外のチンピラ



複数程度に遅れを取っているはこの武道家限定での無法都市、M A H O R A において半日たりとも生きてはいられないのだから当然のことだ。故に馬鹿にしている所か相手にもしていないことを隠そうともせず無造作に吐き捨てる。

……チンピラ共がキレたら飛び上がって那波だけでも逃がすかな  
……

やれやれと溜息を吐くヤル気の無いことこの上ない豪徳寺であったが、当然敵対している側はそんな舐めた態度を取られて平常心でいられる訳も無い。

「ンだとゴラア!!?」

「調子こいてんじや無えぞウドの大木野郎があつ!!?」

「女連れて随分余裕じやねえかよ状況解つてんのか、ああ!?!?」

「五月蠅えぞでめえら!!?…相も変わらずナメた野郎だなあ豪徳寺。てめえから喧嘩売つといて面も覚えてませんるかあ?」

いきり立つチンピラ達を制して、リーダー格らしき金髪が亀裂の入った様な歪んだ表情で軋る様に呟く、最早溢れる怒気を隠そうもしていない。対する豪徳寺は安心しろ、とばかりに千鶴の背中をポン、と軽く叩きながらどうでも良さそうに返答する。

「るっせえなあ、俺は闘り合つて強かった奴の面は忘れて無えよ。つてことはお前ら雑魚だったつて事だろが?御礼参りに来たつてんならハツキリ言つてやる、話にならねえから回れ右して失せやがれ。こちとら見ての通りエスコート中なんぞな、お前らに構つてる暇は無え」

豪徳寺の言葉に、ブチンと金髪の聞こえる訳の無い、頭の血管が切れる音が響き渡った様にその場の面々は感じた。

「っ等だ時代錯誤の糞番カラがあああああああつ!!?!!?」

「「っつらあああ!!?」」

崩れた言葉を吐き出しながら真っ赤な顔を憤怒に染めて、一斉に四方八方から豪徳寺目掛けて襲い掛かるチンピラ達。

「……………ふう…」

豪徳寺は溜息混じりに右手へと気を集中させようとするが、

「豪徳寺先輩、逃げますよ!!?」

千鶴の台詞に伏せがちになっていた目を見開き、驚愕の表情で千鶴を見やる。

「……はあ!??」

「早く!!?」

思わず千鶴へ問い質そうとする豪徳寺だが、千鶴が一步も退かない、とでも言わんばかりの真剣な表情であるのに加えて、今の会話で迎撃のタイミングを逃してしまった点を踏まえ、豪徳寺は舌打ちすると素早く千鶴を抱え上げる。

「……掴まつてろよ!!?」

「っ、はい!!?」

一息に豪徳寺は千鶴を抱え上げたまま高さ三m、飛距離七m程の大跳躍によりチンピラ達を飛び越えて近場の平屋建ての建物へと着地する。豪徳寺はすぐ様千鶴を屋根へと下ろすと、怒ってこそいないものの眉根を寄せた表情で千鶴を諭しかかる。

「那波、心配すんな。あんな十把一からげのチンピラ共一発で伸して……」

「豪徳寺先輩」

豪徳寺の言葉を遮り、千鶴は足元へ群がって口々に喚き散らすチンピラ達も気にせず、激しくは無い、されど強い視線で豪徳寺を射抜く。思わず豪徳寺が続く言葉を飲み込んだのを尻目に、千鶴はハッキリとそう、口にした。

「豪徳寺先輩、教えて下さい。…先輩は今、何をなさっている最中ですか?」

「……それは……だけど那波……」

豪徳寺は千鶴の台詞を、折角のデート中に喧嘩騒ぎを起こすとは何事か、という咎め立ての意味に取って、それでも向こうが襲って来るんだからしょうがねえだろ、と言葉を返しかけてから、千鶴の言葉の意味に気付く。

豪徳寺は目を見開き、僅かに身体を揺らしてから片手で顔を覆い、深々とした溜息を吐く。無論、自らに対してだ。

「……そうだなあ。俺は、お前をエスコートしてる最中だったよ」「はい」

苦笑と呼ぶには苦みの強い、引き攣りの様な笑みを浮かべて豪徳寺が洩らすと、千鶴は表情を微笑みに変えて満足気に肯定した。

「向こうから絡んで来たとはいえ嘗ての自分自身のツケ。それも明らかに格下の雑魚相手に僕ちゃん強いでしょ？とばかりに女の前で大暴れ、か……確かに、無えなあ」

「そうですね……ふふつ、言ってしまうんですしたら、漢のする事じゃありませんよ？豪徳寺先輩」

千鶴が少しだけ悪戯っぽい表情に変わって告げたその言葉に、豪徳寺は呵々と大口を開けて笑い声を上げる。

「ははははは!!？そりやあ駄目だな、漢らしく無え俺なんざ死んだ方がマシってもんだ!!？…悪かったな、那波。自分で言い出したことだったのに、無下にするとこだったぜ」

「いいえ、寧あれだけで察して頂けたなら、寧ろ気分が良いものですよ」

上機嫌に笑い合う二人の耳に、ガタガタと耳触りな物音が響く。見れば自分達を無視して呑気に会話をしている豪徳寺と千鶴に業を煮やしてか、チンピラ達が建物の上へと這い上がって来るのが顔を向けた二人の目に入った。

「やれやれ……ヤンチャのツケを払ってやんのはまた今度、だな。今更聞き入れる連中じゃ無えだろうから、逃げるぞ那波」

「わかりました。…とはいえ、中々簡単に逃がしてくれなさそうですね?」

「まあな。……いざとなったら抱えて逃げるからな」

「あらあら、嬉しいですね。お姫様抱っこって密かに憧れだったんですよ?私」

目前に差し迫ろうとしているチンピラ達への不安や緊張を全く伺わせずに二人が手を繋いで逃走に移ろうとした、その時。

「せやあああああつ!!?」

「あ?…つ!!?、ぶあああああつ!!?」

二人の元へいち早く到達しようとしていたチンピラが、雄叫びと共に跳んできた人影の飛び蹴りを喰らい、濁った悲鳴を上げながら吹き飛んだ。

「……あん？」

「……あら？」

いきなりな展開にキョトンとする二人を尻目に、他のチンピラ達へも次々と高速で動く人影が襲来する。

「てめっ……!?？」

「口を閉じて頷かねば脳挫傷でくたばるぞチンピラアア!!？」

「ぐああっ!?？」

ある者は屋根に登ろうと上半身を縁に預けていたチンピラを見事なそり投げで地面に叩きつけ、

「ンだてめえ……!?？ぶはあ!?？」

「口を開く暇があるならば拳の一つでも振るってみたまえ」

ある者は屋根へ上がってきたばかりのチンピラに太い体軀から繰り出される張り手を顔面に決めて吹き飛ばし、

「つだ teme 殺つぞボゲエエエエベア!?？」

「そんな雑なパンチが当たるものかよ」

ある者は激昂して喚きながら振るわれたチンピラの拳に鮮やかなクロスカウンターを炸裂させて大地に沈めた。

「……!?？、なんだ、てめえらあ!!？邪魔すつと砂にすんぞ、あゝあゝ!?？」

呆気にとられて立ち竦む豪徳寺と千鶴を守る様に立ち塞がった複数の男達の異様な迫力に、リーダー格の金髪が顔に焦りを滲ませながらもドスの効いた声で吠える。

それに対して、その白マスクの集団は憎たらしい程余裕のある仕草で一斉に肩を竦め、何やら大仰なポーズを全員で決めると、高らかに宣言した。

「……愚昧の集よ、この二人へ危害を加えんとするならば、我々を倒してからにするがいい!!？」

ズバーン!!？と効果音の聞こえてきそうな白マスクの集団、そう。

言わずと知れたし〇と団であつた。

「…お前ら…何やってんだ？」

驚愕から立ち直った豪徳寺がジト目でツツコミを入れると、白マスクの面々が振り返り、矢鱈威勢の良い口調で言い放つ。

「早くそのお嬢さんを連れて行くがいい、元軍艦頭!!？」

「この場は我らに任せて先に行け!!？」

「貴様のことは如何でもいいが、綺麗な娘さんを悲しませてはいかんからな!!？」

「なあに心配は無用！我らは無敵のしつ〇団、嫉妬の心は父心よお!!？」

「誰がてめえらの心配なんぞするか阿呆共。普段なら寧ろてめえらこのチンピラ共に便乗して襲い掛かって来そうなクズの群れだろうが、どういう風の吹き回しだよ？」

猜疑心に満ちた豪徳寺の問い掛けに、白マスク達は自嘲する様な笑みを浮かべて（マスクで見えはしないが）、静かに語り出す。

「そうだな、我らのこれまでの所業を鑑みれば信用されぬのも無理はない、いや当然だろう」

「しかし番カラよ。いかな屑とて年中朝から晩まで屑のまま居る訳でも無いのだ。我々は今、そういう気分になっているのだよ」

「今回に限つては裏も何も無い。早くこの場を立ち去り、お嬢さんとデートを続けるがいい。我らのせめてもの罪滅ぼしだ」

「後ほど菓子折りでも持参して謝罪に行かせて貰おう。その場限りの勢い任せで反省した気分になっている訳では無いと証明する為にもな！」

「何を訳の解らん…待てよ、このタイミングの良さといい訳知り顔での語りといい、てめえらまさか覗いて…!!？」

真相に気付いたらしい豪徳寺が目を剥いて何事かを言いかけたが、そのタイミングで困惑から立ち直ったチンピラ達が怒りの表情で突っ込んで来る。

「さあ、行くのだ豪徳寺！このチンピラ共の相手は我らが受け持った!!？」

「憎たらしいがデートを満喫していたのだろうか！こんなことで詰まらんケチを付けるでない、行けい!!?」

正面に向き直り、各々構えを取りつつ叫ぶし〇とマスク達に、豪徳寺は顔を歪めて何やら唸っていたが、

「……豪徳寺先輩?ここは御言葉に甘えましょう」

「……………しょうがねえ…………」

千鶴の言葉に顔を上げ、徐に繋いだままだった手を引いて走り出す。

「てめえら後できつちり話付けつからな!!?」

「ありがとうございます、この御恩は忘れません!」

「無論のことだ元軍艦!!?我々は逃げも隠れもせん!!?」

「そのお気持ちだけで十二分に我らは満たされますよお優しいお嬢さん!!?」

去り行く二人に各々が言葉を投げ、未だ三十人は下らないチンピラ達をしつ〇マスクは迎え撃つ。

「「さあ!!?あの二人を追いかけたいのならば、我々を倒してからにするがいい!!?」」

「つめんじや無えぞ変態つ郎があああああ!!?!!?」

「……………はあ…はあ。……………地味に強かったな、このチンピラ共」

「全くだ。リーダー格らしきこの金髪に至っては未熟とはいえ気を使っておったし」

激戦の後、死屍累々という言葉が相応しい様子で地面に横たわるチンピラ達を背景に、ボロボロになった〇つと団は白目を剥いているリーダー格の金髪を踏み付けつつ言葉を交わしていた。

「やれやれ、割に合わんな正義の味方とは。広域指導員の連中を尊敬するよ」

「しかし、悪くない気分だ。そうだろう?」

嘆息する白マスクの一人に対して、ニヤリと笑った(見えないが)もう一人がそんなことを言う。

「……………そうだな、嫉妬に溢れ、リア充野郎に八つ当たりをしていた頃よ

りは、清々しい気分になったな」

「これしきのことです許されたとも生まれ変わったとも思わんが、一歩前進という所か」

なんだかんだで豪徳寺と千鶴を助ける方向に向かったし〇とマスク達だったが、人間そう簡単に変わるものではない。今でも彼らはリア充男子が憎いし、他の同志達を否定し切れはしない。それでも、今までの様に妬み嫉みを隠さずに通り魔の様な真似をする気にはなれなくなっていた。

「……あの<sup>中</sup>の変態<sup>村</sup>に制裁を喰らうかなあ……………」

「幾ら何でもあんまりだとは思いますが、覚悟の上でやったことだろうか？」

「……そうだな」

「俺、なんとかあの二人の制裁を生き延びたなら、彼女を作る為に頑張るんだ……」

「ほう、学生らしく健全な目標で何よりだ変態マスク共」

唐突に白マスク達の後方から響き渡った低く野太い声に、全員がビクーン！と電流が流れたかの様に一瞬痙攣し、カタカタと身体を震わせながらゆっくりと振り向く。

白マスク達の視線の先で佇んでいたのは、丸太の様な腕を巖の如き体軀の前で組み合わせ、ゴリラにも似た厳しい容貌の中目を細めて、お世辞にも友好的とは言い難い視線でし〇と団を射抜く、麻帆良学園における災害<sup>ヒューマンノイド</sup>の化身<sup>デイザスター</sup>広域指導員杜崎 義剛その人であった。

「……さて、この状況について何か申し開きはあるか？」

杜崎の静かな圧力が込められたその一言に、し〇とマスク達は一斉に土下座の姿勢を取ってから必死に弁解を始める。

「待ってくれ、いや、待って下さい杜崎先生!!? 我らは今回に限って非は無いのだ!!?」

「目撃情報を募ってくれ! 諸悪の根源はチンピラ共であり豪徳寺なのだ!!?」

「只でさえ軍艦頭と超絶変態からダブルコンボで制裁を喰らいそうなのに、この上暴虐<sup>アウトレイジ</sup>武人の軍隊殺人コンボなんて幾ら何でもあんまりだ!!?」

「御慈悲を、どうか御慈悲をおおお!!?」

「喧しいわ貴様ら!!?!!?」

徐々に喧騒と化していく○つと団を一喝で黙らせる杜崎。ビクリと震えて黙り込む白マスクの変態達を目にして、盛大な溜息と共に杜崎は肩を落とす。

：もう少しあらゆる方面について真面なやり方は出来んのか、この街の阿呆共は……………

普通にしているも厄介事を呼び込んでそれを更に傍迷惑な鎮圧方法で消し去りに掛かるバイオレンスがデフォルトの無法都市、MAHORAのトンデモぶりに暗澹としたものが腹の底辺りから湧き上がって来る様な錯覚を覚える杜崎だったが、いい加減に馬鹿の相手がウンザリだと思った所で目の前の惨状が消えて無くなりはないのである。

「……状況と通報者の証言からして貴様らに情状酌量の余地はあると認めてやる。今回は嚴重注意のみに留めてやるから伸びているチンピラ共の搬送を手伝うがいい」

苦虫を噛み潰した様な顔で唸る様に告げられた温情あるお言葉を聞いて、パツと顔を輝かせた(しっこいようだが見えない)しっ○団の面々は口々に噎び泣き、感謝を口にする。

「Sir Yes Sir!!? 杜崎大提督、直ぐに取り掛かるであります!!?」

「慈悲深き杜崎大明神に満腔の感謝を!!?」

「いやはや心がお広い、この様な海より深く山よりも高い果てしなき器を持つからこそあの様な美人の奥様を迎えられるのですなあ」

「その調子で普段の取り締まりにおいても僅かばかりの御心添えをお願いします—」

「見え見えのおべっかを使うなシリーズ人間の屑共!!? グダグダ喋くってないでさっさと働けい!!?」

「了解しました申し訳ありません!!?」

バネ仕掛けの人形の様に跳ね起きてチンピラ達を担ぎ上げ始めた白マスク達を見て、杜崎は再び嘆息して憎らしい程に晴れ渡った青空



を見上げた。

「やれやれ、馬鹿共が無茶をせんように格闘大会迄顔を出さねばならんとは、つくづく今年は厄介事の火種と火元に困らんな……」

「……よし、ここまで離れりや大丈夫だろ。那波、立てるか?」

「はい、問題ありません。…ふふつまるで映画のワンシーンみたいでしたね」

「劇場にしちやあキャストの一部が変態に過ぎるがなあ……あの野郎共が、後でギタギタにしてやるから覚悟しときやがれ……!」

「一応は助けて下さったのですから、程々にしてさしあげて下さいね?」

結局距離を稼ぐ為に千鶴を抱き上げて疾走した豪徳寺は、騒ぎが起きた場所から数ブロック離れた所で千鶴を降ろした。悪漢に追われてお姫様抱っこで男女が逃走などという、ある種ベタな状況に笑みこぼれる楽しい気な千鶴とまんまとストーリーキングされていた事実の顔を歪ませる不機嫌そうな豪徳寺が実に対称的である。

「わかったわかった……何にしても悪かったな、詰まらねえ因縁に巻き込んだ」

「お気になさらないで下さい、誰にでもヤンチャな時代はあるものですから。…とはいえ、豪徳寺先輩は今でもヤンチャ盛りなのかしら?」

「ぐっ!??……ぬう……」

コロコロと軽やかに笑う千鶴に物申したい豪徳寺だが、毎日毎日喧嘩三昧に近い日々を送っている身としては概ね事実その通りであるし、その所為で先程千鶴を巻き込んでしまったのも事実なので反論の余地は無かった。

「……仕方ねえだろうが。喧嘩、つつーか子ども地味た言い方になるが、強くなりたいたってのは最早俺の人生そのものと言っていいものなんだ。呆れられようが馬鹿にされようが、今更止められ無えし止める気も無いんだよ」

口にするにはどうにも面映く気恥ずかしい豪徳寺の想いであった

が、誤魔化しの一切無い正直なものだ。

「……………そう、ですか……………」

しかし、千鶴は豪徳寺の台詞を聞いてそれまでの笑みをふと曇らせたかと思うと、少しして囁くような小声でそう呟いて、何事か思案しているらしき表情のまま押し黙る。

「…いやな、那波？俺も年がら年中こんな風じゃ…結構あるかもしれないが、だからってそればかり考えている訳じゃ無えんだよ。勘違いしないで欲しいんだが……………」

「……………あ、いえ。違います豪徳寺先輩。確かに諸手を上げて賞賛出来る様な思考だとは思えませんが、殿方はそういうことが好きだとは知識として知ってはいますので。このことで豪徳寺先輩に悪感情を抱いたりした訳ではありません」

流星に仮にもデートの最中で女に大してする様な話じゃあ無かったか、と悔やんで思わず弁解地味た言い方になる豪徳寺だが、そんな豪徳寺を見て誤解に気付いた千鶴は、やや慌てた様子でそう告げる。

「……………ただ、理解わからないなあ、と思ったんです。所詮私は女ですから、殿方の考えなど理解出来なくて当然、と言われてしまえばそれまでののですが。……………馬鹿にするつもりは毛頭ありませんけれど、そこまで争い事に傾倒出来る豪徳寺先輩のお気持ち私にはよく、解らないんです。喧嘩なんて、痛くて辛いものだとしか私には思えませんか。……………豪徳寺先輩は、どうしてそんなにも強くなりたいと思うのですか？」

千鶴の問い掛けに対して、豪徳寺に戸惑いは無かった。唯、どう説明したらいいか解らないとでも言いたげに暫し豪徳寺は沈黙していたが、やがてポツリポツリと、言葉に出して自分の想いを形にするかの様にゆつくりと豪徳寺は語り出す。

「……………そう、だな……………お前の言う通り、男女の違いと言っちゃえばそれまでの話なんだろうな……………。…どんな男でも、素手スデ喧嘩ゴロ最強って響きに心惹かれない奴は居ないと思うんだ。こればかりは、説明しろと言われても上手く言葉に出来る気はしねえ……………」

只な、と豪徳寺は苦笑いの様な顔で千鶴を正面から見据え、自ら

の想いを吐露する。

「俺は、その憧れを現実にしようと踏み出したんだ。努力に努力を重ねても、一向に見えちゃ来ない、頂きに到達する為にな。お前の言う通り、痛くて辛くて、碌でもねえ思いばかり始終味わっていて、その癖見返りなんて時には僅か程も感じられない、割に合わねえ道さ。……なんでこんなことやってんだろうな、って、俺でも考えることはある」

でも、それでも憧れるんだよ、と豪徳寺は笑って言う。

「痛くても、辛くても。身に付けた力は誇らしくて、その力で誰かの為になれば、俺の努力は無駄じゃ無かったんだって、言葉に出来ない充足感を得られる。そんな人間の中で、トップに立てるなら一生を捧げてでもやる価値はあるって、俺は思えるんだ。……時代錯誤な考えだっつてのは百も承知だ。それでも俺は、強くなりたい。誰に何を言われようとも、この生き方を貫き通したいんだ。……この想い、理解<sup>わか</sup>るか、那波？」

語り終えた豪徳寺の言葉を受けて、一瞬迷う様な表情を浮かべた千鶴だったが、やがて力無く首を横に振り、言葉を返す。

「……すみません、豪徳寺先輩。私にはよく、理解<sup>わか</sup>りません」

千鶴の言葉を受けて、豪徳寺は僅かに寂しそうな表情を浮かべる。しかしそれを笑みで塗り込めた豪徳寺は、徐に一枚のチケットを懐から取り出し、千鶴へ告げる。

「……気にすんな、那波。おかしいのは俺の方で、正しいのはお前の方なんだ。……俺は口が達者な方じゃ無え。これ以上はお前に、上手く説明出来る気はしねえんだ。……渡そうかどうか迷ってたが、なんだかお前には、俺の、俺達のことを理解して貰いたくなっただ。……今日の日暮れ頃から、龍宮神社で格闘大会が行われる……お前に俺の、闘いぶりを見て欲しい。那波の趣味じゃ無えのは百も承知だ。……それでも、俺の闘いを見せれば、言葉よりも雄弁に、俺を伝えられる気がするんだ」

来てくれないか、と豪徳寺は千鶴にまほら武道会のチケットを差し出す。

千鶴は直ぐにそれを受け取らず、豪徳寺を真つ直ぐに見て問い掛ける。

「…私は、貴方を憎からず想っています。自惚れと思いたくはありませんが、貴方も同様に想っているとも」

貴方のことを、もつと知りたいんです、と千鶴は静かに告げる。

「……貴方は、私に貴方を見せてくれますか？」

これ以上無く真剣な顔での千鶴の問いに、豪徳寺は力強く頷く。

「…お前の知りたい、俺を見せると、約束する」

その言葉を聞いて、千鶴は僅かに表情を緩めると、笑顔で豪徳寺の差し出たチケットを受け取る。

「楽しみにしていますよ、豪徳寺先輩？」

「任せときな。最高に格好良い、俺を魅せてやるよ」

かくして各々の甘い一時は終わりを告げ、血で血を洗う、闘争の宴が幕を開ける。

まほら武道会の、幕開けだ。

7話 まほら武道会 予選（上）

其の場所は何とも重苦しく、凶々しい空気に満ちていた。

「はっはー……金にガメついてめえなら出場でると思つたよウツテイ・チャイ」

「No、ワタシミナニウイ、ヨバレルネ。ハンゲツ、トモダチヨ」

「…テメエとオトモダチ、になつた覚えは無えよ。単に俺は昨年割られたアゴの借りを返してやりてえだけだ」

「オー、イサマシイ？ユウノダカ？ナマクラonlyノガツテイツガーデ、ワタシニカツカ……タノシミタノシミ。コレカツ、ファイトマナーモラエルシ、マホラノtopハ、ステータスヨ。ギャラフェルネ、ワタシマケナイ」

見る者を不快にさせる、ニタニタした歪んだ笑みを浮かべながら、腰に半月刀シミターとマン打・ゴ用ーシ短ュ剣を履いた中肉中背の男一ノ刀剣甲冑部副部长 半月 疾也が傍らの、対照的に長身でニコニコと人の良い笑顔を浮かべたトランクス一丁姿の黒人一ノムエタイ部部长 ウツテイ・チャイと対話している。チャイは和かに返答こそしてはいるが、半月が発しているのは殺気にも似た敵愾心剥き出しの感情であり、お世辞にも二人は友好的な関係とは言えないだろう。

一種異様な関係と言えるかもしれないが、本日、この場所においてはこの程度の因縁めいたそれは珍しい者では無く、相当に目立つ格好をしている二人だが、此処においては人目を惹くどころか埋没しているに等しかった。

控えめに表現しても、其処には修羅が溢れていた。

「さてはて、楽しみですねえ。こんな規模で部長クラス、副部长クラスが集まるのは何時ぶりの話でしょうか？」

「バカレンジャーあが麻帆良五強に決定した極大乱闘以来じゃあ無いかなあ？まあまあ皆さん殺気立った容貌かおしちゃってまあ……」

三揃えのスーツ姿の如何にも紳士然、とした二十歳前後の青年一ノサバット部部长、常道 優也が重ねた年齢以上に悠然とした落ち着きを見せつつも、それ以上に心躍る想いを抑えきれ無いといった

様子で眩き、呆れた様な台詞を吐いて応じつつも好戦的な笑みを浮かべて身体を揺らすのは、どちらかというど細身の使い古した道着姿の常道と同年代らしき糸目が特徴の青年——テコンドー部部长 天越 修斗だ。

「……ふ、相も変わらさず醜い脇役達がこの秀丽なる美の化身にしてアフロディテの寵愛を受けし、戦場に咲く一輪の薔薇。：水仙華・エミール・雅美を引き立てる簀の子として散ろうとは、なんとも健気なことだ……路傍の石塊にも金剛石の輝きは理解出来るとみえるね……」

「聞きたくも無え遠回しな御託をグダグダグダ五月蠅えんだよ糞ナルシー野郎が。武器持ちでも良いとこトツプテンに入るかどうかも怪しい中堅野郎が大口叩くな哀れで聞いてらんねえから」

胸元の大きく開いた白シャツとピッタリした黒のスラックス、腰元に薔薇上の花卉の如き精緻な彫刻の施された籠ナックルガード拳のレイピアを備えた金髪碧眼の美丈夫——フェンシング部部长 水仙華・エミール・雅美が、その細面をキザったらしい動作と共に掌で覆い、舞台上の役者か何かの様な大袈裟に過ぎる口上を垂れる。それに対して心底ウンザリだという態度を隠そうともせず投げやりな口調でツッコむのは、荒んだ目付きの三白眼が目立つボサボサ頭の青年だった。櫂の棍や鎖分銅、十手等を背中や腰へ身に付け、腰には太刀を手挟んだ全身武装の古武道部部长 東雲 慶である。

「……僕に決闘を挑むならまず手袋を用意したまえよ、薄汚い口を利く汚れた野獣？」

「格好付けの御飾り剣術が喧嘩売るかよ身の程知らず。小綺麗な面の鼻っ柱から潰して更にイイ男にしてやろうか？」

「……はっはっは!!? 実に滾る顔付きの武士もののふが揃つとる様で何よりじゃなあ!!? 重い腰上げて出場て来た甲斐があつたつちゆうものよ、御主もそう思わんか拳螺!!?」

「……恥ずかしいから大きな声で呼ぶな……」

ズシーン!!? と、周りの人間が一瞬振り返る様な凄まじい地響きと共に四股を踏みつつ胴間声を張り上げるのは二mを優に超える長身以上に膨れ上がった横幅の目立つ、小山の様な廻し姿の大男——

相撲部部长 奉日本 豪臣であった。呼び掛けられて仏頂面でボソリと返答するのは、奉日本には及ばないが二m近い巨漢であり、簡素なシャツとズボンに身を包み、特徴の無い服装の中で唯一両手に着けたボクシンググローブが異彩を放つボクシング部部长 拳螺 一番だ。

「うははは相変わらずぶつきらぼうな男よ、そんなデカイ成りをしていながらのう!!?」

「……お前や金剛にデカイ成りなどと言われる筋合いは無い」

「そうその金剛よ!!? ふはは奴とは真正面から決着を着けねばなるまいと心残りだったのだ、今回上手く当たればよいがのう!!?……それにしてもこうして儂等が平幕の様に先入りしているというのに、随分と遅いでは無いか、横綱級バカレンジャーの土俵入りは」

「……俺に言われてもな……!……噂をすれば影、の様だぞ、奉日本」  
「ぬ!!?」

奉日本が拳螺の指す方向へ首を向けると、会場の入り口からある一団が入って来る所だった。

その顔触れを見た会場の面々の一部が、歓喜や嚇怒、憎悪や敵意等、正負種類の区別無い様々な感情を発露する。それは目に見えないながら圧倒的な圧力を感じさせる重プレッシャー圧の波となり、会場内から外の龍宮神社の境内まで拡がり、範囲内の人間を打ち据えた。

「……つ!!?」

「………なんや、この……!!?」

「あ………!!? ゆゆ、ゆえ……!!?」

「つ!!?………落ち着く、です、のどか……!!?」

「……ちよつと、洒落になんないわよこの連中……!!?」

「………お嬢様?」

「………大丈夫や、せつちゃん」

「アイヤ、相当いき立ってるアルね」

「正しくはいきり立つ、でまぎるよ古。……それにしても、此れ程でまぎるか、此処麻帆良の面々は………」





「いいか那波、此処に集まってる連中は頭のネジが最低三本は抜けてる様な馬鹿しか居ねえ。中には武道家精神とは程遠いゴロツキ紛いの奴も居るから、余り一人で行動すんなよ?」

「はい、解りました。じゃあ所用の際は豪徳寺先輩にお声を掛ければよろしいですね?」

「……………いいけどよ……………」

「はーはははははあ、豊作アル豊作アル!!?どうやら麻帆良のナンバーワンを決める時が来たみたいアルね!!?」

「恥ずかしいから燥ぐな阿呆。いいか、望み通り当たれば決着をつけてやるが、俺達がここに参加すると決めた当初の理由をくれぐれも忘れるなよ?」

中村の視線の先には戯れる二組の男女である。お仲が良ろしい様で結構な事で、と吐き捨ててから、今度は怖々と中村はその横を見る。

「…………………………」

「……………あ、あんなくせつちゃん……………」

「近衛ちゃん、きもちは解るけどそつとしくしか無いさ。あの状況はまんま僕らの男女逆だ、……………桜咲ちゃんはもう覚悟を決めてるし、辻は意地でも受け入れない。大会で譲れないもの秘めた武道家が二人……………勝負でしょう」

「ネタ走つとる場合や無いんや山下先輩く!!?てゆうか先輩もそんな飄々しとる場合や無いやんかく!??」

「ハハハゴメンね近衛ちゃん、いや静かにジツとしてると僕も弾けそうだからさあ。一種の開き直りだよ、うん」

オロオロと半ば泣きそうになりながら惚けた事を言う山下を詰る木乃香に何処か虚ろに笑う山下だった。

見れば普段よりも明らかに間隔の開いた距離感で佇む辻と刹那。辻は苦虫を噛み潰した様な表情だし、刹那は眉一つ動かさない無表情で淡々と装備の点検を行っている。何かあったーそれも良くない方のものがーのは明白であり、午前中から大会直前までデートをしていた事実を鑑みれば答えなど一つしか残されていないだろう。

龍宮神社に入る直前に合流した木乃香が尋ねても、『申し訳ありません、時が来たら話します』の一点張りで刹那は真面に話しはしないし、辻に至っては人の良い普段の態度が嘘の様に機嫌が悪く、とても話の聞ける状態では無かったのだ。木乃香が不安になるのも当たり前前の話だろう。

「……ていうか何でせつちゃんあない殺る気マンマンなん？辻先輩も殺気立つとるし、絶対ネギ君のお父さん関連の為だけであないになる訳無いやんか〜!!?そないに気負うて参加するもんや無いやろ〜!!?」

「どうどう近衛ちゃん、落ち着いて。いや気負わないどころか本気出さなきゃ危ないからね今回予選から。……まあ何にしても放つておけない状態なのは確かだけれど、間も無く予選が始まるんだ。悪いけど口を出してる時間も余裕も無いんだよ……だから豪徳寺や大豪院達も敢えて普通にしてるんだと思うしね。……これが終われば明日の本戦まで時間はまだある。それまでに必ず力になるから、今は見守っていてくれないかい、近衛ちゃん？」

「……………、う……………」

「……………あれだからなあオイ」

「な、何があつたんでしようか〜?」

「事情は聞いていますが、単に辻先輩が操られた云々の話を引きずっているだけとは思えませんしね……………」

「え……………じゃあ他になんだったっていうのよ?」

「さて、神ならぬ拙者らには窺い知れぬことでござるが、山下殿の意見が正しいでござろう。今は当初の目的の第一段階を果たすことに集中するべきでござる」

「…楓ちゃんにさんせーとして、その上でどうすんべ、これあ……………」

面倒臭ーなーさつさと始まりやいいのになー、と中村は内心でボヤきながら色々追い詰まっている二人の悪友を見て溜息を吐く。

……………山ちゃんの方は勝つにしろ負けんにしろ一応の決着は着くんだろうが、「はじめちゃんとせつたん明らかに拗れたべ。……………あの糞真面目野郎もしや操られたにせよ愛する者に刃を向ける様な男は君

に相応しく無い!!?…とか言っつてせつたんの告白拒否つたんじゃ無  
だろな……?」

そんな風にドンピシャに近いニアピン予想を立ててから如何  
にも有りそうだと再度深い溜息を吐いている中村へ近づく人影が  
あった。見れば中村だけで無くバカレンジャーの面々、3-Aの実力  
者である古や楓の元へも寄る影が認められた。

「あれ部長じゃん、へロー元気してます〜?」

「…ああ、絶好調だとも中村。お前を倒す為に以前から万端の用意を  
整えて来たのだからな……」

中村は目の前に佇む空手着を来たオールバックの良く似合う、  
鋭い目付きの青年に軽い調子で声を掛けるが、その青年――空手部部  
長 真隆 正樹は敵意に満ちた声音で攻撃色の伺える言葉を吐く。  
友好的な態度を示す気は欠片も無いようだ。

「ヨイヨイ部っ長おくん、何いきり立ってんのよ?雄々しく勃つのは  
我等が股間の息子様だけで充分でしょうが?」

「っ……!!?……中村、この際だからはつきり言わせて貰う。お前の、  
実力を身に付ける事に関しての求道者振りは一人の武道家として尊  
敬している。……しかしお前のその、どうしようも無く軟派で巫山戯  
た言動と、仮にも部に所属しているにも関わらず碌に顔を出さずに、  
後輩の指導等を全放棄する自分さえ良ければいいという独善的な部  
分が。……どうしようもない位に大嫌いだよ」

からかう様な中村の軽いおちよくり、額の血管に青筋を浮か  
べて激昂しかける真隆だが、一度深呼吸を行って怒気を抑え付ける  
と、隠し切れない敵意と侮蔑の伺える言葉にて中村へ宣言した。お前  
の事が大嫌いだと。

しかし、中村はそんな拒絶の言葉をそですか、という軽い頷き  
にてアッサリと受け止めてみせる。

「まああれっすよ。部長みてえな堅物と俺みてえのは合わねえんで  
しよ何処までも。まあぶっちゃけちつとは俺も悪いとは思ってんす  
よ、後輩共の件とか。けど俺手加減苦手ですし、何よりあれだ……強

くなる為に血反吐吐く覚悟も無え様なハンパな連中相手に構うのな  
んぞ時間の無駄だと思ふんすよねえ……」

別にクラブ活動にケチ付ける気は無いつすから、今後も部長の  
指導で仲良くやってりやいいじゃないっすか？と、中村は投げやりに  
言う。真隆は中村の言葉を聞いて静かに首を振り、最早戦意を隠そう  
ともせずに宣言する。

「…解ったもういい、確かに俺とお前は相容れないらしいな。なら単  
刀直入に言う。…フラフラして問題ばかり起こしてる幽霊部員が空  
手部最強なんてのが俺達は耐えられない。だから今回の大会で、俺が  
直々にお前を潰す」

「おっ！いいねえ部長、そういうわかり易い展開は好きよ〜」

鋭い眼光で睨み付けて来る真隆に対して、歯を剥き出した獰猛  
な笑みを中村は返した。

「……ふむ？それは拙者に対する戦線布告ということではよろしいので  
ござるかな、忍野先輩？」

「……ええ、その通りよ長瀬さん」

楓は目の前に立つ長身の、首元から足首までを覆う漆黒のボ  
ディースーツを着た、伶俐な印象を受ける冷たい美貌の女性――忍術部  
副部長 忍野 瀧姫を、それなり以上の驚きを持って見上げていた。

ケブラー繊維が織り込まれているという濡れた様な輝きを放  
つスーツは素肌に直接身に纏っているらしく、引き締まりながらも女  
性的な豊満な乳房や臀部のラインをくつきりと浮かび上がらせてい  
る。今も話している最中に重たげな双丘はユサリと艶かしく動き、な  
んとも言えず扇情的だ。そんな格好をしている本人は表情の変化が  
少ないクールな美人である為、服装とのギャップが一瞬異様な色気を  
発している。楓はその姿がクノイチというコンセプトに則つての一  
種制服に近いものだとして理解しているが、事情を知らない者からすれば  
単なる痴女である。そんな忍野と楓はそれ程親しい訳では無く、顔を  
合わせて幾らか話をしたことがある程度。故に楓は態々尾け狙われ  
る理由が解らなかつた。

「……ふむ、何故、と問うても?」

「……申し訳無いけれど教えられないわ。唯、部活関連で無く私個人の因縁である、とだけ言わせて貰うわね……」

迷惑だとは思いうけれど、喧嘩を買って貰うわ……、と言いつつ踵を返し、忍野は楓の元を去って行く。

「……うむ、訳が解らなくてござるなあ……」

楓は形の良い引き締まった尻を僅かに揺らしながら遠ざかる忍野を見て嘆息する。楓自身はストイックな性分であり、修業により鍛えた心身と技の数々を思う存分揮える機会に心躍らないと言えは嘘になる。故にこの手の挑戦も来る者は拒まないスタイルで此処まで来たし、ネギに協力する為の打倒偽物チキンオヤジはそれとして、強者と闘えることにワクワクしながら来たものであったが……

「拙者何か忍野嬢に悪いことをしたでござるかなあ……」

これである。知らぬ内に恨みを買っていたとなれば気になるし、それが自分と無関係とは言えない人間ならば多少ならずとも堪えるものなのであった。

「……忍足殿はいない様でござるし……明日にでも聞いてみるでござるかな?」

楓は軽く頬を叩いて気持ちを切り替える。何せ今日の相手の大半は最低でも外気、内気のどちらかを使い熟す超人集団、麻帆良武道系部活の部長、副部長の群れである。

「……最低でも、中村殿と当たるまでは負けたくないでござるな……」

「やあやあ、辻君元気……じゃあ無さそうだねー、どしたの怖い顔して?」

「辻 はじめ 一 えっ!!? 何時もの様に腑抜けた表情をしているかと思えば、漸く貴様も本力で我等と相対する気になったか!!?」

道着に刃を潰した薙刀一本を抱えた身軽な格好の太刀嵐と、元々女性にしては長身の身体に総身板金鎧スリーツァーマイを纏い、二m近くにまで巨大化した鎧塚がそれぞれ、強張った表情でベンチ刃潰しの日本刀に座って得物を点検していた辻へ言葉を投げ掛ける。辻は面倒臭そうな素振りを隠

そうともせずにごんざいな目付きで二人を見据え、ぶつきらぼうに返事を返す。

「…ああ、どうも太刀嵐先輩、鎧塚。元気そうで何よりです」

「そう言うそっちは何やら暗いねー。どしたのホントに、辻君らしく無いよ?」

太刀嵐は普段から考えられない程投げやりな辻の対応に目を白黒させている(重厚な面頬クローズドヘルム付き兜を被っている為に見えないがその様な素振り) 鎧塚を他所に、心配気に眉根を寄せて辻へ尋ねる。

しかし、太刀嵐の台詞に辻は顔を歪めて吐き捨てる様に言い放つ。

「らしく無いって……貴女が俺らしさの何を知ってるって言うんですか。…解った様なことを言わないで下さいよ」

そのどうにも棘の生えた辻の返答に、太刀嵐が何か言うよりも早く鎧塚がガギョリと鎧を鳴らしながら怒鳴り付ける。

「辻 はじめ ー! 曲がりなりにもこのユルフワ女は貴様を心配して言っているのだ! その様な返事の仕方は失礼だろうが!!?」

「……ねー彩華ちゃん。そんな風に氣遣ってくれるならユルフワ女呼ばわりも止めてよ。どっちかって言うとな私そっちの呼称の方がシヨックだよ」

「ぬ……!!? ……そ、それよりも私を下の名前で、しかもちゃんを付けて呼ぶな!!? 女々しい響きを氣に入っていないのだ!!?」

「ああん!!? それは大蛇なんていう仰々しい名前してる私への当てつけかこのデカ女ー!!?」

何時の間にか互いに心の柔らかい所をつつき合ってしまったらしく、辻をそっち除けで睨み合い始めた太刀嵐と鎧塚を見て、辻は僅かに表情から険が消え、力無い苦笑へ変わる。

そんな辻の変化を目敏く見咎めた太刀嵐が直前までの怒り顔をパツと笑顔に変え、勢いに任せて何事かを捲し立てかけた鎧塚の口元…は塞げないので面頬に平手を当てて黙らせ、辻に朗らかに話し掛ける。

「ヤホウ辻君、落ち着いたかい?」

「…すいませんでした。何処までも自業自得ではあるんですが、やり切れないものを感じてましてね……」

「……ふーん、まあいいや。何かあったのか、なんて聞かないよ。人間生きてりや何かしらあるもんだからねー、」

でもさ辻君、と太刀嵐は僅かに目を細めて尋ねる。

「まさかここまで来といてやる気ありませんー、適当にやって帰ります、なんて言わないよね？悪いけれど、そっちの事情がどうあれ私はリベンジに燃えてるんだからさー？」

「……心配無く。寧ろ半分はやり場の無い怒りを発散させる為に来た様なものでしてね。八つ当たりなのは重々承知の上ですが、やり過ぎでしまいかねないので注意して下さい」

辻の宣言に太刀嵐は何とも嬉しそうに顔を綻ばせ、先程から黙って会話を聞いていた鎧塚も哄笑して歓喜を表す。

「はははっー！いいねいいねえ。理由はどうあれ本気で来てくれるんなら文句は無いよ!!？」

「貴様にしては大きく出たな辻 はじめー!!？ならば私はその上で貴様を真っ向から打ち破り、貴様と貴様の剣道部を我等が傘下に加えて見せよう!!？」

呵々と高笑う二人を前に、辻は自分以外に聞き取れない様な小さい声で、ポツリと呟きを洩らす。

「……悪いな、桜咲。お前がその気なら、俺はお前相手でも容赦はしない」

「……やあ、エヴァさん」

「……よう、山下……」

その二人は喧騒の中、静かに会合を果たした。

「……予想以上に馬鹿が多いな、この都市は。正直舐めていたと言わざるを得んのだろうが、まさかお前はこいつらが私の戦力を多少削るなり解き明かすなりしてくれることを期待しちゃいまいな？」

エヴァンジェリンは初めて山下達と闘り合った時と同じ、身体にぴったりとしたボンテージコスチュームに身を包み、背中には裏地

が血のように朱い、漆黒のマントを羽織っていた。外見は歳幼い少女の些か過激な格好も、多種多様な仮装の煌めく麻帆良学園祭の中、尚異形の揃うこの会場内では不思議に相応しく見える。

「まさか。先輩方及び日夜修練に励んでいる同期後輩を貶すつもりは無いけれど、彼らは貴女に初めて遭った時の僕らより大体は下き。寧ろ勘を取り戻す良いウォーミングアップになってくれると思うけど？」

対する山下は、ピッタリとした首までを覆う、一枚繋ぎの袖無しフィットスーツの上から同材質の長手袋に、足元迄を覆い隠す黒皮で出来た袴の様な前垂付きの衣装を身に纏っていた。まるつきり格闘ゲームの怪しい武術使いとかがしていそうな、見栄えを重視した機能的とは余り言えない格好だ。

どちらも現実に即したとは到底思えない、不釣り合いや虚飾製とは一段階離れた所に有る服装センスである。

一般人が有り体に言うなら服の趣味が悪いと一蹴しそうなこの二人、実は感性が案外似通っているのかもしれない。

「フン、薄い希望に縫り付いている訳でも自棄になった訳でも無いよ。うで一先ず安心だ」

「いやまあ相応に気負いも緊張もしているけどねえ。今回はネギ君には悪いけれど、全体のしがらみ全部忘れて自分の為だけに動いてたから。……勝つも負けるも懸かっているのは己の望み唯それだけだ。ならば気取らず気取って行こうと思っせ。どうだい、イカしてるだろエヴァさん？」

「……ああ、悪くは無いセンスだ」

フンと鼻を鳴らしながらも、至って馬鹿にしたり皮肉気な様子は欠片も見せずにエヴァンジェリンは頷く。

「……………、退く気は無いな？」

「何を今更」

「ならば、いい」

二人は短く言葉を交わし、やがて一方は踵を返す。

その場に残ったもう一方――山下が、傍目にはボンヤリとエ



ヴァンジエリンの小さな背中を目で追っていると、後方から近付く大小の影がある。気配を感じて振り返った山下は、其処に立つ物影二体を見て有るか無いかの身体の緊張を緩めた。

「やあ、零さん、茶々ちゃん」

「ヨウ山下、応援二来テヤツタゼ」

「こんばんは、山下先輩」

小悪魔風の仮装衣装に身を包んだチャチャゼロが制服姿の茶々丸に抱えられて小さな手を振っている。外見こそ可愛らしいが、その実態は何百何千という主人の敵対者を手に持つ刃で切り刻んで各世を歩み、遂には仮初の生命いのちを持つに至った筋金入りの殺戮人形キリングドールだ。人やものはつくづく見かけによらないよなあ、と内心山下が思いつつも、先程の気になる発言を問い質す。

「あれあれ零さん、零さんはエヴァさんの相棒パートナーなんだから、エヴァさんの応援をしなくていいのかい？」

「イインダヨ、前二モ言ツタダロガ。俺アドツチカツテト才前ノ意見ニ賛成ダツテヨ。俺ハ人形ダガゴ主人ト一緒ニ、酸イモ甘イモソレナリニ噛ミ分ケテンダ。ゴ主人第一主義ノ妹達ト違ツテ、ゴ主人ガ自分デ選ンダ以上、ドウナロウガ自分デ選ンダ道ダ、ツテコトデ諦メハ付クゼ。俺ハ唯追イテクダケダカラナ」

ソレデモ、とチャチャゼロは変わらぬ表情の中、心なしか柔らかい響きを持っている様に感じる声音でチャチャゼロは締め括る。

「ドウセナラ幸イナ方ガ良イ、ナンテノハ当リ前ノ話ダロ？」

「……………だねえ……………」

マア才前ガ幸セニ出来ルツツウ保証モ無エ نداケドヨ、とケラケラ笑って混ぜっ返すチャチャゼロに山下が苦笑していると、それまで黙って話を聞いていた茶々丸が一步進み出て、姉とは方向性の違う無表情の中に確かな真摯の光を湛えさせながら山下に申し出る。

「山下先輩。私や姉さんは立場上公然と山下先輩を応援することは出来ません。また正直に申し上げますが、マスターと山下先輩が戦闘を行った場合において、山下先輩が勝利する確率は極めて低いと言わざるを得ません」

「うわあはつきり言うねえ茶々ちゃん」

「悪気ハ無エンダロガ正直ナ末妹デ悪イナ山下」

ザツクリと斬り込み、ぶっちゃけた茶々丸の台詞にガツクリと首を垂れる山下と、全く悪いとは思っていなさそうな雰囲気でケケケと笑うチャチャゼロ。しかし茶々丸は一人と一体の反応リアクションを意に介さず、続く言葉を口にする。

「しかし、マスターも山下先輩も、勝算の有無等を計算して雌雄を決するので無い以上は、私の外面的観察要因に基づいた予想等不用にして無意味な空論なのでしよう。……私はガイノイドです。山下先輩の勝利を祈る行為に対して、意味を見出すことが未だ出来ない人ならぬこの身であります。感情を交えぬ論理の機械として有る身だからこそ、創造主の一人にして主君たるマスターに絶対の忠誠を捧げるモノ故に、私は主君の幸いを望みます」

意味の理解わからぬ祈りを貴方に捧げる不全な行為をお許し下さい、と頭を下げる茶々丸に、山下とチャチャゼロは顔を見合わせた後、同時に愉快気な笑い声を周囲に響かせた。

「……………う……………」

「ケケケケケ、悪イナ妹ヨ。才前ノ拙工意思ヲ嘲笑ワラツタ訳ジャ無工、許セヤ？」

「うんうんその通り、笑うべきで無い場面で笑ったのは謝るよ。……茶々ちゃん、自分をそんなに卑下して想いを口にする必要なんて無いよ。自覚は無いのかもしれないけど、君には確かに自我が目覚めている。主君エヴァさんの命に反しながらも、主君エヴァさんの幸いを望むその姿が何よりの証拠だ。……承ったよ。これでますます、敗まけられなくなったねえ」

山下の言葉に、僅かだが目を見開く茶々丸と、そんな末妹を見て笑うチャチャゼロを見て、山下は決意を新たにしている。

……貴女に勝って、貴女を幸せにしてみせるよ……エヴァさん……………

「桜咲く!!?」

「おおい、桜咲!!?」

「……副部長、何故此処にいらつしやるのですか？」

息急き切つて面白い格好の危ない男達、(少数の女)を掻き分けながら現れた剣道部の副部長、Sを見て、固い表情で押し黙り、待合席に腰掛けていた刹那は僅かに驚いた様子で目を軽く見開いた。

「どうもこうも無いよ！あんなことになつちやつたから上手くデートをシメられるか心配だったけれど、部長と桜咲にバレた以上は尾けて行く訳にもいかないし!!？」

「それでヤキモキしてたら案の定明らかにお前ら雰囲気おかしいじゃん！一体どうしたんだよ、出場でとは聞いてたけれどそこまで桜咲と部長が殺気立ってるのもおかしいし!!？二人の性格上喧嘩別れなんて無いとは思うが、何かしら拗れたんだつたら俺達一同が覗きの詫びも兼ねて誠心誠意仲直りのお膳立てを……!!？」「先輩達、宜しいですか？」

副部長(男)の言葉を静かに遮り、刹那は言葉を放った。いつそ穏やかとすら言える刹那の言動に、しかし不穏な何かを感じた副部長、Sは言葉を呑み込み、続く台詞を待つ。

「私、辻部長のことが好きなんです」

と、周囲まわりからすれば周知の、しかし本人達の口から周りに暴露されることはまず無いだろうと思われていた事実の突然過ぎるカミングアウト  
告 白に、副部長、Sは目を白黒させた。

「…でも、理解していなかっただです。好きっていう感情がどういふものなのか。……好きな人が、隣に居ないとどんな気持ちになつてしまうのか。……私は全く、理解わかつていなかっただ。あれだけ自信の欠片も無いような醜態を見せていながら、辻部長は私以外に振り向きはしない、なんてこの何処かで考えてでもいたんですかね？」

なんとも傲慢で、恥ずかしい話です、と刹那は苦笑しているが、何やら先程から発せられている得体の知れない迫力に副部長、Sは全く笑えない。

「……いやあの桜咲……？」

「……ああ、すみません副部長。要領を得ない話ばかりベラベラと不躰でしたね、申し訳ありません」

「…い、いや、愚痴くらいなら幾らでも聞くけどな……？」

目からハイライトが消えている等という解り易い変化は起こっていないが、明らかに現在の刹那いまはおかしい。そして、その原因はどうも告白したのかする前にそれとなく拒否されたのかは判らないが、どうも刹那が辻にフラれたことにあると副部長、Sは結論付けた。

「……え〜何で？何で上手く行かないわけ本当に？凡百の何が気に入って付き合いだしたかもわかんないモブカップルなら兎も角部長と桜咲だよ？どうチョツカイ出しても結局は上手く行きそうだからこそ安心してイジってたのに……」

「解らん、解らんが口振りからして部長がフツたっぽいのは事実らしい。……あの部長が他に好いてる女が居るなんてことはほぼあり得ねえし、億が一そうだったとしてそれを黙ったまま他の女と逢引き出来る様なクソ根性は絶対にあの部長には無え。つまりはほぼ間違いない二人は相思相愛だが、部長の方で何かしらやむを得ない事情があつて桜咲をフツた……つて事になるのか……？」

副部長（男）は自分で言いながら自信が無くなって来て語尾を濁す。そもそも付き合えない何らかの理由が有るのならば、デートに行くよりもっと前の段階から交際を深めない様に立ち回るのが普通の考えである。ならば考え違いを起こす程の何か辻には有るということになるのだろうか、ならばそれは何だという話に戻る。

「……何だか凹むねえ、マイダーリン……」

「だな……そりゃあ無二の親友だなんて自惚れてたつもりは無えけど、普通以上に仲良くしていたつもりだったのにな、マイハニー……」

ふう、と二人揃って辻の内心を察することの出来ない不甲斐なさに溜息を吐く副部長、S。そんな二人を心無し柔らかくなった目で見やりながら、刹那は言葉を投げ掛ける。

「…私はおろか、一番付き合いの長いであろう中村先輩達にも、はつきりとは打ち明けていなかった話らしいですから。きつと誰であろうと踏み入らせるつもりは無かった話なんだと思います。…だから私を、あの人は拒みました。自分の為で無く、私を氣遣つて。……本当

に、お人好しですよ、黙っていれば嫌われるかもしれない危険性を負わなくて済むでしょうに」

刹那の言葉に、今だ話が見えないながらも副部長、Sは頷く。断片的に刹那から告げられた話が本当ならば、それは正しくあの男らしいと。

「……私は、どうやらフラれて諦めが付く程物分かりの良い女では無かったようです。到底褒められた方法ではありませんが、あの人と添い遂げる為に私は此処に居ます。：私の気が違つたと、見ていて思われるかもしれませんが。協力して欲しいとは言いません、嫌悪されることも覚悟の上です。：ですがどうか、私の行いを止めないで下さい。お願いします、陽愛先輩、優月先輩」

そう言つて深々と頭を下げる刹那の姿に副部長、S―陽愛月求と優月 陽求は一瞬顔を見合わせてから破顔する。そうして二人は刹那の両肩にそれぞれ手を置いて身体を引き起こし、顔を上げさせられて少し驚いた様子の刹那に視線を合わせて告げた。

「大丈夫だよ桜咲、あんたが何をしたつて私達は味方で居てあげるから。水臭いこと言つてないで、私達に出来ることがあるなら何でも言いなさい」

「お前さんの男は部長以外にあり得んさ。昼間のゴスロリ女が何なのかは知らんが、お前の気持ちしが固まつてるんなら何も問題無い。恋する乙女は無敵だし、何したつて許されんだ。無理を承知で突つ走れ、大したことが出来るとは思えんが、援護射撃と尻拭い位はやってやるから」

だから単刀直入に言いなさい、やがれ、と声を合わせて副部長、Sは言い放つ。

「俺は（私は）何をすればいい？」

刹那は暫し固まつていたが、やがて頬を緩ませてもう一度頭を下げると、ありがとうございます、と一言礼を告げてからその言葉を口にした。

「私と辻部長が予選、または本選で闘うことが出来る様に、お力を貸して下さい」

それぞれが負けられない想いを胸に秘め、まほら武道会はある少女の宣言にて幕を開ける。

そして、その内容は魔法使い達にとって到底無視出来ないものを秘めていた。故に……

「……呪文詠唱の禁止つてまあ、ブツコンできたなああのチャイナ娘……」

「何を暢気に構えているの篠村!!?これは公に存在を知られてはならない私達魔法使いに対しての重大な背信行為であり、超 鈴音の拘束は急を要するわ!!?ボウつとしていないで準備なさい!!?」

何処か遠い目で明後日の方向を見やりながら現実逃避気味に呟く篠村と、魔法の存在の暴露に繋がりがかねない超の発言に憤り、怪気炎を上げながら今にも会場奥へ踏み込まんとしている高音の姿が此処にあった。

「お、おとおお姉様!!?お、おちちゆ、おちちゆいて……!!?」

「先ずお前が落ち着けや佐倉。高音よ、上の指示を待たずしてお前らだけで突っ込んだら独断専行つてことで却つて処罰されんじや無えか?一先ずぬらりひよ……学園長辺りに報告して指示を仰いだらどうよ?」

自身も突発的な異常事態にテンパっているのかわたわたと手を振り回しながら盛大に嘯みまくっている愛衣に声を掛けてから高音を宥めに掛かるのは観客席で木乃香達と観戦に移る、と言う千鶴を送つてから超の宣言を聞き、色々と余裕の無い悪友達に代わつて篠村達の様子を見に来た豪徳寺である。

「……そーそー高音。場合によつちや俺ら下つ端の出る幕じや無くなつかもしれないんだから落ち着こうぜ?今電話してみつからさあ」

「……つ!!?……早急な対応が必要なのは事実よ……早くしなさい、篠村」

ハア、と一際大きな溜息を吐いてから現実に帰還した篠村の、携帯電話を取り出しつつの執り成しに、高音は顔を真っ赤にして何事かを捲し立てかける。が、感情的になって喚き立てても事態は好転しない、と寸前で自制して数度深呼吸を行い、やがて低い声にて篠村へ告げた。

「はいよ……にしてもホント何考えてんだろなああのチャイナ？」

「や、やっぱり再三私達に対する調査行為を失敗したことに対する腹いせでしょうか？」

「……超 鈴音は極めて明晰な頭脳を持つ優れた超科学の担い手よ、私達はおろかベテランの魔法先生の方々でも彼女の対応には手を焼いたらしいわ。……そんな彼女が今更私怨如きで此れ程大掛かりな騒ぎを始めるとは考え難い以上、兼ねてから魔法の現在いまの扱いに思う所があつて、今回辣腕を振るっていると考えるのが妥当でしょうね……」

手早くダイヤルボタンを押しながらウンザリした声音で篠村が呟く。愛衣が漸く呼吸を落ち着けながら推測を口にするが、高音が口元に手を当てながら熟考した後、それを否定する。

「……何にしろ今大豪院が古の奴を連れて超の所へすっ飛んでった。まさか正直に全てを話すとは思えねえが、事実上敵対してゐてえなお前らよりは穩便に話し合いに持ち込めるだろうよ。ともあれ指示を待とうや」

考え込んでいる三人組に対して、それ以上に明確な知識を持つ筈も無い豪徳寺は当然意見を持ち得なかったが、開会宣言の終了と同時に突っ込んで行った友人達の事を話して思考を止めに掛かる。下手の考え休むに似たりでは無いが、持ち得る情報が余りにも少ない現状推測を立てても確認のしようが無いのだ。サボりたい訳では無いが、豪徳寺が元から向いていない頭脳労働を拒否したくなるのも一概に責められないだろう。

「……貴方も少しは危機感を……」

「……えええ!?？」

渋い顔で豪徳寺に苦言を呈しようとした高音の声が、学園の上

層部相手に通話を行っていた篠村が上げた驚愕の悲鳴が遮った。

「…篠村？」

「ど、どうされましたか、お兄様!?？」

高音と愛衣が驚いて声を掛けるが、手を上げて篠村は二人を制止して会話を続ける。

「はい…はい…いやしかし…それは…解りました、やらせて頂きます…はい、では」

ブツリ、と通話停止ボタンを押した途端に脱力した篠村は、何事かと詰め寄る高音と愛衣に対してやさぐれた声で呻く様に告げた。

「…どーも近接戦そこそこでしか無い俺と如何あつてもコツソリ行えないお前と、そもそも近接戦を想定した訓練をしていない愛衣は役に立てなそうだから参加しねえ予定だったのに…：：：b a d n e w s だぜ高音。愛衣を除いた俺とお前、まほら武道会参加が洩れなく確定だ」

「…はあ!?？」

「え、えええ!?？」

「…超展開だな、おい…」

揃って驚愕の悲鳴を上げる高音と愛衣を他所に、渋い表情で豪徳寺は麻帆良学園の方角を睨み付けた。

「…どういふことだ、と言われてもネ。開会宣言で言たことが私の望みであり目標ヨ。…と言っても納得してくれないのだろうネ、大豪院」

「当然だ」

「…超…」

龍宮神社の本殿と拝殿を繋ぐ間の通路にて、相も変わらず人を食ったような笑みを浮かべている超の目前に、大豪院と古は佇み、超を問い詰めていた。その理由は、つい先程のまほら武道会開会宣言にての言葉である。

『表、裏の世界を問わず私は最強を確かめたい』

『大会における禁止事項は銃火器の使用、及び呪文詠唱の禁止』



超はハッキリと世間に知られ得ぬ魔法の存在を仄めかしたのだ、それも一般人ならぬ一パソ人とでも言うべき半人外とはいえ、超の言う裏の世界に関わり無き表の世界の住人達に。

「……超。私にむつかしいことはよくわかんないアル。前から超のそういう頭を使てる方面では敵うと思ったことは無いから、聞いてもあんまり理解は出来ないと思うアルけど……」

大豪院の傍らに控えていた古が、彼女にしては珍しく遠慮がちな、言い換えれば気弱な様子でオズオズと問い掛ける。

「……魔法が秘密にされてるっていうのは私も知てるアル。それも、魔法使いの先生達や、篠村や高音みたいな生徒が、とても頑張つて秘密を保てるつて聞いているアル。……超のしてることは、大勢の人の努力を無にする……義に反することじゃ無いアルか？」

古は伏せがちになつていた面を上げ、超の顔を揺れる瞳で、されど真つ直ぐに見据える。

「言てる事が的外れで、超を侮辱してしまたなら臥して謝るアル。だから超……教えて欲しいアル。超のしてる事は、悪いことアルか……？」

言葉を終えても古は超から視線を逸らさない。ただどの様な感情からか、強く握り締めた大豪院の功夫服の裾の手に、大豪院は僅かに視線を落としてから一度だけ古の頭を軽く撫でて、同じ様に超を深く、静かな力強い視線で捉えた。

「……そんな目で睨まないで欲しいネ、二人共。まるで私が極悪人の様ヨ？」

「超、茶化すな」

苦笑しながら戯けた様に肩を竦める超を、大豪院が僅かに目を細めつつ些か語調を荒げてピシヤリと制した。

「おお怖いネ……ふむ、些か難しい質問ヨ、古。私は私の目的の為、信念に基づいて行動してイル。そして私は正しいことをしようとしてるつもりヨ？……しかし古、絶対的な正しさなんてものが空想の世界でしか有り得ない様ニ、私のしようとしてる事が全ての人のにとって正しく益するものでは無いという事ヨ」

「…つまり」

超の言葉の後を引き継ぐ様に大豪院は言葉を放つ。

「お前の計画は絶対多数的に多くの人間にとって益するものである為に多数方式において正しいものであり、それによって不利益を被る者達がこの学園の魔法使い達……という認識で良いのか？」

「おお、流石は大豪院ネ、少々頭の残念な隣の我が<sup>ボン</sup>朋友<sup>ヨウ</sup>と違って頭の回転が早いヨ」

「世辞は要らん、肯定とみなすぞ」

「というか誰が残念頭アルか超!!？」

シリアスな表情浮かべてる大豪院の横で両腕を振り上げてウガー!!?と古が憤慨しているが、超も大豪院もそれを黙殺する。

「そうネ……大体において正解とっておこうカ、大豪院。唯私の計画において不利益を被る人達においても私は充分な補償をするつもりヨ。またその不利益という者も、彼らの掲げる信念からすれば許容せざるを得ないものもの筈ダ」

「……何？」

「?、???」

謎めいた超の発言に大豪院は眉を潜め、古に至っては既に頭から煙が上りかねない様子だ。

そんな二人の様子を見て超は笑い、くるりと衣装の裾を翻して本殿へと歩み始める。

「超、待て！まだ話は終わっていない」

「そうネ。だが大豪院、此処へ今日出向いた目的を忘れてはいないカ？」

引き留めようとする大豪院に対して、超は境内に仮設された闘技場を指差し、告げる。

「間も無く予選が始まるネ、選手は指定された各ブロックに集合しなければいけないヨ、大豪院、古？」

「……………ぬ……………」

「……………嵌められたアル!!？」

何やら型にはめられたかの様な鮮やかなる超の身躰し振りに、

齒噛みする大豪院と古。

「……心配要らぬヨ大豪院。私は事情を話すと前に誓々。友との言を破る程私は落魄れてはいないサ。ネギ坊主とのそれを優先するとイイ」

「……………いいだろう」

超の言葉に、大豪院は澁面を崩さぬまま尚も詰め寄り、文句を吐こうとしていた古の首根っこを引つ掴むと闘技場へ向かって歩き出す。

「では何れまた、ポチ」

「……………その名で呼ぶな」

悲喜交々の想いを載せて、混沌の宴が幕を開ける。

「おやおやあ……？此処は子供の遊び場じゃありませんよお、僕ちゃん達い？」

オリシと呼ばれる六十cm程の短棍棍を両手に持った浅黒い男の揶揄う様な声に、場内の何処かで抑えた笑いが起こる。

「……………」

「……………遊びに来た様に見えるんかい、兄ちゃん」

様々な道着、防具、武器によってその闘技場内は異形の彩りに染められていた。古今東西多種多様の武術、武道を修めた麻帆良の強者達、各部活の副部長、部長クラスが一つのブロックに二十人。それは則ち、猛獣以上の危険性を備えた脅威の顕現が群を成して佇んでいる事に他ならない。

同じブロックに配置されたネギと小太郎であったが、明らかに小学生以上にはどう頑張っても見ることは出来ない子供の姿に好意的な視線は向けられなかった。ネギは兎も角、血気盛んな性格をしている小太郎ならばもっと威勢良く噛み付いても良さそうなものであったが、それが出来ない理由は単純にして明快である。

「……………あんまりお子様に厳しいことは言いたく無いんだけどさあ。君達武道始めてどれ位？一年かな、五年かな？まあどう頑張っても十年

以上つてことは無いよね?…ああ、答えなくていいよ。返答次第じゃ大人気なく怒つちやいそうだからさ」

先程の二棍使いに続いて、黒く染め上げられた縄を手に持つ道着姿の男が顔を顰めつつ、睨む様にして自分達を見つめて来る小太郎に淡々と告げる。

隠し切れない憤りをその目に宿して。

「……此処に今こうして居る連中の大半はさ。物心ついた頃から、理由は色々だけど一つの何に魅せられて、寝ても覚めても強くなることだけ考えて、文字通り血反吐吐く様な思いをしながら自分鍛え上げた奴らなんだよ、解るかお前ら?…遊びに来たんじゃ無えのは目と立ち振舞い見りや判るよ。お前ら真剣だし、その歳にしちやあり得ない位に実力有るんだろう。俺が同じ歳の頃より強いかもな……で?」  
ブワリ、と実態が無いにも関わらず、熱く乾いた何かに吹き付けられた様な感覚をネギと小太郎は覚えた。

その正体は、怒気。

プライド 誇りに触られた、武道家の怒気だ。

「……舐めてんじや無えよガキ共。調子こいてねえか天才少年達? そっちの子供先生は頭の出来だけじゃ無く腕っ節も飛び級かオイ。中村達に目え掛けられてるらしいが、てめえらが出場て来んには十年早えんだよ。……忠告だ、今直ぐ棄権しろ。俺達みたいな人種はキレてる奴も多い、優しく手加減して貰えるなんて夢見んな? 病院送りならまだいい、下手すりや死ぬぞ。……いい歳こいて最強目指してる様な男は大人気無えんだ、もう一度言う。怪我しねえ内に帰れ」

男は言い終えると、年端もいかない子供相手に遠慮無しで凄んだからか、多少バツの悪そうな表情を浮かべながらも吐いた言葉は撤回しない。周りの部長、副部長達も同様だ。

「…………アレやなネギ、ホンマに」

「…………うん、井の中の蛙、って奴だったんだろうね」

ネギと小太郎は力無く笑い合うと、周囲の男達を見渡す。誰も彼もが凄まじい気迫を身に纏っており、京都で遭遇した十把一からげ

の妖達などよりも遥かに強大な力を持っていることが、現在の二人には理解出来ていた。

『……二人揃ってギリ合格じゃあ、まああるんだが……馬鹿にする訳じゃ無えけど、正直予選突破も厳しいぞお前ら。馬鹿が大挙して集まっちゃったからなく……俺らだけに任せる気は、本当に無えんだな？』

合宿最終日に中村から渋い表情で告げられた言葉がネギの脳裏に蘇っていた。

……馬鹿だな、僕は……

ネギは己の考えの無さを嗤った。

辻達バカレンジャーは毎日毎日まだ暗い内から夜遅くまで、一切の妥協無く、ネギや小太郎がへたばつても一心不乱に己を苛んでいた。文字通り血反吐を吐く荒行を日常として辻達は行っていた。

そんな辻達に張り合う彼麻帆良の武道家、彼女ら達が弱い筈は、ましてや未だ付け焼刃に過ぎないネギの武術で、たとえ魔法というアドバンテージがあつたとしても簡単に打倒出来る筈が無いのである。

寧ろ近接技術フィジカルと身体能力ではこの場の誰よりも劣るであろうネギと小太郎は、男の言った通り敢え無く地を這うことになる可能性は高いだろう。

……でも、それでも……

ネギは傍らの小太郎に目を向ける。小太郎も呼応して視線を合わせると、一度小さく頷き合つて視線を正面の武道家達に戻してはつきりと言い放つ。

「……無礼千万は承知の上や、それでも俺は、勝ちに来たんや!!?」  
「……退くことの出来ない、理由があります!!? お相手を、お願いします!!?」

「……そうかよ」

「あ〜あ〜……」

「……命知らずが」

「若いつていいねえ」

幾人かは舌打ちをし、ま達幾人かは面白いものを見たと言わんばかりに顔を綻ばせ。

そして幾人かは憤怒に燃えていた。

『それでは間も無く予選開始の合図となります、皆さん用意を……』

審判の声が遠くに聞こえる。

凄まじい重圧プレッシャーが吹き付ける。

そして試合開始のゴングが鳴り響いた瞬間、ネギと小太郎の眼前には、其々槍の様な横蹴りと蛇の如く疾走はしる黒縄が迫っていた。

……身の程知らずなガキには、キツイお灸を据えてやら無えと、な!!?

テコンドー部副部長 チェ・ヨンハンは横突き蹴りヨブチャキルギを小太郎の顔面へと試合開始直後に放っていた。

……死なねえ程度に加減はしてやる。度胸は認めるが、それだけで罷り通る程この世界は甘くねえんだよ!!?

……どう反応しようとも出足を潰し、頸動脈を締めて落とす、それだけだ……

古武術部副部長 馬締ましめ 束彦かねひこは、得意とする縛法にてネギを可及的速やかに退場させようと縄を疾走はしらせていた。

……やる気と熱意は買う、しかしお前の様な子供には、まだこの場所は早いんだよ少年……! !

そんな開始早々の苛烈な洗礼に対してネギと小太郎は。

「……んな緩い蹴り放ちよって、舐めてんのはそつちやオラア!!?」  
「……つ!!? はあああつ!!?」

小太郎は蹴り足が髪を掠める程の寸前で躲して飛び掛かり。

ネギは己の首目掛けて伸びて来た輪状の縄内に左腕を突き込み、勢いを付けて背後へ倒れ込む様にしながら強く縄を引く。

「……………つ!??」

この時のヨンハンと馬締に油断はあっても慢心は無かった。ネギと小太郎のことをそれなりの実力者と看做していたからこそ、それなりに本気を出した初撃を捌かれた動揺はあっても次撃を放つその動作に停滞は無い。そうでなければ麻帆良の武道系部活で副部長<sup>N.O.2</sup>は名乗れないのだ。

故にヨンハンは横突き蹴りが空を切り、前に傾いた重心に逆らうこと無く宙に舞うと、残った足により横回し蹴りを空中で回避の術無し小太郎へ見舞い、馬締は敢えて引き込む動きのネギの力に逆らわず前にのめりながら両の手を閃かせ、半呼吸程の間も無くネギの左腕を肘と手首、肩の三点から完全に固めて振じり上げる。後は縄を引き上げて張らせればネギは身長差もあり、殆ど身動きが取れなくなる寸法である。

しかし、詰めに入ろうとしていた副部長二人の予想を、ネギと小太郎は些か以上に越えていた。

ヨンハンは小太郎の土手つ腹に真面にめり込ませた蹴り足の感触にほくそ笑みー

次の瞬間、その顔を凍り付かせる。

何故ならば蹴りを真面に喰らったかに見えた小太郎の姿が一瞬ブレ、次の瞬間には霞か何かの様にその五体を四散させていたからだ。

「……………な、なん…!??」

「影分身、ちゆう技術わざや。ここも楓姉ちゃんの他に忍術部とかいう所の連中が使うんやろ？」

空中にて動揺の声を上げたヨンハンは、己の下方から聞こえてくる少年のにギクリと身体を強張らせる。先程空中で逃げ場のない小太郎（の分身）を、身動きの出来ない死に体と見なしてヨンハンは全力で蹴りを放ったのだ。

則ち、現在いまは同じく空中で、しかも攻撃を放った直後のヨンハンは、これ以上無い死に体ということである。

「これはぎっつきの一発の礼やあオラア!!?」

「が、はああああああつ!?」

拳に犬神を纏わせての、小太郎の放った全力のジャンピングアッパーがヨンハンの脇腹へ真面に突き刺さり、ヨンハンはアバラのへし折れる軋んだ様な音を腹内で響かせながら場外へ吹き飛んだ。

「……………つし!!?あと十何人、掛かって来いやあ!!?」

「それは悪手だよ、子供先生……………!!?」

馬締が言いつつ、縛り固めたネギの左腕を引き揚げ様とした、その瞬間。

バツン!!?と弾ける様な音を立てて、ネギの腕に巻き付いていた黒縄が千切れ飛び、周りに散らばった。

「……………は……………」

思わず馬締は刹那の間、我を失う。それも無理の無い話で、締め付け過ぎて骨などを折ってしまった様な気にこそ込めてはいなかったものの、馬締の使っていた黒縄は数種類の韌性、耐久性等がそれぞれ異なる繊維を幾重にも織り合わせ、結果として刃物を用いても容易に切断の叶わない様な剛性を得るに至った特性の捕縛縄なのである。刃物はおろか、何ら抵抗らしい抵抗をしている様に見えなかったネギの腕にてあっさり千切られたとあつては驚きに固まるのも無理は無い。

そう、無詠唱で腕に纏わせる様に展開した魔法サギタマギカの射手の雷にて、幾ら丈夫でも所詮は繊維の束にしか過ぎない黒縄を焼き切ったことなど、魔法使いならぬ馬締には理解わかり得ぬことなのだから。

そして馬締の大き過ぎるそんな隙を見逃す程甘いシゴきを、ネギは辻達から受けた覚えは欠片も無かった。

「……………しまつ……………!!?」

数瞬の動揺から馬締が立ち直った時には、ネギの身は既に馬締の懐深くへと入り込んでいた。そしてネギの振り下ろした足が、その小さな身体から発せられたとは思えない程に重く、響き渡る轟音が響き渡り、

「……………破!!?!!?」



「い……………っ!?？」

ネギの繰り出した鉄山靠が馬締の身体を十m近い距離まで吹き飛ばし、その身体を境内の石壁に叩き付けた。

「……………純粋な武道家として僕は未だ貴方達に及びません。持てる力の全てを以って、当たらせて頂きます!!？」

奇しくもほぼ同時にそれぞれの相手を返討ち、高らかに宣言してみた二人の少年の姿に、一連の光景を目の当たりにしていた幾人かの動きが一瞬停まり。

「……………上っ等うううううっ!!??!!??」

複数の影が颯風と化して、ネギと小太郎に襲い掛かった。

8話 まほら武道会予選 (中 その1)

「……さて、瓢箪糞爺……失礼、学園長先生の何時もながらに胡散臭……回りくど……まあ腹黒い指示に従い、いい歳して喧嘩最強を夢見てる図体ばかり育った餓鬼共相手に更なる大人気なさを発揮しに行く羽目になった訳ですが、何か思う所はありますか、高畑先生？」  
「杜崎先生、少し言い方を……まあ、気は進みませんが、ね。しかし、ネギ君も参加していると聞いていますから。不謹慎ではありませんけど正直僕は少しだけワクワクしているんですよ」

時間は少し遡り、まほら武道会予選開始の約一時間前。とある校舎内の浴室内にて、その場に相応しくないスーツ姿の二人の男性。杜崎と高畑両麻帆良広域指導員は佇んでいた。杜崎の方は額に青筋が浮き上がり元より厳しい顔は今や仁王の如く顰められ誰がどう見ても明らかに機嫌が悪い。そんな同僚の様子に苦笑を浮かべながら、高畑は己にとつて様々な意味で特別な存在である、とある英雄の忘れ形見の少年を話題に出した。その少年ーネギと、杜崎に縁が深いバカレンジャーとは仲が良いので、高畑としてはそこから話が広がれば少しは気が紛れるかもしれない、と気を使って振ったつもりのもりの話題である。

所が杜崎はそんな高畑へ目線を遣ると、顰めた顔を若干困った様なそれに変えて言葉を紡いだ。

「高畑先生がネギ先生を買っているのは知っていますし、実際あの馬鹿共も目を掛けていますから、年端もいかない少年の育ち方としてどうなのかという疑問はさて置いてまあ、尋常でない伸びを見せているのは認めますがね、高畑先生……」

それでも、と杜崎は前置きして、鏡の如く凧いでいる浴槽の水面を睨みながら言い放つ。

「日頃からあの大馬鹿共及び各部活の馬鹿共をぶちのめしているなら御存知でしょう、連中の実力を。幾らネギ先生に才があっても真面に訓練を積んだのはここ数ヶ月でしか無い。ましてや今から我々が赴くのは格闘大会です……寧ろ何故あいつらが参加を許したのか不思議

議な位だ、恐らくネギ先生は予選も突破出来ませんよ」

杜崎はそう断言する。如何にネギが天性の才能を授かっているとしても、血と汗と涙で構成された武道家達の半生は、生半な努力では越えられないと杜崎は確信している。

別に、杜崎自身には武道家を擁護するつもりは無いし、ネギに対して思う所がある為に否定的な評価を付けているつもりも無い。自分と他人そのほかの差異と優劣なんでもものに折り合いをつけられる様になれないなければ大人として、しかも教師などやってはいられない。

ただ杜崎は知っているだけである。日頃の馬鹿騒ぎを身体を張って鎮圧している為に、文字通り骨身に沁みて。

「あの馬鹿共武道家達は強いですからね」

面と向かつてはまだまだ教師としてそして一人の先達として、認めてやる気にはなれない正直な想いを杜崎は高畑へ告げる。

「……そう、なんでしょうね。至極真つ当な評価だと思えます、杜崎先生」

高畑は些か眉を顰めたが、やがて一つ頷いて杜崎の意見を認める。己自身も教師の肩書きを持つ故に、生徒達の努力を軽く見ているつもりは元より無い。高畑がネギに水準以上の期待を掛けてしまうのは、杜崎と違って直にネギの父親にして英雄たる、ナギ・スプリングフィールドを識るが故だった。

「…それでも、僕は何だかネギ君なら何かやってくれるんじゃないかって期待してしまっんですよね。重い期待は、時に重圧でしかないって解ってはいるんですけれど……」

苦笑しながらそう言う高畑の顔を暫し見ていた杜崎は、小さく息を吐いて呟きを洩らす。

「……成る程、解っている様で解っていない、か……」

「？、杜崎先生？」

「いえ、何でもありませんよ。……あの馬鹿共が殊更にネギ先生をガキンチョ扱いする理由が、何となく理解出来た気がしましてね」

「……それは、「へい毎度々スライム急便ダゼー」……おっと」

杜崎の言葉に高畑が何事かを言いかけたその時、目の前の浴槽に張

られた水が渦を巻き出したかと思うと、中心から半透明の幼女達――すらむい、あめ子、ぷりんのスライム三人娘が現れ、飛び散る水飛沫に高畑と杜崎が身を躲す。

「遅くなりましタ、では龍宮神社付近の水場まで移動しマス」

「水中姦……」

「黙れ」

相変わらず脈絡も何も無いぷりんの下品な つぶ wit t er き をバツサリ切り捨てる杜崎である。

「よく来てくれた、早速頼むぞ。…しかし気の利いた申し出だったな、俺と高畑先生の参戦が決定してから直ぐに話を持ちかけたのだろう？」

「アー、まあぶつちやけ点数稼ぎって奴？中村の野郎が言い出したからヨ」

「立場悪いんだからお前らはこういう細かい所でポイント稼いで挽回すんだヨ、って勝手に電話して決めたんデス」

「女に対しては気の回る男……ふふスケコマシ」

ふとした疑問に対する三人娘の返答に杜崎は糞でも踏み付けた様な顔になり、高畑は苦笑を浮かべる。

「なんとというか…懐いてるなあ、君達は」

高畑の感心している様な呆れている様なその言葉に、三人娘は各々に肩を竦めて言葉を返す。

「話してるとウダウダ身構えてんのが阿呆らしくなんだよあの馬鹿ハ」

「ノリがセルヴァさんに似てますからネ、私達にとっては付き合い易いんでシヨウ」

「べ、別にちよつと優しくされたからってアンタなんかを好きになつてなんかいないんだからネ」

「キモっ!?」

ぷりんが無表情のまま一切抑揚を付けずに吐いたテンプレートなツンデレ台詞の余りな不気味さに、すらむいとあめ子が揃って絶叫する。

そんな様子の三人娘にさっさと転移の準備をしろと一喝してから、杜崎は頭痛を堪える様にこめかみを揉み解しつつ、言葉を吐いた。「……よくもまあ奇天烈な存在にばかり好かれるものだ、あの変態は……」

『さあーっ 観客の皆さんお次はCブロック上空をご覧あれ!!? 飛行部部長 天翔 翼による舞○術からの砲丸乱舞だあー!!?』

「うらうらうらうらあああああっ!!?」

天翔は地上十五m程の高さでCブロック内を縦横無尽に飛び回ら  
つつ、

背中に背負った鉄籠から陸上競技の砲丸投げで使用つかわれる鉄球を下の選手へと矢継ぎ早に投げ付けていた。

「うおお危ねえ!!?」

「テメエ天翔降りて来いやオラア!!?」

「それで闘ってるつもりかコラア!!?」

「ああ!!? 五月蠅えよ空飛んじやいけねえとも鉄球投げちやいけませんともルールにや書いて無かつたろうがあ!!?」

勝てばいいんだよ勝てばあっ!!?と哄笑しながら今度は高所からの落下による重力加速度をも加えて威力の増した鉄球を尚も天翔は投げ降ろす。

『な、何やら格闘技大会の予選とはとても思えない様なトンデモ映像が私の目に飛び込んで来ます! っっていうか部長ーっ!!? あれど  
ういう仕組みで飛んでんの!!?』

『こーら朝倉ー! 実況と解説をする人間は素で喋っちゃいけねえの、お前はただ目に映るありのままを解り易い言葉で届けりやいんだよー!!? ……オッホン!、失礼しました皆様、あそこの不法投棄をしま  
くっている煙と一緒に高い所が好きそうな奴は先程申し上げました

ように飛行部の部長！四六時中空飛ぶ為に顔を真っ赤にして只管念じてるか気を強化する為にトレーニングしてるかしかしてない変人集団の頂点です!!?その甲斐あってか何か飛んでるアレの仕組みですが、詳細は本人達も詳しくは不明、気の発現が最低条件としか解っていません!!?要するによく原理も理解していない力で一切の躊躇なく空飛んでるフライト兄弟もビックリの神風野郎だあーっ!!  
?」

各ブロックの中心点に立ち、実況として忙しく喋っていた朝倉の悲鳴にも似た問い掛けに叱咤を返し、報道部部长 喧囂 囀はべらべらと良く回る舌による解説を行う。そうしている間にも喧囂の両眼は其々が別の生き物であるかの様に各ブロックの情勢を捉え、両手が霞む速度で状況をメモに取っていた。

「五月蠅えよ余計な茶々入れんな喧囂!!?」

解説席辺りを怒鳴りつけた天翔は背中中の鉄球の数が少なくなってきたのを察知して、更に高度を上げてからの急降下爆撃により一人一人を確実に処分するかと方針を変更する。両手に鉄球を握り締め、気を放出して上昇を始めようとした、その瞬間。

「ゴッ……!!?アアアアアアッ!!?」

脇腹に凄まじい速度で突き刺さった硬質の何かによる衝撃が天翔のアバラを軋ませ、集中の乱れた天翔は真っ逆さまに己がブロックへと落下を始める。

……何……が……!!?」

顔を苦痛に歪めながらも何とか気の制御に成功し、地上数mで急減速した天翔は、己が土手っ腹にめり込んでいた凶器を見やり、驚愕に目を見開く。それは厚手の牛革を糸で縫い合わせた白い球体――野球で使用<sup>つか</sup>われる硬球であった。

「遮蔽物の無いお空でグローブも無しにプカプカ浮いてるたあ随分余裕だなあフライング野郎おお!!?」

「この野郎……!!?」

自らに対して浴びせられた罵声に声のした方向を睨み付けた天翔

だが、次の瞬間先程の硬球とは比べ物にならない勢いで飛んで来た第二の硬球を真面に顔面で受け止め、盛大な鼻血と折れた前歯を零しながら力無く地面に落下した。

『弾丸ライナー直撃ー!!?や、野球部部长 松坂 秀樹選手の恐るべき精度のバッティングによるボールによって天翔選手ダウン!!?』  
『何で野球部が格闘大会出場てんだという皆様方の疑問に前以てお答えします…ズバリ、優勝賞金の為です!!?野球部部长は守銭奴だったー!!?ちなみに始めの硬球はピッチングによるものです!松坂選手はエースであると同時に部内屈指の強打者だあー!!?』

「はーははははあ!!?てめえら組手は出来ても白球取る練習はしたことねえだろが!!?喰らえ俺の全力投球うううううう!!?」

松坂はバットを頭上天高くに放り投げ、何処から取り出した硬球を右腕で振り上げる。ワインドアップで上体を右腕が背中に隠れる程に捻れ、上げられた前足が前へ伸びると同時に骨盤が急回転。前足の着地と同時に軸足の膝から足先迄が一気に伸び切り、骨盤の回転を更に加速させる。腰から上の上体が捻転、肩が素早く、堂々とした円運動を描き、全身運動によって乗せられた遠心力が腕から手先のボールへ正確に伝わり、凄まじい速度で硬球が放たれる。

「MAX!246kmおおおお!!?」

「ぐ、はあああああ!!?」

哀れ標的に選ばれた道着姿の短い木刀を持った男の鳩尾に砲弾の様な勢いの硬球が炸裂。アバラ数本をヘシ折りつつ男の身体を場外まで吹き飛ばす。松坂は投球フォームを終えると同時に回転しながら落下して来たバットをキャッチし、不敵な笑みと共に懐から宙に無数の硬球をばら撒く。

「麻帆良野球部伝統!!?一万本地獄ノックだおらああああ!!?」

あり得ない回転数による高速バッティングによって、硬球が必殺の弾幕となり武道家達に襲い掛かった。

『さ、先程に続いて前代未聞!!? 格闘大会中にノックが始まったー!!?』

『まあ普通に考えれば一発一発投げるのに時間が掛かるピッチングよりもバツティングの方が回転数は早いし威力も上だろうからねえ。まあそれで常識的に他人と闘う際にピンポイントで急所狙う様な真似が出来る筈も無いんだが、そこら辺は半人外の象徴、麻帆良の部長クラスって訳だあ!』

『部長、部長クラスならしやうがないで何でも纏めるの止め……ちよつとー!!? 顔面イってるけど大丈夫其処の人ー!!?』

「……舐めるな、スポーツクラブの頂<sup>てっぺん</sup>点風情がああああ!!?」

朝倉と喧囂が阿鼻叫喚な光景を目まぐるしく実況解説する中、矢の様に飛んで来る硬球の群れを捌き、躲しながら松坂へと突進する、薙刀を手に持つシャギーを入れたショートヘアーの少女が現れた。

『あーつと此処で松坂選手に薙刀部らしき選手の襲撃ー!!?』

『まあ普通に考えて接近戦で勝負になる訳無いからね。距離を詰めれば勝ちつてのは間違った判断じゃ無いでしょう』

「せえい!!?」

「なんのお!!?」

薙刀部副部长、弥刀 勇希の繰り出した、首を狙った踏み込み突を松坂はバットを横薙ぎにして刃先を打ち払う。しかし、弥刀の素早い手捌きによって長大な柄の先にある刃が旋回、上弦の弧を描いて松坂の脳天に面打ちが繰り出される。

「ぬんっ!!?」

しかし、松坂もさる者、身を屈めたバントの如き構えでバットを頭上に突き上げ、一撃を見事に真っ向から弾き返す。

しかし、弥刀の連撃は止まらない。脛を狙って足を斬り落とさんとする様な下段の薙ぎ払いを松坂が如何にか退がって躲せば薙刀の刃が毒蛇の如く跳ね上がって顔面を斬り上げんとする。それを仰け反り、松坂が回避しても、面から胴、胴から小手、小手から突へと、無限に変化を見せる攻撃のバリエーションが、必死で直撃を躲している



だけの松坂をドンドンと削って行く。

「っ!!??……さあああああああつ!!??!!??」

一際大きい回避によって松坂が体勢を崩したその瞬間、大きく一步を踏み込んだ弥刀は、己が一番得意とする全力の踏み込み面を松坂の脳天目掛け全力で振り下ろす。例え防禦うけられようともバットごと斬り下ろすという不退転の全力攻撃だ。全身から気を溢れさせ、霞む速度で打ち下ろされた輝く刀身は、落雷の様に真上から松坂に襲い掛かった。

松坂は傾ぐ上体を起こして、再びバットを頭上に構え、防禦の体勢を作る。

「無駄、だああああああつ!!??」

弥刀にとつては想定内の対応。薙刀よ折れよ、とばかりの力を持つて一撃を見舞う、と。

その一撃は空を斬る様な手応えの無さと共に松坂をすり抜け、轟音と共に闘技場の床板を破碎して大穴を開けた。

「……………!!??」

弥刀は瞠目して打ち下ろした直後の前に屈んだ体勢から松坂を仰ぎ見る。見れば薙刀の刃がすり抜けた様に見えたのは弥刀の錯覚であり、実際は松坂の身体ギリギリの所を掠める様にして通り抜けていた。

否、軽く血の滲んでいる右胸から右脇腹までの太刀傷を見るに、実際に掠めていたのだ。則ちそれは、松坂が一撃に呼応して回避を行った事になる。振り下ろされた一撃に対して前足を上げ、バットをスイングする構えフォームにバントの如き体勢からスイッチした、松坂の僅かな身体フの動きによって。

「……舐めてんのはそっちも同じだろうが」

それはバントの構えからヒッティングに切り替える事により、バントシフトを敷いている敵の守備陣形の裏をかく奇襲打法。その名を

…

「バアアアスタアアアアア!!??!!??」

「ガッ!!??……………!!??」

物の見事な一本足打法から繰り出されたフルスイングにより側頭部を強打され、弥刀は一瞬で意識を刈り飛ばされて闘技場の床に倒れ伏した。

『み、弥刀選手ダウン!!? てゆーかバットで脳天フルスイングとか正気かあんたら!!?』

『大丈夫だって朝倉、そんな単なる打撃凶器の一発より余程ヤバい代物を普段から喰らい続けてるマゾ集団なんだから武道家つてのは……ともあれ強いぞ野球部、遂に飛行部イロモノに続いて副部長とはいえ正統派武道系部活の猛者を薙ぎ倒したあああつ!!?』

「はっはあーっ!!? どっからでもかかって来やがれてめえらゴアハアアツ!!?」

高笑いしながらバットを振り回し、新たに硬球を取り出そうとしていた松坂に、横合いから飛んで来た清流の様な澄んだ水色に光り輝く気弾が直撃し、弾けた蒼の衝撃に松坂は闘技場の端近くまで吹き飛び、やがてヨロヨロと起き上がる。

「な、んだこの……!!? どいつの仕業だオラア!!?」

「俺だ。何処からでもかかって来いと言っていたからな、遠慮なく行かせて貰った」

バットを振り上げ、怒号を上げる松坂に悠然と答えたのは、体前で組み合わせた、淡い光の残滓を纏う両掌を松坂の方に向けて中腰気味の、まるで何かを撃ち出したかの様な姿勢を取っている白いボロボロの道着姿をしている男だった。

男は構えを解くと身体を伸ばし、頭に巻いた真紅の鉢巻きを風に靡かせながら、改めて空手に似た構えを取る。

「さあ、楽しもう…戦いの中に答えはある!!?」

『……なんか格ゲーから出て来たとしか思えないキャラが波○拳っばい一撃で松坂選手を吹き飛ばしたあーっ!!?』

『はい!!? 彼はゲーム研究会部長の 武星 隆選手!!? スト○アイの

り○ウに憧れるあまり身体鍛えまくって気まで発現させたマジモンの変態だああ!!? 巫山戯た見た目とは裏腹に強いんだなあこれが!』

「行くぞ!!? むううん……! 波○拳!!?」

武星が再び両の掌を腰溜めに構え、その手の中に蒼い光球が現れる。たちまち一抱え程もあろうかという大きさに成長を遂げた<sup>光球</sup>それを、武星は一息に松坂目掛けて撃ち放つ。

「……っ!!? 上っ等だコスプレ野郎があああつ!!?」

松坂はその場を動かずにバットを振りかぶってバツティングの構えを取り、高速で近づく波○拳を伝導させた気によって光り輝くバットにより、見事な一本足打法によって迎え撃った。

フルスイングしたバットと波○拳の蒼い光球が一瞬拮抗し、次の瞬間光球が爆発して松坂の姿は光の奔流に飲み込まれる。

「……野球部舐めんなあつ!!? 高速、スチールラアアアン!!?」

光を裂いて飛び出して来た松坂は、身を低く屈めた体勢から凄まじい速度での特攻で一気に武星へと詰め寄る。武星は迫り来る松坂へ、再び腰溜めの体勢から気弾を放ち、迎撃に入る。

「波○拳!!?」

「甘えっ!!?」

距離にして数m、ほぼ躲し様の無い近距離から浴びせられた蒼の気弾を、しかし松坂はバントでもするかのように両手で持ったバットのスイートスポットで受け止め、撓んで爆発する直前の気弾を思い切り上方へカチ上げて逸らす。松坂の前髪を掠めて斜め上方へ飛んだ気弾は背後で爆発し、寧ろ松坂の特攻を後押しする結果となった。

「何っ!!?」

「野球だったらファール所か下手すりや一死だがなああああつ!!?」

気弾をバットで受け流すという非常識な防御に武星が目を見開くが、構わず松坂は勢いのままにバットを横薙ぎにフルスイング。武道を嗜んでいないとは思えない颯風の如き一撃が武星の頭を薙ぎ払——

「……………あ?」

「……うかと思われたその瞬間、武星の身体が霞の如くかき消え、バットの一撃は物の見事に空を切る。」

「……俺が、空振り？何処へ………っ!?!?」

脳内で疑問が形となるよりも早く、松坂は高らかに轟いたその技名を耳にすると同時に、顎を砕かれて意識を刈り取られた。そう……

「昇っ!!?。○、拳!!?。!!?。」

弾ける寸前の撥條の如く、全身の筋肉を撓めてしやがみ込んだ体勢からの一瞬の爆発。一直線に真上の標的をその拳で穿つ、正しく天高く舞い上がる龍が如き一撃によって。

『…ジャンピングアッパーカット一閃ーっ!!?松坂選手、五mは浮き上がって吹っ飛んだー!!?』

『迂闊に飛び込んだ奴にはあれが炸裂するってんで闘った事のある武道家達からは結構評価が高いらしい!!?イロモノ粹だからといって弱いとは限らないのが麻帆良の半人外、部長クラスだな!!?』

実況の叫びと解説の語りを背に受けながらフワリ、という擬音が聞こえてきそうな柔らかい着地を見せた武星は、派手な一撃拳に反応して自らの方を向く武道家達バケモノへ拳を突き出し、不敵な笑みと共に宣言する。

「掛かって来い！俺は、俺より強い奴に会いに来た!!?」

各ブロックの闘いは熾烈を極め、また混沌の度合いを増してゆく。

「しええええええええええいっ!!?。」

裂帛の気合いと共に繰り出された稲妻の如き突きが、オリバーポーズと呼称よばれるポージングをやたら爽やかな笑みを浮かべつつキメている、どこからどう見ても隙だらけな体勢の黒い小山ーボディビル研究会部長 金剛の喉元に突き刺さった。

穂先には覆カバいが施されており、突き刺す武器としての本領を發揮すること叶わぬ槍の一撃ではあるが、刀剣甲冑部に併合されたとはいえず元槍術部部長の全力、下手な鋼板程度ならば貫通しかねない、人外の

領域に足を踏み入れた者の一撃だ。常人ならば首が吹き飛んでもおかしくないそれを喰らってー

「…うん、良い *thrust* だ。僕が十年槍を振るっても確実にこうはいかないだろうね。…惜しむらくは槍中君、余りにも君は非力過ぎる。せめて倍の *weight* が無ければ僕の筋肉は、貫けない」

ー全く堪えた様子も無く、首元に撓んだ槍の穂先をめり込ませたまま、金剛は笑ってそう言った。

「気を落とすことは無いよ槍中君。これが真剣…真槍かな？であったならば、流石の僕もこう *casualty* には受けられは…むぐつ!!」

「…舐めるな、筋肉達磨がああああつ!!?!?!」

金剛の言葉を皆まで聞かずに、槍中は一撃で倒せぬのならば手数で打ち滅ぼすとばかりに槍を閃かせ、まるで機関銃の掃射の如き槍の連撃を金剛の肘、肩、膝等の関節部や鳩尾、眉間、喉元といった急所に見舞う。

しかし、気を込められて光り輝く槍の猛撃を雨霰と貫いながらも金剛は笑みを崩さず、ポーリングによって分厚い大胸筋の手前で固めていた両の腕をゆっくりと伸ばし、振り上げていく。

「やれやれ…*elegant* では無いね槍中君、そして僕の方こそ舐めないで貰いたい。君の *maximum* で通らぬ我が筋肉の鎧、そのような手数頼りで抜ける筈が無いだろう?」

尚も槍の連突を浴びながら、金剛は脅かす様に両手を掲げたまま大腿四頭筋に力を込め…

「今度はこちらから行かせて貰うよ!!?!」

…その巨体からは信じられない程の高速で槍中目掛けて躍り掛かった。

無論槍中もそんな特攻を馬鹿正直に喰らうつもりは無い、素早く後ろに退いて間合いを開けながら牽制の為に槍を顔面目掛けて突き出した。

しかし、槍中の予想を超えた速度で踏み込んだ金剛は、槍の一撃をその分厚い胸筋で受け止めて弾き返し、逆に突き込んだ槍中の体勢を

崩す。

「Y a a a a a a h a a a a a a a a a a !!?!!?」

「うおおっ!!?」

金剛は雄叫びと共にその丸太以上に太く、長い両腕で槍中の身体を無造作に引つ掴むと、細身とはいえ70kgを優に超えているであろう槍中を、まるで藁束か何かでも持ち上げているかのように軽々と頭上に抱え上げる。

「て、てめえ……!!?」

「H A H A H A !!? プロテインを飲んで出直して来たまええええええ!!?」

金剛は無造作に槍中の身体を闘技場の床に投げ落とした。

ドギヤアツ!!?という鈍い音が響き渡り、叩き付けられた場所に巨大な陥没痕を作りながら槍中はボールの様にバウンドし、数m離れた地点に再び激突してゴロゴロとしばし転がってから漸く停止する。白目を剥いて痙攣するその姿は、明らかに戦闘不能であった。

その余りに強引かつ豪快な力技に周りが僅かに気圧される中、金剛はダブルバイセツプスで決めポーズをとりながら笑って言い放つ。

「この世全てのものは筋肉によって補い、代わる事が p o s s i b l e なのさ……!!? そう、強ささえも、筋肉があれば武術など必要無い!!? それを a t t e s t してあげよう!!?」

「ハイハイハイハイハイハイハイハイ!!?」

「くっ……ぬ、ぐあつ!!?」

テコンドー部部长 天越 修斗の放つ横回し蹴り、前蹴り、横蹴り、外回し蹴り後ろ蹴り等の変幻自在な多種多様の連続した蹴りがレスリング部 部長 腕木 孤月を襲っていた。傍目からは手数ならぬ足数に頼った軽快な乱打に見えるが、一発一発が重く、芯に残る必倒の意志が籠った連撃であることを、必死に捌き、躲している腕木自身が文字通り骨身に沁みて理解していた。

「どうしたどうしたどうしたのさあグラップラー!!? 組み付きに来なきやお前の力は発揮出来ないでしょおおおお!!?」

「……っ！の、野郎……!!?」

やたらハイテンションな天越の挑発地味た捲し立てに腕木は齒噛みするが、不用意にガードを解いて前に出る様な真似はしなかった。一撃でも喰らえば其処から濁流の様な連撃に呑み込まれ、忽ち戦闘不能と化すことは解っていたし、一呼吸に二、三発の蹴りが飛んで来る凄まじい回転数での攻撃である。このまま何とか凌いでいれば、何れ息が上がって隙が出来る腕木は判断し、あくまで致命傷を貰わないことだけに気を付け、愚直に攻撃を捌いていた。

「……しっ、こい！ってのおおおおっ!!?」

そんな変わり映えの無い攻防に嫌気が指したか、天越は一際鋭い横突き蹴りをガードの上から構わず叩き込み、衝撃にたたらを踏んだ腕木に対して跳躍すると、時計回りに回転しながら奥足である右脚側で蹴りを叩き込む、飛び捻り蹴りを見舞った。

しかし腕木は、天越が跳躍して蹴りを繰り出す迄に空いた一瞬の空白で即座に身を屈め、両手を突き出して自分の首目掛け飛んで来る蹴り足を受け止めに掛かる。

……引き摺り下ろして組み付きさえすればお前は俺の敵じゃ無え!!?」

そんな想いと共に腕木は飛燕の如く迫り来る蹴り足をまず両腕でブロックして勢いを殺しに掛かり。

その想定していたよりも遥かに軽い手応えに悪寒が走った。

脳裏に閃いた予感が形になるよりも早く本能が鳴らす警鐘に衝き動かされ、腕木はあっさりといが前腕に弾かれた天越の右脚を掴み取りに行く、が……

「ハイヤアアアアアアアツ!!?」

腕木の両手が捕らえるよりも一瞬早く天越の身体が旋回を早め、右脚は腕木の眼前を斜めに通り過ぎて行き。

斜め上から打ち降ろされた天越の左脚が、虚しく空を掴んでいた腕木の両腕上をすり抜け、米神に横合いから突き刺さった。

「が……っ!!?」

空中での360°回転蹴り。強烈な衝撃を頭部に受け、腕木の視界

が暗転し、膝が崩れる。そのまま腕木は前のめりに倒れかけ、危うい所で踏み出した足が身体を支える。

「……………これを……………耐えれば……………!!?」

「お、ああああああああああつ!!?!!?」

攻撃を終え、着地するしかない天越を捉えることが出来る。強靱に鍛え上げたタフな肉体と、苦しい鍛錬にて培った精神力が、K・O寸前の腕木の五体に力を取り戻させ、未だ宙に有る天越の身体へ腕を伸ばすことを可能にした。

しかし。

結果として腕木のその踏ん張りは無駄に終わる。

腕木の暗転していた視界が回復し、天越の姿がその目に映し出された時。その身体は腕木に背面を見せており、尚も旋回を続行していたのだ。

その意味を正確に理解するよりも早く、再度頭部へ襲い掛かった衝撃が、腕木の精神を今度こそ束の間の夢現へと旅立たせた。

「…やれやれ、こういうガタイがモノ言う様な連中はタフガイ過ぎて好かないねえ」

自慢の蹴りが軽いんじゃないかと不安になる、と天越はボヤいた。空中一回転の二段蹴りで腕木が完全に意識を飛ばしていないことを悟った天越が繰り出したのは、更に半回転しての右脚による飛び外回し蹴りである。つまり天越は飛び上がってから着地する迄テイミヨフリヨに一回転半の回転をしながらの計三発の回し蹴り、言わばオベクサシブ540°回転蹴りを繰り出したのだ。

「さーて……………次のお相手はどうですか?…つとお」

力無く床に崩折れている腕木には最早一瞥も無く、その大人し気な顔に似合わぬ獰猛な笑みを浮かべて天越は次なる対戦者を求めて歩き出した。

武道家達は、己が全力を振るうに相応しい強敵達との相対に、歓喜に震え猛り狂う。



「遅いわあああつ!!?」

「ぐええつ!!?」

相撲部部长、奉日本 豪臣が矢継ぎ早に繰り出す鉄砲の嵐が、その圧力に思わず身を躲そうとした柔道着の男に炸裂した。鋼鉄の柱が高速で叩き付けられた様な剛打の連続に、必死でガードを固めた男の粘りも虚しく枯葉の様に吹き飛ばされ、宙を舞う。

「ぬははははっ! 何とも血が滾るのう、儂の張り手を正面から受けられる奴なぞ部内以外じゃ金剛か豪の字位じゃろうに!!? 命知らずが溢れておるわあ!!?」

呵々と高笑いしながら、奉日本は摺り足のまま次の獲物を求めて闘技場の中央に戻る。基本的に一対一を前提とする周囲の武道家達の性質上、不意打ちや多数に同時に掛かられたりする心配は少ないとはいえ、その足取りは余りに無造作であり、不安の欠片も無い。それだけ奉日本は日頃のぶつかり稽古によつて粘り鍛えた己の肉体を信頼していた。

「ゴツ!!?.....!!?」

「ぬ?」

そうして悠々と歩を進めていた奉日本の足元へ、サンボジャケツト姿の大柄な男が転がり込んで来た。その男は小さく苦鳴を上げた後に喉を抑えて痙攣している。男の飛んで来た方向を見やった奉日本は、其処に立つ道着姿で木刀を青眼に構える男の姿を捉え、表情に喜悦と微かな緊張を浮かべる。

「...ふははっ! 辻い!!? わいが相手かあ、ならばきばるとしようかい!!?」

ズウン!!?と一際高く跳ね上げた足で地響きと共に四股を踏んで腰を落とし、両手を床へと下ろした奉日本の構えは正しく立ち合いの構え。元々二mを超えている小山の如き巨体が全身に力を入れて構えを取る様は、最早巨獣の猛進を予感させる重<sup>プレッシャー</sup>圧を放っていた。

対する辻は何処か冷めた表情のまま木刀を振り上げ、己が源流の薩摩が太刀。右蜻蛉と称される必殺の姿勢を取る。

「...奉日本先輩。私事な理由で大変申し訳ありませんがね、俺は今虫

の居所が悪いんです。……やり過ぎてしまいかねませんが、お覚悟は宜しいですか？」

「……はんっ!!?」

奉日本は辻の宣言を鼻で笑う。

「確かに険しい顔をしとる。お主がそんな顔になつとるぐらいなんじゃからまあ、余程の事があつたんじやろうがな……本気で腹を立ててる様な人間はまず馬鹿丁寧においては危ないから注意しろ、何ぞと警告したりはせんわい。律儀な性分もええ加減にしたらどうじやあ? ……」

奉日本は身体を撓め、不敵な笑みと共に言い放つ。

「胸貸してやるわ。遠慮無う、掛かって来んかい辻い!!?」

「…礼を言います、なら堂々と八つ当たらせて、貰いますよ」

堂々たる奉日本の豪語に、辻は微かに瞳孔の開きを見せ、笑みと呼ぶには躊躇われる獣が牙を剥き出したかの如き狂笑を見せる。

次の瞬間、両者の動きが示し合わせたかの様に停まり。

「…つちえええええええいっ!!?!!?!!?」

「呵………」

猿叫と裂帛の気合いが交差して、二人は同時に飛び出した。そう、少なく共踏み切つて前に飛び出した拍子タイムリは確かに同時であった。しかし。

「ぎあ………つつ!!?」

奉日本自身が改心の出来と認める立ち上がりからその巨体を砲弾の様に前へと放ち、一步目の踏み出した足が床に着くよりも早く、打ち下ろされた辻の木刀が奉日本の脳天に叩き付けられ、奉日本は気が付けば口端から勝手に洩れていた苦鳴と共に顔面から床へと墜落していた。

それは立ち上がりの動きが全格闘技中最も敏捷はやいとされ、必然的に開始直後の高速戦闘域で瞬時の判断を求められる故に、動体視力も思考速度も磨きに鍛えられている筈の相撲取り。その中でも麻帆良において自他共に認めるNo.1の実力を持つ奉日本をして全く視認出来ずに気が付けば喰らっていたと後に言わしめる程の神

速の斬撃。加えてその威力たるや、常日頃から軽くtを超える衝突力を持ってぶちかましを行っている奉日本をして、一撃にて身体から根刮ぎ力を奪い取る致命の破壊力を伴っていた。

まず間違い無く、真剣であったのならば頭部所か身体毎両断されていたであろう必殺の太刀。強靱さも迅速さも、正に雲耀の名に相応しい一撃だった。

それでも、辻の前に立つのは麻帆良内でも屈指の身体能力を持つ、相撲部部长奉日本 豪臣だった。

……流、石じやのう、辻……全く見えん……地べたに顔を付けた以上、相撲取りとしちやあ負け……なんじゃがなあ……!!?

歯を喰いしばって力の入らぬ五体に喝を入れ、再び奉日本は地に伏した体勢から残心を取る辻目掛けてぶちかましに行った。

「一、武道家としてこのまま沈めはせんわあああああつ!!?」

それは至近距離での躲し様が無い肉弾砲。高速で迫る奉日本に対して、辻は焦った様子も無しに対応へ移る。

元より薬丸自顕流が雲耀は全身の力を用いて振り下ろす、二の太刀要らずの一撃必倒が太刀。逆に言うならばもし一撃にて仕留められなかった場合、反撃されて躲したり捌いたり出来る様な余裕は身体に残っていない、ということである。

「…すいませんね、奉日本先輩」

しかし、辻は元より、奉日本へ放った一太刀に全力を込めてはいなかった。

理由としては、本気の一撃を見舞えば如何なタフネスを誇る麻帆良の部長クラスだとしても殺してしまいかねない故に。中学生の当時から化け物地味でいた中村達バカレンジャーをして、何度も彼岸へ葬送りかけた殺人剣である。奉日本の指摘した通り、頭から理性が飛び切っている訳でも無い辻は、己が流派の理念を裏切っても手心を加えることに抵抗は無かった。

最も、だからこそ辻の憂さ晴らしで無駄な打擲を奉日本は喰らう羽目になるのだが。

……俺もこの場に限っては剣士としているつもりは無いんですよ……

武道家としても失格かもしれないけどな、と己を嘲笑いながら、辻は腰の落ちた体勢から後ろ向きに瞬動を行い、奉日本のぶちかましを完全にスカした。

「っー……おのれい………!!?」

「言ったでしょうが……八つ当たるって、ねえ!!?」

失速した無防備な身を辻の前に晒す事となった奉日本は、無念の表情で呻き、辻は何処か苦い笑みを浮かべながらも、裂帛の踏み込みと共に連撃を見舞う。

斜め上方に伸び上がる体勢となっていた奉日本の喉元に弾丸の様な突きが炸裂し、尋常ならぬその衝撃とそれまでのぶちかましの勢いが互いに殺し合う事によって一瞬宙に浮く様にその場で静止した奉日本。さらなる追撃の面打ち…否、兜割とでも言うべき打ち下ろしが今度こそ、250 kgを超える目方の奉日本の全身を地べたに叩き付けた。

僅かに震えた後に、身体を弛緩させた奉日本を一瞥してから、辻は再び木刀を振り上げて次の武道家を見据える。

「……ホント、碌なもんじゃ無いな俺は………」

「……っ!!?、シュツ!!?」

「っ」と

もう何度目になる光景か。鋭い、されど段々と乱れ始めた呼気と共にトランクス姿の男が放つハイキックを、軽い眩きとは裏腹に飛燕の如く翻った手刀で打ち落とすのは空手着姿のオレンジ髪ー言わずと知れた中村であった。グシャリ、と鈍く湿った音が手刀で防禦うけられた男の足の甲で響き、遂にトランクスの男ーキックボクシング部部长 沢村 沖の顔がハッキリと苦痛に歪む。

払われた蹴り足ー僅かに変形し、脛や甲など複数箇所から血の溢れる傷付いた右脚を軸足にスイッチしながら憎々し気に沢村は吐き捨てる。

「……防御しているだけでこれ、か……この化け物が」

「阿呆、てめえの鍛え方が足りねえだけだ。人体やサンドバッグだけ蹴り込んでても僕ちゃん等人間のおみ足は強靱つよくなっちゃくれねえの。俺みたく鉄柱蹴り込めたあ言わねえから、ムエタイの連中倣ってバナナの木でも蹴り込んだらどうよ？」

中村は沢村の悪態を鼻で笑い飛ばしてそんな事を言う。沢村が蹴りを放つ度に中村は拳足でそれを払い、打ち、叩き落とした。その赤黒い手足は人類に属する生命体としてはあり得ぬ程に硬質であり、容易くコンクリ壁を粉碎する筈の蹴打乱幕を受け止めて傷一つの綻びも見せていない。鋼の凶器に優る強度を、鍛錬によって中村の紅い手足は備えていた。

「んじゃ、行くべ」

「っ!!??」

構えつつ、軽い口調で告げられた中村の宣言に、両腕のガードを上げて沢村は迎え討つ姿勢を見せるが……

「うら」

「つぐあつ!!??」

無造作な、しかし凄まじい速度での踏み込みから打ち出された順突きの中段正拳をブロックした沢村の腕が軋みを上げ、激痛が走る。気で強化して尚、中村の一撃は鍛え上げている沢村の橈骨と尺骨に罅を入れたのだ。衝撃に身体の浮いた沢村へ間髪入れず打ち込まれるのは逆腕での正拳逆突き、初撃により空いたガードの隙間から捻じ込まれた鉄塊の様な拳は、炸裂した土手っ腹付近の肋骨を内側に向けて数本を纏めて押し折る。

矢継ぎ早に襲い来る激痛に悶絶しつつも、沢村は己が胴体に拳を打ち込み、至近の距離に居る中村の米神目掛けて肘を振り切る。

ゴキイ!!??という骨が骨を打つ、鈍い音が響き渡った。

「:U〇〇ルールって肘有りだったっけ？」

「……クソが」

肘を受け止めに差し込まれた腕越しに中村と沢村の目線が交差して。

「フンツ!!??…つらあ!!?」

ゴギャリイ!!?と、とんでもない音を上げながら中村の頭突きが沢村の顔面にめり込んで血を飛沫かせ、僅かに距離の空いた隙間から蛇の様に摺り上がった右脚が沢村の側頭部を真面に捉えた。

「グ…!!??つそ…!!?」

尚も堪えようとして膝が抜け、歯噛みしながら沢村が崩れ落ちる。

「おーっし。…ってーかシンドイわマジに!!?どいつもこいつも無駄にタフネス発揮しやがってからに、大胆不敵にして素敵に無敵なこの中村様に跪いて道開けねえたあ脳味噌腐ってんのか脳筋野郎共が……」

「戯言は終わりか?ならばそろそろ行かせて貰うが」

残心を取り終えた後に、まだまだ半数近く残っている己がブロックの他選手達を見渡してからウンザリした様子でブチブチと文句を垂れる中村に、横合いから声が掛けられる。あぁん?と、インネンを付けてくるチンピラそのものな表情で中村が声の主に向き直り、その顔を見て多少表情を真面なそれに変えた。

「……なんだ部長か……」

「ご挨拶だな、どうでもいいが。……構えろ、中村」

真隆は背筋を真っ直ぐに伸ばして軽く腰を落とし、足を前後に開き臍の辺りに左右の拳を置いた、身体を中心に重心を置く構えを取る。空手の中でも伝統派と呼ばれるそれによくある構えだ。対する中村は溜息を一つ吐くと、やや前傾姿勢からアップライト気味に緩く開いた両手を構える、やや変則的なフルコンの構え。一昔前のボクシングにも似た構えを取った。

「試合前はああ言ったけどさあ。…懲りないよねえ部長も。俺に空手で挑むつてのがどんだけ無謀な事か理解<sup>わか</sup>つてんでしょように?」

「自惚れるなよたかだか二十にもならないガキの分際で。追放されたとはいえ外での無差別優勝、此処<sup>麻帆良</sup>では俺を下した程度の事で、空手の頂点に立ったとでも言いたいのか?」

ジリジリと摺り足で間合いを詰めつつ呆れた様に言い放つ中

村。その軽い調子がすこぶる気に入らないらしく真隆は眉を吊り上げて言い募るが、中村は鼻を鳴らして真隆の思い違いを一蹴する。

「理解<sup>わか</sup>って無えなあ部長。俺とあんた：いやあんたらとじゃあ、前提も目標も違い過ぎんだよ。まあ別に理解して貰いたい訳じゃ無えから詳しく語るつもりも無えけど、俺はもう空手最強なんてのは通過点のつもりであり、目標でも何でも無え。強い空手家が居りやあ闘ってみてえけど、空手の世界はもうウンザリだ」

はあ、と溜息混じりに中村は真隆を見据えて、吐き棄てる。

「空手つてのは武道でしようが、人ぶつ倒せてナンボでしようが。：全力で他人ぶつ潰して文句言われて、稽古で骨の一本も折られる覚悟も無えヌルいスポーツ競技なんぞ眼中に無えんだよ。異常と言いたきやほざいてろ、こつちやあ世界最強目指してんだ健康体操野郎が」

「……もう黙れよ、お前」

ドン!!?と鋭い踏み込みの音と共に真隆の身体が、まるで背面が爆発したかの様な勢いで中村に突っ込んだ。槍の様に打ち込まれる右中段逆突きを内受けであっさり打ち落とす中村だったが、真隆の腕は骨を軋ませながらも防禦<sup>うけ</sup>とは到底思えない、中村の破壊的な手刀に耐え抜く。

流石に鍛えてつかと中村が内心で舌打ちしていると、御構い無しに真隆は弾かれた右手を引き様に右上段回し蹴りを連続で中村に見舞う。継ぎ目を殆ど意識させない高速の二撃目に、打ち落として使用<sup>つか</sup>った左手の戻り切らない中村は、軽いスウェーバックで鼻先を掠めさせる様にして蹴り足を躲す。

しかし、真隆は蹴り足が躲されたと見るや素早く叩きつける様に地面へ落とすと、その足をそのまま軸足に大きく一歩踏み込み、左の上段逆突きを仰け反る中村の顔面目掛け打ち込んだ。

「あああいつ!!?」

「……つと!!?」

裂帛の気合いと共に迫る正拳を前に、しかし中村は笑みさえ浮かべながら右手でそれを防禦<sup>ガード</sup>に掛かる。

……ちつと下手こいたとはいえ、俺に払<sup>は</sup>わせ無えとはホントに

腕上げたじゃんよ、部長……………

カツ！と笑顔を溢しながら中村はカウンターの左正拳を腰溜めに引き絞る、が。

パンツ！と中村の想定を遙かに下回る軽い衝撃と共に真隆の左正拳が中村の掲げた腕に叩きつけられる。

「……………あ？」

中村はそれを反射的にフェイントの一撃と判断して、真隆の次なる挙動を見極める為に真隆を注視して。

腕に当たった左正拳が退かれずに掌を広げられて、右顔面を覆う様に目の前に掲げられた事により、中村は真隆の狙いを悟る。

「っんの野郎…!!？」

「しええええええいっ!!？」

轟く気合いの声と同時に、右の視界を覆われて死角となった中村の右側頭部へと、真隆の左上段回し蹴りが炸裂した。

……………よし、決まったっ!!？」

理解し易く言うならば左ストレートからその突いた腕をブラインドにして死角から左ハイキックという真隆の変則的な攻め。簾すだれと呼ばれる伝統派空手の技の一つである。流星に三連撃からのフェイントを用いた奇襲は中村の対応力を超えていたらしく、まごう事無きクリーンヒットを真隆は中村へ果たした。

……………畳み掛けさせて貰う!!？」

真隆は気を緩ませず、左足をそのまま踏み込んで再び軸足にせんと、蹴り足を引き下ろし——

「ぐ、はああっ!!？」

——その最中に一切動作に遅滞無く即座に突き出された中村の左中段逆突きを真面に鳩尾へ喰らい、肋骨のへし折れる鈍い音を体内に聞きながら真隆は吹き飛び、受身も取れずに床を数回転して仰向けに倒れ伏した。

「…っ痛くく、うわくダッセエ。部長にあんな大口叩いちやっついて一発綺麗に貰っちゃったわ、どう見てもこれ一本だな。……………悪りい部長、流星に健康体操は言いすぎたわ。マジに腕上げたじゃん、いやホ



ント馬鹿にして申し訳無え」

バツが悪そうに蹴りを喰らった側頭部を摩りながら頭を下げる中村。真隆は腹の底から湧き上がってくる激痛に荒い息をする吐いて脂汗を滲ませながら、何とか半身を起こして中村を睨み付ける。

「……な、ぜ……………」

「ん？」

息も絶え絶えに、問い掛ける真隆に中村は数本近寄り耳を側立てると。

「何故…………俺の、渾身の蹴りを…喰らって!!?…………即座に、お前は反撃出来る!??」

「……………あ……………」

文字通り血を吐くような真隆の叫びに、中村は天を仰ぎ、ポリポリと頭を搔いてしばらく言い淀んでいたが、やがて腕を下ろすと共に真隆と視線を合わせ、ゆっくりと語り出す。

「まあアレだ、大言吐いといて一本取られてっから偉そうに言えた筋合いじゃ無えんだけどよ、部長。あんたの一発、殆ど俺には効いてねんだわ」

「……………な、に……………」

気不味気に顔を顰めながらも、中村は告げる。

「これが試合や練習ならあんたの勝ちだ、実際面目丸潰れだわな俺あ。…まあでもこれは空手じゃ無えし、先に喰らった方が負けなんてルールでも無え。…………別にアンタが試合感覚で俺と相對してたとは言わねえよ、實際あんた一発入れても調子こかず次へ繋げようとしたもんな」

アンタが甘いのは、と中村は真隆に指を突き付け、ハッキリと言いつつ。

「あの程度の一発で俺の動きを一瞬でも止めらるなんて思っちゃまった事だ。言っちゃなんだがあんたの全力、普段から馬鹿共の馬鹿みてえな重撃喰らい慣れてる俺からすりゃ屁でも無えよ。身体まの鍛えも、気の練り込みも、あんたはまるで足りて無えんだ。…………俺に勝つ為に鍛えて来た、って言ったよな、部長。どう足搔まいても現在のあんたにや、

無理な話だ」

「…ぐ、……………つー……………くっ!!?。」

中村の断言に、真隆は血が滲み出る程に歯を噛み締め、視線で射殺さんとはかりに中村を睨み付けるが、中村は動じない。

「言いたかねえが次元が違えよ。俺はホンマもんの化け物とここ最近闘り合ってたし、それに合わせて死ぬ気のレベルが一段階違う鍛え方をした。…もし何も無かった俺らなら、今よりあんたは喰い下がれたろうけど、それでもあんたにや勝ちは無い。…あんたは強えよ部長、自惚れじや無く俺が真面目に空手やって、一発貫うなんざそうは無えわ。でも俺は、打倒個人なんて狭い目標追っちゃいねえ。色々今はしがらみが出来ちまって、色々やっちゃあ居るけどよ。元々誰より強くなりてえなんて馬鹿達だけで集まって俺等は腕磨いてんだ。俺の土俵に入りたきや、ホントのホントに死ぬ気で鍛えて、出直してくれよ、部長」

今日の所は、俺の勝ちだわ。と中村は最後に告げ、ヨロヨロと立ち上がった真隆へ一歩踏み込む。

「…っ!!?…:…おああああ、あ、あ!!?!!?。」

激痛を無視して真隆は中村を迎え打ち、拳を振るうが、

「っらああっ!!?。」

その拳と交差する様に跳ね上がった中村の左上段回し蹴りを真面に喰らい、糸が切れた人形の様に真隆は倒れ、今度こそ動かなくなる。

「悪いいな部長。ウチのお子ちやまの為、つてのもあんだけどよ。何より俺あ……」

中村は一つ息を吐いて残心を終えると、常人には届かず、また聞こえないであろう人と幽霊の微かな声援のする方へ向けて拳を掲げる。

「…可愛子ちゃんの声援貰ったときながら負ける訳にやあいかねえのよ」

『あ!!?綾瀬さん綾瀬さん!聞こえたみたいですよ、中村さんほら手

を振ってます!!?」

「…どういう耳をしているのですかあの人は。というか試合中に余裕ですぬ」

「……………うゝゝん……………」

「あらあら、宮崎さん、しつかり」

「きゃー本屋ちゃん大丈夫!??余裕が無いのはこっちよもー!何この世紀末空間!??!!?」

「明日菜明日菜ー、落ち着きやく、辻先輩達とドンパチやれる言うとなんやからこん位の地獄絵図は想定しとかな〜」

呆れた様に手にしたメガホンを口元から下げる夕映の頭上でさよがはしゃいで手を叩き(鳴らないが)、あまりのバイオレンスな光景の連続に目を回したのどかを千鶴が介抱し、悪鬼羅刹共の殺し合いの凄まじさに明日菜が現実を疑い、木乃香はそれを宥めようとしていた。

全身鎧の巨人が手にした長大な斧ハルバード槍で周囲の武道家達を人形のように薙ぎ払い、傍目からは虚空から溶け出る様にして現れたとしか思えないラバースーツの美女が何が起きたかさえ悟らせずに一人の武道家の意識を刈り取り、ランナーウェアを着た黒マツチヨの巨人がクラウチングスタートからの突進でソニックブームを巻き起こし、直線上の全てを薙ぎ払う。人種年齢性別体格武門競技、全く以って全てに共通点の無い多種多様な人物達が、磨き上げた己の一芸を披露し、闘技場は戦場と化していた。

観客席は大いに血湧き肉躍るの様相を呈し、湧き上がっていたが、少なく無い数の知り合いがこの地獄の様な光景の一助を担っているところとあっては、彼女達は無責任に騒いではいられないらしい。

「いやにしたってこれは無いわよ!!?なんでこんなちよつとファンタジー混ざった格闘漫画で主役かライバル役張れそうな魔人共がこんなに存在してるわけ!??」

「うーん、麻帆良だからしょうがないんじゃないかしら?」

「正直その台詞は現実逃避ですよ。…まあこの半人外達の中でも先輩達は別格のようですね」

「せやなく古ちゃんも楓さんも勝ち残つとるし……問題はネギ君とコタ君やなく」

「……うう、ネギ先生が、ネギ先生が……!!?」

「のどかのどか、すっかりしい……わーな、なんかネギ君とコタ君がトランクスの黒人と薙刀の人に絡まれとる……!!?」

「あら……あの方は確か、麻帆良大学の太刀嵐先輩ですね……」

「え、あ!!?あの辻先輩に絡んでた!!?……つて言うかネギ……!!?」

「なっ!!?……ネギ先生吹き飛びましたよ!!?」

『はわわわわわ……!!?な、何とか中村さん達に助けて頂けないんでしようか!!?』

「……難しいでしょうね。そもそもブロックが違いますし、何より豪徳寺先輩達も、決して余裕は無さそうです」

これ以上無くピンチに陥っているらしい子供二人の様子に3-A一行は色めき立つが、当然のことながら観客席からでは何も手出しのしようが無い。

「……やはり、中村先輩達の仰る通り、参加は止めさせるべきだったのでしょうか?」

見るに耐えない光景に眉を顰めながら夕映がポツリと呟く。

「……ううん。夕映ちゃん、それは違うわ」

しかし、明日菜はそんな夕映の言葉に違を唱え、先ほどまでの狼狽4表面上だけとはいえ沈め、はつきりと言い放つ。

「先輩達は相当厳しいし危険だからできれば止めておけ、とは言っただけど、無理だ、なんて言わなかったもの。それを聞いた上でネギと小太郎はやるって決めたんだから。……ガキンチョだからってその覚悟を無にしちゃいけないわ。……あたし達が今やるべきは、今更どうしようも無いこと悔やむんじや無くて、あいつ等が勝てる様に祈って、応援してやる事よ!!?」

キヤーキヤー騒いでたつて現実が変わらないんだから、声出してくわよ皆!!?と、決意を秘めて立ち上がった明日菜に一同は顔を見合わせ。

「……そうですね、元より化け物の様に強い先輩達は兎も角、外野が勝

手に悲観して嘆いていても始まりません。のどか！目を回して無いで、ネギ先生に声援を送りますよ!!?」

「うう……………、…うん!!?」

「あらあら、じゃあ私はネギ先生達は勿論だけれど、皆さんの分まで先輩方を応援しましょうか」

「あはは〜那波さん強いなく、明日菜もよう言うわあ、さっきまで一番ワタワタしとったのに〜」

「う、うっさいわね木乃香!!?…ネギ〜小太郎〜!!?…気張りなさい正念場よ〜!!?」

『皆さ〜ん!!?…頑張つて下さ〜い!!?…!!?』

果たして少女達の声は、少年に力を与え得るのか。

「お、お姉様、横から凄いのが…………お兄様後ろ!!?後ろです〜!!?」  
「大丈夫かよオイ、魔法使いチーム…………俺っちにも出来ることがありやあなあ…………」

「ま、アタシ等の出る幕は無えナ」

「まあ私達も一応応援はしましょうカ〜?」

「…………勝つたらすらむいとあめ子が粘液プレイ……………」

「誰がやるか阿呆!!?」

「貴女がやりなサイ!!?」

「…………解つタ」

「「エエ!!?」」

「…………真面目に応援しようぜ嬢ちゃん達……………」

「お、お兄様危つ、お、お兄様〜!!?…!!?」

10万UA突破記念SS 第2弾 中村と愉快的な仲間達

『真夏のくそ暑い今日この頃、夕映つちに至ってはいかががお過ごしでしょうか?と、いう訳で納涼会しようぜ納涼会!!?明日の13:00に図書館島の前に集合な、水着持参のこと。』

P・S・ 折角だから水着は露出度高い奴だと嬉しい主に全俺が。スエクスイタ映っち降臨に期待しちゃうゾ☆』

「……………」

夜も更け出したPM20:00、寝台の上で少々行儀悪く寝転がりながら読書をしていた夕映の元にそのツツコミ所満載のメールは送られて来た。

見なかった事にして読書を続けようかとよっぼど思った夕映であったが、現在己の抱え込んでいる形容し難いある感情を鑑みてしまえば、色々な意味で台無しという表現がこれ以上似合うことは無いであらうこの残念男の残念メールを無視する様な事は出来ないのだと、ある種の諦念と共に夕映は理解していた。

……色々な意味で彼方にしても此方にしてもそれ以前の問題を幾つも抱えていて、到底あり得ないと現状判断している事が前提とはいえ……恋する乙女とはもう少しロマンティックな気分相手のことを考えているものではないのでしょうか?……………」

乙女などという柄では無いですが、と些か自嘲気味に鼻を鳴らしつつも夕映は溜息を吐く。

まったく本当にどうして、だ。

「よりにもよって何故アレなのでしょうね…趣味が悪いにも程があります……………」

ゴロリと身をベッドに投げ出し、ぼんやりと天井を見つめながら夕映は独りごちた。

……何ともはや、つくづく規格外な御仁でござるなあ……………」

楓はポカン、と口を開けて呆けている夕映と共に一列横並びとなつてつつ立ちつつ、目の前の非常識な光景に苦笑を禁じ得なかった。

燦々と柔らかな陽の光が降り注ぐ、半ば水没した樹々と本棚、白い砂浜に彩られる、静謐な雰囲気の漂う図書館島深部の湖畔。その澄んだ水辺に半ば身体を浸からせる様にして羽根を伸ばし静かにリラックスした体勢で横たわるのは、燃え盛る炎の様に鮮やかな朱色の鱗で全身を包んだ巨大な竜ドラゴンだった。

我関せず、とでも言う様な細目かんぼせで顔を伏せたその竜ドラゴンーキャサリンことキャシーの背上、身体の中心部辺りにブーメランパンツ一丁の中村が、足元にすらむい達スライム三人娘とさよを侍らせつつ、手に持ったデッキブラシを高々と掲げて宣言する。

「それではこれよりいっ!!?我等がマスコット兼ヒロインたるキャシーのボウデイウオオツシュを、行いまあああああす!!?!!?」「イエー」「ソープランド…」

『が、頑張ります!!?』

イエエエエエエエエエエイ!!?と高速のタップダンスを刻むウザったいテンションの中村へすらむいとあめ子がポチョパチョ、と水っぽい音を立てて棒読みな歓声と共に適当な追蹤を送り、相も変わらずぷりんは下ネタ連想ゲームに余念がない。ふんすと可愛らしい鼻息を立てて張り切っている様子のさよが唯一の癒しであろうか。最も、直後にドタドタとステップを刻み続けていた中村が喧しいわとばかりにキャシーの尾によって薙ぎ払われ吹き飛ぶ様子に、さよの口からは続けて悲鳴が上がった。

「……何なのでしょうか、あの人は?……………」

何処からツツコミを入れれば良いのか解らないこの状況に、呻く様な声で疑問を漏らした夕映の様子に、悪いとは思いながらも楓は思わず破顔する。気配を察したのかやや無然とした表情で見上げてくる夕映に手振りで謝罪をしながら、楓は湧き上がってくる何とも言えな

いその気分には、上機嫌にて独りごちた。

……きつとそれが易々と言葉などでは表し切れない、不可思議にして愉快な御仁だからこそ、こうして拙者達は逢いに来ているのだと思うでござるよ、夕映殿……………

「まあ中村殿だからしょうがないでござるよ、リーダー？」

クスリと口元に笑みを浮かべて、湖面から這い上がってきた中村に夕映の背中を押しして歩み寄りつつ、楓は悪戯っぽい調子でそう告げた。

「鱗の掃除……………ですか？」

「おうよ」

俄かには概要を理解し難かったのか、眉根を寄せて言われた言葉をそのまま返す夕映に対して、中村は事も無げに頷いた。

「ほう、キャシー殿は普段湯浴みや水浴び等行わないのでござるか？」  
「うんにゃ、基本的に竜<sup>ドラゴン</sup>ってな老廃物やら排泄物が殆ど発生しねえらしいんで生きてく上では特に必要無えんだそうだがよ、やっぱ普通にしたりや塵やら埃やら身体に付くもんだべ？ 偶くに此処来て水浴び位はしてたんだと」

一方早くも順応している楓の質問に答える中村。全くペットの世話も碌にしねえたあやっぱあの野郎生かしちゃおけねえな！と憤る中村がまたもやキャシーの尾による一撃で壁面まで吹き飛び、小さくないクレーターを作るのを無感動に見届けた夕映は、何がツボに嵌ったのかクツクツと震えて笑声を洩らす楓を余所に冷たい口調でヨタヨタと覚束ない足取りで戻って来た中村へ告げる。

「一々遠くへフェードアウトしていないで話を進めて下さい中村先輩」

「それが洒落にならねえ一撃喰らって割と深刻なダメージ受けてる先輩に対して言う台詞かい夕映っち!? 最近益々俺に冷たくねえかちよつと〜?」

哀れっぽく中村は両手を組んで抗議の声を上げるが素気無くスルーされ、ガツクリ肩を落とすも数瞬で立ち直り、今度は素知らぬ顔



で寝そべるキャシーへ声を張り上げる。

「つーか何すんだよキャツシー、ペット呼ばわりがそんなに気に入ら無かったかよしようがねえじゃん門番やってるとはいえ自分で狩りしねえでエサをあのヒツキーから貰ってる以上どう高く見積っても精々番けオバアアツ!?」

皆まで言わずに今度は上から下へと振り下ろされたキャシーの尾が中村を砂浜に半ば埋め込んだ。キャシーはフン、と鼻から蒸気を洩らして不機嫌そうに一つ息を吐いた後に再び僅かに擡げていた首を再び砂浜に横たえる。

「……お、おのれいこのツンデレ飛竜があ……………」

「欠片もデレている様には見えなくてござるが?」

「戯言はさて置き中村先輩、キャシー……さんが定期的に水浴びをしているのならば先輩の言うボディウオッシュ云々は必要が無い様に思えますか?そもそも何故それに私達を呼ぶのですか?」

「おーい中村ー、遊んで無えでさっさと始めようぜー」

「さっさと終わらせて美味しい水奢って下サイー」

「…竜尾ドラゴンテイルスパンキング…………ふふ命知らず…………」

『な、中村さーん!??大丈夫ですかー!??』

ピクピクと痙攣しつつ、這々の態で埋もれた砂浜から這い出しつつ恨み言を吐く中村の状態を見事にさよ以外がスルーしつつ各々が言葉葉を吐く。

「…畜生、モテ男への道は遠いぜ……………」

戯言をほざきつつも中村はなんとか半身を起こし、話を纏めに掛かるのだった。

「……はあ、つまり水を被った程度では落ちない奥の汚れを落とす、と」

「ウイー、マドモアゼエール」

要点を纏めた夕映の言葉に巻き舌で返す中村。

「キャシーもレディーだからなあ、自分なりに身綺麗にやあしてるみ

たいなんだが、何分生き物として俺らたあサイズ大きさに雲泥の差があつからなあ。俺らで言えば毛穴に詰まってる老廃物だの皮膚上に浮いてる垢だのを目で見て一つ残らず落とせなんて言われたらまあそりや無理な話だべ？それにキャシーの鱗殆ど金属みてえな硬さと質感だからよ、磨いてやればもつとテカつて綺麗になつと思うのよ」

んなもんだからスラ娘達も呼んで徹底的にやつたらかと思つてな！と無駄に爽やかな笑顔でサムズアップをする中村に、夕映は疲れた様な、楓は楽し気な顔でそれぞれ了解の意を返す。

「ふむ、拙者竜の湯浴み手伝い等産まれて初めての経験でござる。喜んで協力させて貰うでござるよ」

「普通の人生を過ドラゴンごしていれば竜の身体を洗う、等という選択肢は登場しなくて当然かと思いますが……ともあれ、まあ、特にやる事も無いので構いませんよ。ただ体力面を考慮して、あまり戦力になるとは期待しないでいただきたい所ですが……」

温度差はあるものの色良い返事を返してくれた二人だったが、中村は不思議そうな表情を浮かべてヒラヒラと手を横に振り、言葉を返す。

「いんや？楓ちゃんも夕映っちもんな大変そうな作業は手伝つてくれなくてOKよ？女の子呼び付けて肉体労働させようなんて真似を紳士な俺様がする訳無えじゃん」

「およっ…」

「……ならば何の為に我々に声を掛けたんですか、中村先輩？……」

不思議そうに首を傾げる楓の言葉を代弁する様に、ジト目で夕映は問い掛ける。中村は温度の低い視線にもめげること無く、あつけらかんと答えを返す。

「だからメールにも書いてあつたら夕映っち、納涼会に呼んだのよ二人は!!？水着持参つて書いたろ？こんなクソ暑い日にこーんな綺麗な湖があんだから、泳がない理由は無いでしょうちよつと!!?…お二人にお頼み申すのは年頃のおにゃの子の澆刺とした肢体……いや様子をボディウオッシュに勤しむ俺様ちゃんの傍らで見せ付けてくれて俺のモチベーションアップに貢献して頂きたいのでござえますよ

Do you understand?」

段々早口になって行き、最後の方は殆ど息もつかずにビシィ!!?つと両の人差し指で楓と夕映を指し示しながら言葉を送らせた中村に對して、夕映は蜚<sup>ゴキブリ</sup>でも眺めているかのような冷たい眼差しを返して言い放った。

「率直に言いますが気持ち悪いので死んで下さいです先輩」

「グハアツ!?!?」

言葉の刃がグサツと中村の心臓を抉り抜き、中村はゆっくりと回転しながら地面に崩折れた。

『中村さん!!?!?しっかりして下さい!!?!?』

フワリと棚引く尾を靡かせ、ピクリとも動かない中村に近寄りユサユサとその身体を揺さぶるさよだったが、そんな健気?な少女に對して中村は、まるで急激に歳を取ったかの様な力無く弱々しい目線を、冬眠明けの亀の如き鈍い動きで首を擡げて向け、やはりか弱く震える声にて告げる。

「さよ……ちゃん……俺が、死んだら……思い残して化けて出ることの、無いよう……俺の遺灰を、麻帆良女子高の女子更衣室の…床と壁と天井、余す所無く塗り込めて、く…れ……………」

『な、中村さーん?!?嫌です、死んでしまうんですたら幽霊になって、私とずっと一緒に居て下さい!!?!?』

「我が生涯に……百九十八片程悔い有り……………ガクリ」

『中村、さん?……………!!?!?つ、中村さーん?!?!?!?』

安らかな表情で身体から力を抜く中村の身体に取り縋って名を叫ぶさよ、非常に良く出来た三文芝居である。

「こんなキモい遺言初めて聞いたぞオイ。つーか百九十八片とか悔い有りまくりダロ、灰塗り込めてもぜってえ化けて出るぜ?」

「とういかガクリって口に出して死んだフリする人初めて見たデスウ」

「……大和撫子系気弱幽霊天然ロングストレートぼっち娘……ふふ数え役満」

「……とうかさり気に告白地味た事を口走っています、さよさん

のアレは天然ですか悪ノリですか？」

「存外狙って言っている可能性もあるでござるよ、夏は女を積極的にするらしいでござるからなあ。…ふふ、うかうかしてられんでござるな夕映殿？」

「……何を仰りたいかは大体察していますが、私を数に含めないで下さいです」

素直で無いでござるなあ、という楓の言葉を無視して夕映は無表情のままズンズンと歩を進め、死んだフリを続ける中村の頭を軽く蹴り飛ばして注目させる。

「アウチ!??夕映っち最近ツツコミと言動が厳しくね?」

「自らの行いを省みて反省すれば手も口も飛びはしないですよ、自業自得です。それよりも中村先輩、私達を呼んだ目的に関しては解りたくはありませんが理解しましたが、何故に私を呼んだのですか?」  
「はい。」

質問の意味がわかりません、とばかりに首を傾げて夕映の方を見やる中村に、夕映は苛立った様子で起伏の無さが悲しい己の胸に手をやり、自嘲気味というよりは半ば投げやりな口調で言葉を紡ぐ。

「楓さんは解りますが、私の様な貧相な体型で顔もそれ程良いとは言えない、更には口まで悪いという三重苦なチビ女を呼ぶ理由は無いでしょう、といった意味合いです。声を掛けなければ角が立つ等と考えているのでしたらそれこそ余計な……」

「ストップストップ夕映っち、何よダウンな空気出しちゃってらしく無えぞ?」

ありがとなさよちゃん!!?と寄り添って来ていたさよに一声掛けて跳ね起きた中村は、唇を尖らせて夕映に言葉を投げ掛ける。

「自虐的になるのは止めえやね夕映っち。確かに夕映っちのお胸は少々所では無く慎ましやかで寧ろ挟れてんじや無えかと不安になるようなナイ胸だが……」

「わかりました、その喧嘩格安で買いましょう」

「その分厚い本鈍器どつから出したのよ危ねえっ!??……ともあれ夕映っち、胸の大小なんざ気にすんだけ無駄ってもんよ。俺あ巨乳も貧乳も

等しく魅力的だと思ってんぜ、何処ぞの淫獣も言ってるが大きいオツパイは包まれない、小さいオツパイは包んであげたい、つてなあ！大体夕映っち、仮にスレンダーバディがマイナスポイントだったとしても夕映っちは美少女だし女の子からの罵倒なんて寧ろご褒美でしょ!?? 自己評価が低いのもいい加減になさいってホバアアツ!??」

語りの最中に夕映の手によって本を顔面に叩き付けられ、中村は転倒する。

「何!?? なんなのよキレキャラで売っていく訳夕映っちは!??」

「喧しいです!……さて置き、下心ありきとはいえお気遣いには感謝しますが、私も手伝うですよ」

「why!??」

乙女のように両手で顔を覆い、嫌々と首を振りながら砂浜を駆け回る中村のリアクションに一切構わず、夕映は仄かに赤い顔をパイと背けながら踵を返して、ズンズンと湖畔の岩陰に歩んでいった。

「もう一年頃の女の子は繊細過ぎて扱いに困るわあ……」

『…ふふふ、中村さんが女心を理解してないからですよ?』

「ええさよちゃんにまで言われた!??」

起き上がりながらしなを作り、クネクネと身体全体を蛇の様にくねらす中村に、さよがクスリと笑いながら言葉を投げる。ほぼ無条件で味方だった筈のさよからもツッコまれたのが地味にショックだったのか、中村は顔をムンクの叫びが如く縦に押し潰した。

「然り、でござるな。まあ中村殿、働いている人間を他所に水遊びではバツが悪い気分になるというものでござる。キャシー殿に拙者らは学祭でお世話になったでござるし、ここは一つ恩を返す意味合いでも協力させて頂くでござるよ」

「……………うゝん……………」

結局労働力として呼んだみたいになって悪いなあ、という中村の眩きに女性陣は笑い、スライム娘達は、アタシらは初めから労働力として呼んでたろーガー! と思いきいに中村へタツクルをかましていた。

「これってよーまんま掃除家電のアレだヨナー……」

「私達の奥の手をまさかお掃除に使うとは恐れ入りマシター」

「…飛竜の性感帯が見つからない……」

「何をしてやがる（ですか）ぷりんは」

体長が二m程に膨れ上がったすらむい、あめ子、ぷりんの三体が身体から湯気を立てつつ、掌から高温の蒸気スチームを高圧で放ち、キャシーの背中側の鱗を洗浄していた。正しくその姿は高温・高圧の蒸気でガラスやサツシ、風呂のカビから車の油污れまでも綺麗に落とす、年末大掃除に忙殺される主婦の頼れる味方、ジェットスチームクリーナーそのものであった。

「……大丈夫なのですか、あの子達は。熱湯で身体を作ったりなどで、体組織が壊れたりしないのですか？」

すらむい達の後方から蒸気によって浮かされた汚れをデツキブラシで刮ぎ落としてつつ、夕映が隣の中村に尋ねる。

「んーあいつらによると強酸性の劇薬とかでも無けりやあらゆる液体を身体として纏えるらしくてよ、熱湯はちつと負担が掛かるけどあんま長い時間そうして無きやあ大丈夫らしい。身体の本体つつーか内臓であり脳味噌も兼ねてるみてえな核コアつてのがあるらしんだわ…殆ど透明で見えねえけど。で、それは柔つかくてあんま頑丈じゃ無えらしいが、温度差には結構強いんだよ」

しっかし熱湯で出来た幼女とか闘いたく無ーよなあ、二mの幼女つて長身系少女とはまた違ったジャンルの萌えじゃね、…巨女きょじょ?などと眩きながら中村は手際良くブラシで鱗を磨いて行く。中村を挟んで夕映と逆隣りの楓はやたらと楽し気にブラシを動かして進みつつ、足下のキャシーに声を掛ける。

「キャシー殿、遠慮無しに擦りまくっているでござるが、痛くないでござるか？」

大声での問い掛けに返ってくるのは低い唸り声、心無しか心地良さ気な弛緩した響きを伴っているようにも感じる。

『大事無い、続けるが良い』だとよ、もう！キャシーったら男女問わずに魅了して奉仕させちやう魔性の女!!？」

「……理解出来ているでござるか？」

「うんにやニユアンス。でも今まですれ違いがあつたこた無えから合つてんだろーよ」

「また適当な……」

呆れた様に呟く夕映に何故かドヤ顔でサムズアップしてから、中村は後方の水着姿のさよへ声を掛ける。

「すわあよちゅわあん!!?大丈夫ちゃんど汚れ流せてる疲れて無えー!??」

『あ、はーい!!?大丈夫です中村さん!キャシーさん綺麗になつていきますし、私の方も違和感とかはありません!!?』

「そっかー!でもちよつとでもおかしいと思つたら直ぐに言いなさいよー!!?」

『はーい、ありがとうございます!!?』

パールホワイトのフワフワとしたフリルの付いたバンドウ型の水着を纏ったさよは上機嫌な様子で、ポルターガイスト騒霊現象によつて持ち上げた巨大な水球から水をシャワーの様に振り撒き、すらむい達、中村達の後へ続きながら残つた汚れを洗い流していた。元気に返事をしてくる姿からも何ら不調は無さそうに見える。

「えがったえがった。この分ならさよちゃんを遊びに長時間連れ出しでもなんら問題は無えな、俺の魔力も持ちそうだし」

「……ツツコンでよろしいでしょうか中村先輩?」

「あによ?」

「……さよさんはどうやって衣装を変えたのですか?寡聞にして服を着替えられる幽霊というのは聞いたことがありませんが……?」

夕映の疑問は最もであり、ゴースト幽霊の類は一般的に死んだ時、若しくは本人にとつて馴染み深い服装と状態で格好が固定されているものがあり、着替えも何も先ずこの世のものならざる幽体には服に触れる事など出来はしない。故にゴースト幽霊の格好とは固定されているものである。

中村はああ、と得心のいった顔になり、頭をさよから夕映の方へ向け答えを返した。

「どうよあの水着さよちゃん色白だから超似合つてね!??最初はマイクロビキニにしようかと思つただけど幾ら何でも貞淑そうなさよ

ちゃんには似合わねえしキツイかと思ひ直したんだけどよ」

「本当に最悪な企みしか持ちませんねこの男……待って下さい、つまり中村先輩がさよさんにあの水着を？」

相も変わらず下世話な思考を何故か得意気な表情で告げて来る中村にウンザリした顔で罵倒しかけて、夕映は中村の言葉の意味に気付いた。

「そーそー。皆で水遊びだつてのにさよちゃんだけセーラー服のまんまじゃ可哀想だべ濡れ透けになる訳じゃ無えし……ウオツホン!!? つー訳でおれが水着買って来てお焚き上げでプレゼントしますた!」  
「どうよ?と自慢気な中村をスルーして夕映と楓は顔を見合わせる。

「…お焚き上げ、というと……」

「故人の想いが籠った形見の品などを焼くことによつて供養する、というあれでござるか?」

「うんうんそれ」

中村は頷いて肯定し、説明を続ける。

「つつても俺がやったのは日本の退魔屋や霊能力者なんかを除霊や供養なんかを使うそれで、普通のお焚き上げとはちつと意味合いが違うらしいのよ。死んだ人間に思い出の品を手を取らせて正気に戻そうとしたりすつ時に使われるらしんだがまあ詳しくは知らねえや。俺はこれ利用すればさよちゃんにも物くれられんじやねえかと思つて教わつただけだからよ」

俺の勘は正しかったぜ、と自慢気に鼻を鳴らす中村に楓が続けて尋ねる。

「何方がそのような?」

「刀子せんせー。ほらあの人色々あったけど今幸せの絶頂じゃん、実に気前良く教えてくれたわ。ちよつと前ならピリピリして学生の際で不純異性交遊云々と喧しかつたらうなあ……」

「ああ……」

と、楓と夕映は声を揃えて納得の声を上げる。苦節ウン年の努力が実つたのだ、今頃大人の夏を満喫している事だろうというのが全員の共通認識だった。



「よくやるでござるなあ中村殿も」

「こんぐれえは当たり前えよな。たつて俺あさよちゃんの一の親友だぜし・ん・ゆ・う!!? そうじゃ無くて野郎は女の子が為に金を惜しまねえもんだべや?」

カラカラと高笑いを上げる中村だったがその言葉を聞いて何故か二人は微妙な表情になる。ややあつて夕映が珍しくオズオズとした様子で中村に問い掛ける。

「……中村先輩……」

「はい夕映つちなんでござえましようかあ!!?」

「……中村先輩はさよさんにモーションを掛ける気は無いのですか?」

「……うん?」

あまりに予想外な質問だった為か、ハイテンションな空気を霧散させてゴキリと90度近く首を傾ける中村。

「……悪りい夕映つち、質問の意味がいまいちよく解らん」

「いえ、ですから……誰彼構わず節操の無い中村先輩が、とりわけあれやこれやと気に掛けているさよさんに対して先程親友、と断言していただきましたので……言葉尻を挙げ連ねるつもりはありませんが、少し気になったものですから……」

「ああ、ああ成る程、理解了解」

中村は何度も頷いて了承の意を示してから、事も無げに言い放つた。

「やだなあ夕映つち、そもそも俺みたいのが女の子に振り向いて貰える訳無いでしょうに」

「っ!!?……」

夕映と楓は思わず絶句し、それから長い沈黙を挟んだ後に震える声で言葉を紡ぐ。

「……自覚が……あつたのでござるか……!!?」

「ならば何故……普段の言動を、改めないのですか……?」

「そりやまあアレよ、自由に生きてえんだ俺。実際そうしてっし」  
あつけらかんと中村は言葉を紡ぐ。

「取り繕ってカツコつけて女の子と付き合っても絶対俺は長続きしない自信があんのよねえ。だったらありのままでの自分にいる、の、よ〜つてな風に行動して、その上で素の俺を好いてくれるおにやのこ見つけようと思つてよお」

今の所全戦全敗だけどな！と胸を張って堂々と宣言してから畜生イケメン死ね!!?と怪気炎を上げてブラシの速度を上げる中村に、夕映が半眼になりながら問い掛ける。

「……では懲りずにナンパをしているのは?」

「億分の一くれえの確率で奇跡が起こって領いてくれる娘がいるかもしれねえじゃん。大体さよちゃんみたいな器量好しだったら俺の兆倍イケメンで性格紳士で真摯な野郎掴まえるに決まってるでしょ〜」

中村の言いように、楓と夕映は再び顔を見合わせて同時に溜息を吐いた。

要するに中村という男、自己評価が限りなく低い（普段の言動を鑑みれば適切な自己判断とも言えるが）為、普段何かと積極的な割にその実受け入れられるとは全く思っておらず、そもそも異性に己が好意を持たれるという前提を頭の中で想定していないが為これ程までに鈍いらしい。

「え、何、どしたのおめえら凄え顔して……?」

「……中村先輩は馬鹿ですね、今更周知の事実である筈の認識を通り越す位に馬鹿なのですな……」

「然り。全くもって一分も反論の余地無くその通りでござるな」

「あつるえー?俺という概念が酷く念入りに馬鹿にされてんだけどもし?」

……やっぱり、凄く優しいなあ中村さんは……

さよは何とも言えない幸せな気分で、新たに水を湖から持ち上げるとキャシーの背中に浴びせかけて汚れを洗い流す。無論掃除に幸福を覚えている訳では無い、さよ自身の生活事情の変化からだ。

誰にも認識して貰えずに、独り孤独を抱えていたほんの一、二カ月前までが嘘の様に、今のさよは満たされている。級友達と声を掛け合い、お喋りに勤しみ、遊びに行く。当たり前な一人の女学生としての日常というものを、さよは漸く数十年越しに取り戻せた気分だった。

更にさよは今現在、流行りの水着なんてものを好きな人からプレゼントされて、一緒に水遊びなんて洒落込んでいる。

……好きになって、当然だよね……………

相坂さよは中村 達也の事が好きである。

理由は様々あるようで、その実きつとシンプルだ。自分に気付いてくれたから、最初から友好的に接してくれたから、身体を張って助けてくれたから、初めての友達になってくれたから。

要は優しくしてくれたから絆されたのだ。単純だなあと思わないでは無いが、別にちよろい女と言われるならば言われてしまって全然構わないと、さよは自信を持って言える。

……理由なんて何だっていいんだ。私にここまで好意を向けてくれる人なんて、他に絶対居はしないんだから……………

だからさよは開き直って現在の幸福な日々を謳歌している。中村はさよを良く気に掛けてくれ、幽霊であるさよが少しでも普通の女の子と同じように生活出来るように、あれこれと気を遣ってくれている。だからさよは中村に深く感謝をしていて、自分が出来ることで中村の力になれるのならば何でもやってあげたいと考えていた。この位の手伝いなど軽いものだ。

唯、さよは自分の抱えている想いが身を結ぶのは難しいだろうな、と同時に考えてもいた。

「つーか楓ちゃん影分身の海戦術で尾っぽと両脚側やってくれんのはマジで助かるけどすらむい達無しで大丈夫か？背中の面積デカいから三機並列使用してるけど、大変ならすらむいクリーナー辺りを一機貸すぜい？」

「クリーナーって呼ぶんじゃ無えヨ!!？」

「扱いが雑でスウ!!？」

「クリーナー……………バスター犬…」

「やかましいです」

「…………ふふ、大丈夫でござるよ中村殿。これでも壁登りの為のリベリングは得意でござる故」

「楓さん、それはツツコむ所ですか!?!」

…………難しいよなあ……………

生きている中村が恋人を作るなら生身の人間の方が都合の良いに決まっている。さよは当たり前前のことを当たり前前に理解していた。きつと皆優しいから、そんなことは無い、なんて言ってくれるかもしれないけれど、それは純然たる事実なのだ。

最もさよは其れ程悲嘆に暮れてはいない、あくまでも現在は、だが。

級友達と触れ合えて、好きな人と一緒に遊べて。さよは今、充分に満ち足りている。楓も夕映も優しい、いい人だ。彼女達ならば、もし中村と結ばれたとしても祝福出来るのではないかとさよは考えていた。

中村は生きている人なのだから仕方がない。だからさよはぼんやりと、思うのだ。

…………中村さんが死んじゃったりしたら、幽霊になってくれないかなあ……………

…………そうになったら、ずっと一緒に居られるのになあ……………と。

無論さよは中村に今、死んで欲しくは無い。こんな何もかも中途半端な時期に召されてしまったては、中村は一生後悔するだろうし、周りの人達も悲しむだろう。折角仲良くなれたのだ、好きな人が、友達だ。悲しむことをさよは望まない。

それでも、もし中村が死んでしまうような事があつたなら。ネギ一行の中でさよは、さよだけはそれでもいいと思える存在である。

…………中村さんが死んじゃって幽霊になったら、沢山、沢山慰めてあげよう。そうして落ち着いたら、世界中を見て回るなんていいか

もなあ。中村さんが一緒なら、百年だって千年だって、きつと楽しくて幸せだろうなあ……………

ふふつと、まだ見ぬ未来にさよは想いを馳せて、幸せそうに笑う。ああ、なんて自分は幸せなんだろうと。

「さーよちゃんお疲れ様あー！泳ぐおうずええいい!!?」

『はい!!?……………楽しいですね、中村さん』

「さよちゃんが楽しいなら何よりだぜい!!?」

……………全くもって五月蠅い奴だ、あの男は……………

キャシーは灼けつく様な熱を帯びた空気を鼻から吐き出し、溜息にも似た仕草を行う。飽きもせず到他竜ひとの周りで、囀る小鳥の如くピーチクパーチクと喧しい。

「へいへい夕映つち、タンキニとはまた渋いチヨイスでござえますねヒュウウウツ!!?」

「褒めているのですかそれは?味も素っ気も無いと自分で理解していますので、無理に褒めようとなさらなくて結構です」

「いやいやなー言ってるの夕映つち。身体にピツタリしたタンクトップトップスって、まるでスポブラを見ている様で健康的なエロスが有るから個人的に大好物ですハイ!」

「何度でも言わせて頂きますが気持ち悪いです中村先輩」

「罵って頂きありがとうございます!!?……………楓ちゆわくん、半ば本気の発言とはいえボケをスルーって一番やっちゃいけねえ事だと思うんだ!!?」

「仕方がないでござるよ、中村殿は気持ち悪いだけで無くウザったいでござるからなあ」

「ヴ オ オ オ オ オ」なんてこったい楓ちゆわんにまで夕映つちの毒舌が!!?まあそんなことはどうでもいいとしてくわあえでちゆわくん!!?!!?そのシンプルなチューブトップ系の水着はもうアレだね、素晴らしいとしか言えないね!!?悲しいかなこの魅惑の果実が見事に実って無えと単にサラシ巻いたみてえな印象受けるからひんぬーな娘さんには似合わないのよね痛つてえ!!?夕映つち俺夕映つ



生命体は、多くはないものの存在していた。

なんの因果か本の年寄りに掴まり、番人として缶詰にされている現状に不満は多いに有るが、折り合いは己の中で着いている。どう言い繕おうが結局の所、キャシーは己よりも遥かに強い年寄りに膝を屈したのだ。

媚へつらつて惨めに生きる位ならば、とも考えたが、退屈である事を除けば存外此処麻帆良での生活は悪いものでは無かった、別に大層な誇りを抱いて生きていたつもりも無い。無意味に死ぬ位ならば生きるべきだ、とキャシーは思っていた。

しかし退屈だ、退屈なのだ。

侵入者所か生ける者さえキャシーを恐れ近寄りはしない。時間さえも忘却された様な光差す広場で、横たわりただ微睡み続けたこの百年と少しは、振り返ってみても思い起こせる何か等欠片も存在しはしない。生きながら死んでいる様なものだったと、キャシーは思い耽る。

……そう、暇潰しには丁度良い。

……この位に五月蠅い方が、煩わしいが面白い。

ギャアギャアと元気に騒ぐ中村達を見下ろしながら、キャシーは笑う。

殺し合いに近い相対の最中にキャシーの生殖器の話を唐突に始め、年寄りに水を差されて不貞腐れていたキャシーにあれこれ愚にも付かない事を尋ね、挙げ句の果てに名を持たない事を告げれば激昂して己よりも遥かに強者である年寄りに突っ掛かりに行く様な飛び切りの愚か者だ。

良くも悪くも斜め上にブツ飛んだ男の言動は、キャシーにおそらく童生に於いて初めて、愉快という感情を知らしめてくれた。加えて男は頑丈で小さい存在にしては強い。時折キャシーの元を訪れての鍛錬と称する潰し合いは、退屈していた身には頗る愉快的な娯楽である。

そう、言うなればキャシーは、この妙に馴れ馴れしくも面白可笑しい、馬鹿な道化師を気に入っているのだ。





「やめてください変態先輩、常識人椀筆頭のさよさんを汚染しようとするのは」

「ンんだとゴルアアアアアアアツ!!?」

「……唐突にマジ切れ……ふふDV夫婦」

「黙りやがれ（なさいです）下ネタ担当幼女!!?」

「……息がぴったりでござるなあ」

……ああ、本当に喧しい……

キャシーは鰐の様な口元で緩やかな弧を描きながら、磨かれて一層鮮やかな朱色の澄んだ輝きを放つようになった己が鱗にしがみつき、頭の後ろに半透明の幼女を引っ付けてロッククライミングならぬスケイルクライミングを始めた馬鹿な男の飛び込み台になってやる為に、身体をゆつくりと上方へ伸び上がらせた。

「キイエエエエエエエエエエエツツ!!?!!?」

「イエーイー……」

テンションに落差のありすぎる掛け声と共に、手を繋いでキャシーの頭から並んで飛び降り、途中で逆さになりつつ抱き合いながら回転して。水面が迫ると体勢を変え足の裏と裏を合わせて、お互い逆方向の斜め上に跳躍。結果空中にハートの形を己が身体により緩やかな放物線で描きながら再び着水寸前に合流し、抱き合いながら中村とぷりんが巨大な水柱を上げる。

『わああああ……!!? 凄いです中村さん、ぷりんさん!!?』

「確かに凄えけど何で打ち合わせも無しにフイーリングで合わせてこんな複雑な連携が出来んだヨ」

「もう以心伝心とかいう域を越えてますヨネー」

「……とかこれ、描いたハートの形を最後に水柱で二つ割っているからlove<sup>愛</sup>というよりはheart<sup>失</sup>break<sup>恋</sup>でござるな」

「……いえもうツツコミは意味を成さないでしょうから何も言いませんが……」

夕映は身体から力を抜き、（或いは抜けて）水面に仰向けになって浮かびながら、横目で犬神家!!? 等と叫びながら水中で逆立ちにな

り水面からガニ股の両足を突き出している変態馬鹿をボンヤリと見る。

……………本当に、何ででしょうか……………

「……………何であの男なのでしょうか……………」

「言ってしまえば、きっかけは吊り橋効果でござろうなあ」

『うーん、中村さんは普段楽しくおちやらけてくれる人ですけど、いざという時に凄く頼もしいじゃないですか。ぎやつぷ萌え、つていう奴だと思えます！』

「さよ殿さよ殿、萌えは必要無いでござるよ」

「ゴボオツ!?」

しみじみと呟いた1独り言に複数の返事が返って来て、驚いた夕映はバランスを崩してしこたま水を呑み込んだ。

「ゲツホゲホゲホ!!」

『夕映さん、大丈夫ですか?』

「リーダー、驚き過ぎでござるよ」

心配そうに夕映の半身を(騒霊現象ポルターガイストによって)引き起こすさよと、あいあいと背中を摩る楓の二人を軽く睨みながらも夕映は何とか落ち着きを取り戻し、聞き捨てならない先程の言葉の意味を問います。

「……………先刻のあれはどういう意味ですか?」

『え?中村さんを夕映さんが好きになった理由、ですよね』

「リーダーは些か素直で無いので照れているでござるよ、さよ殿」  
「待って下さい」

夕映は堪らず二人の言葉を押し留める。

「リーダー…いや夕映殿。些か以上に往生際が悪いでござるよ?」

「楓さん……………いえ、まああれです。流石に私があの人を憎からず思っているのは認めましょう。ですが私のそれは何と言いますか、お二人のそれとは違うのです」

夕映は懸命に抗弁した。少々以上に捻くれている己の気質があるがまます直に認めようとしないう所為も確かにあったが、それ以上夕映は本気でよく解らなかつたのだ。

「私が好ましく思うのは、知的で真面目な落ち着いた人間です。自己

分析では、懐いていたお祖父様の影響を多分に受けているのだろうと判断しています。：故に年頃の思春期女子にありがちな父性や家族愛と恋愛感情の混同を視野に入れたとしても、余りに中村先輩は私の好みから掛け離れているのです」

それに、と夕映は心の中だけで続く言葉を紡ぐ。

……私はさよさんの様に純粋な好意をぶつけられませんし、楓さんの様に共通して打ち込んでいるものが有る故の共感、親近感を持ち合わせていません……

問題行為云々の追求はさて置いて、夕映は中村の人格を好ましくは思っているのだ、奔放で助平だが面倒見が良く、女性や子供に対しては器の大きさを見せる中村の本質を。

しかし、幾ら普段の言動の大半が巫山戯ているとはいえ、口を開けば出てくるのは憎まれ口ばかり。中村は気にしていない所か時折喜んでいたりもするが、明らかに言い過ぎていた場合も一度や二度では無いのである。

だから夕映は思うのだ。そんな自分がもし本当に中村の事を好きなのだとしても、愛されるべきに相応しい者は他に居るだろう、と。

考えていて何やら暗鬱な気分になって来た己が内心をおくびにも出さずに、夕映は話を纏めようとする。

「ですから、私は……わひやつ!!?」

「んー………肌触りは良シ……」

しかし、何時の間にか足下から接近していたぷりんが水中に沈む夕映の下半身全体を撫で摩る様にしながら夕映の前にポチャリと浮き上がる。

「……ぷりんさん、私は今大事な話を……」

「ん、聞いて夕。………夕映っちの話は、前提が違う……」

眉根を吊り上げて苦言を述べようとした夕映の言葉を遮り、ぷりんは告げる。

「ぷりん」

「……中村を好きになったナラ、中村 達也が夕映っちの好きなタイ

プ。好きなのかどうかで悩んでるなら……ふふ、悩んでる時点で、惹かれてる証拠……」

「……なっ!?？」

何を言うかこの不思議ちゃんは、と夕映はぷりんの両頬を手で挟み込んで持ち上げるが、ぷりんは気にした様子も無くコンビツニツはー♪、と何やら歌を歌い始めた。

『……ぷっーふふふっ……!!??』

「はっはっはっ……真理らしき一言を貰ったでござるな、夕映殿」

「何処がですか!?？」

真剣を通り越して必死そうに見える夕映と無表情ながらお気楽さの漂うぷりんの、余りに落差がある雰囲気の違いが何ともシュールで、まずさよが吹き出し、楓も愉快そうに笑いながらツツコミを入れた。

「……ともあれ難しく考え過ぎない、好きなら好きでいいじゃない。

恋は盲目、命短し恋せよ乙女」

「……そうして思考停止するのは愚かな事と理解わかっていますか?」

「好きなモンはしょ、うが、ねえ♪」

「ネタに走らないで聞きなさいです!」

あくまでも真顔でボケに走るぷりんに堪らず夕映の怒号が突き刺さった。

「何なのですか、本当に……」

「まあまあ夕映殿、焦らずじつくりと、されど思い詰め過ぎずに考えてみれば良いでござるよ」

一通り水遊びを満喫し終わり、よっしゃあアイス喰いに行こーぜっ!!?という中村の鶴の一声によって一同撤収準備を始めている中、夕映は慣れない恋話?からぐったりと憔悴しているのを楓に励まされていた。夕映の苦悩を余所に中村とスライム三人娘、さよ達は相も変わらず元気に騒いでいた。

「ところでアイスって燃えんのかな、ガソリンでも掛けりやいいの?」

「ガソリン掛けたモン食わせようとすんなよボケ」

『中村さん……やっぱりそこまでしてただかなくても……』

「なに言ってるの、皆でスイーツを食べに行くってのに一人だけ食べられないなんて何のイジメよ！あたしは絶対にそんな陰険な真似許さないんだからね!!？」

「何でカマ言葉ですカ」

「……お供え物……?」

「おおっ珍しく真面な意見その卑猥な口から出すじゃねえかぷりん!!  
?でもあれって墓に供えりやいいのかねえ……埒があかねえから一はじめちゃんの嫁に聞か、今日は二人して昼まで寝てねえ筈だし」

「アレ?お二人はもうそんな関係でしたカ?」

「間違い無えだろ、こないだ二人でやってる声の最後辺りが聞こえだし。危うく真つ二つにされる所だったぜ、頭蓋骨を頭に仕込んでおかねば死んでいたな!!?」

『用意周到ですね、中村さん!!?』

「ツツコミ不在って怖ーナア……」

「ツツコミ不在……百合?」

「……こちらの気も知らないで……」

「はあ、と溜息を洩らす夕映。そりやあ惚れた腫れたはこちらの都合である以上、想いを告げる所か好意が確定してすらいないのである。ちらに気を遣えなど、単なる暴論でしか無いと夕映も解っている。解ってはいるが理屈で感情を抑えられるなら世の中戦争が起こったりはしないのである。」

「まあ夕映殿、愚痴っついても始まらないでござるよ。居辛くなつたので無いなら合流しようでござらぬか」

「……そうですね……」

着替え終えた二人は騒ぐ中村達に向かって歩き出す。

「…楓さんは余裕ですね。私の事情は一旦棚上げするとして羨ましいです」

「なに、拙者もまた悩める一人の女でござるよ。産まれてこの方修業の他碌にしないことも無い田舎娘は他にやり方を知らんでござるから

なあ…」

羨望の眼差しで楓を見る夕映に、楓は意外な答えを返した。

「拙者もあまり夕映殿の事は言えぬ身、益強荒男は好きでござるが、それは恋愛対象に向けるべき好きなのか？と問われれば答えに窮する、というのが本音でござる。……一先ず拙者は現在いまの時を充実して過ごしている故に、今はこの関係で満足しているのでござるよ」

先の事は先で考えるでござる、と笑う楓を見て、夕映は一つ肩の荷が下りたような感じを覚える。

「…そうですね…考えてみれば今直ぐ解明しなければどうにかなってしまう、という類の話でもありませんでした…」

夕映はふ、と一つ息を吐いて、両肩と首に幼女三人を乗せ幽霊を引き連れる人誑中村かしの元へ歩み寄る。

「解ってんだろーな中村、ミネラルウォーター俺ら三人合わせて60リだかんナ」

「わーってるつつーの、でも身体の水分入れ替える前にお前らもアイヌ食べよ、確か一応味覚あんだろ？」

「なに食べても美味しく感じるバカ舌ですけどネー」

『お、美味しいんでしたらいんじゃないでしょうか？』

「さよちゃんが真理を言ったぜ！そうだよ食物なんざ美味けりやいんだ美味けりや」

「アイス…：幼女…：おまわりさーん…」

「止めい!!？広域指導員のゴリラや眼鏡なら兎も角、幼女の悲鳴を聞き付けて糞塵くそちり変態あやしいが現れたらどうする!!？今日を最後に俺あ少年院に行つちまうぞ!!？」

「馬鹿なことを言っていないで早く行くですよ」

疲れもせずにテンションの高い中村一同の隣に並び、夕映はグダグダな空気を纏めに掛かる。

「それで、さよさんのアイスはどうかなるのですか？」

「一ちゃんいちごに嫁連れてアイス屋に来させる事にしたからなんとかなべ。あ、そうだキャシー!!？後でお前にも特大アイス玉買って来つから何時もの場所に居ろよ!!？」

「ゴアアアア……………」

「……………因みになんと?」

『『はいはい』的な感じ?一応食ってくれるみてえよ、火竜ってアイス食えんだなあ。つーか夕映っち元気無えけどどうしたよ、泳ぎ疲れたそれとも冷えた?生理不順になっちまうから常備してる漢方薬でもアウチ?!?』

「流石にデリカシーに配慮しろです……………本当に人の気も知らないで……………」

「ほえ?」

「なんでもないです、行きますよう中村先輩。こうなれば兼ねてから挑戦しようと考えていた世界10大珍味の十段重ねアイスを奢って貰うです」

「……………奢んのは勿論いいけどよ。夕映っちそれ本当に美味そうな訳?」

「ええ、確かラインナップはハウカトル、セビチエ、ステインクヘッド、ホンオ・フェ、シユールストレミングの魚介臭系コースを上段に、茶外茶、コピルアツク、ルーテフィスク、カース・マルツウにサルミアッキをトドメにしたデザート系コースが下段の筈です」

「聞き覚えのある奴だけでも世界一臭い缶詰が入ってんじやねーか!!?夕映っち、言いたか無えけど最近単なる変なジュース好きからゲテモノ好きにランクアップしてね?」

「失礼な……………!!?」

ワイワイと賑やかな一行を、何処か穏やかな眼で飛竜が見送っていた。

9話 まほら武道会予選 (中 その2)

「イヤアアアアアア!!?」

「だあああああつ!!?」

浅黒い男が雄叫びと共に繰り出した、床に手を着けつつ身体が反り返らせて斜め上から叩き下ろす様な回し蹴りを、対照的に少々情けない悲鳴を上げつつ黒髪茶瞳のやや目付きが悪い以外に取り立てて特徴の無い少年――篠村 薊が、手に持つ杖を斜めに掲げてギリギリ受け止める。

「っ……ふんっ!!?」

篠村は力を込めて男の蹴り足を弾き返し、杖の先端を男に向けようとして、男の身体が更に傾きまるつきり逆立ちをしている様な体勢から、先程とは逆の足を篠村の側頭部に思い切り振り込もうとしている凶に遅れて気付き、盛大に顔を引き攣らせながら倒れこむ様に回避を行った。

「ギヤアアアアアツ!!?」

「ヒョオオオオウウ!!?」

篠村の髪の毛を数十本程引き千切りながら、颯風を纏った蹴りが危うい所で篠村の頭皮上を通り過ぎる。

そのまま転がる様に男から距離を取った篠村は慌てて頭を撫で、悲鳴の様な怒号を男へ叩き付けた。

「て、てめえもう少して坊主頭所かスキンヘッドにしなきゃならねえ羽目になってたろうが糞野郎!!?」アアアアアアもうやだこん畜生!!?何が悲しくて『平穩無事』を座右の銘に掲げる凡人代表みてえなこの俺がこんな闘バトル技場フィールドで格闘漫画のトーナメント二回戦辺りで出てきそうなヘンテコ格闘家とガチバトルしなきゃいけねえんだ巫山戯んなよおおおお!!?」

「随分と余裕あるじゃないか、篠村薊」

対する男――カポエイラ部部长 田中・マルコス・アレサンドロはややぎこちないニュアンスの日本語でキツく、詰る様な口調にて篠村へ言葉を叩き付けた。



『おおーつとエブロックの篠村選手、何やら泣き言を空に向かって喚いております！男らしく無いですね！解説席の喧囂さん』

『そうですね、日頃生真面目な幼なじみと可愛い後輩を構い倒すのに明け暮れて大分ストレスが溜まっているのでしよう、杖術部所属の篠村 薊選手！因みにそのリア充爆ぜろ君と相對しているのはカポエイラ部の部長、田中・マルコス・アレサンドロ選手、日系ブラジル人です！因みに

先程繰り出された逆立ちになつての回転蹴りはエリローピテコ!! ?カポエイラと聞いてこれを思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか、あちらの言葉でヘリコプターを意味する有名な技だあ!』  
「五月つ蠅えな揃いも揃ってハイエナ共が……………!!?」

篠村は流言飛語も甚だしいデマ（と、少なくとも篠村は思っている）を垂れ流すへ喋る公害▽コンビに憎悪の視線を投げ掛けるが、朝倉も解説もケロリとした表情でそれなり以上の迫力を持つ眼力をスルーした。恨まれたり脅されたり襲われたりと、真実を追求する為の時として手段を選ばない報道部は、危険な目に遭うまたは遭いかける等日常茶飯事だ。少しばかりカタギなお仕事をしておらずとも、基本的に人の良いお人好しに睨まれる位で今更怯みやしないのであった。畜生…………と肩を落とす篠村の顔面目掛けて、アレサンドロの放った顎目掛けての蹴りが飛ぶ。

「ぬあつ!?」

「舐めているのか、このオレを」

仰け反る様にして一撃を躲した篠村に怒りを秘めた眼差しを向け、アレサンドロはジンガと呼ばれる踊る様な左右へのステップでギリギリと篠村へ距離を詰める。

「お前の腕前はもう見て取った！闘い慣れはしている様だし腕前は何とか副主将の端には引つかかろう!!?しかしそれでは到底あの五人衆と切磋琢磨し合うに相応しい腕前と言えんな!!?貴様程度の使い手は吐いて捨てる程この麻帆良には居ると知れ」

「…………俺はしたくて自分から彼奴らとつるみ出した訳じゃ無え…………なんてのは流石に責任他人に押し付け過ぎだから言わねえがなあ。勝

手に人に期待して勝手に失望されても、こちとら知るかとしか言いようが無えわ阿呆」

冷たく言い放つアレサンドロの言げんに欠片も動じず、篠村はそれ以上に冷たく、投げやりな様子でそう返した。

「……成る程、貴様は部活動にも余り積極的に顔を出してはいないと聞く。理由はさて置き、此の期に及んでその態度！貴様に武道家としての精神を期待したオレが間違っていた様だ!!?」

そのぞんざいな返事を受けてアレサンドロの目が危険な形に細まり、吼えると同時に流れる様なステップを一気に加速させて篠村へ躍り掛かる。

「ヒャオオオオオオオオツ!!?」

アレサンドロは右手の人差し指と中指を揃えた二本抜手——テディラと呼称よばれる一撃を篠村の眼球目掛けて突き出す、と見せかけてその腕は直前で沈み、躍り掛かった上体が前転でもするか如く床へと落ち掛かる。抜き手の構えを取っていた右手を床に着き、前進の勢いをそのまま下半身の捻転に転化。床に着いた手を軸にした身体全体を回転させるアクロバティックな後ろ回し蹴り——メイア半 月 回 転ルーアが抜き手をフェイントとして篠村へと放たれる。

対する篠村は明らかにその幻惑的な二段攻撃に対応仕切れてはいなかった。アレサンドロの言った通り、篠村は前衛としての鍛錬を積んでこそいるが、その実力はこのまほら武道会の中では下から数えた方が早い。

「調子に乗んなド素人が」

そう、あくまで肉体のみを駆使した近接戦闘においては。

「つ!!?…:ガアアアアツ!!?…!!?」

蹴りの着弾する寸前、篠村の体前に無数の光球が浮かび上がったかと思うと、次の瞬間それらは高速で前方へ射出。アレサンドロの全身に突き刺さった光球は、凄まじい雷撃と化してアレサンドロの身体を走り抜け、一瞬で五体を麻痺させる。

「…つとあつぶねえ……」

篠村は、雷撃を喰らって威力も疾さも失ったアレサンドロの蹴りを寸前で弾き返す。無理な体勢が災いしてか、そのまま足を放り出したまま横向きに倒れ込んだアレサンドロの喉元へ、篠村は容赦無く長杖ワンドによる突きをぶち込んだ。

「ほれ」

「ゴツ…!?」

短い苦鳴を上げて動きを止めたアレサンドロを見下ろして、篠村は溜息混じりに言い放つ。

「こつちの世界じゃ基礎の基礎サギタ マギカの魔法の射手を対処どころか警戒も出来ない単なる武道家が粹がんな。……まあ自慢出来ることじゃ無えけどな、幾ら腕が立とうが逸般…いや一般人に魔法使つてる時点で魔法使いとしちゃ褒められたもんじゃ無え」

けど悪いな、こつちも仕事なんだわ、と言い捨てて篠村は油断無く長杖ワンドを構え、襲い掛かって来る者がいないか警戒しつつ、何故だか同じブロックになってしまった現暫定的相棒にして幼馴染みを横目で探し――

「……相つ変わらず派手だなあいつのアレは………人に魔法バレにはくれぐれも気を付けろとか言つといてお前の方がよっぽど危険だろうによ……」

――始める迄も無く周囲のガタイが良い男達よりも尚巨大な、3mを越す黒衣のローブとマスク簡素な白い仮面の如き白面の顔かんはせを持つ巨大な使い魔を背にした高音を視認し、篠村は溜息を吐く。ビスチエドレスの様な一部デザインスカートの様な、あちこちに付いたベルトの所為で全体的にはビザールファツションなイメージのある露出度高めの衣服を身に纏う高音は、その幼さを残しながらも伶俐な美貌もあって思いつきり目立ちに目立っている。

「…大丈夫かなあいつ……まあ言つた通りにやってくれば、原理は理解わからずともお祭り人間気質な此処麻帆良の連中は見た目の派手さとノリで追及とか脇に放り投げて勝手に盛り上がるだろうから問題無いんだろうけど……」

篠村は暫しの黙考の後、再度小さく息を吐いて高音の方へと歩き出した。

「……そうだな、どうせ武道家の矜持も騎士道精神もスポーツマンシップも持ち合わせ無え俺だ、高音と組んでさっさとブロック勝ち上がっちゃうおう。まずは本選に出場ねえ事には話にならねえし」

その為にも、と篠村は死人の様な目付きで、目の前に立ち塞がった二m越えのマッスルボディなアメフト防具に身を包む巨漢にウンザリした調子で言い放つ。

「退けや筋肉デブ」

「退かしてみろよ、セツトSet! ハッハッh u ~ ~ t !!?」

「：場外で失格、というのは正直助かりましたわね」

「のああつ!!?」

「うおっ!!?」

「ぎやあああ!!?」

ポツリと呟いた高音の背後で浮かぶ巨大な使い魔の各所から伸びた、黒い布の様な皮の様な不思議な質感を持ったロープか触手の様なそれらが周囲の武道家達に絡み付き、拘束して次々と闘技場の外へ放り投げて行く。

『おーつとーブロックの高音選手が扱う不可思議な巨大人形らしきもの!!? 凄まじい怪力と布捌き? で次々に屈強な武道家達を場外へと放り出すうう!!? 他のブロックも大概だけどまるつきり格闘大会の光景では無いぞこれわあ!!? ……っていうかどうい原理で動いてんのアレ!!?』

『オカルト的なパワーかはたまた麻帆良工学部の最新兵器なのか、是非とも高音選手には予選終了後にインタビューを申し込みたい所ですね』

『おい、なんだありやあ!!?』

『な、なんかヴェネチアの謝肉祭カルネヴァレであんな格好の人見たよ!!?』

非常識な光景は予選開始から各ブロックで散々見てきた朝倉&喧嘩実況解説コンビや観客達にしてもこのド派手な魔法には驚いたらしく、マイク

に向かって声を張り上げる二人を筆頭にざわめきが各所で広がる。

「なんだこいつは!?？」

「ホログラム…幻術…いや違う、質量を持っているぞ!!??」

「ス○ンドか!?？」

「いやペ○ソナじゃね!?？」

「如何でもいいわ、兎に角他者を拘束している以上実体がある!ならば殴って壊せるし引き千切れるということだあああつ!!??」

「よっしやああああ!!??」

しかし武道家達はその異形の巨人に怯まない、明らかに自分達の常識で理解し得ない、謎めいた得体の知れない力だろうと臆したりはしない。

相手が強けりや何でもいい。麻帆良の武道家達における大半が共通している認識であった。

「…成る程、彼我の戦力差を理解せずにひたすら攻め込んで来る様は正直愚か者の集まりだと思ってもいたけれど…、原理は理解<sup>わか</sup>らずとも起こる現象は分析出来る、考えるよりもまず動け、という奴ね。…無謀と言うよりは勇敢だ、と評するべきなのでしょうね」

非常識<sup>バカレンジャー</sup>集団を彷彿とさせるわね…と、高音は溜息を吐く。四方八方から躍り掛かる武道家達を前にしてあまりに無防備な態度だが、別段舐めている訳でも油断している訳でも無く、高音はそれらの攻撃が自分や背後の使い魔に届き得ないと確信しているからこそその余裕だ。

突き出された月牙が、振り抜かれたアイアンクラブが、振り下ろされた棍が打ち出された拳足が。

それら全てが一瞬で全方位に張り巡らされた黒布に遮られた。

まるで金属<sup>ワイヤ</sup>繊維で出来たケープか何かでも打ち抜いた様な、硬性と柔軟性を兼ね揃えた粘りのある壁が、気の込められた武道家達の岩をも砕く攻撃を事も無げに無力化したのである。

「なっ…!!??」

「…侮辱するつもりはありません、が…」

己が全力の一撃を容易く阻まれた衝撃に驚愕の声を洩らした一人の武道家の方へ振り向き、それから周りを見回して高音は宣言する。

「軽過ぎます」

「「……っ!??!」」

ギョルリ、とでも聞こえてきそうな勢いで、攻撃を受けて撓んでいた黒布が巻かれ蠢き、武道家達の突き出した武器や手足を絡め取る。動きを封じられた武道家達に対して、使い魔がその巨体と比しても異様に長く、太い両腕を無造作に振り払う。正しく人ならざる剛力によって振り抜かれた巨腕は武道家達をまるで玩具の様に闘技場の外遙か彼方まで吹き飛ばした。

「……お、のれえええええっ!!?!」

唯一人、素早く武器から手を離し飛び退ったが故に薙ぎ払いを回避した功夫服の男が怒号を上げる。

瞬動による踏み込みによって瞬時に高音の至近へと距離を詰めた男は、不意を突かれて反応仕切れていない高音の胴目掛け全力の崩拳を打ち出した。

直後に轟音が響き渡り、両者の動きが止まって。

「……何故……?!?!」

「お生憎様ですが……」

黒布に巻き取られる様にして静止している己の拳を見下ろして瞳目する男へ、高音はあっさりと言い放つ。

「私の意志に関係無く、私の黒布は私を守護ります」

「……う、おおおおおおおっ?!?!」

黒布が跳ね上がり、男は悲鳴と共に場外へと投げ捨てられた。

『た、高音選手強い!!?!? 巨大人形の圧倒的な防御ディフェンス御によって他選手の攻撃を物ともせず、鎧袖一触と蹴散らしたー!!?!?』

『理解わからないなりに高音選手の戦闘能力を解説するなら、あの巨人が纏っている黒い布とワイヤーロープの様な物は極めて頑丈で自在に操作が可能、更に巨人本体は凄まじい怪力を発揮出来る、位でしょうか?最後の攻撃に関する高音選手の反応からしてあの巨人は自らの意志で高音選手を守護しているのかもしれませんが、所謂オートガードというやつです。いやはや恐ろしいですねー』

実況と解説の声を遠くに高音は一つ息を吐き、辺りを見渡して目当

ての人物を見つけると、眈を吊り上げて念テレバテイア話を使用する。

『篠村、何をグズグズしているの！私達は何としても本選に出場して超 鈴音の企みを白日の下に曝さねばならないのよ、さっさと周りの連中を片付けてしまいなさい!!?』

『平然と無茶振りカマしてんじゃねーよ連中を舐め過ぎだお前は!!?』

恐ろしい速度と重圧感を持って突っ込んで来る、アメフト部のお偉いさんらしき巨漢のタツクルを必死で躲し様に魔法サギタの射手マギカを雨霰と叩き付けつつ篠村が念テレバテイア話で叫び返した。

『俺の見たとこ単に技術とトレーニングの末に氣い発現しただけの連中はそこまで怖くねえ！懐に飛び込まれりゃヤバいがお前は元より通さねえし俺は手数で圧倒出来る。…問題はよお……っうお!!?』

『篠む……!!?』

念テレバテイア話を返している最中に、雷の弾幕を喰らって尚勢いの衰えぬアメフト男のタツクルを躲し様、足を取られて転倒した篠村の姿に、高音が思わず一步踏み出して呼び掛けた瞬間、横合いから黒布を境に突き抜けてきた衝撃にたたらを踏んで二、三步後ずさる。

『随分と余裕のようだけれど、背後の使い魔がガードしてくれているからって、周りを無視するのは戴けないよ、先輩?』

高音が体勢を建て直して睨み付けた先には、袖長のコートを身に纏いチャラチャラと手元の五百円硬貨を弄ぶ、龍宮 真名の姿があった。

「……何をしました?」

「銭投げだよ、日本の古き十手持ちの捕り物師よろしくね」

薄い笑みを浮かべながらの真名の返答に、高音が最前まで立っていた場所の床を見れば、確かに五百円硬貨が複数枚散らばっていた。

……魔力を込めて強化した筋力で、複数の硬貨を集中して同じ箇所に着弾させ強引に衝撃を通した、という所かしら……?」

高音は考えつつも背後の使い魔に指示を出し、更に多くの黒布を展開させた。

「……私は仕事で来ています。貴方も雇われの身とはいえ私達に協力

する立場にあるならば、無用な争いは避けたいのですが…？」

「棄権しろ、ということかい高音先輩？生憎だが、表大会で一千万なんてのはボロい儲けでね。上から指示を受けていない以上は好きにやらせて貰うことにするよ、私はね」

「……金の亡者が」

努めて苛立ちを押し殺し、平静な面持ちで告げた言葉に素気無い返事が返された高音は、小さな声で毒付くと使い魔の両腕を振り上げさせる。

「…いいでしょう、丁度貴女のごことは頗る気に入らずにいた私です」

「おや、奇遇だね先輩。学の無い己が身からの嫉妬という訳では決して無いが……私も気に食わないだよ、魔法世界魔法学校のエリートって存在は」

二人の少女は相対し、今にも両者が動き出さんとした、その時……

「ひつつこいんだよデカブツうううう!!?!?!?!」

「ぐ、がああ?!?!?!」

大音量の怒号が響き渡った。

思わず高音と真名が其方に首を向けると、足を取られてから腕力にモノを言わせて潰れた蛙の様に地面に押さえ付けられていた篠村が、

spiritus lucis<sup>精</sup>五柱を拳に収束させたアツパーカットでアメフト男を宙に浮かす勢いで殴り飛ばした光景が目飛び込んできた。

「あーくっそバケモン共が、下手な魔獣種なんぞよりも絶対タフだろこの手の筋肉ダルマ共。…で、何を睨み合ってたんだよお前ら、曲がりなりにも同組織に組してんだから無駄に唾み合ってたんじゃないよ時間と労力の無駄だろが」

やれやれと首を振りながらの篠村の言葉に、高音と真名は澄ました表情でそれぞれ言い放つ。

「喧嘩を売ってきたのは龍宮さんの方からよ、篠村」

「心外だね。私としては誰を残すかと考えた時に、高音先輩よりは篠村先輩の方が色んな意味でやりやすいから取捨選択を行おうとしただけなんだけれどね」



「…合わねえだろうとは思っていたけどホント仲悪いなお前ら」

「悩まなくてもいいような事ばかりで悩んでいるねえ篠村先輩。余計なお世話というのは些か厳し過ぎる物言いだけれど、放っておいても誰も貴方を責めたりはしないと思うけれどね？」

深々と溜息を吐く篠村と、苦笑して肩を竦める真名の背後から、それぞれ道着姿とトランクス姿の選手が躍り掛かる。

「篠村…!!？」

「おや、危ないよ先輩？」

「魔法の射手 高速 光の一矢」

不意を突かれた篠村の窮地に高音が声を上げ切るよりも早く、真名と篠村がそれぞれ互いの背後の選手目掛けて硬貨と光球を撃ち出し、硬貨は篠村の頬を掠めかけるギリギリの弾道で選手の眉間を、光球は真名の肩上がりギリギリを目にも留まらぬ高速で疾り抜け、選手の顔面に着弾する。

白目を剥いて昏倒する二人の選手を余所に、篠村と真名はまるで何事も無かったかの様に会話を続ける。

「この私が眼で追い切れない魔法の射手とはいよいよ良い腕だね篠村先輩。先輩のような人は私の様な何でもありの傭兵稼業でこそ真価を発揮すると思うよ？」

「あまり買い被つてくれんな、しがない魔法組織の下っ端だよ俺は。…ともあれアレだ、要するに金だろ？お前らが何で揉めてるかは知らんが、少なくともお前の方は金で引いてくれるよな龍宮？」

やや唐突にも思える篠村の言動に、真名は軽く眉を顰めるが、聴てクスリと僅かに笑みを浮かべて言葉を紡ぐ。

「あまり金の亡者みたいに言われるのも不愉快なんだけれどね…と  
言いたい所だけれど、そうだね篠村先輩。私は然るべき金銭を手に入  
れられるならば、全てとはいかないが大抵の理不尽な条件を呑み干せ  
る女だよ」

しかし話が早くて助かるね、と流し目で見られた高音は眦を今迄以上  
に吊り上げると、篠村目掛けて声を張り上げる。

「篠村!!？」

「五月蠅えがなるな、決して内輪と言いつれ無えような信頼の無い関係だろうが、内輪揉めしてる場合か今が。：龍宮、こんな状況だから単刀直入に言うがこのブロックの勝ち上がりは俺と高音にしたい。報酬は出させるからお前には本戦出場諦めんのと、周りの排除を手伝って貰いたい」

「……ふうん……」

高音を抑えて発せられた篠村の言葉に、龍宮は硬貨の束を握っていたのとは逆の手に袖口から新たに束を出して握り、背面から密かに接近していた武道家へ抜き打ち気味に連撃を叩き込みつつ答える。

「二つ程。まず報酬次第で私は本選を勝ち進みながら各種要請にも従えるのだけれど、私を本選に進めない訳は？」

「あーそれはな……」

篠村は答えながら高音に目配せを一つ飛ばし、ジリジリと間合いを詰めて来る周囲の選手に無詠唱且つほぼ一瞬で紡ぎ終えた魔法を解き放つ。

「魔法の射手 連弾 高速戒めの風矢」

パン!!?と短い炸裂音と共に、篠村の手中から再び常人では残像すら視認不可能な速度で放たれた七つの光弾は、回避所か碌に身動きさえ出来なかつた七人の選手の脚に着弾した瞬間に、光り輝く縛鎖となつて選手達を地面に拘束する。

「なっ!??」「っ!??」「んだこれ……!??」「What!??」

いきなりの攻勢に驚愕する武道家達だったが、そんな彼らの戸惑いに全く構うこと無く、次の瞬間高音の操る使い魔から放たれるワイヤーロープの様な黒い束の群れがその全身を打ち据える。

「先ずお前はこの大会のルールで闘り合った場合、俺や高音より弱いだろうから、だな?」

「…篠村、後で覚えていなさい……!!?」

「…へーいよ……」

「返事はキチンとしなさい!!?」

「五月蠅えお前は俺の母親か!??」

まるで片手間の様な気軽さで他選手を制圧しながらギヤアギヤアと言いつつ二人の姿に、真名は呆れた様な感心した様な眼差しを向けながら続く言葉を投げ掛けた。

「…成る程、異論反論は無いでもないけれど一先ず理解したよ。なら次に、私に本選を諦める以外を要求しないのは？」

「有り体に言つて信用出来ん。お前の人格がでは無く職業が故に」

バツサリと篠村は真名を切り捨てに掛かる。

「一流の傭兵は先に受けた依頼を決して違えないんだろ？フリーランスで腕と信頼がモノを言う世界だもんな、後から更に金を積まれたからつてホイホイ裏切つてちゃ誰もお前を雇いやしねえ。…要するにぶつちやけ金次第で何でもやるお前が超 鈴音側に付いていない保証が無いから表立った事以外にお前には何も頼めん、お前が一流でもそうでなくても変わらな」

「……へえ……」

篠村の言葉に、呟き一つ洩らしてから意味深な笑みを浮かべて黙り込む真名の様子に、ええ何こいつ何か怖いんですけど…と篠村が内心ビクついていると、高音がやや慌てた様子で、テレパティ念話にて問い掛ける。

『篠村！今の話は……！』

『慌てるなりアクションするな、動作で密談がバレる。……いやぶつちやけ殆どこんなモン言いがかりに近い難癖だよ？でも念を押すならこの位の用心は必要だろ、仕事なんだから失敗しました、じゃ済まねえんだし』

『……けれど貴方、それを正面から何故告げるの？そもそも貴方に彼女へ報酬を払う云々の権限は……』

『ああ、心配すんな。でもって次弾放つからお前も追撃の用意しろ。言つちまえばこの問答時間稼ぎみたいなモンだから』

思念で答えつつ、篠村は何事かを考え込む真名へ更に言葉を紡ぐ。「序でに言つとくが受けるかどうかの返事は早めにした方が良いでしょう？仕事無くなるからな、お前の」

その言葉に、真名は何事かに気付いた様子で一瞬眉を上げ辺りを素早く見渡し、

「……やられたよ。初めからそのつもりだったね、先輩？」

「うん」

遂にハッキリとした苦笑を浮かべながらの真名が発した台詞に、篠村はあっさり頷いた。

「……どういふことかしら、篠村……？」

「ん」

疑問符を浮かべる高音に篠村は顎で周りを指し示す。そのぞんざいな仕草に眉を顰めながらも高音は周りを新たためて見回して、こちらを遠巻きに疎らに散った武道家達を視界に納める。

「……だから何が言いた……？」

言葉の途中で、高音は篠村が先程口にしていた仕事が無くなる、という台詞を思い出し、篠村の真意を悟る。

『あ、理解わかったか高音？』

『呆れたわ……貴方最初から騙すつもりであんなことを？』

『悪いかよ？効率的に仕事進めようとして何が悪んだ、少なくとも暫定身内相手に真正面から喧嘩売ろうとしてたお前よりマシな思考しているわい』

『……この……！』

『文句は後!!？後で聞くから一先ずシヤラップ!!？』

ピシヤリと高音を黙らせてから真名に向き直る篠村。真名は楽し気に笑うと、篠村の顔を見返して告げる。

「私と話している間に周囲の選手を沈めてブロック内の他選手排除、という条件の一つを私が実行不可能にさせておいて、いざブロック内に私と先輩達だけになったら二人掛かりで私を制圧……で合っているかな？」

「うんまあ大体は。なまじお前も寄って来る連中片手間に迎撃してたから気付くの遅れたみたいだな？……も少し言うならそこまでお前を敵認定はしてねえよ。俺は単にお前が損得をしつかり見極めてくれんだらうからお前が此処予選を降りざるを得ない状況に持ってきたかっただけだ。今話を呑んでくれんなら上に掛け合って仕事に協力してくれた、って名目で金はある程度出させるし、もし出なくても俺

が個人的に支払いはしてやる」

別にお前を敵認定はして無いよ、と篠村は念押ししてから話を纏めに掛かる。

「お前は俺達二人にここでは勝てない、超 鈴音云々の疑いは俺個人の裏付けも無い言いがかりで組織としては現状お前に思う所は無い、此処の連中はこんな風に何時迄も話の片手間で相手していい連中で無い、金は出す。∴以上の理由からお前にはさっさと協力体制に移って貰いたいんだがどうよ？」

「解ったよ、それで構わない」

話し終えて伺いを立てる篠村に、真名はあっさり了解を返す。

「……………えらい簡単に頷いたな？」

「判断が遅くても良いことは何も無いし、私の稼業は必要以上にプライドを大事にはしないものさ。逆らっても草臥れるばかりでメリツトが無さそうだし、ね」

半ば騙し討ちを喰らった様なものだというのに、妙に楽しそうに答える真名の様子に、問題無く纏まった筈が却って気味悪げに篠村は高音に尋ねる。

「……………なあ高音、なんでこいつはこんな楽し気なんだと思う？」

「私を知る訳無いでしょう。纏まったならさっさとやる事をやりなさい」

「……………なあ高音、この際俺が気に入らねえのはもういいからせめて仕事の時は…」

『だからさっさと仕事に取り掛かろう、と言っているのよ』

今度は逆に有無を言わせない形で遮られた篠村は不審気に高音を見やるが、何処となく不貞腐れた様に顔を顰めてこそいるものの、表情から考えを押し量る事は出来ない。

「……………女つてのあ理不尽だ……………」

「先輩がキチンと気に掛けていればいいだけさ、こと高音先輩に関してはね」

やり切れない想いを込めて篠村がポツリとつぶやいた言葉に、やはり楽し気な笑顔のまま真名がツツコむ。

「……あんだ？お前まで茶化すか龍宮てめえ。何遍も言うがな、俺と高音は…」

「解っているよ、中々拗れてはいる様だけれど、私から口幅つたい事を言うつもりは無いさ。…ただ先輩、後悔すると理解わかっているのなら、みつともなくとも恥をかいても動くべきだと思うよ？」

やさぐれた篠村の返しにしたり顔で頷いきながらも注釈を付ける真名。それに対して篠村は意味有り気に視線を真名の背後に送り、鼻を鳴らして言葉を返した。

「言ってるじゃねえかよ口幅つたく。……ならこつちも言わせて貰うが、お前こそ自分の周りの関係きつちり清算してからさっきの言葉吐けよ」

「………どういう、っ!?？」

その言葉に眉を顰めて疑問を口にしかけた真名は、背後で急激に膨れ上がった殺気を感じて咄嗟に大きく飛び退き、その場を離れる。

次の瞬間、寸前まで真名が立っていた場所に轟音を上げながら巨大な人影が突き刺さり、闘技場床の木材を爆発的に周囲へ散らばしながら半ばその身を埋めた。

「………よう龍宮あ、随分と楽し気に歓談していたみてえじゃあねえかよ………」

そんな恨めし気な言と共に、土煙を裂いて床の大穴から這い上がって来たのは、鈍い光を放つ金属製の外骨格を纏った、手入れをしている様子の無いぐしゃぐしゃの髪がモミアゲや口髭、顎髭と完全に一体化している熊の様な大男だった。

「………ボダイアーマー、かしら………」

「…パワードスーツ駆動式機甲鎧ツツって奴じゃねえの………なんにしろホレ、昼間のツケでも払ってこい龍宮」

「………成る程ね………今の私は確かに、他人のことをどうこう言う資格は無かったらしいよ、先輩………」

いきなりな展開に高音が最前迄の不機嫌面を何処かへやって半ば呆然と眩く中、気の無い様子で高音に応えつつ、軽い調子で真名を促す篠村。それに対して真名は奇妙なまでに力無く答えると、普段クー

ルな面立ちを崩さない彼女にしては珍しくはつきりと気の乗らなそうな鬨めつ面で熊男に相對する。

「…………ご機嫌如何かな、鬼島副部長？」

「これが喜色満面の面にでも見えんのか龍宮あ？ああ!!？」

荒い語調で真名の挨拶へ返答した男——バイスロン部副部長 鬼島 友多は、低い駆動音と共に身構える。

「龍宮あ、てめえ何でこんな風に俺が怒髪天突いてるか、真逆解らねえなんて言わねえよなあ？」

「…ああ、芹沢部長の件だろう、副部長？」

「つたりめえだボケエ!!？」

「…………芹沢つて？」

「…………昼間俺らと龍宮が警備でかち合った時に龍宮に告白仕掛けて文字通り玉砕したあのイケメン兄ちゃんだよ……………」

「…………ああ……………」

『おおーっと、何やら先程から色んな意味でド派手に人が空飛んでいたIブロック、何やら選手同士で話し込んでいたかと思えばSFちつくな機甲戦士の乱入だあーっ!!？』

『あれは麻帆良工学部の開発した外骨格式駆動式機甲鎧パワードスーツであり、装着した着用者の身体能力を平均して3, 8倍にパワーアップさせてくれるというれっきとした兵器ですねー、因みに着用しているのはバイスロン部内で鬼教官の異名で恐れられる、副部長鬼島選手です。工学部とは何の関係も無さそうな人物ではありますが、性能実験でしょうか？』

「龍宮あ、俺は他人の色恋沙汰にあれこれ首を突っ込む趣味は無え。芹沢は確かに俺の大事な友人だが、恋愛なんてのは個人の自由だ。あいつがどんなにいい奴でも、お前があいつを受け入れるか受け入れないかは自由だよ」

だがなあ、と鬼島は眦を一層吊り上げ、射殺す様に苛烈な視線を向けながら真名を怒鳴り付けた。

「真剣に想いを告げようとした一人の男にタマ麻酔弾ぶち込むとか正気かて

めえは!!? 断るにしてももつと幾らでもマシな方法があったろうがあ!!?…真面に身動きも出来ねえ身体になって芹沢は嘆いてやがったぞ!俺は龍宮君にこんな事をされる程に嫌われていたのか、つてなあ!!?」

鬼島の言葉に真名は一瞬だけ辛そうに眉を顰めたが、直後に軽く首を振り、顔を引き締める。

「……芹沢部長が特別どうという訳では無い、と言いたい所だけれど、そうだね。言い訳の余地が無い程酷い真似をした自覚はあるよ」

「そうかよ、まあお前の心情なんざ俺はどうでもいいけどなあ?

………実際、お前が理由も無くンな真似をしねえ女だったのは知ってんよ、そんな女に芹沢が惚れてたまるかってんだ。あいつの他にも撃たれてダウンしてる輩がゾロゾロいるらしいしなあ、なんか理由があんだろが?」

だが、そんな事情は俺にやあ関係無え、と鬼島は言い切り、重い地響きと共に前へ踏み出しながら高らかに言い放つ。

「どんな理由があれ、てめえの行為を俺は決して容認出来ねえ!!?だから俺は龍宮、お前を沈めるぜ。俺自身の怒りの為、そして芹沢の為になあ!!?程良くボコボコにして医務室送りにしてやらあ、先に寝ている芹沢と嫌でも顔突き合わせて、もっかい昼間の続きをやりやがれ!!?どうせフられるにしても、そうしてきつちり清算しなきやああいつはこの先一生悔いが残るんだからなあ!!?」

覚悟しやがれ!!?と剥き出しの殺気を叩きつけてくる鬼島に対して、真名は一つ息を吐くと両手の硬貨束をポケットに仕舞い込み、代わりに懐から小さな球体の山を握り込んで取り出した。

それは指弾つかに使用つかされる真球の鉛玉であった。

「……先程も言ったが言い訳をするつもりは無いよ、鬼島副部長。私は私の都合で身勝手に芹沢部長を手酷く袖にした、貴方の言い分は一片の誤りも無く正しい。……しかし私は嫌な女でね、悔いが無いでは無いが、非を認めるつもりは毛頭無いんだよ。今更芹沢部長と顔を合わせるのも、叩きのめされて痛い目をみるのも真つ平ご免なんだ……返り討ちにさせて貰うよ」



「上等だオラ、寧ろあつさり受け入れられたらどうしようと思つてた所だよ…怒りのやり場が無くなつちまうからなあ!!?」

片や静かに、片や激しく敵意を燃やしながら、一人の男の純情に端を成す闘いが幕を開ける。

「……よし、と言つていいかどうかは解らんが、今の内に残りを片付けんど高音。仕事の成否には煩い奴らしいから、これならば上にもどやされずに済みそうだ」

「……色々と言いたい事はあるけれど、そうね。先ずは勝ち上がりを確認させましようか…」

取り込み中の真名は一先ず手を出さずに残りの選手を倒す方針に変えた篠村と高音。

「愛衣がいないパターンで何時も通りに。俺足止め、お前トドメ」

「言われる迄も無いわ。…今更だけれど、なるべく目立たない様に行きましよう」

「お前の魔法は目を惹くなつて方が無理だろ本当に今更だな……あ、そうだ。お前俺の教えた口上ちゃんと唱えたか?」

篠村が問い掛けた瞬間に高音はピシリと固まり、油の切れた人形の様な動きで篠村の方を向く。

「……私はコスプレイヤーじゃ無いわ」

「いやしようがねえじゃん。お前のそれは俺のと違って原理不明の如何にもな謎パワー発揮してんだから、魔法の存在秘匿の為にここは頑張れよ」

「私は此処に出ている変人達の同類じゃないわ!!?」

「叫ぶなよんな泣きそうな面で見えるな!!?同じ原理不明でも元ネタが割れてれば麻帆良だから有りなんだろうで納得するから此処の奴等は!!?祭りの最中なんだから悪ノリは後に引き摺られないから!!?頑張れ高音、これも仕事だ!!?お前は課せられた役目を放棄するのか!!?」

「っ!!?…ぐう!!?…………っ!!?!!?」

篠村が発した最後の一言が真面目で責任感の強い高音の柔らかい

所を貫いた。高音は目を剥き、全身を瘡の様に震わせながら真つ赤な顔で歯を喰いしぼり、やがてポツリと怨嗟の声を洩らした。

「……………篠村……………本当に後で覚えていなさい……………!!?」

「八つ当たりじゃねえか……………と書いてえトコだが解ったよ、俺の所為でいいから、さ、行こうぜ」

「……………!!?」

形容し難い表情の高音を連れて、篠村は残りの武道家達と相対する。

「…つてなんかさつきよりも減つてねえかお前ら?俺と高音をどうにかしなけりゃ勝ち上がれないのは明白なんだから、此の期に及んで潰し合いやってねえで連携の一つでもすりゃいいだろ」

呆れた様な篠村の言葉に、されど武道家達は不敵に笑つて各々構えを取り、高らかに謳い上げる。

「笑止!!?貴様の言い分は戦略上においては正しいのだろうが、それは一武人として取るべき行動では無いのだ!!?」

「然り!!?貴様らは貴様らのやり方で研鑽を行い、その不可思議な戦闘力を得たのであろう!!?麻帆良ではどれ程奇妙奇天烈だろうが強ければ全てが認められる!ならば貴様らは徒党を組んで倒すべき化生の類いでは無く、真つ向から挑んで打ち倒すべき一人の強者よ!!?」

「生憎負け犬よろしく群れて噛み付く様な闘い方は学んできていねえ。叶わねえなら更に鍛えてまた挑む、そんだけの話なんだよ!!?」

「先ずは私のから行かせて貰う!!?強者を前にして臆しては永遠に最強への道など切り開けないからなあ!!?」

「……………へーへー(立派な事で……………」

無駄に熱いそれらの口上に気の無い素振りでも返しながらも、篠村は内心で微かに苦いものを感じる。

……………俺にやあ真似の出来ない熱血ぶりと、生き様だわなあ……………真似したいとは思わんが、羨ましいっちゃ羨ましい生き方だぜ……………」

成る程、あの五人の馬鹿の思考は麻帆良のキチガイ共共通のそれらしい、と一つ頷いてから、篠村はあつさりと言いつつ。



「だとすれば近距離パワー型だ!!? 遠くにはいけないが素早くて精密な動きをするぞ!!?」

「馬鹿が今迄なにを見てやがった!!? 奴の動きからしてスタプラ系じゃ無えよ、能力がヤバイ系か防御力からして純粹にパワー系統が極まってるタイプだ!!?」

「待て!!? という事は篠村君の殆ど見えないあの攻撃も、もしや○タンド……!!?」

予想以上の喰い付きを見せる武道家達に若干気圧された高音だが、ここまでくれば勢いだとばかりに乗りに乗った仕草で前方を指し示し、決め台詞を叫ぶ。

「謝肉祭の始まりよ!!?」  
カルネヴァーレ

無数の黒布と黒縄が、奔流と化して武道家達へ襲い掛かった。

「……何をやっとするんだ、あいつらは………」

「ゲゴ、ボ、ゴボガボオ……!!?」

ガツチリ極めたフロントチョークスリーパーで柔道着姿の男に泡を吹かせつつ、麻帆良広域指導員の生ける伝説、バイオハザード生物災害杜崎 義剛は嘆息した。

「ギャハハハハハハハ!!? 高音、今お前サイツコーに輝いてるわヒヤアハハハハハハハハハハア!!?」

「殺す!!? 殺してやるからそこで待っていなさいスクールカーストの無能男篠村 薊い!!?!!?」

「「ぐおわあああああつ!!?」」

『乱舞乱舞乱舞ううううつ!!? 黒布がワイヤー? が舞い狂い人をゴミの様に吹き飛ばすう!!? 最早鬼神と化しています、何やら怒髪天を突いている高音選手の操る巨人! 高音選手の先程の口上によればなんとこの巨人は高音選手のスタン○との事です!!? リアル格ゲー選手の手次はリアルス○ンド使い!!? この大会果たして何処へ向かって

いるのかあああ!!?」

『いやはや盛り上がってまいりましたね!あの○タンド、ビジュアル的に第五部のヴェ○チア辺りで登場してくればピツタリだと思います。龍宮選手と鬼島選手の激闘も続いていますし、いよいよイブロックは闘技場がヤバいかもしれませんねー』

まあ一言で表すならば大騒ぎである。

「ははは、まあ高音君のアレは魔法の存在を隠匿する為のカモフラージュとして言っているんだと思いますよ、杜崎先生」

ゴドリと白目を剥いた男を情け容赦無く床に放り捨てた杜崎へ、もう一人の生ける伝説、死の眼鏡高畑・T・タカミチが笑って告げる。

「呑気にお喋りしてんじや無えぞデスメガ……!!?」

ズボンのポケットに両手を突っ込んだ無造作な立ち姿の高畑に、選手の一人が怒号と共に拳を構えて打ち掛かる、が。

高畑は欠片も動じずに、ポケットに入れた拳を居合いの要領で腰を切って高速抜拳。更に魔力による増強により、視認すら不可能な超速度となった拳で打ち放たれるのは大気の圧力。余りの速度と威力に物理的な衝撃と化した拳圧は、無防備に突っ込んできた武道家の顔を真面に打ち据える。

「……っ!!?・舐めんじや無えぞオラア!!?」

しかしこの場に参戦している時点で彼も気を発現させた超人への頂きを登り始めし男。例えその一撃が普段行っている組手の下手な全力打撃などよりも遥かに強い威力を秘め、完全に鼻骨を砕かれ少ないダメージを頭に喰らっていたとしても、一撃で戦闘力を失いはしない。

しかし。

「悪いね、もう少し修業して出直してくれ」

高畑のそれは連射が可能なのであった。

武道家は初撃により足の止まったその瞬間、機関銃の如き拳圧の嵐に全身を打ち抜かれ、意識を飛ばされて倒れ伏す。

「それは解りませんがね、こんな馬鹿騒ぎの勢いに油を注ぐ様な真似を

せんでも「死ねやゴリラアア!!?」：五月蠅いわ社会不適合者が!!  
?」

高畑の方を向いて話していた杜崎は、己の言葉を遮って飛び掛かってきたヤンキー風の男が振り下ろした光る鉄パイプと交差する様に杜崎が素早く突き出したした拳がヤンキーの顎を真面に捉える。顎チジャブによって脳を揺らされたヤンキーの襟首をジャブによって突き出したままの腕を以って驚掴んだ杜崎は、そのまま片手一本でヤンキーを吊り上げ、野球ボールか何かの様に闘技場の外目掛けて投擲した。

悲鳴を上げながら大きな放物線を描いて地面に激突し、タンフルウイード回転草の様に転がるヤンキーを見もせず、杜崎は嘆息と共に高畑の方へと振り返ろうとして、視界の端から球状の何かが高速で己の顔面目掛け飛来して来るのを捉えた。

「フン!!?」

杜崎は振り向く動きを利用しての裏拳をその球体に叩き込み、迎撃する。が、その球体は凄まじい勢いで放たれた裏拳が炸裂した瞬間に弾け割れ、圧縮した空気の破裂する甲高い音を上げながら四散した。

「……バスケットボール?……っ!!?」

舞い落ちる球体の破片の一つの、特徴的な模様と質感を見て取った杜崎が予想外の事態に一瞬気を取られた瞬間、後方から伸ばされた両手に頭部を驚掴みにされ、驚愕の呻きを洩らす。

杜崎に奇襲を掛けたのはバスパンにバツシユと、如何にもなバスケットの姿をした長身の男、バスケットボール部部长 田臥 武彦だった。田臥は獰猛な笑みを浮かべながら杜崎の頭部を振り上げつつ跳躍。身体全体で巻き込む様な高速の横回転を決め、全身と両腕の織り成す二段階の猛烈な振り上げによって杜崎の首をへし折りに掛かる。「喰らいやがれ暴力教師が!!?幾多の強豪からリバウンドをもぎ取った我が究極奥義!デスロールバイトオオオオツ!!?」

「ぐが!!?」

メキリ、と嫌な音を首で上げさせながら杜崎の頭が真後ろに向かつて捻じ曲がりー掛けた所で杜崎の僧帽筋と板状筋が爆発的に肥大

化し、ピタリと田臥の回転が止まる。首の筋力だけで田臥の全身を使った捻転運動に拮抗し、更には人一人を首だけで宙に浮かせているのだった。

「……嘘だろオイ……!?」

「大人しくダンクシュートでも決めていろバスケ小僧がああ!!?」

杜崎はがっしと無防備に浮かぶ田臥の腰を両腕でホールドし、闘技場の床が砕け散る勢いでパワーボムを叩き込んだ。

「ゴハアツ!!?」

「阿呆共が、ここぞとばかりに寄って集って鬱陶しい……!」

床にめり込んで意識を飛ばした田臥を無造作に放り出し、杜崎は歯を剥き出して怒りを露わにする。

「死ねや糞メガネああ!!?」

「自由なる闘争を邪魔すんなやああ!!?」

「君らのそれを黙認したら麻帆良は世紀末都市になるって解らないのか!!?」

一方高畑も四方八方から飛び掛かってくる選手への対応に苦慮していた。威力、速度共に十二分な高畑の居合い拳だが、鍛えに鍛えられた武道家達を単発で倒すには至らない。常日頃から杜崎と高畑に煮え湯を飲まされている彼らは、武道家の理念云々よりも私刑執行の魅力に取り憑かれているらしく、篠村達への様に十字砲火を遠慮してはくれないようだ。

乱戦の中、杜崎は飛び付き腕十字固めを極めようとして来た総合格闘家をしがみつかれた腕ごと振り回して周囲を薙ぎ払いながら高畑の方へ向かって走り、高畑は杜崎の接近を感知すると、カッターを両手に激しく斬り掛かってきていた正面の男へ瞬動で踏み込み、魔力強化した拳にて一撃を決めガードした武器ごと粉碎して吹き飛ばし、穴の空いた包囲網から飛び出して杜崎に合流する。

「唐突ですが高畑先生、篠村達のブロックといい、魔法関係者がある程度一箇所に固められている感がありませんか?」

「で、しようね。一ブロックにつき本選出場者は勝ち残り二名、ある程度ふるい落としを狙ったのかもしれない」

ジリジリと間合いを詰めて来る周囲の武道家達を視線で牽制しつつ、言葉を交わす杜崎と高畑。

「…何にしろ、このままでは埒があきません。目立つのは本意じゃありませんが、ここは一つ本領発揮と行きましょう」

「……そうですね、一般人相手に間違っても使用<sup>っか</sup>う様な技法じゃありませんが、彼ら相手にはそれこそ今更ですから」

杜崎と高畑は背中合わせに構えを取ると、力ある言葉をそれぞれ唱えた。

「喜べ馬鹿共、そこそこな本気で動いてやる…戦いの旋律」メロデーア ベラークス

「左手に魔力、右手に気。……出力だけはわりかし本気で行くよ、覚悟してくれ、君達」

強化としての種別こそ異なるものの、全身に熾火の様な眩い光を纏った二人がその言葉を皮切りに、暴虐の化身となる。

こうして、魔法使い達は己が本文を遺憾無く発揮する。

密やかに、種は撒かれる。

「イヤハヤ、強いネ麻帆良の武道家サン達ハ。予想以上ダヨ、仕上がりはこれなら期待できそうネ」

モニターの無機質な光に照らされながら、超 鈴音はニンマリと笑みを浮かべる。傍らで何事かの分析を行い、キーボードと格闘を繰り広げていた葉加瀬は、ふと気になったことを疑問符として口に出す。

「超さん、魔法関係者の方達を同じブロック内に固めたのって何か意味があるんですか？」

「ウム。面子を確認した時、本気を出させてもバレずに誤魔化されそうなのは精々篠村サンと杜崎先生位だからネ。派手な方達と組んで貰うことで、同調作用から羽目を外してくれることへの期待ダ。他人が既にやてる行為ならば人は遠慮が無くなるものヨ？」

それとネ、と超は薄い笑みを浮かべて葉加瀬を見返し、事も無さ気な口にした。



「きちんと協力し合わせて互いをはきり関係者だと判断出来る様にしておけば、いざという時蜥蜴の尻尾切りで逃げられずに済むネ」

10話 まほら武道会予選 (中 その3)

「ハッ……ハッ……ハ、アッ……！」

ネギは己の荒い息遣いを煩わしく思った。

ここ数ヶ月で、何度も何度も辻達に組手をして貰った。辻は丁寧に、中村は戯けながら、豪徳寺は豪快に、山下は優しく、大豪院は厳しく。

そして全員に共通して、ネギには必要以上の無茶を決してさせなかった。ネギがまだやれる、もっと頑張れる、と幾ら言い募ろうとも、辻達はネギが修練だけに傾倒するのを許さなかった。

ネギが自分の父親、ナギ・スプリングフィールドの手掛かりを得る為にまほら武道会へ出場を目指す段階になっても大きくは変わらなかった。確かに修業の内容は数段厳しくはなったが、それがネギが耐えられ得る最大限かと問われれば、ネギは否と答えるだろう。

何故ならば、理解わかつてしまうのだ。辻達が己に課す修業を見ていれば、否応無しに。

始めて辻達の修業風景、組手を見学した時に、ネギは冗談でも何でも無く、本気で殺し合いをしていると思った。一切の手加減無く（ネギが端から見ているという感じがただだが、実際に当たったら身体が弾けて四散するだろうというレベルの技を禁じている他は何でも有りという殆ど殺し合いに近いものらしい）急所を穿ちに行き、その動きに遠慮は欠片も見出せない。呆然と血が飛沫き、肉が弾けるその光景を目にしていたネギは、我に振り返らず止めに入ったのは良いか悪いかはさて置き、忘れられない思い出である。

『いや、流石に修業の時間内全てをこんな風に全開で飛ばしちやいな  
いよ？いくら俺達でも身体が保つ訳無いからね。精々ほぼ全力のぶ  
つかり合いは一日一度出来ればいい方かな？大概は誰かが組手中に  
骨や内臓痛めるのがしょっちゅうだからやっぱり毎日はやつてない  
ね。それに矛盾した表現だけれど、俺達はこの組手、殺すつもりで打  
ち込んでいるけど殺す気は無いんだ。だから大丈夫、じゃ無いけど見  
た目程危なく無いよ』

等と素面で言つてのける辻と、平然とその無茶な言い分に頷いて  
る他四人を見て、ネギはこの人達は人として何かがズレている、と幼  
いながらに確信したものである。

だからネギは自分が未だ強くなれたとは思っていない。これまで  
一度は敵対者として向かい合つてきたエヴァンジェリン、天ヶ崎 千  
草、白髪の少年、黒髪の青年、両面宿儺、そしてヘルマン達悪魔。  
それらの強さには及んでいない筈の目の前の武道家に、ネギは畏怖<sup>おそ</sup>  
れを感じている。

「オウ……シヨーン、怖いカ？ソウネ、ワタシテカゲン、ヘタクソよ。  
殺すキで蹴れ、言われてきたからネ。だからシヨーン、ギブアップ  
してくれる、助かるヨ。シヨーン蹴トバスノ、キ、ススマナイネ」

ニコニコと、人好きのする邪氣の無い笑顔を浮かべながら、ウツ  
テイ・チャイームエタイ部の部長は朗らかに告げる。その様子から  
は、とても格闘大会の予選の最中という、暴力の渦巻く非日常的な空  
気は感じられない。顔だけを見れば友人と談笑中だと言われても皆  
が納得するだろう。

しかしネギは、チャイが間合いに入るなり、その柔和な笑みを微塵  
も崩さずに、欠片程の戦意や殺気を感じさせざる事無く、空気が千切れ  
て甲高い悲鳴を上げる程疾く、強烈な蹴りを見舞つて来た事を知つて  
いる。

辛うじて風<sup>デクレンフオー</sup>盾による減衰が間に合い、腕でブロックして衝撃に逆  
らう事無く自ら飛び、威力を殺す事に成功したものの、闘技場の端近  
く迄吹き飛んでしまう様なその一撃は、減じて尚ネギの左腕を満足に  
動かさせない程のダメージを与えていた。

ネギは素早く立ち上がり、前に出たものの、笑顔のままジリジリと  
間合いを詰めて来るチャイの不気味な迫力に気圧され、自ら仕掛ける  
事が出来ないでいたのだ。

チャイの纏う空気には、敵意も殺意も無い。ただ其処にあるのは、  
目標に向かう己の障害となる対象を排除しようという、冷たく乾いた

拒絶の意志だった。

……敵意じゃ無いけれど、これは本気で僕に、敵対している…この人は、僕と、真面目に闘おうと、してるんだ…!!?」

ネギに足りないものは実戦経験だ、と辻達は口を揃えて告げた。どれだけ力を付けようと、それを実戦で十全に振るうには相手の敵意や殺意に耐え、また自らも相手を打ち斃す、という意味を己の中に沸かさねばならない。

そればかりは修業や組み手では体感出来ないものだから、と辻達は告げ、ネギに噛んで含める様に言った。

『確かにこの大会であるの怪しい魔法使い?に勝てなければ情報は手に入れられない。そういった意味では次があるから気楽に行けとは確かに言えないな。…でもネギ君、それでも言わせて貰うよ。君が頑張らなくとも、俺らの誰かが必ずあのクウネル・サンダースを斃してみせる。もうネギ君が武道会に出るのを止めはしないけど、それならいつそ自分の力を確かめる程度の、ある程度気楽な心持ちで挑んでくれ。君が一人で頑張らなくても、俺達がいるから。実戦ではやって来たことしか発揮出来はしないけれど、平常心で臨まなきゃやって来たことすらも半分も発揮出来やしない。だからネギ君、重く受け止め過ぎずに、気楽に行きな』

駄目でも何とかしてやるから、という笑い顔を思い出し、ネギは跳ねる鼓動と纏まらない思考に喝を入れる。

辻達なら、本当に何とかしてくれるのではないか、という、最早確信に近い思いがネギにはある。しかし、だからこそネギはその頼り甲斐のある兄貴分達に、ただ寄り掛かるだけの現状を良しとしたくは無かった。

……子どもは大人に素直に頼ればいい、って、何度も言われている…!!?

……でも、それなら僕は、いつ大人に成れるんだ?このまま辻さん達の負んぶに抱っこでいたって、僕は成長出来る筈が、無い…!!?」  
ネギは畏怖れを戦意で拭い払う。

「……貴方を倒して、先へ進みます!!?」

最早逃れぬと不退転の決意を秘め、ネギはジリジリと迫るチャイに、確かな声でそう告げた。

対するチャイは、その宣言を聞いて笑みを微かに薄いそれに変えると、俄かに真剣味を増した固い声で応じる。

「ソ、ウカ……君はヨイ戦士<sup>ナツクモエ</sup>、ナレルネ……シヨーネンのトシで、ソウ言う。……とてもユーカーンヨ。だからモツタナイ思うネ、でも……」  
ワタシ、テカゲンは出来ないヨ。と締め括り、チャイは一步を大きく詰めて。

次の瞬間、ネギの首目掛けて全力の回し蹴り<sup>テツ</sup>が放たれた。

ムエタイの蹴りは空手等の様にスナツプを効かせず、腰を回してその勢いで放たれる、体重を乗せた重い蹴りだ。それでいて相手の急所への最短距離を駆け抜ける為に速度をも兼ね備える、立ち技最強を謳われるにも説得力に足るその一撃。鍛えた武道家をして視認すら碌にままならぬその一撃を、しかしネギはその身を屈め、紙一重といえど避けてみせた。

チャイは僅かに舌打ちをして蹴り足を引く。その引かれた足に合わせてネギが両腕を掲げ顔面を護りながら一気に突っ込んだ。

が、素早く引かれたチャイの右足が地面に着くが否や、間髪を入れずに左ローキック<sup>テツカーサイ</sup>が飛び、ネギの足をへし折りに掛かる。

ネギは左に踏み込む足を大きく逸らし、半ば飛び込む様にチャイの右側面へと移動することにより、薙ぎはらう様な次撃を何とか躲す。

「甘イ」

「がつ……ん？」

しかし。それでもチャイの懐へネギは届かない。空振った足を即座に引き戻したチャイは、三度前蹴り<sup>テイツブ</sup>を無理な機動でバランスを崩したネギの胴体にぶち込んだのだ。

ダメージ<sup>ダミツ</sup>を与えるに有効な距離<sup>ホイエン</sup>にはやや近過ぎる距離であった為にどちらかといえば押し出す様な、吹き飛ばされた事によって逆にダメージの分散する様な蹴りであったが、それでも未だ身体が未成熟であり、魔力による強化にも限度のある発展途上なネギの肉体には少ないダメージが通っていた。

そもそもをしてネギの体軀は年齢に違わぬ小学生並みのそれだ。然程体格が良いとは言えぬチャイをして、その体重差は二倍以上。軽さは衝撃を逃がすには適した利点と言えど、同時にその体軀はリーチの短さという欠点を同伴する。攻撃の度に吹き飛ばされては攻勢に転じることなど叶わないネギは、新ためて己の体格差というハンデの大きさに、咳き込みながら歯噛みする。

一方チャイも、易々と懐に飛び込まれかけた不甲斐なさに内心で軽く臍を噛んでいた。体格の違いは、何もチャイだけに一方的な恩恵を与えるものではない。ネギの小さな身長は、蹴りの連打で接近を阻むムエタイの蹴りにおける上、中、下の蹴り分けを殆ど無意味なものとしていた。バリエーションの減った攻撃は、本来満足に防がせない程の力量差があるネギでも何とか凌げるものとなっている。

「…マ、イイさ。それならフツーにやるダケよ」

しかしチャイは焦らず、再び距離をゆつくりと詰め始めた。確かにネギは体軀が小さい割に動きは麻帆良における副部长クラスでも上位の代物、というやり難い相手だ。しかしその程度のアドバンテージでは、チャイは無傷で勝つ事こそ不可能であろうが、後に響くダメージ無しにネギを降すことは可能だと判断した。

そう、その程度の厄介さを持つ選手等、このまほら武道会には幾らでも存在するのだから。

ゆつくりと、しかし確実に近付いてくるチャイの貼り付いた様な笑みを見やりながら、ネギはタイミングを伺っていた。

ネギは篠村の熱心な指導により、既に魔法の射手を無詠唱で即座に三矢、格闘戦で実用可能な限界時間、一秒から二秒程度で五矢を展開可能である。故にネギはチャイが態々近付くのを待たずに、雷の矢で感電させ動きを鈍らせるなり、戒めの風矢で拘束するなり、自分から攻めに出る選択肢はあつた。

しかし、ネギは待ちを選択肢した。武道会が始まる直前、小太郎と共に、辻達及び篠村や高音から告げられた忠言を思い出した故に。

『無詠唱からの魔法の射手を初見で見切つて対応してくる一般人なん

て、幾ら腕っ節が強くて、もまず存在しない。だから近接技術で及ばなくとも、ネギ先生は積極的に攻めに走るのも一つの手だ。格上相手に防戦主体で挑んでも結局はジリ貧だからな』

『しかし、だ』

篠村の語尾に被せる様に、中村は言った。

『副部長クラスなら正直スペック的に互角以上なんでゴリ押しも出来らあな。…でも部長クラス、それも単に部活内で技術と肉体極めただけじゃ無しに、しっかりモノにした上で麻帆良ストリートファイトに明け暮れてるタイプには恐らく通用しねえぜネギ。麻帆良の猛者の強さは千差万別だ。この無法地帯じゃ何が起こってもおかしく無えってのを骨の髄まで沁み入る程奴等は理解してる。だからネギ、部長クラスの猛者達に相対してまだ、勝つ気があつたなら頭を使え。普通に攻めても攻め切れ無えからな、加えて今のお前の手札じゃ一回しくじれば次は無え。奴等あ一度受けた攻撃は直ぐに対応すつからな。初見殺しの必討法つてのを考えてみな』

チャイは幼い頃から生活を掛けてムエタイに打ち込み、麻帆良に来てからも実力の研摩を怠らず異種格闘技戦ストリートファイトに精を出す、紛れも無い部長クラスの上位実力者である。加えて今迄ネギと相対してきた武道家達と違い、最低限の手加減すらしていない紛れも無しの真剣勝負。ネギは未だ経験の乏しい未熟な己の殻を破る為に、一世一代の大勝負を仕掛けた。

「つつ!!?……シユツツ!!?」

チャイがネギを捉え得る蹴りの間合いの数歩手前。それまでの緩やかな足取りとは一線を画する爆発した様な踏み込みで残りの間合いを一気に詰めたチャイは、斬り付ける様な鋭い呼気と共に渾身の右ミドルキッククワァーを放つ。

颯風と共に高速で迫る蹴り足を前にしたネギが取った行動は、迎撃でも反撃でも、回避ですらも無く。

「風香・風障壁!!?」

今の己が全力を用いての防御であつた。

「……………!?!?!?」

チャイの蹴り込んだ右脚が、10トトラックの衝突すらも完全に無力化する超圧縮され最早質量すら持ち得る風の壁に阻まれる、無理矢理停止させられた脚をチャイ自身の凄まじい脚力による莫大な負荷が襲い。

鈍く乾いた音と共に、チャイの右脚の骨に亀裂が走った。

「ガアツ!?!?……………ツ!?!?」

幼少期からバナナの樹を蹴り続け、今や鋼鉄の鞭と化した己の脚に疾走る、数年振りの激痛。

思わず苦鳴を上げて硬直したチャイは、片脚を中途な位置で振り上げた無防備な体勢を晒す己の懐に、小さな影が潜り込んで来たのを霞む視界の中知覚する。

「ああああつ!!?」

ネギは雄叫びと共に、魔法の射手を纏わせた光る拳をチャイの身体目掛けて突き出した。

しっかりと前後に踏ん張り、重心の落ちた身体から下半身の捻りと共に打ち出されるのは中村に教わりし空手の正拳突き。しっかりと脇の締まった鋭い一撃は、片足立ちで移動する術の無いチャイの鳩尾に吸い込まれる様に突き刺さり、骨の碎ける感触がネギの拳に伝わってくる。

「……………ドゥー トゥーク デック プーシャイ 舐めるなよ…少年!!?」

それでも。

肋の骨を碎かれながらもウツテイ・チャイは斃れない。するりと蛇の様に翻った両腕が、残心を取って退がりかけたネギの首に、後頭部毎ごと抱え込む様に廻される。

ムエタイ選手の闘士を相手取る際に注意すべきはその鉄鞭を叩き付けられる様な蹴りの嵐。そしてもう一つが、首相撲モエバンと呼ばれる至近距離での組み付きからの、膝蹴りタイカウや肘打ちバンソークだ。

中途に浮かんでいたチャイの右脚が跳ね上がり、天を衝く膝蹴りがネギの顔面目掛けて跳ね上がる。加減の欠片も無いそれは、当たればネギの顔面を破碎し、頭蓋を陥没させるであろう、殺意を込めた本気



の一撃だ。

『ムエタイの部長辺りは当たったら無理しねえで避けとけよ。あいつなんかはガチに腕一本でメシ食ってた野郎だ。反撃されて手負いになると、途端に本気で潰しに来るからな』

『中学の時の山ちゃんや大豪院と同じ壊し屋つてことさ、ネギ君』

『喧しいわ(よ)!!?』

「っ……………!!?」

高速で自分の顔目掛け跳ね上がって来るチャイの尖った膝頭を、頭を固定され身動きの取れない状況で見るネギの脳裏に、辻達のそんな忠告が走馬灯の様に通り――

「ギアアツ!?!?」

「がっ……………!?!?」

――ネギの額にチャイの膝が突き刺さり、双方の悲鳴が闘技場内に響き渡った。

チャイはネギへ膝蹴りを決める寸前、右脚の輝が入った脛骨中心辺りが締め付けられ、後ろに引き寄せられる様な感覚が生じた。

それによる一度目を遥かに上回る途轍も無い激痛により僅かに体勢が狂い、また引つ張られて威力の死んだチャイの膝蹴り。

更に防御として張られた風デクレシフオー 盾と着弾寸前に頭を振り、額で受け止めたネギの二重の防御によって、チャイの反撃はネギの命を刈り取ることも、意識を飛ばすことすらも出来ずに終わる。

「っ……………!?!?」

チャイは慌てて己の右脚を見下ろし、輝の入った右脚の中心辺りに巻き付いた光り輝く帯状のものを視認して、普段細めている目を限界まで見開く。

それは魔法の射手サギタマギカアエールカプトウラエ 戒めの風矢。ネギが首相撲モエパンに掴まるのと同様にチャイの右脚目掛け無詠唱で放った一撃だった。

「……………!!?」

一方ネギも、二重三重に威力を軽減して尚有り余る破壊力を持つチャイの膝蹴りに額を割られ、軽い脳震盪を起こしていた。が、ネギは揺れる視界と定まり切らない思考に鞭を打って動く。チャイは現

在片足を拘束され、自分の渾身の反撃を堪えられた衝撃によって隙が出来ている。ここで攻めねばもう付け入る好機チャンスは無いとネギは半ば本能的に理解わかっていた。

ネギは体前に浮いているチャイの右足首を両手で取ると、左肘の内側にチャイのアキレス腱上を挟んでホールド、右手でチャイのつま先を掴んで折り込みながら身体全体を思い切り捻った。

元より蹴りを放った直後で片脚立ちのチャイは急激な重心移動にバランスを崩し、横向きに倒れ込む。

「っ!!? 糞!!?」

ネギの狙いを察したチャイは悪態を吐きつつ、足を伸ばし切られる前にネギの下半身を蹴ってエスケープしようとするが、

「グ、アアッ!!?」

足の先から伝わって来た激痛に蹴りが目測を誤り、ネギを引き剥がすことに失敗するチャイ。

妨害を目論むチャイの動きを封じる為に、ネギが右手で折り込んでいたチャイの足先の指を掴み、力任せに捻り折ったのだ。

「……褒められた、闘い方で無いのは、承知の上、です……僕は何としても勝つやり方を、教わって来たんです!!?」

揺れる思考の中、言い切ったネギは、地面に着いてから回転し、仰向けに倒れたチャイの足首を極め、思い切り上体を後ろに倒した。

柔で言う足首固め、総合格闘技やグラップリングではアンクルホルドと呼称よばれる関節技が、チャイの足首を軋ませる。

「っ~~~~~~~~!!?!!?」

チャイの口から声にならない悲鳴が上がる。ネギの肩口を無事な方の脚で蹴って再度エスケープを試みるが、その度にネギが手挟んでいる右脚を捻り、折れた脛骨に刺激を与えてチャイに激痛を味合わせ、る為に上手く力が入らない。

ミシミシと、不気味な軋みと共にチャイの足首が駆動域を越えて捻じ曲げられ、靭帯が悲鳴を上げー

「っ!!?……ワカッター！タツプだ、ギブアップヨ、ショーネン!!?」

ー脛と足指に続いて足首が破壊される前に、地面を数度叩いて

チャイは試合放棄をした。

「……………!!?……………ふう……………!」

ネギはチャイの降伏宣言を聞いて一瞬身を固くするが、次の瞬間には全身の力を抜いてチャイの足首を解放し、へたり込む様にして尻を着くと、空を仰いで大きく息を吐いた。

「イ、タタタタ……………!!?……………アー、カンパイよシヨーン。油断無かた  
いわないが、ココまでヤラレル、私マケね」

チャイが右脚を抱える様にしながら座り込み、ネギに声を掛けると、ネギは上体を起こして、申し訳無さそうに眉尻を下げて言葉を紡ぐ。

「あの、僕……………」

「イイトコトよ」

皆まで言わずにチャイはネギの言葉を遮った。

「コツチもコロす気でケツタね。オトナゲ無い、私ヨ。何でもありなら、シヨーンはマチガテ無いヨ」

それより、とチャイはネギに問い掛ける。

「私の膝蹴り……………ヒザケリ。ヨンデたか？」

慣れぬ日本語で、首相撲からの膝蹴りに繋げた自分の反撃を読み切って対応したのかと尋ねるチャイ。

「……………接近した際に反撃が来るとしたら、ムエタイはまず肘か膝。…身長差から僕を持ち上げる為に一手損する肘よりも、身長差を逆に活かして急所の頭部に入れられる、膝だと予想してヤマを張りました」  
「……………フ、ハハハ!!?……………そうか、そうか……………!!?」

ネギの返答を聞いてチャイはさも楽し気に笑い転げ、暫しの間を空けてから左脚のみで軽快に立ち上がる。

「ナツトクだ、バカレンジャーがミコンダことあるネ。……………私にカタタ、シヨーン。マケル、ダメよ?」

にこやかに言い捨て、ヒヨコヒヨコと右脚を引き摺りながら闘技場の外へ向かうチャイに、ネギは頭を下げて別れを告げる。

「僕と闘ってくれて、ありがとうございました!!?」

応えて、ヒラヒラと後手に手を振り場外に消えたチャイの背中を、

ネギは暫くの間見つめていた、が。

「おおくくくうい、子供先生くく」

「素晴らしい激闘の余韻に浸ってる所悪いけれど、ちよつといいかなく？」

後ろから掛けられた複数の野太い声に、ギクリと身を強張らせながらネギが恐る恐る振り返ると。

そこには満面の笑みを浮かべるマツチョと武装集団がひしめき合い、ネギの事を熱い視線で射抜いていた。

「あのムエタイ部部长をグラウンドで仕留めたその腕前に感服した!!? 今度は俺と闘って貰おうか!!?」

「いや、俺が先だ!!? 君の様な強者と渡り合ってこそこの武道会に参加した意義があつたというものだ、さあ行くぞお!!?」

「うわーん!!?」

雪崩掛かって来るお肉の塊達に、ネギは全速力で踵を返した。

刃が翻る。機械の様に効率的な軌道で、最小限の弧を描き。されど無機質な絡繰りガラケッタなどには決して表せぬであろう、幽玄の美を備えながら。

「……つづああつ!!?」

何度目になるだろうか、正面から踊り掛かる、と見せかけて大きく左から廻り込んで低いタックル。と、その動きすらも囷とした二重のフェイントを掛けた後に渾身の瞬動を行い、刃の射程外から背後を取ろうとした小太郎は、瞬動の入りから抜き抜きの着地に繋げるその前。高速での移動中に土手っ腹へ凄まじい衝撃を受け、逆方向へと吹き飛ばされた。

もんどりうって闘技場の床を転がった小太郎は、何とか受け身を取ることに成功し、擦過音を上げながらも爪と靴底でブレーキを掛け、ギリギリの所で場外を免れる。

「あくくまたダメかあ……私子供は大好きだからあんまり闘いたく無

いんだけどなあ……それにしても丈夫だねー犬耳君。手加減してるとはいえもう四発目？五発目？……あれえ？……まあいいや、兎に角いっぱい私の打ち込みを喰らってるのにピンピンしてるじゃない。うーんやっぱり辻君が目を掛けてるだけの事は有るんだねえ、あつちの子供先生もチャイチャイ君相手に頑張ってるしねえ」

のほほん、とした口調で長大な刃——薙刀を上段に構え直しつつ、薙刀部部长 太刀嵐 大蛇が小太郎と遠くのネギを賞賛する。まだ子供なのに大したもんだ、と上からの目線で。

「……はっ、どうにもナメられとるみたいやな、俺も」

小太郎は痛む肋を押さえつつ立ち上がりながら毒付くが、その声音には隠し切れない焦燥と緊張が滲んでいた。

「あ、ゴメンねえ。馬鹿にしてる様に聞こえちやつたかなあ？」

「……まんまやろが、お姉さん。アンタは俺を、下に見とるんちゃうんかい？」

「あ、うん。下には見てるよ」

あつさりと大蛇は肯定した。

「事実君は私より地力で及んでない。これでも指導してる身だからねえ、目利きは確かなつもりだよ。ただ私は君を舐めてはいない、君はその歳にして下手な部長クラス位の実力はあると見てるよ。あつちの子供先生は実戦経験が無いのかな？動きが少し固いし、危なっかしさがまだあるけど、もう少し慣れれば君と互角位。凄いねえ、ホントに凄いよ、その歳で」

でもそこまで、と大蛇はフワリと微笑みを浮かべる。

鮮烈で凜とした出で立ちの中で黒髪 of 美麗な容貌を持つその可憐な笑みは、戦場に咲く一輪花を思わせて。とても美しいと思わせるものであったが、何故か小太郎は背筋に怖気の走る何かを、その弧を描く口元に感じ取った。

「君達は若い所か幼いのに、とても良い鍛錬を積んでいる。しかし、それは私達も同じ事。君達よりももっともっと、下手をすれば物心付く前から一つの武に打ち込んで、唯の一日も休まずに腕を磨き続けて。尚且つその中で才能の有していた人間がね」

フォン!!?と、鋭い風切り音を上げて刃が踊る。大蛇を中心として、円状の刃の檻を描き上げる。

「舐めているのはお前だ餓鬼。積んで来た年季は伊達じゃあ無い。無駄では無い。武の世界は上を見ればキリが無い、私は辻はじめ一に敗北まけた。内臓を泥塗れの靴底で踏み躪られたみたいに悔しかったし、才能なんて安っぽい響きでは到底表し切れないその差に足元が崩れ落ちる様な絶望も味わった。それでも私は弛まず、挫けずに腕を磨いて此処に来た。大袈裟で無く人生賭けているんだよ、此処にはそんな人間が集っているんだよ」

何時しか笑みの消えていた大蛇の顔には冷たく乾いた月の裏側の如く。凍える無貌が貼り付いていた。

「才能も努力の量も私は絶対の要素とは言わないし思わない。私自身が辻はじめ一に地力において勝ったとは言えないから。でも私は勝ちに来たよ。言葉に表し切れないものを積み上げてね。君達に負けた連中は思い入れが少ない。全くもって、執念が足りていない、だから壁を越えられてもその先には行けない。…腕試しなんてヌルい言葉が吐けている段階の連中には、実力の優劣なんてものとはもつと前の段階の要素で、私は負ける気がしない。…君はどうなんだ、少年? 信念、強くなりた理由、負けられない理由わけ。…言葉にすれば安っぽい、そんなものが有るか? 無いのなら少年、君は私に敵わないので無く適あわない。今すぐ此闘技場処を降りるがいい、これより私は…本気で行く」

その眼に、全身に。熱を孕みながらも裏腹に冷たく言い捨てた大蛇は、唐突にほにやりと柔らかく笑み崩れ、纏う空気を最前までの暖かいものに変えた。

「……な〜んてね! ゴメンよ犬耳君、怖かったかい? つい熱くなっちゃったけど、要は甘く見てると怪我するぜい、って言いたかったのさ私あ! それ以上打つ手が無いなら降参するのも普通に有りだとお姉さん思うよお? 君はまだ若いんだ、鍛え直して出直せばいいさ、未来のチャンピオン!!?」

小太郎は、大蛇の言葉にただ吞まれて聞き入っていた訳では無かつ

た。

勝手に自分を決め付けるな、お前だけが譲れないものを背負っているんじゃない、等と、反論して吐き出した言葉は幾つかあった。

……でも、上手く伝えられる気はせえへんな……

難しい事は解らない、と小太郎は改めて思う。一緒に頑張っている頭ネギスブリングファイールドでつかちのお利口さんの様に自分は頭が良くないのだ、と内心で呟き、忸怩たる思いが無いではないが、同時にそれでいい、とも小太郎は思う。

……豪徳寺の兄ちゃんも言うとする、漢はゴチャゴチャ語らんもんや……

だから小太郎は拳で語ろう、とそう決意して構えを取り、ただ誤解を受けない為の最低限の想いを口に出す。

「……勝ったもんが正しい。悲しいけれどそんな世の中や……。だから俺は、押し通る。アンタは俺にとって、邪魔やから」

「……………そうかい……………」

決意を秘めた小太郎の燃える双眸に最早言葉は不要と、大蛇は薙刀を持つ手に僅かな力を込めた。

拳と長刀をそれぞれ構え、少年と女は対峙する。

……この姉ちゃんは完全な後の先型や。獲物構えて待ち構え、間合いに入ったモンを問答無用に斬って捨てる……………

小太郎は大蛇に相對する以前に薙ぎ払われていた他選手と、己が身体で味わった撃を思い返し、小太郎は考える。

踏み込み、持ち替え、出鼻、払い、巻き落としの技……薙刀には状況に応じて様々な技が在る。

その中でも特に持ち替え技を駆使して、二連、三連とその圧倒的リーチから遠間において連続で攻撃を仕掛けられるのが薙刀の強みの一つ。

しかし大蛇の薙刀の技は、そんな領域には収まらない。脛への下段薙ぎから跳ね上がった刃が顔面を襲い、躲しても刃が反転し、唐竹割

りの一撃を。それを躲しても極小の弧を描いて地面近くを疾走り、の字を虚空に刻んだ刃は胴を横薙ぎに。躲されても脚を、躲されても更に胴を。と、無限とも言える連撃の嵐によつて反撃を許さず、呑み込むが太刀嵐 大蛇の結界刃。

例え複数からあらゆる方向に於いて襲われ様とも、神速で翻った刃があらゆる角度から間合い内に入った対象を薙ぎ払う、正しく薙刀の間合いがそのまま結界の如き不可侵領域。

……隙は無い。せやから裏あ掛かん！持てる技で勝ちに行くしか、俺に取れる手段は無いんや……………!!？

もつと塾考を重ねて対象法を見出す道は在った、が、それは自分の流儀で無いと小太郎は感じていた。

……其の場凌ぎの浅知恵で乗り越えられても、俺が俺のまま姉ちゃんを連れ戻したいんやつたらそれは取つちやアカン手や!!？

己を先に繋げる為。小太郎は今の己の全力で、真つ直ぐ前に疾走つた。

……真つ直ぐな子だねえ、うん……勝負の場じゃ無きや、すつごく可愛がつてあげたいんだけどなあ……………

大蛇はふ、と口元だけで微妙に苦い笑みを作るが、その迎撃に最早容赦は存在しない。

通常薙刀において上段の構えは試合等ではまず使われない。振り上げた薙刀は攻撃が大振りになり、動きを読まれやすい上に防御に繋げ難い故に。

しかし大蛇は主に相手が単独の場合、上段の構えからの渾身の打ち落としを大概選択する。

その理由は……………

……コレが一番敏捷いから、さ……………!!？

剣撃において最も速度が乗るのは当然、体重を乗せ易く、重力に逆らわず寧ろ加速させる上から下への振り下ろす一撃である。まして盤石の体勢から麻帆良随一の薙刀使いである大蛇が重く、長大な薙刀の重量さと遠心力を駆使しての全力の振り下ろしは、人間の動体視力



なぞ軽く凌駕する。

稲妻が閃いた様な超速度の斬撃は、真つ向から突っ込んで来た小太郎の左肩口に突き刺さり、容易くその身体を二つに裂いて。

柔すぎるその手応えに大蛇が眉根を寄せた瞬間、断ち割られた小太郎を含めて七人の小太郎が出現<sup>あらわ</sup>れ、その全てが正面から大蛇に殺到した。

影分身。気を用いて己の分け身を創り出す、忍びの者の業<sup>わざ</sup>を源流とする東欧の神秘的秘技である。優れた術者が用いれば思考力、判断力を有し、本体の知識、技術をそのまま継承した、真の意味での分身を創る事が可能だというその高等技法。小太郎のそれは自立思考こそ有するものの、判断力、戦闘力共に本体には一步以上及ばない未熟なものではあつたが、それでいて尚、小太郎には勝算があつた。

……このお姉さんの異様な迎撃速度は、一撃をただ単発の一撃として振るわんで力の反動、打ち終わり後の軌道修正なんぞを駆使して力のロスを極力避け、少ない力での連撃を行うことに主眼を置いとるこそや……!!??

その流れる様な高等技術を駆使した息も吐かせぬ嵐の連撃は確かに恐ろしい。が、裏を返せばその連打は力や瞬発力を用いた強引なものでない以上、一定以上軌道<sup>弧</sup>を描いて振り回す必要のある斬撃には、同一方向からの迎撃可能な数に限度がある筈と小太郎は睨んだのである。全てが正面から、地を這う様な突撃が二、真正面からの特攻が三、飛び掛かつての上方攻撃が二。全てを一撃で同時に薙ぎ払うが不可能な以上、どれかの小太郎の手は絶対に大蛇へと届くと小太郎は確信していた。

斬撃を振り下ろした直後の大蛇は、巧みな捌きで重い薙刀を飛燕の如く弧を描いて閃かせ、下段から斜め上方への薙ぎ払いで左方下から突っ込んで来た小太郎と正面の二人、空中で軌道修正の出来ない一人の計四人を一息に斬り裂いた。が、そこまで。斜め上に振り切った薙刀が再び翻るよりも残り三体の小太郎の攻撃が大蛇の元に届く方が早い。

小太郎が貰った!!?と、そう、確信したその瞬間。

小太郎達の目前に在った大蛇の身体が唐突に掻き消え、三体の攻撃が空を切った。

……………あ？……………!??

小太郎は瞠目する。

大蛇は正確には掻き消えたのでは無い。距離にして踏み込み幅約七歩。小太郎達の数m先に大蛇の姿はあった。

即ちそれは後退して小太郎の攻撃を躲した、という事になる訳だが、問題はその速度である。

少なくとも小太郎には下がり始めた瞬間はおろか、何時立ち止まったのかも全く視認出来なかった神速の後退。そんな動きが可能となるのは唯一つである。

「……………瞬動…いや、縮地……………!!?」

「正確に言葉として表すなら縮地じゃ無くて伸地かなー?」

戦慄めいたものが背筋を駆け抜ける中、絞り出す様に口を開いた小太郎の言葉に、のんびりとした語調で大蛇の返答が返った。

「そんなに驚かないでよー、辻きゆんに見せて貰った事無い?彼は全力の振り下ろしで無ければこうして縮地の応用で下がるよー。何せ教えたのは私みたいなもんだからねえ」

薬丸自顕流、二の太刀要らずの斬撃に本来後退はあり得ない。

ある意味己の血肉を捧げてまで鍛え込んだ己の剣に愛着が無いからこそ出来得る神速で踏み込んで一撃の後神速で退く辻の反則的な攻勢。

しかし、何故薬丸自顕流という生家の剣術を除けば、精々剣道の技法を取り込んだのみの辻がその様な後退を身に付けられたのかという疑問に対する答えが、太刀嵐大蛇その人なのだ。

「結局これが有っても負けちゃったから私は連撃を磨いたんだけどねー、君は凄いよ、この武道会で退がらされたのは君が初めてだ」

でも、私に勝つのはまだ早い。と、大蛇は笑い、瞬時に距離を詰めての踏み込み面で中央の小太郎の脳天に一撃、更にそこから斜め下方に落ちての下段薙ぎ払いが一人の足を掬い上げて転がし、そこから更にアッパーカットの如く跳ね上がった刃先が最後の小太郎の顔面を

打ち抜いた。

……終わりか、な……………!!?」

全ての小太郎を打ち倒し、残心に移りかけた大蛇は、己の背後から差し迫る一つの影を知覚し、僅かながら身を固くする。

小太郎がやられた隙を突いて他選手が大蛇を倒しに来たのか?…  
答えは否。

「オラアアアアアアツ!!?」

雄叫びを上げつつ爪を振り上げ、抜手を突き出すのは紛れもなく犬上 小太郎その男であった。

……今迄のが全部分身……………!!?」

今度は大蛇がその眼を見開く。全ての対象を迎撃した、というその一瞬の有るか無いかの気緩みを突いた渾身の奇襲。大蛇が知覚したその時には、小太郎は薙刀の刃の射程遙かその内に踏み込みを終えている。今更薙刀<sup>得物</sup>を用いての迎撃は不可能である。

だから大蛇は薙刀には頼らなかつた。

「は、あああああああつ!!?」

大蛇は手から薙刀を放り捨て、小太郎の突き出された抜手をその両手で掴み取る。鋭い鉤爪に二の腕を挟られるも、小太郎の勢いを利用してその身体を地面から引っこ抜いた大蛇は、その勢いのまま小太郎を一本背負いで地面に叩き付けた。

「ガツ……………!!?」

「生―憎う……………」

肝が一瞬竦み上がったことを自覚し、またそれを認めながらも、大蛇は笑みを浮かべて叩き付けた小太郎にまるで己が名を表すが如く絡みつき、胴巻き裸締めを極めた。

「…犬耳君の用心深さには恐れ入るけれど、武器が無くなったら闘えませんなんて言ってたら、とても麻帆良じややってけないのさ―……………」

だからやっぱり私の勝ちだよお、と、大蛇が両腕に力を込め、小太郎を締め落としに掛かる。と……

「……………の…けや……………」

「んん？なんだいい犬耳君？」

後数秒で落ちる、と確信を得ながら大蛇は途切れ途切れに聞こえた小太郎の声に反応し、耳をそば立てる。

「あんたの負けや、言うたんやろ、俺の分身はな、お姉さん」

その声は、大蛇の真後ろから聞こえて来た。

大蛇がゆっくりと視線を後方に向けると、そこには小太郎が腹を抑えながらも残った片手を引き絞り、大蛇に対して突き付けていた。

「……………これも、分身かあ………………凄いな、本体の君は今迄安全圏で気配を潜めてたってこと？」

「違うわお姉さん。アンタが退がってから踏み込んで来ての薙ぎ払いで、二番目に潰されたんが本物の俺や。潜ませとったんは分身や……………アンタが今抱えとる俺の事を分身やって気付かれたら負けやったらうから、正直こんなん一か八かの博打に勝ただけで後味良く無いんやがな……………」

アンタの流儀なら、勝ちに優劣は無いんやろ？と小太郎は締め括る。

それに対して大蛇はうっすらと笑って頷き、朗らかに言葉を投げる。

「舐めては、いなかったつもりだよ。油断はあったのかなあ……………まあそんな言い訳はカツコ悪いから、御見逸れしたよ、と言っておこうか犬耳君。…君の名前、なんて言ったかなあ？」

「……………犬上 小太郎や」

「そっか……………覚えて、おくよ!!？」

言葉が終わるか終わらないかの内に大蛇は分身の小太郎を放り捨て、爆発した様な踏み込みで上体を撃ち出し振り向き様に渾身の抜手を放つ、が。

その貫手が届くよりも一瞬早く、小太郎の気が集中した右の正拳が大蛇の鳩尾に突き刺さっていた。

「……………、ゴホツ……………!!？……………あー、あ……………私は、耐久力は無い、か

らなあ……………悔しいね、悔しい、けれど……………これは負け、だねえ……………！」

一塊の血塊を吐き出して、大蛇は苦笑を浮かべると共に前のめりに倒れ掛かり、小太郎にその身体を抱き留められる。

「……………済まん、女の腹あ殴るんは本意や無いんやが……………そこで漢お魅せられる程、俺はまだ強お無いわ……………」

謝らんけどな、と、小太郎は眉尻を下げながらも毅然と言い放つた。

「……………はは、カッコいいねえ、小太郎君……………将来、楽しみなベビーフェイス、だあ……………」

……………あーあ、辻君へのリベンジは、また今度。だねえ……………

言葉の最後で力が抜け、意識を失った大蛇の身体を抱き抱えて小太郎は歩み、闘技場外のスタッフを招き寄せるとその身体を丁重なる動作で預けた。

「……………つたく……………女だてらにこないゴツツいたあ、先は長いなあ、ホンマ……………」

踵を返し、闘技場内の選手達を睨み付けながら小太郎は独りごちる。しかし言葉の内容とは裏腹に、その表情には溢れんばかりの闘志が漲っていた。

……………上等や!!? どんな奴が相手やろうが、必ずや喉元喰い破つて下剋上かましたるわい……………!!?」

序盤の連闘、大蛇に喰らった夥しい薙刀の打撃と小太郎も最早ベストとは程遠いコンディションであり、一、二箇所骨に痺位は入っている。しかしそれよりも尚酷い重傷を負った経験が小太郎には無い訳では、ないのである。

太刀嵐 大蛇が一つ見誤ったとするならば、犬上 小太郎はその幼さにして、暴力の支配する裏社会を曲がりなりに切り抜けて来たというその底力を見抜けなかった事だろう。

「うし、大分数も減ったみたいやしこのまま一気に……」

「うわーん!!?!?!?!」

小太郎の眩きに被さる様に甲高い悲鳴が響き渡った。

その幼子特有の高いソプラノを上げる様な年端もいかなない男児など、このブロック内どころか武道会全般でも一人しか存在しない。

「……ネギ、何を情け無い悲鳴上げて……?!?!?!」

激戦を制した後には自分と同じく不利な条件下を潜り抜けて来ていた筈の同志の醜態に、多少の苛立ちを感じながら小太郎が振り返った小太郎の視界に、複数の武道家達に追い回され、全力でブロック内を逃げ回るネギが己の方へ向かって突っ込んで来る光景が飛び込んで来た。

「……ああ?!?!?小太郎君、助けてええ?!?!?」

「おわあああこつち来んなやアホー?!?!?」

済し崩し的にデストレインに巻き込まれ、肩を並べてひた走る小太郎とネギ。

「何をやっとするんやお前は?!?!?」

「そ、それがムエタイの強い人をなんとか倒した直後から周りの人達に目を付けられちゃったみたいで……幾ら何でもこんな数を相手にしてたら僕やられちゃうじゃないか?!?!?」

面倒な事態に巻き込んでくれたネギに小太郎は怒号を上げるが、ネギは悲痛な声で反拍する。

「てめえらしつけえぞ、あの子と次に闘るのは俺だすつこんでろ?!?!?」  
「巫山戯るなよ子供先生は俺の獲物だ、貴様を先に沈めてやろうか?!?!?」

一方ネギ達を追い掛ける武道家達は別に協力してネギを叩き潰そう等とは誰も考えていないらしく、小太郎が合流した先から互いに睚み合い、一部は戦闘を始めて徐々に数を減らしていた。

その様子を走りながら首を後ろに捻じ曲げて無言のまま見ていた二人は、同時に顔を前方に戻すと互いに大声で声を掛け合う。

「……これこのまま逃げていれば上手い具合に戦闘数を減らせるん

「じゃないかな!?」

「同感や!些かセコいつちゅうかビビりな選択やが、此処の連中一人一人がヤバいしここはこのまま……!?」

戦略的闘争ならぬ逃走を提案したネギに同意しかけた小太郎は、前方で両手を広げて半円状の布陣を組み、ネギ達の逃走経路を塞いでいる武道家達を視界に入れ、思わずネギの首根っこを掴んで真横に思い切り跳躍した。

「う、わあ!?」

「黙つとれ、舌噛むわ!!」

盛大な擦過音を上げながら着地して僅かに咳き込むネギを下ろした小太郎は、得意気なドヤ顔を見せつけてくる武道家達を睨み付け、言葉を投げる。

「……なんのつもりや?」

「ふふん、少年達よ。そのまま逃げ回ってタイアップ作戦たちよつと消極的過ぎるんじゃないやねえか?特に犬耳の学ラン少年!!?あの『結界刃』を打ち倒した君の強さには俺達とつても惹かれるものを感じているんだ!!?……闘ろうぜ俺とお!!?」

「それにそつちの子供先生はあのチャイを倒したんだろ?どつちもオイシイ獲物だぜえ……俺が貰った!!?」

「馬鹿俺が先だよ」

「まあまあ、それでは早い者勝ちという事で」

イイ笑顔を浮かべて迫り来る武道家達に、ネギは半眼で小太郎を見やる。

「……小太郎君……」

「巻き込んだのはお前が先やろが!??それに元から追い掛けて来たつたんが反対側からも来とるぞお前も同罪や!!?」

最早逃げ場は無く、四方八方からジリジリと間合いを詰めて来る飢えた猛獣の様な目付きの武道家達を前に、ネギと小太郎は同時に盛大な溜息を吐くと背中合わせに構えを取った。

「……しゃーない。ネギ、唾み合つとる場合や無い。一時共闘してこの戦闘狂共ぶつ倒すで」

「だね。……さっき追い掛けて来た人達の様子を見るに、半分以上は同士討ち？で減ってくれる筈だから、基本的には動き回って乱戦に持ち込もう。基本的に一対一を良しとしている人達だから袋叩きにはされ難いし、勝手に争い合ってくれる筈だよ」

二人は同時に駆け出し、暴徒の群れに突き進む。

「僕（俺）は、こんな所で負<sup>予</sup>け<sup>選</sup>てられないんだ（や）!!?」



11話 まほら武道会予選 (下)

「ははははっ！随分と優雅さに欠ける荒々しい奔流であることだ!!？  
ネムの花が如きその憂いを帯びた美貌には些か相応しくないのでは  
ないだろうか、made moissele桜咲？」  
「……………」

フエンシング部部长 水仙華・エミール・雅美がその豪華な金髪を  
揺らしながらキザったらしい微笑みと共に告げるが、刹那はそれを黙  
殺し、黙って木剣を構え直す。

刹那は予選開始と同時に流水の如き動きで武道家達の間を疾走  
り抜け、鎧袖一触に嵐の様な剣撃で戦闘不能者を山と築いて来た。

そうしてブロック内の人数が半数以下になった辺りで正面か  
ら刹那に向って来たのがこの水仙華であった。

「つれないね、まあ made moissele 桜咲には想い人が  
いるというのは周知の事実。他人の手中の珠に触れる様な不粋な真  
似をするつもりは元より無いが……おっと!!？」

水仙華の言葉途中で刹那が瞬動を用いて懐近くまで踏み込み、  
斬撃を胴目掛け薙ぎ払う。しかし水仙華は手に持つ優雅な護拳付き  
の細剣を翻し、斬撃を受けに入る。

優男の見た目に似合わず鍛えられた強靱な手首と、柔軟な肘、  
肩の関節が衝撃を柔らかく吸収して斬撃の威力を殺す。

「parade！」  
威力の死んだ斬撃が外に払われ、刹那は僅かに目を見開く。そ  
の時には水仙華の細剣は飛燕の如き速度で正面に戻されており、次の  
瞬間予備動作も先触れも無いに等しい、高速の突きが刹那目掛けて打  
ち放たれた。

「riposte!!？」  
鈍く、重い音が響き渡り、刹那の身体が弾かれた様に二歩、三  
歩と後退する。

その体前には、しっかりと掲げられた木剣が打ち込まれた箇所から白煙を上げていた。

「ははっ!!? t r s b i e n!!? m a d e m o i s e l l e  
桜咲、私の r i p o s t e を真面に受けられるものなど部員の中でも殆どいないというのに!!?…やはり君はカルミア ラティフォーアの桃白の花が如し、美しくも危険な女性だね。とはいえ会話の最中に襲って来るとは些か典雅な振舞いには欠けるというものだよ?」  
「…武道家という括りの貴方がたからすれば無粋な行いであることは認めます。…ですが私は今、どうでもいいんですよそういうの」

私は、何としてでも本選に上がらなければいけないので、と刹那は切れ長の瞳を一層鋭く細めて、木剣を身体の右側に立てた状態で寄せ左脚を前に出す、八相にも似た構えを取った。

「ほう…重い野太刀を己が牙とするのに、消耗せず構えを保つ為の構えかい?…生憎だが私の学ぶフェンシングとは剣技中最速とも謳われる。最短動作からの一瞬の閃光の如し f e n t e は到底見切つて刃を返せる様には、成り得ない。あのまま嵐の如き連撃で泥臭い乱戦に持ち込むのが君の唯一垣間見える勝因かと思つていたがね?…否、矢張り可憐な花は散り際に於いても己を貶める様な…」  
「御託は充分です、何時でもどうぞ」

水仙華の言葉を遮り、刹那は素っ気無く先手を譲った。

「…これは失礼。ならばその刃の如き美貌に相応しき覚悟に…敬意を表そう!!?」

水仙華は僅かに目を細めて音も無く切っ先を僅かに擡げー

ー 次の瞬間細剣を保持する腕とは逆側の高く掲げられていた腕が後方に大きく振り切られ、後足の下腿三頭筋と前足の大腿四頭筋が爆発的に伸縮。水平に跳躍したと錯覚しそうな鋭い踏み込みから、後手を振り切った反動を利用してより鋭く伸び上がった突き手が稲妻の如く打ち出された。

フェンシング部部长 水仙華・エミール・雅美が現状において

繰り出せる全力の f l e c h e 。常人所か生半な武道家ですら視認を許さぬその一撃は、彼が単なる伊達男で無く此処麻帆良の数多の頂点が一つである証である。

しかし。

「か、はつつ……!?？」

「……申し訳ありませんが……」

水仙華が気付いた時には刹那の姿は己が視界から掻き消えて後方へ抜け、胴体に走った衝撃に五体から力を奪われて為す術無く倒れ伏していた。

視界が暗転し、世界が遠ざかっていく中で、水仙華は刹那の冷たい感想を耳にした。

「確かに速い突きですが、辻部長の片手平突きの方が倍は速いですね」

『水仙華選手ダーウン!!? 桜咲選手、小柄で可愛い見えた目とは裏腹に凄まじい剣の冴えです! 各所で噂の辻選手以上の腕前を誇るといふ噂は本当なのかあ!??』

『なにやら鬼気迫る様子に見えられますが何かあったのでしょうかねえ?』

『『『ワアアアアアツ!!?!!?!!?』』』』

「わく解説の人!そこ触れたらアカンとこやでく!??」

「こ、木乃香ちよつと落ち着いて!!?」

「……ゆえく、何なのかな麻帆良の人達って……」

「人外の者としてか最早思えないですよ、のどか……それにしても余す所無く地獄絵図ですね……」

「……凄いとしか言い様が無いわねえ、私なんかだと……それにしても凄いい盛り上がりだわ……」

観客席で見守る明日菜達の困惑混じりな雰囲気余所に、見た目に派手な武道家達のぶつかり合いによって他の観客のボルテージは否応無しに上がっていき、大歓声による喧騒が辺りを包み込んでいく所為で通常の音量では会話も儘ならぬ程であった。

「あ！み、皆さんこちらにいらつしやいましたか!!？すみません、色々やることがありました……!!？」

「オツツ」

「エラいことになってますネ」

「乱交……」

「いやだから五月蠅えよ!!？」

「あれ？愛衣ちゃん……とあんたらも……」

そこに観衆を掻き分けて現れたのは荒い息を吐く愛衣だった、後ろには頭にカモを乗せたすらむい達を連れている。

「お仕事で、やっぱり超ちゃんのアレなん、愛衣ちゃん？」

刹那のいるブロックを心配気に見ていた木乃香が視線を外し、小首を傾げて愛衣に尋ねる。それに対して愛衣は息を整えながら暫し迷った様子であったが、ややあつて躊躇いがちに頷く。

「…はい、正確には超<sup>チャオ</sup>鈴音<sup>リンシエン</sup>…さんの起案したこの大会全体への対策ですね。本来でしたら一般の方には漏らせない機密事項なんですけど、皆さんはもう半分関係者みたいなものですから……」

どうか内密にお願いします、と手を合わせる愛衣に各々頷きを返す。

「なに考えてんのかしらね、超さんって……」

「実は単なる格闘観戦マニアやとか？」

「え……？で、でもそれだと、詠唱の禁止、とか……」

「ですね。発言から鑑みるに秘匿されている魔法について詳らかにしようという意思が見られます」

「……状況から考えてみると、魔法関係者の方々に大会で活躍でもして欲しい、みたいな感じね……？」

夕映と千鶴の言葉に、愛衣が俄かに慌てた様子で口を挟む。

「え……!!？そ、それはつまり、魔法の存在を曝露しよう、とか……!!？」

「愛衣ちゃん落ち着いて、声大きいわよ」

明日菜が愛衣の身体を制して落ち着かせに掛かる。

「仮にそうだとシテ、ンなことやってあの団子頭になんのメリットが



表現しようの無い光の爆撃が闘技場内全てを蹂躪していた。

爆発に呑み込まれ、成す術も無く吹き飛ぶ武道家達の悲鳴が幾重にも木霊する。

「こ、これまた格闘大会とは思えない壮絶な光景ーっ!!? さながらその姿はB―52かはたまたAS―90か!?!? 人と兵器が闘っているとしたか思えぬ蹂躪具合だあー!?!?」

『豪徳寺選手の異名に相応しい暴れ具合ですな、放たれている光の弾は所謂遠当て、と呼称よばれる気を用いた遠距離攻撃です。既に今大会でも何人か使い手が居ましたが…はつきり言ってこれは威力、連射力、効果範囲全てに於いてレベルが違い過ぎますな。豪徳寺選手は気の総量が極めて大きいらしく、並みの使い手ならばとつくに疲労困憊で意識を失う程の気を涼しい顔で行使出来るとのことです』

「どうしたどうしたてめえらあ!!? 幾ら何でもこれだけで全員沈んでやしねえだろうなあ!?!? このブロックは雑魚ばかりかオラァア!!?!」  
豪徳寺の戦略は至ってシンプル。莫大な量の気に任せて目に見える対象全てに只管気弾を叩き込むことであつた。

細かい格闘技術に乏しく、乱戦となればバカレンジャーの中で一番消耗が激しいだろうと自覚のある豪徳寺は、ある意味で他の選手達を土俵に立たせないことを決意したのだ。

……絨毯爆撃喰らつた経験のある奴はこの麻帆良なら居ねえとはいいきれねえ、が、対応出来る奴ってなら限られるぜ。雑魚相手に削られていい余裕は無え!!? ……

……ネギの為、も一つは癪だが、那波の為!!?!? 格好つけると言つちまつた以上、全力で挑まねえのは漢じゃ無え!!?!?

……

尚も気弾の連射を続ける豪徳寺だったが、弾幕により木片と白煙、気の粒子が飛び交う中、それらの幕を引き裂いて一つの大柄な影が豪徳寺へと迫る。

「っ!!?!? 漢魂おとしだまあつ!!?!?」

豪徳寺はその影に対して都合六発のm級気弾を撃ち放つ。数歩と離れていない近距離からの回避しようが無い弾幕を、その影は



螺は言い放つ。

「…どれほどパワーがあるうがそんな大振りのテレフォンパンチでは俺を捉えられはしない。喧嘩殺法でボクサー殴り合いのプロに敵うと……!?」

「グダグダ五月蠅えよ」

言葉の途中で拳螺は目を見開き、慌ててスウエーで寝たままに豪徳寺の放った気弾を躲す。どれをとってもKO級の連打を喰らったにも関わらず、まるで堪えた様子も見せずに豪徳寺は無造作に身を起こした。

「無様な所は見せらんねえと思った矢先に張っ倒してくれやがって、覚悟しやがれよ拳螺てめえ」

「……格好を付けている余裕があると考えているならば、矢張り舐められている様だな、俺は」

ボヤク様な豪徳寺の言葉に硬質な声で返答し、拳螺は再びピーカブーガードに構えた状態でジリジリと豪徳寺へ距離を詰め始めた。「…ならば受けてみる。反撃の機会すら許さない、真のコンビネーションつてものを」

言うが早いか、拳螺はガードを固めたまま一直線に豪徳寺の懐へと突き進み拳を閃かせる。

左右のボディブローが豪徳寺の土手っ腹に突き刺さり、返しの左フックが入り様に右のボディストレートが真面に豪徳寺の鳩尾を抉る。僅かに前屈みになった豪徳寺の顔面目掛け、拳螺は渾身の一撃を撃ち放った。

突き出した腕の筋肉が伸び切り、インパクトの一瞬前に 肩、肘、手首が拳螺の膂力における全力で思い切り身体の内側へと捻られる。

グローブの親指面が下を向く程に腕全体が強く、捻り込まれる。その捻る動きにより肘が上を向き、打ち下ろしの打撃となる事によりパンチの威力を増す拳螺の切り札、コークスクリューブロー。

渾身の気を込められたその一撃は、旋回する腕に螺旋状の気が纏わり付き、まるで竜巻を叩き付けるかの様な大迫力のそれだ。

黄金色の竜巻は、これ以上無い程にしっかりと豪徳寺の顔面を捉え、爆発の様な轟音と共に豪徳寺の頭を振じ切れんばかりに後方へ



と跳ね上げた。

『決まったーっ!!? ボクシング部部長拳螺選手、目にも留まらぬコンビネーションからの文字通り回転羽根型推進機の如き激烈なコークスクリューブロー!!? 豪徳寺選手の顔面が弾け飛んだーっ!!?』

『単なる喧嘩屋と手のみを使った熟練格闘競技者の差が現れた形ですね、単なる殴り合いならば豪徳寺選手は拳螺選手に勝ち目は無いでしょう』

「うわちよつと豪徳寺先輩大丈夫?!?」

「ひやーゲームの必殺技みたいなん当たったでく!!?」

ピンポイントに豪徳寺の<sup>先輩の一人</sup>状況を実況解説されていたおかげで注目していた観客席一同はどう考えてもヤバそうな一発を真面に喰らった豪徳寺の安否を気遣う。

「ひやあああ?!? あ、あ的那波さんお気を確かに……!!?」

ある意味非常に衝撃的光景を前に、愛衣は思わず隣にいた千鶴へ声を掛ける。

篠村達及び辻達から豪徳寺との近況を教えられ、愛衣は既に二人が学祭デートまでしている仲なのを知っている。想い人が滅多打ちにされた挙句に殺人パンチを喰らった光景など目撃したら倒れてしまうのでは無いかと、安否を気遣った愛衣の考えは至極真つ当なものだろう。

「大丈夫よ、愛衣ちゃん。ここから豪徳寺先輩だったら格好良く逆転してくれるでしょうから」

「え、ええ……?」

しかし、予想に反して千鶴は豪徳寺の惨状に小さく眉を顰めて心配気な表情こそ浮かべてはいたものの、慌てふためく愛衣を優しく制して微笑みかける程の余裕を保っていた。

「あ、あの……那波さんは、なんでそんなに余裕がおりなんでしょうか……?」

「勿論、心配は心配よ。気になる殿方が血飛沫上げて気に病まない女は居ないだろうから」



漢 漢 魂 ああつ !!? !!? !!?」

「が、ああああああああああつ !!? !!? !!?」

爆撃に次ぐ爆撃。最早ガードに意味は無く、衝撃の浸透に吐血して吹き飛ぶ拳螺は、霞む視界の中、自分に向って己の身長を遥かに超える一際巨大な気弾が迫って来るのを知覚した。

「二重極漢魂ああああつ !!? !!? !!?」

「つ……………!!? !!? !!?」

最早悲鳴も無く、直撃した大爆発に拳螺は闘技場はおろか、龍宮神社の境内外まで吹き飛び、意識を失った。

『な、情け容赦の無い絨毯爆撃いー!!? 拳螺選手、遙か場外彼方まで吹き飛んだああああつ !!? !!?』

『これが豪徳寺選手の真骨頂にして二つ名の由来ですなー、どれほど強烈な攻撃を喰らわせてもケロリとして反撃に出て来る。不沈艦だけならばまだしも彼の火力は戦艦主砲並み。故に五強の一角、『不沈戦艦』…………いやはや下馬表通りと言ってしまえばそれまでですが、強いですねえバカレンジャー』

「……………ね? 大丈夫だったでしょう?」

啞然とする愛衣に対して、千鶴はクスクスと笑いながらそう言った。

『他の選手も決して悪くない、所か一騎当千の古強者ばかりです。ただ……………』

解説席にて喧囂は微かな笑みを浮かべ、言葉を放つ。

『決して馬鹿にする意図がある訳ではありませんが、はつきり言っただけが違う』

「……………本当に、言いたかねえがその通りだわな……………!!? !!?」

「どうしたの、来ないならこっちから行くよ?」

額に汗を滲ませながら、古武道部部长 東雲 慶は手に持つ鎖分銅を構え直した。対面に立つ山下は、対照的に緊張した様子も無

くいつそ朗らかですらある笑顔のまま静かに一步を踏み出す。

山下の居るブロックはリーゼントが爆撃を起こすでも無く、対峙し合った内の片方が沈んで行く静かなものだった。

しかし、その中での山下の相手を打倒する速度は異常と言えた。

『……………こちらは何とも静かな空気のEブロック、既に選手の九割近くがリタイアしています』

『その内の約半数が山下選手によるものですね、何せ回転率が違う。殆どの選手は組み合う、または獲物や拳足にて初撃を打ち込んだ瞬間に舞わせられ、場外となっています』

……………そう、はつきり言つて勝負になつちやいねえ……………

東雲はゴキリと大きく音を立てて首を回し、手中の鎖分銅を静かに旋回させ始めた。

『……………山下、正直に言うが、俺は今、闘り合つても勝ちが薄いと感じている』

「へえ、それなら棄権してくれないかなあ東雲。僕も君にまず間違はなく勝てるだろうとは思うけれど、本選を見据えて消耗はしたくないから」

「……………はっ！」

意外な台詞にも動じず笑顔で舐めた口を利く山下に、しかし東雲は寧ろ己の情弱さに失笑する。

……………下に見られちまう程、差を作つちまつたかよ……………

「……………サボっていたつもりは断じて無え。何で差が付いちまつたかなあ……………オイ……………」

「……………経験の違いかなあ」

山下は答える。

「都合三回程…もつとかな？死闘なんて表現すると安っぽいけれど、死にかけながら闘ったからねえ。やっぱり実戦知らないと武道家は武道家たり得ないのかも……………それに加えて僕は今回の大会に人生賭

けてるから、さ」

其れこそ死んでも負けられないんだ、と山下は笑みを消して言い放った。

「……心構え、か……必死と決死は、そりゃあ違うわなあ……」

納得は今一出来ねえがよ、と東雲は笑って、

「らああつ!!?」

前触れも無しに何時の間にか先端が視認出来ない速度にまで加速して旋回<sup>まわ</sup>っていた分銅を、山下の顔面目掛け撃ち出した。

弾丸の様な速度で己の顔へ迫った分銅に、山下はそつと掌を翳す。分銅が掌に触れたか、触れないか、の域まで伸び切った、次の瞬間。

分銅は見えない壁に弾き返されたかの如く反転すると、撃ち出された以上の勢いで東雲目掛け襲い掛かった。

「けつ!!?」

しかし東雲はまるでその魔法が如き反撃を予期していたかの様に動じた様子を見せず、鎖を握っていた手を複雑に拗<sup>よこ</sup>らせた。

その途端、矢の様に真つ直ぐ東雲へと突き進んでいた鎖分銅がくねり舞い、まるで蛇が鎌首を擡げるが如く、その先端を跳ね上げて天高く上昇する。

「おおー」

「あんま舐めんな」

まるで生き物の様な鎖捌きに山下が小さく感嘆の声を上げると小さく鼻を鳴らして東雲が吐き捨て、鎖を持つ手を振り下ろす。

途端に分銅は急速落下、東雲が小さく手を拗らせる度に千差万別に起動を変えながら山下を襲った。

しかし山下は、頭に落ちると見せて大きく直前に弧を描き、左膝頭を襲う。と見せかけて更に鎌首を擡げて鳩尾へ突き進んで来た、見切る事など不可能に等しい分銅へ刹那の遅滞無く掌を翳し合わせ、触れた瞬間にその手を閃かせる。

直後、轟音と共に分銅は床を爆砕しながら地中深くへめり込んでいた。逸らしたり返したりすればその度分銅を返される、と判断し

ての山下の武器殺しである。

しかし、分銅が闘技場の床を叩き割ったその瞬間には、既に東雲は鎖を手から放り捨て山下へと突貫していた。

腰元から太刀を引き抜き、東雲は突きの姿勢で一心不乱に山下へと突き進む。

……及ばなくてもな！勝負を途中で投げろと教わった覚えは無えんだよ!!?……

「おおおおああつ!!?」

裂帛の気合いと共に渾身の瞬動で距離を詰め、山下の胴体目掛け東雲は突きを放つ。

「お見事」

「……………つ!!?!!?」

しかし、刀身が届く、かと思った次の瞬間には、東雲は刀を突き出した体勢のまま宙を旋回して、場外目掛け吹き飛んでいた。身体に痛みも、負傷も無い。タイミングはおろか何処を掴んで投げられたかすら解らないが、東雲は己が軽くあしらわれた事だけは理解していた。

「……………強えな糞が……………畜生め……………」

己が非力を嘆きながらも東雲は場外に着地し、この瞬間Bブロック十六人目の敗退者が決定する。

『東雲選手、場外!!?底知れぬ強さだ山下選手、人をまるで人形のように容易く宙を舞わせるその腕前！まるで映画か漫画の世界だあーっ!!?』

『とても闘っている様には思えない、いっそ優雅ですらある合気と柔の技。『流麗舞闘』の名に相応しい圧倒的な実力ですね』

実況と解説の声を遠くに山下は一つ息を吐き、闘技場内を見据えながらもポツリと呟く。

「やっぱり、楽じゃあ無いね麻帆良の武道家達は……………」

「……？！！？」

「ご、バアア！！？」

大豪院の打ち込んだ双撞掌が防御に回された半月刀とマン・ゴーシユを諸共に打ち砕きながら男を凄まじい勢いで吹き飛ばす。

「野郎つ……！！？」

道着姿の男が鋭い踏み込みと共に、縦拳、リードストレートとも称される直突きを大豪院目掛けて打ち放つ。しかし、大豪院は拳が己に届く寸前に鋭く一步踏み込んで絡み、纏わせる様な腕の動きで拳を受け止め、横に払う。

嫺やかな動きとは裏腹な重い払いに弾かれて体勢を崩した男目掛けて、大豪院は闘技場の床に亀裂が走る程の重い震脚と共に靠撃を繰り出した。

「があああああつ！！？」

咄嗟に男は防御を試みたが、自動車に跳ね飛ばされる様な衝撃に腕ごとへし折られて弾き飛んだ。

「…手応えが無いな、貴様ら。俺達に挑戦しに来たのだろうか？」

もう少し根性を見せてみたらどうだ？と、大豪院は腰を落とし、た原初の姿勢に戻る。

「……では私が。挑ませて頂きますよ、大豪院君」

「……ああ、確かサバットの、常道先輩だったか……？」

挑発めいた大豪院の言葉に呼応したかの様に、軽やかな足取りで大豪院の前に立ち塞がった三つ揃いの背広を着こんだ男——サバット部 部長 常道 優也だった。

「ええ、その通りです。顔と名前程度は覚えて頂いていた様で安心しましたよ」

「当時はまだ貴方は副部長だったな、確か。成る程腕は上げたらしいが………まあ、いい」

言葉は無粋か、と小さく呟き、大豪院は僅かに前足へ重心を移す。

次の瞬間には弾かれた様な速度でありながら、床面を滑り移ったかの如くぬるりとした動きで大豪院は常道の懐近くまで移動して

いた。

「……！、瞬動!!？」

「いや、探馬歩の発展形だ」

言い捨て様に大豪院は槍の如き横突き、冲捶を常道の胴体目掛け突き込む。

「……ふっ!!？」

しかし常道は素早く半身になりつつ身体を左に捌いて大豪院の一撃を躲し様、手に持つ杖ステッキ　―鉛入り―　にて大豪院の頭部目掛け横薙ぎに振り抜いた。

「……つち……つ……つ!!？」

大豪院は上体を沈めて薙ぎ払いを躲し、常道の動いた側へ踏み込み肘の打撃を見舞おうと前進する。

しかし、直後に常道が打ち放った横蹴りシヤツセが大豪院の肩口付近に突き刺さり、杭打ち機バイルバンカーに一撃された様な重い衝撃に大豪院は踏み込みを断念して構え直す。その隙に常道は数本退いて距離を取り、杖ステッキを構えた戦闘姿勢を取った。

「……良い蹴りだ。棒捌きも素人では無いな」

「手足が届く間合いの打撃技法ボックス・フランセーズしか教えていない現在の競技的なサバットと違い、至近距離での投法、関節技法麻帆良ウチのサバット部は杖を用いた牽制術カンヌ・ド・コンバットやリュット・パルジエンヌをも継承している紳士の護身術にして総合格闘技ですからね。この格好も意識してのものなんですよ」

背広の襟を軽く摘みながら常道は微笑んでそう告げる。

「それでは、白黒付けましょうか大豪院君。salute!  
アン　ギャルド　en　garde？」

「……望む所だ」

大豪院は深く腰を落とした半身に近い姿勢となり、強い視線にて常道を促す。常道は笑みに獰猛なものを一瞬滲ませ、高らかな叫びと共に躍り掛かった。

「ailez!!？」

常道はフェンシングの如く杖ステッキを長い片手握りに手挟み、飛び込む様な遠間からの踏み込みで大豪院の顔面へ先端を突き込む。



しかし、大豪院は円を描く様な腕の振りで杖を横から払い、緩やかな動きとは裏腹の強い一撃によって常道の手から杖を弾き飛ばした。

「……ツ・アアイツ!!?」

それでも常道は動じずに飛び込みによって詰めた間合いを更に一步踏み込み、大豪院の拳足が届く一步外の間合いから渾身の廻し蹴りを放つ。それも大豪院は僅かに上体を引いて躲すが、常道は想定内だとばかりに刹那の遅滞も無く連撃を放った。

それは一見して始めの方に繰り出した横蹴りの動き。実際にサバットの試合においても廻し蹴りからの横蹴りは定石となるコンビネーションの一つであり、手合わせが初めてでは無い、ましてや先程横蹴りを喰らったばかりの大豪院ならば疑い無く胴体、もしくは顔面への蹴りだと判断してもなんら不思議は無いだろう。

しかし、常道の蹴り足は大豪院の胴体目掛けて突き進む最中に後ろ回し蹴りでも打つかの様に小さな弧を描いて斜め下方に落ち、大豪院の前足大腿部に突き刺さった。

近接から相手の腿や膝を踏み込む様に蹴り下ろす、骨法などでも見られる摺り蹴り。サバットにおいては coup de pied bas と呼称される一撃である。

大腿部は筋肉の塊に思えるが、膝のすぐ上から中央にかけて急所の集中している、人体構造において弱点の多い箇所だ、踏み抜けば激痛の疾走り続け、真面な足は使えなくなる。

常道は至近距離での強烈な一撃を主とする八極拳使いの大豪院相手に間合いを詰めすぎたの勝負は危険と判断し、大豪院の足を殺してからサバットの得意とする遠間からの蹴りによって仕留めようという戦術を立てていた。

「……………!!?」

「先にも言ったが、良い蹴りだ」

しかし。

大豪院の腿へ突き刺さった常道の蹴り足は、まるで布団に包んだ鉄柱へ蹴り込んだかの様な柔硬併せ持つ感触と共に跳ね返され、常

道はバランスを崩してたたらを踏む。

「しかし俺にとつてはまだ……軽いっ!!?」

動作に支障無く大豪院の前足が常道の至近へ振り下ろされ、闘技場の床を粉々に砕く震脚がブロック内全体を地震の如く揺るがす。直後打ち放たれた鉄山靠は常道の身体を木の葉の様に軽々と吹き飛ばし、肋骨を纏めてへし折られ内蔵にもダメージを喰らった常道は、血反吐を吐きながら場外彼方の壁に叩き付けられた。

「……硬気功の一種だ。前に出足を潰されて痛い目に遭っているのでは」

大豪院は僅かに自嘲気味に口端を曲げると、静かに闘技場内の他選手に身体を向ける。

「……さて、次は誰が来る? 轢殺されたい奴から来るがいい」

『……大豪院選手、凄まじい踏み込みからの強おー烈な体当たりいっつ!!? トラックに撥ねられても人はこう景気良くは吹き飛ばさないでしょう!!? 今大会優勝候補とされるバカレンジャー、五人が五人とも人間辞めすぎです!!?』

『因みに今の豪院選手の踏み込みは震脚、体当たりは鉄山靠と呼ばれる技です。中国拳法の種類、八極拳の技であり、その破壊力は麻帆良No. 1とも謳われます。そのあまりの威力から山を崩し、海をも裂くと噂された故に豪院選手の異名は『崩山裂海』……如何ですか、不思議と名前負けには聞こえないでしょうか?』

喧囂は愉快気に卓上へ肘を付いてゲ○ドウポーズを取り、各ブロックを見渡してからポツリとマイクを通さずに呟く。

「……そろそろ大詰め、か。勝ち上がりで全くの想定外は……一人二人、居るな……全くの下馬表通りにはいかない、か……」

その視線の先には人が疎らになり始めた複数のブロックがあった。

ただ只管に、あらん限りの力で薙ぎ払い、打ち崩し、突き穿つ。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの存在するブロックの他選手達は、まるで嵐の海に翻弄される小舟の様であった。

「ガハツ!!??」

「ギイイ!!??」

「ギャアア!!??」

腕を掴まれたまま玩具の様に、力任せに投げ出された軍服の男が道義姿の男と衝突して鈍く、湿った音と共に両者が潰れ、目一杯に振るわれた技術も何も無い、ただ荒々しいだけの腕による薙ぎ払いがトランクスの男のガードした腕をへし折りながらその身体をボロクズの様には吹き飛ばす。

『アイ、Dブロックのエヴァンジェリン選手…可愛らしいお人形の様な見た目とは裏腹の、悪鬼羅刹の如き暴れ振り!!? 体格差二倍以上の男達が鎧袖一触と薙ぎ払われるうううう!!? ぞ、それにしても何とという怪力だあああ!!??』

『事前の情報ではエヴァンジェリン選手は高度な武術の使い手との触れ込みでしたが…:…まるで野獣の如き荒々しきですね』

…:…悪いな、貴様ら。普段ならばもう少し真面に相手をするんだがな…:…

…:…鬱屈としているんだ、苛ついているんだよ私は。訪れない待ち人に、無謀に愛を謳う若僧に…:…

…:…そして何より無様に揺れ動く、自分自身に、な…:…!!??

「運が無かったな、貴様ら。…:…八つ当たりにつき合つて貰うぞ」

底冷えのする声音で静かに宣言したエヴァンジェリンは、浮き足立つ武道家達目掛けて全力で突っ込んだ。

「…:…貴様あ！一体何者だ、名を名乗れ!!??」

「いやはや困りましたね…:…先程から申し上げている通りですよ、勇ましいお嬢さん。私の名はクウネル・サンダース、ある図書館ではない司書を営んでいます」

「その何から何まで胡散臭い名乗り上げの何処を信用しろというのだ

巫山戯おつてええええつ!!?!?!?!」

闘技場の中央にて悠然と佇むフード付きのローブ姿の怪し気な人物ークウネル・サンダースの口上に先程から頭に血を昇らせた様子で叫ぶのは、二mを超えるであろう黒鋼の重装板金鎧スリーツァーマイに身を包み、全長5mを越す長大にして巨大なハルバードを構えた、空想世界ファンタジーの悪役としても登場しそうな重戦士がいた。

なんとこれで中身は女性であり、肩書きは刀剣甲冑部部长、名を鎧塚 彩華という。麻帆良武道家の武器使用組（暫定）No. 1の辻にライバル意識を燃やす怪力熱血少女であった。

鎧塚は予選が始まって以来、その重装備を苦にもせず、高速で動き回り、暴風の如き斧槍の一閃にて数多の武道家達を鎧袖一触と薙ぎ払って来た。

そしてブロック内の人数が元の半数以下に減少し、この調子ならば本選通過は堅い、と鎧塚が喜色を露わにしかけた時だった。クウネルと名乗る謎の人物が鎧塚の前に立ち塞がったのは。

何事かをペラペラと唱えるクウネルの言動に一切頓着せず、鎧塚はハルバードを胴体目掛け横薙ぎに振り抜いた。

身体は何方かという細身の少女だが、内気による身体強化においては麻帆良有数の使い手である鎧塚の力は、大岩を容易く粉碎し自動車を軽々と放り投げる荒唐無稽な代物だ。クウネルがどのような使い手であろうが、真面に直撃すれば刃が潰してあるとはいえ胴体が断裂しかねない超常の一撃である。

しかし、為す術無く両断されたかに見えたクウネルの身体は、ハルバードの刃が当たったかどうかという時点で霞の様に掻き消えた。驚愕した鎧塚は刃を慌てて引き戻すが、それよりも早く鎧塚は、背後から巨大な鉄槌に殴られた様な一撃を喰らい前方へ転倒した。

鎧塚が跳ね起き、後ろを振り仰げば其処には無傷のクウネルが突き出した掌底を引き戻す所であった。

それから優に数分が経過し、クウネルを裁断せんと斬撃、打撃、刺突を嵐の如く叩き込んだ鎧塚だったが、その何れもが躲し、捌かれ、直撃したかと思われた一撃も気付けばクウネルの身体には負傷どこ

ろか身に纏うローブに綻び一つすら無い。単に強いという言葉で括るには余りに異質で底知れない何かを持つクウネルに、鎧塚は憤怒と微かな怯えを抱いていた。

……底知れない。動きを見れば素人で無いのは解る、しかし、私の攻撃は確かに当たっている……何故、それでこの男？は倒れないどころか傷一つ、負っていない……………!!?」

ギシリ、とハルバードの柄を握力により軋ませる鎧塚に、クウネルはあくまで穏やかな調子を崩さずに語りかけた。

「混乱するのも無理はありません。私のこれは言わばズル、の様なものでしてね、表の世界に身を置く貴女方にすれば未知を通り越して異質の領域に有るものですからね。…貴女の実力は素晴らしい領域に達しています。裏の世界を通して一角の代物であると、私が太鼓判を押ししましょう。ですから、私に屈してもどうか腐ること無く精進を続けて下さいね」

「……………この、私を前に、私が五体満足のこの時点で、勝利宣言か?……………」

クウネルの、その幼子を諭すかの様な優しい、丁寧な調子が。鎧塚の心の、柔らかい部分を刺激した。

「つゝゝゝ!!?!!?……………この、鎧塚 彩華を、…………舐めるなあああああつづ!!?!!?!!?」

空気を引き裂く様な怒号と共に。

鎧塚の纏う重装板金鎧スレッツプレートの各所から湯水の如く黄金色の気が溢れ、漆黒の甲冑は輝く光を纏った。

甲冑の関節部が啼き叫ぶ様な音を立てて軋みを上げた瞬間には、鎧塚の全身は颯風を纏ってクウネルへと一直線に突き進む。

「ルアアアアアアアアツツ!!?!!?」

裂帛の気合いと共に放たれた斬撃は一呼吸に五撃。100kgを優に越す重量武器をまるで枯れ枝の如く振り回しての全方位攻撃は、例え辻達であろうとも迎撃に困難を窮まるであろう鎧塚渾身の一撃がクウネルの全身を叩き斬り刻み。

次の瞬間クウネルの身体は鎧塚の頭上あらかわに出現していた。

「……素晴らしい攻撃でした」

クウネルの手から不可視の何かが放たれて。

次の瞬間、巨人の掌に押し潰されたかの様に鎧塚の全身は地面に墜落し、爆砕して木切れと化した闘技場の床材を巻き上げながらその下の地面に巨大なクレータを作りあげ、沈んだ。

もうもうと白煙を上げる巨大な穴を見下ろしながら宙に浮かぶクウネルは、緩やかな下降を始めながら、ローブの奥の目を微かに細め眩きを洩らす。

「……申し訳ありません。私も負けられない事実があります故に……」

地面に降り立ったクウネルはもう一度地中に倒れ伏す鎧塚に視線を落とし、目礼を行ってから残る選手へ対峙すべく身体を廻して。

次の瞬間眼前に迫っていた褐色の巨体に目を見開き、僅かに身じろぎをした直後に訪れた莫大な衝撃に、全身を歪めながら宙を舞っていた。

『よ、鎧塚選手を謎の攻撃により打倒したクウネル選手、ボディビル研部長 金剛選手のシールドータックルにより宙を舞ったあああっ!!?』

「アイヤ、モロアル。あんなの私が喰らたら全身複雑怪奇骨折アルよ」「うゝむ、金剛殿の馬鹿力は下手をすれば中村殿の全力打撃に比肩し得るかもしれんでござるなあ。この武道会の選手は何れも一騎当千の猛者ばかり、拙者はまこと井の中の蛙でござったなあ」

朝倉の興奮した様な実況のシャウトを耳にしながら、古と楓はそれぞれテコンドー部部长 天越 修斗と忍術部 副部长 忍野 瀧姫を足にて踏み付け、または腕を捻り上げて拘束しつつ言葉を交わしていた。

「ぐあ……っ!!?てめえ古 菲!!?止めも刺さずになんのもりだてめえ!!?」

「ム?あらかた倒し終わて楓と一息吐いてる所に襲い掛かて来る方が

いけないアル。とはいえ？<sup>ドワイブウチイ</sup>不起、確かに武道家の振舞いでは無かたアル、嘿ハイイツ!!?」

「ゴツ!!?」

天越の怒りの声に対して素直に詫びた古は気合いの声と共に延髄へ足刀を落とし、速やかに 天越の意識を刈り取った。

「うむ、藪蛇でござったなあ」

「……私のことも、さっさとケリを着けたら如何かしら楓さん？私の負けよ。あの隠形を察知されては私に勝ちの目は何一つ無いもの」

白目を剥いて崩折れる天越を呆れた様な目で見やる楓に、微笑に目元と口元を歪め悔し気な表情を浮かべながら忍野が言い放つ。

「あいあい、拙者は本選に必ずや出場でする心積もり故に、一つ質問に答えさせてさえくだされば言われずともそうさせてもらうでござるよ」

「……何かしら?」

「何故忍野殿は拙者を付け狙ったでござるか？拙者も忍術部の誘いを無碍にした身、恨まれる当てはないでは無いでござるが、何故今になって、という点が腑に落ちぬのでござる」

楓の問いに忍野は一つ息を吐くと切れ長の瞳を楓に向けて、普段よりも一層抑揚の無い声で言葉を放った。

「勘違いよ、楓さん。忍術部一同の総意はあの時忍足部長が告げた通り、来る者は拒まず、去る者は追わず、そして望まぬ者には強いらすよ。私が貴女を目の敵にしたのは、あくまで私個人の理由からだわ」「なんとー……………拙者其処まで恨みを買う様な真似を、何か忍野殿にしてみましたでござろうか?」

以外な忍野の台詞に、楓は糸目を見開いてやや急いた様に尋ねる。

「……貴女に非は無いわ、勝手な私の、逆恨み。……忍足部長が、何かにつけて貴女の腕前を誉めそやすのだもの。嫉妬したのよ、貴女に」

「……………(うき)……………」

「アイヤ楓、大丈夫アルか?」

果たして告げられたあんまりと言えばあんまりな理由に、楓は妙な眩きと共に固まり、古に心配される。

「……元々必要な時以外は喋ってくれない人なのに、私が頑張って訓練の事なんかで話しかけても引き合いに出すのは貴女のことばかり。いくら貴女が強くて上手いからって、部長にその気が無いって解っていたって。…面白く無いし、寂しいのよ。だから貴女に勝つたらもう少し位私のことを見てくれるかな、って思ったから、勝負を挑んだの。悪い事をしたとは思っているわ、迷惑を掛けたわね楓さん」  
「……いや……そういう事情ならば、拙者も気持ちが悪くは無い気がしないでも無い故……。仕方が無いでござるよ」

目を伏せて謝罪する忍野に、楓は脳裏にボンヤリと一人の男の姿を思い浮かべながらそう告げた。

「……そう、ありがとう……」

「……失礼は承知の上アルが、あんな仮面男の何処がいいアルか？」

古がおずおずとした調子でそう尋ねる。忍野は少しばかり目を細めて古を睨み付けるが、臆て頬を微かに朱に染めて語り出した。

「……忍足部長って、何方かと言えば小柄な方でしょう？」

「…む。まあ、平均やや下くらいでござるか？」

「チビでは無いアルが、麻帆良の男の中では小さいアルね」

唐突な忍野の台詞に、二人は首を傾げながらも同意する。忍野は我が意を得たりとばかりに頷き、若干弾んだ声音で告げた。

「……あの人は意外に可愛らしい顔立ちをしているの。寡黙だけれど面倒見が良くて、強くて優しい。凄い器を持っていると思わない？ ……それなのに私の胸に収まる位小柄で、可愛い顔をしているんだもの。……そのギャップにハートを撃ち抜かれたのよ」

「顔見たアルか!?」

「……そうでござったか……」

麻帆良の百は超えるであろう不思議の一つを知ったという忍野に、古は驚愕し、なんと答えて良いか解らなくなった楓は何とか相槌を口にした。

「……拙者、気になる男性がいる故忍野殿の障害になるつもりは無いでござる。しからば、これにて」

「……そう。無礼に温情を返してくれてありがとう、楓さん」



タン、と延髄に振り下ろされた楓の手刀にて意識を飛ばされる忍野。

楓は一つ息を吐いて古と顔を見合わせてから互いに苦笑し、言葉を紡ぐ。

「…何にしろこれで本選出場決定でござるな」

「どいつもこいつもタフ過ぎてスゴく苦労したアル！陸上部の部長とか、すれ違い様に蹴りを入れたら脚ごと持てかれそうになったアルよ!!？」

自分達以外は誰も意識を保っているものの居ない死屍累々とも表現出来そうな空間を見渡しつつ古は語る。

「……他のブロックもほぼ決まった様でござるな」

「あ、ホントアル。……好!!？ポチは生き残てるアルね！皆も大体健在アル…後は………」

「真名が脱落ちているのは意外にござるが……」

楓と古の視線は唯一戦闘音の響く一つのブロックに注がれていた。

「クウネル・サンダース。あの御仁は生き残るでござるかな？」

「あの筋肉ダルマが負けるのはちよと想像出来ないアルが……此処で負ける位ならとんだ赤恥アルよ、あの男。金剛には悪いアルが、残ると思うアル……」

「フン、ンンンンンンツツ!!？」

金剛の繰り出した掬い上げる様なラリアートがクウネルの胴体に斜め下方から炸裂し、その身体をくの字に折り曲げつつ天高く吹き飛ばす。

と、思われた瞬間その姿は空間に溶け崩れたかの様に掻き消え、次の瞬間には死角からの強烈な打撃を喰らって金剛の巨体は闘技場の床を転がる。

既に片手の指で余り始める程には繰り返されたそんな光景だったが、急所である筈の延髄に強烈な掌打の一撃を入れたクウネルの、ローブに隠れた表情は冴えない。

「H A H A H A！これが全力の a t t a c k かい、h e r m i t 殿？  
至高の筋肉に守護まもられる私には h a i r 程も効いてはいないよ？」

動作に刹那の遅滞も無しに平然と身を起こし、暑苦しい笑い声と共にサイドチェストを決める金剛。人間ひととは一見して思えぬその巨体の全身は小山の様に盛り上がり、纏まとう光を身体中に塗りたくられたオイルが照り返して不気味な輝きを放っている。

ボディビル研部長 金剛 力也。自他共に認める麻帆良N.O.  
1の膂力を持つ男であり、その最大筋力は莫大な重ウエイトりの負荷に耐えられる器具が未だ存在しない故、最早本人にも計り知れない。

一つ言えるのは、彼は大型トラック程度ならば両手で掴み振り回すことが可能だという事である。

その極限まで鍛え込まれた肉体は当然のことながら気を発現しており、金剛が身体強化により防御に徹した場合、かのバカレンジャーデスマメガネや死の眼鏡すら意識を刈り取れる確証は持ち得ないとコメントする。

「……凄まじい肉体と、身体強化ですね。今し方の一撃などは、年甲斐も大人気も無くこの身体での本気で打ち込んだものですが……本当に、大したダメージは無い様ですね」

感心を通り越して半ば呆れた様にクウネルは呟く。

確かにクウネルの本業は前衛で無く後衛寄りであり、その格闘技能と身体能力は裏の一流程度でしか無い。

しかしそれは、裏の世界で一握りの本物を除けば誰とでも最低限互角以上には渡り合える、ということであり、普通に考えれば表の世界、それも日本という各種安全の保証された先進国の学生が主体となる学祭で催される大会などで発揮される様な実力では断じて無い。「…例年の学祭や体育祭を通して、麻帆良の学生達の異常振りは充分に理解していたつもりでしたが……どうやら私の認識はまだ甘かった様ですね」

「H A H A H A H A！褒め言葉と受け取っておくよ!!？」

何処か力の無い声でそう独りごちるクウネルに、テンション高く応じる金剛。

「……しかし何ともmysteriousな技術を使うねhermit殿？私は確かに貴殿をこの筋肉に捉えた瞬間take effectを感じている。つまりは貴殿は瞬動なる気の技術にてescapingしている訳では無く、またliving bodyの感触である以上は私の様にnonstandardな防御力で耐えている訳でも無い、と、いうことだ……まるでto be deceived by a foxな気分だよ」

金剛は笑みを消し、悠然と佇むクウネルへ向けて舌鋒を飛ばす。

「going right to the pointに尋ねるがね、hermit殿。如何にも貴殿からはjoin battleの意志を感じられない。私は武道家では無く、筋肉の力強さ、美しさといったvalueを他人に知らしめる為のartistであり、propagandistだ。しかし武道家の灼けつく様なvictory or defeatへの情熱は、今迄打倒して来た者達へのcourtesyとしてよく、理解しているつもりだ」

金剛は指を突き付け、クウネルへ向けて鋭く言葉を叩きつける。

「seriousnessになりたまえよ!!？貴殿は先程倒した鎧塚君にpay one's respects toの為にその頭を下げたのだろうか！貴殿がこちらを見下しているので無くばそれがcourtesyというものだ!!？」

そうで無くば貴殿の倒して来た武道家達が浮かばれまい!!？と、言い放ち、金剛は全身の筋肉を隆起させる。

「私はこれよりmaximum powerにて貴殿を攻撃する。貴殿にbe unbeatableな理由があるならば、まずは私の屍を越えて行きたまえ!!？」

金剛の宣言に、クウネルは暫しの間微動だにせず押し黙っていたが。

「……私に返す言葉はありません、貴方の言葉は最もでしょう。真剣にこの大会へ挑んでいる方達からすれば私の行為は唾棄すべきもの

でしょうから、ね」

しかし貴方の言う通り、私には私なりに負けられない理由があります、とクウネルは唱え、その身に不可視の重圧を纏わせる。

「故にせめてもの礼儀として、私なりの全力でお相手しましょう。貴方の強靱さならば、耐えられるでしょうからね」

「……フン、上等だとも。この至高の筋肉、penetrate出来るものならばしてみるがいい!!?」

金剛は言い放つが早いのか、全筋力を用いての己が身体自体を凶器と化した最も単純にして原始的な攻撃、体当たりチャージングを敢行した。

たかが突進と侮るなかれ、重量400kgを超える重く、分厚い肉の塊が凄まじい速度でぶち当たるのである。金剛の瞬発力、気の強化による肉体強度を併せて鑑みれば、その破壊力は大型トレーラーの衝突を遥かに上回るだろう。

まほら武道会最重量のその巨体が掻き消え、無防備に佇むクウネルへと高速で突き進む。その身体がクウネルへ届き掛けた、その瞬間――

「遅い」

ークウネルがこれまでで最大級の力を解き放ち、金剛の身体は一瞬で闘技場の床を貫通して地面に両脚を半ばまで埋もれさせる。

フウ、と息を吐きかけたクウネルは、猛烈な違和感に一瞬動きを止める。

そう、金剛は極大の重力力場重力力場を浴びたにも関わらず、地面に身体を付けずに両の脚で立ち続けていたのだ。

……貴殿はattackを受けてもstrangeな回避を行う。ならば貴殿がattackを行っている最中でもescapeは可能かい?……!!?」

軋む全身に喝を入れ、金剛は綿毛を鉄塊の如き重量に感じる重圧の中、腕を引き絞り渾身の力を込めて突き出した。

豪腕は確かにクウネルの顔面を捉え、確かな手応えと共にその身を吹き飛ばす。

「……ふ、む……やった……かな……」  
「いいえ、残念ながら」

その身を襲っていた重圧が消え去り、圧力によつて無理矢理下降させられていた血液が頭へ昇ってくる鈍痛に額を抑え、霞む目を開きながら眩いた金剛の背後にて、終焉を告げる声が響く。

「…mortificationだねえ……」

悔し気に眩いた金剛の身体は、次の瞬間二度目の重力力場に押し潰され、地面に叩き付けられた。

「月並みな賛辞となりますが……素晴らしい闘志です、見事な闘いぶりでした。……ですが、今はまだ、私には及びません」

『……それまで!!?金剛選手の戦闘不能を以つてAブロックの本選出場者二名が決定、全てのブロックで選抜が終了した為、まほら武道会の予選を終了します』

『平凡な感想になってしまいましたが、どれをとつても凄まじい闘いばかりでしたね。観客の皆様にも大いにお楽しみ頂けたようです』

AとHブロックの生き残り二名が闘技場を離れ、各々解説席前の壇上に集う。

『それではこの猛者達が集う群雄割拠の予選にて本選出場の栄光を勝ち取った強者達の紹介を行います!!?Aブロック代表、クウネル・サンダース選手!豪徳寺 薫選手!』

「……やっぱてめえは気に入らねえな」

「おや、それは至極残念です」

『Bブロック代表、大豪院 ポチ選手!桜咲 刹那選手!』

「……桜咲後輩……」

「……今は、何も聞かないで下さい」

『Cブロック代表、ネギ・スプリングフィールド選手!犬上 小太郎選

手!』

「……………ネギ、生きとるか…………?」

「……………何とか、ね……………」

『Dブロック代表、中村 達也選手! エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル選手!』

「うわようし、よつよい」

「黙れ」

『Eブロック代表、辻 はじめ 選手! 山下 慶一選手!』

「辻、悪いけど僕桜咲ちゃんの味方かな」

「……………ああ、文句を言う資格は俺には無いよ」

『Fブロック代表、篠村 薊選手! 高音・D・グッドマン選手!』

「あゝゝゝマジで疲れた、つうか余裕で何回か死にかけた……………」

「私が……………コスプレイヤー……………ふ、ふふ……………!」

『Gブロック代表、長瀬 楓選手! 古 菲選手!』

「お互い、目当てと当たるまでは負けられんでござるな古」

「無論アル!!? 首を攫って待てるアルよポチ!!?」

『Hブロック代表、高畑・T・タカミチ選手! 杜崎 義剛選手!』

「ものの見事に知り合いばかり残ったものだ。…確かに、持っていますね、ネギ先生は」

「はは、小太郎君とコンビだったのが功を奏したのもあると思いますよ」

『以上十六名が明日の本選より鎬を削り合います!!? 皆様、各選手の健闘を祈り盛大な拍手をお願いします!!?』

万雷の拍手が鳴り響く中、中村が一際ズタボロのネギと小太郎に声を掛ける。

「よー、やったなオメエら。鍛えといて何だが抜けて来ると思わなかったわ」

「……………いえ、心底思い知りました。僕らなんて、まだまだだったんですね」

「俺を含めんなや……………とりたいところやが同感や。正直、最後まで残れたんは運があったわ」

「それが実感出来たならば一歩成長だ」

大豪院が薄く笑みながら会話に加わる。

「にしても恐れ入ったぜ、魔法使いは全員勝ち残ってんな。杜崎と死デスメガネの眼鏡は……うはは、随分ボロボロだなオイ」

「先生を付けろ軍艦頭。貴様こそボロ雑巾の分際で偉そうな口を利くな」

「……何だか僕達は広域取り締まる側指導員だからか、日頃の仕返しとばかりにそつちみたいに一对一で無く集団で仕留めに来てね……」

高畑があちこち破れたスーツを悲しげに見下ろしながら力無く呟く。

「全く、これだから貴方達バカレンジャーの同類は！無法者と変わらないじゃないこれじゃあ!!?」

「オイオイ高音、同類呼ばわりは流石に……、いや正当な分類か……」

「まあ日頃の行いからして反論は出来んでござろうなあ」

「アイヤ、友人付き合っている自分が恥ずかしいアル」

「二てめえ（貴様）も同類だバカンフー娘が（めが）!!?」

中村達が会話に花を咲かせる間、辻と刹那。山下とエヴァンジェリンはそれぞれ無言のままに見つめ合っていた。

「……諦める気は、無いか……」

「当然です」

「……ならば……」

「……ええ……」

「勝負だな（ですな）」

「うくん、あつちは驚くことに今勝負で決めようって話になったみたいだねえエヴァさん」

「……他人を気にしている余裕があるのか？」

「……いや、正直あんまり無いね」

「だろうな、私もだ」

「……………」

そんな緊迫感に満ち満ちた四人の空気に、残りの人間も当てられて会話が途絶える。そんな中唯一泰然とした空気を纏ったままなのはクウネルだ。

「…(おやおや、この距離でキティが私に気付かないとは、余程山下君のことで頭が一杯なようですね)」

……おやおや、正直私に勝つどころの騒ぎでは無いのでは？皆さん」

口の中で小さく呟いてからクウネルは柔らかな笑みを口元に湛えて中村達へ言い放つ。

「五月蠅せー謎イケメン!!?、こちとら色々取り込み中なだけだボケ!!?」

「てめえなんざ俺ら……いや俺だけで充分なんだよ優男!!?」

「貴様ら速攻で挑発に乗るな馬鹿共が……………」

「フッフ……………」

ギアアギアアと中村達がいがみ合っていると、突如何も無い空中に映像が浮かび上がり、名無しのトーナメント表が浮かび上がる。

『皆様、どうか空中の映像をご覧下さい!!?本選形式は1DAYトーナメント!組み合わせは完全なるランダムにて決定します。間もなく一回戦、全八試合が決定されます、ご注目下さい!!?』

朝倉の説明が終わるか終わらぬかの内、空白の選手名枠に文字が浮かび上がり始めた。観客席から喧騒が消え、無数のざわめきに変わる中、舞台上の選手達は固唾を飲んでトーナメント表を注視する。

やがて、枠内の文字が完全に露わとなった。

まほら武道会本選 Aブロック

第一試合

??辻 一

??桜咲 刹那

第二試合



?? 山下 慶一

?? エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

第三試合

?? 中村 達也

?? 長瀬 楓

第四試合

?? クウネル・サンダース

?? 豪徳寺 薫

まほら武道会本選 Bブロック

第五試合

?? ネギ・スプリングフィールド

?? 高畑・T・タカミチ

第六試合

?? 高音・D・グッドマン

?? 杜崎 義剛

第七試合

?? 篠村 薊

?? 犬上 小太郎

第八試合

?? 大豪院 ポチ

?? 古 菲

「.....」

オオオ!!?と湧き上がる観客を余所に、海よりも深い沈黙が舞  
台上の選手達を包み込んでいた。

中村が無言のまま左を見ると、そこには辻と刹那が肩を並べな  
がら物騒な形で目付きを細め、互いに無言のまま嗤っている。

その光景からそっと目を逸らし、中村が右を見やるとそこには  
山下とエヴァンジェリンが並んで佇み、顔を見合わせながら苦笑して  
いた。一見して和やかだが、瞳の奥には鋼の様な硬質の煌きが宿って

いる。

無言のまま顔を正面に戻した中村は深く嘆息し、乾いた声でポツリと呟いた。

「この大会、一試合目か二試合目か、或いは両方で死人が出て中止になるんじゃないの……？」

12話 まほら武道会本選第1試合 辻VS刹那  
(その1)

可愛さ余って憎さ百倍、という諺があるが、俺のそれは違う。切衝動

相手に対して好意を抱いているけれど、くな理由からそれが負の感情に変わり、相手を害したい。では無いのだ。

そもそも俺の欲求が疼くのはマイナスの感情を抱いている対象よりもプラスの感情——親近感、思慕、愛情、性的好奇心、尊敬、憧憬——等を抱いている対象に対してが殆どだ。平たく言うなら好きだから断ちたい、とそういう訳なのだろう。

彼女はとても優しく、友達思いで。不器用なのに責任感が強くて他人を頼るのが苦手だ。とてもいじらしく、そんな所が好きだ。だから断ちたい。

馬鹿で底抜けのお人好しで、夢の為に全力で努力を続けている。尊敬出来る、素晴らしい自慢の友人達だ。だから断ちたい。

まだ幼いのに辛い目に遭って、世を憐んでもおかしく無いのにとっても頑張っている、好感の持てる少年だ。だから断ちたい。

そんな価値有る彼、彼女らをもっと素敵にしてあげたい。何より、もっと綺麗になった皆を俺が見たい、感じたい。

だから俺は桜咲 刹那を二等分に両断したいのだ。

：そして、つい最近になって俺は、それさえ正しくは無いのではないかと考えるようになった。

そう、ひよつとしたら俺は……

好きだから断ちたい、のでは無く、断ちたいから好きなのではないだろうか。

「……なくって風に語ってやがったなあ、あの馬鹿は……」  
『よく、解らないお話でした、私には……』

麻帆良学園祭二日目のAM07:52。

初日に続いてよく晴れ渡った好天に恵まれた麗らかな日差しの中、龍宮神社の境内に特設された闘技場を取り囲む観客席は、間も無く開始されるまほら武道会本選の第一試合に向けての期待と興奮により、熱の籠ったざわめきという形で静かに湧き上がっている。

その最前列、選手が関係者を招く為の特別席にて中村はその様に眩き、溜息を吐いた。隣に浮かぶさよの相槌にも力は無い。

「真つ二つにしたい衝動が辻あいつにとってのすべて核であり、それ以外の感情やら何やらは全て付随物で過ぎねえってあれか？」

馬鹿馬鹿しい、と豪徳寺は不機嫌そうな顔で吐き捨てる。

「あいつはそんな奴じゃねえ。あのヘタレな底抜けのお人好しっぷりが全て演技だったとでも言うのかよ？」

「豪徳寺先輩……」

千鶴が心配気な様子で手摺りを折れんばかりに握り締める豪徳寺の手にそつと細い指を乗せ、宥める様にそつと動かす。

「演技、っていうのは実際違うだろうね。普段の辻は別に無理をして会話を合わせたりはしていないって言っていたし。二重人格、なんて安易な話じゃないけど、自分の本性っていうか本音なんて完璧に自覚出来ている奴の方が稀なんだ。外面と内面がかけ離れている人間なんて、僕は珍しくないと思うよ」

「……一理ある、かもしれんがな。この場合は奴の本性が他者との交流に対して危険を伴う、という点が問題なんだろう？」

山下の言葉に小さく鼻を鳴らして応じながら、エヴァンジェリンが皮肉気な調子で言葉を紡ぐ。

「考えるまでも無く、好意に比例して相手を害する確率が高まる存在など、人の枠組みにおいては異端どころか排除の対象でしかない。あの剣鬼は賢明な判断をしたよ、私としては奴に一票をくれてやりたいものだ」

「……エヴァちゃん、なんでそんな意地悪言うん……?」

「木乃香、エヴァンジェリンさんは辻先輩の性質について社会的な問題点を論理的に列挙しただけです。…私もあの辻先輩が、社会不適合者であるかのような発言を肯定するのは心苦しいです。…：…それでも、他の誰でもない本人がそう言っているのです。それこそ他人がむやみやたらに否定したところで何の解決にもなりません」

力無い声で、泣きそうになりながら抗議する木乃香に、夕映が自身も苦し気に眉根を寄せながら淡々と諭す様な言葉を掛ける。

「…あの辻が堪えられる保証が無い、と言うのだ。一生忍耐を重ねて己を押し殺し、女の為に生きろ…：…等と無責任に言える筈も無い。…正直な話、俺は奴の言う感覚や感情を全く理解できなかった。憶測や想像で、適当な慰めや励まし、激励を口にした所でなんの意味もあるまい」

大豪院が苦虫を噛み潰した様な表情で吐き捨てた。中村や豪徳寺、山下も各々が苦い顔で無言のまま反論をしない。

辻 一の感性は異質過ぎて、親友と呼ぶに差し支えの無い彼らを持つてしても、理解することは出来なかった。

「…：…辻がそうでも、刹那は諦めてないアルよ」  
暫しの沈黙の後、何処となく不貞腐れた様に古が口を開いた。

「よりにもよって初戦で…とは思わなかったでござるが、刹那は初めからそのつもりで予選を勝ち抜いた様でござるからな」

「…：…でも、お付き合いするかどうかを、勝負で決める、っていうのは…：…」

古と楓の口弁に、おずおずとした調子であるものの、のどかが否定的な見解を述べる。

「だよなあ、強い方が恋愛成就の成否を決めるて何処のバーバリアン戦闘民族だお前らと俺はさつきからツッコみたかったんだよ…」

俺には感性云々よりそつちが理解出来ん、と篠村はバンザイをしてお手上げだとのジェスチャーをした。

「阿呆やな篠村の兄ちゃん。辻の兄ちゃんも刹那の姉ちゃんも、腕を頼りに生きて来た人や。言葉で決着きめられへんことがある、ちゆうことを解つとるんやろ。話し合いで解決せえへんなら、腕づくで相手にい

うこと聞かせるしかないつちゆう結論に達したんや」

「いや、大筋で間違っていねえのかもしれないねえけど、その説明じゃあまりにも二人が脳筋過ぎんだろ」

拳を握り締めながらの小太郎の熱弁に、ネギの頭上のカモが呆れた様子でツッコんだ。

「…というか勝った方が正しいを次の試合に地で行こうとしている僕からすれば耳の痛い言葉だねえ……」

「ハッ……」

苦笑する山下と鼻で笑うエヴァンジェリンである。

「……個人的に思う所は諸々あるけれど、現時点で辻はじめ一が犯罪を犯した訳でもなし、この大会での戦闘行為が私達の規定に違反する事もない以上、これ以上は外野が口を出す資格は無いでしょうね……」

「お姉様……」

魔法組織の一員としても一知人としても不干渉を宣言する高音だが、例に洩れずその顔は浮かないそれだ。隣に付き従う愛衣の表情も曇る。

「…なんだか、大変な時にすみません、僕の一件で……」

「ネギ!!それ以上は止めなさい。辻先輩や刹那さんの件は言っちゃえばアンタに関係ないし、個人の問題って高音さんの言葉もぶっちゃけ正論よ。アンタは何時から兄貴分と生徒の恋愛に干渉出来る程エラくなつた訳?」

「え……いい、いえ、それは……」

「自分が悪いと安易に決め込んで頭を下げればある意味楽ですからね。そんな本質を見ようとしないう逃げの行為は止め、と彼女は言っているんですよ、ネギ君」

明日菜に鋭く制されて言葉に詰まるネギに対して、観客席後方の入り口からゆつたりと歩んで来たクウネルが追従を入れる。

「うわ出たぜ、胡散臭えのが……」

「まあまあ、此処で喧嘩してもいいこと無いですよ」

「覆面プレイ……」

『?、ぷりんさん、プレイって何の……』

「ストロップさよちゅわん、それ以上いけない!!ぷりんったら駄目じゃないもう!お口にチャックよ!」

「ブ、ラジャー!……」

「コントをやっている場合か、貴様ら」

「やあ、皆。諸々あつて遅くなつたよ、済まないね」

クウネルをダシにしてワチャワチャ中村とスライム娘達が騒いでいると、遅れてやって来たのは杜崎と高畑があつた。これで第一試合の開始に控える辻と刹那を除けば、まほら武道会本選出場の選手は全員揃い踏みである。

「……タカミチ、僕は……」

「……事情は何となく聞いているよネギ君。恩人と自分の生徒が関わっているんだ、気が気でないのはよく解る。だけれど……」

「所詮は惚れた腫れたの錨ぜり合いだ。他人に口が出せる訳もないな」

「モリー今他人と担任かけた?つまんねえんだけど」

「黙れカス」

「ホバアツ!」

「揃いも揃ってお優しいことだが、主の試合は間も無く始まるぞ?最早騒いだ所で試合が止まる訳でも無し、大人しく見物しては如何だ貴様ら?」

杜崎の裏拳を喰らつて転倒する中村を余所に、カラリコロリと朱塗りの下駄を鳴らしながら相も変わらず古めかしい道着姿をした女性が一同の前に現れる。

「……フツちゃん……」

「あれ?アンタ辻先輩に付いてたんじゃ無い訳?」

木乃香と明日菜がその意外な人物——正確には人では無く、魔力によつて作られた擬体を操っている一振りの神秘級がアーティファクト——フツノミタマを見て思わず声を上げた。

「どうせ私を大会で振るう訳にもいかな故にお役ご免だそうだ。ならば折角だから良い席で見物でもしようかと思つてな」

フツノミタマは気のない様子でそう答え、通路に佇んでいた高畑と

杜崎の脇をすり抜け掛け、その二人から注がれる視線にふと足を止めると面倒臭気な口調でぞんざいに告げる。

「なんだ其処の中年眼鏡に筋肉ゴリラ？私に欲情したなら主に許可を取って来い。許可が下りたなら抱かせてやるぞ」

「……成る程、色々常識の通じん奴だというのはよく解った……！」

「……杜崎先生、抑えて下さい……」

米神辺りにぶつとい青筋を浮かべる杜崎を宥めつつ、高畑はフツノミタマへ語り掛けた。

「不躰な視線を送って済まないね。君のことは色々報告に聞いてはいたが、会うのは初めてだったものだからつい、ね……」

「そうか、まあ如何でもいいがな」

ぞんざいに会話を断ち切ったフツノミタマは歩みを再開し、ネギ達から数席離れた場所に腰を下ろす。

「……おくいフツちゃんよお？」

「なんだ馬鹿が」

辛辣な罵倒にも怯まず、中村は問い掛けた。

「仮にこの試合、せつたんが勝つちまったらどうすんのよお前さん？

フツちゃんは狂気モードのはじ一ちゃんが好きなんだべ？」

「どうもせんさ」

あつさりとフツノミタマは答える。

「主の才は天下一、だ。主が抑えようとも世界が決して逃しはしない。高々一世紀程しか生きられない人間と違い私は長生き出来るのでな。気長に待てばいいだけだ」

「……相も変わらず不穏な物言いだねえ……」

苦笑いする山下だが、フツノミタマは頓着しない。

「……始まるぞ。因みにどちらが勝つと考えている、刀の精霊？」

「小娘だろうさ」

「……辻が負けると？根拠はなんだフツノミタマ」

杜崎の問いに即答したフツノミタマに、大豪院が訝し気に尋ねる。

「なに、確信あつての物言いでは無い。可能性として述べるならば、だ。主のお人好しは猫被りではない、小娘に情があるならば本気を出



せはせんよ。なれば勝つのは、小娘だろぅさ」  
フツノミタマは嗤って答え、闘技場を注視する。

「さて、ある意味良い灸を据える機会だ。己というものを知るといい……貴方はそれで良いのだよ」

『さあああぁつーいよいよ始まりです、まほら武道会本選!!開幕を告げる記念すべき第一試合は麻帆良五強と謳われるバカレンジャーの一角、普段のお人好しなヘタレ具合とは裏腹に、その剣撃は宛ら地を駆ける疾風か閃く雷撃か!!薩摩の雄薬丸自顕流の血を引く不可避の一闪、『疾風刃雷』辻、はじめ—えええええつ!!!!』

「うら辻負けるー!!」

「な、なんてこと言うんですか中村さん!」

「いやネギ、あれでいい!!色々考えたが桜咲嫁にしねえでお前が誰嫁にすんだよボケエー!!大人しくやられちまえい!!」

「僕もどつちかっていうと桜咲ちゃん側だから。頑張れー!桜咲ちゃん!!」

「ポチはどうするアルか!」

「ポチは止める!!……何方を応援しても義理を欠くが、俺も桜咲後輩を袖にしたとして以後奴が幸福シラフに人生を全う出来るとは思えん!!故に辻!全力を尽くした上で負ける!!」

「つーじくーん、頑張れー!!」

「ゴホッ!……辻 はじめ—え!!無様な試合をしたら許さんぞお!!」

「部っ長ー!!悪いけど俺ら桜咲に全面協力する所存なんでー!!」

「負・け・ろー!負・け・ろ!!はいあんたらも!!」

「二「負・け・ろー!負・け・ろ!!」」

観客席からの盛大な歓声(と、知り合いの大半からの罵声)を受けつつ、道着姿の辻が入場する。

「…ヘタレは余計だよと……四面楚歌もいいところだな、まあ自業自得だが」

道着の袖を紐で括り、臨戦態勢に移行しながら辻は小さく呟く。  
……単なるヘタレなだけならばどんなに良かったろうな………  
自嘲しつつもしみじみと辻は思う。

自分が普通の男ならば、桜咲 刹那を幸せにしてやれたらどうか、と。  
意味の無い思考と知りながらも、異常にして異形な己を恨めしく思  
う。

……でも、それでももうしようがない………

……お前のことが好きだから、お前を俺の側には居させない、桜咲  
………!!

決意を秘めて辻は反対側の入場口を見据える。

『さあさあそんな辻選手に相對するのは辻選手の所属する剣道部におい  
て最強の座を欲しいままにするという、可憐で華奢な容姿とは裏腹に  
その恐ろしい迄のキレを秘めた剣の腕は並み居る猛者を薙ぎ倒し、  
あつという間に本選出場を果たしました!!巷では辻選手と浅からぬ  
仲との噂もある齡十五の剣道小町!桜咲刹那あああつ!!』

「せつちやーん!!」

「っしややれ桜咲いいいい!!」

「ぎやああああ桜咲、可っ愛いいよ……!!……っ!!……えええええ  
待って本当に可愛い?!?!」

「ぶふうううっ?!?な、何だあれ桜咲なんのつもりあの格好う!!」

木乃香の声援を皮切りに、中村達や剣道部員を中心に、入場して来  
た刹那へ声援が飛ぶが、刹那が闘技場前の通路に姿を現した時点で声  
援は悲鳴の様などよめきに変わり、会場全体が軽く揺れる程の騒ぎが  
起こる。

何故ならば、入場して来た刹那の服装は、膝丈迄の幅広なスカート  
をたなびかせ、和服の様な左合わせのゆるりとした袖を余らせる、所  
謂萌え系メイド服と呼ばれるものを和風に改造したコスプレイヤー  
の如き衣装であったからだ。

桜咲 刹那は身体付きこそ華奢であるものの、その容貌は伶俐な鋭  
さを含めつつも何処か幼さを内包する矛盾を秘めし、中学三年生とい  
う花盛りの年齢でしか成し得ない、青い魅力を誇る美少女だ。そんな

少女の可愛らしいコスプレ姿に、観客の大半を占める若年層から中年層に差し掛かる迄の男達は大いに湧き上がり、一時期の緊迫感を忘れて浮ついた盛り上がり会場は見せる。

『おぉーつと桜咲選手、なんとも可愛らしい和風メイド服にて入場だあああ!!この衣装は女性選手にスポンサーが善意で提供している舞台衣装の一つですが、桜咲選手以外にサービス精神が旺盛な模様です!!』

「……………どう思うよ、あの格好?」

「どう考えても辻を悩殺しようとか阿呆な考えのもと選んだんじゃあ無いのは確かだわな。…しかしだとしたら何の意味があつてあんなモン着てんだ桜咲は……………」

「……………うくくくん……………わかんないね、うん」

「ただここに来てのあんな格好、何か嫌な予感がするぞ俺は……………」

「……………こ、木乃香……………何のつもりだか解る?刹那さんのあの格好……………」

「……………解らへん。解らへんけど、せつちゃんはきつと勝ちに行つてるんや……………!!」

湧き上がる会場とは裏腹に、ある程度事情を知っているバカレンジャーや3-Aの面々はどうにも状況に対して不釣合いにすぎるその姿に、不吉な予感を覚える。

「……………桜咲、…何のつもりだ?その格好は……………」

淀みなく階段を上り終え、同じ壇上に昇つた刹那に対して、辻は僅かに硬い声音でそう尋ねる。ある意味決死と言つていい覚悟で躍り出てみれば、その相手が真剣勝負の場に於いては巫山戯ているとしか思えない浮ついた格好をしているのだから、辻の詰問はある意味当然であろう。

「……………、ああ、すみません。似合っていないませんでしたか辻部長?」

しかし刹那はあつけらかんとそう答え、状況を理解していないと捉えられる刹那の台詞に、辻の目が細められる。

ところが、刹那は物騒な辻の空気を歯牙にも掛けず、破顔して辻へと言葉を投げる。

「冗談です、辻部長。私は貴方を舐めている訳ではありません、私は私なりに考えがあつてこの格好を選択しました。……私は勝つ気ですよ、それこそどんなことをしてでも。……ですからご心配無く、遠慮無しに掛かつて来て下さい」

「……なーんかなんとなくせつたんのペースじゃね？」

「腹あ括ると女の方が思い切つたことをやるとは言うけどなあ……」

「なんにしろあの格好、意味はあるっぽいね。しつかし読めない展開になつて来たなあ……」

「……辻、呑まれるなよ……」

「……なあ、ネギ。刹那の姉ちゃんの狙い、解るか？」

「……全然。でも、刹那さん柔かに見えて全く目が笑っていないし……とんでもない事になりそうな気が何だかするよ……」

『さあ、皆様間も無く試合開始となります！まほら武道会の開幕を告げる第一試合、どうかお見逃し無きよう……はい？』

試合開始の時刻が差し迫る中、懸命にアピールを続ける朝倉に対し、刹那が何事かを告げ、口上が滞る。

『……少々お待ち下さい、規定では厳密に開始時刻は定められ……は？構わない？……しかし……、……解りました、良きに計らいます……』

刹那の申し出に対し、渋い顔で受け応えていた朝倉は、言葉の途中でヘッドホンを抑え、何事かの指示を送つて来たらしいイヤフォンの向こう側の何者かに向けて、暫し応答する。

やがてマイクから手を離れた朝倉は、刹那の方へ視線を投げて頷くと、マイクを通して高らかに口上を謳い上げる。

『御来場の皆様、誠に申し訳ありません!!先程も軽く申し上げましたが、この試合にて相対する辻選手と桜咲選手は同じ剣道部に所属し、

プライベートに於いても浅からぬ因縁を持つ、いわば訳ありの二人です!! 時間の押している状況ではありませんが、桜咲選手から辻選手に対して、試合前にどうしても告げておきたい話があるとの事であり、大会上層部との協議の結果、特別に時間を割く事と相成りました!! 申し訳ありませんがもうしばしの間、お待ち頂けるようお願いいたします!!」

観客から小さくないどよめきの上がる中、僅かな沈黙の後に辻は相対する刹那へ尋ね掛けた。

「……それで? 桜咲、話というのは?」

「至極単純な話ですよ、辻部長。私は私の想いの丈を、嘘偽り無く貴方に告げておきたいのです。…貴方は私の為に、語りたくなかったであろう己の内を余さず私に明かして下さいましたから。私の想いも、知って頂きたいのです」

あくまで固い辻の対応も気にせず、刹那はそう言っ朗々と語り出しました。

「辻部長、貴方は私のことを、好きだと言っ下さいましたよね?」

「…ああ。その気持ちに嘘偽りは無い」

辻ははつきりと刹那の問い掛けに答えた。ことこの場に及んでも、辻に刹那を恨んだり憎んだりするような気持ちなど一片たりとも無い。好きだからこそ遠ざける。言葉にしてみればなんとも陳腐なメロドラマ地味な響きだが、紛れもない辻の本心であった。

刹那はそれを聞いて嬉しそうに目を細め、再び口を開く。

「辻部長、これから突拍子も無いことを言わせて頂きますが、どうか真面目に答えて頂けますか?」

「……ああ………」

「ありがとうございます。では……辻部長、私と辻部長が結ばれて、私が子を孕んだとしましょう」

「……ああ? ……!?!」

言葉通りではあったが、あまりに突拍子も無さ過ぎるその台詞に、辻は領き掛けてギョツとした様にその眼を見開く。

刹那は微かな笑みを湛えて、そんな辻へ尚も言葉を投げ掛ける。

「例えば、の話です。辻部長、聞いて下さい。……妖魔の血というものは、人のそれよりもずっと濃いものなんです。近新種とは程遠い人へも胤を着床させ、何代にも渡って血が薄まろうとも、子々孫々には常に先祖返りが起こりうる危険を孕みます。……私や、小太郎は外見上にそれほど変異性が無いだけ、まだ幸運でしたね」

刹那は一度言葉を切り、辻の目を真っ直ぐに見据えて言葉を紡ぐ。

「私は烏族のハーフです。人の腹から、背中に羽根を持って生まれ落ちた、異形のもの。身体の半分を流れる妖魔の血は、私が子を成す時にも暗い影を落とすでしょう」

辻部長、と刹那は笑みを消し、奇妙な迄に凧いだ表情でその問いを放った。

「もし、私と貴方の間に生まれた子供が烏頭の子供だった場合、その子を貴方は愛してくれますか？」

沈黙が降りる。言葉を放ったきり、能面の様な表情で押し黙る刹那も、問いに目を見開き、固まった辻も、立ち位置上刹那の台詞を耳にした朝倉も。

言葉を発することができずにいた。

「…… うくん、重ってえなあオイ……」

「…… 自分の立場になって考えてみると、軽々しい肯定の言葉は白々し過ぎて」

迂闊な返答は出来ないね……」

「…… いやそれ以前に今聞くことかよ、あれは？」

「…… そうだな、言われて見れば少々話の軸がズレている気がせんでもない」

「…… いやいやー辻先輩がどう答えるかでしょ此処は!!」

「ち、ちよつと、さつきから何の話してるんですか皆さん!？」

「まさか旦那方と姐さん、この距離で二人の会話聞こえてんのか!？」

「明日菜明日菜!!せつちゃん何の話してるん!？」

「… いや、木乃香殿は今聞かぬ方が良いかもしれんてござるな」

「… 愛せる。いや、愛したいとは思うよ。ただ、今の俺は そうなってしまった俺達を想像することが難しい… そうなってみなければわからない、というのが正直な感想だ」

「… でしょうね」

やがて呟く様に洩れ出た、色良い言葉とは言い難い辻の返答にも、刹那は怒ることなく頷きを一つ返して言葉を続ける。

「では、そんな子を産み落とした女を、その後も愛し続けてくれる保証も、またありませんよね？」

「… そうなるな」

一瞬の逡巡の後に、辻は頷いた。本当は、違う、そんなことは無い!と言いたかった。が、幾ら口先だけで不変の愛を謳えようと、いざその時になってみなければ、人とはどうなるか解らないということ、異端であるが故に故郷を離れた辻はよく知っていた。なればこそ、質は違えど同じ異端の苦しみを味わったであろう刹那に対して、辻は上っ面なおためごかしを述べたくは無かった。

刹那は再び僅かに目を細めて僅かに口端で弧を描き、想いの丈を吐き出した。

「私はそれが一番怖いんです、貴方が離れて行ってしまうことが。お嬢様の時もそうでした。大好きな人が私を嫌いになったら、私どうやって生きていけばいいんですか?…寂しいんですよ、愛されたいんですよ、愛したいんですよ。貴方と愛し合いたいですよ辻部長…深く、深く…深く。生まれが碌でもありませんでしたから、好きになった人とは私、だれより深く繋がりたいんです。寂しい女は優しくされると弱いんですよ。貴方みたいな素敵な人は、一生離したくなくなるんです。それなのに、もし貴方が離れちゃったらどうするんですか」

刹那の瞳孔は微かに開かれ、いつそ懇願するかのように辻へと言葉を叩きつける。

「怖いんですよ、離れられるのが。自分から離れるなら兎も角、離れられるのは絶対に嫌です」

だから、求められないなら諦めるつもりでした。貴方は優しい人で、私を悪く思っていないから、私が求めれば一緒に居てくれるでしょうけど、私を求めないなら、何かの拍子に、愛想を尽かされるかもしれないでしょう？私はそれに耐えられませんから。……でも、予想外に貴方へ突き離されて、私やつと自分の望みが理解わかりました。辻部長、貴方は自分がイかれているから、相応しくないから私から離れようって、そう言うんですよ。じゃあいいですよ。貴方がどんなに外道で、鬼畜で、イかれていようと、私それを愛してみせますから。……愛しますから、必ずや。私、あなたの支えになりますから。だからもつと私を必要としてください、もつと私を求めてください。そうになったら、私も貴方を遠慮せずに愛せるんです。辻部長も私に負担を、重荷をかけてくれるんですから、私もちよつと他人が引くぐらい、貴方を愛していいですよ？だから言ってお下さい貴方の欲望のぞみ。いいんです、お互い様ですから。私もあなたに、押し付けますから」

ですから私と、生涯を添あい遂たげて下さいよ、と。

刹那は笑って想おもいを告つげた。

辻は黙って刹那の言葉を聞いていた。刹那が語り終えてから、暫くの間辻は僅かに俯うついて歯を喰くい縛しばっている様な形相で震ふるえていたが、臆おそて搾しぼり出す様に、辻は言葉を洩はらし始める。

「……勘弁してくれよ、桜咲……っ！……俺がどれだけ、普段から我慢に我慢を重ねているか、お前は解とって、いないんだ……!!」  
ギョロりと、瞳孔の開き切った目を刹那へ向けて、辻は軋こる様に言葉を紡紡ぐ。

「お前が今言ったのは、さ……お前にも解とり易く言うなら、お前が全裸になつて寝そべりながら、股開またあいて誘よつた様な、そんなもんだよ、今、お前が俺にやったのは……!!」

辻は頭を掻かき筆しり、血走ちった目付きで刹那を見やる。

「答えは否、だ桜咲……!!……頼たむ、頼たむよ、退ひいてくれ……!!……俺は、お前を、殺ころしてしまう。きつと、そうなる!!……頼たむから俺を、好きな



娘を嬉々としてぶった斬ってしまう様な、畜生以下の存在へ墜とさな  
いでくれ……………っ!!!!」

血を吐く様に、辻は刹那へ告げた。

「……………そうですか、辻部長……………。……………ならば、仕方ありませんね。…  
貴方を屈伏させて、理解<sup>わか</sup>らせて差し上げますよ」

「……………おい、知らねえぞどうなっても……………!!!!」

かくして互いに言葉は届かず。

両者は示し合わせた様に戦闘姿勢を取った。

『……………っ、これは……………!!!!』

「朝倉さん、もう結構です。ありがとうございます。試合を始めました、試合を始めて下  
さい」

余りに緊迫した二人の空気に、思わずマイクに声を通したもの  
の、言うべき言葉が思い起こせず言葉を詰まらせる朝倉へ、刹那は  
笑って促した。

「っ……………、桜咲、アンタこれじゃあ……………!!「お願いします」……………っ  
!!……………大会初っ端から死人が出るなんてアクシデントは御免だ  
からね!!無事に済ませなさいよアンタら!!」

言葉の途中で刹那に言葉を差し挟まれ、更に辻に無言のまま目線  
で促されて。朝倉は最早自らの言葉は届かないと悟り、半ば怒鳴る様  
に言い捨てる。

『それでは皆様!お待たせ致しました、間も無く試合開始となります  
!!』

朝倉の宣言に、二人の会話を伺えず焦れていた場内は再び湧き上  
がる。

「……………やっべーなコレあ……………!!」

「辻の野郎、ある意味キレてんぞこれ!!」

「そりゃそうだよ黙っていたならまだしもあの言い様だもん、気持ち  
は痛い程解るけど煽り過ぎでしょ桜咲ちゃん!!」

「或いは作戦の内かもしれないが……辻が本気で斬り掛ければ桜咲後輩にも見切れはせん筈…些か無謀に過ぎるぞこれは……!!」

ボルテージの上がる観客達の中、辻を除いたバカレンジャーは、惨劇の予感に冷たいものが背筋を流れるのを感じていた。

「こ、ここ木乃香?! ちよつと桜咲さん本気で思い詰めてる感じで、辻先輩完全にキレてる感じで兎に角ヤバいわようしよう!!」

「あ、明日菜さん落ち着いて下さい!!」

「だー!? 会話が解んねえから話し合いが決裂したって位しか理解<sup>わか</sup>らねえー!!」

「……これ下手しなくても血見るアルよ……」

「言うなや古の姉ちゃん……解りきったことでも口に出したらマジに現実になつてまうやろが……」

「……で、ごごごろうな……しかし刹那は何らかの勝算あつてのあの強気でごごごろうか……?」

「待て待て待て揃いも揃って地獄耳共、勝手に内輪で話を進めんな! なに? そんなヤバそうな訳あいつら!!」

「ち、ちよつと待ちなさい!! 取り返しのつかない事態に発展しかねないなら黙って見ている訳には……!」

「私でも途中で邪魔立てしたらどうなるかなど理解できるですよ、高音先輩……二人の顔を見て下さい、最早余人が立ち入れる空気では無い様ですよ……!」

「……で、でもゆえ、本当にもしものがあつたら……!」

「そ、そうですね!! それに、こんなこと言うのは何ですけど、関係者として余り派手なことをされちゃうと秘匿事項の漏洩に繋がっちゃいます!!」

「……私としては、何となく察せる部分だけでも桜咲さんの気持ちは解るから、見守つてあげたい所だけれど……」

「…やれやれ、揃いも揃って青臭いことだ。余りに必死過ぎて笑う気も起きん……同じ様なノリで次に挑む己が一番笑えんがなあ……」

各々が壇上の辻と刹那を危ぶむ中、エヴァンジェリンは一つ息を

洩らしてから、固い表情で刹那を見据える木乃香へ言葉を投げ掛ける。

「刹那は随分と入れ込んでいる様だが、辻 はじめ はどうやら本気だ。……止めで良いのか近衛 木乃香？お前の言葉ならば刹那も聞き入れるやもしれんぞ？」

「……エヴァちゃん……」

木乃香は僅かに唇を噛み締め、思案する様な表情を一瞬浮かべたが、聴て緩やかに首を振りエヴァンジェリンの提案を否定する。

「……せつちゃんが怪我するか、もつと酷いことになるかもしれないのは、勿論嫌や……辻先輩も、同じや。二人共、ウチにとつては大事な親友と先輩や！……でも、上手く言えへんけど……今はきつと、言葉じゃ解決せえへんねや。好き合つとるのに、何でこないなことせないかんのか、ウチには解らん。解らんけど……せつちゃんは辻先輩が大好きなんや。辻先輩も、同じや。……ウチは、悪いことにならないて、信じるわ、エヴァちゃん……！！」

せつちゃんが、見守つていて下さい、言うたんやから……と、木乃香は隣の明日菜と手を握り合い、刹那と辻へ再び向き直る。

「……フン……」

「御節介な事だな、吸血鬼？」

一つ鼻を鳴らして正面に向き直りかけたエヴァンジェリンに、今度はフツノミタマが話し掛ける。

「好ましい歪み方をしていた小娘が今では惚れた腫れたの罅迫り合いだ。可笑しくて声の一つも上げたくなろうさ」

貴様は愉しそうで何よりだがな、と皮肉気にエヴァンジェリンが返すと、フツノミタマは嗤つて口端を吊り上げる。

「愉しいとも。状況如何では主がいよいよ一皮剥けるやもしれんからな」

「そんなことにはさせんよ」

口を挟んだのは杜崎であった。

「ほう……？」

「子どもに恨まれるのは大人の役目だからね。いざとなったら、何と

かするさ」

「あれでもウチのクラスでは破格に優等生な方でな、お前の主人は馬鹿共のストツパーがいなくなるのは御免被るといふものだ」

高畑も一つ頷いて杜崎に並び、フツノミタマは詰まらなそうに一息を吐いて辻と刹那へ向き直る。

「まあ勝手にするがいい……どうせ、遅いか早いか、だ………」

「……辻部長、私のこの格好がなんのつもりか、と先程尋ねられましたよね?」

「…陽動のつもりか知らんが、乗らんぞ?」

辻は試合開始の合図を前に、唐突に語り出した刹那へピシヤリと返す。辻からしてみれば既に語るべきことは語り終えたつもりである、今更無駄に言葉を交わす気もしなかった。

「いえ、そんなつもりはありませんよ。ただ、言っておきたいことがあるだけです」

しかし刹那は奇妙な迄に楽し気に笑みながら辻の勘繰りを否定すると、空いた片手で己が衣装を指し示す。

「ほら、最初に奇抜な格好をしていれば。更に格好が変わっても、仮装の延長と思ってもらえるじゃないですか」

刹那のその言葉に。

無視することの出来ない何かを感じて、辻は目を見開き、刹那を凝視する。

刹那は僅かに笑みを深めて、木剣を持った手と空の手を左右に開き、言葉を放った。刹那の台詞に、後方の朝倉が放つ口上が重なって辻の耳に響く。

「以前に私は羽根をお見せしましたが、今から見せる姿はお嬢様や長

にもお見せしていないものです」

『それではまほら武道会、第一試合開始となります!!』

「ええ、化け物地味ていますから。本来見せるつもりは一生無かったのですが……」

『試合、開始イ!!!』

「最早形振り構うつもりはありませんので。全力で、行かせて頂きます」

『さあ両者、静かな立ち上がりですが……何やら桜咲選手が両手を広げた奇妙な構えを取っています!』

「桜咲、お前……!?!」

「烏族獣化」

刹那の静かな呟きと共に、錯覚で無くその全身が蠢いた。

細身の肢体は僅かに厚みを増し、髪は白く色を変え腰まで伸びる。手足は長く、腰付きは丸みを帯びて括れ、肩幅は俄かに広く変貌かわった。

円熟し、華奢な中学生の身体付きは大人びたそれに組変わり、更に身体の各所を覆い隠すかのように、フワフワとした純白の柔毛が生え揃う。

手足には猛禽の如き鋭い鉤爪が伸び、特に脚足の爪は脛から下からの形状ごと鳥の脚のそれに変形し、前爪の三本と後爪の一本が闘技場の床に喰い込んだ。

そして、背なの衣服の間から静かに一对の翼が零れ、刹那の身の丈よりも遥かに大きさを増した純白の羽根は、会場内の僅かな風を孕んで大きく広がった。

呆けた様に立ち竦む辻を、人のそれよりも瞳孔の広がった真紅の瞳が居抜き、半鳥半人と化した刹那は穏やかな調子で声を掛けた。

「さあ、始めましょうか辻部長?」

13話 まほら武道会本選第1試合 辻VS刹那  
(その2)

「……刹那の姉ちゃんは、俺と同じで妖怪のハーフや。日本の古妖一族、実力の有る奴は鴉天狗なんぞとも呼称よばれる鳥族の血が流れとる。身体が人よりも強靱ちからなんは勿論やが、何より連中は疾はやいし素早い。姉ちゃんの動きにはなんの絡繰も無いわ、素の速度が人と違い過ぎるんやろ……」

「付け加えるならば」

顔を緊張によってか或いは恐怖によってか。

大いに引き攣った表情を浮かべながら眩く様に言葉を洩らした小太郎の語りを引き継ぐ形で、対照的に愉し気な表情を浮かべたフツノミタマは言葉を紡ぐ。

「よほど孕ませた鳥が格の高いのもだったか、それとも先祖帰りの一種か。あの小娘は白鳥の血を引いているらしい。完全に使い熟せていないとはいえ、奴が使っているのは神通力的一种だな」

「じ、じんつーりき？」

それに対して確実に単語の意味が解っていない体で、明日菜が鸚鵡返しに疑問の声を上げる。

「神に通ずる力と書いて神通力だ。正確には神話に祭り上げられる様な天津神、国津神から土地神、人に対して善性とされる妖擬きや幻獣種などの正しい異形共が使う力の総称だな」

エヴァンジェリンが皮肉気に正しい、の部分強調して会話に加わる。

「鳥は大体の国や土地で吉兆の証や神の使いとされている格の高い鳥だ。日本では修験道だったか？熊野三山の八咫鳥が有名だな。それと比べてはピンキリだろうが、末端といえ神の系列、使用つかう力は其処らの凡妖とはワケが違うだろうよ」

「……んな小難しい分類や解説はどおーでもいいがよお………！」

ヒクヒクと米神を引き攣らせながら微妙に震える声で篠村が口を挟み。

「…どうすんだよあの有様はあああああつ!？」

闘技場の床にて血塗れで倒れ伏す辻と、それを見下ろす無傷の刹那という光景を前にして絶叫した。

遡る事僅か数分、その闘いは一方的なものだった。

「……では、始めましょうか辻部長？」

微笑みながら木剣を片手に、無造作に一步、二歩と歩み寄り始める刹那に、呆けた状態から辻は無理矢理意識を戦闘状態のそれへ切り替えた。

……呆けるな!!小太郎と同じ様な形態変化なら身体能力が跳ね上がっている筈……!？」

己の持てる最高の一撃を繰り出す為に辻が木剣を振り上げた、次の瞬間。

ガシユリ、という木材を何かで削った様な軽い音が辻の耳に届いた時には、既に刹那は辻の頭上へ移動を終えており、静かに下ろされた両足の鉤爪が辻の頭を跨ぐ様にして両肩へ喰い込み、鋭い痛みを感じさせていた。

「随分とのんびりしていますね、辻部長？」

「桜ぎ……!？」

ゾブリ、と鉤爪が万力の如き力で辻の両肩を固定して血を滲ませた。

次の瞬間には、辻は凄まじい揚力を発揮した刹那の双翼によって、空へと浚われていた。

『…さ、桜咲選手が瞬間移動でもしたかの様に辻選手の両肩に乗ったと思われた次の瞬間!!まるで猛禽類に浚われた小動物か何かの様に桜咲選手、空を飛んで辻選手を宙へと引き揚げたあああああつ!』  
『入場した際には美少女剣士から美少女和風メイド剣士に、試合開始と同時に美少女和風メイド剣士から美少女和風メイド剣士に、試合開始』

ド剣士に二段階変身を果たした色んな意味で要素てんこ盛りの桜咲選手、更には飛行とサービスピス精神旺盛ですねー。あの格好はコスプレかはたまた麻保良の狂科学による真の変身なのか、飛行の原理はどうなっているのか等々、疑問は山の様にありますますがそれをさて置くとして試合の状況を解説するならば、辻選手はいきなり大ピンチですねえ』

「大ピンチですねえ、じゃねーよ。せつたんの思惑にもよるが、下手すりゃ試合これで終わっちゃうぞオイ」

あつという間に数十m程も上空へと舞い上がり、辻を両足で捕獲したまま翼から光を放っている刹那を見上げつつ、中村は多少ならずとも引き攣った表情で呟いた。

「……あ、え……な、なんでですか中村さん……!?!」

あまりと言えばあんまりな試合開始直後の超展開に魂の抜けた様な表情であんぐりと口を開けて呆けていたネギが、我に返って尋ね掛ける。

「いや今の動き見たろ？せつたんが一瞬で辻の頭あ跨いで絶景晒しかねえステキポーズ決める迄のあの動き。ありゃ瞬動じゃねえぞ、瞬発力と脚力の賜物だ」

「要するに辻が攻撃動作に移ろうとする直前に飛び出して大跳躍、多分翼の羽ばたきか何かで勢いを完全に殺して辻の頭上を取った。それだけでもすげえが恐ろしいのは、気で瞬発加速したんじゃなく強化された身体能力とはいえ普通に速く動いただけで瞬動と同等以上の速度になってる、って事だ」

「ただ純粹な気による強化だけを用いた身体能力で速く動いているだけなら、縮地レベルにでも達してない限り初動や気配を察知されて対応される瞬動と違って感知は非常に困難。つまり今の桜咲ちゃんは常時入り、抜きをほぼ悟られる事の無い縮地を継続しながら動いている様なものだね」

「つまりは辻の超高速斬撃と同じ認識されざる動きだ。違うのは、辻は一撃必殺の斬撃を放つ際の踏み込みでしか発揮出来ない動きを、桜



咲後輩は制限無しに発揮出来るという点だな」

「代わる代わる詳細且つ正確な解説痛み入るけどよお……それで辻の奴はこれから何がどうなって絶体絶命なんだ？」

中村を筆頭として、刹那の踏み込み一つで戦闘力を丸裸にせんとでもするようなバカレンジャーの解説ぶりに引いた様子を見せつつも、篠村は遥か上空の二人をうそ寒気に見上げつつ尋ねた。

「あれ程の機動が出来るならば普通に攻め立てればいいだけだ。にもかかわらず態々手間を掛けてまで空へと連れていった……」

応えようとした中村に先んじて、苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべながら杜崎が腕組みをしつつ告げる。

「考えてもみろ、お前や高音、その馬鹿共ならば吊り上げられようが反撃の手段はあるだろう。が、辻は純正の剣士だ。腕の動きの基点となる両肩関節を固定された状態で何が出来る？」

「……成る程……」

「それに加えて」

杜崎の言葉に呻く様な声で理解の声を上げた高音の後に、苦笑と呼ぶには幾分苦みの強い笑みを浮かべて高畑が続く。

「恐らく刹那君は空中に辻君を放り出す気すら無い。今から始まるのは、罠り殺しだ……いや、死にはしないだろうけどね」

「ぐうっ!?……くっ、そ……!!」

「無駄ですよ辻部長。鳥族の鈎爪は一度喰い込んだら獲物を決して放しません」

肉を突き破って血を飛沫させる鈎爪を引き剥がそうと体をよじる辻に、状況を考えればいつそ不気味な程穏やかな声で刹那が告げる。

「では辻部長、これから貴方を痛め付けますので。…死んでしまわない程度の加減はしますので防御に集中しててください」

「何を……っ!?」

「行きます。…安心してください……」

言うが早いか、刹那の両の翼に目映い光が生まれ、直ちにその白光



「大体俺ら桜咲に付いてっしなあ」

「まあ辻には簡単に負けてほしくは無いけどねー、一緒に切磋琢磨した仲だ、大会開始の景気付けとばかりに雑魚キャラみたいなやられ方は見たくは無いや」

「まあ黙って見ていろネギ。どうせなる様にしかならん」

「ちよ、ちよっと木乃香大丈夫!」

「うくん、せつちゃん、せつちゃんが辻先輩にDVしとる……」

「正確には二人はまだ所帯を持ってはいませんが……のどか、しつかりしなさい」

「ゆゆゆえくく!」

「……アレあのまま振り回されてたら死ぬアルよ辻」

「容赦の欠片も無いでござるなあ刹那は……」

「桜咲さん、思い詰めそうな性格していたものねえ……」

「そ、そういう問題じゃ無いですよこれはもうく!」

「……篠村?」

「……今止めに入ったら冗談抜きに殺されんぞ。それもおそらく両方に……」

『あ、あわわわわわわ……!!?』

「落ち着け幽霊娘、死にやしねーヨ……多分」

「まあぶつちやけ半殺し所か八割殺し位にはしそうな勢いですネ」

「…アルビノ鳥系獣人要素付きスレンダー生真面目微百合ヤンデレ美少女和風メイド剣士…khoroshō……」

「言つとる場合かああ!」

「……やれやれ喧しいことこの上ない。ご苦労なことだよ貴様らも」

「皮肉は聞き飽きたわ吸血鬼」

「……君は随分楽し気だね、フツノミタマ君?」

「気安く私を呼ぶな若僧。……愉しいとも、外敵で無い分あの鳥娘は此れまでで一番、主を追い込んでくれそうだから……」

騒がしい周囲を鬱陶し気に一瞥しながらも、フツノミタマは嗤う。

「さあ、真の貴方を見せてくれ主」

「意識はありますか、辻部長……？まあ、容赦をするつもりはありませんが」

何度目かの急上昇を果たした後、螺旋状に弧を描きながら徐々に高度を下げていた刹那は、聞こえないのを承知で両脚で捕獲している辻へそつと囁く。

直後、刹那は羽ばたく翼の角度を変えて急激に進路をほぼ真下の方向へ切り替え、落下していると言っても過言では無い急降下で闘技場内へと舞い戻る。

『さ、桜咲選手急降下あーっ!?!』

『漸く戻ってくるようですね』

朝倉と喧囂の声を背後に、流星の如く真つ逆様に落下<sup>おち</sup>て来た刹那は、闘技場の床に頭から激突する数m前で双翼を広げて急制動。減速しつつ上体を海老反り気味に起こしながら反動で脚に掴んでいる重りを思い切り振り降ろして、同時に鉤爪を開いた。

擬音にすれば、ゴガン!!?とバシャアン!!?を組み合わせたかの様な、鉄塊と水風船を同時に足元へ叩き付けた音を何十倍にも増幅した様な音が会場中へ鳴り響く。

轟音と共に巨大なクレーターを形成しながら、辻は木材を水飛沫の様に巻き上げつつ闘技場に半ば埋もれた。

「……………、お……………！……ゴ……ッ、グエエアアツ?!?!?」

辻は暫くの間ピクリとも身動きをせずに横たわっていた。軀て緩慢に上体を起こし、おこりの様に全身を一度激しく震わせ、焦点の合っていない両の目を瞬かせた後。

思い出したかの様に、赤黒いものが混ざった吐瀉物を大量にぶち撒けた。

『…玩具か何かの様に超高度から叩き付けられた辻選手、ダメージは甚大だあああつ！吐血混じりの吐瀉物を吐き戻しています!!?』

『三半規管と内臓の幾つかにダメージが入った様です、まあ普通なら赤黒いシミになっているのですから当然でしょうね。今の速度で叩き付けられたのならば、下手な高層ビルから飛び降りたよりも衝撃の度合いは大きいでしょうからね』

解説実況の声を遠くに聞きつつ、辻はバラバラになったかのように痛みを通り越して感覚の無い五体に鞭打って身体を起こす。辻の視界は廻っているどころか見えるもの全てがドロドロに溶け合っており、思考も混濁した前後不覚にも程がある状態であった。次の瞬間に倒れ伏そうとなんらおかしくは無い重傷であったが、この試合に懸かっているものの大きさが、辻の意識をギリギリの淵で保っていた。

「こ……なんで……寝て、られねえん、だ……!!?」

謔言の様に呟きながら、辻は叩き付けられ様と手放さなかつた木剣を正面に構える。

「神鳴流奥義……」

されど、そんな辻の執念を嘲笑うかのように、その声は響き渡った。

「百烈桜花斬!!?」

「が………つ!」

春風に舞う桜の花びらの如く。

宙を舞う様に無数と疾走<sup>はし</sup>った斬撃の嵐が辻の全身を打ち据え、血飛沫と共に辻はゆっくりと再び闘技場の床へ崩折れる。

そうして僅か試合開始から三分と経過<sup>た</sup>たない内に、冒頭の光景は出来上がった。

『辻選手、桜咲選手の容赦無い追撃により再びダウン!!? カウントを始めます!』

『これは、決定打が入ってしまったかもしれませんね……』

朝倉のカウントが響き渡る中、中村はポツリと呟く。

「さつて、こっからだな」

「何処がよ!?! 辻先輩くたばりかねないじゃないあれじゃあ〜!」

耳聴くその声を聞きつけた明日菜が狼狽気味に絶叫する。明日菜の言う通り辻は身動きもせず床へ突っ伏している状態である。悠然と佇む刹那は未だ擦り傷一つ負っていない現状、こっからどころかどう考えても試合終了一步手前である以上、明日菜の言葉は最もだろう。

しかし中村だけでなく、豪徳寺山下、大豪院の何れもが、明日菜の

叫びに対して否を返した。

「大丈夫…じゃねえが、桜咲は止めを刺しに行つてねえ。辻は立つぜ」  
「……いやさっきのアレがもう止めやる!? 刹那の姉ちゃんも獣化して斬撃の威力も跳ね上がつとる！ 下手すりゃ死ぬで本当に!？」

「死なないさ、これ位なら中学時代で慣れつこだ」

ある種非情とも取れる言葉に声を荒げる小太郎だが、山下の声は揺るがない。

「何度も何度も僕らは他の四人を意識不明の重体にして、病院送りにしたりされたりしていたんだ。馴れ合いじゃ無く死線を潜つて僕らは腕を磨き合つた。これで大人しく寝てる様なら、辻はとつくに僕ら四人に殺されてるよ」

「そして口惜しい事だが、述べ三百を超える真剣勝負に於いて、辻は俺に僅かといえ勝ち越している。他も僅かに勝負回数の上はあつても勝率は同じ様なものの筈だ」

「そういうこつちや」「あくまで暫定だけどな」「結果は結果だ。今現在に於いて…」

「二「俺（僕）達の最強は辻」だはしめ（なんだよ）」

「剣道屋を馬鹿にする訳じゃねえが、桜咲に負け越してる辻は本気の辻じゃ無え。もう一度言うぜ……こつからだ」

『つ、辻選手立ち上がりました!!? 開始早々その姿は満身創痍! 最早試合はおろか生命が危ぶまれる負傷ですが……!!?』

「闘るよ、闘るに、決まつてる……!」

僅かに足取りが覚束ない様子ながらも、10カウント前に立ち上がり、木剣を構えた辻に場内はどよめきにも似た歓声に満たされる。実況の朝倉の心配気な視線に短く切る様に答え、辻は目の前で木剣を泰然と構えて待つ刹那へ向き直つた。

「……とはいえ実質俺はもう、負けか? 待つてくれたもの、なあ? 桜咲……?」

「……これは野試合ではありません。倒れた相手への追撃はギブアップ目的の寝技以外禁止されていますよ、辻部長。…それに私は先程の一

撃、二度と起き上がらせない心算で放ちました。立ち上がった事自体が、私としては驚きです……」

血塗れの顔で場違いな迄に明るく笑い掛けて来る辻に、刹那は軽く眉根を寄せながらそう答える。刹那としては十二分に手応えを感じていただけに、フラつきながらも起き上がって来た辻の姿は予想外と言えた。

辻はそんな刹那の言葉を聞いて、何故かクツクツと笑顔を漏らす。

「……まあ、お前相手には負け越してた俺だからなあ。舐められるのも無理ないか？でも桜咲、これ位の重傷は、さ。慣れてるんだ、わかりかし俺はさ。中学時代の俺も、エヴァンジェリン女史と闘った時の俺も、お前は知らないんだから、しょうがないんだけど、な……」  
まあ遠慮無しに掛かって来い、まだまだ俺は元気だぞ？と辻は和かに告げる。

刹那は、何時の間にか足取りも確かに、明確に呂律も回り出している辻の回復の早さを、素直に不気味に思った。されど刹那の行動は既に決まっている。

……この人を、完膚なきまでに叩き潰す……！！？」

そうすれば。桜咲 刹那は辻 はじめ一よりも遥かに強いと、そういった烙印を押す事が出来れば。

辻は刹那を、断ちたくとも断つ事は叶わないと、そういう事に出来るから。

「斬空閃!!？」

刹那は木剣から収束させた気の斬撃を飛ばす。人の形態を保っていたその頃よりも、遥かに大きさと密度を増したその三日月は、高速で辻へと飛来して。

辻はフラリと、倒れ込む様な右手側への足取りで、その一撃を掠めたのみの紙一重で躲した。

「……………!!？」

しかし刹那としては、単発の牽制に等しい一撃を回避されるのは予想の範疇だった。辻の傍らを斬撃が通り過ぎるか過ぎないかのタイミングで、刹那は全力の踏み込みを持って己が身体を颯風と化す。

最早知覚不能に等しい超速度を持って刹那は辻の左手側を突き進み、すれ違い様に辻の胴を薙ぎ払わんと木剣を全力で振り切った。そして。

その一撃を身体毎振り回す様な全力の斬り上げで完璧に迎撃した辻の一撃によって、刹那の身体は勢い余って突き進んでいたその方向へ打ち上げられ、宙を舞う。

「……………う……………つな……………つ!?」

回る視界に一瞬前後不覚に陥った刹那は呆けた様に眩きを洩らし。逆さまに己が視界に映る、木剣を天高く振り上げた辻の姿に、背筋を悪寒が走り抜けた。

次の瞬間、一瞬で距離を詰めると同時に振り下ろされた辻の斬撃を咄嗟に体軸に合わせて立てた木剣で受けた刹那は、その凄まじい一撃の威力によって己の手首が妙な方向へと捻じ曲がるのを知覚しながら、斜め下方へ打ち下ろされて闘技場外の水面へ着弾した。

『な、あ……………!?……………桜咲選手の先制攻撃を回避した辻選手でしたが、次の瞬間には己の背後目掛けて大上段からの斬撃を一閃!?…何時の間にか後方を吹き飛んでいた桜咲選手を場外水面まで弾き飛ばしたあああああつ!!?』

『私もよくは見えませんでした、どうやらあの飛ぶ斬撃に続いて斬り掛かって来た桜咲選手を剣で後ろへ弾き飛ばし、追撃を仕掛けた様ですね辻選手は』

「……………疾いねえ、辻君。どうやら素であるの速度っぽい桜咲ちゃんも相当アレだけど……………」

「良おし辻 — はじめえつ!!?…そうだそれこそが我がライバルだあ!!?」

「……………今のが?」

「応。最も儼に振り下ろした一発と違い、コレは全力の様じゃがな……………口惜しいのう」

「うげヤバい!!?桜咲が空中で防禦うけする一瞬しか見えなかったけど手首折ったよあの娘!」

「加えて押された木剣がそのまま胴体にめり込んだ!下手すりゃ肋骨



痛めたぞアレは!!?」

「フン、これでもまだ五分では無いが、解らなくなつて来たなこれは……ククク……!」

「くははははは流石だ主!!?今の一闪、正しく雲耀の如し、だ。果たしてこの会場で見切るのはおろか視認できた奴が何人居るのやら!」

「なんでそんなに楽しそうなんだよお前は!」

含み笑いを浮かべるエヴァンジェリンと哄笑するフツノミタマに篠村が目を剥いてツツコんだ。

「せつちやくくん!」

「ちよつとー!」

「でえじよぶだつて、精々手首と肋数本イツた位だから」

「寧ろ今ので致命傷与えられなかったのは痛いな。依然として辻が不利だぜ」

「しかし相変わらぬあの良く解んかい原理で見切つたんだろうけど凄いいつくづく。桜咲ちゃんの二撃目、僕だったら不完全に受けるか避けるかするのが精一杯なんだけど」

「あいつは昔から見て対処したとしか言わんからな。詳しく聞いても中心線がグニヤリと歪むとお前らが動くだの益々理解わからん」

「……それは、辻先輩の言っていた、人や物の正中線に添う様に見えるという、線なのですか……?」

肩を竦めた大豪院に、震えるのどかを宥めていた夕映が尋ね掛ける。

「……さあな、当時の奴は詳しくは語りたがらなかった。が、まあ話を聞いた今してみればそうなのだろうよ……」

「……んー?、ポチ、線が歪むと見切れるって良く解らないアル。身体の真中の線が見えてるのが何で見切りの良さに繋がるアルか?」

古が首を傾げながら会話に加わってくる。他にも試合内容の凄惨さに気圧されながら会話自体は聞いていたのか、幾人かが大豪院達へと顔を向けていた。

「……推測になるがな、単純と言えば単純な話だ。武道の基礎の一つ

は、例外もあるが軸をブレさせずに正中線を保つ事。初動を悟らせず予備動作無く動ければ対峙する相手は反応出来ず攻撃を無防備に喰らうと、そういう原理だ」

「でもまあ、実際に身体動かして攻撃やら何やらすんだから、ぶつちやけ軸を全く動かさないなんてのは物理的に不可能だわな？未熟な奴の瞬動の入りなんか察知されんのは身体が沈んだり身動きしたりして見切られっからなんだわ。だからそういうのが察知されない位までブレを殺して、僅かな予備動作を隠せるレベルまで行っただけ縮地とか無拍子とか呼ばれる。まあ軸なんつっても実際に軸が目に見える訳じゃ無えんだから、人間様の知覚領域じゃ認識出来る限度があるって話だわ」

「でも辻はさ、それが見えるんだよね、原理は不明だけど」

中村に続いて山下が語り出す。

「辻は人や物の中心に線が見える。…まあ話を聞いた限りじゃ、正中線っていうよりはその対象を等分に両断する為のガイドラインみたいなもののかな？兎に角そんなものが見えるなら、僅かな体軸のブレや身体の重心なんか擬似的に知覚出来るのと同じって事だ。辻の防禦ぼうぎけが昔から堅いのは多分これのお陰なんだろうね。だから今のも、桜咲ちゃんのブレを察知して迎撃したって寸法だと思うよ」

「……真ならば、辻殿は凄まじいアドバンテージを戦闘に於いて得ているのでござるな……………」

「まあな。つっても別に辻のそれは万能でも無敵でも無えよ。試合開始早々の一撃にしても、桜咲の奴が獣化？した驚きに付け込まれてああして重傷負ってるしな。要は見えてても辻が対処出来なきや一緒だ……桜咲も出て来た、始まるぜ」

豪徳寺の言葉通り、水面から上がって来た刹那が再び辻と対峙していた。

「……………ふっ!!？」

刹那は完全に折れたらしい右手手首を考慮して木剣を左構えに持ち替え、時折瞬動を交えながら辻の周囲を高速で円状に回り、時折接

近して斬り掛りつつ気の斬撃を飛ばす波状攻撃&ヒットアンドアウェイに戦法を切り替えていた。

しかし辻は殆ど動かぬままに雨霰と飛んで来る斬空閃を僅かな捌きで回避し、不意に飛び込んで来る刹那の一撃も木剣での確に迎撃する。

「っ……………はああっ!!?」

業を煮やした刹那が放つのは百烈桜花斬。無数の斬撃が疾り、辻にあらゆる方向から襲い来る。

「無駄だ、桜咲」

しかし、その時には辻の姿は遙か後方へと後退しており、斬撃の全ては空を切った。

『……………火を噴く様な激しい桜咲選手の猛攻!!?しかし目にも留まらぬ高速の連撃を見事に捌き、躲している辻選手!重傷を負っている身体とは思えない動きです!!?』

『敢えて言うならば、桜咲選手も辻選手の一撃を喰らって以来動きが少々鈍い様にも思えますね。何処かを負傷したのかもしれませんが。因みに辻選手が最後の斬撃を躲したあの後ろへの瞬間移動の如き滑る様な動き。あれは薙刀部部长、太刀嵐選手の『逃げ水』と呼称よばれる後方への瞬動と呼ばれる技術だそうです。辻選手は過去の激戦でこの技を習得したそうですね』

「いえーいその通りー、辻くん良いキレだよー!!?」

「……………はは」

辻は観客席からの太刀嵐の声援に小さく顔を綻ばせる。

「……………桜咲。お前その身体慣れてないんだろ?何時もより僅かだけど所作が大きいし、体軸のブレも大きい。身体が急成長したから線しに加えて俺の斬撃で肋骨痛めたる、無意識に庇う動きが出るから線の歪みが更に解り易い。初手で不意を突いてから一氣に決めるなら兎も角、俺相手には悪手だぞその身体。迎撃のタイミングはシビアだけど、動作が荒いから読み易い。精密な斬撃はお前の長所だろうに」

「……………普通はそれが見えなくて、更には見えていたとして対応出来ないものなんですよ、辻部長……………」

刹那は苦笑して、左手一本で保持している木剣の切っ先を辻に突き付ける。

「辻部長、そうだとして貴方のその傷は重傷の域を超えています。このまま持久戦になれば貴方は私よりも確実に不利でしょう。今の貴方で怖いのは雲耀の太刀のみですが、反応速度の上昇した今の私ならば完全に無くとも、防ぐことは可能です。……更に言わせて頂くならば」

刹那は紅い眼差しの瞳孔を更に広げ、辻を視線で射抜く。

「例え片手と言えど、その身体の貴方に未だ剣刀面の制し合いの勝負で負ける気はしませんので」

苛烈な視線を受けた辻は、しかし怯む所か小さく息を吐いた。

「……違うんだよ、桜咲。理解出来て、ないんだお前は。……もう、いいけどな、お前は降伏しろなんて今から言っても聞きはしないだろうし。……うん、もういいんだ」

辻は木剣を振り上げ、右蜻蛉の形を作る。

「……俺は言ったぞ、どうなつても知らないって。こんな台詞は言いたく無いが、それでも言わせて貰うぞ桜咲」

辻は泣きそうな顔で笑って告げた。

「お前だって悪いんだからな？」

「……何を……!?!」

刹那が最後まで言葉を言い終えない内に、辻は再び刹那へと斬り掛かった。

『一進一退の激しい剣撃の応酬!!? 試合時間も中盤に差し掛かろうというこの段階になって漸く観客の皆様にも見応えのある試合となつてまいりました!!? しかし辻選手は大分出血が激しいが大丈夫かあーっ!?!』

『桜咲選手は右手が使えない分苦しいですね。押される場面が目立つて来ましたが、このまま凌いで持久戦狙いでしょうか?』

「……どうも引つかかんな」

「おう、辻は大分無理しての全力戦闘だ。長期戦で勝ち目が無えから

出し惜しみしねえのは解るが、にしちやあ攻めが全う過ぎるぜ」

「桜咲ちゃんもね。片手で辻と鬪り合うのが厳しいのは当然だけど、幾ら何でも辻がああの状態でこうまで押され気味なのは解せないよ」

「…桜咲は距離を置くのを止めて激しく打ち合うことで渾身の斬撃を封じる心算の様だが……」

一見して全うな打ち合いに、しかしバカレンジャーは違和感を感じていた。

「もう一つあるな、辻は何か知らんが牽制以上の意味合いで桜咲の身体へ斬撃を当てようとしていない」

「攻撃パターンからして、刹那君の武器を落とそうとしているんだろうけどね……」

杜崎と高畑も加わり意見が出るが、何れにしても辻の狙いは解らなかつた。

「…解らんものか、貴様らの域でも？まあ人の思考では中々発想にも至らんものかな」

しかしただ一人（一刀）例外として、フツノミタマは全てを理解している様子で他の全員を嘲笑う様に口を挟んで来た。

「……性格悪いわねえアンタ、言いたいことがあるならさっさと言いなさいよ」

青い顔をして心配気に刹那と辻の打ち合いを見ている木乃香を気にかけてながら明日菜がフツノミタマを睨んで言い放つ。

「威勢がいいな小娘？まあいい、教えてやろう。主がああ傷で小娘を押しているのは単純だ、主の実力が正された故に負傷した小娘では対応仕切れておらんのだよ」

「……いや、辻の奴は最初から全力だったろ」

「今迄辻一がずっと手加減をしていたとでも言うのかしら？貴女は」

有り体に辻は全力を發揮していなかった、という旨の発言に、篠村と高音が反論する。

「……いや、そうだな。奴が刹那を叩き斬るつもりでいるのならば領ける話だ」

しかし、フツノミタマの発言に僅かに思案したエヴァンジェリン迄もが賛同した。

「人間は心持ち一つで発揮する力に大きな差が現れる。奴にとっての本願は刹那を二等分にする事なのだろう？ならば奴は所謂野ノつている状態だ。身体の動きに迄好影響を与えているのやもしれんぞ？」

エヴァンジェリンの言葉をフツノミタマは笑って肯定する。

「まあ正解の一つだ吸血鬼。加えて主は『何かを真つ二つにする』才能に於いては天下一だと私は見込んでいます。産まれついでに認識異常、異常嗜好、剣の才、生家が一刀両断を肝とする剣の道場。主はその才覚を最大限発揮出来る環境においてもまるで何者かが図つたかの様に備えて生きて来た。解るか？世界が主の欲求を肯定しているのだよ！つまり対象を両断しようという意志を持つて主が闘うのならば主は己の才覚を存分に活かせる、断ち切りる為に闘う主はそうでない主よりも実力に於いて上なのだ!!？これは下らん精神論などでは無い、振るわれる私だからこそ断言出来る！主の剣はあの負傷を以つてして普段よりも鋭いのだからなあ!!？これがもつ者選ばれしの力だよ、世界の依怙鼻肩とは何と理不尽なのだろうなあ？」

このままでは負けるぞ、小娘は？と、愉し気に嗤うフツノミタマの視線の先には、言葉通り疾さを増して来た辻の剣撃に、ジリジリと後退を始めている刹那の姿があった。

……ここまで、違うものなのか……!!？

木剣を保持する左手の手首目掛けて真下から蛇の様に翻った辻の斬り上げを辛くも柄で打ち払いつつ、刹那は歯噛みした。

獣化している刹那の身体能力は人の形態を保っていた頃よりも格段に増している。気の強化に加えて限定的とはいえ白鳥としての力さえも解放している刹那の力は、単純な出力に於いては最早大会中でも右に出る者は居ない域にまで達しているのだ。

加えて今の辻は満身創痍、普段通りの実力が間違っても発揮出来る状態では無い。普通に考えれば、辻に異能が備わつていようと正面からの打ち合いならばゴリ押しでとうに倒せている筈である。

しかし現実とは違っていた。辻は刹那の斬撃をギリギリで見切り、捌き、躲して無駄の無い動きで斬撃を矢継ぎ早に放って来る。その動作は今迄と変わらない。少なくとも刹那の目には、過去に手合わせをした時の辻と何ら変わりは見出せない。

だというのにその動きはこれ迄の辻よりも格段に疾く、強く、隙が無かった。

何も変わりが見られないというのに動きだけが鋭さを増している。

そんな理不尽とも言える強さを今の辻は発揮していた。剩え辻は刹那の武器を破壊、若しくは手放させる事を狙って攻撃を繰り返しているらしく、牽制以上の斬撃は刹那の身に届いていない。にも関わらず刹那は押されている。

横から木剣の腹を鋭く打ち据えられ、その斬撃の重さに左手へ痺れが走る。

足に頼らず、翼を用いて数歩の間合いを開けようと後退するが、初動を読まれて吸い付く様に距離を詰められる。

気を放射状に放ち、敵を吹き飛ばす神鳴流の技、百花繚乱により辻を吹き飛ばそうと試みるが、脇を擦り抜ける様に瞬動で己の後方に抜けられ、避けられる。

目の覚める様な奇抜な動きをされている訳では無い。辻は刹那の攻撃をあくまで普通に捌いている。

つまり地力に於いて、刹那は今の辻に及んでいないという事であった。

「……成る程！ 肚を決めたつもりで、覚悟が甘かった様ですね、私は!! ?……時に、辻部長?! 私自身へは碌に攻撃を加えようともせず、遊んでいるのですか、貴方は!」

刹那は木剣を打ち合わせ、鏑迫り合いになった状態から刀身を滑らせ、小手を打ち据えようとしてくる辻の手捌きを、捻る様に返した刀身で押さえつけつつ言い放った。

対する辻は、実にあっさりとその言葉を否定する。

「いや? 単に邪魔なんだよお前の剣が。最初に一撃を見舞った時もお前は剣でガードしただろ? 綺麗にお前を二つにするには邪魔なんだ

余計な物は。武器を弾き飛ばすなりへし折るなりしてからお前の左手も砕いたら、きつとお前を綺麗にしてやれる。ほら、右手はもう砕けるから左手も砕かないと見た目も綺麗じゃ無いしなあ」

遊んでいるつもりは欠片も無いぞ?と苦笑気味に辻はそう告げた。

全く以って普段通りの会話をする時と同様の調子で、辻はそんな歪んだ言葉を伝えて来た。

「……はは、成る程。私を両断、するのでしたね、貴方は!!?」

己の知る辻 はじめ という男と一切その雰囲気の違いは無いというのに、狂った言葉を唱えてくるその得体の知れない迫力に対して、しかし刹那は戦慄する事も気圧される事も無く、ただその事実を受け入れた。

「そうです、か!!? 貴方が私の!!?……惚れた男ですか!!?」

「幻滅、したか!?!口が利ける内に言っておくが、お前のその姿はとても……綺麗だ!!?ますますお前を、断ちたくなつたよ、俺は!!?」

一層激しく剣の応酬を重ねながら、辻と刹那は互いに熱で浮かされた様に言葉を交わす。

「まさか、真逆!!?……正直理解は出来ません!私の感覚に正しく照らし合わせるならば、気味が悪いと言うのが正しい感想でしょう!!?……しかし貴方がそうであるのなら私は何ら抵抗無くそれを受け入れられる!!?痘痕も笑窪という奴で……しようかね?!」

言葉の終わりに刹那は辻の木剣を横に大きく打ち払い、木剣を返し様ひ練り上げた気を螺旋状に飛ばして相手を斬り裂く、神鳴流の技斬鉄閃を辻の胴体目掛けて撃ち放つ。

「そうか!!?……惜しいな本当に!!?お前の様な良い女が、惚れてくれているというのに!!?……応えられない自分がつくづく恨めしいよ!!?」

辻は地を這う様な低い体勢を取って刹那へ突撃。気の斬撃を肩口に掠めさせながらも攻撃を躲して刹那の右手目掛けて真下から伸び上がる様な鋭い突きを放つ。

「何故、応えられないと決め付けるのですか!?!私は、此れ程に貴方と渡り合える!!?貴方が危惧する様な事は、決して起こさせはしない!!?」



其れ程までに私を想ってくれるのならば、私の気持ちにまず答えて下さい!!?」

刹那はその一撃を辛くも払い除け、辻目掛けて大上段から打ち掛かる。辻は刃を寝せて一撃を受け、反撃を繰り出す。刹那も呼応して更に斬撃を放つ。

「出来るものかよ!!?物事に絶対なんてものは何一つ無いんだ!俺はお前を殺してしまうかもしれない!!?今もお前を断ち割りたい!こうしてお前の身を心底案じている筈なのに、それと同等以上にお前を害したいんだ!!?それなら、そんな真似をする位なら!!?お前が他の男と幸せになるのを見ている方が、何倍もマシってものだ!!?だと言うのにお前は何なんだ、馬鹿女があ!!?」

「分からず屋!!?」

「どつちがだあ!!?」

子供の痲癩のように怒鳴りつけ合いながら、二人は永遠とも言える打ち合いを続ける。

「……餓鬼の喧嘩か、全く」

「人はこれを青春と呼ぶのだろうさ。楽しめもせん酒が呑みたい気分だよ私は、吸血鬼?」

何合目になるかという打ち合いの末。

「ぐ……フツ!」

辻が不意に咳き込み、新たな血塊を吐き出す。刹那はそんな隙を見て攻め入ろうとはせず、大きく翼をはためかせて風を孕み、辻から距離を取る。

『おおーっつと辻選手再び吐血うーっ!!?矢張りダメージは甚大の様です!残り時間もそろそろ終盤に差し掛かるこの状況、決着は其れ程遠くないのやもしれません!!?』

『桜咲選手も好機に付け込まず敢えて距離を取りました。恐らく決着の一撃を見舞おうという心算でしょう』

「……………どう思うよっ!」

「多分喧囂の言う通りだろ。桜咲の奴はこれ以上辻と打ち合っていたら残った左手も保たねえんだろうよ。あれだけ弾き飛ばしを喰らえば握力も相当怪しい筈だぜ」

「一発勝負なら桜咲ちゃんが言わずもがなで有利だよ。雷撃飛ばされたら辻に対抗手段は無いもの」

「……それでいて辻が距離を詰めにいかないのは、何か秘策があるのか……?」

「……いやいや待て。んなこと言ってる場合じゃ無えだろ? いい加減止めに入るなら今じゃねえのか、このままじゃ下手しなくてもどつちか死ぬぞ?」

固唾を呑んで見守るバカレンジャー達とはおそらく違う意味合いで唾を飲み込んだ篠村が、いい加減限界だと言う様子で口を挟む。

「阿呆かお前は。無粋って単語知ってんのか?」

「阿呆はお前らだ。命の成否の瀬戸際でそんなことに構っている場合かよ!」

篠村の言葉に愛衣は顔を青く染めながらも頷き、高音は僅かに迷いを表情に浮かべながらも篠村の傍らに立つ。会話がこのまま成立しないのならば実力行使に出る算段である。

「待て。……気持ちは解るし、立場的にも心情的にもお前に賛同だが篠村。ここは抑えろ」

しかし、魔法教師という地位に立つ杜崎迄もが中村達に賛同した。「何故です杜崎先生!?!このままじゃ……!!?!」

「そうだな、しかしこいつらは筋金入りの馬鹿なんだ」

篠村の抗議を途中で遮り、杜崎は苦々し気に語る。

「ここで止めてもあの馬鹿二人は必ず同じことを引き起こす。一生縛り付けてでもおかん限り奴等は同じ事を仕出かすだろう。…止める事は、不可能だ」

「しかし、杜崎先生!!?!」

「俺達を信じろ」

高音の叫びに、杜崎は重々しく言い放つ。

「俺と高畑先生が居る限り、断じて人死になぞ出させはせん」



「神鳴流決戦奥義!!?真・雷光剣!!?!!?」

刹那、斬撃と雷撃が交錯し、闘技場内は光に包まれた。

「……………どうなったや?」

「……………闘技場吹っ飛んでんぞあの阿呆共……………」

「……………阿呆共じゃ無くて阿呆でしょ……………吹っ飛ばしたの桜咲ちゃんじゃん……………」

「……………関わっている時点で辻も同罪だろうよ……………」

凄まじい衝撃と爆風が観客席内を襲ってから数瞬経<sup>た</sup>って。

身内を庇ったバカレンジャーが些か煤けながらぐったりとした様子で言葉を交わす中、慌てた様な朝倉の声が場内に響き渡る。

『……………ご来場の皆様、ご無事でしようか!?何やら辻選手と桜咲選手の渾身の一撃?により光と衝撃に包まれた場内でしたが、二人の安否はどうなっているのでしょうか!』

『いやはや、凄まじい威力でしたね。水蒸気と土埃で何も視認出来ませんが、果たして…………?』

喧囂の言う通り、もうもうと舞う二つの粒子によって闘技場内は完全に隠されていた。聴て僅かな風により煙幕が徐々に散らされ、内部の様子が露わになると同時、観客席からは低いどよめきが上がった。最早跡形も無く破壊され、所々が水堀から流れ込む水によって浸水した闘技場の隅。全身から黒煙を上げる辻がピクリとめ身動きをせずに倒れ伏していたからである。

『つ、辻選手ダウン!!?どうやら桜咲選手の何だかよく解らない光る一撃?を真面に喰らった様子です!!?これは今迄の負傷も相俟って辻選手の生命が危ぶまれますが…………!!?』

『……………皆様、逆側のやや上方をご覧下さい。桜咲選手は未だ宙に浮遊しています』

喧囂の言葉に煙の晴れた空へ皆が視線を向けると、其処には依然として翼を広げ、宙に浮かぶ刹那の姿があった。

「せつちゃん!!?」

「え……………これ、刹那さんの勝ち……………ってこと!?!」

倒れ伏す辻と飛び続けている刹那。一見して明瞭に分かれている勝者と敗者の図に、思わず声を上げる少女達。

「……いや……これは……!!?」

「寧ろ危険なのは、桜咲だ……!!?」

しかし、杜崎と高畑が発した言葉に、3-Aの少女達の頭に疑問符が浮かぶ。

「……ど、どういう……」

「桜咲さんは空中に居たのです、普通に考えて無傷の筈では……」

「……違うアル……!!?」

夕映の言葉を否定するのは、冷や汗を浮かべて拳を握る古だった。

「…辻の斬撃は、確かに届いてたアルよ、刹那に……!!?」

「……宛ら飛ぶ斬撃。…刹那の斬空閃と同様の一撃で、ござろうな……!!?」

「え……!!?」

心無しか顔の青い楓の言葉に木乃香が空中の刹那を振り仰いだその刹那。

空中の刹那の頭頂から股間迄に、一直線の線が走り抜け、次の瞬間溢れた鮮血が宙に舞った。刹那はそのまま糸の切れた人形の様になり、力を失って落下し、闘技場へ墜落すると床の残骸に血溜まりを作った。

「……つつ!!?せつちゃん?!?」

「刹那さん!」

木乃香と明日菜と時を同じくして会場内から複数の悲鳴が上がる中、刹那と辻を結ぶ同一線状の観客席の屋根、座席、床材。更には闘技場の床迄もに一直線の亀裂が走り、深い断裂を生んだ。

「……うっわ危っな……!!?」

「つ、辻 はじめ一め!!?私達を殺す気か!」

「あ、危ねえ、何が……!」

「ぎ、斬撃だ!!?辻の野郎の斬撃がここまで!!?」

「巫山戯んな!?漫画かなんかじゃあるめえし……!!?」

「実際に起こってんだから認めろよ!!?」

幸い数名の武道家達が事前に一般人の観客を避難させていた為に

怪我人は発生しなかったが、常識外の超現象に観客達は動揺を隠せず  
に騒ぎが引き起こる。

『皆様!!? 只今被害確認の為にスタッフが参ります!!? お怪我のある  
方は直ちにお申し出を……!!?』

『凄まじい一撃の応酬でした。結果として二人共闘技場内に倒れた状  
態となった為、実況の朝倉に代わって私喧囂がダブルノックダウンの  
定義に於いてカウントを初めさせて頂きます』

「言ってる場合か馬鹿野郎……!!?」

「待てや、篠村」

この後に及んで試合の中止を告げない大会側の対応に業を煮やし  
た篠村が闘技場内へ飛び込もうとすると、中村がその腕を掴んで制止  
した。

「……いい加減にしろよテメエ……!!? 手を離せや、ぶち抜くぞ!」

「こっちの台詞だボケ。それによく見ろや、立つぞ二人共」

「せつちゃん!?!」

時を同じくして響き渡った木乃香の悲痛な悲鳴にハッと篠村が闘  
技場内を振り返れば、刹那と辻が緩慢に身を起こそうとしている光景  
が目に見え込んで来た。

「……は……は。身体が、いうこと……聞かねえや。……流石だ、なあ、

桜咲……!!?」

辻は未だ全身から煙を上げながらも緩慢に上体を起こし、同じ様に  
泥土の中でもかく様にして身動きをする刹那へ呼び掛けた。

「……、こちらの、台詞です、よ……辻部長……!!?……何時、

この様な、斬撃を身に付けられたので……!!?」

刹那は夥しい血液を正中線に走った傷から溢れさせながらも、徐々  
に身体を起こしつつ尋ね返した。

「……こっそり、な……お前の技が羨ましくて……練習して、たんだよ  
……単発とはいえ、ここまでの威力は、過去最高だが、な……!!  
?」

二人は凄絶な笑みを浮かべながら、喧囂が10カウントを告げるそ  
の前にその両脚で闘技場の床を踏み締めた。

『た、立ち上がりました両選手!!? 両者共既に言葉で言い表せない程の重傷です!!? 二人共生命尽きるまで止まる事は無いとでも言うのでしょうか!?!』

『……いえ、桜咲選手の傷は………!?!』

「だな」

「ああ、頭蓋骨までイってねえ」

「内臓は肋骨ほねに守護まもられたね。まあ普通に重傷だけれど、生命に関わる傷じゃ無いよ」

豪徳寺と山下の言葉通り、刹那の身体に走る傷はギリギリの所で急所を断つてはいなかった。

「……手加減、されたのですか? 辻部長?」

傷口が泡立ち、止めどなく溢れていた血液の量が次第に減少し、塞がっていく。

刹那は目元に流れ込んだ血を拭いつつ、静かにそう尋ねた。

「まさか、な……お前の、身体が人のままなら、両断出来てたんじゃあ、ないか……? ……強いなあ、桜咲。断つつもりで、全力で。……振るつたのに、届かなかったのか………」

辻は今にも倒れそうな足取りで一步、二歩と前に出ながら、力の無い笑みを浮かべてそう告げる。

「……ええ、そうですよ辻部長……私は、貴方にはやられないって、……そう、言ったでしょう………?」

刹那も覚束ない足取りながら前へと足を進め、二人は鼻も触れそうな程の近距離で見つめ合った。

『……これは……』

『朝倉。……実況解説失格だが、今だけは黙ろうか………』

「……どっちの、勝ちなんだろうな、これは………?」

「……さて。もうそんな取り決めに………いえ、始めからそんなもの、意味は無かったのでは、無いですか………?」

「……………俺が、受け入れるか、どうかだど？」

「はい」

迷い無く頷いた刹那に、辻は目元を掌で覆いながら語り掛ける。

「……………桜咲……………」

「はい」

「……………俺は、異常者なんだ……………」

「知っています」

「……………俺は、お前を二つに断ち斬りたくて、仕方がないんだ……………」

「!!？」

「承知していますよ」

「……………俺は、俺は……………!!？」

「大丈夫です、辻部長。貴方の望みも如何にかして叶えさせてみせます。私は元より化け物の身です、必要とあらば、定命の定めすら打ち破って更なる人外へと、身を墜とす事に躊躇いはありません……………!!？」

刹那の言葉に、帰る家の定まらない少年の様であった辻の眼に、確かな力が宿る。

「……………桜咲」

「はい」

「……………沢山、沢山迷惑を掛けることになると思う。でも、それでも……………!!？」

「……………俺と生涯、添い遂げてくれ……………!!？!!？」

「喜んで。離せと言われても、離しません……………!!？!!？」

二人はしっかりと抱き合い、愛の言葉を交わした。

「……………ああ、安心した、ら……………力が、抜けちゃいました……………!!？」

痛い程に抱き締め合ってから暫く。

刹那はへたり込む様に腰を下ろし、辻に両肩を支えられてい



た。

「……御免な、桜咲……………」

「いいんです、こうして私を受け入れてくれたんですから……………」

刹那の身体に走る数々の負傷を見下ろして、悲痛な表情で謝罪する辻に対して、刹那は朗らかな表情で受け答える。

「……桜咲、棄権しろ。後の事は俺が引き受ける」

「……………しかし、辻部長の方が余程……………」

「お前の本願は、果たされたんだろ？……………安心しろよ、お前の男を信用しろ……………」

辻の言葉に躊躇いを見せる刹那に、辻は静かに屈み込んで目線を合わせると静かに、されど力強くそう告げた。

「……………解りました」

「ああ」

「……………後は、お任せします、……………はじめさん……………」

「……………任せておけ、刹那」

二人の顔はゆつくりと近付き、ゆつくりと互いの唇が合わさった。

「……………棄権します、朝倉さん」

「……………こんの馬鹿……………!!?……………心配掛けせんじや無いわよ、本当に……………!!?……………!!?」

朝倉は目元に浮かんだ涙を拭い、マイクを構えると高らかに宣言した。

『皆様!!?只今桜咲選手が棄権を告げました、まほら武道会第一試合の勝者は、辻選手です!!?』

その言葉に、会場中から地鳴りのような歓声が上がった。

『何を隠そうこの試合、単なる勝敗の他に二人の恋の行方も掛かっておりました!!?先程の光景をご覧頂いていた皆様にはお解りのことと思いますが、今この瞬間!!?この麻帆良に新たなカップルが誕生致

しました!!? 新たな人生の旅路を比翼連理にて歩むこととなる二人に盛大なる拍手をお願い致します!!?!!?!!?』

「うおおおおおおお!!?!!?!!?」

「恋の成就に殺し合いとか阿呆かお前らー!!?!!?」

「お幸せにいいいいいい!!?!!?」

「盛大に爆発しやがれ辻いいいい!!?!!?」

「……………おい朝倉……………」

「散々心配掛けた罰ですよへタレ先輩! 先ずはお嫁さんの大親友をどう宥めるかお考えになったら如何ですかあ?」

    「フン!!? とそっぽを向いた朝倉の言葉に首を向ければ、半泣きになった木乃香を筆頭に顔見知りの連中が闘技場内へ雪崩れ込んでくる光景が辻と刹那の目に入って来た。

「……………どうしますか……………」

「……………素直に謝るしか、無いんじゃないか……………」

    顔を見合わせて同時に笑み溢れ、刹那と辻は穏やかな表情で互いの身体へ回した手に込める力を強めた。

14話 まほら武道会本選第2試合 山下VSE  
ヴァンジエリン (その1)

「……ゴ主人ヨオ、モウイインジャネーカ？」

麻帆良武道会本選開催日の早朝、身仕度を整えてログハウスを出ようとしているエヴァンジエリンに、チャチャゼロはそう告げた。

「……何がだ」

「勝負ノ話ダヨ。ゴ主人ハアレダ、迷ッテンダロ？ナラモウソノ時点  
デ答エハ出テルンジャネーノカヨ」

「チョコチョコと短い足取りでエヴァンジエリンの横へ移動しながら、チャチャゼロは語る。

「モット小狡ク立チ回レバイイダロ。山下ノ野郎ヲ受ケ入レテ、駄目  
ナラ捨テリヤイイダケノコツタ。ソントキヤ改メテアノ阿呆ヲ追イ  
カケリヤアイイ。割り切レヨ、ゴ主人。二度ト裏切ラレルノモ、待ツ  
ノモ御免ダロウガ？俺ハ少ナクトモ、アノ優男ハ本気ダト……」  
「そこまでだ、チャチャゼロ」

エヴァンジエリンはチャチャゼロの言葉を途中で遮り、チャチャゼ  
ロへ一瞥も向けないまま扉を開いて外へ出た。

「……ゴ主人ヨオ！」

「理解っている」

続いて扉を潜り抜け、小走りに追い掛けながらチャチャゼロはエ  
ヴァンジエリンに呼び掛ける。抗議の声を黙殺して、エヴァンジエリ  
ンは静かにそう呟いた。

「理解っているのだ、馬鹿な真似をしていると。過去は過去だ。地獄  
に墜ちた後の話など、墜ちた時に考えればいい。幸せを、望めばいい  
のだよなあ……単純に」

己を嘲笑ってエヴァンジエリンは空を仰ぐ。

「山下が信用出来ないのでは無い、全てが信用出来ないのだ。過去の  
心的外傷等と言えはさぞ悲劇的で聞こえは良かろうが、要するに私は

数百年と麻帆良<sup>マホウ</sup>での十五年の恨み辛みを抱えたままグジグジと拗ねていじけて、情性のまま誠意を踏みにじっている訳だ。全く非道<sup>ひど</sup>い女だなあ？私は……」

クツクツと笑いを溢すその顔は、しかしまるで泣く寸前の様で。

「所詮あいつにとつて、私は旅の連れ合い程度にしか見て貰えなかったのだろうなあ。餓鬼扱いして欲しかったのでは無い、輩が欲しかったのでは無いんだ。……世紀を幾つも跨いだ年寄りの、本当に年甲斐も無い恋患いと嘲笑<sup>わら</sup>われようが、私はナギが、好きだった」

「……ゴ主人……」

チャチャゼロは、何時もの憎まれ口を叩けなかった。何十年、否。何百年ぶりかに見えた、外見相応の幼い少女そのままの如きエヴァンジェリンのか弱い素の顔に、何処まで連れ添おうと人形に過ぎない彼女には、掛けるべき言葉は見出だせなかったのである。

「あいつは何処の誰とも知らん女と結ばれ、似ても似つかん餓鬼をこさえた。言われなくとも解っていた。それで終わりだ、私の恋は、終了<sup>おわ</sup>っていた。どの面下げて会いに行けるものか、奴が他の女と仲睦まじくしている様子などを目の当たりにして、どうして側に居られるものか。結局は嘘だ。本音を吐いたつもりで、山下には嘘を吐いてしまった……私に行く当てなど、もう何処にも無いというのになあ……」

「……ソコマデ<sup>ワカ</sup>理解<sup>ワカ</sup>ッテンナラヨオ……!!」

チャチャゼロは声を荒げる。

「イイジャネーカモウ!!信ジテナクテモイイ、一緒ニ居テミロヨ山下ト!!知ッテンダロ、時間テノハ残酷ダガ、詰マラネエ感傷モ埋メテクレンダ!!ゴ主人ミテエナ地雷女ニ、モウ奴ヲ除イタラ誰ガ寄り添ッテクレンダヨ!」

「あの場で山下に言った通りだ、ぐちゃぐちゃなんだよ私はもう」

エヴァンジェリンは、泣きそうな顔を元に戻して、儂い笑みをチャチャゼロに向ける。

「口では先程あ言ったが、私は言葉程割り切れていない。私は幸せを求めるべきでないとも矢張り思うし、ナギに私はまだ未練がある。

私が私で在る限り、吹っ切れはせんのだろう。こんな気持ちのまま誰と何処へ居ても、幸せになど私はなれん。だから今日、己自身に引導を渡しに行くのだ。…もう、諦めたいんだよ。踏ん切りのつかん現状と自身の無様が、私は厭わしくてしようがない。…山下には悪いが、良い機会だ」

「…ソウカヨ。モウ、本当ニドウシヨウモノエンダナ…」  
チャチャゼロは己の言葉は届かないと悟った。これ以上の説得は無駄だとも。

「ああ、奴もこれ以上こんな女に付き合わせるのは憚びないからな。変わっているが、良い男だよ奴は」

話は終わりだ、とエヴァンジェリンは前に向き直り、歩み出した。チャチャゼロはそんなエヴァンジェリンの横を追従しつつ、ポツリと告げる。

「…ナラヨオゴ主人。山下ノ奴ガゴ主人ニ勝ツタラドウスンダ？」

「有り得ん話だ。奴では私に勝てんよ」

「モシ、ノ話ダヨ」

「…そんなこれ以上が起こり得るなら、信じてもない神とやらの慈愛を信じてやってもいいな。こんな私に、人生の同伴が出来るというのだからな」

「回リクデエ返事ダナ、受ケ入レルツテ事デイインダロ？」

「そこまでの奇跡を起こしてみせるならばお手上げだ。喜んで貰われてやるや」

「ソウカヨ、妹共モ喜ブゼ」

「有り得んと言つたらうが、ボケ人形」

ハン、と鼻を鳴らすエヴァンジェリンの横顔を仰ぎ見てから、チャチャゼロはフワリとした笑みを浮かべる優男の顔を思う。

…悪イナ山下。ヤッパオ前二任セルシカ無エミテエダゼ

……

「……………何か申し開きはあるか？」

「一切ありません、申し訳ありませんでした」

会場医務室の並んだベッドにて寝かされている、全身包帯塗れの辻と一見して胴体と右手の包帯を除いては無傷に見える刹那は、横になつた姿勢のまま、せめてもの反省の意思として首を曲げて仁王立ちに腕を組んで佇む杜崎に頭を下げていた。

「……………全く貴様らは。もう一度言うぞ、嚴重注意で済んだのははつきり言つて単なるコネの成果に過ぎんからな！色々譲れんものがあったのは理解してやるが、明らかに全ての面においてやり過ぎだ特に桜咲！貴様だ貴様あつ!!」

「はい……………本当にすみません……………」

杜崎の一喝にどんよりとした空気を纏いつつ刹那は項垂れる。

辻は辻で下手をしなくとも相手が死んでしまいかねない様な容赦の無い試合運び、ラスト終幕にて観客を巻き込んだ大斬撃を放った点、ついでに刹那を傷物にした点で木乃香を筆頭に中村達や剣道部員一同からクロスファイヤ十字砲火を浴びていたのだが、刹那のやらかした件は魔法秘匿関連での取り決めに抵触している為に輪を掛けて糾弾が厳しかった。

麻帆良住人の大半はノリと勢いで納得していたが、外来の観光客や一部の住人からしてみれば刹那の獣化や飛行、神鳴流の技の数々は余りに常識から逸脱し過ぎていて理の外にあるものだった。

「……………俺からしても其処の面倒臭い男を他にどう射止めると問われれば代案は思い付かん。どうせ貴様は今過去へ戻る事ができたとしても同じ方法を取るのだろうか」

「反省はしている、しかし後悔はしていないって奴だなブヘツ!?…そこまでおかしな事言つて無えだろ俺!!」

「気にするな、単なる憂さ晴らしだ」

裏拳を喰らつた頬を押さえながらの中村の抗議に教師の言葉とは思えない台詞を平然と返してから、杜崎は改めて刹那を睨み付ける。

「情状酌量の余地はあると認めてやる。が、それを踏まえても多大な温情の元にお咎め無しとの処分が下ったことを自覚しろ！ 言うまでもないが次に同じ様なことをやらかした場合は、魔法使いの定めたる理に基づいて貴様らを拘束する！ 良く肝に命じておけ!! ガキ共の恋愛ならばガキらしく平和裏に行かずともせめて周りを巻き込まん様に決着をつける馬鹿者共!! 何か反論はあるか!？」

「返す言葉もございません……」

杜崎の怒喝に悚然として小さくなる辻と刹那であった。

「まあまあ杜崎、そんな位にしてやってくれよ。辻のヘタレと桜咲の地雷つぷりが事態を悪化させたのは確かかもしれないねーが二人共、特に辻は早くも絶対安静なんだ。説教は大会終わって元気になってから頼むぜ」

「それにもうじき第二試合目の開始時刻です。到底空気を読んで大人しく闘ってなどくれないだろう二人に注意を払った方が良いのではないですか？」

「そうだけゴリエツティモリモリ。ロリババアはどうせ自重しねえし山ちゃんの手加減する余裕なんざ無えだろうからよ。次も同じ様な事が起こるんだから目くじら立てんなやどうせそのバカカップルこの後木乃香ちゆわんから新めて説教あつし」

「反省が無いと言うのだ貴様らの様な常習犯の物言いは!!」

ガン、ゴン!と豪徳寺と中村の脳天に拳骨を落としてから杜崎は怒れる足取りでズンズンと医務室を後にする。

「何でポチだけ殴らねえんだよ!？」

「貴様らと違って俺を舐めた呼び方をせんからだ、先生を付ける豪徳寺!!」

「俺をポチと呼ぶなど言っているだろうが!!」

「痛つてえく、まあ一ちゆわんとせつたん。心配掛けまくつたんだから大人しく怒られるや、山ちゃんの応援は俺らでしっかりやつとくからよ。最後にカップル成立おめでとうっつーか遅えわくつつくのがバーカバーカ!ち○こ爆ぜやがれ幸せモンじゃあな!!」

中村を殿としてバカレンジャーも医務室を後にし、最後に残された

のはこの上無く膨れっ面を形成している木乃香だった。

「……………え、ええ〜つと、近衛ちゃん……………?」

「お、お嬢さ、いや、こ、このちゃん、あんな……………?」

「……………二人共……………!!」

どう見ても爆発寸前の木乃香の怒りを少しでも緩和しようと、辻と刹那は引き攣った顔へ懸命に笑みを浮かべて宥めに掛かろうとするが、残念ながら活火山の噴火はその直後に始まったのだった。

『自分等の世界勝手に酔うていちびつとるんや無いわ阿呆共おとおおつ!!』

「うわあ…」

医務室の扉を挟み、既に10mは離れているにも関わらずはつきりと響き渡ってきた木乃香の怒轟に中村が呻き、大豪院と豪徳寺も首を竦める。

「普段怒らない娘程怒った時が恐ろしい、つてなあ」

「男女は問うまいよ」

「自業自得だ思春期共が。恥を偲んでも先ずは大人に相談しろ、こうなる前ならば幾らでも取れる手段はあるのだからな」

やれやれ、と杜崎はやり切れない様子で息を吐く。

「貴様らがいくら殺しても死なんとはいえ対外的には最早組織の一員だ。その馬鹿でもその辺りは理解出来ているだろう?……………余り無茶を仕出かすな、尻拭いをしてやるのにも限度はある。世の中とは無条件でお前達の味方ではないぞ」

杜崎の言葉に、中村達は珍しくバツの悪い様子で顔を見合せた。

「……………まあこれでも迷惑掛けたのは自覚してんだよゴリポン」

「つってもまあ、あれだ。意地になってたつもりは無えんだが、どうもガキ共の上に立つてるとなあ……………」

「些か矜持を尊び過ぎたのは認めましょう。非常抱歉」

「俺からすれば貴様らも変わらさずガキだ半人前共。しかし厄介な事に組織の歯車は勝手には動けん、機械弄りを覚えて貰いたいものだな?」



やれやれと首を緩く左右に振りながら杜崎は足早に選手席へ続く通路を曲がり掛け、ふと首を巡らせると同時にピタリと足を止めた。「どうしたよモっさん、括約筋がピンチか？」

「黙れドドメ色の脳味噌。……なに、折角だから控室の山下に激励を兼ねた露払いをしてやろうと思つてな」

臆て曲がる筈の通路を無視してそのまま山下が待機している側の控室に向かい歩を進める杜崎が告げる言葉の真意に、何かと後に続いた三人は一拍遅れて気付いた。

「なる。これは確かに一肌脱いでやらねえとな」

「馬車馬の如く働かされてんじゃねえのかよあの野郎……」

「大方警備の名目で侵入り込んだのだろうよ変質者めが……」

「加減はせんでいいぞ。大会終了まで現世に還つて来させんつもりでやれ」

物騒な笑みを揃つて浮かべつつ、四人は山下の控室からほど近い柱の影に身を潜めた。

「……さて、行きますか」

控室の置時計が予め指定されていた入場時間の五分前を指し示したのを見て、精神統一の為に座禅を組んでいた山下は軽く伸びをしながらかち上がった。

軽く手足を伸ばし、身体全体を軽く動かして何処にも不調が無いのを確認しながら、ゆっくりとした足取りで山下は出口へと歩き出す。

……最後の最後迄粘つてはみたけれど、やっぱり厳しい所じや無いねえ。強敵を通り越して難敵つてレベルだ、エヴァさんは……

絶対に敗北まけられない勝負にこれから赴く者の内心としては幾分弱気な事を思いながら山下は苦笑を浮かべる。

……まあでも、やるしか無いなら全力で闘るだけさ……！

されど諦念も絶望も心の内には置かず。

静かな闘志を両の瞳に宿して、山下は控室の扉を開けた。



を沈め待機していた大豪院はそのまま飛んで行く事すら許さない。

「ではな変質者。……………フン!!?!!?」

「……………!!?!!?」

大豪院の全力の裡門頂肘にて只野は起動を無理矢理水平に変えられ、ボロ屑の様になりながら遙か彼方へ吹き飛んで行く。ゆつくりと回転しながら只野の身体は遠ざかり、聽て高度を徐々に下げながら森の中へ消え去った。

「……………うん、何やら助けて頂いてありがとうございます?」

「気にするな。あれは見かけた時点で自動的に滅ぼさねばならん害虫だ」

怒涛の展開に付いて行けなくなっていた山下は、それでも未然に脅威を防いで貰った事には思い至ったらしくゾロゾロと集合して来た中村達を背後に従える杜崎にペコリと頭を下げるが、杜崎は実に爽やかな微笑みを浮かべてそう返した。

「これであるカスはまあ流石に試合中には復活はしないと思うぜ山ちゃん。まあ気張って来いやどう足掻いても絶望だけだよ」

「ざらりとモチベーションを下げようとするな馬鹿が。山下、為せば成るとはこの国の言葉だ、死力を尽くせ」

「まあなんだ、勝てなきや後悔するぜ山ちゃん。勝てよ」

「……………ありがとう皆。勝って来るよ、なんとしてもね」

山下は激励に笑って答えた。

「……………山下。正直な話俺はあの女の何処が良いのかは理解らん。しかし曲がりなりにも生きるか死ぬかの大恋愛の果てに今の連れ合いと結ばれた身だ、今のお前の心境は多少理解出来る」

「……………おいモツさん、初耳なんだけどその話?」

「恋愛って単語がこれ程似合わねえ面してんに激しく意外だな」

「……………いや、良く考えてみれば杜崎教諭の様な人間が結婚するのならば逆に恋愛結婚以外は有り得まい。仮に政略結婚だの何だのといった話があったとして大人しく従う訳が無いのだからな」

「……………ああ……………」

「五月蠅いぞ外野共。……兎に角だ、山下。教師として、組織の人間としては自重の二文字を告げたい所ではあるが、お前にとつては人生の正念場だ、野暮は言わん。これだけは言っておくが……余り無理をし過ぎるな。そして、死ぬなよ」

「……………はい」

重々しい杜崎の言葉に、小さく頷いた山下。

「……………そろそろ試合開始だな、行つて来い」

「んじや俺ら選手席行つてんわ」

「応援声援なんつうと陳腐な響きだが、俺らが付いてんぞ山ちゃん」

「祝你好運、健闘を毎個人都」

「安心して、勝つよ必ず……………文字通りの命懸けで、ね……………」

送り出された山下は、己にしか聞こえない様な程に小さく、後半の言葉を呟いた。

迷いの無い足取りで通路を進んでいた山下だが、朝倉と喧囂の前口上により賑わう会場内への入場口手前でピタリと足を止めた。

「試合に向けて集中している所申し訳ありません。少いで良いのでお時間を頂けますか山下君？」

薄暗がりの隅に溶け込む様にして佇んでいたローブ姿の年齢人種性別素性、その他一切が不明の目下、ネギ達一行にとつての打倒目標クウネル・サンダースが声を掛けて来たからである。

「……………戦線布告をあれだけ辻を筆頭に堂々としておきながら申し訳ないけど、今は貴方の事は眼中に無いんですよ。今から行う試合に、僕は大き袈裟でなく人生を懸けているつもりですから、ね……………」

「ええ、勿論。存じ上げているつもりですよ。あのエヴァンジェリンを相手に一歩も退かず、この場に漕ぎ付けた貴方を私は非常に高く評価しています」

返されたクウネルの言葉に、山下の眉が僅かに動き、目が細められる。

「……………薄々考えてはいましたが、ネギ君のお父さんの情報を貴方が知っている、というのは、貴方自身がナギさんと知古の関係だから。

…今の口ぶりからして、もしかしてエヴァさんとも知り合いなんですか？」

クウネルは静かに笑んでその視線を受け止め、答えを返す。

「古い友人。…と私は捉えています。どうにもキテ…いえ、エヴァンジェリンには苦手だと思われる様ですが」

「…そうですか……………それで？」

「ありがとうございます、では単刀直入に」

肯定の言葉に山下は一瞬目を閉じて、相槌の後にややあつてクウネルを促した。クウネルは見えている口元だけで微笑み、言葉を紡ぐ。「何故山下君はエヴァンジェリンに惹かれたのでしょうか？気を悪くするかもしれませんが、彼女は色々大変な女性です。それこそ命懸けで手に入れようとするだけの魅力を、貴方は彼女の何に見出しているのでしょうか？」

「…………それを貴方に語る必要や義理が？」

山下は少しばかり皮肉気に目を細め、敢えて冷たくそう返した。

…………よく解らないけど、癪に障るね、本当にこの人？は…………

理由は上手く言葉に出来ない。しかし山下だけでなく中村も、豪徳寺も大豪院も辻も。バカレンジャー全員が相容れないものを感じているのである。

…………この、見透かした様な存在をね…………

「ありませんね、これは単なる私の下世話な好奇心に過ぎません。低俗な動機で申し訳なく思いますが、私は私なりにあの不器用な昔馴染みに対して好感を抱いているものでして。どうしても気になつてしまふのですよ」

「…………エヴァさんに僕が相応しいかどうかを見極めよう、と？友人として…………」

探る様な睨む様な目付きで山下はクウネルの隠された顔を伺うが、そこからはなんの感情も見出せない。ただその時ばかりは、クウネルは明らかにそれと判る苦笑と、僅かな自嘲の気配を滲ませて答えを返した。

「その様な偉そうな行為に及ぶ資格は私にはありませんよ、山下君。

貴方が考えている通りです。…彼女がこの地に現れて十五年、傷付いた彼女に何もしなかつた私に、手を差し伸べてみせた貴方へ何も言う権利は無い」

「っっ!?!」

その言葉に、山下は僅かに身を強張らせた。

「……僕は……」

「ああ、勘違いなさらないで下さい。皮肉や嫌味で述べた言葉ではありません。……私なりにエヴァンジェリンを静観した理由わけはありますが、足を踏み入れてみせた貴方には何を言っても言い訳にしか捉えられないでしょう。断っておきますが、私はエヴァンジェリンに思う所はあっても恨み辛みを抱いてはいません。幸せに至れるものならば、是非ともそうなってほしいと願っています」

山下が何か言う前に、クウネルは笑ってそう述べた。

「だからこそ、資格が無いのは承知の上で御節介を焼きたくなるのですよ。相応の覚悟や想いが無ければ例え結ばれたとして、貴方と彼女は孰れ辛い離別を味わうでしょう。…貴方にエヴァンジェリンを想い続けられる、確固たる理由がありますか？ 答えを返せないのなら、山下君。貴方は…」

滔々と述べるクウネルの言葉を遮って、山下は言葉をぶつけた。

「理由なんて知るか。好きになつたから好きなんだよ」

惹かれた理由を言葉にしようとおもえば不可能では無いのだろう。きつかけやこれまでの過程を思い返せば、幾らでもそんなものは見つけられる。

純粹に一人の男を想う姿に胸打たれた、自らの言葉を曲げない気高い様子に惹かれた、普段は冷静を通り越して冷徹で、済ました表情を浮かべているのに、何か想定外の事態が起こる度にコロコロとよく変貌かわする外見相応のギャップにやられた。

それらの理由は間違いでは無いが、何故エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが恋しいのかという問いに対して相応しい答えとして返すには余りに足りない様に、山下には思えた。

「アンタには僕に何か言う資格が無いんだろ？ だったら説教臭い台詞

を向けるのは止めて欲しい。困難だか倦怠期だか知らないけど、そんなものは起こったときにどうにかするよ。かもしれない、で惚れた女を諦められるか」

山下は真つ直ぐにクウネルを見据えて、言った。

「人を好きになるのに理由なんか要らないでしようが?」

山下の宣言を受けて、クウネルは暫くの間無言で佇んでいたが、臆て僅かに身を震わせながら口元に笑みを浮かべた。

「……馬鹿にされてますか?」

「……いえ、失礼しました。寄る年波を実感して、若さが羨ましくなりましてね。……仰る通り、無粋な口出しは撤回させて頂きますよ。この上無く余計なお世話だった様ですからね」

クウネルは睨む山下を涼し気に宥めて一礼し、壁際に張り付くと片腕を掲げて入場口へと山下を促す。

「貴重な時間をありがとうございます。間も無く試合開始の時間でしょう、健闘を祈りますよ」

「どうもと言っておきますよ、一応」

山下は一つ息を吐いて顔を引き締めると、足を踏み出す。クウネルはすれ違い様に元の柔和な微笑みを浮かべ、山下へ言葉を投げ放つ。

「いえいえ、本心からの言葉ですよ。エヴァンジェリンはナギを追い掛けたとして、幸いに至ることは無いでしょうから」

「……… 訳知り顔でのその口振り。本当に色々知っていそうですね?」

「貴方がたの誰かが私に勝ったならば、全てお話致しますよ」

「上等だ」

勝つべき理由が増えたよ、と笑って、山下は歓声の降り注ぐ闘技場内へ歩み去った。

「……頑固なのですよ、年寄り。ねえキティ?……素直になれれば、お互い楽でしょうに」

『さあーっ!!? 麻帆良建築部のめざましい八面六臂の大活躍によっ

て僅か十分少々によつて再構築された闘技場をご覧下さい!!? これよりまほら武道会第二試合、『流麗舞闘』山下 慶一VSエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル選手の試合を開始します!!?!!?』

『『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!?!!?!!?』』  
そして、万雷の歓声が降り注ぐ中、山下とエヴァンジェリンは闘技場の中央にて向かい合った。

「さて、じゃあ闘ろうかエヴァさん」

「……覚悟は決まったか?」

「何のだい?身を固める決心と覚悟なら大分前からしていたけれど?」

「……馬鹿だな、貴様は……」

戯けて小首を傾げてみせる山下に、エヴァンジェリンは目を細めて薄く笑みを浮かべる。

「ああ、そうだエヴァさん。口が聞ける内に言っておくけれど」

「……何だ?」

「あちらのローブ男。ナギさんの情報知っているっていうのはあの人だから、僕に勝ったのなら締め上げてみるといいよ。何だか古い友人らしいからね」

「ほう?私に友人はいない筈だがなあ」

エヴァンジェリンは多分に自虐的な言葉でそう笑うと、覚えておこうと締め括る。

「……何だか反応薄いねえ?」

「正直な、半ば頭から消えていたとも。山下、お前との試合に集中していたからね……」

嗤い顔でエヴァンジェリンは山下の顔を下から見上げる。

「……そこまで僕に夢中なら、試合はもういいんじゃないかなあ?」

「生憎だな、私は面倒な女なのだよ……もう、いいな?」

「ん、語り残した事は今更無いね」

「いいだろう。……おい、審判。待たせたな、始めていいぞ」

互いにこれから死闘を交わすとは思えない軽妙な笑顔を向け合うと、互いに踵を返して試合開始線に移動しながら、エヴァンジェリン





「……相性とは何ですか中村先輩？山下先輩がエヴァンジェリンさんに合気柔術の手解きを受けているのは知っていますので、単純に腕前に於いて山下先輩がエヴァンジェリンさんに及んでいない故の不利だと私は考えていましたか……？」

「んん、それは間違いじゃ無えよ夕映つち。まあ山ちゃんも急速で腕上げてっし、言う程最早差は無えと俺は考えてっけどまあ、少なくとも近接技術じゃ山ちゃんは勝ってはいねえ」

ただなあ、と中村は顔を顰めて続ける。

「ぶつちやけ山ちゃんはそれ以外磨合気柔術いてきちやいねえんだぜ？その唯一の取り柄で甘めに見積もったとして互角なんだ。比べてあつちはまだまだ手札が有り余ってんだ、例えば魔法とかな」

「そういうことだ」

と、豪徳寺が先を引き継ぐ。

「呪文詠唱禁止なんて言っても、あの女なら幾らでもやりようがある筈だぜ、歴戦の超ベテランなんだからな」

「更に中村馬鹿が先程言った相性だ。エヴァンジェリン女史は吸血鬼、馬鹿げた身体能力に加えて最悪な事に再生能力がある」

「あ……………」

大豪院の言葉に、ネギが何事かに思い当たり、声を洩らす。

「そういうことだ、ネギ。色々山下のは逸脱して来てはいるが、合気柔術とは文字通り柔法であり剛法では無い。関節を極めた所で、骨をへし折った所でいとも容易く元通りになってしまう相手と山下は闘わねばならん」

「しよーじき俺らの中で一番あのロリババアに勝率低いのが山ちゃんなんだわなあ。しようがねえ事だけど山ちゃん火力低いんだよ。こんなモンレベル三十のぶどうかとレベル四十のけんじやからてんしよくしたレベル三十二〜三位のぶどうかか闘うみてえなモンだぜ？」

ぶつちやけ勝てる要素が一つも無え、と中村が天を仰ぐ。

「確かに、これは厳しい所の騒ぎでは無いでござるな」

「要はほぼ完全劣化版アルか山下？」

「いやだから最初から俺はそう言っただろアレは闇の福音だぞ元  
六百万\$の賞金首!!? 幾らバグ的に強いのが多いこの街でも一学生  
が叶うかあの超S級魔法使いに!!?」

「落ち着きなさい篠村!……でも、そうね。悪いけれど実態を知って  
いる此方側からすれば、そもそも勝負になるとは思えないわ……」  
魔法使  
「……せめて、山下先輩に魔法が使えるれば上級魔法の使えないこの  
ルールでは有効だったんですけれど……」

バカレンジャーだけでなく、楓達や魔法使いサイドの篠村達から  
見ても一様に勝率は著しく低い、との見解である。

「え……ちよつと、じゃあ山下先輩まず負けるってこと!?!じゃあなん  
で試合に出てるのよ!!?」

「舐めんなや明日菜の姉ちゃん!!? 負ける思うて勝負事に挑む男はお  
らんわい! 山下の兄ちゃんは死中に活を見出す気や、実力差はまんま  
勝敗に直結する訳や無いんや!!?」

「とはいえ、紛れとは中々所か滅多に起こり得んから紛れなのだがな。  
無策で挑むならば十中八九負けるぞ、これは」

鼻息荒く明日菜に反論する小太郎の首根っこを摘み上げて抑え  
ながら、杜崎は溜息混じりに呟く。

「高畑先生……」

「……僕からも、厳しいとしか言えないね」

「……そ、そうですか……」

苦い声で呟く高畑に、尋ねた夕映も聞いたのどかも顔が曇る。

「ダメですよ、応援する側が先に諦めちゃ。私は格闘技の事や魔法使  
いの事は解りませんが、山下先輩は勝つ気で彼処に居るんでしよ  
うから」

しかし、千鶴は暗い雰囲気になった周りを鼓舞する様にそう言  
うと、足元にいたスライム三人娘を抱えて客席に載せてやりながら微笑  
む。

「貴女達も山下先輩を応援してあげてくれないかしら?」

「…イヤ、こんなナリしてつけど俺らガキじゃ無えカラナ?」

「マアマア。さて置きキツいのは百も承知ですが私は山下さん応援し

ますヨク、ぶつちやけ伯爵達上位悪魔三体に襲われるのだから充分な無理ゲーデス。この人達なら何とかするんじゃないかと私思いますカラ」

「……勝ったら金髪ツンデレ合法ロリが手に入るなんてオイシイ状況、石に噛り付いても勝たなきゃ男じゃ無イ……」

「その通りだ！流石解ってんじゃないやねえかよプリン体!!？」

ぷりんを持ち上げて頭の上に置きながらの中村の戯けた言葉に、若干だが空気が緩む。

「元より負けると断言はしていねえ！山下ならやるぜえ!!？」

「無策で挑む程間抜けでもあるまい。曲がりなりにも一度闘った相手、此方にとって有利な点は皆無では無いからな」

「うら勝て山ちやくくん!!？」

「二度もそんなちんちくりんに負けられねえぞああああ!!？」

「多くは語らん、男を見せろ山下!!？」

「賑やかな事だ」

「悪い気分じゃ無いよ、僕はね」

向かい合った二人へ、朝倉の声が降り掛かる。

『試合、開始イ!!？』

15話 まほら武道会本選第2試合 山下VSE  
ヴァンジェリン（その2）

試合の開始宣言と同時に、エヴァンジェリンから見て右側へ体軸を傾けた山下がその姿を掻き消す。

「む……………!?!」

お世辞にも気負っている様子を、少なくとも表面上には欠片も見せていなかった山下の、開始早々に瞬動を用いて積極的に攻めに入る姿勢にやや意表を突かれた形になったエヴァンジェリンは、上足底を擦る様に動かしたその僅かな動きだけで自身の右側に身体の正面を向け。

直後向き直ったその方向に、山下の姿を影も形も確認出来ず、エヴァンジェリンは己の失策を悟る。

「チィイツ!?!」

己の背後へと急激に振り返ったエヴァンジェリンは、映った視界にマイクを構える朝倉の姿しか闘技場内へ見出せない事に思考が一瞬困惑により停止する。

直後、身体に影が射したとエヴァンジェリンが認識したその瞬間に、上方から槍の様な勢いで降って来た山下の蹴り下ろしが、エヴァンジェリンの身体へと突き刺さった。

『か、開始直後に山下選手の急襲ううううっ?! 奇妙な体勢からの高速移動の直後、空中に飛び上がった後空中を蹴っての飛び蹴りだああああつ!!』

『以前解説した瞬動と、空中を蹴ったあの動作は、何も無い宙空にて固めた気を放出、それを足場とする事により方向転換を可能とする虚空瞬動と呼称よばれる技術です。恐らく奇抜な動きで意表を突いた後に死角である空中からの奇襲を仕掛けた、という所でしようか?』

「……………まあ七十点ってトコか?」

「ほぼ正解でいいだろうが」

「え、どういうこと今の!?!」

地面にもんどりうって転がってから綺麗な後ろ回り受け身を取り、素早く跳ね起きるエヴァンジェリンへ着地をする間も惜しんで再度空中を蹴って追撃に掛かる山下を落ち着かなさ気に見やりながらも、明日菜が中村と豪徳寺に言葉の真意を尋ねる。

「山ちゃんが瞬動かます一瞬前に左側へ走り抜けそうな構えしたろ？山ちゃんの技術は俺ら一だ、あんな解っかかりやすい予備動作は必要無え」

「エヴァンジェリンから見て右側に行くと見せて逆側へ後ろ向きに瞬動かましたんだよ。その上でエヴァンジェリンが反射的に右側向いた一瞬で空中に飛び上がって二重に裏を搔いた上で全力の一撃決めに行つた訳だな」

「初っ端から随分と飛ばしているが、元よりエヴァンジェリン女史は格上も格上。短期決戦で決着めに行かねば潰されるだけだと理解しているのだろう」

「……解説お前らがやった方がいいんじゃないの？」

「黙って見ていろ篠村……動くぞ」

呆れた様な篠村の言葉を遮つての杜崎の言葉に全員の視線が闘技場に向いたその瞬間、闘技場内で氷の爆発が花咲いた。

「……っ!!もうか!!」

「出し惜しみする理由も無い。貴様と組手勝負をすつた覚えは無いぞ?」

休み無く拳足を見舞い、エヴァンジェリンの腕を取ろうとした間際に無詠唱で放たれた氷ニウイス爆カーススを間一髪横つ飛びに躲して難を逃れた山下だったが、温度差により生まれた水煙を裂いてエヴァンジェリンの貫手が迫る。

「くうっ……っ!?!」

鋭い鉤爪の生え揃う刃の如き一撃を辛くも流した山下は、お返しとばかりに伸び切った腕が戻される前に腕を取ろうと両手を閉かせ。

見えない壁に阻まれて、指一本を触れる事すらも許されずにその手を弾かれた。

「…そもそも貴様。私と相對するだけの實力があるのか、山下？」  
「つつ！！！！」

攻めに出掛けた中途半端な姿勢の死に体を晒す山下の宙にある片腕に、エヴァンジェリンの両手が蛇の如く絡み付き、次の瞬間山下は轟音と共に床へ叩き付けられた。

『腕取り一閃んんっ！！車の衝突した様な物凄い音と共に、山下選手床面を破壊しながら吹き飛ぶうううっ！！』

『直前の爆発といい、不自然に固まった山下選手の姿勢といい、どうやらエヴァンジェリン選手は多くの隠し玉を持っている模様ですね』

「あくこりや駄目か」

「駄目っぽいな」

「無念だが相手が悪過ぎたか……」

「だから兄ちゃん等が先に諦めてどうすんねん!？」

「山下さんまだ元気ですよ!!」

常人ならば五体がバラバラになりそうな凄まじい投げだったが、山下は口元から血を流しながらも闘技場の端まで床板を巻き上げながら静止。直後に跳ね起きて飛来する光の矢を回避しながら再びエヴァンジェリンに突っ込んでいる。ネギや小太郎の言う通り、誰がどう見ても劣勢ではあるが山下に深刻なダメージが入った訳でも無いこの段階での、中村達のコメントは早計に思える。

「阿呆、今のは受身取ってたから見た目派手だがそんなに効いて無えのは解つてらあ。俺等が言つてんのは障壁だ障壁」

「柔術家が組み付け無えでどう闘えつてんだ。しかもあつちはただ亀みてえに守るだけじゃ無く任意に障壁解いて殴る投げる魔法を撃つとやり放題だつてのに」

「先にも言った通り、山下にはあのレベルの障壁を破る火力は無い。せめてこちらの土俵で勝負してくれるならばまだ芽はあったのだからうがな……」

「…ですが、中村先輩!!」

「落ち着け夕映っち、俺等が駄目つつつてんのは山ちゃんがこのまま

闘うんなら、だ」

前回の辻と刹那の試合とは裏腹に余りにも見切りを付けるのが早いその物言いに、夕映が抗議の声を上げかけるが、中村はそれを手で静止する。

「向こうだって全力じゃねえ。流石に空飛びながら魔法で絨毯爆撃かます程不粋じゃ無えし、ルール破る気が無えなら大火力はあっちも出せねえ。俺等が闘り合った野生のエヴァンジェリンじゃ無く、公式戦エヴァンジェリンなら穴を突けるかもしれねえ」

連打で障壁を穿とうと激しく攻め込む山下を真っ直ぐに見つめながら、中村は締め括った。

「予想よか厳しいが、勝負を投げちゃいねえなら何かしらやるぜ、山ちゃんは」

「どうした!?これで終わりならば拍子抜けにも程があるぞ山下あつ!!」

「く……………っ!?!」

数条の魔法の射手を回避し、後から高速で迫るエヴァンジェリンの薙ぎ払いを捌き。襟剣を掴まれての投げも振り切った山下だったが、駄目押しに至近距离で撃ち放たれた氷ニウイスカースス爆を躲し切れず、氷片に身体を刻まれながら爆風に吹き飛ばされる。

『エヴァンジェリン選手の怒濤の連撃いいいっ!!光の矢に氷?の爆発!更には剛柔兼ね揃えた体術と手数が圧倒的に違います!!山下選手は先程から防戦一方だああ!!』

『氷というよりは極低温が瞬間的に発生している、といった感じでしょうか?急激な気圧と温度差によって空気が動かされ、擬似的な爆風になっている様です。液体窒素でも霧状にして散布しているのでしょうか?速度は違うとはいえ光る矢の方は予選で本選出場の篠村選手が使っていたそれに酷似しています…これも遠当ての一種かそれとも異なる技術か。何れにせよ前回の試合に続いて格闘技の大会とは思えませんこれは』

「まさかあれは氷結能力……………!?気をつけたまえ山下君!!分子運動を彼



女が制御しているのならば発火能力パイロキネシスも使い熟すやもしれないよ!!」

「超超能力研究会研は黙ってるろ! ンな真似出来んのはてめえ等の副部長から上位だろうが!!」

「負けんな山下あーっ!! それでも俺等抑えて勝ち上がったてんのか馬鹿野郎!! 相手は幼女だぞ幼女!」

「そんな大道芸人擬きに負けないで山下君くっ!!」

「テメエそのまま負けたらテメエがロリコンだから本気出せねえで負けたって今日中に学園全体に言いふらすからなあ!!」

「……はは、そりゃ御免だ。どうせロリコン呼ばわりされるなら、晴れて告白成功させてから堂々と呼ばれたいもん、だね……!」

急激に体温が低下した所為で早くも鉛の様な疲労がのし掛かって来た手足に喝を入れながら山下は起き上がり、己に向ってゆつくりと歩み寄って来るエヴァンジェリンに構えた。

「……もう止めておけ山下。今の攻防で理解わかった筈だ、お前は私を倒す所か反撃すら儘ならぬとな」

「はっ! 冗談キツイねエヴァさん。立場が逆ならエヴァさんは諦めるのかい?」

氷片と水煙を纏いながら、何処か憂う様な表情で山下に降伏を促すエヴァンジェリンだが、山下は鼻で笑ってそれを拒否する。

「諦めない。……とやりたい所だがな、生憎今の私ならばどう答えるかは解らんよ。……ともあれ、まあ貴様がこの程度で諦めんのは承知の上だよ山下。死に掛けながらも意地を通した馬鹿集団の一人だ、多少痛め付けた所で折れはすまい。……だから」

と、エヴァンジェリンは淡く発光する右手を山下へ突き付け、薄笑いと共に告げる。

「人の抵抗力ではまずどうにもならんクラスの封氷魔法で凍結してやろう。なに死にはせんから安心しろ」

「僕にとっちゃあ死刑宣言も同じだ……よっ!!」

山下は言葉の終わりと共に飛び出し、エヴァンジェリンの側面に瞬動で潜り込みながら掌打の一撃を叩き込む。

「無駄……っ!」



大豪院の言葉通り、尚も前へ出る山下に対して闘技場の縁で身体を起こしたエヴァンジェリンは再び氷ニウイス爆カーススを巻き起こす。寸前で瞬間を用いて横つ飛びに爆風の範囲から逃れた山下だが、着地地点にエヴァンジェリンの放った無数の魔法サギタの射手マガカが殺到してした。

「く、そおおつ!!」

些か焦りの混ざった声とは裏腹に、身体全体を踊る様にうねらせながら山下は弾幕の隙間を擦り抜け、尚も身体に迫る数発を、気を纏わせた両の手で捌き、或いは散らしてエヴァンジェリンへ迫る。喰らえば終りの氷結魔法がエヴァンジェリンにはある以上、至近距離にて呪文構築の時間を与えずに攻め勝つしか山下に勝機は無かった。

「な……あつ!?!」

しかし、打ち払ったと思った魔法サギタの射手マガカの一矢が、帯状になって山下の右手に纏わり付き地面に突き刺さって拘束され、その光景に選手席の篠村は瞠目した。

「げ、戒めアエールの風矢カフトウーラエ……!?!あの吸血鬼弾幕中に一矢だけ紛れ込ませるとか俺みてえな真似を……!!」

「狡い小技で済まんなあ、山下!!」

エヴァンジェリンは嗤い、光る右手を山下へ突き付ける。

「喰ら、……うかあ!!」

山下は叫んで戒めアエールの風矢カフトウーラエの一端が突き刺さる床へ思い切り足を振り下ろす。轟音と共にその震脚で床が砕け、光の帯が解け散るが……

「逃すか」

「ガア……ッ!?!」

三度放たれる氷の爆裂が今度こそ山下を中心として吹き荒れ、冷気と衝撃に山下が白景色の中で仰け反る。

「……終わりだ。凍ゲリドゥスてつく氷カルプス柩!!」

エヴァンジェリンは山下の姿に一瞬目を細めた後、力ある言葉を解き放つ。

霧に煙る視界が晴れる中、中央には苦悶の表情のまま文字通りの氷の柩に閉じ込められた山下が、直立した体勢のまま突き立っていた。

『……き、巨大な氷の柱が突如として闘技場中央に出現!! 山下選手、氷漬けとなつたあああああつ!!』

『…解説不能ですね。少なくとも私の知る限りにおいて、一人をこうまで瞬時に凍結せしめる手段は存在しません』

「や、山下さあーん!?!」

「アカンかなり高位の魔法やで!?!」

「きやああ山下先輩!?!」

傍目にも衝撃的な光景にネギ達からは悲鳴が上がる。

「……糞が、負けか山ちゃん……!?!」

「無茶も無理も承知の上だけどよお……呆気無さ過ぎんぞ山下あ!!」

「……いや、待て!?!」

そんな中、大豪院が鋭く上げた声にネギ達のみならず近くの観客までもが何事かと顔を向けて。

「……審判、見ての通りだ。どう見ても試合続行は不可能だろう? さつさと私の勝ちを宣言しろ……!?!」

何処か投げやりな様子のエヴァンジェリンが朝倉にそう言い放つ。が、朝倉は掛けられた言葉に反応せず呆けた様に上を見上げている。

「……おい、何を……つ!?!」

様子がおかしい事を見て取ったエヴァンジェリンが天を振り仰ぎ――

「……あ……」

――朝倉の口から呟きが洩れたその時には、音も無くエヴァンジェリンの背後に山下が上から落下し、背中合わせに着地を試みせていた。

「な……!?!」

「エヴァさん」

山下はエヴァンジェリンが振り向き切る前に、背を向けたまま後ろ向きに両腕を繰り出してエヴァンジェリンの頭を両手で掴む。

「あんまり舐めるなよ僕のこと」

山下はそのまま屈み込むと同時にエヴァンジェリンの頭を肩越し

に斜め下方へと思い切り引き下げた。

「ゴ……!？」

ゴキリ、と、エヴァンジェリンの首が山下の肩を支点にして乾いた音を立ててへし折れ、濁った音がエヴァンジェリンの喉から洩れ出る。山下はそのまま片腕を首に回し、もう片方の腕をエヴァンジェリンの細い片脚へ巻き付けると身体全体を抱え上げ、同時に片足を床へと振り下ろした。

足が踏み下ろされた地点を中心に、闘技場の床が白い気の光に包まれる。山下はその二m四方程の光る床へと、自らも身体毎飛び込もうとするかの様な凄まじい勢いで、エヴァンジェリンを頭から急角度で叩き付けた。

バツシャアン!!と、中身の詰まった重い肉厚の水袋を叩き付けた様な鈍く、重い音が鳴り響き、首がへし折れて支えが無い為に側頭部から斜めに落ちたエヴァンジェリンの頭蓋骨が爆ぜ割れて脳漿が溢れ出る。叩き付けられた衝撃は頭部だけを破壊するに留まらず、折れていた首を蛇腹の如く滅茶苦茶に折り砕きながら胴体へ伝播して両肩の骨とその下の脊椎、肋骨を砕きながらその小柄な体軀を歪に歪めた。

会場の観客達が挙げていた喧騒が潮を引く様に遠ざかり、シン……とした静寂が全体を包み込む。

山下は周りの反応に一切頓着せずに、着ていた上着を脱ぎ取ると高所からの落下死体さながらの様子になっているエヴァンジェリンへそれを投げ掛け、身体を覆い隠した。

『あ、あの……山下選手……』

「朝倉、カウント取って。ダウンだよ。大丈夫、エヴァさん立つから」  
僅かに身体を震わせながら恐る恐る、といった体で問い掛けて来る朝倉に山下はあっけらかんとそう返し、倒れた所に布が被さっている為に死体が安置されているような状態のエヴァンジェリンへ顔を向けると言い放つ。

「立ちなよエヴァさん。再生、あと十秒以内に来るでしょ？これで敗けを認める、って言うんならそれでいいけどね」

「……何を考えてんだあの野郎は……全力で勝ちに行ってるんじゃないのかよ……?」

篠村は大打撃を与えた一大好機になぜ山下がわざわざ相手を気遣う様な言動をするのか意味不明だった。

「……いやな。それに関しちやまあ、考えてる事は解るんだけどなあ……」

「どうするんだよ山下、ここから勝ち目はあんのか?」

「……ちよつと待ちなさい、何一つ解らないわ。そもそも首を折った迄はよくないけれどいいとして、あの床を光らせてからの投げ技は何なの!」

「今は其処は重要ではないと思うが……単純だ、気で床を強化して砕けない様にしてから投げ落とした。前の試合の辻の様に投げ落とされて作ったクレーター。実に凄まじい破壊力を伴っている様に見えるが、その実床は碎ける事によって衝撃エネルギーを吸収してしまっているのだ。マットやトランポリンの様な柔らかい地面で無くとも、衝撃の大きさに耐えられず下が砕けてしまえば、投げ技の威力は半減と迄行かずとも減少する。山下は気で砕けない床を作って衝撃を余す所無くエヴァンジェリン女史へ伝えただけの話だ」

「まあ殺人技だわな、ババアが相手じゃ無きややんねえ技だよ山ちゃん」

「……なら、なんでそんな決め技放つといて山下はエヴァちゃんに立つ様言うアルか?」

「……恐らくだけれど、ね……」

古が腑に落ちない、といった様子で洩らした言葉に、何処か苦し気に聞こえる声で高畑が答えた。

「エヴァは本気を出して、いや出せていない。山下君は全力のエヴァに勝つつもりでいるんだ……」

『え、エヴァンジェリン選手、カウント八で上着を跳ね除け立ち上がったあああつ!!命が危ぶまれるレベルの怪我に思えました……』

!？」

「……何のつもりだ、山下……？」

「決まってる、白黒はつきり着ける為だよエヴァさん」

脳漿の一部と粘る血液で斑に染まった金髪を一振りし、静かに問い掛けて来たエヴァンジェリンに、同じくそつと山下は返した。

「塩を送ったつもりか？ 貴様……」

「自分でもう理解わかってるだろうエヴァさん。何だよその体たらくは、偉そうに格上宣言しておいてももう何回僕に裏掛かれた？ ……理由は何でもいい、結局迷ってるだろうエヴァさん。動きにも判断にも今一つ切れが無いんだよ」

「……………」

山下の言葉に、エヴァンジェリンは反論しなかった。

「はじちゃんめとせったんの場合もそうだけどよ、元々勝った負けたで付き合うか付き合わないか決めるって無理あんだろ。気持ちで何か割り切れねえからそんな話になってんのによ、無理矢理決着付けた所でシコリは残らあな」

「まあそういうのは時間が解決してくれる場合もあんだらうけどよ、あの女そこら辺を凄まじく引き摺る性質タチだから此処まで話拗らせてんだろ？ 明らかにノリ切れてねえ状態で決着つけても、その後円満に行くとは思えねえわな？」

「だから山下は、あの欠片も余裕の無い状態で敢えて喝をエヴァンジェリン女史に入れた訳だ。…気持ちは解る、理解も出来る。が、今のが奥の手ならば勝機は無いぞ……………」

「…奥の手……………そ、そう言えばあの氷漬けの山下先輩は一体……………」

大豪院の呟きに、夕映がふと未だに氷に包まれたままのもう一人の山下を見やり、疑問の声を上げる。

「あれは身代わりだ。型紙か影分身かは知らんが、あの水煙を目眩ましに上空へ逃れていたのだろう。…………成る程確かに百戦錬磨の元賞金首が散漫にして隙だらけな事だ」

「アレは影分身でござるな、拙者がコツを教えたでござるよ。まさか

この短期間で一体といえ創り上げてみせるとは驚きでござるが……」

「本気で来いよ、エヴァさん。じゃなければこんな茶番に意味は無いだろ！アンタをこの先、引つ張っていけると理解らせる為に僕は命張ってるんだよ!!何処かで敗けてもいいと思ってるなら、最初から僕の手を取れよ!!……未練が残っているっていうなら、悔いが残らないよう思いっきり来いよ!!」

それが出来なきや、この場に立つな!!と、山下は嚇怒の咆哮を上げた。

エヴァンジェリンは温厚な山下の現す激情を受けて僅かに目を見開くと、やがて顔を片手で押さえてクツクツと笑い出した。

「……やはりお前も馬鹿の仲間だな。…本当に馬鹿だお前は……」

「馬鹿はお互い様だろエヴァさん」

「……一緒にするな、いや、してやるな。お前達の為にな……私は唯、歪んでしまっただけだ……」

覆っていた手を除けたエヴァンジェリンの顔は何か吹っ切れた様な微笑みを浮かべていて。

「後悔するなよ?」

「上等」

斑の金糸が風にはためき。

血を吸う鬼は嵐と化した。

縦横無尽に撃ち放たれる魔弾の豪雨、幾重にも折重なり凍氷を撒き散らす氷の爆発、目には映らぬ透明な絶対零度の霧。颯風を纏い振るわれる手足は触れる者全てを薙ぎ裂き、かと思えばその纖手は添えられた次の瞬間優雅とさえ言える技術を繰り出す。

『…エヴァンジェリン選手、大打撃を被った事により箍が外れたか!先程よりも更に勢いを増して山下選手を攻め立てるううううっ!!』  
『先程までと戦闘法自体は変化かわっていません。違うのは、言わば気迫



でしょう。必倒、いや必殺の意志が攻防の一つ一つに表れています」  
「山下ああああ気張れやあああつ!! テメエ此処で負けたら一生節目で勝ち切れ無え負け犬だオラアアア!!!!」

「山ちゃんオラア死ぬ気で躲せええええ!! 態々本気にさせといて負けましたなんつったらお前只の阿呆だ阿呆お!! 死ぬまで馬鹿にされたくないや何でもいいから勝てやああああつ!!」

「これがお前にとつての分水嶺だ!! 死力を尽くせ、あるか無いかの隙を見極めろ!! 勝てねば一生後悔するぞ、一生だ山下ああ!!」

「お前等極限状態の人間に重<sup>プレッシャー</sup>圧重ねんな!? こういう時はポジティブな事言つてモチベーション<sup>プレッシャー</sup>上げさせるもんだろがあ!!」

「とうかあの蝙蝠ババア魔法の秘匿とか此方側<sup>魔法使</sup>への配慮を最早欠片も考えておらん!?」

激励しているのか脅迫しているのか解らない中村達の厳しい激に篠村が目を剥いてツツコみ、余りに堂々とした魔法の行使に杜崎が青筋を浮かべて掴んでいる木柵に罅を入れる。

「さつきから山下先輩、殆ど反撃出来て無いわよ!? これじゃあ……!」  
「あのクソツタレた障壁がある以上山下の兄ちゃんは付け焼き刃除いて真面に攻撃通せんものや!! もう打つ手無いんかい兄ちゃん!」

「掴まれた時にしか反撃の機会は無い……けれどエヴァンジェリンさんが近接戦闘をするのは決まって魔法で山下さんの体勢を崩して優位に立っている時なんだ! 一撃毎の間隔もどんどん狭まっているし、浸け入る隙が無いよ!!」

ネギ達が歯噛みして見ている間にも、死角から襲つて来た糸に足を取られ、身体の沈んだ山下の横腹にエヴァンジェリンの拳が突き刺さった。観客席にまで届く乾いた枝のへし折れる様な異音と共に山下は血塊を吐き、闘技場の端まで吹き飛んで水面に着水した。

「オーオー、ゴ主人モ容赦無エナ。イヤ容赦無クサセタノカ山下ガ。……阿呆ガ、必要ツテモテメエガ負けチマツタラ意味無エダロガ」

闘技場の入場口の壁に凭れ掛かりながら試合の推移を静かに見守っていたチャチャゼ口は、山下へ小さく悪態を吐く。

状況は素人目に見ても、最早山下に勝ち目がある様には見えない。意地を貫いて山下が倒れた所でエヴァンジェリンは辻のように絆されたりはしないとチャチャゼロは自信を持って言える以上、山下が勝たねば話は終わりなのだ。

……才前ナラ、ト思ツテタケドナ。ヤツパ無理ガアル、カ……………チャチャゼロは小さくかぶりを振って吐けもしない溜息でも出た様な鬱屈とした気分を追い払う。

「ヤレヤレ、妹共ニハコノ分ダト良イ報告ハ……………ア……………」  
そこまでを呟いて、ふとチャチャゼロは動きを止めた。  
そう……………。

「……………妹<sup>茶々丸</sup>ハソウイヤ何処ニ居ツテヤガル……………?」

「最終調整完了、何時でも撃てますよ茶々丸さん」

「ありがとうございます」

ヘルメットに白衣姿の研究員らしき男の言葉に、絡繰 茶々丸は一礼して手に持つパソコンの端末部に己の首元から伸長したケーブルを突き刺さした。

龍宮神社から北東に役2.5 kmの草原にそれは設置されていた。

それは一見巨大なクレーン車に似ている。しかし、天高く聳えている機械の巨腕は起重機<sup>クレーン</sup>とは異なる蛇腹の様な何節もの関節を持ち、先端にはフックの代わりに外から内に掛けてサイズの異なる金属の爪が幾何学模様の花柄の如く生え揃っていた。

「……………しっかしこんな実用性皆無のアホ兵器、よく取ってありましたねウチ」

「温故知新、麻帆良の最新化学技術で古代兵器を作ろう……………だっけな。因みにこの機械制御式<sup>カタパルト</sup>投石機<sup>カタル</sup>のスペックは最大射程7 km、有効射程がその半分<sup>3.5 km</sup>。投擲精度は有効射程内ならば誤差50 cm以内でピンポン球から直径10 m超のウニみてえな形した鉄塊までを形状、重量を問わずに精密射撃……………ってどうか投擲か?が可能だよ。ああ、因みに最大射程やら何やらは飛ばす事の出来る maximum

の重量での話だそうだ」

二人の研究者らしき男達が呆れた表情で、四方にパイルを打ち込ん  
で地面に固定されている牽引車両一体型投石機カタバルトの巨体を見上げる。

「トン単位の重量物をどうやってキロ単位で飛ばすんですか？」

「電磁加速関連の技術が密接に関わってるらしいが専門分野外だ、よ  
く解らん。それより俺は何だつてあんな馬鹿デカイガラクタを建物  
に向かって投擲するのかが気になってしょうがないんだが……ああ、  
始まるみたいだな」

男の言葉の途中で、低く重い起動音と共に倒れ込み、機械の爪で投  
擲物を確保したホールド。巨大なアームはゆっくりと後方へ倒れ込み、幾重も  
の関節を折り曲げた、人の身体に例えるならばブリッジでもしている  
様な形状で先端が地面に付く。

「間も無く指定された時刻を迎えます。対象を投擲した後は速やかな  
撤収をお願いいたします」

唸る様な機械音と共に細かい振動が軽く地面を揺るがす中、茶々丸  
の平坦な声が周りの作業員達に届く。

「了解です、茶々丸さん！……所でこんなものを撃ち込むなんてどう  
いったイベントですか？神社ですよ彼処」

バチが当たらないですかね？と冗談めかして言つて来る作業員の  
一人に茶々丸は顔を向け、平然と言い放った。

「奇襲及び援護を目的とした支援行為です。私のマスターの人生が懸  
かった一大事ですので、苦情や二次被害に於ける対応及び損害賠償は  
後程受け付けます」

「「……………？」」

その不穏な台詞に、作業員達は一拍遅れて乾いた声を洩らす。

「投擲時刻まで十五秒前、衝撃波発生のおそれがある為、皆様退避をお願  
いします」

茶々丸は端末を介して気候状況の微細な変化に合わせて投擲角度  
を微調整しつつ呼び掛ける。

「……いやいや待った、待って茶々丸さん……………」

「まさかこれって……………」

「許可取って無いんですかあ!？」

「謝罪は後程致します……主犯の方と共に。皆様、重ねて申し上げませんが退避を」

「だああああもおおおおっ!？」

抗議の叫び声を上げつつも蜘蛛の子を散らすように逃げ出した作業員達を余所に、茶々丸は淡々と作業を進める。

「秒読みを開始……3. 2. 1……ファイヤ発射」

一際高い機械の唸り声が響いたその瞬間。風船の割れる音を数千倍にした様な甲高い音が周囲を襲い、視認不可能な速度で撃ち出された物体は空の彼方へ小さい影と成り果てた。

「……御武運を。貴方様の勝利を願います……山下様」

「……!!……っしや来たああああっ!!!!」

氷の爆風に吞まれつつ、山下は空を仰いで歓喜の叫びを上げた。

「……ああ……?……!!……っ!？」

叫んだ直後に跳躍し、更に虚空瞬動で空へ昇る山下に、エヴァンジェリンは疑念の声を上げた直後。目を見開き驚愕の呻きを洩らす。

『こ、これはあああああっ!?!何か巨大な物体が、闘技場に……!?!』

急速に斜め上方から降って来たそれは、鉄骨や金属球、種類の判別出来ない機械の部品からボルトや薬缶に至る迄、あらゆる金属が滅茶苦茶に溶接された10m近い歪な球体だった。

山下は高速で落下して来る巨大な鉄塊に取り付き、身体全体を一回転させる様に激しく身を振りたくると同時に虚空瞬動の応用で宙を踏み締めた。超重量の鉄塊には撃ち出された速度に重力加速度迄も加わって凄まじい運動エネルギーを有している。

その落下位置に干渉しようとする山下の全身は激痛いたみと共に悲鳴を上げた。筋肉の幾つかが断裂し、何処かの骨が外れる乾いた音を山下は激痛に霞む思考の中知覚する。エヴァンジェリンからこれ迄に受けたダメージも相まって身体がそろそろ限界に近い事を山下は否が応でも自覚させられた。

だが、それでも。

「飛竜ドラゴン投げといてコレが投げられない、道理があるか  
ああああああつ!!!!」

咆哮さけびと共に山下は闘技場の中央に向けて落下しようとしていた鉄塊の落下角度を、約5.2。という数字で表せば極小さい範囲でズラした。しかし、それによってもたらされる結果は凄まじいものとなった。

ハイマジックユーザー  
高位魔法使いの多重魔法障壁を打ち破る最も単純な方法の一つは、大質量による純粹物理打撃である。

「こ、の馬鹿、があああ……っ!!!!」

軋みを上げて破碎されて行く己の物理障壁を目前に、エヴァンジェリンは驚愕と怨嗟の呻きを洩らす。

『え、エヴァンジェリン選手、山下選手により空から降って来た鉄塊を投げ付けられ、え、耐えてる!?!?っていうかこれ大丈夫なのちよつとおおお?!?!?』

『ルール上は刃物じゃ無いから問題無いかな?どちらかというど鈍器だろうしこれ。…まあ空から大質量物体持ち込んではいけませんなんてルールが無いのは、そんな馬鹿な真似誰もしないという前提あつての事ですが。ともあれ朝倉、逃げる。観客の皆様も一時退避をー』

「言われんでも逃げるわああああああああつ!?!」

喧囂のいつそ狂気を感じるこんな状況でも冷静な解説に全力で闘技場から遠ざかろうとしている最中の観客の一人が叫び返す。

津波が来る前に引いた海面の如く周りに人の消え失せた闘技場の端に次の瞬間鉄塊が突き刺さり、隕石が衝突したかの様な凄まじい衝撃が龍宮神社全域を揺るがした。

龍宮神社  
「…あんまりウチの敷地にダメージを与えないで欲しいものだけどね、前の試合の刹那といい……………」

観客席の後列で椅子の後ろに伏せて衝撃と水飛沫をやり過ごした真名は苦笑しながら身体を起こした。

闘技場は鉄塊の炸裂した片側が完全に地盤毎砕け割れ、原型を留める面積が三分の一程度しか残っていないという燦々たる有様だった。

『朝倉ー、生きてるかー?』

『……生きてますよー! っっていうか殺す気か!? 咄嗟に鉄塊が落ちて来るのと反対側の水堀に飛び込まなきゃ死んでたでしょ私!』

もぬけの空となり、衝撃波で半ば砕け、水浸しになった解説席に堂々と鎮座したままの喧囂は、ずぶ濡れのまま朝倉に呼び掛ける。それに対して朝倉は、水堀の中から上体を引き上げつつ半ばヤケクソ気味に応答した。

『まあさて置き実況だ朝倉。山下選手、エヴァンジェリン選手に組み敷かれています。奇想天外な手段を用いて勝負に出た山下選手でしたが、これは決着となるでしょうか……』

『……え? ちよつと待つて?! 何時の間になんかことになつてるの!』  
随分と小さくなった闘技場にて、山下は首を両手で、左肩を両脚でエヴァンジェリンに極められた状態で床に倒れ伏していた。

時間はエヴァンジェリンが鉄塊を障壁で受け止めていた時分まで遡る。

「!」………のおっ!!!!」

エヴァンジェリンは咄嗟に魔力を込め直し己の障壁を強化したが、初めから最大規模の物理障壁を展開していたなら兎も角、後付けの強化では破られると瞬時に悟った。

故にエヴァンジェリンは碎ける障壁をそのままに、素早く鉄塊の落下範囲から逃れに掛かる。瞬動で横つ飛びに飛び離れ、抑えを失った鉄塊が闘技場の床に衝突したその瞬間。

空から山下が逆落としてエヴァンジェリンへ襲い掛かった。

「読んでいないとでも、思ったかあ!!」

しかしエヴァンジェリンはその奇襲を看過していた。確かに大質量での純粹物理攻撃は自分の障壁を砕き、ダメージを与えるに値する一撃ではあるが、エヴァンジェリンは単純な物理攻撃では全身を破碎イモータルされた所で数秒あれば再生する不死者である。故に質量攻撃が有効

打に成り得ても決定打とならないであろう事を理解している山下が何故それを行ったかと言えば、答えは単純である。

……私の障壁が邪魔だから、だろう……………!?

山下はエヴァンジェリンの障壁を砕くためだけにこの一撃を放った。と、エヴァンジェリンは読み取っていた。故に障壁が砕け失せたこの一瞬に山下は必ず仕掛けて来ると、エヴァンジェリンは警戒を切らなかつたのであつた。

「……………!!」

「残念だつたな、山下あ!!」

目線が合い、顔を歪める山下に叫ぶ様に言葉を叩き付け、エヴァンジェリンは瞬時に展開した氷ニウイス カリスス爆を放つと同時に糸を操り、例え虚空瞬動を用いても逃れられぬ様四方八方から山下を捕縛しに掛かつた。

魔法と糸、二重の包囲網に対して好機から一転、詰んだ状況と成り果てた筈の山下は。

何故か懐に手を入れながら、エヴァンジェリンに対して笑みを向けた。

「……………つつ?!」

まるで立場が逆転したかの様なその笑みに、理由も理解わからずエヴァンジェリンの背中が総毛立つた。そうして氷の爆発と糸の檻が山下を捉えるその寸前。

山下の身体が、まるで霞の様に掻き消え、エヴァンジェリンの全ての迎撃は空を切つた。

「……………!?!?……………!!」

あり得ないその事実刹那の間呆けたエヴァンジェリンは、落下した鉄塊が闘技場を破碎する地震の様な衝撃にたたらを踏む。

そうして体勢を完全に崩したエヴァンジェリンの背後に、山下は出現した。

「……………つ、らああああああつ!!」

「が、アアアアツ!」

山下の渾身の気を込めた抜き手の一撃が、エヴァンジェリンの背を

突き破り、心臓に突き刺さる。完全に知覚外からの不意打ちにエヴァンジェリンが血塊を吐き散らしながら仰け反る中、貫いた抜き手にてそのまま身体の内側を掴み取った山下はその身体を担ぎ上げ、逆落としてエヴァンジェリンの身体を地面へと叩き付けた。

「グ……………ッ!?!」

後頭部から床に叩き付けられ、首の骨をへし折りつつ脳挫傷を起こしたエヴァンジェリンがくぐもった声で呻く中、山下はエヴァンジェリンの関節を極めに掛かる。

エヴァンジェリンは真祖の吸血鬼であり、関節や骨を外した所でへし折った所で立ち所に再生する、そんなことは山下は百も承知の上である。

……………それでも、もうこれ以外に僕に勝つ方法は無い……………!!

エヴァンジェリンは身体が動く内に敗けを認める事は絶対に無い。ならばエヴァンジェリンに勝つには戦闘不能に追い込むしか無いが、例え全身を潰そうと再生するエヴァンジェリン。物理的なダメージで倒し切るだけの火力は山下には無い。

故に、山下はエヴァンジェリンにどう反撃されようと関節を極めた状態でダウン状態を取り続け、審判のカウント10による判定勝ちに望みを賭けた。

……………これで貴女が納得するかは判らない、勝ち切れるかどうかすらも!!……………それでも、これが僕の精一杯だ、エヴァさん……………!!

山下は投げられた後に仰向けに崩れたエヴァンジェリンの右腕と首を抱え込む様に捻り上げ、逆手で両足を外側から絡めて固定しながら覆い被さる、所謂縦四方固の様な体勢を取りに掛かった。

「オ、ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”アアツツ!!!」

しかし、極めが完成する間に喉が破けて血が滲む程の凄まじい絶叫を上げたエヴァンジェリンが唯一無事な左腕を振り上げ、山下の顎部を横合いから殴り付けた。

「が、ぐ……………うっ!!」

しかし山下も、この機会を逃せば勝ちの目が無い事を理解している決死の身である。揺れる視界の中、力が抜けそうになる両手を初め



とした身体全体に喝を入れ、力付くで極めに掛かる。

「…っ!!、ニウイス カースス 氷 爆!!」

しかし、エヴァンジェリンの動きは山下に輪を掛けて強引だった。己が傷付くのも構わずに魔法を連続で唱え、掴まれた片腕に負荷が掛かって骨が折れるにも頓着せず全力で山下を撥ね退けようと藻掻いた。

「ぐ、あぁっ!?!」

脇腹にエヴァンジェリンの鋭い爪が突き刺さった直後にニウイス カースス 爆の爆風が頭部を直撃し、山下の意志とは無関係にその腕から力が一瞬抜ける。

「ガアアアアアアアアアッ!!!」

「ぐっ……!?!」

エヴァンジェリンはその機を逃さずに両手足を撥ね上げて山下の上体を弾き飛ばし、獣の様に俊敏な動作で跳ね起きると膝立ちに近い体勢で仰け反る山下へ掴み掛かり、首投げの要領で山下を地面に叩き付けた。

残った闘技場の床に亀裂が走る程の勢いで叩き付けられ、山下の肩甲骨と肋の数本に罅が入る。肺の中の空気を吐き出して悶絶する山下の首をエヴァンジェリンはそのまま振り上げ、左腕に両足を絡めて身体を旋回、山下を俯せに引き倒すと同時に首と肩を極め、闘技場の床に腰を着けたのだ。

エヴァンジェリンの動作には余裕の欠片も無く、それは山下の猛攻に紛れもなくエヴァンジェリンが追い詰められていた事を示していた。

しかし、結果的には山下の渾身の一手はエヴァンジェリンを詰み切るに至らず終わりを告げた。

「……あと、もう少しで………!!」

「………無念だけど、これは終わりだ………糞っ……!!」

医務室のベッドの上でそれぞれ半身を起こしてモニターで試合を見守っていた辻と刹那は、唇を噛み締めながら言葉を絞り出した。

「……でも、山下先輩空から落ちて来た時に、瞬間移動みたいな事してたんやし、これも……！」

「無理です、お嬢様……！エヴァンジェリンさんの攻撃を躲して山下先輩が背後に移動した際に、札の様なものを捨てるのが見えました。……恐らくあれは転移魔法符です。どこのツテを頼って手に入れたかは解りませんが、稀少性が高く高価な代物です。乱用せずにあの場面で漸く使ったという事は、一枚きりの切り札だったのでしよう……！」

刹那の傍らで椅子に座っていた木乃香が両の拳を握り締めながら希望を唱えるが、刹那がそれを苦し気に否定する。

「あの体勢で下手に動けば死ぬ。……言いたくは、無いが………っ!!」  
「そんな………」

血が滲む程に唇を噛み締めながらの辻が発した、山下の敗北宣言に、木乃香は悲痛な声を上げた。

「……っ!!山ちゃん逃げろおおおおおっ!!」

「無茶言うな!!首が極められてんだぞ!!」

「藻掻けば藻掻く程首が締められ、終いには頸椎がへし折れる……勝負、ありだ……!!」

「そ、そんなあ……!!」

「や、山下先輩!!」

選手席、観客席でも辻の見立てと同様であった。明日菜達はこそって山下へ声を上げるが、最早決着が着いたのは誰の目にも明らかだった。

そう、唯一組伏せられた当の山下を除いては。

『こ、これは完全に極っている様です！空から鉄塊が落ちた後の一瞬で凄まじい密度の攻防があった模様です!!』

『空白の攻防が知りたい方は試合終了後に再現映像を御覧下さい。山下選手は動けませんね、動けば首の骨が折れます。……』



しかし、エヴァンジェリンは山下の覚悟を読み誤っていた。彼は試合前に中村へ告げた言葉の通り、文字通りの死ぬ気で最後の反撃に出ていたのであった。

ゴキリ、と。乾いた音が鳴り響いた。

山下が首を抱えたエヴァンジェリンの身体に手を回し、自分の首に掛かる負荷を一切気にせずにエヴァンジェリンを引き剥がした結果、山下の首の骨がへし折れた音だった。

「な……………あ、ああっ?!?!」

エヴァンジェリンは目を見開き、愕然と首がほぼ直角に折れ曲がった虚ろな瞳の山下を凝視する。その瞬間のエヴァンジェリンは茫然自失という言葉が相応しい様子で、山下の腕の中で何をすることも無く、ただ身体を小さく震わせた。

「つつ!!山ちゃん!!」

「おい山下あつ!」

「山下……………愚蠢コイチュンが!!」

「あの、馬鹿が…!!」

「っ、きやあああああああつ?!?!」

『……………救急車、早く!!試合終りよ……』

何処をどう見ても致命傷の山下に、中村達は絶叫し、戻り始めていた観客達の間から悲鳴と怒号が響き渡る。

しかし、山下の状態を見た朝倉が顔色を蒼白に変えながらもスタッフに指示を出し、試合を終わらせようとした、その時。

そのまま崩折れるかと思われた山下の身体が動作に一切の遅滞無く閃き、エヴァンジェリンの右腕を掴むと同時に脇固めの要領で腕をへし折りながら、エヴァンジェリンを闘技場の床に押し潰した。

「が、あああああつ?!?!」

顔面から床に叩き落とされたエヴァンジェリンは、しかし反撃に移る事も極めを外そうと藻掻く事もせず、ただ訳が解らないといった様子で首を捻じ曲げて山下を呆然と見上げる。首が横を向いたままの山下はそんな呆けるエヴァンジェリンの様子に一切構わず、へし折った右腕を左脚でフックして折れた状態のまま固定し、無事な右腕

を伸ばしてエヴァンジェリンの左腕を後ろ手に振り上げ、容赦無く関節を外す。同時に右脚を首に巻き付けながら跪く様な体勢で腰を降ろした山下は、ものの二秒も掛からずにエヴァンジェリンの動きを完全に封じた。

「ふ…：ヴツ!!ゴ、ガハツツ!!」

息を吐こうとして激しく咳き込み、赤黒い血塊を縦向きになった口から吐き出す山下。グラリと傾ぎ掛けた身体全体を半ば落ちる様に向け直した山下は、首と頭に淡く光る気を纏わせると同時に肩を怒らせて、これ以上頸部が曲がらない様に固定した。

「…あ…：つヴンツ…：…朝、倉…：カウント、頼む、よ…：…!!」  
「…：…つちよ、先輩!？」

そして山下から掛けられたまさかの言葉に、朝倉はマイクを通しての状況も忘れて叫び返す。

「そんなこと言ってる場合じゃ…：…！首、首の骨折れて「朝倉!!」…：つ!？」

狼狽する朝倉の言葉は、山下の一喝に遮られた。

「後生だ、頼むよ」

「つつ…：…!!この、馬鹿男は…：…：…：…つ!!!」

朝倉は目尻に浮かんだ涙を乱暴に拭い取り、マイクを通してあらん限りの大音量でカウントを開始した。

『ワーン!!、トウー!!』

『…：審判のカウントが開始されました。まさかの捨て身行為で首の骨を自らへし折ってまで山下選手がエヴァンジェリンを極め切りしました。このまま10カウントを向かえられれば山下選手は勝利します!』

喧囂の解説から告げられた、山下の文字通り決死の覚悟で勝機を引き寄せてみせた勝利への執念に、観客から幾重ものどよめきが上がった後、爆発した様な歓声と声援が山下に向けられた。

「山下あああつ!!死んでも放すなああああ!!」

「これ逃したら終わりだぞおおお!!」

「ちよつと、マジでヤバいつてアレ!？」

「五月蠅え黙ってる!!ここで止めてみる、俺がてめえをぶち殺すぞ!」

「おい、幾らなんでもよお!!」

「止めに入んな、止めたら俺等がぶち殺して、その後復活した山ちゃんがお前を殺すぞ」

そして、選手席では腰を上げかけた篠村達や杜崎に高畑、ネギ達の前に中村、豪徳寺、大豪院が立ち塞がって動きを封じていた。

「豪徳寺……」

「豪徳寺君!」

「口を利く気は無え、行きたきや俺を潰してから行け」

「大豪院さん!!」

「ポチの兄ちゃん!なんぼなんでもあれはヤバいわ!治療始めんと後遺症残るか、下手すりや死ぬで!」

「奴は覚悟の上だろう」

「あと、少しなんだ……!!」

中村は血の滲む拳を前に突き付け、泣きそうに歪んだ顔で、全体に言い放った。

「俺等の親友の本懐だ!!邪魔する奴は許さねえぞ!!!」

「……貴様、どういう原理で生きている?」

「小技と、後は根性、だねえ……!頸骨が完全に、折れる前に頸椎を外しちゃえば、神経系が断裂する迄の骨折には、行き難いものさ……ゲホッ!!……まあ確証は無かったし、普通に致命傷、だけどねえ……!!」

進むカウントに漸く我に返ったエヴァンジェリンは、射殺す様な苛烈な視線を無理矢理首を捻じ曲げて山下に向けるが、山下はどこ吹く風とばかりに殺気立ったそれを受け流し、顔色を徐々に蒼黒く染め始めながらも飄々と答える。

「馬鹿な!死ぬぞ山下あ!」

「言ってなかったかな?…死ぬ気で勝ちに来たんだよ、僕はあつ!!」

口端から、全身の裂傷や貫通痕から止めどなく血を零しながらも

山下は最後の力を振り絞って全身を気で強化し、改めてエヴァンジェリンの全身を極め直す。

『シックス!!』

「勝たせて貰う、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル!!」

「やら、せるかあああああああつっ!!!」

朝倉のカウントが進み、決意の宣言を告げた山下に対して、エヴァンジェリンは追い詰められた獣の咆哮の如く、絶叫にも似た声を上げた。

轟音が多重化して重なり、闘技場に氷の嵐が吹き荒れた。情け容赦の欠片も無く打ち付けられた氷片と爆風に、山下は血反吐を洩らす。腕を、脚を。放さない。

『ツ……エイト!!』

「あ”あああああああつっ!!!」

エヴァンジェリンの絶叫と共に、空に大小様々な鋭い刃を供えた美麗な氷の槍が出現あらわれる。質量と速度で敵を貫く魔法、  
氷ヤクラ槍ティオー弾グラン雨だ。  
「…殺すぞ」

「やるなら殺れよ」

「脅しと思うか？」

「そうまでして拒むなら、しょうがないさ。……貴女に殺されるなら、悪くは無いよ」

「……、馬鹿が」

『ナイン!!』

『上空に槍の群れが……!?!』

朝倉のカウントと喧囂の声が響くと同時に、氷の槍が驟雨の如く山下とエヴァンジェリンに降り注いだ。

『つつ……!!……テン!!エヴァンジェリン選手、10カウントダウンです!!』

『……これは……!』

爆発した様に木切れと粉塵が舞い上がる、最早残骸と表現するの

が相応しい闘技場。その中央では、朝倉によって10カウントが告げられたその瞬間まで、山下はエヴァンジェリンを押さえ込み続けていた。

そして、降り注いだ氷の槍達は全て、山下の全身を掠める様にしてギリギリの所でその身体を貫いてはいなかった。

「……僕の、勝ちだ……ね？エヴァさん………？」

「……………ああ、お前の勝ちだ、山下」

山下の問い掛けに、エヴァンジェリンは顔を伏せたまま静かにそう、肯定した。

「そ……っか……………ははっ！、やっ……た……………！！」

「山下!!」

エヴァンジェリンの言葉を聞き届けて破顔一笑した山下は、唐突に電池の切れた人形の如く崩折れ、跳ね起きたエヴァンジェリンに支えられた。

「審判!!私の敗けだ、そう宣言しておけ!!」

言うが早いか、足元の影に干渉して転移門ゲートを繋げたエヴァンジェリンは、山下を丁重に抱き抱えたまま沈み込んで消え去った。

『……………え、ええくと……………!!…ああもう!!まほら武道会第二試合は、山下選手の勝利です!!尚、山下選手は試合中に負った負傷が命に関わる重傷である為に、対戦者であるエヴァンジェリン選手が手づから医務室へ運び出しました!!』

ドヨドヨと急激な幕切れにどよめく観客達を纏めに掛かる朝倉を余所に、中村はネギ達の方を振り向くと逼迫した表情で言い放った。

「俺等も行かず!!」

「……………ドーダヨ、ゴ主人？」

「最悪だ……………」

医務室で辻を飛び越して刹那の隣に寝かせられた意識の無い山



下をサイドテーブルに立って除き込みながらチャチャゼロが発した問いに、エヴァンジェリンは片手で顔を覆い隠しながら呻く様に答えた。

「私の追撃で脊椎の神経系が損傷していたらしい。傷自体は魔法で癒せるが……」

「神経系は極めて繊細な器官だ。魔法で寸分の違い無く復元しても当人は動作に違和感を感じる事例が極めて多い」

エヴァンジェリンの言葉を部屋の隅で渋面を浮かべて仁王立ちしていた杜崎が引き継ぐ。

「ましてや山下の場合は脊椎だ。最悪傷を癒しても初めは真面に歩けるかどうかすら怪しいぞ」

「そんな……そんなのって無いですよ………！」

「……ネギ………」

「ネギ、せんせー……」

信じたくないとばかりに頭を振って眩く様に言葉を洩らすネギ。その悲痛な表情に、明日菜やのどこか掛ける言葉が見つからずに口篋もる。

「嘆くなネギ。今後どうなるにしろ、一番辛い思いをするのは山下だ」

「山下は覚悟の上でこうなったんだぜ。あの状況で、あの怪我で。……きっちり根性貫いて勝ってみせた山下の事を、嘆くよりは誇ってやれよ」

「そーそー、案外楽隠居してこっちの見た目ロリとイチャイチャして過ごすかもしれねんだからよ？ 周りで勝手にカワイソーな奴扱いですんのは止めようや」

しかし、ネギのみならず部屋に居る大半の人間が発している沈んだ暗い空気に対して中村達が待ったを掛けた。

「………こうして五体満足で成し遂げた私が言うのは何ですが、山下先輩には悔いは無いと思います………自分の想いを、押し通せましたから………」

「………せつちゃん………」

「……へし折れて絆された側としては複雑だけど、これで良かったんだ

と思うよ、俺は。山ちゃんは、勝てなかったら立ち直れなかったかもしれないから……」

「…皆さん……………」

「そうや、まだ何がどう決まった訳でも無いんやから勝手に暗くなるんはようないで、ネギー！」

辻と刹那の同意の言葉に、ネギは顔を上げ、小太郎が背中を叩きながら励ます。

「……よく言うぜ、親友がこんなになつて最もへこんでんのは自分達だろうによ……………」

「篠村、こればかりは私でも解るわ。無粋なことを言うのは止めなさい」

「そ、そうですよお兄様！」

「それで、どうするんだいエヴァア？」

中村達を半眼で見やりながらポツリと呟きを洩らした篠村が、高音と愛衣に総スカンを食らう中、高畑が穏やかな声音で黙りこくるエヴァンジェリンに尋ねた。

「……それを貴様に告げる義理があるのか、タカミチ？」

エヴァンジェリンはしかめ面で振り向き、冷たくそう返すが、高畑は怯まず言葉を続ける。

「いいや？ 僕等に首を突っ込む権限は無いだろうとは思うよ、馬に蹴られて死にたくは無いしね。……でも、山下君がこんなになつてまで身体を張って勝利を勝ち取ったんだ。せめて人生の先達としては、若人の頑張りが実を結んだのかどうかをはつきりさせてやりたいんだけどね？」

実際君はどうなんだい？と、高畑は問い掛ける。

「口先だけじゃ無く山下君は命を賭けて君に誠意を見せたと僕は思うよ。……君が引き摺っているしがらみを僕は知っているつもりだ、山下君に応えなかったとしても責めるつもりは無い。ただ、山下君にこれ以上は無いよ、エヴァ。今回の結果を踏まえて、答えを出してやってほしい」

真剣な表情でそう告げる高畑に、エヴァンジェリンは自ら俯いて

視線を切り、何やら思案を始めた。

「……オイゴラロリババア、まさかここまでやらせといてやつぱ断るとか巫山戯た事ぬかさねえだろうな？ああ!」

「凄むな阿呆。…とはいえ俺も気持ちは同じだぜ、こいつのこれで駄目だつてなら、あんたの眼鏡に叶う漢なんざこの星の何処にも居やしねえよ」

「……………私は……………」

中村と豪徳寺の促しに、エヴァンジェリンが何事かを告げようとしたその瞬間。

「マスター、失礼します」

軽いノックの後に試合中山下へのアシストを行った張本人、絡繰茶々丸が一礼と共にドアを開けて現れた。

「……茶々丸、お前山下に手を貸したな?」

「はい、マスター。真に勝手ながら、山下先輩をマスターの伴侶とする事がマスターの今後に対して最も有益であるとの判断により、山下先輩の支援を行いました。勝手な判断によりマスターをご不快に思わせたならば深く謝罪致します」

エヴァンジェリンの問いに淡々と答え、深々と頭を下げる茶々丸を、エヴァンジェリンは手で制して止めさせた。

「いや、いい。私は今回の一件に対してどういう指示もお前に下さなかつたからな。…それが、お前の判断ならば、それでいい……………」

「ありがとうございます、マスター。……時に、山下様は現在意識を失っているのでしょうか?」

茶々丸の問いに皆は首を傾げるが、物怖じしない古が真つ先に立ち直り、質問に答えた。

「そうアル。負傷による衰弱が激しいから体力回復の為に一旦眠らせてるらしいアルよ。…でもそれがどうしたアルか、茶々丸?」

「はい、こちらの手紙を提出すべきか否かの判断において山下先輩の意識の有無を確認する事が必須であつた為です。マスター」

茶々丸は懐から一通の便箋を取り出してエヴァンジェリンに

差し出した。

「山下様より、試合の結果自らが植物状態、昏睡状態に陥っていた場合にのみ、私からマスターへお渡しする様頼まりました」

「……………何?……………」

思わぬ展開にザワつく部屋の人間を余所に、エヴァンジェリンは躊躇いがちに手を彷徨させたが、やがて意を決して茶々丸から手紙を受け取り、開封する。

「何が書イテアンダ、ゴ主人?」

「ひつつくなバカ人形……………」

肩上に飛び付いて来るチャチャゼロを鬱陶し気に押し戻しながらエヴァンジェリンは手紙に目を通して。

「……………は、はは。はははははははははははははは!!?!?!?!」

「クケケケケケケケケケケケ!!?!?!?!」

始めに呆然と目を見開いたエヴァンジェリンは二度、三度と手紙の文章を見直し、やがてクツクツと笑声を洩らし始めると、たちまちの内に籐が外れた様な大笑いに変わった。隣ではチャチャゼロが同じく腹を抱えて笑っている。茶々丸はといえば、そんな一人と一体を無表情ながら何処か慈愛に満ちた雰囲気で見守っていた。

「……………おいエバーちゃんよ、バカ笑いでねえで俺らにも内容教えてくんね?山ちゃんアンタに何伝えたのよ?」

暫くその異様な風景を黙って見ていた一同だが、聴て室内の人間を代表する様に中村がエヴァンジェリンへと尋ね掛ける。

「くくくく……………!!?!?!?!ああ、大した事では無いさ。キザに永遠の愛を誓われただけの話だ」

「ソウイウコツタナ、ケケケケ…………ソレデ、ドウナンダゴ主人?」

「ふ……………そうだな……………」

エヴァンジェリンは何処か吹っ切れた様な明るい笑みを浮かべながら言い放った。

「そうだな、受け入れよう。元より私などには勿体無い話だったのだ。誰に無様と笑われようと、後に懦弱と蔑まれようと。受け入れてやりたい、いや、受け入れたい。…………場の勢いに流されている感があるの

は否定せんが、そんな気持ちだ。文字通り命を賭けて、此処まで一途に想われては確かに絆されもするものだなあ？」

エヴァンジェリンは晴れやかな笑顔のまま一同に向き直り、堂々と宣言した。

「お前達、私は山下 慶一を残りの永き化生の生への同伴として共に歩んで行く事を、今此処で誓おう。貴様等が生き証人だ、よく心に刻んでおけ」

「…………お、おう、そうかよ……………」

「…………まあ、おめでとうと言うべきか……………」

余りの豹変振りを見せた妙に機嫌の良さそうなエヴァンジェリンの得も知れぬ迫力に一同は気圧されながらも、反対意見を述べるものはいなかった。

「そうかそうか。…………時にお前達、すまんが少々席を外してくれんか？一つこの馬鹿の頑張りに報いてやりたいのだが、余人の目や耳にいれたくは無いのだよ」

皆の反応を機嫌良さ気に頷きなかわら見ていたエヴァンジェリンは、出し抜けにそんなことを言い出す。

「…………いや本格的にどうしたよアンタ？頭叩き付けられすぎて脳味噌どっかイカれたんじゃ無えの？」

「大体絶対安静の人間をそう簡単にほっぽり出していけるかよ」

「頼む」

流石に承諾しかねる内容の頼み事に難色を示した中村達だったが、エヴァンジェリンが小さくではあるが頭を下げて頼み込んで来たその姿に驚き、続く言葉を呑み込んだ。

「妙な真似すんなよロリババア、人生の墓場行きが決定したからって早速盛るんじゃ無えぞ」

「五月蠅いぞ馬鹿が、さっさと失せろ」

結局エヴァンジェリンのらしくもない姿勢に押された形で、一同は短い間だけエヴァンジェリンと山下を二人きりにして医務室内に残すことにした。態々寝ていた辻と刹那迄を車椅子で連れ出す念

の入り様である。

「なんなんだあの女は？」

「感謝の言葉でも告げたいけど照れ臭いんじゃないの？」

「キスの一つでもするとか？成る程見られたくはないだろうけどね」

医務室から少し離れた廊下で屯しながら、門番の様に扉の前で控えるチャチャゼロと茶々丸を見やって語り合う一同。

「……でも、何だかんだでエヴァちゃん山下先輩を受け入れたんでしょ？それは良かったじゃない」

「せやなく、山下先輩あないになるまで頑張ったんやもん、報われて良かったわあ〜」

明日菜と木乃香はまるで我が事のように嬉し気にそう語り合う。

「何だかんだでゴネると思ってたんだけどなあ俺あ。往生際悪そうだしよ、あのババア」

「俺はそうは思わねえぜ？約束はちゃんと守りそうな奴だろ、敗けた以上は頷くと俺は思ってたぜ」

「……まあ何にしろ山下の頑張りが無駄にならずに幸いだ」

「……しかし今更だが俺達といい山下達といい、何で殺し合い地味な決闘して事の如何を決めてるんだろうな……？」

「……皆、不器用なんですよ辻部ちよ、…いえ、はじめ「さん」

「ビュービュー、お熱いこって」

そうしている内に医務室の扉が開き、中からエヴァンジェリンが顔を出した。

「もういいぞ貴様等、入って来い。私は言いたい事は全て告げたからな、無茶に無理を重ねたあの馬鹿に文句の言いたい奴は言つてやれ。今なら半ば寝ぼけ頭だ、反論も出来まいよ」

「いやだから何でてめえはんな偉そうな……あ？今なんつった？」

元の威丈高な様子に戻っているエヴァンジェリンに文句を返そうとした中村は、その口振りに思わず台詞を中断して尋ね返す。

「だから起きてると言ったのだ、山下がな」

その言葉に一瞬場を沈黙が包み込み、次の瞬間雪崩れ込む様にして一同は医務室に入り込んだ。

「……………あ……………」

そこには何処か呆けた表情を浮かべながらも、二本の脚でしっかりと立つ山下の姿があった。

「うおお起きてる所か立ってんじやん!？」

「おいコラ山下あ!!?心配掛けやがってこの野郎!!?」

「待て、それより貴様絶対安静だろうが!何を動き回っている寝ている!!?」

「あゝ、えつと……………」

怒濤の勢いで矢継ぎ早に言葉を浴びせかけられた山下は、罰の悪そうな顔になり、口籠もりながらも何事かを言いかけたその時。

「待て、そもそも山下、お前はなぜ動いている?治療魔法師が治療したのは頸椎の骨折と身体各所の傷だけだ。慎重に時間を掛けて修復する必要がある神経系統はまだ繋がってもない筈だが?」

杜崎の発したその問い掛けに、はたと周りの動きが止まる。そもそも意識があること自体今の山下にはおかしなことなのである。

山下は杜崎の問いを受けていよいよ決まり悪げな表情になったが、ややあつて意を決した様に片手を上げて言葉を紡ぎ始めた。

「えゝ、皆さん、先ずは心配掛けて申し訳ありませんでした。念願叶ってエヴァさんという仲になれた山下です。……………言い難いのですが、一つ重大な事後承諾、というか事後報告があります」

山下は落ち着いて聞いてくれ、と前置きしてから上げていた片手の指を口端に突っ込み、横に引っ張った。

其処には並んだ綺麗な白い歯の中に、一際目立つ長い長い八重歯が見て取れた。

「……………んあ?」

「……………おい……………」

「……………やはりか、この馬鹿は……………!!?」

各々がその存在に気付き声を上げる中、山下は口から手を外して、茶目つ気を交えながら照れ臭そうに言い放った。

「僕、吸血鬼になりました」

16話 まほら武道会本選第3試合 中村VS楓  
(その1)

『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル様

若葉青葉の候、試合の終わった現在、どのようなお気持ちでいらつしやるでしょうか？

……と、堅苦しい挨拶はここまでにしてエヴァさん、貴女がこうしてこの手紙を読んでいるという事は、僕は死に掛けているか再起不能な状態か、まあ碌でもない状態でベッドに横たわってでもいるかと思われます。本当はこんな手紙でなく自分の口で伝えたかった事ではあるのですが、貴女に勝たねば吐く資格の無い言葉であると僕は思うが故に、この手紙を茶々丸ちゃんに託しました。

まず僕がこの様な有様になった事に関してはどうか責任を感じる事などありませんよう。僕は自分の意志で命を張り、代償を支払って勝負に挑みました。貴女がこの勝負に人生を賭けてくれていた様に、僕も人生を賭けて勝ちに行つたのです。もしこの勝負の後僕の身体に障害が残るか、あるいはもし死んでしまったのだとしても、その全責任は僕にあります。貴女に責任を被せる事も恨みに思うこともしませんし、周りにも何も言わせません。

そしてエヴァさん。こうして貴女が手紙を読んでいるということ、僕は貴女に勝つたということ、単刀直入に問いますが、貴女は僕を受け入れてくれるでしょうか？

貴女が未だに吹っ切れていないのは理解していますし、またそれを情けないとか見苦しいなどと思いはしません。

ただ僕は待たせはしませんし、貴女を置いて行きもしません。

…前の男を下げ連ねて比較する様な言い方は少し卑怯かもしれないですが、僕の偽らざる本心です。

僕は久遠の時を生きる貴女に、生涯寄り添って生きていきたいと考えています。あの時の言葉は、今でも偽らざる本心です。

…以上が、僕が貴女に告げられる言葉の全てです。言葉に出来ない



想いの全ては、きつと試合にて僕は貴女に伝えられていると僕は僕を信じます。

エヴァさん、貴女が決めて下さい。僕を受け入れるか、入れないか。もし受け入れてくれなかったとしても、僕は貴女を恨みません。ナギ・スプリングフィールドに一人の男として負けたのだと、無念ですがそう受け入れて僕は生きて行きます故。

願わくば、目覚めた時に貴女が隣に居る事を望みます。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

僕は貴女を愛しています。

時節柄、御自愛專一にてお願い申し上げます。

山下 慶一』

く山下 慶一がエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルへ宛てた恋文く

「くおんのブアカタレがあああああつ!!?!?!?!?!」

「ブハアツ!」

中村が助走を付けた全力疾走の後に繰り出したアックスボンバーが豪徳寺に羽交い締めにした山下の顔を直撃した。

「よし、代われ中村。次は俺がウエスタン・ラリアートをくれてやる」

「どうせならク○ス・ボンバーにしようぜ俺押さえてるだけだしよ」

「採用ー」

「いやちよつと待った待って!?!事前は何の相談もしなかったのは悪かったけど幾ら何でも復活したての僕にこの所業は無くない!?!」

ジツタバツタと暴れながら山下が悲痛な声で抗議するが、バカレンジャー一同はギロリと殺気立った視線を返して一斉に怒りの声を上げる。

「五月蠅えボケナスがもう不死身になったんだからサンドバッグと化そうが屁でもねえだろがあ!!?!」

「死に掛けたと思ったら勝手に人間辞めやがっててめえ一人で突っ

走ってんじゃねえよ一言相談しやがれオラア!!?」

「貴様が決めた事ならば無碍に反対などせんわ俺達は!!?どれだけの付き合いだと思ってる水臭いのだ愚蠢<sup>ユイチュン</sup>が!!?」

「ギヤアアアアアツ!!」

ガツシャーン!!?と大豪院&豪徳寺による覆面狩りダブルラリアートを喰らって断末魔の声を上げる山下。

「ちよつ……!?!本気でヤバいマジでマジで!!?つ、辻!!?辻助けてちよつと不死者になったのにいきなり殺される!?!」

山下は震える手を車椅子に座ったまま苦笑を浮かべて一連の光景を見ていた辻に伸ばすが、辻はヒラヒラと手を横に振って素気無く助けを求める山下を見捨てに掛かり、

「悪い山ちゃん。俺はお前をどうこう言える立場じゃ無いし気持ちは解るから助けてやりたいとは思うんだが……」

チラリと殺意の波動を浮かべる他三人を見やってから爽やかな笑顔と共に言い放った。

「うん、止めたら俺が何されるかわからないから無理だ。耐えてくれ山ちゃん」

「くっそおおおおおおお!!?」

「うーしいくぞ次は<sup>ダットロー デス</sup>3 <sup>ドロップ</sup>Dだ、コーナーの代わりに豪徳寺な」

「うし」

「行くぞ」

憤怒と絶望の声を上げる山下を中村が抱え上げ、下手をしなくともマット上以外で決めれば人が死ぬ殺陣技の構えに入った。

「イーノカヨゴ主人、旦那ガ死ヌゼ?」

「旦那は止める旦那は、小っ恥ずかしい」

「マスター、セカンドマスターが危険です」

「茶々丸……いや、まあそうするつもりだが……」

「うわーデレた。あの闇<sup>ダーク</sup>の福音<sup>エヴァンジェル</sup>がデレたよマジで。…ひよつとしなくとも歴史的瞬間なんじゃねえのこれ?」

「離しなさい篠村、愛衣!如何に親しい間柄でも人から夜<sup>ミディア</sup>の眷族へ成

り変わる等魔法使いの端くれとして放っておける訳が無いでしょう!? 然るべき所へ報告し、然るべき処罰を受けるべきなのよ!!?」

「そ、それじゃ山下先輩処刑されちゃいますよ!? 見過ごせないのは解りますけどもう少し落ち着いてから……!」

「いや、この一件は学園上層部に報告する。最早個人の間で済ませて良い話では無いからな」

そして廊下の傍では山下を拘束せんと突っ込んで行こうとする高音を篠村が羽交い締めにし、正面から愛衣が腰の辺りに抱き着いて阻止している。魔法世界に於いて吸血鬼とは名目上巫人の枠カテゴリーに収まるが、他者の血を吸い害を為すとされる性質上、実際の扱いは殆ど怪物、魔獣モンスターのの類と変わりない。立派な魔法組織である関東魔法協会の総本山たる麻帆良学園都市の魔法使い達に話が一気に出回ってしまえば最悪私刑が執行される可能性も無いではない為、篠村や愛衣が高音に待ったを掛けるのもある種当然ではある。

しかし、この所見る機会の増えた顰めつ面を更に歪めた杜崎は、事態を余す所無く上に伝える旨を宣言した。

「……杜崎先生、立場上その判断は当然の事とは私も思いますが……」

「皆まで言うな桜咲。俺とてその大阿呆には拳骨をダース単位でくれてやりたいともこの世から消えて欲しい訳では無い。しかしこんなものは隠し通そうとして隠し通せる訳も無いのだ」

「そういうことだね」

車椅子から上体を僅かに乗り出して何事かを発言しようとする刹那を杜崎が遮り、苦笑いを浮かべながら高畑が続く。

「エヴァ……いや、エヴァンジェリンは良くも悪くも半ば伝説と化している吸血鬼なんだ。魔法組織魔の元へ着いて十五年、賞金も取消されたとはいえ、見ている人達はまだまだ彼女に注目している。…そんな彼女が賞金首時代にも行わなかった眷族作りを行ったんだ、麻帆良に留まらず本国にまでこの話は報告せざるを得ないだろうね……」

「た、タカミチ……それじゃ山下さんは……!」

話を聞いていたネギが顔を青褪めさせながらその先を尋ねるが、話

の当人である山下は豪徳寺にギロチンチョークを喰らって青白い顔をしながらも笑って口を挟んだ。

「もし処刑だの禁固刑だの話が物騒になったらエヴァさんと逃げるよ僕は。エヴァさんもそれを覚悟で僕を受け入れてくれたんでしょ？」  
「……そ「そんな真似はさせるか、この女には暴力沙汰以外の方法でたつぷり灸を据えてやる」……！」

言葉を口にした直後に目を吊り上げた中村も加わってのツープラトンブレインバスターを喰らって轟音と共に沈黙した山下にエヴァンジェリンが一瞬躊躇った後に開いた口を、素早く言葉を紡いだ杜崎が遮った。

「いい歳をして面倒臭い恋慕の情拗らせて若者に無茶をさせた責任の一端は貴様にあるぞ吸血鬼。都合が悪くなつたから逃げ出すなど今更此方が許すと思うな。先ずは貴様は学園長の元で絞られて来るがいい、我々はどれほど手間が掛かっても貴様には諸々の騒ぎの尻拭いを過激で無い普通のやり方でさせてみせる。……日陰者だ悪者だと開き直る様な真つ当でない道連れ合いに歩ませるなよ、依然としてそこ山下の大馬鹿慶一には未来がある。此奴と結ばれた以上は貴様にも色々色々台無しな真似は上に取らせん、だから貴様も偶には踏ん張って堪えてみせる……当然貴様にも処罰は下るぞ山下あ!!? 残りの学祭期間中どころか暫くは説教と調書と反省文と労働で日々が埋まると思っておけ!!?!!?」

「……ああ、解つたよゴリラ教師」

「……承知しました……」

エヴァンジェリンは言葉を受けて一度目を閉じ、神妙な顔で頷いた。山下もまた、一旦拘束を解いた中村の間から身体を起こして、深く頭を下げる。

「……じゃあ僕達は一度報告と今後の対応の為に学園長の所へ行つて来るよ。エヴァンジェリン、一緒に来てもらうよ。そして山下君、こうなつた以上は君も試合を棄権して一緒に来てもらう。何せ別の生き物に変わったばかりだ、身体に異常が無いかも検査しなければならぬいからね」

「解っている、何処へでも連れて行け。チャチャゼロ、茶々丸。供をしろ」

「アイヨゴ主人」

「かしこまりました」

エヴァンジェリンは抵抗すること無く高畑の言葉に応じると、山下の隣に立ち、そつと手を取りつつ苦笑と共に促した。

「付き合って貰うぞ慶一？何せ永い人生だ」

「勿論だよエヴァさん。何処までもついていくさ。……皆、悪いけど……」

「気にすんな、あんな優男は俺だけで充分だ」

中村達の方を振り向いて頭を下げる山下に、クウネルの初戦に於ける対戦相手の豪徳寺が笑って頷いた。

「正直まだまだ殴り足りねえがまあこつてり絞られてくるみてえだし、今の所はこんぐらいで勘弁してやらあ」

「学園側がどうにもならず逃げる羽目になったならば顔を出せ。一発殴った上で逃亡補助に加担してやる。ほとぼりが冷めたらまた逢いに来るがいい」

「……まああれだ。お互い急に身を固める事になったけど、頑張つていこう山ちゃん。ネギ君達の面倒と大会は任せてくれよ」

笑つて送り出すバカレンジャー達に続いて3ーA女子達や篠村達も声を掛け、すらむい達の転移ゲートによって山下とエヴァンジェリン、付き添い兼連行員の杜崎、高畑は学園長室へと送られていった。

「……今度は、今度こそ血生臭い事にはなんないわよね？」

不安を隠しきれない様子で明日菜が観客席にて独り言の様にそう洩らした。

『さあああああつ!!?第一試合、第二試合と、凄惨という言葉が生温い様な凄まじい試合が行われ、選手は勿論闘技場に観客席から観客の皆様になで被害が行くような危険度MAXな試合運びでございましてが!!?第三試合からはどのような試合となっていくのか、正直な話もう闘技場ぶつ壊すのもお互い死に掛けるのも無差別広範囲攻撃も

無しな方向でお願いします選手の二人いいいいっ!？」

あれよあれよという間に麻帆良建築部の残像が見える様な高速での修復作業により十五分弱で元通りとなった闘技場で朝倉が間もなく入場となる中村、楓に向けて大音量で叫び、何処か悲痛なものが籠ったその言葉に散々危ない目に遭った観客達は懲りずに湧いている。

そんな中登場する大会選手の殆どが知り合いと言つていい一行はとても朝倉の様子を他人事として笑えはしなかった。

「……大丈夫や明日菜。中村先輩のこと楓ちゃんが気になつとる言うてもあれはまだバトルジャンキーなそれ多分に含んでる思うし……」

「少なくとも殺し合いめいた真似にはならない、かと……」

「そ、そうだよねゆえ、毎回毎回、あんな事にはならない、よね……?」

「……そうねえ、流石にあんな試合が続いたら見ている方も心臓が保たないもの……」

明日菜の呟きに木乃香や夕映、のどかに千鶴も同意するが、その顔には一抹どころでは無い不安が見て取れる。二度ある事は三度あるでは無いが、赤の他人同士が争うので無い以上人と人との関係は何処でどう振じられるか解りはしないのである。

ましてや次の選手はあの中村であった。去り際に『これ以上問題を起こしたら冗談抜きで磨り潰すぞ』と般若と仁王が融合した様な顔の杜崎に脅されて、『大丈夫だ、問題無い』とドヤ顔で返していた中村なのである。人と成りをよく知る彼女らが不安に思うのも致し方ないことであった。

「ソ、まあ大丈夫じゃないアルか?中村は馬鹿だけど残忍でも愉快犯でも無いアルよ。普通に全力で、真つ当に勝ちに行くだけだと思うアル」

「そういうこつた。長瀬の方も人が出来てる、一線を越しちまう様な真似はしないでろうぜ」

「漸く真面に観戦が出来るという事だ。既に峠は越えている、俺達は

また何時の間にか消えているあの怪しげな男の撃破と、個々の目標達成だけを考えていれば良いのだ」

不穏な空気を払拭しようとする古やバカレンジャー達は言葉を紡ぐ。「仮に何か起こったとしても俺はもう知らねえからな、人の気もしらねえで戦闘狂共が勝手に殺し合っつてやがれ、ケツ！」

「お、お兄様……………」

「止めようとする度に邪魔をされて心配を無碍にされたから拗ねているのよ、そんな精神的幼児は放っておきなさい、愛衣」

『ネギ先生、中村さんと楓さんはどっちが強いんですか?』

「え。そ、そうですね……………」

「まあどっちが有利で断言出来る程腕に差は無い、っちゆうことや相坂の姉ちゃん。そもそも戦闘のタイプが全然違う二人やからな、予想は見当もつかんのが正直な話や……………」

「まあ、あの人外地味た旦那方の強さを良く知ってる身としては忍者の姉さんがやや分が悪いんじゃないかねえかと俺たちは見てるけどな」

各々が予想を語り合う中、いよいよ選手入場の時刻となり、先ずはゆつたりとした足取りで一つの影が闘技場へと入って来る。

『それでは皆様、大変長らくお待たせしました、いよいよ選手入場となります!!?先ずは麻帆良の類稀なる……………って何だあああああつ?!?』

朝倉が紹介の途中で驚愕の悲鳴を上げた理由は入って来た人物?の姿形にあった。

「皆さんこんにちわ、お加減如何ですか?」

柔らかい声音でそう観客達へ呼び掛けるのは、白い風船の様な丸々とした柔らかそうなボディを持つ、洋梨型のロボットだった。某天才科学者の弟を持つ兄が作ったケア・ロボットののような外見を持つ風船ロボットだったが、球形の頭部から生えるオレンジ色の鶏冠めいた髪の毛が頗る違和感を見る者に叩き付けて来る。

「私の名前は……………ナカマックス!貴方達の心と身体を……………ケアしない!!?野郎が怪我した?唾付けてすっこんでろ!心に傷?根性でどうにかせい!!?女性の方はこのナカマックスがじっくりねっとり入念なケアをー」

最後まで言わずに観客席から無数の投擲物がナカマックス  
?に降り注いだ。

「巫山戯んな中村このヤロー!!?」「黙れ変態が、消えろ!!?」「大体パ  
クリじゃねえかその格好ー!!?」「ここまでシリアスかつ緊迫したい  
雰囲気だったのにぶち壊しにしてんじやねえええ!!?」

「皆さん、危険です。物を投げないでください。物を投げないでくだ  
さい。物を………喧しいわ空気が殺伐としてっから和ませてやろう  
としたんだろがボケ共があああああつ!!?」

裂空掌ー!!?とナカマックス改め着ぐるみ着用の中村が観  
客席の四方八方へと気弾を飛ばし、観客達が逃げ惑う。朝倉はそんな  
光景を静かな瞳で観察していたが、臆てガツクリと脱力して力無くマ  
イクに声を通す。

『……あー色々キャラが濃過ぎる人格破綻者なんで気合入れて紹介文  
作ってましたが……中村 達也選手、変態で大の付く馬鹿です!!?こ  
の一言で説明 は十二分と私考えを改めました!!?』

「誰が馬鹿で変態じゃあ朝倉あああああつ!」

「「お前だよ!!?!!?」」

朝倉はおろか、観客席と選手席の辻達までもが声を揃えて断言  
した。

『……対するは長瀬 楓選手!!?中学三年生という華の乙女な年頃で  
ありながらその類稀なる体術とまるで忍者を思わせる摩訶不思議な  
力によって並み居る猛者を打ち倒して本選出場を果たしたその実力  
は本物です!!?馬鹿VS忍者!どの様な闘い振りを我々に見せてく  
れるのかあああああつ!』

「だから俺のキャッチフレーズを馬鹿で固定すんなやパラッチ風情  
が!天才空手家とか超絶美形闘士とかもつと色々相応しいのがあん  
じやるがい!」

「朝倉殿、拙者忍者では無いでござるよ、ニンニン☒」

「……キャッチフレーズ通りの二人ねえ………」



先程迄の鬼気迫る握力を有していた面々が醸し出してたそれに比べてあまりにも気が抜けるその情景を見やりながら、明日菜が力無く洩らした溜息混じりの言葉に一同が無言で首肯する。

「……まあ二人共真剣に勝負をするのでしようから気が抜ける、などという感想は失礼でしょうが……先程の二試合に比べれば心に余裕を持って見ていられそうですね」

冷やかな視線を着ぐるみの頭から飛び出て綺麗な三回転半のトリプルアクセルを決めつつ闘技場にドヤ顔で降り立った中村へ向けながらも、表情とは裏腹に少し安心したような口調で夕映がそう口にする。

『中村さん、格好良い所を見せてくれるらしいですよ夕映さん！楽しんでですね!!?』

「あの人のセンスからして格好良い光景が本当に見られるかどうかには疑問を覚えますが……一体何を見せてくれるのか、という怖いもの見たさのような気持ちはありますね……」

「そうだそうだ、そんなぐらいの気楽な気持ちで見てりや良いんだよ」  
いかにもわかりやすく全身で私ワクワクしています、という身振り素振りを見せながら話し掛けて来るさよに対しての夕映の返答に豪徳寺がカラカラと笑いながら同意する。

「そうだな、勝った負けたで当人達の人生がどうにかなる訳でも無い。ここから先は心情的に気楽なものだ」

「……まあお遊びじゃあ無えのは百も承知だけどよ。ならここからは本当に命の危険とかそういうのを心配せずにただ観戦してりやいってことだな?」

未だにブスツとした表情を浮かべていた篠村が大豪院の言葉に少し臍を緩めてそう尋ねる。それに対して豪徳寺と大豪院は笑顔で頷き、声を揃えてそう言い放ったのだった。

「ああその通りだ篠村、貴様にも随分と心労を掛けたな」

「もう大丈夫だ、安心して見てろ。ここから始まるのは気楽な〜」

「普通の殺し合いに過ぎない（ねえ）からな」

「「「はっ……………」」」

「……さつて、随分と再戦が遅れちゃったなあ楓ちゃんよ?」

何時もの空手着姿となった中村がゴキリバキリと手足を鳴らしながら、不敵な笑みと共に楓へ告げる。

「修学旅行のホテルの一件以来…でござるか。それほど昔のことではないと言うのに、確かに久しぶりに感じるでござるなあ」

対する楓は彼女にとっての正装である忍者装束に身を包み、飄々とした普段の笑みで中村の重圧を受け流していた。

そんな楓を見つめる中村はふつと威圧感のある笑みを抑え、表情を若干柔らかいものに変えると再び楓に話し掛ける。

「楓ちゃんよ、一応確認しときてえが何処までやる?」

一聞しただけでは謎めいて聞こえる中村のその問いに、しかし楓は若干意外そうに目を見開くと直ぐさま言葉を返す。

「これは異な事を問うでござるな、中村殿? 全力で闘り合う以外に答えがあるのでござるか?」

楓の答えに、中村は破顔する。

「はっはー、だよなあ!!? ……楓ちゃんならそう言ってくれると思つてたぜ」

「あまり見くびらないでほしいでござるな中村殿。拙者一人の武人として此処に立っている以上、情け容赦も遠慮も無用でござる」

「ん、OK OK 悪かった。…んじや明らかに戦闘不能っぽいなら止めは無しで」

「ああ、それ位が丁度良いでござるな」

はっはっはー! と快活に物騒なことを宣っている中村と楓に、再び嫌な予感がこみ上げてきたらしい朝倉が恐る恐る話し掛ける。

「……ねえ二人共さ、前の辻先輩桜咲や山下先輩みたいな無茶しないわよね? いくらなんでもあんたたちは大丈夫よね?」

朝倉の言葉に顔を見合わせた二人は、直後に爽やかな笑みを浮かべて朝倉の心配を一蹴する。

「H A H A H A 安心せいや朝倉！いくら何でもあそこ迄の無茶はしねえよ!!?。」

「然り。あくまでこれは健全な決闘である故、心配は無用でござるよ」「本っ当でしようね!?もう爆発も烈断も私は御免だからね!!?。」

朝倉は目を吊り上げて念を押した後仕事モードに入り、マイクで観客席へと呼び掛ける。

『それでは皆様！間も無く第三試合、中村 達也VS長瀬 楓の試合を開始致します!!?。』

「心配すんな、朝倉」

「で、ござるな、中村殿。何せ……」

「最悪不幸にも打ち所が悪ければ死人が出る、っただけの話だしな」

「殺す気は無くとも殺る気でいかねば真剣勝負など茶番に成り下がるでござるからなあ」

クツクツと笑い合った二人は構えを取り、試合開始位置にて向かい合う。

『試合、開始イツ!!?!!?。』

「行くでござるよ、中村殿!!?。」

「来いやあ楓ちゃん!!?。」

試合開始直後に音も無く四人に分裂した楓達と、矢の様な速度で踏み込んだ中村が正面からぶつかり合った。

17話 まほら武道会本選第3試合 中村VS楓  
(その2)

「ねー母さん、クソ親父のこと教えてー?」

かつて幼い日の中村は、己の母親にそう尋ねた。

「駄目よ達也、クソなんて汚い言葉を使ったら。貴方が私の……うーん、好きな人だった男かしら?……を嫌いなのは解るけれど、言葉遣いはしつかりなさい」

「はい母さん、気を付けます。……でも親父はクソでいいんだ母さん。こんな美人で優しい母さん放つといてどっかに行つちまつてる時点でそんなやつはクソ野郎なんだから!」

「あら、嬉しい事言ってくれるわね達也は。……でもね、あの人が今お母さんの側にいないのは、お母さんも少なからず悪いのよ?黙って出て行つちやつたからね、私」

その時に母が浮かべた悲し気な笑みを、中村は今でもよく覚えている。

「お母さんの好きだった人はね、結構凄い人だったの。頭の方がはつきり言つて馬鹿だったんだらうけど、ものすごく腕っ節が強くてね。……きつとあつちの世界でも、まともに喧嘩をして勝てる人なんて何人もいないんじゃないかしら?……そんなに強いのに、それで何かを為そうとかはあんまり考えていない人だった。きつと自由が好きな人だったのね。あの人が私と一緒に子供を育てて、のんびり生きて行く……なんて未来が私には見えなかつたから。……逃げ出しちゃつたの、面と向かつてはつきり断られるのが怖くて」

達也にはまだ難しい話かしら?と母は何故か楽しそうに笑っていた事も、中村は印象に残っていた。

「達也はなんとなくあの人に似ているわ。女の子に対して軽すぎる所は似なくてもいいんだけど、きつと達也が望むなら凄く強くなれる。お母さんだつて結構強かつたしね。」

……だから達也、あなたがそれを続けたいと思うなら、周りにどう言

われたって貫き通しなさい。お母さんだけは何時だって貴方を応援してあげるから。…でも辛くなつたんだったら、投げ出しちゃってもいいのよ？お母さんはあなたに、生きたいように生きて欲しいわ。あの人がそうだったように、そして私はそうして自由に生きる人が好きだもの」

だから頑張りたいことを頑張って生きていきなさい。と、中村の頭を優しく撫でながらかつて母はそう告げたのだった。

「母さん母さん、クソ親父ってどれぐらい強かつたんだ？」

「うーんそうねえ……ただのパンチ一発ででっかいドラゴンを倒せるぐらいかしら？」

「くっそ悔しいけど凄え!!」

「……ってな会話したのを覚えてんだよ。今にして思えば俺の母さん魔法のこと知ってるっぽいわ、ドラゴンとか言ってたし」

「お前のお母さん何者だよ!？」

「いやそれより親父が何者だよ!？」

〜とある日の雑談にて、中村の回想語り〜

「裂空、掌波ああっ!!」

四方から迫る楓達を纏めて抱きしめる様に中村は左右に広げた両腕を挟み込み、腕から腕を繋ぐ気の波を撃ち出した。

四人の楓は人の背丈を遥かに超える小規模な津波の如き莫大な気に為す術も無く飲み込まれ――

『か、開幕早々に楓選手が光の波に……!?!』

――朝倉が実況の台詞を言い終わる間も無しに、ぐりんと音が聞こえてきそうな程の高速で後ろを振り向いた中村が、その勢いをそのままに利用した裏拳を振り抜く。その一撃を身体ごと沈める様にし

て回避した楓は、折り畳んだ身体全体を伸び上がらせて中村の顎部へ掌底アツパーを繰り出す。中村はそれを仰け反って紙一重で躲し様、杭をぶち込んだかの様な前蹴りを打ち放つが楓は伸び上がった勢いのまま空へと跳躍、更に空中を踏み締めて高速の二段ジャンプを行い、中村の反撃を回避した。

『…!? やられたかと思われた楓選手が中村選手の後方から仕掛けて…!』

空中へと舞い上がった楓はその場で再び四人に分裂、各々が逆さに空を踏み締め中村へと時間差を置いて落ちて行く。

「ツ賢しんだよオラア!!」

中村は颯風を纏う凄まじい勢いの上段回し蹴りを初めに落ちて来た楓に見舞い、その楓を胴体から真つ二つに蹴り裂いた。尚威力を失わない蹴り足は二番目の楓の顔面をそのまま捉え、それを爆砕させる。

「残念、外れでござる…な!!」

残り二人の楓がそれぞれ常人でも視認出来る程に巨大で密度の濃い気が充満した拳を無防備な中村に叩き付け、それぞれを両手で防禦た中村の軸足を衝撃によって闘技場にめり込ませる。

「…つのヤロー!」

強烈な一撃に膝を折りかけた中村だったが、無理矢理な力技で二人の楓を払い除けつつ引き戻した蹴り足で闘技場の床を蹴り砕きながら跳躍。槍の如き飛翔脚によって一人の楓を貫きながら両手に作り出していた気弾を最後の一人へ打ち放った。

「裂空双掌っ!!」

「遅い(び)ぎん(ぶ)よ!!」

高速で己の顔面と胴体目掛けて迫り来る気弾を前に、しかし楓は笑みさえ浮かべながら両足で空中を踏み締め、綺麗な月面宙返りで完全に回避した。

貫いた分身体を掻き消した中村と気弾をスカした楓がほぼ同時に闘技場へと着地して構えを取る。漸く動きが止まった二人に対して、息も吐かせぬ激しい攻防に固唾を飲んで試合に見入っていた観客

達から一斉に歓声が上がった。

『とても実況にならないハイスピードな攻防！今の所一進一退な互角の熱い勝負が繰り広げられています!!』

『まだ始まったばかりですから軽々な判断は出来ませんが、未だ攻撃を受けていない長瀬選手がやや優勢に思えますね。動きのキレと速度に於いては中村選手よりも上のようです』

「うわー……………」

「ガチバトルという奴ですね……………」

明日菜が何処か引いた様子で呻く横で夕映が額に一筋汗を垂らしながらそう呟いた。

「まあでもあれだ、真つ当なという言い方もこの場合おかしい気がするが、レベルが高い他は普通の試合だな」

「か、影分身ってあんなに速く、見分けが付かない程密度の高い分身を複数展開出来るんですね……………」

「…自重云々の話はこの際置いておくとして、本当に何故こんな実力を持った人間が普通に学業を営んでいるのかしら……………」

「でも楓ちゃん本当に強いんやなー、忍者てあんまり直接勝負とかしたりするイメージ無いから意外やわー」

「楓は技術的な面を現状出来る限りに完成させた一流の使い手アル。馬力で負けてても攻撃を当てるのはデスメガレベルでも一苦労アルよ」

「中村の兄ちゃんもタフやからあん位じゃへこたれんにしても、分が悪いは事実かもしれへんな……………」

各々が戦況を何とはなしに分析、解説する中、千鶴はやんちゃな利かん坊でも見るような目で中村と楓を見やりながら傍らの豪徳寺に話し掛ける。

「何だか楽しそうですね。中村先輩も、楓さんも」

「元来俺等はあるべきだと思ってるぜ那波。乱暴者やら社会不適合者の誇りを受けようが、武道家は闘いを楽しめなきゃいけねえ」

「比武を楽しめるのは良い事だ。が、懸念すべきはあの馬鹿がはっ

ちやけ過ぎる事だな。合意の上とはいえ、折角阿呆な友人達が無事に済む筈の無い修羅場をまだ取り返しが付く範囲で無事に済ませられたのだ、言ってしまうえば単なる格闘大会で今更死体を拝みたくは無いぞ」

何処か浮かれた様子で機嫌良く返事をする豪徳寺とは裏腹に、渋い表情の大豪院はそんな懸念を口にした。

『…えーと、あのー大豪院、さん……?』

「ポチと呼ばなければ俺のことは好きに呼ぶがいい相坂後輩。……まあ後輩とは此方こそ相応しくない呼称かもしれんがな。それで、何だ？」

基本的に男性陣の中で中村以外と積極的に会話をしてはいない為は何処か及び腰でさよが大豪院へ呼び掛け、この男からすれば最大限愛想の良い対応で大豪院が応じる。

『あの…今の豪院さんの言葉を聞いてて、中村さんが勝つのは当たり前みたいな言い方に私聞こえてしまって……勿論、中村さんが強いのは普段の練習とかを見えますから凄く良く解るんですけど、さっきの解説の人や皆さんは楓さんの方が勝負で有利なんじゃないかって話をしてまして……えつとあの、大豪院さんは何で違う意見なのかなって思いました……あ、あのすみません、変な事聞いて……』

「言わんとする事は解った。話を聞いていれば当然浮かんでくる疑問だろう、謝ることは無いぞ相坂後輩」

的外れな言葉を口にしてしまったかと頭を下げるさよを遮り、嵐の如き乱打で軽妙な動きにより身を躲す楓を攻める中村を横目に見つつ、大豪院は答える。

「別段俺は必ず中村の馬鹿が勝利すると確信している訳では無い。が、どちらが勝つのかと問われればやはり俺は中村が勝つ確率が高いだろうと答えるな。豪徳寺、同じ意見だろう?」

「まあそうだな。長瀬が弱い訳じゃ断じて無えし、実力的には互角以上と言っている。がまあ、どっちかと問われりゃ中村だろうよ」

「……旦那方に限って身内鼻負って事は無いんでしょうが」「あの最低最悪な変態馬鹿を俺達の身内扱いですな（してくれるな）小動物」



「………へい、すいやせん」

「あ、あのく、じゃあ、どういう理由で………?」

発した疑念を皆まで言わせず二人に声を揃えて斬って捨てられ、カモはすごとごと引き退がる。そんなやり取りに恐る恐る小さな声で割り込んだのはのどかであった。

「なに、単純な話だ宮崎後輩。仮に戦闘続行不能を敗北条件とするならば、馬力と耐久力の差で中村の敗けはほぼあり得ない、というだけの話だ」

「え………?」

大豪院の言葉に思わず、といった様子でネギが声を上げる。豪徳寺はそんなネギの頭をボスリと軽く叩き、諭す様に告げた。

「普段お前は俺等と散々組手やってるだろうが。あの馬鹿は俺に次いでタフで、おまけに色々我流の俺と違って一つの武道をとことん磨き抜いてる麻帆良有数の武道家だ。長瀬の気の練りは確かにあの歳にしちや満点やれるんだろうが……」

『ああーつと長瀬選手被弾ーつ!!』

豪徳寺の言葉の途中で一際大きな朝倉の実況が会場内に響き渡り、一同が闘技場内を注視する。

そこには、蹴り足を斜め下方に振り抜いた体勢の中村と、吹き飛んで闘技場の床を転がる楓の姿があった。

「長瀬は出力重視の鍛え方はしていねえ、どう考えても中村相手にや<sup>パワ</sup>火力不足だわな」

「そして中村の一撃は決まりさえすれば対人相手ならほぼ必殺だ。機関銃では戦車には勝てん」

………覚悟はしていたでござるが、何ともこれは分の悪い勝負でござるな………!!

喰らった衝撃は咄嗟に後ろへ飛んでダメージを軽減したものの、尚ガードした腕に残る熱く鈍い痛みは僅かに顔を顰めた。

目にも止まらぬ鋭い三段突きを空中に飛び上がって躲し様、引つ

掛ける様な回し蹴りで頭部を一撃しようとした楓だったが、素早く跳ね上がった両腕による十字受けで威力を完全に殺された挙げ句に天高く上がった片足による上方から斜めに叩き降ろすような蹴撃、通称マツハ蹴りによるカウンターで地面に打ち落とされる始末である。

無論のこと、楓とて無傷のまま一方的に攻め立てられる等と都合の良い展開を想定してはいなかったし、今の一撃にしても攻撃を受け止めた腕が骨折・筋肉断裂イカれた訳でも無い。戦闘続行は勿論可能であり、多少痛い思いをした程度の事で戦意を失う程楓は腑抜けでもなかった。

しかし楓は、早くも中村に動きを捉えられたこの時点が勝負の分かれ目であり分水嶺であると、そう感じ取っていた。

……さてはて、楓ちゃんはどうすんのかねえこの後  
……

中村はゆっくりと身体を起こす楓に対して油断無く構えつつも、まるで楽しい遊びをしている如く浮き立つ心を宥めて思案する。

待ちの姿勢にこそなつてはいるが、中村は先程迄の猛攻を無駄と判断した訳ではなかった。確かに楓の動きはキレにキレており、中村の全力駆動で追い回したとして攻撃を当てるのは難しい。

……でも体力勝負なら絶対俺に分があつし、楓ちゃんの攻撃は仮に直撃ちよくつてもあんま効きやしねえからな。俺は強えから殴らせ放題、逆にお前は一発当たれば終わり。…何のネタだっけなこれ？まあ兎に角そういう状況だわなあ。ここで何か変えてかねえと詰んじまうぜ楓ちゃん……

中村はしっかりとした防禦を空手という技術体系に於いて獲得しており、只でさえ中村の連撃を躲しながらの腰の入り切らない楓の攻撃では何発入れられようがそれは有効打足り得ない。武道家としては上等な勝ち方で無くとも、耐久力と火力にモノを言わせてゴリ押しをすれば勝てる勝負だと中村は分析していた。

……勿論勝ちも勝ちだ、ケチを付ける気はサラサラ無え……でもそれじゃあ、ちよつと詰まんねえよなあお互いによ。まだこんなモンが底じゃ無えだろ？もつと魅せてくれよお……

「…楓ちゃんよおおおおつ!!」

中村は完全に身を起こし、身構えた楓に吼えながら高速で突っ込んだ。

『吹き飛ばされた楓選手、どうやら深刻なダメージは無い様子でしたが…立ち上がった楓選手に対して再び猛然と中村選手が襲い掛かったあああつ!!』

『どうやら先程の攻防で中村選手は楓選手の攻撃を然したる脅威では無いと見なしたようですね。逆に中村選手は素の一撃で鉄柱を捻曲げる脅威の鉄拳を持つことは一部で有名な話です。此処に来て楓選手の旗色が悪くなって来たようです』

「…鉄柱捻曲げるって、此処に出場した奴等なら大体誰でも出来るんやないか?」

「ツッコむ所はそこなのかよ」

沸き上がる観客を余所に胡乱気な様子で呟いた小太郎に篠村がガクリと首を手前に折りつつツッコむ。

「ああ小太郎、勘違いだそれは。鉄柱曲げる位は確かに気が発現しているレベルの奴なら誰でも出来るだろうよ、でも喧囂の奴が言ったのは素手じゃ無くて素の状態、だ」

「…?、どういう事ですか?」

豪徳寺の言葉の要領が掴めなかったらしい夕映は眉間に軽く皺を寄せながら尋ね掛ける。

「素というのはつまり気による身体強化を用いない身体そのままの状態を指すのだ。奴は幼少期からの部位鍛練によって鉄の塊を殴打しても折れない骨と裂けない肉に、空手に於ける受打部位を置換している」

「…そんな事が本当に可能なの? 修練の果てに呼吸を行うのと同等の域で気の練り込みを行う事によって鋼に勝る強度に五体を常時強化している一流近接術士の話は本国に存在します。けれど人体はそもそもが蛋白質を主な構成要素とする生体物質であり文字通りの生身、どう鍛えた所で気や魔力を用いずに金属を破壊出来る様には出来

ていないのでは無くて？」

続いた大豪院の答えに疑問を返すのは、魔法世界出身で多種多様な近接戦闘者の存在を知る高音だった。その言葉に豪徳寺と大豪院はふと顔を見合わせて苦笑を向け合い、馬鹿にされたと思ったのか、然とした表情を浮かべる高音に豪徳寺が手を振りながら答える。

「悪い悪い。まあ人体なんてものは言う通り脆いモンではあるんだけどよ。魔法だの気だのと神秘の力が当たり前なそっち側と違って、その柔い身体を武器化する事にこっちの武道家の多くは力を入れてんだ」

言葉と共に豪徳寺が見やった闘技場では、上段回し蹴りを地に伏せて躲した楓に対して中村が更なる回転の後に後ろ回し蹴りを斜め下方に振り切った所であった。跳ね飛んで辛くも楓は再び躲したが、勢い余って振り下ろされた中村の蹴りは闘技場の床を豆腐か何かの様に粉碎する。

「あいつの手足にはもう爪と皮膚が残っていない事知ってるか？ガキの時分から部位鍛練で岩やら鉄やら殴り続けて骨折と裂傷を繰り返して過ぎたんで再生しなくなっちゃったんだよ」

「……………いえ、あの。普通の手足に見えますけど……………？」

いきなり始まった様々な意味合いで痛い話にやや引いた様子を見せながらもそう言葉を返す千鶴。

「ああ、あいつは麻帆良化学部が試験的に作成してる体表面に張り付いて皮膚の代わりをするとかいう医療技術のテスターやってるから見た目は普通なんだ。なんでも気を使う人間が思い切り酷使しても破れない様な強度の擬似皮膚を作成したいバイオ野郎と赤黒い手足や額じゃ女の子にモテないだろって馬鹿の利害が一致した結果らしいぞ」

「どうでもいい話だがな。兎に角素で鋼板をぶち抜く奴の拳足は気を込めれば人体所か装甲車を無造作な単なる拳一撃で簡単に破壊する、長瀬後輩の耐久力では防禦しようが耐えられまい。このまま正攻法で対峙を続けるならば遠からず決着だが……………」

「……………そう簡単には決まらねえ、かな？」

大豪院の言葉に被せる様に篠村が言葉を洩らす。

一際大きく跳躍して中村の暴風雨が如き猛攻の範囲内から抜け出した楓の身体が僅かにブレ、再び三体の分身が造り出された。

「芸が無え、つつうんだよそういうのをよおおおおああつ!!」

再び四方にバラけて波状攻撃を仕掛けんとする楓達に対して中村は獐猛な表情でそう吼えると、腰溜めに構えた右の拳に莫大な気を収束させて前方へ躍り出る。

「破碎、正拳！千重砕きいいつ!!」

中村は迫り来る楓達に直接爆破の拳を向けはせずに、己が足下の闘技場床を粉碎。中村を中心として闘技場が爆ぜ割れて全方位に木片が散弾の様に飛来し、楓達を打ち据える。

「くっ……!?!」

咄嗟に顔を両手で庇った楓は、直後失策に気付く。

「分身の見分けは確かに俺の女体センサーを以てして即座に判別はつかねえけどよ」

次の瞬間には中村が、本物の楓の眼前にまで瞬動を用いて距離を詰めて来ていた。

「分身は所詮気の塊だ、こういう咄嗟の反射行動とかでは反応鈍いんだよなあ楓ちゃん…よお!!」

「が……っ!?!」

言葉と共に叩き込まれた逆突きを楓は腕でガードしたが、人の拳とは思えぬ鉄槌で殴られたが如き衝撃により、ミシリと湿った木材が軋む様な音を立てて、楓の前腕の骨へ罅が入った。

そのまま吹き飛ばされる楓に中村は追撃を掛けようとはせず、動きが瞬間的に鈍りはしたものの再起動を果たして己へと殺到して来る楓の分身達へと向き直る。

「モノホンが入っても敵わねえのに分身だけで敵うかつつーのお!」

正面で左手に向かって身体をを切り掛け、瞬時にスィッチ向きを変えして右手側から脇を抜けようとする一体の動きを見切つてカウンター気味の中段回し蹴りで身体を両断し、その攻撃の隙を突いて左斜め後方と

宙から同時に仕掛けて来た二体の掬い上げる様な掌底と一回転しての踵落としを、それぞれ両手による廻し受けて叩き落とす様に受ける。

最早受け防禦というよりも手刀によるカウンター迎撃に等しいその激烈な受けは、分身体の腕と脚をそれぞれ拉げさせて消し飛ばし、バランスを崩した二体に上段正拳順突きと前蹴りを中村がそれぞれに突き刺した。

掻き消える様に消え失せた分身体達の残滓を振り払い、中村は闘技場の端にて蹲る楓に言葉を叩き付ける。

「どうした楓ちゃん！楓ちゃんの全力つてのはこんなもんかあ!?俺と闘り合うのを楽しみにしてたってんならもうちよい気張ってみたらどうよお!!」

「あいあい。中村殿が望みとあらば存分に気張らせて貰うでござるよ」

そんな言葉に対する楓の返答は、中村の真後ろから返ってきた。

「……、うおっ!」

「ふっつ!!」

背筋を疾った戦慄に中村が反射的に裏拳を振り抜く一瞬前に、氣配を殺しながら近寄り中村の背後を取っていた楓の分身体が渾身の一撃を中村の背面に見舞った。

「いっ!」

全く無防備に近い状態から強烈な不意討ちを受け、流石に体勢を保てなかった中村が前方に吹き飛ぶ。

そして其処には既に体勢を立て直しこれ迄で最大数、実に十体を優に超える数の分身体を作った楓が待ち構えていた。

「……では中村殿、拙者の全力を受けて頂くでござるよ」

三体分の拳や掌底を受けて仰け反りながら後方へ吹き飛んだ中村を背後の一体が水面蹴りで足払いをかまして宙に浮かせ、その他の

二体による蹴り上げで上方へと打ち上げられる中村。更に前以て跳躍し、空中で待ち構えていたそのまた他の三体が飛び蹴りを打ち込み、地面へと中村を蹴り落としたその直後。クレーターを作りながら闘技場へめり込んだ中村の両手足を四体が一斉に間接技で拘束、床に磔となった中村目掛け、四体が遙か上空から虚空瞬動にて高速落下して中村の顔面、首、鳩尾、下腹部に猛烈なストンピングを炸裂させた。『じゅ、十人を優に超える数に分裂した楓選手、中村選手を滅多打ちいいいいっ!!というか勝負あつたんじやないのこれもっ!!?』

『計測した所十六人居ますね、おそらくどれかの楓選手が本物なのでしよう。見た所残像でも幻覚でも無く確かに実体があり中村選手にダメージを負わせている様子です、これが忍の極意分身の術と呼ばれるそれなのでしょうか?』

「よっしやあ中村あーっ!!そのままボロボロ布みてえになって死に晒せやあああ!!」

「長瀬さん頑張つてええええ!!この世全ての女の敵をこの世から消し去って頂戴!!」

集団リンチという言葉がこれ以上無く相応しい凄惨な光景だが、観客のボルテージは寧ろこれまでで一番の高まりをみせていた。

「……とことん嫌われていますねあの先輩は……」

『み、皆さん酷いですっ中村さんがボコボコにされてるのを喜んでるなんて……!!』

何とも言い様の無い顰め面で私刑執行を見守る夕映とあまりと言えばあんまりな観客の態度に憤りを覚えるさよの膨れっ面が何とも対照的な選手席の一角、普通に考えて選手の生命が危ぶまれる一方的な光景であるにも関わらず、その場の雰囲気はどうにも緊迫感に欠けていた。

「うわあ〜楓さん容赦無いわねえ……」

「こ、こ、これ止めなくて大丈夫なんでしょうか?」

「い、いや放っておいたら明らかに駄目な状況に見えるんですけど

……」

「ああ放つとけ放つとけ。あの馬鹿はゴキブリよりもしぶといからあれ位なら欠片も問題無えよ」

「長瀬後輩も流石に殺すつもりはあるまい。尤も殺すつもりで掛かったとして殺しきれるとは到底思えん以上取り越し苦労でしか無いがな。ところで豪徳寺、中村の体勢を崩したあの長瀬後輩の分身は矢張り以前から忍ばせていたのだろうか？」

「多分な。長瀬の能力が本体と遜色無い密度で造り出せる影分身は四体が最大つて所だろ」

心配している者は無論の事居はするのだが、中村 達也というナマモノをよく知る者ほど反応がドライなものである。

「……なんだろうな、普通に前回か前々回一步手前位には酷い光景だとは思うんだが、対象が中村つてだけでまあ放つといていいだろ、つて気分になるぜ……」

「不謹慎、というか職務怠慢。……と言いたい所だけれど、気持ちが悪理解わかつてしまうだけに何だか反論し難いわね……」

「い、いや皆さん待って下さい!!幾ら中村さんでもあんなに一方的にやられてたんじゃ危ないですよ!止めに入った方が……!」

「まあ座つてろやネギ。確かに一方的にボコられとるんは確かやが、楓姉ちゃんのあの分身は能力が大分本体の楓姉ちゃんと比べて三枚は格が落ちとる筈や。十五体分の攻撃は見た目ほど効いてへんと思うで?」

何となく全体に流れ始めた放置ムードを払拭する様に、ネギが座席から立ち上がって抗議する。その肩を押し留め、待ったを掛けるのは隣の小太郎だった。

「小太郎君、そんななこと言つたつて……」

「まあ落ち着けネギ。あの馬鹿が仮に殺られてもまあいいかで済ませられるから対応がおざなりになっているのは認める、でも小太郎の言ってる事は正しいぜ。残念至極な話だがあれでやられてくれんなら普段から俺等は苦労してねえ……何がおかしいんだよ那波あ?」

「いえいえ、何でもありませんよ?素直に友人を信じている、で済ませ



られないものかなあ、なんて思っではいせんから」

「こいつ……………!!」

「余所でやれ。…………ともあれその通りだネギ。おそらくあの馬鹿は長瀬後輩の息切れを待っている。最早この大会中に何度口に出したかは分からんが、重傷程度で勝負を投げける輩は俺達の中にはいない。勿体無くもあの馬鹿を心配してやるといふのならば、黙って見守ってやれ」

ピンボールの様に闘技場内をあちこちに吹き飛ばされる中村を見やりながら、大豪院は低く笑ってそうネギに告げた。

……………!! 芯に響いている気が、しないでござるな……………!!

複数の分身体と共に気を込めた拳で中村を殴り飛ばし、休み無く追撃を仕掛けんと疾る圧倒的優位に立つ筈の楓は、そう内心で臍を噛んでいた。

楓の十五体という数の影分身は、分身体のスベックが実践にて通し得るギリギリの域を保てる限界数であり、紛れもない楓の全力である。個々の能力は下手な部長クラスを下回り、判断能力も落ちるためあまり複雑な連携を取れなくなるのに加えて莫大な気を消耗するというリスクはあれど、楓本体を含めて十六対一という数の差は圧倒的なアドバンテージであり、総合的な火力は四体分身の頃よりも格段に跳ね上がる。正しく楓にとっての切り札であり、根本的な鍛え方の差異で水を空けられつつあった状況に於いて切る事は何もおかしな話では無い。

しかし、楓は順当な手段であると己の攻め手を肯定したその上である懸念があった。

……………果たしてこれで…………火力の不足を手数で補うこの方法で……………

……………中村殿を、倒せるのでござるか……………!!?

単純に手数を増やせば攻撃を当てることは可能であり、中村の反撃を封殺して一方的に攻めることも出来る。

しかし。

この鍛えに鍛え抜かれた刃鋼はがねの如き武道家を単なる数で、言葉を変えれば質よりも量を取ったに過ぎない軽い攻撃で。

中村 達也を倒す事は可能なのか、と。

攻撃は届いている。巧みな体捌きや受けで必要最小限の急所こそ守り抜いている中村だが、入った有効打の数は既に五十を超えている。

しかし中村の眼から光は消えない。肝臓を横腹から手刀で突き刺されても、膝の関節を蹴り抜かれても。ガードの隙間を縫って顎を打ち抜かれてもただ愚直に数の暴力を耐え凌ぐ。

ギラついたその眼差しに射抜かれた気がして楓の背筋を恐怖と歓喜が同時に駆け抜ける。

……矢張り……

……これでは中村殿は倒せんでござるな……!!

楓とて分身をノーコストで維持出来る訳では無い。分身が使用した気は楓本体からの消費であり、多量の分身を保つには多大な集中力を必要とする。消耗仕切る前に押し切るつもりであつたが、このまま攻めていてはじり貧に削れて逆襲を喰らうと楓は判断する。

しかし楓にこの多重分身による超密度攻撃を超える火力を誇る手札は無い。だから楓は手数を保ったまま火力を上げに掛かった。

「……っ！はあっ!!」

一際力を込めて中村を大きく弾き飛ばし、楓は分身達に追撃を掛けさせること無く終わりの無い様に見えた連続攻撃を止める。

『楓選手が攻撃を止めました!!しかしこれは勝負ありというよりは……!』

『正まに決着きめに行く為の溜ためめでしょうね。素人目にも解る程に空気が張り詰めています』

「……さて、止めと行かせて貰うでござるよ中村殿?」

十六人全ての楓が声を揃えてそう宣言し、拳に気を集束させる。半円状に整然と並んだその姿からは必討の気迫が見て取れた。

「……ゴホッ!!……へっ!最後まで削りに来なかつたのは正しい判

断だぜ。実際波状攻撃は効いたつちや効いたんだが……………」

中村はあちこちに血の滲んだボロボロの姿で一つ咳き込み、赤黒い血の混ざった唾を吐き捨てながらも、ニヤリと笑って言い放つ。

「効いちやいねえからな、こんなもんはよ」

「…流石の益荒男でござるな、中村殿。そんな御仁だからこそ、張り合う事に縁の無い拙者が、柄にも無く勝ちたくなつたのでござるよ」

はったりとも痩せ我慢とも取れる中村の言葉に、しかし楓は嬉し気に一つ微笑む。

「…………参るでござる」

「来いや、楓ちゃん」

お互いに言葉を伝え終えた直後、楓達の姿が一斉に掻き消える。

一瞬後には中村の周囲を楓達は十重二十重に上空を含めて囲い、中村が上下左右前後何処にも逃げ場の無い状況を作り上げた。

「二はあつつ!!!」

楓渾身の一撃。破壊力に特化していないとはいえ、人体など容易く破壊する超常の力を秘めた十六の拳が、あらゆる方向から中村の身体を貫いた。

『楓選手の一撃…………いえ、十六撃の全てがクリーンヒットオオオオオツ!!さしもの中村選手もこれでは……………』

『…………いや、どうやら少なくとも結果は痛み分けに終わった様ですな』

暗に決着を匂わせる朝倉の言葉を遮って喧囂が不敵に笑いながらマイクに声を乗せた。

闘技場の中央では無数の拳に貫かれた中村が口から血を溢して今にも倒れそうに身体をグラつかせる。

しかしそれよりも早く、中村が繰り出していた正拳に身体の中央を真面にカウンターで打ち抜かれていた楓が力無く床に崩折れた。

「…………え!?何今の!?!」

「何も糞も無えよ。中村の野郎が本物の長瀬にカウンターで逆突き決めたんだ」

「あれではアバラが粉々だろう、勝負ありだな」

「ポチ！中村はどうやって本物の楓を見分けたアルか!?楓が距離を詰めてから攻撃に移るまでは僅か一瞬だったアルよ!!」

「俺をポチと呼ぶなバカンフー娘!!」

「……解ったかネギ?」

「僕にはじっくり見ても見分けがつかないよ小太郎君……」

「俺はあの本物との差なんぞ毛程も無い四体分身は無理やがこの密度なら何とか見分けは付くわ。……でもあの一瞬で見分けんのは無理やわ、そもそも全員視界に入れんのも無理やろ」

「どういう原理で見切ったというの?」

「解らねえけどあいつの事だから何となく馬鹿な理由の気がすんだよなあ……」

ワイワイと各人がやや興奮した様子で話し合うち、夕映はこっそりと息を吐き、隣で同じ様な動作をしたさよと視線が合つて苦笑を向け合う。

「……まああれだけボロボロでこのような言い方はおかしい気がします……」

『……無事に終わって良かったですね……』

「……あの一瞬で。……拙者の本体を見極めたので、ごさるか……?」

「まあ半分賭けだったけどな」

片手で腹を押さえて荒い息を吐き、顔を蒼白に染めながらも中村へと事の如何を尋ねた楓に、中村は口元の血を拭いながら笑って告げた。

「まず楓ちゃんが正面側に来てくんなきやさしもの俺も見分けられやしねえよ、見えねんだから。……逆に言やあ見えてりやあ解るよ、俺が女の子見間違えっと思うか楓ちゃん?」

「……はは。説得力が有り過ぎて笑えんでござるな……」

楓は仄かに苦笑を浮かべ、軋みを上げて苦痛を訴える胴を無視して立ち上がる。

「で？まだやつか楓ちゃん？」

「……………いや、止めておくでござるよ中村殿。些か辻殿や山下殿と比べて情けない体たらくかもしれんでござるが、拙者が命を賭けるのは此処では無いでござる」

中村の問い掛けに、楓は一瞬考える素振りを見せた後緩やかに首を振った。

「それでいいと思うぜ。ヌルいドンパチはご免だけどよ、殺し合いがしてえ訳じゃ無えからな俺は」

楓ちゃんもそうだろう？と中村は笑顔で尋ね、ややあつて楓はそれに頷いた。

「中村殿」

「あん？」

「……………また、闘りたいでござるな」

「……………！、おう、また闘ろうぜ!!」

「朝倉殿、拙者の負けでござる」

「……………あんたらアタシは穩便になって……………いや平和に終わった方なのこれ？……………まあいつか……………」

何かを諦めた様な表情で朝倉は手を掲げ、試合終了の宣言を行う。  
う。

『まほら武道会第三試合！長瀬選手のギョアップ棄権により中村選手の勝利です!!』

『わああ…』

『『『BUUUUUUU!!!』』』

会場内には僅かな歓声と大量のブーイングが木霊した。

「何勝ってんだ中村ああ!!」「変態が生き汚ねえぞ糞がああ!!」「嫌ああ犯罪者が生き残ったあああ!」「ホント腕っ節だけは真面だ

なあ社会不適合者あ!!」

「五月蠅えぞカス共が文句のある奴あ降りてこいや相手になつたるわ  
雑魚の群れがあああああ!!!」

『物を投げないで下さい!!選手が退場します!!』

『締まらないですねえ中村選手が絡むと何事も』

「五月蠅えー!!」

「本当に締まらねえなあいつは」

「まあらしいと言えはこの上無くらしいがな」

やれやれ、という服音声がぴったりな様子で溜息を吐く豪徳寺と  
大豪院。

「良かったアル、凄く平穩無事に終わったアルな」

「……平穩?」

「……ぶ、無事って……」

「まあ今までの二試合と比べれば大人しい終わり方…では無いでしょ  
うか?」

「……普通って何だっけ?」

「…もう考えない方が幸せだと思います、お兄様」

一部の人物が遠い目をする中で、中村は飛んでくるペットボトル  
や空き缶、トイレットペーパーや鉄アレイにナイフ等を怒りの鉄拳で  
弾き飛ばしながらズカズカと荒い足取りで一同の元へ帰還した。

「長瀬置いてくんよ薄情モン」

「じゃかあしい。楓ちゃんはアバラが軒並み砕けてつから医務室直行  
だし俺が送ってつたら心無いクス共がゴミ投げて来て危ねえだろ」

この至高の存在を受け入れられぬとはゾウリムシ以下の低俗共  
が!!と無意味な決めポーズ（ジョジョ立ち ver 吉良○影）を決めな  
がら憤る中村を殆どの人間が冷たい眼差しで見やっっているが、そんな  
中でさよは無邪気な笑顔を向けつつ中村の奮闘を労った。

『お疲れ様です、中村さん。凄かったです!!楓さん分裂したりとても  
速く動いたりしてとっても強かったのに、中村さんって本当に強い  
ですね!!』

「んん〜さよちゅわんもつと誉めてくれていいのよ俺様という一人の天才的存在をオオオオ!!」

「なんとも解りやすく調子に乗っていますね、この人は」

さよの純真で真っ直ぐな賞賛に鼻高々と仰け反って高笑いを上げる中村に夕映が呆れた顔で言葉を突き刺す。

「お!どうよ夕映っち、俺あ格好良かったかね?」

「格好良い悪いはさて置き、存外真面目に闘っていましたね。何時もその調子でいればもう少し余所からの評価も上がると思うですよ」  
「つれないねえ〜」

コロコロと喉を鳴らす様にして笑う中村に、夕映は僅かに眉根を寄せて尋ね描けた。

「……大丈夫なのですか?」

「心配すんな」

ポツリと告げられた言葉に中村は即時返答する。

「楓ちゃんは強かった。でも俺あこんぐれえで試合を投げやしねえよ。手足は動く、血も止まった。……止まる理由は無えんだな。心配すんなや夕映っち」

「……半人外所か八割人外の貴方を心配などしませんよ」

フン、と鼻を鳴らしてそっぽを向いた夕映の態度に、中村は苦笑してからポンと頭を一度だけ撫でる様に叩く。慌てて振り向く夕映だが中村は既に背を向け、さよの方へと向き直っていた。

「見てろよさよちゃん!次に上がって来んのが優男だろうと軍艦頭だろうと俺は華麗に勝って見せるぜ!!」

『はい!応援してますね中村さん!!』

キャツキャと騒いでいる中村だったが、そんな空気に中へ入り辛そうにしていた小太郎が意を決した様に声を中村へと掛ける。

「……中村の兄ちゃん、ちよつとええか?」

「駄目と言ったらどうするつもりだお前は?」

「……それは……ええい茶化すなや!!」

「美少女とのふれあいを脇に置いて小生意気なガキンチョの相手をしてやろうというのだからこんぐれえ我慢しろや。で、何よ?」

お兄さんが胸を貸してあげよう、とドヤ顔で尋ねてくる中村に小太郎は一瞬拳に力を込めるが、ツツコんだら負けと己を落ち着かせ、深呼吸を一つしてから問いを放つ。

「兄ちゃんは楓の姉ちゃんハナの分身、当所ハナから見分けが付いたみたいやけど、どうやって本物と分身を見分けてたんや？」

「ああ、その事か。確かにありやあ本物と殆んど違いが無えからな、さしもの俺様も初めの方は見分けが付かなかった。しかしな小太郎、如何に似せようとも本物には到底及ばない点が分身にはあったんだよ」

中村はフツと涼やかな笑みを口元に湛え、何かを驚掴みにするが如く五指を曲げた両手を己の胸へと持ち上げる。

「そうそれはあのたわわなおっぱいが激しい動きに合わせて行う魅惑の踊り!!ダンスこればかりは何処がどう違うとは言葉に出来ねえが、所詮気の塊に過ぎねえ分身体と本物のそれとは違うんだなあ!こう、本物の胸はゆさりとだな……」

得意満面に阿呆な語りを続ける中村の顔面に、無言のまま夕映が投げ放った一抱え程もある鈍器の様な分厚いハードカバーの書物が突き刺さった。

「ブハアアアッ!?!」

「……さて、綺麗に落ちが着いた所で次は俺の番、か」

もんどりうって倒れ伏す中村を無視して豪徳寺が眩き、視線を観客席の一角に向けた。

その戦意を秘めた力ある眼差しに気付いてか、豪徳寺に首を向けてフードの端から見える口元に柔らかな笑みを浮かべてヒラヒラと手を振るのはクウネル・サンダース。

元はといえばネギ達一行がまほら武道会に参戦を決めた理由そのものである人物であった。

豪徳寺は獰猛な笑みを余裕綽々としたクウネルに返し、滾る闘志を身体から溢れさせながら傍らの千鶴へと告げた。

「約束を果たすぜ、那波。お前に俺を見せてやる」

「……はい。頑張つて下さい、等と当たり前前の文句は言いませんわ。」



期待しています、豪徳寺先輩？」

18話 まほら武道会本選第4試合 豪徳寺VS  
クウネル（その1）

『他人がどう思うかなんて事は関係無え、自分が一番大切に思ってるモンを守る為に俺はツツパってんだ。：漢ってのは、そういうもんだろうがあっ!!』

嘗て世間にて風聞を期した大ヒット不良<sup>ヤンキー</sup>ドラマ『漢道』の主人公による屈指の名台詞だ。俺、豪徳寺 薫は現在<sup>いま</sup>でも幼少期の当時見ていた内容を昨日の事のように思い出せる。

俺がポンパドールに長ランって今じゃあ廃れちまったスタイルを貫くのはドラマの主人公である番長に憧れたからだし、喧嘩最強なんて夢を掲げたのも漢は強く有るべしなんて台詞に影響を受けたから、だ。今に至るまでを喧嘩と修業三昧の血生臭い半生を送って来た動機としちやあ、ガキ臭くて馬鹿みてえに聞こえる理由だとは正直思う。

しかし、俺はこれまで一時たりとも今迄続けて来たから今更引つ込みが付かねえ、なんて情性で日々を過ごして来たつもりは無え。例え創作だろうが、俺はその番長の背中に真の漢の姿を見出だし、真剣に自分もそう在りたいと強く思ったから一切の妥協無しに鍛えて来た。

『何時までそんな時代錯誤な格好したまま余所様に迷惑掛け続ける気だドラ息子が!!』

『あんたとうとう格闘家の偉い人か何かは知らんけどそんな危ない世界の人にまで喧嘩売って……家族の迷惑になるとか少しでも考えないのかい!?!』

『……私ね……お兄ちゃんの事は大好きだよ……私や、お父さんお母さんには一回も痛い事したこと無いし、私が頑張ってるピアノとかお絵描きのお稽古、一生懸命応援してくれるもん……でもね、お兄ちゃんが不良<sup>ヤンキー</sup>さんだからって、クラスの男の子が私の事馬鹿にした

り、おかしな事噂したりするんだよ……………私、どうすればいいのかなあ、お兄ちゃん……………?』

……正直家族には随分迷惑を掛けちまつてる。もう少しガキの自分にはやりたい事に一々異を唱えてくる親父やお袋を疎ましく思ったし、妹にちよつかいを出してくるガキ共を威し付けて解決した気になっていた。

が、現在いまになってみれば両親の文句も当然だし、妹には沢山の我慢をさせて、学校っていう重要な生活の場で随分な迷惑を掛けまつたと理解している。俺は親孝行や埋め合わせとして何かやれるのならば、家族に対しては何をしてでも償いをしなきゃいけない、と考えている。

ただそれでも。

家族に対して申し訳なく思うが、今までもそしてこれからも俺はこの漢道を、修羅の道を違う事は無いと確信を持って言える。

どれ程親不孝者と罵られようが、玉の様に可愛がっている妹から例え蛇蝎の如く嫌われる事があるうが。

強い漢になりてえ、つて心の本音こえに背を向ける事は俺には出来ねえからだ。

だから俺は誰にどれだけ馬鹿にされようが嘲笑わらわれようが、自分の信じる漢の信念を貫き通す。

だから可愛がってる弟分が気にしてる親父の行方は是非とも探し出してやりてえし、こんな俺に何が気に入ったのか好意を持ってくれてるらしい酔狂な後輩には、期待に応えて良い所を見せてやりてえ。

「豪徳寺君、今迄の試合を鑑みて、私は貴殿方のレベルを見誤っていた事に気付きました。予選の時の様なあしらい様で貴方を打ち倒せるとは最早思えません故、今の私なりの本気でお相手をさせていたいただきます。今更そんなことを、と貴方達は怒るかもしれませんが、胡散臭い私という人物なりに真剣に向き合ってきた、とその程度に受け止めて下さい……………良い試合をしましょう」

だから俺は何としてでも、この得体の知れねえ優男に勝ちに行く事にした。

「っしや来やがれ、優男!!」

豪徳寺の両の拳を打ち合わせながらの一喝に、悠然と闘技場の反対側に立つ隠者の如きローブ姿のクウネルはそつと見える口元に弧を描かせた。

『さあーっ！前の試合による闘技場の被害が比較的、あ・く・ま・で・比較的軽微だった為に早めの試合開始と相成りました、豪徳寺 薫選手VSクウネル・サンダー選手が争う第四試合ですが、先程の試合開始宣言から両者動かず！今迄の三試合と比べて静かな立ち上がりとなりましたが、この状況をどう思われますか、解説の喧囂部長!!』

『あくまで見えている通りの互いに様子見、という受け取り方でよろしいかと思われませぬ。敢えて付け加えるならば、クウネル選手は予選の戦いぶりを見ても、相手を待ち構えて攻撃を流すかスカすかとしての強烈な反撃を決める、所謂後の先を得意とする待ちのスタイルに思えますのでこの姿勢は順当でしょう。が、豪徳寺選手は言わずと知れたその不死身の如き耐久力と馬鹿力、圧倒的な気の総量で生半可な攻撃や防御をもともせず正面から薙ぎ倒す、クウネル選手とは対照的な突撃野郎です。開始宣言と同時に突っ込んで行つてもなんら違和感の無い豪徳寺選手がこうして様子を伺っているという事は、豪徳寺選手がそれだけクウネル選手を警戒している、つまりは強敵と見なしているという事でしよう』

「そうなんですか？」

「ああ、まあねー。只の試合ならあいつは誰だろうとブツコミかますんだろけど、この期に及んであの優男手の内殆ど見せない上にネギのおやつさん情報が賞品だからねえ。あれで年下や後輩は可愛がる奴

だから気負い過ぎてる、って程でも無いけど、負けられねえと張り切ってたんだろ。あいつなりに考えて挑んでんだと思っただけで「らしくない状態ではあるし、生兵法は怪我の元だ。下手に頭を使おうとするならば何時もの通り猪武者でいた方が良い気もするが……まあ手の内が不明な状況で無闇に突っ込めば最悪の解らん手段で瞬殺も有り得ぬ話では無い。一先ず賢明と見るべきだろう」

固唾を飲んで一同が見守る中、実況解説の二人のやり取りを聞いて千鶴が正否を尋ね、中村と大豪院は概ね肯定を返した。

「まあらしくないのはホントアル。豪徳寺はガンガン攻めて自分のペースで闘うタイプアルから、慣れない待ちでコケなきやいいアルが……」

「でもさ古ちゃん。なんかあのクウネルって人凄い魔法使うんでしょ、重力魔法だっけネギ？」

「はい……予選の映像を見た限りだと、恐らく指定した範囲内の重力を何十倍にも増幅させる産み出すタイプの魔法だと思えます」

「成る程、仮想重力の力場を叩き付けるタイプじゃあ無く範囲内の重力を変化する方か。重力魔法が主力か切り札なのかは知らねえが、かなりの高等魔法使いなのは確かだぜ」

「……そないに強力なんか、重力魔法言うんは？」

明日菜の問いに返されたネギの答えに頷くカモに対してやや胡乱気に小太郎が疑問を放つ。

「ああ。難易度が高く、習得にはある程度の才能を有する、なんてされてるから上級者向けの魔法なのは確かで、それ程メジャーな存在じゃねえ。が、発動すれば効果が及ぶのは一瞬だし、対象の重力を増加させる類の魔法は特に魔法世界の竜を始めとした巨大生物に相性が良い。元々無意識の魔力強化運用により自重を支えている奴らにや継続した重り、つてのが致命的なんだろうさ。他にも結界・空間系の魔法に対する手っ取り早い対抗魔法に使えたりと応用範囲が広いんだよ、重力魔法ってのは」

「……となると、素人意見ではありますが豪徳寺先輩はクウネルさんに先に攻撃をさせて、ある程度手の内を見てから攻め立てるつもりと

「いう訳ですか」

「で、でもあの……こ、金剛先輩？……っていう凄く鍛えてそうな人も、重力魔法でやられちゃったんですよね……豪徳寺先輩も危ないんじゃない？……？」

「ああ、そら大丈夫だぜ宮崎ちゃん」

心配そうなのどかの懸念の声をケラケラと笑いながら中村が否定する。

『？、なんでですか中村さん。あの筋肉の人って、豪徳寺さんと正面から殴り合いが出来る位タフ？だつて前に言つてましたよね？』

「おおさよちゆわんよく覚えてんねえ、そうだよあの筋肉ダルマは耐久力や馬力じゃあはつきり言つて俺等を越えてる。小細工無しに近接戦仕掛けりや麻帆良で敵う奴あ数える程しか居ねえだろうなあ」

そう口にしながらも中村の視線は仁王立ちに構える豪徳寺を捉え、その表情かおには笑みを浮かべていた。

「でもそのお肉要塞に真正面からのぶん殴り合いで負けた事無えのがあの化石番長なんだわ。重力ボンバーだか何だか知らねえが、余波で闘技場が消滅するレベルでも無え攻撃でアレを瞬殺なんざ無理無理無理」

「豪徳寺のタフネスは気の総量や頑丈性等の理屈だけで語れるものには無い。に兎に角奴は、何をやつても理不尽なまでに斃れず、どう痛め付けて地に伏させても起き上がる。心配するだけ無駄というものだ」

「だから安心しろ、ということですか？……うふふ、ありがとうございませす」

言外に気を使われた事を察して千鶴は微笑みながら頭を下げる。そんな様子にあくやダヤダ死ねりーゼント、と中村が悪態を吐いたその時、闘技場の上で一分近く固まっていた両者に動きがあった。

「……黙りかよ。来ねえなら、こっちから行く、ぜえ!!」

試合開始前の宣言以来、黙して語らず動きも見せないクウネルに豪徳寺はしびれを切らし、牽制を兼ねての気弾を右拳から撃ち放つ

た。

《漢》と表面に浮かび上がる m 級の輝く気の塊は高速で大気を切り裂きながらクウネル目掛けて疾駆する。クウネルは回避や防御の動きを見せずに、腕を軽く掲げた棒立ちに近い姿勢のまま真面に気弾の直撃を喰らった。

「ああ？………っ!？」

『睨み合いの後遂に動きを見せた豪徳寺選手の気弾炸裂ーっ!! 無防備に喰らった様に見えたクウネル選手は………と!？』

まさか素直に喰らうとは思っていなかった豪徳寺が僅かに眉根を上げ、怪訝そうに声を上げる。その開幕からの意外な展開に朝倉が実況の声を張り上げたその瞬間。

その言葉が終らぬ内に炸裂した気弾の舞い散る気の幕を引き裂いて、クウネルが高速で豪徳寺目掛け一直線に突っ込んで来た。

「野郎………っ!？」

やや意表を突かれた形になった豪徳寺が対応の為に左拳を後方へ引き絞った瞬間、クウネルの姿が豪徳寺の視界から掻き消える。

「瞬動!!」

「完全に縮地レベルだな」

豪徳寺の右後方へと現れたクウネルの動きに中村が声を上げ、全試合の楓のそれと遜色無いキレに大豪院が颯め面で呟く。

クウネルの横蹴りが豪徳寺の右膝裏を打ち抜き、豪徳寺の身体が右へ傾く。

「……っ! おおああっ!!」

「遅い」

不意を突かれた豪徳寺だが怯まずに身体を旋回させクウネルへと拳を放つ。しかしクウネルは僅かに首を傾け、フードの裾を掠める域で豪徳寺のパンチを紙一重で躲し、カウンターの掌底を豪徳寺の顎に叩き込んだ。

衝撃で頭を反り返す豪徳寺の懐へクウネルはさらに踏み込み、ローブを翻えさせながら体重の乗った肘打ちで豪徳寺の顎を横合いから挟る様に打ち抜く。

「…貴方が非常に打たれ強い事は伺っていますので。糸を断たせていただきます」

横に身体の流れる豪徳寺へとクウネルは更に回し蹴りによる追撃を放つ。鋭く、軋やかなその一撃は三度豪徳寺の顎部を捉え、斜め上方からの衝撃により豪徳寺は頭から闘技場の床にめり込んだ。

クウネルは蹴り足を引き際に大きく飛び退き、掲げた掌を下に下方へと軽く振り抜く。

直後に発生した重力力場が豪徳寺を中心に闘技場の床を巨大なクレーターを形成し、爆発が起こったかの様に粉塵と木片を周囲にばら撒いた。

『ク、クウネル選手の素早い連撃でダウンした豪徳寺選手に、予選にて鎧塚選手や金剛選手を文字通り沈めてみせた不可視の一撃が炸裂うううっ!!』

『クレーターの直径から鑑みて金剛選手を倒した際の一撃と同等以上でしょうかね？攻撃の正体は不明ですが、範囲内の上方から下方へと極めて強いエネルギーの様なものが働いている様なものと推測出来ます。タフで知られる金剛選手の意識を刈り取れる威力の攻撃、半ば不死身の怪物として恐れられる豪徳寺選手と言えども手痛いダメージかと思われれますね』

「ちよーっ!!?あっさりやられてんじやない豪徳寺先輩!!」

「ご、豪徳寺さん!」

一矢報いる間も無く派手にやられた豪徳寺の有り様に明日菜やネギが悲鳴を上げ、会場内もよもや試合開始早々に決着かとざわめきが一部で広がり始める。

「まだですよね、中村先輩、大豪院先輩?」

しかし、そんな中である意味最も取り乱しそうな立場の千鶴は、衝撃的な光景にやや顔を顰めさせながらも口元の微笑みを絶やさずに、二人へ返ってくる答えを確信しているかの様な口振りで問いを放つ。

「就是」  
ジョウシ

「なして解るん那波ちゆわん?恋する乙女パワー?」



言葉少なに、されど僅かに笑みを浮かべながら大豪院は肯定し、中村はあらあらまあまあ、と近所の噂好きなババアの如きしなを作りながら気持ちの悪い微笑みと共に尋ね返す。

「いえ、ただこれで終わってしまったんでは……」

言葉の途中でクレーター上の煙が引き裂かれ、その中からクウネルへと突き進む影を目にした千鶴は笑みを深めながら言い切った。「ちよつと格好悪過ぎますから。立ち上がるに決まってる、って思っただんです」

……馬鹿な……!?

クウネルは危ういタイミングで己の顔面目掛けて飛んで来た、大気を引き裂いて唸りを上げる豪腕を躲しつとも内心で驚愕の声を上げていた。

クウネルは掌底、肘打ち、回し蹴りの計三撃を顎部に集中させ、豪徳寺の脳を揺らしての脳震盪狙いにより意識を断ちに行った。どれ程打たれ強かろうとも人間は脳が頭蓋骨の内壁に叩き付けられれば一時的に意識障害を起こす。これは根性云々の問題では無く生物学に基づいた厳正な事実である。

クウネルとしても打撃に十分な手応えはあり、よしんば意識を豪徳寺が保っていたとしても平常通りに居られる筈は無い。故にクウネルは念には念を入れ、重力魔法による追撃を行い無防備状態の豪徳寺を押し潰したのだ。百歩譲って意識があったとしても……

……まるで何事も無かったかの様に攻撃を仕掛けてこれる筈はないのですが……!!

クウネルは地面ごと巻き上げんとするかの様な豪徳寺のアツパーを躲し様、踏み込んでの掌底を再び豪徳寺の顎へと決める。何ら痛痒を感じていないように見える暴れぶりの豪徳寺だが、確実にダメージは蓄積されている筈とクウネルは判断していた。

ダメ押しに連撃を叩き込めば倒れるか、少なくとも動きが鈍る筈と考え、クウネルは至近距離での鳩尾に対する膝蹴りからの脳天目掛けた肘の打ち降ろしを繋げに行く。



：つてゆーか壊れる！会場どころか龍宮神社がぶっ壊れちゃうから豪徳寺先輩!?!もうそのくらいで良くない、つてか死ぬよそのローブ男!?!」

『朝倉、素になつてるぞ口調が。……先程手持ちにあつたのど飴をテーブルに置いた所、闘技場の方向へ向かってゆっくり転がり始めるのを確認しました。この会場、既に傾き始めていますね。ともあれクウネル選手は一転してピンチを通り越し生命の安否が気遣われますね、豪徳寺選手は爆撃を止める気配がありません』

「うわっ冷てえ!?!」

「ちよつとここ崩れないわよねえ!?!」

「もういいだろ豪徳寺ー!?!こつちまで巻き添えが…痛えつ!?!」

「止めろつて死ぬぞそのローブ男!?!」

会場内の観客が悲鳴や怒号を上げる中、ネギ達一同はネギと篠村が合同で張った風の結界で木片や石片、水飛沫の浸入を防ぎながら言葉を交わしていた。

「どーなつてんだあの男は一体何で出来てやがる!?!昏倒確実な打撃魔法喰らつてもピンピンしてやがるし挙げ句の果てになんだこの艦砲射撃も真つ青な気弾の嵐は!?!あいつの気弾、一発一発が下手な魔法使いの上位呪文より強力なんだぞ有り得ねえだろこの連射は!?!」

「豪徳寺だからとしか言い様が無えぞそれらの質問にやあ。単なる漢魂…あああいつの一番弱い気弾な?。だったら連続百発くれえは余裕だべあいつは」

「……余りこういう表現は好きでは無いけれど、気の総量、練りや扱いを見るに紛れもなく気に関しては彼は天賦の才を授かっているわね……!?!」

ギヤアギヤアと喚く篠村にのほほんとした調子で中村が言葉を返し、高音が何処か苦々しいものを滲ませながら続ける。

「さ、流石にやり過ぎじゃないでしょうか!?!あんな密度の気弾をあんな連続で受けていたらどんな障壁でも耐えられません、クウネルさんが死んじやいますよ!?!」

「待てやネギ。あの怪しいのは兄ちゃん達より格上やて兄ちゃん達が



かという絶え間ない震動が全身の傷を刺激して痛みに悶える辻と心配そうに隣で身体を支える刹那、モニターに映る絨毯爆撃跡を見て最もではあるが今挙げるには何処かポイントのズレたコメントを上げる木乃香の姿があった。

「大丈夫だ桜咲……と刹那、傷自体は一応塞がってるしな……それにしても引つ掛かる………」

「？、何がですか辻先輩……？」

身体を案じる刹那を制して半身を起こしながらの辻の呟きに木乃香が反応する。

「いや、ね……あのクウネルって男？……まあ男でいいか。多分身体が図書館島の奥で対面した時とは違う。……昨日の予選から見ていてやっと気付いた様な差だからそんなに元から外れてはいないんだろうけど………」

「？、？………」

「……………それは、はじめ「さんの目で見て、の話ですね？………」

辻の端から聞いていれば意味不明なその呟きに木乃香は首を傾げるが、刹那は抜けている言葉の意味に気付いたらしく、表情を真剣なものに変える。

「影武者か何か、という事では無いのですね？」

「ああ、言葉で説明するのは難しいけど同一人物ではあると思う。……………そうだな、俺が人や物の中心を縦に線が走ってるように見える、っていう話は覚えてるか、二人共？」

木乃香と刹那が頷きを返すのを確認しつつ、辻はどうにも言葉で表すのが困難である感覚的な話を進める。

「その線は実際に存在するものじゃ無くて、俺の脳がおかしいのか精神こころがおかしいのか、原因は不明だけど何か狂ってる事による認識異常だって医者はかつて言っていた。だからか俺の見える線は画一して同じものじゃなく、対象毎に違って見える……例えば刹那の線は歪みが寸分も無くて真っ直ぐ通ってる、後は透き通った雑味の無い良い黒なんだ。基本的に興味の無い物や合わない奴ほど微妙な歪みが目に着くし、斑というかボヤけるといいうか、雑な感じの色なんだな。」

他にも細々特徴はあるけど、大体俺が見分けてるのは線の通りと色合い、質感だね」

近衛ちゃんのは線がはつきりしてて幅が他の人より少し大きいんだ。綺麗だよ、と辻が笑って告げ、木乃香はよう解らんけどありがとうございます、とほんわかした笑顔で礼を言い、刹那は多少ならず引き攣った笑顔を返す。如何に辻の異常な感性を受け入れようとも、自身の根幹が実は病み気味のそれであっても。基本的に常識人的な思考を持ち、生真面目な気質の刹那は、まだまだ素のままのテンションでは理性的なキチガイの言葉を涼しい顔で対応するのが難しいらしい。

「話がズレたな。そんな俺の感覚で言うとな図書館島のクウネルと今豪徳寺と闘ってるクウネルはどうも違うらしいんだが、かといって別人では無いとも思う。……感じたままに言えば影分身の本体と分体を見比べてるのが一番近い。同位体ドッベルゲンガーか何かを見てる気分だ……」

「……つまりあのクウネル、さんは魔法か何かで作られた分身の様なものである、と………?」

「俺の感覚以外に何の根拠もない推測に過ぎない上に正体は何なのかも解らないけどな」

仮定を立てて予想を交わし合う刹那と辻の言葉を木乃香はんん?と、思案する様に小さく唸り声を上げながら聞いていたが、

「辻先輩、せつちゃん、それって反則やく言うて勝ちにしてもうたりとか……でもそんなん一生懸命闘こうてる豪徳寺先輩に失礼やなあ……」

駄目や駄目や、と可愛らしく眉根を寄せての木乃香の言に、良い意味で力の抜けた辻と刹那は思わず顔を見合わせて笑い合う。

「……そうですね、それで勝つても先輩方は納得しないとします」

「それに大会の規約は『呪文詠唱の禁止』だ。残念ながらアレクウネルを咎めるにはルールが追い付いていないな。……しかしそうなると……」

俺の予想が正しければ、豪徳寺には殆ど勝ちの目が無くなるな。と、モニターに映る豪徳寺と対峙するクウネルを見やりながら辻は再び表情を険しいものに変えて呟いた。

『く、クウネル選手何時の間にやら爆撃跡地から抜け出していた模様です!!その身体には傷痕どころかローブに裂け目すら出来ていません!あのB-29もびっくりな絨毯爆撃を全て躲し切っていたのもいっしょではないか!?!』

『……妙ですね。仮に何らかの方法で豪徳寺選手の連射を回避していたとしても、豪徳寺選手の最初の反撃による二つの巨大な気弾は間違いないくクリーンヒットしていた筈です。ダメージが見られないのは豪徳寺選手も同じですが、ローブにすら傷一つ出来ていないというのは打たれ強い等という話とは完全に別物です』

『……流石にやり過ぎたんじゃないかねえのか、優男よ?』

「さて、何の話でしょうか?」

場外カウントが朝倉により数えられ出してから視界が完全に晴れ渡る前の段階、クウネルは虚空から溶け出る様にして宙から現れて闘技場の端に着地した。朝倉や喧囂の言う通りその身体にはローブに汚れすら着いてはおらず、まるで今この時に始めて闘技場に着いたかのような泰然とした物腰は、フードに表情が隠れて見えない事も相俟って得体の知れない不気味な迫力を醸し出している。

しかし豪徳寺はクウネルが無傷であることに動じた様子は欠片も無く、覇気も露わにクウネルを睨みながら尚も言葉紡いだ。

「惚けんな。てめえのその身体、本物じゃねえんだろ?」

「……ほう……」

クウネルはその豪徳寺の指摘にローブの奥で目を細め、見える口元の笑みを深める。

「最初は魔力強化で肉体を鋼並みに強化してんのかとも思ったが、てめえの打撃は一流留まりでいまいち芯には響かねえ。あんたは近接戦も出来るだけの純魔法使いだろ、そんな奴が肉体強化をそこまでの域に伸ばしてる道理は無え。かといってきつきのを真面に障壁だけで防ぎきんのは不可能な筈だ、そこまで温い攻めをしたつもりはねえ。現に弾き飛ばして磔にしてから途中までは当たった手応えがあつたぜ」

豪徳寺はクウネルに指を突き付ける。

「なのにてめえは無傷だ、魔法で回復したならローブまで再生してんのはおかしくねえか？……あんたの身体、長瀬の奴が使う影分身みたいに一から作り直したんだと俺は見てる、あんたは相当強えのに、防御に何処か隙があんだよ。……死なない怪我あしねえと思つて舐めた覚悟で掛かつて来てんじゃねえ……漢の勝負を穢す気か、てめえは!!」

豪徳寺の一喝に、クウネルは黙したまま佇んでいたが、聴て静かに顔かんばしを擡げると、ローブの奥から伸ばした視線を豪徳寺のそれへと合わせた。

「貴方の……いえ、貴方武道家達の心意気を踏み躪る様な真似をしている自覚があります。それについては申し訳なく思つてはいますが、私は私なりに考えあつて貴方達に相対しています。貴方の言う通り、些か実力を見誤り無様を晒はしましたが、今現在に於いても私の答えは変わりません。貴方達はナギ・スプリングフィールドまで辿り着きはしない。……ならば私のやることは一つでしょう」

クウネルはゆっくりと両の腕を擡げ、不可視の力場を掌に纏わせる。

「おくばせながらこれより貴方を全力で潰しに行かせて頂きます。貴方の言う通り、偽りのこの身は跡形も無く消し飛ばしてもしない限りは幾度でも再構成を繰り返し、この場に於いて私は不死身に近い存在です、卑怯と罵りたくば如何様にも。手段を選ばず、勝ちに行かせて頂きましょう」

「居直りやがったか……まあいい、麻帆良の理念は強けりやあ何でもあり、だ。グダグダ文句は垂れやしねえよ漢らしくはねえからな。……その姑息な身代りぶつ飛ばして、クウネルてめえ本体の面を殴り飛ばしてやらあつ!!」

戦闘姿勢を取ったクウネルに呼応して豪徳寺も両の拳に気を充纏させていく。

直後、クウネルがノーモーションで繰り出した仮想重力力場と豪徳寺の撃ち出した巨大な気弾が両者の中間点でぶつかり合つて炸



裂し、盛大に爆風と衝撃波を撒き散らした。

「おらああああああつ!!」  
リコフオス アルトウス パノゴメー スペーライオン

「昏く深く冷たい窟」

19話 まほら武道会本選第4試合 豪徳寺VSク  
ウネル（その2）

「……成る程、奴だったか。まさか麻帆良に居るとはな……」

「どういった関係だったのさエヴァさんとは？」

「ナンダ嫉妬カ山下？安心シロヤ。ゴ主人ハプライドバツカ無駄ニ高  
ケエカラマダ才前ニ対シテ素ツ気ナク見エツケド、内心嬉シクテ嬉シ  
クテ無イ尻尾振ツテ浮カレテル状態ダカラヨ。今後ハ恋愛ゲームト  
カデ一番攻略シ易イキヤラミテニ合ウダケデンドン好感度ガ上  
ガツテツテ、一ヶ月モシネエ内ニデレデレニナルカラ楽シミニシテロ  
ヤ」

「粉々にされたいかボケ人形。……とにかくこいつは……」

「本日はマスターとセカンドマスターの婚約記念日と相成りましたが、祝杯と祝いの宴は御自宅で行うべきでしょうかセカンドマスター？飲食店を貸し切って行うのであれば早急に予約を……」

「イヤマズ本日中ニ出ラレンノカ此処カラ？」

「無理かもねえ。まあ何とか学祭中に動けたとして、うくん……気安  
くて美味しい店といえは超包子チャオパオスだけど学祭中に彼処を貸し切るのは  
不可能だしねえ……っていうか茶々丸ちゃん何だか語呂が悪いし慣  
れないからセカンドマスターは止めて？山下でいいよ何なら慶ちや  
んとか」

「では慶一様と」

「いや様は……」

「いけません」

「ええい聞け!!こうしてこいつが出てきたということは何かしら企ん  
でいるに決まっているのだ!」

「貴様等が人の話を聞かんかあああああつ!?まだまだ調書は終わっ  
ておらんのだぞ神妙にしろ!!」

幾重にも魔力封呪刻印が部屋中に刻まれた対魔法使い尋問用  
の取調室にて、まほら武道会の経過をTVで見やりながらの緊張感が

無いエヴァンジェリン一家のやり取りに担当のガンドルフィーニが額の青筋をブチ切りながら怒号を上げた。

「喧しいぞがなるな魔法教師。大会の状況確認の為に写している映像を私達も確認して良いと爺いから許可が出ているだろうが、肅々と、とはいかんが素直に話してやっているのだから喚くな鬱陶しい」

「エヴァさんエヴァさん喧嘩売ってるのと変わらないからそれじゃ。…えくとガンドルフィーニ先生、若気の至りでやらかした挙げ句にご迷惑をお掛けしています申し訳ありません、ただまあ色々立て込んだ事情がありまして……」

「ならばその立て込んだ事情とやらを包み隠さず我々に明らかにしたまえ山下君!!自分の現在置かれている立場が理解わかっているのかね!!君は今や我々を含めた古今東西の魔法組織、魔法関係者が挙って目の敵にする元六百万\$の賞金首である犯罪者の眷族だ!私は学園長や高畑先生が存在を認めているからといって言に絹を被せるつもりは無いぞ!!」

ガンドルフィーニの舌鋒にエヴァンジェリンの目が何処か愉快気に細められ、チャチャゼロは嗤い茶々丸は無言のままにガンドルフィーニを注視する。

「……まあまあ、ガンドルフィーニ先生。大人達此方が落ち着いて冷静に話を進めなきや拗れて終わるだけです。認める、認めないはまた別として、エヴァンジェリンや特に魔法使いの事情にまだまだ疎い山下君に今後の指針に於いての選択肢をしっかりと示すのが僕達の役目の一つなんですから」

にわかには張り詰め出した空気を緩和するように式集院が苦笑いを浮かべてとりなしに入る。

「式集院先生……これが落ち着いていられる問題だと思いですか!?この吸血鬼は自分の置かれている立場がどれだけデリケートで危ういものなのかを欠片も考慮せずに、よりによって真祖の吸血鬼の眷族創り等という特大の爆弾を私達に叩き付けて来たのですよ!!封棺処理を受けての半永久的な終身刑がほぼ確定していた身の上を、英雄ナギ・スプリングフィールドの後押しがあったといえ万の批判を喰ら

い、莫大な代償を支払ってまで我々は庇い立てた!! 罰則を学園警備の強制労働程度に納め、制限付きにしろ学園に通わせある程度自由な日常生活を許している!!」

しかしガンドルフィーニの怒りは収まらず、宥めようと己の肩に置かれかけた式集院の手を払いエヴァンジェリンへと燃える眼光と共に言い放つ。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、貴様が何処まで理解しているかは知らんが貴様に架されている罰は至上稀に見るレベルの甘い代物だ!! 学園長を初めとして多くの者からそのような多大なる温情を賜りながら、貴様の態度は傲岸不遜にして傍若無人! それも今回に限った話で無く以前から貴様の言動に私は怒りを覚えていた!! 恥という概念を理解しているのならばその厚顔無恥な態度を今すぐに改めてみせろ!!」

「ははは、威勢がいいな貴様は。学園長から押し付けられたそれらは、私からすれば糞喰らえ、の一言で済む下らん話ではあるのだが……まあ、礼を逸しているのは確かだな。貴様の言葉は正しかろうよ魔法使い」

「……………何……………!?!」

ガンドルフィーニからすれば意外なことに、エヴァンジェリンはあつさりと己に非がある事を認めてみせた。

「元より私の両手は血塗れさ、高々十数年ばかりの奉仕活動で赦されたなどとは思つたらん。……あの考え無しに押し付けられた勝手な機会にせよ、考えされられるものはあり、煩わしいばかりで無くそれなりの幸いもあった」

だがなあ、と、エヴァンジェリンは嘲笑うかの様に両の口端を吊り上げ、ガンドルフィーニへと言葉を吐き捨てた。

「何処まで行っても善行は贖罪に成り得る代物では無く、死者に対して生者が出来得る事は究極的には何も無い。悪いことをした奴は善いことをして償いましょう? ……お前達は其処ら辺を少しばかり勘違いしているんだよ」

「……………だから貴様は我々の活動に加わる事に意味は無いと! 悪人は変

わり得ないと開き直るつもりか!？」

「違う」

ガンドルフイーニの叫びにエヴァンジェリンははつきりとした否定を返した。

「私はただ、私を裁く資格があるのは地獄で私が何時か迎えるであろう滅びを待つ、私が殺めた怨霊共だけだろうと言いたいのだよ。貴様ら正義の魔法使い共が勝手に下した裁き等に身を任せるのはお門違いだし単なる茶番だ、そのような意図で私は動かん。……ただ、先程述べたようにジジイやあの馬鹿、そして私の様な厄災を抱え込んで要らん苦勞を背負い込んでいる貴様等には些か借りがあるのは確かだ。その借りを返すまでは上の指示に従ってやるさ。どうせ下手に出歩けばヘルシング教授気取りの正義漢や、怨嗟を引き籠りの心中で薄ら暗く発酵させたストーカーに囲まれかねん身だ」

だからさっさと調書を再開しろ、と椅子の背凭れに寄りかかってふんぞり返るエヴァンジェリンの態度にガンドルフイーニはいよいよ血管を二、三本ブチ切ったかの様な憤怒の形相を浮かべて身を乗り出すが、

「すいませんねガンドルフイーニ先生、これでもエヴァさん凄く機嫌が良いんですよ」

僅かにエヴァンジェリンの隣で椅子から上体を起こした山下が手を翳して押し留める。

「……っ！山下君!!」

「はい、それが問題起こした人間の態度かというのは百も承知です。でも何と言いますか、無茶を承知で言いますがどうか堪忍して頂けませんでしょうか?この人<sup>エヴァさん</sup>へキサントロ<sup>L</sup>ヘキサアザイソウル<sup>2</sup>チタン<sup>0</sup>使った地雷並に面倒臭い地雷女でカーボン<sup>C</sup>ナノチューブ<sup>T</sup>級の<sup>クラス</sup>筋金入った捻じくれ者ですんで。非を認められても頭を下げられない可哀想な女なんです、あんまりガミガミ怒鳴つてるとヘソ曲げて逆ギレした挙げ句に暴れ出しますんでどうか反抗期且つヒステリックな<sup>テイ</sup>10代半ば<sup>ン</sup>から<sup>エイ</sup>後半年代<sup>ジ</sup>少女<sup>ガ</sup>でも相手にしていると思つて一つ大人として寛大なグエエ!？」

「なんだ貴様絞め落とされては覚醒してまた落とされる無限地獄が味わいたいなら早く言わんか慶一い？」

背中に飛び乗られた一瞬後に完璧な裸絞めを極められた山下は最後まで言葉を吐けずに悶絶の表情を浮かべてー

ー数秒後にその顔を訝しげなものに変え、エヴァンジェリンの細腕が巻き付いたままの首を傾げた後に、ハタと思い当たったという表情で後方のエヴァンジェリンに告げた。

「…エヴァさん、僕もう息してないから効かないんじゃない気道圧迫関連？」

「……………ああ！そうか。そうだな……………」

エヴァンジェリンはしまったと僅かに顔を顰めて吐き捨てて、「なら首の骨をへし折ってやろう。何心配するな、成り立てといえ吸血鬼ならば10秒もかからずに再生する」

「ギャー待った待つエヴァさん確かに些か言い過ぎまグゲゴ、ゴツ……………!？」

「いい加減にしなさい君達は!？」

曲がってはいけない方向に山下の首を捻じ曲げ始めたエヴァンジェリンを青筋を額に浮かべて止めに入る式集院であった。

「……………糞っ……………」

ガンドルフィーニはんな一連のやり取りを黙ったまま睨み付ける様に見ていたが、やがて小さく吐き捨てるとドカツと乱暴な動作で己の椅子に座り直す。

「……………私の。たかが30余年生きた程度の若輩の言葉では、貴様には届かないか、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル……………」  
「……………まあ、そんなことは無い、等と白々しい台詞は吐かんがな。相手にするつもりが無い訳でもないぞ、これでもな」

打って変わって力無いガンドルフィーニの言葉に、エヴァンジェリンは一つ息を吐いて苦悶の表情をしている山下の身体から滑り降り、己の椅子に腰掛けながら僅かばかり柔らかい声音で語り出した。

「貴様が単に私を気に入らないだけで突っ掛かる訳で無いのは解って

いる。話に聞く伝説級の悪者を毛嫌う薄っぺらい正義感だけが貴様の芯では無いのだろう。：私が受け入れた其処の底無しの大馬鹿は貴様の半分生きたかどうかだ、年齢や経験が全てなら私は私の歩んだ年月の35分の1以下しか生きていない青二才になど絆されんよ。ただ貴様の言葉は聞こえるし届きもするが響かない、それだけだ」

「……………!!」

私は面倒臭い女らしいのでなあ、と、エヴァンジェリンは渋い顔で首を回している山下を軽く睨み上げた。

「私二意見シタキヤ少ナクトモ人生賭ケナサイ、ツテヨ。本当二面倒臭エ女ダナ」

「マスター……………慶一様が居て下さり幸いでしたね……………」

「喧しいわボケ従者共!!」

ギアアギアアと騒ぎ始めたエヴァンジェリン一行をガンドルフイーニは何処か口惜しげに見やっていたが、苦笑を浮かべた式集院に肩を叩かれてから暫しして頭を振り、厳格な表情へ戻ると怒鳴り声を張り上げた。

「……………全員静粛にしたまえ!!調書を再開するぞ!!」

「……………で、エヴァさん。結局誰なのあの人？」

「正確には人では無いがな。奴の名はアルビレオ・イマ。あの馬鹿<sup>ナ</sup>の<sup>キ</sup>盟友の一人にして凝り性の変態古本だ」

『クウネル選手の繰り出す不可視の力が目まぐるしく動き回る豪徳寺選手を追い詰めるうう！先程迄とは打って変わって豪徳寺選手は攻撃を避け出しましたね喧囂部長!!』

『あの不可視のエネルギー……………斥力の放出か重力磁場の形成かはたまた不可視化迷彩を施した重量兵器の連撃かは知りませんが、クウネル選手の放つ攻撃は相当の威力を秘めているでしょう。普通に見て

いる限りで闘技場の床に容易く直径数mのクレーターを形成する攻撃が機関銃マシンガン、とまで行かずとも連射式拳銃並の密度で飛んで来ていまずからね。豪徳寺選手が幾らタフでも限界が存在しない筈がありませんし、あの手の攻撃は喰らえば足が止まります。磔られて連射を喰らえば最期でしょうからね、豪徳寺選手は反撃の機会を伺っているのでしょうか」

彼方此方が破砕し、最早原形を留めていない蜂の巣が如き闘技場の上。

クウネルが腕を振るう度に不可視の仮想重力力場が放たれ、瞬間を繰り返して縦横無尽に闘技場内を疾駆する豪徳寺に追い縋る。

当初気弾でクウネルの重力攻撃に対抗していた豪徳寺だったが、何時しか気弾の放出を避け切れない仮想重力力場の迎撃のみに絞り、次第に一方的に攻められる展開となっていた。

「糞つたれが厳しい状況だぜ」

「このままではじり貧だな。あの躊躇無い全力攻撃を見ている限りでは魔力切れも期待は出来んようだ」

中村と大豪院は渋い表情で豪徳寺の不利を語る。

「豪徳寺先輩、なんで反撃しない訳!?!さっきまでは互角っていうか、寧ろこっちの攻撃の方が当たってた感じだったじゃない!!」

「明日菜の姉ちゃん、ホンマの仕組みは解らんがあああのローブ男には攻撃が効かんか、効いとったとしても直ぐに回復してまうような何かがあるんや、ダメージ無いんなら撃つだけ無駄やわ。おまけに直撃ちやくるたびにフツフツフツ姿消して瞬間移動かますんやで、却って反撃喰らい易い状況作るだけや」

「……それに、大豪院さんが言った通りクウネルさんは魔力を何らかの手段で回復、又は補充する手段を持っていると思います。重力魔法は魔力の消費率が高い高等魔法です、幾らクウネルさんが凄い魔法使いでもこんな風に無造作なバラ撒き方は本来出来ない筈なんです。これに対抗していたら、幾ら豪徳寺さんでも気力が保ちません!」

「MP無限で毎ターンベ○マ使うシ○破壊神ーが相手みたいなモンか。アイツがもよ○とでも勝てねえなこりや」



「日本語で喋りなさい、篠村」

「で、でもそんな魔法聞いたこともありませんよ……………!?!」

「まあ、そんなもの普段から使えるならあの胡散臭いの一人で世界救えるアルから、何かカラクリがあるアルな」

「…で、ごござるな。問題はその絡繰りを無しとするような都合の良い展開をクウネルなる御人は到底許してはくれぬ、という点でごござる」  
「……………」

「……………那波さん……………」

「……………大丈夫。駄目ね、見せて下さいって言ったのは私なのに。それにあの人は私の為だけに闘っている訳じゃ、無いのにね……………もう止めて、なんて今の私に言う資格は無いのよ?」

「…つつい、自惚れた勘違い女みたいなみつともない振舞いをしてしまいそうになるわ。と、やや力無い微笑みを湛えて千鶴は傍らの夕映に述べる。しかし、そんな千鶴の言葉に夕映の隣にいたのどかは首を振り、珍しくはつきりとした口調で言葉を返した。

「……………那波さんは、豪徳寺先輩が心配なだけ、です。……………好きな、気になってる人が危ない目にあってるなら、当たり前です。豪徳寺先輩も、他の人も、誰も馬鹿にしたりしないと思います、那波さん」

「最もその後へのどかは顔の色を真っ赤に染めて傍らの夕映の身体に顔を埋める様にしてゴニョゴニョと言葉にならない何事かを呟いており、夕映は苦笑と共にそんなのどかの頭を軽く抱えながら驚いた様に目を見開く千鶴に告げる。

「……………心配して心を痛める位なら応援の一つもした方がまだマシだ。…等と言っても心配は心配ですから。お馬鹿な先輩の言い方を真似るなら、今からそんなにいい女でいなくてもいいじゃんよ……………というやつです。少しは素直にヒロインをやっても良いと思うですよ?」

「……………ふふっ……………」

夕映の言葉に千鶴は思わずといった様子で笑みを溢し、悪戯っぽい口調で言葉を返した。

「……………なんだか綾瀬さん、中村先輩に少しだけ似てきたんじゃないかしら?」

「止めて下さい冗談抜きで吐き気がします」

「ゆ、ゆえ〜……………」

「宮崎さんもありがとう、少し気が楽になったわ」

本気で嫌そうに吐き捨てる夕映にのどかが中村の方を見やりながら慌て、千鶴はそんな二人の様子に再び笑みを溢した。

「…………つけ。リーゼントの分際で物凄えイイ女捕まえやがってからに不慮の事故で死に腐ればよかろうに…………!!」

「喧しいわ」

呆れた大豪院の言葉に構わず中村は両手をメガホンの様に口へ当て、豪徳寺へと轟く大声で喝を入れる。

「オルア豪ウウウ徳寺イイイイツ!!可愛子ちゃん不安にさせてんじや無えぞポケエエエ!!単細胞が単細胞なりに頭使ってんだろうがんんくなモン全つ然てめえらしか無えんだよおお!てめえは難しい事出来ねんだ、何時も通り腹ア括って行けやあ!!それで駄目だったとしてもお!結局他に何やつても勝てねえよてめえはあああつ!!」  
『な、中村さん、それって応援じゃ無いと思います!?!』

「…………てめえにだけは単細胞呼ばわりされる筋合い無えよポケが」

自分の直ぐ真横の空間を巻き込む様にして地へと落ち、クレーターを形成する仮想重力力場をやり過ぎしながら、豪徳寺は小さく毒づいた。

「…………が、まあ確かに俺らしかあ、…無えんだわなあこれは…………」

真つ直ぐ突っ込んでぶちかます。

凡そ全ての戦闘でそんなコナン<sup>元</sup>・ザ<sup>祖</sup>・グレート<sup>脳</sup>上等の闘い方を<sup>麻帆良最強の一角</sup>続けて来たのが豪徳寺 薫である。そんなやり方でバカレンジャーまで登り詰め、結果を出してみせた豪徳寺は、己のやり方を間違っているとは思わない。効率的な、もっと上手い方法は幾らでもあるのだろう。しかし、そんな器用な真似は豪徳寺には出来なかった。

真つ正面から堂々とやり合うのが自分は最も力を発揮できる

のだと、豪徳寺はそう確信しているのであった。

……それが出来ねえのは、いやとり辛くなつちまつたのは。……  
良くも悪くも柵しがらみが増えちまつたからだろうなあ、オイ……………

可愛い弟分の親父を見つけてやる為に勝たなくてはいけない。  
自分なんぞを気にしている酔狂な女の子にいいところを見せ  
てやりたい。

柵が増えるのは悪い事ではない、悪い事では。

少なくともガキの時分の、腕試しか憂さ晴らしか判別のつかない  
ような暴れ方をしていた頃の自分よりは万倍マシな理由で拳を振  
るつていると、豪徳寺は胸を張って言えるから。

……それでも、それに囚われ過ぎてらしくなくなるのはそもそ  
も俺じゃねえ、か……………!!

豪徳寺に難しい事は解らない。

クウネル・サンダースには目下豪徳寺の攻撃が効いていない以  
上、無闇矢鱈に仕掛けても通用しないのかもしれない。

しかし、それならば。

「……通用するまでぶっぱなすのが漢オレつてモンだわな  
あああああつ!!」

豪徳寺はそんな完全に開き直った頭の悪い宣言と共に、飛来し  
た重力球を躲し様クウネルへと一直線に突っ込んだ。

『おおーつと!?!先程まで回避を優先しクレバーに隙を伺っていた豪徳  
寺選手、突如としてクウネル選手へと特攻おおつ!!』

『…確かにあのまま後手に回り続けていればジリ貧で潰されて終わる  
事も充分に有り得ます。クウネル選手がへばらないなら耐え凌ぐ行  
為は詰みでしかない。……しかし今の豪徳寺選手は、我慢比べに自分  
が先に負けると読み切った故の打開行動、と言うよりは……………!』  
「……ただ、自棄になって飛び出した様にしか見えませんが……………  
!」

真意はどうあれ、容赦はしません。と、クウネルは凄まじい勢  
いで迫って来る豪徳寺へ仮想重力力場を連続して投射し、不可視の重

力球が豪徳寺へと正面から突き進む。人体など容易くひしゃげさせ、グシャグシャの肉塊へと変貌かえてしまう重さかさという力の塊を前に、されど豪徳寺は臆おそさずに犬歯を剥き出して嗤わらう。

「……っ！極きわめおとしこ漢魂こあっ!!」

豪徳寺の放った巨大な気弾は先頭の重力球と激突して炸裂、後に続く複数の重力球を巻き込みながら歪よこんだ大爆発を引き起こした。

「あんな舐なめんなあっ!!」

吼えながらクウネルの攻撃をやり過ぎた豪徳寺は光の幕を引き裂きながら突貫し、クウネルへと拳を打ち込もうとする。

「…舐なめているのは貴方でしょう」

しかし、爆発を越えた先に立つクウネルは冷たくそう言い放ち、力ある言葉を解き放つ。

「リコフオス アルトウス パノゴメー スペーライオン  
昏こく 深く 冷ひやたい 害がい！」

解き放たれた夥おほしい数の仮想重力力場は真っ直ぐ突っ込んで来た豪徳寺へとカウンターとなり真面に直撃。圧縮されていた重力の弾ける甲高い音が無数に重なり、幾重にも歪よこんだ歪む空間の中央に豪徳寺は呑み込まれた。

「うわぁーっ!!」

「あかんモロ直撃や!?!」

圧倒的な力の重層空間に取り込まれた豪徳寺の姿にネギと小太郎は焦りの声を上げ、会場のあちこちからもどよめきに似た悲鳴が上がる。

ただ、そんな中で口端を上げ、ニヤリと笑みを浮かべる者、二人。

「ま、紛れもなくトドメとしてぶっばしたモンだろな。実際俺らが喰らえば普通にヤベえわ」

「だが、しかし」

と、大豪院は楽し気に中村の後へ続けた。

「普通にヤバイ程度ではその男は沈んでくれんだよ、クウネル・サンダース」

「おおおおおおお漢漢漢漢才才才才オオオオツツ!!!」  
「……………?!?」

重力球の群を豪徳寺へと直撃させ、クウネルが或るかないか程度に気の緩みを見せた瞬間、その割れんばかりの咆哮は轟いた。

高密度、大質量の重力影響下にあつて歪む空間の中央に金色の光が垣間見える。次の瞬間にそれは溢れんばかりの金色の瀑布となり、空間歪曲を起こしている高重力影響下一帯を諸共に吹き飛ばした。

「いいや、やっぱ舐めてんのはテメエだオラアアアアアツ!!」

波濤を押し割つてクウネルへと突き進むのは全身を金色に輝かせた豪徳寺その人であった。

「えええ何あれサ○ヤ人!?!」

「……………全身を最大級の気で強化してゴリ押しやがったあの脳筋!!」

「…あの重力魔法を身体強化と気の放出のみで!?!」

「……………くっ!?!」

「遅えんだよボケがああああ!!」

織手を差し向け、迎撃に移ろうとしたクウネルのその手を豪徳寺は腕の一振りですくい除け、逆の拳をクウネルの鳩尾へ深々と突き立てる。

「……………!!」

猛烈な衝撃に身体全体の浮き上がったクウネルの視界に飛び込んで来たのは、己が顔面に向かって鉄槌の如く降り落ちる豪徳寺のチヨッピンングライト降り下ろしの右だった。

『ぜ、全身に光を纏ってクウネル選手の何だかよく解らない攻撃を強引に突破した豪徳寺選手、強烈なボディブローからの打ち下ろし一閃!闘技場の床にめり込ませたクウネル選手へと馬乗りになりましたあ!!』

『マウント・ポジションですね。クウネル選手は正体不明の瞬間移動地味な移動を用いて、度々豪徳寺選手へ奇襲を行っています。物理的に逃げ道を塞いで攻撃を加える腹積もりなのでしょう』

直後、喧囂の解説が正しい事を証明するかの様に、豪徳寺の光輝く両の拳が弾幕の如く、クウネルの顔面に降り注ぎ始めた。

「つしやああ休むな豪徳寺い、そのまま伸しちまええええあ!!」

「このまま物理的に撞り潰せるなら勝機はある、が……………」

「ていうかあれもうマウントじゃ無えだろ、ほぼ中腰だしローブ男の上半身全体に拳当たってるしローブ男は次第に埋まってく……………」

「指摘するべき点は其処では無いでしょうが……………」

「ひ、ひひひ挽き肉みたいになつちやいますよお姉様、お兄様ーっ!」  
「いやならねえだろ、旦那方の見立てによると分身体だぜ野郎の身体は」

歓声を上げる中村の一方で大豪院は懸念の声を洩らす。段々感覚が麻痺してきたのか死んだ魚の様な目で淡々とツツコむ篠村に、更にツツコミを入れる高音の声にも力は無い。一人わたわたと慌てる愛衣にカモは落ち着けと声を掛けた。

『わ、わ!これって豪徳寺さん勝てますか!』

「…あのまま逃げられなければ可能性はあるアルが……………」

「拙者らの見立てではおそらく……………!!」

歓声を上げるさよに古が唸る様に返事を濁し、楓が言葉を続けようとしたその時、何の前触れも無く屈む豪徳寺の傍らに現れたクウネルが、横合いから豪徳寺の顎を蹴り上げてその身体を宙に浮かし、駄目押しの仮想重力力場を上から叩きつけた。

唐突に殴り付けている相手の手応えが掻き消えたと思つた次の瞬間には身体が持ち上がる程の勢いで顎を蹴り上げられ、重力に潰された。

豪徳寺の感覚でクウネルの動きを説明するならそれ程にどう対策のしようもない、理不尽なものであった。

……………悪い方の予想が、当たっちゃったかよ……………!!

豪徳寺は内臓が丸ごとひっくり返つたような錯覚を感じる程に凄まじい重圧を全身に感じながらも拳を握りしめて前方に突き出

し、気弾を撃ち放った。

確かな手応えに霞み始めた目を見開けば爆裂した気弾の衝撃を喰らって吹き飛ぶクウネルの姿が歪む視界に入り、豪徳寺は笑みを洩らしながら物理的な重圧を払い除けて身体を起こした。

………身体を元通りにしてんじやなく、分身体を瞬間的に再構成してんだなあれは。んで恐らく好きな座標に再構成が可能だから致命打を受けた時点で古い分身を破棄して有利な位置から現れて反撃可能、と………

物理的な拘束も意味無えとかほぼ詰んでんな、とボヤきながら豪徳寺が完全に身体を起こすと、丁度闘技場の端まで吹き飛んでいたクウネルも身を起こす所だった。

『り、両者共に立ち上がりましたあーっ!? 打撃、気弾に正体不明の攻撃と、尋常でないダメージを双方受けている筈ですがその動きに衰えは感じられません!! 試合前は想像だにしませんでしたが、この闘い不死身VS不死身の様相を呈して参りました!!』

『………違いをあげるのならばまさしく、二人の不死身振りの理由でしょう。豪徳寺選手のそれはタフネス……の一言では説明出来ない凄まじさですが、それでも桁外れの打たれ強さと体力という表し方でまだ理解出来ます。しかし、クウネル選手のそれは全く得体の知れない何かですね。試合時間も半ばを過ぎましたが、あちこち傷付いた様子の豪徳寺選手と違いクウネル選手の身体には幾多の攻撃を受けながら未だ傷一つ見受けられません。一見互角の勝負ですが、クウネル選手には消耗している様子が感じられません』

このまま行けば恐らく先に力尽きるのは豪徳寺選手の方でしょう。と、喧囂は重々しい調子で言葉を締め括った。

「………どう思いますか?」

「解説の言う通りでしょうな。豪徳寺の最大火力であるクウネルとやらの構成体を吹き飛ばせん以上どれだけ攻撃を加えようが無意味です。どちらも強みは耐久力であり、戦法が噛み合い過ぎた為に膨大であつても無尽蔵でない豪徳寺が削れているのです」

何者ですかあれは？と、エヴァンジェリン一行を連行してからすらむい達の転移によって再び会場に戻って来た教師陣営の片割れ、杜崎が高畑へと訪ねる。

「……一言で述べるなら古い知り合い、となりますが………言ってしまうえば赤き翼アラルブラの一員、ですね………」

「……それはまた………」

観客席の屋根上にて立ちながら渋い表情で絞り出す様にして答えた高畑の言に、杜崎もまた呻く様な調子で言葉を返した。

「…では差し当たってあれは全力で無いと。まあ当然でしょうが」「なぜそう思われますか？」

高畑の問いに杜崎は愚問ですな、と鼻で笑って答える。

「流石に英雄様御一行の顔ぶれと成りは木っ端魔法使いの私でも存じ上げていますよ。西の長殿やかの伝説の傭兵の他は生死不明、のとことでしたが……あの瓢箪爺いめが一体幾つの厄ネタを抱えている黒幕秘密主義者めが……！」

「……いや杜崎先生………いや間違いなく学園長は知っておいでか……ネギ君達の話では図書館島の奥に定住しているらしいし、幾ら何でも勝手に出入りできる様な所でも無いし………」

瞳の奥に剣呑な光を宿らせて己が属する組織の最高権力者に対して怨嗟を唱え始めた杜崎の様子に、近右衛門のフォローを試みかけた高畑だったが、状況的に庇い立てできる点が思い当たらず言葉を濁す。

「……まあ妖怪総大将ぬらりひよんの邪智暴虐については後程追求するとして話を戻しますが、ともあれあのローブ男の戦闘に於ける役割は純後衛に近いのでしよう？それで武道馬鹿のあいっら相手に近接戦闘で張り合ってみせる裏トップクラスの水準レベルには脱帽ですが、あの妙な分身体の術式を態々引つ張り出してまで畑違いの分野で試合に臨んだり、使う魔法に関しても即死級のものを使用せずにいたりともまああからさまに手加減をしているのは見て取れますよ」

何より、と杜崎は前置いて、口端を歪めながら締め括った。

「英雄ホンモがついこの間まで表にいた学生には負けられんでしょう？」



「……………成る程……………」

語り口は皮肉気な調子を含みながらも、素直な賞賛の意を秘めた杜崎の返答が嘗てのナギ・スプリングフィールド一行を知る身としてはどうにも面映ゆく、なんとはなしに返す言葉を思いつかず高畑は相槌を返した。

「……………まあもつとも……………」

と、杜崎はゆっくりとした歩調で前に出るクウネルを見下ろしながら颯めっ面で言い捨てる。

「恐らく浅からぬ付き合いなのでしょう高畑先生には悪いのですが、私はあの御仁どうも好きになれませんな。何やらあの馬鹿共を気にかけている様ですが、武道家相手に試合で写し身を繰り出すのは私事ながら、非常に気に入らない」

「貴方は本当に打たれ強いですね、豪徳寺君。まさかあれを堪える所か弾き返して反撃をしてくるとは……………試合の範疇で貴方を時間内に倒すのはどうやら私には難しいようです」

「…その言い方だと試合でない実戦なら、でもって時間制限が無けりゃあ俺に勝つのは余裕だって言ってるようにしか聞こえねえな。……………つくづく癪に障る野郎だてめえは……………!!」

向かい合い、両手を広げて声に感嘆の色を滲ませるクウネルに、豪徳寺は怒りを滲ませて獰猛な表情で睨み下ろす。

「こうなりやとこん消耗戦をやってやろうじゃねえかよ！余程自慢のお人形みてえだが、例え今のでめえが不死身でも俺は正面からてめえをぶっ潰す!!」

ボウ、と豪徳寺の全身を再び黄金色の光が覆い、両腕に気が圧縮されていく。

クウネルはそれに倣って構えを取るでも無く、フードの奥の眼へこれ迄に無い鋭いものを滲ませ、懐へと腕を差し込みながら口火を切った。

「……………いえ、豪徳寺君。恥を偲んで言わせて貰いますが、返す返すも私は貴方を見縊っていました。理由は幾通りにも、如何様にも思い当た

りますが、それをこの場で告げる事には貴方を侮辱し、私の株を更に貶める以上の意味合いは見出だせませんので、口には出さずにおきましよう」

貴方に倣って私も一つ、単純明快に宣言させて頂きましょう。と、クウネルは言い放つ。

「私の実力では貴方を殺さずに倒し切るのは難しい。しかし未来ある、しかも旧友の忘れ形見がこれ以上無い信を置く一人である貴方を殺めるのは忍びない……………故に私はこれに頼るとしましょう」

そう言つて懐から引き抜かれたクウネルの細い手指には、見覚えのある形状のカードが挟まれていた。

「あれは…………!?」

「アーティファクトカード!」

驚愕に目を見開き呻いた篠村の声を遮る様にネギがそう叫んだ。

「世界の頂点に近い者達の力量をお見せしましょう。如何なタフネスを誇る貴方であろうと、彼等には決して耐えられない」

……………本気、だな……………

豪徳寺は我知らずに競り上がってきた粘性の高い血液混じりの唾液を飲み込む。

言動のいけ好かない相手ではあったが、クウネルの実力が本物であることはこれ迄の闘いにて豪徳寺は充分に理解出来ていた。此方を抑え付ける重圧の類を発しない為に解り難いが、嘗て闘ったエヴァンジェリンや白黒コンビと遜色ない実力を目の前の男は備えているのである。

…………喧嘩は相手選んでやるモンか? まあ普通はそうなのかもしれないねえなあ……………

自分一人では、到底勝ちの目など見出だせない相手なのかもしれない。

……つても、んな泣き言は俺が一番嫌いな類いのものだけ  
……!!

されど、戦力比だの相性だの小難しい理屈を豪徳寺は日々考え  
て喧嘩をしない。全力でぶつかり、必倒の意志にて拳を振るう。そう  
しなければ勝てる勝負も勝てなくなると豪徳寺は理解していた。

「……出来ねえと思いつながら出来る事なんざ何一つ有りはしねえ。て  
めえは俺よりも格上か？だとしてもそれは俺が敗ける理由にそのま  
まなりやしねえんだよ!!」

豪徳寺は爆発的に内在している気を全身の強化に充てて全力  
放出。最早目映い光の巨人と化した豪徳寺はクウネル目掛けて飛び  
出す。

迎え撃つクウネルは来たれアテアットの言葉と共にアーティファクトを  
顕現。幾百という数の螺旋状に宙へ浮かんでクウネルの周りを取り  
巻く書物の群を召喚した。

豪徳寺が突進しながら撃ちだした二つの巨大気弾が、傍らの一冊を  
手に取り逆の手に持つ葉を手挟んでから引き抜いたクウネルへと突  
き進んで――

「神鳴流奥義……!!」  
「っ?!」

――直後、斬り裂かれ四散した気弾の影から細身の  
野太刀を振り上げた眼鏡の男が、豪徳寺目掛けて突っ込んで来た。

「百裂桜花斬・二ノ太刀!!」

「が、あ……っ?!」

一瞬に満たない刹那の合間に多重の斬撃が男から繰り出され、  
豪徳寺の全身を打ち据える。最大限の身体強化により最早戦艦主砲  
の直撃にすら耐え得る筈の気の鎧が容易く斬り裂かれ、肉が潰れ骨の  
軋む激痛いたみを豪徳寺は全身に受ける。

「……こ、の期に及んでっ、何処まで舐めてんだてめえはあああつ  
!!!」

控えめに表現して大打撃を受けた豪徳寺だが、怯まず咆哮を一  
つ上げて男へと飛び掛かる。

豪徳寺の怒りは攻撃を受けたからでは無い、その攻撃ざんげき

が刃を返した峰打ちによるものであったからだ。無論のこと試合に於ける刃物の使用は大会の規則にて禁止されている。しかし豪徳寺はそれ以外の意志、手加減の意図を受けた攻撃から感じ取っていた。

則ち、本身の一撃では危険でしょうから。という気遣いや配慮、情けや慈悲の念とも言えよう余裕の表れ。

大仰な言い方をするのならば真剣勝負に於ける武人としての礼儀の欠如に豪徳寺は憤ったのであった。

「零距离爆撃ならどうだオラアアアアアツツ!!」

憤怒の形相を浮かべた豪徳寺は野太刀を振り切った姿勢の男へと全力の右拳を叩き付け、接触イシバクトの瞬間に気弾を放出。轟音と共に光の爆発が掌を翳し防禦うけに入った男を包み込んだ。

『……………、豪徳寺選手の特攻に何やら大量の書物らしきものを何処から取り出していたクウネル選手!!ローブを脱ぎ捨て?やはり何処から取り出した長大な刀にて猛烈な反撃を繰り出しましたが、恐るべきタフネスの豪徳寺選手から渾身の更なる反撃!爆撃をまともに喰らったあああああつ!!』

「……………今のは……………!?!」

「俺が知るか。でもよお……………」

「ああ……………!?!」

「……………今……………お父様やった……………えらい若い、姿やったけど……………!?!」

固唾を飲んで豪徳寺の試合を医務室にて辻や刹那と見守っていた木乃香は、驚愕に掠れる声でそう、呟いた。

「……………ほおーう……………」

「……………な……………!?!」

気弾の爆裂による光の残滓が消え失せ、視界が開けた闘技場の  
上。

豪徳寺の拳を掴んで止めている浅黒い肌の二mはあろうかという白髪の巨漢は、感心した様な唸り声を上げた。

「いいパンチじゃねえかよ、気もよくその歳でここまで練り上げたなあオイ」

二カツと人好きのする笑みを浮かべた巨漢は、空いている右の拳をと握り締めてゆっくりと振り被る。

その瞬間。

選手席にて見ていた中村の背筋に怖気が走り抜けた。言葉にして表現しようの無い、一言で表すなら戦慄としか言い様の無いそれがもたらす衝動のままに中村は血相を変えて――付き合いの長い大豪院すらも見たことの無い程の慌て様で――手摺から身を乗り出し、豪徳寺へ向けて叫んだ。

「避ける豪徳寺いいいいいつ!?!」

「……………!?!……………つ!!」

悲痛なものさえ感じる中村の絶叫に豪徳寺は驚愕から来る呆けから立ち直り。

直後全身に再び気を巡らせ、歯を剥き出しにしながら身体を回し、全力の左拳を繰り出した。

巨漢の放った突き上げる右と豪徳寺の内側へ切る左が交差し、て。

直後、豪徳寺は鳩尾に喰らった右拳の衝撃によって冗談の様に高く、空へと打ち上げられていた。

「……………つ痛えなく……………お、血い出たわ。本気でやるじゃねえかあのガキ」

「……………つあんの、馬鹿が……………!!意地張る場所考えやがれよ!?!」

「中村!!」

「あれはヤベえ、下手しなくても死ぬ!!」

「……………つ!!……………先輩!?!」

グシャリと己の前髪を握りながら呻く中村に大豪院が顔に焦りを浮かべて声を掛け、今の一撃が危険な代物であった事を半ば自棄な口振りで中村は返す。

千鶴の見上げた豪徳寺は、遠目にもしかと理解<sup>わか</sup>る程に重傷<sup>じゆう</sup>だった。

「…………げ、があ……ぐ、あああああああああつ!?!」

優に二十m以上も打ち上り宙に舞う豪徳寺は、東の間己の状況も何もかも忘れて身体を二つに折り、苦悶の声を上げた。

それは只の右拳であった。それも豪徳寺の放った左拳と巨漢の右拳が擦れ合い、互いに当て所を微妙に外していた為に、豪徳寺の受けたダメージは本来のそれよりも幾分軽減している。

その上で、そのたかが拳の一撃は豪徳寺の強靱な気の防御を頑強な肉体を歯牙にも掛けずに破壊した。

……………肋が……………完全に、イカれやがった……………!!……………この、感じは……………胃が、破れちまったか……………!?!

腹を中から二つに引き裂かれた様な激痛に定まらぬ思考の中で、兎も角豪徳寺は追撃に備えて身体に喝を入れるが、痛みには頭は回らず四肢は鉛の様に重く、全身に力が入らない。

唯の一発で豪徳寺は根刮ぎを持っていかれていた。

『構えとれ小僧。守護<sup>まも</sup>らねば貴様、命が無いぞ』

それでも豪徳寺が藻掻く様にして空中で身体を返したその時、頭の中へ直接そんな声が響いた。

「っ……………!?!」

豪徳寺が何とか身体を捻り、遙か下となった闘技場を見下ろすと、そこには小さくなったフード付きのローブ姿をした男がいた。

「……………やれやれ。」

まるで童子のように小さいその男は深い嘆息を一つ洩らす。

「二十を過ぎん、それも半ば表の若造に……ここまですることもないじやろうが……詠春はまだしもあの馬鹿二号は……下手せんでも死ぬぞ」

まったく……、と尚も愚痴を溢しながら小さな男は魔法を紡ぐ。

それも魔法の才を持たぬ一般人の観客達にすら感じられる程

の莫大な魔力を発しながら。

その様子に今度は篠村や高音といった魔法関係者達が血の気を引かせる。

「……………っ!?篠村!!」

「お兄様!!これは……………!?!」

「…構成してる術式の数に複雑さ、おまけに漏れ出てる魔力の量からして……………最上位魔法、恐らく水系統、か……………?……………だとしてその詠唱圧縮してほぼ無詠唱でこの早さ、何処の化けモンだ!?!」

「……………そんな!?豪徳寺さんが!?!」

「……………高畑先生!!」

「……………あれは、ゼクト……………!?!アル、やり過ぎですっ!?!」

「……………安心せい、殺さんし後遺症も残さん。だからこそその水じや」

フードの奥に灰褐色の髪と瞳を持つ少年の姿をした男は小さく呟き、その強大なる力を解き放った。

「…斯くして全てを水面の底へ 終末と創世 祖はただ荒れ狂う

存在 プリミラー オーケアノス 溢れる大海!!」

力ある言葉により膨大な魔力は天へと昇り。

数瞬の後、空は全てが莫大な量の荒れ狂う水塊に覆われ、陽の光が遮られた会場内は黄昏時の様な薄闇に包まれた。

『……………え……………は、あ……………!?!』

『……………海が……………空に……………!?!』

実況の朝倉も、解説の喧囂すらも言葉を失ってしまうような。そんな非、現実的な光景。

一般人は元より、危機的状况には素早い反応を見せる麻帆良の勇者達迄もが呆けた様に空に浮かぶ海を見上げていた。

その天地創世の序章が如き幻想的な光景から最初に立ち直ったのは中村であり、直ぐ様傍らの篠村の腕を掴んでその身体を揺さぶりに掛かる。

「おい、呆けてんな篠っち!!あれは何だ豪徳寺は無事かオイ!?!」

「……あ？ああ………」

「呆けんなつーに!!」

「痛ってえ!?!……てんめえ………ああ、あれは ブリミラー オーケアノス 溢れる大海、水系魔法の最上位魔法だよ。町一つを易々と呑み込んで水没出来る桁外れの水を生成してその莫大な質量で押し潰すか、若しくは単純に水攻めに使うかすんのが主だ」

「……付け加えるなら、特殊な付随効果の無い単なる純水を大量発生させるだけの魔法である為に、最上位魔法の中では習得が容易な部類で純粋な火力に於いては最も低いわ………あくまで最上位魔法の中では、だけれどね………」

「じじ、実際は魔法操作の加わった凄まじい水圧が水塊の中に取り込まれた対象に襲い掛かりますから………加えて他の魔法と違って、水系統の魔法は発動した後もその場に留まり続けるものが多いんです!あのままじゃ中の豪徳寺先輩が………!!」

「………つまり?」

「あの中にあのままなら豪徳寺は圧死して潰れた西瓜になるか窒息して土左衛門になるか、だ」

「豪徳寺さんがヤバいんですよおおおお!!」

いまいち理解が及ばなかったらしく首を傾げて訊ね返す中村に淡々と大豪院が返し、ネギが絶叫を上げた。

「……頃合いかの………」

魔法が発動してから一分弱。観客達のざわめきが徐々に大きくなりつていき、空中つてカウント入るんですか!?!と喧囂に叫んでいる朝倉を尻目に小さな男は眩くと、腕を横合いへ一度大きく振った。『!!、皆様ご覧下さい!空で荒れ狂う大海原の如き水流が分裂していきます!!』

まずモーゼの十戒が一節の様に水塊が二つに割れ、二つが四つに、四つが八つに、とあつという間に水塊は細かく分かれていき、臙て一つの塊としては視認出来ない水蒸気の靄の様に薄く広がった。

「それ」



と、小さな男が軽く握っていた五指をパツと広げる。すると靄は更に高度を上げて昇って行き、遙か空の彼方に消え去った。

「……………え、えつと……………あの、クウネル？選手……………」

「儂をそんな巫山戯た名で呼んでくれるな娘子。それよりも、気を付けい」

「はっ」

「一雨来るぞい」

ポツリ、と、朝倉の鼻先に一滴の雨粒が落ちた。

「え……………つ!？」

誰かの溢した眩きが驚愕の声に変わる。

麻帆良学園祭二日目のAM10:16。麻帆良学園都市を中心として、周辺地域には約二分間の間通り雨が降り注いだと後に記録されている。

「……………聞こえてはいないでしょうが、豪徳寺君。これが世界の領域です」

いつの間にかアーティファクトを消し去り、元の姿に戻ったクウネルは、水塊から解放されてからピクリとも動かず、真つ逆さまに落下してきた豪徳寺を念動魔法で受け止めつつそう言った。

『ご、豪徳寺選手ピクリとも動きません!!これは勝負ありでしょうか!?!』

『濁流に呑み込まれた人間は水の激しい流れによって翻弄され、当人が耐え得る潜水時間よりも遙かに短い時間で窒息に至ります。場合によっては早急に心配蘇生法を豪徳寺選手へ施す必要があるでしょう』

クウネルはゆっくりと豪徳寺の身体を闘技場の床へ横たえ、静かに歩み寄りながら尚も言葉を紡ぐ。

「ゼクトにも叱られましたけど、如何に貴方達が強かろうとこんな大人気ない手段を用いてまで、普段の私ならば勝ちに拘りはしません。ですが何としてでも、今のネギ君にナギの後を追わせる事を容認出来ないのです。……………ネギ君は無論の事、貴方達はまだ若い。よく学び、よ

り良く世界を知ってからでも、真実を知るのは遅くはないでしょう」  
カウントをお願いします、と傍らに控えていた朝倉にクウネルは告げて、豪徳寺の側に立ち止まる。

「……勝ちを宣言させて頂きましょう」

「却下だこの糞野郎が」

ガシリ、と。

身動きもせずに苦悶の表情で横たわっていた豪徳寺が突如として跳ね起き、片手でクウネルの足を掴んだ。

「……っ!?……………馬鹿な…………!?」

「舐めんなってよ。何回言ったよ俺あ?それがてめえの敗ける理由だボケエ!!」

……俺の最後の、とっておきだ……………!!

……………これで駄目なら、俺の負けだろうよ……………

豪徳寺は掴んだクウネルの足を引き寄せながら、空いた右拳へ体内に残っている気を全て集中させていく。

その集束していく気は僅かに漏れ出る余波だけで付近の床に不気味な亀裂を生じさせ、右の拳は太陽の如き凄まじい光を発している。

これは先程の小さな男が繰り広げた一種現実離れしたそれと違い、極めて容易に、近くにいたのが危険と理解出来る代物だった。

『部長あとよろしく!!』

『……………え〜皆様……………』

「皆まで言うな解説総員待避しろおおおおおっ!?」

これは駄目だと一目散に駆け出す朝倉の言葉を受けて喧囂が避難を呼び掛けるよりも早く、ある意味慣れてきた観客達は蜘蛛の仔を散らす様に四方八方へ逃げ出していた。

「待避がビミョーに間に合わねえ、防壁張れ誰でもいいからあああっ!?」

「今度はどんな大爆発よおおおっ!?」

「いいから兎に退がるでござる!!」

豪徳寺が気を集束させ始めた時点で、ある意味勝手知ったるネギ達一行は一目散に避難を開始していたが、一部の人間の逃げ遅れによりモタついていた。

「は、早く逃げますよ那波先輩!!」

「……………っ!……………ええ……………でも、だけれど……………!!」

愛衣に腕を引かれる千鶴は、避難の指示に反対こそしないものの、その動作には明らかに精彩を欠いていた。

「……………豪徳寺先輩は、あれじゃあ……………!!」

最早態々言葉にするまでも無い当たり前の話ではあるが、千鶴は豪徳寺の身を案じていた。

具体的な戦力の差など理解は出来ずとも、素人目にも豪徳寺が傷付いているのは理解<sup>わか</sup>る。豪徳寺は弱音を吐かず、辛そうな素振りも見せはしないが。

今の豪徳寺が無理をしている事を、千鶴ははつきりと感じ取る事が出来ていた。

辻と刹那の、山下とエヴァンジェリンの死闘を素知らぬ顔で見物しているながらそれかと、自分本意で身勝手な女の自分を笑う自分が心の中には居た。豪徳寺がそれ<sup>心配</sup>を望んでいない事も理解していた。

……………でも、それでも……………!!

……………もしも、死んでしまったりしたら……………!?

それでも、こんなものは理屈では無い。

惹かれている男が危ない状況を、案ずるなど言う方が無茶な話なのだから。

「…勝つから、安心してろ那波<sup>あ</sup>あああああつ!!!」

「っ!」

だから<sup>豪徳寺</sup>漢はそう叫んだ。

見えていたのか、聞こえていたのかは解らないが、千鶴へ向けてそう言った。

それを受けた千鶴は一瞬目を見開いてから馬鹿、と小さく口から溢して。

一滴の涙を目尻に零しながら愛衣の誘導に従って退がり始めた。

「豪徳寺君っ!？」

「真、漢魂おとこだまああっ!!!」

クウネルの身体に叩き付けられた拳から膨大な気が弾け散り。

闘技場は半球形の放射状に広がる光に包まれ、直後衝撃波が周りを全てを薙ぎ払った。

同時刻、龍宮神社を視界に入れていた周囲の人間は、天へと立ち昇る目映い光の柱を目にしたという。

「……………もう崩壊すんじゃないか龍宮神社?」

「少なくともこの闘技場はもう駄目だな」

「……………ねえ、本当に消滅してんじゃないのよ!？」

「何アルか今のは、滅びのオーラストストリームアルか!？」

「寧ろ核爆発のそれに思えたでござるが……………?」

もうもうと白煙が立ち込める闘技場及び観客席全般。

遂には完全に砕け割れ、水堀から流れ込む水によって完全に水没し始めた闘技場の中央にて精魂尽き果てた様子で座り込む豪徳寺を見やりながら中村達は言葉を交わす。

「……………今のは本当に気の爆発か?空にキノコ雲上がってねえだらうなオイ……………?」

「……………範囲こそ狭いながら最上位魔法一步手前位の破壊力はあったわね……………」

「ば、爆発の余波だけで、此処まで衝撃が到達したんですか!？」

「……………消し飛んだのではないですか、クウネルさんは……………?」

「あ、あわわわわわ……………!？」

「……………なあネギ、今の見たことあるか?」

「……………無いよ……………」

『レーザービームみたいでしたねー』

『……………豪徳寺選手の渾身の反撃カウンターが決まりました!!まるでSF小説の

レーザーキャノンのような光の柱がクウネル選手を捉えたかに見えましたが……!?!』

『見たところ空の彼方まで突き抜けて行きましたね、衛星でも落ちてきそうな凄まじい一撃でしたクウネル選手の姿が確認出来ません、よもや今の一撃で消し飛んでしまったのでしょうか?』

三々五々と散っていた観客達が恐る恐ると戻る中、豪徳寺はゆっくりと身体を起こしてフラフラと覚束ない足取りながら二本の足で立ち上がる。

「これが、私の!全力全開!!…的な一発だなオイ。もう気は空っぽだらあいつあ」

「後先を考えないという点では実にらしいがな。気の運用を更に昇華させたか、俺達でも真面に喰らえば消し飛ぶな」

ケケケと愉快気に笑う中村に上機嫌で相槌を打つ大豪院。

「……捉えた様に思いますか?」

「消し飛んだ。それは確かだ」

「……!なら、豪徳寺先輩の勝ちやなあ〜!」

医務室では辻がその眼をしかと開き、モニターを凝視しながら断言した。

「……これは、勝ったかな?」

「……………ああ、勝ったよあの番カラは」

調書を取っていたガンドルフイーニ迄もが何時しかペンを持つ手の動きを止め、固唾を飲んで見守っていた一室。

座り込む豪徳寺を目にしながら沈黙を破り、そう問い掛ける様に呟いた山下に、エヴァンジェリンは確かにそう返した。

「少なくとも私なら此処まで見事にしてやられたなら敗けを認めているからな。勝ったと誇ってもなんら恥では無い、恥知らずはあの変態の方だ」

「悪いな、那波」

と。

身動きもせず豪徳寺を見守っていた那波は、豪徳寺が小さくその様に呟いた気がした。

「……………先輩……………!!」

『ク、クウネル選手、突如として闘技場内に現れ出でたあーっ!? その身体は今だ傷一つありません! あの核爆発が如き一撃すらも無傷で凌ぎ切ったというのでしょうか!』

「……………消し飛んだと、思ったんだがな……………」

「……………ええ、完全に前の身体は跡形も無く消滅しました」

「……………成る程、ね……………」

そう、クウネルの分身体は豪徳寺の奥の手、真・漢魂によって消滅していた。

しかし。

「……………スピアを用意出来ませんなんぞとは一言も言っただけでねえわな、あんたは」

クウネルはクウネルなりに徹頭徹尾、勝ちに来たという、ただそれだけの話である。

「……………貴方の勝ちです、と……………申し上げたい私があります。貴方が成した事は、そう胸を張れる偉業です。……………しかし……………」

「それ以上は、言うな」

豪徳寺は静かに、しかしはつきりと怒気を籠めた一喝により、クウネルの言葉を遮った。

「そんな上から目線の御慰みはいらねえ、聞きたくもねえ。てめえが蘇るなら起き上がって来るのが嫌になるまでぶっ潰しつづけりやいだけの話だ。…それが出来なかった俺の未熟だ、それが全力で挑んだ俺の結果だ!! 勝たなきゃあ意味が無え? 尤もだあな、でも漢には、意地があんだよ!! てめえは俺から負けすら奪い取る気か!」

豪徳寺は背後に立つクウネルへ振り返らぬまま告げた。

「……………てめえの勝ちだ、そのつもりでまた出て来たんだろうがよ」

「……………ええ……………」

クウネルは豪徳寺の背中に対してゆっくりと一礼し、そつと言

葉を投げ掛けた。

「貴方は立派な武道家です。渡り合えた事を誇りに思いましょう」  
「てめえに言われても全く嬉しくねえな」

第四試合、決着。

勝者　クウネル・サンダース。

20話 まほら武道会本選第5試合 ネギVS高畑

「そんな子供みたいにブスつとした顔をしていないで、目を閉じてお休みになって下さい豪徳寺先輩。お怪我は魔法で治して貰ったとの事ですけれども、心身共に消耗しているから休息させるように、と先生が仰っていましたよ?」

試合が豪徳寺の棄権という形で終わってから、豪徳寺は直ぐに担架で運ばれて治療術士と医師の集中治療を受けさせられた。

豪徳寺の受けたダメージは激戦に見合った相当なものであり、全身打撲や裂傷から始まって肋骨の半数以上が折損、胃の外壁が破れて軽度の内臓破裂まで引き起こしていたのである。

『腹腔内出血と腹膜炎を併発していたのに何故君はショック状態にもなっていないければ意識消失にも至っていないんだ!?』……なんて、随分と慌てていらつしやいましたね、お医者様も……」

「……意識不明の重体だった方が良かったみてえな言い方はそれでも医者か?……って話だがな……」

「あらあら、漸く口を開いてくれましたね、先輩?」

行儀良く椅子に腰掛けながら甲斐甲斐しく世話を焼く千鶴は何が可笑しいのかクスクスと口元に手を当てて上品に笑い、そんな様子を幾分恨みがましい気分ですベッドに横たわった状態の豪徳寺は見上げるが、ゆつたりとした服越しにも圧倒的質量を伺わせるその胸部装甲おほほいを下から凝視する羽目となった為、一瞬の硬直の後豪徳寺は身体毎ソツポを向いた。

「先輩?」

「何でも無え。……なあ、那波……」

……無様な所見せちまって、悪かった……

豪徳寺は寸前まで出掛かったその台詞を呑み込んだ。

豪徳寺としては全身全霊でクウネルとの勝負に挑み、全力を出し



切った。勝てなかったのはクウネルの反則擬き云々は関係無く己の実力不足が原因であり、敗北という結果に忸怩たる想いはあれど、負けという事実自体を恥と豪徳寺は思っていない。

それでも、豪徳寺は千鶴を前にしてバツの悪い想いを抱いていた。勝つと断言して、格好の良い所を見せてくれという求に任せると見栄を切った上での初戦敗退という結果が、単純に豪徳寺はきまりが悪かったのである。

とはいえ、何を言っても言い訳にしかならねえよな……………

加えて千鶴には、決着間際の様子からして相当な心労を掛けてしまった自覚がある。開きかけた口を堅く閉ざし、言い訳などという漢らしくない真似はすまいと、目を閉じて豪徳寺はベッドに横たわった。

「格好良かったですよ、豪徳寺先輩」

「……………ああ……………」

しかし、静かに微笑みを浮かべながら千鶴が投げ掛けたその言葉に、豪徳寺は即座に目を見開いて千鶴の顔を凝視する。

「……………俺の何が。格好良かったってんだよ、お前は？」

低く、唸る様な声色で豪徳寺は千鶴に言葉を返す。

「何が、と言われれば、そうですね……………語弊のある言い方になります。が、全部という言い方になるのでしょうか？」

そんな、ともすれば凄んでいるとも取られかねない豪徳寺の威圧的な態度にも動じず、千鶴は言葉を重ねる。

「私、武道家の方達の事はよく解りません。先輩が拘っているそれを理解しようと努めて大会を観ていましたけれど、やっぱりよくは解りませんでした」

クラスメートや、懇意にしている先輩達が傷付いているのは単純に見ていて辛いですしね。と、千鶴は苦笑する。

「…那波……………」

「でも、それでも。皆さんが生半可な気持ちでは断じて勝負の場に臨んでいない事だけは、痛い程に理解わかりました」

気遣いか、謝罪の言葉か。何事かを告げようとした豪徳寺を静かに

遮り、千鶴は正面に豪徳寺の顔を捉えてはつきりとそう続けた。

「闘いが、勝負事が、争いが生き甲斐だ。……そんな考え方は正直言つて嫌いです。其処まで行かずとも、暴力に訴えなければ物事を解決出来ない人も私は好きになれません。……でも先輩達は違うんですね、そういうのとは。近いひともいるけれど、それだけじゃない。結局は生き方の一つなんだと、そう思えるようになりました」

強くなりたいバカレンジャーやネギ達。理由は千差万別であり十人十色だ。言わば強いのが好きだから、とでも言うべき中村や豪徳寺、愛する者の為にと理由の増えた辻や山下の様な者も居る。強さを身に付ける事が人生に於ける己が価値を高めると信仰にも似た想いを大豪院は抱く。

手段でもあり、目的でもある「強さ」という一つの価値観を豪徳寺達は重要視している、という。言つてしまえばただそれだけの話なのである。

「何かに情熱を持つて、一生懸命になれる人を私は好ましく思います。だから、闘つていた……いえ、喧嘩している豪徳寺先輩は、活き活きしていて楽しそうで……」

格好良かったですよ。と、千鶴は悪戯っぽくはにかんだ微笑みを浮かべた。

「……………俺は……………」

「敗けてしまったならその人は格好悪くて、みつともないんですか？

桜咲さんを、エヴァンジェリンさんを、楓さんを。…豪徳寺先輩は勝負に敗けたから、見損ないましたか？」

「違う」

諭すような千鶴の問い掛けを、豪徳寺はきっぱりと否定した。

「そうじゃねえ。そんなつもりは、無いんだ。……………ただ、俺は勝ちたかった。ネギの為にも、俺の矜持の為にも……………後は、お前に大見栄切ったから、な。……敗けたけど、格好良かった。なんてしよつぱい事お前に言わせたくなかったし、言われたくなかったんだ……………ああ、悔しいんだよ、それが……………！」

何時の間にか握り込んでいたシートに皺を寄せながら、豪徳寺はそ

う溢す。千鶴は笑みを困ったようなそれに変え、洗面の豪徳寺を見やっていたが、聴てそつと上体を前のめりに倒して豪徳寺の頭を掻き抱く様に抱きしめた。

「……………っ!?おい、那波……………!!」

「在り来たりな台詞になりますけれど、次がありますよ豪徳寺先輩」

ムニヨリ、と柔らかく重厚な質量を感じさせながら己の頭を半ば包み込んでしまった千鶴の圧倒的胸部装フカッブおっ甲いの接触到にいろんな意味で焦る豪徳寺だったが、千鶴は構わず額を豪徳寺の頭頂部にコツン、と当たて語り掛ける。

「皆さん言っていましたよ、後は任せておけて。豪徳寺先輩は、全力を尽くしたんでしょう?成果が伴わなかったのが悔しい気持ちは解りますけれど、それでも結果は結果です。直ぐには切り替えられないでしょうけれど、受け入れてください。豪徳寺先輩は、もうやる事をやっつたんです。……………お願いですから、今は休まれて下さい先輩。こんなに傷だらけになって、あんなに血を吐いて……………ボロボロに、なってしまう……………」

豪徳寺の頭へ上から囁く様に掛けられていた千鶴の声が、僅かに震えを帯びる。

「……………心配、したんですよ?…私はまだ、貴方にとって何でも無くて、厚かましいって解つてて。……………それでも……………」

倒れた貴方を見て、胸が張り裂けそうだった。と、千鶴は小さな震える声でそう口にした。

「……………今は、此処にこうして居て下さい。先輩……………」

「……………ああ、解つた……………」

すまねえな、と。

言葉としては口にせず、胸の内だけで豪徳寺は呟いた。

「……………那波、大人しくしてっからもう放せ、っつか離れろ!」

「あらあら、何を慌てていらっしやるんですか豪徳寺先輩?うふふ……………」

「あくあくああああ畜生!!豪徳寺の腐れ朴念仁がああんなええモン持つてる超美人なおにやの子に付き添われといてどうおとおおせ敗けた何だと不貞腐れて碌に相手もしてねんだろな勿体ねえ!!何故神は欲する天才無敵最強美形様に与えようとはせず望まぬ馬鹿阿呆リーゼントなぞに与えてしまうのか世界が間違っついていやがる!」

「いい加減喧しいから黙れ頭の中に味噌の代わりとして糞の詰まった糞以下の大糞。もう試合も始まる頃合いだろうが」

選手席と席の間に跨る様にしながら大仰な仕草で天を仰ぎ、聞くに堪えない罵詈雑言を漏らしているシリーズ・人間の屑に杜崎の冷たい合いの手が突き刺さった。

『さあ皆様永らくお待ちせしました!色々な意味でトンデモな、なんて第一試合からそんなのぼっかりな気もしますがそれは置いておいて!!兎に角凄まじい先の第四試合に於いて重傷を負い、安否の氣遣われた豪徳寺選手でしたが、先程医療スタッフから命に別状は無いとの報せがありました!これより第五試合を開始させて頂きます!!いよいよ本戦一回戦も後半に移って参りますが、この試合はある意味これまでの試合とは趣向の異なる代物と、或いは成り得るやもしれません!!たった一人で学園内幾多の抗争、決闘、馬鹿騒ぎを鎮圧し、麻帆良の半人外達の挑戦を退け続けた渾名は死の眼鏡!!名高き学園都市の暴徒鎮圧兵器、荒くれ共の恐怖の象徴!見た目は老け顔の中年:もとい渋目の大人な教師でありながらその実力は学園広域指導員最強にして学園都市最強の呼び声も高い!!輝く眼鏡は死神の眼光か!?!ハードボイルドなナイスガイ高畑・T・タカミチ、満を持してのエントリーだあああああつ!!』

「老け顔は兎も角、中年呼ばわりは止めてほしいなあ……」

『『『『おとおおおとおおおとおおおとおおおつ!!』』』』』

『死ねや死の眼鏡エエエエツ!!』

『いや、そんなガキにやられんのは俺あ断じて承知しねえ!テメエを殺るのは俺だ死の眼鏡エエ!!』

「高畑先生に何てこと言ってるのよーっ!?!」

「明日菜ー、落ち着きいやーどうどう」

「あの、お嬢様…それは馬の宥め方では……………?」

「まあ鼻息の荒さはそっくりアルな…だいじよぶアルか楓?」

「普通に動く分には問題無いでござるよ。拙者よりも辻殿や刹那は休んでいなくてよいのでござるか?」

朝倉の何気に失礼な選手紹介に苦笑しながらゆつくりとした足取りで入場して来た高畑の姿に観客（主に武道家達）が一斉に罵声とも歓声とも取れない、只管に熱が籠った咆哮を上げる。そんな盛り上がりを余所に、ウガーツ!!と般若が萌えキャラに見えてしまう様な形相で朝倉に向かって吼える明日菜をほわつとした笑顔で宥める木乃香に、辻が座っている車椅子の背後に控えながら控え目にツツコミを入れる刹那と一行はある意味平常心だ。心配気に問い掛ける古に笑顔で答えつつの楓が発した問いに、辻は苦笑しながらも答えた。

「まあ本当なら試合の時間迄は安静にしていた方がいいんだろうし、まだまだ本調子じゃない桜咲…いや刹那には尚更休んでいて欲しかったんだけどね…………」

「…さんが征くと言うならば私が寝ている理由はありません」

そんな辻に皆まで言わせずにきっぱりと言いつける刹那に、辻は困った様な笑みを深くしながらも言葉を続ける。

「…まあこんな調子でね。命がどうたら、って話じゃ二人共無いのは確かだ。一先ずスルーしておいてくれれば幸いだよ」

「イチヤイチャしてんじやねえよ血塗れカツポアが羨ましくなんて無いんだからねっ!?!」

「黙れと言うとろうが」

「ホゲエツ!?!」

最早息をするように宙を舞う中村を当たり前にスルーしつつも、期待六割不安四割、といった緋い交ぜな表情を浮かべている辻や何時もより表情の険しい大豪院の様子に、夕映がふ、と口元を緩めて問いを放つ。

「…何か落ち着かなさ気なご様子ですが、矢張りネギ先生の事が気に

なりますか?」

「……ま、自分の技術を教えてる時点で、そんなつもりは無くてもネギ君はある意味弟子みたいなものだからね……………」

「部活の後輩の試合を見るように、とは中々いかんな。ましてや色々と柵の多いこんな大会だ、気にせず伸び伸びとやってこいとは言つてあるが、ネギの性分からしてそう簡単に割り切れはせんだろうからな……………」

「まあぶつちやけ単純な戦力比じゃネギが勝つ確率なんざとある学園都市の改造美少女、木○ 那由他ちゃんの彼方に飛び去っちゃう位低いんだが、教えた俺らも実際闘うあいつも闘る前から敗ける気で勝負を挑むなんざ性に合わねえんでな。勝つ算段立てて送り出した以上は結果を見届けなきゃあなあ?」

「当たり前のように復活しますね……………」

『中村さん、強いですから!』

辻と大豪院に続けて、鼻血を滝の様に垂れ流しながらも平然と帰つて来ながらあつけらかなと述べる中村のタフさに今更ながら薄気味悪気に問いを発した夕映が呟き、さよが明るく言葉を返す。側から見れば何処か歪んだ光景である。

「……勝算があると思うのか、その馬鹿?私が見た所あの老け顔は、実力的に人の世では世界で少なくとも百より上に入るであろう正真正銘の本物だ。余程の手加減でもあれがせん限りは十中八九あの眼鏡の勝ちで話は決まりだと思ふがな?」

そんな馬鹿騒ぎに対して冷静を通り越し、いつそ冷徹とさえ形容出来る調子でフツノミタマは中村へ言葉を投げる。

「いんや?ぶつちやけ敗けて元々って評価が当然だしご意見に関してちやご尤もだよフツちゅわん。ま、上手くハマれば勝てねえではないつてレベルだが策は授けてあるからなあ。細工は流々、仕上げを御覧じろつてな」

「……………はっ……………」

暇潰しにはなる事を期待しているよ、と呟いて豊満な胸の下で腕を組み、ドツカと椅子の背もたれに体重を預けるフツノミタマの乳

の揺れ具合をしかと凝視しながら中村は頷く。

「…あ、あのー、やっぱりネギ先生はー……………」

「……………んくまあ厳しいアルな……………」

「高畑先生が中村殿達を凌ぐ実力者であるのは紛れもない事実でござる。ネギ坊主はこの二ヶ月でめざましい成長を遂げたでござるが、両者の実力は蟻と象まで行かずとも、兎と獅子程には遠い差でござるうなあ」

「……………つまり勝負になるかどうかも怪しいレベルという訳ですね……………」

「……………いやな、お前ら。魔法使いとしての高畑先生の事をお前らがどれ程知ってるかは俺の知るところじゃねえけど、あの人は実力に於いて本国からA A +の評価を頂いてる本物だからな？とある事情で偉大な魔法使いの称号こそ得ちゃいないが、それに匹敵する程の功績を上げている大魔法使いなんだ。ナンボ天才少年だろうが未だ魔法使い見習いに過ぎないネギ先生に勝ち目なんぞある訳無いだろうが」

不安気なのどかの声を皮切りに言葉を交わす古達に対して呆れた様に声を掛けるのは渋面を作る篠村である。

「……………そう口にしながら随分と熱心に技術を仕込んでいたじゃない。貴方も実の所期待しているのではなくて？」

「やるからには全力を尽くすさ。可能性は0じゃあ無い、そうだろう？」

「……………ふん……………」

「お、お兄様、お姉様！今は応援に集中しましょう!!そろそろですよネギ先生が出てくるの!!」

空気がそぞろ悪くなり始める前に慌ててフォローに入る愛衣の声に应じる様に、朝倉が高畑の後に入場する小さな影の存在を紹介し始める。

『続きまして、そんな麻帆良の最終兵器リーサルウェポンに挑むのは何となんと!!どう見ても小学生高学年を越えてはいないであろう年端もいかぬ小年です!ご存知の方も多いのではないのでしょうか、齡十にして麻帆良女子中学校で教師を営む可愛らしい容貌の天才少年!そのあどけない容姿に似合わぬ多彩にして強烈な武術により並み居る麻帆良の魔人達

を薙ぎ倒し、本戦進出に漕ぎ着けました文武両道の小さな怪物。英国出身の美少年拳士、ネギ・スプリングフィールドオオオオオオツ!!!』  
『へーイ!!ガンバルよショーネン!!』

『うおおおおおおおおつ!!気張れネギ先生、デス眼鏡のクソ野郎を討ち滅ぼせえええええ!!』

『キヤアアアアツ!頑張ってネギ君くく!!』

「……………っ!よし!!」

朝倉の紹介に促される様にネギは気合いの声と共に闘技場内へ足を踏み入れる。予選で雌雄を決した半人外部長クラスや可愛いものの好きの女性客達から歓声や声援の上がる中、ネギはゆっくりと階段を上り高畑に正対した。

「……………そういえば中村、前の試合で豪徳寺をパンチ一発で吹き飛ばしたとかいう褐色の巨漢が現れた時にえらく取り乱してたらしいが、何だったんだ?」

「……………んくくまあ何だ、ヤベえ奴だつてのは他の連中も見ただけ解ったみてえだから俺が特別どうこう、ってんじゃねえと思うんだけどよ?なーんかこう、クモンがあつたんだよ気になるっつーかなんつーか……………後とりわけイケメンでも

無え筋肉達磨だつたつてのに妙にムカつく感じがしてよく……………」  
何だったんだろなあれあ?と、中村は首を傾げる。どうやら当人も過剰反応した明確な理由は解っていないらしい。

「…緊張しているかい、ネギ君?」

「……………うん、正直ね……………」

ふ、と微笑んで声を掛けてくる高畑にややぎこちない笑顔で応え、ネギは一つ大きく息を吐いてから高畑へと言葉を放った。

「タカミチ。僕、今日は頑張るよ。…父さんに負けないために、ついでうのも勿論あるけれど、何より僕を此処まで鍛え上げてくれた辻さん達に応える為に。だから……………」



「ああ、解ったよネギ君」

高畑はネギに皆まで言わず、こくりと頷いた。

「本気でいっていいんだね？」

「……うん!!」

『最強の学園広域指導員VS噂の子供先生!!トトカルチョは死の眼鏡・高畑圧倒的人気です!確かにこの対戦、結果は火を見るより明らかにも思えますが……!』

『しかし組み合わせに比較的恵まれたとはいえ、まぐれや単なる勢いだけでやられる程麻帆良の部長クラスという概念は安くはありません。予選で見たとこ、子供先生は五強バカレンジャーのそれぞれ納める武術をかなりのレベルで習得している様です。外見で判断してはいけないという話でしょうね』

「……やれやれ、高畑先生も程度はどうあれやる気が。大人しく収めてはくれんようだし、どうなることやら……」

「……まあ今更穩便に試合収めた所で遅えダロ。一回戦の半分が漏れなく血塗れジョートー魔法バレジョートー、テカゲン?何ソレ美味しいノ?的なRー18指定確定の凄惨試合だったんだからヨ」

「マアあのヒゲ先生が幾らか手加減したとしても、順当に行けばネギセンサーに勝ち目が無いのはお馬鹿大将の言った通りですヨネー、どうするつもりなんでしようカー?」

「……高×ネギ?ネギ×高は無いか……」

「やかましいわ」

ぷりんの頭をポパチョン!と水っぽい音を立ててはたきながら杜崎は溜息を吐く。

……自分の立場は兎も角、心情的には好きにやらせてやりたいとは思うのだが……少々意味合いは違うが、すまじきものは宮仕え、か……

落ち着いた静かな表情こそ保ってはいるものの、入場する前の様子からして明らかにネギとの試合を楽しみにしている様子だった高畑の姿を思い返して渋面を作る杜崎に、中村がへらへらと軽い笑み

を浮かべながら声を掛ける。

「へいへーいどうしたよゴリランボー？何がそんなに心配かは知らねえがあんま怖え顔すんなやガキが泣くぜ？」

「馬鹿同類が見ても一目でそれと解る様な大馬鹿面よりはマシだろうよ。……それよりも貴様ら、ネギ先生に余り妙な事を仕込んでいまいな？一緒になつてお祭騒ぎに参加している以上偉そうな事を言えた義理では無いが、既にあのローブ男が派手にやらかしている現状だ。あまりやりすぎないようにしてもらいたいものだが……？」

中村の軽口をばつさりと斬って捨てながら杜崎は辻達へと釘を刺す。既に両選手が入場している段階で何を言っても無駄だと半ば理解はしていても、確認をしておかなければ最悪の事態が起こった時に素早い行動が出来ない為である。

「安心して下さい杜崎先生。魔法の存在秘匿の重要性は、あれから私達も勉強して意義は充分理解しているつもりです」

「勝たせる気で技術わざや心意気は仕込みましたが、ネギ先生は聡明で常識を弁えた少年です。杜崎教諭が案じているような事態にはならないでしょう」

「うんうんその通りだぜゴリポン、安心しなあ？」

「……もういい、それ以上喋るな。逆に不安が増して来た……」

「……いや、尋ねていてその物言いは流石に理不尽じゃありませんか杜崎先生……？」

にこやかな笑みを浮かべて（大豪院ですら若干表情が柔らかい）とりなして来る辻達の様子に、何かしら一波乱あるであろう事を半ば確信した杜崎は額を片手で押さええて呻く様に返し、そんな杜崎に篠村がおっかなびつくりながら抗議の声を上げた。

「……ああ、すまん。しかし篠村、今回に限つてはお前も仕込んだ側だろうから聞かせて貰うが、戦力差の割に其処の馬鹿共は落ち着きを残している様に見える。……一体全体何を教えた？勝てるのか、ネギ先生は？」

「……あ………。……上手くハマればワンチャン、つてとこですかねえ……」

「篠村。言葉遣いに気をつけなさい、杜崎先生に失礼よ」

「……うっせえよお前は……えくと、杜崎先生……」

「……いや、解った。もういい篠村、重ねて悪かった……」

何時ものように高音から小言を貰いながらも言葉を続けようとした篠村を静かに制して、杜崎は一つ息を吐いてから闘技場へと向き直る。

「外野が今更何をほじくり返した所で何が変わる訳でも無い話だったな。……こうなった以上は見届けるしかあるまい」

……結局は根っこの部分で、俺も高畑先生もこいつらと大して変わりは無いのかもしれない……

半ば自分達から騒ぎの元を生み出している現状に、苦笑と呼ぶには苦味の強い笑みを浮かべる杜崎であった。

『さあ、間も無く試合開始となります!!様々な意味で注目を集めるこの一戦!果たしてどのような試合運びと成り得るのでしょうか!』

『高畑先生、もといデス眼鏡は麻帆良の武道家達の間では周知のハンドポケット姿。対する子供先生はやや腰を落として開いた掌を前方に向けた半身の姿勢です。どれと問われれば空手に近い構えですが、予選の情報によれば子供先生は投げ技や寝技、関節技も使えるとの事です。どのような立ち上がりを見せるのか注目しない所ですね』

「……さあ、闘ろうか。ネギ君」

「……うん!!」

静かに闘志を立ち上がらせながらの高畑の言葉に、ネギは臆せずやや固い様子ながらもしかと言葉を返した。

「…ね、ねえ先輩、大丈夫あいつ!?なんかガチガチなんだけど……!」  
「アスニヤン、心配すんなーつてのは無理な話だろが、まあしつかり見せてやんな。初めが肝心なんだから若干固えのは無理ねえよ」

試合直前の高まってきた緊迫感に耐えかねてか、明日菜が小声ながら焦りを滲ませる調子で辻達に尋ねるが、中村は落ち着いた（少なくとも表面上は）様子でそう宥める。

「……う……えつ、と……あの〜?」

「…それは、通り一遍の物事は最初が肝心、という意味合いでは無いのですね?」

「ジョシー就是。まあ見ているといい。上手くいくにせよいかんにせよ、恐らく勝負は長くは掛からん」

「上手くいかなければ、ネギ君はそれなりに健闘した後に敗けるだろうね、十中八九。…だから、見守ってあげてくれ、皆。あの子はこれから、一度のチャンスの機会に全てを賭けるから」

大豪院と辻の言葉に促され、明日菜達は目線を闘技場の中央にて佇む高畑とネギに戻す。

様々な意味で対照的な二人の、されど等しく発する闘気が周りに波及し、騒めていた観客も徐々に静まり返り始めた。

張り詰めた空気が境内に漂う中、長い様で短い沈黙の後に――

『試合、開始イッ!!』

――朝倉の一声によって、闘いの火蓋が切って落とされた。

結論から述べるのならば。

この第五試合は一瞬と形容していい時間でおわり決着を迎えた。

「…っ?」

試合開始の合図が届くか届かないかの、そんな際どい拍子。タイミング

そんな開始早々に高畑の顔面に襲い掛かったのは、光り輝く光球が弾けた事により発生した衝撃波。

それ単発では高畑を倒す所か、碌なダメージすら与えるに至らない軽い一撃ではあったものの、その先制攻撃は不意打ち気味に放たれたとはいえ、百戦錬磨の高畑をして碌に視認の儘ならない超速度であった。

当然、それを放ったのは高畑の対戦相手であるネギである。意表を突かれた高畑が思わず半歩後退り、刹那の間を置いてネギへ視線を戻した時には、既にネギは一瞬たりとも停滞無く、次撃の用意へと移っていた。

「魔法の射手・戒めの風矢!!」

鋭い一声と共にネギの周りに浮かび上がり、即座に撃ち出されるのは三発の風の弾丸。それぞれ高畑の頭部、右胸と左腰目掛けて疾駆する弾丸に併せる様にネギは足裏で大地を掴み、思い切り踏み切った。

『格上に勝つにやあどうすりやいいと思うよ、ネギ?』

バカレンジャーの言葉がネギの脳裏を駆け巡る。

『真正面からの馬鹿正直な戦闘じゃお前は高畑の野郎には勝てねえ。つまりお前がやらなきゃいけないのは意表を突く、不意を突く、弱点を突く。つまり騙し討つ、って事だ。漢らしいとはいえねえ方法だが、敗けると理解<sup>わか</sup>って何の対策も無しに挑むのはそれ以上に情けねえ怠慢だぜ』

『とはいえ高畑先生にそれと解る弱点なんて無いし、そうそう突ける様な油断も隙も生じさせる訳が無いだろうからね。唯一つだけ込める点があるなら、多分高畑先生は始めからネギ君を全力で潰しには来ないだろうって所かな?』

『故にこそネギ。初撃から一気に畳み掛け、高畑教諭が力を発揮する前に、何もさせずに押し切る。これが最も勝率が高いであろう作戦だ』

『解っていると思うけれど、ネギ君。これはネギ君の現状の戦力で一番勝てる見込みがあるっていうだけで実際にそれで勝つ確率が高い事とイコールじゃない。：残念ながら今のネギ君じゃあまだ隙を突いて尚敗ける可能性の方が高いんだ、其れ程に高畑先生は強い。それでも、相手が誰であろうと闘う前から諦めたりはしたく無いんだろう? 目的<sup>お父さん</sup>の為に自分も出来ることをしたい、俺達に任せつきりにしたくないって言うんなら。のっけから壁が高過ぎようとも、やれる事を全力でやるしかないよね?』

『…ネギ先生の呑み込みが良いというか良過ぎるんで、単発とはいえ俺の魔法の射手・変型は何か実用段階だ。とはいえまだまだ息する様に使えちゃいない現状、試合が始まってからじゃあ一々集中させ

てくれる隙なんて高畑先生はまず与えてくれないだろう。だからネギ先生、使うなら最初だ、意表を突こう。高速ケレリタースならおそらく初撃を当てられる。まあ当てる後どうすんだってのが正直な俺の感想だけど、まあ頑張れ。先生は俺なんかとはモノが違うんだ、もしかしたら本当にやれるかもな』

「……くうっ!!」

矢継ぎ早に襲い来るネギの攻撃に対して、高畑は先だつての奇襲に小さくない動揺を受けていたものの、即座に立ち直り迎撃を行った。飛来する戒めアエールカフトウーラエの風矢を全力で抵抗レジストしてあらゆる方向へと弾き散らし、腰を切つての抜剣ならぬ抜拳による抜き打ちの拳撃が大気を叩く。魔力強化によって極限まで加速された拳が撃ち出す大気の弾丸は半呼吸に満たない間に片手の指を超える数が撃ち出され、瞬動により一気に間合いを詰めんとするネギへと襲い掛かる。

「……っ!!」

ネギが障壁として展開している風盾デクレシフォーに次々と拳圧が弾け、重なる衝撃にネギの体勢が崩れかける。しかしネギは歯を喰いしぼりながら流れそうになる上体を前に倒して半ば落ちる様に着地、勢いで滑りかける足を踏み付ける様に闘技場の床へ叩き付けて留めたその位置は、高畑の懐近くであった。

「荒いな」

「高畑先生に妨害喰らつた割には上出来だと思うぞ?」

「だな、よく堪えたぜネギ」

「……使えるのね、瞬動術……」

「言つたら、あの子は天才だ。俺の技術テクを練度はさて置き大半習得はしてみせちまつたからな、この短期間に。……はあ……」

「お、お兄様落ち込まないで下さい!お兄様の教え方が良かったからネギ先生はあんなに覚えがいいんですよ、きつと!!」

「っ、あああっ!!」

ネギは右拳を脇へと引き絞り、大きく踏み込んだ右足を軸に骨盤を回旋。身体毎飛び出す様に突き出した右拳へと体重を乗せ、右の順突きを繰り出す。

『ネギ、お前さんは格下だ、挑戦者だ。少しでも有効な手法と思うなら汚かろうがコスかろうがどんどん使っつけ。本気つてのはそういう事だ、デス眼鏡に対する礼儀でもあるぜ』

……はい!!……

脳内によぎる中村の言葉に内心で勢い良く応え、ネギが突き出す拳の先は高畑の胴体中央、ではなくその下にある下腹部。すなわち股間であった。

身長差から中段突きをネギが繰り出した際に最も狙い易く、且つ入れれば一番効く急所である。

「……っっ!?!」

高畑は先程から何やら色んな意味で容赦の無い、ある種ガチな攻撃を見舞ってくるネギの豹変振りに顔を引き攣らせながらも、動きそのものには遅滞無くポケットから引き抜いた右腕により防衛ガードを行った。

『とりあえず接近すんのに成功したとして、まあまずあのデス眼鏡に攻撃当てんのは無理だろ、普通に打ち込んだならな。とはいえネギきゅんのキャワイい面に死ぬ程似合わねえダーティープレイにデス眼鏡の野郎盛大に面食らう筈だ、その隙を突け』

「……はいー」

ネギは短く口の中だけで返事をして受け止められた右拳をそのままに重心を後肢に移し、右足による横蹴りを高畑の左膝へと叩き込んだ。

正面からの真っ当過ぎる正拳突きは初めから四。ネギは拳が止められる事を前提に高畑の機動力を奪いに行っていた。

「ぐっ!?!……」

ミシリ、と、関節と靭帯が軋む音を己の膝から聴き、高畑は小

さく顔を歪めて後退り、体勢を崩す。

「……え、えええっ!？」

「ち、ちよつとお!？」

「お、入った入った」

「とはいえネギの筋力と体重では関節の破壊まではいかんだろうな」

「ああ、だからこれは体勢を崩すのがメインなんだろう?」

流れる様にエグい連撃を行うネギのあまりと言えればあんまりな姿に困惑を通り越して混乱する明日菜達を余所に、今の所は作戦通り、とほくそ笑む辻達。

そんな騒がしさを増す外野を余所に、闘技場の上では後方へとよろける高畑目掛けてネギが勢い良く至近の距離へと踏み込んだ。

『ネギ。この二ヶ月でお前は相当の功夫クシフを積み上げたが、残念ながら未だお前の勁では致命の打撃を高畑教諭へ与える事は叶うまい。…しかし言わば半端な勁力が功を奏する場合もある。今のお前が一撃に拘る必要はまだ無い。全力で、何度でも。打てる限りを打ち尽くせ』

「はっ」

蘇アドバイスる忠告にネギは短く返事を返し。

高畑の正面、超近接の間合いへと足を踏み入れた。その小さな身体からは想像もつかない鋭く、重い踏み込みが闘技場のみならず観客席までを一瞬揺るがし、直後突き出された槍の如き冲捶が高畑の鳩尾へと突き刺さった。

「……ぐ、うっ!？」

鉄槌を叩き込まれなかのような重い一撃に高畑は呻くが、ネギの攻撃は単発で終わらない。突き出した腕を折り畳みながら更に前進、振り上げる肘による裡門頂肘が胴体にめり込み、高畑の身体が浮き上がる。

そして更に一步。

三度の地響きと共に高畑の右側面へ大きく一步踏み込んだネ



ギは逆の足を高畑の正面手前に叩き付け身体を旋回。己が肩から背面で靠撃を打ち込む大豪院の絶招。

鉄山靠が高畑の身体を後方へと大きく吹き飛ばした。

「好、中々の練りだ」

「半端な発勁も三発決まれば立派な重撃だわな」

「ああ、悪くない……しかし……」

「貰ってしまいましたね、遂に一撃……」

言葉を濁す辻の後に続く様に、刹那が顔を顰めて呟いた。

辻達の視線の先で、グラリとネギの身体が傾ぐ。

「三度目の打撃の交錯際だな。吹き飛ばされる直前にカウンターで顎部に拳が入っていた」

「流石ですねー高畑先生は。あれだけ畳み掛けられて翻弄されながらきっちり立ち直って反撃してみせるとか」

「……解って言っているだろう、篠村？」

フン、と鼻を鳴らして杜崎は言葉を紡ぐ。

「自慢では無いが俺があの場合で闘っていたならば、お前が仕込んだらしい最初の一撃は兎も角それ以降の打撃は一発たりとも有効打は貰っていない。それはお前でも、高音でも。あの馬鹿共でも同様だろう」

「……いや高音やあの武道馬鹿共は兎も角俺は……」

「つまる所油断か慢心かは知らんが気を抜き過ぎだなあの老け顔眼鏡は」

此れはこれで詰まん、と篠村の言葉を遮ってフツノミタマが本当に退屈そうな顔で吐き捨てる。

「いくらあの童が半人前以下だろうがあの一発だけで沈むまいしな」

……反撃されて、顎を揺らされた……！

「……だか、ら、なんだ、ああ!!」

ネギは捻れて溶け始める視界の中、中心の高畑から目を離さず

に、込み上げる衝動のまま叫びながら力の入らない足を床に叩き付け、無理矢理に踏み止まる。

「……………っ!？」

……………堪え、られるのか、ネギ君……………!？」

その姿を見て、確かに打ち抜いた感触を拳に覚えていた高畑は試合が始まって何度目になるか解らない驚愕に目を見開く。

……………辻さんも、山下さんも、中村さんも豪徳寺さんも!この何倍も、何十倍も物凄い攻撃に耐えて、闘い続けたんだあつ……………!!

『お前が無傷のまま高畑の野郎を圧倒するなんてことはまずあり得ねえ、奇襲からの畳み掛けが上手く行ったとして何処かで反撃を喰らうだろ。そんな時はな、ネギ。兎に角動け、キツかろうが何だろうが気合いで無視しろ。無茶苦茶だと思うか?でもなネギ、俺は本当にそれだけで何時も立ってるんだぜ?そう……………』

「…根性って奴です、よね……………!!」

「そうだネギ。根性だよ、倒れんな」

奇しくも同じタイミングで、闘技場の上にいるネギと医務室で那波に世話を焼かれながら食い入る様にモニターを見ていた豪徳寺は同じ言葉を口にした。

『……………な、何とも目まぐるしい、というか息もつかせぬ連続した子供先生の速攻!!試合開始から数秒もしない内に猛然と距離を詰め、高畑選手を豪快な打撃で吹き飛ばしたあああつ!』

『高畑選手は意表を突かれ動きに精彩を欠いている様ですね、最後の攻防でどうやら子供先生も一撃貫った様ですが、グラつきはしたものの決定的なダメージにはなっていないようです』

「あ、あのデス眼鏡がああも容易く……………!？」

「馬鹿がよく見てたのか?油断し過ぎだぜ高畑の野郎!!」

「少年の動きは悪くないが正直少年が強いというよりは今の高畑が弱い、腑抜け過ぎだ。余程浅からぬ因縁がああ少年とはあるのだろう」

「……杖メア ウエルガ よ!!」

驚愕する解説と実況、観客席を余所にネギはしかと背筋を伸ばし、二本の足で闘技場の床を踏み締めると、両腕を掲げて力ある言葉を唱える。

選手席の椅子に立て掛けられていたネギの長杖スタツフが弾かれた様に宙を舞い、高速で飛来してネギの手に収まった。

「……此処で、魔法勝負を……?」

「え、でも詠唱は……?」

「違う」

順調に近接戦闘で攻撃を重ねていたネギの唐突な行動に疑問の声を洩らす高音と愛衣の言葉を辻が短く否定する。

「魔力を通す触媒として。ネギ君が一番振るい慣れてる獲物として。単にあの杖が一番適していたってだけの話だよ」

「……?えと、あのどういう……あ、あれ!」

謎めいた辻の言葉に中村の傍で宙に浮かんでいたさよが問いを放とうとして、闘技場のネギの様子に思わずといった調子で声を洩らした。

ネギは手にした長杖スタツフを魔法の発動媒体として構えるで無く、杖の下端を両手で握り締めてからそれを天高く高々と振り上げたのだ。

右膝が地に着きそうになるまでに曲げ、左足を大きく前へ出して右構えに獲物を頭より高く振り上げたそれは紛れも無く武器術の構え。

「ネギ君に教えたあれは剣術で無くて薙刀術に近いけどね。…元々薬丸自顕流の開祖は野太刀術の使い手なんだよ。扱い方は、親しいさ」

『難しい事は言わないよ、ネギ君。技術わざはこれまでに仕込んだ通りだ、



「……あ〜〜解った？木乃香ちゃん？」

「多分やけど……ネギ君、練習しとったアレ高畑先生にぶつける気なんやろ？……高畑先生炭にならへん……？」

「……は!?ちよつ、木乃香どういう……っ!?……先輩達まさか……!!？」

「うん、恐らく想像通り」

何事かに思い当たり、顔から血の気を引かせて青褪める明日菜に対して、若干申し訳なさそうに笑いながら辻は頷きを返した。

「詠唱禁止とルールにあるだけで大呪文禁止たあ言われて無んだなコレが。使える様にもつてくのが難しいってだけで」

「エヴァンジェリン女史の別荘にて行ったあの訓練は魔力の制御コントロールの為だ。しかしただ制コントロール御したいだけならば彼処までの無茶はさせん。無理に無茶を重ねる唯でさえ難儀な性分を持つネギにそれでもあれをやらせたのは……」

「……勝たせる為に、決め手を作らなきゃいけなかったからなんだよねえ……」

モニターに映るネギの様子に周りの魔法教師達が目を剥いて絶句し、傍らのエヴァンジェリンがほう？と若干愉し気な笑みを浮かべるのを苦笑と共に横目で見やりながら、山下は独りごちる。

画面に映るネギは、闘技場の床へ半身を起こしかける様にして半ば横たわる態勢の高畑へと、長杖スタッフの上に出現させた巨大な雷球を振りかぶっていた。

『こ、これは、あああっ!?』

『雷、球?……第一試合の桜咲選手が放つたのと似たような……』

解説実況の声を遠くに、ネギの脳裏に辻達の言葉が三たび蘇る。

『ぶつちやけお前がデス眼鏡を格闘戦でブチのめすのは無理だネギ。いくらデス眼鏡がお前相手に力あ出せないなんつっても、お前が想像

以上に腕前見せてりや、ネギ君強くなつたなあ、よーし僕も其れなりに本気出しちゃうぞ！…ってな事になる。そうなつたらもう敗けた、十中八九どころか百中九十九は敗けた』

『だから高畑の野郎がまだ立ち直りきらねえ内に、具体的に言うとかと魔法魔法の合一合一だったか？あの超パワー発揮するようになるまでに魔法で致命打を与える。お前が本来あのローブ男と当たった時の為に用意してたアレでだ』

それは己の力で勝ちにいきたい、と言つたネギの為に辻達が考察してくれた大会用の切り札。

『あのヘルマンって爺悪魔の時の闘いでネギ君がキレて撃ち出した雷雷の暴風暴風。あの時の威力とまでいなくても、あれに近い規模を遅延魔法遅延魔法で備えておける様になるのがネギ君の課題だ』

『無論簡単な事では無い。あれは暴走状態だから出来た荒技であり、意識的な改革から行わねばそもそも再現すらできないだろうし、そんな暴発半歩手前の危険な代物を制御制御して何時でも撃てるように留めておかねばならんだ。訓練から危険が伴う様なこんな無茶を、やらせるつもりなど毛頭無い、と本来ならば言う所だが……』

『勝ちたいんだろ、ネギ君？自分の力でさ。今のネギ君が持つ手札の中で実力者に決定打を与えるには、正直そんな無茶をする位しか方法が無い。最悪の事態が起こらないよう篠村達に協力を仰いで訓練は行うし、モノにならなそうならキツパリ止めさせる。でもそれも今の話を聞いてネギ君がヤル気になってくれるなら、だ。子供だから無茶をさせない、とはもう言わない。でもネギ君、キツイ訓練になる。やり遂げる覚悟はあるかい？』

ネギは辻の問いにはつきり応と返し、そして必死の修行の果てに擬似的な暴走状態暴走状態での魔法行使と、其れを維持しておく制御能力制御能力を身に付けるに至つた。

……こうでもしなきゃ、辻さん達よりも強いタカミチは絶対に倒せない！だから僕がする事は、躊躇い無く、遠慮無しに！！…全力の魔法をタカミチにぶつける事……！！

『手加減や容赦なんてものが出来る程まだお前は強く無えんだよネギ。弱者は常に全力全開。それが勝つ為の最低限の前提条件だ』

『どれだけ高畑の野郎が弱って見えてもお前は躊躇い無くトドメ刺しに行け。殺すつもりで行ってやっとなら如何にかなるかもしれない、つて位に力差があんだ』

『大丈夫だからホントに。僕等が本当の本気で殺しに行つて殺し切れないモツさんより高畑先生は強いんだからネギ君。真面目に遠慮は無しの方向で』

『比武に全力を尽くすのは武人としての礼儀だ。俺達に教えを請うた以上半端な真似は決して許さん』

『…高畑先生もネギ君がどれだけ強くなったかを見てみたいと思うよ。その期待に応えたいなら、変な氣遣いはしない事。知らない仲間じゃ無いのなら、変な話だけど高畑先生の強さを信頼して、胸を借りるつもりで撃ち込めばいい』

大会前日、辻や山下などは自分達の問題を明日に控え、ネギに構っている暇など本来ならば欠片も無かつたというのに。その他の三人も打倒クウネルの為、一分一秒を惜しんで調整を行いたかつただろうに。

いきなり高畑という高い壁に挑む事になつたネギを案じて、そうして少くない時間を裂いてアドバイスをくれたのだった。

ネギはその想いに応える為に、生来の優しさを一時的に封印し、戦士としての覚悟を胸に抱いた。

高畑が長杖スタツプの一撃を受けて闘技場の床に亀裂を作りながら半ば埋もれた次の瞬間には、ヨウイス テンベスターズ フルグリエンス エーミッターム ヨウイス テンベスターズ フルグリエンス エーミッターム 雷の暴風は解放され、一瞬の遅滞も無く追撃の用意は整っていた。

「…タカミチ、僕は遠慮なく行くよ！タカミチに、勝つ為に!!」  
「ね、ネギ君……!!?」

ヨウイス テンベスターズ フルグリエンス  
「雷の暴風!!?」

ネギは驚愕と焦りの色を表情に浮かべて何事かを言いかけた高畑の様子に一切頓着せず、力ある言葉と共に制御コントロールして球状になっている大呪文を思い切り撃ち出した。

直後、雷と爆風が闘技場全体を舐め尽くし、会場内は閃光に包まれた。

『……朝倉………』

『皆まで言わなくていいよ無事だから部長!!……ネギ君が、ネギ君までこんなんな訳え………?』

本日何度目かになる観客総員退避状態の後、些か力無い声での喧囂の呼び掛けに半ばヤケクソ気味に水堀を飛び越えた先の安全地帯セーフティゾーン(度重なる広域被害状況につき急遽建築部の手により作成)から勢い良く身体を起こした朝倉は叫び返し、悲哀に満ちた小声で後半の台詞を呟く。

『うう………兎に角実況を、って何これ!?』

『……これは、また速攻な………』

朦々と煙の立ち込める中、プロ意識から早い立ち直りを見せた朝倉が状況の確認に移ったが、ネギの行動はそれよりも遙かに迅速であった。

朝倉と喧囂、更には観客達や辻達一行の目に映る光景は、光の縛鎖により雁字搦めにされて横たわる高畑と、その首元に覆い被さるようにして裸締スリーパーホールドめを極めるネギの姿だった。

『大呪文を当てられたからって勝ったと思わないようにね、ネギ君。実際喰らわせれば大ダメージを与えられるとは思いうし、高畑先生は素の状態で防御力が高い訳でも飛び抜けて頑丈タフな訳でも無いと思うから倒せてるかもしれない。けれど確証が無いならダメ押しドムエに移ろう。仮に意識があっても素早い行動は咄嗟に出来ないと思うから魔法を撃つたら首絞め頸動脈圧迫ね。教えた通りにやれば誰でも数秒で意識がトぶから落ち着いて極めれば大丈夫。重要なのは其処で変に遠慮や情けを見せて、手負いの獣状態になっているかもしれない高畑先生から反撃



を喰らわない事。仮に致命傷を負っていても、高畑先生が本気になれば一瞬でネギ君は敗けるんだからね？彼我の実力差を、状況把握を間違えず、勘違いしない事。そうすれば勝てるよ、頑張れ、ネギ君!!」

「……………はい、解つてます、山下さん……………!」

……………最後まで、油断はしない……………!!

拘束の為に幾重にも戒めアエールの風矢を撃ち込み、動きを封じた上で、ネギは追撃の手を緩めず高畑の背後に回り込み、首を獲ったのだった。

……………なんだ、ろうな……………この状況、は……………!!

全身が様々な種類の痛みを訴え、更には気道が圧迫されて段々と意識の薄れ行く中、高畑は霞む頭で思考していた。

高畑はネギとの試合に於いて、格別油断や慢心を以って臨んでいた訳では無い。態と敗れるつもりなど毛頭無かったし、ネギが相応しい実力を発揮するならば咸卦アルテマ法の使用も躊躇わずに用いるつもりだった。ネギがどれほど出来る様になったか先ずはお手並み拝見、という考えが無いではなかったが、それは圧倒的な実力差がある以上当然在るべき強者の余裕であり、先達者としての威厳である。ましてやネギは高畑にとって憧れの人物で今尚有り続け、尊敬する世ナギ・スプリングをファイールド救っの忘れ形見だ。初めから潰す気で掛かるつもりなど毛頭起きようが無かったのである。

……………つまり、そんな僕の心理を読まれて、完膚なきまでに嵌め殺されたの、か……………ネギ君、じゃないな……………彼、らに……………

いよいよ以って薄れ行く意識の中、高畑は最早半ば見えぬ眼を見開き、選手席に居る辻達を力無く睨み付ける。

……………この、結果はどう言い訳しても、僕の油断と、読みの足らなさから来たものだ……………それはいい……………僕もまだまだ、未熟者って事だ……………

だが、と高畑はその上でなお思う。

……………不意を討ったとはいえ、相手がネギ君だったとはいえダブルエープラスAA+級の評価を得ている魔法使いに、ほぼ何もさせずに勝

利する戦闘技術と、心構えとか……………

……なんてものをネギ君に仕込んでるんだ……この問題児達  
は……………!!

そんな恨みがましい思いと戦慄を胸に。

学園都市最高峰の実力者、高畑・T・タカミチは気道圧迫によ  
る脳の酸素不足により、意識を失った。

「……………!!はあつ、はあつ、…はあつ!!」

高畑の身体より完全に力が抜けてから尚数秒。

十分に警戒しながらもネギは残心を怠らずに立ち上がると、荒  
い息を吐きながらも己の成し遂げた成果の実感をジワジワと感じ始  
めた。

……僕が、倒した……………!!

……僕がタカミチに、勝ったんだ……………!!

「……………あつ、あのー朝倉さん!!」

「……………うん、ネギ君。確認取れたよ……色々言いたい事あるけど、ま  
ずはおめでとう……………」

「…は、はい……………?」

何故か死んだ魚の様な目で力無い賞賛の言葉を投げ掛けて来  
た朝倉の様子を疑問に思いながらも、ネギは何よりも戦果を先ず一番  
に報告して、誇ってもらいたい己が師達の元へ首を巡らせる。

「……………皆さん、僕は、僕は……………?」

歡喜に目を潤ませながらネギが紡ごうとした言葉が尻切れ蜻  
蛉に力を失って行った。

「貴様らは子供に何を教えているこの大馬鹿共があああああつ!!」

「うるへーっ!!これ以外に勝つ方法なんざ有りやしねかつたろ  
があああああ!!」

『大体こんな事になるとは思ったがブン殴られる筋合いは無えぞ糞ゴ  
リラがあつ!!』

「魔法の射手関連の技術仕込んで魔力制御の訓練付き合っただけの俺にはもつと殴られる筋合い無えわ高音えええっ!?!」

「……………魔力制御の訓練には私も付き合った以上文句を述べる資格は無いけれど……………その代わり貴方達を庇う道理もまた無いわ!!あんなダーティーな戦術を仕込んで……………!!」

「……………お兄様申し訳ありません!!流石に擁護が難しいです!!」

「あんた等ネギに何仕込んで高畑先生になんてこととしてくれてんによおおおおおおおつっ!?!?」

「言い訳はせんがその物騒な獲物の一撃を喰らってやるつもりも無い!!」

「逃げる刹那!!言い訳の通じる状態じゃ無いしなんか大剣出現してる!?!」

「解りました、しつかり掴まっついて下さい一さん!!…申し訳ありません明日菜さん、私は無条件で一さんの味方ですので!!」

「……………」

「のどか、のどかーっ!?!しつかりするです!!」

「ひゃああああ白目剥いとるーっ!?!」

「本屋には刺激強過ぎたアルか…………」

「無理もないでござるな……………拙者達や観客席の百選練磨の御仁等ですら若干引いているでござるよ……………」

『……………ネギ先生って、お顔に似合わず、怖い所あるんですね……………』

「いや、違うで幽霊の姉ちゃん。ネギのあのガチっぷりは兄ちゃん等に半ば洗脳地味た意識改革されたもんやから……………」

「……………兄貴、麻帆良の色んな連中にこれであらゆる意味で目エ付けられちまうんじゃねえかなあ……………」

「ギャハハハハハ凄エー!!俺達でも名前知ってる様な世界のトップ相手にほぼ完勝しやがっタ!!」

「なんていうか全く以つて見事な殺す為の戦闘法でしターー!!」

「凶悪シヨタ……………新しい……………!」

「……………え……………えくと……………??」

「…………ま、全部先輩方が悪いって事で。取り敢えずメに入りますか……………」

自分の仕出かした事の意味合いがイマイチよく理解出来ないネギを虚ろな目で見やりながらも、この様々な意味でどうしようも無い空間を終了<sup>おわ</sup>らせる為に朝倉はマイクを握り、高らかに宣言する。

『高畑選手の戦闘不能により、まほら武道会第五試合、勝者ネギ・スプリングフィールド選手ううううっ!!』

『ウオオオオオオオオッ?!?!?』

試合時間、00:38秒。

まさかの1分以下の秒殺劇という幕引きに、観客席から悲鳴の様な歓声が地鳴りの如く響き渡った。

「…………ネギ君を預ける相手を、間違ったかもしれませんねえ……………」

「貴様がどうこう言えた筋合いでもあるまいよ」

何時の間にか選手席に現れ、乾いた声でポツリと呟くクウネルに冷たく言葉を返したフツノミタマは、まあ中々に楽しめた、と、薄い笑みと共にこの試合を締め括った。

21話 まほら武道会本選第6試合 高音VS杜崎(その1)

「ハハハハハハ!!流石は当学園一と謳われたバカ常識外の集団ネ!イヤハヤ之程迄に計算通りに計プロジェクト画が進まない等、私の故郷でもそうは無かタ珍例ヨフフフフフフ……!!」

「何だかご機嫌ですネ超さん………?」

バン、バン!と両の掌で寄りかかっている机を勢い良く叩き鳴らしながら笑声を洩らす超の此れまでに無いテンションの上がり様に面食らった様子で、斜向かいにて機材と睨み合いながら作業を進めていた葉加瀬が声を掛ける。

「確かに予期せぬ事態は思い掛けない副産物を産む場合もありますから、私も計算結果ばかり忠実に追い求め過ぎはしませんけどね、今回に限っては正直笑っている場合じゃないと思うんですけど:私としては勿論ですけど、超さんにとってはそれ以上に大事な計画なんですから………」

「ハハハ、葉加瀬済まないネ。全く以ってその通りダ、暢気に笑い転げてル場合でも暇も無い。……しかし如何にも感慨深い、では無いが、其れに近い感情がジワジワと込み上げてくるものでネ」

超は目尻に滲んだ涙を拭って一先ず笑いの衝動を抑えこむと一息を吐き、しみじみとした調子で言葉を紡ぎ出す。

「……私が念願成就の為に此麻帆良の地へ降り立て早数年ダ。当初は訳の解らない変態半人外集団道家の存在に驚き慄き、その行動理念や気質を調べる内に計画の邪魔以外にはなり得ないと、忌々しく思いもシタ」

だが、と、超の口元に浮かべる笑みが何処か淡いもの変わる。

「あの馬鹿としか言い様の無い途轍もなく馬鹿なノリの馬鹿達は、見ているだけでも楽しかったのだ、葉加瀬。そして多少なれどそんな馬鹿の輪に加われて、私は焦燥に駆られ余裕の無かた自分を自覚出来た気がするのだ。……こうして現在イマ、落ち着いて計画を進められているのはある意味彼等のお陰ヨ?」

「……そうですね。超さん、随分明るくなりましたものね……」  
そう語られれば思う所もある、と葉加瀬はこの数年を思い返した。  
「…大豪院さんや古菲さんに絡んでいる時が最もはっちゃけてた気が  
しますけど?」

「そうかね? 勿論葉加瀬や他の皆との日々も良い思い出ヨ」

コロコロと軽快に笑いながら超はデスク上のタブレットを拾い上げ、軽快に指を滑らせ始める。

「ナニ、心配する事は無いヨ葉加瀬。想定外は多かれど致命的な支障は及び得ない。大会がどういう結果に終われど、身内相手であろうと手加減も妥協も無しに闘い抜ける武道家達の性は、必ずや私達にとつて有利に働くのだからネ。…計画は揺ぎ無く、そして私も揺るがぬヨ、葉加瀬」

「……まあ、私もそこまで慌ててはいませんでしたけどね。エヴァンジェリンやクウネル?さんの一件は兎も角、ネギ先生に実力が備わるのは悪い事じゃないんでしようし……」

「実力というよりは覚悟の練成力ネ? 生半な実力よりも容赦無く闘える気構えとは余程身に付け難いと聞いてル。倫理観等諸々の常識を  
考えないなら、良い師なのだらネ、ポチ達は」

サテ、と前置きして超は手に持つタブレットの操作をひと段落させ、目の前のモニターに視線を移す。

「次は魔法教師と魔法生徒の対決ダ。予選の様に派手にやってくれない力ネ?」

「高音さんでしたっけ? 真面目そうな人なのに服の趣味が何だかアレ  
ですよね。魔法も何だか派手派手ですし、虚栄願望とか密かにある  
んですかね?」

「……クシユン!!」

「お、お姉様、大丈夫ですか!? さつきはクウネルさんの魔法で雨なんて

降つちやいましたし御風邪でも召されたんじゃ……………!」

何処かの誰かによる不名誉な噂の

所為か否か、上品に口元を押さえながらも盛大なクシヤミを洩らした高音の調子を傍らの愛衣が心配そうに気遣う。

「大丈夫よ、愛衣。体調が悪い訳では無いから……………それよりも……………」

スン、と可愛らしく鼻を一つ鳴らしながら愛衣を制した高音は、呆れた様に目を細めつつ眼前の惨状へと視線を移した。

『だから何度も言うようにだね杜崎先生!! 貴方に全責任がある等と無茶を言う気は毛頭無いし、寧ろ普段からあの聞かん坊共相手に良くやってくれていると思つてはいる! しかし今回の一件は余りにも……………!!』

「ええ、ですから此方も同じ台詞を繰り返すことになり恐縮ですがねガンドルフイーニ先生。取り敢えずのヤキは入れてやりましたのでその辺りの問題は大会終了後にしましょう。其処にいる山下や医務室で唸っている豪徳寺を含めて誰も逃しはしませんから、ええ」

「糞ゴリラが純真なる少年の為に奔走した俺様達によもやの鉄拳制裁なぞかましよつて、この中村様の天才的頭脳の脳細胞様が死滅したらどうすんだよチクショア!」

「貴様の脳細胞なぞ挙つて死に絶えようが思考レベルは今と同レベルだろうが。罷り間違つてそのまま自然回復すれば賢くなるやもしれんぞ、一度徹底的に潰してみろ」

「くつそ危うく神楽坂ちゃんにも殺されかけたのにその上拳骨とか……………あ、あと中村。様は二度使うなよ唯でさえ頭悪い印象しか無いんだから」

「どうでもいいつつーの辻……………俺は仮にも怪我人だぞ杜崎の野郎情け容赦の欠片も無え……………!」

「下手をしなくともそれより重傷で殴り転がされた事が俺達は全員あるだろうが。今更ブチブチ文句を垂れるな豪徳寺」

「そんなもん程度の差はあれお前ら全員本来なら病院送りが暫当だろうがさつさと病院行きやがれ人外共が……………畜生、理不尽だ理不尽に過ぎる……………! 死ぬ程痛えというか頭がクラツクラする俺は仮にも次

試合あんだぞ……………?!」

「…………どうすればいいんでしょうか、お姉様……………?」

「…………まあ概ね自業自得、としか言い様が無いのではないかしら?」

耳元で喧しくがなり立てる携帯を鬱陶し気に横目で見やりながら杜崎がウンザリした表情で返答を行う足下に於いて、頭部に大きな打撲痕タンコブを形成しつつ正座をさせられている山下を除いたバカレンジャー村プラス一名の惨状惨状に大きく嘆息を洩らした高音は、半眼で己の(不本意ながら)パートナーたる存在を見やる。

「暫くそうして頭を冷やしていなさい篠村。みつともなく喚き散らしているけれど、貴方自分が大変な事をやらかした自覚が本当にあるのでしょうか?」

「だからあの弱味と人の情と油断にえげつなく潰け込む様な詰将棋コンボにや俺は不参加だって言ってるだろーが!」

「あー teme エ責任逃れか篠っち!!」

「実際責任は無かるうに…………」

いい加減にしろや!?!と最早泣きそうになりながら喚く篠村を隣の中村が喧しく誹り立て、更に隣の辻が割れそうな頭の痛みに顔を顰めながらも取り成す。

「じゃっかあしやあ血みどろリア充はだあってろ!! 実際まあ子供に教えるモンじゃ無え、って意見には全く以って反論の余地もねえ。だが俺達はそれでもネギきゆんを見込んでその心意気をだなあ…………」

「言うな馬鹿。杜崎教諭や高音女史の言う通り、俺達の指導は決して褒められた内容のものでは無い。叱責は元より承知の上だろう?…後の責任は全て請け負うと太鼓判を押した以上、言い訳をするべきではあるまい」

「…………まあ結局ネギ先生もああしてお叱りを受けていますしね……………」

ブチブチと尚も愚痴を垂れ流す中村を諫める大豪院の言葉に、拳骨を喰らっていないにもかかわらず律儀に辻の隣で正座しながら寄り



添っていた刹那が苦笑して相槌を打った。

「アンタって奴は本当にもう……!!」

「あぶぶ……!で、でも明日菜さん、仕方なかったんですよ!僕がタカミチに勝つには不意を討つしか……!!」

「その話は何回も聞いたし納得はしてないけど理解はしたわよ!!でも憧れの人目の前でズタボロにされて理性的な判断なんても恋する乙女あしたに求めてんじゃないわよー!!大体あんたはちよつと悪い影響ばかり最近受けすぎて……!」

「うわーん!?!」

「のどか。庇い立てをしてはいけませんよ、ネギ先生が中村先輩の様になってしまったら取り返しが付かないです」

「…う、うん、それは、私もちよつと、じゃなく嫌だけどく……」

「ちよつとで無く絶対に御免アルよそんなのは」

「拙者個人的にはネギ坊主お見事、と言いたい所でござるが、まあ流石にあれが日常化するやもしれぬと考えれば教師の方等の反応も宜かるかな、と言わざるを得んでござるなあ」

「まあそないな殺伐したネギ君ウチもアレやけど……」

「…そうね、せめてネギ先生位はあんまり殺伐としていない方がいいと思うわ……」

「何でや?ええやんかアレで。お行儀良い道場拳法習つとつても実践じゃ半分も力発揮できんのやから、ネギも実践ダーティレイン流覚ええといて損は無いやろ?」

「そういう訳にもいかないんだなこれがよ。兄貴が一介の並魔法使いの出ならあまり五月蠅くも言われねえんだろうが、ナギ・スプリングフィールド英雄の息子にして今をときめく魔法使い見習いとあつちやあ立ち振る舞いってのも常人以上に厳しく見られちまう。将来の兄貴の道を狭めないように、って先生方は案じて下さつてんだよ小太郎」

明日菜の鬼の咆哮に涙目で弁明するネギの姿は中々に同情を惹くものではあったが、バカレンジャーの様なる種のどうしようもなさに移ってはかなわないと心を鬼にして見守る一行であった。

そんな一連の大騒ぎを見ていた杜崎は大きく一つ息を吐き、尚もがなり立てる向こうへと短く断つて電話を切つてからバカレンジャー及び一行へと向き直る。

「まあ凡そ俺達の言いたい事は見当が付いている様だし手短に言うぞ。：お前達もだが、あまり急いで大人になろうとするな。俺達の存在意義が無くなるだろうが。：：：今回は事情が事情というのは理解しているつもりだ、ネギ先生の覚悟を無碍にしたくなかったというお前達の気持ちも解る。：それでも余り無茶をするな、させるな。気を付けているつもりだろうが、お前等は矢張り生き急ぎ過ぎなのだ」

そう告げると杜崎はもう戻っていいぞ、とバカレンジャーに告げ、のしのしと闘技場の入場口へ向かって歩き始める。その普段からすれば余りにも穏やかであつさりとした説教に中村達は面食らつた様子で顔を見合わせるが、

「自分達のやった事を理解<sup>わか</sup>っている奴にクドクドと説教はせん、もつと上手いやり方を考えろとも言わん。：本来ならば俺達が導いて然るべき話なのだからな。これからはきちんと口を出していく。：：：お前達の未熟な点についての指導は、大会が終了<sup>おわ</sup>つてからみっちりと行うから覚悟しておけ。：：：：：それから高音」

「：：っ!?、は、はい!!」

杜崎の捨て台詞になんとも言えない表情を揃つて浮かべるバカレンジャーを余所に、言葉の終わりに脈絡も無く声を掛けられた高音が慌てて返事をする、杜崎は歩みを止めず肩越しに高音を振り返りながら、そう言った。

「次の俺との試合だが。：：：：お前は本気で掛かつて来い」

「：：：：っつーか高音。真面目にやる気か？」

「主語を抜いて話すのは止めなさい篠村。なんの話かしら？」

「とぼけんな」

雷撃と爆風により何度目になるか解らない半壊と成り果てた闘技場であつたが、「今年の祭りは例<sup>いっ</sup>年にも増して大忙しじゃハヤツハアーツ!!」「棟梁おおっ！今年やあ祭りの最中も気が抜けやせん

ねええええつ!？」とやたら活き活きしながら残像が見える程の勢いで修復に当たると麻帆良建築部の奮闘により間もなく完全修復が成されようとしていた。そんな中、杜崎にやや遅れて選手の入場口に行こうとする高音を篠村が呼び止め、高音の真意を問い質していた。

「まさかさっきの台詞を真に受けて本気で掛かっていたりはないよな？あの人はちよつと熱に当てられてんだよ今。何だかんだである人は武道馬鹿達と縁が深いし、高畑先生まであんな風になっちゃったからヤケになつてる……つつたら言い方悪いけど、ノセられてる感があるだけなんだよ。仕事優先、効率第一で行こうぜ、冷静に考えりや此処で魔法関係者同士が争う事にメリツトデメリツト以前な話で、意味なんか有りやしねえって解るだろ？……お前に限つてバカレンジャー<sup>中</sup>の熱に当てられたなんて事は無えんだろうけど……あいつ等が真剣通り越して決死な意気込みで試合に挑んでるからつてお前まで馬鹿正直に付き合う事は……」

「違いわ」

と、高音は篠村の言葉を途中で遮り、返答する。

「彼等は彼等、私には……私達には私達の立場と事情がある。私が思っていたよりも、ずつと重いものを背負つて、重い覚悟で臨んでいた事に関して、軽く見ていた事を申し訳なくは思うけれど、それと仕事は別の話。大会を勝ち進む事が下された指令なら、私はそれを果たすだけよ。高畑先生が医務室で寝込んでおられる現状、この場のリーダーは杜崎先生なのだから、私はその指示に従うまで」

「……考え直せ高音。そんな馬鹿正直に話を受け止めな」

素っ気無く端的に言葉を切ってみせるその様は、言葉よりも雄弁に話は終わりだと告げていたが、尚も篠村は食い下がる。

「大会で行けるとこまで行け、つてのは俺等にだけ下された指示じゃ無え。お前の対戦相手の杜崎先生にも下されてるんだぜ？もう少し魔法関係者が組分けでバラければ勝ち進む意味もあつたらうけどよ、杜崎先生が相手ならお前は無理せず勝ちを譲つてもいいと俺は思うぞ。現場の上司の指示が適切な代物と思えないなら、一旦本部に伺いを立てて……」

「篠村」

今度こそ。

高音はその短い呼び掛けによって篠村の二の句を封じ込めた。「解っているわ、貴方の言う事は最もな話よ。単に勝ち進んで注目を集めるだけならば私達よりも経験豊富で実力のある先生方にお任せした方が確実だものね。私達はあくまで組み合わせに難があつたり、高畑先生や杜崎先生に他の指令が下された場合の保険要員、といった立場なのでしよう。：別に私はそんな扱いが不満な訳では無いわ。自身の分は弁えているつもりだもの……そうね、確かに杜崎先生の考えは理解できない。効率的でも無ければ意味があるとも思えないわ」

「……だつたら……」

「でもね」

皆まで言わずに高音は続けて言葉を紡ぐ。

「貴方も解っているでしょう？杜崎先生は一時の感情に流されて公私を混同しないし、私達の為にならない事をする人では無い。：きつと深い考えがあるんだわ。上からはつきりと指示を頂いていない以上は、私は試合に全力を尽くす。それだけよ」

言い切ると高音は篠村へ背を向け、選手の入場口へと歩き始める。篠村は何かを堪える様に顔を伏せ、ややあつて遠ざかる高音へ叫ぶ様に言葉をぶつける。

「……そういうのを融通が効かねえって言うんだよ！義理を立てる所と糞真面目な性分發揮する場所が間違つてんだろうが!!なんで其処で態々キツイ方を選択すんだよ、いいじゃねえか妥協しても!?あつちだけがお前に怪我がありませんように、なんて気を使つてくれる訳じゃ無えんだぞ!こんな所で真剣<sup>マッ</sup>になつてなんの意味があるんだよ!?どいつもこいつもたかが格闘大会風情に熱くなりやがつて、冗談じやなく試合なんかに人生やら命張りやがつて!はつきり言つてイカれてるとしか思えねえんだよ!!譲れねえモンがある?くつたらねえ、ああまでして意地張る価値があるか!?あの熱血教師も結局根っこが同じなだけだよ、全力でぶつかり合う事で見えてくるものもあります、全力でぶつかる事で自分を見出せます。……そんな所だろう

よ、アレの言いてえ事なんぞ!!こちとら其処まで頭悪いつもりは無えよ、解つてんだよ普段の態度で!!…馬鹿にも見習うべき点はあるつてよ、解るんだよ言いたい事は!!」

「……なら、それでいいでしょう?」

篠村の言葉が途切れた拍子に高音はピタリと足を止め、振り向かぬままに抑えた様な低い声で返す。

「貴方がそう思うのなら思つていればいいわ。それが正かろうと、そうで無かろうと私は辞退めるつもりは無いわ。」

「高音……!」

「貴方は!!」

堪え切れなくなった様に、何処か悲痛な響きを持った高音の叫びが篠村の言葉を掻き消す。

「貴方は何時もそうなのよ!!勝手に人の事を解つた気になって、何時も勝手に行動して!私が心配してくれなんて貴方に頼んだ事がある!?!……貴方の気遣いは、心配は!…そうやって何時も、独り善がりな自己満足だわ!!」

「……っ……!!」

篠村は高音の叫びに顔を歪ませ、強張る口元を動かし言葉を紡ごうとして。それは形にならずに力無く口を開閉するに留まった。

高音は細かく震える身体を強く己が両腕で掻き抱き、一瞬強く震えると、何事も無かったかの様に再び歩き出す。

「……御免なさい、言い過ぎたわ。でも篠村、私の事は放っておいて。…貴方は唯の、仕事上の相棒パートナー。それだけで、他の何者でも無いわ。……私にあまり、干渉しないで……」

振り返らぬままに言い捨てると、高音は速い足取りで篠村の前から歩み去って行った。

「……だから仕事で口出してんじやねえかよ……お前は今、絶対冷静じゃ無えよ、ムキになってる、だけなんだよ……!!」

篠村は力無く呟きながら片手で顔を覆い、天を仰ぐ。

「……成長して無えなあ…あいつも、俺も……」

『さあさあ、まほら武道会一回戦も後半に差し掛かって参りました！第六試合、早々と入場を果たしガ○ナ立ちにて待ち構えるは音に聞こえた麻帆良屈指の生物災害バイオハザード!!その仁王が如き鍛え抜かれた体軀から繰り出される軍隊仕込みとの噂もある殺人打撃は麻帆良

生息のゴロツキ：もとい武道家達をボールの様にひしゃげさせ、吹き飛ばす!!その容赦無い制裁振りから一部の命知らず達からは類人猿教師との異名を冠する、デス眼鏡高畑先生と双璧を成す麻帆良広域指導員屈指の強者……暴虐アウトレイジ武人、杜崎義剛その人だあああああつ!!』

『ヴオ、オ、オ、オ、オオオオオオオオオオオオツツ!!』

「……後ほど貴様にも拳骨をくれてやる」

「いやいやいや、勘弁して下さいよ私はただ場を盛り上げようと……」  
最早罵声と歓声が入り混じり過ぎて地鳴りの様にしか聞こえない音のうねりの中で、杜崎はガツシと腕を組んだ仁王立ちのままに朝倉を睨み付けた。

「……まあいい。お前を構っていられる程此方も余裕がある訳では無いしな」

「いやいや本当にお仕事お疲れ様です杜崎先生、大変ですなあ教師や広域指導員としての仕事もあるのにこんな所まで」

「理解わかっているならお前はこんな怪し気な企みに……いや、盛り上げ役の太鼓持ちが精々のお前にケチを付けた所で始まん話か……」  
「…ねえなんか私に対しては言葉キツくない先生?」

「日頃の行いを省みろ」

短く言い捨ててから杜崎は一つ息を吐く。

「……俺はまだ二十七だぞ、小僧小娘共の青春劇にケチを付けに行く役割をこなすには手前の青い体験思い出に仕切れておらんというのに……」

「まあ真面目に大変ですよなああの先輩達の御相手は。こればかり

は皮肉で無く御愁傷様です本当に」

「……彼奴らだけならば何時もの事だ、今更グチグチと文句など垂らしはせん」

バカレンジャー

規格外の相手に日頃から悪戦苦闘している杜崎に対して割合真剣に同情の声を掛ける朝倉だったが、杜崎からすれば些かの外した言葉であった。

「質は違えど馬鹿をやリたがらん生真面目連中までが馬鹿に影響されていてな。見習おうにも羽目の外し方が解らるので拗れている始末だ」

「生真面目連中って……ああ、はいはい。まあ前々から拗れてましたものねえ、高音さんと篠村先輩」

伊達に他者への探りを入れるのが習わしの報道部期待のホープなどと呼ばれていない朝倉は杜崎の言わんとする事を直ぐに察し、苦笑と共に言葉を紡ぐ。

「何であんなになってるのかご存知ですか杜崎先生？」

「大体の事情はな。しかしパラツチに語る舌は持たん」

「ああんいけずうく……」

「いいからさっさと自分の仕事をしろ」

取り付く島も無い杜崎の態度に目が無い事を悟ってか、不満そうな表情を浮かべながらも続く選手の紹介に移る朝倉を横目に、杜崎は再度溜息を吐く。

「……やれやれ、この手の御節介など柄でないにも程がある……」

『さあ、続いてそんな麻帆良の怒れる猿人と試合を行う勇氣ある選手のご紹介!!風に靡くは夜の天幕、翻され迸るは闇より出でし演者の腕か!昏く深き宵闇より現れし真夜中の遊楽団、その麗しき女団長が我々の前に姿を現したア!!今宵貴方を日常と幻想の境目へとお連れしましょう!傍に立つ者を従えし夜の女王、高音・D・グッドマン選手、入場だああああっ!!』

『ワアアアアアアアアアッ!!』

「スタ○ド使いじゃああああああっ!!」

「観測だ、観測を行ええ!!あの謎の能力を何としても解き明かすのじゃあああああつ!!」

「……篠村……本当に、覚えていなさい……!!」

先程の杜崎に対してとは異なる、何かヒーローショーを見ている子供が上げる様な期待と興奮に満ちた喝采、更には一部の研究者やらマニアやオタク達の上げる嬌声を一身に浴びた高音は、羞恥と憎悪により顔を真っ赤に染めつつ凄まじい形相を浮かべていた。

「おうおうてえした盛り上がりだな、つっーか高音ちゅわん凄え顔してんぜ」

「魔法使いから色モノ能力者へジョブチェンジされてしまったのが屈辱なんだろ、幾ら認識上の事だけとはいえ」

「そういう意味では貴様の所為だなあれは」

「五月蠅えよ関係無えだろがテメエ等にや畜生が……」

選手席にてそんな様子を見守りながら大豪院が篠村へと矛先を向けるが、篠村は不貞腐れるを通り越してやさぐれた様な形相で顔も向けずに切って捨てる。

「高音殿との話が拗れてえらく立腹でござるなあ、篠村殿？」

「……聞いてやがったかよ……」

「あんなデカい声で言い争てれば私等やポチ達には普通に聞こえるアルよ」

「そーよそーよイカれで悪かったわね!!」

「五月蠅え変態が、殴らば殴れ。俺あ発言を撤回するつもりは無えからな、この際だからはつきり言わせてもらうがテメエら全員どつかおかしいんだよ」

甲高い声で不気味にクネクネとくねりながら中村が叩き付けた文句に半ばヤケクソ気味に言葉を返すと、篠村はバカレンジャーイチ欠け（説教が終わったので豪徳寺は医務室に叩き返された）及び楓達3-A武闘派の面々をギロリと睨め付けた。

「たかが惚れた腫れたでリアルに罅迫り合い起こして殺し合いなんぞ仕出かしやがって、見ているこっちの身になってみろってんだよ。尋



常の勝負だ手を出すな、死ぬ事も武道家として覚悟の内だあ？警備や戦争出てんならまだしもこれは単なる試合だろうが。常在戦場だか何だか知らねえが戦闘<sup>バトルジャンキー</sup>狂の理屈を恥ずかし気も無しに語るんじゃねえよ。こちとら人生万事それなりに上手くやってけりやいと考えてる凡人様だ畜生が、正直ついてけないんだつつうのお!!」

吐き捨てる様に言葉を切ると文句あつかコラ？と半眼で各々にガンを付ける篠村だったが、

「うんうんそーねー、篠つちの言うことあ尤もだあねえ」

軽い口調の中村にあつさりと己が主張を肯定され、道端の糞でも踏ん付けたかの様に顔を顰めた。

「……何なんだよその軽いノリは……」

「実際自覚はしてるんだよ、少なくとも俺<sup>バカレンジャー</sup>達は全員さ」

「常人の神経ではおおよそ辿り着けぬ境地を目指しているのだ、狂わねばやっていられぬよ。武道に限らず道を極めようとする者は皆そうだ、篠村」

辻が、大豪院が。何れも狂人呼ばわりに対して怒りも浮かべず、寧ろ穏やかとさえ言える表情で言葉を返す。

「なんつーかよ、イカれイカれと言うんならぶっちゃけ麻帆良の連中は半分くれえはイカれだぜ篠つち。何か知らねえが麻帆良<sup>マホウ</sup>は普通じゃないのが集まって、それに普通じゃいられなくなつたのや普通でいる気の<sup>ま</sup>ないのが惹かれて現在<sup>ま</sup>みてえな世紀末都市が出来上がつてんだ。……だーいたい魔法使いなんてファンタジックな職業<sup>ジョブ</sup>に付いてる癖にてめえの事を普通だの凡人だの言ってるなや、世間一般からすりやおめ様も立派に逸般人<sup>エッセン</sup>だろが」

「…そういうことが言いてえんじゃねえんだよ、俺は…」

軽い調子ながら何処か論す様な中村の語り掛けに、しかし篠村は首を縦には振らない。

「……あいつさあ……、口ではあれこれ言うけど、本当の所はお前等を相当気にして、相当影響受けてんだよ」

「…とっつとっ」

「…あいつが杜崎先生の本気で来い発言に異を唱えなかったのはさ、

上司命令だからってのと、本部から明確な指示が出なかったからってのの他に、お前等の事も理由の一つだと思っただよ」

水を差し向ける辻のみで無く、その場に居るバカレンジャー全員に向けて篠村は語る。

「お前等が思っている以上にあいつはお前等を評価してるんだ。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの一件、京都の一件、悪魔共との一件。常に最前線でネギ先生や近衛ちゃん護り通して撃退して、結果出して見せたのはお前等だ。あいつは生真面目で割と思ひ詰める性質だからなあ。年も殆ど変わらない、経験に至っては自分の方が余程積んでるってのに自分は……ってな。まあ簡単に言うならいきなりやって来た素人集団が正義の味方として活躍しまくってるから、経験が上なのにイマイチ何も出来てる気がしないんで焦ってんだな」

「……まあ、プライド高そうでもんなあ、高音さん……」

「手柄だ出世だと功名心が強い様には感じねえから、先達としての自尊心や責任感が強いんだべ？ ツンツンしてつけど面倒見は良さそだしよ」

「解らんでもない話だが……そんなものは比べるだけ意味のない話だろう。俺達は偶々荒事に関わる機会があったから注目されている、それだけの事だ」

大豪院の言葉に篠村は渋い表情で頷きを返した。

「まあ、そうだな。他人と比べちゃダメだわなあこういうもんは。あいつは立派に仕事をこなしてるし、パトロールなんかも率先して自主的にやってる。客観的に見てなんら恥じる事は無え、寧ろ誇るべきだと思うぜ。…理屈としちゃああいつも解ってる筈なんだよ。でもこんなもんは、まあ…感情のアレだよ。道理として理解出来ても抑えて納得しろってのは、難しいんだろうな。その馬鹿中が言った様に、あいつは活躍したい、目立ちたいって性分の女じゃ無い。ただ理想が高くて向上心も強いから、自分は出来なければならぬ、って強迫観念に近いものを抱いてんだと思う。……だから杜崎先生の誘いに抵抗無くあいつは乗ったんだろうな」

『……あの、高音さんが杜崎先生に本気で挑むのが、何で高音さんが焦りを解消するって話になるんでしようか……?』

「ん?……ああ……」

尋ねてきたさよを始めとして、3-Aの幾人かが腑に落ちないといった表情を浮かべているのを見て、言葉足らずだったか、とひとりごちてから篠村は話を続ける。

バカレンジャー  
「こいつ等良くも悪くも普通じゃない、つつうかさ……破天荒、規格外、非常識……まあ一言で言うなら行動力のある馬鹿だな」

「えらいざつくりと馬鹿にされたな……」

「虚仮にしてるつもりは無えよ、今言ってるのはいい意味での馬鹿だ。バイタリティー活動力って言うのかね、お前等の土壇場でやってみせる力に高音は憧れてるんだろ。少なくとも自分とそいつらとが違う点つてのはそこだ、とあいつは考えてると思う。上手く言葉には出来ないが、そこから辺をあいつは見習いたいんだろ。でもどうすればいいか解らないから、そいつ等の行動を真似てみようとしている。……今更。今更やりたいたいようにやってやり抜くには、俺もあいつも組織つてもんに些か馴染み過ぎた。生き方なんてのはそう簡単に変えられないもんだろう?……こんな時にこんな所で、ゴリラ教師相手に危ない思いままでして、焦って如何にかする類の問題じゃないって俺は言いたいんだよ。成果が得られるかも解らねえつてのに、あいつは……」

ハアア……と細く長い溜息を吐いた篠村は、ふと後ろに控えている筈の愛衣の存在に思い当たった。

……あいつが高音関連の話で口挟んでこねえなんざ珍しい通り越して何やら異常だが……

何かあったのかと背後を振り返った篠村は、すぐ側に居た愛衣を見て思わず上体を仰け反らせた。

愛衣は感極まったかの様に両手で紅潮した頬を押さえながら整った顔をくしゃくしゃに歪め、両の瞳からポロポロと大粒の涙を零していたのである。

「なんで号泣してんだよお前は?」

「お、兄様あ……!!」

ヒクヒクとしゃくり上げながら愛衣は得体の知れない様子にジリジリと後退する篠村へと詰め寄り、叫ぶ様に告げる。

「お兄様が、お兄様はあんな風にお姉様に拒絶なされたのに、こんなにもお姉様を心配していて下さったのですね!? 私、二人の絆が別たれてしまったんじゃないかってずっと、不安で。…不安でえくく!! でもお兄様はそんな私の詰まらない心配を難無く吹き飛ばしてくれて! 私、今本当に嬉しくて感動してるんです!! やっぱりお姉様の最大の理解者はお兄様なんですネ! 大丈夫ですお兄様あつ!! ここまでお兄様はお姉様の事を想ってるんですから、お姉様もきつと解つてくれますよ!!」

「とりあえず落ち着けお前は!!」

荒ぶる感情を抑え切れなくなったのか、両手を広げて突進してくる愛衣の顔面を引つ掴んで押し留めながら篠村は助けを求めて振り返るが、

「いや何つうかお前はもうアレじゃね? 夫じゃね冗談抜きに」

「この聞いている尻の穴がむず痒くなる様な面映ゆい語りは何処かで聞いたと思っていたが、あれだ。桜咲後輩について語る時の辻そっくりだな」

「待て。俺はこんなに相手を何もかも理解わかっているような調子で語りトクをかました覚えは一切無いぞ!!」

「新幹線内で京都へ向かう時の語りを思い返してからもう一度言うてみる」

「ハモリやがった!?!」

「とりあえず高音に聞かれると先の言い合いを含めて俺が確殺されるから黙れお前等!! それから愛衣、さつきからお前はこういうテンションの跳ね上がり方だ引つ付けてくんないああああつ!?!」

「あの男は何を騒いで……………」

「……………ふっ……………」

高音が闘技場内に足を踏み入れ、杜崎と対峙する傍らでギヤアギヤアと騒ぎ散らしている篠村を中心とした一行に、挨拶もそこそこ

に高音が渋い顔で悪態を吐く様子を、杜崎は思わずといった様子で溢れた笑みと共に細めた目で見やる。

「お前の事を心配しているのだろうよ、聞こえていたぞ。こういう揶揄いをお前が好かんのは知っているが、まるで痴話喧嘩だぞお前達の様子は」

「……………」

杜崎の言葉に高音は冗談じゃないとばかりに顔を顰めるが、軽く噛み締められた口元から返しの言葉が放たれることは無かった。

「…なんだ？ 否定しないのか？ 俺が教師だからといって遠慮する必要は無いぞ。お前の悪態などよりあの馬鹿共の日頃の行いの方が万倍腹が立つからな」

「………… 勿論、肯定する訳ではありませんけれど。………… 醜態を晒した自覚は有りますから。ああまで端から聞いていれば思わせ振りの台詞を自分で口にしておいて、詮索するな………… と言える程に私は自分を心に世界が回っているとは思っていません」

「殊勝なことだ。………… 下衆の勘繰りはさて置き、良いコンビだとは思うがなお前達は」

「………… それは違います、杜崎先生」

杜崎の言葉に、高音はそれまでの渋面をふと陰らせて返す。

「私達は息が合っているので無くても、篠村が私に合わせているだけなんです。…昔から、ずっとあの男はそうしてきました………… これでも、少なくとも割合で凭れかかっている自覚は有るんですよ…………」

「………… ならば何故？」

「私が。…未熟だから、未だ子供のような意地を張っているからでしょうか…………」

言外に、ある程度お互いを認め合っているのなら、迷惑をお前が少なからず掛けている自覚があるのなら。お前達は何故そう喩み合っている？、と問い掛けた杜崎の疑問を正確に汲み取った高音は、自嘲の笑みと共にそう溢した。

「………… 昔の話です。お互いに子供で、特にあの男は取り返しの付かない馬鹿をやらかして、私がそれを許せていないだけ。…謝らないあの

男もあの男ですけれど、私もいい加減歩み寄って、水に流すべきなんだから解ってるんです。……それでも私は、篠村が非を認めて謝罪しなければあの事を許せない、認められない。……下らない子供同士の、意地の張り合いです……」

「……それこそ思わせ振りの語りだろうが。全てを話す気もない癖に、訳ありな事情を匂わすな。甲斐性のある男なら構ってやるのだから、生憎俺は連れ合い一人に応えるので精一杯だな。……助けて欲しいならはつきりそう言え、力にはなってやる、教師としてな」

「……っ……申し訳ありません、これでは本当に単なる愚痴を溢しただけ、ですね……」

恥じ入る様に俯く高音を、杜崎は深く長い溜息と共に一瞥して、独りごちる様に言葉を紡ぐ。

「……意味合いは違うが、確かにお前はある種面倒な女だ。篠村も相手にアレだがな……まあ、元より俺はお前達の先達で、役職として上司という立場に立つてはいても、本質的に部外者だ。少しばかり口を出した程度で柵を解けるとは思っておらん。……だが、これだけは聞かせる高音」

「お前は、彼奴らの様に成りたいのか？」  
「……………」

高音は暫しの沈黙を挟んだ後、尚も口にするか否かを迷う様子を見せていたが、静かに先を促す杜崎の眼差しに勇気付けられて、おぼろげと話始める。

「……あんな風に成りたかった、のでしょうか……………」

一つ紡ぐと、高音の口からは堰を切った様に言葉が溢れ出した。

「……誤解の無いように明言しておきますが、彼らの素行や振る舞いを羨んでも憧れてもいません。嫌悪とまではいきませんが、非常識を地で行く輩とは気が合いませんので。……ただ。……ただ、そうです。私が彼等の様に後先を考えず、事情を知らず。……組織などに属していなかったのなら、私は今までに何度ネギ先生達の助けになれたのだろうか、と考えました。IFの話は意味が無いとは解っています。……ただ

現状を鑑みるならば……」

高音は辻達の居る選手席に視線を移し、静かに呟くかの如く言い放った。

「私や篠村、愛衣よりもネギ先生に必要なのは、きつと彼バカレンジャー等の様な存在なのでしょから」

「…お前は何故、そう思う？……」

「私達では、どうしても色眼鏡が入ってしまいますから」

何処か寂し気な笑みと共に。

「英雄の息子、大魔法使いの息子。……その肩書きに恥じない才能。良くも悪くもネギ先生は私達魔法使いにとって特別です。期待の掛け方も、様々ですけれど……ネギ先生にとってそれは必ずしも良い影響を与えるとは限らないのではなんでしょうか？」

『子供ガキにどんだけ多くを望んでんだよ。あいつの人生はあいつのモンだろ？期待かけんのは勝手だけだよ、偏った教育やら狂言八百長までいくと感心しねえ通り越してフツツ〜ウに犯罪だぜ？こっちで暮らしてて普通に常識ってモンを弁えてんならよ、魔法使いだから別、つてオツムの働き停めてんのを一旦止めて考え直してみたらどうよ？十歳児に対してやる事かっつてのをよ』

高音の脳裏に蘇るのはそんな、かつて辻達に投げ掛けられた言葉の数々。

『別に俺達は、そ魔法使いっちの価値観やら文化を一切合切否定しよう、って訳じゃ無いよ。ただこっちの感覚からすると、いくら才能が有って有名な人の息子だからって、皆が皆してそこまで構いたがる気が知れない』  
『優遇も過ぎれば差別と結局は同じことだ、心無い扱いは知らず知らずの内に根を腐らせる。他者よりも劣る才覚を持って生まれながらもその不遇にめげる事無く、努力の果てに確かな実力を備えるに至りながらも、それに見合わぬ扱いを受けてきた同僚を持つ貴女ならば理解わかるのではないか？』

『組織のお偉いさんやら世間の事情やらは知らねえがよ、ネギの奴は飛び級なんて真似してまでさつさと一人前の魔法使いになろうって頑張ってたんだぜ？これ以上何を頑張らせて無理をさせる必要があんだよ』

『見ていれば解ると思うけれど、ネギ君は凄い頑張り屋さんだから。周りまでが生き急がせたら何時か潰れてしまうと僕は思うよ、期待に応えようとした結果ね。他人ひとより速く走れる人は、転んだ時に他人よりも痛いし、大怪我をするものだよ。しかも、速く走れる人は嫉妬を買い易い上に、走り切る事だけに集中している人はこかし易い。……もう兆候は現れてる、一端は高音さんも垣間見たんじゃないかな？まあ、現在進行形で厳しく稽古漬けてる僕等が言えた台詞じゃないけれど……年相応に甘やかしてあげる人が居てもいいと思うんだよね……』

…魔法使いという枠組みに、慣れ過ぎていたのかもしれないわね……

高音は思う。

ネギの育成に関する組織の方針やり方を、高音は多少行き過ぎとは感じてても間違っているとは思わない。魔法とは万能にして絶対の力であり、すべから須く魔法使いとは万人の幸福の為にその力魔法を振るい、秩序の安寧を保つ存在であると高音は信じているからである。

故に、立派な魔法使いマギステルマギという己自身も目指している偉大な存在と成るべくネギが導かれるというのなら、喜びこそすれ憤る事などある筈もない、と。

高音は辻達から意見を聞いた上で尚も思っていた。

其れは向上心ウツウツを持つ若き魔法使いとしては至極真つ当な考えであり、こと此処に至っても高音は魔法を必ずしも良しとしない、という認識を持つ辻達の事が理解できはしない。

だが、それでも。

「杜崎先生、ネギ先生は…子供ですよね」



「……まだほんの。本来なら初等部を卒業しているかどうかの、…子供でしかないんですよ……」

魔法師至上主義者としてでは無く、一個人としての高音・D・グッドマンは。普通の人間から真つ直ぐに疑問を投げ掛けられて気付いた事がある。

ネギ・スプリングフィールドという血筋も才能も申し分ない、英雄の後継者に相応しいが現時点で年齢十に満たない年端もいかぬ少年を、果たして魔法使いとしての道を一直線に歩ませるのが相応しいのか、という、旧世界の社会常識に則った根本的な疑問に。

「…言葉に上手く出来ないのですけれど……何だかおかしいと……しつくり来ないな、と……彼等に言われて、私は思ったんです……」  
「……そうだな……」

そんな、戸惑いを多分に含んだ高音の言葉に杜崎は目を瞑り、無理矢理絞り出した様な重々しい響きの籠った短い返事を返す。

「そうだな。お前の言う通り、おかしな話だよこれは。高々餓鬼一人に大騒ぎをし過ぎだと、俺も思うぞ。魔法使いとしては異端な考えなのだろうがな。……糞の様な世界の現実を見せ付けられた奴ほど、そう思う。高音、お前は味わわずしてそういう考えを持つに至ったな。矢張りお前は、優秀な生徒だ」

暫しして目を見開いた杜崎は、苦笑と呼ぶには苦味の強過ぎる笑みを浮かべて言葉を続ける。

「魔法使いを……今の世界を、間違っていると思うか？ 高音」  
「いえ」

その問いに、高音は即座に短くはつきりとした否定を返す。

「私は彼等の思想に影響を少なからず受けたのでしよう。しかし、私は魔法使いとしての己に誇りを持ち、属する組織に今だ大義を見出ししています」

ただ、と高音は短い前置きの後、些か躊躇いながらも続く言葉を放った。

「ネギ先生は類稀な才能と優れた精神性を兼ね揃える、素晴らしい少年です。そしてネギ先生は、魔法は皆が幸せになる為に使われるもの

だと、そう信じてくれています。……ええ、綺麗事だと一笑されても仕方のない子供の考えでしょう。世の中が夢と希望ばかりに満ち溢れてはいない事は私も知っていますつもりです。でもそれは、そんな夢見がちな夢を……諦める理由にはならない筈なんです。ネギ先生には他者による押し付けで無く、先生自身が正しい判断に基づつ将来の選択をした上で、それでもなお立派な魔法使い<sup>マギステル</sup>を目指してくれれば、と考えています」

世間知らずの小娘や子供の夢と嘲笑<sup>わら</sup>われようとも、魔法使いはそう在るべきなのだ、と。

高音もそう信じている故に。

「間違っているとは思いません。魔法使いも、世界も。……ただ、私は彼<sup>バカレンジャー</sup>等が間違っているとも思えません。全てを満たす解は存在しないのかも、そもそも正否の問題では無いのかもかもしれませんが、今の私にはその答えは導き出せないようです。……元はといえば、私がどう成りたいかという話でしたね。私は私が正しいと思った事を通せる様に成りたいのです、杜崎先生。正しいなどという枕詞の要らない魔法使いを、私は目指しています。世界に秩序と安寧を齎す為に力を尽くす、在るべき魔法使いを。だから彼等に助けられているようでは、駄目なのです。彼等がどれほど強かろうと、優れていようと。……私はそれに頼らなければ何も出来ないようでは、いけない」

……だからこそ、私は彼等以上に強く、正しく在れる様に成らなければならぬ……!!

「彼等の様な強さを身に付け、彼等自身も、ネギ先生も。篠村も愛衣も、聴て世界をも。私は正しく導きたい。……自己中心的で他者の気持ち<sup>チ</sup>を省みない、傲慢な考えなのは百も承知ですが、私はそう成りたいのです」

私は正しく在りたいのです。

高音はそう、小さくではあるがはつきりと締め括った。

「……なくんか拗らせてんなあお前の嫁もよお？」

「お、お姉様は何を話していらっしやったのですか中村先輩!?もしか

してお兄様に対する熱い想いを……!?!」

「黙れや。つつーか尋ねられても俺はお前等化けモン程超人的な聴力持ってねえから何話してつか解んねえよ! んでもって愛衣、お前も面白いから黙って座ってる!!」

「真面目を通り越して馬鹿真面目が思い詰めるとああなるんだろ。何となく刹那に似てるよ考え方が」

「……いえ、私は……」

「反論するだけ墓穴を掘るぞ桜咲後輩、黙っておけ。そして辻、お前も他人の事は言えんわ」

「ちよと押し付けがましいアルけど、高音の夢は立派だと思うアルよ私は」

「で、ござるなあ。大言壮語になるか否かは当人の頑張り次第。志の高い人間の理想を嘲笑う現実主義リアリストぶつた悲観主義ベシミストよりは万倍マシでござる」

「あ、明日菜さん。杜崎先生と高音さんは何を……?」

「…聞いちゃってる私が言える台詞じゃないけど、他人の事情にあんまり首突つ込むもんじゃないわよ。ま、あんたの味方で、立派な人なのよ高音さんって」

例によつて聞いていた(聞こえていたと言うべきか)面々が高音の一筋縄ではいかない拗れ振りに唸る中、傍らに愛衣を引っ付けながら膨れっ面をしていた篠村が呻く様に尋ねる。

「……で? 結局あいつガチで闘る気なのか……?」

「そもそもやる気満々よ」

「大体篠村の言った通りだな、目標の大きさにはビックリしたけども…」

「世界平和と大差はあるまいな。地に足が付いた上で目指すならば好感は持てるぞ」

「…そうか……あんの馬鹿真面目馬鹿女めが人の気も知らねえで……いや、知った上でこれか……」

畜生儘ならねえと頭を抱えて唸る篠村。今にも血を吐きそうな程の心労が顔に浮かんだ様子は端から見ても哀れみを誘う。

愛衣がワタワタと慌てながらも慰めに入るがあまり効果は無いようである。

「まあまあ篠村の兄ちゃん、んな心配すんなや大丈夫やて。あのゴリラみたいなゴツツイオツさん、見た目と違って話せば真面な人やったから。高音の姉ちゃんも怪我くらいするかもしれんけど兄ちゃん等みたいに死にかけたりはせえへんて」

「せやせや、案ずるがより生むが易しやで〜篠村先輩？」

「事情があるのは察しますが、高音さんが決めた事ならば協力して良い形に持つて行くのも一つの方法かと思うですよ」

「た、高音先輩は、口では色々言つてても、篠村先輩の話は、ちゃんと聞いてますから〜……落ち着いたら、きつと解つてくれると、思います〜」

「まあ旦那、あつしのような凡俗としちやあ旦那の事勿れ主義もよく理解できやすが、古来より腹括った女を野郎が止めんのは無理な話つて相場が決まつてまさあ。ここは信じて見守つてあげやしよう」  
『一緒に応援しましょう、篠村さん!!』

「……………つはあああああ〜……………」

俺に味方はいねえらしい、と小さく呟いてから篠村は近距離にある愛衣の顔を力無く見上げ、投げやりな様子で問いを放つ。

「……………まあ、今更俺なんぞに止めようが無えからなに言つたつて愚痴でしかねえんだけどよ。愛衣、お前は高音に無理してほしくないとか思わねえか？」

「思いますよ、当たり前じゃないですかお兄様!!」

ともすれば敬愛するお姉様への愛情を敬愛するお兄様に疑われたとでも思ったのか、非常に心外な様子で即座に肯定の意を返す愛衣。

「…ですけど、お兄様。お姉様は今、確かに慣れない事をやろうとしていて、それはとても大変な事だと思えますけど。お姉様は無理をなさろうとはしていないんだと思います」

「……………どういふことつちや……………」

「お姉様は、目標ゆめに向つて頑張っているんですよ、お兄様」

愛衣はそつと微笑んでそう告げる。

「お姉様が最近悩んでいらつしやるのは見ていて判りましたし、お兄様が気を遣っていらつしやるのも判っていました。お姉様は話してくださいませんかでしたから私は何も出来ませんでしたし、お兄様が声を掛けて、お姉様が意地になつて跳ね除けてしまわれた時はこのまますれ違つてしまふんじゃないかつて不安でした」

だけど大丈夫です、と愛衣は明るい声で断言する。

「お姉様は何時も通りなんです、お兄様。ちよつと思ひ詰めてしまわれただけで、それで変わつてしまわれたりしません。普段の様に、強く気高く美しく。：周りの人の為に何処までも頑張る事が出来る、私の尊敬するお姉様のままです。お姉様は何時も通り、己を高めようと努力しているだけなんです！だから、杜崎先生ならきちんと受け止めた上で、良いようにしてくれます。お兄様は、試合が終わつた後でお姉様に優しく声を掛けてくださればいいだけなんです!!」

「……何時も通り、か……」

仲直りの言葉を考えておいてくださいお兄様！あわよくばこれを機に進展を……と、再びハイになつて騒ぎ出した愛衣を押さえ付けつつ、篠村はポツリと呟いた。

「……ま、そうだよな。何時も通りつちやホントにそうだ。お前の言う通りだよ愛衣……」

「民草だの人々だの、要するに赤の他人な見ず知らずの幸福なんでもん目標に出来て、周りが引くくらい努力家で。その上周りへの気遣いや面倒見んのを忘れない。そんな出来た奴だから好きになつたんだよな、お前も……俺も」

……焚き付けたからには、しつかり面倒見てくれよ、杜崎先生……熱血バカゴリラ呼ばわりしたのは、謝つから、さ……

「……生き急ぎ過ぎだ、と言つても聞くまいな……お前を唆しておいてなんだが、俺の教育方針は無茶は認めど無理をさせるな、だぞまったく……」

まあお前自身は無理などしていないと言うのだろうが、と杜崎はひとりごちる。

「いっそのこと馬鹿共と当たっていればゴチャゴチャと考えずに却って上手く行ったのやもしれんが、こうも固められたならば仕方があるまい。妙な所で弾けてやらかすよりは、この馬鹿騒ぎのお祭り舞台上で吐き出すべきだろうよ」

だからこれは上司命令だ、と杜崎は高音に告げる。

「思いつきりの全力で、かかって来てみる高音。あの馬鹿共のようにな。馬鹿の行動を真似た所でお前が馬鹿になれる訳でも無ければ、そもそも馬鹿になり切りたい訳でも無い、どうなりたいか理解<sup>わか</sup>っていない、この方法でいいかの確証も無い、無い無い尽くしだな」

全く以って理に適っていない、と杜崎は太い笑みを浮かべた。

「なんとも自分らしくない真似をしている、と何処かで思っているだろう？確かにお前らしくは無い。俺が促したとはいえ、普段のお前ならば俺の馬鹿げた提案など一蹴して勝ちを譲るだろう。それが今こうしているのは、先程お前が語った様に馬鹿共に感化された部分もあるのだろうか、元々お前にも馬鹿な部分が有るからだよ高音」

決して馬鹿にするつもりは無いが、一言で言うなら世界を平和にしたい、などと真剣に宣えるのは立派な馬鹿だよ、と、杜崎は厳つい顔に似合わぬ邪気の無い笑顔を浮かべて告げた。今更ながらに子供染みた夢を語ったのが恥ずかしくなっただか、揶揄するような杜崎の言葉に顔を赤く染める高音だが、杜崎のそれ<sup>言葉</sup>に貶す様な響きや悪意は存在していない。

ただ、愉快そうな笑みと共に。何処か楽し気に杜崎は語る。

「形は違えど、それはお前の馬鹿の素だ高音。理屈で考えなくていい、筋道立っていないなくていい。お前が考えているよりも、変わるきつかけなど簡単に見つけられるものだ。お前はまだ、若いのだからな。……少なくとも馬鹿に学ぶと決めたお前の判断を俺は好ましく思う。お前は勤勉で熱意があり、他者に対して誠実な良い生徒だ。が、反面その気質故か責任感が強過ぎて思い詰める節がある……と、俺は判断している。それも若さだ、仕方がないといえば仕方がない、が……もう少

「しお前は柔らかくなくていいと、心配はしていた」

「だからこんな柄でも無い御節介を焼いている、とその笑みを些か苦いものに変えながらも、杜崎は話を締め括りに掛かった。

「だが安心したよ、真面目も過ぎれば充分に馬鹿の素質だと俺も学んだ。……一先ず何も考えずに、思いっきり掛かって来い高音。あの馬鹿共に当てられるものがあつたなら、それできつと上手く行く」

「……解りました……!!」

『さあ、間も無く試合開始となります！麻帆良の生物災害がもたらすド級の破壊を、謎めくス○ンド使いがどう捌くのかあ!?!これ迄の試合とは違った意味合いで注目の一戦が、今始まります!!』

「高音、一つ忠告だ」

「……なんででしょうか?」

地鳴りのような観客の歓声が響き渡る闘技場内の中央。向かい合った高音に杜崎は告げた。

「全力で来い、と言ったが俺は全力を出すつもりは無い。有体によえば手加減をしてお前の相手をする。……お前を舐めている訳では無い、これは上司として、先達として。……歳上の矜持であり、行つて然るべき配慮だ。……まあそれが災いして高畑先生はあの馬鹿共の毒牙に掛かった訳だが、俺達はそれでいい。子供を相手に潰す算段を立てる様な真似をするよりはマシだ。……しかし俺は加減が大雑把というか、下手糞でな」

「……全力で無いからと油断する事無く、私に防御を真剣に行え、と?」

「有体に言えばな。……馬鹿にしていると思うか?」  
「いえ」

短く答え、高音は己の衣服と影を微かに蠢かせた。

「元より。杜崎先生が全力であろうと、そうで無かろうと。私は防御が真骨頂です、手を抜くことなど、ありえませんが」

「……良い答えだ」

「……あく、お二人さん？……」

ニヤリと悪鬼の如き笑みを浮かべる杜崎と、それに対して不敵に微笑み返す高音。

そんな二人の様子に何処か不吉な既視感デジャビュを感じてか、朝倉がゲンナリした表情で釘を刺しに行く。

「もうさつきまでの会話聞いてたから半ば諦めてはいるけれどさ……魔法バレだの何だのって心配はさて置いて、直ぐに直せるからって全く建物にガタが来ない訳でも無いんだからさ。…あんまり闘技場ぶっ壊さないでよ？」

「善処しよう」

「ワザとは壊しませんよ、朝倉さん」

「……うん、まあもいつか……」

悟った様な笑みと共に朝倉は一步、二歩と後退し、マイクを口元に持つて来ると試合開始を宣言に掛かる。

『……それでは第六試合……！』

「行くぞ」

「行きます」

静かな互いの宣言と共に、朝倉の声が響き渡った。

『開始イッ!!』

その大音量の絶叫に重なり合う様にして低く、重い打撃音が会場中に響き渡る。

「ワオ！」

「いきなりか」

「まあ、杜崎教諭ならばこうなるだろう」

「力は抜いても手は抜かないアルからね〜杜崎は」

「上手い事を言うでござるなあ、古」

「……いや、しかしこれは……」

刹那が呻く様な声と共に見つめる先。

試合開始直前まで杜崎が立っていた闘技場の床が、まるで埋め



てあつた地雷が爆発したかの様に捲れ上がり、大きな穴が空いている。

杜崎が開始と同時に魔法によって強化した脚力により、踏み込みを行ったが故に。

そして、そんな規格外の踏み込みによって放たれた疾く、重い右のストレートは、高音が一瞬で展開した複数枚の影精により編まれた漆黒の衣を盛大に撓ませ、半ば引き裂きながらも受け止められていた。

「…良し、口だけではなかったな。舐めて掛かったならば今ので終わりだったろう」

「重ねて言いますが防御は私の十八番です、そして私は口先だけの輩が大嫌いなのですよ。……己の至らなさにより迷惑を掛けている以上、半端な真似をするつもりはありません!!」

言い捨てると共に高音は新たな黒布を呼び出し、杜崎の身体を巻き取ろうとするが、杜崎は素早く右手を引くと同時に大きく後方へ跳躍し、束縛から逃れる。

高音は元より杜崎を退からせるのが目的だったか、刹那の遅滞無く両腕を跳ね上げ力有る言葉を紡いだ。

ノクトウルナニグレデーニス  
「黒衣の夜想曲!!」

「……ふん………!」

マスケラの様な面を被った黒衣の巨人を背後に召喚する高音を前に杜崎は獰猛な笑みを浮かべ、半身に拳を構える。

「……だから言ったじゃねえかよ………!」

ハナッ  
最初からの激しい攻防の展開に観客が湧き上がる中、選手席の篠村はアワアワと身を震わせる愛衣を落ち着かせる為に背中を摩りながら、ウンザリした調子で呟いた。

「いくら見かけによらず常識人だからって日常的にこの馬鹿共の相手バカレンジャーしてんだろ?……手加減やら普通やらの基準がとつくにイカれてんじゃねえかと思っただよ………!」

22話 まほら武道会本戦第6試合 高音VS杜崎 (その2)

篠村と私の付き合いは存外に短い。

初めて出会ったのは私が十一歳の時、丁度魔法学校を一年飛び級して卒業した後に同系列の高等部へ入ってから程なくした頃だった。

当時の私は周囲との人間関係に問題を抱えていて、疲れ気味だった。

今だからこそ素直に認められるが、原因の大部分は私にあった。私は物心着いた頃から物事をな<sup>あな</sup>あに出来ない性質<sup>たち</sup>で、常に品行方正且つ侃々諤々な在り方を己に律してきていた。幼い頃から立派な魔法使いに憧れ、在るべき魔法使いを目指す身としては当然の心掛けだと思っていたし、それは現在<sup>いま</sup>でも変らぬ己が根幹を成す信念だ。

しかし、当時の私はそんな姿勢を他者に対しても強く求め過ぎていた。やる気が出ないと授業で手を抜く者、自分の努力不足を棚に上げ周りを妬み、蔑む者、従<sup>バートナー</sup>者選<sup>び</sup>びを恋人探しの口実程度にしか捉えず異性を籠絡することにばかり熱を上げる者。

今でもそんな輩に対して好感は持てないが、当時の私はそんな人間はその場<sup>学び舎</sup>に存在することすら許されないとでも言わんばかりに彼彼女等を厳しく諫め、性根を叩き直さんと舌鋒鋭く批判を行った。

結果、私の周りから人は離れていった。真面目過ぎてついに行けない、空気の読めない堅物、一人で盛り上がっているコミュ障女。当時の私に貼られたレッテルの数々だ。

今となってもそんな当時の私の態度を間違っている、とはつきり否定は出来ないが、きつと正しくも無かったのだろう、と今ならば思える。

『皆が皆、君の様に正しくは在り続けられないんだ。高い目標の為努力を惜しまず、そしてそれを苦しめない君の精神はとても素晴らしいものだけれど、他人にまでそれを強要してはいけないよ』

…現在の私からすれば耳の痛い諫言だが、その時の私は大人にして一人前の魔法使いである教師からも否定的な意見を告げられた事がショックだった。

『私は正しい筈なのに何故？』

そんな憤りを交えた疑問を幾度も頭の中に渦巻かせながら、私はその日の放課後、当てもなく校内の敷地を彷徨っていた。誰にも会いたくは無く、何も言われたくない気分だったのだろう。

そんな時だ。

校舎から遠く離れ、学生の住まう寮からも反対の位置に面する。訓練用の施設も何も無く、何か目的のある者ならば絶対に寄り付かないであろう、敷地と林の境界線に存在する抉れたような深い窪地にて一人黙々と鍛錬を行っていた同級生、篠村 薊に出会ったのは。

『……何だお前？こんな時間にこんな所フラフラして何がしてえ訳？まさか態々俺を探しに来て皮肉や嫌味言いに来たんじゃなからうな？』

『言っている事の意味が解らないのだけれど？こんな辺鄙な場所云々はそのままお返しするし、生憎今は何時もの様に下らない妬み嫉みや自虐を論してあげる気分でないから一先ず黙ってくれないかしら。私は貴方の事なんて一欠片たりとも知りはないわよ自意識過剰さん？』

……初対面の印象は互いに最悪だったと、こればかりは篠村と口を揃えて言える。私はその情景を見て聞いて、篠村を単なるへし折れた落伍者としか見出せなかったし、篠村は篠村で私の事を鼻持ちならぬい高慢ちきな女、とでも思ったのではなからうか。兎に角その時の私は冷静さを欠いていて機嫌が悪く、そして篠村 薊という男は当時から自虐的で後ろ向きな考え方をする、卑屈で臆病な面のある人物だったが、馬鹿にされてもヘラヘラと笑って誤魔化す様な腐った性根も持ち合わせてはいなかった。

ならばどうなったかと言えば簡単な話だ、私はその日生まれて初め

て凄惨な罵り合いを初対面の人物と交わした。私は篠村の自虐的で遠回しな嫌味を交えて此方を皮肉つてくる陰湿な物言いに激昂し、軟弱者だの度量が小さいだの腐った性格だの、おおよそ今まで生きてきて口にした事が一度も無い様な汚い罵詈雑言を吐き出すに吐き出した。もう売り言葉に買い言葉といった有り様で、最終的に声が枯れるまでの怒鳴りあいの果てに、

『そんな碌でも無い考え方をしているから落ちこぼれなのよこの存在価値無し男!!』

これ以上罵り合いを続けていけば実力行使になりかねない。茹だった頭でも辛うじて残っていた理性からそう警鐘を受けたため、そんな捨て台詞を残して私はその場を駆け去った。育ちの良いお嬢様はスラングまで可愛らしいですねエエエエツ!!等という苛つく台詞を背中に受けながら。

その後、充てがわれている自室にて、私は己の所業に後悔して身悶えしていた。

……初対面の人間に対して私は何て無礼な真似を仕出かしたのかしら……

確かに、篠村の物言いは此方への悪意が籠った代物であり、全面的に自分にばかり非があるなどは思わない。しかし、それを差し引いても己の態度には明らかに問題があったと私は自覚できていた。

見た所篠村は、鍛錬を行っている様子だった。何故あんな人気の無い場所でそんな真似をしていたかまでは解らないが、少なくとも法に触れる様な如何わしい真似をしていた訳では無い。幾ら苛つく物言いをしていようが、堪に障る様な態度を取ろうが。あそこまで相手を否定する言葉を吐く権利は高音・D・グッドマンには無かった。

感情のままに他者へと不当な弾劾を行なってしまった。その事實は正しく在ろうとしてきた己の心を後悔と自噴の念に千々に乱れさせていたのだった。

……明日、誠心誠意の念を込めて謝罪しよう………!!

不覚にも何ら遠慮する事の無い口喧嘩の様なやり取りにて、鬱憤の溜まっていた心情がスッキリした様な、何処か爽快な気分にいる己の

状態を自覚していた私は、強く誓いながら眠りについたのだった。

『アザミ・シノムラ?……ああ、あの我が校始まって以来の落ちこぼれの事ですか?』

『精霊との接触コンタクトなんて基本中の基本すら真面にこなせない正真正銘の屑よね?……それがどうかした?』

『劣等生の分際で此方の温情を跳ね除けては誰彼構わずに噛み付いて問題を起こす、問題児の筆頭ですよ。……まさかとは思いますが、彼に関わろうとしているなら辞めておいた方が身の為ですよ高音さん……?』

『……………』

何故だろうか?

普段の私ならば態々謝罪する相手の情報など集めようとはしない。噂話等は大量に語られるものだし、見聞きした話というのはその人々の主観が入った時点で事実からは歪んでいくものだ。仮に篠村が噂の通りどうしようも無い低俗な人物だったとしても、非があるのは私の方なのだ。相手を見て頭を下げるかどうかを決めるなど、私が最も嫌悪する行為なのだから。

相手が聖人だろうと極悪人だろうと、非を見出したならそれを正し、非礼を犯したならばそれを謝る。私の考える正しさとはそういうものだ。

だから私がそうした理由は今でも解らない。ただ何と無く、無性に気になった。としか、今も昔も言いようが無いのだ。

そうしてらしくもなく、好かない真似までして手に入れたのは、悪意に満ちた蔑みにブレンドされた、篠村 薊という一人の魔法使いが紛れも無く純然たる落ちこぼれであるという、冷たい事実だった。

精霊との接触コンタクト。

この場合の精霊とはこの世の異層に存在する力有る存在の総称であり、魔法使いがある程度位の高い魔法を使うには避けて通れないあらゆる魔法の基礎にして始まりの行為。

魔法とは精霊に干渉し、己が魔力を対価として支払う事により極小

規模の世界を改変する力だ。

それが行えないならば、篠村 薊はごく初歩的な魔法以外を除いた一切の魔法を使う事は出来ない。

落ちこぼれや劣等生などという言葉が、過剰どころか不足に思える、そうそれは。

全く以って、酷い様であった。

『……で、何しに来た訳お嬢様？昨日の続きがしたいってんなら生憎だが遠慮させてもらうぜ。俺は落ちて零れちやいるが暇じゃねんだよ、昨日の事なら俺も……』『待つて』

昨日と同じ、まるで他人の目から逃れる様に落ち窪んだその地にて、手頃な大きさの岩にだらしなく腰掛けながら面倒臭いという内心を隠しもしない篠村の投げ遣りな言葉を私は途中で遮った。

誠意の無い態度に腹が立った訳ではない。そもそもその時の私にそれを責める資格など有りはしなかった。

ただ、私はせめて先に謝罪をしたかった。先に謝ればいいという問題では無いし、謝りたいという考え自体が自ら気持ちを楽にしたいが為の自己満足だと言われてしまえば、反論は出来ない。

それでも、私は彼方が譲歩してきたから仕方が無く謝った、等と目の前の男に――篠村 薊に思われなくなかった。

落ちこぼれという本人の自虐は決して逃げの誤魔化しなどでは無く、冷たく揺るぎない事実ではあった。しかし、私が姿を見せてから篠村は曲がりなりにも己の非を認め、ぞんざいながらも謝罪の姿勢を見せたのだ。

矢張り噂などは当てにならない。篠村は他より劣っていようとも、人の気持ち解らない訳でも自己を中心として生きている訳でも無い。

寧ろ篠村は、呼んでもいないのに勝手に姿を現した挙句生意気な口を利いて、言われる筋合いの無い誹謗中傷をぶつけて帰って行った腹立たしい小娘を全面的に拒絶しない程度には心の広い人物だった。

相手が仁を返してくれたのなら、私は誠を以って応えたかったの

だ。

『私は、昨日貴方に心無い罵倒を吐き、無礼な態度を取ったわ。…許してくれとは言わない、ただ謝罪をさせて』

『…申し訳、ありませんでした』

だから私は深々と頭を下げ、誠心誠意を込めて謝罪の言葉を放った。

それに対して篠村は、私のそれを<sup>謝罪</sup>予想だにしなかった、というポカんとした顔をしてみせた。

『…頭、上げてくれや……なあ……』

『何かしら?』

『…お前さ、何で態々、謝りに来たよ? 関わりに来なきや下げたくもない頭下げずに済んだとかは思わなかったか?』

『簡単な話よ』

私は言われた通りに頭を上げると、真っ直ぐに篠村の目を見て告げた。

『私は頭を下げた……だから。正直に言わせてもらえば貴方の態度には腹が立ったし、先日の一件は私が十割悪いとも思っていない。けれどそれに対して私はその指摘だけでなく、私の苛立ちから来る私心で貴方を不当に貶めたわ。それはやってはいけないことだから謝罪したかった。それだけよ』

『…成る程、解ったわ……』

篠村は呆れたとでも言わんばかりに、ジリジリと刃物を捻じ込まんとする様な冷たく鋭い眼光を和らげて仏頂面を微苦笑に変え、僅かに声を和らげながら言い放った。

『馬鹿真面目って言われんだろ、お前』

『似た様な事は言われるわね、其処まではつきり言ったのは貴方が初めてだけれど……』

それで?と、声に出さずに促す私の意図を汲んでか、篠村はバンザイをする様に軽く両手を上げて謳う様に言い放った。

『謝罪は確かに受け取った。俺も言葉が過ぎたよ、悪かった。…今更だしもう知っちゃいるんだろうが名乗らしてもらおうか。アザミ・シ

ノムラ、俺の両親の故郷じゃ篠村 薊と、そう詠むらしい。俺みたいな輩にも筋を通したがる真人間ぶりと真面目ぶりが良いと思つた。名乗つちやくれないかお嬢さん?』

『喜んで、高音・D・グッドマンよ。彼方と此方旧世界 魔法世界の血が中々複雑に入り混じる、魔法使いらしい成り上がりの生まれ、とでも返せば貴方流かしら? 自虐的な物言いは好かないけれど、聞いただけでも酷い理不尽と無理解、差別の逆境に曲がりはしても折れてはいない気概は好感が持てるわ。どうぞよろしく』

そうだ。

私は篠村 薊を嫌いじゃない。あんな事があつても尚、良くも悪くも変わらないから。好きな所も嫌いな所も。

だから私は篠村を、今でも嫌い切れずにいる。

『乱打乱打乱打乱打あああああつ!! 音に聞こえる暴虐教師、その音よりも疾く鉄拳の猛撃を打ちまくるう!! 一撃毎に大気が裂け、踏み出す床が爆ぜ割れる! 規格外の連撃が高音選手に襲い掛かります! しかし此方も悪夢の予選を勝ち抜いた一人の規格外! 人体など風船の如く弾けさせるであろう破壊の嵐を謎の巨人が操るローブかマントか、兎に角黒い布の様なもので防ぎきっています! 耐衝撃素材かはたまたアラミド繊維か、それともス○ンドの不思議パワーか!? 超ド級の矛と盾がぶつかり合う、なんともド派手なバトルになつてきたあああつ!!』

『矛盾の故事ではありませんから矛と盾では攻めている方が有利ではありませんがね。試合という形式に則つての勝負である以上、何らかの形で相手を振じ伏せなければ勝ちはありませんから。高音選手がどう反撃して杜崎選手に有効打を与えられるかが重要なポイントになるでしょう』



「…まあ間違いではないな。丸まっているだけでは勝てはせん」

腹の底まで響く踏み込みの轟音と共に、杜崎は掬い上げる様なボディアツパーを一撃、其処から身体毎抉り込むかの如き左ストリートへと繋げ拳を引き戻し際に鉈の一撃を凌駕する回し蹴りを後頭部への打ち込んで。

その何れもを完全に纏う黒布のみで無力化せしめた鉄壁の様な堅牢さを誇る高音へ、しかし杜崎は怯みも竦みもせず、猛攻を止めないまま言葉を投げ掛ける。

「お前はと思う、高音？俺の見立てではお前達三人は極めて高い精度で完成されたチームだ。前衛、遊撃を篠村が、防御、後衛をお前が、決めの一撃を佐倉が。…やや変則的ではあるが良い連携をしている。お前達は三人揃えば高畑先生にも良い所まで肉薄出来るだろう」

だが、と、杜崎は続ける。

「其々が役割に特化し過ぎてお前達は一人一人で戦闘を行う場合、得意分野で爆発出来ても総合的に見た場合然程脅威とは感じない。篠村は決め手に、佐倉は防御に欠け、そしてお前は……」

「……………っ!!」

ズドン!!と一際大きな破砕音と共に、まるで戦車砲が直撃した様な凄まじい衝撃を受けて、高音と杜崎の間を隔っていた複数枚の黒布の大半が千切れ飛ぶ。半ば姿が露わになった高音の顔面目掛けてチョッピング ライト振り下ろしの右を叩き込みながら、事も無げに杜崎は言葉を放った。

「攻撃行為自体に慣れていないからか、攻めの手法がはつきり言うなら平凡で、貧相に過ぎる。お前の防御は既に一流と称しているが、自分よりも疾い相手や火力のある相手に対して丸まって凌ぐ事しか出来んのならば、先の大言壮語は矢張り絵空事と笑われても反論は出来んぞ？まさか此の先ずつと篠村や佐倉に負んぶに抱っこをされる事を良しとしたまま先の宣言をした訳ではあるまい。耐えてさえいれば並の相手ならば息切れもしようが……」

高音が次々と喚び出す黒布の防御幕をそれ以上の速度と回転数の重撃で千切り飛ばし、遂に生身の身体を晒した高音に杜崎は拳を引き絞りながら締め括る。

「生憎俺は並よりも大分上の域に在る。そして今はそんな輩がお前の敵だ。…守るだけでは勝てはせんぞ高音、何事にもな」

杜崎は自然石がそのまま成り代わったかの如き鈍器こぶしを容赦無く高音の鳩尾目掛けて突き出した。

「容赦無えな、ゴリポン。まああの殺人コングパンチや抹殺ゴリラキックをあそこまで真面に受けときながらあんだだけ凌げる高音ちゆわんの防御力は確かに凄えけどよ。…ん、まあモリモリの言う通りどんだけ堅くても反撃来ねえなら面倒臭くても脅威こわくは無えわな。ゴリ崎の言う亀じゃ無きやアルマジロ系女子って奴だぜ。守りに入っちゃいるが本来肉食系っぽい気の強さだしなあ」

時間は少し遡り、次々と散らされる黒布が花卉の様に舞う様を見ながら中村が（後半に限ってはどうでもいいことを）呟く。

「何か一つを極めるのは悪い事じゃないが、一点特化し過ぎていても大抵の場合相手はその得意分野に態々付き合ってくれたりはしないからな。実戦的な観点から言うなら、そもそも相手が高音さんを倒す事が目的で無い場合は堅牢なだけで鈍重な壁なんて無視して行けばいいだけの話だ。壁役は防御力が高いだけでなく、敵を引き付けられなければ壁足り得ないんだから」

「だからこそ年齢の割に攻撃呪文ばかり覚え過ぎている佐倉後輩や、手数と小回りが利く遊撃役に適した篠村と組んでいるのだろう。普段仕事を上ならば互いに補い合っている以上欠点は欠点足り得ん。…しかしこれは一対一の試合だからな」

「高音も黒布で拘束狙たりワイヤーみたいなの撃ち出したりしてるアルから全く反撃しようとしてない訳じゃ無いアルが……」

「杜崎先生の言う通り、並の相手ならば牽制程度にはなるでござろうが、この武道会のレベルではやるだけ無駄、と言っているでござるな」  
「まあ確かになんちゅうか、何が悪いって訳や無いけど攻撃手段が全う過ぎて平凡やな。あんなん負けんだけなら俺やネギでも出来るで」

「いや、僕じゃ……」

「謙遜スナ。様は真面に勝負しなきゃいんだから少しばかり動ける

「奴なら難しくネーヨ」

「まあ攻撃はCからD、防御がAってだけの話ですカラ、あの人が弱い訳でも勝とうとすれば勝てるって訳でも無いんですけどネー」

「…ガードの固い女は脱いだら凄イ……………」

中村を皮切りに選手席の武闘派面々から述べられる高音の評価は酷評とまでいかずとも辛い評価である。

「杜崎先生は身体強化魔法の扱いに掛けては高畑先生等の例外を除いては右に出る者のいない使い手で、近接戦闘の技量に於いては少なくとも見積もつても私や皆さんと同等以上。大型魔獣を正面からの肉弾戦で圧倒出来る一流の前衛魔法使いです。如何に高音さんの防御が秀でていようと、ただ受けているだけでは……………」

「全う過ぎて詰まらんが魔法拳士としては一つの最適解だな。ああいうなんの小細工も無く単純シンプルにただ強い輩は余程極端に戦力で上回らねば簡単にはやられてくれん。格下の下剋上が最も成立し難いバランス型という奴だ。…………見ろ、早くも終わりの様だぞ貴様の女は」

相変わらず退屈そうな表情のまま、刹那の語尾に被せる様にして言葉を紡いだフツノミタマの目には今まさに防御を剥がされ、一撃を喰らわんとしている高音の姿が映っている。誰がどう見ても高音の絶体絶命としか思えないそんな光景を元にしたフツノミタマのコメントを、

「馬鹿言うなよアーティファクト骨董品。長生き…んにや、長く存在してる割には見る目無えなアンタは。アレを俺の女呼ばわりする節穴さを含めて」

「最後を除いてお兄様の仰る通りです！」

篠村は鼻で笑って否定した。隣の愛衣もそんな篠村の台詞に自信の籠った笑みを浮かべて頷き、一部を肯定する。

「…………いや旦那、ありやどう見ても……………!?!」

そんな、端から見ていれば身内鼻根の盲信としか思えない言葉にカモが反論しようとして、直後の光景に言葉を失う。

鈍く、重い音と共に杜崎の拳がめり込んだのは華奢な高音の肉体では無く、それまでの鈍重な動きが嘘の様に高速で翻り、高音の体前へ

と差し込まれた黒衣の巨人の掌であった。

……まさか影精による防御布だけで無く、このデカブツまでが……!?

「はい。物理、特殊攻撃を問わず自動防御オートガードを行います。実体を持ったこの大質量を速く動かすには多大な力を消費するので、普段は黒衣を防御手段として用いています。……先程の宣言、あまり安く見ないでほしいと、そういうニュアンスを込めたつもりでしたが?」

半ば掌をひしゃげさせながらも、軽く装甲車をスクラップに変貌かえする重爆を受け止めてみせたその巨人の能力に杜崎が目を見開く様子を見て高音は事も無げにそう言い放ち、己が下僕たる巨人に指令を下す。

直後巨人が歪んだ掌を無理矢理握り締めて杜崎の片腕を拘束し、振り上げられた逆の手が鉄槌の如く振り下ろされる。高音の出し惜しみなない魔力消費によってそれまでの動きが嘘の様に加速した巨人の拳は身動きの取れない杜崎の頭部に吸い込まれ――

「ならば同じ様に返そう、…舐めるなよ?」

――る寸前に杜崎が振り上げた爪先の一撃によって逆に粉々と砕け散る。一瞬の後逆の軌道を描く様にして振り下ろされた脚撃が腕を掴む逆の手を半ばからへし折り、自由を取り戻した杜崎は素早く後退して距離を置きに行き。

「舐めてはいません。…無理をして攻めに来ていない現状、私がないか動きを変えれば一先ず退くと、そう読んで誘導した結果が今ですの  
で」

「……っ!?!」

高音の軽く掲げられた両手の間から湧き上がる黒の奔流に杜崎の目が再び見開かれた。  
ケントウム ランケアエ ウンプブラエ  
「百の影 槍!!」

直後、殺到する黒き槍の群れに杜崎は全身を打ち抜かれ、その身体は弾かれた様に場外の水堀へと叩き込まれた。

「あいつは勝気だが根が優しい。気性が攻めに向いてないのは、お前等の言う通りだろ。実際俺から見てもあいつの攻めは平凡だ」

「でもあいつの攻撃自体は平凡でも貧相でも何でも無え。影精魔法は防御や支援向きってだけで攻撃出来ない訳じゃあ無えし、あいつの魔法力は質、量共に少なくとも魔法生徒ン中じゃN.O. 1なんだぜ？加えて出来損ないの俺みたく取り分け苦手分野の魔法も無えってんなら……」

「こう、なります。先程中村先輩はお姉様を<sup>アルマジロ</sup>と例えましたが、お姉様はそんな消極的な肉食系<sup>情熱家</sup>ではありません！同じ甲羅を持つ獣ならば穿山甲<sup>センザンコウ</sup>の如くと讃えて下さい!!」

「……愛衣、それは確実に讃えて無えぞ……」

『バ、生物災害杜崎選手！まるで暴風雨の様な破壊の連打を只管防御に徹する高音へ見舞い続けていましたが、遂にその鉄壁のヴェールを打ち破ったかに見えたその瞬間ツ!!突如凄まじい速さで動き出した巨人と目にも留まらぬ攻防を繰り広げたかと思えば高音選手の放った無数の黒いワイヤー？に全身を痛打され場外へ吹き飛んだあああつ!!』

『相も変わらず高音選手の操る力の原理は不明ですが、極めて強固な靱性且つ弾性を兼ね備えた繊維の様なものを自在に動かせる様ですね。防御に用いている黒い布も、攻撃、拘束に用いているワイヤーも恐らくは同じ物質なのでしょう。さて、杜崎選手のダメージは如何程でしょうか?』

「……捉えた、のは確かね。手応えという感覚が私には良く解らなけれど、当たりはした……」

矢鱈洞察力の鋭い解説実況コンビのコメントに薄ら寒いものを感じつつも、高音は油断無く杜崎の沈んだ水面を見据えながら奇襲の可能性も踏まえ、全方位に黒衣の盾を展開する。見事己にとっての会心の一撃を決めることの出来た高音ではあったが、それによって杜崎が致命傷、或いは重傷を負い戦闘不能状態になっている等とは欠片程も思っていないかった。

「……浮かんでこないけど、もしかして……」

「無えな、百%どころか一万%無え」

朝倉のカウントが場内に響き渡る。一向に浮上してくる気配を見せない杜崎に、観客で常日頃からその実力を文字通りの骨身に沁みて理解している武道家達が動揺と戸惑いを多分に含んだざわめきを漏らす中、今の一撃で勝負が決まったのではないかと明日菜が口にした疑念を中村が阿呆臭いとても言わんばかりに一蹴する。

「あの黒い槍の奔流、一本一本の威力は篠村の魔法の射手一柱よりやや上程度だろう？それが百本近く当たった程度で動けなくなるのなら、杜崎先生は麻帆良に赴任してきた初日に俺達によって殺されてるよ」

「ほぼ間違いないく杜崎教諭は健在だ。恐らく奇襲を掛ける為に水中へ潜んでいるのだろう。…些からしくはないが……」

朝倉の場外カウントが半分を越えた直後、高音の足下ーより正確に表現するならば闘技場の床下から響いた微かな物音が高音の耳に届く。

「……………っ……………っ!？」

油断無く全周囲を見渡しながらも高音が下へと意識を向けたその瞬間、盛大な破碎音と共に高音の立つ闘技場の床が下からの衝撃によって爆ぜ割れ、吹き上がる様に上へと奔ったその一撃は高音の身体を斜め上方へと打ち上げた。

「……………っ、くっ!」

闘技場の端まで吹き飛ばされた高音だが、巨人と共に何とか着地を遂げたその身体に然程大きなダメージは無い。高音を護る障壁は周囲に展開する黒布だけでなく、その身に纏う黒調のレザーとシルクで作られた様な若干ビザール感のあるデザインスカート状の衣服、ローリーカウンプラエ影の鎧がある。如何に強大な威力といえ、床を破碎した余波を喰らった程度では戦闘続行に全く支障は無い。

「成る程、本当に堅いな。意趣返しとしては些か大人気ないやり口で

意表を突いたというのに、これでは本当に節穴呼ばわりされても文句は言えんなあ全く……」

「…お褒めに預かり光栄です……と言いたいところですが、私の様にタネや仕掛けがある訳でも無く耐えた上で仰られるならば皮肉としか思えません?」

しかしそれは杜崎の方も同じであった。のっそりと無造作な動きで闘技場に空いた(空けた)大穴から這い出して立ち上がる杜崎は、身に纏うスーツの各所に穴こそ開いているものの、皮膚上には傷すら付いていない。

『杜崎選手、健在ーっ!!っていうかこの人奇襲掛ける為だけに水堀の中から闘技場の床下くり抜いて来てるんだけど!?基礎からぶっ壊したら修復に時間掛かるんだって!あんまり壊さないでっつて言っただしよーが先生!』

「すまん、ものの弾みだ」

「ちよつと位は悪びれてよ!」

思わず途中からマイクを遠ざけて素の口調でツツコミを入れる朝倉を適当にあしらいつつ、杜崎は高音に向き直る。

「舐めてはいなかったつもりだが些かお前の実力評価が過小に過ぎたか。もう少しばかり出力を上げても問題は無さそうだな」

「ご存分に」

高音は言外に今迄の防御では通用しないぞ、と律儀に忠告してくる杜崎の宣言に苦笑を浮かべつつも、返す了承の言に不安は無い。

一気呵成に攻め立てられ、余裕が無かった所為もあるが、高音とて本気で守ってはいなかったのだから。

「元より杜崎先生を相手に節約用の術式で相手取れるとは思っていませんでしたので。猶予を頂けるならば、遠慮無くいかせてもらいます」

高音は両の腕を高く差し上げ、力ある言葉を紡いだ。

黒衣の巨人の、全身が蠢く。

「アンサンブル ニグレデーティス  
「黒衣の重奏曲!!」

元より三mを越していた巨人が更に一回り以上縦横に膨れ上がり、身体の各所に煌びやかな装飾品が浮き上がる。マスカレードの豪華な仮面行列者そのものの姿となった巨人の、幾重にも重なる黒い衣装が風も無いのに靡き、緩やかに広がった。

高音は巨人を己が動きに連動させて共にゆっくりと一礼し、不敵な笑みと共に言葉を投げ掛ける。

「先ずは様子見で五重奏クインテットとさせていただきます……敢えて大言を吐かせて頂きます」

立てた指を手前にしゃくる、掛かって来いよ、のジェスチャーと共に。

「少しばかり、等と吝嗇めいた事を仰らず全力でどうぞ。これより私の盾は決して破れませんので」

「……ひゃくなんや高音さんの、えらい派手派手になったで？」

「元々派手でしたので言っただけなんです。最早悪趣味の域です……」

「ゆ、ゆえ、駄目だよそんな事言っちゃ！高音さんはアレが良いと思っただけでああいうデザインにしてるんだから！！」

「宮崎さん？あまりフォローになっっていないわよその言い方だと……」

『わ、なんだか凄くいっぱい出てきましたよ、あの黒い布みたいなの……！』

壇上にて荒れ狂う杜崎の拳足を二重、三重に重ねられた黒布にて受け止めながら巨腕の一撃やワイヤー状の黒槍にて反撃を繰り返して出るド派手な格好の巨人を見やりながら一部の者が高音のファッション（デザイン）（デザイン？）センスに疑問を抱いている中、バカレンジャーの面々は素直に高音の実力について感じ入っていた。

「うーわ凄っげ。ゴリポンのあれ、恐らく出力だけなら本気マジだぜオイ」「加えて先程まで容易く千切られていた影精の防御布が破損しなくなっただけ。複数の黒布を重ねて単純に強度を増しているのか……」



「ひい、ふう、みい……少なく共六枚以上は出してるな、黒衣の盾つてあれ。高音さんが優秀な魔法使いだつていうのは聞いていたけど、あんなに障壁ばかりに魔法力を割いて大丈夫なのか？」

言外に己へ問い掛けられたのを察した篠村が渋い表情を辻へと向けるが、一拍置いて長い溜息を吐いてから口を開く。

「…黒衣の重奏曲。あいつのオリジナル魔法で、あいつの影魔法に対する才能と防衛向きの才覚を余す所無く結集させた一つの完成形だよ、あれは。お前等は見分け付かないかもしれないけれど、あの爺い悪魔共と戦い合った時にもあいつはあれを使ってたんだぜ？元となる黒衣の夜想曲は全方位からの攻撃を自動で防ぎつつ、防御の元である黒布と牽制、攻撃用に自動展開してる影槍は手動操作可能。それでいてその防御力は並の魔法使いが張る障壁を軽く凌駕する……と、まあ其れなり以上に高度且つ使える魔法なんだよ。あいつはそれを更に改良して、攻撃行為のみならず近付いた目標や接触しただけの対象も自動で弾き飛ばす様にしたり、防御力強化の為に黒衣の盾を一度に複数枚展開出来る様にしたり色々やったから、元々防御防衛に優れた魔法が更に難攻不落な即席要塞魔法みてえになつてなあ……と、話がズレてんな」

要するにあの魔法は、と、篠村は半ば呆れ顔で闘技場の高音を見やりつつ、続く言葉を放った。

「それで満足しなかったあの勤勉な天才にして秀才が、防御って概念をトコトンまで極めようとして出来た絶対防御魔法だ。元の魔法である自動防御機能はそのままに、術者の任意で魔法力が許す限り幾らでも黒衣の盾を展開出来る。術式理論の改正と魔力運用効率にも手エ加えてあるおかげで、影精によって編まれた黒布の強度は上がつていながら魔力の消費コストはやや上がった程度でほぼトントン。おまけに複数枚を統合しての防御を行う様になつた所為でそもそも防御を削るのに必要な出力の最低上限が飛躍的に跳ね上がってる。試した事はまだ無えけど、あれの八重展開は理論上、最上位魔法に耐え得る」

「……………それは、また随分と……………」

篠村の断言に反応したのは相も変わらず辻の傍らに寄り添う刹那である。思わず、といった様子で溢れた言葉には、感嘆と微かな畏怖が滲み出ている。

「そ。随分と無茶苦茶な代物だろアレは？しかもあいつの最大同時展開数は八重でまだ限界じゃあ無い。事実上、準戦略級魔法をたった一人で防げる馬鹿げた魔法だが、恐ろしい事にそれだけじゃ無んだなアレのウリは」

「まだあんのか？」

「ああ。まあ一言で言うなら……………」

『ああーつと杜崎選手、遂に高音選手の呼び出した巨人の操る黒布に捕らえられたあぁっ!』

篠村の説明を遮って響き渡った朝倉の叫びに皆が一斉に闘技場へ視線を戻すと、其処にはまるで別の生き物が如くうねり狂う巨人から伸びる黒布の群れが杜崎の手足や胴体に絡み付き、その筋肉質な巨体を宙へと浮かび上がらせていた。

観客が悲鳴の様な喝采と怒号を上げる中、篠村は歓喜や誇らしさ、嫉妬に畏怖れ等、様々な感情の入り混じった複雑な表情を浮かべながら眩く様に言葉を紡いだ。

「防御は最大の攻撃って奴だ、格言とは逆だが誤りじゃ無え。…些か矛盾した言い方だが、桁外れの防御力を得た事によって防御を気にしなくなつたあいつは、攻撃の機会や反撃のタイミングなんて通常の駆け引きを一切合切無視して好きな時に好きなだけ攻撃を行う。相手が何をしようが気にもとめずに、潤沢な魔力任せに高火力の魔法と馬力及び質量のある巨人の物理打撃で波状攻撃を仕掛けてくる。…………毛色は違うがお前等の身内と同種なんだよ、本気の高音はな」

…………想定はしていた、が…想像以上に厄介だな、これは……………!!  
「最大出力!!」  
ウイース マーキスマ

力ある言葉と共に全身が眩く発光し、爆発的に増強された身体能力任せに杜崎は手足に巻き付く黒布を引き千切り、自由になつた両手を組み合わせた鉄槌の如き打ち下ろしによって胴体に一際大量に纏

わっていた黒布と黒ワイヤーを潰し斬る。

自由を取り戻し、闘技場に再び降り立った杜崎だが、息吐く暇も無く巨人の背から濁流の様に湧き出した黒槍の波濤が前面から殺到した。舌打ちと共に身を翻し、迫る穂先を手刀や拳撃で払い除けながら高音の横合いへと回り込み、大型猛獣はおろか大型魔獣の首を一撃でへし折った事もある全力の殺戮打撃を幕の様に展開する黒布へと叩き込む。

「無駄です」

しかし、三層に連なる黒布を纏めて打ち抜き、残る二層を半ば崩壊させながらも杜崎の打撃は高音の最後の一枚の防御を貫けない。舌打ちと共にすかさず追撃の前蹴りを打ち込むが、

「七重奏！」

瞬時に、しかも一層を追加して復元された黒布の盾によって再び威力を完全に殺され、強制的に勢いを止められる。更には風穴を穿たれた黒布が蠢き、渦巻いて杜崎の蹴り足に巻き付くと、凄まじい力でその身体を宙へと持ち上げた。

「……っ！最大……！」

「影よ!!」

杜崎が再び身体能力を跳ね上げて拘束から逃れるよりも早く、高音の呼び掛けに従って巨人の影から飛び出した成人男性程の体格をした黒衣の仮面姿の影精達が杜崎へ飛び付き、生半な気の使い手を軽く凌駕する力にて杜崎の手足を抑えに掛かる。

「鬱陶しいわあ!!」

苛立ちの籠った咆哮と共に杜崎が振り回した手足により、黒衣の仮面達は頭部を破碎され胴体を両断されてあっさりと掻き消える。が、高音の狙いは影精達による一瞬の足止めにあつた。

直後、組み合わせされた巨人の鉄槌が杜崎に振り下ろされ、轟音と共に杜崎は闘技場へ巨大なクレーターを作りながら埋め込まれた。

「ぐ、うう………っ!!」

苦鳴を洩らしながらも巨人の両拳を跳ね上げ、立ち上がった杜崎だったが、その時には再び湧き出した黒衣仮面の影精達と、巨人から

放たれる黒槍の群れが杜崎に迫っている。刹那の迷いも無く杜崎は右手側へと突進し、軌道上の影精を複数薙ぎ倒しながら高音の後方へと回り込みに掛かる。

未だ杜崎に致命的なダメージは無いが、最早完全に攻守は逆転していた。

『た、高音選手による突如人が変わったかのような猛攻により杜崎選手防戦一方ーっ!! 伝え聞かれる武勇伝では常に生徒達やらかした馬鹿を追い立て、蹂躪する側であった怒れる猿人がここまで追い詰められる姿など、試合前に一体だれが想像したでしょうか!』

『あの巨人の姿が派手グレートアップになっただ後から明らかにあの黒布の強度、展開速度、操作性が跳ね上がりました。恐ろしい事に高音選手は試合序盤では全力を発揮していなかったということでしょう。杜崎選手も高音選手に対抗して更なるパワーアップを果たしている様子ですが、現状を見る限りでは杜崎選手馬力負けパワーしている…ということになるでしょう。解説の私自身、口にしていて頗る違和感の激しい言霊ではありませんが、目の前の光景は現実です』

「嘘だあああああっ?!」

「あの狩り暮らしのゴリエツテイが訳の解らねえ超能力に敗ける訳が無ええええええ!!」

「どうしちまったんだよ鋼鉄剛猿!メタルコング?! んな布切れやら木偶人形やら、ことも無げに鎧袖一触出来ねえアンタじゃねえだろうがあっ!!」

「……大混乱ですね……」

「常日頃からあの自動鎮圧兵器にやられている馬鹿共は、忌々しく思うと同時にその実力ちからを認め、敬意を表しているからな。高音女史が如何に強かろうと、最近まで話にも上がらなかつた上に己と全く領分の違う得体の知れぬ力を扱う、同年代かそれ以下の小娘…となれば素直に認められない者もいるのだらう」

「そんな詰まらないプライド云々はまあわかりかしどうでもいいとして……本当に強いな高音さん」

「全くや。さつきは偉そうな事言うたけどこの状態俺なら呑み込まれて終わりや、絶対的に火力が足りん」

「…最上位魔法にすら耐える障壁なんて、杜崎先生や僕等じゃなくても突破出来る人なんていないよ……しかも高音さんの魔力が保つ限りは無限に再生するのに……」

阿鼻叫喚、といった表現が相応しい観客の一部を引いた様子で見ると夕映に解説しつつも、辻達は高音の実力を感じ入った。端的に言えば防御力の桁が違い過ぎて勝負が成立していないのが試合の現状だ。それが並の魔法使いや気の使い手ならばまだ解る話だが、杜崎 義剛ストライクフオーサーは充分に一流の名を冠するに相応しい、しかも出力重視の近接術士である。その重撃が通用せずに一方的に追い立てられるならば、少なくとも格闘大会という規則ルールの限定された舞台に於いて高音に勝てる者はほぼ存在しないに等しい事になる。

「なくに言っただねネギネギぼん。ゴリ先がヤバいなんて実況解説まさか本気にしてんのか？」

しかし、その前提となる杜崎の窮地を中村は笑って否定した。傍らの大豪院と辻も微苦笑を浮かべつつ頷く。

「え、ええ!?!でも辻さんもさつき……」

「高音さんが強いとは言ったけどね。杜崎先生が危ないとは言っていないよネギ君」

「そうだな。正味な話高音女史を些か低く見積もっていたのは確かだ、後程謝罪せねばならんな。…さて置きネギよ。確かに杜崎教諭は攻撃を止められ、少なからずダメージを受けた。しかしな、その程度まで喰らい付いた事ならば俺達もあるのだ。無論、少なくとも出力に於いては全開の杜崎教諭にな」

「そういうことっちゃ」

ムカつくことにな、と、中村は笑いながら。

「俺等は潰す気で行ってあのゴリラに勝てた事は一回も無え、俺達より強えんだよ奴あ。……こっからもう一段階先があっからあの類人猿はデス眼鏡と双壁張ってんだ、よく見てな?」

そろそろゴリラもそれなり以上に本気出さず、との中村の断言に皆

が再び闘技場を注目した、その直後。

闘技場の端に追い詰められた杜崎に対して、鞭の様に長く伸び上がりながら疾走<sup>はし</sup>った巨人の腕と無数の黒槍、黒衣仮面の影精達の三重殺<sup>さんじゆうころ</sup>綜が甲高い破裂音を響かせながら纏めて砕け散り、千切れ飛んだ。

……何が……?!?

「見事だ、高音」

詰みには至らぬまでも、更なるダメージを与え勝利へ近づく為の一  
手として何ら不足無い追撃。杜崎がこれまでに見せた迎撃能力を  
以ってしても無傷で凌ぐ事は不可能である筈であった。

しかし、杜崎は平然とした様子で静かに足を前に進めながら高音に  
語り掛ける。まるで先の攻防程度は一々語る程の事では無い、とでも  
言わんばかりに。

「よくぞその若さで其処まで練り上げた。才能に胡座を掛かず、鍛錬  
を弛まず。実戦を知り、時に思い通りにいかない現実を嘆き、時に挫  
けながらも折れず。…本当に努力を惜しまずに此れ程の力は身に付  
かない。お前を勤勉な、努力する天才且つ秀才と評した篠村の言葉は  
全く以って正しいな」

「……杜崎先生……」

「ん？ああ、心配するな。どうやって先の攻撃を凌いだか気になるの  
だろうが、こんなものは隠す程の代物でも何でも無い。教えてやると  
も、大層な事をしてみせた訳では無いからな」

言ってしまうえば頭の悪い、単なる力任せのゴリ押しだ。と杜崎は笑  
いながら拳を構えて言葉を紡ぎ出した。

「身体強化は骨を、筋肉<sup>にく</sup>をより頑強に、生み出すことの出来る力の限界  
を跳ね上げ、腱の伸縮性を増すと共に反応、反射速度を増幅し、更に  
は魔力による対物理、魔法障壁を身体中に纏わせる前衛にとつての必  
須魔法とされる基本にして極意だ。しかし如何に強化されようとも  
元となるのは生物の身体、自ずと発することの出来る力には限度があ  
る」

限界を越えて身体を動かさせれば、当然肉体は損傷し、崩壊を迎え

るからな。と、杜崎は朗々と語る。

「だからほぼ全ての身体強化には強化の度合いに制限リミッターが設けられている。要は人体が身体を守る為に身体能力の三割程度しか普段使うことが出来ない等という話と同じだ、割り増ししようと土台は同じだからな」

「……それが一体……」

「そう急くな、能書きが長くなったが種明かしは直ぐだ。……つまり、身体強化を先程全開にしたと俺が言ったあれはな？出力限界では無く、駆動する肉体が損傷しない範囲での安全領域内での全開だったという訳だ」

「……………う……………っ?!?」

高音はその宣言の意図が解らずに眉根を寄せ。

一瞬の後に意味を理解し、驚愕に身体を震わせて声にならない声を発した。

杜崎は静かに微笑みながら小さく頷き、また一步を重ねる。

「理解したか……そう、何て事は無い方法だ。その煩わしい制限リミッターを、術式少々弄って取っ払い、身体強化を使っているだけの話だ」

「……っ！そんな……………!!」

無茶な話を平然と語る杜崎にある種狂気染みた何かを感じ、怖気を振り払うように高音は叫ぶ。

「そんなことをすれば身体が無事では……………」

「無論済まないな、というか無事で済まんとは俺自身が先程語った。同じ事を並の前衛が真似しようとすれば先ず一撃か、保って数撃で筋肉は千切れ、腱は断裂し骨が砕ける。……だがこれも先程言ったが、生憎俺は並では無い。あまり大きな声では言えんが、俺はこの無茶を十代半ばから続けていてな。自分に特別優れた才が無いことを察した馬鹿な餓鬼がやらかした若気の至りが産んだ阿呆の所業の成果だ。今更先の迎撃程度は筋繊維が少々痛む位の損傷ダメージにしかならん、だから別に俺は俺にとって、無茶はしていても無理は仕出かしていない」

「だから私の問題に付き合わせた所為で……等と気に病むなよ？単に生

徒の<sup>ちから</sup>実力を見誤っていた節穴の教師が、矜持を潰してもせめて仕事は果たそうと慌てて格好悪く札を切っただけの話だ」

それよりも構える高音。と、杜崎は促す。

「些か大人気無い真似までして延命を凶ったのだ、もう少し話を続けさせてもらおうぞ?」

「……それは肉体言語で語り合う、という意味合いですか?」

「中々言うな、お前も」

僅かに震えた声で返した高音の珍しい冗談めいた台詞に、厳つい顔に似合わぬ軽やかな笑みを返して。

生物災害は名の通りの<sup>バイオハザード</sup>大嵐と化した。<sup>ディザスター</sup>

『……、……いやもう消え、っていうかさつきから破裂音と破碎音の<sup>シンフォニー</sup>交響曲と共に高音選手のスタ○ドがズタボロに崩れては再生してる光景しか実況の私の目と耳には入ってきません!!高音選手に呼応して<sup>アウトレイジ</sup>暴虐武人が遂に本当の本気を発揮したとでもいうのかあああああつ?!』

『最早常人どころか生半可な実力者すら見きれぬ杜崎選手ド級の猛攻。それを凌いでいる高音選手の防御も同等以上に凄まじい代物です。超一級の矛と盾の争いは果たして何方が制するのでしょうか?』  
「つしやあああああ!!<sup>アウトレイジ</sup>そうだよ暴虐武人い!アンタはそうじゃねえといけねえよ!!」

「これが貴殿の本領発揮か処刑教師……!例を言うぞ謎の<sup>マスクレイド</sup>仮装行列を操る小娘!!俺が超えるべき頂きを目の当たりにさせてくれてなあ!」  
「心底は苛つくが俺以外にテメエが斃される光景なんざ見たかねえんだよ糞教師!!そのコスプレ女ぶっ潰せやああああ!!」

「ぶっ潰せやあじゃねえよマッシュユポテトになりてえかチンピラアア?!テメエゴリラ教師やっぱ言わんこつちやねえ生きるか死ぬかみてえになっちまってんじゃねえかそれでもいい大人の社会人か黙ってさつきので沈んどけや!!……つうか止めるや審判ンンンツ!!あんな戦艦主砲も<sup>ビックリ</sup>驚愕な殺人通り越して殺魔獣パンチが一発でも防御通り抜けたら大怪我どころか高音粉々になっちまうだろおおがああ!!高



音あ身体鍛えてねえ純後衛だぞテメエ等半人外の基準で判断すんな聞いてんのかゴラアアアアアアッ!?!」

「お、お兄様あああ!?!どうか落ち着いて、落ち着いて下さいい!?!」

「アザミっちい、激怒した振りして愛しの妹分にコアラみてえに抱き付かれてお胸の感触堪能して興奮してねえで落ち着ゴフ!?!」

「回りくどい上に的外れ且つ長いわ、黙れカス。ともあれ篠村、気を静めろ。言わんとする事も高音女史を案ずる気持ちも全てとは言わんが理解出来る。が、それでも矢張り俺達はこの試合、止めようとは思わんのだ」

無責任に盛り上がる観客と何処までも平常運行の司会に文字通り怒髪天を突いている篠村を制止しようとする両手足で背面だいたいしゅきホールドにしがみ付いている必死の愛衣。

腐った価値観で茶々を入れ掛けた(或いは巫山戯た調子で場を和ませようとしたのやもしれないが)中村の鳩尾を打ち抜いて黙らせた大豪院が宥めに掛かるが、篠村は鎮まる所か怒りの増した様子で噛み付かんばかりに舌鋒を叩き付ける。

「五月つ蠅えよイカれ集団の戦闘狂が賢しらに人様の理屈をしたり顔で語んじやねえ!!あいつはなあっ!?!こんな最果ての異郷じゃなくて、本国の凄えとこで活躍できる女なんだよ!!馬鹿見習って態々馬鹿やらかす必要なんざねえんだ!?!それを止める所か焚き付ける様な真似を揃いも揃って……!!」

「それは貴方の勝手な理屈です、篠村さん」

その多分に八つ当たり地味た言葉を遮ったのは、辻の傍らに控えていた刹那だった。

「……ンだと……!?!」

「高音さんの行動は確かに冷静さを欠いたものであったかもしれません。貴方の言う通り、何の成果も上がらずただ傷付くだけの徒労に終わるのやもしれません。……ですが、高音さんはそれを自ら望んで行っています。誰に強要された訳でも、惰性で仕方なくこなしている訳でもありません。…忠告をするなどは言いません、客観的に見て間違っていると思えるならば論そうとするのは当然でしょう。しかし

それでも本人が望んだならば、止める権利は誰にもありません。……貴方は高音さんの同僚に過ぎないと、高音さん本人に告げられた筈です。それが正しい見方かどうかは解りませんが、貴方はそれを否定しなかつた。……それならば篠村さん。貴方に口を挟む権利は無い筈です」

「っ!!………っくくく………!!」

刹那の淡々とした冷たい正論の羅列に篠村は反射的に何事かを吼え掛けたが、それを正しいと理性が認めてしまった故に。返す言葉が紡ぎ出せず、言葉にならないうなり声を口端から洩らしながら顔を伏せて項垂れる。

「…刹那、ちよつと言い過ぎだ。……悪いな篠村、似たような事をやらかした身としては他人事と思えないんだ…俺も、刹那もな。篠村と高音さんは何でもない、浅い関係なんかじゃ無いだろ? どうでもいい人の為に、そんなに人は怒れやしないさ。…事情を知らないなりに言わせてもらうなら、俺みたいに手遅れになる前に向き合ってみたらどうだ? 自分の為だけにそんな退いた態度を取ってるんじゃないと思っただけ、こうして拗れても踏み込まないなら。……それは逃げだど、俺は思う」

「………」

穏やかに諭す様な辻の物言いに篠村はもう噛み付く様な態度こそ取らなかつたが、奇妙なまでに凧いだ表情で先程までとは一転して黙り込んだ。

「お、お兄様………!………っ、皆さん!!良かれと思って仰られているのは解りますが、お兄様の気持ちも知らないであまり好き勝手言わないでください!!お兄様はお姉様を傷付けたく無いからこのよう………!」

「愛衣」

静かに。されど有無を言わさぬ調子で篠村は、辻達の無理解に腹を立てるあまりに口を滑らせかけた愛衣の台詞を遮った。

「…お兄様………っ!!」

「前にも言ったぞ。俺のやってる事は詰まんねえ俺の意地張りだ。当

時ならいざ知らず、高音はもう大丈夫だよ。今更バツが悪いから伝えねえ、ただそれだけの小せえ話だ」

珍しくも承服しかねる、とばかりに抗議の声を上げる愛衣を素気無くあしらひ、篠村は何処か白けた様な、冷めた表情で辻達に向き直る。「親身な言葉をありがとうよ、嫌味じゃ無くそれは感謝するぜお人好し集団。…ただ、あれだ。こんな言い方はなんだけだよ、今の聞いてやっばお前等は普通じゃねーんだなって、逆に開いちまうモンを感じたよ俺は」

だってもう前提が違うから、と篠村は力無く告げる。

「問題があつてよ。何がなんでも解決しよう乗り越えよう、壁をぶち破つて前進だ……つてのがお前等だろ？やり方が良い悪い以前に打破しようと考えられるのがお前等だよ、才能マン……なあ？」

その瞳は静謐な、澄んだものであったが、

「立ち向かわないのは、妥協すんのは。…引き返しちまうのはそんなに悪い事か？」

同時に何処までも黯い光を湛えていた。

「なまじ心身共にタフで能力あつから、勘違いしてんだよお前等は。……嫌なことがあつたらな、逃げたつていいんだよ。人つてのはそうしねえと、普通は生きていけねえんだ」

「……篠村……」

言葉面だけを取ればただネガティブな開き直りにしか思えない篠村の反論だったが、悲哀と嫉妬と憤り、そして諦念の混ざったその響きに、辻は言葉を返せなかった。

「…そんな顔してんじやねえよ。俺が吐いたのは単なる、妬み嫉みの愚痴と八つ当たり、だ。解つてんだよ自分で。その上で逃げ出して、のらくら流されてこんなとこくんだりまで来ちまうから駄目なんだわなあ俺は」

クツクツと自棄になった様な自虐の笑みを洩らしながら、篠村は壇上の高音に視線を戻して独り言めいた調子で続ける。

「逃げんのは良くないけどいい、でも誤魔化してこのまま放つとくのはもう無理だな。さつきはああ言つたが、アドバイス忠告参考にさせてもらう

ぜ？決着付けねえといけねえのが解ったからなあ、この腐れ縁」

「待てや篠つち。どう聞いても駄目な方向に覚悟完了してんだろ早まんな」

「口ぶりから何をするかは大体想像が付くが高音女史に焦らず落ち着けと言ったのはお前だろう。その場の勢いで自暴自棄な結論を出すな」

「はつきり言わなきゃ解んねえか？俺はお前等奇人変人且つ天才鬼才様方とは心身の出来具合が違うんだよ。見解の相違だ、言ったら俺は逃げてでもいいと思ってる。そっちの意見を押し付けんなよ、：口挟む権利は無えんだろ美少女剣士ちゃん？」

「……………っー」

皮肉気に己の言葉を返されて唇を噛む刹那を一顧だにせず、敬愛するお兄様の態度の急変にオロオロする傍らの愛衣へ篠村はやや口調を和らげて言い放つ。

「愛衣、お前は高音について行きな。一身に健気に慕ってくれてるお前には本当に悪いが、俺は高音から離れる。未練がましくくっ付いて来たが、潮時だ「お兄様っ!」：落ち着け。言われたみたいに自棄になったから言ってんじゃねえぞ？結構前から、考えちゃいたんだ。高音はこの勝負がどうあれ、上に行く。俺の御節介なんぞ関係なくな。…………俺はあいつに、必要無え」

「そんなことはありませんっ!!」

「あるんだよ。寧ろ魔法世界ムンドゥスを出る時に、縁を切つときや良かったんだ。…………今度こそは言うこと聞けよ？もう俺を、お兄様と呼ぶな愛衣」

俺は本気だと締め括り、篠村は両手をメガホンの様に口に当てて高音に向かい、吼える。

「…高音えっ!!お前は自分が攻められる態勢を完璧に作ろうとし過ぎっから常に殴るか殴られるかのシーソーゲームになってんだよ!お前は堅いんだ!保守的になるなゴリラが突っ込んで来てようが攻めろや!!分が悪い消耗戦に態々付き合うなよ真っ向からの削り合い

ならお前は勝てんだよ!!……………」

篠村は一息にそこまで言い切ると深く息を吸い込み、一際大きな叫びを高音へと叩き付けた。

「…偶には俺の言うこと聞けよお前はあああつつ!!!」

……………これが、最後だからよ……………!!!

「……………篠村……………!!!」

「聞いてやったらどうだ?」

絨毯爆撃の集中放火。高音が晒されている状況を端的に説明するならばこの一言に尽きた。

全力で展開した全方位を覆う黒衣の盾が次々に穿たれ、千切られ、吹き飛ばされる。どうにか反撃の機会を作ろうと黒衣仮面の影精達を喚び出し、黒布を広げて足止めを試みても出した先から粉々にされ、却って防御から意識を割いた分攻撃を喰らいそうになる始末だった。

最早亀の様に丸まって耐え凌ぎ、杜崎の息切れに期待する他に高音が選択肢を見出せずにいた時に、声を発した一瞬後には別の地点へ高速移動する為歪み、ブレた響きをしな杜崎の声が届いた。

「…何を意図しての……………忠告でしょうか?!杜崎先生!!」

「簡単だ。俺の状況分析でもお前が俺に勝つにはそうするべきと判断するのがまず一つ。はつきり言うなら今のお前の迎撃、反撃には欠片も脅威を感じない。幾ら防御力が自慢だろうが、単に丈夫なだけで碌に手も出ないようなウドの大木を俺が何時までも潰せんと思うなよ。……………二つ目に……………」

杜崎は一発一発が破城槌の殴打に等しい四段蹴りで高音の背中側から巨人の脚から胴体をグシャグシャにひしゃげさせながら、言葉を一旦切った後に溜息ごと吐き出す様な調子で残りを吐き出す。

「…さっさとお前等がよりを戻すべきと思うからだ。既にお互いを認め合っているのは、お前の試合前の発言と、先程のを含めた篠村の言動で充分に理解した。…高音、お前の問題は、言ってしまうば半ば以

上解決しているんだよ」

「っ!!……解った様な事を……言わないで下さいっ!!」

その、やれやれ、とても副音声の付きそうな呆れを含んだ声音がこれ以上無く高音の癩に障った。

多量の魔力が浸透し、更に強度を増した黒布の瀑布が全方位に放射され、ドーム状の津波が如き不可避の一撃が杜崎を打ち据える、が。「雑魚掃除兼隙を作るには最適だろうが魔力消費の多さと多重行使により息が続かず、発動後次が繋がられない。お前単体では、一定以上の力量相手に遠ざける以上の意味は無いぞ」

黒布の薙ぎ払いを喰らった瞬間に杜崎は後方へ飛んで威力を吸収し、平然と闘技場の端に着地する。

勝負になっていない。現状を打破出来ない己の非力に歯噛みする高音へ、着地してから動きを止めた杜崎は幼子へ噛んで含める様にゆっくりと言葉を紡ぐ。

「高音。一言に纏めるなら強くなりたいたいお前の悩みと、篠村との因縁は別の話だと考えてはいないか? まあ関係無いといえば全く関係は無いし、間違っではないがな」

「…何を………」

「まあ、聞け。普通ならそれでいいのだがな、お前の場合は違うのだ。…お前が篠村と円満にやれていたなら。お前は今更そんなことで悩んではいまいだらうからな」

その言葉に、高音は己が心音の鼓動を意識する。意味合いは未だ解りかねるままに、痛い所を突かれた実感があつた。

「妙な意味合いで無く、お前達は二人で……いや、佐倉を入れて三人か。でやっていけばいいのだ、今まで通りな。お互い苦手があるからと急場凌ぎの先送りが目当てで培った連携ではあるまい、お前達の戦術は? 将来別れる時が来るのだとしたらその時に考えろ、一人の強さなどというものは。お前も篠村も、バカレンジャー 奴等とは違うのだろうか? 強さを目的でなく手段と割り切る以上、お前の悩みは無用な心配というものだからそれを何故、悩むようになったのかといえば………」

親指が、選手席の一角を指し示す。

「篠村とこのままではやっていけない。……そうお前が何処かで考えるようになったからではないか？」

「……………！……………！………違ひ、ます……………」

「意味も解らぬまま否定をするな」

杜崎は高音の遠回しな拒絶に拘泥しない。

「昔色々あつて気まづくなつた、なんだかんだで一緒に居続けて許してあげてもいいまでいった、だけど相手は謝らない、自分から譲歩はできない。……だから、離れなければならぬから。一人でやっていけるようにしなければならぬ。どうだ？大きく外れてはいないと思うがな」

ここまで言えば気付くとは思うが、と、杜崎は決定的なその台詞を口にする。

「お前は篠村を許せないが許したいんだ、関係を途絶させたくないんだ。お前の若さが妥協を許さないだけで、共に在りたいと本心では望んでいる。……急いで大人になるなどは言ったが、いい加減妙な所でだけ子供の様に意地を張っていないで、向き合つてやれよ篠村と。腹を割つて話せば、許してやれるかもしれんぞ？」

「……………っ!!違うっ!!」

怒りか、或いは羞恥によつてか。

顔を真っ赤に染め上げながら高音は腕を振り手繰り、黒衣の巨人から黒槍の群れを投射する。

「私はっ!!……あんな、男のことなんてえっ…!?!」

「高音えっ!!」

何かを振り切る様な高音の叫びを、それに数倍する大きさの杜崎による一喝が掻き消した。同時に打ち上げられた剛腕の一閃が、黒槍の群れをガラス細工のように打ち砕く。

「…其処で自分に嘘を吐くな、高音。他の誰かに嘘を吐くのはまだいい。だがな、自分を誤魔化すのは後で一番、耐えられなくなる。本当に堪えるんだよ。俺は興味本位や囃し立てが目的で聞いている訳は無い、包み隠さず本心を吐いてみる！」

「お前にとってあいつは何だ!?!」

「愛スイトハニしい人？」

「旦那だろう」

「古女房って言い方が俺としてはしつくり来るな」

「流石に何の話かは俺でも解ったわあつ!! どういう話の経緯でんな問  
い掛けをされてんだよ高音はさっきまでガチバトルな流れだった  
ろーが!？」

辻達が茶化す様子でもなく割と大真面目に述べた己の立ち位置を  
強引にスルーしつつ篠村は理不尽な展開に対して吼える。

恋だの愛だの謳う以前に、篠村はその当人高音からはつきり拒絶された  
ばかりだというのに如何あつても話がそこ恋バナ関係に向かうこの不条理。素  
気無くされてデリケート且つナイーブになっている心の柔らかい部  
分が抉られていく様な錯覚を篠村は覚え、身体中から力が抜けていき  
そうになるのを根性で抑えつつ憤懣やるかないと勢い良く立ち上  
がる。

「もう関係無いつつたやないのあんさん」

「あーそーだよ関係無えよ! 関係無えようにしようと思ったからこそ  
こういう糞下らねえ邪推云々はキツパリ否定して二度と沸いて上  
がらねえ様に潰しとくんだよ立つ鳥は後を濁さねえんだよお!!」

お惚けた中村のツツコミにきっちり二倍以上を叩き返し、篠村は高  
音を喉ける。

「んな下衆の勘繰りはどおおおでもいいからぶちのめせ高音えああ!!  
このルールなら勝てんだよお前はビビんな俺を信じろとは言わねえ  
からお前自身の…:「いいから少し黙っていなさい篠村あつ!!」…:あ、  
はい……………」

「弱ッ!？」

「五月蠅え!!…:…:つてか、どうしたあいつ……………」

が、鬼気迫る高音の怒喝に吞まれ、しおしおと引き退る。あまりの  
へたれ具合にツツコんだ明日葉に吼え返しつつ、先程までとは何かベ  
クトルの違う切羽詰まった高音の様子に篠村は疑念を洩らす。

「…:素直になろうとしているだけですよ、篠村先輩。腹を据えられた



ようですが、少々決断が遅かったかもしれませんか？」

「おいこら待てやどういう意味だサムライカツプ：「解りました！今度はお姉様がお兄様を追い掛けられる番なのですね！」……はあ!」「突き離されたんに追っ掛けて、氣い惹いという今度は離れてくみたいな真似しとるんやから、ある意味自業自得やでく篠村先輩?」

「諦め悪くグズグズしてるから逃げられなくなるアルよ」

「中途半端でどっち付かずな対応ではいざという時にキメられぬという訳でござるなあ」

「まあ二兎を追う者はくみたいな結果にならんだけ万倍マシやろ。篠村の兄ちゃん何だかんだで高音の姉ちゃん大好きなんやから取っ捕まってもハッピーエンドやないか?」

「好き勝手ほざくなテメエ等!?!あのゴリラ教師だな馬鹿真面目を唆して妙な方向に:!!」

「嫌な事あつたら逃げてもいいだっけ?けだし名言だが嫌な事が逃がしてくれるかはまた別の話だわなあ?」

お覚悟完了みてえだぜ、お前の嫁。と、中村の言葉に篠村が慌てて壇上を振り仰げば、高音が巨人を従わせつつ、闘技場中央へ戻ってきた杜崎と至近距離にて正対している場面が目飛び込んできた。

「あれは私の相棒です」

「……ほう?」

……そう。大嫌い……それでもやっぱり、嫌いになれない男……

高音は巨体の杜崎と視線を合わせる為にしっかりと顔を上げ、凜としたよく通る声にてはつきりと宣言した。杜崎は興味深いと口端を吊り上げ、問いを重ねる。

「…して、その心は?」

「不本意ながら、貴方の指摘は大凡的を得ていました。私は確かに、突き離すような真似をしておきながらその実、あの男が嫌いではないのです。嫌い切れないので無く、嫌いたくない。惚れた腫れたの領域は既に越えているのだと思います。…ただ、そうです……」



やら教師という立場より高音選手に募る話があった模様ですが、一応の決着がついたようです!』

『ぶっちゃけた話篠村選手と試合前にモメていた様でしたからねえ。まあ祭りなのでですから青春の一言で片が付く類の話でしょう。一部の界限ではそれなりに有名ですからねこの喧嘩ケンカツプルは』

「……何?!?……」

「麻帆良恋愛部の『なんでこの二人くっついてないんだろう』部門のベスト10テンくらいには入ってんぞお前等」

「はい!!お兄様もお姉様も奥手で中々関係を進展なさって下さらないので私が紹介を……」

「事情知つときながら一因はお前か裏切りモンがあああああ!!」

「あつ、痛!?!痛いですお兄様あつ!?!」

「どうせ目つけられてたアルよ」

「遅いか早いかだけの話でござるな」

「じゃつかあしえいつ!!」

「てゆーか愛衣ちゃんに関節技掛けてる場合じゃないわよ先輩?高音さん何て言うか刹那さんや山下先輩右に倣えみたいな腹の据わり方させちゃったから」

仁王の様な形相でオクトパスホルド固めを愛衣に決めている篠村に対して明日菜が呆れた様子で声を掛ける。

「……あいつが今更どうしよう関係無えよ。俺は、あいつと。居るべきじゃ無えんだ。ずっと前から解ってたことだよ」

「違いますお兄様は痛たたた……!!」

「青臭え語りはそんぐらいにしとけや、どうせ何言おうがこの試合の後で決着付くだろうからよ。……そろつと決着フィナーレだぜ、あつちは」

中村がやや呆れた様子でその場を制し、不承不承といった態度ながら蝟固めを解いた篠村を初めとして一回は闘技場に向き直る。

「……問題が話し合いで円満に解決したならばこのような試合を続けなくとも……という指摘は、野暮なのでしょうね」

「ヒョホホ解ってんじゅわん夕映つち」

「流石に慣れました。……理屈抜きにこの場はそういうノリなのだ、

そういうことなのでしよう?」

私の様な輩には今一つピンと来ない領分の話ですが、と、夕映が苦笑を浮かべつつ中村へ返した。

「そ。まあ意味があるかつつたら無えんだらうけどな、無理に勝敗競うなんざ」

「それでも別に、意味のない事はしちやいけない訳でも無い。やらなければならぬ事だけをやっている人の人生譚なんて、詰まらないとは断言せずとも面白味には欠けると俺は思うよ」

「あらゆる行動に目的を定めたのでは、己の世界が定めた地点以上に広がりはない。無意味を先ず、良しとせねばな」

「なにせ人生賭けて無駄に終わるかもしれないねえ所目指してやろうとしてんのが武道家だからなあ、オイ」

「僕等に見習うべき点があるとすれば、そんな所だろうね。我儘おのれを通せなきや人生やってられないさ……まあもう人じゃあ無いけど」

良い様さまになったじゃないか、と、壇上の高音を見てバカレンジャーはそう笑った。

「……やっぱ理解わかんねえよ、お前等……」

『あーっと両者激突うううっ!!』

力無い篠村の呟きを皮切りにした様に、高音と杜崎が真っ向からぶつかり合った。

……もう、今は余計な事を考えずに、勝つ！勝とうと、してみよう……！私が私で在るまま、先に進む為に……!!

高音が最後の奥ラストの手演として披露したのは己と巨人の一体化。巨人の伽藍堂である胴体内から直接操コントロール作を行うことにより、巨人や黒布が高音を庇うという一動作アクションを省略しての動作効率向上による攻撃、防御力の強化と、生身で身体機動力に優れない高音を搭載する事により高速機動を可能とした決戦様スタイル型である。

強いて欠点を上げるのなら黒衣の盾を絶え間無く召喚し、巨人に全力での駆動を行わせる為に魔力の消耗がこれまでとはケタ違いに

早く、短期決戦を強いられる点だろうか。

……私単体でこんな無茶な消費は想定したことなんて無い。保つて数分……いや、杜崎先生級クラスを相手に充分な戦力を維持していられる時間はもつと少ないかもしれない……

今日に於けるもう何度目になるかも判らない、らしくないだ。

「……でも、それでいい」

……知っている、篠村？ 貴方は自分が嫌いでしょうけど……

……私も負けず劣らず、中々に自分を嫌っているのよ？……

互いに自分を、そして相手を。好きになりにいきましょう。

口の中で小さく呟き、高音は己の収まる黒衣の巨人を高速で突進させた。

……解っていたことだが、もう如何程も保たんなこれは……

杜崎は空気の裂ける甲高い悲鳴と共に己が顔面目掛けて突き出された手刀を払い受けて外に叩き逸らしながら独りごちる。

当たり前の話ではあるが、いかに杜崎が常軌を逸した肉体鍛練によつて頑強な肉体ボディを創ろうとも、肉体そのものの制限リミッターを意図的に解除して限界以上の出力を無理に出させているのだから、そう長い時間超過駆動を続けていられないのは当然である。

既に杜崎の全身は四肢を中心に筋繊維の断裂が諸動作に影響を及ぼす域に達しようとしている。今の時点では重度の全身筋肉痛程度が精々だが、このまま続ければ筋か腱か、再起不能までは行かずとも暫くは後を引くレベルの後遺症が残るだろう。

だが杜崎は今の愚直にまでの真つ向勝負を止めようとはしない。

……俺は、……教師だからな!!……

性に合わないとは今でも思う。麻帆良マホウに来てから教職に就くと決まった時には連れ合いにも散々笑われたものだ。初対面から現在に至るまで迷惑以外を被った事の無い馬鹿共武道家達の相手をする日々にはほとほとウンザリしている。

そして、そんな馬鹿共を堂々と叱り付ける資格の無いような後ろ暗い真似にも加担している。あの正義でないが正しい馬鹿共には、本来

偉そうな口を利く資格は無いのだろう。

「だが俺はやると決めたのだ、自分でな」

だから先生と呼ばれる身である内は、先にて生まれ、先立って生きる者として努力する。

そう。

「頑張るんだよ、ただそれだけだ。：俺も、—お前等もな!!」

杜崎は毒蛇の如く闘技場の床を引き裂きながら跳ね上がって来た巨人の鉤爪に渾身の打ち下ろしの右を合わせた。

驟雨の様に降り注ぐ黒槍の群れを杜崎は巧みに必要最小限の動きで捌き、躲しながら巨人の懐へ肉薄。矢継ぎ早に繰り出された左右の二段突きは重ね掛けられた黒布を半ば引き裂きながらも巨人の胴体へと届かずに停められる。舌打ちと共に杜崎が撃ち出す次弾が黒衣の盾を八重奏の半ば迄を突破するのに構わず、高音は一息に十数体の黒衣仮面を己が影より召喚。僅か数瞬の時間稼ぎにしかならないのを承知の上で杜崎に向かわせ、高音は魔法を無詠唱で構成に掛かる。

魔法とは術式を理解し、己がモノとしていれば詠唱をせずとも構成は可能である。単にその作業を実戦で使用可能な域にまで習熟している者を便宜上無詠唱魔法と称しているに過ぎない。

鎧袖一触と黒衣仮面を蹴散らし、再び高音の籠る黒衣の巨人へと肉薄せんとする杜崎へ向けて放たれるのは巨大な漆黒い顎。闇系古代上位魔法でありながら出足の早いそれは難攻不落の人型高速機動戦車の如く君臨する杜崎へ確かな損傷を与えるに足る一撃だったが、刀剣の如き牙の生え揃う黒い唾内へ杜崎は臆さず飛び込む。

直後、牙を掴み取った両手から血を飛沫かせながらも気の全開放出を用いた強引なまでの力技によつて黒獣の頭部を上下に引き裂いた杜崎は、その勢いのままに光の爆発を思わせる気を纏わせた全力の殴打にて高音の防御陣を削りに掛かる。

『小細工一切無し of 真正面からの殴り合い いいいい!! 千切れ飛ぶ黒布と出血が周囲に咲く、凄まじいぶつかり合いとなりました!! 試合

の残り時間からしてこれが最後の勝負かあっ!!」

『見た限りでは生身の杜崎選手が直に削られる分不利でしょうか？試合後半に於ける高音選手の猛反撃で少くない手傷を負っている以上、出血による体力の消耗もあるでしょうからね』

「馬鹿野郎あ喧囂不死身の生物災害が出血程度で弱るかダアホ!!」

「あの黒布はどっから生えて来てんだろーね？なーんか辻君の身内が最近キワモノ揃いになってきてる件……」

「元より奴等は極め付きの変人集団だろうが今更だ。しかし高音・D・グッドマンとやら実に興味深い……大会終了後にも手合わせ願おうかあっ!!」

「……止めときましようよ部長。遂に俺は流しも間に合わずに一見でぶっ飛ばされましたし、最近連中人外の域に達してんですから……アウトレンジ暴虐武人とああまで闘り合える女相手にしたら命が幾つあっても……」

「ハハハ意外ニ腰抜けネー半月ワ」

「……んだと……?」

「黙れ（五月蠅いよー）貴様等（君達ー）」

「……はい」「オーゴメンヨ?」

……馬鹿共が、高音にも全く余裕は無えよ……!」

篠村は結局の所見守るしかない現状に歯噛みしながら実態を知らない解説実況や観客のコメントに内心で悪態を吐く。

高音の魔力量は魔法使い全体で見ればかなり上の域にあるが、今の様な後先を考えない全力行使を続けていけば遠からず魔力切れを起こす。そうなれば純後衛である高音は一瞬で杜崎に斃されるのは火を見るよりも明らかである以上、伯仲した見た目とは裏腹に高音側はギリギリの綱渡り状態であり、実情を知る篠村からすれば  
気が気では無い。

……俺が、こうして気を揉んでるこの行為は意味が無え。自分でしかと、実感して理解したんだらうがよ……

……俺はあいつに、必要無えって……!!

……そりや急には割り切れねえよ。でも何でお前は、そんなに  
……………！

「お兄様」

理性と感情が闘ぎ合い、儘ならない思考に懊悩する篠村に、愛衣がそつと声を掛けた。

「……愛衣、俺は……………」

「いえ、違いますお兄様。私も興奮してしまつて急かす様な言い方になつていました、すみません」

もう、私からは何も言いません。と、愛衣は告げる。

「お兄様が何を考えてあんな事を仰つたのかは、何となく解りますから。結局後から聞いて、その後も見ているしかできなかった私じゃ、これ以上口を挟む権利はありません。時には逃げてもいいんだつてお兄様のお言葉は、私にとつても救いですから…お兄様を私は、否定できません」

でも、と、愛衣は微苦笑を浮かべて篠村の顰めつ面を横合いから覗き込み、そつと言葉を投げ掛けた。

「お兄様は有耶無耶にして逃げるんじゃないやなくて、お姉様を前にしてお逃げになるつもりなんですよね？……多分というか間違いなく、逃がしてくれませんよ？お姉様は」

「……だから逃げるつて決めたのにこんなに氣い張つてんだ。腹括つて全力で逃げんだよ……………」

だから勝てや、という篠村の声無き言葉にまるで呼応するかの様に、壇上は終幕を迎えた。  
クライマックス

「決めさせてもらうぞ、高音えっ!!」

自身の、そして高音の状態を見て、これ以上勝負を長引かせる事が互いのメリットにならないと判断した杜崎は、納得のいく形で勝負をつける為に、氣勢を上げる形を装つて高音を促した。

纏わり付く黒衣仮面達を蹴散らし、絡み付く黒ワイヤーを引き千切り。巨人の重爆を受け流し切つて杜崎は飛び離れる。直後、杜崎の全身から魔力が溢れ出し、光の爆発が闘技場中央で花開いた。



「超過出力!!」  
ウイース エクシード

真正正銘、出し惜しみ無しの全力強化を己が身に施した杜崎は光の矢と化して着弾する。

瞬き以下の間に十を超す拳撃が打ち込まれ、巨人の交差させた両腕を粉々に破砕し。その奥の重ねて纏われる黒衣の防護全てを打ち破り、巨人本体へと破壊を齎した。

巨人の全身が割れ砕け、その場に崩れ落ちる寸前にその胴体が左右に開き、中から高音が飛び出してくる。杜崎は容赦無く踏み込み、高音に拳を見舞おうとして、高音の合わせた掌の内に蠢く黒を垣間見た。

……勝負を投げない心意気と、保険を用意しておく用心深さは見事。…しかし予想の範疇だ、高音……!!

杜崎は防御を破られた高音が反撃カウンターに出る事をよんでいた。杜崎の見立てから高音の最大火力魔法は百ケントウム ランケアエ ウンプラエの影、槍であり、自身の防護を貫くことは無いとの確信からその動きは止まらない。

「破ッッ!!」  
ハダ  
「百ケントウム ランケアエ ウンプラエの影、槍……」

突き出された杜崎の拳が高音の手より噴き出した黒の奔流に衝突し、

「…収束!!」  
コンウエルゲンテイア

それらを打ち破りかけたその瞬間に黒槍の群れは一つに重なり、一本の巨大な槍となって拳を迎え討った。

「何……っ!?!」  
バートナー  
「私の相棒は篠村 薊です。…この程度の術式操作、瞬時にこなせない訳が、無いでしょう!!」

驚愕する杜崎に叫び、高音はあらん限りの力を込めて両腕を突き出す。

「貫……け、ええええええっ!!」  
つらぬ

高音の咆哮に黒槍は軋み、罅割れながらも確かに応え。

杜崎の拳を弾き飛ばし、その身へ穂先を確かに届かせた。

『一瞬の内に杜崎選手の最早視認不能な超速度の攻撃が高音選手を搭載した巨大を粉々に砕いたその瞬間！内部から飛び出して来た高音選手の起死回生の一撃が杜崎選手の鉄拳に打ち勝ったあああっ!! 巨大な杭打ち機（バイルバンカー）の如き攻撃を真面に喰らったかに見えた杜崎選手、人形のように吹き飛び、場外の水堀に沈んだまま浮かび上がってきません!! これは今度こそ決定打かあああっ?!』

『杜崎選手が試合開始から気による身体強化を全開にしなかった理由は高音選手を慮って加減をしていた、というのが理由の一つでしょうが、試合終盤の様な全力行使は自身の身体にも負担が大き過ぎる、というのもあるでしょう。ある意味自滅の様な形でダメージを蓄積させていたのでしょうから、高音選手の一撃が本当に決定打となった可能性は十分に有り得ます。高音選手は見た所あの黒い布や巨人を再度出現させておらず、肩で息をしている様子から恐らく体力か気力か、何らかの限界を迎えていると思われる。これ以上の試合続行は困難でしょうから、杜崎選手が健在ならば小細工を弄さずに攻撃を加えればいいだけの話ですからね』

「……どう思われますか？」

「微妙だな。普段の杜崎先生ならほぼ間違いなく健在なんだが、喧囂の言う様に大分リスクのある身体強化をしていたんだらうから、本当に大打撃を受けて動けない可能性もある」

「まさかあのゴリポンが、たあ思うがな。実際最後のは単なる拳一発一発が俺の破碎正拳位の威力あつたしなあ……」

解説実況の分析に阿鼻叫喚の恐慌状態に陥っている一部の観客をうそ寒気に横目で見やりながら刹那が洩らした疑問に、辻と中村が唸りながら返す。杜崎の強さとタフさを骨の髄まで身に沁（バツ）みて理解しているバカレンジャー（主に中村）からすれば杜崎が出力のみとはいえ本気を出しておきながらやられて動けない、という状況が信じられないというのが正直な感想であり、今にもケロリとした表情で顔を出すのでは、と考えている。

「……勝ちを譲る、とまではいかんが、杜崎教諭は高音女史の迷いを祓

うのが目的だったようだからな。……恐らく杜崎教諭は無傷でなくとも、戦闘続行が可能な程度には余力があるだろう。しかし……」

と、そこまで大豪院が言葉を紡いだ時、観客席から大きなどよめき上がる。

朝倉の場外カウントが十を越えたその時に、杜崎が水面を割って闘技場へと再び上がってきたからだ。

「…本当に、不死身の様なタフネスですね、杜崎先生……。最後の一撃は、中々に手応え、の様なものを感じていたのですが……」

「ああ、実際に効いたぞ。肋に罅位は入っているかもしれない。……とはいえ俺の自爆上等の全力強化をあまり舐めてもらっては困る。有効打ではあるが、イイのが一発入った程度で沈んではやれんよ」

「……そう、ですか……」

「ああ、とはいえこの勝負お前の勝ちだがな」

「……はっ……」

届かなかった。

そんな無念の思いと共に敗けを認めかけた高音は、杜崎があっけらかんと紡いだその敗北宣言こたばに思わず呆けた表情で目を点にする。

「…な、何故……!?!」

「手加減して相手をするなどと宣っておきながら大人気なくパワー全開で教え子を散々ブン殴りまくったのだ。その上で本気の一撃を凌がれ、あまつさえ反撃まで貰っておきながらお前が燃料切れだから俺の勝ちだ、…などと宣言できる訳が無かろうが。面子プライドの問題でもあるし、俺が教師として己に枷したケジメでもある。異論反論は聞かんぞ。終業間近とはいえ未だ半人前のお前が此処までやったのだ。これはお為ごかしくてもお情けでも無い、俺はお前に、敗けを認める」

納得がいかなければ、何時でも来い。馬鹿共を見習って喧嘩を売りに来るなら、何時でも買ってやる。

杜崎は笑ってそう締め括った。

こうしてまたもや闘技場を半壊させつつも、試合は高音の勝利

という波乱の結果となり、武道家達にまた一つ、衝撃を齎した。

そして試合を終えた少女は少年に歩み寄り、言葉を紡ぐ。

「……篠村、多くは此処で語らないわ。……上がって来なさい」

「無理言うな俺の対戦相手特に二回戦の環境破壊兵器見てから言えや……と、まあ普段なら喚く所だけだよ。こっちも腹括ったトコだ。……  
這い上がってやろうじゃねえかよ」

次戦、篠村 薊 VS 犬上小太郎

23話 まほら武道会本選第7試合 篠村VS小太郎 (その1)

高音・D・グッドマンと俺こと篠村 薊は出会うべきではなかったのではないかと思う。

無論のこと、俺は高音あいつが憎い訳でも邪魔に感じている訳でも無い。鮮烈にして高潔な、才色兼備にして秀外恵中とはかくあるべしとでも評したくなる様な本物に出会わなければ、俺は今より大分詰まらない人間になつていたと思うし、あいつと後に出会った愛衣との三人で過ごした日々は俺の人生の中で一番に充実して楽しかった、何物にも代え難い宝物だ。本当の本気で出会わない方が良かったなどと考えちやいない。

しかし、それでも何かにつけて思うことがある。

本物なんてものを知らずにいられたならば。俺は自分の有様を生まれの不運で片付けて、楽に生きられたのではないかと。

そう、思うのだ。

『お前もさあ、こんな郊外でんな地味くな鍛錬やってねえでたまの休日くらい外へ遊びに行つて来いよ。根を詰め過ぎてもいい事無えだろ』

『一言一句そっくりそのままお返ししようかしら。…一緒に繰り出してくれる程親しい知り合いが居ないだけよ』

『……他人の事は全く言えない立場から敢えて言わせて貰うがよ、人付き合いつて社会で生きる上では必須の項目にもう少し人生の容量キャパシテイ割いてみたらどうよ?』

『余計な御世話…と言いたい所だけれど、正論ね。……子供の様な潔癖性だというのを自覚している上で反論させてもらえば、志の低い輩と足並みを揃える意味を見出せないのよ』

『何でもかんでもお勉強基準で考えんなよ。何もかもに目的を定めちゃあ、見聞目的がそれ関連しか得られねえから小さい人間になっちゃうぞ?…まあ受け売りだけだな。お前はもう少し余暇を有効に使うばかりでなく、怠けて遊ぶべきだと俺は思う』

『私の知る限り、寸暇を惜しんで基礎の反復を只管繰り返して続ける鍛錬馬鹿の台詞とは思えないわね』

『一々揚げ足取んなや嫌味か優等生!!俺アてめえみてえな人生障害無し万事順風満帆の才女様と違って最低限の成果上げなきや此処学校追っ出されかねえ赤点野郎なんだよ遊んでる暇なんざあるかあ!?!お前の状況と一緒にすんな!!』

『ならば私も同様よ!!他意なく言わせてもらおうけれど私と貴方では目指している到達点ゴールが違う、花のハイティーン十代後半期間でのんびり青春を謳歌してから世界に出ようなどと、抜けた思考回路で生きている意識の低い連中と同じ課程で道草を食っている暇など私には欠片たりともありはしないの!最低でもあと三年で私は研修資格を手に入れて、魔法使いとして歩き出してみせるわ。…心配して言ってくれているのは解っているけれど、私は楽しんでやっている。気遣いは無用にお願いするわ』

『……ホント可愛くねえなお前………』

『可愛気の欠片も無いネガティブ思考の問題児さんの歪んだ感性にとって魅力的に映らず幸いだわ』

フースト出逢コンタクト時から約一年、俺と高音は万事がこの調子だった。この悪友の如くありながら同好の士の様である、複雑な関係を何と表現すればいいかは未だに解らないが、一言で言うなら喧嘩仲間と表すのが相応しかろうか。理由は違えど、当時の俺も高音も学校生活というものにウンザリしていたのだ。

そりゃあ此方側にも問題はあったろうし、現在イマに輪を掛けて子供ガキだった俺達の態度は対応は、上教師から見ても隣同級生から見ても、はたまた下後輩から見ても頗る可愛気の無い苛つく代物ではあったのであろう。

しかしまあ、疎まれ蔑まれ、拳句の果てに有る事無い事悪評をでつ

ち上げられて排除までされそうになる謂れは無い。そこまでされる筋合いは俺も高音もありはしなかった。

解ってくれる連中は教師や学生にも居ないではなかったが、残念ながら己が身を投げ打ってまで俺達を取り巻く難儀な状況を何とかしてくれる様な正義ヒトの味方ロは存在しなかった。

：まあ、今現在ネギ先生にくっ付いているようなバカレンジャー底抜けの正義漢にしてお人好しみたいな連中がそうそう何処にでもいる訳が無いんだからまあ普通だ、自然な話だ。

だから俺達は降り掛かる火の粉は自分で払っていた。自分がヘタレのビビリという自覚はあるが、辛い目に遭いたくないからと馬鹿にされながら媚び諂って愛想笑い浮かべるのは死んでんのと何が違う、つてのが俺の考えだ。落ち零れなのは事実だが、それを他所様はどうこう蔑まれる筋合いは無い。経緯や動機、状況は違えど高音も同じ様な考えでいたのだろう。嫉妬や羨望から来る陰口や嫌がらせなんぞにあいつは毅然と立ち向かっていた。人は自分より下の存在は扱き下ろして馬鹿にしたくなるし、上の存在には憧れ焦がれて、最後には妬み嫉んで憎むモンだ。

俺と高音は欠片も似てはいないが、全く真逆の存在故に境遇は似通ってしまった。全く以って皮肉な話である。

まあ当然だがそんな周り全部とは言わないが少なくとも敵、みたいな生活はストレスが溜まる。自慢出来る様な話では無いが、俺にも高音にもそのフラストレーションをぶつけられるような親しく信頼できる知り合いは居なかった。だからまあ、身も蓋も無い言い方をすれば俺と高音はお互いを八つ当たりの憂さ晴らしに利用していたのだろう。なにせ初対面から盛大にして凄惨な罵り合いをかました間柄だ、トコトン己の見苦しい部分を既に見られている故に、遠慮なく皮肉や嫌味、時には聞くに堪えない罵詈雑言だろうとぶつけられた。

しかし、こればかりは断言できるが俺は高音を嫌っていた訳では無い。自惚れでなければ、向高向音も同様に。

ただそう、自分の醜い所や嫌いな点も曝け出せる、気安い間柄だっ

たのだ。だから互いに思った事は包み隠さず言い合って、相手の欠点も真つ直ぐに指摘し合えた。俺はまあ、言われて自覚が有る無しに関わらず素直にそれを改善しようと心掛ける程に人間が出来てはいなかったが、あいつもあいつで頑固に中々非を認めようとはしなかったのでまあ、お互い様だろう。

時に喧嘩して時に協力し。互いの鍛錬にも口を出し合って、そしてやっぱり嘘み合い、頭が冷えてから和解して、また喧嘩する。

些か奇妙な関係ではあったが、俺と高音は確かに助け合い、お互いを認め合っていた。

或いはこれを、友情と人は呼ぶのかも知れない。俺の知ったところではないが、少なくとも篠村薊にとって高音・D・グッドマンとは…大切な存在であった。

聽て、そんな変わり映えのしない日々にも変化は訪れる。

『だから貴方はどうしてそう……！自分の研究成果が馬鹿にされたからといって即座に暴力に訴えるから無法者扱いされるのでしよう！！所詮他人を見下げる事でしか心の安寧を保てないような卑小な連中なのだから、相手にしなればいいだけの話でしょう！』

『五月つ蠅えなお前にあん時の俺の気持ち解つてたまるか畜生！！漸くだ、漸くこの腐れた身でやっていける目処が立ったんだ！頑張つて頑張つて、お前にも付き合わせて手間掛けさせて……やっとなりになった俺の魔法を、あの野郎共は……！！』

そう、あれは一際腹の立つ出来事があつてこの上無く俺が苛ついていた時か。煩わしくも納得せざるを得ない高音の正論トークもその時は火に油状態で、出逢った時以来の険悪な空気を撒き散らしつつ何時もの場所にずんずか向かつていたのだが。

『だから私は貴方のその斜に構えた所が……！……！篠村？！』  
『ンだよ』

『誰か居るわよ』

『あー？……本気だ……！』

『ヒック、ヒック……！……う……うっ、うっうっ



……くうっ …!!……』

そうして岩陰に引つ付く様にして啜り泣いていたのが我らが可愛い妹分、佐倉 愛衣であった。

『ふえ……?……!……あ、あああの、あの……!?!』

『何もしはしないし、今直ぐ出て行けなんて言うつもりも無いわ。落ち着きなさい……』

『別に俺等の場所でも何でも無えしな。……つーかどう見ても初等科の女の子、だろ?こんな所でどうしたよ?』

『……事情を訊くのはもう少しこの子が落ち着いてからにしないで、気が利かないわね……!』

『……小声で怒鳴んなや器用な女め……へいへい悪うございました……まあ茶でもくれてやれホラ』

まあ何で態々人気の無い場所で泣いていたかと問えば話は簡単、他人に会いたくなかったからだ。

愛衣は今でこそなんか色々ブツ飛んだ育ち方をしてしまったが、その身は今も昔も変わりなく才能のある優秀な魔法使いの卵である。当時齡よわい九歳児の頃から素直な性格で物覚えも良く、真面目に教務へ取り組む非の打ち所がない良い子であり、更には兄貴分としての鼻根目を抜きにしても可愛らしく整った顔立ちをしている……となれば、教師陣や同級生の男子勢から人気が出るのは当然の話なんだろう。

そんな美人の良い子を気に食わないと、一部の女子がやかんでしまふ事もまた、当然とまで言わずとも無理のない話だったのかもしれない。付け加えるなら、愛衣は少々気が弱い、というか他者に毅然とした態度を取るのが難しい性格だった。オドオドとした気弱な姿勢もいじめに拍車を掛けた一因だろうか。

『要は貴女の容姿と成績に嫉妬した同性からの嫌がらせ、ね……下らない話だわ』

『しかしホントに何処にでも居るなその手の馬鹿は。落ち零れやエリートや可愛子ちゃん寄って集って虐めてる暇あったら自分の事やれよな勉強でも遊びでもいいからよー』

『い、いえ、私が……私が悪いん、です。私がああ、クラスで人気者の男

の子が、その……』

『ああ大体話が見えた、お嬢ちゃんはアレだ、そいつをフツてしまったと』

『いいいえー！ただ、どんな人だかよく解らなかつたから……その、お友達から始めましょう、つて……』

『それほど話した事も無かつたのなら妥当な判断よ、貴女が悪い訳じゃないわ。…袖にされた男子の逆恨みじゃ無いでしょうね？』

『…野郎を直ぐに悪者にすんな女子の偏見だ…と書いてえ所だがまあ、可能性はあんな…まあここで俺等があれこれ追求しても意味無えだろ』

『……すみません、私。先輩達のお邪魔に……』

『気にしないでいいわ、今日は半ば喧嘩をしに来た様なものだったしね……念の為にはつきりさせておくけれど、私とこの男は単なる友人…知り合いにすぎないから勘違いをしないようになさいね？』

『なんで友人から格下げしたよいいだろ別にお友達でよお前半ばボツチなんだし…あと聞かれてもいないのにそんなに必死になつて関係を否定するなよ、逆にデキてると思われるぞ？』

『…喧嘩を売っているのかしら？』

『お前見かけによらず血の気が多いよな危ねえっ!?スカートで蹴りを出すな見えるだろうが!!』

『何処を見ているのこの変態!!』

『お前が蹴り入れた所為だろ見えてねえよ別に!!』

『あ、ああああの、あのっ?!?……』

『ほら見なさい怯えているじゃない!!』

『先に手ならぬ足出したのはお前だろうが!!』

『ひああああの、あの……!!?!?……!!?!?……喧嘩は止めてください、お姉様、お兄様あつ!!』

『お姉様（お兄様）っ?!?』

…まあすったもんだでこの後、結局事の元凶だったクラスの人気者を二人してしばき倒した所為か妙に俺達二人に懐いてしまった愛衣を加えて、我らが学園ボツチ相互補助同盟は本格的に動き出した。

(嘘だんなもん作ってねーよ)

まあ俺も高音も愛衣も、他人の悪意ひとつてモンがちよつとした事でも己に向けられちまうことを知ってしまったて、周りと関わるのが億劫になつてしまつたんだらう。結局魔法学校を卒業するまで、俺達三人は表面的な付き合いを別として、真面に他所と交流を持ちはしなかつた。俺や高音は兎も角、まだ幼かつた愛衣には悪い事をしたと今でも思う。

『どうだ俺の魔法サギタの射手・変型第二弾貫通トライキエーンス！まだ試して無いが並の魔法使いが張る障壁程度は単発でブチ抜くぞ、弾の直径はかなり縮まるし魔力コストが通常弾の二発分は掛かっちゃうから改良の余地有りだがな!!』

『わあつ、凄いですお兄様!!』

『…前の高速弾を見てから思っていたけれど……相変わらず無駄に洗練されて無駄な高等技術を駆使した無駄のない無駄な術式ね……』  
『無駄無駄五月蠅えよこの野郎あつ!?!しよがねえだろ俺が真面に運用可能で且つ実戦的な攻撃魔法なんざ魔法サギタの射手位なんだからあああつ!!』

『そ、そうですよお姉様！お兄様の努力を無にする様な発言は……!!?』

『そ、そうね無駄は言い過ぎたわ……けれど篠村。貴方以外に汎用性の低い基礎魔法の改良は、研究成果として認められ難いと思うわ……それから私は性別上に於いて女性に分類されるのだから野郎呼ばわりは不適切よ!』

『情け容赦の無い無慈悲な正論をありがとうよそして如何でもいいわっ!!』

『よくありませんお兄様！お姉様はお兄様の大事な人なんですから、冗談でも野郎呼ばわりなんてしちゃいけません!!』

『愛衣っ、寝言は寝て言いなさい!!』

『そしてお兄様は止めるあらぬ噂を立てられる俺がつつ!!只でさえ初等部の娘毎日毎日連れ込んでる様なモンなのにいっ!?!』

『お、兄さまああ、つ、おね、えさま、ああっ!!』

『如何したの愛衣、また虐められたの!?』

『何処のド畜生だ糞共がああっ!心配するな愛衣っ!俺達が何とかしてやる!!』

『そうよ、後の事は全て私達に任せなさい!差し当たって貴女を虐めた同級生クラスメイトの名前と部屋番号を教えるのよ、:誰の妹分に手を出したのかを思い知らせれてあげるわ!!』

『……うわくくんっ!!』

『め、愛衣!……篠村!!』

『お前とりあえず何かあったら俺が原因とみなすの止めろや!?今の流れで俺がどう悪かったたってんだよ言ってみろ!寧ろ状況からしてお前の剣幕が恐ろしかったからより一層泣いたに決まってるんだろ!!』

『何ですってこの……!!』

『ぢ、違いますっ!!私、お、兄様とお姉様が私のためにこんなに怒っでぐれてるのが嬉じぐて……それでえくく……!!』

『ンなことぞ号泣すんなや一々大袈裟な……まあいいや兎に角愛衣、根性ヒネたガキ共の所に案内しろ!落ち零れとエリートの凸凹コンビが制裁加えたらあっ!!』

『誰と誰が……まあいいわ、言い争っている場合でも無いから。行くわよ、愛衣!!』

『えええとあの、んん、ッ……お姉様、お兄様、午後の授業は……?』

『サボンぞ (サボりなさい)!!』

『え、ええええっ!!』

『……篠村?』

『ん?』

『この術式のここなんだけれど……』

『……これ以上防御厚くする必要あんのか?お前が相当尖った才能してんのは承知の上で、ここまで一つの術式だけに特化するメリット薄いと俺思う』

『理解した上でよ。言われなくとも普遍的な魔法は一通り網羅する前提で勉強は並列進行させているから問題ないわ。私が今貴方に求めているのはバランスの駄目出しではなく術式の駄目出しよ』

『…よし高音すわん？理解っていいない様だから何度も過去に忠告した内容を懲りずに言ったるが、世間一般ではそれをオーバーワークつてんだ。お前の向上心が高いのはよくよくこれまでの付き合いで理解したつもりだが、背伸びし過ぎたら人間コケるだけだからな？お前は適度という概念を知れ』

『嫌よ』

『即答か畜生め!?あのなああどうせ鼻で笑われるかヒステリックに怒鳴り返されるかだから言うものかと思ってたんで言うつもりは欠片も無かったがいい加減ガチでヤバそうだから大喧嘩覚悟で言わせてもらうが…』

『前置きが長いのは貴方』

『いよおおうし上等だ戦争やったらあ可愛気の欠片も無え無愛想女あつ!?これでも！俺は！一応なあ!!お・前・の・こ・と・を!!…心配して言っただよこの大く馬鹿女ああつ!!!』

『知っているわ、そして感謝もしている。…言動が伴っていない自覚はあるから謝らせてもらうわよ…ごめんなさい』

『……………、……………つんつつ?!……………!!?』

『…別に貴方の氣勢を削ぎたいから口から出任せを言ったわけでは無いわ。異星人を見るような顔を止めてくれる?…根を詰め過ぎている自覚はあるのよ。貴方はスレている割に私や愛衣に対しては意外に良識ある態度でいるから、心配を掛けているのは解っているわ、…いえ、解っているつもりよ』

『……………ならよお前……………』

『…この手の議論で相手方の話を引き合いに出すのは水掛論になり易いし卑怯なのは承知の上で言うけれど、オーバーワークというなら貴方も他人の事は言えないでしょう。自愛を果たしていない者が、他者を気遣うのは些か可笑しな話じゃないかしら?』

『……………前にも言っただ。俺は事勿れ主義の怠け者だ、楽しんでそこそこ

生きていけりやいいって考えてる志の低く、い奴なの。…でも世間は魔法の使えない魔法使いなんて無価値な生きモノのうのと受け入れてくれっほど優しくは無え、後の人生で楽をする為には今頑張らなきゃいけねえんだ。並の傭兵か街級の衛士クラスよかマシな実力付けられりや、何処でもそれなりに生きていけんだろうからな。…何も出来ない状態で放り出されて身を切るような生活しながら這い上がるのと、少なくとも衣食住と勉強、訓練には事欠かない環境で多少無理してでも頑張るのはどっちがマシかって話で俺は後者を選んだだけだ。こういう言い方は我ながら卑屈に過ぎてアレだが、多少周囲と上手く行つて無かろうが将来は約束された様なモンである天才にして秀才、我が校トップクラスの才能持つてるお前さんと同じ目線で語るなや。俺はこうでもしねえと…生きてけねえだけだ』

『確かに卑屈に過ぎる物言いいね。…私貴方のそういう所は嫌いだわ』

『嫌いで結構…とは言わねえが、放つとけ』

『放つておくつもりは無いけれど、まあ今はいいわ。…貴方の心根は兎も角、貴方の目標を馬鹿にするつもりは無いわよ？地に足の着いた良い選択だと思う。…傭兵は実力が、衛士は加えて高い道徳観念に責任感が求められるわ。誰にでも就ける職業じゃ無い、…貴方が将来に夢を見ないなら、それはきちんと貴方が勤められると判断して目指しているのでしょう。余り自分を、低く見ないで。私は努力している貴方を見て、自分だけが頑張っているんじゃないと…救われているから…』

『…らしくも無え、と茶化したいとこだが…まあ、ありがとよ』

『…思う事をそのまま言っただけよ…』

『……………』

『……………』

『……………止めようぜこの空気！』

『わ、私の所為みたいに言わないでちょうだい!?…でもそうね、らしくないにも程があるわ』

『そうだなその通りだそうしよう!!…てなわけであそこで俺達を見

ながら気味が悪い程満面の笑みを浮かべている妹分をとりあえずシ  
めるか』

『そうね、何を考えているかは大体想像が付くし、慈愛の微笑みが凄ま  
じく癩に触るわ』

『え…あ、あの待って下さいお姉様お兄様!?私ほただお二人が何だか  
んだ口では言い合いながらやっぱり心の奥底では深い絆で結ばれて  
いるんだなって再確認出来たのが嬉しかっただけでヒアアアアア  
アツツ!?』

…まあ愛衣の言葉は大袈裟に過ぎるにしても、あの頃の俺と高音に  
は臭い言い方になるが絆の様なものがあつたと俺は思う。周りの連  
中とは違うぞ、俺達は同志を見つけて頑張っているぞ。……なんてい  
う、まあ今にして思い返せば些かの外的な優越感に満ちた幼い絆<sup>それ</sup>では  
あつたが。

あの頃俺達は上手くやれていて、それがずっと続いていくと根拠も  
無く信じていた。

『おおお、お兄様、一大事です!!お姉様が、お姉様があつ?!』

『……愛く衣、お前の一大事は聞き飽きたつちゆうに。どうせまたあ  
の堅物高音様が小競り合いでもやらかしたとかそんなんだろう?』

『違います!今度という今度は本当に一大事なんです!!』

だが現実つてのはそうそう順風満帆にいく事柄つてのは少ないも  
んであり。大抵詰まらない結末<sup>オチ</sup>を用意してくれるモンなのだ。

『お姉様が、お姉様が!……なんだかイケメンな人に告白されたんで  
すつつ?!』

『っ!……、……、……、……、……、……、……、……、……、……』

『なんでそんなに落ち着いてるんですかお兄様あああああつつ?!?!』

『お前が俺の分まで驚いてるからじゃねえ?……、ま、いつかはこん  
な話が上がると思つてたしなあ……、……、……、……、……、……、……、……、……』

思い返す度に身悶えして転げ回りがたくなるような俺が若気の至りでやらかした大失態は、妹分のテンパった報告によりカーテンコールと相まった。

まあ初恋つてのは実らないと相場が決まっているもんである。

「小一太郎君小太郎くーん。俺の頼みを聞いちゃくれんかい？」

「…言うだけ言うてみたらええんやないか？」

極めてダルそうにその背をぐんにやりと軟体生物の如く折り曲げ長杖スタツプに寄り掛かりながらの篠村 薊が溢した戯けた調子の問いに対して、元々三白眼気味の目付きを更に吊り上げた仏頂面という表現がこの上無く相応しい、絶賛不機嫌ゲージMAXな犬上 小太郎は素っ気無く返しの言葉を紡いだ。

『さあさあさあ皆様何処ぞの類人猿暴虐教師の暴挙によって折角控え目な崩壊具合で終わった闘技場が基礎から修復仕直しになった為時間を喰いましたが!!…これよりまほら武道会第七試合、見た目は唯の地味男子！その実態は金髪巨乳真面目委員長系幼馴染と赤毛ツインテ仔犬属性の後輩ガールの二人と日タイチャコラを繰り広げる麻帆良屈指のリア充野郎、キレ芸的なツツコミが売りの苦勞人系主人公、篠村 薊選手!!…対するは、見た目は犬耳尻尾付き素肌学ランとお前何処のいいんちよ…もとい特殊性癖シヨタコン挑発ゆうわくしてんだよとのツツコミが飛んで来そうな属盛りシヨタ！しかししかし侮るなかれその実力、相手が例え乳飲み子だろうと勝負の場に立つならば容赦はしないという、控え目に言って頭オカシい病的負けず嫌いの群れである麻帆良武道家集団の筆頭部長に副部长を打ち斃して本戦出場を決めてみせた本物である事に疑いの余地は無あい!!子供先生ネギ選手に続く凶悪実力派シヨタっ子誕生と相成るか、犬上小太郎選手うっ!!この組み合わせも勝敗が全く予想出来ません、どう思われますか解説の部



長お!』

『お前テンションの上下で口調と呼び方変えるの止めろよ朝倉。：さておき、犬上選手は長瀬選手と似たような技術を用いつつスピードで掻き回す軽戦<sup>スピードアタッカー</sup>土タイプの選手です。言い方はアレですが此方は麻帆良でもよく見る普通の武道家として分析が可能ですが、一方の篠村選手は近接戦闘に於いて杖術を用いはするようですがその主武器となるのは高速且つ変幻自在な軌道を描く正体不明の弾幕です。此方の資料で近いのは武道家の一部が外氣と呼ぶ気の種類を飛び道具として飛ばす《遠当て》ですが、篠村選手の弾幕<sup>それ</sup>は明らかにレベルの違う異質な代物。篠村選手の射撃を犬上選手が攻略出来るか否か、が勝負のポイントでしょうね』

闘技場にて向き合う二人、片方は小学生以上にはどう見ても越えはしていない子供であるにも関わらず、これから始まる試合への期待によって場内は観客達の期待と興奮による熱気に満ち溢れている。

ほんの数試合前の子供先生<sup>ネギ</sup>を思い返すまでも無く最早誰もが理解しているのだ、このまほら武道会本選へ出場を漕ぎ着けた者は皆等しく、実力者である。

まして予選に出場していた部長、副部長達篠村と小太郎に敗れ去った者は言わずもがな、中央に立つ怠そうな地味男とヤンチャな小学生の脅威を身に沁みて理解していた。

「……さてこの勝負、どう見る?」

「なんとも言えん、が言える全てだ。俺はあつという間にやられていたのな、それも奴<sup>篠村</sup>はあのスタ<sup>高</sup>音<sup>音</sup>選<sup>選</sup>手<sup>手</sup>とコンビを組んで予選を突破していた。：タフな連中を仕留めるのに苦労していたようだから単独では火力<sup>パワー</sup>に欠けるのだらうとは思うが……あちらの少年と違い、ス○ンドか何か知らんが得体の知れない術を以って闘う以上は予想のしようが無い」

「まああのガキの方は影分身だの黒い気弾っぽい遠当てだのと、イマイチ根幹<sup>ペ</sup>とする武術<sup>ス</sup>が解り辛いが闘い方そのものは比較的真つ当なモンだ。予選落ちした俺が偉そうに言う資格は無えが実力的にはあ

の面子の中で下から数えた方が早えだろうし、捻りの無い真つ向勝負ならややガキの分が悪いと見るね、俺あ」

武道家達の期待が否応無しに高まる中、選手席にてバカレンジャーが一角にしてある意味筆頭。初代バカレツドこと中村 達也は盛り上がる背後の観客を鬱陶し気に首を捻じ曲げつつの横目で睨みつつ、呆れた様な調子で呟いた。

「さてさて無つ責任に湧いてる背後の馬鹿共あまあどうでもいいとして、どうなんのかねえこれは。ぶっちゃけアザミンの勝ちも覆んねえ気がすつけど…つかアザミンやる気無えく少なくなるとも見かけ上」

「口に出すなら内容をもう少し纏めてしゃべれ脳無し。…まあ小太郎が弱い訳では断じて無いが、ネギと同格ならば勝ち目は薄い、を通り越して皆無に等しいと言わざるを得ないだろう」

「小太郎にとってある程度のガス抜きになればいい…とは思うが、篠村は戦闘に関してバリバリのガチ思考だからなあ。逆に自信がおっべしよれる結果になんきやいいけど…」

「…ねえ先輩達、篠村先輩ってそんな強いのか？そりやあそこの馬鹿先輩あつさり押しちゃうんだから弱い訳ないのは解ってるんだけどさ、あれって本気出してたんじゃ無いんでしょ。普段の振る舞いとか見ると正直…」

「…まあ強そうには見えない、と。そんな所でしようか、明日菜さん」  
「ん、まあね。あの変態爺い悪魔の一件でもあの人、言い方悪いけど最後にイイ所持<sup>トドメ</sup>ってた風にしか見えなかったし…小太郎だつてかなり強いんでしょ？なんかしつくり来ないんだけど…」

相も変わらず身内だけで理解<sup>わか</sup>り合つて完結している感のある、玄人染みたり顔でのレンジャーに明日菜が疑問をぶつける。明日菜として真に実力のある人間が皆戦国武将の様な外見と性格をしている訳で無く、それどころか第二試合後に教師達の手でドナドナされて行った金髪幼女と優男を筆頭に、人畜無害そうな外見をしている奴に限ってヤバい場合が多いんという事はこの人外魔境MAHORAに住んでいる以上理解しているつもりではある。

それでも、篠村 薊という普段テンパリながら慌てふためくか逆ギ

レ気味に切れのあるツツコミを入れている印象しか無い、常識人にして苦勞人といった男と実力者というフレーズが明日菜にはどうしても結びつかなかったのだ。

「……ん〜まあ俺がナチュラルに馬鹿呼ばわりされてんのは不平等にして残酷な世界の所為だから敢えて何も言うめえが、アザミンが強そうには見えねってか？まあ確かに見た目はモブ魔法使いCって感じだし性格はヘタレのビビリの根暗根性と来たもんだからまあ無理もねえけどなあ」

「公然とdisれる程立派な人間かお前が。ともあれ、まあ篠村は解り易い強者じゃないのは確かだ。そもそも本人からして自分の事を凡人だの才能無しだのと率先して下げ連ねているんだから余計になあ」

「過ぎた謙遜は嫌味にしかならんと言ってやった事はあったが聞く耳は持たんらしい。単なる意地にか思えんがまあ当事者達にしか解さぬ事情が存在するかもしれんから強く問い質しはしなかったが……」

当事者、の部分でチラリと高音に愛衣を横目に見やりながら大豪院は一旦言葉を切って闘技場の二人に視線を戻し、続く言葉を紡いだ。

「話を戻すが奴は強いぞ。終ぞ模擬戦も手合わせも奴は拒否し続けていたからお前達には把握できんだろうが……」

「ぶっちゃけた話、俺らと実力的には互角なのよねえアザミンってば多分」

「…いや、認めるのは少し癪だけど一対一なら分が悪い、と言っていいな。実力云々って言うより相性の問題だけれど、六四から七三位で篠村が有利だろうな」

「……まあな——……」

「……フン……」

「「……ええっ?!……」」

大豪院を遮っていずれも渋い顔で吐き出された中村と辻の言葉の内容に、そして辻のそれを否定しない二人に、少女達（+カモネギ）は驚きの声を上げる。

「え、それって……本気で言ってる……?」

「俺等がたとえ冗談でも自分よりも誰某が強えなんて口にするようなナマモノに見えっかアスニヤン」

「…いえ、それは……しかし、それ程なのですかあの人は……!？」

「辻が言ったが相性の問題だ。桜咲後輩ならばまあ五分、という所か？」

「……軽々には判断しかねますが……篠村先輩は、それ程に……?」

「なんだ、刹那も解らないのか?」

「恥ずかしながら……」

意外そうな声を上げながら辻は己の恋人へ面を向ける。車椅子から振り仰ぐ様にして至近距離で合わされた顔と顔に刹那は若干頬を染めながらも、口にする言葉は困惑と疑念混じりのそれである。

「弱い、とは決して思いませんが……篠村先輩の強味は手数ของ多さであり、単体での制圧で無く援護、遊撃役として特化させたスタイル。…といった印象でしたので…火力に欠け、決定打となる何かを持たない以上はバカレンジャーに一枚劣る、というのが私の認識でしたが……」

刹那の見解に概ね同意だったらしい明日菜や夕映、ネギが頷きを返すのを辻は仄かな苦笑と共に見やり、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「まあ、間違った認識では無いか?確かに篠村は火力に欠けるし自分からサポート役としての役割を率先してこなしているからそういうものも無理はない…ってどうかそれが本領なのは確かだろうからなあ。……しかし」

と、辻はかつ怠いと己の心持ちを全身で表している闘技場の篠村へ視線を向け、心なしか潜めた声音で続く言葉を吐く。

「だからといって篠村が一对一で弱いなんて事は無い。終ぞ俺達とは本気で闘り合おうとはしなかったから断言は出来ないけど…当人の言ってた出来る事が本当なら、大した事ないなんて篠村の自己申告は謙遜を通り越して嫌味になる」

「実力隠したい訳でも遠回しな自慢でも無くて素で言ってるっほいけどなーアザミンは。まあお付きの恋人達は才能と努力の塊にして魔

法使い様方の上は油断メガネに狂えるゴリラと化けモンばつかだから、強い弱いの基準値が高くなんのは理解<sup>わか</sup>んねえでもねえけどよー……」

「お前のような凡人がいてたまるか、という奴だ：情に厚いが仕事に公私混同をするタイプではあるまい、高音女史。奴に居てほしいのは……」

単純に奴の実力を見込んでいるからでもあるのだろうか？と、大豪院は高音へ言葉を投げ掛ける。

見事に出歯亀をされていたと含みのある台詞から理解した高音は半眼で大豪院を睨み付けるが、一つ息を吐いて眉間に入った力を抜いて渋々、といった様子ながら口を開いた。

「…まあ、あれだけの醜態を晒したのだから多少囃されようと揶揄されようと文句を言う気は無いけれど。気に入る気に入らないは別と知りなさい貴方達？」

「陳謝しよう。…それで？」

「……、…端的に言うなら、そうね。私は自身の実力を増長も謙遜も無しに冷静に判断しているつもりだわ。その上で言わせてもらうけれど、この学園に在籍する魔法生徒の中で単純な戦闘行為に於いては私が一番強いでしょう」

「あら潔いこの娘男前だわあ〜」

「それほどでも、事実をありのまま口にしていただけなもの。謙遜は過ぎれば嫌味でしょう…話が逸れたわね。その上で言わせてもらうけれど、あれは相性<sup>篠村</sup>もあって私相手にはほぼ勝てない。当然高畑先生や杜崎先生クラスの学園トップレベルの魔法使いにも敵いはしないわ」

「なら、それ以下。例えば他の魔法教師や生徒、俺<sup>麻帆良武道家</sup>達相手には？」

ともすれば酷評とも取れる高音の言葉に、されど笑みを浮かべて辻はそう被せる。フン、と不愉快気に一つ鼻を鳴らした高音だが、続く言葉には淀みが無く。

「貴方<sup>バカレンジャー</sup>達でも分が悪く、桜咲さんのような組織有数の使い手でも勝つのは難しいでしょうね。最も、互いに万全な状態での一对一…なんて

現実味の薄い条件ならばの話だけれど」

「……身内鼻肩……では無いのでしょね、貴女に限っては」

はつきりと名指して篠村に実力で劣る、と断言された刹那は微かに顔を険しいものにするが、高音の人となりを多少ならずとも知る者からすれば高音が篠村に、それがどういった事柄であれ鼻肩をするなど到底ありえない事であると理解できる。故に高音は、篠村 薊の実力を自分達でも頭一つ抜けていると本気で思っているという事になる。「まあアレより下と言われているは不快を通り越して殺意を抱くのも無理はない事だけれど、矢張り信じられないかしら、桜咲さん？」

「……正直に言わせてもらえば。油断の出来る手合ではありませんが、闘って負けるとは思えません」

刹那の言を聞いて高音と愛衣は顔を見合わせ、仕方がないなあ、とてもアテレコ出来そうな苦笑を浮かべ合う。

「まあ普段があだもの、残当というやつかしら？」

「昼行灯を気取ってる訳でも無く、お兄様は素であれですからね……」

『ほわあああ……！篠村さんて中村さんより強いんですかー？』

「断じてそれあ無え!!仮にそうだったとしてもさよちゃんが応援してくれんなら不可能を可能にしてみせんずうえああああ!!」

「喧しいわ」

「ひでぶ!」

『中村さーんっ!』

「天井ですね……」

暑苦しい喚き声を上げて鬱陶しがられた中村が軽めの鉄山靠で宙を舞う様を冷めた目で見やる夕映を横目に、高音は納得のいかない様子の刹那へ告げる。

「もう試合が始まってしまうようだから、口で説明するよりも見てもらった方が早いわね。犬上君はアレが手加減出来る程弱くは無いようだから、直ぐに解ると思うわ」

「篠村先輩が圧勝する、と？」

「……圧勝どころか下手をすれば……」

「開幕十秒で終わりかもしれないです。お兄様は強いのに容赦があり

「ませんから」

「そ、それは流石にあり得ませんよ!!小太郎君は近接戦闘では僕よりずっと強くて、獣化すれば中村さん達にもそうそうやられたりしないんです!篠村さんが強いのは解ってますけど、いくら何でも……!」

「いいえ、ネギ先生。先生は解っていないのです」

最早自分にとって友と変わりの無い修行仲間の瞬殺宣言に若干憤りながら抗弁するネギの様子に若干済まなそうに顔を微苦笑へ変えながらも、愛衣はキツパリと言い切った。

「お兄様が、どれだけでもないのかを。実戦ならまだしも、こんなよーいドンのスタートで始まる試合形式ではお兄様は……ヤバいんです」

「愛衣、もう少し用いる表現法を吟味なさい。頭が軽く見られるわよ」

些かフワツとした説明に混乱し始めたネギの様子に、愛衣を軽く窘めつつ高音が口を開く。

「愛衣が惑わかすような物言いをして申し訳ありません、ネギ先生……重ねて言いますが、見ていれば直ぐに解ります。愛衣の言葉は間違っ  
てはいませんしね」

「ナーナーじゃあ本気<sup>マジ</sup>にコタクくん秒殺あり得る?」

「答えになっていない当然のことを言わせてもらうけれど、アレの初  
手に対応ができませんければ。……と言わせてもらうわ」

「ほう、それは楽しみだ」

「……本当にそうだったら小太郎君ガチで凹みそうだからできれば俺そ  
うなつてもらいたくないんだけど……」

「一<sup>はじめ</sup>ちゃんてば相変わらずお人好しなんだからもう。なつたらなつ  
たでしょうがねえべ、コタクくんがまだ弱かっただけの話ってことだ」

「いやそれで済む話じゃ……!……なんだか様子が変ですよ、あの二  
人」

「んん?」

ネギの言葉にみんなが闘技場に視線を戻すと、何やら剣呑な雰囲気  
で互いを見つめ合う二人の姿があった。

「……もっぺん言うてみてくれるか、篠村の兄ちゃん？」

「あくやっぱ気に触った？負けてくれね、って言ったんだよこの試合。お前さんが俺にさ」

時は僅かに遡り、冒頭の会話から篠村が小太郎に対しての頼みを吐いた直後。先ほど耳にした台詞が間違いでないことを確認した小太郎は、元より鋭く眇めていた視線をモはや殺気すら漂うそれに変え、低く籠った声音で言葉を紡ぐ。

「…それ聞いて、はいわかりましたお譲りします……なんて俺が言うでも本気で思つとるか、兄ちゃん？」

「欠片も思つてねえ。まあおめ様が憤怒バーニングファツキンストリームになんのは無理もねえんだけど聞いてくれよ、俺今負けられねえ状態なのよ」

「高音の姉ちゃんとのあれやろ？見て聞いとつたらそんなんわかるわ。事情は知らんけど色んな柵に決着つけよう云々を別に否定はせえへん、兄ちゃん等見とつたら必要なことやと思うしな」

篠村の軽口に小太郎は軽く目を閉じて静かに答えを返す。

「おお？キレて会話にもならねえと思つてたから助かるぜい。じゃあ…」

「でもそんなんは俺が譲つたる理由にはならへんわ」

しかし、想定していたよりも理性的であつた小太郎の対応に見込みがあるかと喜色を表しかけた篠村に小太郎はカツと目を見開き、射抜くような鋭い目付きでそう続けた。

「負けられん理由、て…そんなんはぶつちやけこんな場所とこに出場でとる奴なら一人残らずなんかしらあるやろ、負けたくない、位でもそれ理由や。大体勝ち上がってきい言うた高音の姉ちゃんに恥ずかしい思わんのかい？」

「欠片も思わねえ」

篠村は即答した。

「…兄ちゃん」

「俺あそういう方面のプライド一切持つてねえんだわ。汚い外道手段も相手によつては位の心持ちだし、勝てりや結果がでりや割と何でも



する輩だ。土下座が欲しけりやこの公衆の面前でも躊躇いなくやるぜ俺は？…唯お前のその反応だと頭下げてでも無駄っぽいしな…」

小太郎君よー、と、篠村は憂鬱そうな顔で語り掛ける。

「俺は凡才なのよ。こんな化け物揃いなメンツが集う大会で、楽して勝てる相手なんざ一人たりともいねえ訳。それでも俺は決着<sup>ケリ</sup>付けると決めた以上は石に齧りついてでも最悪三回戦までは上がらないといかんのだが…魔力量からしても体力からしても全力で闘ったんじゃとても三戦保たねえのよ。一回戦<sup>一回</sup>を無傷で切り抜けられたならまあ何とかなるかな？つてな感じだからさあ…頼むよ小太郎、譲ってくれ。後で俺にできる事なら何でもするからよ」

頼む。と、篠村は頭を深く下げる。決して巫山戯<sup>わけ</sup>た理由でこんな馬鹿げた事を言い出した訳でないのはその態度から十分に小太郎へと伝わってきた、が。

「…スマンな、兄ちゃん」

小太郎はそれでも、その申し出に是、と頷くことはできなかつた。

「…篠村の兄ちゃんからすれば俺の理由なんて軽いように思えるやろ、何せ腕試し感覚でどこまでやれるか、なんて風にしか見えてへんやろからな」

「…なに、違えとでも言いてえの？」

「まあ間違つとらんけどな、それ以外もあるわ」

「何よ？」

「糞格好悪い理由や、話したくないわ。兎も角兄ちゃん、答えはNOや。覚悟決めてやりやつてもらおうで…一つ、気にいらん事もあるしな」

小太郎は鼻の頭に皺を寄せ、一段階低い声で言い放つ。

「なあ篠村の兄ちゃん、兄ちゃんの台詞やと、俺は多少消耗はするけど、闘って負ける相手や無いで…そういう事なんやろ？」

「…ああくそつちが気に障ったか、まあその通りだけだよ」

あつちやー、と篠村は額に手を当てて呻くが、小太郎の言葉自体はあつさりと肯定した。

「…舐めている、とは言わんわい。兄ちゃんの実力はよう解らんけど、

中村の馬鹿兄ちゃんから一本取った事もあるんやろ？やったらまあ、格上やわな普通に。…それでも、負ける可能性微塵も考えてへんのは自惚れ過ぎちゃうんか？」

「いやいや、何があっても負けないとかそんなこと考えてないよ俺神様かよ？普通に計算外の事態が一個二個あつて、一回二回失敗ミスれば普通に俺はお前に負けるよ」

まあ、そんな事はほぼあり得ないんだけどな？と、篠村は笑い、

「…後よ、俺はやるとなったら相当身も蓋もない勝ち方するから、お前のプライドとか諸々心配したつっーのもある。なあ小太郎君よ、真剣マジに止めとかね？…容赦しねえぞ俺は」

「……哀願の次は挑発かい、本当に手段は選ばずやな」

上等や、と、小太郎は犬歯を剥き出した獰猛な表情かおで篠村を睨め付け、堂々と告げた。

「必ず吠え面かかしたるわ、その顔にな」

『さあ、間も無く試合開始と相成ります!!両者開始戦の位置に着いて下さい!…言つとくけど本っ当くくにもう闘技場ぶつ壊すのやめてよね二人共!?!修繕費だつてタダじゃないし、ワンデイトーナメントだから地味に時間押してるんだからね!!』

「安心せえや朝倉の姉ちゃん、俺はわざわざ壊さへんし、篠村の兄ちゃんもなんつうか全体的に地味やからそんな派手な真似出来んやろ」

「さっきのお返しのつもりよ公然とdisりがつて……なあ小太郎、本当に降参する気ねえ？」

切実な響きのこもつた朝倉の念押しに笑つて答える小太郎に、篠村はトントン、と手にした長杖スタッフの石突きで床を軽く叩きながら不景氣스러운顔で問い掛ける。

「クドイわ兄ちゃん、嫌だ言うとるやろ。よもや怖気づいたわけじゃないやろな？」

「いんや、これはもう何つうか、純粋な氣遣いなんだがなあ……何しろ」

『試合……』

「この段階で気付いてねえならお前もう負けほぼ確定だからよ」

『開始イ!!』

「…フツツ!!」

朝倉の試合開始宣言とほぼ同時に聞こえてきた篠村の意味深な発言について小太郎は敢えて無視をした。ハツタリの可能性も無いではないが、事此処に至ってなおもちらの棄権を奨める以上なにかがあるのだろうと小太郎は思う。それでも黙ってただ負けを認めることが自分にとってはありえないのであれば、最初ハナっから全力機動でブチ当たり、死中に活を見出す。何時もやってきたことであり、小太郎に油断は無く。地面を踏み締め、その身体は一瞬で篠村の右側面へと回り込みー

「…お前の負け、と」

「…:…つ!」

瞬動の抜きで床を踏み締めた時には既に空間から滲み出る様に出現していた複数の光球へと自分からぶつかりに行く格好で衝突し、瞬時に弾けた光帯によりその場に身体を縫い止められた。

「…:…つなっ!」

…魔法サギタの射手マギカの…戒めアエールの風矢!カットウラエ俺の開始直後の瞬動と、移動位置やタイミングを全て読んだっちゆうんかい…!?

「違えよ、よく周り見ろや」

驚愕する小太郎の心を読んだかのように篠村は言い放ち、反射的に言葉に従い小太郎は周囲へ視線を向けて。再度驚愕に息を呑んだ。

『こ、これはあ?!謎の光る玉の様なものが篠村選手の周囲を取り囲むように突如として現れました!!そして開幕と同時に目にも止まらぬ速さで私野村選手の至近に踏み込んだ小太郎選手ですが、これまた謎の光る帯のようなものに拘束され身動きが取れない状態だあつ!!』  
『補足するならば、小太郎選手が踏み込んだ瞬間とほぼ同時に光る玉は篠村選手の周囲に現れ、光る帯は小太郎選手が光の玉に衝突してその玉が弾け出現したように見えました。原理は一切理解不明ですが、おそらく篠村選手は小太郎選手が開幕と同時に突っ込んでくる事をトラップ読んでこのような罠を仕掛けただけでしょう』

「ま、俺は近接戦闘能力じゃ獣化状態どころか素のままの前にも多分負けるからよ。瞬動で来る事は読めても何処から突っ掛けてくるか解らねえし、実際目で見ても到底追い切れねえからこうしたんだわ」  
やれやれ肝が冷えたぜ、と嘯きながら篠村は近距離の小太郎に身体每向き直り、僅かに目を細めて告げた。

「言つたる？身も蓋も無えって」

「…っこんの!？」

小太郎が何かを言い終える前に篠村は杖を軽く振り、それまで微動だにせず空中に浮き続けていた残りの五十発近い戒めの風矢光球が一齐に小太郎へと殺到。一瞬の内に全身を余す所無く光りの帯に包まれた小太郎は言葉さえも封じられ、物言わぬ彫像と化した。

「……………!!」

「……………っ!?!？」

「うつわー……………」

「えっげつね……………」

「…この程度は予想して然るべきだったか……………」

「言つたでしょう、下手をすれば秒殺だと……………愛衣が」

「な、何だか私の所為みたいに聞こえます、お姉様!？」

おら、と軽い掛け声と共に小太郎を蹴り転がして審判の朝倉にカウントを求めている壇上の篠村が行なった文字通りの秒殺劇にネギ達が絶句する中、揃えた響めつ面で呻き声を上げる三バカレンジャー人に頬から一筋の汗を垂らして高音が静かに告げ、愛衣が抗議の声を上げる。

「…いやっつかもうこれ終わりか!?!何っとう盛り上がりの欠片も無え……………」

「か、カモ君!!まだ終わりじゃ……………」

「五十発前後の戒めアエールの風矢をテンカウント以内に抵抗レジストして立ち上がる事が先生には出来ますか?…因みに私は無理です……………」

「…っ……………!？」

声を荒げるネギに問い掛けたのは辻の後ろに控える刹那であり、その表情は驚愕と戦慄により歪んでいる。

「…これが。篠村先輩の実力という事ですか、高音さん、愛衣さん」  
「ほんの一端に過ぎないけれどね。あの男は数秒あれば数十本の魔法の射手を無詠唱で展開出来る。もう数秒掛ければ出現の直前までそれを悟らせない様に隠蔽が可能。貴方達どころか、相当な力量の魔法使いであろうと感知の難しい域でね…：あんな風に、試合開始まで腐る程間が開いているのなら、試合開始と同時に無数の高速化、貫通化させた弾幕で相手を一瞬で蜂の巣と化す事さえ、アレなら出来る」

「…お兄様を相手にするなら、猶予を一瞬たりとも与えてはいけません。私達魔法使いはおろか、近接戦闘を得手とする前衛の人が繰り出す手足や武器よりも、お兄様は出足と手数で勝るんですから」

「…：あの、豪徳寺先輩…：…」

「小太郎おー！根性見せろ、そんなんで終わんなああつ!!」

保健室では些か以上に情け容赦の無い篠村のガチ振りに顔を引き攣らせた千鶴の呼び掛けも意に介さず、画面内でピクリとも動かさず横たわる小太郎へと檄を飛ばしていた。見かねた千鶴が身体に手を添え、落ち着かせようとするが今一つ効果は薄い。

「…：傷に障りますよ？」

「そこまでヤワじゃねえよ、それより小太郎だ。あんな負け方じゃ後を引いちまう…：篠村が悪いんじゃないが、あいつはこんなで負けちゃいけない!!」

「…：お気持ちは解りますけれど…：…」

裏の世界を多少知っただけの、戦闘に関して素人同然である千鶴でも解る。小太郎は完全に、詰んでいるのだ。

魔法の射手の中でも捕縛、拘束のみに主眼を置いた戒めの風矢は風の帯による物理的高速に加えてごく低位ながら魔力関連の力に封印までも施す。一矢や二矢では並の魔法使いの魔法発動を一瞬から数瞬遅らせるに過ぎないが、数十矢が拘束しているならばたとえ高位魔法使いであろうとも真面に魔法を行使する事は困難となる。小太郎が扱うのは主に気の力だが、元を辿れば魔力と同じ力である以

上関係は無い。

千鶴はそういった魔法理論が理解出来ていた訳では無論のこと無いが、豪徳寺が例え画面越しで実際に小太郎へ声が届く事はなからうと具体的な解決策を口にしないことから、何とは無しにどうしようもない状況なのだと言うことは解っていた。

戦闘に関して様々な意味で門外漢である千鶴に、この状況で豪徳寺かける言葉が見つかるはずもなかったが、それでも憤りと悲しみを表す豪徳寺の僅かな慰めにでもなれば、と千鶴が声を掛けようとした、その時。

「……！小太郎、そうかそれが……！：：：そうだよ、こんなことで終われねえよなあっ！！」

「……えっ？」

突然目を見開き、喜色満面の笑みを浮かべた豪徳寺の様子に千鶴が慌ててテレビの画面に目をやると、そこにはタールのような黒い何かに沈み込んでいく小太郎の姿が映し出されていた。

『お、おおーつと小太郎選手!!身動きの取れない状態でカウントセブンの迎え最早終わりかと思われたその時！なんと黒い影の様な何かが突如床より湧き出し、小太郎選手を呑み込んだああああっ!!』

『……敢えて言うなら第二試合終了時にエヴァンジェリン選手が出したものに似ていますが……これ迄に輪を掛けて解説実況泣かせですねこの試合』

……あつちやくそうだ小太郎にやこれがあつたか……！……！……！

解説実況が騒ぐ中篠村はやつちまつたと天を振り仰ぐ。

小太郎は単純な獣人族では無く犬神を使役する狗族のハーフである。身体能力の強化、飛び道具、影から影への移動と汎用性に富んだ妖にして式鬼にも似た存在が犬神である。この場合は試合開始前に小太郎もまた、何かあった時の保険として犬神を喚び出し忍ばせておいたのだった。

「……完全に身一つの無策で向かって来る程考え無しでも無かった、か……」

詰めが甘いんだよなあ俺は、と、盛大な溜息を吐く篠村を余所に、朝倉は選手の一人が消えて無くなるという鬼振りにもめげず懸命に実況を続けていた。

『床下に沈んだ……訳じゃ無いのね!?場内には現時点で観測不能：解った……皆様！小太郎選手が謎の移動術により消えてしまいました、大会運営側の急速探知の結果少なくとも闘技場内には小太郎選手の手は見当たらないため、これを場外と捉え二十カウント以内の小太郎選手が戻らないようであれば篠村選手の勝利とします!!小太郎選手が消えた時間から換算してカウントをサーティーンより……』

「あー朝倉？場外カウント負けその展開は恐らく無えから安心しろや」

「……なに選手私今忙しいんだけど邪魔しないでよ鬼振りに次ぐ鬼振りくれてくれちやつてもう少し解説実況に優しい試合してよ！」

「暗に魔法OKです発言した主超催者鈴音恨めや。ともあれカウントは必要無えよ……何せそろそろ……」

篠村が完全に言葉を紡ぎ終えるよりも早く、観客席と神社の本殿を繋ぐ通路の屋根を勢い良く蹴って一人の影が闘技場内へと舞い降りる。

「せやな、待たせてすまん篠村の兄ちゃん」

「別に待ってないけどねイヤ本当に。あのまま沈んでくれりや良かったのにさあ」

「……えくくちよつと会話の流れからして誰なのかは明らかかなんだけどそれでも言わせてもらおうと誰これえええっ!？」

朝倉がそのような叫びを上げた原因は戻って来た小太郎の姿にあった。身体の其処彼処を獣毛が覆い隠し背丈や肉付きは中高生並に発達。犬歯と手足に鉤爪の生え揃ったその姿は、第一試合の刹那が行ったのと同様に狗族の獣化形態である。刹那の場合の様に変身した過程を見ずにビフォアフターのみを見れば混乱するのは当然だろう。

「コスプレやコスプレ。刹那の姉ちゃんと同じやで。…気合入れる為にこの格好なつたんや」

「本気出すなよ俺負けるから。ヤダヤダ初見殺しでさぱつと決着きめるつ

もりが凡ミスでこの様だよ」

「つかよ、と、篠村はギリギリと後ろに摺り足で退がって間合いを作りながら面倒臭そうに問い掛ける。

「今からでも棄権しない？こっから先は痛えぞ小太郎？ほら無理に戒めアエールの風矢力技でぶち破カブトウーラエつて来た所為で彼方此方傷だらけじゃないよ」

「誰がするかい態々本気モードになつてきたんやで」

「寧猛に牙を剥き出して笑う小太郎の返答に篠村は深い溜息を一つ吐き、半身の姿勢で長杖スタツフを構えた。

「んじや塩漬けにして沈めてやんよ」

「手負いの獣舐めんなや兄ちゃん」



24話 まほら武道会本選第7試合 篠村VS小太郎 (その2)

当たり前というなれば当たり前前の話なのだ。

高音・D・グッドマンという少女は当時の齡十三という幼さで既に完成されつつあった伶俐な中にも可憐さを秘めた、下世話な表現をするのならばいかにも男好きのする美貌と学園の中でも下手をすれば高等部の先達にも引けを取らない明晰な頭脳と豊富な知識を持ち合わせ、人格は品位公正にして と、少しばかり少女の年齢にしては嚴格過ぎる欠点も、より強く自身を律せんとするその言動を目の当たりにすれば欠点足ると指摘する者は良識が欠けた者のみだろう。

長つたらしくも回りくどい言い回しになったが、要は天才で秀才氣質な真面目美少女という事だ。同級生のガキにはやかみの矛先にしかならずとも、目を付ける野郎が出て来るのは不思議でもなんでもない。

で、あるからして。

「起こるべき事が起こっただけなんだからいい加減納得しろや愛衣」  
「嫌です!!」

お姉様の伴侶パートナーはお兄様以外認めません！などと妄想を怪気炎上げながら垂れ流していた愛しの？妹分を宥めようとしたものだが取り付く島も無い状態だった。

「お兄様は平気なんですか!?お姉様が何処ぞの馬の骨に盗られてしま  
うんですよ!?!」

「平気もクソも俺は元からあいつ高音のことそういう対象として見てねえ  
もん」

「お、お姉様に魅力が無いと!?頭大丈夫ですかお兄様あ!?!」

「喧嘩売ってんのかお前は……そういう意味じゃねえよ、そもそも釣  
り合いが取れな過ぎるから最初ハナから考えてねえってだけの話だ」

「お兄様で釣り合いが取れなければ誰が取れるっていうんですか!!  
ナギ世界を救った英雄様・スプリングフィールドとかですか!?!」

「どんだけ高音を上に見てんだお前：幾らでも居んだろ優秀で顔の良い奴が。それこそ今時分高音と楽しくお茶でもしてんだらうイケメン先輩なんかピッタリじゃねえか？」

顔良し才能良し人当たりも良し。なあに何処の主人公ヒーローですかと当時は思ったもんだ。高音と並んでりや正に美男美女：というには高音が少々幼いが、旧世界こっちじゃ中学生と高校生のカップルなんざ珍しくもない組み合わせだ。非の打ち所も無からうよ、と、この世の終わりみたいな不景気な面をした愛衣に俺は返したものだ。

「……、…お兄様は、本当にそれでいいんですか………？」

「………、…まあ、良いか悪いかで言うならあんま良くは無えよ。つつつても先走るな？喧嘩仲間とこれからあんまり絡む事も無くなるのはちよつぴり寂しいとか、そんなもんだ俺が思ってたのは。…なんかこういう話の流れだと、何言っても自信の無いヘタレ男が好きなら格好付けて諦めるのに強がっての負け惜しみ吐いてるみたいで何も言いたかねえんだが……」

「ち、違うんですか？」

「違うわ!!……まあ、寂しいよ愛衣。嫌だと思うのは一緒だ。あいつ美人だし、超の付く堅物だけど凄く良い奴だ。ほんの少しも惹かれてなかったかと問われてYESはいと答えたら嘘になるし、もう少しお前も含めて三人で仲良くやってたかっただと思う」

「で、でしたら……」

「それでも、だ。…俺やお前が首を突っ込む資格は無い。何故なら高音は結局あのイケメンとのデートに自分の意思で行くと決めて出たからだ。百歩譲ってあいつが全然欠片も望んじやいないのに何かしらあって嫌々連れられてんなら口を挟むのも吝かじや無いけどな」

そう、あの輩に高音は好意的だったと言っているいだらう。何せ少なくとも外面は完璧な野郎だったのだから。

「告白されて、お友達からとあいつは返して

奴さんはめげず嫌な顔一つせず。お茶だの何だのに誘われて情熱的に口説かれたか楽しくお喋りしたか熱い魔法談義交わしたかまあ

知らねえが、結果好印象だったからお誘いを受けたんだよ高音は。  
だったらもう他人がどうこう言う筋合い無えだろうが」

仮に、本当に仮定の話として。高音・D・グッドマンが篠村 薊に  
好意を抱いていたのだとしても。

最終的に誰を隣に立たせるかなんてのは高音あいつが決める事だから、  
と。

…まあ、認めるのは癪だが、物分かりの良い振りをして逃げて誤魔  
化していたものだ、当時の俺は。

「…それは………そうかもしれませんけれど、でもお兄様っ……!!」  
「…なんか今更だがお兄様は止・め・ろ。場合によっちゃあのイケメン  
先輩をそう呼ぶ羽目になっちまうかもしれないねえしな？」

「…つつくくく!!お兄様の馬鹿あつ!!もう知りません!!………明  
日も来ますからねお兄様あー!!」

「もう知らねえんじゃねえのかよ!？」

激昂して走り去りかけてから建物の影でピタリと停まってそつと  
振り返り、そんなことを言う仔犬系後輩に俺はそうして絶叫したの  
だった。

「どうだったよデートは?」

「……………」

それからすったもんだで一夜明け、(当たり前ながら高音は日を跨  
ぐどころか日暮れ前に帰って来た)何時もの様に朝練に励む俺の所に  
何時もの如く顔を出したは出したが、腰掛けに座り込んだきり此方へ  
顔も向けずに延々と黙り込む高音に俺はそう尋ねてやった。藪から  
棒な質問でも無かるうに、高音は俺をジロリとまあ凄い目つきで睨ん  
で来たものだ。

「…それを貴方に語る必要と義務と義理があるのかしら?」

「だったらそんな如何にも私何かありました、的な顔でブスツと黙り  
こくってんじゃねえよ。んな態度取ろうが此処まで来てんなら聞い  
て下さいつつつてるようなモンじゃねえか」

「フンツ!!……………楽しかったわよ……………」

「その面と声音の何処をどう見れば楽しいって感情が伺えるわけ？」

「五月蠅い男ね本当にいつ!!」

「危ねえっ!?!なにしゃがるいきなりてめえは!!」

「察しなさいよ!!」

「無茶言うなや!?!」

尚も暴れる高音を如何にか宥めすかし、漸く聞き出したデートの首尾は、俺が何処か心の隅っこで期待していたかもしれない、喧嘩別れに終わったただの馬が合わなかったといったものでは無く、寧ろ大成功と言つていい代物だったらしい。件のイケメンは実に歳上の余裕に満ちた紳士の振る舞いで終始高音を優しくエスコートし、途中空気を読まずに高音が繰り出した魔法議論や世界情勢の意見交換にも嫌な顔一つせず熱心に付き合ってくれたとのことだった。

「じゃあ何でお前は仏頂面なのかと小一時間ry」

「……察しなさいよ……」

「……………んん……………」

その、それなりに長い付き合いになった此れ迄でも終ぞ見た事の無かった弱々しい表情での小さな呟きに、当時の俺は流石に高音がどういったニュアンスの言葉を欲しているのかを読み取った。

高音の心境としては、要は俺が愛衣に溢した代物と似たようなものだったのだろう。三人での時間は楽しくて、きっと恋だの愛だのと高尚な感情にまで育ってはいなくとも、淡い想いがお互いにあった。でも高音は別にイケメン先輩の事は嫌いじゃ無く、寧ろ周囲のガキ共と違う大人びた物腰に惹かれるものすら感じている。嫌いになる要素なんざ無いのだから当たり前だ。

はつきりともう一度言うが、当時の俺と高音の間にあったのは恋愛感情では無かった。そのまま何事も無く時間を過ごしていけばそうなった可能性が無きにしも非ずな、友愛敬意嫉妬共感慕情その他何だかよく解らんものが混ざり合った初々しい感情<sup>オモイ</sup>とでも表わすべきか。そんな奴は止めにしろと、言つて欲しかったのでは無いかと現在<sup>いま</sup>になつて俺は思う。

高音の中ではイケメン<sup>先輩</sup>よりも俺が良い、とかはつきり決まっていた

訳では無くて、でも告白に対して返事を決めねばならなくなったその段階で、俺から何も無いのが嫌だったのではないかと、そう思うのだ。そう俺が言えれば高音はイケメン先輩と付き合うのを止めにして俺と関係を深めるとか、そういうんじゃないや無くて。

ただ気に入らない、ムカつくと、俺が嫉妬していると。表してほしかったのではないだろうか。

何度も言うがそうしていたらどうなったと、そういう具体的な話じゃあ無い。女心は秋の空、だ。理屈じゃ無いんだろう、青春こういうもんは。

だから、この時俺がまあ当時の年齢に相応しく、則ちガキらしく。格好悪く高音に内心を曝け出せていれば今日のこんにち様に拗れまくってはいなかったのだろうけれど。

生憎当時の俺は、というか現在いまでもだが、捻くれて卑屈で自分に自信の無い劣等感に縛られた小さい男だった。

「……………お似合いだと思っぜ、俺は……………」

ましてや今し方表した高音の心境予測は大分後になつて頭が冷えてから、心身共に多少真面に成長出来たからこそ纏められた代物であり、相手の望む言葉がどうか察せられたとして嫉妬だの独占欲だの見栄だのと後ろ向きな感情を主として内心がぐつちやぐちやだった当時の俺が素直な言葉なんぞ吐ける筈も無く、そんなあらゆる意味でどうしようもない一言しか告げる事は出来なかった。

「……………そう……………」

と、高音は顔を一瞬歪めてから何かを諦めた様に眼を閉じ、ポツリとそれだけ洩らして立ち上がった。

「……………当分…顔は出せないとっわ……………」

「……………そか……………」

それだけポツリと告げて去って行く高音にそんな間抜けな返事をして、俺は一人その場に残された。

「……………何を言えるってんだよ……………こんな俺がよ……………!」

俺は今でも自分が高音に相応しいとは全く思わない。

ただ、当時の俺はやり方を間違えたのだ。

前にも言ったが件のイケメンは完璧だった。見て聞いて、実際に高音と居た時に少しばかり話をして。女々しい俺はなにやってんだと自己嫌悪しながらこっさり周りに評判聞いたり独自に調査したりしても答えは変わらなかった。

だからそれは他人が聞いたら気になる女を盗られそうになってるへたれ男の言い掛かりにしか思えなかっただろう。実際に当時の俺自身でさえ嫉妬と僻み根性から来る思い込みだと九割九分確信していた。

偶々人気の無い場所で念話テレバテイヤしていた時の表情に何とも言えない嫌なモノを感じたなんて、俺のモノの見方が歪んでたと判断するのが順当だろう。なにせ俺はスタートラインにすら立てていなかったとはいえ、野郎は恋敵の様なものだったのだから。だからこそ。

なんの証拠も根拠も正当性も見出せないまま、自分の器の小ささにとほとと愛想を尽かしながらも。そんな信用出来ない感覚に従って行動を起こした当時の俺を褒めてやりたい。

やり方を致命的に間違えて、意中の女に愛想尽かされ後輩には盛大に迷惑掛けて。周りからの評判地に落としながらも、当時の俺は好きな女を糞野郎から守護まもれたのだから。

最も、それで結局高音を傷付けてしまったのだから全く誇れた話じゃあ無いのだけれど。

複雑に軌道を変え、絡まり合う様に互いが互いの位置を入れ替えながら五つの光弾が宙を疾走はしり抜け、半獣半人の少年の身体目掛けて突き進む。

「…っ、チイツ!!」

闘技場の床を踏み締め、光弾を放った青年へと飛び掛らんとしてい

た少年は舌打ちと共に跳躍の向きを力技で強引に斜め右方に変更。無理な働かせ方をした筋肉の軋みを感じながらも動きそのものに遅滞は無く、気の爆発により瞬間移動の如き加速を果たした少年の身体は青年の左斜め後方、死角となる位置に一瞬で移動する。

直後、空気の動きかまたはまた気配を感じたか。少年が己の後方に現れた事を察知した青年が振り向かんと身体を旋回するが、その時には既に少年は青年の至近へと手刀を後方へ引き絞りつつ飛び込んでいく。普通に考えれば、青年は防衛迎撃回避の何れも間に合わずに、少年の渾身の一撃を喰らって重傷を負う事になるだろう。

「オラアツツ……!?!」

しかし、少年が青年の土手っ腹目掛けて突き出した手刀の進路上に突如一抱えもある光弾が出現する。反射的に引き戻さんとするも間に合う筈は無く、鉤爪の生え揃った少年の手刀は光弾へと突き込まれて。

収束コンウエルゲンテイアによって七矢分が圧縮されて形成されていた光弾、魔法の射手・連弾サギタ マギカ セリエス ルーキス 光の七矢が炸裂。突き込まれた手刀の方向へ指向性を持って弾ける様に調整された衝撃波が逆に指の数本をへし折りつつ少年の腕を弾き返す。

「ぐっ……っ!?!」

「ほい」

一瞬遅れて指先から上がって来た激痛に少年が顔を歪ませながらも、体勢を整えるため後方へ跳躍せんと足に力を込めた直後。青年の軽い掛け声と共に魔法の射手・変型、高速・雷の一矢が青年の指先から視認不可能な超速度で射出。少年の左太腿に突き刺さったそれは紫電の奔流と化して少年の脚の肉と神経を舐め尽くし、少年の左脚から本人の意思に関わりなく一瞬力を奪い取る。

左からへたり込む様に床へと頽れる少年の鳩尾へと即座に放たれた光の三矢セリエス ルーキスが少年の肺から空気を無理矢理絞り出すと共に身体から自由を奪い。

二度の攻撃で産み出した時間により万全の体勢で、ゴルフクラブのフルスイングが如く上から振り抜かれた青年の長杖スタツブが少年の身体を

痛打、打撃と同時に込められていた収束・光の七矢が追撃の衝撃波として弾け、少年の身体をボールか何かの様に猛烈な勢いで吹き飛ばした。

闘技場の場外に張り巡らされた水堀に屹立する石灯籠の一つに激突してそれを半壊させながら漸く停止した少年は、口端から鮮血を溢しつつ瘡の様に戦慄きいうことを聞かない身体に無理矢理喝を入れて半ば倒れ込むように水面へと跳躍。

直後、さらなる追撃として青年から放たれた魔法の射手・アエールカブトウラエの風矢が壊れた石灯籠に着弾し、光の帯が半ば瓦礫と化した灯籠を締め上げ、数多の石塊を水面へと零れ落とした。

「…やれやれ、どんだけタフなんだよこれだから獣人種は嫌いなんだ。ハーフでこれとか本気にやっつてられんわ…：…：…つーかあの壊れた石灯籠、俺が弁償するんじゃないやねえよな？」

次はどっから来んのかねえ？と、怠そうに呟く青年――篠村 薊は、態度とは裏腹に長杖を油断無く自然体に構えながら少年――犬上 小太郎の飛び込んだ波紋の立つ水面に目を向け、奇襲に備える体勢にあった。

『…、これで何度目の激突でしょうか!?何処ぞの抜剣○醒かサ○ヤ人の如く髪伸ばして色変えてなんか第二形態に変身した犬上選手が試合開始当初に輪を掛けての凄まじい動きで猛然と篠村選手を攻め立てますが！篠村選手が矢継ぎ早に繰り出す光る玉やら電撃？やら光る帯やらで悉く潰され、反撃で痛打を貰い弾き飛ばされております!!相変わらず原理はさっぱり不明ですが、見た目に反し実に格上というか強キヤラムーブだ篠村選手う〜!!』

『単純に身体能力では犬上選手が圧倒しているのですよが手数が違い過ぎますね。小太郎選手が攻撃なり回避なりで一手を打つ時間で篠村選手は優に迎撃、反撃、追撃の三手を繰り出しています。変身した所為か素なのか犬上選手は相当にタフなようですが、勝っている点で何とか有効打を入れなければこのまま完封負けも有り得るでしょう』



「オイオイオイオイ!? 此処まで出来る奴だったのかよ篠村って野郎はあ!! 杖術部に殆ど席だけ置いてる幽霊野郎って聞いてたぜ俺は!?!」

「最近顔は出さねえが麻帆良マホウに来た当初は熱心に顔出してたよ! 今でも部内No. 3程度には腕が立つって話だぜ!! それより凄えのはあの訳分かんねえ弾幕だろありやどんな仕組みだ!?!」

「気弾とは違うようだがなあ、幻〇郷の出身じゃね?」

「…部長、あれは……」

「子供先生やエヴァンジェリンさんの試合でも散発的に使われてはいたがこうなつては間違いないな……我らが図書館探検部の秘術、矢張り本家本元の使い手が世には存在していたという事だ……!!」

「発生から着弾までが早過ぎて判別難しいけれど見たところ光、雷と……風かな? 物理打撃、感電によるスタン、捕縛効果と多才ねあの三白眼」  
「練度が違い過ぎて参考になんねえんじゃねえかこれ? …にしても強えな。大会終わったらお手合わせお願いしたいもんだ」

「……攻撃される箇所の軌道に収束なんて一手間かけた玉用意して弾いたと同時に足を止める為の特殊弾と削り狙いの普通の弾ほぼ同時にぶち込んで、更に一瞬で繰り出せる域で最高威力の一発武器による打撃に合わせて叩き込むとか……曲がりなりに俺様マホー使い始めました状態だからあれがどんだけ無駄に高度つつうかド器用な真似なのかなんとなく解んだけど、なにあいついつもあんな面倒臭い曲芸かましながら戦ってんの?」

「……いつが何か他人より理解していますって類の発言するとこんなにも違和感湧いてくるものなんだなあ……」

「気持はよく解るが辻、ツッコミ所はそこではあるまい」

観客の中でも主に武道家達バウダが新たな強敵トモを見つけたと驚きながらも沸き立ち、何処ぞのダンジョン走破パーティーが魔法使いの存在を確信してしまったりしている中、選手席の中村はリフティングとお手玉と円周率の計算を同時に熟す様な篠村の器用振りに感心を通り越して引いていた。

「…そこまでむつかしいアルか、あれ？」

「一つ一つはそれ程高度な代物で無くとも、右手で殴り付けるのと同じ時間で術を三つ唱えて得物で殴り返すまでを一緒にやっていると考えろ古。凄まじい並列作業だ」

「1ターンのイ○ナズン一発撃てるのとベ○ラマとバ○マとメラ○を三発同時に撃てるのはどちらが凄いですかと聞かれりやどちらも凄いとしか答えようがねえけど俺個人としては後の方がより凄えと思うわ、凄さの質が違いけど」

「ふむ…：篠村殿はこれだけ出来て何故自分を凡人等と？」

「あれは才能なんて持って産まれたもののおかげで無く、単純に努力の賜物だから、かしら」

楓の疑問に高音が呆れた様に首を緩く左右に振りながら答える。

「篠村は魔力の量、質共に魔法使いの並程度。魔法の適正に於いても際立って優れたものは何も無く、寧ろ精霊との接触が苦手という欠点付き。才能という観点から見れば紛う事無き劣等生よ。あれがあまで出来るのは他に何も出来ないというだけなの。…どれだけ一芸に秀でてでも出来ない事の方が圧倒的に多過ぎるから、あれは劣等感を何時まで経つても払拭出来ないでいるのよ」

「お兄様の魔法の射手は元々の汎用性に加えてお兄様独自の強化術式、変型との組み合わせによって戦闘に用途を限れば万能魔法と言っても言い過ぎじゃ無い位に多様性があります。魔法の射手一つで麻帆良の警備任務を全うしているお兄様の実力は…：少なくとも見積もっても魔法教師の先生方と互角以上だと私は思ってます。とんでもなく凄いことなのに…：お兄様は…：」

「うん、取り敢えず佐倉さんは兎も角高音さんにも何だかんだで愛されてるのは解った」

「…：辻先輩こんな感じだっけ？」

「せっちゃんとうまい具合に収まったから、喜びとようさんあったストレスからの開放感でハイになっとるんちゃうん？要所でヘタレるよりウチ今ぐらい砕けとった方がええ思うわ」

「…：まあ先程も言ったけれど、色々やらかした後だから今更躍起に

なつて否定はしないけれど……私とあれの間にあるのは恋愛感情云々といった甘いものではないわよ?」

「…正直に言わせていただきますと、発言に説得力がありませんが……」

「でしようね、そういつた想いも全く無いと言つたら嘘になるから。……過去の柵を水に流したいだけなのよ、もう。悪いのはどちらかというとあれだけれど、今の今まで拒絶してきたのは私だから、喧嘩両成敗…にしたいのだけれどね。あれも私も譲れない一線が有つて、お互い譲る気は無いから、そうね。其処のお馬鹿さん達に倣つてみようとしているのよ」

「馬鹿だつてよ大豪院。もう少し日頃の言動改めろよなお前はもう」

「自らの普段の行いを鑑みてからもう一度言つてみると言いたい所だが、そもそも貴様に振り返る記憶が残っているだけの脳細胞も己の客観視という高度な真似をするだけの知能もあるはずが無かつたな。すまん、貴様の様な可哀想な頭をした生き物に酷な事を言つてしまつた」

「喧嘩売つとんのかワレエ!!」

「一言一句違い無く此方の台詞だ単細胞生物!!」

「…まあ色んな意味で同レベルな旦那方は放つておくとして、コタローの奴には最初から勝機は無かつたつて事かい、姉さん達?」

「喧嘩からの殺し合いをしているバカレンジャーを華麗にスルーして、小太郎の劣勢に気を揉むネギに代わつて肩のカモが高音と愛衣に問い掛ける。

「まさか。あれは一芸特化した結果何故か魔法の特性で多芸になつているだけで、魔法使いとしては酷く歪な能力よ。付け入る隙は幾らでもあるわ」

「…まあ全てはあの弾幕を越えられれば、という前提での隙ですからお姉様の言い分はある意味答えになつていないのですけれど。お兄様は本当に魔法の射手以外何も手札が無いですから、逆に言えばそれさえどうにか出来ればお兄様は後が無いんです」

「まあそれが出来れば苦労はせん、という話だがな。手前味噌になるが、俺並の頑強性と機動力を持つか、高音の様な防御力が無ければ蜂の巣にされるか塩漬けに固められて御陀仏だろう」

愛衣の言葉を混ぜ返したのは観客席横の出入口から現れた杜崎だった。医者の見立てでは肋に罅が入っていた筈だが平然とネギ達へ歩み寄る姿はとてついで先程試合を終えた様子には見えない。

「あんれゴリラの化身でんてー、奥さん帰っちゃった？真逆のケモミミ属性とはいくら体の構造が九割くれえ獣そのものだからといって業が深いとこの中村戦慄しほべえっ!？」

『中村さーん!?!』

「前置きが長いわ阿呆」

「天井でござるなあ」

「このやり取りもいい加減飽きましたね」

「ゆ、ゆえ、楓さんも、もうちよつと心配してあげようよ〜」

早速裏拳で撃墜された中村が横一直線に後方の席へ頭から突き刺さるのを（さよとのどか以外が）綺麗にスルーして杜崎を出迎える。

「随分と掛かりましたが何方へ、杜崎先生？」

「企業秘密…という言い訳は今の貴様等には通じんが組織の事情だ、察せ。何のためにスライム娘共を態々医務室から秘密裏に呼び付けたと思ってる」

「…であれば聞きますまい、が。<sup>チャオ</sup>超の事で何か解ったのであればどうか一報を、俺も其方の古<sup>ク</sup>菲<sup>フェイ</sup>も、奴とは浅からぬ縁があります故」

「…故にこそ話せん場合もあるのだがな。確約は出来んが覚えておこう」

「試合やってんだから関係無い話は程々にしとケヨ、試合はこれ如何なっんだ？」

「マア見た通りコタロー君が手も足も出なくて膠着状態、でしゅうけどネー」

「緊縛プレイからの放置…」

『そういえば、動かなくなつて随分経ちますねー、何かお話ししてるみたいですけど…』

「小太郎さあ、そろそろ思い知ったか？お前は俺のこれを近接戦闘と認めねえかもしれねえけど、お前は前衛とくいの間合いで俺に手も足も出ねえのよ。悪いこた言わねえから降伏しろって、人生諦めが肝心だぜー？」

「……………」

水堀から何とか這い上がり、篠村に向かって構えを取る小太郎は、ユルク苛つかせる調子で告げられる忠告を装った挑発を耳に入れないがらも黙殺した。冷静さを失い無謀な特攻をかませば最後、今度こそ如何あつても逃れられない様に拘束された上で屈辱の10カウント負けを味わう羽目になる事を察しているのと。

告げられている言葉自体が紛れもない事実そのものである為、反論の言葉を持ち得なかった故に。

「シヨックかよ？シヨックだろうなあ。お前は俺を格上とは見做していたかもしれないけど単なる肉弾戦では自分が上だと思ってたろ。まあ種も仕掛けも無い単なる殴りっこならその通りだよ、ハーフといえ獣人：いやこつちだと妖魔百鬼か？の血が流れてるほぼ純前衛の小太郎君に対してこちとら半端に棒術齧っただけの才能無しだ。十秒もしねえ内に決着付くだろうな」

だーが、と、篠村は不意に構えを解き、半身に構えていた長杖スタツフを体前でクルクルと指先で回して遊び始める。一見して隙だらけだが、小太郎は誘いに乗らない。

篠村 薊にとつては武器を構えていないどころか、例え両手を縛られていたとしても戦闘力にさしたる違いは無いと、もう理解わかっていたから。

篠村は攻め気を見せない小太郎の様子に一つ息を吐き、中断していた言葉を続ける。

「だがまあ俺の唯一の得意芸含めりやお前さんは遠中近距離全てで俺に敵わない。俺がいくら凡俗の一山幾らでも十年近く掛けて磨いた一芸だ、年季が違うんだよ小太郎君。まあ氣い落とすなお前さんなら普通に頑張っても五年掛からずに俺なんぞは……」  
「兄ちゃん」

軽薄な笑みを浮かべながら軽い調子で回される篠村のお喋りに喰ペラ回しい気味で小太郎は呼び掛けを被せる。

「…何や?」

「兄ちゃんが強いのはよう解ったし俺が舐めとったのもその通りや、謝るわ」

「いやいや謝罪とか別にいいよ一銭ならぬ一ドラクマにもならねえし。代わりに実力差を認めてくれたなら降参してくれっと有難い、俺雑魚キャラだから今後の展開考えると「それや」…うん?」

またしても途中で言葉を遮られ、思わず篠村は小太郎の顔をまじまじと見遣る。小太郎ははつきりとした怒りの表情を浮かべていた。

「兄ちゃんは強いわ。今迄の攻防で俺はほぼ完封されとるけど、まだ全然本気出しとらんものやろ? だったら冗談抜きに中村や豪徳寺の兄ちゃん達並の実力や。つまりこのトンデモ都市の中でもそう勝てる奴はおらんつちゆうことやろが。…そこまで強いのに、何で兄ちゃんはそのないに自分を下に見るねん。謙遜とかや無くて本気で言うとするやろ、自分が凡才やら雑魚やらで。巫山戯んなや」

小太郎は牙も露わな文字通り噛み付かんばかりの表情で吼える様に言葉を叩き付ける。

「あんたが雑魚ならその雑魚に完封喰らつとる俺はなんやねん! 屑か塵以下やとでも言いたいんか!! どんだけ自信が無いんか知らんけどな、そんだけ出来とる癖に自分は弱いからなんて言い訳になると思っちなや! それだけの力あるんなら…何処へだつて行けるし、誰にでも付いて行けるやろが!! …俺はなあ…!!」

泣き出しそうにも見える歪んだ憤怒の形相を浮かべた小太郎は、激情に歪んだ声で叫んだ。

「あんたみたいに強うなかつたから大切な人も護れんで、あんたみたいに強うないから今も! 何処にもいけんものや!! …まだ全部間に合う癖に、情けない事ばつかほざいてへタれとんやないわ、この上無く苛つくんやボケエツツ!!」

「……今のつて……………」

「京都の中々いいオツパイした眼鏡の姉ちゃんのことたる。そういや最近普通ふつくにつるんでで気にもしてなかったけどコタの奴元々敵だったわなあ」

「家族同然の姉はあの訳解らん魔法使い？の白黒コンビがいた謎の組織に拾われたらしくて行方不明、だからなあ。小太郎は罪を償う他にお姉さん見付ける為にも麻帆良まほらで頑張ってるんだよなあ……………」

「…態度に出さんから気を遣って格別何か言っちゃった記憶は無い、な…………未だ求める人の手掛かりは無く、何時終わるやも解らない異郷の地での贖罪か。学園長の一人娘を拐かしたのだ、改心して味方になった等と言われても信用される筈は無いし、中には完全に敵に接するような態度を取る頭の固い輩も居ただろう。些か以上に参つていたのだな、小太郎は」

「……小太郎君……………」

小太郎の内情を充分に汲んで配慮してやれなかったと一行が後悔を滲ませる中、ネギは小太郎に強く共感していた。

大切な人己の父親が居ないのも、探し求めているのも全く以って同じ境遇だからだ。或いはかつての敵同士であり性格的にもウマが合うとは言い難い二人が、バカレンジャーや3-A一行よりも何処か気の置けない何かを互いに感じていたのは、そういった点で似ていたからかもしれない。

「…あいつはあいつで、背負うもの、か…………成る程、それを念頭に篠村の旦那と自分を重ねちまえばそりゃ苛つくわなあ。言っちゃ何だか旦那のそれは心の持ち様一つでどうにでも…」

「いいえ」

得心がいったと篠村の理由を小太郎のそれと比較して暗に軽いものとするカモの言葉を、他ならぬ高音ははつきりと否定した。

「あれはあれなりに苦しんで、どうにもならないと断腸の想いで妥協してあなのよ、カモさん。…私はある意味、酷な事を篠村に望んでいるから」

「…お姉様……………」

「…あ、あのー、どういう意味、なんでしようか、それはー……？」  
これまでに比べて沈んだ表情でそう語る高音に、恐る恐るといった様子ながらのどかが問い掛ける。

「……、…篠村は確かに強い、強くなったわ。常人ならばとうに諦めて投げ出している様な酷い環境で、生まれ持ったハンデにもめげずに、本当に出来る事をやり尽くした。意味の無い仮定だけれど、あれと同じ立場で人生を始めて、あれと同じ時間であれより強くなれる奴なんて一人も居ないわ。それ位、本当に血を吐く様な努力を重ねてあれは此処まで来たのよ」

「……どういう……」

「なくる。何となく見えたわ話のオチが」

流れの見えない話に刹那が先を促しかけようとしたその時、中村がそう声を上げる。

『え？解ったんですか、中村さん？』

「んーまあねー。おめえ等は、え、解んないの？普段この天才中村様を散々馬鹿にしといて皆俺よりも察し悪いとか無いわ〜」

「確証がないから口にしてないだけだよ黙れ鳥頭」

「慎みは日本人の美德だろうああそもそも人で無かったな畜生」

「いやいやいや私等普通に解んないから！戦闘民族だけで納得しないで教えてよちよつと」

中村に解って自分に解らないという状況に忸怩たるものを感じながらも相変わらず結論の見えない会話に明日菜は待ったをかける。

「……俺個人としては好きでは無いが、事実として認めねばならん現実の話だ」

埒があかないと嘆息して口を開いた杜崎だが、その顔は何とも言えない苦さが滲み出た渋面であった。

「人は産まれながらに平等では無い。篠村は初めから答えを言っているぞお前達…奴にはもう、成長の余地が殆ど残っていないのだ」

あくまで戦闘面に限った話ではあるがな、と杜崎は一層顰めた顔で付け加えた。



「…小太郎君よ、お前の言い分は解ったさ。同情なんざ真つ平ご免だろうからそつちの事情には触れねえけど、まあお前さんも大変だわな。…正直言えば勝手に自分重ねて知ったような口挟むな俺はお前じゃねえしその逆も然りだよ、と書いてえがまあ、気持ち解るわ」  
「…ええわい氣い使わんで。兄ちゃんの言う通り、勝手に投影して八つ当たりしとるだけや。俺の問題は、今関係無いわ」

「別にいいんだぜお前はまだ周囲に当たり散らして泣いて喚くのが許される歳だよ。…まあいいや、話を戻そう」

篠村は弄んでいた杖を掴み直して石突きを床に突き、軽く寄りかかる様に身体を傾げて語り始めた。

「まあ情けねえ言い分なのは否定しねえよ、女の誘い断る文句としちやあ最低クラスだわな。自分は駄目だ、才能無いんだ。君みたいな立派な人にはとても吊り合わない、もつと良い人を見つけてくれ。……うん、情けねえわ…でもな？」

「そんな自信が無いだけのヘタレとは一緒にしてくれんなや」

その語調は強いものでは無かったが、反論を許さない鋭さを滲ませていた。

「小太郎、俺が才能無いっていうのはさ、卑屈な泣き事ではあるかもしれねえけど事実でもあるんだよ。何も試さずに根拠も無く言ってるんじやねえんだ。俺は、魔法がこれ以外使えない。少なくとも習得は不可能に近い。かといって一芸は既に思い付く限りを改造して改良し尽くした。本職としてこれ以上の成長は殆ど見込めない。体術は？俺は身体能力に格別優れた点はない、センスが良い訳でも無い。鍛えちやいるが前衛としちやあ及第点以下。今から磨いていけば？ 燻し銀なトレンチコートが似合う歳まで頑張れば一流の端っこ位には引つ掛かるかもな。……それで？」

言ってみてくれよ小太郎、と。乾いた温度の無い声音で篠村は問い掛ける。

「俺はこれ以上どう成長する余地が残ってんだ？そりゃあ壊滅的に頭が悪い訳でも身体に致命的な障害抱えてる訳でもねえ、これから先の人生何やっても駄目だなんて言わねえよ。でも高音はこれから

世界平和目指して闘うんだぜ？俺みたいなのに役に立つ余地が何処にあるってんだオイ？」

堪え切れない遣る瀬無さを苛立ちとして、強く石突きで床を叩き、篠村は嗤う。

「別に戦闘能力は全てじゃねえさ。争つてばかりの道じゃねえだろうよ、高音の目指すそれは。だが確実にあいつの前には困難が立ち塞がる、その時平和主義なので喧嘩はやめましようなんて聖人君子よろしく話し合いで解決出来るか？金も地位も権力も何もかもが必要な立場だぜ、正義の味方の相方つてのは。戦闘能力なんてのは高いに越したことはないというか出来るだけ上を見込むもんだろ。……俺が全く相応しくない訳じゃない、ただもつと良いのは幾らでも居るんだよ」

ふつと、強張った表情を緩めて泣き笑いのような顔になった篠村は、小太郎へ幾分柔らかい口調で告げる。

「諦めなければ夢は叶うなんてのは夢物語だ。努力が実り続けるのは、実るだけの土壌を持つてる奴だけなんだよ。俺はもう、強くなれない。俺じゃあいつ<sup>高</sup>音<sup>音</sup>についてけねえんだ。無理について行って邪魔になる位なら、俺はあいつから離れるよ……なあ小太郎」

まだお前俺にヘタレンとか偉そうにいえんのか？

「つつ……!!」

小太郎に、言葉は返せない。

彼自身、辛酸を舐めた経験が無いではない。千草<sup>姉</sup>に拾われるまでの境遇は悲惨の一言に尽き、家族の温もりを知ったからこそ研鑽を惜しまず、冷たく理不尽な現実<sup>音</sup>に抗い続けて来た。

だが小太郎は、まるで疲れ果てた老人の様な、深い諦念と枯れ果てた嚇怒の緋い交ぜになった、昏い地の底の様な冷たく乾いた瞳に成り果てる程の絶望を、まだ知らない。

「…悪いな、これこそ八つ当たりだ。お前等があんまり、眩しいもんだから…悔しくてよ。…なあ小太郎、さつきも言ったがお前は普通に頑

張っても五年、目一杯頑張れば三年も掛からずに今の俺を追い越せるよ。俺の実力は精々上の下、ゲーム序盤の味方キャラみたいな早熟型だ。ラスボスに挑める様な晩成型じゃないから成長早く上げ尽くせて、現在いま一瞬、お前等天才達を追い越せてるだけに過ぎないんだよ。俺なんぞを見て焦んな、頑張つてばかりでなくて、遊んで騒いで楽しんでゆっくり成長していけばいい。馬鹿共やネギ先生達に学園の魔法使い達は、お前をきつと助けてくれるよ」

だからこんな馬鹿げた大会で無理すんな、と、下ろしていた長杖スタッフを構え直しつつ篠村は笑う。

「ま、最後に台無しなこと言うけど、そんな訳でお前と違って俺負けらんねえから負けてくれ、小太郎君」

試合再開ー、と、軽い掛け声と共に篠村は高速の光弾を小太郎目掛けて射出した。

「……実際のところどうなのよ？アザミン本気マジで成長の余地無えのゴリポン？」

「杜崎先生だIQ猿以下。…少なくとも今後急激に伸びる何かしらは現時点で見出せん。大体奴は無理をし過ぎだ。幾ら凶抜けた才を持たずとも、一人の人生一生分の伸び代が十年そこらの努力で埋まってるか。俺は麻帆良こちらに来てからの奴しか知らんが、まあ貴様等の事をどうこう言えん域で寝る間どころか息をする間も惜しむ勢いで修行漬けの日々だったわ。奴の実力は世界を見据えても恥ずかしい水準レベルではなんら無い…と、俺は思っているが……」

当人が納得しない以上忠告を越える干渉は出来ん、と、不機嫌そうに鼻を一つ鳴らして杜崎は中村に答えた。

「…完璧主義者、なんてお姉様の事を笑えないんです、お兄様は。二人共、理想が高過ぎて……」

「私の荒唐無稽な域レベルで無茶な目標を鑑みれば必要な目標設定よ。…私は現在の篠村を今のままで認めているわ。既にこれ以上無い程無理をしているのに、更に頑張れだなんて言える訳が無いじゃない。……それは、言葉にしてはいないけれど…伝わっていると思っていたの

よ」

「……高音さん、言い難いけれど男からすれば最もされたくない妥協というか、言われたくない言葉なんだ、それは……」

「今の自分では足りていない、されど足すのは不可能に近い。しかも自らは及ばずとして身を引くか。好ましい考え方では無いが、努力を尽くした上での結論ならば軽々しく否定の言葉など吐けんな」

「つつーかもう夢だの実力だのそこら辺どうでもいいからとりあえず結婚しろやお前等!!なんでそこまで想い合つて唯の仕事上の相棒なのよ!？」

ムン〇の叫びの如く両頬を抑えて全身をクネクネと蠢かせながら中村が唐突に絶叫する。高音は気味悪そうに謎のワーム中村へ一瞥をくれないながら面倒そうに返した。

「私はあれに恋愛感情は抱いていないのよ」

「嘘だーっそんなになつて欠片も意識してねえとか絶対嘘だあ!!そうまでして認めねえとか何があつたし本気で!？」

「答える義理も義務も無いわね」

素気無く切り捨て、高音は闘技場へと視線を戻す。

「……何も、言ってくれなかったものね、あの時。……もう終わった話と、いうことよ……」

『連射連射連射あぁあっ!!篠村選手の弾幕が犬上選手を追い詰める!っっていうか床が!?また穴だらけに!!』

『建築部がハッスルしてるからなんとでもなるって。…私の予想では篠村選手はもつと数多くの光弾を一度に放つ事が可能と思われませんが、現状篠村選手は単発若しくは精々数発単位でしか光弾を撃っていません。多発するのに何らかのデメリットがあるかと思われませんが、撃てない訳でもないでしょう。一見攻めているのは篠村選手ですが、その実犬上選手のアクション待ちと思われれますね』

…そうやな……明らか誘われとるわ、これは………!」

牽制気味に飛んで来た三つの光弾を両手で打ち落とした直後に鳩尾へ飛んで来た高速・雷の一矢を反応しきれず、臍へ響く

重い痺れを感じながら小太郎は内心で吐き棄てた。

篠村が果敢に攻めに出ないのは無論、魔力の節約の為である。小太郎との試合を前哨戦以下の邪魔なハードル程度にしか意識していないその姿勢に、小太郎は怒りと共にそんな扱いをされてしまう己の弱さに忸怩たるものが込み上げるが、頭を一つ振って余計な思考を消却する。

……今考えてもどうしようも無いことは考えんな……やる事あ  
変わらん、目にも物見せたるだけや……勝つのを、諦めんな!!……  
このままでは終われない。

そう、小太郎は強く思った。

他人の事情を深く知りもせず首を突っ込み、気圧されて今のザマだ。情け無く、不甲斐ない。元より自分が大人と対等に何か出来る等  
と思いついてたつもりも無いが、矢張り自分はまだガキなのだと  
痛感する。

無遠慮に傷を引つ搔いた篠村には申し訳なくも思うし、理由<sup>わけ</sup>を聞いた今、闘う事自体に引け目を感じてもいる。

……だけど……同じや!!俺が望んどらんように、兄ちゃんだって同情  
したり憐れまれたりしてもらいたい訳や無いわ!!……

だからまだ負けてはやれない。そもそも理由の有る無しは勝敗に  
関係無いのだから。腕試しと、修行と、八つ当たり。褒められた動機  
でないのは初めから百も承知の上で、<sup>本選</sup>此処まで勝ち上がって来たの  
だ。

……兄ちゃんは同情票で勝ち譲られんなら本気でそれでもええんや  
ろ。せやけど俺は、それは嫌や!!……上手く言葉に出来んけど、何もせ  
んまま終わってたまるか……!!

篠村に何かを示したい故にか、己の価値<sup>強さ</sup>を示すか。或いはただ、  
<sup>プライド</sup>誇りの為か。

何も解らない小太郎だが、一つだけ理解している事がある。

「このままただ負けたら……誰もなんも……変わらんやろがあああつ  
!!」

小太郎は吼え、脚を狙って高速で突き進んで来た光弾を飛び越える

様にして躲し様、己の影に潜んでいた相方達犬神に指示を出す。

噴水の如く影から溢れ出した漆黒の猟犬達が弾丸の様な速度で四方八方から篠村へと襲い掛かる、犬神を飛び道具とした疾空黒狼牙。「詠唱も無しでこれとか東洋の術やら魔物やらはズリいよ…なあ!!」

突然の反撃にも篠村は焦らず半眼でボヤきながら、小太郎が反撃姿勢に移り出してから現在までの数秒で無詠唱のまま組み上げた魔法の射手を撃ち放つ。

「魔法の射手・貫通光の17矢!」

篠村の力在る言葉により出現れたのは槍の様な十七の光弾。長杖スタツツの一振りで弾けた様に周囲へ撃ち出されたそれらは、悉くが犬神の頭部を正確に射抜き泥土の様な黒塊へと変貌かえる。

「危っねえな…っ!?!」

「まだやああああっ!!」

凄まじい精密射撃を見せた次の瞬間には新たな光弾を手元に生み出していた篠村だが、小太郎はそれよりも早く。犬神の群れを差し向けた直後から追撃に入っていた。

『い、犬上選手が分裂したあああっ!! 一齐に篠村選手へ襲い掛かるうっ!!』

『予選でも用いていた分身ですね。謎の犬の群れに続き、弾幕かには頭数かずで対抗という事でしょう』

小太郎が影分身によって増やした数は七人、現在の小太郎が生み出せる限界数だ。楓がそうであった様に、影分身は数を増やせば増やす程一体一体の能力は本体よりも劣化していく。ましてや小太郎は忍術の腕前自体は我流のまだ未熟なものであり、仮に分身の攻撃が届いたとしても前衛としての鍛錬もある程度積んでいる篠村に決定的なダメージは与え難い。

…それでも兄ちゃん腕前なら足止めにはなるわ! 先ずくつつかな話にならん…!!

しかし小太郎は影分身による手数と的が増えるというアドバンテージを至近距離まで近付く為だけに捨てた。小太郎が己の能力を完全に複製できるのは二体が限度。例え単純に己が三人に増えたと

して、その程度の頭数による波状攻撃では篠村の連射を前に纏めて撃ち落とされるだけだと判断し、少しでも篠村の動きを止める事のみに分身を使用<sup>つか</sup>う事としたのである。

劣化したとはいえ元となる小太郎は狗族のハーフにして獣化で身体能力が軒並み跳ね上っている。前後左右に加え空中から時間差で分身達が篠村の身体に殺到し――

「くっ!? これはやっべえ……なんて言うんでも? コタくんよお」

――その爪と牙が届く寸前、篠村の周囲に無数の光弾が出現<sup>あらわ</sup>れ、ゆるりと宙に漂い。

「<sup>エーミツタム</sup>解放、<sup>ケレリタールスヴェルテクスルー</sup>高速大渦光の37矢<sup>キ</sup>」

それぞれが篠村という惑星を中心として廻る衛生の如く、一矢一矢が微妙に違う軌道で高速旋回。残像により刹那、篠村を囲む光の檻が形成された。

影分身の全てが高速でぶち当たった光弾によって打ち消され、本体の小太郎も側頭部、脇腹、肩、脚に炸裂した衝撃波で一瞬息が詰まる程のダメージを喰らう。

グラリ、と小太郎の身体が傾ぎ、倒れ掛け。

「……る、アアアアアアアアアアッ!!」

叩き付ける様に踏み出した足で床を掴み、堪えてそのまま篠村へと踏み込んだ。

役目を終えて光の檻は消滅し、得物の長杖<sup>スタツプ</sup>は既に至近の距離にいる小太郎へ振るえる位置に無い。仮に無詠唱の魔法<sup>サギタ</sup>の射手<sup>マギカ</sup>で迎撃されたとして、最大七矢程度では捨身で飛び込んできた小太郎の勢いを殺せない。純粹な前衛でなく身に纏う障壁も並の魔法使い以上のものではない篠村の耐久力では、小太郎の膂力で一撃喰らえば重傷を負い、形成逆転となる可能性は高い。

だから篠村は次の札を淡々と切った。

「<sup>エーミツタムサギタ</sup>解放魔法の射手<sup>マギカ</sup>貫通<sup>マギカ</sup>高速雷の29矢<sup>マギカ</sup>」

それは正しく雷の如く。

小太郎の目に瞬く様な光がチラと見えたその時には、小太郎の全身を電撃の槍が貫いていた。通常の雷の矢と違い、貫通化という強化付

与の為されたそれは身体の芯まで到達し、エネルギーを解放する。

「っ……ッ……ッ……!!」

声にならない呻きが小太郎の口端から洩れる。全身の神経が灼け、思考が定まらない。

完璧にカウンターで決められた、決着きめの一撃だった。

「二発一発の威力に欠け、主たる火力になんざなり得ねえから初級魔法サギタマギカだ、ゴリ押しでの突破なんざ今迄腐る程やられて来た。対抗策も保険も、用意して無え訳ねえだろ？」

数歩分後ろに退いて距離を取り、長杖スタツフを後ろに引き絞りながら篠村は静かに告げる。

「お前は直ぐに俺より強くなる、でも現在いま俺に勝つのはまだ早い。……何たって一生分の伸び代ほ伸ばしたんだ、大したもんじや無いが安く見られ過ぎんのも御免被るぜ」

苦笑めいた響きを持つ言葉と共に、篠村は膝から崩れ落ちかけた小太郎の喉頭へと容赦の無い振り下ろしの一撃を打ち込んだ。打撃と同時に宿された魔法サギタマギカの射手が弾けて衝撃波が小太郎を床に叩き付け、めり込ませる。直後に突き刺さった戒めアエールの風矢カフトウラエが小太郎の全身を雁字搦めに縛り上げ、床へ磔とした。

「ガ……ッ、グ……!!」

「終いだ、小太郎。影から逃げようとしたらそれより早く杖を打ち込んで意識刈り取っからな」

呻き声を上げてもがく小太郎が拘束を破壊できそうにないと判断して漸く身体からだの力を抜いた篠村は一つ息を吐き、意識も定かでない小太郎へ言い放つ。

「…悪いとは思うが押し通る。いい歳して何やってんだと言われても全く以って反論出来ねえが、この意地いぢだきやあ張り通すって決めてんだわ」

「……め……なや……」

「ん？」

独りごちる様にそう続けた篠村は、掠れた声で小太郎が何事かを呟いたと聞きとがめ、片膝を付いて耳を寄せる。



「…諦…めん、な……………」

「諦めんなや、兄ちゃん……………!!」

意識が朦朧としているのだろう、焦点の合わない瞳で謔言の様に。

しかしはつきりと、そう言っていた。

「……………キツツイ事言うなあ、小太郎……………」

苦笑というには苦味の強いそれを口端に浮かべながら、篠村は立ち上がり呟く。

「…悪いな、諦めんのは慣れっこなんだ…小太郎」

「……………二重、ダブル遅延呪文……………!!」

「魔法の射手を軸にした戦闘法しかあれは磨いていないので。無詠唱魔法、遅延呪文、魔法構築速度。この辺りであれより熟練した使い手なんて、本国でも少ないでしょう、ネギ先生」

流れる様な連続した無詠唱、遅延呪文の行使で宣言通り小太郎を塩漬けに沈めてみせたその手際に戦慄するネギへ、高音は静かにそう告げた。

「…いやっ—かあれもうサギタマガカじゃなくてベツノナニカだろ」

「上手い事言ったつもりか……………あれは喰らえば言うまでもなく俺等もヤバいな」

「最低でも二種の強化を数十矢規模で展開可能。構成に必要とする時間も数秒程度だろう。無詠唱であれば詠唱すれば威力はまだ上がるな……………さて」

大豪院は言葉を切り、朝倉が手を交差させて試合終了を宣言するのを目に入れながら傍に居た古 菲へ改めて告げる。

「二人を労ってやりたい所だが準備をしろ、古。一回戦の最後は俺とお前だ」

「わかたアル!!小太郎には声位掛けてやりたかたが仕方ないアルね!」

「……………先輩も古ちゃんももう少しさあ……………」

「すまん、些か不謹慎な振る舞いなのは自覚がある。が……」

試合終了と同時に最早壇上の二人は関係無し！とばかりに口では一応案じる言葉を吐きながらも、誰がどう見ても活き活きというかうきうきとしている大豪院と古 菲に明日菜が苦言を呈する。大豪院は僅かに苦笑を浮かべて謝罪しながらも、その身から精気を滾らせ、言葉を放った。

「今の試合もそうだが……善い試合ばかりでな、見ているだけでは昂ぶるばかり、だ。些か待ち草臥れたのだ」

「私も念願のポチとの決着アルから燃えてるアル!! 大体篠村もコタロも、多分誰かと話す気分じゃ無いアルよ。言い方悪いアルが心配するだけ今は無駄アル」

「まあ、そうなんでしょうけど……」

「昂ぶる、ってまた酷いことになりそう……」

「まあ何にしろ」

愛衣や夕映が嫌な予感がすると顰めた顔で話しているのを横目に、辻は見つめ合うというか睨み合い、火花を散らす大豪院と古 菲に声を掛ける。

「少し落ち着け二人共。どうせ大豪院が闘うなら、建築部が神社が更地に変わらないよう床を改造するだろうから、暫く時間掛かるだろ」

25話 まほら武道会第8試合 大豪院 VS 古  
菲 (その1)

八極拳、と一口に言っても様々な流派が存在する。有名なものだけでも武壇八極拳、長春八極拳、呉氏開門八極拳など実に多種多様だ。

このうちの開門八極拳とは、八方の極遠（遙か遠い彼方）にまで達する威力で敵の門防禦を打ち開く破ことを意味している。解り易く言うならば爆弾でも大砲でも破城槌でも、兎に角凄じ威力のイメージがあるものならば何でもいい。それを相手に至近距離で叩き込むというのが近いだろうか。

そして俺は何時しか、極遠を世界の果て。地球を越え宇宙を越え、銀河をも越えるこの世の終着点（そんなものがあるならば、だが。一説には宇宙とは常に広がり続けているらしい）であると認識していた。

ならば八極拳士が、この俺が己が五体より放つ勁はこの世の何よりも大きな一撃でなければならぬ。

繰り出した渾身の一撃は地球この惑星など易々と碎けなければならぬ。そう在れる様に功夫ゴキョフを積んでいくべきだ。

俺は本気でそう考えていた。いや、正確には現在いまもか。

…無論のこと、そんな荒唐無稽な真似が人間に出来る訳は無く、八極の由来も其れ程の心持ちで研鑽に励めという意味合いで伝わっているものなのだろう。俺の考えを聞いた老師は、先達は。驚き、呆れ、それから嗤った（馴染の馬鹿共には笑われた）ものだ。

『…焰イエン!! 貴様、何をした…何を、している!?!』

『…己が功夫ゴキョフを示しただけです、老師ラオシ』

だから、かつて打ち壊し、粉々にした山々を思い返す度に俺は自嘲の念と共に思うのだ。

矢張り、俺も馬鹿の一人だと。

「……知らん天井や」

「あら、目が覚めた様ですよ豪徳寺先輩」

「起きて早々ネタかます元気があんなら一先ず大丈夫そうだな」

「……何で豪徳寺の兄ちゃん等が……ああ、此処医務室かい……」

試合終了後、全身の打撲と電傷の治療を行う為龍宮神社内に仮設された医務室へ搬送された小太郎は豪徳寺と千鶴に見守られる中覚醒した。全身が灼けた様に熱く疼くのを煩わしそうに重い身体を起こそうとしたがベッドの脇に座る千鶴に優しく押し留められる。

「駄目よ、まだ横になつていなさい小太郎君。お医者様が仰るには、全身の神経系が感電で炎症を起こしているそうなの。後遺症は残らないだろうとの事だけれど、安静にしていないと治りが遅くなるわよ？」

「……篠村の、兄ちゃんは……居る訳無いわな。無傷なんやから……」

諫める千鶴に直接言葉は返さず、暫し黙りこくった後に歪んだ笑みを浮かべて、ポツリと小太郎はそう溢した。

「落ち込むな……つても無理な話だろうが、敢えて気い使わずに言うぞ。今のお前じゃ順当な結果だ」

「……豪徳寺先輩……？」

「んな怖え面で睨むな那波、優しく気遣つて欲しいとはこいつも思つてねえよ。……あいつは強え、最低でも俺等と同等位にはな。加えてお前とじゃ相性も……」

「ええわそんなんは、止めてえや兄ちゃん」

誰がどう見ても傷心の小太郎に対して欠片も遠慮の無く傷口に塩を擦り込みに行く豪徳寺へ、千鶴がやたら威圧感の籠った笑顔で抗議の圧プレッシャー力を叩き付けるのを顰めた顔で往なした豪徳寺の懇々と諭さんと掛ける言葉を、小太郎は吐き棄てる様な調子で遮った。

「……小太郎君。気持ち解るなんて調子の良い事は言わないけれど

……」

「だからええんや、千鶴姉ちゃん。…態度悪いんはすまん、でも本当にそういうんは今、ええんや。…二人が思つとる程落ち込んで、悔しがつてもないねん、俺。…相性悪いくだの実力がくだの、そんなもん結局言い訳やる兄ちゃん。豪徳時の兄ちゃんはその胡散臭いの負けただけ、んな風にナニがどうだったから仕方ないなんて自分で思つたんか？」

「……いいや」

我ながら安い慰めだったか、と自嘲気味に笑いながら、豪徳時は一瞬の沈黙の後、小太郎の問い掛けに否定を返した。

「お前の言う通り、そんなもんは言い訳だ。相手が思つてたのと違つてたとして、話が違つて予想していなかった今の自分じゃ対抗出来ない……。闘つて決めて勝つと誓つて、その場に立つたならそんなもんは負ける理由にならねえよ。漢つてのは言い訳をしねえんだ、敗けたのはただ……」

「…自分が弱かつただけ、やろ……」

豪徳時の語りにそつと被せる様に、小太郎はそう口にした。

「そうだ。……ああ、だからな。小太郎、お前は篠村より弱かつた。そんだけの話だ。次があんなら話はこれで終わらせちやいけねえが、今はそれだけ解つてりやいい」

「……解つとる…つちゆうより、なんや。理解わからされた、つてな感じやな……」

ドサリ、とやや乱暴にベッドへ起こしかけていた身体を投げ出し、小太郎はぼんやりと天井を見上げながら呟く様に言葉を紡ぐ。

「…最後の方はな、折れとらんつもりで折れとつたわ。篠村の兄ちゃんの実力がどうかという話や無くて、執念…ちゆうんか？…気迫に圧倒されとつた。本気で、挑んだつもりや。軽く見とつたんは確かやけど、勝とうとすんのを辞めた事は無かつた。此れ迄だつていつぺんもあらへん。……それが普通に、敵わんで…思つてしもたわ……」

何でやるな、兄ちゃん？と、小太郎は力無く豪徳時に問い掛ける。

「…強いつてのは理由が要るんか？要るんやったら俺のは弱いんか？それとも俺は何かを間違つたんか？…俺はまだガキや、何もかも足りんゆうのは解つとるわ。でも俺は、此処まで…」

「相手にもされなかつたのがシヨツクだ、つてか？しようがねえよ小太郎、それはな」

今度は豪徳時が小太郎の言を遮り、あつさりそう答える。

「…しようがないつて何やねん……」

「何だつつても言葉通りだ、しようがねえんだよ。この世に絶対は無え、俺は絶対に敗けないつもりであのチキン野郎と闘つたが、敗けた。根性に不可能は無えと俺は思つてるが、結果はご覧の有様だ。ささえあれば絶対にくになるなんて理屈は、多分何に対しても存在しねえんだよ。認めたかねえが、どんなに譲れないモンが在ろうと、熱いモンを秘めていても、駄目な時はあるし、敗ける時は敗けちまう。認める認めないは別だが、結果として見りやそうなんだろうよ」

でもな、と。らしくもない無機質な乾いた現実論を口にしながらも、豪徳寺の顔に小太郎を否定する色は無い。

「だつたら裏を返せばどんな理由にも優劣は無いつてことだ。強くなりたい？姉を探したい？結構じゃねえか、立派な理由だと俺は思うし、仮に馬鹿にする奴、否定する奴がいようがそいつの理由も同レベルだ。理由が無くとも同じかもしれないねえんだしな。理由が必要と思ふんなら、そいつを決して譲らずに闘い続ければいい。それは何かを成す為の絶対的な要因にはならないかもしれないねえが、お前を動かしかける原動力になる。小太郎、お前は敗けたが、間違つてはいねえと俺は思うよ」

小太郎は天井から豪徳寺の顔に視線を移し、ややあつてからポツリと溢す。

「間違えてないなら、何やつちゆうんや……」

「今までやってきた事も、考えてた事も無駄じゃないつてことだ。」

豪徳寺は小太郎の目を見据えて言い切った。

「何もかんも引つ括めて盛大にやり直すなんて面倒な真似はしなくていい。お前は何か足りなくて敗けた、そんだけだ。終わつたばかり



カカカと笑声を洩らす豪徳寺を途中から微妙に蚊帳の外となつた千鶴は面白くなさそうな半目で睨んでいたが、ややあつてニンマリと人の悪い微笑みを浮かべ、ベッドの上で丸まる小太郎の背中（恐らく）？に優しく手を置き、言葉を掛ける。

「小太郎君、よく頑張りましたね。お母さんが褒めて上げますよ」

『誰の親父がそのリーゼントやねん!!』

「……………!!、一瞬意味が解らなかつたわど阿呆無駄に捻つた返しをすんな!!こつちだつてお前みたいな生意気な餓鬼は願ひ下げだあ!!」

「あらあら、私に対して何も言及は無いのですか?」

「どう答えてもドツボにハマリそうだから何も言わん!!」

「……………イチャついてんなや怪我人の前で……………」

包まつていた布団から顔を出した小太郎は、目の前でギヤアギヤアと（主に一方的に豪徳寺が）喚いている光景に溜息混じりですう溢した。

「なあなあアザミンよお。何があつた訳お前と高音とうわくわねちゅわん?」

「しつげえなお前は少しでも魔力回復する為に瞑想してんだから絡むな馬鹿野郎!こんだけ拗れてる大元を聞かれてはいくですよと説明するとも思ふか諦めろや!!それから誰がアザミンだ馴れ馴れしいんじやボケえ!」

「そうそうこのキレつつも律儀に返答はしておまけにきつちりツツコミ返す感じ、何時もの篠村先輩よねえ」

「ウチは篠村先輩やる時はやる人やと思てたからさつきのもあんまり違和感無かつたな」

所変わつて会場の選手席では、素気無く高音に問答を拒否された中村が懲りずに試合を終えるなり席にて黙想し、次に備えようとしている篠村に絡んでいた。既に大豪院と古 菲の二人は控え室にて待機しているが、例によってボロボロになつた闘技場の修復に加え何やら重機クレインまで持ち出して建築部が総出で大規模な補強を行っている



為第八試合の開始が遅れている故の小休止であった。

「中村、ホントにそれ位にしておけよ。誰にだって知られたくない秘密の一つや二つあるもんだろうが。ましてや男女のあれそれなら口を挟むのが野暮だろ」

「えく俺あ知られて困る過去なんざ何一つ無えぞ?」

「真の恥知らずとはこういうことか……」

「大体人の恋路を云々て言うがよ、こいつらの道明らかに樹海か崖に一直線だぜ? 馬に蹴られようがスレイブ麻帆良四大魔獣ニルに蹴り碎かれようが、下世話に無粋の極みの汚名を被ってでも道を正してやんのが友達つてもんだろが」

「その通りです!!」

「うおスイツチ入った……」

辻の白い目線にもめげずに(どうか堪えずに)篠村と高音の迷走振りを引き合いに出して力説する中村にお姉様佐倉お兄様愛衣至上主義者が乗った。

「お互いにお互いを想い合うが故に道を違えようとしている、まこと真実に相手を思い遣るお二人の高潔なる精神には心の底から敬意を表します! ですが恋とは耐えるものであっても最早互いを求め合った以上は、これは愛です!! 愛し合うお二人ならば例えどのような障害だろうと……」

「愛衣? 取り敢えず恥ずかしいから……」

「…座つてろお前は!!」

「ひあああああつ?!? むぐぐうー?!?」

燦然と立ち上がり輝いつちやった目付きく瞳でポエムを垂れ流す愛衣を息の合ったツープラトンで座席に投げ飛ばし、ハンカチを口に詰め込んでから縛り上げ強制的に黙らせた篠村と高音は、何とも言えない顔付きで暫く見つめ合った後ネギ一行を振り返り交互に口を開いた。

「なんか紛らわしい事になったから話整理すつけどなあ、要は俺が立派な魔法使いマギステルマギ目指して邁進する高音に魔法使いミニステルマギの従者として付いて行くか否かって話してんだだけだよ。男女の意味合いは無え」

「…失礼ですが、魔法使いが従者を定めるといふのは現在の魔法社会

では恋人を定める様なものと聞いていますが……」

「そういった風潮があくまで流行っている、というだけの話よ。仮契約なら兎も角、本契約を結んだ魔法使いと従者は余程の事が無い限り契約破棄はしないし、そもそも出来ない。魔法使いとして活動する上で大半の時間を共に過ごすのだから当然ね。要は其れ程重い契約を交わす仲であり、それが異性の相棒パートナーなら恋人、夫婦そういう仲に発展し易いのは自然な話だからそんなイメージが定着したのよ」

「実際同性のパートナーも珍しくねえし、そういった連中は一部の特殊性癖除いて仲の良い友人つとこだ。男女でも事務的効率的に戦力の相性だけで組んでる奴等も居るからあくまで綾瀬の言ったのは主に若い世代の恋人探しの名目にしてるアーパー連中の言い分だな」

「個人的には唾棄すべき下らない風潮ね。真面目に社会貢献を果たそうとしている先達はいい面の皮だし後輩は道を誤る原因よ」

『確かに高音さんはそういうのお好きじゃなさそうですね』

「え、ええと、じゃあ高音さん、もあくまでビジネスパートナー……みたいな意味合いで……?」

「ええ……この卑屈な男の戦力を私は買っていますので」

「嬉しい嬉しい御世辞をどうもありがとよ……と、まあこんな具合で拗れてる訳だ」

「嘘ダウトだナ」

「それだけでそこまで話は纏れませんかー?」

「……組んず解れつ……箇条書きマジック……」

話をさっさと切り上げようとした篠村に、中村の頭上と両肩でタレつつのスライム三人娘が揃ってツッコんだ。

「五月蠅えな何なんだよ軟体生物がしたり顔で人間様の心情ケチ付けんなや」

「アゝその発言亜人差別ですよ……?」

「ハイ・スライムデミヒューマン人でなくほぼ魔物モンスター粹だろが」

「マアナー、その人外風情にも見て判る位お前等迷走してるって事ダロ?」

「……ええまあ。確かに客観視すればそういう風にしか見えないのでしようし、敢えて誤解を恐れずに言ってしまうえば痴情の纏れだものね」

「…k w s k」

「……おい高音え……」

「この煮え切らない話をこのままグダグダ続ける方が疲れるわ。私をフツたのが其処の男よ、世にも最悪なフリ方だね」

「…ンのアママ…馬鹿言えお前がフツたってーか愛想尽かしたんだろがやらかした俺に」

「と、まあ見解の相違はあれど。そんな所よスライムさん？」

「…開き直ってるでござるなあ高音殿……」

フラットな表情のままサラリと爆弾を投げ付ける高音に一筋の汗を垂らしつつ楓が唸る。

「はいお兄ちゃんお姉ちゃん！僕そのやらかしたの部分詳しく聞きたいでえーす!!」

「キメエ、黙れ。……ハイハイそうだよその通り。俺の人生ぶつちぎりにN.O. 1で黒歴史案件だから詳細は語らん、絶対にだ」

「でしょうね、私も好んで恥を晒したくないしこれ以上はノーコメント、よ」

気味の悪い裏声を発してきた中村を揃って一蹴し、二人は互いに顔を背けたまま工事中の闘技場へと視線を固定した。これ以上語る気は無いとの意思表示である。

「下らん色恋沙汰は終わりか？ならば私の問いに答える馬鹿連中。主も構わんな？」

「……フツ。お前前の試合前後位からフラツと居なくなってたけど何処行ってた訳？」

「結果の見た勝負など詰まらんからな、暇潰しに色々覗いて来ただけだ。幾つか面白いものも見れたので後程教えよう主」

「……む……」

前触れも無く後方の入り口から滲み出る様にして現れたフツノミタマに辻が半眼でツツコむが、何処吹く風と表情を変えぬまま聞

き捨てならない台詞を返して音も無く辻の傍らに戻る。後ろの刹那が敵意と困惑が緋い交ぜになった曖昧な表情でフツノミタマを軽く睨むが、超絶マイペースを貫く幻想武器アーティファクトにはそよ風程も通じないようである。

「へいへいほー、美女の頼みとあらば喜んでえ、と書いてえトコだがまず何が聞きてえのよフツちゃん？」

「アレは何をしている？ 私は化学だの何だのは疎い、説明しろ」

言ってフツノミタマが指差したのは丁度複数の建築部部長が気で身体強化を行い、床を基盤ごと人力で持ち上げるといふ力技を披露しながら分厚いゲルの様な質感の緩衝材を下へ仕込んでいる絶賛強化（改造？）中の闘技場そのものであった。

「あーありや次の試合に耐えられる様に改造：補強？ してんのおよ建築部が。何せ一発の威力に関しちや俺バカレンジャー等どころか恐らく麻帆良N.O.1のポツちゃんがこれから闘うからさー、下手すりや闘技場はおろか神社通り越してこちら辺一带に被害出つからよ。まあ必要な事だべ」

「……………え、なに？ 大豪院先輩ってそんな凄いの、なんて言うか破壊力？」

ケタケタと笑いながら何やら物騒な事を言い出した中村に明日菜が聞き捨てならんと追求する。

「大豪院先輩の武術は八極拳：でしたか。近年では映画やアニメーション等の所謂娯楽媒体でも取り上げられているので有名といえは有名ですね。矢鱈と破壊力というか一撃必殺とでも表現すべき要素が強調されていますが、これは恐らく李氏八極拳しゅうえんの創始者、李り 書文しゅうぶんの影響で…………」

「夕映夕映く今そつちの豆知識はええてく」

「で、でも、大豪院先輩は、見てて一番凄いつていうか…………」

「あー確かに素人目にもいつちゃんともねえって解り易いのは大豪院の旦那だわなあ。何せ一瞬大地が揺れんだぜ地震が起きたのかってレベルだよお」

裏に関わる羽目になってから持ち前の知識収集欲により各種武術や魔術系統に深い造詣を見せている夕映の無駄に詳細な解説を

木乃香が流しつつ、のどかとカモが納得の声を上げた。

実際、端から見ていて所謂凄<sup>い</sup>、即ち達人つぼいのが良く解るのは大豪院の豪快な一撃である。踏<sup>震</sup>み込みにより大地が揺れ動き、大気が突き出された手足の衝撃により甲高い音を立てて弾け、炸裂した人体が宙を舞い、物は粉々に割れ砕ける。素人に真似出来ない凄<sup>い</sup>事としてみれば極めて明快な演舞披露となるだろう。

だがしかし。

「あー、俺が言わんとする事あまあその通りじゃあるんだけどよ。多分チミ達が今開いてる回想シーンにある大豪院のそれは本人曰く……なんやつけ一ちゆわん？」

「そこで俺に振るなよ……?? 児<sup>シメ</sup>?、だったかな? 兇戯に等しい、らしいよあいつの普段の打は。そして俺達も、まあ同意見かな?」

その素人目にも凄まじい一撃を、中村と辻、そして伝聞ながら大豪院<sup>本人</sup>迄もが大したことの無い代物と評した。

「えっ……!?!」

「…到底人類が捻り出せる威力じゃねえと思うんだけど。なんだ、サ○ヤ人にでもなろうとしてんのかあのカンフーマスターは?」

雲行き<sup>の</sup>の怪しくなつて来た話にネギが濁った驚愕の声を上げ、完全に未確認<sup>エイリアン</sup>生命体でも見るような目付きで篠村が問い返す。

「ああある意味間違つてねえわあいつの目標その気になりや惑星一つ粉々に出来る様になるこつたし」

「その言い方だと語弊があるだろ。…要は目標の違いかな? 俺達は揃って切つた張つたや血みどろの潰し合いに青春賭けてる碌でなしだけど、概ね全員に共通してるのは強くなる事。でも強いって一言に言つても色々形はあるものだから…今更隠すことでも無いから正直に言うけど、俺の場合は綺麗な人を綺麗な二枚おろしに出来る様に、どんな相手でも圧倒するよう剣の腕を磨いてた…いや、いるか」

「お友達に対してあんまりこういうこと言いたくないけれどせつたんでなきや警察呼ばれてっからね一ちゃん。そんな一気にワイルドにならずに昔の程良くへタレな一ちゃんも混ぜてくれてもいいのよ?」

恥ずかしながら、と照れ笑いを浮かべながら車椅子の握りに添

えられていた刹那の手に手を添える辻。多少顔を引き攣り気味ながらも微笑みを浮かべて添えられた手を握り返す刹那は、正に好きなもんはしょうがねえ痘痕も唇であるうか、おもわず中村も真顔でコメントを述べようというものである。

「まあ一ちゃんはじめの将来に関しては大いに心を配りたいとこだけどそれはまあ置いていて：目標の違いってのはまあそうだな。一ちゃんはじめは妖怪真つ二つになること、俺あこの世で一番強くなること。リア充腐れリーゼントもロリコン確定色物柔術家もまあ同じだろ。ただムツツリ疑惑唇野郎は多少ニユアンスが違うつーのかねえ……」

なんて言ったもんかと腕を組んで唸りながら中村は続けて言葉紡ぐ。

「ポツチンは八極拳つー拳法の在り方に惚れ込んで、自分の思う八極拳士として完璧な実力ちからを身に付けたいってのが目標でなあ、最強を目指すつてのはビミョーに違う。まあ拳法やら武道やらはざっくり言っちゃまえば他人ヒトぶつ倒すのが目的なんだし、どーせ本人に聞いても“完璧な八極拳士なれば其即ち最強に決まっているだろうが”とかなんとか言うだろーから同じ様なモンだけどよく」

「話を要約出来ない馬鹿の話が長いから纏めるけど、目標とする到達点とこが同じでもそれを目指す為の手段：空手に然り喧嘩殺法然り、柔術中国拳法剣術然り、だ。道が違えば当人の才能や努力を差し置いても当然、差異は出てくる。実力差なんていう解り易い点以外でもね」

「要は得手とする分野の差だな」

と、中村の大工事に関する説明を聞き一先ず満足したらしいフツノミタマが変わらぬ冷めた表情のままに先を引き継ぐ。

「主が武器かたなを用いた中距離に於ける戦闘で他の追隨を許さぬのは貴様等にも理解出来よう？そこな馬鹿ならば人体破壊に特化、内気外気共に練り上げている為人外とも渡り合えはするだろうが最も得手とするは対人戦闘だろう。逆にあの番カラはあの耐久力にあの外気、だ。対人などという小さい的よりも魔獣辺りとやり合う方が得意だろうな。：斯くして主バカレンジャーを含めた五人が偏に同程度の実力を持つ、とって

もその有り様は十人十色にて千差万別だ。そもそも基本として対人戦以外を想定していないのが武術というものだろう？ 対応が済んで来たといっても主達の現在の立ち位置は畑違いにも程があるということだ」

「相手が人外だった、聞いてない話が違うそれ用に鍛えて無いから無理くなんて死んでも言わねえけどな、格闘技の選手じゃねんだよ俺等。そもそも強くなってけばそこら辺の区分あんまり関係なくなつてこね？」

「…概ね同意見だけど、つまりだ」

話を纏めようとしている内にまたしても脇道に逸れ出した話の流れにネギを始めとした幾人かが渋い顔で首を捻っているのを見て辻が再度流れを浚った。

「大豪院は大豪院の理念に則って彼奴なりの強味を磨いてる。其れが解り易く言うなら一発の破壊力って事になるかな。単発での火力なら、俺達はおろか学園一だと思うよ…あの発勁は」

「…先程の話からすると、彼は普段本気を出して鍛錬を行っていないと。そういう事かしら？」

辻の言葉に眉根へ仄かに皺を寄せつつ高音が問い返す。よもやこの男達バカレンジャーが真面目に修業を成していないなどはこの数ヶ月曲がりなりにもそれなり以上に深く関わって来た手前思わないが、それならば尚更訳の解らない話となる。

「んん〜ま、そういうことになっかな？でも誤解しないであげて高音ちゆわん、あの糞の上に超が付いちまう様な真面目ちゃん鍛錬に手を抜くなんてこたあ死んでもしねえ奴だから。やむを得ない事情があるのよ事情が」

「ンだよ、本気出したら麻帆良が崩壊するとかのサイ○人理屈か？」

「お、冴てんね〜アザミン大正解〜!!」

「「……………え……………!!?」」

「ああ、そろそろ始まるかな？多分見た方が早いと思うよ、大豪院のトングデモっぷりは」

と、皮肉混じりの冗句ジョークとしてかました篠村の発言に諸手を叩

いて肯定の意をかました中村に一拍遅れて辻以外の全員が呆けた声を洩らす中、闘技場の入口に現れる見慣れた長身を視界に収めつつ、辻はそんな言葉を紡いだ。

『さあさあそれでは皆様！波乱続きというか化け物続きの麻帆良武代会本選一回戦もいよいよ最後の死合…もとい、試合と相成りました!! そんなある意味一区切りとなる試合を飾る両選手はなんとどちらも同じ部活の出身、即ちある種の同門対決だあーっ!!先ずこのかわいそうな闘技場に足を踏み入れるは知る人ぞ知る麻帆良百十二不思議の一角、”麻帆良大震源地”の原因にして元凶たる公式環境破壊兵器!! その拳撃は山を崩し、その脚撃は海を割る! 防御不能な破壊の一撃、中国武術研究会、略して中武研副部長: 『崩山裂海』大豪院 ポチ選手うううううっ!!』

「本名で登録をした筈だろうがああ!？」

『『『ヴオ`オ`オ`オ`オ`オッ!!』』』

どうあつても真面に名前と呼ばれない自らの運命に大豪院が目を剥いて吼えるが周りは、特に本来身内の筈の中武研の反応はにべもない。

『死に晒せタラコクチビルウウ!!中部研には菲部長一人で充分よおっ!!』

『貴様の存在は冗談抜きに麻帆良で生きてく上で迷惑なんじゃあこの巨大ナマズめが!そして菲部長は渡さねええええ!!』

『今日という今日が有害指定生物筆頭たる貴様の命日だ菲部長のお美しい御御足をせめてもの冥土への土産として目に焼き付け逝きやがれあああああっ!!』

『??、??。正に雀の頼母子だな、負け犬の遠吠えまで他力本願とは本当に卑屈で哀れな連中だ?共が!』

『『『テメエエエエエア!!』』』

「ほんとポツちん自分ん<sup>テメー</sup>トコの部員と仲悪いよなあ」

「強くて可愛い娘なんて麻帆良にはゴマンと居るのにな。……まあ古



菲ちゃんは実力では頭一つ抜けている組になるからその所為じゃないか？」

「…後は人格が（比較的）破綻して無えからじゃねえの？」

「ああ、かもなあ……」

「……あのー、先輩方……？？」

功夫服を着た筋骨隆々の暑苦しい巨漢共が放つ聴くに耐えない罵詈雑言を涼しい顔で受け流す大豪院の様子を呆れた様に語り合う辻と中村にその場の全員を代表して愛衣が尋ねる。

「…あの大豪院先輩の本気で麻帆良が危ないとは一体……？」

「「ちやんが言ったべー？見た方が早えよ絶対」

「いやいや気になるわよ先輩。っていうか本当にそんな、物凄いことになるなら試合させてもいいの？」

「だから建築部が今の今まで頑張ってたんだよ…と、始まるな」

「は、始まるって…」

と、たまらず尋ねかけたのどかの機先を制する様に大豪院が悠然と佇む闘技場へと脚を踏み入れたのは先程まで最後の調整として何故か側の水堀へと入り込み土台の基盤を弄くっていた麻帆良のマイ○クラフター建築部の長、安藤 豊雄であった。

安藤は全身から流れ落ちる雫を払うのももどかしげに大豪院へと歩み寄り、普段の彼よりも幾分高いテンションで声を掛けた。

「大豪院！我等が宿敵にして怨敵大豪院よ!!今年もやって来たな俺達建築部と貴様の決闘の機会があ!!昨年の惨敗から俺達は更に高みを目指し、そして昇華した!前の俺達と同じと思うなよお!!」

「闘技場を比武に耐え得る状態に強化してくれた事には感謝するが、俺は貴様等の耐久試験の為にこの場にいる訳では無いぞ」

「貴様が全力をこの場で出す以上同じ事よお!!さあ加減は無しだ!、遠慮無く踏み込むがいい!!」

「……御前達がそれで満足なら俺は何も言わんが……」

と、呆れた様に嘆息しながらも大豪院は佇まいを背筋に芯の通ったそれに変え、僅かに腰を落とした半身の姿勢を取る。

『さてさて皆様御刮目下さい!!これより大豪院選手が試合前の

デモンストレーション  
示威行動…いや興行？まあいいや兎に角凄い事やらかします!!  
麻帆良の人外枠たる武道家は知らぬ方などいないでしょうがまあ改めて御戦慄くださいこの方の超・人外振りを!!』

『麻帆良の五強バカレンジャーは其々がそれぞれに麻帆良の人外枠、武道家の中でも格の違う人外振りを発揮していますが大豪院選手は最もそれが一般の方にも理解り易い脅威として示してくれませぬ。報道部  
ブン屋としては少々複雑ですが、百聞は一見に如かずという奴です  
ね。どうか腰を抜かさぬようご注意を』

「…五月蠅い外野だ……」

「雑音は気にするな、踏めい、大豪院!!」

「……、……」

本人そつちのけで気焰を上げる安藤に大豪院は一つ嘆息して緩やかに半歩分、前に出るか出ないかの域僅かに身体を前に出し、するりと踏み込む脚が前に出る。

踏み降ろした足が地に着くと同時、闘技場の床に同心円状の波紋を観客の皆は幻視した。

それとは別に確かな事実として、闘技場が大豪院を中心に一瞬撓むのをネギ一行は視認して。

直後、龍宮神社の境内は縦に大きく跳ね上がり、震災級の直下型地震が如き激震に揺れ動いた。

「………つ!?………」

「おー、大分マシになってね?」

「建築部の尽力の成果かな、素で喰らうよりも破格に穏当だ。物理的に身体が宙に浮くどころか近間の奴は吹き飛ばすからなあ大豪院のあれは」

未だ縦揺れに震える場内、何処となく死んだ瞳で場外に避難していた朝倉が見つめる先、闘技場に出来た綺麗な円状のクレーターから埋もれた足首を引き抜く大豪院の引き起こした比喩でなく天災級の

の一撃に言葉も無く戦慄するネギ達を余所に、中村と辻はいつそ呑気とも言える様子でそんなことを言う。

「……待て、頼むから待て!!」

「どったのアザミン。大?まさか大なの、もよおしてる!?お客様ーっ! お客様の中に携帯トイレをお持ちの方はいらっしやいませんかああああっ!?!」

「五月蠅え!!」

「ろまんりお!?!」

己のヤクザキックで吹き飛ぶ中村には目もくれず、篠村は恐怖と焦燥に血走った目を比較的会話辻の通じる方に向け、叫ぶ様に問い掛ける。

「…っんだありやあ?!?!」

「震脚。八極拳のみならず中国拳法では結構な割合で見られる割とポピュラーな技法だね。八極拳のそれは他流派震脚と違ってあまり足を高く上げずに普通の踏み込みの延長みたいな感覚で繰り出すから驚いたかもしれないけど……」

「違う!!心底驚いたというかビビったのは確かだが微妙にというか130度は論点が違い?!? 比喻表現抜きに大地が揺れたぞなんだあいつは!?!」

「ああ威力というか破壊力にビビったのねアザミっち」

「ああ…うん、感覚麻痺してるからなあ俺達。まあ驚くのも宜からん馬鹿げた代物なのは確かだけれど、それが大豪院の特化方面なんだから仕方がないとしかない様が無い」

「だからお前等は自分達の非常識が周りの害になると自覚しやがぬがっ!?!」

「少し落ち着きなさい篠村。……先程話した“何に秀でているか”の話かしら? 彼の場合は大豪院はそれが…所謂気の放出に特化している故にこの馬鹿げた破壊力だど?」

「まあ放出っつーか発勁っつーのかね? ポチは一撃の威力をどれだけ高められるかに焦点当てて鍛え続けてんだ、ずーつとな」

一撃必殺目指す俺たあ同じなようにでいて全く違え。と、中村は

呆れと感心の入り混じる歪んだ笑いを浮かべた。

「なんもかんもを後回しにして全ブツパやり続けたポチの発勁は本気で打つたら魔法で言やあ上級魔法くれえの威力は優にあんだろ。信じられます奥さん体当たりで学園裏手の小山砕いたことあるんですのよあの唇ちゃん」

「序でに言うならそれは中学の頃という話なんだな。当時の俺達で悪ノリして嘸し立てたら意外に煽り耐性の低いあのカンフーマスターが本当に粉々にしてしまつたものだから、半日近くも鬼の様な形相の杜崎先生に追いかけて回されたっけ……」

「……なんと言うか、その……」

改めて日常生活から何か狂っているバカレンジャーイカレ頭五人の、殺伐とした話をのほほんと語るブツ飛んだ調子に冷たい汗を額に感じながらも刹那は問いかける。

「…不躰な問いですが……此れ程の練氣を納めながら一さん達と何故修行を……」

「まあ、そうだね。極論すれば大豪院の場合俺達との手合わせに殆ど意味は無い」

「ポツちんヤーティ神信仰してる論者だからぶっちゃけせつたんの言う通りよー。…そのまんまじゃいけねって彼奴も解つてつから俺等と頑張つてるんだろけどー」

「……それは、どういう……」

ケケケと甲高い笑声を漏らす中村の含み有り気なもの言いに夕映が眉根を寄せて問い質そうとした時、大豪院のド派手な一撃に恐怖と高揚から湧いた場内へ気を取り直した朝倉の声が響き渡る。

『さあ皆様!!之なるじめんタイプの引き起こした大技じしんに興奮冷めやらぬ所ではございませうが「俺はポ○モンか」先輩ちよつとステイ!…そんな意志在る大災害に挑まんとする勇氣百倍な何処その食用ヒーローが如き蛮勇の持ち主が此処に居たあ!!先程紹介に上がりました麻帆良武道系部活の中でも有数の実力者を抱える中武研の長、その貧相…もといスレンダーにして小柄な体格からは想像も付かない強烈な打撃にて並み居る猛者を薙ぎ倒し本選出場をもぎ取つたもう

一人のカンフーマスター!!昨年度ウルティマホラ優勝者、古<sup>クーフエイ</sup> 菲選  
手ううううつ!!』

「「「ヴァアッ、アッ、アッ、ツ!!」」」

「朝倉、失礼アル!」

「俺に比べればマシだろうが……」

　　プンスコと頬を膨らませながら入場してきた古に大豪院は糞でも踏みつけた様な響め面でそう告げる。

「菲部長おとおおつ!!その災害タラコに正義の鉄槌を!ズタボロにしてやって下さいいっ!!」

「ウラア今日という今日こそ年貢の納め時じゃあ人望ゼロの名ばかり副部長が!!菲部長、遠慮は要らないんでやっちまって下さい、いつそ殺っちまって下さいああい!!」

「……だ、そうだぞ麗しの菲部長」

「ポチはホント彼奴らに嫌われてるアルねー。真面目に鍛えて仕事もしてるのにかわいそアル」

「大半は貴様の所為だよアー。パー小娘」

「聞き捨てならないアル!私がポチに何したアルか!!」

「もういい加減訂正するのも疲れたが俺をポチと呼ぶな、そして普段の言動を省みる。どうせ言っても無駄だろうが……まあ、そんなことはどうでもいい」

　　ムガー!と両腕を振り上げて吠える、思えば随分な付き合いになる少女の変わらぬ天真爛漫を絵に描いたような様に大豪院は一瞬目を細め、自らも変わらぬ憎まれ口を叩いてからゆつくりと身体を開き、僅かに腰を落とす。

「ム……」

「案ずるな、よもやこの様な舞台で奇<sup>チーシュー</sup>?など仕掛けん。古……」  
　　拘<sup>クワ</sup>らせてもらうぞと。

　　大豪院は目の前の少女、古<sup>クーフエイ</sup> 菲<sup>エイ</sup>に出会ったその日。対峙した其時と変わらぬ言葉を昂然と告げる。

「一ツウダーヂィ  
「一撃だ?」 《一撃だ》」

「…なんて言ったの? 最後?」

「一撃だ、だつてよ。よーするにワンパンKO宣言?」

「二打不要…だつたかな? さつき綾瀬ちゃんが解説してくれてた李

書文先生の異名の一つ。どんな相手でも初めの一発で打ち倒した  
事で付いたまさに“一撃必殺”そのものだね」

「…はあ? …はあ? …お前相手なら、一発で充分だつてか? 流石  
に自惚れ過ぎだろ。あのカンフー娘ンな弱くねえぞ、  
キワモノ馬鹿集団の頂点でもトップレベルに強いんじゃないの?」

ようやく先程の狂騒を少しばかり落ち着けた篠村が息を切り  
切り辻と中村に尋ねる。伊達に日頃の鍛錬では楓に絡まれ古に絡ま  
れとバカレンジャーの一行たる戦闘狂達に絡まれ続けているわけ  
ではない、確かに古 菲はバカレンジャー五人には及ばないものの力  
量そのものに隔絶した差は無く、闘いの流れ次第では充分勝ちを狙い  
にいけるだけの実力があると篠村は分析していた。

「あー違う違う。古ちゃんが弱いとかそういうんじゃないのよ、寧ろ  
この麻帆良じゃ練ってる技…あー言葉にしづれえから彼奴ら流にク  
ンフーでいいや、においちやあ普通に俺等 ≡ 古ちゃんだもん  
よ。あ、リーゼントの阿呆は別な。ありやある意味天才だけどそう呼  
ぶのはなんかムカつくからバグだバグ。…んで古ちゃんはその  
介党鱈とはまあ武術系統被つてつからなー、そうなつと純粋に素の実  
力勝負になつちまうから噛み合うけど相性悪いのよ。ぶつちやけそ  
れなりに真剣な勝負で古ちゃんが☒に勝つたの見たこと無えわ」  
「どうでもいいですがさつきから大豪院先輩に対するスケトウダラ連  
呼はなんなのですか?」

「知ってるー夕映つちー? 俺等がタラコだと思って食つてんのはスケ  
トウダラの子なんだつてー。少なくとも一般的に出回ってるような  
のは」

「そうですか…? どうでもいいですね…」

「そうなんです…? どうでもいいわなー」

「話元に戻してくんないその馬鹿？」

それまでの話題を明後日の方向にふっ飛ばしてから夕映と漫才の様な掛け合いを繰り広げる中村は辻の冷たいツツコミにへいへいと頷き、脱線した話の流れを修正に掛かる。

「まあ要するに古ちゃんはスケトウダラ唇より実力で半枚落ち：までいかねえか、一枚落ちくらいだわねえ。真つ当にコンデイション万全の状態同士で当たりや普通に十回闘って七、八回負けちまう位には差があつけど、モチのロン一発でやられちまう程の実力差は無えよ。あれは単にポチ袋の拘りだあね」

「聞いてて混乱するので呼び方統一せんでござるか？……拘り、とは古に對して？」

紛らわしい中村の語り口にツツコミながらも楓は合いの手を入れる。大豪院は兎も角古 菲とは短くない付き合いである楓だが、しばしば鬨り合っていると話す古 菲の口からそれらしい話を聞いた事は無かつたからだ。

「俺等にもそうだけど、古ちゃんに對しては一際かなー？ 普段の手合わせやら鍛錬でいっつもやってるわけじゃねえから楓ちゃん達が知らないのは無理ねえよ。真剣勝負の時ほど、あいつの阿呆な拘りは顔を覗かせると来たもんだ」

「…まあ、俺としてもこればかりは中村に同感かな？ 色々趣味嗜好じゃ他人のこと言えた義理じゃ無いけれど。やっぱり大豪院も俺達とウマが合うだけのことはあつたんだといふかなんと言うべきか…」

「つまりは馬鹿の同類という所だろうよ、主」

「曲がりなりにも主と呼んでる男を馬鹿呼ばわりするなよ…反論出来ないけど」

曖昧な言葉で評する二人にフツノミタマが皮肉気に口端を曲げながらバツサリと言いつ切り、遠慮の無い己が刀の混ぜっ返しに辻は嘆息混じりに応じる。

「……で？」

「一撃必殺主義」

結局なんなの？と言外に含ませる明日菜の促しに辻は正確な表現じゃ無いけど端的に表すなら、と前置きしてそう口にした。

「八極の果てまで通ずる極限の我が打、たかが人間レン如きの打倒に二撃は必要無い”…んだってー、おめえも人間だろっつーなー。まあ有体に言つて阿呆だあな」

ケタケタと甲高い笑顔を吐き出しながら、言葉の内容とは裏腹にどこか弾むような調子で中村は言った。

「…やっぱりそれアルか。馬鹿にされてるでも嘗められてるでも無いのはもう解てるけど…ぐつぐつポチも中村や豪徳寺の同類アル」

「その煮えてる擬音はつぐづくと言いたいのかもしや？…ともあれ、そうだな。こればかりは反論出来ん」

相も変わらず微妙に可哀相な日本語力をしている目前の腐れ縁な少女の相変わらず振りに嘆息しながらも、発言の内容自体には反論の余地も無く。改めて己は阿呆な真似をしていると自嘲の念が込み上げてくる。

しかし、それでも。

「これが対練ならば自重しよう、実戦ならばこんな下らん拘りなど掃いて捨てる。友や庇護者の安否に変えられる様な崇高なものでは断じて無い。…本来ネギの悲願が掛かっているこの場でも抑えねばならんものであるが……」

こうでなければ嫌なのだから仕方がない

「古、お前が相手ならば。お前だからこそ、俺は拘らせて貰う」

「…特別扱いは嬉しいアルよ？こんな様でも女孩子ニユイハイシイアルから」

古は一瞬目を見開いた後、クツクツと小さく笑みを漏らす。

「私は付き合わないアルよ。遠慮なく、キメに行くアル」

「それでいい、そうでなくてはならん。これは俺の、我儘だからな」

三体式。左足を前に前後へ大きく開き後ろ脚は僅かに曲げて重心を中心やや後方へ、両手は指を揃えて開き右掌は下を向け半身に開いた丹田付近、左掌は腕を真直に伸ばし、天へと指を揃え目前の敵



手へと自然に向ける。

緩く腰を落とし、上から糸で上半身を吊り上げられているかの様な“軸”の通ったその構えは、まだあどけなく華奢な印象さえ抱かせる幼さの残る面相を持つ少女が、その若さにそぐわない並々ならぬ功夫を積んできた事を、理解する者には如実に表していた。

対する巖の如き大男が取るのは腰を落とした少女とは逆身の半身構え。右足の爪先を真直に相手へ向け、前後に大きく開いたそれは少女のものに共通するが、大男のそれは名も無き八極拳の構えよりも更に腰が深い。後ろ脚は左斜後方へ肩幅二分を優に越え、右足首と膝の角度はほぼ床と垂直に近いその重心の低さは、一見して機動性を無視した待ちの構えに見える。肉厚にして巨大な体軀を低く、大きく開いたその姿は、山がその身を今にも爆ぜさせ此方を巻き込まんと、その圧倒的な質量を撓めながらジリジリと迫り来る様な錯覚さえ感じさせる圧迫感を放つ。

「…じや、お二方は準備万端？始めるよ」

「几点都行《いつでも》」

「不需要言？《もはや言葉は不要だ》」

「中国語あんまり達者じゃないんだって私…まあ言いたいことは大体分かったけど」

最早互いのことしか見えていないザ・中華の端的な返事に苦笑を浮かべつつも、同時に間違いなく今迄の試合と同等かそれ以上の破壊劇がこれから始まるのだらうと暗澹とした気分はその笑みが引き攀ったものになる朝倉である。

高確率で開幕から発生するであろう衝撃波に備える為、闘技場の端に備え付けられた避難シェルター Mk-II（哀れ初代はネギと高畑の試合の余波で半壊した）の内側へそそくさと避難する朝倉を見て喧囂は口を開く。

『さて、間も無く試合開始と相成ります。大豪院選手 versus 古菲選手、この二人の対決には余計な装飾は不要でしょう。中国4000年の歴史を誇る…まあ中国武術の起源が本当に紀元前の倍程も

前から連なっているのかは諸説あり確定してはいませんが…』

『余計な装飾セリフをいれてんじゃねーかよ!』

『おっと失礼……流派は違えど同じ故国クニより生まれ出でた最上級にクラシックな武術の使い手。決着は拳を一合交えたその瞬間トキに、既に終わりを告げているやもしれません。見逃すことの無いよう固唾を呑んで、それでいて二次災害を警戒して腰は完全に座席へ着けないままご覧下さい』

簡潔に纏めようとして己が業により余計な茶々が入りかけた喧囂の解説に観客の一人が咆哮し、明らかに格闘大会で入るべきではない警告文句を添えつつ言葉を切った。

「……参考までにお伺いしますが、この試合も下手をすれば……?」

「下手しなくても奴らあ付き合い長い分、弁えてるように見えて遠慮が無いから死人はでっかもしれんぜ。安心せい夕映っち」

「……………」

「ゆ、ゆえ〜!前に内容全部が作者に対する敬意の無いパロディの二次創作小説読んだ時みたいな顔してるよ〜!」

「どんな顔だヨ、ソレ」

「好き嫌い通り越して理解したくない類のもの見た顔じゃないですか?」

「…スカトロプレイ……」

「黄土茶色になりてえかプリン体めが。…まあ大丈夫だろ、前回のガチ手合わせじゃ古ちゃん両肩ボグツと逝って靱帯伸びまくった程度だったし……」

「充分重体です。……まあこれまでの試合を鑑みれば何を今更という話なのでしょうが……」

改めて、お祭り騒ぎのノリで流してしまうには血生臭過ぎる一大イベントに執心クラスメートしている同級生と先輩連中の、異国人を通り越して異星人染みメンタリテイた精神性の違いに眩暈にも似た感覚を覚え頭を押さえる夕映である。

違うと感じることとそれを悪しと感じることはイコールで結

ばれるものでは決して無く、其れなりに長い付き合いにもなった現状からすれば今更この程度の相違で喚く気も拗ねる気も無いが、それにしたって端から見れば死に急いでいるようにしか見えないその様は一言くらい物申したくなるものであった。

「言いてえ事は大体察するけどよー夕映っち、好きなモンの為だったらいくらでもはっちゃけられるのが人間だろーよ。夕映っちやのどかちゅわんだって本一冊の為に下手なダンジョンより危ない魔窟に潜ってんじやん。たかが本なんつったら怒るかもしれないけど俺からしてみりやそっちの方が狂気の沙汰だぜ、要は方向性の違いよ方向性の。俺らあ戦闘狂で夕映っち達はなんつーの、ビブラムフィリア？」

「最後の最後にオチをつけないでください。愛書家です、日本では慣用的にビブロフィリア。誰が合成ゴム底の偏執家ですか」

少し真面なことを言ったかと思えばいまち締まらない中村のボケに夕映は肩を落としてツツコミを入れながらも、言われた内容自体には得心のいく思いであった。

“好きこそ物の上手なれ”ではないが、何かしらの分野で成功し、評価されるものの多くがそれらの事柄に感情の正否を別として執着するものである。何かを極めるには高いモチベーションの維持が不可欠である以上、中村達武道家が常人から見て常軌を逸した振る舞いをして見ように見えるのは寧ろ必然であり、おかしなことではない。「人の趣味嗜好にケチをつけるのは無粋の極みでござるからなあ。こうして中村殿に懐いている拙者等自身をも嗤うということにござる」  
「懐いて……いえ、まあ。……ともあれ、冷たい言い方をしてしまえば所詮他人事ですからね。元よりこれ以上常識云々を吐かす気はありませんが……」

夕映は半眼で横の中村を見やり、どこか嫌味たらしい調子で言葉を締め括った。

「それでやる事為す事全てが正当化される訳ではありませんからね」  
「返す言葉もござえやせん」

『…はい、実況員こと私の避難も終了いたしましたのでこれより第八試合、大豪院選手VS古 菲選手の試合を始めます!!最後に皆様、どうか観戦中はお気を抜かれる事のありませんように!この試合確実にこれ迄のどれより酷い試合になりますので!!観客席には万全を期して安全防护処置が為されていますが本当に!ボーツとしてると最悪死にますからね!!私警告したからね!!』

『いいから早く決闘開始の宣言をしろ磯野オ』

『誰が微妙にリアクションの萌えるKC社員よ、ノらないからね!!』  
『…ああ、もう!!』

注意を促す体でこれから始まる大破壊劇を間近で見届けねばならない緊張と恐怖へ覚悟を決めんとしていた朝倉は喧囂のフツてきたボケに対して反射的にツツコミ返し、一拍遅れて気を遣われた事に気付く。

何もお前目掛けて攻撃が飛んで行く訳じゃあない、肩の力を抜いていけ、とでも言わんばかりに薄い笑みにて笑い掛ける喧囂を一瞥して朝倉は半ば勢いで強引に肚を決め、手に持つマイクを折れんばかりに握り締める。

『……………試合ー』

大豪院と古の身体がほぼ同時、紙一枚程も無いあるかないかの域で沈み。

『開始イイ!!』

弾かれた様に両者共に前方へと飛び出した。

「……………ツ!」

互いが互いに開始直後からの近接を選んだが為に手の届く距離まではほんの一刹那。その僅かな間に古の脳裏を掠める様にして浮かんだのは驚愕と疑念だった。

……………自分から、出て来た他从自己出?了……………!?

大豪院は一撃での決着に拘っている。

少しでも武道という形でこの男と関わりを持ってば誰もが知っている事柄であり、其れに拘るが故に大豪院の出足は遅い。確実に初撃を当てる為に後の先を狙う事が殆どだからだ。

過去何度もその“一撃必殺”に沈められた事のある古だが、その流れは決まって低く腰を落として待ち構える大豪院に猛然と打ち掛かった古がその打を捌かれ、いなされして反撃カウンターの一打にて吹き飛ばされる形であった。

八極拳は前に出られない拳法では無い、敵の動きを制し必ず当てる事を旨としている為に陸動かないものの舟とも形容されるが、歩法が洗練され小さく目立たない故の印象である。熊歩虎爪《熊の様にとっしりと安定した歩みで虎の如き猛烈な打を見舞う》の別称を持つその動きだが、間合いを詰める際のその速度は熟練した拳士ならば鈍重である筈も無く。

「…っ、ハアア!!」

その危疑が形となる前に古は強く踏み込み、迷いを払うかの様に強く右拳を大豪院の中心鳩尾へ打ち出した。元より古が主体メインとして修める形意拳が理念は“硬打硬進”、相手の虚実ウラに拘らずただ真中を打ち抜くのみである。

跟歩からの進歩、後脚の付いた床面が爆発した様な踏み込みから継いだ右脚が踏み込まれ、趾球と足指に全体重の乗ったそれにより闘技場は一瞬縦に揺れる。丹田を中心とした猛烈な腰の捻りから打ち出される崩ボンチユアン拳は、不意を突かれた形となった一時の劣勢を引つ繰り返すに余りある古 渾身の一打であった。

「……………!!」

床にクレーターを作り上げながら打ち込まれた岩をも砕く超常の一撃に、大豪院は防御迎撃回避、何れの動きも取りはせず、ただ震脚による急制動にて床へ破壊痕を穿ちながら止まった。

「っ!?!」

「…喝ッ!!」

態々前に自分から出ておきながら動きを止め、攻撃を喰らいにいくかの様な大豪院の異様な行動。当然迎撃、回避から次の動きに入

ると踏んでいた古は己の拳がいつも容易く大豪院の鳩尾に吸い込まれた事に目を見開く。が、打撃インパクトの瞬間吼える様な大豪院の放つ裂帛の気合いと共に、その内側から噴き上がる様にせり上がった力に己が打撃を弾き返され、その眼まなこは更に開かれる。

『こ、これはああ!?』

『古 菲選手の中段突きを無防備に攻撃を喰らったかに見えた大豪院選手、頽れるどころか打ち込んだ古 菲選手を跳ね返しました!!』

両者の踏み込みによる衝撃の余波が会場を揺らす中、攻撃を放った側が吹き飛ぶという異常な光景に会場はどよめき、

「あ、やべえ」

「まっずいなあれ…」

零れる様に選手席の中村と辻がそう洩らしたその瞬間には、もんどり打つ様にして後方に流れる古の体前に大豪院が地響きと共に踏み込んでいた。

「糟ザオラ了…っ!?!」

「勝つのが二の次だと不快な感違いをされても困るのでな…決ヂュエスウアン着だ」

転倒こそ免れたものの、完全に体勢を崩した古の悪態に静かに応じ、大豪院は前方へ跳ぶ様に左脚を床へ叩き付け躍り出る。殆ど古の身体と交差する程に深く踏み込まれた右脚は古の側面を越え左斜下方に。

再び龍宮神社を直下型の大地震が襲う。

『うわわ、わ……!』

「「「うおおっ!」」」

「「「きやああ!」」」

「ぐ……っ!!」

朝倉が僅かに恐怖と、単純な振動による物理的影響で僅かに上擦った震え声を、内臓から浮き上がる様な一瞬の浮遊感に観客が悲鳴を上げる中、震源地震源地にいた古は踏み込みで発生した衝撃波により身体

が宙に浮かされて、無防備な姿を晒す。その古死に体目掛け大豪院の身体は踏み込まれた右脚を軸として急速に旋回し、左脚は破壊痕クレイターにめり込む右脚へと寄り添う様に叩き付けられる。

瞬動に値する速度の歩法による前進の勢いが、局地的な地震を引き起こす程の震脚踏み込みによって急制動。慣性の法則により前方へと打ち出される上体による靠撃に練り上げられた外気による発勁が加算された大豪院の絶招。

「…ハッツ!!」

鉄テイエンヤンカオ山靠が古へと炸裂した。

『ちよ、直撃いいいいっ!!』

古は独楽の様に激しく回転しながら弾丸並みの速度で斜め上方に射出され、観客席を繋ぐ廊下の屋根へ着弾する。重厚にして頑丈な春日造の木材を微塵に破壊しながら古は尚も止まらず、緩やかな放物線を描いたその身体は闘技場から二十m程も離れた境内に鈍い音と共に叩き付けられた。

『『『………っ?!?!』』』』

『菲部長おおおおおっ!!』

『てめえこのバケモンがああああ!!』

『………どう見る?』

『いや………相当にイイのが入ったぞ。厳しいのではないか?』

目の前で起きたあまりの惨劇に観客は水を打ったように静まり返る。元気なのは同じ穴の貉の武道家達と身内同士の対戦とは思えない程に一方に対してだけヘイトを高めている中部研だけであった。

『以後は転倒しない様、大豪院選手が打ち込む際立見のお客様は近くの手摺にあらかじめお掴まり下さい。…さて、試合開始直後から早くも古 菲選手は大打撃を喰ってしまいました。果たして闘技場へ二

十カウント以内に復帰する事は可能でしょうか?というか朝倉、早くカウント…」

「カウントもへったくれも無いでしょうがスタッフー!!待機させとした医療班急行させてえええつ!」

そんな中変わらぬポーカーフェイスを保ったまま解説席の喧囂は、改めて格闘大会で入るべきでは到底ありえない注意を観客に向けて発した後朝倉に場外カウントのカウンティングを促す。が、当然と言うべきか朝倉は古への対処で頭が一杯であった。

「職務放棄は感心せんぞ朝倉。まず無駄になるだろうが仕事はきちんと果たせ」

「あなたには血も涙も無いのか!?ああ、さっきみたいな殺人技躊躇いもなくぶつ放せるんなら無いんでしょねこの冷凍タラコ!!」

「まあ聞け、古は今に上がってくる。が、お前の良識もそう捨てたものでないな。クラスメイト級友の安否を気遣えるならば上司のサイバーテロリストと違いまだ抹殺リストには入れずによさそうだ」

「例え私が古ちゃんやんと犬猿の仲でも心配するわこんなん!?そして上がって来るわけ無いでしょ高速道路でダンプの前に飛び出してもあんな景気良く吹っ飛ばないよミンチ肉詰めた肉袋みたくなってるんでしょどう考えたって!!古ちゃんやんで人型餃子でも作りたいのかあんたはあああああつ?!?!」

血腥く容赦の欠片も無い試合が続き、その内のほぼ全てが顔見知りの潰し合いであった為に朝倉は精神的にクる心労から大分参っていた。其処に来て比較的常識人(バカレンジャー当社比)である大豪院までが開幕公開殺人現場を披露と来たものである、いい加減にここいらでこの世紀末な世界観にも申さんと朝倉は猛っていた。

『朝倉、落ち着け。そろそろ起き上がるぞ古 菲選手、其処なタラコと言う通りカウントは必要無いだろうが戻ってくる前に平静を取り戻せ。報道部の一員として其処に立つ以上、私情で実況を投げ出す事は許さん』

「っ!!だっから部長……っ!?!っんな、ええ!?!?」

そんな朝倉の機先を制する様に、個人通信用の無線機よりフ



ラツトな喧囂の言葉がイヤフォンから届く。その感情の色が欠片も伺えない冷めた声にカチンと来た朝倉が実況席側へ振り返りながら怒鳴り返しかけたその時、観客席の一角が大きくどよめく。反射的に向けた朝倉の目に、廊下に溢れ返る観客の合間から古の姿が飛び込んで来た。

古はフラフラと頼りなく身体を左右に揺らしながらもその両足で立ち上がり、やや覚束ない足取りながら闘技場こちちらへ向かい歩き出していた。

『朝倉、実況だ。古 菲選手が吹き飛んだのと反対側の観客は何が起きてるか解らんのだぞ』

『……、……っ!!……古 菲選手、場外より起き上がり、闘技場に向け歩き出したああああ!!信じられないタフネスです、流石にダメージは大きいようですが時間内に戻ってこられるかああ!!………なんで生きてんの?古ちゃん』

再び喧囂に促され、朝倉は半ば呆けながらも培った報道部としての経験からマイクへ叫り、最後にぽそりと呟く様に誰へともなく洩らす。そんな朝倉を含めた観客の大半が抱くであろう疑問に答えたのは、次第に確かな足取りで近付いて来る古を見やりながらしたり顔で頷いていた大豪院である。

「往なしたからだ」

「いや…吹っ飛んでたじゃん、これでもかって位」

「ああ、但し回転しながら、な。考えてみる、俺は古の身体の真芯目掛けて勁を放った。本当に直撃したならば古は真っ直ぐ俺の打した方向へ一直線に吹き飛ぶ筈だろう?古は俺から見て四十五度近く右方へ、水平で無く斜め上方に放物線を描きながら飛んだ。…忠告した通り、半端だった化勁ホァジンは磨いてきたらしい」

大豪院は不敵に笑いながら観客の群れる渡り廊下を乗り越え、闘技場内へ入って来る古を睨めつけた。

「成る程、化勁かけいという奴か」

「うん。中国武術なんかでは太極拳や形意拳が主な使い手かな?勁ほん

を用いて攻撃を吸収し逸らして、威力を減衰させ軌道を変化させる。僕やエヴァさんの合気と似た技術だね」

「聴勁と発勁が備わり初めて充分な往なしとなる、昨日今日で備えられる技ではあるまい。極まればベクトルの操作だけでなく相手の力に自らの力を加え威力を倍加させてはね返すことすら可能とするらしいが、流石にあのアーパー小娘はまだその域では無い、か」

「あはは、そんなのエヴァさんや僕もまだ完璧じゃないんだ。幾ら何でも齢十五の古ちゃんに抜かれる程又ルい修業はしてきて無いよ、そう簡単に抜かれちゃ面目が立たない」

「ハッ、才能の有無は時として真摯な努力などという健気な代物を一度の会合で無に帰すがな。お前も数多湧き出る有象無象の可愛い努力家達に挫折と苦悩を味わせてきた口だろうに、お為ごかしとまでは言わんが、綺麗事も程々にする事だな慶一？」

「ナニセお前ハ今ヤコノ闇ノ福音タルエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルノ愛スル旦那ノダカラ、オ利口ナ物言イハ似合シカラナ!!……ドウシタヨ、ゴ主人？スゲエ顔シテ。恥ズカシガリ屋ノゴ主人ガ思ツテテモ口ニ出来ネエ最愛ノ気持チヲコノ童姿ノ魔法使イ<sup>イチ</sup>ノ忠臣、チャチャゼロ様ガ代弁シテヤツタンダゼ？」

「お見事です、姉さん。マスターは折角自らの為に命まで賭けて身体を張ってくださったセカンドマスター、慶一様に対して気恥ずかしさからかプライドからか、対応が素気ないにも程があります。もっと素直に愛情を示さねば慶一様が早々に愛想を尽かし、成田離婚ともなりかねません」

「オオ怖イ怖イ」

「貴様等纏めてスクラップにしてやるから其処に並べボケ人形共!!」

「エヴァさん、大丈夫！僕はエヴァさんが素直じゃない人：吸血鬼だって知っているからエヴァさんの態度は高純度のツンデレだと思いなからマゾ寄りの感覚で楽しんでるから!!」

「止める!?確かに私はサドかマゾかで言えば紛う事なきサドだがくっ付いた初っ端からSM意識して新生活生活過ごしたくないわあ!!」

「ライライ聞イタカヨ妹、新生活生活ダトヨ」

「ああ、マスター……！甘い生活への期待と昂りを遂に口に出されて……!!」

「違いわ開き直ったただけだ、じゃあほかにどう言えというんだ六世紀物の純潔引つ提げた化石吸血鬼が男を身内に入れたなぞこの惑星の何処の誰が聞いてもそういう意味にしか取らんわあ!!上等だ行ってやろうじゃないか新婚旅行！ベツタバタのハワイだのモルデイブだのでシヨツピングやレジヤヤーやらロマンチックな海の景色やら満喫して逐一写真撮った後知り合い全員に結婚報告葉書と一緒に送り付けてやるからな覚悟しろ慶一イ!!」

「僕からすれば寧ろバツチこいだけどエヴァさんステイステイ、ノリと勢いと自棄で行動すると碌な事にならないから。ゼロさんも茶々ちゃんもエヴァさん今怒濤の展開で花婿兼眷属出来ちやつて混乱気味なんだからイジるのは程々にしないと……」

「ダナ。流石二俺毛燦々ト輝ク太陽ノ下白イワンピースト麦藁帽装備ノ満面ノ笑ミ浮カベテオ前ト腕組ンダ主人ニ抱エラレテ撮ラレタ写真バラ撒カレンノハブツ壊サレテモ御免ダゼ、コノグレエニシトクカ」

「マスター、まず結婚報告と新婚旅行を行うには式を挙げる必要があるかと。恐れながら私の愚行といたしましてはセント・パトリック大聖堂を一日貸し切り大々的な……」

「ハハハハハハハ真祖の吸血鬼たる私がローマ教皇の訪れる神の家で挙式だ?!?気に入ったぞ茶々丸早速プランニングに掛かれ!!」

「いいいから落ち着いてよ二人共」

「貴様等全員表に出ろ」

「ガンドルフィーニ先生、このテンションだと表に出した瞬間恋ダンスとか踊り出しそうだから止めましょう」

『……古さんがまだ大丈夫みたいなのは解りましたけど……やっぱり危ないですよ中村さん』

所変わって選手席、ふよふよと上下に浮き沈みを繰り返しながらさよは中村に苦言を呈する。闘技場ではどうにか二十カウント以

内（試合記録用映像からの逆算）に場内へ舞い戻った古が朝倉に試合続行が可能かの確認を受けている真つ只中である。

正常な思考回路を有している者ならば、大豪院が放ったあの一撃を見て古が尚試合を続行しようとしているのは自殺行為としか思えないだろう。奇襲の様な形とはいえ古の攻撃を難なく往なした上で汚い爆弾dirty bombもかくやと言わんばかりの破壊劇をお披露目であった。これ以上続けられ古が誇張無しにミンチより酷い状態になるのは想像に難くない様に思える。

「つてつたつてなくさよちゃん、やるかやらねえか決めんのは外野でも審判でも無くて結局は古ちゃんなのよ。上がったんなら古ちゃんはやる気だべ？大体此れ迄と比べてなんか判り易くデーハーだからヤバイと感じるだけで、一試合目の一ちゃん時から充分地獄絵図だったじゃないさー？」

まあまあ落ち着きんしゃい、と高速スクロールするさよを手振りて宥めつつ、中村は辻へ言葉を投げた。

「は結局ノーダメかね一ちゃん？まあ古ちゃんのもいい突きだっただけど」

「まあ少なからず響いたろうけど動きが鈍るレベルではないだろうな。あれのおかげで微妙に初動が遅れたから古 菲ちゃんも化勁が間に合ったんだろうし、無意味ではなかったさ」

「…いや、そう言えば古ちゃんのパンチ直撃してたでしょ大豪院先輩。なんで平気で動いてんの？いや先輩達が人外の域にいるのは今回の放送禁止映像フルコースでよ〜〜く理解わかったけど、幾ら何でも凄すぎない？」

どうせ止めても無駄だこれ、と死んだ目付きで語っていた明日菜が、中村と辻の会話にふと我に返り尋ねた。深く掘り起こして更にドン引きな事実が判明する可能性が高い為気は進まないが、化物要素をこれでもかという程アピールしてくる人生の先達として見習いたくない先輩達の謎をそのまま放置していれば、その内人間扱いすら出来なくなってしまういそうなので曲がりなりにも種や仕掛けがある事を知って安心したいのである。

「明日菜さん、あれは発勁を用いたカウンターによる相殺です。大豪院先輩が古の攻撃を受ける直前に震脚を行い止まったのは見えましたか？あれで突進の勢いを外気と共に腹から放つて古の打撃へぶつけ、無効化したのです」

「……つまり、先程古さんを吹き飛ばしたものと同様の攻撃を：腹部から放つたと？そのようなことが可能なのですか？」

そんな明日菜の疑問に答えたのは辻の傍らに居る刹那だった。言葉の意味としては耳に入ったものの到底理解不能な話だったか、眉根に深い皺を作りながら続けて夕映が問い、それに対して隣の楓が答える。

「己の推進力を震脚などの踏ん張りによって重心を沈下させ反作用で身体を固定し、力を減衰させずに伝え打ち出すのが発勁の原理でござるが：達人ともなれば手足の様な末端から末端への大移動を大きな動作により行わずとも、重心移動と体捌きによる最適化された最小の動きで身体のあらゆる箇所<sup>箇所</sup>に力を伝導させ、打ち出すことを可能とするそう<sup>そう</sup>でござる。……その辺りの理屈を抜きに判り易く言うなれば、腹を使った体当たりでパンチを弾き返したのでござるな」

「わ、解つたような、解らないようなく……」

勉強は出来ないが得意<sup>好き</sup>な分野ならば小難しい理屈もなんのその、と刹那の解説を掘り下げて説明する楓だが、明日菜を始めとして主に3-Aの面々がピンと来ない様子で首を傾げている為、結果だけを踏まえる噛み砕いた結論を口にした。

「まあ自分<sup>てめえ</sup>で実践する訳でも無し、なんとなくそういうもんだと理解しときしやええべや」

「魔法<sup>わたしたち</sup>使いからすれば本当になんの参考にもなりませんからね……」

「……っつーかそれ以前にあんなとんでもねえ打撃を恐ろしい事に殺意の欠片も無いままブツパした所業<sup>バカレンジャー</sup>にまずツツコみ……無駄か、無駄だわな。そういう奴等だわなお前等<sup>バカレンジャー</sup>って……まあ、いいや……それはそれとして、なんで初っ端からあんな無茶すんだよ大豪院は。上手く合わせられたから良かったが、腹なんざ重要器官のわんさか詰まってる急所<sup>急所</sup>だぜ？タイミング誤<sup>誤</sup>つたら内臓ペーストにされちまってる

が」

「寡聞にしてこういった拳法の理には詳しくないけれど：此方の大道芸人で、大型のハンマーで己の腹部を殴らせるパフォーマンスをしていた方がいたそうよ。気血、というのかしら？を用いて幾度殴られようとびくともしなかつたらしいけれど、少し気を抜いた瞬間に一人の観客に殴られて内臓破裂により亡くなられたらしいわ。無知なりにあれは定跡セオリに則った攻防で無いのは解る、同じ見解ね。何を焦っているのかしら彼は？」

中村の身も蓋もない纏めに苦笑しつつ愛衣が応じ、何か色々なものを諦めた据り目の篠村が恨めし気に溢しながらも疑問を呈する。高音が同意しながら視線で辻と中村を促すと、二人は事も無げに返答を返した。

「焦ってる、というのは少し違うかなあ……実際、普通に攻防を重ねながら一発を狙うだけの腕前が大豪院にはあるし、意表を突く為にしろ些か以上にリスキーな選択だったのは確かだよ」

「ポチヨムキン一発屋が好きだけど分の悪い賭けや一か八かを好む訳じゃねえ。寧ろあんな誰が見てもヤベえと理解出来る全力ブツ帕を決めようとすんだから、勝負の組み立ては俺等ん中でも慎重で繊細な質だぜ。そんな奴が何でああもかつ飛ばしてるかつつうと……」

「気になる女との勝負だからじゃネーノ？」

「意地でもお前にだけは負けられんって感じですからネー、力んじやってますカー？」

「ツンデレ乙……」

「まあそれも無いわけじゃないかな？」

ケラケラと笑いながらのすらむい達による茶々入れに苦笑しながら辻が応じ、中村はそんなスライム娘達の頭をペペペン！と水平に軽く掌で風ぎながら続けた。

「簡単だ。少々危ねえ橋渡つてでも最初アドバンテージに有利稼いできてえ位に古ちゃんが強えからだ。なんか雰囲気的に古ちゃんの負け一色な空気になってるけどよ。直ぐに解るぜ、こりゃ人外と人の闘いでなく怪獣大決戦だったって事がな」

『古 菲選手、何とか二十カウント以内に場外より復帰を果たしました、驚異的なタフネスです!!』

『まあ派手な吹き飛び方からして化勁か何かにより威力は流していたのでしよう。更に言うなれば大きく飛ばされるという事は衝撃が体内へ十全に伝わらず運動エネルギーに変わっているという事ですからね。その様な勁を働かせる対象を“移動”させない為に密着した状態で筋肉が弛緩した瞬間を作り、衝撃エネルギーを通す打撃を二試合目に山下選手が用いた浸透勁と呼びます。大豪院選手に完璧な打撃を施す余裕が無かったか、古 菲選手の防御がそれだけ巧みだったかまでは解りませんが、何れにしろまだ勝負はこれからという事でしよう』

『尚、通常のルールにおいては場外から時間内に一方の選手が復帰した場合令なく試合続行となっておりませんが、選手の生命状況が危ぶまれる様な危険な状態においては審判の、場合によってはドクターのチェックを受けた上で続行か否かを判断させていただきます!!……ねえ古ちゃんちよつと、本気で大丈夫? 痩せ我慢とか意地で堪えてるだけなら正直に……』

「没??」  
メイウエンテイ 心配掛けたアルね、朝倉」

古は忙しく解説実況をこなしながらも心底心配そうに此方を案じてくる朝倉に軽く頭を下げて応じながらも、五感にて五体を確かめ戦闘続行に向け余念がない。

……打ち込んだ手は折れてはない、強めに捻っただけ。勁を流すのに逆腕はかなり無茶させたけれど、筋肉の断裂程度。筋も骨も逝っていない。動悸、発汗、強めの目眩と耳鳴り、手足が軽く痺れて身体が若干フラつく。……流しきれなかった勁が内臓へ浸透した為の循環機能の乱れによる一時的な異常。ついでに肋骨が二本……三本か。罅は入ったけど折れてない……

己の散々な状態を正しく理解した古は、最後に軽く顎をひきながら付け加えた。

「このぐらいなら、軽いアル」

「……いいのね？」

「無論」

「……解ったからそんな睨むみたいにして見ないでよ。選手がやるつて言ったらやらせるしかないんだから、こっちは」

苦笑を一つして古から離れ、己の仕事場たるシエルター（恐らくというかほぼ間違いなく三代目への交代が近い）へと足を向けながら、マイクへ高らかと宣言する。

『皆様、大変お待たせいたしました!!古 菲選手は問題無く試合続行可能と判断出来た為、間も無く試合再開と相成ります!!』

『ウオオオオオオオオオ!!』

『菲部長オオオオオ!流石ですうああ!!』

『一生ついていきますうううう!!』

「開始早々一発で吹飛ばされて、もうろとしながらなんとか復帰した奴に投げる台詞じゃないアルよお前等…待たせたアルね、ポチ」

「ああ、待ったぞ古。最も決められなかった俺からすれば忸怩たる思いだ、が…あの様な半端な一撃で決着などと言われても不完全燃焼に過ぎる故な」

大豪院は太い笑みを浮かべて腰を落とす。

「良い化勁だ。一から磨き直したか」

「防禦だけは私より上手い太極拳使う部員にみちり学んだアル。余波だけでこんななてたなら闘う所じゃないアルから」

応じて古は再び三体式の構えを取り、その面に戦意を満たした。

「真逆これで勝ったも同然とか思てないアルな？」

「無論だ。多少何処ぞを痛めようが、当たれば一撃はお前も同じだろう？」

「☒………」

口を横に広げて笑んだ古は、唐突に片脚を天高く突き上げ、床へと勢いよく振り落とす。

大地が、震える。

『ちよお、待…!?!』



